

日本美術年鑑

昭和十二年版

美術研究所

序

美術研究所が日本美術年鑑の編纂に着手してより漸く二年、茲に昭和十二年版を上梓する運びとなつた。

本年鑑の編纂は、美術研究所が計畫し又は従事しつつある幾多の事業の一部を爲すもので、規模未だ大ならざる本所に於ては、完全なる準備を整へて此の事に當つたとは自負し難く、又經驗猶淺く、相當の困難を伴ふ美術年鑑の性質よりして、之を以て決して完璧を誇るものではない。

併しながら、吾人は美術年鑑の任務の重さを十分認めるものである。我が美術界は現時多難なる、而して又希望に充ちたる、大切な時機を過しつつある。美術界が年々健全なる歩みを進め、我が美術が愈々光輝ある發達を遂げんことは吾人の衷心より念願する所である。美術年鑑は其の中に在つて、公平にして且つ忠實なる記録の役を務め、旺盛なる美術界全般の活動を後世に傳ふる信頼すべき資料たらしむると共に、現代の我が美術界の爲に、幾多の問題に就いて參考となるべき基準を與へんことを期してゐる。

編纂に關しては固より擔當者の判斷取捨に俟たざるを得ず、右の意圖の遠く達し難きを惧れるが、方針としては努めて世論に聽き、獨斷を避けて妥當穩健ならんことを期した。擔當者としては、本所員和田新を主任として一切の編纂、竝に執筆の事に當らせ、助手倉田平吉をして之を助けしめた。尙一部分の分擔者として、建築に關する部分は囑託山田智三郎、文獻目錄中、古美術關係の部分は助手中川千咲をして之に當らしめた。

本年鑑の編纂に當つては、文部省宗教局、同寶物調査室、同建築調査室、商工省工務局、大藏省營繕管財局、帝室博物館、諸美術館、日本古文化研究所、朝鮮古蹟研究會、其の他公私諸施設、諸美術團體、美術及建築關係雜誌社、各畫廊等の關係當事者諸氏、竝に美術家、學者諸氏等の厚意ある援助を辱くし、資料の提供、貴重なる寫眞の寄贈貸與等の便益を與へられた事は擧げて數へ難い。茲に記して深甚なる感謝の意を表するものである。

尙本書中の不備、誤謬等の箇所就ては江湖の垂教を惜まれざらんことを切に希望し、次年度以下に一層の改善を期したいと希ふ次第である。

昭和十二年九月

美術研究所長 矢代幸雄

凡 例

一、本年鑑は其の内容を「本欄」、「挿圖」及び「便覽」の三部に大別する。本欄は我が國美術界の全般に就き、昭和十一年度、即ち同年一月から十二月に至る一年間に現はれた主なる出來事、製作又は發表された注意すべき作品、發表された文獻等を記録し、挿圖は右作品の寫眞を主として掲げ、便覽は同年末調に依る美術關係の諸事項を、分類輯録して検索の便を計つた。記事中「本年」とあるは昭和十一年を指すもの、月日のみを擧げて年を記さぬ場合亦同様である。

一、美術として本年鑑が取扱ふ範圍は、從來一般に行はれる狹義の解釋に従ひ、繪畫、彫刻、工藝及び建築に限ることとした。繪畫の中で「日本畫」及び「洋畫」の區別は之を附することの困難なるものも、近年相當に現はれる趨勢にあり、又其の稱呼も字義として好ましいものとは言へないが、姑く便宜の爲多年の慣習に倣ふこととした。建築は用途に従つて種類も多く、殊に近年の傾向に在つては之を美術として取扱ふことには問題も多いが、茲では吾人の見地から注意を牽くものの範圍に止めることとした。

一、人名を記す場合に敬稱は一切之を省いた。

一、本欄、現代美術の中美術展覽會の項には、明治大正以後活動した作家の遺作展觀、回顧的展覽會、及び外國美術展覽會等に關しても、便宜上此に含めて取扱ふこととした。

一、同、展覽會以外の作品に就いては、其の範圍を擴げるならば際限無き爲、茲には多少とも公共的性質を有するもの、或は記念碑的意義を有するものに限ることとし、主なる作品少數のみを選んだ。

一、同、美術教育の欄に於ては、之に關する彙報的な記事若干を輯録するに止まつた。尙一般普通教育に於ける圖畫教育は、美術とは關係が深く、屢々美術教育とも呼ばれて混同されてゐるが、本年鑑に於ては特殊な場合の外は之を取扱はず、専門の美術教育の範圍に止めることとした。

一、挿圖として掲載した寫眞は、日本畫、洋畫、彫刻、工藝、建築、古美術資料、物故美術家及美術關係者の七種とし、古美術資料以下を除いては昭和十一年度内に新作として發表されたもの限り、遺作展覽會等に出品された舊作は、古美術と共に總て之を掲げぬこととした。古美術資料は主要なる修理發掘等の報道に添ふ程度のものでした。

一、便覽は昭和十一年十二月末日現在の記録たることを原則とするが、使用の便を圖り、美術團體一覽中の展覽會規則、新結成の美術團體、人名録中の住所等に關しては十二年に入つての消息を例外的に記載したものもある。

一、便覽中、美術研究施設並團體一覽は調査に十分の準備を費し得なかつた爲、掲載の洩れたものもかなりある。次年度以下に補ふことを期してゐる。

一、御所、離宮、御苑及び正倉院は固より觀覽施設ではないが、拜觀者の便を計つて其の拜觀規定を美術觀覽施設一覽の項に掲載した。又社寺に關してはそれ等の寶物館を掲げた外、一般に堂塔寶物類の拜觀を許して一種美術館的意義をも有する主要なるものに就き、之を同じ項に掲載した。

一、美術商一覽は、古美術商に關しては主として東京美術俱樂部株主名簿に據り、新美術商に關しては、現在展覽會開催等に依り活動せる東京、京都、大阪三市の極く主な人々を録載した。

一、本欄中、文獻目錄及び便覽中、美術家及美術關係者名簿に就いては、夫々の欄の初に凡例を記した。

目次

序	一
凡例	二
目次	四
挿圖目次	六

本欄

昭和十一年度美術界概観	一〇
現代美術	二〇

美術展覧會(月日順)

一月	二三
二月	二七
三月	三五
四月	三九
五月	五四
六月	六三
七月	六八
八月	七一
九月	七二
十月	八五
十一月	九八
十二月	一六
展覧會以外の作品	一二一
日本畫、洋畫、彫刻、建築	一二六
美術界彙報(月日順)	一四二
物故美術家及美術關係者	一四二

古美術

美術行政	一四九
美術教育	一五四
古美術展覧會及展觀(月日順)	一五六
古美術關係彙報	一七六
古美術保存	一八八
昭和十一年度國寶指定 附同所有者變更	一九四
同 重要美術品認定 附同解除	二〇五
國寶修理	二〇六
朝鮮寶物及古蹟指定	二〇六

美術市場

東京、京都、大阪、名古屋各美術俱樂部賣立高値表	二〇九
昭和十一年度美術文獻目錄	二一六
凡例・目次	二一八
現代美術文獻目錄	二五九
東洋古美術文獻目錄	二五九

挿圖 (内容目次別記)

日本畫	一
洋畫	三六
彫刻	七四
工藝	八四
建築	九七
古美術資料	一〇五
物故美術家及美術關係者	一〇八

便覽

美術關係法規一覽

國寶保存

國寶保存法、同施行令、同施行規則

國寶保存會官制、同職員

重要美術品等保存

重要美術品等ノ保存ニ關スル法律、同施行規則

重要美術品等調査委員會規程、同職員

史蹟名勝天然紀念物保存

史蹟名勝天然紀念物保存法、同施行令、同施行規則

史蹟名勝天然紀念物調査會官制、同職員

朝鮮寶物古蹟名勝天然紀念物保存

朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然紀念物保存令

朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然紀念物保存會官制、同職員

著作權保護

著作權法

著作權審查會官制、同職員

改正ベルヌ條約

美術獎勵施設一覽

帝室技藝員

帝國美術院

帝國美術院官制、同職員、同諸規則等

帝國美術院展覽會規則

文部省美術展覽會

昭和十一年文部省美術展覽會規則、同委員

商工省工藝展覽會

工藝審查委員會官制、同委員

工藝展覽會規程

商工省輸出工藝展覽會

商工省輸出工藝展覽會規程

京都市、名古屋市、朝鮮、臺灣各美術展覽會

美術獎勵資金

美術研究施設並團體一覽

美術研究施設

美術研究團體

美術教育施設一覽(地方別)

東京 學校、研究所

京都 學校、研究所

大阪 學校、研究所

其他 研究所

工藝指導施設一覽

美術觀覽施設一覽(地方別)

御所、離宮及御苑拜觀規定

關東 地方

東京、地方

東北 地方

中部 地方

近畿 地方

京都、大阪、奈良、地方

中國 地方

四國 地方

九州 地方

臺灣、朝鮮、關東州

美術關係團體一覽(五十音順)

文化團體一覽

展覽會場一覽(地方別)

定期刊行物一覽

現代美術關係定期刊行物一覽

古美術關係定期刊行物一覽

美術商一覽

美術家及美術關係者名簿(五十音順)

挿圖目次

日本畫

六潮會展(一一二).....一

江(山口蓬春) 五月晴(福田平八郎)

個展(三) 南枝早春(小杉放庵).....一

第一回帝展(四一四〇).....一

夏座敷(磯田又一郎) 牡丹(林司馬) 菊(德永觀林)

星をみる女性(太田聰雨) 春隣り(大智勝觀) 唐犬圖

(橋本關雪) 鴨(奥村土牛) 曉烟(小川芋錢) 萬葉春

秋(富田溪仙) 雪しまく瀬戸(川合玉堂) 慶喜恭順

(鍋木清方) 龍蛟躍四溪(橫山大觀) 小春の神泉(田

之口青見) ぼら網(堅山南風) 役ノ優婆塞(安田靉彦)

觀畫(前田青邨) 大威德明王(山村耕花) 潮の鯉(矢

野鐵山) 細雨(河野秋邨) 豐穰雲(中村貞良) 白鶴

(小林柯白) 枯野(兒玉希望) 五月雨(中村龍子) 冬

暖(酒井三良) 山の秋(郷倉千靉) 茸狩(川端龍子)

高野草創(矢野橋村) 天女(木村武山) 菩薩嶺(村島

西) 鬼子母(荒井寛方) 凍る鳥(近藤乾年) 白乾地

(小室翠雲) いとさん、こいさん(北野恆富) 遠帆連浪

(森谷南人子) 婦女群像(杉山寧) 野梅(結城素明)

和春(鈴木主子)

春虹會展(四一四四).....九

雨簷(中村大三郎) 春光(山口華楊) 吉野春風(富田

溪仙) 猫(金島桂華)

個展(四五) 芳芽(長野草風).....二〇

春陽會展(四六).....二〇

櫛斜(小杉放庵)

個展(四七) 龍に春蘭(津田青楓).....二〇

個展(四八) 桐花(落合朗風).....二〇

春の青龍社展(四九一五四).....二〇

椿(石塚連) 華菜圖(加納三樂) 花垣(川端龍子) ぬ

らはと(柴田安子) 春韻(坂口一草) 青宵(渡邊綱雄)

個展(五五) 午涼(小室翠雲).....二

踏青會展(五六一六二).....二

白鷺(前田青邨) ほととぎす(鍋木清方) 鳩(小林古

徑) 華會(安田靉彦) 海風(大智勝觀) 萬葉の花(富

田溪仙)

煌土社展(六七).....二

河霞む野田九浦

九阜會展(六二、六三、六五).....二

星巖の妻(太田聰雨) 春の夜(吉岡堅二) 餌(奥村土

牛)

新燈社展(六六).....二

白絲漉(青木大乗)

革丙會展(六四).....二

役の優婆塞(安田靉彦)

日本南畫院展(六八、六九、七三).....二

殘寒(須網雨亭) 三枝禮(小室翠雲) 寒庭一角(水田

竹園)

個展(七〇) 黃花白鷄(山口蓬春).....二

東西大家新作小品畫展(七二).....二

菊慈童(橫山大觀)

讀畫會展(七一).....二

新筍(荒木十敷)

個展(七四) 賤機帯(鍋木清方).....二

個展(七五) 魚影(川端龍子).....二

尙美堂展(七六—八一).....二

葱の花(西村五雲) 老松栗鼠(橋本關雪) 金風(川合

玉堂) 五月の頃(繪原紫峰)

五葉會展(八〇、八一).....二

砂汀(森守明) 風雨渡舟(人江波光)

青龍社展(八二—九二).....二

海洋を制するもの(川端龍子) 山の憩ひ、海の憩ひ(谷

口富美枝) 黒鳥(坂口一草) 醍醐(山崎豊) 夏日好菜

(加納三樂) 花宴(木村鹿之助) 雷雨(川端龍子) 集

鹿(安西啓明) 光(福岡青嵐) 白朝(松宮左京)

第二十三回院展(九三—一一一).....二

みづかけ(中村岳陵) 寒巖主(山村耕花) ヒマワリ

(田中青坪) 野の花(橫山大觀) 雪農(大智勝觀) 白雨

(堅山南風) 船路(太田聰雨) 歸路(田中案山子) 聽

秋(小川芋錢) 青田風(酒井三良) 澄潭映大悲(荒井

寛方) 岩つゝじ(長野草風) 紫苑紅蜀葵(小林古徑)

月明(郷倉千靉) 受洗を謳ふ(溝上遊龍) 兎(奥村土

牛) 白河樂翁(前田青邨) 雨月物語(其三) (小林三

季) 大和當麻寺(小島一登)

明朗美術聯盟展(一二—一四).....三

かまくら(落合朗風) 秋の林(川口春波) 網小屋(井

上陵華)

昭和十一年文展鑑査展(二五—二九).....三

得度(西村卓三) 運を聴く(橋本明治) 薄暮(加藤榮

三) 海の微風(山本丘人) 映像(菊谷鸞行) 防人歌(増

田正宗) 雪の音(奥村厚二) 蘭學事始(長谷川路可)

山(谷川岳) (木本大泉) 姉妹(立石春美) 九月(寺島

紫明) 濱木綿の丘(曲子光男) 秋溪(小坂勝人) 砂上

(秋野不矩) 初冬(南家吉有)

個展(一三〇) 湖山秋興(八木園春山).....三

七絃會展(一三一—一三五).....三

佛性房(安田靉彦) 伽羅(鍋木清方) 魚(前田青邨)

吉法師、竹千代(菊池契月)

昭和十一年文展招待展(一三六—一六一).....三

甚目寺の一遍上人(堂本印象) 吐綬雞(池上秀歌) 竹

生鳥(西山翠嶂) 堀河夜討(服部有恆) 山、濱(川崎

小虎) 霧氷(川村曼舟) 室戸岬(小野竹喬) 渚(高木

- 個展(二八七) 風景(伊原宇三郎)……………五
 個展(二八八) 松(水船三洋)……………五
 二科美術展(二八九—三一八)……………五
 群像(濱田深光) 子供三態の圖(伊藤鑑郎) 夏の午後
 (碓伊之助) 時(岡田謙三) 砂上(大澤昌助) 市の日
 (田口省吾) 着衣(洋装)(高岡徳太郎) 洗濯(柏原覺
 太郎) 撒撒の花(國枝金三) 獨航船(中村善策) 花園
 の友人(野間仁根) パルコン(東郷青兒) 海風(田村
 孝之介) 霽れゆく寒霞溪(向井潤吉) 西瓜と鹿子百合
 (黒田重太郎) 青い蘭扇(中川紀元) 行水(鍋井克之)
 秋の熱河承德(栗原信) 野に憩ふ(宮本三郎) 放牧二
 馬(坂本繁二郎) 自畫像(藤田嗣治) 志摩の海女(小
 山敬三) 椿(正宗得三郎) 鸚鵡と少女(安宅虎雄) 兎
 暴なる饗宴(高田力蔵) 水(島崎鴎二) 鹽田(松井正)
 庭上三人(清水刀根) イヨシヌ河畔(木下孝則) 花と
 魚貝(鈴木信太郎)……………五
 個展(三一九) 静物(伊藤廉)……………五
 昭和十一年文展鑑査展(三二〇—三三六)……………五
 磯人(伊藤清永) 閑庭(李仁星) 小憩(岩崎勝平) ス
 ンガリーの岸邊(石川澄彦) 釋尊降誕圖(林明善) 遊
 樂(大沼かねよ) 島の貝焼き(牛島憲之) 巖(倉員辰
 雄) 畫房の女(野口良一) 秋庭(胡桃澤源一) 湖畔
 (山崎坤象) 海邊(川端實) 丘の上(朝井閣右衛門)
 草丘(鈴木榮二郎) 休憩時間(須田烈太) 馬ならぶ南
 政善) 洗濯屋(平通武男)……………三
 三味堂洋畫展(三三七、三三八)……………三
 芦の湖(石井柏亭) 少女(長谷川昇)……………三
 獨立秋季展(三三九)……………三
 朝顔(中村節也)……………三
 個展(三四〇) セーヌ河畔(高橋庸夫)……………三
 個展(三四一) 夜叉門(川島理一郎)……………三
 東光會小品展(三四二—三四五)……………三
 裸婦(熊岡美彦) 鳥羽風景(齋藤典里) 風上げの風景
 (野口謙藏) 群がる家(佐藤一章)……………三
 昭和十一年文展招待展(三四六—三七三)……………三
 沼群(橋本八百二) 積藁(林俊衛) 青服の少女(長谷
 川昇) 按摩さん(和田三造) 雲虹(天之日矛傳説)(太
 田三郎) 働く漁婦(大久保作次郎) シヤンテ(角野判
 治郎) 春(奥瀬英三) 婦人半身像(岡田三郎助) 妙義
 山(中村不折) 霞む春(辻永) 鶴飼(中澤弘光) 黎明
 の大雪山(上野山清實) 裸婦(田邊至) 水邊(中野和
 高) 花火(矢島堅土) 三部試作(成長) 手傳(草光信
 成) カナカの娘(小林萬吾) 冬瓜(山本鼎) 雨後の山
 (榎藤種男) アリアスと祖父(有岡一郎) 鞆鞆(耳
 野卯三郎) 子守歌(南薫造) 南洋母子(山崎省三) 山
 色漸青(柚木久太) 草原(清水良雄) 仔細子(佐竹徳
 次郎) 横臥せる裸婦(鈴木千久馬)……………六
 個展(三七四) くさりとわ(庫田發)……………六
 新制作派協會展(三七五—三八六、三八九)……………六
 ジャズバンド(脇田和) 談る人(今村俊夫) パルコン
 (伊勢正義) ダンス(脇田和) 蓍女(藤島武二) 制作
 (佐藤敬) 人物(中西利雄) 馬と裸婦(猪熊弦一郎)
 黒い帽子(小磯良平) 裸婦を巡る構想(内田慶) 裸婦
 (鈴木誠) 綠蔭(三田康) 浴後(坂井範一)……………七
 小絲寺内作品展(三八七、三八八)……………七
 椅子による裸婦(寺内萬治郎) ばらC(小絲源太郎)
 青樹社洋畫展(三九〇、三九二、三九三)……………七
 菊(安井曾太郎) 神苑(山下新太郎) 薔薇(和田英作)
 個展(三九一) 曇り日(和田英作)……………七
 個展(三九四) 少女(岡田謙三)……………七
 新興美術家協會展(三九五)……………七
 水邊(大内青龍)……………七
 主線美術協會展(三九六—三九八)……………七
 花壇(高間徳七) 畫室(堀田清治) 裸婦(橋本八百二)
 展覽會以外の作品(三九九—四〇四)……………七
 本多先生肖像(安井曾太郎) 徳川家達公肖像(伊原宇
 三郎) 東京帝國大學行幸(藤島武二) 憲法發布式(和
 田英作) 九物百貨店壁畫(東郷青兒) 藤田嗣治)……………七
 彫刻
 第一回帝展(四〇五—四一〇)……………七
 風(石井鶴三) 岩戸神樂(山本豊市) 結髪(新海竹藏)
 八咫鳥(佐藤朝山) 牧神クリシュナの扉々(大内青龍)
 靈龜(平橋田中)……………七
 個展(四一一) 裸婦(清水多嘉示)……………七
 新彫塑協會展(四一二、四一五)……………七
 試作(臺なき効果)(酒見恒) 女(立像)(菊池一雄)
 日本木彫會展(四一二、四一四、四一六、四一七)……………七
 ラグビー(森野圓象) 無馬(佐々木大樹) 光明佛身(澤
 田晴廣) 朝露(中野桂樹)……………七
 第三部會展(四一八—四二五)……………七
 明けゆく(開發芳光) 空甌來(吉田久繼) 浴泉(日名
 子實三) 牝鶏(川城良) 胸像B(野口安友) 壁面裝飾
 「勝利」(畑正吉) ダービーのゴール(池田勇八) 加藤
 元帥銅像(上田直次)……………七
 二科美術展(四二六—四三〇、四三二、四三三)……………七
 若き女(上田曉) 女の胸像(土田實) 母と子(松村外
 次郎) 男の首(ザツキン) 少年工(笠置季男) 彫刻家
 (渡邊義知) 闘争(川崎榮一)……………七
 第二十三回院展(四三一、四三四—四四七)……………七
 首(長谷川豊雄) 大魚先生(關谷充) 老婦袒胸(石井
 鶴三) おのころ島由來(山本豊市) 青年(武井直也)
 吉岡調等殉難群像(保田龍門) 明暗相「三部作」宇受貴
 (中村直人) 少女立像(松原松造) 佛母摩耶夫人(大
 内青龍) 蚊相撲(入江美法) 試作(新海竹藏) 平安老
 母(平橋田中) 乳牛(宮本理三郎) 迦陵仙(吉田白嶺)
 旅人芭蕉像(宮本重良)……………七
 昭和十一年文展鑑査展(四四八—四五六、四五九)……………八
 海邊(山内食藏) かわろそ(佐藤靜司) 働キニユク男
 (吉田敏示) 薔薇(中野四郎) 少女像(高橋英吉) 鐵
 工(藤野舜正) 腰かけた女(星野直弘) 銀線を描く(宮
 本朝澤) 唄(山口四郎)……………八
 昭和十一年文展招待展
 (四五七、四五八、四六〇—四七四)……………八
 寶華素影(長谷川榮作) 陸軍(電信兵) (一色五郎) 十
 七の女(建島大夢) 天之安河原其ノ一部(壁面彫刻)
 (内藤伸) 手鏡(藤井浩祐) 女の群(野村公雄) フロ
 ラリヤ(安永良徳) 菅公(山崎朝雲) 裸女(國方林三)

貝(齋藤素盛) 實生重英匠能委國柄(後藤良) 胸像(安藤照) 九世團十郎之像(朝倉文夫) 兼恥(北村正信) 丹花綻ぶ(三木宗賢) 旭日登天(北村西望) つめ(三國慶一)

主線美術協會展(三七五—三七八) 立像

夏(小室達) 胸像(藤澤古實) トルソ(安藤照) 立像(村田勝四郎)

新構造社展(四七九) 立像

母と子(寺如助之丞)

工 藝

第一回帝展(四八〇—五〇一) 六

三藏法師(山本安堂) 黃銅拓榴形花瓶(杉田永堂) 鑄銅柳鸞給花瓶(山本自燭) 彫金仙人掌香爐(大須賀齋) 鐵鍍金錦雄香爐(三井安蘇夫) 鑄銅瓶掛(香取正彦) 腕相撲の圖硯屏(清水龜藏) 曜變鶴首花瓶(板谷波山) 漆器紫陽花手箱(奧村溫城) 陶器珊瑚磁水注(新海邦太郎) 白磁大盃(富本憲吉) 耀星花瓶(清水六兵衛) 漆器春融白映手宮(平館曾) 漆器鸞文庫(松田福六) 蝦蟆模蒔繪手箱(高野松山) 乾漆花文飾壺(未完) 故赤塚自得 漆器朴の花文庫(天下雪香) 漆もぎみ棚(吉田源十郎) 竹茶籠(飯塚環珩) 木製筥(稻木春千里) 手織錦木の實敷物(山鹿清華) 瀬戸風景染色衝立(櫻井溫洞)

國畫會展(五〇二、五〇三) 六

鐵繪壺(濱田庄司) 金襴手大角箱(富本憲吉)

商工省工藝展(五〇四—五〇八) 六

クリスタル硝子花瓶(各務鎮三) 花器(豐田勝秋) 鳥ノ圖刺繡飾額(京都染織試驗場) 果物文沈金手箱(塚田吉良、塚田重太夫) 象嵌香爐(宮之原謙)

實工藝展(五〇九、五一〇、五一二、五一三) 六

電氣スタンド(内藤春治) 喫煙具(山崎覺太郎) 洋銀果實盛(高村豐周) 觸子九帶(廣川松五郎)

昭和十一年文展鑑査展(五一、五一四—五二八) 六

青銅花瓶(林萬壽人) 鑄銅とんぼ文花瓶(渡邊紫鳳) 鉦金野牛置物(山脇洋二) 青銅水盤(廣瀬英五郎) 漆

挿 圖 目 次

サボテンにホロホロ鳥飾棚(磯井如真) 陶製草文水指

(大森光彦) 紅葉菱繪花瓶(近藤悠三) 金錯芙蓉紋花瓶(山本純民) 柳波文平股小箱(内藤四郎) 草花圖彩

漆衛立(番浦省吾) 漆さゞ波風爐先屏風(越田尾山)

挽挽の造り筥(青柳齋齋) 漆器春秋衛立(福澤健一)

漆器鷄手箱(河面冬山) 洛北山川之圖屏風(小合友之助) みのり刺繡壁掛(平野利太郎)

昭和十一年文展招待展

(五二九—五三四、五三七、五三八)

柿香盒(船越春珉) 吹込み硝子花瓶(岩田藤七) 鑄銀

鴛鴦置物(佐々木象堂) 銀金彩鹿文花瓶(北原千鹿)

青金色繪瓶(海野清) 陶磁飛動花瓶(清水六兵衛) 硝子魚文飾筥(各務鎮三) 紫翠動花瓶(清水正太郎)

個展(五三六) 建築天鰲絨繡絨鳥の圖額面(鹿島英二)

工藝濟々會(五三三、五三九) 六

青銅鉦水次(香取秀真) 雙鶴圖圓硯屏(堆朱楊成)

建築

京大醫學部附屬醫院內科病室第二棟棟南東面(五四〇) 六

鐵道博物館(五四一) 六

日本赤十字社病院外來診療所(五四二) 六

新舞子水族館中央ホール(五四三) 六

大阪市美術館(五四四—五四六) 六

日本郵船株式會社橫濱支店(五四七) 六

慶應義塾幼稚舎(五四八、五四九) 六

野々宮ビルディング(五五〇—五五二) 六

大阪放送會館(五五三—五五五) 六

帝國議會議事堂(五五六—五六八) 六

大倉邸南側外觀(五六六) 六

谷口邸(五六七—五七〇) 六

山川邸庭面(五七二) 六

日向別邸(五七二) 六

古美術資料

法隆寺修理狀況 一四

修理竣工の西園堂(五七三)

解體せる大講堂(五七四—五八〇)

修理中ノ白鷺城ヨノ渡櫓(五八二) 一〇五

修理竣工ノ石手寺塔婆(五八二) 一〇五

藤原京發掘狀況(五八三—五八五) 一〇五

朝鮮扶餘發掘狀況(五八六—五八七) 一〇五

同發掘佛像(五八八、五八九) 一〇五

平壤附近高勾麗古墳 一〇六

林原面高山里第一號墳(五九〇—五九三)

柴足面内里第一號墳(五九四—五九七)

物故美術家及美術關係者

(五九八—六〇九) 一〇七

中條精一郎、赤塚自得、河合新藏、石川寒巖、紀

淑雄、佐分眞、尾竹竹坡、土田麥穂、富田溪仙、

滿谷國四郎、山中定次郎、栗原忠二

九

昭和十一年度美術界概観

總記

昭和十一年は、我が美術界に取つて頗る多事多難な、又意義深き一年であつた。前年の帝國美術院改組に端を發した紛争の後を承けて、本年は何等かの解決に到達し、安定と靜穩とを取り戻すかと期待されたが、依然問題は順當な落着を見るに至らず、帝國美術院は其の機能を中止するの已むなき状態に至つた儘、年を終ることとなつた。

斯かる状態が好ましくないことは勿論であるが、果して之が美術及び美術界の爲に不幸であつたか否かは、輕々には判じ得ないのである。昨年に引續いて明朗を缺いた美術界の空氣が、種々の惡影響を與へなかつたとは言へないが、此の一時的な損失も、將來の建設に對する過渡的な試練として經驗するならば、必しも悲觀すべきではない。現に今次の紛争は、美術界に種々の意味で多くの教訓を與へ、氣力ある作家達に反省と發奮とを起させたことが尠くない。創造的な活動力を有する作家、新時代を擔はんとする年少作家等の覺醒、發奮の徵候は隨所に認められるのである。感情的にさへ走りがちな對抗意識も、藝術上には屢々有益な刺激となることは常に經驗される事實である。

斯くして本年の美術界は極めて多事、潑刺たる動きを見せ、幾多の運動の中には藝術上注意すべき現象も現はれ、記録さるべき作品を生み、新進作家達の躍進も目立つたことなど、種々興味深く示唆に富んだ活動を示し

たのであつた。

本年度に於ける美術界最大の關心事であつた、帝國美術院展覽會問題の經過を先づ略敘せねばならぬ。昨年の帝國美術院改組以來の紛争に關しては茲に詳述する邊を有しないが、其の表面に現はれた運動の要點は、所謂舊帝展系作家、主として其の無鑑査級作家達に依る新帝展の制度に對する反對の主張であつた。是等の運動は各部に依つて夫々様子を異にし、洋畫家達は全體的に結束して第二部會を組織、彫刻家達は幾つかの團體に分れて、官展に反對する第三部會、新帝展改善を主張する東邦彫塑院等を主なものとして運動を續けた。日本畫壇では、東京の作家達が昨年末に至つて第一部會を結成して本年初頭熱心な運動を續け、京都の作家達は二月上旬第一回帝展の出品期日間際に至つて俄かに不出品の運動を起した。

此の情勢の中に在つて第一回帝展は豫定の通り開かれたのであつた。新制度に従つて、第一回は第一部日本畫、第三部甲種彫刻及び第四部美術工藝の範圍に限つたが、會場難を豫想して其の緩和の爲に設けた此の制度が無意味となつた迄に出品が少く、第三部の如きは陳列數僅かに二十三點と云ふ寂しさであつた。第四部はともかく、第一部に於ては會員以外舊帝展無鑑査級の出品は殆ど五指を屈するに止まり、第三部では會員初め殆ど之を見ない状態で、從來の所謂在野作家、主として院展に屬する作家達の努力が其の開催を可能ならしめた状態であつた。尤も第三部出品の不成績に就いては後に記す如く、單に新帝展反對の爲の不出品と云ふだけでなく、

彫塑を甲乙二種に區分した新規則が理論的に明確な定義を缺き、爲に幾多の疑義と不安とを出品者に與へたことも原因の一に數へなければならぬ。製作上にも鑑賞の爲にも季節的に最も不適當な時期に加へて、帝都に非常事件突發のことなどあり、外形上展覽會の成績は甚だ不振であつた。之を質の上から見れば、舊弊を思ひ切つて破棄し、獎勵の基準を藝術的價值に置かうとした新帝展の方針は或る程度實現され、革新的空氣を感じしむるものがあつたが、全美術界を代表させようとした意圖は、原因はともかく事實上には實現されなかつたものと言はざるを得ない。

文部當局及び其の方針を支持する帝國美術院會員等の意向は、革新途上に於ける過渡的紛擾は已むを得ざるものとし、第一回展覽會の經驗から展覽會規則其の他の不備に就ては改善を圖ると共に、根本方針に就いては飽く迄既定通り進めようとするに在つた。帝國美術院の方針が公式には右の通り決定されてゐながら、會員の總てが同じ意見でなかつた所に困難があつた。當初より改組の經過に満足してゐなかつた舊會員の多くは、第一回展覽會はともかく開くが、其の上で展覽會機構に關し適當な「再改組」を行ふべきであるとの意見を持ち、中には再改組實現の爲には第一回展覽會にも出品せぬと云ふ者もあつた。

展覽會開會を前にして文部大臣松田源治急逝し、開會後間もなく内閣更迭のこともあり、閉會間近くして平生夙三郎が廣田新内閣の專任文部大臣に就任した。此の政情の變化は、所謂再改組派の希望と運動とを一層活潑にさせるものがあつた。平生文相は就任以來美術界紛糾の圓滿收拾を念とし諸方面に意見書提出を慫慂した爲、前記の如き運動團體及び各立場を異にする會員等は競つて夫々の意見書を文相宛に提出し、あらゆる主張は殆ど出揃つた觀があつた。文相は自ら是等の資料に基いて研究の結果、展覽會

機構改革に關する一試案に到達し、六月四日官邸に會員を招いて懇談會を開催、席上之を提出して各會員の考慮を求め、此の案を基礎として會員の意見一致し得る展覽會改革案の作製を要望したのであつた。

此の試案の要點は、展覽會を二分して一を帝國美術院主催無鑑査のみの招待展とし、一を文部省主催鑑査展とすること、並びに舊帝展無鑑査の全部を復活させること等在つて、反對運動の大部分及び「再改組派」の會員を大體満足させ得たと共に、昨年の改組方針を支持する、世間に「支持派」と呼ばれた會員等を到底承服させ得なかつた。是等の會員十四名の外、夫々別個の立場から二名、都合十六名の會員が一舉に辭表を提出し事實上帝國美術院の運行は休止するの已むなき事態に立ち到つた。十四會員の連名を以て發した聲明書に據れば、彼等は試案の内容に不満であると云ふばかりでなく、「當局の方針突如として一變し」「院議の決定を無視し」て「改組の趣旨を沒却せる試案を提出するに至つた」新當局を信頼し得ないと云ふ理由からであつた。

文部省では、此の帝國美術院の問題を姑く別にして同院と無關係に本年度展覽會を開くことに決し、十月半より十一月下旬に互りは、前記試案の趣旨に據つて鑑査展及び招待展に分けた昭和十一年文部省美術展覽會を開催した。其の規則、被招待者人名、其の他具體的の細目決定に當つては、帝國美術院の所謂「殘留會員」を集め其の意見に多く聽いた。「殘留會員」の中には此の展覽會の趣旨に不賛成の爲、之と關係することを謝絶した者もあつた。

展覽會は、既成作家の優遇及び新人の獎勵と云ふ方針が實現されて、招待展に招待を受けた作家は六百六十九名の多數に上り、「新人展」では思ひ切つた寛選が行はれて、兩者共質の低下した作品が氾濫したとは世評の

はゞ一致して認める所であつた。展覽會の方針、出品者の範圍何れも今春の帝展とは逆の場合となつたもので、宛も振子運動の如く動いた此の官展問題は、帝國美術院の破綻と無鑑査激増の悩みとを後に残して此の年を終つたのであつた。

官展の問題を繞つて上述の如き對立が行はれた一方、美術團體其の他の間にも、直接間接に其の影響が及んで種々の動きが見られた。從來の所謂在野團體の主なるものとして、昨年の帝院改組當時會の中心であつた五會員と袂別して飽く迄官展に關與することを拒絶した二科會は、本年は七名の新會員を推舉して、其の展覽會も更生の意氣込を見せ、同じく最初から官展に無關心の態度を取つた獨立美術協會、青龍社等は依然として夫々の立場で活動を示した。昨年新帝展改革意見を提出して容れられぬ爲之と絶縁を聲明した春陽會は、平生文相の試案に對して修正案を提出し之に協力せんとしたが、文展が開催されるに及んで依然官展と無關係の立場を取つた。同會は昨年の改組以來數名の會員を失つたが、春季の同會展覽會では曾てなき嚴選を行ふなど藝術的な覺醒と努力とを示した。國畫會は新帝展には參加するものと見られてゐたが、秋季文展の開催を見るに至つて依然在野の立場に返つた。日本美術院は積極的に新帝展に參加し同人院友等舉つて之に出品したが、平生文相の試案提出の結果文展とは絶縁することとなり、從來の如く秋季に同院の展覽會を開いて活動を示した。

昨年の帝院改組以後政治的運動を主要な目的として結成された幾つかの新團體は夫々行く所に落着いた觀がある。文展の開催に依つて第一部會は既に目的を達したものととして解散し、第二部會は一波瀾の後文展參加を決議して反對運動を終熄させた。彫刻團體では第三部會が飽く迄官展反對の立場を取つた外、帝展には參加しなかつた東邦彫塑院、日本木彫會等何れ

も文展に加はり、從來在野の殆ど唯一の彫刻團體であつた構造社亦文展に合流して本年は自らの展覽會を開かなかつた。是等とは稍事情を異にするが、多年の歴史を有する日本南畫院は文展問題に端を發して遂に九月解散するに至つた。

新な運動として注目すべきものも幾つかを數へる。舊帝展系の洋畫團體東光會より分れた作家達と、同彫塑團體塊人社とは合同して今春主線美術協會を組織し、十二月其の第一回展を開いた。昨年二科會と別れた石井柏亭等四名の帝院會員は本年の文展に反對したが、十月二科會を脱した裕伊之助等四名の作家と共に新團體一水會を組織した。第二部會の態度に憤つて同會を脱した少壯作家七名は「反アカデミツクの藝術精神」を旗幟として新制作派協會を結成し、十一月其の第一回展を開催した。此の運動は工藝界に於て昨秋結成された實在工藝美術會が五月に第一回展を開いたことと共に、本年に於ける顯著な藝術運動と見るべきであらう。

今年完成された國家的記念物の大なるものが二つあつた。一は四月完成記念式を舉げた明治神宮外苑の聖德記念繪畫館であり、一は十一月竣工式を舉げた帝國議會議事堂である。繪畫館は申す迄もなく明治天皇の御盛徳を千古に記念し奉らんが爲、財團法人明治神宮奉贊會の事業として大正六年に計畫され、建物は既に同十五年竣工を告げたが、其の主體たるべき八十枚の繪畫は全部の製作に時日を要し、今春最後の五枚が納入されると共に其の完成記念式が行はれたのであつた。經營當局、奉納者及び揮毫者の至誠と努力との成果たる此の盛舉は、我が美術史上にも輝かしき一記念碑を加へたものと謂はねばならぬ。併しながら此の完成の結果を見て卒直に評するならば、現代美術の精粹たるべき是等の作品が必ずしも其の稱に値せず、今日の我が美術の水準を後世に傳へるものとしては許容し難いこと

を遺憾とする。作者の選擇にも依ることであらうが、一面現代の多くの作家が此の種の製作に著しく不慣れなことを示すものである。議事堂に關しては後段建築の部に於て記すであらう。

日本畫

落着きがなく騒がしくはあつたが、製作の上から見れば畫壇は頗る賑かであつた。前述の如く、本年は異例として春秋二季に、帝展と文展と二回に互つて官展が開かれ、主なる作家は兩者各々に分れて出品した形となつたが、是等を合せるならば畫壇の主要作家を殆ど網羅したこととなる。院展に屬する作家達は更に自身の展覽會を開いた爲に、發表の機會は一層多かつた。意識する与否とに拘らず全體として大きな對立の風潮に在つたことも原因をなしたのか、近年に珍しく張りのある作品を見たのは興味深き現象であつた。

日本畫壇で目立つことは、問題の作を提供し若々しい精進と努力とを示すものは、少壯作家に乏しくして、寧ろ既に老境に入つた大家達に多いことである。中堅と呼ばれる所謂無鑑査級作家の数は夥しく、新人の新たな試みも見られぬではないが、大勢としては功成り名遂けた大家達が依然先頭に立つて活動して居る様が見える。春の帝展には會員等は何れも力作を示した。川合玉堂の「雪しまく瀬戸」、結城素明の「野梅」、小室翠雲の「白乾坤」、橋本關雪の「唐犬圖」、鍋木清方の「慶喜恭順」、横山大觀の「龍蛟躍四溟」、前田青邨の「觀畫」、安田靫彦の「役の優婆塞」、富田溪仙の「萬葉春秋」、川端龍子の「茸狩」等出來不出來はあれ、何れも陳套の畫境に安住することなく、新鮮な研究の熱意を示してゐるのである。中堅又は新進と呼ばれる人々の中には例へば中村岳陵、太田聽雨、杉山寧等の如

き因襲的な取材や技巧を離れて自己の途を拓かんとする者はある。奥村土牛の「鴨」は日本畫の特質をよく生かし、而も新鮮な感覺に富むものとして好評であつた。無論は等の外にも將來を期待せしむる人々が無いとは言へぬが、前述の如き大家の作品を除けば會場は頗る寂寞を感じしめる。

秋の文展及び院展に就てもほぼ同様の觀察がなされるであらう。文展に竹内栖鳳は近年の大作「夏鹿」を出品した。此の作には讚辭と不評とが並び行はれたが、それは彼の藝術に關する評と見るべく、其の長所も短所も共に發揮された此の作が問題を提起する力作であつたことに異論はない。西山翠嶂、上村松園の如き作家等の若々しき精進も認めなければならぬ。院展に於ける收穫を顧るも、其の主要なるものはやはり横山大觀の「野の花」、小林古徑の「紫苑紅蜀葵」、前田青邨の「白河樂翁」等であつた。是等の大家達の努力に比し、一般を通じて多くの既成作家達の間に、藝術的野心の不足と、創作活動の不振とを指摘せざるを得ないのである。

他方顯著なる一傾向と見られるのは、所謂新人の間に洋畫的手法の盛行することである。日本畫に洋畫の長所を採り入れることは今に始まらず、其の是非は論ずる迄もないが、茲に言はんとするのは日本畫の材料に依る洋畫の表現形式の皮相なる模倣である。此の問題は屢々説かれ美術學校の教育方針にも及んで批評された所であつた。日本畫の優れた傳統的技法を棄て、徒らに洋畫模倣に趨くことの愚は、何人も容易に考へる所であるが、同時にそれだけで片づけられない惱みを今日の多くの畫家が抱きつつあることを見通してはならない。多年傳承され來つた日本畫の技法はかなり嚴格な形式主義を含み、表現上に或る制限が約束される。新時代の藝術を創造する爲自由な表現効果を求めて、過去の形式を離れ新技法に到達せんとする努力が、自ら洋畫に近接した結果を生んでゐるのである。

此の問題に深入りする遑を有しないが、本年特に此の事は目立つ現象であつた。作品の實例は、帝展にも、文展にも、又青龍社、明朗展、其の他隨所に數多く擧げることができる。多くは胡粉等を塗り重ねて素地を餘さず、線條を省いて荒き筆觸に色彩効果を求めるもの、光の調子を寫さんとするもの、細密描寫に依つて寫實に迫らんとするもの等手法は様々であるが、多くは形式打破に急であつて材料の特質を十分生かすに至らず、技法的に圓熟せぬものを見る。洋畫に近似して而も遙かに其の進歩に遅れた程度に止つてはならぬであらう。文展鑑査展に於て文部大臣賞を獲た加藤英三の「薄暮」及び選奨された三點は、何れも斯かる傾向を示すものであつた。此の事は當局の獎勵方針に就いての批評をも惹き起したが、他に優れた作品の乏しかつたことに依るとも云へるであらう。ともあれ新進作家の主なる傾向を知るに足るものである。

斯かる傾向に在つて自らの境地を拓きつゝある作家、或る成功を見せた作品等も固より幾何かを數へることができる。例へば文展招待展に於ける川崎小虎の「山・濱」、吉岡堅三一の「高原白夜」、福田豐四郎の「六月の森」等の如く、或は青龍展に見る一二の例の如くである。

青龍社の活動は未だ作家個々としてよりも、集團的運動として意味が認められる。沈滯勝ちな日本畫壇に在つて、「健剛なる會場藝術」と云ふ明瞭な藝術主張の下に新たな日本畫を創造せんとする潑刺たる活動振りは目立つ所で、其の將來性に或る期待が懸けられる。川端龍子「海洋を制するもの」と「雷雨」とに稀なる筆技を示した。藝術的に或る危険を感じしめぬではないが、彼の活動力と時代に對する敏感さとは其の大衆性と共に類が少い。山崎豐の「醍醐」は一境地を拓いたものとして注意すべき收穫たるを失はなかつた。

小團體の展覽會、個人展覽會、畫商主催展覽會等も數多く開催された。團體にも種々のものがあるが、百貨店等が主催して人氣ある作家の會を作ることが近年の傾向として屢々行はれ、作家も此の種の展覽會には力を入れた仕事を示す風があつて、藝術的興味は却つて普通の團體展又は塾展などよりは遙に深い場合が多い。本年此の種のものとして注意を惹いたのは六潮會、春虹會、踏青會、九阜會、七絃會等が主なるものであつた。淡交會が開かれなくなつたのは聊か寂しさを覺えさせる。畫壇綜合を目指して昨年より始められた三越日本畫展は、本年第二回を開いたが徒らに混雜の感を與へ、全體としては調子の低いものとなつた。

展覽會出品以外で本年完成された顯著な作品としては、堂本印象の京都三寶院純淨觀の襖繪を擧げる。彼が數年來近畿地方の諸寺院に描いた襖繪其の他の作品は頗る多く、其の活動は注目されるが、本年純淨觀建物の復興完成と共に納入された水墨及び濃彩の襖繪中、特に櫻楓圖は金碧襖繪の現代的復興に成功した一例として記憶される作品であらう。聖徳記念繪畫館の奉納畫は、日本畫四十枚の中最後に殘された三枚が結城素明、松岡映丘及び岡田三郎助に依つて完成された。其の中岡田三郎助の「大阪行幸諸藩軍艦御覽」は、洋畫を専門とする作者に依つて描かれた點に興味の惹かれるものである。

日本畫壇は本年土田麥僊、富田溪仙、尾竹竹坡、石川寒巖等を失つた。中でも麥僊、溪仙の他界は、洋畫壇に於ける滿谷國四郎と共に我が美術界の蒙つた大きな損害として痛惜される所である。何れも素質に甚だ多くを恵まれ、製作に衰へを見せざるのみか愈々將來を望まれる耀かしい存在であつた。

洋 畫

洋畫壇は著しく活動的であり進取的である。我が國洋畫の一の弱點は、古典の傳統を有せず、眞のアカデミズムの存在せぬことにあつて、其の爲に確固たる技術の根柢なくして常に新なるものを求め、屢々輕薄なる新流行を追ひ勝ちである。歐洲に於ける新興運動を忽ち敏感に反映し、皮相なる模倣を出でぬ尖端的運動が絶えず一部に存在してゐる。併し此の事は弱點であると同時に、一面には藝術を沈滞と凝固から救ひ、時代と共に發展すべき流動性と進歩性とを與へる意味で、良き作用を及ぼすものとも云へるであらう。其の中から育つべきものが育ち、生命なきものは時と共に自ら枯れ萎むからである。

事實洋畫壇に於ける新進少壯作家の技術的進歩は著しく、殊に帝院改組以來の混亂は、彼等をして藝術的に覺醒させ奮起せしめたことが目立つて見えた。藝術運動と共に積極的な社會的進出が種々の例に依つて示されてゐる。固より優れた少數の大家達は各人の完成された境地に在つて、時の流行とは關係なく畫壇に重きをなしてゐることに變りはないが、彼等の多くは安住の境を出でず、積極的な創作活動を示さない。曾ては新人であつた多數の既成作家等は時代に遙か置き去られ、何れの展覽會にも新進の活動が著しい。或る團體の如きは鑑別に當る會員等の何れの作品よりも入選作品の方が優れてゐる奇觀をさへ呈した有様で、畫壇の主流は少壯の新進作家によつて形られると云つても過言ではない。殊に注意されるのは多くの新人が先輩の畫風に倣はぬことで、此の現象は洋畫壇に於て最も顯著に認められる所である。

展覽會に競つて大作が出品される傾向は益々増加した。此の流行は、大

畫面の製作に慣れて、大膽な構圖と筆技とに依り容易に之を描きこなす技巧の發達を來した。物象の單純化と強調、歪形、破調的抑揚などを巧みに驅使して、視覺的に効果を強からしめたものが多い。建築、工藝などの主潮と共通する近代的感覺を反映して、單純、明快な作風が多く行はれる様になつた。舊來の所謂帝展型の説明的寫實から一步前進したのである。固より急激な前進運動は早くから行はれて、之を主義とする團體の活動も盛に行はれてゐることは言ふ迄もないが、茲では中庸穩健の途を歩む一般に就いての觀察である。

技術上の進歩が見られると同時に、其處には又共通した或る缺陷が無いとは言へぬ。大作は、表現の爲に大畫面を必要とする内容を伴はぬ場合、畫面構成の技巧と會場効果を求むるに急にして、一樣に大味となり、質の充實を忘れた永久價値に乏しきものとなり勝ちである。固より機智と技巧だけでは優れた藝術は生れ難く、大作は小品に比して藝術的感興が失はれ易い。事實大作流行の一の弊として、此の種の安價にして退屈なる作品の氾濫が目立つ所であつた。

本年の前半は、第二部會を中心とする舊帝展系作家等の反帝展の氣勢が猶盛であつた。舊來の所謂在野團體は固より、舊帝展系作家等も等しく在野的意氣を以て何れの展覽會もかなり革新的な藝術上の努力を見せた。秋季に文展が開かれるに及んで、前述の如く第二部會は之に参加し、舊帝展系作家は一部分を除いて大體官展に復したが、之を潔しとせず第二部會を脱して反官展の藝術行動を起した新制作派協會の創立及び其の展覽會は、本年の洋畫壇に於ける最も潑刺たる新運動であつた。其の同人は少數ではあるが舊帝展に於ける新進作家中比較的實力と將來性を認められてゐた人であり、官展不開催の意見を有して文展にも協力しなかつた藤島武二が

此の會に贊助出品したこと等と相俟つて、此の運動は頗る注目されたのであつた。作品に現はれた結果は、必しも總て稱讃に値するとは言ひ難いが、現代に於ける若き作家等の一つの主流を代表する一群として注意されるものであらう。帝展支持を聲明してゐた東光會は其の展覽會を昨秋繰上げて開いた爲本年は開催しなかつたが、此の會を脱した作家等が彫塑團體塊人社と合同して結成した主線美術協會も一の新運動と見られるものであつた。其の繪畫部は寫實的な畫風を一擲し、立體派以後の新畫風に倣ふものの如く見られたが、彫刻部は依然舊帝展時代の作風を繼續するもので藝術團體としての態度を知るに苦しませるものであつた。

招待展と鑑査展とに分けて開かれた本年度の文展では、前者は既に過去に於て功績を果し時代の進歩とは離れた多くの作品が、既成作家優遇の方針に依つて蒐められた爲に、洋畫發達史を示す回顧展覽會の趣を呈した。無論現在活動する作家達の出品もあり、岡田三郎助の「婦人半身像」、和田三造の「按摩さん」等の如き夫々異なる境地で技術の完成を示す作品も見られた。從來の帝展作家の外、長谷川昇、山本鼎、林俊衛等の作家が新に加はつたことも或る興味を以て迎へられた。鑑査展は新進の努力を示すものであつたが、程度の低い作品が多く陳列された爲に全體として著しく不評であつた。概して前述の如き缺陷が多く見られ、選奨された作品にも其の例に洩れぬものが多かつた。文部大臣賞を受けた朝井閑右衛門の「丘の上」は場中最大の作で特異な作風と共に目立つものであつた。

二科、春陽會、獨立展等所謂舊來の在野團體も夫々の立場に在つて活動を示した。二科會は更生の意氣を見せたと共に、先輩の會員等は多く振はず、茲でも新人達の活躍が賑かであつた。急進の作家達は既に早く此の會を離れてゐる爲に全體としては現代のほゞ中庸の作風を示し、若くは甚だ

通俗性を帯びたものが多い。畫風は多種多様で美術團體としての主張は明瞭でなく、寄合世帯の觀を呈することが顯著であつた。尤も少壯作家の中に將來を期待させる人々も幾何かを數へる。

歐洲の新興運動に直接影響を受けた所謂前衛派の運動が、かなり盛になつて來たことも本年の著しい現象であつた。近時頗る増加した銀座、新宿等市街中心地の小畫廊を利用して、是等の若き作家等に依つて開かれた展覽會の數は頗る多かつた。獨立展の中には近年日本主義が唱へられ、會員中に其の途を進める作家の幾人かを見出すが、一方出品者の間には超現實主義、抽象主義等に倣ふものが多くなつて來た傾向が注意される。

近年壁畫流行の徴が見え、壁畫研究を目的とする團體なども現はれたが其の大成は遠く將來に俟たねばならぬであらう。壁畫として本年描かれた作品は、聖徳記念繪畫館奉納の和田英作の「憲法發布式」及び藤島武二の「東京帝國大學行幸」の二圖を別として、京都丸物百貨店に藤田嗣治と東郷青兒との描いた裝飾畫、京都日佛會館に藤田の描いたもの等が主なる例であらう。東郷の獨自の畫風は大畫面の場合にも裝飾的な落着きを以て壁畫としての面白い効果を見せた。尤も茲に言ふ壁畫は何れも普通の畫布に描いた油繪を壁面に取付けただけのもので、壁畫として特殊な技法は未だ我が國にあまり試みられて居らぬ。

洋畫壇では本年滿谷國四郎、河合新藏、栗原忠二、佐分真、原田和周等の諸家を失つた。

彫 刻

昨年以來の美術界の紛擾は、彫刻界に小會派分立の時代を現出し、運動としては相當活潑な動きを見せた。是等の團體は舊帝展系作家の間には東

邦彫塑院、第三部會、日本木彫會、塊人社等を主なるものとし、其の他構造社、院展二科國展等の彫塑部、二科會から昨年分れた新彫塑協會等を舉ぐべく、多年發達の遅れ勝ちであつた彫刻界は、形の上では可なり有望な活動期に入つたものの如く見られ、帝院改組の影響が少くとも作家の發奮を促す効果のあつた例を茲にも認め得るのである。

帝展は新制度として彫塑を甲種（彫刻）と乙種（塑造）との二科に分け、今春の第一回展覽會では其の甲種のみを受付けることとした。此の甲乙の區別に就ては、甲は大體木彫を主とする傳統的な日本彫刻の技法を繼ぐもの、乙は塑造を主とする西洋彫刻の技法に倣ふものと云ふ程度に、常識的には理解されたが、規則には明確な定義を缺き會員の間にも當初から解釋に意見一致を見ぬ有様であつたから、此の制度は實施以前から既に其の成果を危まれてゐた。出品者の側として之に反對し、昨秋以來熱心に其の撤廢を主張して運動を續けてゐたのは東邦彫塑院を中心とする作家達であつた。此の問題のみが原因ではなかつたが、併し重要な動機の一となつて、帝展には多くの作家が出品を見合せた結果、甲種のみとは云へ入選數僅かに十七點と云ふ稀なる不成績を示した。而も搬入された作品の判定に就いて鑑査に當つた會員の間に異論を生じ、或る會員は憤然鑑査を棄權して退場すると云ふ場面をさへ生じた。展覽會は斯く異常な寂しさの中に殆ど院展に屬する作家の努力のみが見られ、殊に真剣な意氣込を示した平櫛田中の「靈龜隨」と佐藤朝山の「八咫鳥」とは、木彫として稀なる大作であり記録さるべき力作であつた。

帝展に参加しなかつた日本木彫會は五月展覽會を開いて更生の努力を示し、新彫塑協會は若々しい活動を起した。此の會は未だ作品に完成したものを見出し難いが、本年の展覽會にドイツ現代の大家、ゲオルグ・コルベ

の作品を陳列紹介したことは、我が彫刻界に刺激と參考とを供したものであつた。年少作家の間に早くもコルベに學ぶ作品が本年幾つか現はれたことに依つても明かである。模倣に急なる輕佻さを責めるよりは、我が國の彫刻界が權威ある指導精神を缺き、平俗低調なアカデミズムと習作的寫實の域を未だ脱し切れぬ現狀に於て、研究心に燃える青年作家の當然な欲求の現はれと見なければならぬ。

構造社、東邦彫塑院等は本年文展に参加することとなつた爲に自らの展覽會を開かなかつたが、官展に對立する第三部會、二科會、及び再び官展を去つた日本美術院等は、何れも夫々の特色を示しつゝ、秋季展覽會に活動を示した。殊に昨年來種々の打撃を蒙つた二科彫塑部は、渡邊義知を中心として從來にない努力と進展とを見せた。院展では石井鶴三の「老婦袒胸」同大阪展のみに出品された保田龍門の「吉岡訓導殉難群像」等の收穫が記憶さるべきであらう。

文展には、第三部會を除いて舊帝展系作家が舉つて出品した外、院展を脱した藤井浩祐が加はり、構造社等も参加した爲中々賑かであつたが、傑出した作品として特記すべきものは僅少であつた。既成作家等は固定した境地に安住して、新な研究や飛躍を見せるものに乏しく、新進作家達は習作の域を脱し兼ねてゐるものが多い。建畠大夢の「十七の女」は作者の研究的な熱意を示したものととして注意され、藤井浩祐の「手鏡」は洗練された作品として好評であつた。

建築裝飾或は記念碑的製作等の社會的需要と共に、浮彫を試みる作家が多くなつて來たことも注目される。併し極めて少數の作家を除いては未だ其の技術は専門的に研究されて居らず、技法的に遺憾なものが多い。第三部會、文展等に浮彫の種々な作風を示すものが見られたが優れたものは稀

であつた。薄肉では齋藤素巖の「貝」(文展招待展)が技術的に圓熟の境を示し、半肉彫では一色五郎の「電信兵」(文展招待展)が其の行き方に於て或る成功を見せた。

彫刻界には洋畫に見る如き急進的な新運動は餘り現はれないが、之は其の性質上基礎的習練が一層必要とされる故でもあらう。

工 藝

美術界紛糾の中に在つて、工藝作家の間には積極的な反帝展運動なども餘り表面に行はれることなく、比較的靜穩であつた。併し作家の間に新な團體を組織して、新時代に即した工藝創作の研究と發達とに努力せんとする氣運が、俄に盛になつたことが見られる。東京では、實在工藝美術會が昨秋結成され、今年五月日本漆藝院が結ばれた。關西では昨秋組織された京都の蒼潤社、大阪の創工社等が主なものである。更に京都では本年末に至り従來の工藝各部門に於ける諸團體の大同團結を計り、同市工藝界の綜合團體として京都工藝院の組織が成つた。

本年示された是等の運動の中、藝術的主張から見て最も注意されたものは實在工藝美術會であつた。舊帝展作家の中、新時代の傾向を代表する舊尤型の同人を中心とするもので、五月作品公募に依る第一回展覽會を開いた。其の主張する所は、所謂帝展式工藝の、一品製作に依る技巧過重、實用を離れた鑑賞本位に流れる傾向を排し、生活に即したる用と美との一致を求め、多量生産とも結び着くべき現代に有用なる工藝を生み出すべしと言ふものの如くである。工藝の主張として今更耳新しいものではなく、要は其の製作上の實現に在ることは言ふ迄もないが、第一回展覽會の成績はともかくとして、相當に有力なる作家を集めた此の團體の活動は、今後の

工藝界に或る意義を持つものとして期待されるであらう。

現代の代表的な工藝作家は、少數の例外を別として、從來大體帝展に集中されてゐると云つてよい。本年は帝展と文展と二回の發表の機會があつたと云ふ以外、全體として情勢に著しい變化があつた譯ではなく、作品の傾向等に就ても特に注意する程のものを見出さなかつた。

元來帝展の工藝には新舊様々の傾向のものが含まれるのであつて、之は當然なことと言へるが、陳腐と極端なる新奇とは共に斥けられる所から、何等か新時代らしき意匠を案出し、之に技巧の精緻を凝す傾向の作品が最も多く現はれた。優れた感覺と必然の要求から生れぬ以上、徒らに虚飾に終つて眞の工藝美を失ふことは言ふ迄もなく、帝展工藝が難ぜられた點は斯かるものに對してであつた。工藝は其の性質から、實用性を離れずして而も新鮮なる創意を示し、藝術的品位を併せ具ふことは、他の美術に比して或る意味で一層困難が伴ふ。本年の帝展文展を通じて此の困難を征服し得た作品は依然として多くはなかつた。併し裝飾過多の平俗なる作品の多い中に、單純簡素の美を求めんとした清新なる作品も現はれる傾向は、些少なから認められる所であつた。

昨年帝院改組以來人形進出の運動が俄に盛になり、本年の帝展及び文展には何れも六點宛の入選を見た。人形研究或は獎勵の團體が頻りに創設され、其の展覽會が開かれたなど、新な現象の一に數へられるであらう。

商工省工藝展は、帝展(或は文展)とは別個の目的の下に重要な一使命を持つが、一般に、或は出品者の間にさへ其の目的が十分理解されて居らず、帝展よりは一段程度の低いものと云ふ位に考へられて居り、出品の結果から見れば正にそれが實狀である。本年の出品にも失望して、「更に來年を待たねばならぬ」と言ふ審査當局の言は十分考慮さるべきである。

漆の種々な利用法に關する研究、硝子工藝の進歩などを本年の收穫の中に數へて置きたい。漆繪の如きも特志な作家等に依つて試みられ、漆膜の利用など工夫されつゝあることが見られた。硝子では岩城製造所に於てバート・ド・ヴェールの製作が完成され、又岩田藤七に依つて、近年彼の工夫した吹硝子の技法の特殊な味と面白さを持つた様々の効果が示された。吹硝子の技法を金工と組合せて、其の透し彫に應用せるものなども試みられ、硝子工藝發達の將來は今後愈々有望なるべきを思はせるものがあつた。

美術團體で工藝部を有するものは幾つかあるが、それ等の中では、幾人かの優れた作家を會員に有する國畫會が獨り抽んでて異色ある活動を示した。たゞ多くの出品の中には素人の手藝の範圍を出でぬものもかなり見受けられる。團體ではないが、工藝教育機關として自由學園工藝研究所が、社會的に相當の活動を示すやうになつて來たことも注意される現象の一つであつた。

日本民藝館が東京駒場に建設され、十月開館式を擧げたことは喜ばしい報道の一である。柳宗悅等同志の多年に亙る苦心の成果で、蒐集陳列された多數の所謂民藝品は、我が民族の優れた工藝的感覚を素直に示し、現代に忘れ勝ちな工藝美の本質に就いて教へる所が尠くない。

數年間高崎に在つて同地方の産業工藝指導に盡瘁し、顯著な功績を示したドイツの建築家ブルーノ・タウトは、トルコ政府に迎へられて十月日本を去つた。優れた感覺と創作力を持つ藝術家として、日本を理解し得た少數の外國人の一人として、彼の潜在は特に我が工藝界に取つて一つのよい刺激と教訓とを與ふるものであつた。彼が残した仕事は其の後繼者に依つて續けられてゐるが、タウトの設計圖案が其の儘繰り返し用ひられるに止

まることなく、之に出發した更により、更に日本のものの、自由なる發達が見られるのである。

漆工の名家赤塚自得を失つたことは、本年我が工藝界の受けた大きな損失であつた。

建築

本年の建築界を概觀するに當つては、先づ其の規模の大と國家的重要さから、帝國議會議事堂の竣工を記さねばならぬ。之は大正七年の懸賞當選設計に基いて十數年前に設計されたものだけに、其の外形はルネッサンス様式を主體として之をセセッション風に自由に改變し、細部の裝飾には所々東洋的題材を採用し、内部はルネッサンス、バロック及びロココの諸様式を用ひたもので、其の日本的要素の排除と非合理性は現代の建築思想からは物足りなく感ぜられようが、當時の歐米建築模倣時代の設計としては最善を盡したものと云ひ得るであらう。又右に記した如き歐洲建築の諸様式を本格的に使ひこなし得る點も、其の意味では賞讃されねばならぬ。

殊に裝飾の材料と技術の本格的な施工振りは、とかくまがひ仕事の裝飾の多い我が洋風建築界に其の意匠の當否を別として、好模範を示すものと言ふべきであらう。便殿及び兩院協議室のみは、立禮の洋室ではあるが日本風に裝飾され、殊に前者は造作を漆塗りとなし、壁及び格天井には華山織、錦、刺繍を貼り、扉は螺鈿、高蒔繪を以て裝飾するなど我が國工藝の粹を活用し、それ等が美しく調和して莊重なる雰圍氣を醸し出すことによく成功した。

此の大建築の總ての材料を國産に得たことは特記に値するが、之が爲に我が國に産する天然建築材料の調査を完了し、石材特に大理石の産出を促

進し、或は諸種の建築材料の製産、工藝特に織物の製作技術の發達に寄與したることなどは、喜ぶべき副産物であつた。又之が議事堂建築として世界最新のものであるだけに、其の機能を發揮する上に、他國の議事堂に其の比を見ぬ幾多の新しき機械的設備を有し、其の總てを國産を以て完成した點にも當事者の努力を多とせねばならぬ。

前述の如く其の設計が十數年を遡る議事堂は別として、本年に於ける建築界の特徴は合理主義の浸潤である。所謂國際建築型の徹底的な合理主義建築は決して多くはないが、それでも明朗で健康的な東京市の江戸川及び谷中小學校（設計者東京市建築課）を初め、慶應義塾幼稚舎（設計者谷口吉郎）、鐵道博物館（設計者鐵道省）、京大醫學部附屬醫院内科病室（設計者同大學營繕課）日本赤十字社滋賀支部（設計者岸田日出刀）、野々宮ビルディング（設計者土浦龜城）、變つた所では新舞子水族館（設計者久米權九郎）等を舉げることができる。區役所の建築が、東京の目黒と澁谷とに於て（設計者東京市建築課）合理主義的なものとなり、民衆に親しみ易い明朗な姿を以て現はれた例を見るのは喜ばしい。

其の他神戸大丸（設計者村野藤吾）、關西日佛會館（設計者木子七郎）、日本赤十字社東京外來診療所（設計者同前）等、舊來の建築美を保有せしめんとしつゝ、而も合理主義的な新しい建築への關心を明かに示したものが多い。ロマネスク風を主體とした大阪市美術館（設計者大阪市營繕課）等も妙な裝飾を附けてはゐるが其の一である。

斯かる合理主義的傾向は、瓦葺屋根を持つ日本風な鐵筋コンクリート建築にも見られるが、それが合理主義を根本とする日本建築の精神から新に出發した仕事ではなく、單に舊來の日本建築の型を探り、それに合理主義的な取扱ひを加味してゐる程度に止まるのは遺憾である。

合理主義的ではないが、材料の美を驅使した豪華な裝飾を持つ近代建築の代表としては、大阪放送會館を挙げ得るであらう。其の建築は、放送技術上の機械設備に就いては別として、音響に關する行届いた建築上の配慮に於ても注目し得る。ルネッサンス風の莊重な建築は猶銀行等の方面に於て歡迎せられ、日本郵船横濱支店（設計者和田順顯）、三井銀行大阪支店（設計者曾禰中條建築事務所）等に其の例が見られる。

一般建築の機械的設備に就いて一言すれば、冷房裝置の流行及びパネル・ヒーティングが大規模な建築に用ひられ初めたことは、本年の顯著な現象であつた。

住宅建築に移る前に、所謂アパート建築の流行に就て記さねばならぬが、本格的なアパートメントハウスの建築は未だ我が國に少い。代表的なアパート建築としては曩に舉げた野々宮アパートがあるが、之は特殊な人々（主として外國人）を對象としたもので、我が國一般の經濟水準からは聊か贅澤に過ぎる憾がある。其の點では青雲莊アパート（設計者山口蛟象）の方が、我が國一般のアパート建築の、諸問題解決の一つの試みとして興味がある。

住宅建築に於ても合理主義の浸潤は目醒しい。所謂國際建築型の陸屋根は、木造建築に於ては施行が困難である所から、他の部分は國際建築型に近い様式を探りながら瓦葺の勾配屋根を用ひる人が多くなつて來た。今一つ目立つのは、木造モルタル塗の乾燥上の缺點を考へて、木造の乾式構造が次第に流行して來たことで、スレート壁を使ふ外、大壁造りの堅羽目や下見板張りが用ひられるやうになつた。此の種のもので最も興味のあるものは谷口吉郎邸（設計者同人）で、先年レイモンドがブラウン邸でアルミニウム箔を中空壁の間に挿入したのに對し、此處では外壁を堅羽目に、内壁をテックス張りとして、其の中間にトタン板を用ひた。此の建築は又、中

中央部居間の吹き抜けを換氣筒に利用してゐる外、諸點で新機軸を出してゐる。

陸屋根より勾配屋根への復歸竝に木造の乾式構造の流行は、木造でも立派に陸屋根が施工し得るとは云へ、又外國で乾式構造が流行してゐるからとは云へ、明かに我が國の氣候風土の特殊事情に對する關心が深まり來つた結果であつて喜ばしいことである。斯かる我が國固有のものの再認識は構造上のみならず、造型的にも次第に努力せらるゝに至り、以前は少數の先驅者に依つてのみ行はれてゐた、日本的題材と日本の材料とを新しき生活機構に順應せしめて新しく生かすことが、汎く試みられて來た。それを外國人であるだけに却つて勇敢に行つたのが、ブルノー・タウトの設計に成る大倉邸（久米權九郎と共同設計）及び熱海の日向別邸で、後者は日本座敷を主體として、桂離宮の理想を現代に生かさうとしてゐるが、それが其處では成功してゐるとしても、新時代の日本建築の途を示すものとは言ひ得まい。吉田五十八の山川秀峰邸の書齋は、日本の古き民家の手法を洋室に應用したものであるが、日本人の趣味感覺をよく近代生活に適した立禮の室に生かしてゐる。

其の他

美術批評に關しては、從來からも屢々批評不振の聲を聞かされてゐる所であつたが、本年特に注意された現象は、新聞雜誌等に多く作家の執筆に成る批評が發表されたことであつた。それには種々の原因も考へられるであらうが、要は批評家の批評が權威を有せず、或は讀者の興味を繋ぎ得ぬことから、自然ジャーナリズムに依つて作家批評の流行が興されたものであらう。固より作家批評には或る興味があり、中には優れたものも見出さ

れぬではない。又例へば洋畫家の日本畫批評の如き、専門外の作家の評には他山の石とすべき言説が聞かれぬではないが、何れにせよ美術批評としては本筋のものと言ひ難く、一つの奇現象と見る外はない。美術批評の確立を期し、幾多の事業計畫を示して美術批評家協會が十月結成されたことも、斯かる時流に在つて其の發生の理由を見出したからであらう。同時に指導的權威として個人の力が殆ど無力となつた現代に於ては、美術批評も團體的な力を必要とすることが發見されたからでもあらう。

現代美術館の必要に就いては、過去に於て既に説き盡され、其の建設運動の如きも屢々企てられつゝ未だ實現の曙光さへ認められぬ状態であつたが、本年六月帝展問題の解決案に伴つて、平生文相が積極的に美術館建設を政府事業として計畫し、其の要綱を發表したことは、多年に亙る美術界の要望を充すものとして諸方面から多大の期待を持たれたのであつた。併し相當の費用を要する此の案は、同文相の熱心なる努力にも拘らず早急の實現を望み難い模様である。

早くより計畫されながら經費難の爲に、建築完成に多くの年月を費してゐた大阪市立美術館が、愈々本年五月竣工式を舉ぐるに至つたことは、大都市大阪としては遲きに過ぎた觀があるとは云へ、美術館事業の甚しく遅れた我が國としては喜ばしい出来事であつた。同館が古美術品を主として陳列する美術館たると共に、半ばは現代美術の展覽會場として使用されることは、便宜の方法として固より不可欠とするも、現代美術館としての計畫を有する大禮記念京都美術館が、殆ど全く展覽會場に使用されてゐる現状と併せ考へて、各大都市が夫々古美術及現代美術の爲に美術館を有し、展覽會場も別個に經營される日の速に至らんことが希望される。

東京帝室博物館の復興建築は工事進捗して、其の外廓はほぼ完成を見る

に至つた。

東京、京都、奈良及び本年よりは大阪を加へた諸地の博物館又は美術館では、例年春秋の季節に主として古美術に關する特別展観が催されるが、本年開催された主なるものは、東京帝室博物館の奈良時代出土品展、東洋古陶磁展、奈良帝室博物館の繪卷佛畫展、恩賜京都博物館の桃山時代障屏畫展、丸山應舉展、大阪市立美術館の開館記念名寶展、傳教大師奉讃展等であつた。其の他古美術展覽會としては、大阪城の南蠻屏風展、徳川美術館の隆能源氏特別展観、或は白鶴美術館の春秋二期の展観等が主なるものに數へられる。

昭和九年より着工された法隆寺保存の大修理工事は、昨年より初めた大講堂の解體修理を續行し、往時の建築構造を知る幾多の發見がなされた。それ等の結果は嚴密な調査を経て舊形に復する爲に種々現状の變更が行はれてゐる。尙本年は西圓堂の修理が完成されたが、此の場合に於ても文政年間に附加された向拜は撤去したのであつた。

内地に於ける重要な發掘事業は、日本古文化研究所に依つて昨年に引續き行はれた藤原京遺址の發掘が最大のものであつた。此處では多くの貴重な遺構が發見されて學界の注意を惹めてゐる。尙藤原京に關して異説を有する喜田、足立兩博士の論争が、近年稀なる活潑さを以て行はれたことも併せ記して置きたい。

朝鮮に於ては、日本學術振興會の補助に依り朝鮮古蹟研究會が高勾麗、百濟等の遺蹟の調査を開始した。本年は平壤附近の高勾麗古墳二十一基に就て調査及び發掘が行はれ、壁畫の發見がなされたことも貴重なる資料を加へたものである。又扶餘では總督府の委嘱に依り帝室博物館の石田鑑査官が百濟寺院遺址の發掘を行つたが、其の結果は百濟の伽藍配置等に關し

闡明された所多く、佛像の出土等と共に學界に貢獻する所があつた。

近時日本文化宣揚の一として、我が國美術の海外紹介進出等の氣運が興り、昨年度には英、米等に日本美術に關する講師派遣のことが行はれたが、美術品の海外進出に就ては、現代美術はともかくとして、古美術品展観の爲の國外搬出は場合に依つては必要を認められつゝ、一方に於て損傷等の危險を顧慮する有力な反對意見がある爲に、積極的には行はれ難い現状である。本年は、濠洲シドニーに開かれた國際美術展覽會に現代の繪畫及び工藝品の若干を出品したこと、日本版畫協會が外務省其の他の後援に依つて現代版畫を送り、歐米各地に展覽會を開催したことなどがあつたが、更に古美術に關する大規模の出品として、米國ハーバード大學創立三百年記念としてボストン美術館が計畫した日本美術展覽會に賛助し、御貸下の御物を初め、國寶及び重要美術品を含む百點の繪畫及び彫刻が送られ、豫期以上の効果を收めたのであつた。

別に英國ローヤル・アカデミーでは、名品多數を網羅して一層大規模な日本美術展覽會を昭和十四年開催する計畫を立て、同國政府より我が外務省宛正式に招請を申込んで來たが、關係當局に於て慎重に考究した結果、其の到底不可能なることを認めて之に應じ難き旨を回答した。國寶搬出に關しては、近年愈々其の問題が繰返される傾向のあることに鑑み、豫てより之を憂ふる人々の間には、國寶の國外搬出を絶対に禁ずる様法律を改正すべしとする意見も行はれるに至つた。

我が美術海外進出の一として、全く別の場合ではあるが、印度鹿野苑の初轉法輪寺の大壁畫が、野生司香雪の五年に亙る獻身的な辛苦と努力の結果、本年完成を告げたことは喜ばしい報道であつた。

美術展覧會

一月

諸作家洋畫小品展

一月四日—六日 大阪・美術新論社畫廊

京都五條會作陶展

一月四日—九日 大阪・三越

東西名流工藝家新作展

一月四日—十二日 京都・大丸

高田廣喜個展

一月五日—七日 下關商工會議所

第二回オサカ漫畫クルツベ展

一月五日—十日 大阪・阪急百貨店

新造型美術協會第二回展覽會(洋畫)

一月七日—十八日 東京府美術館

新時代の繪畫運動に任じ、超現實主義を採る同

會の展覽會で、會員十一名、會友九名の作品約八十點を陳列した。

安田謙洋畫個展

一月八日—十二日 大阪・美術新論社畫廊

NOVA美術協會第六回展覽會(洋畫)

一月九日—十八日 東京府美術館

會員五名が各々少きは數點、多きは二十數點を

出品、其の他は壁面使用料を徴する無鑑査制度で

同志の出品を募り、所謂前衛派繪畫總計百二十一

點を陳列した。

宇野三吾陶藝展

一月十日—十二日 大阪・十合

現代挿畫大家展覽會

一月十日—十五日 上野・松坂屋

日本挿畫院の事業として、同人等の外挿畫諸作家の舊新作五百點許りを蒐めて展觀した。

青松會第一回日本畫展覽會

一月十日—十五日 上野・松坂屋

東西日本畫家十五名を會員として、大阪松坂屋内に創立され、昨秋十一月同店で第一回展覽會を開いたものの東京に於ける展觀である。出品は各一點、左の十五點であつた。

南天 伊東 深水 山莊阻雪 矢野 橋村

源家源緒 服部 有恆 寒山拾得 山口 蓬春

仔狗 堂本 印象 紅樹 山口 華陽

松 徳岡 神泉 早春 福田平八郎

早春 金島 桂華 若紫 妻本 一洋

こいぬ 中村 岳陵 雪裡鳥噪 兒玉 希望

新春 中村大三郎 夕がほ 廣島 晃市

壺 宇田 萩都

堺洋畫協會寫生展

一月十日—十六日 堺畫廊

第十一回春臺美術展覽會(洋畫)

一月十日—二十七日 東京府美術館

本年は工藝部の陳列をなさず繪畫のみとし、一般出品の外特別陳列室を設けて會員等の寫生に成る滿洲風物展、及び故清水正喜の遺作陳列を行つた。屋覽會の性質として程度の低い作も多く混ることは已むを得ないであらうが、新鮮な潑刺とした力に缺け、或は保守的にしても技術の練達を見

せた力作に接し得ないことは、聊か物足りない。森田元子、山崎坤象、黒田頼綱、有岡一郎、和田清、内藤求等の作は夫々注目され、又先輩の會員達、中村研一、辻永、太田三郎、有馬さとし、伊原宇三郎、岡田三郎助、鬼頭鍋三郎等夫々に自家の作風を示してゐた。故清水正喜は夭折を惜まれた青年で遺作は昭和七年より九年迄のものであつた。

出品數 二三九、滿洲風物展 五六、故清水正喜遺作 一六、合計 三一一點

春臺特賞 内藤 求、黒田頼綱、高宮一榮
春臺賞 三谷浩三、柳瀬俊雄、細田喜道

生野久美子、栗田さだ

安宅虎雄個人展覽會(洋畫)

一月十一日—十五日 銀座・青樹社

陳列作品三十餘點。

「人物、靜物、風景共に、特異のフォルムを決定する事に急で無く、極めて平明な心がまへから製作せられてある事は、第一に觀者に心易い親しみを與へる。然し畫面は夫々に引きしまり、決して、イージー・ゴーイングの跡が無い。これは直ちに作者の人格を思はせ大らかにして、靜かに正面よりする正攻法を示して愉快である。」(佐分眞、みづる二月)

新作家同盟第一回展

一月十一日—十六日 銀座・三共ギャラリー

第一回新自然派展覽會(洋畫)

一月十一日—十七日 日本橋・白木屋

小城基を主宰とし、其の門下生數十名を同人とする新自然派協會の第一回展。寫實的畫風で技術は低い。

一曜會第二回展

一月十二日—十五日 神田・東京堂
樂燒研究會第一回作品展

一月十二日—二十六日 神田・東京堂
第十三回白日會展覽會（洋畫、彫刻）

一月十二日—二十六日 東京府美術館

會員會友を合せて六十人に達する大きな團體であるだけに、展覽會も陳列總數、油繪、水彩畫、彫刻を合せて四百五十に近い龐大な量であるが、質の上で之に伴ふだけの精選を示さぬことは同會の爲に惜む所である。作品の一般的傾向は穩和な寫實的なもので、相當の力作が出品されては居るが進歩的なもの内容的なものに乏しい憾みがある。

會員會友の「淺草百態」が一室に特別陳列された。中で池部鈞が「公園の女」を描いた五點は軽いスケッチ風の作品であるが、特殊な内容的表現を見せて佳品とすべきである。一般の作品の中では綱島廉の「白い手袋」、野口良一呂の諸作、笹岡了一の「紫の羽織」、加治屋隆二、渡部菊二の水彩畫數點、荻野康兒の水彩畫「郊外殘雪」、間部時雄の「鵜舟」、秋元松子の數點等の諸作が注目されるものであつた。彫刻では木村珪二、明珍勝友、永原廣、西田信、富田武雄等の諸作を舉げる。

陳列數 繪畫四一七（内淺草百態三九）、彫刻三一、總計四四八點

授賞

白日賞 高畑正明、加治屋隆二、綱島廉、長

尾三郎、兒島正典（彫刻）

會友獎勵賞 田村信義、荻野康兒、栗林丈、

小泉馨二、渡部菊二

F氏賞 鳩川誠一、佐藤龍雄、佐竹賢彦、小杉
幸三（彫刻）
新帝院日本畫諸大家新作展

一月十三日—十六日 京都・丸物

小川翠村大阪寫生畫展

一月十四日—十七日 大阪・三越

夕刊大阪新聞社主催で大阪郊外八景三絶二十勝の寫生畫を展觀した。

太田三郎洋畫個展

一月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

「いつもの裸婦は一點しかなく、風景と花卉とを主としてゐるので、吾々には珍しく思はれる。華麗な色彩を暢達な筆致をもつて自在にこなし、美しさの魅力があると共に對象の風景また明朗なる場所を選んでゐるので、興味も深く、裝飾的効果十分である。『寄せ來る潮』『秋籬』『新緑の路』『爛漫』『田園退日』『アルプスに雪來る』『雲雀の鳴く頃』『秋深し』などその代表的なものであるが、『薔薇』や『白牡丹』などの花卉も非常に美しい。（大朝）

向井潤吉洋畫個展

一月十五日—二十二日 日本橋・高島屋

「海と岩、或は信州の山々、秋林などの緻密な描寫は流石この『精妙な洋畫壇の奇手』にして始めてなされる業であらう。中でも夕陽を浴びた岩や、雨の海の美しさ、十二月の穂高や戸隠山新雪、岩山、大正池附近などは向井式の岩質や山、浪、樹林の例の描寫が異常に輝いて見える。……既に日本畫的な表現に成功してゐる作品が多い。うるさい筆ながらあらはす所は極めて單純、高雅、氣品ある日本畫の風景である、」

（佐波市、美術二月）
岩佐古香歴史畫展

一月十四日 京都・八坂俱樂部
中京作家新作畫展（日本畫）

一月十五日—十七日 名古屋・松坂屋

名古屋在住の主なる作家三十餘名の作品二點宛を陳列した。

月曜會第三回月例展

一月十五日—十七日 神戸畫廊

京都陶磁工藝展

一月十五日—二十日 銀座・服部時計店

松方幸次郎蒐集西歐カーテン展觀

一月十五日—二十日 麴町・室内社畫堂

大衆向工藝品競技展

一月十五日—二十九日 京都美術館

帝美三六會展

一月十六日—十九日 銀座・伊東屋

大原美術館所藏泰西名畫展

一月十六日—二十二日 大阪・三角堂

第五回六潮會展覽會（日本畫、洋畫）

一月十七日—二十二日 日本橋・三越

日本畫家と洋畫家と三名宛で組織し何等の拘束を持たぬ友誼的な會であるだけに、各々楽しんで製作を並べ、力作と言ふべきはないが、夫々の立場を示して氣持よく見られることが此の會の特色であらう。木村莊八の油繪小品五點と毛筆畫は好評で、「歌妓午後三時」は氣分をよく寫し、「蜜柑」は味ひ深きミニアチュールであつた。中川紀元の作では「松島殘陽」を舉ぐべく、荻野虎雄は「冬枯の山」三點を描いたが、此の作者として特に優れたものと言ひ難い。山口蓬春は「汀」と「春宵」を出した。裝飾的に扱つた試作と見られるが、少

しく作り過ぎて自然を忘れた憾みがあり、「何か大いに物をいはうとして、未だはつきり云へないでゐる」(素心庵生、中商)とも評された。中村岳陵の「双鶴」成功と云ひ難く、福田平八郎は「北西の風」と「五月晴」を閉會開際に出品した。同人合作の陸龜蒙の漁具詩に因む「漁樂十二題」畫冊は各々其の題材を樂んで描き興味豊かなものである。中でも平八郎は好い出來を示してゐた。

富本憲吉日本畫展

一月十七日—二十二日 上野・松坂屋
紙本小品五十點許り、墨畫を主とし、瑠璃手、金欄手、赤繪手等の小壺を寫したものは夫々着彩、金銀泥文様等を現はす。又紺紙、紅紙等に泥描のものもある。草花、樹枝、蔬菜、小魚、陶器等を主題とし、表現にも畫家の仕事とは自ら異なる所がある。

三木義榮新興陶漆展

一月十七日—二十二日 上野・松坂屋
陶器の文様に漆を用ひた作品、皿、鉢、花瓶、壺、茶碗等約二百點を陳列した。

東西諸家日本畫展

一月十八日—十九日 名古屋・中檢番樓上
表現同人展(洋畫)

一月十八日—二十日 銀座・紀伊國屋
在名古屋第二部會入選者展(洋畫)

一月十八日—二十二日 名古屋・丸善
御幸會主催第二回東西大家新畫展

一月十九日—二十日 新愛知新聞社講堂

美術展覽會(一月)

上野山清貢「鶴の繪」個人展(洋畫)

一月十九日—二十一日 澁谷・東横デパート

足立源一郎山岳スケッチ展(洋畫)

一月十九日—二十三日 神戸畫廊

江川平三洋畫個展

一月十九日—二十四日 大阪・阪急百貨店

鬼頭鍋三郎洋畫個展

一月二十日—二十四日 大阪・美術新論社

畫廊

近作十五點を展觀した。

「赤衣の女」は力作で、その確實さや溫雅な趣を代表してゐる。「口紅」「縫物」も同様である。他に風景が多く、「紀州風景」「曇日河畔」「冬日」「冬のニコライ堂」「數寄屋橋」など寫實に重きを置き、一筆もゆるがせにしないところ、小品とはいひながら見たへのあるものである。」(大朝)

富本憲吉新作陶磁展

一月二十一日—二十四日 大阪・松坂屋

「種類は白磁、染付、赤繪、青磁、天目釉に及び、壺、鉢、菓子器、抹茶碗、飾陶箱、陶板、香爐、香盒、湯呑、箸置、帶止の諸器を含み、愛好者を十分に満足せしめるに足るものであらう。白磁大壺や「染付萬物清澄壺」「染付柳壺」「染付蘭壺」「染付廣大陶板」「魚飾陶箱」「むきはら香爐」「染付壽字香盒」などは印象の深いものの一部である。」(大毎)

伊東深水日本畫個展

一月二十一日—二十四日 大阪長堀・高島屋
大阪で初めて開かれた作者の個展である。

「絹本二五横の『鏡獅子』は龔に帝展で好評を博したものの上半身で、顔の表情など却つて出品畫より洗練されたものがあつた。此作を中心として總て二十點、

「伊豆の春」「熱海夜雪」と云ふ風景も加はつて複雑さを示し、大體に於て所謂深木式の美人畫が主ではあるが、「初春」など二人立の珍しいものもあり「灯影」の陰影を見せた畫のやり方など新味も感ぜられ、「柘榴」「涼風」などしんみりした味の作もあつた。」(神崎生、塔影三月)

刻正會農村工藝品展

一月二十一日—二十五日 日本橋・三越

主として北歐の農民藝術に模範を探り、又南洋アフリカあたりの土民藝術なども参考としてゐるが、單なる模倣に終らず幾分なりとも日本人らしい創作の見え始めたこと、技巧の進境を示したことは共に進歩と言へる。併し技巧が専門化して農民藝術の意義からは遠ざかりつゝ、あることが見られる。

東光會關西進出展(洋畫)

一月二十一日—三十日 大阪・朝日會館

フォルム第一回展(洋畫)

一月二十二日—二十四日 銀座・紀伊國屋

金子九平次彫刻洋畫個展

一月二十二日—二十六日 大阪長堀・高島屋

近作並に渡歐作品彫刻四十點、油繪二十餘點を展觀した。

豐藤勇洋畫展

一月二十三日—二十五日 大阪・第二野村ビル

早稻田高等學院繪畫部洋畫展

一月二十三日—二十六日 神田・東京堂
四國民藝品展

一月二十三日—二十七日 銀座・たくみ工
藝店

小杉放庵日本畫個展

一月二十三日—二十七日 日本橋・三越

日本畫に獨自の境を拓きつゝ、ある放庵第四回の個展で、『山中秋意』二曲半双を初めとして花鳥作品十七點を陳列、格段の進境を示したものと好評であつた。其の作風は一般日本畫家の達筆の技法と相反し、禽獸、花卉、岩石いづれも靜的な表現に成り、裝飾的取扱ひに深い觀照を示して、特異な美しさを持つてゐる。

國畫會第一回小品展 (洋・版・彫・工)

一月二十四日—三十日 上野・松坂屋

同會々員及び會友の小品を陳列した。繪畫五十餘點、版畫六點、彫刻六點、工藝二十餘點。佐藤哲三の二作は内容的に好く描かれてゐて『靜物』は白い鉢に赤い柿の單純な色の對比もしつくりし、柏木俊一の風景は深味のある色彩で味ひに富んでゐる。其の他輕いものながら、諸家夫々の特質を見せてゐた。

石井彌一郎洋畫小品展

一月二十四日—三十日 京都・大丸

現代名家油繪みにあちゆる展覽會

一月二十四日—三十日 日本橋・高島屋
各派に互つて知名の油繪作家六十七名を蒐め、各一點乃至數點づゝ計百二十五點の出品を得て陳列した。

「ミニアチュルを通俗の語義に解して小形としたもの。……油繪小品展覽であつて、いづれに至つて小さいものながら、大作において窺はるる程の充實した作

品のみであつた。安井曾太郎君の『赤蕪菁』や藤島武二君と岡田三郎助君の『裸婦』はいづれもよろしい。殊に岡田君のものの如きは十號位と同様な努力が拂はれた作品であり、坂本繁二郎君の『海上の雲』の君には珍らしい表現として注目に値ひし、川口軌外君の『ざくろ』はそのマチエールの面白味をとるべく、高間惣七君の『ばら』はやゝ甘口ながら氣品のすくなからざる作品であつた。石井柏亭君の『庭』はわるくはないが感じにおいて餘りに纖弱に過ぎたと思ふ。」(大隅生、東日)

吉田博洋畫個展

一月二十五日—二十八日 大阪・三角堂

黒色洋畫展

一月二十五日—二十九日 銀座・紀伊國屋

日本漫畫會第十三回展

一月二十五日—三十日 新宿・三越

田村孝之介近作洋畫展

一月二十五日—三十日 神戸畫廊

堀柳女第二回人形個展

一月二十五日—三十一日 日本橋・三越

セクションダール洋畫展

一月二十五日—三十一日 大阪・阪急百貨店

第二十三回日本水彩畫會展覽會

一月二十五日—二月十一日 東京府美術館

永い歴史を有し水彩畫の主要作家を網羅する此の團體の、總出品六百點を超える大展覽會で、現代我が國水彩畫の水準と其の全貌をほぼ見渡すことのできるものと云へる。會員及び一般出品作家の外、今回は特別出品として川島理一郎、水谷清

池田永一治、安井曾太郎、田邊至、三上知治、栗原信、池部鈞、内田巖、佐藤敬、鶴田吾郎の諸作を陳列し、又會員小山周次の西日本旅行資作品、及び會員齋藤大の中部山岳地帶旅行資作品を特別陳列した。

小山周次、中西利雄、早川國彦、池部鈞等の諸作が優れ、南薰造は小品ながら美しさを見せた。特別出品では安井曾太郎が光り、内田巖、鶴田吾郎等の作が佳品であつた。入賞作品の中岡田正二の『造船場附近』は本格的な油繪の迫力を持つ力作で、春日部たすくの『逆光の丘』も推賞するに足りる。一般出品の中で渡部菊二は注目される作家である。

出品數 通常出品五三三、特別出品三六、小山周次特別陳列二四、齋藤大特別陳列一一、總計六〇四點

授賞 M氏旅行資 赤城泰舒、王様旅行資

春日部たすく、日本水彩畫會賞 岡田正二、

第一賞 荒谷直之助、キング賞 名柄正之

みづゑ賞 中田早、ニュートン賞 山口敏男

小西氏賞 岡崎祇容、鈴木榮二郎

桂友標準圖案展

一月二十七日 京都美術館

大橋了介滯歐作品展

一月二十八日—三十日 大阪・松坂屋

第二部會洋畫小品展覽會

一月二十九日—二月七日 日本橋・三越

會員の作品各一、二點の外、昨秋同會第一回展覽會に於ける授賞者伊勢正義、脇田和、田澤八甲朝井閑右衛門、南政善の作品各一點、別に昨年の

例に倣ふ帝院會員岡田三郎助、和田三造、中村不折、中澤弘光、藤島武二、南薫造、滿谷國四郎七名の友情出品七點を陳列し、總出品百三十點の展観であつた。伊原宇三郎、中村研一等の裸婦數點が撤回されたが、之は會場の性質上特に厳しくしたものであらう。現代洋畫壇に活動する多くの作家を集めてゐるだけに、各人夫々の特色を見せて興味深く、又小品だけに素直に描かれて親しみ易い作品が多い。脇田和の「港」は技巧的に完成されたものではないが優れた構想を示す作であつた。伊原宇三郎の「秋の山」は小品ながら充實し、猪熊弦一郎「横濱風景」は獨自の才氣ある技巧に成り、中村研一「水族館」、相馬其一「春の山村」、矢島堅土「化粧裸婦」、小磯良平「踊り子」、三田康「春装」など夫々に注意を惹く作品であつた。

第四回旺玄社展覽會(洋畫)

一月三十一日—二月十日 東京府美術館

旺玄社は牧野虎雄外二十數名の同人に依つて組織されてゐるが、牧野を除いては所謂既成作家として知名の畫家は少く、比較的年少な新進洋畫家の團體である。そして出品を公募して同人作品の外二百數十點の一般出品を選させ、總計三百六十三點を陳列して量に於ては大展覽會を開いてゐる。従つて全體として技術の程度はかなり低く、此の量に對して見るべき作品の少いことは怪しむに足りないであらう。併し一般に新奇を衒ひ或は無理をした大作と云ふ如きものが少く、眞面目に自己の道を進んでゐる手頃な作品が多かつたことは好ましく見られる所であつた。

出品作品の中では牧野虎雄の二點「箱根(冬)」
「函嶺夕陽」がさすがに最も優れ、東洋畫的な表現を心掛けながら油繪の持つ現實感を生かしてゐる。その他では、青柳喜兵衛の諸作、小林猶治郎の「田」、尾崎三郎の「無料宿泊所」、坂田虎一の「茶房」等が注意される作品であらう。

搬入數 一五〇六(五七一人)、入選數 二二九(一六一人)、同人出品數 一二四(二七人)、總陳列數三六三點

授賞

旺玄社賞 坂田虎一、目白賞 水戸矩夫、中村彝賞 鈴木良三、中央商會賞 小林泰山
新同人推薦 深澤省三、遠山陽子
社友推舉 小林泰山、村瀬眞治、松本節、三好俊一、深澤紅子、清水孝一、關川富士郎、薄田芳彦、佐藤文雄、小林榮、坂田虎一、青山襄、市村雄造、水戸矩夫、尾崎律江、遠山八二、巽健治郎、高橋正、藤村はつゑ、村上隆一、石上末廣、齋藤七資、晴木親久、鈴木良三、新野歡一、岡村崇子、松本茂雄、宮島佐一郎、川城國司、石井四郎三

二月

灰野文一郎洋畫個展

二月一日、二日 宇都宮・上野吳服店

クレイ會彫刻小品展

二月一日—五日 大阪・阪急百貨店

池上秀敏日本畫個展

二月一日—五日 大阪長堀・高島屋

「大小二十五點の出品を見せたが、……専念した努力の跡が見え、近頃池上氏作として好感を抱かせられた。『秋山遊鹿』は讀畫會で見た龔のある繪に似たしんみりしたものだし、『蘆汀群雁』は風景味を取入れた珍しい味のものだ。『琵琶行』は紙本半折だが楽しんで描いた氣持が出てゐたし、『高梢』や『五鶴』『狐』『狸』『白鷹』『長春孔雀』など却々努力作もあり、池上氏の近況を知るに便宜のある會だつたと言へる。」(神崎生塔影三月)

佐伯米子洋畫個展

二月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

和田香苗南洋臺灣スケッチ展覽會(洋畫)

二月一日—六日 日本橋・白木屋

作者の最初の個展として、昨夏南洋諸島、フィリッピン及び臺灣に旅行して得た油繪作品三十七點を展観した。

高橋雅子手藝作品展

二月一日—六日 大阪・阪急百貨店

武藤完一洋畫個展

二月一日—六日 大分・一丸デパート

東京高等工藝木工科生徒試作品展

二月一日—七日 新宿・三越

第六回童寶美術院展

二月一日—七日 上野・松坂屋

第五回彌生會人形美術展

二月一日—七日 日本橋・三越

野村守夫洋畫個展

二月一日—七日 大阪・阪急百貨店

第三十二回太平洋畫會展覽會(洋畫、彫刻)

二月一日—十六日 東京府美術館

永い歴史と多數の會員會友を有する大きな團體

だけに、多くの知名作家を含んでゐるが、展覽會は、それ等の會員の藝術發表機關と言ふよりは、主として同會研究所に育つ新進作家の奨励紹介の意義を多分に持つもののやうで、畫風は一般に穩かな寫實的なものが多く、保守的な氣風が見られる。會員等の作品には特に力作と云ふ程のものを見受けず、新進の中でも間所一郎、早川國彦等數名の外には餘り注目すべき作品を見ない。會員では鶴田吾郎の「阿治の横顔」「樺太の鱒漁場」の力強い描寫は面白く見られた。

陳列數 繪畫三二一、彫刻二一、計三四二點

授賞 太平洋畫會賞 大内青坡、中村彝賞

等々力巳吉、愛山賞 安田豐、葵賞 杉本宗

一、相馬賞 布施信太郎、昭和賞 海洲正太

郎、嫩草賞 王井力藏

福澤一郎清水登之鈴木保徳滿蒙洋畫展

二月三日—七日 大阪・三角堂

獨立美術協會の標記三會員が滿蒙旅行に於ける收穫四十點を展觀した。

「清水氏は相變らず新境地の開拓に努め、『オボ祭』『草摘む女』など清新な感じを受けるが、『長城』『三點』特に面白いと思つた。『蒙古風景』『新京風景』『南滿風景』なども見るべきものである。鈴木氏は獨特の畫風で滿蒙の風景や人物をいろいろに描寫してゐるが、馬を題材とするものがよく、『新戦跡寛城子』や『月夜の馬』など目をひく。福澤氏は畫風の上から滿蒙とは密接な關係は現れにくいが、『獨語』『砂丘』『人像』『フアンテジー』『風景』などは氏の立場を示してゐるものである。」（大朝）

赫士社第三回展

二月六日—九日 銀座・伊東屋

現代みにあちゆる洋畫展

二月六日—十日 大阪・美術新論社畫廊

大島春觀日本畫個展

二月六日—十一日 大阪・三越

第二回末光續油繪個展

二月八日—十一日 銀座・紀伊國屋

高間惣七洋畫個展

二月八日—十二日 數寄屋橋・日動畫廊

藤香美術展

二月九日—十一日 福岡日日新聞社講堂

清水登之滿蒙洋畫展

二月九日—十二日 神戸畫廊

大衆向工藝品競技展

二月九日—十四日 日本橋・高島屋

京都市主催。

京都漆藝會作品展

二月九日—十四日 日本橋・高島屋

第二回大亦觀風個展

二月九日—十四日 日本橋・白木屋

東西諸大家新作展覽會（日本畫）

二月十一日、十二日 丸之内・日清生命館

永樂俱樂部

中央美術協會主催で、東京及び京都の主要作家九名の作品を陳列した。

戸田郁郎洋畫小品展

二月十二日—十四日 銀座・紀伊國屋

白日莊主催日本畫小品展

二月十二日—十九日 銀座・三越

福岡玉僊圖案個人展

二月十三日 京都美術館

眞道黎明日本畫個展

二月十三日—十六日 名古屋・松坂屋

岡田穀滯佛油繪展

二月十四日—十九日 數寄屋橋・日動畫廊

山口草平劇畫展

二月十五日—二十日 大阪南海・高島屋

伊太利マール彫刻展

二月十六日—二十二日 上野・松坂屋

藝術通信社新作畫展（日本畫）

二月十七日—十八日 丸之内・日本工業俱樂部

部

東西諸家の作品三十點を展觀した。

宇野三吾陶器展

二月十七日—二十一日 大阪・美術新論社

畫廊

大國栢齋遺作品展覽會（鑄金）

二月十七日—二十二日 日本橋・高島屋

名人簽師として知られた大阪の大國栢齋が昭和九年三月七十九歳を以て物故してから三周年となるのを記念し、其の遺作品、簽五十、鐵瓶三十を展觀して一般に頒つことにした。

瀧秋方小品畫個展（日本畫）

二月十七日—二十二日 大阪・朝日ビル專

門大店

兒島虎次郎遺作展（洋畫）

二月二十日—二十四日 大阪・朝日會館

昭和四年物故した兒島虎次郎の遺作は大原孫三郎に依つて保存されてゐたが、其の中のものが遺族救援の爲に賣立てられることとなつて展觀された。出陳百餘點で、「日本服を着たベルギー少女」

「早春」「二人の少女」「婦人」「茶」「窓際の少女」「夕暮の運河」、小品では「ガンの街」「夏の庭」「噴水」「室内」「ベルギー風景」「ランプの下」等があり、晩年に於ける支那、朝鮮の諸作をも含み、印象派の畫風を忠實に傳へて一家を成した作者の全貌をほゞ窺ふに足る展覧であつた。

枅井一夫洋畫展

二月二十一日—二十三日 神戸畫廊

橋本八百二近作油繪展覽會

二月二十一日—二十五日 數寄屋橋・日動畫廊

近作四十點を陳列した。新な畫風を拓かんとし自らの様式の發見に努めつゝある作者の研究作と見ることが出来る。從來の寫生的な描寫から表現派的な傾向のものへ轉向しつゝある過程を示してゐる點で注目された。「夕映の山」「朝の海」「波太風景」等が代表的作品である。

松居均洋畫小品展

二月二十二日—二十七日 大阪・阪急百貨店

高間惣七洋畫個展

二月二十三日—二十七日 大阪・美術新論社

畫廊

染織紋樣研究會圖案展

二月二十四日 京都美術館

宇野賢治南歐陶器試作品展

二月二十四日—二十九日 日本橋・高島屋

春季二科美術展覽會（洋畫、彫刻）

二月二十四日—三月二日 日本橋・高島屋

二科會は本年より春季展覽會を開催することと

して其の第一回を開いた。出品は會員十五名、會友十九名の作品合計百點許り（内彫刻五點）で、其の他に特別出品としてアンリー・マチスの素描二點を陳列した。小品展ではあるが中々見應へのある展覧であつた。藤田嗣治の三點は線描に淡い調子を附けたもの、「私のアトリエ」は神經の行届いた鋭い寫實で作者の好い方面を示してゐた。木下義謙の「靜物」三點は淡々たる寫實、東郷青兒の「婦人像」「西班牙の女」は獨特の技巧に成る裝飾的な繪で佳品である。小山敬三の風景畫三點、中川紀元、酒井亮吉等それぞれに見るべく、高岡徳太郎の「風景」二點、「薔薇」共に佳品であつた。島崎鶴二は花三點を出品したが、獨自の裝飾的畫風がよく花の美しさを生かし、人物畫の場合よりも優れた才能を見せてゐた。

内鮮名家書畫展

二月二十五日—二十七日 京城・三越

南畫協會主催。

第十一回黑色洋畫展

二月二十五日—二十九日 銀座・紀伊國屋

關西諸作家洋畫展

二月二十五日—二十九日 大阪・淀屋橋畫廊

港屋特選文具工藝品展

二月二十五日—二十九日 神戸畫廊

第一回帝國美術院展覽會（日本畫、彫刻、工藝）

二月二十五日—三月二十五日 東京府美術館

昨年の改組に依つて面目を一新した帝國美術院の第一回展覽會は、其の開催を繞つて幾多の波瀾を捲き起したが、所謂舊帝展系作家の、再改組要

求、不出品運動などの問題を未解決に残した儘、當初總會で決定された通り、二月、殊に本年は寒氣酷しく降雪の多かつた季節に開催された。今年開かれたけれども、實は昭和十年度の帝展で、昨秋開かれる筈であつたものを會計年度内一杯に延期したものであつた。

新制度に依つて今回は第一部（日本畫）、第三部甲種（彫刻）、第四部（美術工藝）のみが出品され、洋畫が無く又彫塑が木彫類のみに限られたことは、やはり此の種の綜合展覽會としては頗る物足りなさを感じさせた。

然かのみならず未だ安定せぬ美術界の紛糾を反映して、所謂舊帝展系作家の中、第一部では舊無鑑査級の第一部會に屬するものは全く出品せず、京都の畫壇には出品締切間際に不出品運動が起つて漸く之は解消したものの、主要作家は殆ど出品せず、第三部では會員參與指定に出品する者なく、之に對して日本美術院に屬する作家達は何れも努力して出品に努めたが、量の上では帝展として曾て無い淋しさであつた。尤も其の原因としては所謂反帝展運動の外にも、製作の季節が最も不適當な嚴寒に際して作家の筆を滯らせたことも擧げられるし、又彫塑の甲乙の區別に就ては適確な解釋を下し難く、會員の間にも意見が一致しなかつた爲に不安を生じ出品を見合せたものが多かつた爲でもある。

斯くして開かれた第一回帝展の成績に就ては美術界全體が異常な關心を以て注視した所であり、夫々立場を異にする見方から毀譽褒貶様々の批評

が行はれた。成功とするものは質に於て舊帝展に優つて精選され、舊來の情弊が一掃されたものと、失敗とするものは主として美術界綜合の實が擧らなかつたことを難じて量の減少を指摘し、質に於ても院展の色彩が取つて代つたに過ぎず何等の改善も見られぬと評した。質だけに就て言へば舊帝展に多く見られた或る種の作品が目立つて減少し、清新な空氣と藝術的精進に依る新鮮な空氣が感ぜられたとする評は恐らく公平な見方であらう。蓋し展覽會に現れた形の上ではそれ等の評は何れも當つてゐるのである。事實今次の展覽會は第四部を別としては、院展に屬する作家達の懸命の努力に依つて形が整つたもので、第三部の如きは陳列數二十三點と云ふ寂しさであつた。

第一部では會員二十名の中半數が出品し、參與及び指定の無鑑査出品は三十六名の中九名に過ぎず、其の七名は日本美術院に屬する作家であつた。以下陳列順に注意すべき作品を擧げる。

第一室では、兒玉希望の横長の大きな畫面に枯野に狐を配した「枯野」が最も注目された。寫生的な描法に依り精緻を極めた力作で、よく纏められてゐた。岩淵芳華の「佳日」は卒業式の記念撮影をする女兒を描き、素朴な表現の中に鋭い感覺を示した作であつた。第二室、北野恆富の「いとさんこいさん」は夕涼みする二人の娘を描いた風俗圖で、部分的な形の缺點など指摘されたが、可憐な情緒も地方色もよく表されてゐた。山村耕花は「大威徳明王」の大作を描いたが、藝術的意圖の解し難きものと言ふ外はない。

第三室、前田青邨の「觀畫」は滿洲國婦人の一群を描いて、畫面の外に視線を集めさせ、單純な線描と、快い配色とに依つて纏めた作品で、寫形の上からは多少の難が擧げられるにせよ、悠揚迫らざる畫境を示してゐた。小川芋錢、川合玉堂結城素明、何れも夫々の境地に在つて遺憾なく作者の特色を示した好個の畫作を出品した。芋錢の「曉烟」は、紙本水墨に廣潤なる田野の風景を描き、淡々たる用筆によく自然の空氣を傳へた佳品であつた。玉堂の「雪しまく瀬戸」は寫生を基調とするが、雪景であるだけに色を節し、行届いた觀察と溫雅なる觀照を練達の筆技に表現して遺憾なく、襲來する雪嵐の瞬間を捉へて氣品高き畫面を成す。此の作者でなくては現はせぬ境地であり場中の白眉であつた。素明の「野梅」は溪流に臨む老樹を主題とした寫生で、自然を寫して奇巧なく、よく其の趣を傳へ、作者の長所の最も發揮された一作と言ふべきであらう。入選作品の中鈴木主子の「和春」は屏風に描いた裝飾畫で、よい感覺を示したのとして好評であつた。

第四室では林司馬の「牡丹」を擧ぐべく、第五室には太田聰雨の「星をみる女性」が注意を惹いた。機械と婦人とを取扱つて現代風俗畫を試み、繪畫的な構圖に多くの工夫を見せた力作で清新な畫面であつた。第六室には小室翠雲の六曲屏一雙「白乾坤」が陳べられた。畫面を斜に切つて白雪に蔽はれた連峯と、這松に岩石と雷鳥とを配した近景とに二分した大膽な構圖であるが、用筆に慎重を缺き自然感の稀薄な憾があつた。

第七室、橋本關雪の「唐犬圖」は三頭の洋犬を描いて一隅に牡丹を添へ、金泥の渲し等を用いた豪華な畫面で、寫實に徹し、特に動物を描いて定評ある作者の渾然と熟した技を示してゐた。而も一面に若々しい感覺の漲つて生彩のある畫面であつた。近藤乾年の「凍る鳧」は一見亂雑な描法の中によく氣分を傳へ、作意が面白く現はされてゐる。第八室では磯田又一郎「夏座敷」の素直な表現がよく、郷倉千靱の「山の秋」は、秋の植物に兎を躍らせて特色ある様式化と賦彩とに興味のある作であつた。

第九室、寺島紫明の特殊な風俗畫「あつゝ」は細緻な觀察力を示すが、藝術として未だ醇化されぬものがある。矢野橋村の「高野草創」は六曲一雙の大作で筆の細緻なるにも拘らず、よく全體の引緊つた佳作であつた。たゞ此の作者の常として此の作も説明的に過ぎた傾がある。中村岳陵の「豊幡雲」は萬葉の名歌に主題を得て、六曲半雙に入日に映える美しい雲のみを描いた裝飾的な畫面である。世評は様々であつたが、單純な構想に上代の心持を現さうとした意圖は相當の成功を示してゐる。新な境地を拓かうとする努力も認むべきであらう。

第十室、安田靉彦の「役の優婆塞」は山上の行者を描いて、形式の上からは古畫の高僧像に多く借りたものであるが、肖像畫でもなく歴史畫でもなく、此の人物に托して内面的な意力、不撓の精進と言ふ如き精神表現を意圖したもので、洗練された技巧がよく内容に適應して、稀に見る氣品高

き畫面を成した。鍋木清方は寛永寺の一室に默思する慶喜公の風貌を寫した「慶喜恭順」を描いた。劇的な歴史上の大事件を背景として、此の人物の心理的表現を企てたもの、幾分の弱々しさが見られたが、神經の行渡つた澄んだ作品であつた。田之口青晃の「小春の神泉」は水面に延びた松の一枝と鯉の群とを描いてすつきりした纏りを見せた明快な作であつた。

第十一室、横山大觀の「龍蛟躍四溟」は六曲屏一雙に水墨と金泥とで描いた理想的な作で、高古の風格を傳へて而も全く獨創の表現に成る。絶讃と不評と觀者に依つて異なる種々の批評が行はれたが、其の構想と技巧とを貫く作者の意力は遺憾なく發揮され、龍を描いた近代の名作たる位置は自ら定まつた觀があつた。第十二室には富田溪仙の「萬葉春秋」が陳べられた。二曲屏一雙に萬葉集に現はれた草木と鳥とを裝飾的に配したものの。單純卒直な描寫はよく主題の意に適ひ、殊に色の美しさは華麗にして格調高きものがあつた。

第十三室の堅山南風の「ぼら網」は群青を強く用ひ、一種の様式化を以て潑刺たる水と魚群とを描いて或る効果を見せてゐた。川端龍子「茸狩」の大畫面に現實の世界をあるが儘に描き、敢て上品がらず、作者の持説である會場藝術の効果を十分に示したのは異彩を放つてゐた。滯滞なき筆を縱横に振つて松を描き、離草を描き、男女の興する姿を描く。畫風と好みに對する評は區々ではあるが、其の筆力は何人も認める所である。

第十四室、大智勝觀の「春隣り」は庭の一隅を

寫して地味な作であるが、奇巧なく誇張なくして情趣を溢へ、靜寂な作者の畫境を表してゐた。奥村土牛の「鴨」は推獎の首位に選ばれ、一般にも入選作中最も好評であつた。日本畫技法の長所をよく生かして、單なる寫生に止まらず舊套に泥まらず、鋭敏な感覺に依つて要約され、冴えた筆技も適確な表現に働いて新鮮さに充ちた好畫面であつた。第十五室の木村武山の「天女」は大壁面の裝飾畫と見られるが重く鈍いものとなつた。

第十六室、荒井寛方は「鬼子母」に獨自の佛畫を試みて個性的な表現を見せた。山川秀峰の「三人の姉妹」は自動車為主となり、人物の描寫に鋭い觀察が示されてゐない。

第二十室、杉山寧の「婦女群像」は既成の日本畫の型を脱し、現代風俗の華美な主題をわざと色彩を省いて、特殊な感覺が見えるが少し作り過ぎたやうである。第二十三室、村山西一の「菩薩頷」は推獎作の一つで異色ある作風のもの、説明を省略して色彩を主とした情趣の表現に重きを置いてゐた。

第三部彫刻は出品も少く平櫛、佐藤の兩會員が何れも木彫として稀に見る大作を出し、卓越した技術と努力とを示した外は殆ど小品で概して低調であつた。

平櫛田中の「靈龜隨」は淺野老公の散歩姿に作因を得たと言ふ。巨木を刻みこなして遺憾なく、刀技の熟達を見せてゐる。佐藤朝山の「八咫鳥」は構想に行き届いた創意面白く、彫刻的組立もしつかりして、記念碑的な安定と力強さを持つた作

である。我が古代彫刻と文藝復興期頃の歐洲彫刻とに夫々學んだ所を見るが、木彫としたことは多少材料の不適合さを思はせた。石井鶴三の未完成作「風」は一般に賞讃されたが、特に優れた彫刻とは認められぬ。山本豐市の「岩戸神樂」は乾漆を用ひ、小像ながら本格的な肉附に健康な美しさを見せた。新海竹藏の「結髪」は古拙感を持ち外形の寫實より内部的なものを狙つてゐることは首肯されるが、味に陥つて生氣を缺いた。

第四部美術工藝は從來の帝展と殆ど變化なく、近代工藝の新たな傾向はあまり見られなくて、所謂一品製作の技術本位、或は技巧過多の傾向のものが多く出品された。種別は入選二一四點の中、漆器五三點、金工七七點、木工一點、染織二一點、陶器及硝子五〇點、竹工三點、雜九點であつた。今年人形が六點入選したことは舊帝展に見られぬ新な現象であつた。

漆工には概して優れた作が多く見られた。吉田源十郎の「あざみ棚」は形態よく氣品もあり目立つて優れた作で好評であつた。松田權六の「鶯文庫」は行き届いた技巧を見せたもので、落着いた味の深い作。故赤塚自得の「乾漆花文飾壺」は最後の仕上に至らずして終つたもので、流石に洗練された名家の技を見るものである。高野松山の「蝦蟆様蒔繪手箱」もすつきりした出来であつた。

金工では大須賀喬の「彫金仙人掌文香盆」は意匠もよく技巧も優れ、林萬壽人の「鑄銅水盤」、西村敏彦の「鑄銅交錯文花瓶」、佐々木象堂「駱駝香爐」、山本安曇「三藏法師」、杉田禾堂「黃

銅柘榴形花瓶」等注意すべく、香取正彦の「鑄銅瓶掛」は銀瓶、火箸、五徳などの一揃で行届いた作であつた。

陶器は、會員板谷波山、清水六兵衛が何れも窯變の花瓶を出品し、富本憲吉は無文の「白磁大壺」を出した。富本の作品は陶磁の特質を純粹な形で見事に活かしてゐた。是等の單純な美しさに比べて多くの作品は裝飾過多の弊に陥つてゐた。宮之原謙の「牡丹繪象嵌大皿」は技術の巧緻を賞し得るが効果の上で面白味の無いものとなつて居り、新開邦太郎の「陶器珊瑚磁水注」は美しいが其の不安定さと脆弱性は用途を無視した飾り物に過ぎぬ。長谷川怒の「陶製河馬置物」は技法の上から巧みな効果を示してゐた。

その他では技術にも意匠にも所謂一品製作の精技を示すものとして稻木春千里の「木製筥」、飯塚琅玕齋の「竹茶籃」等を擧ぐべきであらう。

出品目録

第一部

繪畫

撞球圖	橋本 明治	群生	石山 太柏	野梅	結城 素明	湯治	池澤 青峰
冬の雨	佐原修一郎	馬場島の秋	櫻井 孝一	睡蓮	岡田 壺中	魚開	辻 宇佐雄
深山木の秋	加藤 洵毅	大威徳明王	山村 耕花	虫籠	田中 針水	晴丘	堀田 徳次
枯野	兒玉 希望	山の娘	東谷 桃園	春潮	荒川 晃雲	あつさ	寺島 紫明
佳日	岩淵 芳華	耕牛	宮原 蕪山	海潮音	林 司馬	高野草創	矢野 橋村
奥人瀨	田中案山子	啓蟄	村雲大樓子	松林	西岡 聖鵬	碓水の冬	松澤 更青
尾瀬沼の春	三宅 星明	閑庭	吉田 登蒙	清潭	吉田 澄舟	橋本 關雪	中村 岳陵
午後	森田 沙夷	和春	鈴木 主子	立夏	會津 勝巳	朝餉の白川女	池田 榮廣
海邊	松垣 鶴夫	觀畫	前田 青郎	星を見る女性	林 悌三	雪雲未霽	吉田 喬子
村童	藤森 青雲	曉烟	小川幸鏡子	霜葉	高木 富三	要 樹平	河野 秋郎
湖の岬	矢野 鐵山	雪しまく瀬戸	川合 玉堂	藤	安堵 三樹	磯田又一郎	大野 重幸

染織には特に傑出したものを見なかつたが、櫻井霞洞の「瀬戸風景染色衝立」は製陶所を圖案化した構想に面白さを見せた作であつた。

第一部 第三部甲 第四部

搬入數	一、七三一	一九八	七九七
入選數	一九一	一七	二一四
無鑑査	二五	六	二九
陳列數	二一六	二三	二四三
推獎 第一部「鴨」	奥村土牛、	「小春の神泉」	
田之口青晃、	「菩薩嶺」	村島酉一、	第四部
「木製筥」	稻木春千里、	「彫金仙人掌文香盆」	
大須賀喬、	「漆器紫陽花手箱」	奥村霞城、	「漆
あざみ棚」	吉田源十郎、	「蝦模様蒔繪手箱」	
高野松山			
政府買上 第一部「鴨」	奥村土牛、	「星をみる	
女性」	太田聽雨、	「細雨」	河野秋郎、
林司馬、	「和春」	鈴木主子、	「菊」
			徳永觀

林、第三部「八咫鳥」佐藤朝山、第四部「彫金仙人掌文香盆」大須賀喬、「鑄銅水盤」林萬壽人、「漆器朴の花文庫」大下雪香、「漆器春融白映手宮」平館曾、「三藏法師」山本安曇

李王職御買上 第一部「白鶴」小林柯白、「ぼら網」堅山南風、「小春の神泉」田之口青晃、「凍る鳧」近藤乾年、第四部「乾漆花文飾壺」故赤塚自得、「漆器鸞籠文庫」松田權六

大阪市立美術館買上 第一部「唐犬圖」橋本關雪、「枯野」兒玉希望、「浴後」今尾津屋子、「群芳」融紅鸞、第三部「姉妹」岡崎白信、第四部「磁器魚紋花瓶」柄本曉舟

京都美術館買上 第一部「觀畫」前田青邸 入場者總數 五六、五五三人(内無料二六、四六二人)

湯治	池澤 青峰	後園深秋	石山喜世子
魚開	辻 宇佐雄	役ノ優婆塞	安田 靱彦
晴丘	堀田 徳次	奈良ノ寺	芝 正雄
あつさ	寺島 紫明	遠帆連浪	森谷南人子
高野草創	矢野 橋村	喜六の山小屋	村岡 應東
藪	松澤 更青	慶喜茶屋	鎌木 清方
豊饗雲	中村 岳陵	小春の神泉	田之口青晃
メルシヤ猫	池田 榮廣	樺崎 朱雀	徳永 觀林
春日閑庭	吉田 喬子	閑庭	大野 重幸
細雨	河野 秋郎	龍鼓躍四溟	樺山 大源
雪後小景	大野 重幸	茶梅	宮部沙九郎
紙すき	加藤 榮三	五月雨	中村 貞以
無花果	高橋 勝	殘暑	甲斐 常一
靜思	溝上 游龜	海金剛の漁婦	三宅 凰白

萬葉春秋
富田 溪仙

春樹
中島 萬木

西瓜
赤井 正方

爽秋
竹内 喜一

ぼら網
堅山 南風

諸のヨット
豊島 伯羊

茸狩
川端 蒲子

雨後ニ立ッ雲
奥村 厚一

陸舟之松
河原 悦人

少憩
森山 夢笑

爽葉譜
丸岡比呂史

山沼
平間 旦陵

花日傘
西畑起佐子

春隣リ
大智 勝瀨

秋暑
奥村 土牛

夕風
幸野 豊一

時雨
森戸 國次

苗庭春日
野々内保太郎

玖翠溪
佐野 光穂

晚秋の湖畔
須網 雨亭

天女
小谷喜代三郎

桃園
木村 武山

歸る磯人
貴道 草衣

カスミ網
高木 勇

城址の夏
丸山 春露

印度
山口 實

金鱗光燭
竹林 愛作

金工七寶飾板黒味花盛
藤井 靖峰

林と道
村山 兩牛

山の女
若木 山

晩春
片桐 白登

鬼子母
荒井 寛方

山に沿ふ秋
多田 敬一

祇園會
北澤 映月

三人の姉妹
田川 秀峰

山莊暖翠
川田 盧舟

つばき
新井 勝利

或る日の秋
八幡 白帆

實る平野
中村 威

群芳
佐々木與條

融紅
融紅

大河内山郷
小島 一銘

水原長安門
梅原 藤坡

木立
梶原耕佐子

二人の舞妓
大幸 靈泉

藤ヶ峯
喜多川玲明

櫻織
齋藤 紫山

山葡萄
陳 進

化粧
柿沼 宗居

春日
白倉 二峰

前赤壁
酒井 三良

冬暖
菅野 安一

賀名生の里
小谷津任牛

園芸
佐野 一星

春日野
久保田王堂

信潮
魚磯

百日紅と少女
玉城 末一

寒牡丹
中庭 燦華

蒼松新禧
大河内夜江

搖春
酒井 とし

再舉
名取 春仙

淵(鮎)
竹澤 吟泉

早春譜
牛田 雞村

樵夫
須藤 幽邨

ゆく秋
里見米山人

婦女群像
杉山 寧

朝露
德力富吉郎

白鶴
小林 柯白

暖燠
木下 青屋

秋の庭
後藤貞之介

眞畫
佐伯 春虹

秋氣蕭森
赤松 雲嶺

暮鴛
小坂 勝人

冬木立
上田 睦草

下鴨風景
眞繼 慎一

門
西村 青園

樵路
山下 巖

深山二趣(彌助)
山元 春汀

附け紅
木谷 千種

秋
岡子 竹春

淺春
友田 陽國

秋光
山口 盧明

久保田王堂
湯川 三舟

魚磯
三舟

長雨の後
松村 正雄

湖群早春
田中 一望

月見ノ宵
岩本 周照

菩薩嶺
津田正太郎

神境二題
村島 西一

(右香取春雪)
赤井 龍民

めざし千し
樹下孝太郎

くぬぎ林
高井 誠

清盛
森戸 果香

ます綱
松浦 滿

奥州七夕祭
鈴木 一耕

晴れたる日
横山 葩生

店頭囀聲
岩橋 英遠

海邊
福田豊四郎

淀の冬
細見 豊玉

山間暮色
羽田 晃雅

秋韻
安田 拿契

山の湯の畫
宮瀨 泉城

霜汀
富取 風堂

若武者
小堀 安雄

驛路の雪
大貫 鐵心

雪晨
八木 泉石

姉妹
石田 重子

高原
佐藤 敬美

奏樂
丹羽阿樹子

摩耶山頂
伊藤 深水

鑄銅交錯文花瓶
鑄銅累粟文花瓶
萬籟九帶
秋草ノ圖鼓箱
銀製花插
つゆ草刺繍二枚折小屏風
銀鍍附立だれ花瓶
磁器吳州游魚文花瓶

渚雪
田中 蘭谷

連
井上 流光

松林小景
恩田 得壽

富有柿
福田 元子

夕暮踏路
橘田 永芳

森の雪
中野 草雲

高原春色
野添 平米

想秋圖
仙田雪山子

八瀬の嵐風呂
大藪 春篋

くもり日
有元 一雄

峽谷のはつな
野原 鳥聖

(朝鮮金剛山)
柴田 春叢

慶州路の小春
澤谷 五臺

驟雨一過
八ッ井舜主

初冬
安井 桂洲

白日
中尾 篁谷

歸樵
佐藤林太郎

つゆ霽
衛藤 晴村

綠香
江崎 孝坪

覆正月
齊藤 和秀

奔湍
天野 大虹

朝の祇園神社
澤野 文臣

機關車
淺野 祐夫

船
河原 勇夫

秋立つ頃
北野 以悅

乙女文樂
島 春潮

霜風
橘田 仙草

果樹伸長圖

第三部 彫刻

草相撲
關谷 充

日本少女ノ首
松田 順弘

乳牛
福井 廣賢

岩戸神樂
山本 豊市

牧神クリシ
大内 青園

ユナの罪ヲ
先崎 榮伸

少女
宮本 重良

風神試作
佐藤 靜司

(二冬の風神)
水島 弘一

木ノ實
平橋 田中

雲龍隨
新海 竹藏

結髮
岡崎 白信

姉妹
佐藤 朝山

八咫鳥
佐藤 朝盛

作樂
石井 鶴三

風
佐崎 龍村

吉祥天
木村 惠保

ふうせん
山本 光陽

仔牛
藤岡 光田

入藏沙門
石塚 裕康

猜疑
入江 美法

安達原
大橋 敏男

小憩
杉本 宗一

水牛

山田 峴山

喜多村榮太郎

藤村 正男
松田 權六
鈴木 美彦
堂本五三良
中谷小太郎

第四部 美術工藝

雲峰刺繡壁掛

鑄銅瓶掛銀瓶、象嵌火箸、五徳、漆

白銅瑞鳥置物

鑲銀蘭華文筆筒

鑲銀香爐

蔣繪飾簪	守屋 松亭	漆モザイク盛麗の圖手宮	西塚 朝光	天鵝絨織額山村四季壁面裝飾	鹿島 英二	綠砂龍梅花瓶	緒部 彌一
堆朱圓型爽日香盆	佐藤 爽春	鍛鐵製彫金花瓶	後藤 學一	刺繡靜物壁掛	箸尾 清	黃銅線條文花瓶	山室 百世
曜變磁瓶首花瓶	板谷 波山	漆目細線文花瓶	天目細線文花瓶	瑞麟祥游花瓶	澤田 宗山	漆器松栢ノ圖文庫	東端 新策
乾漆花文飾蓋(未完)	故赤坂 自得	漆器八仙花繪風文樣文庫	漆器八仙花繪風文樣文庫	鐵打出さいから模樣花瓶	黒瀬 宗世	里幸之圖形漆花瓶	磯井 如眞
磁器金銀唐草文蓋付菓子器一對	伊東 陶山	陶器紅魚文花瓶	井上 良齋	鑄銅花瓶	中島 保美	鑄銅水盤	原田 峯雲
青銅花文壺	北原 三佳	鑄銅陽文花瓶	中村 昌夫	銀鍍金孔雀置物	三好 宏靜	磁器紫陽花額皿	森野 嘉光
花鳥文蠟燭ビヤノ掛布	野村 蝶二	豹置物	長谷川藤三郎	鑄銅脚文盤	西村 英夫	金工喫煙具	鴨 幸太郎
槍鳥威ノ圖友禪染壁掛	林 雨染	竹雀文糸目釜	石田來之助	金屬八角形寶石宮	小島 重貞	彫漆菱文花瓶	富樫 光成
歲寒三友ノ圖截金屏風	齋田 梅亭	桐鳳文釜	加藤忠三郎	漆器吳竹冊子宮	都筑 幸哉	乾漆十二稜花瓶	森 三樹
仙人掌文漆棚	大庭 要一	松鷲模樣蓋	小泉 清信	白銅獅子置物	中川 爲延	純銀打出水鳥水瓶	河村 清司
硝子彫刻額藥符リ	加藤 葦山	漆器紅椿内部群レ雀蒔繪書棚	根來 實三	黒味銅小鉢	三井 義夫	鐵香爐	高橋千代三郎
雪崩袖花瓶	藍原 義也	紫陽花彩漆衝立	梅澤 隆眞	鑄銅雄置物	森村 西三	垂水花瓶	土肥 刀泉
陶相撲の圖視屏	清水 龜藏	彩漆千鳥模樣飾棚	番浦 省吾	黒味銅金銀切板花瓶	小川 友衛	磁器孔雀寶珠文花瓶	湯山 青屋
白鳳素心置物	大野 光典	漆あざみ棚	吉田源十郎	陶器均窓花壺	土居 研六	漆器秋草模樣漆黒手宮	竹園 自耕
硝子花瓶	各務 鎭三	瀬戸風景景色衝立	櫻井 霞洞	鑄銅水盤	林 萬壽人	磁器草花文花瓶	石野 薫
黃銅製花瓶(花盛金用花瓶)	中條 義男	草砂丘迎見金唐革壁面飾リ	井上彦之助	手刺手染春光絨氈	矢部 修子	漆器龜目文樣漆花瓶	多畑 宗哉
草花文彫金鉢	小川 英鳳	陶器珊瑚磁水注	新開邦太郎	陶器九形鳳凰文天目釉額皿	宮永 東山	黒髮壁掛	鈴木 至郎
唐銅四方耳附花瓶	山本 純民	漆器相華文飾棚	岩村 貞雄	皮革華文金唐革手箱	楠谷 定一	金工鉢	江島 信一
磨院の群鑄金置物	武藤 英華	鉦起黃銅水盤	藤本 長邦	陶製鸚鵡斑花瓶	大坪 重周	白銅鑲嵌瑞芽香爐	廣瀬英五郎
錦魚金具	大關 勝盛	染色陶鍋二曲屏風	佐野多景夫	刺繡彩色明治回顧衝立	米澤 蘇峰	乾漆彩漆盆	中川 哲哉
茄子金具	山下 春興	陶器海草紋花瓶	小柳今朝一	テール掛	中上川蝶子	三多紋漆モザイク三枚折屏風	中田 滿雄
流金竹文金具	鶴河 康次	漆器天體的模樣晝夜棚	鈴木 貞路	鳴牙銀製床置	米田 弘	鑄銅見透折疊衝立	秤 雄吉
仰天獅子飾金具	小杉 芳盛	毛織物裝飾用壁掛	山脇 道子	白銅雄飾香爐	四谷 正美	漆器蕪華の衝立	二本 成抱
車海老金具	有田 利章	樂園花盛器	田村 泰二	銀象嵌鐵盛器	島崎正二郎	漆器南天棚	林 次郎
六方形籠火鉢一對	田邊小竹雲齋	金銅銀彩牡丹花瓶	北出塔次郎	竹花籃	飯塚 薰石	鐵製四枚折衝立	戸島光阿彌
陶器染刻魚文花瓶	手塚 玉堂	金銅香爐	松原 南海	蔓紋花瓶	加藤 千一	黃葉人形	黒井 光珉
梔子形鐵花瓶	鈴木 孝次	鍍鍍金錦雞香爐	三井安蘇夫	黃盆花文花瓶	和田 曉峰	村童人形	鹿兒島壽藏
彫漆白木連文庫	小野 爲郎	鐵牛之圖瓶掛	牧田 久義	彫金格子文筆洗	信田 洋	櫻梅の少將人形	野口 光彦
陶器河馬置物	長谷川 怒	銀鉢	宮坂 房衛	鐵花紋樣飾盆	磯崎 美夫	仕舞高砂人形	平田 柳陽
紙裝小宮	山野井勝風	磁器魚紋花瓶	柄本 曉舟	竹茶籃	飯塚環珥齋	幼女人形	羽仁 春水
四睡の圖金具	船越 春現	刺繡テール・センチ	村田 春雄	菊文庫	高井 白陽	文政人形	野口 明豊
金屬蛙水滴	介川 芳秀	彫金仙人掌文香盆	大須賀 喬	櫛目栗給花壺	大江 文象	金黃釉獨樂形草魚紋刻花瓶	堀 柳女
護封	杉村 正策	眞鍮彫金皿(秋草)	小林 親光	磁器黑耀釉花瓶	中陵 茂守	室內裝飾を兼たる服飾	皆川 月華
金屬胡蝶紋小宮	深瀬 嘉臣	層打斷面花瓶	吉田宗人齋	漆器紅蜀葵描刻九箱	天野 文堂	黃銅花瓶	佐藤 如湖
硝子峯巒紋玻璃花瓶	河上傳次郎	黃銅栴檀形花瓶	杉田 禾堂	陶器窯變銀彫花瓶	安原 喜明	瑞花蔓脚文文庫	水内平一郎
陶磁モザイク宮	板谷 梅樹	飾棚	高見 九藏	手織錦木の實敷物	山鹿 清華	名石嵌漆器飾宮	彼谷 芳水
磁器天藍草花文花瓶	伊藤 翠堂	白磁繁條彫花瓶	山澤 松篁	繪更紗松島之圖壁掛	三宅 更紗	陶磁器鶴文大皿	松本 佐吉

漆器誰か袖時給廣蓋
彫漆茄子之圖盆
漆器ハゼ圖色紙箱
梅にしき模様手箱
白鷺時給手箱
遊魚模様手箱
乾漆沙漏夜行壺
陶器御深井稻草花指頭文花瓶
木製宮
磁器青華低輪花瓶
金屬瑞鳥香爐
銀打出錫置物
漆器朴の花文庫
鑄金製青銅廣口兩耳鑄銅花器
漆器春融白映手宮
刺繡額(夏祭)

井田 宜秋
高橋 靜堂
森富 義典
清水 美象
寺島芳三郎
木村 雨山
龍田 牛歩
加藤 華仙
稻木春千里
伊東 信助
中野 三郎
羽原 秋芳
大下 雪香
加納 眞輝
平館 晉
富岡 伸吉

松梅蹴彫飾宮
漆器菊風呂先屏風
磁器梨付松竹梅文大皿三枚揃
金屬壁面へノ裝飾照明
彫漆花紋飾棚
漆棚
磁製白磁浮模樣花飾
金屬西香爐
銀製鶴文金彩花瓶
磁器繪彩草花紋水注
鑄銅海老文花瓶
漆器瓢箪箱
青銅龜甲華紋青銅花瓶
磁器瑠璃葫蘆輪壺
漆器甲盛形茄子觀箱
漆器黍之圖文庫

内藤 四郎
一色 一哉
河村 鯨木
鈴木 泰
佐藤 陽雲
吉田 醇一郎
國領 素夫
岡部 達男
北原 千鹿
叶 松谷
渡邊 紫風
新村 撰吉
金森 榮一
近藤 悠三
河面 冬山
結城 哲雄

鷺丸宮
漆器時給手箱
鑄銅柳鶯輪花瓶
牡丹繪象嵌大皿
瀬戸黒種五月花刻文壺
綴織靜物壁掛
鯉魚圖陶屏風
飛皮天目螺紋花瓶
木の葉文七寶花瓶
宣德鑄造立涌文方壺
銀鑄柿紋樣箱子吹込花瓶
布染色二曲屏風
線文鑄銅花器
白磁大壺
漆器合歡之圖手箱
耀星花瓶

海野 建夫
戸川 綠鳥
山本 自爐
宮之原 謙
加藤 英一
和田 秋野
竹中 微風
辻 晋六
太田良治郎
村田二代聰泉
宮代 健三
磯部 陽
宮田 藍堂
富本 憲吉
平石 孝
清水六兵衛

蝦模樣時給手箱
乾漆鶴文樣飾宮
漆器彫漆喉籠
黑味彫形金小箱
青銅透鑽花瓶
三藏法師
洋園口廣花瓶
鴛鴦物
漆器紫陽花手箱
金屬象嵌花挿
瑞鳳文飾皿
漆器ころく月飾棚
漆器海芋飾棚
福澤 健一

高野 松山
寺井 直次
三木 貞三
龜倉 宇吉
會田 富康
山本 安藝
加賀 月華
小川 雄平
奥村 霞城
高橋 勇
清水正太郎
酒井 光開
福澤 健一

川上涼花遺作展(洋畫)

二月二十六日—二十八日 銀座・資生堂
大正十年に物故した作者の遺作、油繪十、水彩畫二十三、木炭畫四十二、及び日本畫一點を展觀した。

前田政雄個展

二月二十七日—三月一日 札幌・今井吳服店
平賀龜祐洋畫展
二月二十八日—三月六日 銀座・青樹社

「現在フランスに滞在中の平賀氏の個人展である。長い佛生活は畫面上にも現れ、あくまで洋畫手法は堂に入り、精練されたテクニクが畫面一杯に働いてゐる。印象派風の靜かな作品で、氏の好んで描く古びた建物または田園風景は、豊富な色彩と共に情味があふれてゐる。」(報知)

藤田嗣治第三回小品展覽會

二月二十八日—三月十日 數寄屋橋・日動畫

廊

油繪、どろ繪、水彩畫等の小品二十四點を展觀した。

「最近の内地旅行の間に描いたといふ小味のものが見られる。かうした反面の藤田は實に我々に親しめる存在である。眠猫など小猫を描いた數點は愛すべき作品であり巧みなものである。泥繪の異國風景、油の日本の女子供、人形、魚などもつれづれのすきびであらうが、繊細で且つまた強靱な神經が、また小品なりとも疏かにせぬ作畫態度が窺れた。」(佐波甫、美術四月)

三月

第二十二回大阪美術展覽會(日本畫)

三月一日—五日 大阪・三越
矢野橋村、北野恆富、菅橋彦、水田竹圃審査に當り、第一入選十一點(内推奨四點)、第二入選八

十八點、外に無鑑査作品五點に依り開催された。

推奨並市長賞 西山英雄、月居玄依、橋川華光

森安子
小野藤一郎洋畫小品展
三月一日—七日 大阪・三角堂

巴人社第三回作品展
三月一日—七日 日本橋・白木屋

香川縣立工業學校生徒作品展
三月一日—七日 大阪・三越

第一回日本人形社展覽會
三月一日—十日 上野・日本美術協會

平田郷陽、岡本玉水等九名を會員として新に設立された團體の第一回展で、會員作品に公募作品を併せ、人形三十三點、人形繪十六點を陳列した。

塚本茂洋畫小品展
三月二日—六日 大阪・美術新論社畫廊

月明會作品展

三月四日—六日 銀座・資生堂

S・P・A 第三回洋畫展

三月五日—九日 新宿・紀伊國屋

土屋幸夫洋畫個展

三月六日—九日 銀座・紀伊國屋

花の油繪展

三月六日—九日 神戸畫廊

二科會春季展

三月六日—十二日 大阪南海・高島屋

江崎寛友洋畫個展

三月七日—十日 岐阜市公會堂

泰西美術工藝品展

三月七日—十一日 銀座・資生堂

南蠻堂主催

二科西人社展覽會（洋畫、彫刻）

三月七日—十一日 福岡日日新聞社講堂

二科會出品者に依つて昨年組織された團體の第二回展で、福岡日日新聞社の後援に依り開催された。繪畫五十餘點、彫塑十三點の外、二科會員數名の贊助出品小品を併せ陳列した。

東京寶塚劇場美術部展

三月七日—二十日 日本劇場地階畫廊

故武藤山治戲墨展

三月八日—十二日 銀座・鐘紡ギヤラリー

藤友會主催

姉崎蕨洋畫展

三月八日—十四日 大阪・淀屋橋畫廊

輸出工藝試作展

三月九日—十一日 名古屋市商品陳列所

三雲祥之助洋畫展

三月九日—十一日 大阪・堂ビル清交社

「三雲氏の滯歐十年間の收穫を提げての歸朝第一回展であつて、どの作品にもフランス的なよい味がこもつてゐる。セザンヌの影響が最も多く見え、マルケ、アスラン等にも魅かれてゐるらしい。従つて作品に新人らしい清新さは感じられないが、眞面目な態度には好感が持てる。……」（大朝）

東西日本畫家新作展

三月九日—十七日 日本橋・白木屋

古林一哉堂主催で六十點を展觀した。

岡藤園日本畫個展

三月十日—十四日 京城・三越

大亦觀風邦畫個展

三月十日—十五日 日本橋・白木屋

人形藝術座マリオネット展

三月十日—二十日 銀座・三越

蒼潤社第一回美術工藝展

三月十一日—十五日 京都美術館

京都の工藝家に依り昨年組織された蒼潤社の第一回展で、同人作品の外、應募出品並に贊助出品を併せ百七十七點を陳列した。

「……應募作品は殆んど全國の各地から三百餘點の出品を見るなど、曾つて華やかかなりし頃の京都美工院に匹敵するものがあつたと思ふ。會期が帝展出品の直後であるにも關らず同人の諸氏を始め相當努力の作品が多數寄せられ、特に新進作家の方面から帝展などの大展覽會には餘り示されなかつた極めて自由な研究的な出品を得たことは、この展覽會の開催された意義を首肯するに十分のものがあつた。同人出品のうちで力作として擧げるならば、岸本景春氏の『刺繍二曲屏風春秋花鳥』、小合友之助氏の『畫の月風呂先屏風』、皆川

月華氏の『猶染衝立』、清水正太郎氏の『四友花瓶』、近藤悠三氏の『薔繪花瓶』、浮田榮徳氏の『袖彩文花瓶』、米澤蘇峰氏の『葡萄酒扇壺』等が、全くこの展覽會に相應しい効果を擧げ、作家個々の特色を遺憾なく發揮してゐるものである。……」（桂田榮明、アトリ五月）

應募作品三〇七點、入選一三五點
授賞

蒼潤社賞 桶谷定一

工藝獎勵賞 中村幸節、奥村究果、佐野多景夫

五大家洋畫展

三月十二日—十四日 大阪畫廊

藤島武二、岡田三郎助、中澤弘光、石井柏亭及び辻永の土佐風景を主とした小品展で、藤島「室戸の黎明」「浪」「朝陽」、岡田「高知城遠望」及び裸婦を描いた「梳る」、中澤「鏡川畔」「出漁」、辻「鏡川の夕」「室戸の朝暾」、石井「停船」等が陳列された。

青田五良、橋本清正遺作展

三月十二日—十五日 神戸畫廊

石川欣一郎、三宅克己水彩畫展

三月十二日—十七日 數寄屋橋・日動畫廊

石川欣一郎作品四十四點、三宅克己作品六十三點を展觀した。

「最近では『みづゑ』の技法も大分近代化した作風が喜ばれるやうになつたが、かういふ本筋の、明治型の水彩も中々趣がある。石川氏はイギリス風の洒脫な味を出して地方風景に成功し、三宅氏は細密な筆と巧な明暗法によつて外國風景や眞鶴附近の景觀を描いてゐる。油繪と違つて、一種即興的な、日常性を有つてゐる點が親しみ深く眺められる。」（東朝）

福岡縣主催第二回工藝品展

三月十三日—十七日 縣產業獎勵館

新燈社第十四回展

三月十三日—十八日 大阪・朝日會館

西洋骨董品展覽會

三月十四日—十七日 日本橋・高島屋

庭山耕園社中展(日本畫)

三月十四日—十七日 大阪・三越

第一回立體圖案展覽會

三月十四日—十八日 銀座・資生堂

東京高等工藝學校工藝彫刻部內高藝彫刻會の主催で立體圖案及び實材製品の各種を展觀した。立體圖案とは工藝彫刻即ち、「工藝品の原型として、其の考案を土又は石膏を用ひて立體の形に造る圖案的創作の事である。」

近藤光紀洋畫展

三月十四日—十八日 大阪・三角堂

「帝展の異色ある作家近藤氏の第二回の個展で『窓』『白布静物』『桃と葡萄』などの豊麗な静物に從來の歩みを進めてゐるが、今度は更に風景に新境地を開拓して美しい仕事を見せ特に『斷崖』『満ち潮の海』『仁右衛門島の磯』『太海の波』などの海景には畫面に力強い動きが感じられる。」(大毎)

吉田博一洋畫個展

三月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

山本森之助遺作展(洋畫)

三月十四日—二十日 銀座・三味堂

昭和三年物故した山本森之助の遺作油繪風景畫二十四點を展觀した。遺作展としては小規模ながら風景畫家としての彼の優れた位置を示すに足り

た。

「山本氏は啓蒙期洋畫界に於ける重要な作家であつた。今日ここにかうした遺作を列べて見るに繪畫の正道を眞直に歩いてゐた故人の態度は、慥かに記憶されて然るべき何物かを有つてゐる。渡佛から獲た印象主義の影響がシスレー、モネ、ピサロを憶はせるやうなパリ近郊の風景を抒情的に展開せしめてゐる。セーヌ河畔の二、三點は特に佳作であり、日本風景としては重厚な感じの『漁港』『房州の海』やバステルのように鮮麗な『檜原湖』が注意を惹く。」(東朝)

バル創案園圖ボスター展

三月十四日—二十二日 銀座・明治製菓

谷道霞嶂新作日本畫展

三月十五日 上野公園・櫻亭

アニメ第五回展

三月十五日—十七日 銀座・紀伊國屋

吉田喜藏バステル畫展

三月十六日—十八日 大阪・堂ビル清交社

第六回太平洋美術學校卒業制作展、附うなばら會展

三月十六日—二十日 神田・東京堂

西田數雄滯歐洋畫小品展

三月十六日—二十日 神戸畫廊

第二回石鹼彫刻展覽會

三月十七日—二十二日 上野・松坂屋

花王石鹼長瀬商會後援で知名の彫刻家達を集めた石鹼彫刻研究會の第二回展である。作品は北村西望、建島大夢、長谷川榮作等を初め數十名の作家に依る百二十點餘りが陳列された。

東西名家小品展

三月十七日—二十二日 上野・松坂屋

川路柳虹賛詩小品展

三月十七日—二十二日 上野・松坂屋

土佐風光スケッチ展

三月十七日—二十二日 銀座・松坂屋

「明朗な南國土佐の風光に興趣をもつた藤島、岡田、中澤、石井、辻、中村研一の諸君が三回にわたる旅より得たる作品二十有餘點はいづれも相當の出来栄であつて、殊に本社を選定したる日本八景の一たる室戸岬の雄大な景色は藤島、岡田、中澤三君の筆によつて岬の大觀を窺ふに足るべく、なかんづく藤島君の『海上雲遠』と題せるもの、中澤君の『室戸の一角』等は兩君近來の佳作だと思ふ。……」(大隅生、東日)

長野草風個人展覽會(日本畫)

三月十七日—二十三日 日本橋・三越

新作品二十點を陳列した。

白蠻展(洋畫)

三月十八日—二十一日 銀座・紀伊國屋

幸野樸嶺遺作展覽會

三月十八日—二十九日 恩賜京都博物館

恩賜京都博物館では幸野樸嶺の作品百十三點、外に參考品數十點を蒐めて此の展覽會を催した。其の中三十六點は千支の明記されたもので、嘉永五年中島來章の門に入つた九歳の時の秋月孤雁圖から明治二十六年五十歳時代の蘆洲群雁圖に至る畫家一代の進展を知るに足りる。代表的な傑出作品としては東京帝室博物館藏の秋日田舎圖(明治二十一年シカゴ博出品)幸野西湖藏の帝釋試三獸圖等が挙げられるが、博覽會や共進會出品作が殆ど見られなかつたことは遺憾であつた。

辻富芳遺作展(日本畫)

三月十九日—二十日 大阪・道頓堀中座西畫廊

北野恆富門下で三十五歳で夭折した作者の遺作十六點を展觀した。

東丘社如月會第三回展覽會（日本畫）

三月十九日—二十一日 京都・大丸

堂本印象畫塾の展覽會で、出品者四十七人、五十二點を陳列、別に贊助出品として堂本印象が小品連作「詩經鈔」を出陳した。

猪熊弦一郎素描展覽會（洋畫）

三月十九日—二十三日 數寄屋橋・日動畫廊

水彩畫、素描三十餘點を出品。

第三回津田青楓蔬菜花卉線描畫個展（日本畫）

三月十九日—二十四日 日本橋・高島屋

六曲小屏風、横卷等を含む三十餘點の近作を展觀した。

木内省古、木内五郎象嵌と木彫展覽會

三月十九日—二十四日 日本橋・三越

木内省古の木象嵌に依る工藝品數十點と木内五郎の木彫作品とを併せ展觀した。

海外美術工藝展

三月十九日—二十四日 大阪・三越

水野有中森第一回作品展（土俗玩具）

三月二十日—二十三日 銀座・資生堂

白聖會洋畫展

三月二十日—二十四日 京都美術館

勝間田武夫洋畫個展

三月二十日—二十四日 大阪・美術新論社

畫廊

鹿島英二臘染作品展

三月二十日—二十六日 銀座・鐘紡

岡野福太郎洋畫個展

三月二十一日—二十三日 銀座・伊東屋

春陽莊新畫展觀（日本畫）

三月二十一日—二十三日 東京美術俱樂部

山川勇一郎油繪小品展

三月二十一日—二十四日 神戸畫廊

輸出工藝品展

三月二十一日—二十七日 靜岡商工獎勵館

街頭二科展

三月二十一日—二十九日 京都四條通

フォルム展（洋畫）

三月二十二日—二十四日 銀座・紀伊國屋

横井禮市洋畫個展

三月二十二日—二十七日 名古屋・丸善

近作三十八點を展觀した。

版畫と皮浮彫の同好會展

三月二十三日—二十四日 大森區田園調布

櫻幼稚園

芝川照吉蒐集洋畫賣立展

三月二十三日—二十五日 大阪・日本綿業俱樂部

小川洋吉室内建築用織物試作展

三月二十四日—二十六日 上野公園・韻松亭

東京美術學校卒業制作展覽會

三月二十四日—二十六日 上野・同校

春虹會第二回展覽會（日本畫）

三月二十四日—三十日 日本橋・三越

三越が主催し京都畫壇の知名作家十七名を蒐めて昨春組織した春虹會は、新に金島桂華を會員に加へ、第二回展を開いた。栖鳳、五雲、翠嶂、麥櫻、契月等の出品が無かつたことは物足りなかつたが、帝展に作品を見せなかつた作家達の多いことから世人の注意と興味を喚んだ。

中では金島桂華の「猫」はしつかりした精進振りを示したもので頗る好評であつた。上村松園の「春宵」も濃艶に美しく、完成の技を示し、福田平八郎の「春雪」は作者の近年試みつゝある裝飾的取扱ひに成るが、裝飾的構圖が勝ち過ぎて、其の豪華さにも拘らず案外弱い。堂本印象の「鏡清雨聲」は洗練された技巧を見るべく、富田溪仙の「吉野春風」、山口華楊の「春光」等亦注目される作品であつた。

出品目録

牡丹	石崎 光瑠	雨霽	中村大三郎
吉野春風	富田 溪仙	春宵	上村 松園
鏡清雨聲	堂本 印象	荔枝	宇田 萩郎
春夕	小野 竹喬	春雪	福田平八郎
夏雲仙閣	川村 曼舟	春光	山口 華楊
猫	金島 桂華	夕ぐれの春	案本 一洋

一軌社同人展

三月二十五日—二十八日 神田・東京堂

黑色洋畫展

三月二十五日—二十九日 銀座・紀伊國屋

白磁會洋畫展

三月三十五日—二十九日 京城明治町・淺川號樓上

兒島善三郎油繪個展

三月二十五日—三十日 數寄屋橋・日動畫廊

「前回に瀬戸内海風景を展示して成功したこの作家は今度は伊豆西海岸の寫生と、一セリーの庭園畫を見せ

てゐる。……色彩は相變らず豊麗快明で線と點による草木の説明も兎鳥君獨特のスタイルをなしつつある。花は風景に比して多少遜色がある。シンボライズされた日本趣味は中々面白いが、これがもう少し豪宕なものに發展して行くといふだらう。(東朝)

佐野宗元作土風爐灰器展覽會

三月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

青樹社蒐集歐洲繪畫展覽會

三月二十五日—四月一日 上野・日本美術協會

洋畫商青樹社主人が昨年度歐して蒐めて來た佛英、蘭、白、伊、獨諸國の繪畫百五十餘點を展觀した。

三雲祥之助滯歐作品展

三月二十六日—二十八日 神戸畫廊

渡邊大虛山水花鳥畫個展

三月二十六日—三十日 銀座・資生堂

作者の第三回の個展で、紙本を主とした山水花鳥畫を陳列した。

クルト・セリグマン作品展覽會

三月二十六日—三十一日 銀座・三越

パリ畫壇に於ける前衛畫家スウイス人クルト・セリグマン(Kurt Seligman)が來朝して其の作品四十點を展觀した。

横井弘三繪畫回顧展

三月二十六日—四月二日 數寄屋橋・日本劇場

地下畫廊

澤田宗山陶器展

三月二十七日—三十日 京城・三越

びゆるて會第一回洋畫展

三月二十七日—三十一日 銀座・三味堂
第十一回國際オリンピック大會參加美術展覽會(綜合)

三月二十八日—四月三日 東京府美術館
ベルリンに開かれる國際オリンピック大會藝術

競技參加の爲、大日本體育藝術協會の主催で出品の募集審査を行つたことは別記(二二頁)の通りであるが、それ等の入選作品に審査員等無鑑査の作品を加へ、尙參考出品をも併せて國內展覽會を開いた。

「美術の國際競争に對する、この國の代表作品としては聊か貧弱の感を免れ得ないが、日本畫、洋畫、版畫彫塑、工藝に至るまで、兎も角も約百點の作品を描へて恰好はついた。また日本固有のスポーツから歐風の近代スポーツまで探入れてあるので、何んな風の運動が今この國にあるか、その種々相は概括的に外國へ紹介することはできるだらう。(東朝)

霸王樹社第二回展(洋畫)

三月二十九日—四月一日 神田・東京堂

第三回三春會展(洋畫)

三月二十九日—四月七日 東京府美術館

昭和三年東京美術學校西洋畫科卒業生の組織する會。大體に寫實的な作風で極めて眞面目な研究を進めてゐる者もある。佐藤功の滯歐作品二十餘點、大澤昌助、鈴木重成、三木辰夫、山口猛彦、二宮不二麿等の諸作が注意された。

ゲラード・ビー・アドルフス個展

三月三十日—四月二日 數寄屋橋・日動畫廊
繪行脚に來朝したオランダの油繪作家アドルフス(Ger. P. Adolfs)の作品を展觀した。

神田畫塾展(洋畫)
三月三十一日—四月六日 鹿兒島縣産業獎勵館

四月

人見少華日本畫個展

四月一日—三日 名古屋・松坂屋

新古典派彫刻洋畫小展覽會

四月一日—四日 銀座・資生堂

金子九平次の彫刻及び洋畫、片山健吉の洋畫作品合計四十四點を陳列した。

新興漆藝家具創作展

四月一日—五日 日本橋・高島屋

東陶會第八回陶展覽會

四月一日—五日 日本橋・三越

東京に於ける陶磁及硝子工藝作家二十餘名の團體東陶會の、會員作品發表の展覽會第八回を開いた。

油繪ミニオン展覽會

四月一日—五日 數寄屋橋・日動畫廊

第二部會に屬する新進作家「愉快なる仲間十七人」有岡一郎、朝井閑右衛門、猪熊弦一郎、伊勢正義、角野判治郎、鬼頭鍋三郎、小磯良平、耳野卯三郎、南政善、中西利雄、緒方亮平、三田康、佐藤敬、鈴木誠、田中繁吉、内田巖、脇田和の小品作品を展觀した。

アルペール・ボークラン作品展

四月一日—五日 銀座・青樹社

矢橋六郎油繪個展

四月一日—五日 銀座・紀伊國屋

新時代洋畫連續個人新作發表會の第一として開催した。

内田巖洋畫個展

四月一日—五日 大阪・阪急百貨店

岩井彌一郎油繪個展

四月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

角野判次郎洋畫展

四月一日—五日 神戸畫廊

白桃會洋畫展

四月一日—七日 大阪・淀屋橋畫廊

建築學會記念展

四月一日—十日 帝大工學部及建築會館

第一回銀座美術家協會展覽會（洋畫）

四月一日—十日 銀座街各商店飾窓

井手坊也、石川滋彦、房野徳夫等十七名の青年洋畫家を會員とし、岡田三郎助を顧問として創立された會で、銀座柳まつりを機會とし、銀座聯合會後援に依つて新奇なる「街頭展」を開いた。出品は會員作品の外、顧問、賛成會員（第二部會に屬する先輩達）其の他一般招待出品合計二百數十點の小品で、是等を銀座八丁間の各商店飾窓に配置したものであつた。

加藤華仙作陶陳列會

四月一日—十日 日本橋・白木屋

水彩バステル畫創作展

四月一日—十二日 銀座・三越

第二十六回東海美術協會展覽會（綜合）

四月一日—十二日 名古屋市美術館

名古屋に於ける綜合團體として長い歴史を有する同會の、第二十六回展で、日本畫六十一點、洋

畫百三點、彫刻二十八點、工藝四十二點を陳列した。

エミール・ベルナル・佛蘭西近代繪畫展覽會

四月一日—十七日 東京府美術館

國民美術協會の主催に依つてフランス現代畫家エミール・ベルナルの作品油繪三十九點、水彩畫及素描百十八點を陳列、併せてフランス近代畫五十八點を陳列展觀した。

倉敷洋畫展

四月二日—五日 倉敷・天満屋

自由學園工藝研究所第四回作品展

四月二日—七日 日本橋・高島屋

帝國美術院第一回展京都陳列會

四月二日—二十二日 京都美術會

京都市主催。出品點數は第一部二〇九點、第三部一八點、第四部二〇三點、合計四三〇點であつた。

柴田耕洋日本畫個展

四月三日、四日 上野・勸兵衛酒屋

外山一二三洋畫個展

四月三日—五日 銀座・交詢社

平賀龜祐洋畫展

四月三日—五日 大阪・十合

船木道忠第二回陶器展

四月三日—七日 銀座・たくみ工藝店

第十一回國畫會展覽會（洋畫、彫刻、工藝）

四月三日—十八日 東京府美術館

國畫會は昨年の帝院改組の一影響として同會中心の一人であつた川島理一郎を失つたが、新會員青山義雄、新會友大森啓助を加へ、美術界動搖の

中に在つて帝展支持の殆ど唯一の團體と見做されて注目されつゝ此の展覽會を開いた。青山義雄の滯歐作品二十七點を特別陳列とし、招待出品として別府貫一郎のイタリア風景十點が陳列されるなど賑ひを添へたが、全體としては特長も短所も國展らしきを見せつゝ例年と大差のない成績であつた。此の會は野心的な力一杯の製作を競ひ示すものと異り、安住の境地に在つて楽しんだ日常の製作を出す云ふ風が多く、觀者に一種の親しみを與へてゐる。洋畫の外に版畫、彫刻、工藝の各部を有して夫々所屬の作家達が製作に勵み、しかも一貫した國展の色調に統一されてゐることも他の團體に見られぬ特色を示してゐる。併し一面に少數の會員等を除いては技術上に専門家としての十分な習熟を経たものが比較的少く、餘技若くは趣味的な程度の作が多く見られることは一つの弱點と云ふべきであらう。

繪畫に梅原龍三郎の感化を受けるものが多いことは當然とするも、模倣を超えぬ作品が常に失敗に終ることは云ふ迄もなく、而も彼の作風の長所は餘人の最も學び難き點に在り、眞似易き部分は常に其の弱點に在ることは此の弊を多からしむるものと云つてよい。立石鐵臣の赤を主調とした風景にも其の一例が窺はれる。

第一室では阪本清雄の「船溜り」が素直に描かれ、澁川駿二の風景三點は空間が好く描かれて氣分が現されて居り、椿を描いた靜物もよい。

第二室の中村博の風景畫も亦梅原の感化を示すものであるが、「靜物」はそれを脱して相當しつかりした構成を示した。清水多嘉示の作は一種裝

飾的に畫面を作り上げてしまつて力が無い。此の室では土田文雄の諸作が優れてゐる。深味には乏しいが、特に其の風景には色調の美しさが魅力となつてゐる。

第三室、久保守の諸作は穩かであるがしつかりした寫實的畫風で、「白衣の婦人」「ばら」は愛すべき小品である。大森啓助の試作「海水浴」は構想は面白いがやはり試作の域を出でず他の作中では「犬」がよい。此の作者は甘美な一手法を持つてゐるが、其の安易さを破つて今後進展することとを必要とする。會友に推された眞垣武勝の三點の中では「靜物」を取る。

第四室、山田正の風景四點は奇はないが靜かに自然を樂しんだ寫實的な作である。椿貞雄は變化なき畫風を守り、山下品藏の風景諸作の中では「駒ヶ岳初夏」もしつかりした出來であるが、「八丈島の海(朝)」は作者の荒い筆使ひの持味が主題に合致してよく成功してゐる。併し同じ連作中の(風)は荒くなり過ぎて纏まりに缺けた。

第五室では宮坂勝の滿鮮風景四點、殊に「夏スナガリー」は暖く澁い色調に調子もよく愛すべき作であり、輕快に描かれた宮田重雄の「風の目」は白波を巧みに寫してゐるが山は餘りよい出來でなく、寧ろ「あけび」を探る。技術的には未だ本格と言へぬ、仰木茂の「江の浦」はおとなしく描いてゐるが鋭い所のある風景畫である。

第六室、梅原龍三郎の三點の風景中では「江の浦」が力作である。此の作者の深味のある色彩と量感を盛つた筆觸とは、餘人の及び難い境地を見

せてゐる。

第七室では河野通勢の「ABC教育」は作者の懷古趣味が過ぎて、現代の作品としての意義に乏しく觀者の共感を誘ひ難い。別府貫一郎の滯歐作品は氣の利いた筆致に成る。

第八室で特異な作風を示す佐藤哲三は以前よりも練れて來たと共にドミエの摸倣が目立つ。今回の諸作では「姉」と「晩秋」とを擧げる。

第九室には青山義雄の滯歐作が陳べられた。色彩の豐麗な外光を描いたものが多く、快美な獨自の畫風を示してゐる。深い觀照を缺く物足りなさがあり、脆弱感を伴ふことも弱點であるが新鮮な色彩感に優れた特質が見える。

版畫の中では平塚運一の諸作がさすがに際立つて優れてゐた。墨一色の「佛國寺」など構成的な構圖と力の籠つた線に、新しい木版の美を創つたものである。川西英も技術的に巧みであるが例年の通りと云ふ外はない。

彫刻は總じて貧弱さを免れない。清水多嘉示は「處女」と「裸婦」とを出してゐるが特記すべきこともなく、本郷新は技術的に未熟の觀が多い。

工藝では陶磁の富本憲吉、バーナード・リーチ、濱田庄司等の會員出品の外、陶磁、染織の類を主とし、それも日用品、服飾装身具等の小工藝品が多く帝展工藝とは異なる小味を示してゐるが、特に進展を見せたものも見當らなかつた。

搬入數 繪畫部一二五一、版畫部一九七、彫刻部二二二、工藝部三五八點、入選數 繪畫部一二四、版畫部三二、彫刻部四二、工藝部八八點。

會員推薦(繪畫部) 別府貫一郎、(版畫部) 恩地孝四郎
會友推薦(繪畫部) 眞垣武勝、(工藝部) 仰木ゲルト
國畫獎學賞(繪畫部) 東克己、(版畫部) 栗山茂

(彫刻部) 能美八重夫
褒狀(繪畫部) 松木滿史、澁川駿二、三雲祥之助
(版畫部) ブノワ、(彫刻部) 佐藤邦輔、宮島久七、(工藝部) 並木十四郎

出品目錄 (○會員 △會友)

桂川	大貫 第二	山陰風景	黒津 久乃
朝の森	松本 満史	静物	△中村 博
林	同	御覽瀬	同
少女	同	春	望月 清作
湯谷風景	湯淺邦三郎	風景	堀場兼太郎
寺の屋根	鈴木 清	江之島	川北 英司
田園風景	菅藤 霞仙	Bourcelle et sa fille	○清水多嘉示
淡水	△立石 鐵臣	姉弟	同
裏街	同	少女	同
河岸の夕べ	同	弟	江口 環水
夏草と家	同	ベコニアと果物	原 信重
雪の丘	根本從之介	噴水のある風景	中村 忠二
野方風景	納富 進	風景	土田 文雄
船溜り	阪本 清雄	坐像	同
窓外風景	澁川 駿二	秋	同
緑色花瓶に椿	同	裸婦	同
薄暮	同	風景	福田紹太郎
夕陽	同	風景	濱田 直記
窓邊	依岡 恒喜	落日	加藤 作三
習作	角野 毅	樹間	同
橋のある風景	渡邊 武	樹間	小池不可止
風景	高田 貞吉	風景	藤本 佳弘
菜の花	黒津 久乃	帝大の冬	鈴木 正二

四二

[illegible]

郊外の家	平野 新二	曉の阿蘇	○平塚 運一	女の首	宮島 久七	パン皿(陶器)	△船木道忠	小品七種	○廣田 庄司	綴織手提生地	小川 清子
林縁	小川 一男	雲仙遠望	同	婦人胸像	松野 亨	水滴(同)	同	エマイユ押出し	日根野作三	同(三種)(一)	同
春日	増田 匡彦	萬座温泉プール	田原 幸三	T氏の妹	水船 六洲	同(同)	同	エマイユ帶留	同	綴織手提(織物)	同
官吏の妻	里見 明正	伊豆片瀬	清水 正博	友人の像	峯 孝	燭臺(同)	同	同	同	同	同
雪後	田中常太郎	利ヶ崎	稲葉 享二	I子の首	野口 安友	同(同)	同	同	同	同	同
冬の日	佐宗 美邦	風景	小梅橋附近	Mの首	成田 政男	松竹梅大鉢(同)	同	同	同	同	同
版畫	小林 朝治	小梅橋附近	栗山 茂	裸婦	能美八重夫	帶止(同)	同	同	同	同	同
熊の湯風景	高田 一夫	日本平A	同	F子の首	新田 實	同(同)	同	同	同	同	同
上海Canti D'orneの夜	寺内 長造	駿府城址	同	習作首	小田 精介	同(同)	同	同	同	同	同
石橋	塚本 哲	日本平B	同	處女	清水多嘉示	同(同)	同	同	同	同	同
葛飾風景	水船 六洲	奈良風景	佐々木 孔	裸婦	同	カフス釦(同)	同	同	同	同	同
大分港	武藤 完一	むかばきの夕映	黒木 貞雄	こつとい牛	左 忠子	同(同)	同	同	同	同	同
海岸	中川雄太郎	龍舌蘭のある風	松崎 卯一	習作	杉本幸一郎	黒袖壺(同)	同	同	同	同	同
畫架に凭る女	同	段島と無花果	宇治山哲平	裸婦習作	白井謙二郎	洋承文刺繡ハ ンドバツク	平沼 澤	同	同	同	同
畫齋	川西 英	環路證・大和 し美し版畫卷	△棟方志 功	習作	佐藤 邦輔	書架	同	同	同	同	同
溫室	同	彫刻	同	習作(一)	千村士乃武	竹平籠	同	同	同	同	同
舞踏	同	T子の首	芥川 永	習作(二)	武内 次郎	竹花籠	同	同	同	同	同
少女	同	ザイキイ・スイ ツデコ	明田川 孝	首、習作	武内 收太	帶止A(陶器)	久松 昌子	同	同	同	同
山路	同	アマビの馬を繋	同	女の首	徳力牧之助	同B(同)	同	同	同	同	同
ポリフェー ム(マチス)	○青山義雄藏	胸像	古池 恒雄	子供の首	裸女立像(一)	同C(同)	同	同	同	同	同
人形のある室内	恩地孝四郎	ウサギ習作	福井 堅造	裸女立像(二)	同	同D(同)	同	同	同	同	同
廟門	同	生誕	△本郷 新	樂徒	△山内 壯夫	同E(同)	同	同	同	同	同
人力車三臺	川上 澄生	母子	同	風	同	鐵繪壺	○廣田 庄司	同	同	同	同
馬車二臺	ブノワ	悦子嬢胸像	同	糖妃諫子之像(母)柳原 義達	柿袖花瓶	同	同	同	同	同	同
子供の肖像	同	少女首	長谷川 宏	同子	柿袖大鉢	同	同	同	同	同	同
りうし	同	女立像	本莊 正雄	S子座像	赤繪角鉢	同	同	同	同	同	同
炬燵	同	女立像	同	習作(首)	同	同	同	同	同	同	同
明星山	小川 龍彦	女座像	伊室 正次	習作	山本 常市	同	同	同	同	同	同
山峽の秋	田川 憲一	女	同	工 藝	同	同	同	同	同	同	同
龍舌蘭と糸蘭	同	男の首	清水 要	花瓶(陶器)	△船木 道忠	同	同	同	同	同	同
ゴニョール	中江 恒治	習作	小池 岩夫	水指(同)	同	同	同	同	同	同	同
裸	竹内 英雄	首	木俣 三郎	鉢(同)	同	同	同	同	同	同	同
街	畦地梅太郎	魔神試作(高潮 暴風、地震)	宮島 久七	鉢茶碗(同)	同	同	同	同	同	同	同
淺間山早春	○平塚 運一	腰かけた女	同	鉢茶碗(同)	同	同	同	同	同	同	同
佛國寺	同	同	同	鉢茶碗(同)	同	同	同	同	同	同	同

では「赤い建物」を擧ぐべく、第十一室の遠藤典太の「女」は着實な描法を示してゐた。

搬入數二六五三、入選數一二四、陳列總數二九三點。

會員推薦 倉田三郎

春陽會賞 原精一、田川勤次、新沼杏一

出品目錄 (△會友)

ヴァイオリンを 持つるボーイズ	長田 一敏	花と錦魚鉢	加賀孝一郎
風景	同	花	同
波打際	同	アルゼリアの 公園	△森田 勝
妙見淵	同	赤衣の女	同
小金井邸	同	裸婦	同
上越の山	△倉田 三郎	裸少女	同
静物	同	臥せる裸婦	同
海濱	同	畫室の一隅	田中壽太郎
兄妹たち	同	砂丘	同
ドリブル前	同	田園風景	石塚 青道
肖像	同	香汁壺の牡丹	△藤堂李三郎
シユミーズの女	同	百合	同
寝てゐる裸婦	同	香汁壺薔薇	同
煙草のむ男	同	縫ふ女	同
青年立像	同	牡丹	同
緑の服	同	甲斐岩間	△小栗 哲郎
水邊裸婦	同	安倍川	同
綠蔭裸婦	同	月見連山	同
後向き	同	山の宿	同
S像	同	パリー風景	三浦市太郎
ボンセチニヤ	同	パリー風景	同
夜の果實店	同	パリー風景	同
ダリヤ	同	パリー風景	同
虎の静物	同	巴里風景	同
網に乗る兒等	同	甲斐ヶ根の春	同
夜の狂	同	静物	同
静物	同	トラともでる	同

京都小品A	○小穴 隆一	海	○國盛 義篤	淡水風景	大久保一郎	「青嶋」挿繪よ り六枚	○石井 鶴三
京都小品B	同	冬の海	同	臺北所見	同	「東海美女傳」 挿繪草稿六枚	同
子猫	同	朝の海	同	早春	△川端彌之助	同	同
習作	同	吟松寺の紅葉	同	清水寺秋景	同	同	○中川 一政
舞妓	同	薔薇	山川 清	室内	同	同	同
ジャボンと葡萄△伊藤慶之助	同	椅子に凭る小娘	同	雪景	同	身邊屏風	同
扇子を持つ少女	同	夏の日	原田 武男	薔薇の丘	△加山 四郎	「人生劇場」 十一枚	同
卓上野菜	同	温泉	○石井 鶴三	静物	同	保呂保呂鳥 (水畫)	同
憂愁夫人に扮 するK嬢	同	電車	同	横濱風景	同	横科(水畫)	○小杉 放庵
ブタンと柿	同	三樂莊景	田川 勤次	人形	同	同	同
大海微雨	同	都會の緑	同	面々の静物	同	同	同
初冬午前	同	都會の午後	同	冬日	同	二見 利節	同
白き部落	同	少年	松本 昇	枯れた花	同	同	同
朝の葡萄園	同	段々畑と畦	○鳥海 青兒	庭の椅子	同	同	同
冬の果園	同	紀南風景	同	花	同	同	同
磯の午前	同	信州の畑(一)	同	静物	同	同	同
菊	同	信州の畑(二)	同	静物	同	同	同
ラガー像	同	水田	同	静物	同	同	同
東山早春	△上野 春香	信州の畑(二)	同	静物	同	同	同
日向高千穂	同	道化の顔	同	浅草寺春	同	同	同
室の一隅	金子清之介	道化の顔	同	花菓小品其一椿	同	同	同
秋川	○栗田 雄	道化の顔	同	同 其二柑橘	同	同	同
磯	同	道化の首	同	同 其三薔薇	同	同	同
雪のスケッチ	○横堀角次郎	道化	同	新宿驛	同	同	同
赤城殘雪	同	出番の女	津谷 鹿市	蘇鐵	同	同	同
嵐後の海	同	カルタ持つ女	同	キビ畑	同	同	同
山村小景	同	チゲトシちゃん	同	秋の山の池	同	同	同
裸婦	佐藤 萬郎	キョコちゃん	同	初冬(山の池)	同	同	同
白百合花	○中川 一政	道化	同	浴場	同	同	同
富士川	同	文五郎の樂屋	同	夫人像	同	同	同
富士川べり	同	三番叟	同	少女像	同	同	同
山川冬景	同	十二ヶ嶽	同	ビルビーズ風景	同	同	同
冬川	同	椿	同	山中三越(一)	同	同	同
工事場	△眞田 久吉	驟雨の前	同	山中三越(二)	同	同	同
紅葉	○國盛 義篤	静物	同	山中三越(三)	同	同	同
雪の尖道湖	同	同	同	同	同	同	同

N氏邸	矢野 眞風	花	△鬼塚 金華
菊	萩原 芳枝	上總興津	同
切り通	佐藤 昌胤	伊豆の山	同
枯はな	吉田 達磨	少女と花	中谷 泰
観山(春)	同	農園	同
トレドの公園故△田中謹左右	同	眺望のある室内	同
窓外眺望	同	バスに乗つて	同
トレドの橋	同	畫室	同
モンマルトル・	同	憩ひ	秋口 保波
サクレール	同	化粧直し	同
モレーの洗濯場	同	海	同
モレー墓日	同	裸婦とラング	○水谷 清
ノートルダム	同	天主堂の庭	同
寺院	同	猶と朝顔	同
波太	同	赤い建物	同
伊豫早春	同	萬曆堂の牡丹	同
谷間の池	同	天主堂側面	同
戯れる母子	松本 茂	水さしを持つ	山田 義夫
母子橋臥	同	少年	同
幾久江像	同	ドーアボーイ	同
婦人像	稻熊 賢一	静浦風景	△岩田榮之助
花	手塚 緑敏	マスク	同
静物	同	離久津風景	同
少女たち	同	(一)	同
スキー姿	△兼平 英示	北國風景	橋本 三郎
花を持つ娘	同	樹間望郷	同
小天主閣の窓	石黒平三郎	夕暮の淡水河岸△楊 佐三郎	同
東照宮風景	三原 繁	紅毛城の夏	同
裸女	同	自畫像習作	北村 勇
山村遅日	舟木 章	果物	土屋 實
横濱山の手風景	同	招	故△原田 和周
都會と乾物	大石 ヒ凰	仁王山	同
少年	若山 爲三	戸隠山	同
柘榴	同	雪	同
蘭庭	同	南山を眺る	同
娘	同	横名湖	同
瀧壺	島田 福雄		

肥後南の關	故△原田 和周	うすれ日	△遠藤 典太
戸隠山牧場	同	夕景	同
京城の冬	同	タイレス	小泉倫之助
野尻湖	同	風景	安藝 實
静物	○田中善之助	小供	△和田 歳一
舞妓	同	花	同
西仔灣風景	同	こずもす	魚津 良吉
裸婦	同	天守への道	曾根 端雅
月桃と女	南大路 一	白鷺城の門	同
黄色い本	同	運	本莊 赴
あみもの	同	牡丹	同
女	△遠藤 典太	黄色い風景	北野 萬平
碓村	同		

寶角律子洋畫展

四月四日—七日 大阪・三越

明石哲三洋畫展

四月四日—八日 新宿・紀伊國屋

井澤元一、松崎政雄、岡正一、藤松辨之介洋畫小品展

四月四日—十日 京都・大丸

瑛九フオト・デッサン個展

四月六日—十日 銀座・紀伊國屋

第三回現代十大家洋畫展

四月六日—十日 銀座・資生堂

求龍堂の主催に依り、左の通り十家の作品一點宛を蒐め展観した。

目録

室戸遠望	藤島 武二	風景	岡田三郎助
秋田風景	藤田 嗣治	白馬耕作	坂本繁二郎
少女	長谷川 昇	静浦風景	梅原龍三郎
初春風景	石井 柏亭	風景	山下新太郎
花	川島理一郎	女	安井曾太郎

角野判治郎洋畫個展

四月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

「深い寫實があるので強靱に打ちつけたやうな繪具の塊も畫面の調子によく入つて粗暴な感じを與へない。色調はしぶく、筆觸もよくこなれてよい味を出してゐる。……」(大朝)

小磯良平近作洋畫展

四月七日—十二日 神戸畫廊

「本格的な調子に依る古典の味ひ深い、莊重な作風は『裸婦』二點に最もよく現はれてゐるが近來新境地を求めて十九世紀風な構圖による風景畫に没頭し『石寶殿』の連作や『奇絶峡谷』『敏馬風景』などの諸作を生んだがこの新古典的な感覺もまたその進轉を樂しませるものがある。」(大朝)

昭和工藝美術展覽會

四月七日—十三日 日本橋・高島屋

高島屋の主催に依り、帝展第四部の中堅をなす漆藝、彫金、鍛金、鑄金、陶磁、硝子等の工藝作家十五名の作品を展観するもので、其の第三回展である。

矢野橋村日本畫個展

四月七日—十九日 大阪長堀・高島屋

現代大家新作畫展(日本畫)

四月八日—十日 日本橋・東美俱樂部

緒方亮平洋畫個展

四月八日—十日 尾道市・大廣島

尾道風景十點、靜物九點、其の他合計二十一點を展観した。

現代一流作家洋畫展、前田寛治遺作展

四月八日—十二日 朝鮮京城日報社

太田三郎洋畫個展

四月八日—十三日 名古屋・丸 善

横尾芳月第一回個展

四月九日—十一日 丸之内・東京會館

大阪府工藝協會青年作品展

四月九日—十一日 大阪・中之島慶明莊

宮本三郎素描展覽會

四月九日—十三日 數寄屋橋・日動畫廊

「素描家として自他共に許す宮本三郎が最近の素描裸女三十點を並べてゐる。いろいろの大家のスタイルを採入れ自己のものとして纏め上げて行く所に君の器用と確實さが窺へる。技術のすばらしさはひとめるが、それらが多かれ少かれエロテイクであり、通俗的であり愛撫的であり、頽廢的なものうげに見えるのは、それが近代的なグーをとらへてゐるとはいひながら、尙省略さるべきもの、整理さるべきものを含んでゐるからである。……」(佐渡市・美通)

日本美術院々友展(日本畫)

四月九日—十三日 銀座・松坂屋

日本美術院の院友だけの作品を蒐めて展觀した「一人で二三點も出品した者もあり總數九十餘點、流石に新人らしい精力の横溢さを見て盛んだつたが、慫にはもう少し精選すれば一層引立つたことと思ふ。中村貞以氏の舞妓を描いた「春雨」は院友としての最後の出品だつたが矢張り光つてゐた。其うつとりとして可憐な目はまさに春雨の情味ありかにも上方らしい匂ひが看取された。小島一谿氏の色彩や筆致も近來愈々其特色を發揮し今度の二點も夫々にいい畫境を拓いてゐる。……」(素州生、塔影五月)

「みどりの家」展(日本畫、洋畫、彫刻)

四月九日—十三日 銀座・青樹社

三宅風白日本畫個展

四月九日—十三日 大阪・阪急百貨店

自由學園工藝研究所作品展

四月九日—十四日 大阪・阪急百貨店

陶漆綜合工藝品新作展

四月九日—十七日 銀座・松屋

渡邊正一洋畫個展

四月十日—十四日 福岡縣八女郡八女高女

里見宗次作品展

四月十日—十四日 銀座・伊東屋

益山雅衛洋畫個展

四月十一日—十二日 和歌山縣・田邊町

古賀英利油繪展

四月十一日—十三日 南千住・隣保館

長谷川三郎油繪個展

四月十一日—十五日 銀座・紀伊國屋

新時代展同人の連續個展の一として開かれた。從來のフオーブ風の作品より一轉して抽象畫を描いて居るが、彼の場合には自然に純粹繪畫に達したらしくわざとらしさが無い。新建築の裝飾畫に適すべく、中では「メトロポリス」が面白く見られた。

松下宗義洋畫個展

四月十一日—十五日 鹿児島縣產業獎勵館

秋田美術第八回展(綜合)

四月十一日—十五日 神田・東京堂

下落合町會洋畫展

四月十一日—十七日 銀座・三味堂

下落合に住む洋畫家に依つて結ばれた第一回展で、牧野虎雄、曾宮一念、鈴木誠、川口軌外、宮

田重雄、永地秀太、吉田博、安井曾太郎、大久保作次郎、三上知治等の出品があつた。

滿洲市場紹介展(工藝)

四月十二日—十三日 東京府商工獎勵館

海外美術工藝品展

四月十二日—十九日 日本橋・三越

第十一回表裝同人會展

四月十二日—二十日 東京府美術館

大塚巧藝社古今名幅書畫展

四月十三日—十五日 神戸畫廊

加治屋隆二洋畫個人展

四月十三日—十七日 銀座・資生堂

白日會に屬する作者の第一回個展。何れも小品であるが調つた構圖と健實な味のある筆觸を示してゐた。中では「下田港」「夏の犬若」等佳作であつた。

落合朗風日本畫個人展覽會

四月十三日—十七日 上野・松坂屋

作者の第五回個展として、近作二十點許りを陳列した。

「如何にも溫雅な氏の作品に親しめたことを多とした。明朗展を見て氏の作風にある野心的なものを感じた者も、この室内的に靜かに創作された作品を見ては一才別人のやうな感を禁じ得なからうと思ふ。『金柑』『常春』などの墨を主としたものもよく紙に付き『遊跡五趣』に見る小品も夫々輕い散文詩の味ひを表現してゐる。……」(報知)

太田壽洋畫小品個展

四月十五日—十七日 銀座・伊東屋

ヒカソ研究展

四月十五日—十九日 銀座・青樹社

造型文化協會主催。

井上安男水彩畫展

四月十五日—十九日 名古屋・丸 善

田邊至洋畫個展

四月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊

早川國彥水彩畫展

四月十五日—二十日 數寄屋橋・日動畫廊

羊土社版畫展

四月十五日—二十一日 大阪・金子彩陽堂

濱口陽三デッサン個展

四月十六日—二十日 銀座・紀伊國屋

島野三秋、大國壽郎工藝展

四月十六日—二十三日 大阪・阪急百貨店

青柿社第五回日本畫展

四月十八日—二十二日 銀座・伊東屋

東京洋畫諸大家新作展

四月十八日—二十二日 福岡・大同生命ビル
樓上

第八回新美術家協會展覽會（洋畫）

四月十八日—二十七日 東京府美術館

主として二科の中堅作家に依つて結ばれる會の同人展で、二十四名の會員何れも相當の技術を持ち夫々異色ある現在活動的な作家であるから、洋畫展覽會の中でも實質の上で最も注意されるもの一つである。徒らに奇巧を弄することなく、實實な落着の中に熱心な研究態度を見せ、各人の特色を十分發揮してゐることは此の會を他の公募展などに比して十分見應へのあるものとしてゐる。會員二十名の作品百六十四點を陳列した。

此の中には栗原信の滿洲風物を描いた水彩畫三十七點が特別陳列されたが、「雪のハルビン」其の他の油繪と共に好い收穫であつた。清水刀根は昨年邊りの宮本三郎の作風を思はせるもので、着衣の「人物」は巧みな描法に優れ、「裸」は空間のある而も裝飾的な構圖に優れてゐた。

宮本三郎は進歩を見せて色調も落着いて來た。八點の作品何れも達者な技巧を稱し得るが、中で「娘坐像」は紺ののれんを前に和服の娘を描いた力作であつた。之には藤田嗣治の影響が見える。「夏の女」は鏝形に身體を屈けて金魚鉢を眺める着衣の女を描いた奇抜な構圖であつた。

田邊三重松の風景は動きのある寫實がよく、近藤光紀は、印象派的な描寫に落着いた畫境を示した。早川國彦の水彩畫は何れもよく描いてゐるが平凡である。伊藤繼郎は著しい進境を示し獨特の手法と表現とを以て一種怪奇な美しさを出してゐる。堅實な道を進んで有望を思はせるのは中村善策で「大島の冬海」「椿の庭」など特筆に價した。

春の青龍社第四回展覽會（日本畫）

四月十九日—二十四日 日本橋・三 越

會場の都合から寸法を制限し搬入資格も秋季展入選者に限つて、其の中より嚴選したと言ふ。社人等の作品をも加へて合計二十五點を陳列した。斯種の會場で多く見る知名作家の手際のよい小品の類とは異つて、生々しいが若い元氣に充ちてゐるのが此の會の特質であり、それも次第に技巧的に整つて進歩を見せて來た。

石塚達の「椿」は同社が「畫青年に指導方針と

して示す標準作品として」鑑別外陳列する所といふ。忠實な寫生で、白目下の椿に當る光を描き又それを日本畫的な裝飾感を以てなす所に、日本畫の新たな寫實態度を示してゐる。川端龍子の「花垣」は華麗な裝飾的取扱ひに琳派を追想するが、現代的敏感さを具へた何處迄も龍子のもので、春麗の畫意をよく現した佳品である。渡邊綱雄の「青宵」は飛ばせた蝙蝠に焦點を置いた機智のある構圖で情趣もあり、柴田安子の「めらはど」は多分に洋畫的な、面に依る單純化の技法を用ひて興味ある効果を見せてゐる。谷口富美枝の努力も認められるが「校章」は細かい味を逸した。

第十五回岡崎美術展

四月十九日—二十九日 岡崎市立圖書館

高間惣七第一回研作洋畫展覽會

四月二十日—二十三日 銀座・資生堂

最近の研究に依る作品を特に選んで第一回研作展としたもの、油繪十八點を展觀した。獨特の華麗な色彩感覺を基調にして、裝飾的な構圖を試み

明治大正物故十作家遺作展（洋畫）

四月二十日—二十四日 大阪・三角堂

明治大正期に異色ある足跡を遺した十名の物故洋畫家、前田寛治、中村彝、關根正二、岸田劉生、村山槐多、佐伯祐三、小出楢重、青山熊治、片田徳郎、萬鐵五郎の遺作を陳列した。

村井正誠油繪個展

四月二十一日—二十五日 銀座・紀伊國屋

七彩會第一回展覽會（洋畫）

四月二十一日—二十五日 銀座・青樹社

七名の女流洋畫家に依つて本年一月結成された七彩會の第一回展で、各數點づつ、合計三十二點を陳列した。技術的に完成されたものとは云ひ難いが、夫々に特色ある自らの畫風を示してゐることが見られる。

辻愛造洋畫個展

四月二十一日—二十五日 大阪・美術新論社

畫廊

ブルーノ・タウト指導工藝品展

四月二十一日—二十六日 大阪・大丸

第二十三回商工省工藝展覽會

四月二十一日—四月三十日 東京府商工獎勵館

工藝界の最も大きな行事の一つである商工展も二十三回を重ねるに至つたが、依然として多くの出品者に此の展覽會の趣旨が正しく理解されて居らず、帝展第四部と混同視し、或は之に比して甲乙あるもの、如く考へられてゐるとして、審査當局者を慨歎させてゐる。商工展の目的は現代生活の實用を主眼とした工藝品の改善發達を獎勵するに在ることは周知の筈であるが、其の意味で優れた作品に乏しいことは、一般作家が技巧の末に捉はれてゐるか、或は皮相なる新奇を求めること以外、工藝の本質に關する理解、教養、感覺等に不足することを示してゐるものであらう。

出品數二八六二、入選數九五八點、授賞數は二等賞九、三等賞四一、課題賞二、褒狀一三〇點で其の内譯は左の通りである。(工藝ニュースに據る)

出品

出品人員 出品點數 合格人員 合格點數

圖案 一一四 一六四 五一 五八

金工 一八二 三六五 八六 一二四

陶器硝子 一六三 四五二 八三 一〇六

染織 九二 二四一 六四 一〇四

漆器 三四二 七四〇 一六八 二二九

木竹 二二六 五一七 一一九 一五五

雜題 一〇三 二六〇 六五 一三三

課題 八八 一三一 三九 四九

計 一三二一 二八六九 六七五 九五八

入賞

一等 二等 三等 褒賞 課題 計

圖案 四 一 一二 一三

金工 四 九 二七 四〇

陶器硝子 一 一一 一〇 二二

染織 一 三 一五 一九

漆器 三 六 二九 三五

木竹 三 一一 二一 三五

雜題 三 一一 二一 一六

計 九 四一 一三〇 二 一八二

授賞 九 四一 一三〇 二 一八二

商工大臣賞並二等賞「飾棚」中川武男

二等賞「鑄銅花瓶」山本自爐、「筒形青銅花瓶」

會田富康、「蟬文金彩鐵花瓶」宮坂房衛、「花

器」豐田勝秋、「象嵌香爐」宮之原謙、「蠟染衝

立」寺尾作次郎、「文机」廣島縣立二十日市工

業學校、「飾棚」井田清吉(案)、井田準三郎

三等賞「青銅花瓶」丸谷端堂、「銀小筥」宮坂房衛、「クリスタル硝子花瓶」各務鐵三、「黑釉梅花文壺」加藤青山、「黃瀬戸櫛目篋繪花入」加藤青山、「和南木象嵌衝立」筭光廣(案)、中島至堂(作)、「室内裝飾圖案」原崎吾一、「花瓶」山本能民、「石楠花金具」山下春興、「波魚文花瓶」長野埜志、「飛躍之圖盛花生」高橋勇、「古代文様盛器」八田辰之助、「弧線文花瓶」木村庄太郎、「檜垣柳鷺文釜」加藤忠三郎、「卵殼釉花瓶」大森光彦、「牡丹模様ベリースェット」めでたや合資會社硝子部、「淡青磁布目染付花瓶」松本佩山、「角形花生」川浪竹山、「ナツメ形花瓶」湯山青厓、「蒲公英花瓶」土肥刀泉、「青華蜜柑紋花瓶」河本櫻亭、「六角草花火鉢」伊藤信男、「織成鶏頭名古屋帶」高尾菊次郎、「鳥ノ圖刺繡飾額」京都染織試驗場、「草花模様訪問服」大嘉澤田商店、「飾棚、文机」和歌山縣立工業學校、「洋服箆笥」太田武男、「書物タンス」桑原主計、「飾棚兼書棚」大田武男(案)、竹倉春一(作)、「小簞笥」山内泉(案)大谷訓司(作)、「飾棚」青木得太郎、「水波」婦人室用飾棚と机)加藤青一、「和服箆笥」西澤清作(案)牧野喜伊智(作)、「ネクタイ箱」梶山政雄、「六角形花文様盆」拾石美明、「籃胎漆器綠模樣給仕盆」赤松商店、「盛鉢」岩倉一鳳、「草花文香盆」岡田章人、「果物文沈金手箱」塚田吉良、塚田重太夫、「龍鳳鳳文風呂先屏風」横山幸作課題賞「綠模様帶」河合睦、「綠文花器」宮田藍堂麥生會連續美展

四月二十二日—二十五日 福井・富士見堂畫廊

上野山清貢「鶴と富士」油繪展覽會

四月二十二日—二十六日 敷寄屋橋・日動畫廊

昨年北海道釧路原野に於て寫生した野生の丹頂鶴の作品を主として展觀した。

藤田鶴夫、下郷羊雄近作洋畫展

四月二十二日—二十六日 名古屋・丸善越佐工藝美術會第二回展覽會

四月二十二日—三十日 東京府美術館新潟縣出身の工藝作家に依り組織される同會の

第二回展で、郷土工藝誘發の爲、今回からは新潟縣工藝協會中の作家の應募作品をも加へることとなつた。鑄金、彫金、鍍金、鍛金、漆工、木工を含み、會員作品八十一點、應募作品二十七點を陳列した。

木村百木日本畫個展

四月二十三日—二十五日 銀座・越後屋ビル

河井寛次郎陶硯百種展覽會

四月二十三日—二十七日 日本橋・高島屋
昨冬以來没頭製作しつゝある陶硯百餘點に、併せて墨置、筆立、水入等文房具約百點を陳列展觀した。

石嶺彫刻關西第一回展

四月二十三日—二十九日 大阪・松坂屋

第一回里南會洋畫展

四月二十四日—二十八日 銀座・三味堂

大村廣陽日本畫展

四月二十四日—三十日 大阪・阪急百貨店

光風會第二十三回展覽會 (洋畫)

四月二十四日—五月十日 東京府美術館

所謂舊帝展系の洋畫團體として古い歴史と多くの會員を有する代表的な會の一つで、概して穩健中庸の作風を示すものであるが、昨年の改組以來反帝展を主張し、今回は所謂在野的意識に立つて開いた。其の故のみでもあるまいが、全體にかなり努力の跡が見られ、殊に近年の現象として、新進作家達の間に先輩會員達の畫風に追隨せず、新時代的な感覺技巧を示す潑刺たる氣風が一層顯著に見え、相當優れた作品を示す者の多いことは此の會に生氣を與へた觀があつた。

今年は搬入數も著しく増加を示し左の如き數字を示した。

搬入數四、二四三點、入選數二七一點

陳列數 繪畫三四二點、圖案二三點

授賞

(光風特賞) 脇田和、伊勢正義(光風賞) 藤岡俊一郎 (F氏獎勵賞) 須田剋太、岩船修吉 (K夫人賞) 和田裕介、土佐林豊夫 (レイトン賞) 山中清一郎 (三星賞) 本儀信、名柄正之 (船岡賞) 反町博彦、田村一男 (N夫人賞) 數見定一 (ローヤル賞) 櫻井善郎

會友推薦

石川滋彦、今村俊夫、井手坊也、伊藤悌三、橋口康雄、川端實、田中實一、朝井閑右衛門 南政善

東風社第六回展 (日本畫)

四月二十五日、二十六日 本郷・國醇堂

九元社第二回小品展覽會 (彫刻)

四月二十五日—二十九日 銀座・資生堂
昭和二年から六年までに東京美術學校木彫科を卒業した有志の團體で、會員の作品二十點を展觀した。

桐華社第一回日本畫展

四月二十五日—二十九日 大阪・三越

小室翠雲第二回個人展覽會

四月二十五日—三十日 日本橋・三越

最近箱根に在つて自然に親んでゐる作者が、新作品二十點許りを第二回個展として展觀した。

「こゝ一、二年來、奔放自在の筆を收めて、精密巧緻に赴いた氏の作畫態度には賛意を表することが出来る。その結果として『丹心』『形雲』をはじめ畫格に多分の落ち着きを増してゐる。『青雲』は最も努力した作と見られるが飛翔する鳥の描法が克明に過ぎて畫面を壞してゐる嫌があるやうだ。」(東朝)

牧野義雄在英作品展覽會

四月二十五日—三十日 日本橋・三越

滯英四十年、ロンドンに於て畫家として活躍してゐた作者の恵まれざる老後の爲に、重光葵、森村市左衛門、野口米次郎の三氏が作品をロンドンより取寄せて開催したもので、多く霧を主題とした油繪風景畫四十五點を陳列展觀した。其の英國風の印象派的技巧はさすがにしつかりしたものがあるが、同時に英國油繪の缺點を含んで潤ひに乏しく平板な憾がある。日本版畫を思ひ出させる構圖や、霧中にかすむ樹木の描寫等に日本的なものを想はせるものがあつた。『ピカデリー』、『ロンドン塔其ノ一』、『點燈前の夕暮』等は佳品であつた。

第二回關西水彩畫協會展

四月二十五日—三十日 大阪・三角堂

第六回獨立美術展覽會(洋畫)

四月二十五日—五月十四日 東京府美術館

洋畫界の急進的な運動を代表する獨立展も六回を重ねるに至り、昨年來の美術界の紛争とは没交渉で純粹に在野的意識の下に活動を續け、よく其の面目を發揮して陳列四百點を超える盛な展覽會を開いた。此の會は新時代藝術の創造を目指してゐるだけに、潑刺とした生氣を示すと共に常に未完成であることを特色とするが、新藝術と云ふだけで一定の傾向を主張せぬ爲に、其の内容は様々な要素の混合を示して一種の亂雜さを免れない。

其の中でも歐洲の新興運動に多く影響されつゝ、全體的には種々な勢力の變遷を示しつゝ、あることが見られる。創立の當初全盛であつたフォーヴィズム摸倣は漸く下火となり、近年興りつゝあつた新日本主義も多くの成果に達したと見られず、今年は所謂前衛派的な作品が多く現はれて來た。

會員等の作品は出來不出來はあるにせよ概して各人の途を夫々進めつゝあることが見られるが、一般出品の中には依然新奇を衒ひ、形式に腐心するのみで、表現に必然性を缺いたものが多く、又藝術作品として世に問ふには餘りに一時的な試みや思ひ付きに過ぎぬ未成品が多い。

第一室では、妹尾正彦の諸作が異彩を放つてゐた。中では「春の窓」「平和なる風景」が優れてゐる。第二室の鈴木保徳の滿洲に題材を取つた「國都建設」其の他はミニユメンタルな美を出さうと

して相當の成果を收め、松島鷹子の「山手風景」は鋭さも深さも足らぬが現代的な感覺で描いて効果の華かな面白い作である。里見勝藏の「富士櫻」は富士の美は現れず、富士を描かうとしたとすれば失敗であらう。松島一郎の横濱を描いた「港」と果物を賣る二人のフランス娘を描いた「果物と女」とは共に力作であるが、把み所の纏まりが缺けてゐるやうである。

第三室には林武の滯歐作品十五點が陳列され、熱心な勉強の跡を示した。デフォルマシオンもよく對象を把握して効果を收めてゐる。

第四室、中村節也の諸作は所謂日本趣味のもので、華麗な色文様風に描かれてゐるが、洗練を缺き且つ低俗調を免れない。小島善太郎の風景三點は作者が舊に還つた様な、寫實的で同時に平凡な作風を示した。

第五室には兒島善三郎の風景三點が見られた。作者の日本主義の新畫風も熟して一家の作風を成し、美しい諧調を示してゐる。田中行一の「バラソル」は面白い量の構成である。

第六室、野口の「ギリシヤ印象」はミニユメンタルな構成を試みて成功せず、作者の特長の現れた瀟灑な「秋の庭」を取る。曾宮一念の「冬海」二點は面白い作品であつた。小林和作は今年は出來が惡く、小品「椿」の方がよい。

第七室には前衛派の作品が多く集められた。其の中で福澤一郎の活動が目立つてゐる。第八室の川口軌外の作品は何れも華麗である。「白蓮」には日本風のロマンテイクが多分に含まれ、「浴女」は

之に對して幾分洋風のそれである。

第九室の須田國太郎は技法の確かさを示してゐる。第十室には海老原喜之助が獨自の感覺と詩を盛つた三點を出品した。「蹄」「藝」何れも優れたものを見せてゐる。第十二室、中山巍の作では、「夏所見」を取る。大作の「砂丘」は昨年の作に及ばず、構圖も少しごたごたした。林重義は苦心をしてゐるが結果は感興の乏しいものになつた。

搬入數三四九六 入選數三一九 陳列總數四〇四點。

新會員 中村節也、松島一郎

新會友 飯田操朗、今西中通、大野五郎、中間

冊夫、浦久保義信、上田清一、熊谷登久平、

藤岡一、齋藤長三、菊池精二、三岸節子。(本年から會友制を設けた。)

推薦 飯田操朗、浦久保義信

授賞 (獨立賞) 中間冊夫、(海南賞) 森有材、水

野佳一、(D賞) 森芳雄

出品目錄

並木	中島英砂緒	風景	佐藤 英男
夜	萬城 信郎	アツシジ風景	同
男女	坪内節太郎	七夕	同
西公園風景	不滅 正彦	風景	熊谷登久平
海の人物	中間 冊夫	雲雀	同
漁夫三人	同	鴉	同
丘上	同	干魚ト屋根	同
魚ノ貝・花卉	妹尾 正彦	庭ノ静物	同
春ノ窓	同	鏡ノ前	同
夏(ダイヴィンク)	同	静物	同
平和ナル風景	同	静物	同
花束の少女	同	風	同
			今西 中道

美術展覽會（四月）

眞珠	今西 中道	ロバンソン風景	竹中 三郎	一刻	齋藤 長三	晴日	森 芳雄	海邊の静物	米倉 壽仁	緑の作業服	老 健一
異國の子	大野 五郎	横る女	林 武	曲馬	同	廣告塔	同	岬	六條 篤	ぼたん・木蓮・風景	足達 襄
女二人	同	ニース	同	海	同	ローマ郊外	同	コムボザシオン	岡部 義朗	龍神ヶ岡	小川 謙
枯木のある風景	神津 隆一	オランダの娘	同	銀嶺	同	春	久保田久一	解剖	菊地 精二	新の浦風景	石田 英吉
海	林 豊	コソフユーズ	同	レストラン	同	海邊	同	タノスベ	同	芭蕉	森 有材
港	吉田 穂	立てる裸婦	同	静物	田中安太郎	犬と男	長島 常吉	雪	飯田 操朗	力塊	同
海邊群像	富樫 寅平	シニールモラン	同	壁	鈴木 昌枝	支那街・市	同	作品A	同	早春	故池田 實
ピアノ演奏	伊藤 彌太	スペインの老女	同	窓邊春雪	飯田 張	雷門	佐野 健治	同B	同	風景	井上 孟
庭隅	板持 龍介	黄衣	同	梅の丘	高田 逸治	井戸のある風景	森竹 五郎	同C	同	風景	同
人物	松島 磨子	椅子による裸婦	同	南國梅日	小島善太郎	郊外	高橋 弘二	同D	同	同上上の景	津田 稔
山手風景	同	アツシジ	同	早春麗日	同	波の群	内本 寛一	作品A	阿部 芳文	枯木のある風景	同
國都建設（瀟湘）	鈴木 保徳	踊子	同	庭	關口 誠	作品	葛目 榮	同B	同	島風景	小山 昇
狼の檻を見る	同	カテドラル・ド・シヤルトル	同	風景	鐵指 公藏	秋の庭	野口彌太郎	静物（母性的果實）	土屋 幸夫	窓ぎわ	中川 光延
婦人達（瀟湘）	同	裸婦	同	静物	山田 榮二	雪景	同	記録	落飼 重明	観葉植物	檜地 康國
公園建設（新京）	同	裸婦	同	太陽に照らさ	同	黄色な木	渡邊健太郎	自畫像	三崎 孝雄	静物（石膏）	大垣 泰治
横たはれる瀟湘の土人	同	ボーランドの女	同	初夏	大内のぶ子	慶屋	後藤 幸造	ベルト	武藤 忠	海岸	同
少年	國松のぼる	風景（月夜）	江淵 善仁	雑草	同	室内静物	古川 陽子	殘像	淺田 欣三	生島 覺	同
殘雪	服部 木爾	海邊の花束	寺田 政明	松林	同	冬の海（仁科）	曾宮 一念	花束のある部屋	川路美砂子	金鶏	同
畑	岡部文之助	海邊の植物	同	雲仙風景	高見 寛	同（波太）	同	静物	小川マリ子	橋向きのボアツ	渡部 徹
肖像	里見 勝蔵	戦捷譚	三崎 六郎	雪嶺	山村 猛猪	風景	安孫子眞人	作品	大塚 耕二	植輪静物	同
富士・櫻	同	城影（白鷺城）	森 勘三郎	黒きとばりに覆れて	文挾 勝	風景	西浦 宣夫	月と雲	田邊 富治	樺果	同
荒磯	同	乙女椿	明石 友次	岩と松	同	二人	水島 圭一	歩兵	福澤 一郎	窓邊	同
女	同	風景	樋口 加六	瀬戸の風景	同	座裸婦	同	人	同	あひる	同
温室	北川 正一	セロと人	同	初夏の池	同	こぶしの花	榎本 友子	牛	同	海に生く	同
風景	青木 利近	伊豆風景	中原 清隆	風景	同	山上	小林 和作	雪山（噴風二）	同	氷上漁業	同
立てる女	小出 三郎	湯の山	菅野 奎介	風景	同	樺	同	泉	同	雨に暮るゝ	同
港	松島 一郎	牛乳	諏訪 邦一	風景	木島 眞二	同	同	同	同	工場地帯	同
果物と女	同	殘雪桑園	三好 正雄	二人の女	片桐 英郎	同	同	同	同	同	同
木々の眺め	同	雪山	齋藤 紅一	葉牡丹	峰村リツ子	同	同	同	同	同	同
噴水	今井 憲一	山麓	中村 鐵	雪と樹木	鯨津 政男	同	同	同	同	同	同
菊花などの静物	志村 計介	花卉水庭	中村 節也	バラソル	李田たけを	同	同	同	同	同	同
弘明寺町風景	同	千潮	同	仕事場	同	同	同	同	同	同	同
根府川風景	江口 秋彦	冬山	同	同	同	同	同	同	同	同	同
果物屋	竹中 三郎	畑中の梅	無羅田正健	同	同	同	同	同	同	同	同
ヴァイラ	同	日出入石門	廣田傳左衛門	同	同	同	同	同	同	同	同
マルケンの漁婦	同	斷髮少女	宇津木照子	日時計	森 芳雄	桃	笠井 隆吉	同	同	同	同

風景	久代 敏貴	松林の丘	牧野 静夫	静物	葛見安治郎	瀧の見える風景	内田 梅吉	海景	池田 治夫	樂園	井上長三郎
アネモネ	直村のぶ子	明暗三裸婦	北島 昇	窓	中尾 彰	廢屋	岡村 芳男	雁來紅と娘	寺坂 正信	鐵屑	多賀 延夫
溝	田村 一二	花廊	静 君子	花と木のある風景	吉村 勇	川に浴ぶ村	東 清司	店	折田 勉	天文臺	田中 一郎
ブルーの見える	島田 正次	公園のポート	重見 末造	ひまわり	垣内佳太郎	庭具	櫻井 政雄	無題	野村 章三	風景	末永 風生
風景	同	松林曇日	水野 義正	巨根	岩月 清	卓上静物	山口 義朗	アブストラク	藤岡 一	寄生木	大町 一三
高臺寺風景	山下 嘉藏	鷗	團 勇二	梅林	高原 政孝	獸果圖	新羅 笙介	誕生	同	まどべ	高橋 勉
カンナの花	島津 俊一	丘陵の一部	神保つとむ	葦	赤星 孝	樹木とオート	湯川 尙文	アブストラクシオン同	境野 一之	旅順風景	長尾 照子
デパート風景	今竹 七郎	花鳥	須永 静策	風景	同	静物	西村健次郎	邊境の設計	山崎 隆夫	大連電氣遊園	市村 力
浮島	安田 謙	かに	宇根元 警	静物	永井 宏	極樂院	三水 公平	窓	吉井 忠	ライオン	同
遊泳	原田 潤	木立	奈知安太郎	足場のある風景	青木喜太郎	菊	猪俣 太郎	青年	山本 正	カキ	同
陽と馬	清水 鍊徳	深山	同	倉庫のある風景	加藤 陽	花	内尾 雅惠	海邊風景	武智 肇	崖	山道 榮助
風景	三岸 節子	雪景	松原 武雄	風景	矢崎 牧廣	早春	神谷 嘉和	屠場	井上長三郎		水谷榮之助
室内	同	テゴのある風景	野中寅太郎	夏所見	同	花とオートム	坂本 善三				
夜	同	姉妹	佐川 敏子	砂丘	同	白日	金谷 義敏				
風景温室村	常安 静人	夜の裸婦	同	砂丘	同	訪問	木村 孝三				
陽炎	堀之内一誠	鳥魚	清水 登之	エンヂニアM君	三橋 健	ラバシカを着た女	橋本 春光				
本牧風景	若林 和夫	救鳥蒙古人	同	オタスの印象	齋藤 求	尾道風景	太田 亘				
外人墓地ノ見	同	叢	同	窓邊の静物	廣田 重雄	草	土岐 流司				
エル風景	同	高山・女・馬	同	桐畑	加納 辰夫	嚴	廣田 方一				
風景	同	スナガリ(松花江)印象	齋田 武夫	砂田	上田 清一	森と葎による作品	矢橋 尙武				
跡	同	新緑と白壁	鎌田 功治	田園	同	日食と静物	浮島 弘行				
藝	同	サボテンのある風景	鎌田 知治	風景	同	フットボール	豊藤 勇				
熱帯植物	同	泉布館風景	河野 重軌	飛彈の山	龜井 貞雄	田園風景	松崎 眞一				
室内人物	同	猿と踊り子	鈴木 亞夫	雪景	西村 清	室内	荒井 彰子				
海濱	同	牡丹	同	静物	江川 平三	霜枯れの池	同				
静物	同	伊藤 康	同	風景	植田 俊夫	人物	廣江ミチ子				
群衆	同	本多 京	同	風景	林 重義	水運び	田中佐一郎				
女と子供	同	宗像 逸郎	同	風景	同	女達	幸 壽				
林	同	石井 國義	同	風景	同	馬尾と廢花	村田 健治				
新道	同	鈴木 清	同	風景	同	鐵板とアルミ ニューム層	榎本 省吾				
樹木と廢屋	同	浦久保義信	同	風景	同	風景	野村 正二				
夜櫻	同	花	同	風景	同	女と静物					
月の出	同	窓外風景	同	風景	同						
壁	同	住宅地	同	風景	同						
風景	同	女とひとで	同	風景	同						
窓雪裸女	同	女とひとで	同	風景	同						

美術展覽會 (四月)

美濃社第四回展

四月二十六日—二十九日 岐阜・柳ヶ瀬百貨店

第二回くろも洋畫展

四月二十六日—三十日 銀座・紀伊國屋

青丹會洋畫展

四月二十六日—三十日 銀座・青樹社

山崎省三洋畫個展

四月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

クロツキー研究所員第六回作品展

四月二十七日—二十九日 銀座・伊東屋

小松均日本畫個展

四月二十七日—二十九日、名古屋・丸善

國畫會關西展

四月二十七日—五月五日 大阪・朝日會館

獨立作家小品展 (洋畫)

四月二十八日—三十日 神戸畫廊

聊娛會第十二回展覽會(洋畫)

四月二十九日—五月二日 新宿・伊勢丹

OB D 洋畫小品展

四月二十九日—五月三日 大阪畫廊

踏青會第二回日本畫展

四月二十九日—五月五日 日本橋・高島屋

高島屋の主催に依り東西十三名の作家を集めた會で、其の第二回を開いた。村上華岳、小杉放庵の出品が無く、陳列は左の十一點であつたが、鑑賞には好ましいすつきりした感を與へた。富田溪仙の「萬葉の花」は帝展出品作の副産物と見るべく、それよりも寫實的に又自由に描いてゐた。小林古徑は「鳩」を描いて宋畫の透徹せる寫實と競つてゐるが相當に成功を見せ、鍋木清方の「ほととぎす」は清楚な佳品、前田青邨の「白鷺」は洗煉された技巧で空高く舞ひ上る三羽の鷺を描いて構圖の面白いものであつた。大智勝觀の「海風」は作者近來の出來として評判がよかつた。

丹頂鶴	柳原紫峰	街道の春	橋田大觀
ほととぎす	鍋木清方	華會	安田靉彦
海風	大智勝觀	鷺	小林古徑
綠雨	小川芋錢	白鷺	前田青邨
投網歸路	矢野橋村	菖蒲	福田平八郎
萬葉の花	富田溪仙		

壽山鈴木節哉老師第三回作畫展(日本畫)

四月二十九日—五月四日 日本橋・白木屋

端午繪小品展

四月二十九日—五月五日 新宿・三越

第九回上杜會展覽會(洋畫)

四月二十九日—五月六日 東京府美術館

上杜會は昭和二年東京美術學校卒業同級生の會であるが、九年を経過して次第に育ち、會員の中に夫々の境地を拓きつゝある優れた作家を含んでゐるので、此の種の會としては興味深き内容を示してゐる。會員の作品百八十三點を陳列した中で特に優れた技術を示してゐるのは小磯良平、猪熊弦一郎、水彩畫の中西利雄である。小品であるが小磯の「石切場A」「着物の女」の洗練された寫實的技巧は、幾分アカデミックな乾燥さがあるとは云へ、賞讃に價するであらう。其の他に小堀四郎、高橋弘二、牛島憲之、加山四郎等の諸作が注意された。

五月

九名會第二十四回展(日本畫)

五月一日 京都・八坂俱樂部

圖案人聯盟作品展

五月一日、二日 京都美術館

イタリー・マーブル彫刻展

五月一日、二日 銀座・共同ビル

河村喜太郎作陶展

五月一日—三日 御影公會堂

第一回芳美會繪畫展覽會(日本畫)

五月一日—三日 東京美術俱樂部

芳美堂の主催する展觀で東西諸家の作品約七十點を陳列、富田溪仙、小川芋錢、川合玉堂、横山大觀、竹内栖鳳、安田靉彦、小杉放庵、前田青邨、小林古徑等それぞれ佳作を寄せてゐた。伊東深水

六點、小杉放庵七點、近藤浩一路十點、小室翠雲四點等を出品してゐるのも此の種の展觀として珍しかつた。

五條會第五回作陶展覽會

五月一日—三日 京都美術館

府、市、商工會議所後援の下に開催、出品七十餘點の中霜鳥正三郎、清水六兵衛の審査に依り左の如く授賞を定めた。

第一席 新開邦太郎、第二席 米澤蘇峰、第三席 寺池旬妹

彩虹會展(洋畫)

五月一日—四日 神田・東京堂

野人社洋畫展

五月一日—四日 神戸・十合

第四回東臺會美術展(綜合)

五月一日—四日 奈良會館

奈良在住東京美術學校出身者の會で洋畫、日本畫、彫刻、工藝に互り、十八名の會員作品約八十點を陳列した。

第一回啞地社展覽會(洋畫)

五月一日—五日 銀座・紀伊國屋

黑田重太郎洋畫個展

五月一日—五日 銀座・三味堂

作者の第二回個展で近作二十二點を陳列した。

安宅安五郎油繪個展

五月一日—五日 數寄屋橋・日動畫廊

北朱樵書畫工藝作品展

五月一日—五日 銀座・三越

第七回石山太柏個人展覽會(日本畫)

五月一日—五日 銀座・伊東屋

近作三十三點を展觀した。

渡邊明第二同家具創作展覽會

五月一日—五日 銀座・資生堂

更彩閣開設記念新作畫展

五月一日—五日 神戸・更彩閣

第二回煌土社展覽會(日本畫)

五月一日—七日 日本橋・白木屋

野田九浦畫塾の展覽會で、妓生を描いた九浦の

「河霞玉」外三十一點を陳列した。

新作趣味陶器の會

五月一日—七日 日本橋・高島屋

淺見五郎介、安兵衛、隆三の三兄弟の新作陶器

二百餘點を陳列した。

第四回華陽會彫塑展

五月一日—七日 銀座・三越

東邦彫塑院會員後藤良門下の塾展で、彼の作「義

家公像」外六十餘點を陳列した。

橋本邦助洋畫個展

五月一日—七日 大阪・美術新論社畫廊

現代大家洋畫綜合展

五月一日—七日 大阪・十合

各會派に互つて主要作家三十七名の作品を蒐めて陳列した。

日本美術協會第百回記念綜合展覽會

五月一日—二十日 上野・同協會

協會展第百回記念として繪畫、書、篆刻、彫刻寫眞、工藝品の各部綜合を以つて開催した。陳列點數繪畫七十七、書百、篆刻四十一、彫刻三十五、寫眞十一、工藝品百十九、合計三百八十三點、受賞者は左の通りであつた。

二等賞(銀牌)六名

第一部(繪畫)

蘇州双塔寺古塔 佐々木 永秀

第二部(書、篆刻)

五言律詩 山本 紫雲

賀の歌 熊谷 恆子

刻印歌 阪井 吳城

第三部(彫刻)

春の丘に 須賀 東三

第八部(陶磁、七寶、玻璃)

硝子魚文飾皿 各務 鑛三

三等賞(銅牌)二十五名

第一部(繪畫) 石川美峯、川村松溪、恩田得壽

第二部(書、篆刻) 野田蘭洞、中村旭坡、和田山蘭、千賀椿山、岩松綠山

第三部(彫刻) 榎山三穀、紺谷英儀、三木貞雄

第五部(玉石竹牙介甲彫品、木象嵌) 神山寛暢

第六部(彫金、鎚起、鎚金) 府川一信、鈴木春成

第七部(鑄金、鍛金) 會田富康、林萬壽人、加藤忠三郎

第八部(陶磁、七寶、玻璃) 小川雄平、竹内蘭山、安原喜明

第九部(漆器、蒔繪) 辻喜一郎、藤岡保子

第十一部(寫眞、製版) 宮内良雄、近藤白鹿伊藤孝人

褒賞 三十七名

帝國美術院第一回展覽會大阪陳列會

五月一日—二十日 大阪市美術館

大阪市立美術館落成を記念して、第一回新帝展を、京都陳列會終了後大阪に將來開催した。陳列品は京都の場合より稍多く、日本畫二百一十一點、彫刻十九點、工藝二百三點であつた。

近藤七郎洋畫遺作展

五月二日、三日 小石川・近藤邸

本年二月急逝した近藤七郎の遺作六十二點を同家畫室其の他に陳列展觀した。

尙美會第一回展(工藝)

五月二日—七日 日本橋・白木屋

加藤硯一日本畫展

五月三日、四日 名古屋美術俱樂部

五月會第五回洋畫展覽會

五月三日—七日 銀座・青樹社

陶磁器展覽會

五月三日—七日 福岡縣產業獎勵館

第五回日本版畫協會展覽會

五月三日—十四日 東京府美術館

版畫の代表的團體たる同會の本年度展覽會で、會員三十三名の作品の外一般入選作品を蒐め、種目は木版がやはり大部分を占めるが、外に石版、銅版、木口木版、石刻、リノリウム版をも含んで二百三十七點を陳列、尙其の他に故村山靚光遺作と版畫工藝品とを特別陳列した。中では川西英の諸作、平塚運一の「椿」等が特に優れてゐた。川西英は稚拙味を有しつゝ、要領の好い表現を示し、中でも神戸風景を描いた「支那兩替店」「瓦せんべいや」は佳作であつた。川上澄生のジャンル十點も

面白く、畦地梅太郎の小品「静物」は愛すべき佳品、外に特筆すべきものとしては石井鶴三の「雨中競走」があつた。協會賞の小野忠重の作品は人生の諸相を突込んで表現してゐる點はよいが陰惨な方面にのみ鋭いものであつた。

日本版畫協會賞 小野忠重、栗山茂

大野麥風新作魚類畫展

五月五日—八日 神戸畫廊

丹阿彌岩吉日本畫個展

五月五日—十一日 日本橋・白木屋

石鹼彫刻展

五月五日—十一日 福岡日日新聞社

小山街頭展（洋畫）

五月五日—十二日 荏原區小山銀座

新宿ブロムナード美術展（洋畫）

五月五日—十四日 新宿・諸喫茶店

大久保作次郎、藤田嗣治、木村莊八、東郷青兒、小糸源太郎、林武其の他洋畫家の作品百點を、不二屋、モナミ、中村屋等十軒の喫茶店内に分けて陳列した。

第四回東北美術展覽會（日本畫、洋畫）

五月五日—十四日 宮城縣商工獎勵館

宮城縣及び河北新聞社の主催に係り、日本畫及洋畫の二部に分け一般出品を公募して開催、鑑審査には第一部中村岳陵、第二部安井曾太郎、中野和高が當つた。陳列點數日本畫二十九、洋畫九十一、其中審査員出品の外、木下春、伊東深水、鈴木千久馬、兒島善三郎、石井柏亭、山下新太郎、岡田三郎助、梅原龍三郎、牧野虎雄、故青山熊治、俗伊之助、小山敬三の贊助出品があつた。

河北特選賞 佐々しけ子、岩城照夫、千葉明、

中林壽雄

伊達伯賞 相澤輝治、菅井庄五郎

獨立美術協會會員小品展

五月六日—十日 銀座・三味堂

日本木彫會展

五月六日—十四日 大阪・朝日會館

九阜會第二回展（日本畫）

五月七日—九日 日本橋・東美俱樂部

關尚美堂の主催する會の第二回展である。

「次時代のチャンピオン」十一氏の集團であるが、山口華楊、徳岡神泉、溝上遊龜三氏の出品を見ないことは遺憾である。出品作品中、奥村土牛氏の「餌」、「鳥賊」の二點は斷然他を引離したもので、「餌」は鳥骨鳥を描き近頃例を見ぬ絶品である。「鳥賊」も出来榮よく土牛の前途洋々たるを約束出来るものだ。太田聰雨氏の「星嚴の妻」も調子高いもので、吉岡堅二氏は悪い意味の洋畫調子を脱し、寺島紫明氏は三點中「朝霧」最もよく賣女のみだらな朝姿を扱つて作者の鋭さを示してゐる。人物を描いて邦畫壇の一異材である。（讀賣）

小柴錦侍洋畫個展

五月七日—九日 丸ノ内・日本工業俱樂部

山田新一洋畫個展

五月七日—九日 京城・三越

ジャワけてもの展

五月七日—十日 銀座・松屋

正眞堂洋畫展

五月七日—十一日 銀座・資生堂

正眞堂の主催で、洋畫家十八名の近作を展觀した。

二科小品展（洋畫、彫刻）

五月七日—十三日 名古屋・丸善

朝鮮二科展（洋畫、彫刻）

五月七日—十三日 京城・商工獎勵館

青年創作副業展（工藝）

五月七日—十七日 新宿・伊勢丹

第一回岡崎商業美術展覽會

五月八日—十日 岡崎市・中央公會堂

岡崎市主催で愛知商業美術協會及び岡崎支部會員製作の商業美術ボスター四十七點の外陶磁、硝子、金工、漆器、七寶入木製品、染織品等を陳列した。

愛知縣輸出工藝試作品展覽會

五月八日—十日 岡崎市・中央公會堂

同縣工藝協會から出品の輸出向工藝品百數十點を展觀した。

未知會第三回洋畫展

五月八日—十一日 銀座・紀伊國屋

第十四回新燈社美術展覽會（日本畫、洋畫）

五月八日—十五日 東京府美術館

青木大乗を主宰として新日本畫運動をなしつつ、ある新燈社第十四回大阪展は三月開催したが、茲に其の東京展を開いた。

「積極性には乏しいが、時流を追はずに超然として、郷土的な風景や靜物を描いてゐるので全體的に素直な感じである。油繪も日本畫も一樣に印象主義的なアトモスフェールの中に和やかな空氣や情趣を出さうとしてゐるやうだ。青木大乗君の新日本畫は、寫實と詩の調和をねらつたもので、相當畫品もある。壺の花など一寸ルドンを想はせる美しさがあり、風景も多少弱い感じがでないが靜和である。同人級では山田兵一、北村種三兩君の長閑な畫境がいい。レアリスチックな

傾向としては、北村泰山君の鯉の圖三點ががちり描いてある。」(東朝)

搬入數 五六七點、入選數四六點(二八名)
陳列總數 九八點(内青木大乗新日本畫特別陳列一七點)

新彫塑協會第一回展覽會

五月八日—十九日 東京府美術館

昭和十年二科彫塑部から分れた會友出品者等に依り結成された團體で、公募による第一回展を開いた。大部分は會員の作品で陳列數三十五點。何れも眞面目に製作してゐることが認められるが、技術的には未だ満足し得る作品が少い様であつた。中で菊池一男の諸作は一貫したリズムを有つて居て注意されるものであつた。外に特別陳列としてドイツ大使夫人所藏の同國現代彫刻家ゲオルグ・コルベの作品八點、素描五枚及び近作寫眞十二枚を展覧紹介したことは甚だ有意義であつた。コルベは現在歐洲に於ても有數の大家で、其のリズムは獨特の作風は我が彫塑界に教へる所が多いであらう。出陳作は「若き女」立像一點の外は總て小品であるが、頗る「若き女」「死の舞踏」等此の作家の特長を示す佳品であつた。

工畫會圖案展

五月九日 京都美術館

相潮社洋畫展

五月九日—十一日 鎌倉第一小學校講堂

小松益喜都會風景洋畫展

五月九日—十一日 神戸畫廊

日本壁畫會第一回展覽會

五月九日—十三日 銀座・青樹社

美術展覽會(五月)

昨秋結成された壁畫研究團體の第一回展で、大内青圃、大内青坡、安田豊、井上三綱、大井基光、布施信太郎、武野貞俊、安藤信哉等の同人が各々數點の作品を示した。大内青圃の佛傳を描く中村屋の壁畫下圖は日本風建築の壁畫として面白く見られたが、概して壁畫の性質から見て未だ成功と云ひ難い作品が多い様であつた。

第八回工人社展(金工)

五月九日—十三日 日本橋・高島屋

建築學會五十周年記念展

五月九日—十三日 大阪・十合及朝日ビル

川端龍子大阪個展

五月九日—十三日 大阪・高島屋

作者の大阪に於ける第三回個展で、長幅、横幀を併せて、二十點の近作を展覧した。

園部晋洋畫個展

五月九日—十三日 大阪・美術新論社畫廊

茨城工藝展

五月九日—十三日 水戸・茨城會館

村田丹下油繪展

五月九日—十四日 日本橋・三越

春陽會名古屋展

五月九日—十八日 名古屋・美術館

フロリダコツトクラブ壁畫展觀

五月十日西銀座・同俱樂部

寺田竹雄、野田英夫の製作である。

美工圖案院研究作品發表會

五月十日、十一日 京都美術館

第三部會彫刻展

五月十日—十三日 大阪・三越

第十八回朱葉會洋畫展

五月十日—十六日 日本橋・白木屋

下村觀山遺作展覽會

五月十日—二十四日 恩賜京都博物館

昭和五年五十八歳で逝いた下村觀山の遺作展覽會は、同六年日本美術院の主催に依つて東京で開かれたが、關西に於ては最初の企てとして今次の展觀が催された。出品總計百十五點、曾ての東京展の徹底的な蒐集には遙かに及ばないが、幼少時代から絶筆に至る迄の作品を年次を逐うて平均に蒐めて居り、中大正三年日本美術院再興以後の作品は五十餘點、下村家其の他に藏せられる下繪類は二十餘點を數へた。たゞ代表的作品と目せられるものの若干を逸したことは遺憾であつた。

戸田觀美堂新作畫展(日本畫)

五月十一日—十二日 日本橋・東美俱樂部

觀美堂主催で東西作家の作品約三十點を展覧した。

現代茶道展、名作茶器陳列會

五月十一日—十七日 上野・松坂屋

山陽美術展

五月十一日—二十六日 岡山城

一餅會第十三回展

五月十一日 上野・内山洗心堂

御幸會新古書畫展

五月十二日—十四日 新愛知新聞社講堂

岡本爲治作陶展

五月十二日—十四日 神戸畫廊

倉田白羊洋畫個展

五月十二日—十六日 銀座・三味堂

「一時失明を傳へられてゐたこの作家が、ここに近作數點を公開するやうになつたことは慶ばしい。山、柿の木、白壁、石垣などを巧に採り入れた平和な農村スケッチは田園畫家として倉田君得が最も意とするものだ。その外光による明暗の柔い調子も長閑な感じを與へる。油繪の他に色紙型の即興的日本畫をも描いてゐるが、これは半農生活に於ける一日の印象を文と繪にした畫冊である。なほまた今回は房州の漁村風景を扱つた何枚かの小品があつて、これも亦一寸趣がある。」

（東日）

薄田芳彦洋畫展

五月十二日—十六日 神田・東京堂

第二十三回商工省工藝品展

五月十三日—十九日 京都美術館

大垣美術協會第八回洋畫展

五月十四日—十六日 大垣市・青年會館

那智瀧子創作工藝品發表會

五月十四日—十八日 銀座・資生堂

其の製作する所は布帛、刺繡、木工、金工の諸部門に互り、是等の諸技術を駆使して、大はラヂオキャビネット、衛立の如き家具類より、小はナブキンリングの如きものに至る迄の諸種の調度品、及び衣類、草履、ハンドバッグ等の服飾品六十點餘余りを陳列した。専門家に見られない自由さがある。

第一回レ・リラ展（洋畫）

五月十四日—十八日 銀座・紀伊國屋

七彩會洋畫小品展

五月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

日本畫會

五月十四日—三十一日 東京府美術館

昭和十一年度同會展覽會で、入選作品五十六點、會員作品七十三點、合計百二十九點を陳列した。入選作品の中より左の通り授賞した。

中橋賞 宮部沙久彌

日本畫會賞 一等 池田輝治、二等 米田莞爾

三等 海老原南爽

方水社日本畫展

五月十五日—十七日 三重縣商工獎勵館別館

四工作派第二回展

五月十五日—十七日 大阪畫廊

岩松淳、笹子智江近作洋畫展

五月十五日—十八日 神戸畫廊

田中寅三第二回「船の油繪」展

五月十五日—十九日 銀座・青樹社

芹澤銈介、外村吉之介、柳悅孝新作展（染職）

五月十五日—十九日 銀座・たくみ工藝店

井上恆也日本畫個展

五月十五日—十九日 静岡・松坂屋

革丙會第十五回展覽會（日本畫）

五月十五日—二十日 日本橋・三越

陳列數二十二點、大和繪風の傳統を守つて歴史畫研究を目指してゐる此の會の主潮は例年の如くである。此の傾向に依つては困難なことと思はれるが、現代に生命ある歴史畫の創作として物足らぬ作品が多い。中で岩田豐磨の「竹生島」は大和繪の手法を用ひて寫實的に描いた風景畫で、試みを出でぬとは云へ面白く見られた。安田靫彦は今年の帝展出品作「役の優婆塞」と同じ題材を小品に描いて出品した。

葉隱美術協會第一回綜合展覽會

五月十五日—二十日 日本橋・高島屋

岡田三郎助を會長とし佐賀同郷の美術家に依つて新に創立された會の第一回展である。油繪は岡田三郎助の外、高木背水、武藤辰平、北島淺一、小代爲重等十五名の作品三十點、日本畫は池田幸太郎、野口謙次郎等八名十一點、彫塑及工藝では石田英一、古賀忠雄等五名二十九點が出陳された。

九阜會第二回日本畫展

五月十五日—二十一日 大阪・十合

平安名人會美術工藝品展

五月十五日—二十一日 大阪・十合

岩田藤七創作ガラス器展

五月十五日—二十一日 大阪・十合

大禮記念京都美術館所藏美術品展觀

五月十五日—三十一日 京都美術館

同館所藏の明治大正期を主とする繪畫彫刻等七十餘點を陳列展觀した。

圖案家協會展

五月十六日—十八日 京都美術館

新漫畫派集團展

五月十六日—十九日 銀座・伊東屋

第一回名古屋工藝品展覽會

五月十六日—十九日 名古屋商工會議所

名古屋市産業部、商工會議所、名古屋工藝協會主催で、純粹工藝品と一般商品的なものとの二部に分ち開催、審査は板谷波山、藤井達吉に依つて行はれた。出品は金工、木工、漆器、染織、七寶一閑張、陶磁等に互り、搬入作品九百三十八點のうち百七十七點を第一部入選とした。

ハラツバ第二回洋畫展

五月十六日—二十日 神田・東京堂
大國壽郎作釜の陳列會

五月十六日—二十三日 大阪・阪急百貨店
下野美術展

五月十六日—二十五日 下野新聞社
第十回全關西洋畫展

五月十六日—二十六日 大阪・朝日會館
全關西洋畫協會の催す公募展で、今年は十周年を迎へた。

「全關西洋畫展は、嚴選をモットーとされてゐるだけに、その内容の淘汰、充實の點で例年に比し大いに見るべきものがある。會員、伊谷賢藏氏の出品作二作中『畫架の前』は優れた出來榮を示し、堅實なるレアリズムの手法によりながらも、そのメチエの洗煉味と相まつて一抹の新味を發揚してゐる。鍋井克之氏の二點中『蘆の湖』は氏の本領を遺憾なく窺はしむる佳作であつて、その色感が醸す甘美なるポエジーは感性的にうつものがある。國枝金三氏も作品二點を出陳してゐるがいつものリリシズムに充てるもので殊に『山吹』は氏のさうした獨自の境地を示せる愛すべき作品である。中堅級では松本銳次、田村孝之介、伊藤繼郎、古家新の諸氏の作品がみられるが松本氏の『習作』は破綻なき技法を示し、伊藤氏の『三人の裸婦』は氏の特異なデフォルメと限定された色感の効果が相當面白くみられ、古家氏のはそのアンビシヤスな意圖を包藏せるかに思はれる。『朝の街景』は力作である。」

(小西生、大毎)

實在工藝美術會第一回展覽會

五月十六日—二十九日 東京府美術館

昨年の帝院改組以後工藝界に起つた新運動の一つとして、十一名の作家に依り十月結成された同會の活動は注目される所であつたが、茲に一般の

出品を公募して第一回展を開催した。工藝の總ての部門を綜合し、陳列も飾棚の中に陳べる在來の方法でなく、實用を指示する如き新工夫を以てし總數百九十二點、其の中には工藝指導所及び大阪府工業獎勵館の贊助出品をも含めて展觀した。同會の「實在」と名づける意は一般に解し難いが、其の主張する所は、今日の工藝の、特に帝展に見る如き傾向は兎角現代の實生活とかけ離れ、技術の爲の技術を追ふ弊があり、工藝の本質を誤るものが多い。所謂一品製作のみが藝術的價值あるものでなく、多量生産を目的とするものにも藝術的創意を用ひ、材料と構成とを合理的に生かして、現代生活の爲の合目的性を發揮すべきであると言ふにある。其の主張は決して耳新しいものではないが、相當の作家を集めてゐる同會が仕事の上で之を示さんとする運動は、當然我が工藝界に期待されてよいものであらう。今回の展覽會にも可成り明瞭に其の方向が現はれてゐたことは喜ばしいが、之を以て新時代工藝の指標たらしむるには未だ物足らぬ觀があつた。

搬入數七七八點、入選數一〇八點

實在工藝賞 清水巖、磯矢阿伎良

T夫人賞 芳武茂介

實在獎勵賞 多田茂吉、森省三、長谷川昇

山内多門遺作展覽會 (日本畫)

五月十七日—二十一日 東京府美術館

山内多門が昭和七年五十五歳を以て長逝してより五年、其の祭が営まれるに當つて門下の組織する若集會が主催し、此の遺作展覽會が開かれた。

大宮御所及び宮家御貸下品を初め諸家に藏せられる作品を蒐め、總て百十一點。外に山内家より寫生帖十數冊、絹本作品四點が出陳された。明治三十三年二十三歳の作「三顧草廬」を最初とし、五十四歳の絶筆「西湖春色」に至るまで、大體平均して殆ど毎年の作品を陳べ、明治三十四年第十一回繪畫共進會に三等褒狀を得た「鬪鷄」(二十四歳)を初め、第一回文展三等賞「驟雨之圖」(三十歳)其の他文展帝展出品等代表的作品の多くを集め、故人の畫業の全貌をほぼ窺はしむるに足りた。特筆すべきは大宮御所御藏の「御園の菊」金地御屏風六曲一双(四十歳)が思召に依つて特に御貸下けになり初めて世に示されたことで、之は大正天皇御即位記念に島津公爵家から皇后陛下に獻上の莊麗なる佳品であつた。尙秩父宮家よりは「鶴戸神苑」「高千穂峰」御額二面、久邇宮家よりは「獅子圖」御模四枚、の御貸下けがあつた。

第十五回朝鮮美術展覽會 (日、洋、彫、工)

五月十七日—六月六日 景福宮後庭會場

十五回を重ねるに至つた鮮展は一層其の内容の充實改善を圖る爲、總督府では諮問機關たる朝鮮美術展覽會評議員を從來の四名から十四名に増員し、官吏、學者、實業家等の中から美術に深い理解を持つ人々を任命した。今回の審査委員は東洋畫前田青邨、兒玉希望、西洋畫南薰造、安井會太郎、彫塑及工藝田邊孝次の五名で、鑑審査の成績は左の如くであつた。

第一部 東洋畫

出品數

一三八

入選數

六四

第二部 西洋畫 八六二 一五一

第三部 彫塑工藝 一五三 一〇九

合計 一、一五三 二九四

別に推薦及び無鑑査出品は第一部六、第二部

一四、第三部五、計二五點。

授賞

昌德宮賜賞 (第一部) 松田正雄、(第二部)

星野二彦、(第三部) 塚原庄太郎

朝鮮總督賞 (第一部) 金重鉉、堅山坦、(第

二部) 李仁星

特選 (第一部) 金重鉉、裴濂、安保道子、白潤

文、吳周煥、(第二部) 山下一彦、李仁星

星野二彦、沈亨求、長根翠、金重鉉、猪川

克己、李鳳商、(第三部) 張基命、鎌田縫子

塚原庄太郎、岩佐久代、土屋耕造、嚴孟云

戸張幸雄

表現同人展

五月十九日—二十一日 銀座・紀伊國屋

松島畫舫新作畫展 (日本畫)

五月十九日—二十一日 日本橋・東美俱樂部

兵庫縣美術家聯盟展

五月十九日—二十一日 神戸・大丸

里見公起日本畫展

五月十九日—二十一日 神戸畫廊

池田治三郎近作洋畫展

五月十九日—二十三日 大阪・三角堂

古家新洋畫小品展

五月十九日—二十三日 大阪・美術新論社

畫廊

ハンガリー展

五月十九日—二十四日 銀座・松坂屋

伊太利マール彫刻展

五月十九日—二十七日 上野・松坂屋

四〇會第三回展

五月二十日—二十三日 日本橋・高島屋

白嚙會油繪展

五月二十日—二十三日 銀座・資生堂

松尾松濤洋畫個展

五月二十日—二十三日 名古屋・商工會議所

七彩會洋畫展

五月二十日—二十四日 名古屋・丸善

山本鼎近作油繪展覽會

五月二十日—二十四日 數寄屋橋・日動畫

廊

風景及び花卉を主題とした油繪小品三十七點を

展觀した。

獨立美術大阪研究所展

五月二十日—二十四日 大阪・丹平ハウス

簀火工房第一回彫刻工藝小品展

五月二十日—二十七日 銀座・ラスキン文庫

北信五縣輸出工藝品展覽會

五月二十日—三十日 高岡市商品陳列所

出品は漆器二〇一、陶器五八、金屬製品三九、

木竹製品九一、織物布帛一一、雜工品四七、合計

四四七點。縣別にすれば、富山縣一五七(四九名)

石川縣八五(一〇名)、福井縣二九(一八名)、新

潟縣一二九(五〇名)、長野縣四七(一〇名)で、

國井喜太郎以下商工省特派の審査官が審査に當つ

た。

和歌山洋畫展

五月二十日—三十日 和歌山市公會堂

能勢洋畫藝第七回展

五月二十一日—二十三日 銀座・三味堂

大阪高島屋新作畫展

五月二十一日—二十三日 大阪長堀・高島

屋

横田仁郎滯歐作品展覽會

五月二十一日—二十四日 日本橋・三越

昨夏ベルギーに於ける國際美術教育會議を機と

して歐洲を巡遊製作した油繪風景小品百餘點を展

觀した。

早川尙古齋花籠陳列會

五月二十一日—二十四日 日本橋・三越

花籠三十點を陳列展觀した。

青年美術俱樂部第一回洋畫展

五月二十一日—二十四日 德島・一樂屋百貨

店

無現會第一回油繪展

五月二十一日—二十五日 銀座・青樹社

日本木彫會展覽會

五月二十一日—三十日 東京府美術館

日本木彫會では今春の帝展には會員の大多數は

出品せず、従つて本年は特に重要な發表機關とし

て同會展を開催、去る六日から十四日迄大阪展を

朝日會館に開いたが、其の東京に於ける展覽會で

會員作品に入選作品を併せ總數九十六點を陳列し

た。

新に研究贊助員となつた内藤伸は塑像の大作

「獅子」と小品「多聞天」を出品、其の他澤田晴

廣の「光明佛心」、三木宗策の「丹花綻ぶ」、佐々

木大樹の「無馬」、「座上」、中野桂樹の「朝露」、三國慶一の「歩み」、森野圓象の「ラゲビー」、阿井瑞岑の「俱梨伽羅三尊」、西村雅之の「人麿」等注意される作品であつた。

日本南畫院第十五回展覽會

五月二十一日—六月五日 東京府美術館
十七名の同人と數十名の院友とを有し、主宰小室翠雲が一人群を抜いてゐることは當然として、他にも相當の水準にある作家を多數擁してはゐるが、現代の南畫を代表するものと云ふには物足らぬ觀がある。陳列作品五十點、其の外に今年三月他界した故同人石川寒巖の遺作六點を陳列した。赤松雲嶺の「惜春」は好く描かれてゐるが細かい味に乏しく、平野長彦「仙源」は試みは面白いが稚氣に過ぎた。須網雨亭の「殘寒」は南畫の特質を發揮して陳套に陥らず寫實的な佳品である。水田竹圃の「寒庭一角」愛すべく、濱崎左髮子の「小猫の産れる頃」は南畫を以て現代の生活に突入した面白い作であつた。小室翠雲の「三技禮」はさすがに本格的な花鳥畫を示した。

搬入數四五七點、入選數二七點

山本大慈近作日本畫展

五月二十二日、二十三日 神戸畫廊

層雲二十五周年記念俳畫展

五月二十二日—二十四日 銀座・松坂屋

藤原恂一個展

五月二十二日—二十四日 吳商工會議所

フォルム展（洋畫）

五月二十二日—二十五日 銀座・紀伊國屋

美術展覽會（五月）

前田一鶯日本畫個展

五月二十三日 京都・含笑寺

五行會日本畫展

五月二十三日、二十四日 下關商工會議所

小林榮油繪個展

五月二十三日、二十四日 高田市・一三九銀行

岩松淳、笹子智江近作洋畫展

五月二十三日—二十五日 兵庫縣住吉村・觀音材俱樂部

京都彫塑研究所第一回試作展

五月二十三日—二十五日 京都美術館

松田尚之の指導する研究所の展觀で四十一點を陳列した。

陳列した。

第一回朔土會彫刻展

五月二十三日—二十六日 銀座・伊東屋

出口周慶木彫作品展

五月二十三日—二十七日 大阪・十合

元田龍起東京スケッチ油繪小品展

五月二十三日—二十七日 新宿・櫻製菓

日本美術學院記念展覽會（日本畫）

五月二十三日—二十七日 日本橋・高島屋

東西の主要作家十六名の新作各一點を陳列した「大觀の『春曉』」は珍しく寫意を盡した圓山四條派に別趣の高雅な味を盛つたもの、靱彦の『河原撫子』も別人の觀ある可愛い色彩に包まれた作品であつた。古徑の『老梅』はこの頃の傾向とは別に、しかも古雅な花瓣をついて暢達した筆であり、青邨の『應永の武士』は理窟抜きに同氏の作風の完成された佳品たることを喜ぶ。清方の『雪月花』三幅對は金鈴社當時の作を思ひ浮べるもので殊に月が好かつた。龍子は二點を出品してゐるが小品でも『臘梅』は樂に描いてゐるのが面白く、溪仙の『馬醉木と櫻』は謹直に描いてあつた。...

（報知）

三宅克己、石川欽一郎作品展（洋畫）

五月二十三日—三十一日 澁谷・東横百貨店

第一回伏虎美術協會展覽會（洋畫）

五月二十三日—三十一日 和歌山・商品陳列所

所

和歌山縣出身の洋畫家木下孝則、木下義謙、濱地清松、川口軌外、裕伊之助、國部邦香の六名を會員とし、同縣下洋畫獎勵の爲新に組織された會の公募展で、應募作品二百七十五點の中八十三點を入選とした。

藤瀬冠村近作日本畫展

五月二十四日 福岡日々新聞社

大阪女流畫家作品展（日本畫）

五月二十四日—二十九日 大阪・三越

土陽美術展（綜合）

五月二十四日—三十一日 高知市・縣公會堂

大阪産業工藝博覽會

五月二十四日—六月十三日 大阪府立貿易館

商工省後援、大阪府、市商工會議所、府立工業懇話會、府工藝協會聯合主催。

澤村玉翠紋作品展

五月二十五日 京都・六角會館

小林茂洋畫個展

五月二十五日—二十七日 新宿・森永

森達雄洋畫個人展覽會

五月二十五日—二十九日 銀座・資生堂

田邊至洋畫個展

五月二十五日—二十九日 銀座・資生堂

五月 十五日—三十日 大阪・美術新論社
畫廊

山口蓬春個人展覽會

五月二十五日—三十日 日本橋・三越

昨冬帝展參與を辭退し拘束ある團體等とも離れて畫業に専心したいと聲明した作者が、花鳥を主題として十點の新作を待、最初の個展を開いた。

「金地小六屏風一雙と二曲屏風半雙とを中心にしてゐる。今回の出品畫を見ると氏は多く紙本を用ひ、東洋畫的に一層の關心が深められてゐる。紙本の二尺巾『爽秋』は鹿と鳶を金泥でゆき從來の巧者さに十分の力が加へられてゐる『良宵行』は菖蒲にほたるを配した調子の高いもので、黃蜀葵と白レグホンを描いた、『黃花白雛』『巢籠』などと共に佳品である。二點の屏風は『殘雪』に白さを他は紅梅白梅を描いたが前者は白さの描法新たるものあり、後者は寫實を裝飾化したもので、邦畫壇人氣者としてふさはしき出來榮を示してゐる。關雪以來の見榮ある個展であらう。」（讀賣）

日本人形社第一回展

五月二十五日—三十日 大阪・三越

新圖案協會第五回ボスター展

五月二十六日—二十八日 銀座・紀伊國屋

東西大家新作畫展

五月二十六日—二十八日 大阪・大丸

四人油繪展

五月二十六日—三十日 銀座・三味堂

橋本節哉、佐藤道顯、岡田七藏、坂口右左視四名の作品を陳列した。

關西名家新作展

五月二十六日—三十日 大阪長堀・高島屋

中西利雄第一回水繪展覽會

五月二十六日—三十一日 數寄屋橋・日動畫廊

「油繪に比して歩が悪いと言はれがちな水彩畫もここまで来れば早何の遜色もない。寧ろ油繪とか水彩とかいふ材料に捉はれない氏の獨白の畫境が規はれる。作品三十點、青年畫家の作とは見えぬ老練な味があり高度の純粹性に依つて描寫の無駄が省かれ、明暗の對比も巧みに使ひこなされてゐるが、併し溫室育ちといふ觀がないでもない。」（都）

德力牧之助洋畫彫刻展

五月二十六日—三十一日 京都・大丸

竹久夢二遺作品展

五月二十七日—三十一日 銀座・青樹社

泰西美術寫真鑑賞展

五月二十七日—三十一日 銀座・伊東屋

青柳喜兵衛洋畫個展

五月二十七日—三十一日 福岡日日新聞社

鈴木千久馬洋畫個展

五月二十七日—三十一日 大阪・三角堂

菅野彌一・森重道洋畫展

五月二十七日—三十一日 山形縣物產陳列所

S氏コレクション第一回賣立展觀

五月二十八日—六月一日 麴町・室内社畫堂

第十四回春陽會大阪展

五月二十八日—六月六日 大阪・朝日會館

中央美術展（日本畫、洋畫）

五月二十八日—六月七日 東京府美術館

本年は本賞無く、左記九名準賞を受けた。

日本畫 澤野文臣、立石春美、藤田隆治、村山

三千男

洋畫 西村計雄、後藤繁喜、吉村勇、鈴木貫

司、燦光

新古美術品展

五月二十九日—三十一日 大阪・大丸

七人社圖案展

五月二十九日—六月一日 新宿・三越

第一回幽興會日本畫展

五月二十九日—六月二日 上野・松坂屋

松坂屋の主催で橋本關雪、津田青楓、正宗得三郎、牧野虎雄、古川北華、錢屋の六名を同人とし各人夫々に樂しんで描いた作品を見せた。

岩田藤七吹硝子製品展

五月二十九日—六月二日 上野・松坂屋

京都工藝美術協會第七回展覽會

五月二十九日—六月二日 京都美術館

陶磁一三二、漆器六八、染織六五、金工四二、木竹二八、圖案二〇、版畫一三、雜三八、外に無鑑査三二、審査員出品一六、合計四五四點を陳列した。

授賞

協會賞 村田信續、魚野自醒

特賞 新開邦太郎、矢代庄商店、井上彦之助、伊東翠壺

選匠賞 中山憲一、岡本恒三郎、山田豐、堀

岡道仙、八田蘇谷、中村鵬生

黑越正二個展

五月二十九日—六月三日 鹿兒島市・明治

屋

第八回奈良洋畫會展

五月三十日—六月一日 奈良會館

七彩會洋畫展

五月三十日—六月三日 大阪・十合

JAN洋畫展

五月三十日—六月三日 銀座・紀伊國屋

東臺邦畫會第十一回小品展(日本畫)

五月三十日—六月四日 日本橋・白木屋

名古屋市立工藝學校生徒作品展

五月三十一日—六月一日 同校

西丸小園彩桂社日本畫展

五月三十一日—六月五日 日本橋・白木屋

第一同名古屋工藝品展覽會

五月三十一日—六月七日 日本橋・白木屋

名古屋市産業部、名古屋市商工會議所、名古屋工藝協會共同主催で開いた。

瀨戸作陶會展

岡崎特産燈籠展

五月三十一日—六月七日 日本橋・白木屋

爾步美術協會第一回洋畫展

五月三十一日—六月七日 京都美術館

關西在住の第二部會々員太田喜二郎、角野判治郎、吉田苞、小磯良平、赤松麟作、新井完の六名に依つて新に組織された同會の公募展である。岡田三郎助、中村不折、中澤弘光の友情出品、並に伊原宇三郎、石川寅治其の他第二部會々員等の贊助出品もあつた。

六月 月

牧野虎雄洋畫個展

六月一日—三日 銀座・資生堂
山中清一郎洋畫個展

六月一日—三日 大分・一九デパート

第一回多治見上繪陶器展

六月一日—三日 多治見町・岐工聯階上

大垣泰治個展

六月一日—四日 神戸・十合

新作小品畫展覽會(日本畫)

六月一日—五日 日本橋・三越

東西作家の小品を軸仕立にして展觀した。横山大觀、小林古徑、前田青邨、富田溪仙、安田靉彦五名の「五節句」、川端龍子「ばら」、橋本關雪「風雨杜鵑」、小室翠雲「竹林七賢」、奥村土牛「百舌鳥の圖」等が出品された。

川西英版畫展

六月一日—五日 神戸畫廊

香取正彦鑄金個人展覽會

六月一日—六日 日本橋・高島屋

新作品五十餘點を展觀した。傳家の古典的技法に於ては家翁の壘を摩するものあり又新人としての尖新的の作品に至りては家翁も做し得ざる獨到の所あり(正木直彦推薦文)と謂はれる如く、傳統を承けてよく之を消化する所に作者の特技が見られる。

鎌倉工藝展

六月一日—六日 鎌倉驛前・明治製菓

橋本八百二、はな洋畫展

六月一日—七日 大阪・美術新論社畫廊

しろがね工藝展

六月一日—七日 銀座・ラスキン文庫

青濤社第一回展

六月一日—七日 澁谷・東横百貨店

觀山遺作展觀

六月一日—八日 東京美術學校陳列館

過日恩賜京都博物館で開かれた下村觀山遺作展覽會出品作中約三十點を選んで陳列した。

グスタフ・クリムト遺作素描展

六月一日—十日 新宿・天城畫廊

第三回香川縣工藝美術綜合展

六月一日—十日 高松・三越

香川縣主催の綜合展で、總出品數二百八十一點の中入選は百三十六點、其の内譯は工藝三十八、彫刻三十、洋畫五十一、日本畫十七であつた。

知事賞(工藝)眞鍋光男(彫刻)渡邊弘行(洋畫)今村俊夫

前田寛治遺作デッサン展

六月一日—十五日 大阪・錦水堂畫廊

前田寛治の作品蒐集家早川寛之が錦水堂畫廊新設記念として遺作素描二十九點を出陳した。

浩然社第四回日本畫展

六月二日—六日 新宿・三越

飛彈民藝展

六月二日—七日 大阪・高島屋

第二十九回讀畫會展覽會(日本畫)

六月二日—十三日 東京府美術館

「かなりの嚴選をした、その結果、列品僅に九十二點といふ同會空前の少數記録をつくつた。がそれだけに展覽價値は、うんと高められて來てゐる。そして全體的に會そのものの空氣が明るく澄んで見えるのが、何よりも心持をよくさせた。

拔群の勉強をして見せたのは會の統率者たる荒木十畝氏で『新筈』の一大力作がそれだ、寫實の効果が、やゝ迫真に過ぎたかと思はれる節もないではないが、兎も角も氏の不斷の勉強には恐しいくらひのものがあつた。それに較べると池上秀畝、西澤信畝、永田春水、太田秋良、湯原柳畝その他の幹部一同すべて生ぬるゝ勉強だ。否、中には藝術的には全く無感能な作畫態度で臨んでゐるのさへある。

そこへ行くと森白市、松久休光、木本大果、中島健治、菅谷眞午など、ぐつと若い者の作が、たとひその仕事は未完成の處は澤山にあつても、第一に、いい事には自分が何分かの面白さを熱意に託して描現しようと努めて一生懸命だ。これ實に大家がますます大家になり、中家が次第に没落し、小家が次第にその後をねらふ所以だ（中外商業）

讀畫賞 松久休光

獎勵賞 菅谷眞午、長谷川勇作、中島健治、荒井綠荷、岡部三郎、梅園玉葩、海老原南爽

瑛九フォトデッサン展

六月三日—六日 大阪・三角堂

第二部會名古屋小品展

六月三日—七日 名古屋・丸善

素顔社、七洋會合同洋畫展

六月三日—七日 銀座・青樹社

女流新人作家の兩團體合同展。

田中佐一郎洋畫個展

六月三日—七日 京都・朝日會館

新興獨立美術協會第二回展（洋、彫、工）

六月三日—十四日 東京府美術館

所謂アンデパンダンの展覽會で、繪畫八十九、彫塑六、工藝十五點を陳列した。

能勢龜太郎洋畫個展

六月四日—六日 銀座・三味堂

青桃會第七回展

六月四日—七日 大阪・丹平ハウス

第一回造型彫刻家協會展

六月四日—八日 銀座・紀伊國屋

竹村龍太遺作展（日本畫）

六月五日—七日 京都美術館

第一回葵陽會洋畫展

六月五日—七日 神田・東京堂

女子美術師範科出身の若い女流作家の團體で約五十點を陳列した、

久留米來目會美術展

六月五日—七日 久留米商工會議所

第九回エトアル洋畫展

六月五日—九日 和歌山縣商品陳列所

内藤銀策牡丹百畫展

六月六日、七日 新潟毎日新聞社

現代一流洋畫展

六月六日—八日 大連・滿鐵社員俱樂部

松永冠山日本畫作品展

六月六日—九日 福岡日日新聞社

福岡縣出身の作者が故郷に於ける第一回作品展として福岡日日新聞社の後援に依り新舊作品五十餘點を展觀した。

五味清吉洋畫個展

六月六日—九日 京城・三越

現代一流諸家小品展

六月六日—十日 新宿・天城畫廊

ガートルード管野夫人彫刻展覽會

六月六日—十一日 日本橋・三越

米國女流彫刻家で昨年夫菅野衣川歸國に随つて渡日、此の個展を開いた。作品は大部分青銅で四十七點、外に素描三十點を陳列した。作風はロダン風で「ジョルダン博士」「ジョン・ミュー」「オキン・ミラー」等の肖像はよく性格と精神を擷んでゐる。

第一回綠洲會展（洋、彫、工）

六月六日—十二日 銀座・鐘紡

吉田久繼の彫刻、工藝的のものを併せて二十六點、定方希一の油及水彩畫三十二點、岡本昇三の漆藝十七點を展觀した。

近藤浩一路日本畫展

六月六日—十二日 日本橋・白木屋

六染會夏向染色品展

六月七日—十日 神戸畫廊

カーカム洋畫個展

六月七日—十一日 數寄屋橋・日動畫廊

多摩帝國美術學校圖案科展

六月七日—十四日 日本橋・白木屋

酒田美術協會展

六月八日、九日 酒田・琢成小學校

早稻田大學洋畫展

六月八日—十日 神田・東京堂

獨立美術協會大阪展

六月八日—十七日 大阪・朝日會館

現代大家新作畫展（日本畫）

六月九日—十一日 東京美術俱樂部

東京會主催の展觀で、東西の主要作家二十三名の新作四十點を陳列した。

「例によつて尺五絹本が多いが、今年から京都畫壇の

人々の作をならべ出したのは注目すべきであらう。
竹内栖鳳の『兔』を始めとして……。その代りいつも
必ず見ない事はなかつた横山大観の作が見えないのは
寂しい。全體を通じて荒木十畝の『五位鷲』、小林古徑
の『栗鼠』、川端龍子の『雞』、松林桂月の『飛泉』、橋本
關雪の『家鴨の子』、西山翠嶂の『竹の雨』、廣島晃浦の
『五月雨』、島田墨仙の『熊』などが眼についた。(中
外商業)

山岸主計世界百景版畫展

六月九日—十二日 大阪・三越

大塚稔巧藝畫展

六月九日—十二日 京都・高島屋

兵庫縣美術協會第二十五回展

六月九日—十二日 神戸・三越

旺玄社同人小品展

六月九日—十三日 大阪・美術新論社畫廊

島の洋畫展

六月九日—十四日 新宿・伊勢丹

東京府觀光協會主催。

高谷篁園日本畫展

六月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

中堅作家日本畫小品展

六月十日、十一日 銀座・紀伊國屋

京都昭和工藝協會第八回美術工藝品展

六月十日—十二日 丸ノ内・商工獎勵館

岩田藤七創案新興硝子器展覽會

六月十日—十七日 日本橋・高島屋

吹硝子の面白さを生かして、墨流し手、絞り手、
紙捻手など自由な模様を見せ、手工藝の味の豊か
なものである。

SPA集團展(洋畫)

六月十日—二十日 銀座・カプリス、プリン
ス、サヴォア、デユエット、新宿・ノヴ、チ
ヤスミン、武藏野茶廊、上野・プリンス

第一美術協會第八回展覽會(洋畫、彫刻)

六月十日—二十二日 東京府美術館

會員會友作品の外、一般出品洋畫一一三九點、
彫刻一二六點の中洋畫二八五點、彫刻二二點の入
選作品を陳列、總計約四百點を展覽した。

無鑑査推薦(繪畫部) 袴田恒雄、富岡藤男(彫 刻部) 早乙女絢士

第一美術賞(繪畫部) 高橋賢一郎、野村陸男、
(彫刻部) 龍ノ峰東晃

神戸創作圖案協會第十四回展

六月十一日—十三日 神戸畫廊

同志社洋畫展

六月十一日—十四日 京都美術館

第二回桐城社洋畫展

六月十一日—十五日 神田・東京堂

三岸好太郎遺作素描展

六月十一日—十五日 新宿・天城畫廊

多田榮二滯歐作品展

六月十一日—十五日 神戸・ブチギヤラリ

小谷野半二洋畫小品展

六月十一日—十七日 日本橋・人形町エ
デプト

大森光彦新作陶器展

六月十二日—十三日 京城日報社來青閣

九大美術部第十七回展(洋畫)

六月十二日—十四日 福岡日日新聞社

七人展(洋畫)

六月十二日—十六日 數寄屋橋・日動畫廊

跡見泰、小林眞二、近藤洋二、奥瀬英三、佐藤
三郎、相馬其一、武内鶴之助作品陳列。

第七回京都工藝美術協會展覽會

六月十二日—十七日 日本橋・三越

バート・ヴェール作品展覽會

六月十二日—十七日 日本橋・三越

岩城硝子製造所工藝部で小川雄平が主となつて
製法研究中であつた特殊な硝子工藝バート・ヴェ
ール(Pate de verre)製品を展観した。

第十五回日本南畫院展

六月十二日—十七日 京都美術館

遠田運雄洋畫個展

六月十二日—十八日 京城・鐘紡サロン

松田杏亭日本畫個展

六月十三日、十四日 名古屋美術俱樂部

森人社展

六月十三日—十五日 銀座・伊東屋

京都綜合工藝研究會展

六月十三日—十五日 京都美術館

岐阜社第一回美術展(日本畫)

六月十三日—十五日 岐阜・柳ヶ瀬百貨堂

精進社洋畫部作品發表展

六月十三日—十六日 日比谷・市政會館内

日本文化協會

赤を清算して社會復歸を決心した美術家達が此
の程精進社を組織したが、日本文化協會及び帝國
更新會思想部の後援に依り其の洋畫部の展覽會を
開いた。

四行會第一回展覽會(洋畫)

六月十三日—十七日 銀座・資生堂

獨立展に屬する青年作家北尾欽作、佐藤英夫、中尾彰、竹中三郎四名の會で油繪十三點を陳列した。

東京みづゑ會展

六月十三日—十七日 新宿・三越

四皓會洋畫展覽會(第三回)

六月十三日—十七日 日本橋・高島屋

高島屋主催により岡田三郎助、藤島武二、滿谷國四郎、和田三造四名の作品を展觀する會の第三回である。多く八號乃至十二號程度の小品で左の通り十三點を陳列した。

岡田三郎助「森の一部」「杏咲く村」「熱海の朝」
藤島武二「海」「志度灣」「北國の春」「小豆島の春」
「同(一)」「浴女」

滿谷國四郎「櫻葉」

和田三造「芍藥」「畫室」「大川の朝」

彩々會第一回洋畫展覽會

六月十四日—十八日 銀座・紀伊國屋

須田國太郎素描展

六月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

爾步美術協會第一回洋畫展

六月十四日—二十一日 大阪市美術館

第十四回表裝同人展

六月十四日—二十二日 東京府美術館

第四回童林社繪畫彫刻展覽會

六月十四日—二十三日 東京府美術館

今年東京美術學校油繪及彫刻科卒業の同期生の會。

三井安尾第一回研究作品展(洋畫)

六月十五日—十九日 銀座・青樹社

春臺美術大阪展覽會(洋畫、工藝)

六月十五日—二十一日 大阪・三角堂

大阪に於ける最初の展覽會で總數約百二十點を陳列した。

春陽會名古屋展

六月十五日—二十一日 名古屋新聞社

九年會第六回洋畫展覽會

六月十五日—二十三日 東京府美術館

昭和九年東京美術學校卒業生の組織する會で、熱心な研究態度の現はれることは喜ばしい。

長谷川利行洋畫個展

六月十六日—二十日 新宿・天城畫廊

錨山洋畫研究所試作展

六月十六日—二十日 神戸・ブチギヤラ

辻愛造油繪と日本畫個展

六月十六日—二十日 神戸畫廊

全國中等學校美術展

六月十七日—三十日 東京府美術館

京大、北大合同美術展(日本畫、洋畫)

六月十八日—二十日 京都美術館

久米福衛、大久保喜一、内野猛油繪展

六月十八日—二十二日 神田・東京堂

小城基近作油繪展

六月十八日—二十三日 數寄屋橋・日動畫廊

新自然主義を唱へる作者のフランスを多く描いた風景畫二十五點を陳列した。

グレート・ノイワルター夫人陶彫展

六月十九日—二十一日 銀座・資生堂

昨年來朝した埃國女流陶彫家ノイワルター夫人(Grete Breter Neuwaldt)の作品二十餘點、素描十餘點を展觀した。

猪飼畫塾第二回歴史風俗畫試作展

六月十九日—二十一日 京都・大丸

孫一峰洋畫個展

六月十九日—二十一日 京城本町・大澤商會

會

持田卓二日本畫個展

六月十九日—二十二日 大阪・十合

第六回沈爾留彫刻展

六月十九日—二十三日 銀座・松坂屋

木村武山新作佛畫展覽會

六月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

作者は本年還曆を迎へ高野山と大和長谷寺に夫々兩界曼荼羅の大幅奉納を發願したが、之を機として廣く佛緣を頒つ爲此の展觀を企てたと言ふ。紺地金泥のものと濃彩のものとで諸佛菩薩等の尊像二十五點を陳列した。

筑前美術會第四回展覽會

六月十九日—二十三日 銀座・松坂屋

福岡縣出身作家の親睦團體で、日本畫には今中素友、吉村忠夫、横尾芳月、小早川清、水上泰生、洋畫には和田三造、吉田博、多々羅義雄、中村研一、兒島善三郎、山崎坤象、彫塑に山崎朝雲、安永良徳、富永朝堂等約四十名が出品してゐる。

立光會第一回洋畫展

六月十九日—二十三日 大阪・朝日會館

鍋木清方作品第三回展觀

六月十九日—二十三日 日本橋・三越

墨水懷古十趣作品八題を展覧した。「木母寺夜

雨」「橋場の渡」「夕立」「賤機帯」「雪月花(三幅

對)」「眞崎」「ふたおもて」「渡頭秋色」で、明

治時代の風俗情趣に對する懷古の心を隅田川のほ

とりに寄せた作である。

水谷清洋畫個展

六月十九日—二十三日 名古屋・丸善

大塚稔新作巧藝畫展

六月十九日—二十七日 大阪・十合

芳文繪畫展觀

六月二十日、二十一日 京都美術館

ヘーグの平和殿に我が國より寄贈した故川島甚

兵衛製作綴錦壁張の原圖は、菊池芳文の作で、六

枚より成り縦十五尺幅六十八尺に及ぶ豪華な大作

であるが、今回所藏者川島家より帝室博物館に寄

贈することとなつたので、之に先つて一般の鑑賞

に供する爲展覧した。

工友團同人第一回展(工藝)

六月二十日—二十二日 京都美術館

旺玄社有志近作油繪展

六月二十日—二十四日 銀座・三味堂

馬越辨太郎、尾崎三郎、中出三也、野田信の作

品を展覧した。

第二回白蠟展(洋畫)

六月二十日—二十四日 銀座・紀伊國屋

野口彌太郎洋畫個展

六月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫

廊

高橋雅子洋畫個展

六月二十一日、二十二日 神戸畫廊

新圖案家集團展

六月二十一日—二十四日 銀座・伊東屋

佐藤梅軒畫廊新作畫展

六月二十二日 京都・八坂俱樂部

河村喜太郎作陶展

六月二十二日—二十三日 銀座・交詢社

武井眞澄山岳畫展(洋畫)

六月二十二日—二十四日 大阪・堂ビル清交

社

奥瀬英三個人展覽會(洋畫)

六月二十二日—二十六日 大阪・三角堂

風景靜物油繪五十一點を展覧した。

有吉正雄油繪個展

六月二十二日—二十六日 神戸・ブチギヤラ

リー

石井柏亭近作展(洋畫)

六月二十二日—二十八日 銀座・青樹社

「水に因む作品十五點、それに一首づつ與謝野品子女

史の歌を添へてあるのは季節向きのいい思ひ付だ。作

者自ら序してゐるやうに、モノに倣つて海、川、湖の

動と靜が巧に描き分けられてゐる。從來兎もすれば理

智に過ぎた畫風が、一種のうるほいと滋味を湛へるや

うになつて來たことも見通してはなるまい。海を主題

としたものでは鶴原の風景、殊に『岬角觀潮』が重厚

である。川の景觀では利根の水面を白帆が靜かに滑つ

て行く『水郷早春』の感じがよく出てゐる。なほ不忍

池畔の雪、綠樹の倒影を描いた小品、空の變化による

水の性格的描寫があつた。(東朝)

川島理一郎近作洋畫個展

六月二十二日—二十八日 大阪畫廊

吉田喜藏近畿名勝バステル畫展覽會

六月二十三日—二十六日 大阪・南海高島

屋

黒田辰秋(工藝)清水公子(洋畫)合同展

六月二十三日—二十六日 神戸畫廊

八木岡春山日本畫個展

六月二十三日—二十七日 大阪・三越

第二回グスタフ・クリムト遺作素描展

六月二十三日—三十日 新宿・天城畫廊

第六回川端龍子個人展觀

六月二十四日—二十九日 日本橋・三越

「氣取りなく、摸倣なき奔放自在の龍子は、それだけ

に現代をも理解し得る智能家でもあるのだ。——ここ

に反面龍子の『枯れ』の味に對する將來性が幾分殘さ

れる譯にもなるが、力一杯の點は何人も共鳴し得よう。

今般花鳥を題して十二點近時個展中白眉の成績を收め

てゐるが、中にも『明王鳥』『魚彩』『羽風』等の本

格的力闘は正に邦畫壇快哉の收穫と云へよう。其の他

『花桐』『牡丹』『花の影』等、一點たりとも抜かり

なき精進の跡を見せてゐるものばかりで、混亂美術界

の清涼劑たり得る姿を示し、藝術獨自の勝利をも物語

つてゐる。(讀賣)

祿明莊第四回美術工藝品展

六月二十四日—二十九日 日本橋・高島屋

エミール・ベルナル展

六月二十四日—二十九日 大阪・松坂屋

日本壁畫協會第二回壁畫展

六月二十四日—三十日 日本橋・白木屋

第二十三回商工省工藝展

六月二十四日—三十日 愛知縣商工獎勵館

エリザベス・キース版畫展

六月二十五日—二十七日 大阪・有恆クラ

新美術家協會小品展（洋畫）

六月二十五日—二十九日 數寄屋橋・日動畫廊

構圖社第八回廣告圖案展

六月二十五日—二十九日 神田・東京堂

第十三回黑色洋畫展覽會

六月二十五日—二十九日 銀座・紀伊國屋

伊原宇三郎洋畫個展

六月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊

川端畫學校日本畫部試作展

六月二十六日—二十八日 同校

第二回びるて洋畫展

六月二十六日—三十日 銀座・三味堂

第一回綜合人形藝術展

六月二十六日—七月三日 日本橋・白木屋
新に創立された人形藝術院主催で一般の出品を募り、搬入四百點の中から百數十點を選んで陳列した。

水船三洋洋畫個展

六月二十七日—二十九日 銀座・資生堂
油繪二十三點を陳列した。作者は明快に美しい色彩と、平面的な單純化に特色を示してゐる。

石川確治個展（彫刻、油繪、水墨）

六月二十七日—二十九日 山形縣物産紹介所

辻谷勝三洋畫個展

六月二十七日—三十日 大阪・南海高島屋
セクシヨンドール第三回洋畫展

六月二十七日—三十日 神戸畫廊
永瀬義郎滯佛畫展

六月二十九日—七月三日 大阪・三角堂
滯佛八年の後今春歸朝した作者の滯歐作、油繪

グワツシユ、素描、版畫等五十點を展觀した。

五雲塾農鳥社第三回小品展（日本畫）

六月三十日—七月三日 大阪・三越

西村五雲塾の同人展で前田荻郎、田村豐洲、伊藤晃珠、田之口青晃等六十餘名の作品七十三點を陳列した。

中川清彫塑個展

六月三十日—七月五日 大阪・大丸
主として小品作品三十餘點陳列。

七月

京都繪專研究科作品展

七月一日—三日 同校

齊々會第一回彫刻展

七月一日—四日 銀座・資生堂

十一名の青年作家に依つて新に組織された會の第一回展。

第四回秋香會洋畫展

七月一日—五日 銀座・伊東屋

女子美術學校昭和八年度卒業生の組織する會である。

立陣社第一回洋畫展

七月一日—五日 銀座・青樹社

白日會、春臺、光風會、太平洋畫會等に屬する所謂第二部會系の新人等十一名が新に結成した團體で、同人各一點宛相當の力作を陳列してゐる。

技術は未完成のものが多いが概して明快暢達の近代的色彩を示し、同人展にあり勝ちの退翳さを吹き拂つて新鮮な研究的態度を見せてゐる。

現代八名家新作扇面畫展覽會

七月一日—五日 日本橋・高島屋

川端龍子、田中咄哉州、津田青楓、矢野橋村、小杉放庵、近藤浩一路、島田墨仙、菅橋彦八家の絹紙水墨彩畫種々の扇面畫約三十點を展觀した。

奥村土牛、溝上遊龜、徳岡神泉、山口華楊新作畫展

七月一日—五日 日本橋・高島屋
四名の新作花鳥畫小品十一點を展觀した。

やつて會第一回展覽會

七月一日—五日

林是、長谷川豐雄等八名の彫刻家達に依り、彫刻家の手に成る工藝を示さんとして新に組織された會の第一回展である。

鋌起會第三回美術工藝展

七月一日—五日 銀座・伊東屋

淺見隆三陶器展

七月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

太田嘉兵衛第一回洋畫展

七月一日—五日 福岡市公會堂

岸田劉生遺作回顧展覽會

七月一日—七日 新宿・天城畫廊

未發表遺作素描畫稿等五十點を陳列した。

旺玄社うちわ、扇子繪街頭展

七月一日—十五日 銀座・ストック商會

生島允則團扇冠畫展

七月二日—四日 神戸畫廊

沼田一郎ガラス繪展

七月二日—六日 銀座・三味堂

高麗陶兵衛作萩焼陶器展

七月二日—七日 日本橋・白木屋

現代大家洋畫展

七月二日—十日 大阪・阪急百貨店

尙美堂新作畫展

七月三日—五日 日本橋・東美俱樂部

「高島屋横の東美俱樂部で尙美展がある。契月の『菅公』靱彦の『武藏』五雲の『ねぎ』希望の『煙雨』關雪の『栗鼠』蓬春の『朝顔』紫峰の『もみぢ』など、本格的力作多く、現代作家が大多數出品してゐる。五雲の若鷄とねぎはお家ものの腕を十分見せ、靱彦、契月の人物畫は人物畫として最上のものではあらう。(讀賣)」

杉並區教育會會員繪畫展

七月三日—五日 杉並區・長仙寺

第三回關東府縣聯合工藝品展

七月三日—六日 宇都宮・縣商工獎勵館

無聲會展

七月三日—六日 日本橋・白木屋

女艸會第三回展(洋畫)

七月三日—七日 銀座・紀伊國屋

獨立展出品の女流作家に依つて組織される會である。他の女流展に比して最も新傾向を示し、各人が自由に自己の道を進まんとしてゐることが見られる。

第九回大美術展(日本畫、洋畫)

七月三日—八日 大阪・朝日會館

矢野橋村が經營する大阪美術學校同窓會の主催で日本畫五十五點洋畫五十點を陳列した。

五十嵐幸男ガラス繪小品個展

七月四日—十二日 銀座・明治製菓

東京鑄金會第二十六回展覽會

七月四日—十二日 東京府美術館

鑄金家の團體として唯一であり、多數の會員と古い歴史を有する會である。總數七十一點を陳列した。

「舊人も新人もあるがその仕事は各自の自分を守つて舊型のものにも新人のものにもそれぞれの特色がある記者は鑄銅、黃銅、白銅等々の置物がいつも同じ型に簇つたものの多いことを此の會にも見出してこれをどうかしなければと考へさせられた。瓶掛、鐵瓶、花瓶、釜風爐、香爐、香合、花生、等々にはお道具として使へるものが多い此の方は餘り新らしいものよりも舊き型にほんのりと新味を匂はせたものがよくそれが此の陳列の到る處に見出されるのを嬉しく思つた。(毎夕)」

西歐美術工藝品展

七月五日—七日 日本橋・日本商工俱樂部

伊藤慶之助滯歐作品展

七月五日—九日 神戸畫廊

東西作家新作展(日本畫)

七月五日—十日 大阪・三越

東西知名作家を網羅し小林古徑「泰山木」、西村五雲「鴨」その他四十餘點を陳列した。

大坪重周、武樋貞波留工藝美術展

七月五日—十五日 神田・文房堂

畫友會展(洋畫)

六月六日—八日 銀座・伊東屋

富本憲吉近作陶器展

七月六日—八日 大阪・村上春鈞堂

土肥刀泉陶作品個人展覽會

七月六日—十日 銀座・資生堂

平林清輝佛畫個展

七月六日—十二日 日本橋・白木屋

原田和周遺作展覽會(洋畫)

七月七日—九日 數寄屋橋・日動畫廊

本年一月他界した春陽會々友原田和周の遺作五十餘點が陳列された。

原精一洋畫個展

七月七日—九日 銀座・交詢社

鍋井克之日本畫個人展覽會

七月七日—十一日 日本橋・高島屋

梅原龍三郎、安井會太郎創作版畫展

七月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

前へ展(洋畫)

七月八日—十日 新宿・天城畫廊

一莖會作品展

七月八日—十一日 丸ビル一階

多聞洞名家小品展(日本畫)

七月八日—十一日 銀座・紀伊國屋

橋本多聞洞の主催で東西名家の新作小品を蒐めた。安田靱彦の「孔子觀河」、川合玉堂の「月下歸漁」、鍋木清方の「白雨」、竹内栖鳳の「鰈」、小室翠雲の「清涼」、荒木十畝の「林檎」、福田平八郎の「罌粟」、森白甫の「新秋」、太田聽雨の「夕」等が展観された。

本田隆軒南畫展

七月八日—十六日 東京府美術館

近作四十三點を開催中の三樂書道會内特別室に展観した。作者は文學博士で支那學者として知られ、南畫は富岡鐵齋に師事した。

五葉會新作畫展(日本畫)

七月九日、十日 大阪美術俱樂部
京都の畫商表具師聯合の五葉會主催で、京都畫壇主要作家を集めた展覧である。

齋藤佳三スタディオ小工藝品展

七月九日—十三日 銀座・鐘紡

洋々社洋畫展

七月十日—十二日 敦賀商工會議所

津本柳塘南畫展

七月十日—十四日 神戸畫廊

東京鐵道局美術部展

七月十日—十四日 萬世橋・鐵道博物館

日本南畫院大阪展

七月十日—十六日 大阪・朝日會館

第三回九州沖繩各縣聯合工藝試作品展

七月十日—十六日 福岡縣產業獎勵館

出品は八縣に互り總點數八百五十七點（二百二十三人）、谷口商工省技師審査の結果推薦賞二十五點、特選賞四十點、有效賞十九點が授與された。

墨心莊第二回日本畫小品展

七月十一日—十三日 日本橋・東美俱樂部

高橋墨心莊の主催で、川合玉堂「虎」、小室翠雲「櫻山幡桃」、兒玉希望「清澄」、太田聽雨「末の松山」、鍋木清方「影」、其の他の出品があつた。

高畑正明洋畫展

七月十一日—十五日 新宿・天城畫廊

足立源一郎臺灣山岳畫展

七月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

濱松洋畫五人展街頭展

七月十一日—三十一日 濱松市昭和通

荒井陸男作品展覽會（洋畫）

七月十三日—十五日 丸之内・日本工業俱樂部

最近完成した國防館の「兵器獻納式圖」を初めて、油繪五十五點、水彩畫十二點の作品を展観した。

三相會展

七月十三日—十五日 名古屋・丸善

日本山岳畫協會第一回展（洋畫）

七月十三日—十七日 日本橋・高島屋

足立源一郎、茨木猪之吉其の他山岳を愛好する畫家十名で新に組織した會の第一回展である。山岳に取材した風景畫、油、水彩、墨畫、エツチング等約五十點を展観した。

大塚晚秋洋畫個展

七月十三日—十七日 銀座・資生堂

長谷川三郎洋畫個展

七月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

劉榮楓滿洲風光油繪展

七月十四日—十九日 大阪・阪急百貨店

眞野紀太郎近作水彩畫展

七月十四日—十八日 大阪・三角堂

豐藤勇油繪個展

七月十四日—十八日 大阪・今橋畫廊

五葉會新作畫展

七月十六日 京都美術俱樂部

江原健一洋畫個展

七月十六日—十八日 新宿・天城畫廊

小磯良平デッサン展

七月十六日—十九日 神戸畫廊

喜多武四郎彫刻工藝小品展

七月十六日—二十日 銀座・三味堂

第三回南畫鑑賞會習畫展

七月十七日—十九日 新宿・伊勢丹
小室翠雲を會長とする同會の一般習畫者の作品二百餘點を選んで陳列した。

清水練徳近作洋畫展

七月十八日—二十一日 金澤・丸越

日本版畫協會展

七月十九日—二十一日 札幌・今井デパート

岸田劉生遺作日本畫展

七月十九日—二十二日 銀座・小畫廊

燦木社日本畫展

七月十九日—二十三日 上野・松坂屋

高岡徳太郎滯歐作品個人展覽會（洋畫）

七月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

昨年歸朝した高岡徳太郎の滯歐作は既に一部分昨秋の二科展に特別陳列されたが、未發表の風景を主とした油繪小品約五十點を陳列して個展を開いた。近代的な色彩の明るさと美しさに特色を有し、自然の單純化に可なりの成功を示した佳品が多かつた。別に贊助出品として石井柏亭、正宗得三郎、安井曾太郎、鍋井克之の作品各一點が陳べられた。

大久保作次郎洋畫個展

七月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

米倉兌洋畫個展

七月二十日—二十三日 神戸・三越

中村達郎臺灣風景油繪小品展

七月二十日—二十四日 銀座・資生堂

東西珍奇美術觀覽會

七月二十日—三十一日 銀座・西野屋

繪のゆかたと夏帶展

七月二十一日—二十三日 神戸畫廊

各作家小品と餘技作品展

七月二十一日—二十五日 神戸・ブチギヤ
ラリー

川口軌外洋畫小品展

七月二十一日—三十一日 大阪・阪急百貨
店

近作小品二十餘點を出陳した。

「小品でみると題材も手法もいづれより廣い範圍にわたつてゐる『鯉』はその一例で表現は面白い『京都西芳寺庭』『紀伊靜峽』『白濱三段壁』などの風景も常には見られぬものであるが、氏獨特の觀照が示されてゐる、『貝殻』『無花果』『秋の花』は川口氏の本領で、構成、手法、色彩美などが最もよく發揮されてゐる。(大朝)

女艸會小品展

七月二十一日—三十一日 新宿・伊勢丹

古家苔軒個人展覽會(日本畫)

七月二十四日、二十五日 銀座・交詢社
主として紙本横物草虫を主題とした約三十點を
展觀した。

展觀した。

渡嘉敷唯二遺作展

七月二十四日—二十六日 神田・東京堂

第九回昭和美術展覽會(洋畫)

七月二十四日—二十九日 日本橋・高島屋
蘆原曠、平井武雄等會員六名の作品約四十點陳
列。

歐洲繪畫小品展

美術展覽會(八月)

七月二十四日—八月八日 新宿・天城畫廊

大作畫展覽會(日本畫)

七月二十五日、二十六日 京城美術俱樂部

朝鮮美術會主催で東京及び京都畫壇の知名作家
五十餘名の新作品八十五點を展觀した。

松村菊麿個展

七月二十五日—三十日 大阪・美術新論社畫
廊

宮澤喜一洋畫小品展

七月二十五日—八月三日 下谷區初音町・ア
ルキベンコ

村上正夫、秋山正蠟畫展

七月二十六日—二十八日 銀座・資生堂

日本バステル畫會第十二回展

七月二十六日—三十日 銀座・伊東屋

樋口富鷹、松平春樹新作日本畫展

七月二十七日—三十一日 神戸畫廊

田中咄哉州新作畫幅展

七月二十八日—三十日 大阪・高島屋

「その清新な畫趣はいまや一般の肯定するところとなつてゐる。氏の畫境は天賦による犀利な感覺によつて拓かれてゐる。同じ水墨の使ひ方にしても、強く心に響くものがあり、對象はみな潑刺として紙上に躍つてゐる。鮎を描いた『清流』、竹に小禽を配した『春信』風景小品の『朝の雨』などいづれも、その特質を發揮してゐる。(大朝)

清風與平近作陶磁展

七月二十八日—三十日 大阪・高島屋

五果會第八回洋畫展

七月二十八日—三十日 大連・三越

八月

小川千穂日本畫個展

八月一日—三日 札幌・今井百貨店

高間惣七洋畫個展

八月一日—五日 大阪美術新論社畫廊

安井會太郎、梅原龍三郎版畫展

八月一日—五日 神戸畫廊

小磯良平素描展

八月一日—十日 大阪・阪急百貨店

宮澤喜一洋畫小品展

八月五日—十四日 日本橋區人形町・エヂプ
ト

阪本清雄瀨戸内海風景展(洋畫)

八月六日—八日 神戸畫廊

大智勝觀日本畫個展

八月七日—九日 大阪・高島屋

高畑正明水彩畫個展

八月九日—十三日 新宿・天城畫廊

諸作家洋畫小品展

八月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫
廊

川西英、林重義サーカス畫展(洋畫)

八月十一日—十五日 神戸畫廊

ドイツ觀光ボスター展

八月十一日—十七日 神戸・不二屋

魁春社第三回作品展覽會(日本畫)

八月十四日—十六日 名古屋廣小路・電氣普
及館

名古屋狩野梅齋塾の展覽會。

山本發次郎所藏ムンク作品展

八月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

南紀美術第七回展

八月十四日—二十日 輕井澤法政大學村・同俱樂部

萬鐵五郎遺作展（洋畫）

八月十四日—三十日 新宿・天城畫廊

第七回東北北海道工藝品競技展

八月十五日—二十一日 札幌・商工獎勵館 其他

旺玄社同人洋畫展覽會

八月十五日—二十二日 日本橋・三越

同人の小品を陳列した。作品は可なり多數に上つたが見るべきものは少かつた。

久本弘一滯歐作品展（洋畫）

八月十六日—十八日 神戸・池田屋

辻村富藏洋畫小品展

八月十九日—二十二日 大阪・朝日ビル專門大店陳列場

バステル日曜畫會展

八月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫廊

小杉放庵新作日本畫展

八月二十日—二十四日 神戸畫廊

高畑正明第二回油繪個展

八月二十日—三十日 新宿・エルテル

表現埼玉展（洋畫）

八月二十二日—二十四日 浦和市圖書館

九線會第一回展

八月二十二日—二十七日 横濱・有隣堂
ムネ・サトミ在佛作品展覽會

八月二十三日—二十九日 日本橋・三越

パリに於て習學し、同地に在つて専ら商業美術に勵む里見宗次の、ボスター其の他の作品を陳列した。

新進作家新作畫展（日本畫）

八月二十五日—三十日 大阪・太丸

新進の日本畫家五十餘名の作品七十餘點を展觀した。

洋畫家の色紙展

八月二十五日—三十日 神戸畫廊

艸園會第八回洋畫展

八月二十五日—三十日 大阪・松坂屋

三岸節子洋畫個展

八月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

關西バステル同好會第九回展覽會

八月二十六日—三十日 大阪・三越

會員作品の外、石井柏亭、鹿子木孟郎、田邊至中村義夫、矢崎千代二等の特別出品があつた。

白山卓吉第一回水墨畫小品個展

八月二十八日—三十日 大森繪畫自由研究所

現代版畫展覽會

八月二十九日—九月七日 銀座・松屋

日本畫家、洋畫家、版畫家等二十餘名の版畫作品を陳列、彫師、摺師が別人なるものと、總て同一人に成るものとがあつた。特別出品としてフランス十八世紀民族版畫十點が陳べられた。

大踏會第一回美術展覽會（洋、彫）

八月三十一日—九月四日 銀座・紀伊國屋

九月 月

竹久夢二裝展

九月一日、二日 上野・勸兵衛酒屋

原精一洋畫個展

九月一日—五日 新宿・天城畫廊

有吉正雄素描油繪個展

九月一日—五日 神戸・ブチギヤラリー

現代洋畫綜合展覽會

九月一日—六日 上野・松坂屋

各派洋畫家百三十餘名の作品多くは小品を二百數十點蒐めた量の上の大展觀であつたが、佳作に乏しく、餘りに雜然として纏つた鑑賞を困難ならしめた。

山陰新民藝品展

九月一日—六日 大阪・高島屋

白朝會洋畫展

九月一日—七日 大阪・美術新論社畫廊

青龍社第八回展覽會（日本畫）

九月一日—二十八日 東京府美術館

青龍社は昨年の帝院改組以來の美術界混亂からは全く影響を免れて、例年の如く秋季展を開き其の主張を作品の上に發表した。此の團體は主宰者川端龍子が實力を以て全體を率ゐる其の指導精神が製作の上に行き互つて、見るからに明瞭な藝術上の主張を示してゐる。其の方向に對する批評は區々ではあるが、潑刺とした意氣込で取材にも表現

最も注目され又問題とされたのはやはり川端龍子の作品であつた。其の大作「海洋を制するもの」は逐年示しつゝ、あつた太平洋連作の四で、川崎造船所に於ける艦船建造の場面を描き、寫生的な取扱ひでありながら構圖にも筆致にも多分の誇張を加へて一種の信念を現はす象徴的な要素多く、日

本畫としては冒險に近い思ひ切つた表現であつた其の意氣と技巧とは賞讃の評も多く行はれたが同時に激しい力の表現が外形的なものに止まつて内容は却つて稀薄なものに終つた。長所も弱點も此の作者が最もよく現れてゐたと云へるであらう同じく龍子の「雷雨」は墨と胡粉と金泥の巧妙な驅使に依つて激しい動きの瞬間を捉へ、明暗の諧調もよく、爽快の氣溢れた佳作であつた。

山崎豐の「醍醐」は醍醐寺塔婆の内部を印象的に描いたもので、たらし込みの利用によりよく其の零圍氣を感じさせる作で、独自の畫境を進めた功を稱すべきである。「山の憩ひ」「海の憩ひ」の作者谷口富美枝は現代風俗畫を描いて注目されるが、技巧も優れ單なる綺麗ごとにと終らぬ所に生氣が見られる。人物の描寫は無難であるが、淺骨

加納三樂の「夏日好菜」は成功と言へず、坂口一草の「黒鳥」は影繪的な効果のもので單調であつた。福岡青風の「光」は群像が巧に纏められて達者な筆であるが内面的な力を缺き、一種の癖が目立つてゐる。木村鹿之介の色彩を主とする印象的表現の企圖は了解されるが「花宴」の罌粟の花は華美に過ぎ、渡邊綱雄の「朝霧」、松宮左京の「白朝」は何れも水面と船とを扱つた穩かな寫生で、洋畫の見方が技法と一致せぬ爲に畫面を稀薄なものにしてゐた。其の他鈴木茂子、石橋秀彰などが注意された。

搬入數 一二四、入選數 四九、陳列數 五五點

社友推舉 山崎豐
社子推舉 市野亨、三好光志、松宮左京、坂鐸

一、苧米地永子、奥田正一

Y氏賞 谷口富美枝 山崎豊 安西啓明

出品目錄

寫生	岡本 成薰	小島 鼎子
村芝居	直江 義春	木村鹿之介
初夏	河野 正長	雷雨
觀劇	鈴木 茂子	夏日好菜
集座	安西 啓明	朝霧
青柿	内池 良男	榎
島椿	利谷 双樹	白朝
丁稚	石橋 秀彰	やまごぼろ
ダリア	瀧澤 久子	毒
鬼殿	坂 鏝一	醍醐
アザイナ	鍛冶 貫一	山崎 豊

黒鳥	坂口 一草	若葉	菱田 幾久
綠雲	三好 光志	樂譜	大塚 榮治
濱日照り	白井 充	光	福岡 青嵐
歳暮	池上 恒春	南枝	櫻庭藤二郎
池	丸木 位里	風化	後藤 大學
ジャズの街	佐藤 太郎	娘等	村山三男
麦	佐藤 木草	雨後	上原 兼松
海の憩ひ	谷口富美枝	綠蔭	結城 正雄
山の憩ひ	同	曲馬	山崎 豊
街裏	佐藤 章	秋興	鹿戸 林藏
羽田風景	佐藤 正一	歸漁	平岩長四郎
櫻綺	遠藤 燦可	風	直江 義春
翠	濱出 榮一	雪の家	佐藤 章
蜜桃	坂口 一草	時秋	市野 亨
海洋を制するも 運作の四)	川端 龍子	藝	奥田 正一
		濱上り	時田 直善

瀬戸市陶藝協會創立記念試作展

九月二日—四日 瀨戶市公會堂

豐橋市政記念洋畫展

九月二日—八日 豐橋商工會議所

第三部會第二回彫塑展覽會

九月二日—三十日 東京府美術館

反帝展運動の一つとして昨夏結成された第三部會は、今秋文部省展觀會が開かれることとなつて他の多くの同様の團體が之に参加若くは解散等に決したにも拘らず、飽く迄在野を主張して會の基礎を固め、獨自の第二回展を開いた。八名の會員が夫々個展の集合の如き陳列方法を取ることや、實用彫塑の部を加へて會員其の他の小工藝作品を並べてゐるのは此の會の一特色をなしてゐる。會員は各數點若くは十數點を出品して努力を見せ、一般の作風は概して穩健な寫實的のものが多く、同時に表面の瑣末な實寫に掣はれて、彫刻に必須

なる立體の構成と内在的の力に缺けた作品が多く見られた。上田直次の「加藤元帥」其の他の作品は此の遺憾を示してゐた。日名子實三は大理石の裸女を多く試み其の技巧の上では優れたものを見せてゐたが藝術的な氣品に乏しく、木彫で裸體を多く試みてゐた開發芳光の諸作はやはり表面に捉はれて、動勢に有機的な組立と抑揚を缺いてゐる。入選作品の中では特選された大野信藏の「憤」、同じく野口安友の「胸像」等が優れてゐた。會員が多く浮彫を出品してゐたことも興味があつたが、浮彫の本質を理解した佳作に接しなかつた。此の會のみではなく、我が國の彫塑に浮彫が特に未熟であることを認めざるを得ない。石川確治の彩色板彫は繪畫に等しく、彫刻的效果を殆ど有せぬものと云つてよいが、其の他の作品にしても、畑正吉の「體育會館サロンの壁面裝飾」は運動感を缺いたシルエツトであり、池田勇八の「ダービーのゴール」薄肉は素描の不足を示して高速度映畫に依る運動分解を見る如き結果を來してゐる。小倉右一郎の建築裝飾の大作「山の幸海の幸」は、寫實と裝飾化とが融合せず、浮彫の取扱ひに窮した最も失敗の一例であつた。吉田久繼の「空魔來」は様式化の上に浮彫の一解釋を認め得るが、面の取扱ひにこなれぬ粗雑さを示してゐた。

搬入數 二六四點、入選數 六一點
無鑑査出品（前回特選）一一點 會員出品一〇

〇點、總計陳列數 一七二點（内實用彫塑三八點）

準會員（永久無鑑査）三井高義

特選（次年度無鑑査）大野信藏、川島雄三、

川城良、向山峽路、野口安友
日本美術院再興第二十三回展覽會
（日本畫、彫刻）

九月二日—十月四日 東京府美術館

今春の帝展に同人以下舉つて參加出品した日本美術院は、六月、昨年の改組から滿一年で再び官展と絶縁することとなり、慌しく院展本來の姿に歸つて、此の秋季展覽會を開いたのであつた。美術界紛擾の中に在つて、進退整然とよく一致の行動を取つたことは同院の爲には幸であつた。同人の中富田溪仙を失ひ、近藤浩一路を去らしめ、又彫塑では藤井浩祐が別行動に出でた等一脈の寂寥を與へてゐるが、全體としてはよく努力し、大體に揃つた出來を示してゐた。

繪畫の出品中最大の收穫と見るべきものは、やはり横山大觀、小林古徑、前田青邨の諸作であつた。大觀の「野の花」は紙本二曲屏一雙に花野に憩ふ草刈女を寫す。野毛を散した仄かな金色の効果を主調として五彩の草花を裝飾的に描いたが、此の背景と濃紺の色調強き人物との畫面的不調和や、人物寫形の不備などの缺點は蔽ひ難い。併し此處ではそれ等の難を超えて、作者の心が畫面に溢れて觀者を捉へるものがある。傳統的な技巧の美ではなくて、たどたどしく見える筆に新鮮な感覺が湛へられ、奇巧なく穩かな畫面が強い芳香を放つてゐる。

古徑の「紫苑紅蜀葵」は畫格の高さから言つて或は本年の院展隨一の佳品と稱すべきであらう。金地六曲屏一雙に平凡な花卉を忠實に描いたもの

で、素直な沒骨の描法は技巧の冴えを誇示してゐない。全體が弱きに過ぐとも評せられたが、單なる纖弱さではなく一見平凡な寫生でありながら靜寂な自然の本質に觸れた滋味を湛へ、高貴な畫品を形つたものであつた。青邨の「白河樂翁」は端坐して甲冑に見入る樂翁公を、極めて要約した描寫で現はした。甲冑や着衣の描寫に巧みな技を見せ、全體に道具立や色彩の無駄を省いて、上品で枯淡な雰圍氣の中に此の人物の氣持を捉へようとした意圖はよく成功してゐた。たゞ省略の餘り畫面の餘白が少し無意味に近くなつた。

同人は安田靫彦を除く外總て出品して居り、以上の外特に出色の作を挙げ難いとは言へ、取材にも手法にも研究的な態度を以て、獨自の境地を拓かんとする努力が見られることや、或は自らの畫境に安住して而も常套に墮さず、楽しんで作畫しつゝ、あるもの等を見ることは、此の會に生氣を保たせてゐる。結果から見れば失敗であつたかも知れぬが、中村岳陵の「みづかけ」は日本畫としての困難を敢て冒したもので、斷崖に映する水面の光を捉へようと試みた努力は十分に酬いられず、岩陰に紫や緑の色を見過ぎてゐるのも快い効果と言へないが、作者の凡ならぬ着想は十分認められてよい。太田聽雨の「船路」は對角線を強調し、作者特有の線條を主として纏めた新奇な構圖で、劇的な姿態の船首像が海面に向つて、何かありさうに見えるが、實は何も語られて居らぬ憾がある。畫面が大に過ぎて生彩を失ひ、線に純粹を求めて無機的な冷たさに陥つたやうである。堅山南風が

水面の驟雨を捉へんとした「白雨」も畫因としては面白く、作者特有の潑刺たる描法も相當の効果を擧げてゐる。たゞ適當な省略と畫面の整理を缺いた爲に、勢を失つて些か鈍重に傾いた。

山村耕花は水墨畫の手法に新工夫を試みて、古い題材を生かさうと試みた「寒巖主」を描いた。

作者の才能を示した作ではあるが、才が勝つて筆に必然性が乏しく、且つ此の種の取扱ひでは殊に肝要な畫品に缺けてゐる。荒井寛方の「澄潭映大悲」は朝鮮金剛山にある傳説を描いたもので、結果は成功と稱し難い。此の主題ではもつと幻覺的な表現が必要であらう。溝上遊龜の「受洗を謳ふ」は現代風俗の日本娘等を扱つてイタリア十五世紀の宗教畫に倣つたもので、可憐な情趣は表はれてゐるが、此の畫材を生かすものは技巧の末ではなくて、更に一層宗教的な心情に依る統一でなければならぬ。其の他郷倉千靱「月明」、中村貞以「海女」、北野恆富「大童山」等夫々に舊套を脱せんとする努力が見られる。恆富は可なり大膽な誇張を敢てしたが、結果は低俗なる漫畫に近づいただけで失敗であつた。

小川芋銭の「聽秋」は自家の境地に安住して感ひも野心もなく、而も平凡な主題の中に、自然の聲が聽えるやうである。目新しいものは何もないが、生命を失つた類型的作品とは截然と異なるものを示すのはさすがである。酒井三良の一聯の小品七點も、深さには缺けるが、之に似た畫境で簡樸の裏に棄て難い滋味を湛へてゐる。中では「青田風」「野火」等を擧げる。

大智勝觀の「夕風」「雪晨」は規模の大を求め得られぬが、靜かな境地に楽しんで居り、奥村土牛の「兎」は質實な寫生で、單なる外形描寫に終らず生命感を擷まうとしてゐることは了解されるが、餘りに潔癖の爲か稀薄に過ぎた。田中青坪の「ダリア」「ヒマワリ」は洋畫的な花の寫生であるが、水彩畫家の企て及ばぬ線の利いたものである。眞道黎明の「猿貌」は豪宕な効果を目指し、木村武山の「武神」は威嚴を現はすべきであつたが、共に鈍い力弱きものとなつた。

同人以外では、小島一谿の「大和當麻寺」一室生寺金堂」は版畫的な味を持つた獨特の手法で、色彩も濃く裝飾的效果を擧げてゐる。郷倉和子は新入選であるが、「八仙花」は素直なすつきりした出来で快く、一般に評判もよかつた。小林草悅の「家兎の譜」は黑白の取扱ひに面白さを見せた。小林三季「雨月物語」は細緻の筆に神經の籠つた美しさを持つてゐる。現代の婦女を扱つた風俗畫も數點見られたが、それ等の中では岡本彌壽子の「課外稽古」が簡約された筆でよく氣持を捉へ、優れた素質を示してゐた。

彫塑で傑出した作品は石井鶴三の「老婦袒胸」であつた。半裸の老女の端坐する姿を寫して、衰へた肉體を土に現しながら、此の種の作品にありがちな細部の煩瑣や表面的誇張に陥らず、適確に對象の生命を捉へて之に彫刻的表現を與へた爲、頗る生彩に富むものとなつた。半ば眼を閉じた表情と共に安らかな其の姿勢は却つて強い生命感に充されてゐる。

山本豐市の「おのころ島由來」は男女兩神の群像を乾漆で試みた相當の力作であるが、未だ群像としての有機的構成に全からざるものがあり、女神の腰の邊りの解剖學的缺陷も見遁し難い。此の取材に於ては風俗史的考證は第二義以下のものとして、もつと自由な作者の空想を造形化した藝術的氣韻が望まれる。中村直人の「明暗相」（三部作の内字受賣）も亦神話の人物を現代に生かさうとしたもので、性格と劇的な姿態の表現に或る効果を擧げてゐるが、量感の追求と部分的誇張とが目立つて、稍畸形に陥つた。長谷川豐雄の「首」は構成と力感とを捉へてゐる點で將來の發展が望まれる作品。武井直也の「青年」は古典彫刻に倣つた一習作と見るべく、關谷充の「大魚先生」は個性的なものがよく擷まれてゐる。

平櫛田中の「平安老母」はさすがに完成された見事な技術を見せてゐた。其の精緻な刀技は餘人の企及し難いものであらう。同作者の明月院の古像に倣つた「源賴朝公」は、其の濃彩の故もあつてか、氣搏に缺けたものとなつた。宮本重良は「族人芭蕉像」と「或る日の芭蕉」に此の俳人の心理的表現を試みたが、重厚さを缺いてゐた。院展には相變らず刀技の面白さを見せた動物の小彫刻の類が多く見出されるが、それ〴〵に趣きを持つとは言へ、表現の領域が狭く、大同小異に終ることは已むを得ないであらう。

撤入數 繪畫五二〇點、彫塑一八五點
入選數 繪畫五二點、彫塑五〇點
同人出品 繪畫三五點、彫塑二四點

熟なる混合勢力に依つて動かされつゝあるかに見える。世間的勢力伸張に氣を取られて、藝術上の理想が疎になつてはならぬのである。陳列作品の多くが藝術的に低調であり、安價低俗に墮せんとする風潮が見られたのは惜まれる所であつた。

第一室、安宅虎雄の諸作は色彩の豊富な丁寧な寫生であつた。會員に推舉された高岡徳太郎は二人宛の女を和装・洋装・裸體の三圖に描いた。單純化を目指して特殊な個性的表現を試みてゐるが、色感の上にも技術的にも未だ十分と言ひ難く、歪形描寫も成功して居らぬ。小出卓二の「クロッキ」は色調に苦心して盡く美しいが、人物の姿態などいかにもぎこちないもの、中村善策の「獨航船」は獨特な色と狙ひに効果を収め、殊に光を反映する水の描寫は巧みであつた。俗伊之助は南佛あたりの光の強い風景、室内等を描いた四點を出品した。強く華麗な色を用ひ、練達した大まかな筆觸で纏められた明快な寫生であるが、藝術的な陰翳に缺けることが物足りない。橋本徹郎の「挨拶」は強い陽光下に途上の女達を描いたもので印象的な表現に特殊な効果を持つてゐる。

第二室では、野間仁根の諸作が異彩を放つてゐた。「花園の友人」は強く生々しい色彩で、寫實と空想の錯綜した童話的な獨自の世界を楽しんでゐる。黒い大きな花は魅惑を持つが、色の組立は餘り好結果と言ひ難い。

第三室に、木下孝則の滞歐中の作品十九點が特別出品として並べられたのは、此の會一般の傾向とは異つた空氣を一室に湛へた。習作的なものや

即興的な作品が多數で、取り立て、舉げる力作は少かつたが、何れも歐洲の傳統的な油繪を學んで、習練された快適な筆技を見せてゐた。常識的な感覺であるが、健全で明快であり、二科會に稀な正統派的要素を示すものである。「イヨンス河畔」「マドモアゼール・レーモンド」「ミレイユ」等を佳作とする。

第四室、栗原信の「秋の熱河承德」外二點の風景は、大作には堪へぬ構圖と手法とで光は描かれてゐるが味ひに缺け、無理に引伸した憾がある。小山敬三の「志摩の海女」は大作で、鹽を頭上に載せて歩む三人の海女を寫生的な構圖に取扱つたものである。描寫の平明と手法の簡潔を心掛けてゐることはよく分るが、樂に纏められてゐると言ふことは同時に、説明以外に繪畫的な感動に乏しいものとなつた。小品の風景の方は明快な美しさを見せてゐる。「熊野灘遠望」は單純化に成功し、大きな筆觸も快く水と雲とが巧に描かれてゐる。

宮本三郎は、技巧の上に最も傑出した才能を示してゐる一人である。大作「野に憩ふ」は明快な色彩で、黒を利かせた技巧は氣の利いたものであり、大畫面を纏める構圖も要を得てゐる。筆を略しても人物の姿態、表情、風俗の要點を擷んで危氣がないことは、作者の鋭い感覺と平常の勉強に依るものであらう。街の頽廢的な女を描いて危く卑猥に墮せんとしてゐるが、此處までに表現し得る力量は認めらるべきである。「ゆかたの女」は構圖の上に機智の働いた作で、色調の上にも淡墨の使用が効果を擧げてゐる。

第五室には會員達の作品が多いが、正宗得三郎、熊谷守一などは、即興的な寫生の小品に止まつて居り、坂本繁二郎は馬を描く例年の仕事を續けて居るに過ぎぬ。濱田葆光の「群鹿」は岩と共に不氣味に固く形式化されたものである。藤田嗣治は「自畫像」と「コードモの喧嘩」の二點を出品した。前者は道具立の多い説明的な畫面で、細密描は徒らに細かくて粗末であり、低調なる興味的作品と評する外はない。「子供の喧嘩」は達者な筆致で運動感表されてゐるが、内容として藝術的なものを見出すことができず、技法に新工夫を見るが其の爲に却つて此の作者の長所である細部の技巧に依る畫面の味をも失ふこととなつた。

第七室、中川紀元の諸作は、近年作者が好んで用ひる、荒い速筆の手法が手に入つて來たのを見るが、斯かる行き方は、簡略な構成と筆致の中に、豊かな内容が盛られ暗示されるのでなくては優れた藝術とならぬであらう。田口省吾の朝鮮風俗を描いた「市の日」「湯飯」は藝術的觀照の貧困を思はせる作である。島崎雞二は注目される作家で、技術上に幾多未完成な缺陷を示しつつも、藝術的な鋭い感覺と個性が常に明瞭に示される。大作の「水」は構圖にも色彩にも硬くこなれぬものがあるが、而も其の表現は一種清爽の氣を漂はせ、力強く訴へる鋭いものを持つてゐる。鍋井克之は風景靜物の外に、甚だ日本的な題材「行水」を描いた。荒い筆觸で明暗を對照させたが、即興的な軽い意味のものと見る外はない。

田村孝之介の「海風」は誇張が多く、それだけ

作意は明瞭で或る効果を擧げてゐるが、感覺にも描寫にも粗末さを蔽ひ難い。岡田謙三は特異な世界を持つてゐる。詩情と感傷とに満ちてゐるが通俗に墮せず、比喩的な人物を描いた「時」は畫面的に味ひのある作であつた。

第九室には前衛的な一群の作品が並べられた。

桂ユキ子の「旅行」、「手紙」は面白く、中々機智の働く作者であることを示す。東郷青児は近年殆ど完成の域に達した自家の手法を守つて着衣の「バルコン」、「野邊」と、裸體の「小鳥」とを描いた。特有の好みと精緻な技法は裝飾的な美しさを持つてゐるが、これ以上の發展を期待し得ぬ行き止りを感じさせる。山口長男の二作は白地に黒と原色とで素描風に描いたもので、技法的な思ひ付きだけが目立つた。

第十一室では、高根澤政子の「捕鯨」は挿繪的な面白さを持ち、田邊三重松の「初秋大沼」は地方色がよく描出されて、色彩効果も利いてゐる。

第十二室、向井潤吉の「霧れゆく寒霞溪」は大畫面の勞作であるが、其の殆ど一色に成る陰鬱な色調と肌とは親しみ難いものであつた。

尙第十室には外國作家室としてゴヤの版畫、其の他主として現代作家の作品が特別陳列された。

彫刻は第六室を中心として、各室に若干宛配置陳列された。川崎榮一の「鬭爭」は男性の力闘を現はした群像で、困難な組立を相當にこなした力量は認めなければならぬ。土田實の「女の胸像」は生き生きとして感じのある作であつた。

松村外次郎の「母と子」は寫形の上からかなり

誇張が行はれてゐるが、彫刻的な量感と安定感の表現に成功し、感傷を含まないで健全な感覺を示してゐる。上田曉「若き女」は大きく擱んで自然の心持を樂に出してゐて、固くならない所が良かった。

渡邊義知は大作「彫刻家」と「國土を護る」部分習作「鐵兜」とを出品した。何れも記念碑的な作因に成るもので、男性的な力の表現を試み、傑れた技術を示してゐる。ロダンの系統を引く技法と劇的な表現とは、内容の上では幾分狭い感情に限られたやうである。

搬入數 繪畫四二四點（一四九五入）

彫塑 二三五點（九五入）

入選數 繪畫 三五八點（三二九入）

彫塑 五九點（四八入）

會員推舉 （繪畫部）高岡德太郎、栗原信、宮本

三郎、向井潤吉、鈴木信太郎

（彫塑部）松村外次郎、笠置季男

會友推薦 （繪畫部）安宅虎雄、小出卓二

（彫塑部）長谷川八十、上田曉

推獎 （繪畫部）岡田謙三、島崎鶏二、田村

孝之介

特待 （繪畫部）中村善策、柏原覺太郎、田

邊三重松、藤井二郎、山口長男、飯

田清毅、早川國彦、藤川榮子

（彫塑部）川崎榮一、土田實、木内克

出品目錄（○會員
△會友）

繪畫

立てる女

安宅 虎雄

丘の眺敵

柳田 純好

畫房 安宅 虎雄

同 要

鷗鷗と少女

同

同

同

同

紫陽花と子供

同

同

同

同

廢墟に咲く

同

同

同

同

緋戸簾平博士

同

同

同

同

海

同

同

同

同

石と裸體

同

同

同

同

花と裸體

同

同

同

同

室內

同

同

同

同

海景

同

同

同

同

紫陽花と子供

同

同

同

同

廢墟に咲く

同

同

同

同

緋戸簾平博士

同

同

同

同

海

同

同

同

同

石と裸體

同

同

同

同

花と裸體

同

同

同

同

室內

同

同

同

同

海景

同

同

同

同

紫陽花と子供

同

同

同

同

廢墟に咲く

同

同

同

同

緋戸簾平博士

同

同

同

同

海

同

同

同

同

石と裸體

同

同

同

同

花と裸體

同

同

同

同

室內

同

同

同

同

海景

同

同

同

同

紫陽花と子供

同

同

同

同

廢墟に咲く

同

同

同

同

緋戸簾平博士

同

同

同

同

海

同

同

同

同

石と裸體

同

同

同

同

花と裸體

同

同

同

同

室內

同

同

同

同

海景

同

同

同

同

紫陽花と子供

同

同

同

同

廢墟に咲く

同

同

同

同

緋戸簾平博士

同

同

同

同

海

同

同

同

同

石と裸體

同

同

同

同

花と裸體

同

同

同

同

室內

同

同

同

同

海景

同

同

同

同

紫陽花と子供

同

同

同

同

廢墟に咲く

同

同

同

同

緋戸簾平博士

同

同

同

同

海

同

同

同

同

石と裸體

同

同

同

同

花と裸體

同

同

同

同

室內

同

同

同

同

海景

同

同

同

同

紫陽花と子供

同

同

同

同

廢墟に咲く

同

同

同

同

緋戸簾平博士

同

同

同

同

海

同

同

同

同

石と裸體

同

千物	中川 芳雄	バトン、ルージュ	瀬戸内海	小山 敬三	コドモの喧嘩	○藤田 嗣治	女像	織田久馬一	女のトルソー	渡邊小五郎
町の辻	松原 雪夫	ベルタさん肖像	月夜の静物	泉 治作	洗濯	柏原覺太郎	少女像	加賀山敬之	女の首	山本 博一
自轉車屋	近藤幸次郎	ミレイユ	梳けづる女	玉澤 潤一	櫛櫛の樹蔭	同	習作	中堀 正孝	女の首	山下 博
まりや學院	川有智良三	女、コルサージブル	櫛櫛の花	○國枝 金三	樹蔭	柴田又太郎	母の首	同	試作	堀内 正和
雨の山峽	雄川 泉昌	南佛少女	展望臺より	同	島	川合喜二郎	横臥婦	同	習作	河合 芳男
母の肖像	山崎貴英子	カフエのミレイユ	(小豆島神懸)	同	西伊豆の山	瀨尾 遙	立像	同	習作	若き手工業者
室内	西山 関二	△嬢像	関と桃畑	丹下富士男	窓邊	小林 良曹	凭る裸婦	柳田 昌	習作	胸像
スポーツ室より	國東 清	少女ブロード	沿緑池上附近	倉田 恒雄	群鹿	○濱田 葆光	鳥	同	同	同
麥積	丸野 豊司	座せる裸女	頰杖をつく女	中村 琢二	馬酔木の花	同	習作	同	同	同
ル、ベアラー	日高 健泰	I氏肖像	漁村	石脇 悦三	窓外風景	木村 光江	母と子(木彫)	△松村外次郎	若き女	老尼の首
ジュブレイ	坂本 益夫	シニョローロジタ	オリウ園	藤井 二郎	果實静物	○横井 禮市	芭蕉(セメント)	同	同	同
氣象臺	吉田 一雄	婦人讀書	の女	同	海金剛の朝	加藤 敏子	若き女	同	同	同
すけえちんぐ	菅野 奎介	夏の果實	ゆかたの女	△宮本 三郎	仁右衛門	渡邊造酒三	女の首	野水 信吉	胸像習作	自塑像
アンデル	菅野 奎介	モンマルトル	野に憩ふ	同	鳥を見る	小島 結治	男立像	堀野 秀雄	中村 暉	○君胸像
御巡幸を仰	高橋 卯八	窓	室隅静物	實角 律子	一つや坂	北窓	同	同	同	海邊の正ちゃん
ぐ白河の馬	中村喜多雄	少女	汽車の走つて	吉ヶ谷九一	信號塔の	△松本 弘二	同	同	同	Sの首
自畫像	山口 藤一	村落	ある風景	鶴永 悦男	ある風景	同	同	同	同	男の首
秋の荏原	近藤長三郎	肖像畫オーゲ、ヘンリクセン	安那服の女	西村千太郎	花火大會所見	同	同	同	同	部分習作「鐵兜」
舞妓	竹谷富士雄	裸婦習作	落書	芝野 武男	太陽島の夏	同	彫刻家	同	同	同
姉妹	中村徳次郎	裸女習作	障得馬	○正宗得三郎	(ハルビン)	尾澤 辰夫	習作	加賀山敬之	同	同
綠蔭	土岐 國彦	石屋	静物	同	森の家族	早川 貞明	エチユウド	長野 隆榮	同	同
黃昏れ	西坂 修	春庭	秋の嚴島	同	同	原 勝四郎	少年工	△笠置 季男	同	同
三人の音楽	竹田 久	舟のある風景	湖上の雲	同	同	川崎 榮一	書見	同	同	同
風景	寺田清四郎	花桃畑	同	同	同	露木 里二	婦人	同	同	同
教會の庭	仲田 菊代	兒島灣	同	同	同	日高 政法	女立像	同	同	同
肖像	△高野三三男	秋の熱河承德	最上川上流	○熊谷 守一	同	守屋 海助	座裸婦	同	同	同
△夫人像	特別出品	居唐閣(北支)	山形風景	同	同	長野 隆榮	首	同	同	同
マドモアゼー	○木下 孝則	夏草(佐渡城山)	同	同	同	土田 實	首	同	同	同
ル・レーモンド	樹氷	中野安治郎	雨乞山	同	同	大西金次郎	牛	同	同	同
裸女仰臥	雨	神保 俊子	長良川	同	同	木内 克	女の顔	同	同	同
カフエ	犬のある風景	宮城三喜子	放牧二馬	○坂本繁二郎	同	首習作	女の顔	同	同	同
イヨシヌ河畔	がくの花	黒田壽美子	河口	北川 實	同	大西金次郎	女の顔	同	同	同
ルルーとマド	志摩の海女	○小山 敬三	朝顔と娘	伊川 寛	同	木内 克	裸婦立像	同	同	同
裸女ナワツレ	熊野灘遠望	同	熊	安部治郎吉	同	男の首	男の首	同	同	同
橋向のアンドレー	志摩の海	同	海から歸る素人	明石 哲三	同	同	浴み	同	同	同
			白畫像	○藤田 嗣治	同	同	同	同	同	同

南洋の女達 (其二)	山尾 薫明	憲際	富樫 夏江	テント等	伊藤久三郎	女	モディリアーニ	シュミーズの女△吉井 淳二	立てる少女	△向井 潤吉
市の日	○田口 省吾	秋田男鹿半島	平野 弘	旅行	桂 ユキ子	裸女	ドラシ	桃園	仲 素可	小島 大輔
湯飯	同	唐破風	饒平名智行	手紙	同	顔	同	港	△酒井 亮吉	碇兒風景
花	同	カリーナル	伊東市太郎	静物	同	マデレーヌの像	同	菖蒲	同	鯉機
静物	同	鯛	野尻 三郎	ものの哀れ	同	女人像	同	夕月	須摩 健吉	室内
おび	△島崎 鶏二	イヴ	伊藤 研之	故郷の町の店	同	静物	ギユイヨール	月夜	難賀富美子	祈り
水	同	室中	後藤 俊	シシガボー	同	男の首	ザツ キン	城	初夏の寒村	初夏の庭
少年	同	猫と貝殻	中尾 一枝	ルの一夜	同	夕潮	同	初夏の寒村	旭 亮弘	停車場
サーカス	同	T子の像	井上 賢三	バルコン	○東郷 青兒	ホテルの窓	同	花苑	飯島 貞子	裸婦坐像
子供三態の圖	角野 毅	北の海父と娘	吉田 新	野邊	同	鳥籠	同	葦屋風景	小野岩太郎	汽關車
鴉を配した 子供の圖	伊藤 鑑郎	海にのぞむ	山本 直武	小鳥	同	小園	同	石切場	△松井 正	装ひ
夕暮	同	花と果物	細井善三郎	蜆蜷	同	奥吉野溪谷	金子 博信	鹽田	同	コスチューム
漆名湖	同	横臥裸婦	成田 廣	家族	同	海見ゆる農家	辰巳 義人	外出	同	婦人像
温泉の流れ	○鍋井 克之	風の湖邊	坂 宗一	馬廐	同	黄衣の女	△山本 直治	椅子に寄る女	同	中西倪太郎
行水	同	夏の伊豆風景	青木 治平	二十五號 室の記念	同	漁家	同	北陸の三等車	同	藤本かをり
鮎蓋瀧の富士	同	梅さく頃	栗林 丈	作品A	同	夏	同	寛げる女	同	林 鶴雄
静物	同	ハシレ小馬	荒井 龍男	地表の虚妄	同	二人	同	黒板	同	古淵 昭草
薄衣	△田村孝之介	赤い建物	松本 俊介	兇暴なる饗宴	同	女	△園部 邦香	老婦	同	清水 ふく
噴水	同	船山	中野 貞男	動物圖鑑	同	運池	同	高原の湖畔	同	小林 孝行
海風	同	秋深し	黒田 祐治	臥	同	捕鯨	同	朱のバンド	同	水野 勝美
猫と桃	同	丘の上	高井壽三郎	逃る鳥	同	初秋大沼	同	蘭室の花	同	加藤タキノ
鳥	同	出口 實	藤田金之助	青き裸衣	同	飛沫	同	郊外風景	同	池田 兼徳
室内	△岡田 謙三	神話	同	森の月夜	同	室戸岬	同	憩ひ	同	飯田 清毅
時	同	乗合自動車	鈴木 正治	信號塔	同	池と女	同	洋装店	同	田崎 廣助
二人	同	風景	山本 敬輔	特別陳列	同	ロシヤ墓地	同	演野 長正	同	神保 宜雄
緑の構圖	△鈴木信太郎	静物	山形 稔三	「開牛」のメロイ (エツチング四 十點)	同	炊事場	同	三芳 悌吉	同	三芳 悌吉
夕月	同	出立	齋藤 義重	シシイ風景	同	藝社の女	同	秋元 達三	同	引網
花と魚貝	同	アブストラクト	青木 壽	静物	同	あやめ	同	樺木 七次	同	同
鯉と娘達	同	鎔谷	陽 太陽	静物	同	井之頭公園	同	鎌田朝二郎	同	同
桃	同	渡邊 澄子	高橋 迪章	静物の林	同	椋側の姉妹	同	中村三樹男	同	同
夏の地中海岸	同	山路 眞護	高橋 繁喜	失題	同	漁港の朝	同	竹内 喜助	同	同
フツクとボルト	同	小川 貞彦	後藤 繁喜	水着の女	同	蓄散園	同	水清 公子	同	同
融雪	同	丹羽長兵衛	浪江勲次郎	静物	同	日傘	同	△吉井 淳二	同	同
静物	同	稲田 三郎	同	裸體	同	麥こぎ	同	△吉井 淳二	同	同
蓮華咲く辨天池	同	武田 二郎	伊藤久三郎	裸體	同	同	同	雲れゆく寒霞溪△向井 潤吉	同	同

△向井 潤吉

小島 大輔

堤 正二

甲斐 仁代

齋田 番

陳 清奇

岩本 恒三

河原 勉一

中山 安

井關 昇

兵藤 正中

小林 武夫

黒田 孝子

周 襄吉

田邊徳三郎

西村 五郎

中 利一

故木下 雅子

腕組ひ女

△昭和四年作

△昭和八年作

△昭和八年作

△昭和八年作

△昭和九年作

△昭和五年作

△昭和二年作

同

堀澤 好一

梅村 定二

竹内満沙子

橋本まさる

松田 忠一

江名港	十龜廣太郎	竹林	矢野 雄藏
或る裏街	近森 巖雄	田舎の橋	君家 三郎
氣仙沼灣	廣野 重雄	M嬢	金 宗燦
研究室	酒井 精一	三百度	米倉 允
南瓜畑	小田島 義	監督船就航	山本不二夫
玄海の濱	加藤 尚義	新住宅地風景	財 保
竹林の流れ	△伊庭傳治郎	川祭	杉浦嘉太郎
夏の比良山	同	メリーゴーランド	間所 一郎
春の京都	西田 静子	浴衣のルーチ	三橋兄弟治
動物園風景	藤川 榮子	やん	井上 安雄
三人の裸女	同	晩春の公園	別車 博資
橋はれる裸女	元川 克己	だんまり幕切	渡邊 多平
山村の春	松田 春雄	鯨鈴つり	丹羽 希保
治療室	石丸 一	神社で遊ぶ子供たち	井上 正子
庭	花谷とき子	子供たち	森 繁
風景	原 鼎	白馬	福島金一郎
慶兵と花賣り娘	水谷川忠勝	夏休み	同
猫	田川 寛一	夏休みの風景	同
豆むき	石井四郎三	秋花	萩野 康兒
大島風景	河野 潔	山麓	池田百合子
伊豫の南海	高岡 義次	阿蘇の放牧	小堀 進
S嬢	船橋 治彦	水邊	早川 國彦
浴衣の女	内藤 秀因	海南漁村	桂 龍雄
蔵王噴火口	下高原龍巳	晴れた日の海岸	飯島 八郎
手を組む裸女	ねむれる少女	曇日漁村	牧野 正吉
裸體	ググナーハーパー	南紀の海	池口 伸介
野路	黒川 健二	夏の余晴	古川 弘
アメリカ風景	榎方 寅雄	熱田みなとまつり	東木 春水
瓦	水澤 正一	大陸の祭典	鷹山 宇一
月代	相澤 義二		
人物	荒井 一郎		
少女像	名取 明徳		
日光風景	我部 政達		
アパートの庭	居相 常夫		
お濠端	高取 榮枝		

美術展覽會 (九月)

愚かな時代	廣山 宇一	蓮池	杉全 直
測量地の女	濱田 英一	花咲く丘	井上 三家
起重機	桑原 實	裸體	小川 勝藏
五月の海邊	清水 茂郎	ヴェキナスの誕生	島 あゆみ
Y氏の家族	井口 節三	建築場	小本 精
晩春の奈良公園	小野藤一郎	港の見える貴賓室	小栗 三枝
ベルの花屋	西 肇	萩山ゴルフ場	仲野 俊正
街	小澤 秋成	近港街	松井 米三
浴室	正木 通子	唐獅子圖と女	津田 周平
大谷觀世管	松田 晃八	パリの女の	山田 等
環堤屋	下瀬 貞和	早秋	田中 秋
窓邊少女	菅野 康	早秋の庭	谷 貞
南勢野	原 安佑	玩具	山口 國敏
おどり	石田 三郎	ラクビー	生澤 朗
大原女	野田加一郎	鯨鈴取りの風景	市野長之介
午後	高森 捷三	伊豆街道	荻野 正雄
郊外風景	鈴木 國威	映寫技手の像	小谷野半二
蝶に遊ぶ	松村 綾子	寫生	八重垣逸郎
晩春の景福宮	同	池畔	眞岡 太莊
總壽宮の牡丹	大塚 與志	S子	佐々木宗一郎
鏡の前	松ヶ崎亞旗	溪流	野村百合子
銘流新緑	藤井亞木良		
母子	森 英		

萩島安ニマネキン新作展

九月三日—五日 銀座・交詢社

幸松春浦新作畫幅展

九月四日—六日 大阪・高島屋

横井弘三油繪・漆繪展

九月五日—九日 銀座・小畫廊

油繪及び漆繪小品二十餘點を陳列した。

荒井龍男滯佛作品展(洋畫)

九月五日—十日 銀座・紀伊國屋

牧雅雄、木村五郎、橋本平八遺作展覽會

九月五日—十四日 谷中・日本美術院

日本美術院では本年度展覽會開催を機として、昨年中に物故した同院彫塑部同人牧雅雄、木村五郎、橋本平八三名の遺作を蒐め同時に展覧した。牧雅雄の作品は大正九年作青銅「M牧師像」を初めとして昭和九年作「藤原正雄氏像」其の他に至る迄十四年間の作品二十八點を陳列、青銅肖像の類が多く、木彫の動物彫刻等を交へてゐた。寫實的で質實な作風をよく示し、中では昭和二年作青銅頭像「母の像」、昭和九年作青銅胸像「鈴木英雄氏像」等が優れたものであつた。

木村五郎の遺作は大正十一年作「桃太郎」から昭和十年絶作「新島の婦人」に至る十三年間の作品三十九點、外に陶、木彫、漆塗等の小工藝品十六點、合計五十五點を展覧した。木彫作家として素朴な暖か味のある作風を示し、殊に郷土的な風俗等に愛着を持つてゐたことが知られる。

橋本平八の遺作は大正十一年の「猫」に始まり昭和十年の「利休」に至る六十三點、外に畫稿六點、合計六十九點の陳列であつた。總べて木彫で等身若くはそれ以上の作品も幾つかあり、道釋人物の類多く、作者の特殊な個性的表現が全體にゆき互つてよく示されてゐた。

森芳雄洋畫展

九月六日—十日 新宿・天城畫廊

津田正周歸朝展(洋畫)

九月七日—十日 數寄屋橋・日動畫廊

福岡青嵐新作紙本畫幅展

九月八日—十日 大阪長堀・高島屋

楠部彌一新作陶磁展

九月八日—十日 大阪・長堀高島屋
新自然派協會展（洋畫）

九月九日—十三日 名古屋・丸 善

太田喜二郎洋畫個展

九月九日—十三日 大阪・美術新論社畫廊

青樹社創業十周年記念洋畫展

九月九日—十三日 大阪・朝日會館

玉井敬泉社中白曜社展（日本畫）

九月九日—十三日 金澤・丸 越

ヨロツバ民藝展

九月九日—十四日 上野・松坂屋

津川清平油繪素描描近作展

九月十日—十四日 神戸・プチギャリ

白潮會第十五回展

九月十日—十四日 日本橋・白木屋

第三回近畿聯合輸出工藝展

九月十日—十六日 神戸商工會議所

近畿二府五縣聯合主催で、出品は第一部海外參考品、第二部主催府縣指導機關の試作品、第三部各府縣當業者の試作又は製作品で、三部を通じ總點數千八百二點、其の中第三部第二次審査に合格せるもの千百三十三點（二百一十一名）であつた。

第三回明朗展（日本畫）

九月十日—二十九日 東京府美術館

落合明風の率ゐる日本畫新運動の一つ明朗美術聯盟の第三回展で、搬入百五十一點の中入選三十六點、同人作品を併せて四十四點を陳列した。明風は中々努めて二曲一雙の「かまくら」吾が庭の眺め」の外「遊踪處々」の四作を出品した。「かまくら」は雪國の特殊な行事を描いて童話的な面白

さを持つが、現實感と様式化との融合に未だしつくりせぬものがあつた。「遊踪處々」の中「太海の岩」等は明風の特異な形式に纏りを見せたものであるが、其の筆癖は氣になるものである。其の他の作品多くは傳統を破りつゝ、技法的に未完成であり、一種の畫癖に陥るか洋畫を模倣するかなど形式の末に迷ふのを見受けた。研究賞の東條光高の「芽松」は色彩の生々しいものであるが形を誇張した裝飾化に或る才能を見せてゐる。荒井草雨の「志摩二題」は興味ある畫材であるが整理足らず低調なものとつた。井上陵華の「網小屋」は細部の技巧を別として、巧まぬ一情景を素直に捉へた佳品であつた。川口春波の「秋林」「春丘」の二題は勞多くして效果のそれに伴はぬ觀がある。尚藤田嗣治の出品が豫告されてゐたが、二科會の會規に依り來春の此の會に出されることとなつた。

推舉（新同人）渡邊實、荒井草雨、井上陵華

丹阿彌岩吉（新盟友）岡田魚降森、重松謙吉、

伊久留朗兒、狩野晃行、谷良治（新盟友）佐々

木順、東條光高、城野三藏、西田知都志、佐々

々木勝磨

推賞（國友賞）岡田魚降森、重松謙吉（研究

賞）伊久留朗兒、東條光高

第二回新造型秋季展覽會（洋畫）

九月十一日—十五日 銀座・青樹社

超現實的作品二十九點を陳列した。

第一回九夏會洋畫小品展覽會

九月十一日—十五日 銀座・三 越

春陽會の主催で同會々友等の作品を蒐めた會である。故原田和周をも加へて十九名七十二點が陳

列された。偶成のものが大部分で注目する程の作品は無かつた。

立石鐵臣洋畫個展

九月十一日—十五日 新宿・天城畫廊

第一回大斗洋畫展

九月十二日—十五日 銀座・紀伊國屋

若い二科出品の六名の作家李仲生、橋本太久磨、二宮榮一郎、磯田長敬、飛山幸子、花谷登起が新に結成、藤田嗣治、野間仁根の推薦で第一回展を開いた。新藝術を志しつゝ、夫々の特性を見せてゐる。

ハンガリー美術展

九月十二日—十五日 大阪・松坂屋

鶴田吾郎近作素描描バステル展

九月十二日—十六日 銀座・ラテン畫廊

第二回服飾美術展

九月十二日—十七日 銀座・松 屋

四行會第二回展（洋畫）

九月十四日—十七日 銀座・資生堂

同人四名の作品十三點、各々相當の研究作を並べてゐる。概して超現實的のもので未完成の憾は多いが、色感の優れたもの、個性的なものなどが見られた。

異國趣味時代裂展

九月十四日—十七日 日本橋・高島屋

ザンボリーニ近作洋畫展

九月十五日—十九日 神戸畫廊

吉村芳松洋畫個展

九月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊

ハリラン工藝個展

九月十五日—十九日 銀座・西野屋

第三回中國四國九縣聯合工藝展

九月十五日—二十一日 高松市商品陳列所

香川縣主催で開催。各縣より一般出品の外、商工省、大阪府立貿易館其の他所蔵の諸外國製の參考品二百餘點を陳列した。

松本慎三水彩畫個展

九月十五日—三十日 新宿・エルテル

池袋美術家クラブ第一回展(洋畫)

九月十五日—三十日 池袋・香蘭莊、コテイ紫薰莊

古代染織紋樣圖案展

九月十六日 京都美術館

矢橋六郎洋畫個展

九月十六日—二十日 新宿・天城畫廊

日本アンデパンダン協會秋季展(洋畫)

九月十六日—二十二日 神戸・元生絲検査所

龍駿介万里長城戰跡洋畫展

九月十六日—二十二日 日本橋・白木屋

岩井尊人ブラジル風景畫展觀

九月十六日—二十六日 日本橋・白木屋

日伯經濟協會主催ブラジル展に、作者が昨年南米旅行に得た水彩畫スケッチ七十餘點を陳列展觀した。

武藤夜舟滿洲事變繪卷展觀

九月十六日—二十七日 銀座・三越

第十一回染織美術標準圖案展

九月十七日、十八日 京都美術館

表現第三回洋畫展

九月十七日—十九日 銀座・紀伊國屋

中原清隆洋畫個展

九月十七日—十九日 銀座・ラテン畫廊

錨山洋畫研究所試作展

九月十七日—二十一日 神戸・ブチギヤラリ

全國竹工藝品展覽會

九月十七日—二十八日 熊本勸業館

熊本市及び同産業協會主催、臺灣を初め新潟、静岡、愛知、京都以西の二十府縣より多數の出品があつた。

潮會洋畫展

九月十八日—二十日 明石市公會堂

名井萬龜滯歐作品展覽會(洋畫)

九月十八日—二十三日 上野・日本美術協會
パリに八年間滯在して獨自の途を歩んだ作家で其の滯歐作並に歸朝後の作總計二百五十七點を初めて發表した。說明的な稚拙な作から空想的な抽象畫となる經路を示し怪奇な神經と異常なエロテイズムを露出したものである。

金城畫壇展(日本畫、洋畫)

九月十八日—二十七日 金澤商品陳列館

富本憲吉草花蔬菜線描日本畫展

九月十九日—二十一日 銀座・港屋

佐分眞遺作展覽會(洋畫)

九月十九日—二十三日 銀座・松坂屋

今春四月自ら生命を斷つた佐分眞の遺作が、友人達の努力に依つて數多く展觀された。油繪九十

六、グアッシュ、素描十一點で、故人の畫室に遺されてゐた多くの作品の中から一部分を選んだものであるといふ。油繪は外遊前(大正十三、四年)のもの二點、滯佛初期(昭和二、三年)のもの二十九點、滯佛後期(昭和四—八年)のもの五十八點、歸朝後(昭和—八十年)のもの七點で大部分が外遊中の習作である。近代の流行的形式を追ひ、或は味や技巧で小さく纏める風は見られず、油繪の傳統的な本格の修業を志して眞摯な研究を續けてゐた跡が十分了解される。印象派以前の畫風、古くはオランダ派、スペイン派の巨匠達から、クールベ、初期のセザンヌ等に學ぶ所が多かつた様である。此の遺作展に依つて彼が大成を目途として眞摯な研究に精進してゐたことを知ると共に、遂に自らの藝術を完成するに至らず、又生命と共に畫業を斷つ迄に其の發見に苦しんでゐた不幸な事を想察し得るのである。

石森其一日本畫個展

九月十九日—二十三日 八王子・森萬吳服店

永尾嘉多留南洋風物洋畫展覽會

九月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

新日本洋畫協會第二回展

九月十九日—二十三日 京都美術館

藤田華山作陶展

九月十九日—二十六日 銀座・交詢社

佛蘭西民衆版畫展覽會

九月二十日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

川路柳虹の蒐集したイマアジュリー・ボビユレ

ールの名を以て呼ばれるフランス版畫、多く十九世紀の銅版畫、中に十七、八世紀のもの、或は石版本版等をも加へて約百點を陳列した。

フォルム第四回洋畫展

九月二十日—二十四日 銀座・紀伊國屋

江藤純平洋畫個展

九月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫廊

新潟縣第三回工藝展

九月二十日 高田市・大町小學校

高木背水個展（洋畫）

九月二十一日—二十三日 銀座・資生堂

大阪學生美術聯盟第十回展

九月二十一日—二十三日 大阪・朝日會館

動向東京報告展（洋畫）

九月二十一日—二十三日 銀座・伊東屋

脇田和洋畫個展

九月二十一日—二十五日 新宿・天城畫廊

藤井達吉作畫展觀（日本畫）

九月二十一日—二十七日 日本橋・白木屋

工藝家藤井達吉が自ら楽しんで作畫したもの、絹本紙本合せて五十餘點を以つて最初の展觀を開いた。近來屢々見る洋畫家の餘技的日本畫と異り、固より専門畫家の作品とも異り、材料のこなしに熟練が見えると共に自由な表現と技法とを以て多く裝飾的な趣きあるものであつた。

山路眞洋畫個展

九月二十一日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

新畫會第一回同人展（日本畫）

九月二十二日—二十七日 京都・大丸
橋本關雪塾解散前の同人十九名に依つて新に組織された會で、小品三十六點を陳列、關雪も二點を贊助出品した。

洋畫小品展

九月二十二日—二十八日 新宿・NOVA

第一回全九州獨立美術作家協會展（洋畫）

九月二十二日—二十八日 福岡日日新聞社

寺田竹雄個人展覽會（洋畫）

九月二十三日—二十七日 銀座・青樹社

滯米十數年同地で學んだ青年作家歸朝第一回の個展で、油繪四十二點、外水彩素描等を陳列した。

小杉放庵新作日本畫展

九月二十三日—二十七日 神戸畫廊

中野秀人油繪個展

九月二十三日—二十七日 福岡・大同生命

京都三條會作陶展覽會

九月二十三日—二十九日 日本橋・三越

伊東陶山、伊東信助、楠部彌一、道林俊正、宮永東山、宮永友雄の六名の作になる陶磁器を陳列した。

現代大家新作畫展覽會（日本畫）

九月二十三日—二十九日 日本橋・三越

白日莊主催で、東西諸家の作品三十一點を展觀した。

鈴木信太郎油繪小品展

九月二十四日—二十六日 銀座・交詢社

第二回東潮會展（日本畫）

九月二十四日—二十九日 横濱・野澤屋

横濱在住日本畫家の組織する會で會員十九名の

作品四十餘點を展觀し、別に故顧問下村觀山七周年記念として其の遺作七點を陳列した。

洛案會作品發表展並競技會（陶磁）

九月二十五日—二十七日 京都美術館

白山卓吉洋畫個展

九月二十五日—二十七日 大森繪畫自由研究所

河合卯之助陶器展覽會

九月二十五日—二十七日 長岡商工會議所

伊原宇三郎洋畫個展

九月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊

大河内信敏油繪個展

九月二十五日—二十九日 銀座・資生堂

新美術家協會洋畫小品展

九月二十五日—二十九日 名古屋・丸善

第十四回黑色洋畫展

九月二十五日—二十九日 銀座・紀伊國屋

ロイド・ピサロ、エツチング個展

九月二十五日—二十九日 麹町・日本エツチング研究所

在バリのロイド・ピサロ (Ludovic Rodolphe Pissarro) はカミーユ・ピサロの子であるが、其の腐蝕銅版畫二十六點と父ピサロの同「セザンヌの肖像」一點とを展觀した。

服部亮英長江流域小品展（洋畫）

九月二十六日—二十九日 數寄屋橋・日動畫廊

昨年の支那旅行に依つて得た作品四十餘點を展觀した。

荒井龍男滯佛洋畫作品展

九月二十六日—二十九日 京城・三越

長谷川利行洋畫個展

九月二十六日—三十日 新宿・天城畫廊

桑重儀一洋畫個展

九月二十六日—三十日 瀧野川・白邸アトリ

エ

原田虎猪油繪個展

九月二十八日—三十日 銀座・三段社畫房

富本憲吉線描日本畫展

九月二十八日—三十日 神戸畫廊

十月

布士富美子人形展

十月一日—五日 銀座・資生堂

加藤溪山青磁展

十月一日—五日 福岡日日新聞社

日本自由畫壇第十五回展(日本畫)

十月一日—五日 名古屋・鶴舞公園美術館

山本直武洋畫個展

十月一日—五日 新宿・天城畫廊

黒田重太郎洋畫個展

十月一日—五日 名古屋・丸善

西丸小園日本畫個展

十月一日—五日 日本橋・白木屋

山崎省三洋畫個展

十月一日—七日 大阪・美術新論社畫廊

小野素文日本畫個展

十月一日—七日 大阪・阪急百貨店

日本服飾美術展

十月一日—七日 大阪・十合

水平讓洋畫個展

十月一日—九日 新宿・エルテル

八木一舛作陶展

十月二日—四日 京都美術館

松瀬青々俳畫展

十月二日—七日 大阪・十合

新版畫集團第六回展

十月三日—五日 銀座・伊東屋

米倉壽仁洋畫個展

十月三日—五日 銀座・紀伊國屋

青龍社第八回展覽會(日本畫)

十月三日—十三日 大阪・朝日會館

東京展覽會の約半數三十六點を陳列したが、主要作品は無論中に含まれた。

松坂屋染織名作品鑑賞會

十月五日、六日 大阪・新大阪ホテル

爽秋會洋畫展

十月五日—七日 丸ノ内・日本工業俱樂部

朱明會第一回展(洋畫)

十月五日—十日 神戸・プチギャラリ

女興會洋畫展

十月六日—八日 銀座・紀伊國屋

獨立展出品の女流作家に依つて組織された會で會員各一點宛を出陳した。

加藤靜兒近作洋畫展

十月六日—八日 名古屋商工會議所

お國焼陶展

十月六日—九日 大阪・高島屋

朱葉會洋畫展

十月六日—十日 大阪・三角堂

汎展(洋畫)

十月六日—十一日 新宿・天城畫廊

山元春汀日本畫新作展

十月六日—十一日 大阪・大丸

十寸穗會服飾品展

十月八日、九日 銀座・交詢社

小松益喜洋畫個展

十月八日—十二日 大阪・美術新論社畫廊

圖案人聯盟着尺部會作品展

十月九日 京都美術館

井上良齋第三回作陶展覽會

十月九日—十三日 日本橋・三越

藤岡昇洋畫個展

十月九日—十三日 銀座・青樹社

繪と帶の會(日本畫・工藝)

十月九日—十四日 日本橋・三越

池田遙村、板倉星光、西村五雲其の他京都畫壇諸作家四十餘名の新作畫とこれを模様化した帶地新製品とを併せて陳列した。

水野喜作陶展

十月九日—十七日 銀座・松屋

大圖同人作品展(圖案)

十月十日 京都美術館

第十七回北星社美術展(洋畫)

十月十日、十一日 敦賀商工會議所

同志社洋畫展

十月十日—十二日 京都美術館

くらま會二十周年三十七回展(洋畫)

十月十日—十二日 京都美術館

伊藤藤個人展覽會(洋畫)

十月十日—十四日 銀座・三味堂

最初の個展で静岡風景等の油繪小品十二點を陳列した。鮮麗な色彩と特殊な手法に依る効果は中々面白く、柿などの果物を巧に取扱つてゐた。風景では櫻島遠望の「眺望」、「新緑」、「雨上り」等見るべく、日本的な情緒がよく出てゐた。

中村左都貴個展

十月十日—十四日 下谷・池之端神戸屋

第四回商工省輸出工藝展覽會

十月十日—十六日 東京府商工獎勵館

商工省輸出工藝展覽は昭和八年以來毎年繼續して今年は第四回を開いた。東京開催後は大阪、名古屋の各地に展觀し、出品物中選拔された一部は明春紐育日本工藝展覽會に、一部は同巴里萬國藝術工業博覽會に出品される豫定である。

出品は別表の通り搬入數四四六五、陳列數一五四一點、審査を受けた九七二點中九七點が擬賞され、紐育陳列會出品物としては一般出品二二七、無鑑査出品一四一、合計三六八點が選定された。尙是等の外工藝指導所、陶磁器試験所の出品があつた。

本年度の審査委員及び分擔は左の通りである。

委員長 武内可吉(陶磁器) 平野耕輔、日野厚、瀧藤治三郎、松田權六(漆器) 國井喜太郎、飯野逸平、瀧藤治三郎、松田權六(染織) 和田三造、永井得一、後藤忠治郎(金屬) 高村豐周、國井喜太郎(木竹) 日野厚、宮下孝雄、前田健二郎(綜合其他) 宮下孝雄、和田三造、前田健二郎

出品

陶磁器	一般出品		無鑑査		陳列總數	
	搬入數	合格數	搬入數	陳列數		
	四八五	一一〇	二一二	一一五	二二五	
	一〇一	五〇〇	一七	一四	九四	

漆器	金屬製品	染織製品	木竹製品	綜合其他	計
二〇四一	二九一	四七六	一八五	一六三	七五五
一九八	一四二	一六二	二九四	一七〇	四九二
六三〇	一二八	一九六	一六六	四七	二七四
二二二	一九一	三九	九二	二八	五九一
一四一〇	七二三	一五九	一三六	一七三	五四七

授賞

陶磁器	漆器	金屬製品	染織製品	木竹製品	綜合其他	計
一	二	一	一	一	五	一三
七	二	二	一	一	一	一三
一三	二八	一三	一	一	七九	九七

授賞

陶磁器、硝子其他ノ窯業製品

進歩賞「芍藥畫シヨートセット」日本陶器株式會社

有功賞「クリスタル、スチーム、ウエアー」各務

鑛三「クリスタル果實セット」佐々木硝子店、

「紅茶摘」大倉陶園、「花模様デナーセット」日

本硬質陶器株式會社、「梅模様珈琲セット」株式

會社名古屋製陶所、「唐草模様デナーセット」東

洋陶器株式會社、「青桐地紋珈琲セット」香蘭合

名會社

漆器

進歩賞「珈琲碗」會津漆器同業組合、「サービス

盆」廣瀬俊雄

有功賞「小宮」東華堆朱工藝株式會社、「珈琲盆」

河野篤二

金屬製品

進歩賞「アイスクリームカップ」紅々堂

染織製品

進歩賞「密屏風」山鹿清華

有功賞「銀モール入シホンベルベット」京都織物

株式會社、「ラッシエル」鐘淵紡績株式會社

木竹製品

有功賞「木製ボタン」川口惠次郎

綜合品及其他ノ工藝品

有功賞「置時計」金澤輸出刺繡研究會

時の美術社新作畫展

十月十日—十七日 日本橋・白木屋

各派綜合美術展(洋畫)

十月十日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

日本美術院再興第二十二回展覽會(日本畫、彫

刻)

十月十一日—二十五日 大阪市立美術館

大阪に於ける院展は新に開館された市立美術館

で開催した。彫塑部同人保田龍門作「吉岡訓導殉

難群像」外三點は大阪で初めて出品された。

大衆向工藝品競技展

十月十日—二十六日 京都美術館

富本憲吉作陶展

十月十一日—十四日 上野・松坂屋

第二回名作茶器陳列會

十月十一日—十四日 上野・松坂屋

長谷川利行東京風景油繪展

十月十一日—十五日 新宿・天城畫廊

第六回東海美術洋畫展

十月十一日—十八日 名古屋・鶴舞公園美術館

無鑑査の公募展である。

新漫畫派集團展

十月十一日—二十日 新宿・エルテル

山下繁雄洋畫個展

十月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

近代漫畫展

十月十二日—十六日 銀座・紀伊國屋

大野麥風近作日本畫個展

十月十二日—十六日 神戸畫廊

河合卯之助陶器展覽會

十月十三日—十七日 大阪・三越

「河合氏の陶器にはその模様に雜草を多くとり入れてあるがそれがうまく調和するやうな素朴な味ひに満ちてゐる。結文加彩香爐」「大蓼一輪生」「野芥子赤繪汲出茶碗」「萩赤繪汲出茶碗」等は愛すべき作品で作者のまごころが響いて来る、また押葉を直接模様化したものも技巧的に研究が積まれたので獨特のよい味ひが出てゐる。(大朝)

十寸總會服飾作品展

十月十四日、十五日 甲子園ホテル

小西謙三洋畫個展

十月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

第三回佐賀錦陳列會

十月十四日—十九日 日本橋・高島屋

錦好會主催、會員の作品の外佐賀錦に關する參考品多數を陳列した。

横濱美術協會第五回展覽會(日本畫、洋畫)

十月十四日—二十日 横濱興産館

横濱在住の日本畫家及び洋畫家に依つて組織される同會の公募展で、日本畫五十七點、洋畫二百三十八點、合計二百九十五點を陳列した。

水越松南個展(日本畫)

十月十五日—十七日 大阪・朝日會館

新舊作七十餘點を展觀した。

國際ボスター展

十月十五日—十七日 名古屋商工會議所

萌生會洋畫展

十月十五日—十九日 銀座・伊東屋

第二回靜岡縣美術協會展覽會(綜合)

十月十五日—十九日 靜岡市公會堂

一般出品を公募し會員出品と共に陳列した。陳列數日本畫三十一、洋畫百三十六、彫刻十四、工藝十二點、合計百九十三點であつた。

二科金澤展(洋畫)

十月十五日—十九日 金澤市商品館

日本自由畫壇第十五回展覽會(日本畫)

十月十五日—二十日 京都美術館

同人作品の外一般出品を併せて總數三十三點を陳列した。

京都市大衆向工藝展

十月十五日—二十一日 京都美術館

龍村平藏新作帶地陳列

十月十五日—二十一日 日本橋・高島屋

第二回基督教美術展

十月十五日—三十一日 神田・YMCA

第二回佐々木永秀作品展覽會(日本畫)

十月十六日—二十日 銀座・三味堂

「月下清談」其の他の近作品十九點を陳列した。
ガストン・オーシュコルヌ彫塑水彩畫展

十月十六日—二十日 大阪・松坂屋

第四回日本美術院同人作品展覽會(日本畫、彫刻)

十月十六日—二十一日 上野・松坂屋

日本美術院の繪畫部二十七名、彫塑部十三名の同人達が夫々一點若くは二三點を出陳したものでいづれも小品である。小川芋銭の「秋山明淨」は絹本に秋色美しき淡彩を施したもの、色を惜んだ奥村土牛の「鵲鵲」、線の効果に工夫した太田聽雨の「そとほし媛」、白描に金泥のみを用ひた安田靫彦の「不動明王」、夫々に洗練の技を見せ、前田青邨の「奥の細みち」は旅姿の芭蕉を簡素な線で描いた。溝上遊龜の「風」も愛すべき小品であつた。彫塑では新海竹藏の木彫「髪」が軽い味ながら面白く見られた。

第二回岸田生劉遺作回顧展覽會

十月十六日—二十六日 新宿・天城畫廊

同畫廊では去る七日岸田劉生遺作展を開いたが其の第二回として、未發表の遺作素描四十點に油繪約十點を加へて陳列展觀した。

昭和十一年文部省美術展覽會鑑査展(綜合)

十月十六日—十一月三日 東京府美術館

帝國美術院會員十餘名の辭表提出に依り今秋開かれる豫定であつた第二回帝展は事實上開催不能に陥つた爲、之に代るものとして別記の如き経過に依り文部省は昭和十一年美術展覽會規則を定め委員を依頼して此の展覽會を開いた。開催方法は舊帝展の如く四部綜合としたが、會期を二分して

前半を鑑査展、後半を招待展とし、鑑査展は新人獎勵の意味を以て鑑査を受ける作品のみとし、招待展は既成作家を優遇する趣旨で展覽會委員、帝國美術院會員は固より、帝展無鑑査以外に範圍を擴大して相當の經歷ある多數作家の出品を招待する方法を執つた。此の兩者を會期に依つて分けたことは會場狹隘に依る困難解決の爲で、帝展に於いて部に依る隔年制の試みに代へた新な試みであり、其の結果は多數の作品を收容する目的には叶つたが、勢ひ寛選となつて程度の低い作品が氾濫し、先輩後進の作を同時に見ることの出来ぬ不便さと共に制度として一般に不評であつた。但し第四部だけは會期に依つて兩者を區別せず陳列室の區分に依つて總て全期間陳列した。

美術界の紛糾は猶解決されざるのみか一種の決裂狀態に陥つた爲、此の時期に此の方法で開かれた文展は今春の帝展とはほぼ反對の形となり、帝展を支持した作家達の多くは参加せず、反帝展を唱へてゐた作家の多數が出品する結果となつた。院展に屬する作家達は舉つて官展を去り、第二部會は所謂在野運動を一擲して會員一般出品者共々文展に出品した等である。二科會其の他の所謂在野團體は依然其の立場を變へず従つて新文展は大體舊帝展系作家の展覽會となり、而も帝院會員中の有力な若干の作家や、洋畫界の新進作家の一群等を失ふこととなつた。

鑑査展は第一部三百六十七、第二部三百七十三點と言ふ多數の入選であつた。第一部日本畫は出品が陳列壁面を遙かに超過した爲授賞及び選獎作

を除いて前後二回に陳列替を餘儀なくした。寛選だと言ふ非難が一般に行はれたが、作品の成績から言へば若干の低度の作品を除いては甲乙の附し難い技術のほぼ平均したもので、之を更に嚴選することの困難さを思はせた。併しそれは一般の程度が優れてゐると言ふことでなく、傑出した作品が殆ど無いと共に、全體として遺憾ながら低い水準に止まつてゐる爲である。

第一部に就いては、舊帝展の或る時代に見られた様な絢爛を競ふ卑俗な豪華趣味は比較的減少し色彩の上にも落着きと近代的な明快さを求めようとするものが多く、又技法の上で舊套に泥まず、自由な技法を驅使して新しい表現を試みようとするものが多く見られたが、それ等の多くは日本畫の材料の特質を生かしたものと云へず、傳統を破壊することに急であつて未熟未成の觀があつた。殊に洋畫風の氾濫は何人にも目立つた所で、所謂塗り繪の流行は多くの評者を悲しませた。授賞選獎の作品何れも甚だ洋畫近接を示すもので、當局の獎勵方針を難する評も行はれたが、傳統的な技法のものに優れた作品も見られなかつた。

文部大臣賞を得た加藤榮三の「薄暮」は單純な構圖に薄暮の空氣と自然の悠久感を或る程度現はすことに成功してゐるが、厚塗りの畫面は材料の驅使に無理が見えて色彩と技法の混濁に弱點を示し、牛の描寫にも寫實の不足を思はせるものであつた。選獎の諸作も取り立て、優れた出來とは見ることが出来ない。曲子光男の「濱木綿の丘」は裝飾的な畫面で弱々しいが或る情趣を現はし、秋

野不矩の「砂上」は機智の働いた作であるが裸體の子供の姿體など寫眞を聯想させる。兩者共甚だ洋畫に近く、殊に「砂上」は影を描いたが色感冷たく光は全く現はされてゐない。山本丘人の「海の微風」は細緻な寫生で素直な描寫に好評を得たが纖弱さを免れぬものであつた。

其の他の作品では今野可啓「鐵塔相承」、橋本明治「蓮を聴く」、長谷川路可「蘭學事始」、西岡聖鵬「鳴戸」、西村卓三「得度」、奥村厚一「雪の音」、狩野光雅「雨後」、荻谷鸞行「映像」、立石春美「姉妹」中川正次「夕顔」、南家有吉「初冬」、上林大韻「穴穂部間人妃宮」、増田正宗「防人歌」、小坂勝人「秋溪」、寺島紫明「九月」、海老原南爽「鶴」、木本大果「山」、菅澤幸司「はまゆふ」等夫々に特色を持ち注意された作であつた。

第二部の洋畫は會場効果を狙つた大作が多く、筆觸や形態の誇張等に特色を示さんとし、相當に達者な技巧の多くの意氣の盛なることは見られたが、落着と滋味を有するもの、觀照の深さを示すもの極めて少く、輕薄な驕がしさを多く見たのは遺憾であつた。第一部の場合と同じく技法的の確信が茲にも不足してゐると共に、畫材と言ふよりも表現せんとするもの、貧困が目立つのである。其の爲に強ひ、散策、砂上、畫室等の如き風俗畫とも言へぬ構圖の爲の退屈な畫面が氾濫してゐる。

大臣賞の朝井閑右衛門「丘の上」に就ても批評は區々であつた。作者の西歐的空想を描いたもので壁面裝飾的な畫態であるが、質實なる精神的統

一と技術の基礎を缺き、其の爲に畫品の低い不健康な作となつた。たゞ此の作者には特異の才能が認められるから今後を期待すべきであらう。伊藤清永の「磯人」、川端實の「海邊」何れも才筆が目立つて眞實感に乏しく、借り物の觀が深い。倉員辰雄の「巖」は忠實な寫生畫で重苦しい岩質の表現はよく出來てゐた。面白さを缺くが正直な作品である。平通武男の「洗濯屋」は技術は十分と言へず粗笨な描寫であるが矢張り質實さが見える。

岩崎勝平の「小憩」は畫材にも描寫にも日本的な氣持を見せた一種の味はあるが、確實性を缺いて弱いものとなつた。鈴木榮二郎の「草丘」は童畫の如き無邪氣な面白さを持つた作であつた。

以上は選獎されたものであるが、審査の標準は兎も角として同程度或は何等かの意味で優れてゐる作品は他にも幾つか見られた。石川滋彦「スングリーの岸邊」、李仁星「閑庭」、大村かねよ「遊樂」、牛島憲之「島の貝燒き」、胡桃澤源一「秋庭」、南政善「馬ならぶ」、新道繁「草丘」、須田剋太「休憩時間」等が其の主なるものであつた。中で李仁星は豊かな詩情と色彩感覺に優れ、大村かねよの「遊樂」は無氣味な鋭さを示してゐた。須田剋太の作は佳品と稱し難いが自己のものを持つてゐる。

第三部彫塑では空虚な誇張を示した大作の類が比較的少く、概して習作の程度に止まるものではあるが、質實な寫實に基く素直な作品も見られた。相變らず空疎な裸婦像の多い中で星野直弘の「腰かけた女」はたくまずに自然に若い女を現はした佳品であり、漆原馬須雄の「ひざつく女」も人體

の柔みを感じさせた。選獎された吉田徹示の「働きの行く男」は勞働者の歩む姿を寫して相當な技術を見せてゐるが、肝心の生命感に缺けたものとなつた。藤野舜正の「鐵工」は無難であるが力の稀薄な作である。

小品であるが富永良雄の「F子之首」は個性的な特質を捉へて力強く、堀江尅「兄之首」、瀬戸團治の「女之首」、夫々異なる意味で優れてゐた。新約のエジプト逃避を主題とした柚月芳の「野天家族」は様式化に特色を見せたが、わざとらしさの目立つ作で成功と云ひ難い。

木彫では高橋英吉の「少女像」、古川順三「おね弟」、太田南海「雪ぞら」等注意され、佐藤靜司の「かわうそ」は寫實的に優れてゐた。選獎作で宮本朝壽のスケート姿を寫した「銀線を描く」は寫形の鈍さから輕快な運動感と姿の美しさを捉へ得ぬものとなつた。山口四郎の「唄」は木彫の技巧的自由さが認められたのであらうが、現はされたものには藝術的價値を見出し得ない。

第四部美術工藝は招待作品と同時に陳列されたが、入選作品は搬入數七百六十九點の中百九十四點であつた。漆工、金工が主位を占め、陶磁、染織の外に少數の木竹工、皮革、硝子、人形等で、金工に硝子を併用したものも一、二見られたが試作の程度を出でぬものであつた。概して舊帝展時代とさしたる變化なく、傳統的な技術を守るものと現代の感覺に合致せんとするものが見られたが、特に材料や技法に大膽な創案もなく、技術の上では中庸を得た全體に平凡な出來と云ふ外はない

形態や裝飾に必然性を缺いた技巧過多と、藝術的氣品の缺乏とが相變らず此處にも見られて、展覽會工藝を生活の器具としての親しみから遠いものにしてゐる。言ふ迄もなく工藝の創作には、技巧以外に形態や材料の美に對する極めて鋭い感覺と藝術的統合力とを必要とするのであるが、それ等の不足から多くの新工藝が味の深さを缺いた生硬なものになつて現はれる。

選獎された磯井如眞の「漆サボテンにホロホロ鳥飾棚」の技術的勞作たることは推賞に値するが様式上の未完成が目立つて落着いた味を持つてゐない。番浦省吾の「草花圖彩漆衝立」には草花の圖案的取扱ひに潤ひある感覺を見出すことが困難である。内藤四郎の「柳波文平脱小箱」は單純の美しさがあり、都幸幸哉の「松竹梅翁之面宮」は傳統的な落着を見せてゐる。鑄金で林萬壽人の「青銅花瓶」は無難、渡邊紫鳳の「とんぼ文花鉢」は素直な作であつた。山脇洋二の「鍍金野牛置物」は造形的に多少の難はあるが此の種のものとして優れ、作者の才能の鋭さを示した作であつた。

陶磁器の多くは表面の技巧的虛飾に止まつて陶磁の本質の美を現はしたものが殆ど無かつた。之に比べて木工で青柳謹齋の「挽撓め造り筥」の謙讓な無裝飾の美しさは、工藝美に就いて教へる所が多いのである。染織刺繡類では選獎された「みのり刺繡壁掛」が輕佻さのない品位を持つた點で優れ、宇野光恵の「春鶯囀壁掛」は緋り織に依る效果の面白いものであつた。人形が六點陳列されたが、中には到底入選の意味を解し得ないものも

雪中名鑑之圖	萩原 達義	蝦站を捕る舟	水野 陽翠	櫻を織る	室田秀太郎	倉園	大岩 聚星	汗	柴田 翠城	野邊	川崎 雅
秋晴	大高 爲山	白雨	古市麻佐緒	人日	土肥 蒼樹	桶狭間	小寺 禮三	飛行機のお店	丹羽阿樹子	尾瀬沼の夏	三宅 星明
中國ノ山	木村 廣吉	水郷	河村東次郎	御菩薩ヶ池	高山 三路	大和の家	石田 耕古	夕	和田 菁華	汀の朝	小林 觀齋
愛護	鹽崎水仙洞	鷹	高田 美一	軍鶏	猪田 青以	機織	末藤 米圃	湖群	藤村 茂	雨意	川合 白流
雪	片桐 白登	筑紫路	松尾 晃華	岬丘	大橋 基甫	廢船	西山 英雄	松花道庭	松居の雨	高原暮色	島 村亮
築守る小屋	中西 一路	吉日	小林 立堂	雪の竹生嶋	伊藤 晃珠	麥畑	松尾 冬青	宮居の雨	佐藤 空鳴	秋林	酒井 白澄
游鴨	橋本 虹影	高原の五月	加藤美代三	安息	栗山 弘演	サークスの馬	安藤 寛	母	萩田 東嶺	湖畔新秋	奥田 巖三
山湖朝霞	大貫 鉄心	夕趣	湯川 三舟	鏡の前	中本 英夫	初冬	南家 有吉	大空を彩る	石田 重子	三人の女性	長谷川路可
残雪	羽田 晃雅	山吹	九岡比呂史	猿	芝 正雄	瀬戸風景	上田 道三	山村小景	井上 白楊	蘭學事始	中谷 金鷄
にわか雨	竹内 鳴鳳	葉櫻	諸永 青晃	銀砂灘	横江 正義	秋晴れ	廣田 多津	雨雲れ	荒井 絳荷	鶏を抱く少女	松田 修坪
秋至る	佐々木春華	澤あぢさい	齊藤 紫山	荷上げ場より	吉田 義夫	探芝者	河野 秋郎	光琳と乾山	川邊菊二郎	さつきごろの月山	
朝霧	雅暎 紅朝	加茂川	川本 參江	土に遊ぶ	戸島 光夫	砂濱	水田 慶泉	波太の磯	羽石 弘志	ドン・マンショ	
山の朝霧	堀江 春雲	鬼島平	衛藤 晴村	キャンピングにて	龜田 辨次	幽庭	栗田 槐山	曇り日	中村 徳二	伊東裕益	
おとり	河野 華彦	山の池	細見 豊	得度	機 大晃	雲仙高原ノ初秋	大矢 峻嶺	露天風呂に遊ぶ	清水 保二	氷松	
曉霞	稻葉 春生	眞夏のながれ	大教 春寛	朝鮮風俗四題	西村 卓三	洛西閑苑	寺嶋 春豊	澄心	新村 友猷	高原	
殘秋	三井惣太郎	畫さがり	川村 虹橋	右一、厨房	松田 黎光	室生印象	池田喜久子	白道	宮原 武文	洛陽富貴	
春郊	菅江 白華	ひかげ	阪本 音彦	左一、空房	二、妓生の家	夏立つ庭	本郷 越嶺	荒磯	太田 義一	春光	
野徑	藤森 青雲	湖畔夏日	木下 青陽	春日の奥山	谷口 英雄	頭塔の石佛	松平 春樹	北國の初夏	舟山 三朗	武者圖	
園翠	福田 青藤	三面鏡	堤 利彦	初夏晴日	高田 文也	河岸	市原 稔	熱ふ海女達	伊藤 鈴子	玉璽	
街道すじ	稻垣虎之助	河原	會津 勝巳	朝霞	北上 聖牛	廢車	野澤 文臣	午後の日	浦田 正夫	庭	
サンティモン	陳 進	山池首夏	北川 蒼洋	香落紙	廣本 進	南島夏日	井上 和雄	沼のほとり	湯上 珠	畫をかく子供	
社之女	竹内 未明	春餘	西垣 壽	鯉	井上 流光	阿片	樋口富麻呂	笹原に巣立つ	松垣 鶴夫	木の實	
中之嶋	石塚 晃溪	白日後庭	中瀬 昂	深秋	今尾 景春	秋雨	高山 完	足立 光嶺	久本 春雄	みやまのから	
男具那之峯	遠山 唯一	深山の初夏(上)	濱田 觀	明石港	中堂 長賜	春日野	山本 朝光	須網 雨亭	渡邊 玉花	さは	
溪間	青木 崇美	高地)	野原 鳥聖	寂入り	川原 静子	野に遊ぶ	飛泉	須藤 和秀	遠藤 救三	磯の松	
砂丘放牧	野々内保太郎	草苑	山崎與彌夫	乞花來	融 紅鸞	飛泉	洗暑	湖みつる頃	今井壽々子	磯をつくる	
深山木	松橋 映水	絲を繰る	福岡 玉僊	運香	森本 三木	洗暑	石田 信雄	大島風景	川崎 求霞	茶苑	
幼き日	須田 青蒲	芥生の秋	崎山 喜義	秋聲	福本 嶺溪	楓烟	安島 雨品	社之裏	間宮 正	磯の松	
溫室ノ一隅	角田 磐谷	高雄路	林 貞之助	箕面溪流	河口 處船	立秋	吉田 勳牛	朴若葉	福田 元子	淡月	
あさつゆ	水かけ	關の秋景	田村 豊洲	雲崗石佛寺	直原 放生	海音	不二木阿古	磯のうら山	山口吉三郎	夕月	
(自十月二十五日)	楓	夕照	小島 氣郎	朝	福興 悦夫	蟲の音	谷野 圭一	砂丘	岡田 昇	秋興	
(至十一月三日)	關の秋景	夕照	中野 芳樹	夏	中尾 寛谷	城	井上 正晴	秋日和	關田 華堂	第二部 繪	
林間學園	池田 尙志	關の秋景	小野 踏青	村のおどり子	伊藤美代乃	南園樂園	中島 春鷗	霜晨	山田 申吾	畫	
夏の小學校	淺野 正俊	關の秋景	小野 踏青	村のおどり子	朝見 香城	湖城の雨	池田長三郎	野火	池内 龍朗	白いベール	
木枯	田口 黄葵	新秋	茂森 繁二	紅梅	淺井 正臣	擴炭場	大日三世子	秋聲	秋元 節朗	草上	
家路	一噌 青水	殘る夏	鍛冶 照塵	判官と忠信	林 雲鳳	神苑				山中清一郎	
水邊初夏	森 正元	遠足									

新秋	鳥のある静物	鈴木三五郎	濱に遊ぶ蕃婦	淀田 繁	テラス	古屋 浩蔵	若い女	村岡 平蔵	五月の山手(水彩)	青野馬左奈	生
花園の午後	花園の午後	箕浦壽喜三	浴女	勝間田武夫	編物を手にする女	川村 滋	胡桃のある風景	名村 定志	眞夏の海(同)	五井 開一	みちゆく
着衣二姿	土佐林豊夫	室内	長	田中 孝夫	赤衣座像	藤原 昇一	二人の女	牲川 英雄	園芸に遊ぶ(版畫)	常察 英雄	習作
閑庭	小川 博史	流水の頃	関庭	朝倉 力男	窓前の卓上	田原 輝夫	土佐の海邊	探本 歳二	橋(同)	人海(同)	勝平 得之
裏庭	山下大五郎	新日本の爲に	桑重 清	中川 康之	兄弟	藤田 慎治	常松 菅晴	大沼 静蔵	甲冑(同)	武田 由平	野々村一男
婦人	島津 一郎	桑園の女達	鈴木 敏	鈴木 敏	島の貝焼き	浅井 忠雄	秋近き朝	村田 保三	花(同)	龜井藤兵衛	立てる若き女
池の見える風景	尾崎 勉	豚	武藤 貞一	運池	内田 一郎	田村繁志那	藝者風なモデル	廣本 森雄	家鴨飼ふ家(エツチング)	中田幾久治	坑道
卓上静物	光 千壽	肖像	故清水 辰喜	峡谷の朝	内田 一郎	田村繁志那	緑の休息所	副島 秀生	河野(同)	關野準一郎	泉
北アの一訓	土橋 芳次	笛	沖 嘉一郎	七月のある日	瀬野 覺蔵	西村 計雄	スタヂオにて	秋保 正三	吉田山より見たる京都市の一部(同)	中井平三郎	アルビニスト
刺繍	高橋 雅子	提琴	中谷 健次	ギター	宮島 守	古木 守	ある家族	赤津 豊	船の修理場(同)	曾我尾武治	雪のあした
女三人	光安 浩行	M老人	伊藤 澄子	室内	加藤 精一	武島 武男	紅頭嶼	宮武 辰夫	髮	石原 昂	雪かな夢
静物	染谷 章	夏(九十九里)	伊藤 鎭一	樹間	土本 豊	三人の留學生	芝居	松居 均	少女立像	都築 安一	制空
海	安達眞太郎	静物	若き日	室内	加藤 精一	武島 武男	室内	松居 均	母と子	山田阿利一	洋犬
洋裁店	北村 綱義	初秋	丸山 芳夫	室内	加藤 精一	武島 武男	室内	松居 均	少女立像	山田阿利一	洋犬
休みの日	白石久三郎	岩山風景	武田 伴一	高原に炭を焼く	井上 脩	武島 俊明	母と子	入江 毅	裸婦立像	尾崎 一草	水邊
庭光	藤岡俊一郎	いか釣り船	高橋 道雄	朝	武島 俊明	高見澤隆明	高野山遠望	横垣 孝一	髮	江川 治	F子の首
金魚、桃など	土肥 元	二重唱	野々垣甚一郎	鮎捕り	高見澤隆明	富山 芳男	水牛と少輩	安達 良雄	若き日	藤野 峰正	兄の首
髪を梳く	正木 順子	夏の一時	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
遊樂	大沼かれよ	夏(九十九里)	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
風景	阿部 七郎	夏(九十九里)	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
金魚を掬ふ子供	徳永富士子	夏(九十九里)	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
馬車のある風景	森 八千代	夏(九十九里)	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
静物とうが	伊佐治勝太郎	サカスにて	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
子供のある庭	田村 一男	愛宕山	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
少女座像	渡邊 一郎	夏(九十九里)	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
裸女四人	岩下 三四	楊柳嘉氏之家族	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
水上家族	藤 彦衛門	雪景	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
海邊の裸婦	池田 浩	秋光	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
風景	正田 二郎	或る日	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
朝鮮印象	安武 芳夫	風景	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
分譲地	西野 英二	風景	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
百花園夏景	若松 卯吉	風景	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
私の水族館	中村 忠二	丘と小川	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
秋晴れ	小林 泰山	風景	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき
話を聴く子供等	清希 卓示	母と子供	阿部 七郎	女と猫	高見澤隆明	富山 芳男	赤衣の少女像	園部 晋生	裸婦	山内 倉藏	あき

木の實	清水 源可	裸婦	石渡清三郎	浴後	太田 良平	伊東 翠	觀衆人形	堀 柳 女
微覺	伊藤 精完	おどり	柴田 佳石	ウクレレを持つ	水船 六洲	難波 仁齋	歌集人形	椎 名 静 枝
働キニ行ク男	吉田 敬示	田家の暮タ	牛山 天玉	女	宮本 朝澤	市橋 鷺 山	母と子人形	平 田 郷 陽
餘韻	小川 孝義	習作	三木 凱歌	銀線を描く	三枝徳太郎	加藤 忠三郎	冬人形	佐 野 光 輝
長閑	阿部 東晃	キリン	佐藤 匡義	長閑	山口 四郎	越 田 尾 山	鉦起黄銅手爐	藤 本 長 邦
乙女	來家 虛暉	感情	岩佐 達綱	若き女	中村 七十	小 川 英 鳳	牡丹文様銀皿	介 川 芳 秀
傷魂	宗像庄一郎	裸婦	宇佐見西江	芽生	松本 昇	板 谷 梅 樹	鯉文釜	根 來 實 三
男	宮地 寅彦	球	千村士乃武	淨心	樽谷清太郎	岡 本 昇 三	喫煙具セツト	増 田 三 男
新しき女性の	進藤 武松	裸婦	菅沼 五郎	裸婦	安田周三郎	山下 楊 哉	象嵌乾漆盛器	鈴木利季夫
投影	上田 薫	裸婦	小笠原安兵衛	首	木場 春彦	鈴 木 泰	鍍金白四分一香爐	大 西 甚 平
水球	中島 浩	おけいこ	緒方 敏雄	裸女	八柳 正雄	高 橋 勇	天使魚花瓶	川 本 吉 藏
はかけ	長谷川 昂	女習作	瀧 一 夫	析	倉持 芳	中 川 哲 哉	乾漆十角鉢	山 永 光 甫
湖心	早乙女龜次	少女	石井 遊	静平	先崎 榮伸	小 木 曾 彌 喜 知	洋銀孔雀香爐	森 村 西 三
鳥人	叔山 三駿	あそぶこ	坂上 正秋	裸婦	遠藤 謙	宮 坂 房 衛	漆器鷄手箱	河 面 冬 山
蒼穹	星野 健一	習作	廣井吉之助	立てる女	大嶽 茂樹	村 木 華 郁	淡黄釉藝文花瓶	石 川 信 太 郎
裸婦	佐藤 邦輔	習作	後藤 忠助	習作	高村 泰正	宇 野 村 蝶 恵	黒耀釉瓶掛	寺 池 旬 姪
ひざつく女	漆原馬須雄	疊石	片岡 環	麗春	柳沼 黒師	菊 田 香 石	陶製軍鶏置物	淺 見 賢 一
裸像立像	鈴木三郎助	布を持てる裸婦	太田 南海	さる	綿引 司郎	大 野 玉 枝	花紋乾漆花瓶	中 後 茂 守
追憶	木村 鷹	雪ぞら	法元 六郎	浴女	佐藤 恒三	林 雨 染	緋合金製フロアランプ	眞 鍋 光 男
丘	長澤 幸夫	清寂	星野 直弘	牛	岩田 千虎	井 上 素 明	紅葉葵繪花瓶	九 谷 端 堂
あね・弟	古川 順三	立つてゐる女	星野 直弘	牛	岩田 千虎	橋 越 自 入	草花圖彩漆面立	中 條 義 吾
裸女	小野田高節	腰かけた女	星野 直弘	牛	岩田 千虎	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
第四部 美術工藝						槻 尾 宗 一	刺繡波紋流水テーブルセ	長 谷 川 文 平
みのり刺繡壁掛	平野利太郎	矢野 文 堂	銀四分一重れ打盛鉢	八 田 蘇 谷	鈴 木 孝 次	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
六角形寶石箱	加賀 月 華	加賀 月 華	沙魚風呂先	小 野 爲 郎	小 野 爲 郎	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
雲變線條文花瓶	横川 元 起	横川 元 起	和染盃と花小屏風	長 賣 重 太 郎	長 賣 重 太 郎	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
龍銀抽出箱	加納 晴 雲	加納 晴 雲	透シ編四葉文果物籃	阪口 宗 雲 齋	阪口 宗 雲 齋	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
黄銅蔬菜置物	會田 富 康	會田 富 康	砂張火簀	魚住 安 太 郎	魚住 安 太 郎	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
青銅魚文花瓶	熊谷 幸 哉	熊谷 幸 哉	鐵製花器	義 江 辰 治	義 江 辰 治	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
松竹梅翁之面笠	都 筑 幸 哉	都 筑 幸 哉	金線打込漆文鉢	寺 田 龍 雄	寺 田 龍 雄	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
黄銅製草花文様花瓶	熊谷 勝 明	熊谷 勝 明	漆器繩文花瓶	林 萬 壽 人	林 萬 壽 人	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
黄銅直線文花瓶	山 脇 百 世	山 脇 百 世	漆器繩文花瓶	多 畑 宗 哉	多 畑 宗 哉	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
花器	鴨 政 雄	鴨 政 雄	漆器繩文花瓶	原 直 樹	原 直 樹	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
鍍金野牛置物	山 脇 百 世	山 脇 百 世	漆器繩文花瓶	小 林 直 樹	小 林 直 樹	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
鍍金打花瓶	羽 原 秋 芳	羽 原 秋 芳	漆器繩文花瓶	谷 澤 不 二 松	谷 澤 不 二 松	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二
金線桃圖轆轤物箱	平 石 孝	平 石 孝	漆器繩文花瓶	谷 澤 不 二 松	谷 澤 不 二 松	大 下 雪 香	群鳥皮革二曲屏風	河 合 研 二

鑄銅盛器 蠟燭ノアル水盤 鑄魚文香爐 鑄銅とんぼ文花鉢 彫漆朱ト白ノ飾箱 白瓷五成果紋花瓶 燦彩花瓶 漆モザイク芙蓉紋年筥 萩澤文釜 刻華盛花器 鑄銅四耳花甕 手織錦多牡丹壁掛 村置遊樂圖壁掛 鑄銅廣間卓上花器 陶製草文水指 柿文庫 葱文花瓶 黃玉青南瓜雷文蓋物 乾漆花瓶 銀花器 陶製象置物 鑄銅耳付葉文鉢 延齡草時給手宮 淡黃磁熊笹文花瓶 光壁掛 彩漆小棚 鐵鍍金はやぶさ香爐 茄子文布目染付花瓶 華文衛立 取玻璃天目盤文花瓶 彩漆牡丹圖二曲屏風 漆器春秋衛立 漆張鐵風呂先 白磁果物盛 白銅鯉置物 瑠璃盛花器 黑釉線文花瓶	中村 董一 浮田 樂德 深瀬 嘉臣 渡邊 紫鳳 富樫 光成 井上 憲吾 桶谷 定一 西塚 朝光 伊藤 鐵一 清水 祥次 西村 敏彦 中村 勉生 高久 空木 科雄 吉 大森 光彦 本間 壽華 加藤 千一 河合 榮之助 美 昌園 大谷 玲石 長谷川 怒 加納 眞輝 河合 秀市 和田 曉峰 富田 末雄 岩村 貞雄 三井 安蘇夫 松本 佩山 武藏 貞波留 辻 晋六 大村 素峰 福澤 健一 牧田 久義 米澤 蘇峰 八井 孝二 大町 存 瀧本 蘇嶺	鐵キリン置物 彩磁瓜花瓶 線文乾漆水指 堆朱八稜菓子器 挽挽め造り宮 黃瀬戸釉草葉文宮 竹製梅花口花籃 柳波文平脱小箱 錫象嵌花瓶 芥子紋壺 千勝獅子舞染色屏風 漆サボテンにホロノ鳥飾棚 水邊衛立 陶製食果文花瓶 鑄銅群鸞飛翔文花瓶 唐漆模様長手節宮 彫漆花文手箱 瑠璃釉蔓草紋花瓶 金屬製水差 陶虎 青銅水盤 織部壺 瑠璃釉六方形水盤 洛北山川之圖屏風 銀製ブラケット 寧樂蠟染壁掛 紅鶴(フタミンゴ)ノ居ル綴鐵壁掛 鹽銀皿 銀象嵌鐵飾箱 漆盛器 鐵製水盤 投影刺繡衛立 彩魚壁面裝飾 松竹梅文手文庫 人魚置物	池田 旺弘 森野 嘉光 森 三樹 青丸 耕堂 青柳 清齋 龜井 謹市 伊藤 仁齋 內藤 四郎 今井 千尋 由良 瓜舟 喜多村 榮太郎 磯井 如眞 小松 芳光 井上 良齊 石田 來之助 宮田 藍堂 徳山 嘉明 高橋 靜堂 岡本 爲治 安井 喜一 眞鍋 知道 廣瀬 英五郎 加藤 菁山 山澤 松篁 小合 友之助 小川 正 服部 好雅 和田 秋野 小澤 天來 島崎 正二郎 佐治 正 磯崎 美夫 小崎 山英 箸尾 清 金田 諒三 黒井 光琅	茨圖鐵製色紙宮 蠟文ベルト 龍銀沙魚置物 木瓜形菊瓣花鳥文樣盆 青銅方彩水盤 乾漆八角棧花瓶 藤銀鐵硝子吹込花瓶 彩色菊瓣手箱 青銅華紋花壺 勳條袖花壺 漆鐵線花素彫手箱 竹之圖銀花瓶 小宮 鴛鴦圖手宮 竹文銀盆 銀四分一象嵌菓子器 蔓草圖手箱 銀製菊紋花瓶 蜀葵文手宮 黑味花瓶 招待作品 板金人物置物 紫翠勘花瓶 吹込み硝子花瓶 鑄銀鴛鴦置物 漆ハツ夏文庫 青銅飛鶴文四方口花瓶 漆莖菜山圖手箱 漆高原の春手箱 柿香盒 打出し鐵香爐 彫漆つ草文丸形香盆 近江八景染色屏風 千鳥彫四分一香爐 鳩置物 鍍花瓶 鑄銅獅子置物	後藤 學一 杉村 正策 平松 宏春 岡田 草人 岡 條繁雄 村山 久 宮代 健三 森 象堂 金 森榮一 葉 松谷 室 潤春二 中 島實 古 代幸三 竹中 微風 鹿島 一谷 三井 義夫 東端 新策 染谷 一香 水内 平一郎 松原 春男 岡部 達男 清水 正太郎 岩 田藤七 佐々木 象堂 高野 松山 北原 三佳 奥村 霞城 高井 白陽 船越 春珉 小野 島知文 佐藤 陽雲 山形 駒太郎 四谷 正美 磯崎 美亞 海野 建夫 山本 自燼	鉦起製鐵花瓶 漆葡萄模様手宮 陶八德辨花瓶 龍銀溪山圖烟圖花瓶 緞織白孔雀三曲衛立 漆南天棚 新涼時給二枚折屏風 天鷲絨建染藤羅裝飾 少女華文和染衛立 飛鶴文釣舟生 陶豹置物 硝子魚文飾宮 青銅花瓶 磁器瑞祥花瓶 金屬製河豚香爐 鐵山間二趣花生 亂箱梅花 透模様銀裝オニツクス飾宮 朱地桃果時給卷床 透明手織錦取摺圖衛立 陶磁飛勘花瓶 漆鶴之箱 秋晴鑄銅花器 青銅釣花生 草染色手箱 四分一彫金波上觀音置物 漆莖菜雅趣二枚折 陶花鳥文瓶 友禪帶 四分一秋野圖法内象嵌花瓶 刺繡海中證女帶地 黃瓷老梅双鳩之圖花瓶 布訪問着 金銅玉虫象嵌花瓶 銀金彩鹿文花瓶 漆秋乃野文庫 鑄銅鳩耳花瓶	石田 英一 結城 哲輝 澤田 宗山 桂 光春 遠藤 順治 吉田 源十郎 島野 三秋 鹿島 英二 木村 和一 河村 鱗山 小川 雄平 各務 鎮三 內藤 春治 伊東 信助 大須賀 喬 田村 泰二 植松 彌吉 村越 道守 梅澤 隆眞 山鹿 清華 清水 六兵衛 松田 權六 豐田 堉秋 長井 堉志 櫻井 霞洞 二橋 美衡 越村 計三 植部 彌一 木村 雨山 鈴木 美彦 岸本 景春 宮永 東山 熊谷 重太郎 根 衛忠錄 北原 千鹿 前 大峰 杉田 禾堂
--	--	--	--	---	---	---	--

銀影金水差瓶 信田 洋
梅松時給手箱 三田村 自芳
監春蕭杓乾漆香爐盆 平 館 管
磁象嵌花瓶
鑄銅金銀錯魚文九水盤
四方香爐

毛利梅友社中第六回作品展覽會(日本畫)

十月十七日—十九日 名古屋市公會堂

幸松春浦日本畫個展

十月十七日—二十三日 大阪・阪急百貨店

西日本商業美術學校生徒店頭裝飾競技決戰大會

十月十八日 福岡日日新聞社

福岡日日新聞社主催。

岩佐古香第二回個展(日本畫)

十月十八日 京都・祇園八坂俱樂部

近代歷史畫二十二點を展觀した。

ジャクレー風俗版畫展

十月十八日—二十日 大阪・松坂屋

錦木美術展(日本畫、工藝)

十月二十日、二十一日 京都美術館

江藤純平洋畫個展

十月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫廊

澤田宗山作陶展覽會

十月二十日—二十四日 日本橋・三越

兒島善三郎近作油繪個人展覽會

十月二十日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

近作四十點許を展觀した。獨特の日本畫風の表現を用ひてゐるが、よく空間を捉へて奥行の表現にも相當の追求を見せてゐた。作品の或るものは餘りに裝飾的に作り過ぎた憾もある。「中禪寺湖展望」「燈臺風景」「雨後の漁港」等は味ひ深く、「細雨」「藥等」等も面白く見られた。

「細雨」「藥等」等も面白く見られた。

宮之原 謙
香取 正彦
坂谷 波山
青金色繪瓶

伸草社第三回展(日本畫、洋畫)

十月二十日—二十四日 銀座・伊東屋

女子美術學校昭和十年度卒業生の會で日本畫洋畫合せて五十餘點を陳列した。

第三回全國商業美術展覽會

十月二十日—二十五日 日本橋・白木屋

全國商業美術教育協會主催で、同會加盟の全國商業學校生徒を應募資格者とし、同會贊助の商店會社の商品課題として製作出品せしめたもの、第一部創作ボスター、第二部新聞廣告圖案、第三部陳列窓意匠圖とし、伊藤亮治、和田三造、上野陽一、宮下孝雄、杉浦非水が審査に當つた。

應募數一四八二點、入選數四三七點

吉祥寺在住洋畫家展

十月二十日—二十五日 吉祥寺・ナナン

島野三秀漆繪畫幅展

十月二十日—二十七日 大阪・阪急百貨店

漆を材料として絹本或は紙本に水墨風の繪を描くなどの新な工夫を示した。

中京大家新作綜合展(日本畫)

十月二十日—二十七日 名古屋・十一屋

人形すがた會第一回展

十月二十日—二十七日 銀座・三越

京都六秀會美術工藝展

十月二十一日、二十二日 大阪・中之島慶明莊

ボスター展

山本安藝
竹園自耕
海野 清

竹花籃
染織群禽譜屏風
飯塚環珂齋
皆川月華

十月二十一日、二十二日 高知市縣公會堂

廣鐵局高知出張所主催。

水野勝美洋畫個展

十月二十一日—二十五日 名古屋・丸善

金子清之介油繪小品展

十月二十一日—三十一日 新宿・エルテル

東京洋畫諸大家新作展

十月二十一日—三十一日 大阪・阪急百貨店

第十回臺灣美術展覽會(日本畫、洋畫)

十月二十一日—十一月三日 臺北・臺灣教育會館

臺灣教育會の主催する臺展は本年第十回を開催した。今回の審査員は東洋畫結城素明、村島西一、木下源重郎、西洋畫梅原龍三郎、伊原宇三郎、鹽月善吉で陳列數は左の通り總計百三十三點であつた。

出品	入選	無鑑査	審査員	陳列數
東洋畫	六七	三九	八	三
西洋畫	四八三	六五	一二	六
東洋畫	八三	三	五〇	點
特選	張秋禾、丸山福太、高梨勝壽、宮田彌太郎、陳敏輝			
臺展賞	張秋禾、丸山福太			
朝日賞	高梨勝壽			
臺日賞	村澤節子			
西洋畫	立石鐵臣、李梅樹			

臺展賞 李石樵、立石鐵臣

朝日賞 秋杓東

臺日賞 洪瑞麟

推薦 陳清汾

大禮記念京都美術館所藏美術品展(綜合)

十月二十一日—十一月三日 京都美術館

瀧澤邦行圖案展

十月二十二日 京都美術館

銀座・三味堂第三回洋畫展觀

十月二十二日—二十六日 銀座・三味堂

同店開業第三週年記念として主要作家十一名の

作品各一點を左の通り陳列展觀した。石井柏亭の

「箱根」はうるほひもあつて佳品と言ふべく、長

谷川昇「少女」は荒い筆觸の中に甘美で健康な感

覺を見せて快い作。辻永の「琵琶湖畔」は小品だ

けに纏りよく美しい畫面である。安井曾太郎の

「白桃」は桃に單純化の旨さを見るが質の表現に

物足りなさがあり、白布にも一工夫あるべきであ

つた。

目録

箱根 石井 柏亭 和蘭陀花生と

少女 長谷川 昇 薔薇 山下新太郎

海津濱の夕景 岡田三郎助 白桃 安井曾太郎

日光牡丹門 川島環一郎 菊 牧野 虎雄

琵琶湖畔 辻 永 伊豆下田 藤田 嗣治

裸婦 梅原龍三郎 洞爺湖 南 薫造

佐賀縣工藝協會設立第一回作品展

十月二十二日—二十八日 佐賀縣商工獎勵館

丸山行雄木の葉細工、木の實細工展

十月二十二日—三十一日 新宿・伊勢丹

美術展覽會(十月)

第五回美工圖案院研究作品發表會

十月二十三日、二十四日 京都美術館

河村靖山陶藝個展

十月二十三日—二十五日 京都美術館

C・クルーゼ油繪水彩畫個展

十月二十三日—二十五日 神戸・トア・ホテル

第二回奈良美術家聯盟展(洋畫)

十月二十三日—二十五日 奈良會館

奈良在住洋畫家の團體で會員贊助員等の作品四

十餘點を陳列した。

木村百木第十五回個展(日本畫)

十月二十三日—二十五日 銀座・越後屋

全九州獨立展(洋畫)

十月二十三日—二十七日 熊本市勸業館

日本民藝館竣成記念陳列

十月二十四日、二十五日 目黒・駒場町同館

東都諸家美術工藝品展

十月二十四日—二十七日 神戸畫廊

青丹會第六回展覽會(洋畫)

十月二十四日—二十八日 銀座・青樹社

第三回白蠟展(洋畫)

十月二十四日—二十八日 銀座・紀伊國屋

土曜會水彩畫展覽會

十月二十四日—二十八日 神田・東京堂

春日部たすくを中心とする水彩畫團體の第一回

展で二十七名の作六十五點を陳列、中に大きな畫

面の力作が多く新興の意氣込が面白く見られた。

李仁星の作品には特殊の詩情あり、筆の簡單化も

要を得て色彩も美しい。小堀進、角田行夫等の諸

作が優れ、脇田和のバステル「小品」は面白いものであつた。土用會賞半田丈夫の作はくすんだ穩かな畫風を示した。

八木岡春山第三回個展

十月二十四日—三十日 日本橋・三越

水墨畫を主とし、中に彩色畫を混へて近作十七

點を展觀した。大作では裏箔の「破墨山水」二曲

一双、金地「芦雁」二曲一双があつたが、むしろ

小品の方が面白く見られた。

日本民藝館開館記念新作展(工藝)

十月二十四日—三十日 銀座・たくみ工藝店

國風家具展、紫江會指物展

十月二十四日—三十日 上野・松坂屋

輸出向特産品展示會

十月二十五日—二十九日 別府市南小學校

別府市主催。

長谷川利行洋畫個展

十月二十五日—三十日 銀座・交詢社

竹居齋花籠陳列會

十月二十五日—三十一日 日本橋・三越

第十五回岡崎工藝美術展

十月二十五日—十一月三日 岡崎市立圖書館

坂本善三洋畫個展

十二月二十六日—三十日 新宿・天城畫廊

會宮一念洋畫個展

十月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

白御會第一回展(日本畫)

十月二十七日—二十九日 京都美術館

院展出品の作家達十三名に依り新に組織された團體で第一回展を開いた。

萬國ボスター展

十月二十七日—二十九日 大朝九州支社

東郷青兒洋畫個展

十月二十七日—三十日 京城・三越

藝術資料後援現代名家新作畫展覽會(日本畫)

十月二十七日—三十一日 日本橋・高島屋

金井紫雲の専念する藝術資料編纂及び其の刊行後援の爲諸家より寄贈の小品數十點を展觀した。

川端龍子「月露」、安田靫彦。「北畠准后」、川合玉堂

「早春」、松林桂月「秋江獨釣」、富田溪仙「嵐山」、

前田青邨「防人」、山口蓬春「粟」等見るべきもの

があり、洋畫家では中川一政、木村莊八、石井鶴

三等の作品もあつた。

木心舎第一回彫刻展覽會

十月二十七日—三十一日 日本橋・高島屋

林是、長谷川豐雄、岡村進、高山九羊、中村直

人、松村外次郎、小林貞吾、吉田白嶺の八名を同

人とする會の第一回展覽會で合計二十三點を陳列

した。

人形と陶器展

十月二十七日—十一月三日 池袋・明治製菓

日本美術社展(日本畫)

十月二十七日—二十九日 名古屋美術俱樂部

福田眉仙新作日本畫展

十月二十八日—三十一日 神戸畫廊

大野鈍阿作陶陳列

十月二十九日、三十日 上野・松坂屋

高橋庸男滯佛小品展(洋畫)

十月二十九日—三十一日 銀座・交詢社

作者が今年フランスに旅行して得た油繪小品三十四點、殆ど風景寫生で、色彩垢抜けて溫雅、筆も自由に伸びてゐる。

美術「都人形」「祇園人形」展覽會

十月二十九日—十一月三日 日本橋・高島屋

祇園燒窯元片山眞太郎が陶磁器試驗所創製の白雲陶器を同所指導の下に人形製作に應用したもので、在來の土燒人形に比し四倍強の硬質である。

意匠等には堂本印象、福田平八郎が指導し、京土産として工藝化したもの、作品六十七點を展觀した。

福岡市木製工藝振興會第一回展

十月二十九日—十一月二日 福岡縣產業獎勵館

帝國美術學校創立七週年記念展

十月三十日—十一月一日 吉祥寺・同校

秋季京都帝大美術展(洋畫)

十月三十日—十一月二日 京都美術館

旺玄社々友小品展(洋畫)

十月三十日—十一月三日 銀座・青樹社

紫明會第一回展(日本畫)

十月三十日—十一月三日 日本橋・白木屋

奈良洋畫會第九回展

十月三十一日、十一月一日 奈良會館

第一回華工展覽會(工藝)

十月三十一日—十一月二日 京都美術館

日出新聞社の催で京都工藝家六十余名の花器新

作品百二十余點に、華道各流家元、宗匠等が花を活けて展觀した。

日本美術院名古屋展(日本畫、彫刻)

十月三十一日—十一月八日 名古屋市公會堂

第三回全國中等學校商業美術作品競技大會

十月三十一日—十一月三日 名古屋高商ホー

ル

十一月

藤田華山作陶試作展

十一月一日、二日 日本橋・日本商工俱樂部

商工省工藝指導所創立八週年記念展

十一月一日、二日 仙臺・同所

慶大バレット俱樂部展

十一月一日—三日 數寄屋橋・ラテン畫廊

多摩帝國美術學校第二回展

十一月一日—三日 世田ヶ谷・同校

染織展覽會

十一月一日—三日 福井縣立工業學校

福井縣工業試驗場、縣立工業學校の共同主催に依り、同試驗場製品、生徒及び卒業生製品、當業

者製品等多數を陳列した。

第二回岐阜社美術展(日本畫)

十一月一日—三日 岐阜・柳ヶ瀬百貨堂

同人作品の外入選二十六點を陳列した。

横井弘三漆繪・油繪個展

十一月一日—三日 長野市・城山公園陳列館

第四回未知會展覽會(洋畫)

十一月一日—四日 銀座・紀伊國屋

東西有名商品飾窓競技大會

十一月一日—五日 大阪・十合
商工祭協賛會主催。

レイモンド夫人意匠室内裝飾工藝品展

十一月一日—五日 銀座・鐘紡

織物、敷物、陶器、金屬器、木竹工品、硝子器等を用いて、室内裝飾、家具、食器、日用品等に新工夫をしたもので、日本の材料を生かし簡素にして實用的なことを主眼とした試みであるが、平明であると共に味の乏しいものであつた。

花谷時子洋畫個展

十一月一日—五日 新宿・天城畫廊

香爐と卓の會

十一月一日—五日 日本橋・三越

陶磁、金工、指物、漆器等各工藝に互る諸家の新作香爐と卓類を陳列した。

日大専門部工科建立會建築展

十一月一日—五日 銀座・伊東屋

第七回愛媛美術工藝展

十一月一日—五日 縣公會堂

第一回愛媛青年美術家集團展(洋畫、版畫)

十一月一日—五日 愛媛會館

宮部進洋畫個展

十一月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

七絃會第七回展覽會(日本畫)

十一月一日—六日 日本橋・三越

土田麥僊を失つて會員は五名となり、小林古徑は作品が間に合はず、四名の出品六點といふ寂しい展觀であつた。併しさすがに現代の畫壇で選ばれた作家達だけに何れも洗練された作品を示し、清楚淡泊、神經の細かく澄み切つた畫境に共通の

ものを見せてゐた。鍋木清方は二點を出品、「伽羅」は濃艶なるべき畫材を描いて畫品清爽、而も情趣豊かな佳品であり、「柿」は挿繪風の輕い作であるが無邪氣な秋興に作者の氣持が出てゐた。安田靉彦の「佛性房」は梅林を歩む道元禪師を紙本に描き、前田青邨は幼兒を抱く「原の白隠」禪師を描いた。青邨の「魚」は淡墨に依る寫生であるが、用筆に特殊な趣を見せて、面白いものであつた。菊地契月の「吉法師」「竹千代」雙幅は僅かな淡彩の効果上品に美しく、線に神經が籠つて人物にも生動あり、此の會の中で最も力作且つ優れたものと見られた。

養老人形陳列會

十一月一日—七日 名古屋・松坂屋

商工省輸出工藝展

十一月一日—七日 大阪・府立貿易館

中部日本商業美術聯盟主催第一回商業美術展

十一月一日—七日 愛知縣商工館

獨立美術協會秋季展

十一月一日—七日 銀座・三味堂

會員達が小品各一點を出陳。總數二十一點を展觀した。多數の大作の競ふ春季展と異つて、此處では相當の技術を有する作家達が樂んで描いた作品に、夫々巧みな洗練の筆技を見せてゐるので、觀者も駄作に苦しめられることなく鑑賞することが出来る。概して此の會の作家達は小品の方に優れた味い深きものを見せるやうである。

伊藤廉「果物」、海老原喜之助「人と馬」、小島善太郎「靜岡」、中村節也「朝顔」、福澤一郎「エチウ

ド」、松島一郎「靜物」、高島達四郎「海岸」、野口彌太郎「日光紅葉」等興味を牽く作品であつた。

川島理一郎個人展覽會(洋畫)

十一月一日—七日 銀座・伊東屋

主として日光に取材した作品油繪十四點素描十點を展觀した。社殿の建築、彫刻等を取扱つたものと、風景の綠多きもの、溪流を主題にしたもの等とであつた。單純化された筆觸に生々しい色彩を巧に取扱つて一種裝飾的效果をあげて居り、「奔流」「瀑布」などに風景描寫の苦心が見られるが概して含蓄と云ふほひに乏しい弱點も示してゐた。黒と金とを基調にする社殿の中門を描いた作品等面白いものであつた。

第六回島根縣美術綜合展

十一月一日—八日 島根縣教育會館、同物産獎勵館

中川紀元洋畫個展

十一月一日—十日 大阪・阪急百貨店

長谷川利行花と風景油繪小品展

十一月一日—十五日 新宿・喫茶店エルテル

第二十三回二科美術展覽會(洋畫、彫刻)

十一月一日—十六日 大阪市美術館

大阪朝日新聞社援後で開かれた二科會大阪展は陳列點數繪畫彫塑合せて二百三十七點であつた。

久本弘一滯歐作品展(洋畫)

十一月二日—四日 神戸畫廊

清水登之洋畫個展

十一月三日—五日 大阪・有恒俱樂部

落合朗風個展(日本畫)

十一月三日—五日 京城・鐘紡ギャラリー
東光會小品展覽會(洋畫)

十一月三日—六日 日本橋・高島屋

今春開かれる筈であつた同會定期展は帝展開催の爲昨秋繰上げて開き、東光會として本年發表する所は此の小品展が唯一のものであつた。今春主線協會成立に依つて高間惣七、其の他橋本八百二等を失つた寂しさがあるとは言へ、會員達の一致した努力に依り小品ながら相當に實の入つた展覧であつた。岡見富雄を除いて會員八名、會友二名の作品約六十點を出品。熊岡美彦の數點の中では「裸婦」が優れ、小品ながら力を入れた確かな描寫が美しく見られた。齋藤與里は「鳥羽風景」「琵琶湖の朝」其の他の風景を出品、いづれも詩情に富む味が面白く、野口謙藏の「山村雪後」風上け風景」等亦獨自の仕事を見せてゐた。佐藤一章の諸作は様式化に過ぐる傾があるが色調の極めて美しいものであつた。

南紀美術會展覽會(日本畫、洋畫、彫刻)

十一月三日—七日 日本橋・白木屋

紀州出身美術家二十九人より成る會で、日本畫洋畫、彫刻に互つてゐるが、各作家とも余り力を入れては居らぬ。日本畫では大亦觀風、北澤樂天、洋畫では木下孝則、濱地清松等出品してゐるが、中で木下孝則の滯歐作「ヴィルターヴ・サン・ジョー」の風景畫は佳作であつた。

丹麗會新作家具發表會

十一月三日—八日 新宿・伊勢丹

大倉集古館創立二十周年紀念展覽會

十一月三日—十二月五日 東京・大倉集古館

同館創立二十周年紀念として、昭和五年大倉喜七郎男が現代日本美術紹介の爲ローマに持參して展覽した作品に、尙數十點を加へた同館所藏の現代日本畫を陳列して、特別展覽會を開いた。

作品多數の爲四回に互つて陳列替を行ひ會期も豫定を延長する盛況であつた。各會派を綜合し、大家のみならず新進作家をも加へ、昭和初頭の日本畫壇をほぼ通觀し得る點で興味の深いものがあつた。固より各作家の代表作のみとは言へぬにせよ、六曲屏風其の他の大作力作も多く、名作佳品が相當に集められてゐる。横山大觀「夜櫻」「瀟湘八景」、竹内栖鳳「城外風薰」「蹴合」、川合玉堂「奔潭」「柳蔭閑話」、前田青邨「洞窟の頼朝」、小林古徑「木兎」其の他注意すべきもの頗る多數であつた。

陳列目錄

鷗外圖	野田 九瀧	鶯歌	銀木 清方	小雨	伊東 長秋	時雨	松岡 映丘
新蟹	上村 松園	晚秋	荒木 十畝	伊勢大補圖	上村 松園	淡雪	中村 岳陵
睡鄉	竹内 栖鳳	屋島の義經	松岡 映丘	吳山朝露	川村 曼舟	閑鷗	西山 翠環
秋林農事	同 栖鳳	鯉魚圖	福田平八郎	菊頭花	菊池 契月	時雨	同 栖鳳
聖地の花	富田 淡仙	臘冬	小室 翠雲	菊頭花	前田 青邨	夢殿	同 栖鳳
初夏の滯歐	山元 春舉	春曉	同 翠雲	菊池 契月	島田 雲仙	梅花	同 栖鳳
水邊	堅山 南風	加藤清正望富嶽	小堀 觀音	不動尊	下村 觀山	夕顔	同 栖鳳
藍花蓋忍及幅	平福 百穂	暖日	橋本 關雪	鳳凰堂	同 觀山	曉露	同 栖鳳
溪流	橋本 永邦	聖德太子影	菊池 契月	瑞雲	眞道 黎明	牽牛花	同 栖鳳
小貓	荒井 寛方	鸞圖	木島 櫻谷	瑞雲	田中 賴球	桂川の秋	同 栖鳳
伊術之少將	松岡 映丘	河伯安住所	小川 平鏡	瑞雲	山内 多門	梅花靜禽	同 栖鳳
風雪白鷺圖	櫛原 紫峰	驟雨	川合 玉堂	山雲	廣田 大觀	桃に鳩	同 栖鳳
夏の朝	町田 曲江	斜陽	同 玉堂	山百合	吉田 秋光	踏青	同 栖鳳
淡光	西村 五雲	吹雪	同 玉堂	杜鵑の夜	平福 百穂	藤花孔雀圖	同 栖鳳
木兎	小林 古徑	山四趣四幅	同 玉堂	飛鴨	廣瀬 東畝	左衛門佐重盛	同 栖鳳
晚秋	木村 武山	戲れ	同 玉堂	嵐山春霞	川村 曼舟	鐵合	同 栖鳳
長門峽真趣	松林 桂月	維摩居士	下村 觀山	暹日	島田 雲仙	栗鼠	同 栖鳳

芍薬 小林 柯白 高木保之助
 朝顔 小林 古徑 田中 昭哉
 庭園 木島 櫻谷 富取 風堂
 秋壽 中村大三郎 吉野山 宇田 萩都
 庭の園 橋原 紫野 花下小徑 吉村 忠夫
 晩鐘 下村 觀山 飛鶴 小茂田青樹
 春の花秋の實 富田 漢仙 睡鴨 同
 唐橋の雪 山口 蓮春 遊魚 二曲屏一又 橋本 静水
 豊稜 酒井 三良 朽樹鳴禽 六曲屏半双 長野 草風
 放生司 佐々木尙文

日本畫名作展

十一月四日—六日 新愛知新聞社

御幸會主催。

バステル名勝畫展

十一月四日—七日 大阪・南海高島屋

西洋畫名作模寫展觀

十一月四日—七日 東京美術學校陳列館

東京美術學校では十一月四日同校設置記念式舉行を機會に、教授等の手に成つた同校收藏の西洋畫名作模寫を展觀した。陳列は左記二十八點であつた。

陳列目録

フラ・アンチエリコ 作受胎告知圖 和田 英作
 フラ・アンチエリコ 作聖母戴冠圖(部分圖) 橋本 邦助
 傳デ・エンテ・イ・レ・ベリニ 作二人の肖像 故久米桂一郎
 デ・ヨバンニ・ベリニ 作聖母子像 寺崎 武男
 ボッティチエリ 作デ・ヨバンニ・アルヴィツチと三女神(壁畫部分) 故湯 淺一郎
 ラファエロ 作老人像(壁畫部分) 藤 島 武二
 ラファエロ 作人物(壁畫部分) 同
 ルイニ 作小兒と葡萄(壁畫部分) 故久米桂一郎
 ルイニ 作耶穌降誕圖 故黒田 清輝
 コレッツォ 作聖カザリンの結婚 田 邊 至
 原作者不詳 支倉常長肖像 故兒島虎次郎
 メムリンク 男の像 寺崎 武男

美術展覽會(十一月)

ホルバイン 作僧侶肖像 岡田 三郎助
 レンブラント 作解剖圖 故黒田 清輝
 レンブラント 作自畫像(西紀一六三四頃作) 同
 レンブラント 作自畫像(西紀一六六〇作) 岡田 三郎助
 ヴェラスコ 作塊太利のマリア・アンナ肖像 和田 英作
 ヴェラスコ 作アイリツツ四世肖像 和田 英作
 ゴヤ 作婦人肖像 ベレスフォード
 クロード・ロレーン 作風景 小 林 萬吾
 シヤルダン 作骨騰遊び 庄野 宗之助
 グルーズ 作少女 小 林 萬吾
 アンデル 作オダリスク 和田 英作
 ミレー 作落穂拾ひ 伊原 宇三郎
 クールベール 作セーヌ河畔の娘達 和田 英作
 シヤヴァンヌ 作貧しき漁夫 田 邊 至
 シヤヴァンヌ 作(壁畫部分) 小 林 萬吾
 ロセツチ 作ベアトリチエ 藤 島 武二
 高木 誠一

ガストン・オーシユコルヌ彫塑及繪畫展

十一月四日—九日 神田・日佛會館

十五年前まで支那各地駐在領事を勤め、後作家となつたフランス彫刻家ガストン・オーシユコルヌ(Gaston Hauchecorne)が來朝して過般神戸及び大阪で其の作品展を開いたが、東京では日佛會館でテラコッタ及び青銅の作品數十點に水彩畫若干を加へて個展を開催し、併せて四日午後同會館で講演を行つた。

エリザベス・ケイス版畫個展

十一月五日—七日 京城・三 越

S.P.A集團展(洋畫)

十一月五日—九日 數寄屋橋・ラテン畫廊

瑠派亞士社洋畫展

十一月六日—八日 銀座・紀伊國屋

橋本平八遺作展並神都美術本彫會作品展

十一月六日—八日 三重縣商工獎勵館

長瀧阿貴羅染色品展

十一月六日—八日 神戸畫廊

第一回福岡縣中等學校教員繪畫展

十一月六日—八日 福岡産業獎勵館

田中太郎洋畫個展

十一月六日—八日 福岡・西中洲公會堂

金煥基洋畫個展

十一月六日—十日 新宿・天城畫廊

靜岡縣下教員作品展(日本畫、洋畫、工藝、書道)

十一月六日—十日 縣教育會館及松坂屋

高知縣工藝展

十一月六日—十日 高知市縣公會堂

第三部會彫刻小品展覽會

十一月六日—十一日 日本橋・三 越

第三部會々員八名が各々三四點づ、近作の小品を出品した。池田勇八の「仔牛」「跳悅」、小倉右一郎の「白蓼」、石川確治の「鐘馗」、畑正吉の「走」日名子實三の「舊作を彫る」等が主なるものであつたが何れも小味な巧みさを見せた程度で出色のものはない。

湯川松堂新作並岩倉繪卷畫稿展觀

十一月六日—十一日 大阪・三 越

近作畫幅の外に、御下命に依り明治四十四年完成上納した岩倉繪卷下圖二十五卷を陳列した。下圖と云ふも筆致鄭重彩色完備せる大作である。

昭和十一年文部省美術展覽會招待展

十一月六日—十一月二十三日 東京府美術館

鑑査展に引續き急遽陳列替を行つて招待展が開かれた。招待された作家は新帝展に於ける無鑑査

の外に約二百三十名を加へて總計六百六十九名、出品は第一部九十七、第二部百十九、第三部八十八、第四部六十四、合計三百六十八點を陳列した。

鑑査展の項に記した如く出品は殆ど舊帝展系作家達で、固より實力ある作家もあるが、招待範圍を擴張した結果は既に第一線より退いてゐる過去の作家の復活を見たものも多く、技術と時代的感覚の上に雜然たる色彩を示し、他方有力作家の出品せぬものも多く、寂寥の觀は蔽ひ難かつた。

第一部日本畫では、帝國美術院會員中出品は西山翠嶂、川村曼舟、竹内栖鳳、荒木十畝、結城素明の五名に過ぎず、此處でも畫壇の最高峯を網羅する意圖からは遠いものとなり、其の他の作家に力作もあつたとは言へ、全體として創作的な熱の乏しい平凡な作品が多く竝べられ、概して世評も芳しくない成績であつた。

最も注目を惹いて多く問題とされたものは竹内栖鳳の「夏鹿」であり、之に次いで堂本印象、西山翠嶂、上村松園等の作が代表的な收穫として多く批評に上つた。栖鳳の作品が評判になつたのは、美術界の時局に關聯した彼の態度や、文展第一回以來の六曲一雙の大作であることが世人の注意を惹いた故もあるが、右半雙の群鹿が左半雙に唯一頭跳躍する牝鹿を見守る情景を描いて、細心な構圖や寫形の苦心を一見無造作な、極度に省略された筆致に現はしたもので、作者近年の力作たることには異論はない。其の輕快にして巧妙な達技は多くの評者の絶讃する所であり、正しく此の種の技巧の極致を示したものと云へるであらう。

併しながら一方には其の筆の上上りを難とし其の俗氣を惜んだ評者もあつた。技巧の跳躍は屢々藝術的内容の喪失を來し、自然の本體を忘れた形骸を寫すに止まる憾がある。此の作も其の危險に瀕したもので、鹿は外皮のみとなり、畫品は重厚の氣を缺いて輕佻さを免れぬものとなつた。

堂本印象の「甚目寺の一遍上人」は、六曲一雙を繪卷に倣ふ構圖とし、一遍繪傳中の甚目寺毘沙門天の靈驗を主題としたもので、單なる歴史畫に止まらず、上人、衆僧等の宗教的體驗を心理的に現さうとしてゐる。技巧本位の歴史畫の平凡さは免れてゐるが、群像の構成や人物の描寫がしつかりせず、神秘的な空氣も感ぜられぬことは、此の作者として十分な成功と稱し難いであらう。併し此の作品は印象の多方面の才能と旺なる創作力を示し、注意すべき收穫たるを失はない。

西山翠嶂の「竹生島」は月明の湖中に浮ぶ小島を銀砂子と水墨で描き、水面の光をも感じさせる美しい畫面で、繊細の觀はあるが清澄な佳品であつた。上村松園の風俗畫は愈々典雅の趣を加へ、令嬢の舞姿を描いた「序の舞」は甘美ではあるが畫品卑しからぬ作となつた。翠嶂にせよ松園にせよ新時代開拓の位置にゐないことは寧ろ當然で、斯かる技術的完成を見せた作品が招待展の意義をなすものであらう。

第一室には、福田豊四郎、杉山寧、常岡文龜等新人の作が見られた。夫々の氣質に依る畫境に進み、特異の感覺を盛つてゐる點は興味深いが、技術的には未成の觀が多く、それだけに將來を期

待させるものとも云へる。豊四郎の「六月の森」は童話的畫面に愛すべきものを見、室生寺金堂内部を描いた寧の「慈悲光」は、墨と胡粉の調子に依つたもので、部分的な苦心にも拘らず平凡に近しいものとなつた。文龜の「秋」は寫實を離れ、淡白な色調に依る塗り重ねと描線の新工夫に依つて特殊感覺を表はさうとしてゐる。金島桂華の「魚心暖冬」は群鯉を描いて穩かな觀照と周到な用意を示した佳品であつた。

第二室で森白甫の「飛鴨」は直線的な様式化が目立つが裝飾的に面白い効果を見せ、吉岡堅二の「高原白夜」は日本畫の傳統的な表現を一擲して高原に遊ぶ巨大なる二頭の黒馬を描き、新感覺を狙つたもので、題名の聯想させる浪漫的情緒は或る程度現はされてゐる。

第三室、中村大三郎の「讀書」洋裝の女を描いて巧な筆であるが、表面的な描寫に止まる。結城素明の「溪光」は素直な自然描寫で作者の常の道を進んで居り、特記するものを見出さない。小野竹喬は細描線を輪廓に止めて色彩を主とした「室戸岬」を描き、岩の色などに洋畫的な多彩を施して一種の味を見せてゐるが、調子に缺ける爲稀薄さを免れなかつた。第四室にある吉村忠夫の「燈籠大臣」は説明的な歴史畫に止まり、精緻な技術にも拘らず構圖に難があつた。

第五室では菊澤武江の「秋苑」、森村宜稻の「西行と聖」、川崎小虎の「山・濱」等があつた。小虎の作品は山間の樹枝に遊ぶ群猿を描いたものと、濱を見渡す朝鮮少女を描いたもので、洋畫に近接

した描法を用ひて胡粉を塗り重ねた畫面は繪具の使用上に多くの疑問を残してゐるが、綺麗仕事の多い日本畫の中に在つて特殊な感覺と熱情とを表現し、山は特に爽かな氣分を感じさせた。

第六室、島田墨仙の「出師表」は孔明を描いて氣格の高さを目指したものであるが、氣字の大きさは現はれず神經質な弱々しい人物となつた。荒木十畝は六曲一雙に鷲と鷹とを相對せしめた「雄風」を描いた。力の籠つた作ではあるが表現に創意なく感銘も少ないものである。第七室の矢澤弦日「採果圖」は裝飾的な作で西洋風の構圖や色彩の單純化などに異色を示したが、線條の取扱ひが餘り無反省で寫形もつたなくよい出来と言へなかつた。第十室に川村曼舟の「霧氷」があつたが、藝術的な興味の乏しいものであつた。

第二部洋畫も全體として多く不評であつた。尤も其の標準は文展招待展と言ふ性質から、假令美術界の一分野に過ぎぬとは言へ現代洋畫壇の多數の知名作家の一年の代表的作品を蒐め、社會的に當然最も重視されるものとして見られるからであつて、他の多くの展覽會に比しては相當力の籠つたものであることは云ふ迄もない。併し出品の結果は、舊帝展作家の中でも若干の帝院會員の外主要作家の一部、或は潑刺たる新進作家の若干を失ひ、所謂舊在野の作家數名等を加へたけれども全體に生彩に乏しい沈滞の風が見え、或る程度の技術はあつても藝術的な感興や新鮮な創作精神の躍如たるものは殆ど見出すことが困難であつた。前にも記した如く既に畫壇の第一線から退いてゐた

作家達が呼び戻されて作品を出してゐたことは第二部にも顯著で、その結果は現在の畫壇を代表すると言ふよりも時代を逆行した回顧展覽會に見る如き歴史的感慨を催させるものとなつた。

第一室では佐藤章の「市場」、橋本八百二の「沼畔」、角野判治郎の「シャント」等が異色あるものとして目立つた。「市場」は特殊の形式化に必然性を見出し難いが色彩と調子に面白さを見せた。橋本八百二は寫實的な表現から一轉し新感覺を狙つて月夜の群馬を描いた。空想的な一種の感傷主義に捉はれて結果は優れたものと言へず、過渡期の一試作と見る外はない。「シャント」は或る感じを捉へてゐる。其の他鬼頭鍋三郎の「室内」、山喜多二郎太の「港の舞妓」等があつた。

第二室、中澤弘光は「鶉飼」に近來の力作を示し、南薰造はヒマラヤに近き西藏女の風俗を描いたと言ふ「子守歌」を出品した。外光派的な光に充ち、作者の柔かみある自然觀は現はれてゐたが、技巧的に尙整理を要するものであらう。森倭衛の「積藁」は所謂會場藝術的なものと類を異にした野外寫生で、自然の爽かな空氣を寫さんとしてゐるが、色感と調子とに難があつて薄弱さを免れない。長谷川昇の「青服の少女」は緑衣の少女に黒猫を抱かせて、色彩家としての計畫を示し、調子の高いものとは言へないが、技術の熟達を見せて美しい作であつた。其の他中村不折の風景畫「妙義山」、小林萬吾の窓際の南洋娘を寫した「カナカの娘」等があつた。

第三室には耳野卯三郎の「鞆轡」、高間惣七の

「泉」、有岡一郎の「アリアメと祖父」、細井繁誠の「或る日の畫室」等があつた。「鞆轡」は色調に柔か味があり、描き足りぬ爲のよさがあつた。「泉」は黒と白とを對照させ、雉を配した平面的な一種の裝飾畫で獨特の幻想的表現になり、特に優れた出来とは言へぬが異色ある存在を示してゐた。

第四室では岡田三郎助の「婦人半身像」と和田三造の「按摩さん」はさすがに色々の意味で問題視される作品であつた。「婦人半身像」は作者が以前から試みつゝある岩繪具を用ひ、フレスコに似た描法と効果を見せたもので、清楚な支那服の婦人側面立像を描いた。單純な構圖であるが本格的な描寫になり、氣品を備へた作品である。併し繪具の使用上の効果に就いては未解決と思はれるものが多く、材料の効果と美しさとを生かしたものと見ることができない。たゞ此の大家が手慣れた油繪具のみに安住することなく、斯かる材料的研究に歩を進める熱意には敬意を拂ふべきであらう。「按摩さん」は白の施術衣を着けた盲人の倚像で、節約された筆に驚くべき巧さを以て此の人物の職業、性格等の特徴を把握した作であつた。此の作品に對しては賞讃と惡評とが並び行はれた。問題とされるだけの非凡さは備へてゐるのである。そして此の作品は繪畫の形式として優れるよりも、主題の説明に勝り、それは文學的であるとも言へる。そのことは必ずしも難すべきでないとして、此の作品には繪畫的感興を缺き、藝術精神よりも筆技が勝つて、往年の片田徳郎の「花下竹人」に遙か及ばぬ畫格に終つた。

鈴木千久馬の「横臥せる裸婦」は物足らぬものであるが、感覺に洗練されたものを見せた。大久保作次郎、白瀧幾之助等の諸作があつたがよい出来と言へなかつた。

第五室には石川寅治の「鏡前」、中野和高の「水邊」、佐竹徳次郎の「仔獅子」、矢島堅土の「花火」權藤種男の「雨後の山」、清水良雄の「草原」等があつた。「水邊」は圖案の如き取扱ひに色調は悪くないとして眞實性の稀薄な作であり、「花火」は裸婦を描いたが、此の作者の小品に見る美しさを失つてゐた。「雨後の山」は流行を追はぬ自身の道を進めて忠實な寫生になるよい出来であつた。草原は休息する三人の男を描いて手際はよいが、理智的に片づけられて感興も餘情も伴つて居らぬ。

第六室、草光信成の三部試作「成長」は裝飾畫の態を成すもの、熟しきらぬ點を多く止めてゐるが試みとして注意される作であつた。堀田清治の立體派を取入れた如き「舞樂」に必然さを見出すことは困難である。窪田照三「女流選手」は暖く愛すべき作であつた。

第七室では山本鼎の「冬瓜」、田邊至の「裸婦」が各々練達の技術を示した。「冬瓜」は蔬菜を描いて独自の畫境を見せたが物質の表現に不足がある。仰臥させた「裸婦」は背景の白と敷物の黒との單純な對照を試みて、構圖に新たな工夫をしたものであつた。第八室、第九室には特記するものを見出さなかつた。水繪は三宅克己の「十國峠遠望」等五點で、版畫には前川千帆「山村の踊」、織田一磨「山頂雨後」等四點があり、バステルは矢崎

千代二の「都會風景」のみであつた。

第三部彫塑では舊展系作家の中第三部會を組織した人々は加はらず、院展に屬する作家等が去つたが、同院を脱した藤井浩祐が参加し、又朝倉文夫、齋藤素巖等が出品し、素巖の率ゐる構造社は本年度の展覽會を中止して文展に参加する等、大體舊展作家を中心に知名作家の多くを集め、ほゞ現代の我が彫刻界の水準を見るべきものであつた。作品の傾向は全體的に見て穩健な寫實主義であり中に浪漫的なものの理想的なものを混へ一通りの技術を具へてゐるが、慨して平凡の域を脱せぬ作が多かつた。

朝倉文夫の胸像「九世團十郎之像」は寫實的な技巧の練達を見せるに止まるもの、安一の「雄叫」は劍を持つ三人の群像で、誇張が多いが、組立にも力の表現にも記念碑的な效果に相當の力量を見せてゐる。山本稚彦の「立女」は少女を寫して素直な自然觀がよく、一色五郎の「陸軍（電信兵）」は半肉彫に独自の技法を以て或る成功を収めた。

齋藤素巖の「貝」は薄肉で海底を思はせる背景に裸女の群と一人の男を配し、裝飾的な取扱を試みた。さすがに浮彫の技術に優れ氣品も具はつてゐるが、此の空想的な主題の爲に作者の寫實的傾向が一つのなやみとなることは争へない。

澤田晴廣は木彫三部作の中「光明佛身」と「善魔魚身」とを出品した。魚身の方は面白い試みである。内藤伸の未完成壁面彫刻「天之安河原」の一部は、木彫薄肉で大畫面を刻んだものであるが、取扱は全く平面的で浮彫といふよりも繪畫に

近い。濱田三郎の「藤村詩碑（若菜集）」は様式上に近代感覺を狙つたものであるが題意に調和せず、作風も生硬である。都賀田勇馬の「無碍」は原始藝術を學んだが求める所の卒直な力強さは現はれず、奇異な感と與ふるに止まつた。野村公雄の「女の群」は群像として巧な取扱を見せ、部分的に難はあるが面白い作である。吉田三郎の大作「飛沫」は浪頭の擬人化で、内容に乏しく、森大造の木彫で上代武士の群像を刻んだ「若き建男」は、朗らかさを持つた愉快な作である。

長谷川榮作の「寶華素影」は、現代風俗の婦人像を寫實的に取扱つて濃彩を施したもので、其の試みは一つの見識として注意に値する。三木宗策の「丹花綻ぶ」も同じく木彫に濃彩を用ひ、之は理想化に成る群像で半裸の美女を微笑させた。甘美であり藝術的な深さは求め難いが、作者の力量は認められる作である。

藤井浩祐の「手鏡」は感覺も技術も洗練された佳作であつた。單純な姿態を捉へてよく彫刻的な美しさを表現してゐる。國方林三の「裸女」は多くの此の種の立女像中では最も優れたもの、建昌大夢の「十七の女」は姿態の僅な動勢を巧に擱んで、優れた形態感と確かな技術を示し、方向は違ふが、何れも佳品の中に數へられる。

北村西望は「旭日登天」の大作に意氣旺な男性美を現さんとしたが、形態上の誇張が目立ち思想的に貧しく、又日輪の面に刻まれた浮彫は甚しく粗雑である。安藤照は「胸像」に優れた彫刻的單純化を示してゐた。其の他木彫で山崎朝雲の「菅

公、後藤良の「寶生重英匠能姿國柄」、富永朝堂の「武者」など注意される作であつた。

第四部美術工藝では帝國美術院會員の出品は陶磁の清水六兵衛、板谷波山だけに止まつたが、作品の概況は鑑査展に就て記した以外特記することなく、何れも工藝の各部門に於て定評ある作家達が夫々精技を振つてゐた。たゞ此處にも見られることは、必要以上の豪華な裝飾趣味が依然多く行はれ、端麗、清楚等を以て評すべきもの少く、或は本質的な工藝精神の貧困を思はせるもの多いことであつた。

金屬工藝では香取正彦の「鑄銅金銀錯魚文水盤」、大須賀喬の「金屬製河豚香爐」、長野埜志の「青銅釣花生」、海野建夫の「蛾花瓶」、海野清の「青金色繪瓶」、北原千鹿の「銀金彩鹿文花瓶」等、夫々の感覺に優れたものを示してゐた。岡部達男の「板金人物置物」は技法的な面白さを持つが、構想の意圖を解し難く、石田英一の「鍍起製鐵花瓶」は奇抜であるだけで無意味な努力が費されてゐる。杉田禾堂の「鑄銅鳩耳花瓶」は形態の上に更に洗鍊を要するであらう。

陶磁では清水六兵衛の「陶磁飛瀾花瓶」、清水正太郎の「紫翠瀾花瓶」等見るべく、板谷波山は「四方香爐」の小品に洗鍊の技を示した。硝子に各務鑄三の「硝子魚文飾篋」と岩田藤七の「吹込み硝子花瓶」があり、後者は意匠の上に完美と評し難いが、銀と黄色硝子とに特殊な効果を見せた。

漆工と染織繡には殊に精緻絢爛な技巧を凝し過ぎたものが多い。漆器では高野松山の「漆ハッ夏

文庫」、吉田十郎の「南天棚源」、松田權六の「漆鶴之箱」等は作品の個性的な氣風が現はれるものであるが、未だ意匠の上に十分な洗鍊を経てゐると謂ひ難く、染織類で鹿島英二の「天鷲絨建築染縹緗屏裝飾」、山鹿清華の「透明手織綿玳瑁圖衝立」、山形駒太郎の「近江八景染色屏風」等技巧上の苦心は十分認められることながら、藝術的に高度の美しさに迄はかなり距りのあることを遺憾としなければならぬ。

政府買上（日本畫）「序の舞」上村松園、「燈籠大臣」吉村忠夫、「讀書」中村大三郎、「うな

ひの友」西澤笛畝、「曉山の雲」飛田周山

（洋畫）「婦人半身像」岡田三郎助、「畫室にて」緒方亮平、「鞆轆耳野卯三郎」、「手傳」草

光信成、「春」奥瀬英三

（彫塑）「羞恥」北村正信、「陸軍（電信兵）」一色五郎、「籠球」森野圓象

（工藝）「漆南天棚」吉田源十郎、「柿香盒」船越春珉（鑑査展）「金錯芙蓉紋花瓶」山本

純民、「陶製草文水指」大森光彦

文部省記念買上（洋畫）「氣清」北蓮藏、「奥日光の秋」加藤靜兒、「デリシアス」永地秀太

京都美術館買上（日本畫）「霧氷川村曼舟」、「山鹿」上村松篁、「鶴」案本一洋

（洋畫）「按摩さん」和田三造、「裸婦」田邊至

（彫塑）「親子の鹿」橋本高昇、「作品第十六」小笠原貞弘

（美術工藝）「秋晴鑄銅花器」豐田勝秋、「草花圖彩漆衝立」番浦省吾

李王職御買上（日本畫）「吐綬鶏」池上秀畝、

（工藝）「吹込み硝子花瓶」岩田藤七、「漆秋乃野文庫」前大峰、「鑑査展」「緗綠袖花壺」

叶松谷、「彩漆牡丹圖二曲屏風」大村素峰

出品目錄

第一部 繪畫

六月の森	福田豊四郎	運塘冬日	菊澤 武江
慈悲光	杉山 寧	西行と聖	福田 翠光
離の秋	永田 春水	うなひの友	森村 宜裕
秋	常岡 文憲	ゆく雲（防人）	川崎 小虎
魚心暖冬	金島 桂華	出師表	西澤 笛畝
源名をわたる	岩田 正巳	雄風	織田 振潮
源九郎義經	磯部 草丘	曉山雲	島田 墨仙
秋立つ浦	三輪 晃勢	序之舞	荒木 十歌
林檎實る	案本 一洋	常苑	飛田 周山
青	小早川 清	清風隱聲	上村 松園
甚目寺の一遍	堂本 印象	時の秋	榊原 苔山
入り鶴	穴山 勝堂	哀愁	水田 竹園
飛鶴	森 白重	右廢墟	川上 拙以
高原白夜	吉岡 堅二	中世尊	森 守明
祇園淺宵	勝田 哲	左迦毗羅衛城	町田 曲江
老子	幸松 春浦	林間明月	八田 高容
子猫	畠山 錦成	初秋	吉田 秋光
讀書	中村大三郎	渚	高木保之助
溪光	緒城 素明	探果圖	矢澤 弦月
夏鹿	竹内 柳鳳	うらゝか	武田 鼓葉
室戸岬	小野 竹齋	霜おく頃	望月 春江
白と黒	小川 翠村	阿修羅	小山 榮達
十三詣の装ひ	伊藤 小坡	遙羅の踊	三宅 凰白
山鹿	上村 松篁	日光山	池田 遙郎
潮騒	前田 萩郎	瑞生園	村嶋 西一
燈籠大臣	吉村 忠夫	上高地の秋	野口謙次郎
清韻	川船 水棹	奔瀾	石崎 光瑛
泉州脇の濱	生田花朝女	船二題	太田 天津

右日本軍船	立田川	櫛尾 翠田	とりいれ	櫻井 知足	山下 繁雄	佐々貴義雄	鄭孝得翁之像	河村 龍興
左朝鮮軍甲船	早春の庭	保岡 素堂	泉	高間 惣七	眞山 孝治	多々羅義雄	夢想時代	杉浦藤太郎
あさぎり	富士筑波	尾竹 國綱	湖畔	都鳥 英喜	堀田 清治	濱地 清松	少女像	藤澤 古實
吐綴鶏	池上 秀敏	宮田 司山	祖父	有岡 一郎	佐藤哲三郎	昌子	高橋虎之助	秋天
剛腹之座	磯田 長秋	上田 萬秋	旅藝人	平岡權八郎	鈴木 淳	斜陽の庭	八條 彌吉	飯村 直久
長堤秋意	水田 祝山	山下 竹齋	海を配せる裸婦	木村 義男	窪田 照三	康民收徳	鶴田 吾郎	熊堂先生
時雨	東京 方優	春日野 茗宴	奥日光の秋	加藤 静児	牧野 司郎	丑の日	金子 保	陸軍(電信兵)
薄暮	八木岡春山	第二部 繪畫	或る日の晝室	細井 繁誠	桑重 儀一	薔薇と金莖花	森脇 忠	貝
あさがぼ	廣島 晃市	扇	靈虹(天之日)	太田 三郎	大野 隆徳	心眼(テンペラ)	川合政次郎	女
堀河夜討	服部 有恆	市場	働く漁婦	大久保作次郎	吉田 博	都會風景(パステル)	平澤 大晴	三部作
霧氷	川村 曼舟	晝室にて	婦人半身像	奥瀬 英三	白布の上	寺松國太郎	上野山清實	(地ノ部)光明佛身
竹生鷗	西山 翠輝	沼畔	尾瀬の夕	岡田三郎助	黎明の大雪山	山本 邦助	永	(水ノ部)善魔魚身
古宮陸園靜	野田 九瀨	室内	角野判治郎	白瀧幾之助	霞む春	辻 永	十國時還望(同)	三宅 克己
秋興	矢野 橋村	シャンテ	按摩さん	和田 三造	冬瓜	山本 邦助	高原の秋(同)	相田 直彦
赤陽	山本 紅雲	アラバスク	陸中野海岸	鹿子木孟郎	菊花	橋本 邦助	河野(同)	望月 省三
雙龍	矢野 鐵山	港の舞妓	山喜多二郎太	山田 隆憲	裸婦	田邊 至	山村の踊(版畫)	石川欽一郎
御旗	小早川秋聲	放牧	服部 亮英	杉木 久太	晚秋果物	五味 清吉	山頂雨後(同)	前川 千帆
徳川期名作中	島崎 柳塲	花屋	大久保百合子	鈴木千久馬	グリシアス	永地 秀太	戲れ(エッチング)	織田 一磨
雨過ぐ	森 月城	花の裸婦	池田治三郎	確永嶺より	裸婦エチユード	高村 眞夫	有馬さとい	間部 時雄
衆議	猪飼 咄谷	池	淺井 眞	鏡前	花と二婦	清原重以治	油谷 達	寺崎 武男
奔瀟漆々	中野 草雲	少女	北島 淺一	滑川畔	浴陽	花と二婦	スボーツを樂	第三部 彫塑
露光搖曳	大木 豊平	鶴飼	中澤 弘光	水邊	井上 よし	中野 和高	佐竹徳次郎	少女
秋の雨靜かな	萩生 天泉	氣清	北 運藏	仔獅子	花火	矢島 堅土	雨後之山	裸女
群鯉二態	水上 泰生	湖畔	關口 隆嗣	南 薫造	雨後之山	飾棚	牛瀧風景	小林 眞二
橘公	福田 恵一	子守歌	林 俊衛	松岡 壽	飾棚	草原	裸婦	河井 清一
老妓圖	益田 玉城	積葉	中村 不折	草原	飾棚	末長 護	相馬 其一	初秋の牧場
中洲の夕	大村 廣陽	書を讀む少女	妙義山	長谷川 昇	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘
南国の水邊	太田 秋民	青服の少女	妙義山	長谷川 昇	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘
佐野の常世	加藤 英舟	菊花	麗馬場ニテ	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘	カナカの娘
動物園一隅	庄田 鶴友	菊花	麗馬場ニテ	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘	カナカの娘
冬日	竹原 嘲風	カナカの娘	麗馬場ニテ	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘	カナカの娘
秋晴	古谷 一晁	風景(承德殊像寺)	麗馬場ニテ	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘	カナカの娘
市立つ前	山元 櫻月	初秋	麗馬場ニテ	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘	カナカの娘
新雪の穂高	山元 櫻月	初秋	麗馬場ニテ	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘	カナカの娘
夕しぐれ(英彦山より)	徳田 隣齋	初秋	麗馬場ニテ	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘	カナカの娘
秋晴	安田 半園	貸切電車	麗馬場ニテ	山口 亮一	三上 知治	麗馬場ニテ	カナカの娘	カナカの娘

裸女	渡邊 弘行	無得而得	雨宮 治郎
老人ノ胸像	大西三四郎	裸女	國方 林三
小便小僧	三澤 寛	少女	村田勝四郎
老夫	須藤 素弘	日輪二部作ノ一	關野 聖雲
女	照田 稔	菅公	山崎 朝雲
婦人姿態	白井 保春	十七の女	建昌 大夢
四天王之内持	中野 五一	ある一つの幻	田村 審火
國天試作	花里 金央	想曲より	大島 聯藏
マスコスケ	あゆみ	作品第十六	小笠原貞弘
名魁ノ王様	若き女	大須賀 力	三國 慶一
女ノ群	野村 公雄	つめ	北村 西望
練	大國 貞藏	旭日登天	雨田 光平
信女	橋本 朝秀	愛	後藤 良
悲しき享樂	後藤 清一	寶生重英匠能	安永 良徳
飛沫	吉田 三郎	妄國極	服部 仁郎
能樂石橋	牧 俊高	フロラリヤ	安藤 照
若き建男	森 大造	久遠	中島 東洋
寶華素影	長谷川榮作	胸像	第四部 美術工藝
浮映	後藤 泰彦	潮音	(鑑査展目錄參照)
丹花綻ぶ	三木 宗策	北村 正信	
手鏡	藤井 沼跡	津上 昌平	
羞恥	北村 正信		
默想	津上 昌平		

野人社洋畫展

十一月七日—九日 一宮商工會議所

漫畫クラブ傑作色紙展

十一月七日—十日 銀座・鐘 紡

庫田毅第二回作品展覽會(洋畫)

十一月七日—十一日 銀座・青 樹社

油繪十七點陳列、未完成ながら取材、色彩、畫面に特異な神經と好みを見せ、靜かに澄んだ美しさを現してゐる。「船」と題する數點、「くさりとなわ」、「突堤」など面白い仕事であつた。

藤彦衛門洋畫個展

十一月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

山村耕花個人展覽會(日本畫)

十一月七日—十二日 日本橋・三 越

近作十五點を以て第三回個展を開いた。二曲屏一雙「深山春」を初めとして「崑崙瓜」「日向」「煙草」等が主なもので、さすがに整つた技術でそれぞれに纏められてゐるが概して平俗さを免れず、藝術的な作因と感銘に乏しい憾があつた。

川崎克陶器日本畫個展

十一月七日—十二日 日本橋・高 島屋

専門家ならぬ衆議院議員川崎克が、豫てより復興に努力し又自ら製作を試みつゝある伊賀焼の作品と、日本畫を以て個展を開いた。

ムサシノ會洋畫展

十一月八日—十日 銀座・三 味堂

鹿島英二建築牆幀作品展

十一月九日—十一日 日本橋・高 島屋

建築牆幀に依る染色畫十餘點を展觀した。色彩は溢く趣味の好いもので、工藝圖案としてのみならず獨立した裝飾畫としても樂しむべく、花鳥畫は殊に成功してゐた。

刺繡美術展

十一月九日—十一日 日本橋・高 島屋

山口實洋畫個展

十一月九日—十一日 銀座・紀伊國屋

横山葩生個人展覽會(日本畫)

十一月九日—十二日 銀座・松 坂屋

近作四十一點を展觀した。色彩賡俗で、畫背に深きものを求め難いが、寫生に即しての仕事「高原の初冬」「冬の湖畔」、或ひは裝飾的な構成を試みてゐる「春の海」等は佳作であつた。

加藤英舟日本畫個展

十一月九日—十二日 名古屋・松 坂屋

藤岡昇洋畫個展

十一月九日—十三日 銀座・青 樹社

後藤秋崖畫幅展

十一月九日—十三日 大阪・阪急百貨店

染織研究作品鑑賞會

十一月十日—十一日 銀座・松 坂屋

兵庫縣美術家聯盟第十二回展(日本畫、洋畫)

十一月十日—十二日 神戸・大 丸

兵庫縣在住作家に依つて組織される同聯盟の公募展で、日本畫二十三點、洋畫百三十餘點を陳列した。

北村正信近作彫刻展覽會

十一月十日—十四日 大阪・十 合

一、二點の鑄造を交へた大理石作品十七點を展觀した。自らの境地に安定して美しい作品を樂しんで居り、さすがに材料の特質を生かして練熟の技を示した。

新興數物バイラー作品發表會

十一月十日—十四日 日本橋・高 島屋

第十二回女流畫展(日本畫、洋畫)

十一月十日—十五日 京都・大 丸

大阪毎日新聞社京都支局主催、搬入數日本畫六九點、洋畫一四七點、入選數日本畫五八點、洋畫六〇點。

齊白石、王一亭近作畫幅展

十一月十日—十五日 大阪・阪急百貨店

鐵道省洋畫部第四回展

十一月十日—十五日 神田・鐵道博物館

新制作派協會第一回展覽會（洋畫）

十一月十日—十七日 上野公園・日本美術協會

第二部會を離脱して「反アカデミツクの藝術精神」を主張し、官展に關與せざることを規約の一として、九名の新進作家が結成した新制作派協會は、出品公募に依る第一回展を開いた。會員は何れも舊帝展に於いては新時代を代表する作家達であり、相當の力量と未來性を認められて居ただけに此の運動は美術界にかなり大きな關心と注目を集めた。屢々行はれる美術團體の離合集散が藝術以外に様々の理由を以て行はれる中に、少くとも青年らしい純粹と熱情とを以て興された藝術運動であること、官展廢止の意見を發表した會員等の師藤島武二が進んで此の會に贊助出品をしたことも與つて、本年度の重要な新運動として注意されたのであつた。

一般の出品は五百二十三點の中五十八點を選ばせしめ、會員は各自力作數點宛を出し、贊助出品を併せて總數八十七點を陳列した。作品の出來不出來は別として、技術の上では大體或る水準以上に達し、全體として明快であり潑刺たる意氣を示して一般にも好評であつた。會員等は何れも大畫面を驅使する技巧、舊套を脱した自由大膽な表現近代感覺の攝取等に優れて居り、作者個々の特性も現れてはゐるが、一方取材及び表現上に一種共通なものがあつて、それが教養と作家的觀照の深さをあまり示してゐないことは遺憾である。

伊勢正義の大作「バルコン」及び「キャバレー」の二點は色も調子も面白く、感覺は認められるが

仕事に智性の鋭さを缺く憾がある。中西利雄の水繪「人物」は表現が大掴みでモニユメンタルな効果はあるが頭部を極度に小さくして畸形には必然性を見出し難く、「夏の海岸」は達筆でさりとて出來てゐるが感興に乏しい。鈴木誠は努力は認められるが獨創に缺け、仕事も鄭重でない。四點の中では「三人」が纏つてゐた。

猪熊弦一郎は大作「馬と裸婦」、「二人」の二點を出品した。此の作者の感覺と才氣とは他を抜いてゐるが、前者は一つの試みと見る以外に繪畫的な意圖が明確にされず、尙整理さるべき夾雜物を多く残してゐる。「二人」の方は人物の歪形的表現がわざとらしく一種の氣取りが目障りである。佐藤敬の大作「獨唱」、「制作」の二點は中々野心的な張りのある畫面構成が注目を惹いた。併し其の誇張された線と色調が圖案的説明に陥り、硬く生動を缺いた憾みがある。構成意識に縛られて、物を見る目が疎かになつた。

小磯良平は、獨り古典的な寫實態度を守り續けて、而も暢達した筆に新鮮な美しさを描き出してゐる。三點の中で「憩ふ」、「化粧」いづれも巧な出來であるが、「黒い帽子」は生動の趣があつた。併し此の作者の缺陷は藝術氣稟の不足である。稀なる技術家であるだけに單なる工人に終らせたくないものである。脇田和の大作「ダンス」、「ジャズバンド」は面白い作であつた。本格的な描寫とは云へないが、異國的な踊場の雰圍氣を表現するに成功し、生動するジャズの趣をよく畫面に漲らせた。漫畫に近い難點があるとは云へ、構圖に侮

り難き才能を示し氣の利いた描寫であつた。

三田康は「綠蔭」、「草上」の二點を出陳したが、作者は未だ自己の道の發見に迷つてゐる様子が見える。内田巖の作は個性的傾向が強いが、大作「裸女を扱へる構想」は失敗であつた。此の作者の作風は近代繪畫精神とは遠く且つ自然との背離を示してゐるが、内容的なものを求めてゐる點で獨自な發展を期したい。

藤島武二の贊助出品は近年愈々熟した海景四點と、「蕃女」の一點とで、さすがに洗練された高い境地を示すものであつた。

新作家賞 今村俊夫、坂井範一

出品目録

海の見える窓	矢津 朝紀	初夏のハルビン	小菅 徳三
新聞のある静物	松下 忠雄	バーの二人	宮脇 公實
さばてん	村尾 修子	茶房の女	同
サーカス	岩船 修吉	作品A	小川 末吉
港を見る	東海林 廣	花を持つ女	石山 融
バルコン	伊勢 正義	庭	小田 晴子
キャバレー	同	ドリツク・ク	同
遊園地風景	藤澤 典明	建築場	和田 裕介
晴日	富田 通雄	静物	稲田 光
午後の港	名柄 正之	「J」の家族	同
人物	中西 利雄	遊園地	内田 武夫
夏の海岸	同	習作	灘波 秀二
山手町風景(A)	赤城 如突	赤衣の男	北原 榮一
山手町風景(B)	同	裸婦	伊藤ふじ子
住宅地	恩田 律夫	三人	鈴木 誠
風景	田淵 嚴	露臺	同
家	同	音樂	同
衣裳	小野 忠重	家族	同
風景	齋田 捷三	きもの	合田小三郎
		青衣婦人	高口美年雄
			秋園 元二

風景	佐藤 長生	日の出	藤島 武二
座像	工藤 正義	朝陽	同
座像	瀬島 好正	大洗	同
飾窓の前	白井 次郎	蕃女	同
濱	堀井 駿一	黒い帽子	小磯 良平
談る人	今村 俊夫	化粧	同
裸婦	同	憩ふ	同
田園謳歌	氏京 次郎	浴後	坂井 範一
場末	小山 良修	裸婦	同
俯瞰静物	同	ダンス	藤田 和
樹蔭	曾我 英吉	ジャズバンド	同
理髮師	堀井 一夫	二人	同
樹立	大河内 夢桑	古い洋館	小松 益喜
馬と裸婦	猪熊 弦一郎	工場	同
二人	同	植民地風景(A)	同
山手風景	秋田 仁也	同 (B)	同
石膏のある室内	鳥羽 宗雄	緑蔭	三田 康
風景	福原 武二	草上	同
獨唱	佐藤 敬	風	内田 巖
制作	同	裸婦をめぐる	同
海邊裸女	小林 三郎	風景	同
破片(A)	大河内 信秀	雲	同
同 (B)	同	外出前	島田 滿
室戸御燈臺	藤島 武二		

中部日本陶窯展

十一月十日—十七日 名古屋・松坂屋

井南居第二回東西大家新作畫展覽會

十一月十一日—十三日 日本橋・東美俱樂部

井南居宮崎政近の主催する第二回の日本畫展で、東西の主な作家を網羅した形である。作品五十點許り。伊東深水「春宵」、太田聽雨「良寛嬉戯」、安田靫彦「大雅堂」、前田青邨「勇駒」、小林古徑「爽秋」、小杉放庵「秋興」、荒木十畝「秋圃」、岸波百草居「春雪」、島田墨仙「南山悠々」等注目すべき佳品であつた。

美術展覽會 (十一月)

すべき佳品であつた。

藤井二郎、伊藤繼郎洋畫展

十一月十一日—十四日 神戸畫廊

棟方志功第四回個展(洋畫)

十一月十一日—十五日 新宿・天城畫廊

辻永洋畫個展

十一月十一日—十五日 名古屋・丸 善

第九回春秋會洋畫展

十一月十一日—十五日 大阪・阪急百貨店

佛蘭西洋畫展内見會

十一月十二日—十三日 銀座・交詢社

日佛繪畫協會主催で十二月開催豫定の佛蘭西繪畫展の作品一部先着入荷のもの約五十點を陳列内見會を催した。

佐藤華岳日本畫展

十一月十二日—十四日 京城・三 越

青山襄洋畫展

十一月十二日—十五日 京城・三 越

萩谷巖洋畫個展

十一月十二日—十五日 福岡・岩田屋

レ・リラ第二回洋畫展

十一月十二日—十六日 銀座・紀伊國屋

金屬美術工藝品展覽會

十一月十二日—十七日 日本橋・三 越

鍛金協會主催に依り同協會員製作の金屬工藝品二百點を展觀した。

山澤松篁作陶展

十一月十二日—十七日 大阪・三 越

第四回西日本美術展覽會(洋畫、工藝)

十一月十二日—十八日 福岡日日新聞社

福岡日日新聞社の主催で、洋畫百四十點、工藝は各種目に互り七十九點、別に彫塑二點が陳列された。審査員は和田三造、坂本繁二郎、兒島善三郎、齋藤佳三、野田俊郎、船木長造の六名であつた。

第三回全國中等學校商業美術作品競技會

十一月十三日—十五日 高岡・丸屋百貨店

赤艸社女子洋畫展

十一月十三日—十五日 神戸・大 丸

吉拙五窯展

十一月十三日—十五日 大阪・高島屋

第十七回學生美術聯盟展

十一月十三日—十五日 神戸・大朝支局

第二十回表裝展

十一月十三日—十五日 名古屋美術俱樂部

吉田一雋木彫個展

十一月十三日—十五日 京城・丁字屋

七絃會日本畫展

十一月十三日—十六日 大阪・三 越

讚岐工藝品展覽會

十一月十三日—十六日 高松・三 越

高松工藝協會主催に依り縣下工藝作家の作品五百餘點を陳列した。

小絲源太郎、寺内萬治郎作品展覽會(洋畫)

十一月十三日—十七日 銀座・資生堂

後藤真太郎の主催に依り兩作家の近作を併せて展觀した。いづれもよく勉強してゐる興味ある展覽會であつた。寺内萬治郎は町畫家の味とも言ふべきものを有し通俗さを脱し切れないが感覺的に快美な作を進めてゐる。「椅子に寄る裸婦」「緑の

服」等が佳かつた。小糸源太郎の趣味的な仕事も其の工藝的技術の洗練を加へて魅力のあるものとなつてゐる。「ばらC」「五月頃」など注目される作品であつた。

第六回朗峯畫塾展（日本畫）

十一月十三日—十七日 銀座・松坂屋

伊東深水門下の塾展で各一點宛、合計四十八點を出陳した。何れも仕事は若々しく新鮮な氣持が感じられるが、作畫態度の弱々しさが目についた。村山三千男、津村新太郎、大矢道夫、谷口佗起子、新井守等の諸作が中で佳作の部に入るであらう。深水は「きさらぎ」を出品した。

七彩會洋畫小品展

十一月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

日本壁畫協會第三回展

十一月十三日—十七日 日本橋・白木屋

行幸記念工藝品展

十一月十三日—十七日 鹿兒島縣商工獎勵館

同館の主催で、竹製品、陶磁器、木製品、錫製品等四百餘點を陳列、其の他縣外からも木竹製品などが出品された。

水上泰生個人展覽會（日本畫）

十一月十三日—十八日 福岡市産業獎勵館

故郷に於ける三年振の個展として開催、作品約四十點を陳列した。

ブルーノ・タウト指導小工藝品展覽會

十一月十三日—十九日 日本橋・丸善

最近トルコの招聘に依つて我が國を去つたブルーノ・タウトが、二年餘り高崎郊外に在つて群馬

縣の爲に工藝の指導に盡した業績は、我が工藝界に一つの新たな刺激となつたが、茲に其の指導の成果を示す小工藝品が展觀された。木工が多く、陶器、硝子器、裂地其の他で、裝身具、喫煙具、容器、盆、照明器具、食器其の他日用品として直に實用し得べき簡素な作品が百數十點陳列された。ありふれた材料を素地の儘能ふ限り生かしてゐる點が注目され、裝飾を省いて目新しい感じがあるが、同時に新奇を衒はぬ所に好感を持てる。形態に對するタウトの優れた感覺がよく見られるものであつた。

文部省美術展覽會鑑査展京都陳列會

十一月十三日—二十七日 京都美術館

陳列點數は第一部三百六十一點、第二部三百六十三點、第三部六十七點で第四部は招待展の時に陳列することとした。尙、京都美術館では左記四點を買上げた。

第一部「砂上」秋野不矩、「九月」寺島紫明

第二部「或る日の畫室」市ノ木慶治、「治女三人」光安浩行

中部日本商業美術展

十一月十四日—十六日 岐阜市公會堂

中部日本商業美術聯盟主催。

池上秀畝個人展覽會（日本畫）

十一月十四日—十七日 日本橋・三越

「花鳥を主にしたもので、六曲、二曲屏風をはじめ十三點はその努力を多とするものである。惜しむらくは氣慨の作品に移入されぬ憾みあつて大作『初雪』は枯淡な味あるのみで感銘の少いものとなり、裏箔による『松陰』も亦赤松への技法に苦心の跡を認めることが出

来るが、畫面調整を缺いて迫力の不足を感ずるのは遺憾である。洗練された技法による『白鷺』『小春』『吹雪』等はいづれも克明なる寫生から出で、周到な注意が畫面に行き届き、流石長年に互つての老練さを思はすものである。たゞ難を言へば餘りにも技巧にとらはれて畫格の低きを如何ともし難い。……」（東朝）

青樹社洋畫展覽會

十一月十四日—十九日 銀座・青樹社

洋畫壇の主要作家十名各一點づゝの近作を展觀した。安井曾太郎と和田英作は共に花卉を描いて異なる歩みの對照を示し、他は何れも風景畫に夫々の手慣れた筆致を見せた。安井の「菊」は背景を朱で埋め、花及び磁器の描寫に單純化の優れた技巧が見られたが、奥行に乏しかつた。和田の「薔薇」は洋畫の本格的寫實を正面から進めたもので現代に稀な技術である。辻永の「山湖初秋」は獨自の技法に成る裝飾的な佳品であつた。

目錄

風景	石井 柏亭	薔薇	和田 英作
山湖初秋	辻 永	海	山本 鼎
奈良	中澤弘光	紅葉	小林 萬香
菊	安井曾太郎	湖	南 重造
神苑	山下新太郎	山莊の庭	白瀧茂之助

三宅克己、石川欽一郎水彩畫展

十一月十四日—十九日 銀座・青樹社

兩作家の水彩畫小品五十七點を陳列した。

二十五人展（洋畫）

十一月十四日—十九日 神田・東京堂

三草會展

十一月十四日—二十日 日本橋・白木屋

荒井里曉の日本畫、龜井清市の陶器、勝利彦の

木、金工等三名の作品を陳列した。

津田青楓個展(日本畫)

十一月十五日—十七日 名古屋・松坂屋

第十回陶業品競技展

十一月十五日—十七日 愛知縣・常滑工業學校

古川環子個展

十一月十五日—二十二日 銀座・松屋

中村松華個人展覽會(日本畫)

十一月十六日、十七日 福岡市・縣公會堂

現代名家新作畫展覽會(日本畫)

十一月十六日—二十日 日本橋・高島屋

東西各派の作家各人一點宛三十二點を陳列した。出來不出來様々で慨して餘り實の入つた仕事を見なかつたが、中で群を抜いて見えたのは竹内栖鳳の「秋興」で色調よく輕薄な筆が目につかない佳品であつた。川合玉堂「漁村秋晴」はうるほひ足らず硬い感がしたが之は秋晴の澄明さを狙つたからであらう。菊地契月の「三絃」は此の作家として取り立て、の出來ではないが、場中では優れて見えた。

北方美術協會秋季小品展(洋畫、彫刻)

十一月十六日—二十日 小樽・丸井デパート

第二回青松會日本畫展

十一月十六日—二十一日 上野・松坂屋

矢野橋村、案本一洋、廣島晃甫、中村岳陵、山口華楊、服部有恆、金島桂華、宇田萩邨の八名が各一點宛の小品を出品、會場も悪かつたが作品も力の入つたものを見ず、失望させる展觀であつた。中では橋村が比較的佳かつた。

第三回大衆向工藝品競技會

十一月十六日—二十三日 日本橋・高島屋

京都市主催。

花谷時子、舟越三枝子洋畫展

十一月十六日—二十五日 新宿・エルテル

長谷川利行洋畫個展

十一月十六日—二十五日 新宿・天城畫廊

創立記念諸大家洋畫展

十一月十六日—二十五日 大阪・關西畫廊

秋田市木工品宣傳會

十一月十六日—三十日 丸ビル

九名會第二十五回展(日本畫)

十一月十六日 京都・祇園八坂俱樂部

銀跡會小展(商業美術)

十一月十七日—十九日 銀座・伊東屋

斯心會第一回南畫展

十一月十七日—十九日 銀座・伊東屋

海老原喜之助新作油繪展覽會

十一月十七日—二十一日 數寄屋橋・日動畫廊

第四回の個展で、「卒業式」「愛馬」「馬上散策」「讀む」等二十餘點を陳列した。寫生を離れて落着ある色彩及明暗の配置と造型的單純化に努めてゐるが、靜寂の中に神經の行届いた特異の詩情が満ちてゐる。

新興美術協會第五回展覽會

十一月十七日—二十一日 大阪・朝日會館

關西在住の春陽會々員會友等の組織する會の公募展である。

「花形的作家に乏しく總體的に展覽會面がにぶい感じ

はあるが個々の作品はつぶがそろつてゐて落ちついて觀賞することが出来る、會員では國盛義篤氏の「桃」、田中善之助氏の「南國早春」が畫格の點で優れた技巧的には伊藤慶之助氏の「壺のバラ」、齋藤清二郎氏の「文樂座夏祭即興」、若山爲三氏の「柿紅葉」などを舉ぐべきであらう、入選作品のうち石井彌一郎氏のバリ風景が銀灰調の果敢な描寫で、會友木下公男氏の「ビクベ風景」「バナナの木」と共にこの會では最も感覺的な作品として認めるべきものであらう、……」(大朝)

青木大乘新日本畫展

十一月十七日—二十一日 大阪・三越

岐阜縣陶磁器試驗場試作品發表會

十一月十七日—二十二日 新宿・伊勢丹

同試驗場が從來の美濃燒の行詰りを打開せんとして研究の結果完成した新製品精磁器とて、硬度高く頗る緻密な質の磁器で黃褐色を呈してゐる。食器、茶器、花瓶等多數の製品を陳列したが、意匠甚だ低劣で繪付も俗惡、愛用に適せぬは遺憾であつた。文様の工夫よりも素地を生かす工夫をした方がよさうに思はれる。

飾畫展、附故飯田操朗遺作陳列

十一月十七日—二十三日 銀座・紀伊國屋

釜山美術展(日本畫、洋畫)

十一月十七日—二十三日 釜山・釜日會館並

慶南產業獎勵館

十一月十八日、十九日 金澤市・宮市大丸

第三回全國中等學校商業美術作品競技會

十一月十八日、十九日 名古屋・丸善

獨立美術秋期展(洋畫)

十一月十八日—二十三日 大阪・美術新論社

畫廊

龜高文子の率ゐる關西女流洋畫家の同人展。

鍋井克之新日本畫展

十一月十九日—二十一日 大阪・南海高島屋

魯山人作陶展

十一月十九日—二十一日 銀座・中島居宅

桂月山人近作展覽會並花香畫塾展覽會

十一月十九日—二十三日 上野・日本美術協會

會

松林桂月の近作屏風、幅、卷に互り四十餘點、諸家所藏のものを以て個展を開き、併せて門下天香畫塾々生の作品約五十點の展觀をなした。桂月の作品は力作多く六曲一雙の「溪山春色」を初め同じく六曲屏「風雨山水」「葡萄」、横幅の「南瓜」「四季山水」「松林閑居」等道勁な筆技を示して場中での尤作であつた。卷の「十聲詩意」には作者の豊富な畫才が證され潤達な筆に依る自由な表現が快い。作者の近業を通觀するに足る展觀であつた。

天香畫塾展では市野梧堂、宮原蕪山、藤井靖峯、佐藤敬美等の諸作が注意されたが概して傑出したものを見出さなかつた。

佐伯米子第二回個人展覽會(洋畫)

十一月十九日—二十三日 銀座・資生堂

大阪新美術家同盟第三回展(洋畫、彫刻)

十一月十九日—二十三日 大阪市美術館

關西に於ける洋畫及び彫刻の新人達の、艸園會、ZIGZAG、大阪彫刻會、セクションダールの四團體に依り結ばれた聯合展。

創工社第一回展(工藝)

十一月十九日—二十三日 大阪市美術館

大阪在住の各種工藝家に依つて昨年結成された團體で出品公募の第一回展を開いた。第一部美術工藝、第二部産業工藝の二部に分ち、同人出品四十九點、賛同出品七十三點、參考出品二十一點合計百四十三點を陳列した。

新興潤葉樹材家具試作品展覽會

十一月十九日—二十三日 丸ノ内・府立東京商工獎勵館

東京國有林產物販賣所主催、各營林局、林業試驗場、東京、大阪國有林產物販賣所の出品で、ブナを始めイヌ、シイ、タブ、トチ等を主材とした家具其の他木工品の試作を陳列した。新用材の利用が主眼である爲、意匠に特に新工夫を見せたものは見當らなかつたが、洋室家具セット等氣が利いて材料の特質をも生かした快適なものが見られ十分利用さるべきものであることを思はせた。

山川秀峰個人展覽會(日本畫)

十一月十九日—二十三日 日本橋・三越

「古典舞踊を描く」を主題とし日本舞踊の舞臺上の様々な姿を描いた作品十五點を展觀した。「汐汲」「淺妻」の二曲屏一雙を最大とし、他は小品が多く、線と色彩とに洗練を求めてゐる苦心が了解され、現代風俗を描いた今春の帝展作より面白く見られたが、もつとうるほひと藝術的香氣の溢れたものになつて欲しいものである。

馬來田愛岳南畫個展

十一月二十日—二十二日 銀座・三味堂

第三回全國中等學校商業美術作品競技會

十一月二十日—二十三日 富山市・宮市大丸

佐賀美術協會第二十回美術展

十一月二十日—二十三日 佐賀市公會堂

佐賀縣出身並在住美術家によつて組織される日本畫、洋畫、彫刻、工藝の綜合展である。

中村博英滿洲スケッチ展

十一月二十日—二十四日 上野・明治製菓

田坂乾リトグラフ作品展

十一月二十日—二十四日 銀座・青樹社

商工省輸出工藝展

十一月二十日—二十四日 名古屋・愛知縣商工館

工館

第十五回石川縣美術工藝展

十一月二十日—二十五日 金澤・縣商品陳列所

文化學院生徒作品展

十一月二十一日、二十二日 駿河臺・文化學院

院

自由學園工藝教育展

十一月二十一日—二十三日 目白・自由學園

片山義郎彫刻個人展

十一月二十一日—二十三日 數寄屋橋・ラテ

ン畫廊

滋賀縣下中等學校教員生徒並小學校教員第三回繪畫展

十一月二十一日—二十三日 大津市・縣教育會館

會館

三大學合同洋畫展(商大、關學、醫大)

十一月二十一日—二十三日 大阪市美術館

八象菴近作木彫展覽會

十一月二十一日—二十四日 日本橋・高島屋

吉田芳明が數年前より製作中であつた佛光寺別院西德寺の欄間「龍」完成を機會に、群像「神樂渡御」其の他近作十數點を併せ陳列して個展を催した。

大國壽郎茶の湯釜展觀

十一月二十一日—二十四日 日本橋・三越

第四回熊本縣工藝試作品展

十一月二十一日—二十五日 熊本市勸業館

宇野三吾陶藝個展

十一月二十一日—二十五日 京都・朝日會館

繪更紗畫林展(染色)

十一月二十一日—二十五日 銀座・鐘紡

ねを・くんずと協會小品展(洋畫)

十一月二十一日—二十五日 銀座・ブラジレ

イロ

青巢會第五回洋畫展

十一月二十一日—二十五日 銀座・紀伊國屋

岸田劉生第三回遺作回顧展(洋畫)

十一月二十一日—三十日 新宿・天城畫廊

同畫廊に於ける第三回の劉生遺作展で多くは雜誌裝畫、スケッチの類、油繪では大正二年作自畫像が注意された。

新美術家協會洋畫展

十一月二十一日—三十日 大阪・阪急百貨店

友の會工藝展

十一月二十二日—二十三日 京城・鐘紡ギヤ

ラリー

岡崎丘人社美術展(洋畫)

十一月二十二日—二十四日 岡崎市・市立圖

書館

松田康一第三回個人展覽會(洋畫)

十一月二十二日—二十六日 數寄屋橋・日動

畫廊

藝州美術協會綜合展

十一月二十二日—二十六日 廣島縣產業獎勵

館

津田青楓日本畫展

十一月二十二日—二十七日 名古屋・松坂屋

第一美術協會第七回小品展(洋畫)

十一月二十二日—二十七日 日本橋・白木屋

油繪を主とし水彩、エッチングを交へて六十九點を陳列した。

大森商二油繪個展

十一月二十二日—二十九日 四谷區・慶應病

院陳列所

二科會福岡展(洋畫、彫刻)

十一月二十二日—二十五日 福岡日日新聞

社

野口道方布摺版畫、工藝品展

十一月二十三日、二十四日 小田急成城學園

前南口・成城自治會

木村百木第十五回日本畫個展

十一月二十三日—二十五日 銀座・越後屋

松坂屋工藝美術綜合展覽會

十一月二十三日—二十九日 上野・松坂屋

現代の工藝界の各派各種目に互ひ、多數の作家から出品を求めて、約一千點を陳列した大展覽會で、商品的恰好の品多く、材料用途共あらゆる部

門に互つてゐる。現代工藝の見本市の如き興味はあつたが、餘り數多く、不統一に雜然として、夫々の作品を味ふには困難であつた。之に依つて藝術的批判を受けることは作者も亦本意とせぬものが多かつたであらう。

匠會綜合工藝展

十一月二十四日—二十六日 京都・大丸

第一回アパチロ洋畫展

十一月二十四日—二十六日 新宿・喫茶店N

OVA

第二回包裝試作展

十一月二十四日—二十七日 銀座・伊東屋

和田英作近作展觀(洋畫)

十一月二十四日—二十七日 日本橋・三越

畫布に遠ざかることを餘儀なくされてゐた學校長の職を辭してより約半歳、畫人の生活に還つて専念作畫した風景靜物等の油繪十九點を以て個展を開いた。作者の態度は正面から自然に對し、寫實の本道を進まんとするもので、色彩は若々しく華麗であり筆致は丁寧で正確である。黒釉壺の「ばら」は甘美であつて畫調高くばらの中の佳品である。風景では「湖畔の暮色」「琵琶湖秋色」「曇り日」「富士」を擧ぐべく、靜物では「柘榴」が優れてゐた。

水谷川忠磨風景寫生小品畫展

十一月二十四日—二十七日 銀座・交詢社

第六回青丹會洋畫展

十一月二十四日—二十八日 銀座・青樹社

錨山試作展(洋畫)

十一月二十四日—二十八日 神戸・ブチギヤ

ラリ

日本山岳畫協會展（洋畫）

十一月二十四日—二十九日 大阪・十合

斑丘社工藝展（金、漆）

十一月二十四日—二十九日 上野・池之端神戶屋

昭和五年東京美術學校入學者一同で組織する會で、第一回展を開いた。日用品、小器具等實用的な作品が若い作家達に依つて種々工夫されてゐるのは面白く見られた。同様に陶磁、硝子、染織等を缺くことの物足らなさが感ぜられる。

第二回服飾美術展覽會

十一月二十四日—二十九日 大阪・大丸

高岡物産新見本展示會

十一月二十五日—二十七日 日本橋・日本商工俱樂部

三角堂開店一周年記念展（洋畫）

十一月二十五日—二十八日 大阪・三角堂

池田淑人第三回展

十一月二十五日—二十九日 杉並區荻窪一ノ八六自宅アトリエ

泰西美術品展

十一月二十五日—二十九日 銀座・資生堂南蠻堂主催。

第二回近藤浩一路新作畫展覽會（日本畫）

十一月二十五日—二十九日 日本橋・高島屋

近作二十點、多く紙本水墨で絹本をも交ぜ、淡彩又は彩畫もある。作者は風景を描いて、在來日本畫家の行はなかつた方法で光と遠近の表現を試

み、獨自の水墨畫を作り出した。稍もすれば低調なる洋畫に過ぎざらんとし、或は寫真に近づく如き弊も時に見られたが、今回の作品多くは技法の習練を加へ、畫因の感興もあつて面白く、何より作者が一作毎に楽しんでゐることが觀者の同感を喚起する。「濠」「松林の朝陽」「夕日」等に作者の最も興味を持つ研究態度が見えた。

第一回牧野虎雄個人展覽會（洋畫）

十一月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊

主催者後藤眞太郎。「函嶺春色」「藤咲く庭」等十二點を出品した。

星野空外日本畫展

十一月二十五日—三十日 大阪・阪急百貨店

長谷川利行洋畫小品展

十一月二十五日—三十日 銀座・交詢社

PK人形クラブ展

十一月二十五日—十二月二日 新宿・三越

自由學園工藝作品展

十一月二十五日—十二月二日 大阪・阪急百貨店

新構造社第十回美術展覽會（洋畫、彫刻、工藝）

十一月二十五日—十二月五日 東京府美術館

構造社は昨年彫刻部繪畫部に分れて各々構造社を名のつてゐたが、繪畫部の構造社は本年寺畑助之丞等の彫刻團體十七會と合併して新構造社と改名し、新に工藝部を設けて改名後の第一回展を開いた。併し構造社創立當時より繼續の意味で第十

回展と稱する。會員の中には繪畫、彫刻、工藝の總てに出品せるもの、油繪、日本畫の何れをも作るもの等あり、繪畫部は殊に専門家としての技術を見出し難い。彫刻では寺畑助之丞の外は新會員推薦の戸張幸男を擧げる位である。

陳列數 繪畫一六二、彫刻七三、工藝五三、合計二八八點

新會員推薦 繪畫部 内田正男、寺田芳雄、中

郵善太郎、彫刻部 古賀忠雄、戸張幸男、山

本正年

授賞 新構造賞 山本博（工）、研究賞十名

第一回大潮會展覽會（日本畫、洋畫）

十一月二十五日—十二月六日 東京府美術館

初等及中等學校圖畫教員の作品を蒐めた展覽會で、文部省後援の下に第一回を開いた。審査員は川端龍子、川崎小虎、田邊至、中村研一、牧野虎雄、藤田嗣治、齋藤與里、南薫造の八名。搬入數日本畫三十二點、洋畫一千三百一點。計一千三百三十三點。陳列數總數四百八十一點で其の内譯は油繪三百二十一、水彩畫百三十三、日本畫二十二、版畫五點であつた。

水彩畫はみな一通りの技術を持つてゐて殆ど甲乙なく、又非常に畫風が似てゐる。平生描き慣れてゐる爲と誰にでも出來て一通り纏める技法が普及したからであらう。日本畫は言ふに足らず、最も多數の油繪は中々大畫面が多いが、極めて少數を除いては殆ど正則の技術を有せぬもののみで、此の種の展覽會に依る獎勵は無理な努力を強いるものの様に思はれる。

授賞者 大潮會賞 石本秀雄、特選七名
交詢社日本畫展

十一月二十六日—二十八日 銀座・交詢社
第三回くろも展(洋畫)

十一月二十六日—二十九日 銀座・紀伊國屋
同人八名の作品二十點許を展覧、概して寫實的
傾向で技術の程度は高くないが、中で坂本不二の
三點は優れて中々面白い出来であつた。

藤岡一個展(洋畫)

十一月二十六日—二十九日 銀座・鐘 紡
岡橋三山工藝展

十一月二十六日—二十九日 大阪・高島屋
第二回立陣社洋畫展

十一月二十六日—三十日 銀座・青樹社
會員十三名の作品十三點を陳列した。所謂小品
展でなく賣繪でなく、現代に敏感で潑刺たること
が見るに足る。作品が皆似通つてゐることは、各
人が未だはつきりと自己の道を持たぬからであら
う。

日本文人畫協會第一回展覽會

十一月二十六日—十二月一日 上野・日本美
術協會

文人畫振興を期して新に結成された團體の公募
展で、二百二十九點を陳列した。山水、蘭竹、花
鳥の墨畫が主で、傳統を踏襲しながら新しい境地
を求める努力は見えるが、概して素人藝の域を脱
しては居らぬ。尙參考出品として南畫の古畫を陳
列した。

日英佛油繪展

十一月二十六日—十二月二日 大阪・阪急百

貨店

青樹社主催。

新興美術家協會展覽會

十一月二十六日—十二月九日 東京府美術館
昨年結成された團體の本年は第二回展である。

「新興精神に依る諸種の藝術運動」で日本畫、洋
畫、彫刻、工藝を含み、他の會に見る如く嚴格に
専門分科的でない。同じ作家が繪を描き彫刻を作
る。其の爲とは言へぬであらうが全體として技術
的水準が低い。習慣上日本畫洋畫等の區別を附し
てはるるが注して膠彩、油彩及水彩等とあり、其
の別を撤する趣旨かと思はれる。之は一つの見識
であるが、實情は兩者の本質的相違を問題とする
必要のない所まで技法の格の崩れた作品が多い。
洋畫に接近した日本畫では日本畫の長所を失つて
近代洋畫の缺點のみを真似た觀があり、洋畫亦基
礎的習練が不足である。中では大内青坡の彫塑
「水邊」、洋畫「イブ」「水邊」が優れた技術と獨
自の表現を見せてゐた。版畫で恩地孝四郎の音樂
を主題にした抽象的作品も注意されるものであつ
た。

陳列數 日本畫五二、洋畫一二、版畫一八、

彫塑二四、工藝五二
中谷泰油繪個人展

十一月二十六日—十二月十五日 新宿エルテ
ル

獨立美術秋季展(洋畫)

十一月二十七日—二十九日 京都・大丸
澤田宗山作陶展

十一月二十七日—二十九日 京都・大丸

山本倉丘日本畫個展

十一月二十七日—二十九日 京都・大丸

新時代洋畫展

十一月二十七日—三十日 數寄屋橋・日動畫
廊

會員五名の作品三十餘點を展覧した。山口薫は
寫生的な靜物の外に「神話」「青銅少年」等古典
の夢想を描き「森」に寫實と神話を交ぜてゐて
自由な作風が面白く見られた。津田正周の濫い好
み、村井正誠の象徴的作畫、長谷川三郎の抽象的
線描、矢橋六郎の單純化の取扱ひ等夫々に異なる道
を示して興味があるが、概して頭が先に立つて技
術の根底に危なさを感じるものがある。

前田寛治遺作展

十一月二十七日—三十日 神戸畫廊
山崎貴英子洋畫個展

十一月二十七日—十二月五日 新宿・喫茶店
NOVA

清荒神蒐集富岡鐵齋遺作展覽會

十一月二十七日—十二月六日 大阪市立美術
館

大阪府下清荒神清澄寺住職坂本光淨師の蒐集せ
る富岡鐵齋の遺作五百四十餘點を展覧した。蓋し
其の數量に於て他に匹儔を見ぬであらうが、「天
保九如圖」「月瀬香雪圖」「東瀛仙境圖」等二三
の作を除き概ね粗茶磊落の筆に成るものであり、
玉石混淆、量と質と相伴はざる傾向があつたのは
遺憾であつた。

東西中京大家新作日本畫展觀

十一月二十八日—二十九日 名古屋美術俱樂部

誠和會日本畫展

十一月二十九日—十二月一日 日本橋・東美俱樂部

洛秀會第一回展(日本畫)

十一月二十九日—十二月五日 京都・丸物京都丸物百貨店では新館落成を記念して同地畫壇の代表的作家竹内栖鳳、橋本關雪、西山翠嶂其の他三十名の作品を陳列展觀した。

岡常次第六回洋畫個人展覽會

十一月三十日—十二月一日 銀座・紀伊國屋近作油繪小品五十點を陳列、大部分風景畫で細筆に依る丁寧な寫生であるが、概して表現の弱さを免れてゐない。

第二回三越日本畫展覽會

十一月三十日—十二月八日 日本橋・三越昨年美術界紛糾の一產物として各派綜合を趣旨とする三越日本畫展が出来、今秋其の第二回を開いたが、東西主要作家百十五名より一點宛を集めたと云ふだけで、中には可成り駄作も交つて數が多いだけに頗る雜然とした展覽會になつた。作家の心懸けにも依るが、展覽會は單なる綜合が意味あるのでなく適當な選擇が必要なることを此處にも要求されるのである。而も此の多數を蒐めて、横山大觀以下院展の重要作家を逸したことは遺憾である。橋本關雪の「雄牛」、堂本印象の「漁樵問答」、落合朗風の「樹と魚」、川合玉堂の「仙郷」、川端龍子の「元朝」、川村曼舟の「梅林」、加納

三樂の「海老圖」、鍋木清方の「初雪」、竹内栖鳳の「しづ柿」、田中咄哉州の「伊豆の春」、山口蓬春の「如月」、福田豐四郎の「熱帶魚」、小杉放庵の「春苑」、杉山寧の「霜晨」等が重なるもの又は特色ある仕事として注意されるものであつた。

十二月

サス・ブルネル、エリザベス・ブルネル油繪展

十二月一日、二日 帝國ホテル松の間

昨春來朝したハンガリアの女流畫家 Sass Brunner, Elizabeth Brunner 母子が日本を去るに當つて滯留中の作品二百餘點を展觀した。

久留春年遺墨展觀

十二月一日 奈良・興福寺本坊

萌生會日本畫展

十二月一日—三日 上野池之端・神戸屋

吉田喜藏バステル畫個展

十二月一日—三日 大阪今橋・大阪俱樂部

山岳湖沼等の作品三十二點を陳列した。

林鶴雄、林貞子洋畫展覽會

十二月一日—四日 銀座・青樹社

若き夫妻の油繪展覽會で、小學教師の經歷から生れた鶴雄の兒童生活に取材した作品は、畫材と技法とがよく合致して素直な快いものがある。平明な描寫であるが色彩感に優れ、殊に「青い船」「南紀の岩」などの風景畫に作者のよい素質を見ることが出来る。

岡崎桃乞油繪展觀

十二月一日—五日 銀座・資生堂

室内社畫堂主催で小品二十點を陳列した。宗元花鳥畫の風に倣つた特異な畫風を示し、「桃」など物質感も相當に描けて居るが油繪具の用法に缺陷が見える。

濱田庄司近作陶器展

十二月一日—五日 銀座・鳩居堂

所謂民藝風の好みをはつきり示した各種の食器火鉢等多數で、鐵釉を多く用ひ單純で澁い美しさと實用性を持つものが多い。

鬼頭鍋三郎近作發表展覽會(洋畫)

十二月一日—五日 數寄屋橋・日動畫廊

油繪作品二十四點を陳列した。落着いた色彩感を示し穩和な寫實的作品であるが、筆觸の稍粗なると共に觀照の粗末さの見えるものがある。風景の中で「雪の郊外」「雪」等は何人にも親しまるべき快い出来である。

ポール・ジャクレー版畫並肉筆展

十二月一日—五日 神戸畫廊

新井完洋畫個展

十二月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

第一回二科會女流展(洋畫)

十二月一日—六日 新宿・天城畫廊

第九回蒼原會水彩畫展

十二月一日—六日 神田・東京堂

水彩畫専門の研究團體として此の會の存在は注意されるが、展覽會の成績は頗る不振であつた。特記するに足る作品を見ず、唯同會賞を受けた尾野清の風景を擧げる程度である。

龍駿介洋畫個人展覽會

十二月一日—六日 新宿・伊勢丹

つぼみ會浮彫皮細工作品展

十二月一日—六日 銀座・松屋

眞道黎明日本畫個展

十二月一日—六日 大阪・大丸

三角堂記念展(洋畫)

十二月一日—六日 大阪・三角堂

池袋美術家俱樂部第二回展

十二月一日—二十日 池袋・コテイ

小宮宗太郎洋畫個展

十二月一日—十日 大阪・阪急百貨店

文部省美術展覽會招待展京都陳列會

十二月一日—十五日 京都美術館

陳列點數は第一部九十二點、第二部百十四點、第三部六十點、第四部招待出品四十三點、鑑査出品百五十八點であつた。

現代邦畫結集展覽會

十二月二日—四日 日本橋・高島屋

中外商業新報社主催で東西諸家の作品四十餘點を陳列した。他の同種の展覽會と同様で雜然と蒐められた以外別に特色はない。西村五雲「山果秋味」堂本印象「潤聲永畫」、川合玉堂「鎮守の雪」竹内栖鳳「千岩秋氣高」、津田青楓「盆菜圖」、安田靫彦「白玉椿」、山口蓬春「紅白梅」、小室翠雲「飄雪」菊地契月「藤房郷」等目につくものであつた。契月は常に神經の通つた小品でも何か訴へる仕事を見せてゐる。蓬春は院展風に近いものがあり、少しわざとらしいが華かな裝飾的效果のあるものであつた。栖鳳は巧みな水墨畫であるが氣

韻を缺いてゐた。

東西大家日本畫展

十二月二日—四日 銀座・交詢社

福田眉仙日本畫個展

十二月二日—四日 門司俱樂部

第三回草芽會工藝展

十二月二日—四日 銀座・資生堂

ジャン、アニマ協同展(洋畫)

十二月二日—五日 銀座・紀伊國屋

多くフォーヴィズムの流を引く若い作家達の、陰鬱、強烈、生々しさに充ちた油繪で、意欲の烈しさが感じられるが技術が伴はず、單なる粗暴と怪奇に終つてゐるものが多い。

今右衛門陶展

十二月二日—五日 大阪 阪急百貨店

福島美術協會第七回展覽會(洋畫)

十二月二日—六日 福島市公會堂

石井柏亭審査に當り搬入三百八十點の中百二十點を入選させた。

第二十六回京都表裝競技展

十二月二日—十五日 京都美術館

東西名家日本畫展

十二月三日—五日 日本橋・東美俱樂部

松島畫舫主催

長谷川利行色紙とガラス繪展

十二月三日—五日 京都・梅軒畫廊

庭山耕園畫幅展

十二月四日、五日 大阪・南海高島屋

澤田宗山作陶展

十二月四日—八日 京城・三越

神津港人洋畫個展

十二月四日—八日 銀座・日本サロン

中京州大家作品展

十二月四日—九日 名古屋新聞社畫廊

河井寛次郎新作陶器展覽會

十二月五日—九日 日本橋・高島屋

今春陶硯を出陳した個展以後の作二百點許を展觀した。鐵赤、青釉、黃釉、海鼠等の外象嵌、練上、絞り描等の手法を用ひて獨自の作風を進めてゐる。素地の非常に厚手なものが多く重厚な滋味を見せ、扁壺、縁鉢など特殊なものも幾つかあり、倦まざる研究的態度が窺れた。

中部日本商業美術展

十二月五日—十日 大津市・縣特産陳列場

第三回和光會工藝展覽會

十二月五日—十二日 銀座・服部時計店

岡田三郎助の金、銀打出名刺盆、河村靖山の瑠璃釉、染付、赤繪等の花瓶、沼田一雅の動物置物ランプ、高村豐周の鑄金花瓶等、津田信夫の動物を主題とした置物、廣川松五郎の染色、漆皮製品山崎覺太郎の硯箱、菓子器等が陳列された。沼田一雅の「磁製ダルトン緋色赤釉鶏」「同ぼおぼお」は嘗て我が國では出来なかつた發色に成功したものと云ふ鮮麗な効果のものであつた。概して此の會は好みが應接問的で深い味に缺ける觀があつた

津市主催工藝品展

十二月六日、七日 三重縣社會事業會館

新人社第一回工藝展(金工)

十二月六日—八日 銀座・紀伊國屋

橘小夢優奇世繪展

十二月六日—八日 銀座・伊東屋
江田誠郎滿鮮風景展(洋畫)

十二月六日—九日 神戸畫廊
一耀會第一回展(洋畫)

十二月六日—十日 銀座・青樹社
岡田謙三第一回個人展覽會(洋畫)

十二月六日—十日 數寄屋橋・日動畫廊
小品四十餘點を以つて個展を開いた。此の作者は幾分感傷的であるが藝術的に鋭い個性と感覺とを有し、之に表現する獨自の手法を持つてゐる。

十二月六日—十日 數寄屋橋・日動畫廊
二科展の出品作も注目されたが小品には一層自由に其の抒情詩の流露が見られた。世界は小さくとも深く追求することに今後の道があるであらう。

大谷幸一洋畫個展

十二月六日—十二日 新宿・エルテル

第二回日本刀展覽會

十二月六日—二十日 東京府美術館

大日本刀匠協會主催、文部省後援

菅野圭介滯歐作品展(洋畫)

十二月六日 東京府立第六中學校

エリザベス・キース版畫個展

十二月七日、八日 帝國ホテル松の間

OBD洋畫展

十二月七日—九日 大阪・大株取引所地階

田中佐一郎洋畫個展

十二月七日—九日 銀座・三味堂

大淵武夫滯歐洋畫作品展

十二月七日—九日 丸ノ内・日本工業俱樂部

富本憲吉陶器展

十二月七日—十日 大阪・高島屋
橋本關雪日本畫個展

十二月七日—十日 大阪・高島屋

東都大家紙本畫展覽會

十二月七日—十日 名古屋・松坂屋

獨立美術精銳展(洋畫)

十二月七日—十一日 新宿・天城畫廊

椿貞雄洋畫個人展覽會

十二月七日—十一日 銀座・資生堂

油繪三十五點を陳列。舞妓、老爺、果花、風景等を描いた小品の外に、紅に焼けた「日の出の富士山」(五十號)、「夕焼の富士山」(二十號)等富士の作幾つか目立つた。畫壇の流行に目もくれず草土社以來の自己の道を歩み續ける熱意の強さが見られ、部分的には鋭い眞實感が捉へられてゐるが、全體の把握が曖昧であり、度強さは兎も角として色彩のこなしが頗る洗練を缺く。

佛蘭西近代繪畫展覽會

十二月七日—十一日 日本橋・高島屋

日佛繪畫協會主催で十九、二十世紀フランス作家の繪畫百點許りを陳列した。アマンジャン、ヴラマンク、ル・シダネル、デスパニヤ、アスラン其の他多數作家のものが出品されたが、大部分平俗な室内調度品向のもので、特に注意すべき作品を見出さなかつた。

里見勝藏洋畫個展

十二月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

里南會秋季洋畫展

十二月七日—十二日 大阪・三角堂

中尾白仲日本畫個展

十二月八日—十日 神田・東京堂

尙美堂日本畫展

十二月八日—十日 日本橋・東美俱樂部

關尙美堂主催で東西作家の畫幅三十五點許りを陳列。何れも輕いもので特記する程の作品を見出さなかつた。唯川合玉堂の田舎屋を描いた「雪」は努めて筆を省き絹地其の儘がしつとりとした雪になつて情趣深い佳品であつた。

龍村平藏近作美術帶地展

十二月八日—十一日 大阪・長堀高島屋

野口功造近作染模樣陳列會

十二月八日—十一日 大阪・長堀高島屋

津川清平洋畫個展

十二月八日—十二日 神戸・ブチギャラリー

平安綴織數物陳列會

十二月八日—十一日 日本橋・高島屋

森岡つる押繪展

十二月八日—十二日 日本橋・白木屋

主線美術協會第一回展(洋畫、彫刻)

十二月八日—二十日 東京府美術館

今春東光會を脱した高間惣七等と安藤照等の塊人社とが合體して結成した主線美術協會は、繪畫部二十七名、彫刻部十九名の會員を有する新團體として出品公募に依る第一回展を開いた。此の會は研究を主とすることを標榜してゐて、其の結果は一つの傾向を示すものとなつたが、それは繪畫部だけで彫刻部は依然として何の變りもない。藝術的主張に於て兩者全く別々の觀を呈してゐる。繪畫部の會員が數名を除いては多く水準の低い未

作家に依つて組織されてゐて、全體として技術上彫刻部會員と均衡の取れないことも奇異の感を抱かせ、此の會の本體を不明瞭にしてゐる。

繪畫部は大體造型的追求或は純粹繪畫を目指すと言ひ新形式の發見に苦心してゐることが見られるが、作品の上では立體派に倣ふものも多く、必然の仕事と言ふよりも理論に煩はされた傾が多い。或る程度の成功を見せてゐたのは高間惣七で其の特殊な耽美主義は「太陽と中杓鳴」「海邊」「庭の三人」「庭前」など餘人の追隨を許さぬ美しい畫面を作つてゐた。併し彼の長所は素質から來る感覺的なものに在るので所謂造型的研究は餘り意味を持たない。橋本八百二は昨年の「海」に見せた健康な自然描寫を棄て、今秋の文展には幻想的な作品を出し、今回は更にそれを進めた新研究を見せたが、仕事の巧みさが目立つて、必然性に乏しく表現の稀薄な觀があつた。其の他に立體派、抽象派などを追ふ摸索的な作品が多く見られたが多くの自分のものになつて居らず研究途上の試みと見られた。彫刻部は會員作品のみで寫實に立脚して彫刻の本質を捉へようと努めた穩健な風を示し特に際だつた作品も見ないが、概して平均した出来であつた。中では安藤照、三澤寛、藤澤古實等の作品が注意された。昨年他界した堀江尚志の遺作十四點が特別陳列されたが、是等は群を抜いて傑出してゐた。

陳列數 繪畫一五〇點、彫刻四六點
柏原覺太郎洋畫個展

十二月八日—九日 大阪・三越
ハラツバ會洋畫展

美術展覽會（十二月）

十二月九日—十一日 銀座・紀伊國屋
長瀬阿岐羅藤草木染作品展

十二月九日—十一日 銀座・伊東屋
第二回香風會作品展（日本畫）

十二月九日—十一日 銀座・伊東屋
小卷工房創作藝術衣裳陳列會

十二月九日—十一日 大阪・長堀高島屋
林二郎新作泰西家具木工品陳列會

十二月九日—十一日 日本橋・高島屋
尾竹竹坡未發表遺作展覽會

十二月十日—十三日 日本橋・高島屋

今年六月物故した尾竹竹坡が晩年精進した寫實の作品、未發表のもの三百餘點の中から選んだと言ふ花卉魚介二十八點の遺作を展觀した。眞摯な自然研究を示した手堅い仕事であるが、寫生の精緻に過ぎて寧ろ省略足らず、皮相に終つた憾がある。「石榴花九官」等に見る勾勒着色のもの、「荷」「榮螺」「菜の花」「蟹」等の沒骨彩畫のもの、「梧桐」「向日葵」「梅」「朝顔」等の紙本白描のものの三種があり、沒骨描の屢々水彩畫に接近するのが見られた。白描のものは焦墨で細緻精銳な筆意を見せ、少しうるさい觀もあるが、ごまかしの無い態度が力強いものになつてゐる。總じて晩年の作者が更生を目ざし初歩的研究に没頭した態度を物語る興味深き展觀であつた。

元川克己第一回洋畫展

十二月十日—十三日 神戸畫廊

野口道方工藝作品展

十二月十日—十四日 銀座・西野屋
商美ボスター展

十二月十日—十五日 大阪府立貿易館
泰東書道院第二回展

十二月十日—二十一日 東京府美術館

美交社開業記念繪畫彫刻展

十二月十日—三十日 大阪・ギャラリー美交社

上社會小品展覽會（洋畫）

十二月十一日—十三日 數寄屋橋・日動畫廊

會員の油繪小品七十點を陳列した。藝術運動として集つた會でないだけに各人各様の手法を示し技術も相當程度のものである。概して穩かな寫實的作風であるが、諸方面に頭角を出して名を知られた作家はやはり自らの畫風を持つものである。

高田力藏渡歐記念洋畫展

十二月十一日—十三日 本所區役所

山口縣立工業試驗所第十七回創立記念展（工藝）

十二月十一日—十三日 山口縣立工業試驗場

森古泉俳畫展

十二月十一日—十五日 大阪・十合

田村孝之介豆繪展（洋畫）

十二月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

東京會日本畫大家新作展覽會

十二月十二日—十四日 日本橋・東美俱樂部

東京會主催で東西諸作家三十七名（院展に屬する作家は加はらず）の作品一點宛を集めて展觀した。橋本關雪「巢鶴」、西村五雲「春寒」、堂本印象「双牛」、川合玉堂「雪」、鍋木清方「秋江」、川端龍子「仔猫」、川村曼舟「霧氷」、川崎小虎

「霜の朝」等が見られた。

木下五郎洋畫個展

十二月十二日—十四日 昭和經濟俱樂部

柳瀬正夢油繪作品展

十二月十二日—十四日 神田・東京堂

充美會西洋古美術展覽會

十二月十二日—十四日 大阪・阪急百貨店

菅橋彦作畫展 (日本畫)

十二月十二日—十五日 大阪・阪急百貨店

造型彫刻家協會第二回展

十二月十二日—十六日 銀座・紀伊國屋

第二回展主題「飛翔」に依る作品は研究的態度を見るが未だ成功と稱し得るものに乏しいやうであつた。瀧一夫の父の像「習作」はたゞたどしさがあるが、父に對する感情の溢れた作であつた。

第一回二科會十二人展 (洋畫)

十二月十二日—十七日 新宿・天城畫廊

テラコッタ小品展

十二月十三日—十五日 新宿・フランス屋

敷

寺内萬治郎個人展覽會 (洋畫)

十二月十三日—十七日 大阪・美術新論社

畫廊

畦地梅太郎版畫展

十二月十三日—二十日 新宿・エルテル

川上幸吉洋畫個展

十二月十四日—十六日 數寄屋橋・日動畫

廊

平岡權八郎油繪近作小品畫展覽會

十二月十四日—十七日 日本橋・高島屋

既に一通りの技術を持つた作家であるが、陳列された近作三十二點には近頃の流行を取り入れた新しい工夫のものが見られた。併し本質的に何等の發展がある譯でなく、形式に必然性を持たぬ爲に輕薄觀を與ふるに止つた。

中村鐵洋畫展

十二月十四日—十七日 神戸畫廊

獨立美術秋季展

十二月十四日—十八日 大阪・三角堂

小松多喜尾洋畫個展

十二月十四日—十八日 大阪・三越

小口正二諏訪郷土民藝展

十二月十四日—十九日 銀座・資生堂

佛英油繪大展覽會

十二月十四日—十九日 銀座・青樹社

青樹社主催で十九世紀以後のフランス繪畫三十點、イギリス繪畫八十一點、計百二十點を陳列した。

能勢塾洋畫展

十二月十六日—十八日 銀座・三味堂

オリムピツク獨逸ポスター展

十二月十六日—二十日 上野・明治製菓

大竹哲水油繪展

十二月十六日—二十日 上野・明治製菓

三浦竹軒第一回作陶展

十二月十六日—二十一日 大阪・阪急百貨店

京都名陶工新作展

十二月十六日—二十一日 大阪・阪急百貨店

朝鮮現代雜器展

十二月十六日—二十五日 銀座・たくみ工藝

店

カー・カム エツチング個展

十二月十七日、十八日 銀座・紀伊國屋

現代洋畫小品展

十二月十七日—二十四日 上野・京成聚樂

宮部聚芳個展

十二月十七日—二十二日 日本橋・白木屋

多聞堂東西邦畫展

十二月十八日、十九日 日本橋・東美俱樂部

知名畫家の作品二十三點を陳列したが實の入らぬものが多かつた。

甲斐仁代洋畫個展

十二月十八日—二十日 新宿・天城畫廊

東西大家新作日本畫展

十二月十八日—二十日 大阪・十合

新作日本畫展覽會

十二月十八日—二十一日 日本橋・高島屋

阿々土社主催で東西諸作家の作品一點宛十九點を展觀した。川合玉堂は最近雪の作品を多く試み此處にも一點を出した。小品のスケッチであるが殆ど墨一色、淡墨の外暈で雪を現はし簡潔を極めて畫品亦高い。紙本墨で描いた安田靫彦の「水仙」はのんびりして而も十分智的である。其の他小川芋錢の「田家瑞雪」、山村耕花「貴客」、川端龍子「櫻鳥」、堅山南風「雪風」、榊原紫峰「雪中の松鷹」、田中咄哉州「うすらい」などが見られた。

別車博資近作水彩畫展

十二月十八日—二十一日 神戸畫廊

名古屋新聞社主催「小院展」

十二月十八日—二十四日 同社南館

京都陶器協會作品展覽頒布會

十二月十九日、二十日 日本橋・第一製藥
同會は今夏中尾萬藏博士逝去の爲一先づ閉止することとなり其の最終の頒布會を開いた。

森榮洋畫個展

十二月十九日—二十一日 銀座・紀伊國屋

新興獨立小品展(洋畫)

十二月十九日—二十一日 京橋・味の素ビル

大八會第二回作品展(洋畫)

十二月十九日—二十一日 銀座・三味堂

大正八年東京美術學校卒業者の會で概して作品の程度は高くない。中では能勢龜太郎の「濤」が優れてゐた。

向井潤吉洋畫個展

十二月十九日—二十三日 大阪・美術新論社

畫廊

柳瀬正夢ポスター展

十二月二十日—二十二日 芝・協調會館

和歌と繪の對幅展

十二月二十日—二十二日 大阪・三越

菅野由爲子洋畫個展

十二月二十一日—二十四日 新宿・天城畫廊

佐々木京林個展

十二月二十一日—三十一日 京城・三越

春秋會第十回洋畫展

十二月二十一日—三十一日 大阪・阪急百貨店

工藝濟々會新作品展覽會

十二月二十二日—二十五日 日本橋・高島屋

板谷波山の陶磁、石田英一、桂光春、海野清、

北原千鹿の金工、香取秀眞、山本安曇、佐々木象

展覽會以外の作品

堂の鑄金、六角紫水、河面冬山、堆朱楊成、都築幸哉、梅澤隆眞の漆工、飯塚琅玕齋の付工、保阪光山の貝甲、鹿島英二の染色作品七十餘點を陳列した。何れも傳統的な技術に練達の作家達であり特に新な創作傑出した作品を挙げ得ないが夫々の境地と技藝を示した展觀であつた。

橋本邦助洋畫小品展

十二月二十二日—二十五日 神戸畫廊

第一回鎌倉彫秋峰會展

十二月二十三、二十四日 銀座・資生堂

新海竹藏彫刻十二支展覽會

十二月二十三—二十九日 日本橋・三越

十二支の動物を主題として木彫、鑄銅、乾漆、陶の小彫刻、置物、香合などの作品を陳列、何れにも作者の味を面白く見せてゐた。

號外クラブ作品展(洋畫)

十二月二十三—二十九日 大阪・美術新

展覽會以外の作品

日本畫

堂本印象筆「醍醐寺三寶院純淨觀禪繪」 堂

本印象は昭和五年醍醐寺三寶院內純淨觀の襖繪四十四枚の揮毫を依頼されたが本年九月完成し、一昨年の風禍で倒壊した時を同じうして復舊工事を竣へた純淨觀に納入された。純淨觀は上段の間と次の間とより成り、上段の間には水墨山水を、次の間には濃彩の櫻楓を描いた。いづれも足利以後の障屏に學びつゝ、多くの獨創を加へ、新鮮な美しさ

論社畫廊

原田卯一郎油繪水彩個展

十二月二十三—三十一日 新宿・エルテル

土井撰美堂新作畫展

十二月二十四日 京都岡崎公會堂

白石隆一洋畫個展

十二月二十五—二十六日 銀座・紀伊國屋

文展第四部香川縣出身者入選工藝品展

十二月二十五—二十七日 高松・池田屋

長谷川利行第六回ガラス繪展

十二月二十五—二十七日 新宿・天城畫廊

四行會洋畫展

十二月二十六—二十八日 銀座・資生堂

岸園山新作陶器展

十二月二十六—三十日 日本橋・高島屋

原創三郎油繪個展

十二月二十八—三十一日 新宿・天城畫廊

を現してゐる。櫻楓に於ては智積院を想起させつゝ、而も全く畫風を異にし、金箔に代ふるに金砂子を以てし明快な賦彩と様式化に新な裝飾畫としての効果を收めた。尙北側入側には水墨で、柳に魚籠、柳に鷹を、西側入側には鷹に巢鳥を描き、又上段の間袋戸には小松に月を描いて居る。

黒谷方丈襖繪

京都黒谷大方丈には曾て今尾景年の柳圖及び久保田米偃の虎圖の襖繪があつたが先年焼失し、今年四月同方丈再建が成るに及んで新に父子の縁に依り、今尾景祥が墨繪松圖及び

久保田金僊が彩色虎圖を揮毫完成した。何れも金地襖である。

聖徳記念繪畫館奉納畫 明治神宮外苑聖徳記念繪畫館奉納の日本畫は、總計四十圖の中昨年迄に三十七圖が完成されて三圖を餘すのみとなつてゐたが、別記の如く本年四月二十一日同繪畫館完成式が舉行されることとなつたので、執筆の畫家達は懸命の精進を以て仕上げに努力し、左の通り完成式當日迄に何れも製作を完了し、作品は直ちに同館に奉納された。

結城素明筆「内國勸業博覽會行幸啓」

侯爵大久保利和の奉納に依るもので、四月上旬完成し同十八日納入された。圖は明治十年八月二十一日、天皇、皇后宮には東京上野に開催の第一回内國勸業博覽會に臨御あらせられた節、美術館内御巡覽中の光景を謹寫したものである。

松岡映丘筆「神宮親謁」

侯爵池田仲博の奉納に依り、故平福百穂の後を承けて謹作されたもので四月十九日納入された。圖は明治二年三月十二日、神宮に御親拜あらせられた際、天皇玉歩を内宮瑞垣御門内に進めさせ給ふ光景である。

岡田三郎助筆「大阪行幸諸藩軍艦御覽」

侯爵鍋島直映の奉納に依る同畫は四月廿日完納された。圖は明治元年三月二十六日、佐賀藩の軍艦電流丸、車駕の天保山に著御あらせらるゝを拜し祝砲を發する情景を謹寫したもので、作者は材料に岩繪具を使用し日本畫風に描いた。

京都丸物百貨店壁畫

藤田嗣治、東郷青兒の兩名は九月下旬、京都市丸物百貨店の依頼により藤田は新築成れる同店の中二階喫茶室に、東郷は同食堂に、各々カンバス張付の裝飾壁畫を執筆した。藤田の壁畫は縦六尺、横十二尺で、題材は十九世紀中葉の人物に現代の女を配し、バックにフランス風景を描いたもの。東郷の作は縦七尺、横十二尺の畫面に南歐的な田園風俗を獨特の手法で描いてゐる。此の作者の大作は珍しいが其の畫風と落付いた色彩とは面白い壁面裝飾としての効果を收めてゐる。尙同食堂には此の外にも兩作家が夫々小壁面を描いてゐる。

藤田嗣治筆關西日佛會館壁畫

藤田嗣治は本年五月に開館した京都市關西日佛會館の貴賓室に、縦二米、横三米のカンバス張付油繪壁畫を揮毫した。題材をフランスの田舎風景にとり、前景右手に三人の娘、左に林檎樹を描き、遠景に部落を望んだものである。

岡田三郎助筆「王道樂土」

岡田三郎助は滿洲國政府の依頼により同國務院の大ホールに飾る「王道樂土」を執筆、九月下旬完成した。大さは横十四尺、縦七尺。支那、滿洲、日本、朝鮮、蒙古の五少女が仲よく手をつないだ圖で、五族協和を象徵したものである。

聖徳記念繪畫館奉納畫

同繪畫館奉納の洋畫は四十點の中二點が残されてゐたが、左の通り完成されて全部の奉納が完了した。

藤島武二筆「東京帝國大學行幸」

侯爵前田利爲の獻納によるもので、四月十八日納入された。圖は明治四十五年七月十日、東京帝國大學卒業式に臨幸、車駕將に正門を入らせられんとする光景を謹寫したものである。

和田英作筆「憲法發布記念式」

公爵島津忠重奉納のもので、繪畫館壁畫完成記念式當日の朝納入された。圖は明治二十二年二月十一日、天皇正殿に出御、憲法發布式を行はせられ、憲法を内閣總理大臣黒田清隆に授けたまふ光景を謹寫してゐる。

和田英作筆「山本内閣親任式圖」

和田英作は、大震災當時赤坂離宮内廣芝御茶屋に於て舉行遊ばされた山本内閣親任式の圖を豫て御下命を拜し、縦四尺五寸、横十尺の油繪二面に謹寫中であつたが、八月末完成して奉納した。

安井會太郎筆「本多先生の像」

東北帝大金屬材料研究所内の本多先生在職滿二十五年記念會の依頼に依り、五月完成されたもので、理學博士本多光太郎の肖像畫である。油繪三十號で、忠實な寫實に出發して作者独自のデフォルマシオンと單純化が行はれ、肖像畫には珍しい藝術的な製作と言ふべきである。

伊原宇三郎筆「徳川家達公肖像」

伊原宇三郎は新議事堂に掲げる前貴族院議長公爵徳川家達の油繪肖像畫を執筆完成した。大さは約縦五尺三寸、横四尺二寸で十月十六日新議事堂内第三號委員室正面に掲けられた。

彫刻

洋畫

朝倉文夫作「菊五郎及團十郎胸像」

歌舞伎座に建設される五代目菊五郎及九代目團十郎の胸像

像原型が朝倉文夫に依り三月初旬製作された。

聖野聖雲作「高杉東行銅像」

聖野聖雲の製作にかかる高杉東行の銅像が下關市日和山公園に建設され、五月廿六日除幕式を執行了した。像は高さ一丈六尺の立像である。

山崎朝雲作「湊川神社拜殿狛犬」

山崎朝雲は湊川神社の拜殿正面に新設する狛犬の銅像原型を製作し七月完成した。像は高さ四尺、臺とも八尺餘の大作である。

北村西望作「故久米桂一郎胸像」

北村西望に依り故久米桂一郎の胸像が製作され、七月二十七日故人の三週忌に東京美術學校校庭に除幕式が舉行された。

朝倉文夫作「先代左團次胸像」

先代市川左團次の胸像が朝倉文夫により製作され、九月二十八日明治座に於て除幕式が執行された。

本山白雲作「伊藤公銅像」

本山白雲作の伊藤博文公銅像は十月新議事堂傍に、その建設を竣へ、同月廿六日除幕式を行つた。尙銅像は高さ一丈七尺、臺一尺五寸、礎石二丈である。

加藤景雲作「狩場明神像」

加藤景雲は木像「狩場明神像」を製作、十月三十一日高野山に奉納した。像は立像で弓を携へ、高さ約四尺五寸、二匹の犬を連れてゐる。

朝倉文夫作「嘉納翁銅像」

朝倉文夫製作の嘉納治五郎銅像が東京市小石川區文理科大學構内に建設され、十一月廿八日同校庭に於て除幕式が執行された。像は高さ七尺、和服姿である。

吉田三郎作「林權助男銅像」

林權助男の喜壽を祝ふ銅像が吉田三郎により製作され、十二

月二日京城倭城舊總督官邸庭内に於て除幕式が擧げられた。フロックコート姿、高さ八尺の立像である。

渡邊長男作「菅公像」

渡邊長男のかねての製作による菅公銅像が、東京府下淺川驛岸谷山御衣公園内に建設せられ、十二月二十九日除幕式が執行された。像の高さは一丈六尺である。

建築

一月

仙臺簡易保險支局 仙臺市北一番丁一二七、大藏省營繕管財局設計、大林組施工、鐵筋コンクリート造地階共六階建、建築面積一、四九六坪、總延坪七、一四七坪

二月

吉田時計店日野工場 東京府下日野町、菅原榮藏建築事務所設計、清水組施工、本館鐵筋コンクリート造三階、附屬建物乾構造二階、建築面積三五五・七八七坪、總延面積八五五・一九八坪

三月

京大醫學部附屬醫院內科病室 京都市左京區吉田町、京大營繕課設計、鐵筋コンクリート造四階地下一階、建築面積六〇五三・八二平方米
京都・都ホテル新館 京都市三條路上都ホテル構内高臺、村野建築事務所設計、藤木工務店施工、鐵筋コンクリート造二階建地下二階附、總延

面積二九三・五〇坪

鐵道博物館 神田區須田町、鐵道省東京改良事務所建築課設計、清水組施工、鐵筋コンクリート造、一部鐵骨使用、三階建、總延面積七、一〇三平方米

日本中學校 世田谷區松原町二丁目、今井兼次設計、清水組施工、鐵筋コンクリート造、一部鐵骨使用、三階建、建築面積五四三坪強、總延面積一、一一〇坪

江戸川尋常小學校 牛込區水道町、東京市土木局建築課設計、鐵筋コンクリート造、一部鐵骨使用、三階及四階建、建築面積一五六・五一平方米、總延面積三、八一・七三平方米

谷中尋常小學校 下谷區谷中三崎町、東京市土木局建築課設計、鐵筋コンクリート、一部鐵骨使用、三階建屋階地階附、建築面積三五九・二二坪、總延面積一、一二五・一四坪

東國敬神道場 群馬縣北甘樂郡一ノ宮町、大江國風建築塾設計施工、純日本風、總延面積三七〇・二五坪

阪急ビルディング 大阪府北區角田町六二、阪急電鐵工務課、竹中工務店設計、竹中工務店施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下二階地上八階、電車ホーム下總地下室造、建築面積二、六三三坪、總延面積一七、八三七坪

關西大學豫科教室 大阪府三島郡千里村字千里山一七、大林組設計施工、鐵筋コンクリート造、三階建、建築面積四九二坪四六四、總延面積一二一八坪七三二

四月

大阪市美術館 大阪市天王寺區茶臼山町、大阪
市營繕課設計、鐵骨鐵筋コンクリート造、地上三
階、地下一階、建築面積四、〇三三・八平方米、
總延面積一二、七一六・一平方米

五月

慶應義塾幼稚舎 澁谷區豐澤町六七、谷口吉郎
會根中條建築事務所設計、安藤組施工、鐵筋コン
クリート造三階建、建築面積二、一六〇・三平方
米、總延面積四、四九五・五平方米

日本赤十字滋賀支部病院本館

大津市、岸田日出刀設計、鐵筋コンクリート造
地下室附三階建、建築面積一二七三平方米、總延
面積四二一〇平方米

南滿洲鐵道株式會社東京支社 赤坂區葵町二、

安井武雄建築事務所設計、大倉土木株式會社施工
鐵骨鐵筋コンクリート造、地上七階地下一階、
建築面積一六五〇・四三平方米、總延面積一一五
八〇・七一平方米

關西日佛學館 京都市左京區吉田泉殿町八、木

子建築事務所設計、清水組施工、鐵筋コンクリ
ート造、地上三階地下一階、建築面積一六五・五二
九坪、總延面積四四〇・〇二三坪

日本タイプライター株式會社 京橋區寶町一ノ

二、石本建築事務所設計、大林組施工、鐵骨鐵筋
コンクリート造、地上七階地下一階、建築面積一
四二・六〇七坪、總延面積一、二二八・七七一坪

輕井澤萬平ホテル 長野縣佐久郡輕井澤町六八

久米建築事務所設計、井上工業株式會社施工、本

館(アルプス館) 久米式木骨耐震構造、二階建ア
チック階附、建築面積四九二・一坪、總延面積八
七一・四六坪

六月

女子會館 芝區芝公園、渡邊仁建築工務所設計
本館第一期工事四四七坪餘、鐵筋コンクリート三
階建一部鐵骨使用

大阪青年塾堂 大阪市天王寺區夕陽丘町、大阪

府營繕課設計、松村組施工、鐵骨鐵筋コンクリ
ート造、講演場三階、本館二階(一部地階)、建築
面積一、三五八・五一平方米、總延面積二、七四
五・五〇平方米

三井銀行大阪支店 大阪市東區高麗橋二ノ一、

會禰中條建築事務所設計、竹中工務店施工、鐵骨
鐵筋コンクリート造、中二階付二階建(總地階、
一部中階付)、建築面積四七三・三二坪、總延面積
一、三一三・五七坪

七月

橫濱銀行集會所 大熊喜邦、林豪藏協働設計、

清水組施工、鐵筋コンクリート造地上三階、地下
一階、建築面積一六二・〇七坪、總延面積六四一・
四三坪

新舞子水族館 三重縣新舞子、久米建築事務所

設計、名古屋電軌鐵道株式會社施工、鐵筋コンク
リート造、地階及中二階附、建築面積三三三・二
〇六坪

山中觀光ホテル「河鹿莊」 石川縣江沼郡山中町

大林組住宅部設計施工、木造及鐵筋コンクリート

造、一部鐵骨使用、地上三階地下四階、建築面積
五七一・四九坪、總延面積一九六三・六五坪

八月

青雲莊 芝區新堀町、山口蚊象建築事務所設計

鐵筋コンクリート造三階建、一部木造二階、總坪
數二四〇・七五坪、有效坪數一七七・八坪

日本郵船株式會社橫濱支店 橫濱市中區海岸通

三ノ九、和田順顯設計、大林組施工、鐵筋コンク
リート造三階建(一部地下室付)、建築面積二四
四八・三四八平方米、總延面積六七六七・九九五
平方米

九月

野々宮ビルディング 麴町區九段一ノ一二、土

浦龜城建築事務所設計、大倉土木株式會社施工、
鐵筋コンクリート造七階、中二階及地階付、建築
面積一四五・三四四坪、總延面積一二二四・六〇
七坪

小國民道場 麻布區盛岡町一、東京府總務部營

繕課設計、清水組施工、繪畫館鐵筋コンクリート
造二階建、講堂鐵筋コンクリート及一部鐵骨鐵筋
コンクリート造一階一部二階建、靜座室鐵筋コン
クリート造一階建、總延面積一、〇五五・九三坪

富士ニユーグランド・ホテル 山梨縣南都留郡

中野村字平野、志村太七建築事務所設計、鹿島組
施工、木造一部鐵筋コンクリート造三階地下一階
建築面積六二八坪、總延面積一、二二二坪

三宮驛 神戸市葺合區布引町四丁目、鐵道省工

務局建築科設計、大林組施工、鐵骨鐵筋コンクリ
ート造、一階建一部地下室及中二階付、建築面積

約八、七五四・〇平方米、總延面積約九、五五三〇平方米

十 月

三井クラブハウス 世田谷區上高井戸、久米建築事務所設計、建築施工研究所施工、鐵筋コンクリート造二階建、建築面積一二五坪、總延面積三四〇坪

目黒區役所廳舎 目黒區中目黒四丁目、東京市建築課設計、鐵骨鐵筋コンクリート造三階地下一階一部木造二階建、總延面積九二六坪

大丸神戸店 神戸市神戸區明石町、村野藤吾建築事務所設計、大林組施工、鐵筋コンクリート造地上八階地下二階建、建築面積新館及改造一、四八一・七九平方米

大阪放送會館 大阪市東區馬場町六ノ四、日本放送協會臨時建築部並渡邊仁建築工務所設計、大林組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上六階塔屋三階、建坪一九二七・〇一平方米、總延坪九六一・四九平方米

十 一 月

帝國議會事堂 麹町區永田町、大藏省營繕管財局設計

本館概要

建坪(主階)三、七〇五坪、延坪一五、七八〇坪
階數 一般三階(一部四階)地下一階中央塔九階高サ 一般六九尺、中央塔二一六尺
幅員 正面六八一尺、側面二九二尺五寸
總室數(主要ナルモノ)三九〇室
議場 貴族院議場、衆議院議場各二二五坪、幅一〇五尺、奥行七八尺、議席數(貴族院)四六〇

展覽會以外の作品

(最大限六三五)、(衆議院)四六六(最大限六三五)、傍聽席數(貴族院)七七〇、(衆議院)九九二
構造 基礎 ベデスタル式コンクリート杭打、壁體、鐵骨鐵筋コンクリート造、花崗石張、床及屋根、鐵骨鐵筋コンクリート造

地鎮祭 大正九年一月三十日

上棟式 昭和二年四月七日

竣工式 昭和十一年十一月七日

意匠設計は大正八年の第二次の議會建築設計懸賞競技の一等に當選せる渡邊福三の設計を基礎とし、大正七年に設けられた臨時議院建築局が之を改良修正して、實施設計を完成せるものである。當時の工營部長は矢橋賢吉、工務課長は小林金平調査課長は大熊喜邦であつた。此の臨時議院建築局の仕事は、大正十四年五月新設された營繕管財局に引き繼がれた。其の工務部長は矢橋賢吉、工務課長は大熊喜邦、監督課長は小林金平であつたが、昭和二年五月大熊喜邦工務局長となり、工務課長には池田謹治が就任した。又昭和六年五月には監督課長が小島榮吉に變つた。

其の外形はルネッサンス様式を主體とし、之をセセッション風に自由に省略改變せるもので、細部には東洋的題材を用ひた所も多い。

其の内部の裝飾には、ルネッサンス、バロックロココの諸様式を用ひ、便殿、皇族室、兩院協議室は、立禮の洋室ではあるが、日本風に裝飾されて居る。便殿の造作の漆塗、蒔繪と螺鈿を配せる漆塗屏は東京美術學校に依頼製作せるものである。此の外正面玄關のブロンズ屏も同校の製作になつた。織物、刺繡、木彫、金工等本邦工藝の諸分野を動員した精巧優美なる内部の裝飾は、其の

模様が多く西歐より得たものである點は惜しむべきであるが、其の仕事の優秀さに於て、好い模範を示すものである。又中央廣間の大理石モザイク、各室に絹緞通を卒先的に使用して居る事も特記に價ひする。

建築に用ひられた材料は全部國産品を用ひ、其の九千八百十噸に上る鐵骨は、總て八幡製鐵所の製品であり、外壁の花崗石は勿論、内部に用ひられた三十七種に及び大理石も總て國産である。又議事堂として世界一を誇る機械設備も、一として國産でないものはない。

名古屋觀光ホテル 名古屋市西區仲ノ町一、山下壽郎建築事務所設計、清水組施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造地上七階(内屋階塔屋二階)地下一階、建築面積二、〇四五・七五五平方米、總延面積八、七九五・二二六平方米

日本赤十字社病院外來診療所 澁谷區宮代町一木子建築事務所設計、安藤組施工、鐵筋コンクリート造、地上四階地下一階、一部地階付平家建、建築面積九一二・七〇一坪、總延面積二、七八三・三三五坪

京都丸物 京都市

渡邊節設計、清水組施工、鐵筋コンクリート、建坪一二二九・二坪、延坪八八三五坪

十 二 月

川奈觀光ホテル 靜岡縣田方郡小室村字川奈(川奈ゴルフ場内)、高橋貞太郎建築事務所設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、本館地下一階地上三階、附屬館地下一階地上一階、建築面積八二八・三五坪總延面積二、一八八・七一坪

美術界彙報

一月

第一部會の運動

新帝展の機構に對する不滿から、舊臘東京在住の舊帝展無鑑査の日本畫家達に依つて組織された第一部會では、豫て今春の帝展開催に反對し、帝國美術院を再改組すべしとの要求を示してゐたが、それと共に本年五月同會自ら展覽會を開催することとなり、一月六日展覽會規定起草委員會を開いて其の原案を作製した。

同八日午後銀座皆川ビルに第一部會總會を開催、右規定を審議決定したが、會期を定むるに至らなかつた。又同會の主眼とする新帝展改革運動に就いては、協議の結果左の如き試案を決議し、要求貫徹の爲に、飛田周山、町田曲江、野田九浦、島田墨仙、矢澤弦月、勝田蕉琴、吉村忠夫、小泉勝爾、水上泰生の九名を實行委員に擧げて、文部當局、帝國美術院會員等を歴訪せしめ、運動を繼續することとなつた。

「現下畫壇の混亂狀態に處すべき試案
一、帝國美術院は日本美術の最高諮問機關とすること
一、帝院は各在野團體の展覽會に對し補助獎勵をなすこと
一、舊帝展を今後一在野團體と認むべきこと

一、帝院は週期的に各團體の綜合展覽會を開催すること

以上の件會員會議に於て實行決定せられたきこと 第一部會」

七彩會組織

女流洋畫家長谷川春子、佐伯米子、藤川榮子、島あふひ、遠山陽子、三岸節子、橋本はな子の七名は新團體七彩會を組織し、一月九日其の發會式を舉げた。

藤井浩祐帝院會員任命

昨年十一月二十九日帝國美術院總會で新會員に推薦された藤井浩祐に對し、一月十四日附を以て帝國美術院會員仰付らるゝ旨發令された。

日本工藝品經育陳列會出品物發送

日本輸出工藝聯合會では、商工省補助の下に一昨年より引續き二回バリーで日本工藝品陳列會を開いたが、本年は初めてニューヨークで来る三月同陳列會を開催することとなり、昨秋東京、大阪、名古屋の三市で開かれた商工省輸出工藝展覽會終了後、其の出品の中から選出された九三七點（陶磁器二五〇、漆器一七九、金屬製品九〇、布帛類一九〇、木竹製品一一四、其の他綜合品一一四）を一月十四日名古屋出帆能代丸でニューヨーク宛發送した。

竹内栖鳳の再改組意見

昨夏の帝國美術院改組以來沈黙してゐた竹内栖鳳の

新帝展反對、帝院再改組要求の意見が、第一回帝展を間近に控へた一月三十一日報知新聞紙上に記者の訪問記として發表され、世人の注目を牽いた。後に記す如く、京都畫壇に俄に帝展不出品の運動が起つたのは、此の栖鳳の意見が動因となつたものである。紙上に傳へられた所を抄録すれば左の如くである。

「文部省の改組のやり方は案のれり方が足らず、それをまた權力でまゝとめて行かうとするところが見える、會員内部の反對があつても、無理に押切らうとしてゐる、面目にこだはつてゐる、面目とは商人の損得です、帝院改組後日が経つにつれ、それが益々はげしい、全美術界はもめにもめて不潔な毒ガスを發生してゐる、その中であつて、私は「帝院再改組」を要望する一人です……映々麗々各流派の美術はいはゞ「七色の虹」です、處が新帝展は虹を色に塗りつぶさうとしてゐる……美術は政府直接の庇護を必要とする時代と、さうでない時期があります、今や政府の直接庇護を必要としない時期に入つたと思ひますその昔浮世繪も南畫も野に咲いたからこそ榮えたのです……從來舊帝展内部には東京方、京都方と二つの流れが對立してゐたやうに入はいつてゐる、ところが今度は、更に院展派といふ流れをも一つ加へたので、新帝展は舊帝展よりも一つはげしい鬭争の府となつたのです……文部當局が「再改組は必ずやるから第一回だけ顔を立ててくれ」と態度をハツキリすれば、私とて一夜漬でも出品しないでもない、ところが文部當局は第一回新帝展がうまく成功すれば、そのまゝ再改組をやらずに押切らうとする意向が見える、それでは新帝展に出品すれば、それだけ再改組から遠ざかるやうなものだ、不條理を我慢してまで文部當局に義利立てする筋合はありません。」

一二六

二月

松田文相薨去

文部大臣松田源治は二月一日心臓麻痺の爲急逝した。

川崎文相就任

松田文相薨去の爲、其の後任として川崎卓吉が二月二日文部大臣に任ぜられた。

青松寺火災

二月四日午前七時五十分頃芝區愛宕町の青松寺本堂より發火、同堂内部百六十坪を全焼し、本尊木彫釋迦如來及び脇侍文殊普賢兩菩薩の三尊像竝に上宮教會所藏の鎌倉時代の作と言はれる聖德太子像を焼失した。本堂は鐵筋コンクリート造、工費二十八萬圓を以て昭和六年落成したもの、本尊及び兩脇侍は山崎朝雲に依つて同九年完成された名作であつた。

京都畫壇の帝展不出品運動

京都在住日本畫家の間では、舊臘東京の第一部會が新帝展反對運動を起して参加を勧誘した時にも之に應ぜず、一般に帝展出品を目指して製作中であつたが、出品搬入日の迫つた二月上旬に至り俄かに不出品の空氣が起り、主要作家の大多數並に一般出品者等も申し合せて帝展出品を中止せんとするに至つた。其の動機は、豫て昨年の帝國美術院改組及び新帝展に倦らぬながら、同院總會の決議を重んじて帝展参加に決し、世上再改組などの論が行はれても自重を續けてゐたものであるが最近に至つて前記の如き竹内栖鳳の意見が傳へられてから、栖鳳の系統に屬する

畫家達の間に、恩師の意向に順應し、之を實現せんとする氣運が昂じて來て、遂に動かし難き大勢を成すに至つたものである。

栖鳳を主宰者とする竹杖會は全員不出品を決議し、二月八日夜には西山、西村、土田、堂本、石崎、中村の各畫塾では塾員參集して協議した結果、何れも全員不出品を決するに至つた。西山翠嶂、西村五雲等は帝國美術院會員の立場から極力慰留に努めたが、此の氣勢を如何ともし難く、菊池契月、川村曼舟の各畫塾に於ても無鑑査の作家達は友情不出品の情勢となり、一旦出品の發送を托した作家も撤回を申し出るなど混雜を極めた。

右に就き西山翠嶂等は九日午後四時談話の形式で左の如く聲明した。

「私達は今度の新帝展改組につきましては、素より十全のものと思つてゐませんが、所謂改組問題につきましては當然期待を持ち但し時機としては、第一回展覽會開催後が適當かと考へてゐましたが、最近栖鳳先生の再改組に對する御意見の表示を付度致しますとその根本意見としましては元來私達と全く同一であり要はその時機が今日であるとの御考へであります上、また私達の立場と致しましては現在の狀態に鑑みまして、この際これに對する何等かの考慮を計りたいと思つてゐる次第であります。

西山翠嶂、西村五雲、土田麥僊、
太蒼會結成 第二部會々員伊原宇三郎、中野和高、矢島堅土、阿以田治修、佐竹德次郎、鈴木千久馬の六名は、新團體太蒼會を結成し、二月十一日其の旨を

發表した。親睦と研究を趣旨とし、同人が第二部會々員たることに變りはないものである。

京都畫壇出品に決す

前項の京都畫壇不出品問題に就き、文部省石丸學藝課長は二月十一日入洛し、帝國美術院會員等と懇談を重ね、府市當局者等にも斡旋を求むる所があつたが、其の結果翌十二日圓滿なる解決に達する諒解成立し、會員等も一般の作家に對して不出品申し合せの撤回を勸告した爲、一同之に従つて今次の不出品運動は解消するに至つた。右に就き同日午後四時、西山、西村兩名は入院中の土田の同意を得、三名の名を以て左の如き談話を發表した。

「私共は一般少壯作家の不出品にまで擴大した事態に對し心配し今後の局面打開策を考へてをりました折柄文部省では使者を派遣されわれわれとの間に種々協議を行つた結果文部省ではわれわれの目的を望よく理解されしましたので氣分も自ら朗らかとなりここに至つては一般作家にも是非出品してもらはうといふことになつた次第であります。締切日などについては運送店と交渉中でありまして適當なる取扱ひをしてくれること、信じます、なほこの問題については京都市長も盡力されました。」

第一部會總會

新帝展反對を標榜する第一部會では、其の主張貫徹の爲會員一同帝展に出品しなかつたが、其の出品受付の締切日なる二月十三日午後、銀座皆川ビルの同會事務所にて總會を開き、協議の結果、帝展問題を繞つて現下の美術界は混亂を極めてゐるから新帝展は速かに

解消すべし」と云ふ意味の建白書を當局に提出することに決定、委員を選んで起草せしめた上、近く川崎文相を訪問して之を提出することとした。

帝國美術院常議員會

帝國美術院常議員會は二月十四日正午から帝國學士院で開催、京都出品延着問題に就いて協議した。

岡田三郎助抗議

帝展第一部の鑑別は二月十五日から始められたが、之に關聯して、同夜岡田三郎助は第一部審査主任小室翠雲に對し、去る五日横山大觀、小林古徑等が日本美術院々友等の帝展出品畫を下見したことに就き抗議を申し込んだ。小室主任は翌十六日鑑査續行に先ち横山審査員の説明を求めた所、問題とする程度でない實情が判明した爲他の審査員等も之を諒解し、同日夕小室、岡田兩名と會見の結果此の問題は打切られることとなつた。

十七會結成

昨秋構造社を脱退した寺畑助之丞を中心として、從來構造社に出品してゐた彫刻家有志が新團體十七會を結成し、二月十七日聲明書を發した。

平櫛田中鑑査を棄權

帝展第三部の鑑査は二月十六日から行はれたが、最終日の同十八日に至り平櫛田中は他の審査員と意見衝突の結果、中途退場して鑑査を棄權した。

ジュネーヴ日本版畫展覽會

日本版畫協會では現代日本版畫の海外紹介に努めてゐるが、文部省、外務省等の援助の

下にジュネーヴで展覽會を開くこととなり、會員等の作品約二百五十點を送附、之に同地キヤシエー・アルバレ夫人蒐集の日本古版畫等を加へた日本版畫展覽會が同市博物館で二月二十九日から四月五日まで開催され、多大の成功を収めた。

三月

麗文會組織

東京及び京都の工藝家十九名（東京一〇、京都九）は新團體麗文會を組織し、三月一日京都で發會式を行つた。（便覽一〇二頁參照）

東邦彫塑院二科制廢止進言

東邦彫塑院では、帝展第三部の彫塑を甲乙二種に分つ新制度に豫てより反對して其撤廢を進言し、第一回帝展には不出品の態度に出でたが、帝展開催の成績に鑑みて再び其の主張を繰返すこととし、三月四日同院常議員長谷川、國方、後藤、北村、關野等は文部省に石丸學藝課長を訪問して其の趣旨を説き、帝展三部の分科に就て文部當局並に帝院會員諸賢に再び進言す」と題する意見書を提出した。尙其の文書は關係方面に送付した。

夢二の會設立

故竹久夢二の才能と藝術とが忘れられてゐることを惜み、有島生馬、恩地孝四郎等十五名が發起人となつて夢二の會を設立することとなり三月八日上野の勸兵衛酒屋で創立相談會を開いた。

帝國美術院常議員會

帝國美術院常議員會は三月九日午前十時から東京府美

美術館で開催本年五月大阪に於て帝展陳列
會開催の件を協議した。(四九頁参照)

高岡惣七等東光會脱退 洋畫團體東
光會の會員高岡惣七、堀田清治、橋本八
百二、會友中尾達、益山雅衛等は、三月
八日同會を脱退し、同志二十六名を以て
新團體主線協會を結成、十日左の聲明書
を發表すると共に日動畫廊で其の披露を
行つた。

「最近私達は社會情勢や畫壇の動搖に鑑み各
自の眞摯な藝術的進歩の必要に迫られてゐる
ことを痛感してゐます。願はば私達の現在に
藝術目的の追求以外の團體的の雜事に煩は
され藝術的な政策に悩まされ、ために純粹な繪
畫研究の妨げとなるものが極めて多いのであ
ります。今度はこの煩雜な團體的雜事から離
別して一意各個の純粹な藝術的進歩に全力を
盡すことに決心しました。現在の有爲の畫家
達は藝術目的を離れた團體の經營や其の他畫
壇的な政策に煩はれることなく眞實な藝術
研究者として反省すべき秋に際會してゐると
信ずるのであります。私達は此の趣旨の旗の
もとに新しい第一歩を踏み出すことに決心し
ました。

主線協會
第二部會總會 反帝展を標榜する洋
畫團體第二部會では、三月十二日丸之内
マールに委員會を開き、今秋の同會展
覽會の問題等に就き協議したが、同十四
日午後五時同所で總會を開催し、今後の
態度方針に就き協議の結果、今秋も昨年
同様の方法を以て展覽會を開催すること
帝展と時期が衝突する爲會場難の恐れが
あるが飽くまで既定方針を堅持して進む

こと等を決した。

新古典派創立 金子九平次、片山健
吉、那須辰造、鹽月越の四名は、三月新
古典派宣言を發し新古典派協會を創立し
た。(便覽七頁参照)

造型彫刻家協會組織 九名の青年彫
刻家によつて新團體造型彫刻家協會が三
月中旬組織された。

長谷川昇春陽會脱退 春陽會々員長
谷川昇は三月二十四日、拘束なき自由な
境涯にあつて藝術に精進したいとの意味
の聲明を發し、春陽會を脱退した。

彩々會結成 八名の洋畫家が三月新
團體彩々會を結成した。

平生文相就任 廣田内閣成立後内務
大臣潮惠之輔が文部大臣兼任中であつた
が、三月二十五日附を以て平生飢三郎が
文部大臣に任ぜられた。

尙文部大臣秘書官として岩井章人が三
月二十七日附任命された。

エコール・ド・東京組織 洋畫の最
尖端を目指す青年作家達に依つて、合同
的な新團體エコール・ド・東京が組織さ
れ、三月二十九日發會式が舉げられた。

(便覽六三頁参照)

オリンピック藝術競技参加 今夏ベ
ルリンに開催の第十一回國際オリンピック
大會藝術競技に参加の爲、大日本體育
藝術協會では昨年來準備中であつたが、
東京科學博物館に一般参加希望者の出品
を求めて三月十六日其の審査を行つた。

出品總數百九十三點の中、日本畫三點、

洋畫十一點、版畫十五點、彫塑一點、合
計三十點を入選と決定、此の外に審査員
等無鑑査の作品を加へて都合繪畫六十三
點、彫刻十一點、建築五點、總計七十九
點が競技に参加することとなつた。是等
の出品は三月二十九日から四月三日まで
東京府美術館で國內展覽會開催、同十二
日横濱出帆の照國丸でベルリンに向け發
送された。尙造形藝術の外、今回からは
音樂も参加した。日本より出品の目錄は
左の通りである。

繪畫

犬追物	伊藤龍涯	印地打	伊藤龍涯
羽根つき	伊藤鈴子	鞠つき	石田重子
打球	太田天津	相撲	太田秋民
駒競	荻生天泉	水泳	加藤榮三
釣り	山田中吾	バスケツト	間宮 正
アイス	藤田隆治	雪合戦	小林立堂
ホッケー	佐藤永芳	射弓	岩淵芳華
競泳	三浦文治	少年水走	東山魁夷
スキー	鈴木朱雀	征服	石九一
古典的競馬	豐藤 勇	群像B	陳 瑞
柔道	加藤隆久	柔道	金子博信
ゴール前	神田周三	フオルム	高田力藏
マラソン	高根澤政子	剣道	鶴田 宏
薙刀	自轉車練習 中出三也	薙刀	中村琢二
タツクル	浪江勘次郎	ドリブル前	倉田三郎
用意	草光信成	スタート	草光信成
相撲	日本德生	テニス	山本德生
排球	後藤繁喜	日本の女性	古淵正信
バチナー	海老原 喜之助		
ジュニ			
版			
水彩	石井鶴三	雨中競争	石井鶴三
射的	猪熊弦一郎	フット	伊勢正義
		ボール	

櫓	碓伊之助	アイスホ	春村た々を
スケルテ	春村た々を	オリンピック	脇田 和
インク	川上澄生	スキーの	田坂 乾
村童野球	長坂春雄	合同競走	榎方志功
高跳	市民體操	鐵槌投	山口 進
市民體操	榎方志功	ジャンプ	前川千帆
女子砲丸投	山口 進	タツクル	深澤索一
ゴルフ	古川龍生	學生相撲	小磯良平
相撲	深澤索一	スケルト	小林朝治
學生相撲	小磯良平	跳ぶ	兒玉 篁
スキー	小林朝治	スキ	佐藤 敬
競馬	荒井東留		

彫刻

馬場に出た	池田勇八	打球	池田勇八
姉しき	畑 正吉	横綱兩構	長谷川義起
國技	長谷川義起	ゴルフ	長谷川義起
バトン	宮島久七	木練坊	日名子實三
タツチ	日名子實三		
流鏑馬			

工藝

仕切	長谷川義起	視屏	清水龜藏
建築			
野球塔	石川純一郎	設計圖	石川純一郎
ブル	内田祥三	弓場	内田祥三
日本の			
ゴルフ	岸田日出刀		

四月

建築學會創立五十周年記念講演會
建築學會では四月九日を以て同會創立五
十周年記念日に相當する爲、同九日及十
日に互に祝賀會、記念放送、記念講演會
等を催し、又同一日から十日迄帝大建築
科教室及び建築會館で記念展覽會を開い
た。
シドニー國際美術展覽會出品 漆洲

シドニーの國立美術館では、本年七月各國の出品を求めて國際借款美術展覽會を開催することとなり、豫て外務當局を通じて我が國にも現代美術を代表する繪畫及び工藝品の出品を、點數を豫定して依頼して來たので、文部、商工當局及び國際文化振興會等で協議の上同會の事業として之に應ずることとなり、出品の銓衡中であつたが、繪畫六點、工藝品十二點、合計十八點を決定し、四月十三日横濱發の加茂丸でシドニーに向け發送した。品目は左の通りで、繪畫は文部省所藏、工藝品は商工省所藏品中より貸し出したものである。

日本畫 竊冥(荒木十畝)、カンナ(常岡文龜)、夕(三谷十絲子)、母子(上村松園)

洋畫 裁縫女(小磯良平)、夏の内海(金山平三)

工藝 方形狂獅子模様刀漆畫香盆(六角紫水)、布目象眼鑄銅瓶掛(香取正彦)、拘桶模様漆器手箱(眞鍋光男)、陶試紅磁染附花瓶(商工省陶磁器試驗所)、御所車櫻模様花瓶(香蘭社)、眞葛燒磁製青海波彫色附遊鯉圖花瓶(宮川香山)、「引吭長鳴」鑄銅置物(津田信夫)、鐵刀木飾壺(稻木春千里)、花籠(飯塚琅玕齋)、つゞれ錦花輪圖四曲屏風(川島甚兵衛)、振袖キモノ(高島屋)、カキツバタの圖袋帶(龍村平藏)

帝院第一部三會員協議 豫てより所謂帝展不開催、或は再改組の意見を抱く

帝國美術院會員松岡映丘、荒木十畝兩名は、四月十一日午後湯河原に竹内栖鳳を訪問し、帝展改革に關する意見を交換し、種々協議を遂げた。此の協議に先ち竹内栖鳳は再改組に對する根本的態度を明かにしたとして、四月十二日附報知新聞は左の如く傳へた。

「漫然と帝展不開催を唱へるのは破壊のため破壊で自分の取らざるところである、次の建設を目指しての破壊でなくてはならない。いやすくらも帝國美術院會員たる者が改革意見を出すからには、後進出品畫家の方向を考慮してやらなくてはならぬ、單なる不開催意見、解消論であつてはならぬ、あくまで官展の機構を尊重したものでなくてはならぬ、たゞこれだけのことだが、これは一歩も譲らぬ、帝展の現状ではいけないといふことについては信念を持つてゐる、事實統制のとれなかつた帝展を支持するためには横車を押しても厭はぬ會員達を反省させ、聽従させなくては止まぬものである、私の意見は『論理は穩健だが、信念は固い』のである、統制の取れない帝展を統制の取れるやうにしようといふ穩健な案を提出して、それでも文部當局や帝展支持會員達が横車を押してこの案を却つとすると、その時はまた何をかいはんやである、意見の一致を見ないが故に止むなく帝展不開催、あるひは廢止となるなら、その時は現狀を維持して行かうといふ會員たちに帝展滅亡の責は歸せらるべきである」云々

主線美術協會結成 過般東光會を脱退した洋畫家達を中心として組織された主線協會と、彫刻團體塊人社とは、日本美術界に正しく處する態度に於て、全面的に一致し、且つ洋畫、彫刻相互の研究

啓發が團體としての藝術運動強化のためにも、作家の個人完成のためにも、より有意義である事を認め、茲に兩者合一して新たに主線美術協會を創立(同會趣意書)し、四月十四日新宿白十字で發會式を舉げた。繪畫部二十七名、彫刻部十八名の會員より成る。

尙塊人社は彫刻研究團體として昭和四年創立されたが、「今回の合同に於て、塊人社從來の主義主張は何等の變更を見ることなく、その儘、主線美術協會の主義主張となつて生き、寧ろ益々その強化擴充に向つて邁進する事に」(同社摺換)なつたとして、自然消滅したものである。(便覽七五頁參照)

日本美術院同人推舉 日本美術院では四月十七日、新に左記五名を同人に推舉した。

繪畫部 太田聰雨、中村貞以
彫塑部 中村直人、宮本重良、松原松造
聖德記念繪畫館壁畫完成式 明治神

宮外苑聖德記念繪畫館の、明治天皇の御一代記を永久に傳へる壁畫は、日本畫洋畫各四十枚合計八十枚の中、既に七十五枚は昨年迄に奉納され、大阪行幸諸藩軍艦御覽(岡田三郎助)、東京帝國大學行幸(蘆島武二)、憲法發布式(和田英作)、神

宮親謁(松岡映丘)、内國勸業博覽會行幸(啓(結城素明))の五圖を残すのみであつたが、是等諸家の努力に依つて漸く完成を見たので、四月二十一日明治神宮奉贊會總裁閑院宮載仁親王殿下臨の下に、同

館に於て嚴かな完成式が舉げられた。

午後一時三十分殿下には奉贊會會長徳川家達公以下役員、奉納者、揮毫者の奉迎裡に御着、奉贊會役員の外、奉納者總代、揮毫者總代に賜謁あつて後親しく壁畫を御巡覽遊ばされた。午後二時三十分中央ホールの式場に台臨、役員、奉納者揮毫者參列して式が舉げられ、左の令旨を賜はり、壁畫揮毫者總代蘆島武二に御目錄を下賜、壁畫奉納者を代表して徳川閑順公、揮毫者を代表して和田英作の奉答あり、徳川會長の挨拶で式を終つた。次で同館階下西側廣間で參列者一同に賜餐あり、總裁宮殿下には午後三時二十分御歸還遊ばされた。

「令旨」

明治神宮外苑聖德記念繪畫館ノ壁畫完成ヲ告ケ本日茲ニ其ノ丹精ヲ盡シ精巧ヲ極メタル蹟ヲ覽ルハ予ノ殊ニ満足スル所ナリ惟テ壁畫ノ事企テラレシヨリ既ニ十有餘年ヲ經タリ其ノ間ニ於ケル畫家ノ苦心想慕スルニ餘アリ今ヨリ以往此館ニ出入スル者必スヤ努メトシテ明治盛世ノ事蹟ヲ回顧シ祭神ノ御遺德ヲ仰慕シ以テ益々報効ノ念ヲ固クスヘキヲ疑ハス而シテ四壁ノ繪畫亦千歳ニ互リテ不朽ナルヲ得ン一言以テ感喜ノ意ヲ表シ併セテ深ク奉納者諸子ノ志ヲ多トス

昭和十一年四月二十一日

聖德記念繪畫館は明治神宮奉贊會の主となる一事業として計畫せられ、繪畫の作製に就ては大正五年繪畫館委員及同顧問を囑託して先づ畫題の選定に着手、慎重な審議に六年餘を費し同十一年六月に八十題を決定、同十二年繪畫委員會の外

日本畫家洋畫家各六名より成る壁畫調製委員會成立、揮毫者の選定其の他の審議に當り、爾來七十六名の擔當畫家を決定夫々執筆に従事してから十二年を経て全部の完成を見たものである。揮毫者の中業半にして物故し、後繼者又は他の畫家に完成を譲つたもの、兒島虎次郎、平福百穂、小堀鞆音、葛谷龍岬、吉川靈華、石橋和調、長原孝太郎の七名を數へ、完成後故人となつた畫家も數名に及ぶ。畫題、揮毫者及奉納者は左の通りである。

- 一、御降臨 高橋秋華 奉納者 侯爵中山輔親
二、御深會木 北野恆富 男爵鴻池善右衛門
三、立親王宣下 橋本永邦 三菱合資會社
四、踐祚 川崎小虎 侯爵池田宣政
五、大政奉還 郡田丹陵 公爵德川慶光
六、王政復古 島田墨仙 侯爵松平康莊
七、伏見鳥羽戰 松林桂月 公爵毛利元昭
八、御元服 伊東紅雲 公爵近衛文麿
九、二條城太政官代行幸 小堀鞆音 男爵三井八郎右衛門
一〇、大總督樞仁親王京都進發 高取稚成 侯爵蜂須賀正韶
一一、各國公使召見 廣島是市 侯爵伊達宗彰
一二、五箇條御誓文 乾 南陽 公爵山内豐景
一三、江戸開城談判 結城素明 侯爵西郷吉之助
一四、大阪行幸諸藩軍艦御覽 岡田三郎助 侯爵鍋島直映
一五、即位禮 猪飼晴谷 京都 市
一六、農民收獲御覽 森村宜稻 侯爵德川義親
一七、東京御著筆 小堀鞆音 東京 市
一八、皇后册立 菅 樞彦 大阪 市
一九、神宮親謁 松岡陞丘 侯爵池田仲博
二〇、廢藩置縣 小堀鞆音 伯爵酒井忠正
二一、岩倉大使歐米派遣 山口蓬春 横濱 市

- 三、大警祭 前田青邨 伯爵龜井茲常
三、中國西國巡幸 長崎御入港 山本森之助 長崎 市
三、中國西國巡幸 鹿兒島著御 山内多門 鹿兒島 市
三、京濱鐵道開業式行幸 小村大雲 鐵道省
三、琉球藩設置 山田眞山 首里 市
三、習志野之原演習行幸 小山榮達 侯爵西郷從德
三、富岡製絲場行啓 荒井寛方 大日本蠶糸會
三、御練兵 町田曲江 十五 銀行
三、侍講進講 堂本印象 臺灣 銀行
三、德川邸行幸 木村武山 公爵德川團順
三、皇后宮田植御覽 近藤雄仙 公爵一條實孝
三、地方官會議臨御 磯田長秋 公爵木戸幸一
三、女子師範學校行啓 矢澤弦月 櫻 會
三、奧羽巡幸馬匹御覽 根上富治 日本勸業銀行
三、訃傍陵視謁 吉田秋光 男爵住友吉左衛門
三、西南役熊本鑑城 近藤雄仙 侯爵細川護立
三、內國勸業博覽會行幸啓 結城素明 侯爵大久保利和
三、能樂御覽 木島櫻谷 男爵藤田平太郎
三、初雁の御歌 大久保作次郎 子爵淺澤榮一
三、グランド將軍と御對話 高村眞夫 北海道廳
三、北海道巡幸屯田兵御覽 五味清吉 男爵古河虎之助
三、山形秋田巡幸鎮山御覽 松岡壽 日本銀行
三、兌換制度御治定 寺崎武男 公爵山縣伊三郎
三、軍人勸諭下賜 上野廣一 侯爵井上勝之助
三、條約改正會議 北 運藏 東京商業會議所
三、岩倉邸行幸 跡見 泰 警 會
三、華族女學校行啓 跡見 泰 警 會
三、東京慈善醫院行啓 藤谷國四郎 東京慈善會
三、樞密院憲法會議 五姓田芳柳 公爵伊藤博邦
三、憲法發布式 和田英作 公爵島津忠重
三、憲法發布觀兵式行幸啓 片多徳郎 日本興業銀行
三、歌御會始 山下新太郎 宮内省
三、陸海軍大演習御統監 長原孝太郎 名古屋 市
三、教育勸語下賜 安宅安五郎 若 溪 會
三、帝國議會開院式臨御 小杉未醒 貴族院、衆議院
三、大婚二十五年祝典 長谷川昇 華族會館
三、日清役平壤戰 金山平三 神 戸 市
三、日清役黃海海戰 太田喜二郎 大阪商船株式會社
三、廣島大本營軍務觀視 南 薫造 侯爵淺野長勳
三、廣島豫備病院行啓 石井柏亭 日本醫學會
三、下關講和談判 永地秀太 下 關 市
三、臺灣鎮定 石川寅治 臺灣總督府
三、靖國神社行幸 清水良雄 第一 銀行
三、振天府 川村清雄 公爵德川家達
三、日英同盟 山本 鼎 朝鮮 銀行
三、赤十字社總會行啓 湯淺一郎 日本赤十字社
三、對露宣戰御前會議 吉田 苞 公爵松方 嚴
三、日露役旅順開城 荒井陸雄 關 東 廳
三、日露役奉天戰 鹿子木孟郎 南滿洲鐵道株式會社
三、日露役日本海海戰 中村不折 日本郵船株式會社
三、ボーツマス講和談判 白瀧慶之助 橫濱 正金 銀行
三、凱旋觀禮式 東條鉦太郎 海 軍 省
三、凱旋觀兵式 小林萬吾 陸 軍 省
三、樺太國境劃定 安田 稔 日本石油株式會社
三、勸業會 中澤弘光 侯爵德川賴貞
三、日韓合邦 辻 永 朝鮮各道

一、東京帝國大學行幸 藤島武二 侯爵前田利爲
二、不 豫 田邊 至 東京 府
三、大 群 和田三造 明治神宮奉贊會
帝院第二部七會員意見書提出 帝國美術院の第二部に屬する會員、岡田三郎助、中村不折、藤島武二、滿谷國四郎、和田三造、南薫造、中澤弘光の七名は、豫てより昨年の帝國美術院改組及び新帝展に關し、不満足の意を藏しつゝ表面的には沈黙を續けて來たが、愈々帝國美術院及び其の展覽會問題に關する根本的な改革意見を纏めて之を意見書とし、四月二十三日郵便を以て平生文相に提出した。其の内容として傳へられる所に依れば、帝國美術院解消を第一案とし、之が不可能の場合は展覽會を帝國美術院より分離せしめ、帝展を廢して別に文部省主催の展覽會を開催すべきことを第二案とするもので、文展を開く場合には審査員は文部省が帝國美術院に諮り、其の會員以外の者から銓衡すべしと言ふものである。

第一部會建白書提出 既述の如く、第一部會では去る二月十三日總會を開いて文相に建白することを決議したが、其の後大事件の勃發、内閣の更迭等に依つて機を逸し延び延びになつてゐた所、愈々之を實行することゝなり、四月二十三日午後、島田墨仙、飛田周山、野田九浦、矢澤弦月、勝田蕉琴の五名は同會代表として、平生文相を官邸に訪問し、會見の上、帝國美術院改組の缺陷其の他に就い

て詳細なる意見を述べ、豫てより同會の主張する試案並に長文の建白書を提出、文相の善處を要望した。

日本彫會の會合 所謂舊帝展系木彫作家の團體日本彫會では、第一回帝展には殆ど全部の會員が出品せず、新帝展改革を希望してゐたが、四月二十三日池の端濱の家に會合を開いて協議した結果、從來の如き帝展に依存する立場を棄て、同會自身の確固たる基礎を定めることとし、来る五月東京府美術館で展覽會を開催すること等を決定した。

第三部會建議 所謂舊帝展系彫刻家に依り新帝展に反對して組織された第三部會では、四月二十四日帝展を解消すべしとの意味を文書にして文部當局に建議した。

内藤伸意見書提出 平生文相が各方面から意見書の提出されることを希望し、又美術界の紛争解決に就き何等かの方法を講ずる意向なることが、新聞紙上等に傳へられた爲、美術界諸方面からの意見書提出は愈々盛になりつゝあるが、帝國美術院第三部所屬の四會員、山崎朝雲、建畠大夢、北村西望、内藤伸等の間でも之が提出を協議中の所、意見を纏めるに至らなかつた爲、内藤伸は單獨で意見書を作製し、四月二十五日郵便を以て平生文相宛に提出した。其の内容は帝展の機構を改めて、各團體より選出した作品を綜合陳列する所謂聯立綜合展たらしむる案であると傳へられる。

美術公正會帝院會員に進言

美術公正會は美術界の紛擾を遺憾とし、其の責任と、之が肅正及び安定の任は一に帝國美術院會員に在るとして、四月二十八日長文の書面を印刷し各會員に送附した。

五月

人形藝術院創立

正木直彦、建畠大夢、岡田三郎助、下田次郎、有坂與太郎の五名を同人として、人形藝術院が五月初旬創立された。人形の藝術的向上を計るを目的とし、毎年一回人形の展覽會を開催する由である。(便覽九六頁参照)

美術公正會建言書提出

美術公正會は昨年十二月展覽會改革に關する建言書を當時の松田文相に提出したが、同趣旨を再び文書にして五月五日平生文相宛提出した。其の案の内容は、展覽會を春秋二回に分ち、春季展覽會は文部省主催として鑑別した作品のみを陳列し、秋季展覽會は帝國美術院主催として、全美術界より銓衡した無鑑査作品のみを陳列すると云ふものである。

日本漆藝院結成

東京在住の有力な漆藝作家十七名に依つて新團體日本漆藝院が結成され、五月五日池の端雨月で其の披露會が催された。(便覽九四頁参照)

漆藝會解散

正木直彦を會頭とし明治三十一年創立以來の歴史を有する漆藝會は、既に其の目的を略果したものととして、前項日本漆藝院の結成と同時に解散することとなり、左の聲明を發した。

明治聖代の中期に於ける近代美術工藝變遷の黎明期に當時の新人層によつて創立され、大正時代を経て現代に到つた本會が、その短過去に新界へ對して成し得たる業績は渺しとしない。其間社會の支持と先輩の鞭撻並に會員の熱意努力は不斷の研究會を續け數十回に渉る展覽會に研鑽して向上に勵み幾多の人材を世上に送り出した。蓋し帝都に於て漆工藝の現在を荷負つてゐる大多數の中堅作家を登龍せしめた事は新界のため誇るに足るべき貢獻と謂ふべきである。今や初期以來希望せる漆藝會としての目的に略到達したるを以て此時を劃し時勢を洞察して故に潔く解散を決したのである。解散に臨んで數多の功勞ある先輩や社會の支援に深甚の感謝と敬意を表する次第である。

マドリッド日本現代版畫展覽會

日本版畫協會の海外出品事業の一つ、マドリッドに於ける日本現代版畫展覽會は、外務當局の盡力と同國關係當局の斡旋とに依つて五月六日から約一ヶ月間同市現代美術館で開催され、大統領初め多數の來賓參觀者あり、好評を得た。

帝院第一部四會員意見書提出

帝國美術院第一部に屬する會員小室翠雲、荒木十畝、松林桂月、松岡映丘の四名は、豫て帝展改革案を練りつゝあつたが、帝國美術院總會の時期も近く豫想されるので、愈々具體案を練りて意見書を文相に提出することとなり、病氣中の松岡を除く右三名は四月二十八日午後芝紅葉館に會合して協議を重ね、其の後竹内栖鳳とも打合せたが同人は近く單獨に意見書を出すこととなつた爲、更に五月五日午後

右四名は赤坂あかねに集合して案を練つた結果漸く意見書の草案を決定した。其の内容は、

一、帝國美術院は日本美術の最高諮問機關とし併せて美術の獎勵補助をなすこと

一、帝國美術院自體に於いては展覽會を開催せざること

一、展覽會は民間美術團體聯立の形式に於いて文部省之を主催することとしたもので、之に舊帝展以來の缺陷を指摘した理由書を附したものであると傳へられる。

此の意見書は右四名の署名に成り、松岡が代表となつて五月七日平生文相に之を提出した。

帝院第二部五會員意見書提出

帝展の問題に關して、是れ迄に提出されてゐる意見書は、總て所謂舊帝展系の作家、或は世間で不開派と呼ぶ舊帝院以來の會員に依つて唱へられる所謂再改組意見であつて、新帝展支持の意見を有する會員等は、何等發言する所が無かつたのであるが、世論も多く再改組を當然と認めるやうになつた情勢に鑑みて、帝國美術院第二部所屬の會員、石井柏亭、有島生馬、安井曾太郎、山下新太郎、梅原龍三郎の五名は、五月七日連署の意見書を平生文相宛に提出して所信を明らかにした。その要旨として傳へられた所は左の通りである。

「第二部舊會員の主張する帝國美術院解消論

は越權の沙汰である。新帝展不開催を唱へることは初めの總會で決定した決議に反するばかりでなく春の帝展は第一回展の半分をすましただけであるから秋の分も開き一通り第一回展を終つたうへ初めて新帝展の缺陷を云々すべきであらう、帝院から展覽會を切り離して文部省展を開き審査員を別に任命することは舊帝展時代の弊害を再び繰返すことであるから展覽會はあくまで帝院で行ひ會員が審査に當るべきである、今秋の洋畫展は或は綜合の實には缺けるかも知れぬが春の帝展の成績をみると既に舊帝展改革の一つの目的たる情實打破は實現されたと見てよい、以上の理由から新帝展はあくまで續行し最初目的に邁進すべきである。

日本彫刻家協會結成

早川鏡一郎、林是、加藤顯清、武井直也等彫刻家二十一名を會員として、新團體日本彫刻家協會が五月九日結成された。(便覽九四頁參照)

帝院第一部八會員意見書提出

再改組論に對し沈黙を守つてゐた所謂支持派の帝國美術院會員安田靫彦、前田青邨、小林古徑、鏡本清方、菊池契月、橋本關雪、川村曼舟、富田溪仙の八名は、連署を以て意見書を作製、五月十日平生文相宛に提出した。之は理論的に官展の性質と其の必要を説いたものであると傳へられる。

兩歩美術協會組織

關西在住の洋畫家で第二部會員太田喜二郎、角野判治郎、吉田苞、小磯良平、赤松麟作、新井完の六名は、五月初旬兩歩美術協會を組織した。公募展を開催する豫定である。

(便覽九一頁參照)

衆議院に於ける質問

開會中の特別議會衆議院豫算第二分科會で、五月十四日委員大口喜六は美術問題に關する質問演説をなし、平生文相との間に一問一答を行つた。大口委員の意見に依れば現在の狀態では帝國美術院設置の目的を達せられぬから、英斷を以て根本から之を建直すべしと言ふのである。

竹内栖鳳意見書提出

帝國美術院會員竹内栖鳳は、豫てより湯河原に在つて帝展改革に關する意見書の草案を練つてゐたが、愈々之を完成して、五月十六日郵便で平生文相宛に提出した。其の要旨は大略左の如きものである。

(一) 昨年の帝國美術院改革は美術界總體の幸福と圓滿なる發展のための自覺が極めて貧弱であつた。殊に帝國美術院が直ちに展覽會に關聯を有つ現時の機構に於いては到底思慮ある改革とは考へ得られない。其の意味に於て帝國美術院とその展覽會は分離すべきものである。

(二) 昨年の改革案及びその實施は各方面に相當の無理が押されたやうで、之は文部省の權威で成立し且つ押し續けられたが、斯かる權威なくとも成立し且つ實行し得る改革でなければならぬ。

(三) 無鑑査に關する新規定は何等の改革でなく舊帝展の餘弊を襲襲するに等しい。然も多數決によつて參與、指定、附則などに分類することは作家の社會的資格を無慈悲に公表し、それ等作家の發展や將來性を人爲的に封殺する如き觀を呈する。

(四) 美術は常に流派等を異にする各國體が對抗して各自特色を練磨して發達するもので

ある從つて文部省が美術を獎勵する要點もこれ等諸團體の存立を認め、これを統括的に管理扶育することに在るべきで、之が自分の官展改革の理想であり私案である。

和田英作意見書提出

帝國美術院會員和田英作は、單獨で意見書を作製し、五月十六日平生文相宛に提出した。「帝國美術院現下の諸問題に關する意見書」と題する長文のもので、章を分つて改組以來の情勢と展覽會其の他の問題に關する批判を敘し、既定方針の大綱を動かし、てはならぬ旨を力説したもので、其の結論を抄出すれば、左の通りである。

「帝國美術院は既定方針に基き、其の大綱を斷じて變更することなく邁進して以て其の理想とする使命の實現に努むべし。之を支持する者に對しては固より、反對せる者に對しても、斯くして初めて國家施設に對する信頼と敬意とを抱かしむるの道なりと言ふべし。現在行はるる反對意見、若くは根本的再改革意見の殆ど全部は、公正なる理想と大局に通ずる識見より出でたるものにあらず。主として私情に基き、感情的乃至利己の淺見、若くは誤解に出發したるものと認められ、且つ其の理論の傾倒に傾するものもあるを知らず。固より制度は時世の進退に伴ふべきものなるを以て、帝國美術院の現行制度が永久に適當なりとするものにあらずは言を俟たず。唯今日に於て動搖を收拾することを目的とし、應急的妥協の方策を立て、既定方針を動かすが如きことあらんか、必ずや大局を危殆に陥らしめ安定の目的を達し得ざるのみか、一層其の紛糾を誘致する結果を見るの他なかるべし。

動搖を鎮め、美術界を明朗ならしむるの道は、一に既定方針の貫徹にあり、而して政府當局の毅然たる態度と帝國美術院の公正なる運用とを以て其の要旨となす。

展覽會制度に關しては、大綱は之を動かすべからず。唯、開催方法其の他の細目に就きては考究の上若干の改善を爲す餘地あるべく、是等は會員會議に於て協議の上、帝國美術院自ら決定すべき事項に屬せり。尙展覽會の問題を中心として會員間に存在する再改革等の意見に就きて、姑く之を院内の問題として、會員會議に於て、公明なる方法に依り協議を遂ぐべきものなりと思惟す。

挿繪俱樂部組織

挿繪畫家が團結して新團體挿繪俱樂部を組織し、五月十六日午後六時九の内マールに四十餘名會合、其の結成式を舉げた。(便覽七二頁參照)

美術展覽會場都心建設運動

主要美術團體を網羅した東京會所屬の二十七團體では、現在の東京府美術館は「大衆觀覽者を對象とする展覽會場としては、地の利を得ざるのみならず、その構造に於ても適當ならず」として同館を「常設美術館として、その意義あらしむることを望むと同時に、都心丸の内附近に一大展覽會場を設立せんとする希望から、其の實現運動を起すこととなり、五月十六日夜九の内マールで右團體代表者等の會合を開いて協議し、實行委員として左記二十五名を舉げた。

石川寅治、今井滋、岩佐新、梅原龍三郎、太田三郎、川端龍子、垣見宣修、木村莊八、熊岡美彦、小島善太郎、坂井犀水、齋藤素巖、佐藤哲三郎、笹鹿彪、田

口省吾、田中咄哉州、富田温一郎、中出三也、藤岡一、藤本留三、市喜山義夫、益田義信、望月省三、湯原柳畝、吉田白嶺。

第二部會批判書提出

第二部會では

五月十三日委員會を開き、美術界の問題に關する同會の意見を批判書として文部大臣に提出することを協議したが、同十七日夕丸の内マールに總會を開催し、批判書の草案を可決し近く之を平生文相宛に提出することとした。

其の内容は帝國美術院改組の経緯及び其の後の事態を批判し、帝國美術院解消を力説した長文のもので、會員全部の連名に成るもの由である。

汎太平洋博覽會對し洋畫家建言

明春

汎太平洋博覽會が名古屋に開催され、其の事業として大美術展覧會が開かれる豫定であるが、之に對して同市在住の洋畫家達四十餘名は會合意見を交換し、其の中の二十餘名は更に五月十九日協議を重ねた結果

一、諮問委員會の設置方を早急に實現されたい。

一、同委員は名古屋在住者を主體とすること。

一、同展無鑑査出品は二科、國展、二部獨立、春陽の各會員及び會友以上(舊帝展は特選以上)と内定せられたいこと。

の三項を市當局に要望することとし、二十日伊藤鎌、中野安治郎、魚津良吉の三

名が市を訪問して之を提出した。(新愛知五・二に依る)

京都三會員意見書提出

京都在住の

帝國美術院會員、西山翠峰、西村五雲、土田夢徳の三名は、五月二十四日連名を以て意見書を平生文相に提出し、竹内栖鳳と同意見なる旨を明らかにした。その内容として傳へられる所に依れば、

一、帝國美術院は美術に關する最高諮問獎勵機關とす。

一、美術展覧會は帝國美術院より分離し文部省これに當る。

一、美術展覧會は各美術團體聯立の機構による。

一、參與、指定、附則の階級別を改むとするものである。

挿繪俱樂部著作權法に關し決議

過

日設立された挿繪畫家の團體挿繪俱樂部では、挿繪の著作權が一般に尊重されて居らぬことを遺憾として、著作權法中に挿繪に關して明確なる條文を加へられんことを希望する旨を決議し、五月二十八日著作權審議會宛に其の決議書を提出した。

六月

文相主催帝院會員懇談會

平生文部

大臣は就任以來帝展問題を中心とする美術界の紛争解決に關心を持ち、特別議會等で多忙中にも拘らず諸方面の意見を徴し收拾策を考究中であつたが、漸く成案を得たので帝國美術院總會開催に先ち、

六月四日文相官邸に帝國美術院會員懇談會を催した。會は第一部、第二部、第三及第四部の分科別に三回に分けて開かれ、清水院長を座長とした懇談會の形式で、席上文相より展覧會開催方法其の他に關する改革の試案を提示し會員の考慮を求めた。尙其の他に現代美術館建設、帝國美術院會員の増員等を實現する意志ある旨を發表した。之に對し會員の意見交換が行はれたが即答はなされず、各自文相案に對して十分考究することとなつた。(四九頁參照)

松林、結城會員意見書提出

帝國美

術院會員松林桂月及び結城素明は、六月九日平生文相の試案を支持する旨の意見書を文相宛に提出した。

東臺邦畫會有志文相案賛成

東京美

術學校日本畫科卒業生の組織する東臺邦畫會の有志は、六月六日夕同校俱樂部に會合し、平生文相が帝院會員懇談會に提示した展覧會試案に就き協議した結果、一同之に賛成して支持することとなり、其の旨を文書として文相に提出することに決定、九日代表等は文相官邸を訪問し建白書を提出した。

第一部會文相案賛成

第一部會では

平生文相の展覧會試案に就き態度を決する爲、六月八日夜新橋東洋軒で會合を開き、協議の結果之に賛成することとなり直に建白書を作製、翌九日代表者が文相を訪問して之を提出した。

文部省人事異動

文部次官三邊長治

及び文部省専門學務局長赤間信義は六月九日附依願免官となり次官の後任としては普通學務局長河原春作、専門學務局長の後任としては思想局長兼任で伊東延吉が、夫々同日附を以て任官された。

帝院第二部四會員意見書提出

帝國

美術院第二部に屬する會員石井柏亭、有島生馬、山下新太郎、安井曾太郎の四名は、平生文相の試案に關して協議を遂げた結果左の修正案に到達し、之を最後の斷案として六月十日清水院長宛に提出した。内容の要旨として傳へられる所は左の如くである。

一、展覧會は一年一回各部綜合で秋季に開き、主催は帝國美術院たるべきこと。

一、招待展、鑑査展に二分することに反對す、鑑査を経たる作品と無鑑査作品とを同時に陳列すること。

一、出品多數の爲同時に陳列し難きときは會期半で陳列替を爲すこと。

一、參與を其の儘に存置し名稱を展覽會委員と改むること。

一、鑑査は各部會員之に當り展覽會委員を參加せしむること。

一、指定及び附則の無鑑査出品者の人員に多少の増加を認むること。

實在工藝美術會意見書提出

實在工

藝美術會では文部當局より文相試案に對する意向を諮問せられたので、之に對する會員の意見を經め六月十日大要左の如き意見書を決定、當局に提出した。

「第一案

一、展覽會は帝院より分離して總て文部省の事業とする。

一、文展は年一回綜合展とし鑑査を撤廢し、出品者資格を制定する。

一、出品者資格は當局が認定した各團體に數を割當て、各團體より選出させる。

第二案

一、招待展と鑑査展は共に文部省主催とし、秋季に連續開催する。

一、被招待者の内容は嚴密に考慮すること。

一、鑑査展には無鑑査資格者も鑑査を得て出品し得ることとする。

一、審査員には會員を參加させぬこと。

一、審査員は各團體に人數を割り當てて選出させる。

第一案を根本とするが、之は文相案と餘りに距離があるから、歩み寄る意味で第二案を提出するものである。

日本版畫協會海外巡回展覽會

日本版畫協會では過般ジュネーヴ及びマドリッドで日本現代版畫展覽會を催したが、更に米國各地及び歐洲に巡回展覽會を開く計畫が熟し、文部、外務當局及び國際文化振興會の支援を得て之を實現する爲同會派遣委員旭泰宏は、六月十一日發秩父丸で桑港に向け出發した。

春陽會文相案賛成

春陽會では六月十一日夕青山辰好軒で委員會を開催し、平生文相の試案に就き協議の結果、之に賛意を表することとなり、同十二日左の聲明書を各方面に送附した。

「政府展試案に對する春陽會の聲明書

平生文相が六月四日美術院會員懇談會にて説明せる政府展試案（その説明要旨プリントに依る）に對して意見を述べこれについての春陽會の立場を明らかにします。

一、春陽會の性質

春陽會は從來滿十五年民間團體として自營して來た會で、今後も亦、會員の存續する限りいつ迄も民間團體として自營獨立して行く一つの展覽會團體です。政府展の成立有無に拘らず右は變りません。

二、文相の政府展試案に對する春陽會の主意
春陽會は夙に昭和十年九月試案を提出した通り、綜合展が成立するについては大いに協賛の立場ですから、政府展が綜合大同を意とする限りこれに賛成支持します。

三、その方法について

政府展試案は假りにその開催を春秋二季とする招待展と鑑査展に分れてゐますが、この分割案乃至その主催別の大案については賛成です。

四、招待展について

この被招待資格は、試案に従ふと未だ範圍明らかならざるも、若し舊帝展の無鑑査が全部復活する等の場合があれば、春陽會は會の銓衡したる會友の全數迄右資格の中に含める可きことを主張します。

五、鑑査展について

春陽會本來の意見としては、文部省がこの鑑査委員を求むる場合は美術院に諮ると同時に在野團に諮る可く、在野よりこの委嘱を受ける者は美術院に依つて銓衡される性質よりも各自所屬の團體それ自身から選任された代表者であるべきことを條件とします。

團體尊重は從來と變らず向後も春陽會の根柢であります。

しかし當面の場合には、右を固執主張する

と、その結果その方法論だけで大同より遠ざかつて小異を樹てる立場に傾くこと有る可きは好まないので、便宜上政府展試案に依る場合一鑑査委員委嘱内規案の第一案を採ります。

細部に涉つては略します。

帝院十四會員辭表提出

六月四日文部大臣主催に依る懇談會開催後、會員の間では文相提出の試案に就いて種々考究されつゝあつたが、六月十二日に至り、第一部に屬する川合玉堂、菊池契月、楠木清方、橋本關雪、富田溪仙、横山大觀、安田靉彦、前田青邨、小林古徑、第二部和田英作、梅原龍三郎、第三部佐藤朝山、平櫛田中、第四部富本憲吉合計十四名の會員は夫々辭表を提出し、同夜連名を以て左の如き聲明書を發表、其の理由を明にした。

「不肖等さきに帝國美術院改組の趣旨に賛成し文部當局の懇請に應じて會員の任命を受け爾來全力を擧げて新帝院の使命達成に盡瘁し總會の決議に基づいて今春の第一回展覽會を開催し十分の成績をもつて當局の信任に應ふるを得たりと確信せり然るに偶々文部大臣の更迭に會し未だ既定の秋期展覽會の開催も見ざるに當局の方針突如として一變し改組以來の經過と嚴たる院議の決定とを無視し不肖等の絕對支持をも頼みず新大臣は翼に帝國美術院が天下に公約したる展覽會の構成を破壞することを前提とし全く改組の趣旨を没却せる試案を提示するに至れるは不肖等の甚しく遺憾とするところにして不肖等は新當局の到底信頼すべからざるを確認し茲に會員の職を辭するものなり。

昭和十一年六月十二日

橋本 關雪、富田 溪仙、富本 憲吉
和田 英作、川合 玉堂、楠木 清方
横山 大觀、梅原龍三郎、安田 靉彦
前田 青邨、小林 古徑、佐藤 朝山
菊池 契月、平櫛 田中

川端龍子辭表提出

帝國美術院會員川端龍子は同じく六月十二日會員の辭表を院長宛提出した。獨自の理由に依る所から前項の聲明書には名を連ねなかつたものである。其の談として傳へられる所は左の如くである。

「今回文部大臣から示案された帝展再改組の件につきましては會員として來るべき總會で審議協定すべき責任を感じてゐましたところ本日改組に當つて在野團體から共に任命された多數會員が辭任されるに至りました。色々私も熱慮した末事既にここに至つては當局の意圖する、企畫とは相距ることの遠いものであると同時に私の新帝展への意念も別個のものとなつてしまひました、甚だ遺憾ながら右のやうな理由で美術院會員を辭任するに至つた次第です。」

小室翠雲辭表提出

帝國美術院會員小室翠雲は六月十二日前記會員等が辭表を提出したことを知つて、別個の見解から同様辭職を決意し、同日午後會員の辭表を院長宛提出した。其の理由は、文相試案は展覽會開催のみを重視して美術獎勵機關としての帝國美術院本來の使命を没却し重要な鑑査問題にも觸れてゐず、豫てより意見書として提出した理想は全く容れられず今後如何に協調しても到底相容れない。且つ多數會員の辭職した今

日ではむしろ速に一切を解消しておもむろに時の至るを待つ方がよい。といふものである。

平生文相聲明 六月十二日帝國美術院會員十六名が辭表を提出したことは、帝展問題の解決に頓挫を來し、帝國美術院の將來にも多大の危惧を感じさせるに至つたが、同十三日午後一時平生文相は談話の形式を以て、左の如き聲明を行つた。

「自分のこの際考ふところは日本美術の眞の發達振興に適し有力なる美術家大多數の希望に合致することであつて又新進有爲の美術家を鼓舞激勵しその將來の大成に資するやうな方法の確立を希望してゐる。これがために虚心坦懷慎重なる態度をもつて種々の狀況を考慮し又充分各方面の意見を聴き、その協力一致の下に最善と信じられる方策を樹立せんことを期してゐる、なほ自分として秋の展覽會の開催せられることを期待してゐる。」

川合東京美術學校教授辭職 東京美術學校教授川合玉堂は豫てより辭意を有してゐたが、六月十三日和田校長を経て其の辭表が文部省に提出された。

第一部會總務會 六月四日の會員懇談會に提示された文相の試案は其の後主要美術團體に對しても當局より提示し之に對する答申を懇請してゐたが、第一部會では十三日午後六時から新橋東洋軒に總務會を開いて答申案を協議した。

京都日本畫家意見書提出 京都在住の竹内栖鳳一門に屬する堂本印象、石崎光瑤、小野竹喬、中村大三郎、金島桂

華、山口華揚、福田惠一、森守明、池田遙村の九名は、六月十三日夜竹内邸に集合協議した結果、平生文相の試案に賛成して之を支持することに決し、同夜左の如き意見書を文相宛に電送、京都畫壇多數の態度を明かにした。

「意見書」

六月四日帝國美術院會員各分科別懇談會に於ける閣下の御説明の要旨は現下の我美術界の困難解決への爲の深甚なる御考慮が窺はれ吾々一同厚く感謝する所以であります、固より細部に互つては尙考慮すべき箇所もあることと思ひますが其の本幹に於いて賛意を表するものであります、無幾くば閣下並に帝國美術院諸先生の善慮に依り一刻も早く明瞭なる美術界の出現を企願するものであります。

竹杖會、青甲社、西村塾、堂本塾、中村塾、石崎塾（以上三百三十七名）

日本美術院同人帝展參與指定等辭退

日本美術院同人中藤井浩祐を除く帝院會員は總て辭表を提出したが、帝展參與及び指定の作家等も其の態度に倣ふこととなり、六月十三日協議の結果

參與 小川芋錢、中村岳陵、木村武山、石井鶴三

指定 大智勝觀、山村耕花、荒井寛方、北野恆富、喜多武四郎、新海竹藏、大内青圃

の十一名は連袂して參與指定辭退の手續を取つた。斯くして日本美術院は全く帝國美術院及び帝展と絶縁する態度を明かにしたものである。

和田東京美術學校校長辭職 東京美術

學校長和田英作は六月十五日午前十時文部省に出頭辭表を提出した。

文部當局展覽會準備

帝國美術院會員十餘名の辭表提出に依つて同院の總會開催は不可能に陥り、既定の帝展も今秋開くことが出来なくなつたが、殘留會員中には所謂不開催派多く、又平生文相の試案に對しても之を支持せんとするものが多數である爲、文部省では大體文相案に基く展覽會を同省主催として開く方針を執ることとなつた。其の爲に猶諸方面の意見書を蒐むる一方、六月十五日には岩井文相秘書官が主要美術團體代表として、益田玉城（第一部會）、辻永（第二部會）、兒島善三郎（獨立美術協會）、熊岡美彦（東光會）等を文相官邸に招いて夫々の意向を聴取し文部省展覽會への協力を希望した。

第二部會委員會

第二部會では六月十五日夜丸之内マールで緊急委員會を開き、同會の態度に就き協議した結果

一、第二部會は解散せざること

一、近く總會を開いて協議した上文相試案に對する意見書を提出すること

の二項を決定した。

藤川勇造思ひ出の會

六月十五日は故藤川勇造の一周忌に相當する爲、故人の親友達が發起して遺族を招じ午後七時半から味の素ビルのアラスカで思ひ出の會を開いた。出席者は約二百名に及ぶ盛會であつた。

人形製作家建白書提出 人形製作家

の團體日本人形社、人形甲戌社、人形制作社、日本人形研究會では、平生文相の試案に對し賛成支持を表明することに一致し、六月十六日右四團體の顧問西澤笛畝が文部省に出頭建白書を提出した。

東臺邦畫會有志陳情書提出

曩に文相試案賛成の意見書を提出した東臺邦畫會の有志は、其の後從來の帝展第一部一般出品者等二百餘名の賛同を得たので、文相宛の陳情書を作成し、六月十六日代表者等が文相官邸を訪問提出した。其の要旨として傳へられる所は左の如くである。

「御試案中特に春秋二分案に對する我々の陳情を諒とせられたことは我々の深く感激する所であり、我等一般出品者の爲今秋の鑑査展を實現せられたく總會の決議を以て陳情する次第であります。」

美術公正會聲明

美術公正會は六月十七日左の聲明書を發した。

「今般平生文相によつて提示されたる帝展制度再改正の試案は、曩に本會より文相に提出したる試案と略合致するを以て、賛意を表するものなるも、是は全美術界總意の上に於いて實施せられてこそ意義あるものにして、帝院が一方的存在となつた場合は、本會の主張に反するによりこれが實行に對しては首肯し能はざるものなり。右聲明す。」

帝院第二部七會員意見書提出

平生文相の試案に對する意見を纏める爲、帝國美術院第二部に屬する會員岡田三郎助、藤島武二、和田三造、南薫造、中澤弘光、中村不折、滿谷國四郎の七名は協議中であつたが六月十七日之を決定し直に文書と

して文相宛に提出した。其の要項は左の如きものであると傳へられる。

一、帝國美術院と展覽會とを切り離すこと

一、展覽會は文部省の主催とし、會員は其の鑑査に携らざること

一、舊帝展無鑑査を全部復活すること

一、年一回綜合展を開催し招待展新人展とは同時期に二分して行ふこと

現代美術館計畫 現代美術館建設の要望は豫てより唱へられてゐた所であつたが、平生文相は就任以來其の實現に意を用ひ、紀元二千六百年の大典と關聯して之が建設を計畫する意圖なる旨、過日の帝國美術院會員懇談會でも述べた所があつた。即ち當局では豫算編成期を前にして準備を急ぎ、六月十八日専門學務局、建築課等の關係官の間で具體案が協議され、左の如き計畫に依つて準備を進めることになつた旨報道された。

計畫は建坪約四千坪の二階建ギャラリーとし、建築費豫算約五百萬圓、内約三百萬圓を政府支出金とし紀元二千六百年迄三千年繼續事業として豫算を要求、殘約二百萬圓を民間の寄附に俟つもので、敷地は舊議事堂跡の七千五百坪の中明治天皇聖蹟保存を含む憲政記念館に使用の分以外を、第一候補として交渉中の由である。

第二部會總會 第二部會では、平生文相の試案に對する意見の提出を當局から逡巡されたので、之を決定する爲六月

十八日午後六時から丸之内マールで總會を開催、左の如く意見を決定、十九日辻永代表として文相を訪問提出することとした。

一、帝國美術院を最高の美術諮問機關として獨立せしむること

一、參與、指定、附則の格付を撤去すること

一、招待展と鑑査展とを秋季に連續して開催すること

一、招待展出品資格者の銓衡に就いては試案第一案に依り第二部會々員の全部を包含すること

一、鑑査委員は全部一回毎に文部省が帝院に諮問の上、招待展出品資格者中の若干に委嘱すること

文部省展覽會原案 文部省では取敢へず今秋同省主催に依る展覽會を開催することとし、左の如き要綱に依る原案を作成、近く之に基いて文部省展覽會規定を決定することとなつた旨、六月十九日附諸新聞で發表された。

一、本年に限り文部省主催を以て各部綜合展を開催すること、但し十二年以降の展覽會に就いては更に熟議の上決定すること

一、本年度展覽會は十月十五日より十一月二十日迄開會とし、明治節を中心に前期を新人展、後期を招待展とすること

一、審査員は各部帝院會員の意見を徴し文部省に於て選任、審鑑査の方法其の

他に就いても會員の意見を徴して決定すること

清水六兵衛意見書提出 帝國美術院會員清水六兵衛は平生文相の試案に對して賛成の意見書を六月二十日郵便で提出した。

京都工藝諸團體文相案支持 京都の工藝關係諸團體は六月二十日それぞれ文相案支持の決議をなし、約三百名連署の上文相宛に建議した。

構造社決議 再改組問題に關して沈黙を守つてゐた構造社では、文相試案に對する意見決定の爲、六月二十一日藏前工業會館に會員會友等集合協議の結果、文相案中の招待展開催には大體に於いて賛成することとなり、左の如く決議、近く之を文相宛提出することとした。

「本會は文相案(第二案鑑査展を除く)招待展には賛意を表し得るも、その被招待資格銓衡案に就いては左記一項の附加を要望し、之を採用せらるる場合に限り第一案の支持を明確にす

一、各美術團體を一單位として團體毎に出品者員數を『豫め公平に』振り當て出品者銓衡は各團體に一任すること」

帝院第一部殘留會員文相案支持 帝國美術院會員竹内栖鳳、西山翠嶂、西村五雲、川村曼舟、荒木十畝、松岡映丘、松林桂月等は、六月二十二日會合協議の結果、當局が目下計畫中の文部省展覽會案に賛成し之を支持することに意見一致を見た。

帝院第一部會員懇談會 文部省では展覽會計畫に就き打合せの爲、六月二十三日午後一時から帝國學士院に帝國美術院第一部所屬殘留會員の懇談會を開き、文部省からは石丸學藝課長出席、當局の原案に基き種々協議を行つた。

二科會聲明 文部當局は六月二十六日洋畫團體の代表者を招いて、文展案に就き懇談會を催すこととなつたが、之に先だつて、二科會では二十四日午後二時から四谷番衆町の同會事務所で總會を開催、協議した結果、文部省の計畫する展覽會に對しては無關心の方針を取り、懇談會にも代表者を出席させないことに決し、左の聲明書を發表した。

「二科會は帝院改組に關し既に再度闡明せる態度を持續し、今回の再改組に當りてもこれを更へざることを聲明す、二科會は恒に其の創立當初の精神に則り純粹なる獨自の立場を保持することに依りて國家の美術進展に貢獻するを使命と信ずるものなり

六月二十四日 二科會

獨立美術協會聲明 獨立美術協會では、二十六日文部當局の懇談會招待に關し態度決定の爲、六月二十四日夜會員參集して協議した結果、不參加のことに意見一致したが、地方會員にも諮る必要があるので電報で打合せた上、翌二十五日左の通り聲明を發した。

「現下の美術界情勢に於いては到底満足すべき官展を期待し得ず故に我々は文部省の提案に對して協力し能はざる事を聲明す

六月二十五日 獨立美術協會」

帝院第三、四部會員懇談會

文部當局では、六月二十五日午後三時半から帝國美術院第三部及び第四部の殘留會員を文相官邸に招いて懇談會を開き、文展開催に就いて當局の原案を基礎に種々協議を行った。

立陣社結成

舊帝展出品の青年洋畫家十一名は新に研究團體立陣社を結成し六月二十五日發會式を行った。(便覽一〇二頁參照)

近藤浩一路日本美術院脫退

大正十年參加以來日本美術院同人であつた近藤浩一路は六月二十六日同院を脱退した。發表された所感に依れば、今日の日本美術院は當初の本質を離れ、天心先生の精神とは遠く、神聖修業の道場たる面目を失ふに至つたからで、帝院問題に捲き込まれたわけではない。今後は美術團體から離れて畫道に精進したいとのことである。

洋畫團體代表者懇談會

文部當局では文展開催に關し主要なる洋畫團體の協力參加を希望して、六月二十六日午前十時から文相官邸に諸團體代表者を招き、懇談會を開催した。招きに應じて出席したのは、

第二部會

辻永、太田三郎

東光會 熊岡美彦、齋藤與里

主線美術協會 高間惣七、橋本八百二

春陽會 木村莊八、足立源一郎

の四團體代表八名で、文部省からは伊東專門學務局長、石丸學藝課長、岩井秘書

官出席、意見の交換を行った。

宇田萩邸帝展參與辭退

帝國美術院展覽會參與宇田萩邸は六月二十五日附辭表を提出した。

第二部會文展參加聲明

第二部會では六月二十六日午後二時九の内マールで委員會を開き、同日文相官邸の懇談會に出席した辻永、太田三郎の兩代表の報告に基き同會の態度に就いて協議した結果、今秋の文展に參加することを決定し左の聲明書を發表した。

「本日の懇談會に於いて當局の聲明するところに依れば本秋開催すべき文部省主催の展覽會は形式上特に本年に限られたる如き感あれども、その意の存するところ永久の企畫としてこれを伸張せしむるに在り、且つ文相が今次の所謂帝展問題に對して處せんとするところも嘗て帝國美術院會員懇談會に臨みたる試案當時と毫も變るところなく、格付廢止、既成作家認識、新人獎勵等の精神をそのまゝに延長するものなりと謂ふ、故に曩に文相の明朗の態度を肯定したる本會は延いてその意思に悖る所なく開催せられんとする展覽會に對してもまた之に參加し意を同する一般出品者及び諸團體と相協力してその顯揚に資したしと思惟す」

日本南畫院聲明

小室翠雲の主宰する日本南畫院では六月二十八日午後麹町の同院で總會を開催、東京及び關西在住の同人十三名出席して、帝院問題並に今秋の文展に關する同院の態度に就いて協議したが、一同小室翠雲と行動を共にして文展には不参加の方針を執ることとなり、左の聲明書を發表した。

「平生文相の美術界に對する態度に就て憤慨たるものあり、日本南畫院同人としては暫く靜觀の立場に於て斯道本來の使命に邁進せんとするものなり、右聲明す」

昭和十一年六月二十八日

日本南畫院同人

帝院第二部四會員聲明

帝國美術院第二部に屬する會員有島生馬、石井柏亭、安井曾太郎、山下新太郎の四名は、文部當局の計畫する今秋の展覽會に反對し、帝國美術院會員として何等の責任も負はぬとの態度を決定、六月二十九日左の聲明書を清水院長に提出すると共に之を發表した。

「昨年六月帝國美術院總會ノ天下ニ公表セル決議ガ現文相ノ所謂試案ニヨリ根本ニヨリ全然破棄サレ、今別ニ暫定の文展ナルモノノ開催セラレタルコトニ對シテハ、我等固ヨリ賛意ヲ表セザルモ、可及的綜合ノ實ヲ擧グベク提案シ且努力セルニモ拘ハラズ、毫モコレヲ容ル、所トナラズ、從ツテ其展覽會ガ内容ニ於テ舊帝展系作家、而カモ其一部ヲ網羅スルニ過ギザラントシ、文相ガ過般來主張サレタル全作家綜合ノ趣意ト完全ニ反セル結果ニ陥リツ、アルハ明カナル事實ナリトス。我等ハ美術院會員トシテ斯カル矛盾不公平ナル文部省主催ノ展覽會ニ關與スルコト能ハズ。從ツテコレニ關シ何等ノ責任ヲ負フベキニ非ザルコトヲ聲明スルモノナリ。

昭和十一年六月二十九日

帝國美術院會員

有島 生馬、石井 柏亭

安井曾太郎、山下新太郎

帝院第三部會員打合せ

文展開催に關する打合せの爲文部當局では帝國美術院第三部所屬の殘留會員を招き、六月二

十九日午前十時から文相官邸で協議を行った。

春陽會提案

去る六月二十四日の洋畫團體代表懇談會で今秋の文展案に不賛成の意を表した春陽會では、二十九日午後足立源一郎、木村莊八、中川一政、石井鶴三の四委員が文相官邸を訪問し、秘書官を通じて文相宛左の如き覺え書を提出した。

一、帝國美術院をアカデミーとすべし。

(美術行政に携らず)

一、文部省は主要民間美術團體を公認し之を夫々新人展と認め獎勵補助すべし

(獎勵補助金、作品買上)

一、各國體代表者より成る委員會を組織し諸般の協議に當らしむべし(政府展

委員銓衡、買上品選定、各國體新會員

銓衡)

七月

濠洲國際美術借款展覽會

濠洲シドニー國立美術館で國際美術借款展覽會が七月一日から開催された。之は同國政府が主催し、世界十三ヶ國から現代美術を代表する繪畫、及び工藝品の借用を求めたもので、前述の如く我が國も參加、日本畫四點、洋畫二點、工藝十二點を出品し、頗る好評であつた旨報せられた。

大潮會設立

昭和十年設立の大東會を廢止して、七月一日大潮會が設立された。浦崎永錫を常任理事とし全國圖畫教育者の技術向上の爲、展覽會開催等の事

業を行ふものである。(便覽八三頁参照)

帝院第二部會員懇談會 文展案に關

する文部當局と帝國美術院第二部所屬の殘留會員との懇談會は七月二日、午前十時半から文相官邸で開催された。藤島、滿谷(病氣)及び過日文展と絶縁を聲明した有島等四會員は出席せず、岡田、和田(三)、南、中村、中澤五會員出席、文部當局の原案に基き、招待展被招待者選定の件、鑑査の方法等を協議した。

文展規則決定

文部省では文展開催案に就き準備を進めてゐたが、七月三日午後正式に本年度文展開催の件を決定し同日午後六時其の規則と共に「昭和十一年文部省美術展覧會に就て」と題する當局の聲明を發表した。(一五〇頁参照)

海軍館陳列畫執筆者決定

明治神宮表參道近くに建築中の海軍館は來春開館される豫定であるが、其の三階に繪畫室を設け、明治維新以來今日の光輝ある我が海軍史を語る記念繪畫十七點を陳列することとなり、海軍當局では長谷川次官を委員長として計畫を進め、執筆者に就いて銓衡中であつたが、七月六日畫家との打合せを開いて畫題及び作者を左の通り決定した。大ききはいづれも百號、完成は來年三月末日の豫定である。

- 一、威臨丸の太平洋航海 小林 萬香
- 二、明治元年天保山沖軍艦御視閲 中澤 弘光
- 三、宮古沖海戰(露艦同天の官艦襲撃) 南 薫造
- 四、函館海戰 中村 研一

- 五、黃海海戰 田邊 至
- 六、勇敢なる水兵 北 運藏
- 七、威海衛の夜襲 長谷川 昇
- 八、北清事變に於ける我陸軍の太極砲臺占領 權藤 種男
- 九、旅順港閉塞 奧瀬 英三
- 一〇、日本海海戰の敵前大回頭 永地 秀太
- 一一、蔚山沖海戰とリニウリツク 清水 良雄
- 一二、露沈後敵兵救出情況 石井 柏亭
- 一三、第六潜水艇長佐久間大尉 石川 寅治
- 一四、地中海に於ける我驅逐隊の活躍 山下新太郎
- 一五、樺政宮殿下御渡歐 御野 純一
- 一六、上海陸戰隊の活動 三上 知治
- 一七、海陸協同作戰 栗原 忠二

第二部會六會員脫退

第二部會では七月六日午後六時から丸の内マールで會員總會を開催、文展參加の問題に就いて協議し、採決の結果多數を以て今秋の文展に参加、之を支持することに決定したが、右に絶對反對を唱へて譲らなかつた猪熊弦一郎、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、中西利雄の六名は、退場後直ちに協議の上第二部會脫退を決議し左の聲明書を發表した。

「本日二部會總會に於きまして新文展支持の決議を見ましたが私達六名の者は事態の初めより全日本畫壇明暗の爲め現在に於ては、帝院の獨立、帝展の解消の必要にのみ主張協力して來ましたが殘念ながら事此處に至りました以上我々は二部會々員を辭退致し、新文展に對しては、不出品を聲明する次第であります。

昭和十一年七月六日

- 猪熊弦一郎、内田 巖、小磯 良平
- 佐藤 敬、三田 康、中西 利雄

第一部會文展參加決議

第一部會では七月七日夜總會を開き、今秋の文展を支持參加することに決定した。

第三部會文展不参加聲明

第三部會では七月七日午後九時の内マールに會員集合協議の結果、文展不参加に決定、左の如く聲明書を發した。

「明治、大正、昭和を通じ我國彫塑界に捲起したる凡ゆる鬭争、すべての情實の根源たる松田改組によりて成れる現帝國美術院第三部會員の獨占的に鑑査に携はる文部省美術展覽會には本會會員は招待禮を受けず、純在野團體として我國彫塑界進展に努力せんことをここに聲明す。

會員 池田勇八、石川確治、畑正吉、上田直次、小倉右一郎、開發芳光、吉田久藏、日名子實三

彩交會組織

名古屋在住の日本畫家二十三名に依つて、七月七日彩交會が組織された。之は京都繪畫專門學校卒業生の親睦研究を主とする團體で、大正十年以來愛知縣出身の同校卒業生等に依つて組織された愛土社に新に會員を加へ、名稱も改めたものである。(便覽七一頁参照)

新構造社組織

構造社は昨年七月彫刻繪畫の同名二團體に分れたが、繪畫部の構造社は、元構造社會員同出品者等に依つて本年二月結成された彫刻團體十七會と合同し、別に工藝部を新設して新構造社と改名、七月十二日其の新組織を發表した。(便覽七七頁参照)

旺玄社文展不参加決議

旺玄社とする洋畫團體旺玄社では、文展支

持を決定した第二部會の態度に不滿を抱いてゐたが、七月十三日夜上野廣小路明治製菓で總會を開き、社人社友等集合協議した結果、文展反對を決議、不出品の態度を取ることに決し、翌十四日左の聲明書を發した。

「昨夏旺玄社が松田改組による新帝院に對して一般出品者の立場より聲明した『從來の機構による官設展覽會の廢止』は、其の後吾々が帝院に對する一貫せる態度である、今回の平生文相に依る再改組なるものは何等昨年の改組と、其の本質に於ても亦機構に於ても異ならず益々吾々の理想と背馳するものである如何にそれが一應立派やかに見えやうとも全く一時的に大衆を欺瞞するもので勿論吾々の支持し得られざるものである。

同時に昨年第二部會設立以來積極的に此れを支持し來たつたのは實に前掲の立場よりなせるもので、此の度一般出品者の誠意を裏切る如き第二部會の態度は實に吾々の遺憾とするところである。

此の度吾々が旺玄社は帝展に對する一貫せる態度を表明する爲改めて新文展に對して不出品を聲明するのである。

昭和十一年七月

旺玄社

ペンクラブ國際大會日本代表

ペンクラブ國際大會に、日本ペンクラブ代表として、ブエノスアイレスで開催されるペンクラブ國際大會に、日本ペンクラブ代表として、島崎藤村、有島生馬の兩名が出席することとなり、七月十五日横濱出帆の平安丸で出發した。

第二部會一般出品者同盟解散

舊帝展洋畫出品者に依り昨年結成されて第二部會を支持してゐた一般出品者同盟では第二部會が文展參加に決定してから、其

の態度を非難し文展反對を出張する意見有力となり實行委員と第二部會との間に詰問應答などが行はれてゐたが、態度決定の爲七月十九日夜東京府美術館食堂で總會を開いた。其の結果、文展参加と不参加とに意見が岐れ、遂に一致の行動に出づること能はず、實行委員は總辭職し同盟は分裂解散するに至つた。

光風會文展支持聲明 昨年新帝展に對して不出品を聲明した光風會では、七月二十一日丸の内マールに總會を開き、左の聲明を發して新文展を支持する態度を明かにした。

「今次現文相が企てたる帝院の再改組は、前々文相に依つて行はれたる改組の非を認め、全く新しき立場に於て本邦美術の振興に資せんとするの意なりと認む、依つて本會は茲に舊の政府展不出品聲明を撤去す

昭和十一年七月二十一日 光風會

新制作派協會結成

過日第二部會の文展参加の決議に反對して同會を脱退した作家達は、新團體新制作派協會を結成、七月二十五日發會式を挙げ左の聲明書を發した。同會の規約に依れば、一切の政治的の工作を拒否し、純粹藝術の責任ある行動に於て新藝術の確立を期し、『反アカデミック』の藝術精神に於て官展に關與せず、年一回以上の公募展覽會を最も嚴格なる藝術的態度に於て開催するものである。(便覽七八頁參照)

「聲明書」

現下我國美術界紛擾に直面した我々の體驗の結果は畫家生活に於けるその政治的行動の矛盾を痛感せしめた。今や我々は一切の過去に於ける畫壇的情實を断ちきり今後は藝術家相互の信頼の上にその制作行動を純化せしめつゝ我々の藝術精神の意慾にのみ邁進する覺悟である。新制作派協會は斯かる意義の上に立脚し、その展覽會は眞の藝術研究並びに純粹なる制作行動の發露であり、制作、行動、發表を正しき藝術家の良心の下に一元のならしむる事を聲明す。

昭和十一年七月二十五日

新制作派協會

齋藤弦一郎、伊勢正義、脇田和
中西 利雄、内田 巖、小磯良平
佐藤 敬、三田 康

久米桂一郎記念像除幕

東京美術學校内に故久米桂一郎の記念像を建設すべく、豫て和田校長を實行委員長とし、故人の友人門下の間で藤金、北村西望の手で胸像を製作中であつたが、愈々完成し、三周忌に當る七月二十七日同校庭で除幕式が行はれた。

春臺展有志文展支持聲明

岡田三郎助の研究所關係者より成る春臺美術展の有志は、協議の結果七月三十日左の聲明書を發し文展支持を明かにした。

「今回現文相の企てたる帝院再改組は美術振興の上に多大なる貢獻を齎らんとするものなるを認め茲に我々は舊の政府展不出品聲明を解除し新文展支持を聲明す

昭和十一年七月三十日

春臺美術有志

オリンピック藝術競技審査發表

ベルリンに開かれた第十一回國際オリンピック大會藝術競技審査の結果は、七月三十日發表された。我が國からの出品は造

形美術では繪畫六三點、彫刻一點、建築五點であつたが、内入賞したものは左記の通りであつた。

繪畫並に寫眞
三等 アイヌホツケ 藤田 隆治
デザイン水彩畫 鈴木 朱雀
三等 古典競馬 彫 刻
賞賛 カ 士 長谷川義起

八月

文部省美術展覽會規則制定 文部省では今秋開催することとなつた昭和十一年文部省美術展覽會規則を正式に制定し、同省告示として八月四日の官報で發表した。

新文展一般出品者大會

文展に参加出品せんとする光風會、太平洋畫會、春臺展、白晝會の有志は八月七日丸の内マールに一般出品者大會を開催、左の檄を決議した。

「過去一年間に互る帝院改組問題に當面せる我々は今回提示されたる平生文相試案による文展支持を廻る諸問題の經過に鑑み今や更生の意氣甚だ烈々捉へ来らんとする因亦清新たり同志相寄りて専心繪畫に純粹ならんことを誓ひて感銘する處多大なり、向後は一路製作に邁進其の成果を大方畫壇社會に問ふ處あらんことを期す、此處に我等の決意を宣揚し、廣く天下同志諸彦に激となす所以なり

八月七日 文展支持各派有志

九月

芝田東京美術學校長任命 東京美術

學校長和田英作辭職後、教授岡田三郎助が校長事務取扱を命ぜられてゐたが、九月二日文部省圖書局長芝田徹心が同校長に任ぜられた。

日本南畫院解散

日本南畫院では曩に文展不参加の態度を決定、聲明したが其の後同人中には文展との絶縁を快しとせず、出品の自由を主張する意見が行はれ、分裂の危機を孕むに至つたので、關西在住の同人は九月五日京都で會合した結果、同院の解散を決議するに至つた。之に基いて東京側同人が集合協議し、主宰者小室翠雲の決斷を仰いだ結果、遂に翠雲は同院を解散することに決定し八日左の聲明書を發表した。

「我日本南畫院は開設以來十有六年の星霜を閱し東洋南畫の傳統と時代性の攝取とに因り日本獨自の立場において新南畫を創設しここに新なる日本南畫の基礎を樹立し得たるを確信す、然るに向後に於ける團體としての行動に付いては先後兩者の立場自ら相背馳するものあり爲めに後進の自由を妨ぐる嫌なしとせず此處に鑑みる所ありこの際本院の解體を斷行し以て大乗の見地より隨意研鑽するの必要を認め敢て解散を聲明する所以なり尙餘て發表せる戒嚴展覽會は本院の解散に伴ひ開會を中止する事とす

昭和十一年九月八日

日本南畫院

環堵畫塾解散

日本南畫院を解散した小室翠雲は其の私塾環堵畫塾をも解散することとし、九月九日同畫塾幹部會を召集して解散の辭を述べ、十日午後二時から在京の塾員一同を集めて解散式を舉

げた。

第一部會解散 第一部會は其の運動の第一目的である同會々員の無鑑査復活が、今次の文展に於いて實現されたので九月五日夕新橋驛東洋軒で總務會を開き同會の解散を決議、十日午後三時半から上野精養軒で最後の總會を開催し正式に解散を決定した。

大阪市立美術館開館

大阪市立美術館は本年五月一日竣工落成式を舉行し開館記念として帝國美術院展覽會を開いたが常設陳列の準備も整つたので九月十一日から愈々開館の運びに至り、同月中其の記念の特別陳列を行つた。(六七頁参照)

佐分賞設定

故佐分眞の親近の友人の間で故人の志を生かすべく協議中であつたが、佐分家より提供された資金に依り佐分賞を設定し、洋畫壇の新進奨勵の賞金とすることに決定、九月十六日之を發表した。

賞金は年額一千圓として十年繼續、年度に最もよい成績を示した新進作家四名以内を選んで毎年四月二十三日故人の忌日に發表授與する。授與者の銓衡は廣く洋畫壇から推獎を求め、藤島武二、梅原龍三郎、安井曾太郎、藤田嗣治、長谷川昇の五名が委員として決定する。

此の事務一切を處理する爲佐分賞委員會が設けられた。委員は、伊藤廉、伊原宇三郎、福島繁太郎、小寺健吉、益田義信、宮田重雄、山喜多二郎太、窪田照三、田口省吾の九名である。

文展委員決定

文部省では今秋の文部省展覽會委員を銓衡決定する爲、九月十一日午前十時半から文相官邸に帝國美術院殘留會員を招いて打合會を開き、會員各部會に於て銓衡の結果夫々委員候補者合計七十五名を決定、發表した。

其の第二部、金山平三、牧野虎雄、川島理一郎、藤田嗣治、中山巍の五名は當局の勸誘を固辭した爲、其の他の七十名を委員とし、九月十八日正式に委嘱した。(便覽二四頁参照)

藤島武二意見書提出

帝國美術院會員藤島武二は昨年の帝院改組當時帝展不開催を主張し、去る四月には他の會員等と共に帝國美術院解消若くは帝展廢止意見を提出し、其の後は去る六月四日文相主催の帝院會員懇談會を初め、新文展に關する打合會等にも總て出席せず獨り沈黙を守つてゐたが、九月二十五日午後平生文相を官邸に訪問、會見して所見を述べ「帝國美術院改革に關する私見」と云ふ意見書を提出した。其の内容として傳へられる所によれば、帝國美術院の使命を展覽會開催と混同した所に誤りがあるから、之と離れて帝院本來の使命に歸すべきである。政府が展覽會を開催することは眞の美術奨勵に適せず、官展は廢すべきである」との意味を説いたものである。

平生文相の方針傳へらる

平生文相は前項藤島武二と會談後新聞記者團に美術行政に關する方針を語つたが、其の意見として報導された所の要點は左の如くである。

である。

「帝國美術院から展覽會を完全に分離して、文展を繼續して行ふ。美術行政上に對しては三大原則に依る。即ち一は美術界の元老、功勞者の爲に帝國美術院を確立して優遇し、諮問機關とする。二は既成作家の爲に目下計畫中の現代美術館を提供する。三は新人の爲の登龍門として文展を繼續する。」

十月

二科會四會員脫退

二科會員碓伊之助、小山敬三、木下孝則、木下義謙の四名は、同會展覽會最終日の十月四日突然退會届を提出して同會を脱退した。

美術批評家協會創立

「現代日本の美術界は、未曾有の混亂に陥り、美術家は生活の不安に喘ぎ、批評精神はすたれ、あまつさへ職業的な批評家は、あたかも家畜のやうな存在をさへ營んでゐるではないか。(中略)藝術の世界に於いてもまた、これを指導する進歩的な批評精神を持たないほど、悲惨なことはない。この混亂のちまたに迷ふ美術界にこそ、何よりも先づ嚴正にして妥當な美術批評が確立されねばなるまい。云々」との宣言を發して、美術批評家協會が十月十日創立された。會長子爵吉川元光、書記長柳亮、事務長外山卯三郎とし、東洋美術、西洋美術、工藝、建築、商業美術、都市計畫美術、舞臺美術、舞踊、映畫、寫眞、服飾、裝幀等其の他の部分を受持つ二十餘名の批評家を正會員とする。機關雜誌「美術批評」の發行、美術圖書館設立、美術行政に對する提案建築、其の他十餘項に互る事業計畫が發表されてゐる。(便覽九九頁参照)

名古屋美術聯盟結成

來春名古屋に開催される汎太平洋博覽會美術館出品問題に端を發して、愛知縣在住並に出身者の美術家を包含する名古屋美術聯盟が結成され、十月十日名古屋市公會堂で發會式が行はれた。(便覽八九頁参照)

藤井浩祐日本美術院脫退

日本美術院同人藤井浩祐は十月二十日同院を脱退した。

武井直也日本美術院脫退

日本美術院同人武井直也は十月二十六日同院を脱退した。

十一月

中部日本商業美術聯盟結成

岐阜、三重、滋賀、富山、福井、靜岡、愛知等諸縣の商業美術協會を加盟團體とする綜合的團體として、中部日本商業美術聯盟が結成され、十一月二日名古屋の愛知縣商工館で創立總會を舉行了した。(便覽八五頁参照)

南畫聯盟結成

去る九月解散した日本南畫院及び環堵畫塾の舊同人黨員等の有志は、十一月三日新團體南畫聯盟を結成し、左の宣言を發表した。小室翠雲を顧問に推さんとするものである。(便覽九〇頁参照)

「南畫聯盟宣言」

吾等の同志は時代思潮に鑑み師恩を重んじ友

誼を厚くし一致協力以て心技一如の學畫の大
道に邁進せんとするものであります、吾等は
徒に名利を追はず異端に趨かず、常に熾烈に
して鞏固なる熱意を有する點最も強い一存在
であると思惟するに憚りありません、一同誓
約以て茲に宣言致します。

昭和十一年十一月三日

南畫聯盟幹事 岡田晴峰、福田浩湖

白倉二峰、人見少華

外聯盟員 四十名

國際人形協會創立

人形の發達と其
の國際的進出とを趣旨として國際人形協
會が創立され、十一月三日丸ノ内ホテル
で發會式を舉げた。岡本綺堂、横山正三、
塚本靖、成輝平兵衛、久保田米所、山村
耕花、有坂與太郎の七名を發企人とする
ものである。

黑田子爵記念獎勵買上

黑田子爵記

念美術獎勵資金委員會（便覽三〇頁參照）
では、本年度買上として今秋二科展覽會
に出品された木下孝則の「I氏の肖像」
一點を買上げ、十一月七日帝室博物館に
寄附した。

野生司香雲歸朝

印度サルナートの

初轉法輪寺に釋迦一代記の大壁畫を揮毫
した野生司香雲は、十一月二十八日神戸
着の伏見丸で歸朝、同三十日上京し、盛
な歡迎を受けた。

有島生馬イタリアで講演

ブエノス

アイレスで開かれた國際ペンクラブ大會
に出席した有島生馬は、イタリアの極東
協會の招聘で十一月十四日ナポリ着渡
伊、約二ヶ月間ローマに滞在し、同協會

主催で近代日本美術に關し連續講演を行
った。

十二月

横山大觀座談會

國際文化振興會で

は在留外國人に對する日本美術の理解を
増させる爲、十二月四日午後五時から丸
の内明治生命館の同會々議室で、横山大
觀を中心とする座談會を開いた。

日本工作文化聯盟結成

「生活の全

的立場より建築を中心とせる工作文化の
健全なる發達に寄與せんとし、（一）様式
建築より生活建築へ、（二）有閑工藝より目
的工藝へ、（三）低俗製品より價值製品へ」
を指標として、主として建築家、學者等
を會員とする日本工作文化聯盟が結成さ
れ十二月九日發會式が舉げられた。會長
伯爵黑田清、理事堀口捨己、理事岸田日
出刀で、順次具體的活動を開始する豫定
である。（便覽一〇四頁參照）

文部省學藝課長更迭

多年文部省專

門學務局學藝課長の職に在り、帝國美術
院幹事又は主事として美術界に盡力した
文部書記官石丸優三は、大分高等商業學
校長に轉任、其の後任として静岡高等學
校教授兼生徒主事本田弘人が任命され、
十二月十九日發令があつた。

一水會組織

帝國美術院會員石井柏

亭、有島生馬、安井曾太郎、山下新太郎
の四名に、過般二科會を脱退した木下孝
則、木下義謙、小山敬三、裕伊之助を加
へた八名は、十二月二十二日新團體一水

會を組織した。

巴里萬國博日本館起工式

明年五月

開催のバリ萬國博覽會日本館の起工式は
十二月二十九日午後トロカデロ庭園の敷
地で佐藤大使サベット博覽會事務總長等
日佛兩國の關係者多數參集の上盛大に舉
行された。同館は坂倉準三の設計に成
り、建坪總計千七百五十六平方米、二階
建てで、明年三月中に大體完成、四月に内
部の陳列を終り五月早々開館の豫定であ
る。（東日一二・三一に據る）

京都工藝院結成

京都工藝界各部門

の諸團體が大団圓結して綜合的な工藝團
體を結成する相談が行はれてゐたが、愈
々十二月三十日新團體京都工藝院創設の
旨が左の通り發表された。參加人員は、
陶磁七十名、金工十四名、染織三十八名
漆藝二十五名、雜四名、外研究部員五十
名の多數に上り明春早々發會式を舉げる
筈である。

「時代の進運に鑑み工藝界の革新を企て茲に
『京都工藝院』の創設を見るに至りました其れ
は年來工藝界に於ける一團體として聊か斯道
のため力を盡して來た、

五條會、綵工會、伸更會、金工作家聯盟、
蒼潤社、工友團

等が現下日本工藝美術の重大性に深く念ふ所
あり既往の集團を擴大し一致協力工藝界の革
正に當り純正なる藝術の進展を圖るべき好機
運たりと確信致します。
追而本院は新春を期し發會式を舉げ目的達成
のため邁進するものであります。

昭和十一年十二月三十日

京都工藝院

「物故作家及美術関係者」 ページ (142～148 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.142-148)

Cut for protection of the personal information

美術行政

第一回帝國美術院展覽會

昨年六月一日發令を以て所謂改組の行はれた帝國美術院では、新に制定した展覽會規則に依つて豫定の通り、二月下旬東京府美術館に於て第一回展覽會を開いた。改組に端を發した美術界の紛争は猶收まらず、所謂舊帝展系作家の間に新帝展の機構に對する反對運動の盛に行はれつゝ、あつたことは別項（美術界彙報參照）記載の通りであるが、文部當局は飽く迄既定方針を遂行することとし、帝國美術院亦之が實現に努めたのであつた。

新帝國美術院に於ても、從來の如く展覽會は秋季開催を豫定して居り、此の第一回展も本來昨秋開かれる筈のものであつたが、美術界の實情に鑑みて特に延期されたのであつた。新制度の著しく舊に異る所は、四部綜合とせず、第四部を除いては各部に就き隔年の開催とし、第一回は第一部（日本畫）、第三部甲種（彫刻）、及び第四部（美術工藝）の組合せに依つたことで、之は政府展覽會最初の試みであり、又彫塑を甲乙の二種に分けたことは可なり異論も多かつた問題であるだけに、是等の結果は何れも注意される所であつた。

出品の内容、展覽會の成績其の他に關しては別項（二九頁參照）記載の如くであるが、開催に關する記録の概要を以下に掲げる。

展覽會に關する日程は左の通り行はれた。

美術行政

出品搬入受付 二月十日—十三日

鑑審査打合せ 同十四日

入選發表 同十八日（第三部）、十九日（第四部）、二十日（第一部）

無鑑査出品締切 同二十日

審査 同二十三日

招待日 同二十五日

一般公開 同二十六日—三月二十五日

出品受付開際に起つた京都在住畫家達の不出品問題は漸く解決されたが（二六頁參照）是等の出品は延着の餘儀無きに至つた爲、二月十四日鑑審査打合せに先ち常議員會を開いて協議した結果、鑑査に支障を來さざる限り特に受付を承認することとし、十六日正午迄是等の締切を延期した。鑑審査は規則に依つて各部共會員が之に當り、審査主任は第一部小室翠雲、第三部内藤伸、第四部清水龜藏であつた。

出品及び陳列數は左の通りであつた。

一般出品數	入選數	無鑑査	陳列數
第一部 一七三一	一九一	二五	二一六
第三部甲 一九八	一七	六	二三
第四部 七九七	二一四	二九	二四三

審査の結果は第一部三名、第四部五名の推獎を決定した。又政府買上用品は各部審査員の選定に基づき、三月十五日第一部六點、第三部一點、第四部五點、計十二點を決定した。（三二頁參照）尙會員出

品中左の二點は會員記念寄贈として各作者から帝國美術院に寄贈された。

「白乾坤」 小室翠雲、「靈龜隨」 平柳田中

大阪市立美術館が落成して五月一日開館式を舉げる運びとなつたので、之を機會に同館に於て帝展大阪陳列會を開催した旨同市より願出があつたが、三月九日常議員會を開いて協議した結果、同美術館落成祝賀の爲今回に限り、京都陳列會終了後其の開催を承諾することに決定した。右に依り兩市主催の各地陳列會は左の通り開催された。

京都陳列會 四月三日—二十二日

大阪陳列會 五月一日—二十日

文相主催帝國美術院會員懇談會

二月一日松田文相急逝し、同二十六日帝都に不祥事件突發した爲内閣更迭の事あり、其の後廣田内閣成立に伴つて平生文相の就任を見たが、美術界は猶安定せず、第一回帝展終了後も引續き同展覽會の機構に關し異論が行はれ、帝國美術院會員の間にも所謂再改組の意見を有する者があつた。

平生文相は諸方面より提出された意見書を蒐めて研究中であつたが、六月四日文相官邸に帝國美術院會員各分科別懇談會を開き、之が對策に關する別記の如き試案を提出して會員の検討考慮を求めた。懇談會は午前午後に互り、第一部、第二部、第三及び第四部各別に三回に分けて開催され、清水院長を座長とし、文部省よりは大臣の外次官局長等關係官列席、大臣から試案の趣旨及び内容に就き説明した後、之に對する會員等の意見交換が

行はれた。

提案の内容は

一、美術家の全部、少くとも大多數の協力に依る新な構成の展覽會を今秋より催したきこと

二、相當の美術家と一般に認められた作家には能ふ限り十分なる製作發表の便宜を保護したきこと、並に現行の參與指定及び所謂「附則」等の區別は撤去したきこと

三、能ふ限り多くの新進作家の製作發表に就き便宜を與へたきこと

を主なる趣旨とし、此の目標に依つて左の通り展覽會を年二回に分けて開くものとする。

一、招待展（無鑑査） 各部綜合

主催者 帝國美術院

出品資格者（一）會員、（二）被招待者（院長指定）、（三）鑑査展ヨリ推舉サレタル者

開催期 春季又ハ適當ナル季節、二十

五日間

各部綜合

二、鑑査展

主催者

文部省

出品資格者 鑑査合格者

鑑査委員 文部省ヨリ毎年委嘱

開催期 秋季又ハ適當ナル季節、二十

五日間

推舉

優秀作タル表彰（文部省買上ヲ含ム）ヲ連續二回受ケタ者ハ招待展

出品資格ヲ得ルコト

尙之に被招待者資格銓衡參考案及び文部省鑑査委員委嘱内規案を附し、是等を參考として會員が

一致し得る成案に到達せんことを希望したのであつた。

昭和十一年文部省美術展覽會

前項の懇談會開催後、文部當局では試案の内容を各美術團體に示して之に對する意見の提出を促し、且つ帝國美術院會員の答申の集まるのを待つてゐたが、會員中には文相の措置に慍らぬ者があり、六月十二日に至つて突然十六名の會員が相前後して辭表を提出するに至つた。（一三四頁參照）

之が爲に帝展問題の解決は一頓挫を來し、會員の意見を纏めることは固より、帝國美術院は總ての事業を進行させ得ぬ状態となつた。仍て文部省では取り敢へず本年度展覽會を、帝國美術院とは別に、同省主催で開くことに決し、帝國美術院會員中此の趣旨に賛する者、美術團體代表者等に就いて意見を徴し、其の開催案を製作した。

此の文部省展覽會に關する當局と會員との打合會は、六月二十三日第一部、同二十五日第三及び第四部、同二十九日再び第三部、七月二日第二部の順序で開かれ、是等の結果を纏めた成案は同三日文部省で正式に決定、即日當局の聲明書と共に左の通り之を發表した。

昭和十一年文部省美術展覽會ニ就テ

一、凡ソ一國ノ美術ノ興隆ハ其ノ國民ノ文化躍進ノ一標識デアル、幸ニ我國ハ古來美術國トシテ又美術愛好ノ國トシテ世界列國ノ認ムル所デアツテ益々其ノ發達ヲ圖リ愈々其ノ特質ヲ中外ニ顯揚スルコトハ國民ノ相共ニ努力スベキ所デアルト信ズル
一、我國美術が發達シ又其ノ特質ノ發揮セラルルコト

ハ國民思想ヲ指導シ其ノ趣味ヲ醇美ニシ國民教育、國民文化乃至國民生活ニ大ナル貢獻ヲ爲スベク又之ニ依ツテ國民ノ明朗闊達ナル精神ヲ愈々旺ナラシムルコトヲ得ベク延イテハ美術ヲ通ジテノ國際間ノ理解親和ニモ寄與スル所大ナルモノガアルデアラウ。
一、右ノ考ノ下ニ本省トシテハ力量アル作家ヲ尊重シ出來得ル限り之ニ對シ製作發表ノ機會ヲツクリ同時に新進氣鋭ノ作家ノ大成ニ意ヲ用ヒ之ヲ鼓舞獎勵スルコトハ我國美術發達ノ爲ニ最も大切ナルコトトシテ極力其ノ手段ヲ講ズルコトヲ期シテ居ル。

一、帝國美術院ノ現狀ガ今直チニ種々ノ事項ニ關シ其ノ議ヲ進メルニ適當デナイ狀態デアルコトヲ考ヘ又今秋ノ重要ナル一ツノ機會ヲ空シウスルコトナカラシガ爲ニ、以上ノ趣旨ニ基イテ本省ニ於テハ今同有力ナル美術家ノ意見ヲ聽キ各部綜合ノ展覽會ヲ開ク次第デアル。而シテ帝國美術院ノ從來ノ各種ノ懸案ハ追テ其ノ整備セラルルヲ待ツテ解決スルコトトシ帝國美術院ノ地位ハ充分之ヲ尊重シ我國美術界ノ最高府タルノ實ヲ全ウセシメンコトヲ期シテ居ル。

一、今回ノ文部省展覽會ノ機構ハ獨リ今次ノ展覽會ノミナラズ此經驗ニ徴シテ又各方面ノ意見ヲ聽イテ將來ノ美術行政上ニモ同様ノ考慮ヲ以テ臨ミ度イト考ヘテ居ル、尙本省ハ一面ニ於テハ努メテ美術ニ關スル各般ノ施設機關ノ整備ヲ圖リ以テ美術行政ノ確立ノ爲ニ力ヲ盡スト共ニ各美術團體ノ發達ト其ノ相互ノ和協トヲ希望シテ居ル、而シテ本省ハ此等ノ團體ヲ尊重シ之ト相親シデ努メテ其ノ意見ヲ聽キ、其ノ獎勵援助ノ方法ヲ講ジ多數美術家ノ福祉ノ爲又我國美術發達ノ爲貢獻センコトヲ期シテ居ル次第デアル

昭和十一年文部省美術展覽會要綱

一、昭和十一年文部省美術展覽會ヲ上野公園東京府美術館ニ於テ開催ス
二、展覽會ハ第一部、第二部、第三部及び第四部

ノ綜合展トス

三、展覽會事務ヲ處理スル爲展覽會委員長及ビ展覽會委員ヲ置ク委員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ委員ノ數ハ第一部二十五名、第二部二十五名、第三部九名、第四部十八名以內トシ文部大臣之ヲ委嘱ス

四、鑑査ニ當ル者ハ各部ニ於テ展覽會委員中ヨリ追テ之ヲ定ム

五、展覽會ヲ鑑査展ト招待展トニ分ツ

鑑査展ハ一般作品ニシテ鑑査ヲ經タルモノ、招待展ハ文部省ヨリ招待ヲ受ケタル者ノ作品ヲ陳列ス

招待展ニ招待ヲ受クベキ者ハ帝國美術院展覽會ニ於テ無鑑査ノ資格ヲ有スル者及ビ今回ノ展覽會ニ招待ヲ受ケタルモノトシ、其ノ氏名ハ追テ之ヲ發表ス

六、鑑査展ト招待展トノ會期ヲ左ノ如ク定ム

鑑査展 十月十六日ヨリ十一月三日迄、第一部、

第二部、第三部

招待展 十一月六日ヨリ十一月二十三日迄、第

一部、第二部、第三部

第四部ハ鑑査ヲ經タル作品ト招待ヲ受ケタル者

ノ作品トヲ陳列室ヲ分チテ全會期間陳列ス

七、鑑査ヲ受ケタル者ノ提出スベキ作品ハ二點以內

招待ヲ受ケタル者ノ提出スベキ作品ハ一點トス

八、第一部ノ鑑査ヲ受ケタル者ノ作品ノ大サハ縱十

尺横十三尺以內トシ、招待ヲ受ケタル者ノ作品

ノ大サハ縱十尺横二十五尺以內トス

第四部ノ作品ハ立體ニ在リテハ十尺平方以內ノ

場所ニ陳列シ得ルモノ、其ノ他ノモノハ縱十二尺横十二尺以內トス

第二部及ビ第三部ノ作品ノ大サハ適宜トス

九、作品ノ優秀ナルモノニ對シテハ選奨、擬賞、

買上等ヲ爲スモノトス

十、作品ノ搬入受付日時ハ左ノ如シ

イ、鑑査ヲ受ケタル作品 各部共十月一日ヨリ同

五日迄

ロ、招待ヲ受ケタル者ノ作品 第一部、第二部、

第三部十月二十一日ヨリ同三十一日迄、第四

部十月一日ヨリ同十二日迄

搬入受付時間ハ午前九時ヨリ午後五時迄トス

十一、展覽會事務所ハ昭和十一年九月三十日迄ハ

文部省専門學務局内ニ同十月一日以後十一月二

十五日迄ハ東京府美術館内ニ之ヲ置ク

十二、本展覽會終了後ハ京都市主催ノ京都陳列會

ニ陳列ス

尙此の要綱に基ク展覽會規則ハ八月四日文部省告示を以テ發表された。(便覽二頁參照)

被招待者は左の通り決定し、七月十五日發表さ

れた。第一部一九〇名、第二部二六六名、第三部

一二七名、第四部八六名、合計六六九名で、新帝

展に於ける所謂附則迄を含む無鑑査の外、美術界

各分野に互に、新に二三〇名許りを銓衡追加した

ものである。

昭和十一年文部省美術展覽會

被招待者氏名(イロハ順)

第一部

伊東 紅雲、伊藤 小坡、伊東 深水、入江 波光

岩田 正巳	板倉 星光	磯部 草丘	磯田 長秋
猪飼 嘯谷	生田 花朝	今中 素友	池上 秀畝
池田 遙村	石渡 風古	石崎 光瑤	畠山 錦成
服部 有恆	八田 高容	橋本 關雪	橋本 永邦
橋本 靜水	西村 五雲	西山 翠峯	西澤 笛畝
堀井 香坡	徳岡 神泉	徳田 隣齋	堂本 印象
登内 微笑	富取 風堂	大智 勝觀	大河内 夜江
太田 聰雨	太田 天洋	秋民 大村	廣陽
大木 豐平	落合 朗風	小川 芋錢	小川 翠村
織田 觀潮	尾竹 國觀	奥村 土牛	小野 竹喬
荻生 天泉	川上 拙以	川端 龍子	川村 曼舟
川船 水棹	川崎 小虎	川北 霞峰	加藤 英舟
堅山 南風	勝田 哲	勝田 蕉琴	金島 桂華
鍋本 清方	川合 玉堂	鴨下 晃湖	横尾 翠田
横山 大觀	吉岡 堅二	吉田 秋光	吉村 忠夫
田畑 秋濤	谷角日 娑春	高木 保之助	田中 咄哉州
田中 賴璋	田中 青坪	竹原 嘲風	武田 鼓葉
竹内 栖鳳	常岡 文龜	根上 富治	永田 春水
中村 貞以	中野 草雲	長野 草風	長山 はく子
中村 岳陵	中村 大三郎	村上 華岳	村島 酉一
上田 萬秋	植中 直齋	上村 松篁	上村 松園
宇田 萩郷	榎崎 朱雀	野田 九浦	野添 平米
野口 謙次郎	矢野 鐵山	矢野 橋村	山川 永雅
山川 秀峰	山田 耕雲	山村 耕花	山ノ内 信一
山口 蓬春	山口 華楊	山口 冷照	山下 竹齋
山本 倉丘	山本 紅雲	山元 春汀	矢澤 弦月
八木岡 春山	安田 半圓	保間 素堂	安田 靱彦
前田 萩郷	前田 青郷	町田 曲江	松林 桂月
松岡 映丘	栗本 一洋	松元 道夫	松本 姿水
益田 玉城	不動 立山	古谷 一晁	古屋 正壽
福田 平八郎	福田 豐四郎	福田 惠一	福田 浩湖
福田 翠光	筆谷 等觀	小泉 勝爾	小早川 清
小早川 秋聲	小林 柯白	小林 古徑	郷倉 千靱
五島 耕畝	兒玉 希望	小室 翠雲	小村 大雲

木島 櫻谷、小山 大月、小山 榮達、近藤浩一路
 榎本千花俊、阿部 春峰、赤松 雲嶺、穴山 勝堂
 荒井 寛方、荒木 十畝、佐藤 光華、酒井 三良
 榊原 苔山、榊原 紫峰、佐野 五風、佐々木尙文
 北野 恆富、木村 武山、木村 斯光、菊池 華秋
 菊池 契月、菊澤 武江、結城 素明、幸松 春浦
 三輪 晃勢、三谷十糸子、溝上 遊龜、水上 泰生
 水田 竹岡、水田 硯山、宮田 司山、三宅 風白
 三木 翠山、庄田 鶴友、白倉 二峰、島田 墨仙
 島崎 柳塙、眞道 黎明、廣島 晃市、東原 方僊
 飛田 周山、平井 謀仙、平田 松堂、望月 春江
 森 白市、森村 宜稻、森 月城、森 守明
 菅 楯彦、杉山 寧

第二部

伊原宇三郎、伊庭傳治郎、伊藤 康、伊藤慶之助
 岩井彌一郎、井垣 嘉平、伊谷 賢藏、井上よし
 猪熊弦一郎、今關 啓司、池部 鈞、池田治三郎
 池田永一治、石井 柏亭、石井 鶴三、石川 寅治
 石川欽一郎(水彩)、服部 亮英、八條 彌吉
 林 武、林 俊衛、林 重義、濱地 清松
 濱田 葆光、伊之助、橋本 はな、橋本 邦助
 橋本八百二、長谷川 昇、長谷川 潔(版畫)
 細井 繁誠、堀田 清治、別府貫一郎、都鳥 英喜
 東郷 青兒、富田溫一郎、鳥海 青兒、大橋 孝吉
 太田 三郎、太田喜二郎、大野 隆徳、大久保作次郎
 大久保百合子、大澤鉦一郎、緒方 亮平、岡 吉枝
 岡田 謙三、岡田三郎助、岡見 富雄、岡本 一平
 織田 一磨(版畫)、小野田元興、奥瀬 英三
 恩地孝四郎(版畫)、若山 爲三、和田 香苗
 渡邊 浩三、和田 英作、和田 三造、加藤 静兒
 角野判治郎、梶原 貫五、河井 清一、川西 英
 (版畫)、川口 軌外、川島理一郎、片岡 銀藏
 金山 平三、金子 保、金澤 重治、河野 通勢
 鹿子木孟郎、川合改次郎、川合 修二、龜高 文子

柏木 俊一、横井 禮市、横堀角次郎、吉井 淳二
 吉田 苞、吉田 博、吉村 芳松、高島達四郎
 高橋虎之助、高岡徳太郎、高村 眞夫、高野三三男
 高間 惣七、多々羅義雄、田邊 至、田中 繁吉
 田中善之助、田村孝之介、田口 省吾、相馬 其一
 曾宮 一念、椿 貞雄、坪井 一男、土田 文雄
 鶴田 吾郎、塚本 茂、辻 愛造、辻 永
 鍋井 克之、中西 利雄(水彩)、永地 秀太
 中川 一政、中川 紀元、中村 研一、中村 不折
 中村 節也、中野 和高、長屋 勇、中山 巍
 中澤 弘光、長坂 春雄(版畫)、永瀬 義郎(版畫)
 武藤 辰平、向井 潤吉、内田 巖、梅原龍三郎
 上野山清貢、野口彌太郎、野口 謙藏、野間 仁根
 黒田重太郎、黒田 新、國吉 康雄、國枝 金三
 國盛 義篤、窪田 照三、栗原 忠二(水彩)、白羊
 栗原 信、栗田 雄、桑重 儀一、倉田 白羊
 熊岡 美彦、熊谷 守一、草光 信成、矢崎千代二
 矢島 堅土、安井曾太郎、保田 龍門、安田 稔
 山脇 信徳、山田 隆憲、山口 亮一、山崎 省三
 山喜多二郎太、山下 品藏、山下 繁雄、山下新太郎
 山本 鼎、山本 直治、松井 正、前川 千帆
 (版畫)、間部 時雄(版畫)、松岡 壽
 松村 巽、松山 省三、松本 弘二、眞山 孝二
 正宗得三郎、牧野 虎雄、牧野 司郎、深澤 省三
 福澤 一郎、藤島 武二、藤田 嗣治、小早川篤四郎
 小林徳三郎、小林 和作、小林 萬吾、小林喜一郎
 小林 眞二、小山 敬三、小絲源太郎、小磯 良平
 香田 勝太、小寺 健吉、小穴 隆一、五味 清吉
 小柴 錦侍、小島善太郎、兒島善三郎、小杉 放庵
 權藤 種男、近藤 光紀、江藤 純平、遠藤 典太
 寺内萬治郎、寺松國太郎、寺崎 武男(版畫)、泰
 寺澤幸太郎、相田 直彦、阿以田治修、跡見 泰
 有岡 一郎、有馬さとえ、安宅安五郎、足立源一郎
 赤松 麟作、赤城 泰舒、新井 完、青山 義雄

第三部

飯島三四三、伊藤 鉦次、井口 喜夫、一色 五郎
 池田 勇八、石井 鶴三、石川 確治、畑 正吉
 羽下 修三、花里 金央、早川巍一郎、林 謙三
 服部 仁郎、濱田 三郎、橋本 朝秀、橋本 高昇
 長谷川義起、長谷川榮作、長谷 秀雄、新田藤太郎
 西村 雅之、堀 進二、富永 朝堂、沼田 一雅
 大西三四郎、太田 三郎、大塚 辰夫、大内 青岡
 大國 貞藏、大島 胸藏、大須賀 力、小笠原眞弘
 岡本金一郎、小倉右一郎、萩島 安二、渡邊 義知
 渡邊 浩行、加藤 顯清、河村 龍興、河村 清司
 開發 芳光、矩 幸成、笠置 季男、上條 俊介
 横江 嘉純、吉田 白嶺、吉田 芳明、吉田 三郎
 吉田 久繼、高田 博厚、高村光太郎、田村 春火
 武井 直也、建昌 大夢、都賀田勇馬、津上 昌平
 内藤 伸、中川 清、中野 桂樹、中野 五一
 中村 直人、中島 東洋、夏目 貞良、村田勝四郎

青柳喜兵衛、油谷 達、淺井 眞、旭 泰宏
 (版畫)、有島 生馬、齋藤 豐作、齋藤 與里
 佐藤 敬、佐藤哲三郎、佐藤 章(統一章)
 里見 勝藏、酒井 亮吉、坂本繁二郎、佐竹徳次郎
 櫻井 知足、笹鹿 彪、佐々木義雄、三田 康
 鬼頭颯二郎、鬼頭鍋三郎、清原重以知、清宮 彬
 (版畫)、北島 淺一、北 蓮藏、木村 義男
 木村 莊八、木下 孝則、木下 義謙、金 觀鎬
 柚木 久太、三上 知治、三宅 克己、宮部 進
 (水彩)、宮田 重雄、宮坂 勝、宮本 三郎
 南 薰造、耳野卯三郎、水谷 清、白瀧幾之助
 島崎 雞二、清水多嘉示、清水 良雄、清水 登之
 平岡權八郎、平塚 運一(版畫)、平澤 大曜
 望月 省三(水彩)、森脇 忠、森田 勝
 關口 隆嗣、鈴木千久馬、鈴木 保徳、鈴木 誠
 鈴木 亞夫、鈴木 淳、鈴木信太郎、鈴木 清一
 末長 護、菅 一郎、須田國太郎

畝村 直久、上田 直次、野村 公雄、黒田 嘉治
 國方 林三、倉澤 興世、梁川 剛一、山脇 敏男
 山根 八春、山崎 朝雲、山本 豊市、山本 稚彦
 保田 龍門、安永 良徳、松原 岳南、松原 松造
 松田 尙之、牧 俊高、藤井 浩祐、藤澤 古實
 小室 達、後藤 良、後藤 泰彦、後藤 清一
 照田 稔、寺畑助之丞、阿井 瑞岑、赤堀 信平
 安達 貫一、朝倉 文夫、雨田 光平、雨宮 治郎
 安 一、安藤 照、齋藤 素巖、佐藤 朝山
 佐伯 量良、澤田 晴廣、佐崎 霞村、佐々木 大樹
 喜多武四郎、北村 西望、北村 正信、木村 威夫
 行田 泰英、三國 慶一、宮本 重良、三澤 寛
 三木 宗策、柴田 正重、白井 保春、清水多嘉示
 新海 竹藏、日名子 實三、平櫛 田中、森野 圓象
 森 大造、森山 朝光、毛利 敦武、關野 聖雲
 須藤力次郎、杉浦藤太郎、杉本 宗一

飯塚琅玕齋、伊東 陶山、伊東 信助、岩田 藤七
 板谷 波山、磯崎 美亞、稻木 春千里、石田 英一
 六角 紫水、濱田 庄司、豊田 勝秋、富本 憲吉
 沼田 一雅、大島 如雲、大須賀 喬、仰木 政齋
 岡部 達男、奥村 霞城、小川 雄平、小野島知文
 香取 正彦、香取 秀眞、河井寛次郎、河村 靖山
 各務 鑛三、桂 光春、鹿島 英二、四谷 正美
 吉田源十郎、吉田醇一郎、高井 白陽、高村 豊周
 高野 松山、龍村 平藏、田村 泰二、竹園 自耕
 堆朱 楊成、津田 信夫、根箭 忠縁、内藤 春治
 長野 埜志、村越 道守、植松 彌吉、梅澤 隆眞
 海野 建夫、海野 清、信田 洋、熊谷重太郎
 楠部 彌一、山形駒太郎、山鹿 清華、山崎覺太郎
 山本 安曇、山本 自燼、前 大峰、松田 樞六
 二橋 美衡、船橋 舟珉、船越 春珉、越村 計三
 遠藤 順治、佐藤 陽雲、澤田 宗山、櫻井 霞洞
 佐々木泉堂、清水六兵衛、清水正太郎、北原 三佳

美術行政

北原 千鹿、木村 和一、木村 雨山、岸本 景春
 結城 哲雄、三田村自芳、皆川 月華、宮川 香山
 宮永 東山、宮之原 謙、島野 三秋、清水 龜藏
 廣川松五郎、平館 曾、森川 紫山、芹澤 銈介
 杉田 禾堂、鈴木 義彦

展覽會委員の選に關しては、九月十一日文相官邸に帝國美術院會員中此の展覽會の趣旨に賛する者のみを集めて打合會を開き、銓衡の結果、是等の會員を含み第一部二五名、第二部二五名、第三部七名、第四部一八名、合計七五名を選定、之を發表したが、其の中第二部の川島理一郎、金山平三、中山巍、牧野虎雄、藤田嗣治の五名は委員受諾を辭退した爲、之を除いて七〇名を委嘱した。(便覽二四頁參照)

審査員は十月六日鑑審査打合會に於て協議の結果、展覽會委員中第一部及び第二部は帝國美術院會員以外の者、第三部及び第四部は全員で之に當ることに決定した。各部審査主任は左の通りであつた。

第一部水田竹圃、第二部小林萬吾、第三部建畠大夢、第四部津田信夫
 展覽會に關する日程は左の通り行はれた。
 鑑査展

出品搬入受付 十月一日—五日
 鑑審査打合會 同六日
 入選發表 同九日(第三部)、十日(第四部)、十一日(第二部)、十二日(第一部)
 審査 同十五日
 招待日 同十六日

一般公開 同十七日—十一月三日
 招待展

出品搬入受付 十月二十一日—三十一日

招待日 十一月六日

一般公開 同七日—二十三日

出品及び陳列數は左の通りであつた。

一般出品數	入選數	招待	合計
第一部 一五六	一三六	七	四六四
第二部 三〇二	三三七	一一	四九二
第三部 四一五	一二四	八	二二二
第四部 七六九	一九四	六	二五八

鑑査展出品の作品に就いては審査の結果、文部大臣賞第一部一名、第二部一名、計二名、選奨第一部三名、第二部六名、第三部四名、第四部二名、計二五名を決定發表し、(九〇頁參照) 十月三十日文相官邸に於て授賞式を行つた。

政府賞上品は招待展出品に就て選定(第四部は受鑑査作品を含む)、十一月二十一日左の通り決定した。

第一部五點、第二部五點、第三部三點、第四部四點、合計一七點。別に文部省記念買上第三部三點。(一〇五頁參照)

展覽會の内容及出品目録等は別に記す通りである。(鑑査展八七頁、招待展一〇一頁)

尙京都市主催に依る京都陳列會は、鑑査展十月十三日より二十七日迄、招待展十二月一日より十五日迄の日程を以て開かれた。

美術教育

京都繪畫專門學校長及教授更迭 京都市立繪

畫專門學校長兼教授西山卯三郎(翠嶂)、同教授菊池完爾(契月)、同川村萬藏(曼舟)及び同西村源次郎(五雲)は豫て辭表提出中であつたが、一月三十一日附内閣辭令を以て各本職並に兼職を免ぜられた。同時に教授の後任として、同校助教授宇田萩郎、同福田平八郎、同案本一洋、同中村大三郎、同石崎光瑤及び堂本印象の六名が各教授に任せられ、又學校長の後任は取り敢へず京都市助役石川芳太郎が同校長事務取扱を命ぜられたが、三月二十日川村曼舟が就任し、市立美術工藝學校長をも兼ねることゝなつた。

東京美術學校卒業及入學者

東京美術學校では、三月二十四日同校第四十五回卒業式を舉行した。本年度卒業生は百二十九名であつた。又同校本年度入學志望者は七百八名、内入學を許可された者は百三十六名であつた。卒業及び入學者の内譯は左表の通りである。

	卒業者	入學志望者	入學者
日本畫科	一九	五五	二〇
油畫科	三九	二二	三六
彫刻科	一五	二六	一七
塑造部	六	一二	七
木彫部	一四	一六	一五
圖案部	六	八	五
彫金部	一四	一六	一五

鍛金部	一	四	二
鑄金部	六	一七	五
漆工部	三	一四	七
建築科	五	六八	七
圖畫師範科	一五	一五七	一五
合計	一二九	七〇八	一三六

西洋名彫刻複製陳列

東京美術學校では、豫

て米國ボストン美術館から同校に寄贈された西洋彫刻名作品の石膏複製三十四點を整理陳列中であつたが、準備完了して三月二十四日同校卒業式を機會に公開、觀覽に供した。之は元ボストン美術館に陳列されてゐたものであるが、同館の都合に依り陳列取り止めとなつたのを、東京美術學校矢代幸雄教授が昭和八年渡米中、同館の厚意に依り寄贈を受けることゝなつたもので、ドナテルロ作ガツタメラタ騎馬像、同聖チオルヂオ像、ヴェロツキオ作コレオニ騎馬像、ミケランヂエロ作モーゼ像、同奴隸、同メデイチ家墳墓群像等イタリア文藝復興期の名作を主とし、エヂプト、ギリシア、ペルシア等の古代浮彫をも加へた總て原寸大の複製である。此の種參考資料の殆ど絶無な我が國に於ては、僅かながら貴重な蒐集の端緒が開けたものと言ふべきである。同校では之を陳列する爲に校舎中庭の一部を改造して百十二坪許りの陳列場を設け、生徒の學習に資することゝした。

東京高等工藝學校卒業及入學者

東京高等工

藝學校本年度の卒業者は百二十八名、同入學者は

志望者九百八十名中百三十一名であつた。各科の内譯は左表の通りである。

	卒業者	入學志望者	入學者
工藝圖案科	二一	一三三	二四
工藝彫刻部	五	三三	六
金屬工藝科	一五	一三八	一七
精密機械科	二八	三三三	二五
木材工藝科	二〇	一五六	二二
印刷工藝科	二〇	一一一	二二
寫真部	七	六二	六
木材工藝別科	一二	一四	九
合計	一二八	九八〇	一三一

全國圖畫教育大會

全國圖畫教育大會は、從

來三回に互り東京、大阪及び横濱に於て開かれたが、本年は愛知縣教育會及び同縣圖畫教育研究會共同主催の下に、六月一日より三日迄名古屋に於て、同市公會堂及び美術館を會場として開催された。出席の正會員は全國各府縣からの圖畫教育者三百三十餘名、來賓及び賛助會員の出席者八十餘名、全國圖畫教育功勞者の表彰、大會宣言の決議等をなして後、正木直彦を議長に推して議事を進め、文部省諮問案其の他の協議題、建議案等に就き研究協議を行つた。感謝及び表彰に就ては、圖畫教育界の恩人として特に正木直彦に感謝帖を呈し、功勞者として左記八名に感謝狀を、其の他七十名に表彰狀を贈つた。

東京高等師範學校阿部七五三吉、同板倉賢治、同伊藤信一郎、廣島高等師範學校原貫之助、同石谷辰治郎、東京女子高等師範學校山形寛、奈良女子高等師範學校横井曹一、東京美術學校多

賀谷健吉

東京女子高等美術學校創立

女子美術家の養成を目的として、伊澤勝磨を校長とする東京女子美術學校が創立せられ、小石川區第六天町五〇に校舎を設けて六月十五日開校された。入學資格は高等女學校四年終了程度とし、教授としては日本畫荻生天泉、彫刻長谷川義起、洋畫阿以田治修、手藝阪井琴子等が夫々に當る。(便覽三六頁參照)

全國中等學校美術展覽會

日本大學主催、文部省後援で、全國中等學校美術展覽會が六月十七日から三十日迄東京府美術館で開かれた。繪畫、彫刻、工藝、書道の四部とし、中等學校生徒を出品資格者と定めたものである。出品總數二三四三點、内入選數一九一四點で其の内譯は油繪四七四、水彩畫五九九、日本畫九七、彫刻三六、工藝品一二〇、書道五八八點であつた。

東京美術學校校長更迭

東京美術學校校長和田英作は別項(二五三頁)の通り六月十五日辭表を提出した爲、同二十二日附を以て依願免官となり、同校教授岡田三郎助が學校長事務取扱を命ぜられたが後任校長は銓衡の結果、文部省圖書局長芝田徹心が任ぜられることに決定し、九月二日附發令された。

尙和田前校長は八月十八日附同校名譽教授の名稱を授けられた。

朝倉彫塑塾專門學校認可

朝倉文夫が門弟教育の爲に設けた朝倉彫塑塾は、彫塑專門學校として設置すべく手續中であつたが、六月十五日東京府より正式に認可された。豫科三年、本科五年とする。(便覽三四頁)

日本美術學校校長異動

日本美術學校校長紀淑雄は、別記の通り四月十五日逝去したので、後任として前文部參與官衆議院議員山榊儀重が同校長に就任することとなり、九月二十五日其の就任式が行はれた。

文部省圖書科教員講習

文部省では本年度中等學校圖書科教員講習を十月十九日より二十八日迄東京美術學校に於て開催した。講習科目及び講師は左の通り、講習員は八十名であつた。

明治初期に於ける洋畫教育(四時間)

東京美術學校名譽教授 正木 直彦

文藝復興期の繪畫及彫刻(六時間)

同 教授 矢代 幸雄

最近の工藝圖案(四時間)

同 教授 和田 三造

文化教育學概説(六時間)

同 講師 小塚新一郎

繪畫實習(三十時間)

同 教授 南 薫造

同 教授 田邊 至

同 助教授 伊原宇三郎

尙右實習時間内に於て、南教授の講話「水彩畫の沿革」及び伊原助教授の指導に依る文展見學を行つた。

全國中等學校美術展覽會

帝國美術學校主催

第一回全國中等學校美術展覽會が、十月三十日から十一月五日迄同校で開かれた。男子中等學校生徒を出品者とし、種目は繪畫(日本畫、水彩畫、鉛筆畫等)、圖案、工藝(平面的なるもの)、版畫等で、搬入數一六七九點、入選數二四〇點、入選學

校數五二、内優秀校六、入賞者二五名であつた。

東京美術學校創立記念式

東京美術學校では十一月四日同校第四十七回創立記念式を舉行し、併せて津田信夫教授在職三十五年、田邊至教授及び濱野校醫の在職二十五年を祝して、其の勤績祝賀式を行つた。

自由學園工藝教育展覽會

十一月二十一日より三日間自由學園明日館に於て小學部女子部工藝研究所の展覽會が開かれた。之によつて最近の學園工藝教育の實際を見る事が出來た。工藝研究所から來年四月巴里の萬國藝術博覽會に出品するといふ絨氈及び布地十五種の意匠や製作其他最近の研究になる美と實用とを兼ねたあらゆる服飾日用雜貨玩具等約三千點、特に澤山の圖案作品は圖畫、手工教育上參考となるものが多かつた。尙二十一日午前十時から山本鼎、足立源一郎、今井和子、山室光子諸氏の工藝教育に關する講演會が開かれた。(圖畫と手工、十二月)

第一回大潮會展覽會

圖畫教員を出品者とする大東會展覽會が昨年開かれたが、同會は一回のみで解散となり、之に代つて大潮會が新に設立され、十一月二十五日より十二月六日迄東京府美術館に於て、文部省後援の下に第一回展覽會を開いた。同會役員は會長嘉納治五郎、理事阿部七五三吉、同多賀谷健吉、常務理事浦崎永錫、外に評議員七名を置く。(二一四頁、便覽八三頁參照)

古美術展覽會及展觀

一月 月

家康公遺品遺墨展覽會

一月七日—二十六日 名古屋・徳川美術館

家康公を中心とする遺品遺墨の展観で、尾張徳川家、前田家、松平家等からの協賛出品があり、家康の遺品、書簡等の外、秀忠、家光等の歴代將軍のものを陳列し、歴史的意義深きものであった。

土城里出土品展観

一月二十二日 東京帝大文學部事務室

東京帝國大學文學部考古學研究室では、昭和十年度朝鮮古蹟研究會主催の古蹟調査の中、特に同研究室關係者に依つて發掘された平壤府外土城里土城（樂浪郡衙址と謂はるる遺蹟）出土品の一部を陳列して展観した。

陳列品は、瓦當、瓦甃、瓦甃、紡錘車、五銖錢及錢範、銅鏃、銀環、鐵鏃、銅鼎、瓦鼎、銅勺等であつた。

美術懇話會展観

一月二十五日 美術研究所

美術懇話會例會として、足利より徳川初期にかけての畫蹟の稀な水墨畫家の作、即ち牧松、周耕を中心として蒔岡、等梅等のもの二十餘幅を諸家より借用展観し、相見香雨の講話を行った。

展 覧 目 録

國寶觀音像	五幅	牧松筆	建長寺藏
觀音圖	一幅	同	西脇健吉藏
觀音圖	一幅	同	岡崎正也藏
山水圖	一幅	同	大橋樹太郎藏
山水圖	一幅	同	三宅長策藏

東京帝室博物館繪畫陳列

一月中 同館

東京帝室博物館一月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

山水圖摹本	一枚	牧松筆	帝室博物館藏
山水圖	一幅	周耕筆	三宅長策藏
鍾馗圖	一幅	同	東京美術學校藏
山水圖	一幅	同	帝室博物館藏
鳥筆	一幅	同	相見香雨藏
寒山拾得圖	雙幅	同	相見香雨藏
鷺圖	一幅	同	相見香雨藏
職人畫圖	一幅	同	相見香雨藏
人物圖	一幅	同	相見香雨藏

奈良帝室博物館繪畫陳列

一月中 同館

奈良帝室博物館一月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

婦女圖	一幅	懷月堂	紙本著色	本館藏
婦女圖	一幅	懷月堂	同	同
婦女圖	一幅	懷月堂	同	同
婦女圖	一幅	懷月堂	同	同
婦女圖	一幅	懷月堂	同	同
婦女圖	一幅	懷月堂	同	同
婦女圖	一幅	懷月堂	同	同
婦女圖	一幅	懷月堂	同	同
江戶時代	一幅	懷月堂	同	同
近世職人畫畫卷（三卷ノ）	二卷	懷月堂	同	同

二月

古代木綿手染織繪展

二月六日—十日 銀座養生堂

京都中井敬之助商店主催

大塚珍巧藝畫古名畫幅展覽會

二月十日—十五日 日本橋・高島屋

大津繪展覽會

二月十三日—十七日 大阪・三越

大津市の主催で、滋賀縣下、京阪、東京及び名古屋等の諸家に藏される大津繪二百點許りが展觀され、併せて新興滋賀縣物産宣傳會が行はれた。

日本風景版畫發達展

二月二十二日—二十六日 銀座・長安畫房

東京帝室博物館繪畫陳列

二月中 同館

東京帝室博物館二月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

鎌倉—足利時代

御物 法隆寺藏納佛畫貼交屏風 三隻

鎌倉時代

一遍上人繪傳 清淨光寺模本 二卷 (十卷ノ内二三卷)

明時代

朝川積雨圖 雙幅 謝時臣筆 絹本墨畫 本館藏

樓閣山水圖 一幅 仇英筆 絹本著色 同

梅圖 一幅 沈小霞筆 絹本淡彩 同

清溪畫舫圖 一幅 吳合筆 同 絹本墨畫 同

梅圖 一幅 劉雪湖筆 同 絹本墨畫 同

松山鳥圖 一幅 陳子和筆 同 絹本著色 同

雪中山水圖 一幅 楊運筆 同 絹本墨畫 同

花鳥圖 一幅 呂紀筆 同 絹本著色 同

古美術展覽會及展觀

清時代

花鳥圖 一幅 沈南頓筆 絹本著色 本館藏

山水圖 一幅 王蒙筆 同

碧山春雲圖 一幅 葉雨筆 金箋淡彩 同

春江晴嵐圖 一幅 朱本筆 絹本淡彩 同

桃花書屋圖 一幅 陸遠筆 絹本著色 同

雪山行旅圖 一幅 錢球筆 紙本淡彩 同

山水圖 一幅 修世晉筆 絹本淡彩 同

松亭論古 一幅 錢叔寶筆 絹本淡彩 同

雨中山水圖 一幅 石漁繼筆 絹本墨畫 同

清時代

四季花鳥畫卷 一卷 王同筆 絹本著色 同

水仙圖 一卷 陳書筆 紙本墨畫 同

牧馬圖 一卷 郎世寧筆 紙本著色 同

明治時代

竹雀圖屏風 一雙 今尾景年筆 絹本墨畫 同

藍雁圖屏風 一雙 大庭學仙筆 紙本淡彩 同

奈良帝室博物館繪畫陳列

二月中 同館

奈良帝室博物館二月陳列替繪畫は左の通りであつた。

目録

多聞天像 (十二天) (國寶) 一幅 絹本著色 西大寺藏

龍樹菩薩像 (天台高僧像) (國寶) 一幅 絹本著色 一乘寺藏

聖德太子御像 (國寶) 一幅 絹本著色 鶴林寺藏

佛涅槃圖 (國寶) 一幅 同 新藥師寺藏

持鉢釋迦如來像 (國寶) 一幅 同 西教寺藏

五尊像 (國寶) 一幅 同 法隆寺藏

水天像 (國寶) 一幅 同 園城寺藏

增長天像 (四天王像ノ内) 二幅 同 淨信寺藏

小野篁像 一幅 同 弘仁寺藏

東征繪傳 (五卷ノ内) (國寶) 一卷 紙本著色 唐招提寺藏

融通念佛緣起繪卷 (二卷ノ内上ノ) (國寶) 一卷 紙本著色 室町時代 清涼寺藏

佛涅槃圖 (國寶)

阿彌陀如來廿五菩薩來迎圖 三幅 絹本著色 宗廟寺藏

不動明王圖 一幅 絹本著色 大藏寺藏

阿彌陀如來地獄十王圖 一幅 同 法隆寺藏

弘法大師行狀繪卷 (六卷ノ内第一) (國寶) 一卷 紙本著色 大師堂藏

文殊菩薩像 一幅 同 能滿院藏

二河白道曼荼羅圖 一幅 同 藥師寺藏

一行阿闍梨像 一幅 同 靈山寺藏

命運上人像 一幅 同 朝護孫子寺藏

名刀武器展覽會

三月一日—十五日 大阪城天守閣

大阪市主催、關西地方の社寺並に諸家秘藏の名刀二百五十餘口、武器百餘點が陳列された。その中國寶は左記十六點であつた。

太刀銘守家

太刀銘包水 一口 同 堺市開口神社藏

短刀銘吉光 一口 同 大阪府樂田神社藏

劔銘真守 一口 同 同

太刀銘國一 一口 同 同

刀無銘傳一文字作 一口 同 同

銘左近將監景依 一口 同 同

太刀銘光忠 一口 同 同

太刀銘川吉宗寄進 一口 同 同

太刀銘守家 一口 同 同

太刀銘元重 一口 同 同

太刀銘栗田口國安 一口 同 同

太刀銘光忠 一口 同 同

太刀銘大和則長 一口 同 同

同 同 兵庫縣瀬戸保太郎藏

古美術展覽會及展觀

服卷傳楠木氏一族所用 一領 大阪府金剛寺藏

時代製遺樂會

三月三日—十一日 日本橋・高島屋

朝鮮古代美術品展覽會並即賣會

三月十五日—十八日 下關・唐戸百貨店山口縣特產品陳列所

石川縣古美術品展覽會

三月十九日—二十一日 石川縣商品陳列所及圖書館

石川縣では縣下の隠れた古美術品の保存を期し、廣く所有者から出品を蒐めて文部省から調査員の派遣を求め、重要美術品等の候補を發見することとしたが、一般縣民の希望者多く、繪畫、彫刻、工藝、建造物、文書、刀劍其の他に互り數百點の出品があり、其の中より選擇して陳列公開したものであつた。

東京美術學校藏屏風繪特別展觀

三月二十四日—二十六日 同校陳列館及正木記念館

東京美術學校では例年の如く卒業式を機として卒業製作展覽會を開いたが、別に特別展觀として同校所藏の屏風を陳列公開した。尙此の機會に過般ボストン美術館から同校に寄贈され、校舎内庭に陳列された西洋古代より復興期に互る彫刻名作の石膏像を開期中一般に公開した。

目録

- 一、柳下鬼女圖 二曲屏風 半双 曾我蕭白筆
- 二、龍虎圖 六曲屏風 一雙 傳狩野永德筆
- 三、松二鷹圖 同 一雙 傳狩野永德筆
- 四、柳二鳳凰圖 同 一雙 狩野常信筆
- 五、林和靖放鶴圖 同 一雙 狩野探幽筆
- 六、游鯉圖 同 一雙ノ内半双 黒田稻草筆

七、三十六歌仙圖

八、琴棋書畫圖 四愛圖

參考品

一、屏風繪縮圖卷

東京帝室博物館繪畫陳列

三月中 同館

東京帝室博物館の三月陳列替繪畫は左の通りであつた。

平安時代

山水屏風 國寶

鎌倉時代

二河白道圖(國寶)

阿彌陀二十五菩薩來迎圖(國寶)

寶篋園曼荼羅圖

稚兒文殊像

疎草紙繪卷(國寶)

松崎天神緣起繪卷(國寶)

桃山時代

繪圖屏風

商山四皓圖屏風(國寶)

黃石公張良圖屏風

江戸時代

錢塘觀潮圖屏風

蘭亭曲水圖屏風

便面山水畫卷

醉蓮居墨竹詩卷

七言律詩

七言古詩

奈良帝室博物館繪畫陳列

三月中 同館

奈良帝室博物館三月陳列替繪畫は左の通りであつた。

二曲屏風 半双 渡邊始興筆

六曲屏風 一雙 狩野四家(守信、安信、尚信、益信)合作

六卷 狩野及住吉家傳來品

一隻 絹本着色 教王護國寺藏

二幅 同 本館藏

一幅 同 光明寺藏

一幅 同 興福院藏

一幅 同 本館藏

一卷 同 本館藏

一卷 同 曹源寺藏

六卷ノ内紙本著色 松崎神社藏

一隻 狩野永德筆 紙本着色 本館藏

一雙ノ内海北友松筆 同 妙心寺藏

一雙ノ内狩野山樂筆 金地著色 同

一雙ノ内池 大雅筆 紙本淡彩 本館藏

一雙 謝蕪村筆 紙本淡彩 同

一卷 池王湖筆 紙本着色 同

益田鶴樓外 紙本墨書 同

三十一家各書 同

細井廣澤書 同

頼山陽書 同

目録

梵天像(十二天)(國寶) 一幅 絹本着色 西大寺藏

觀世音勢至菩薩像(阿彌陀)(三尊ノ内) 一幅 絹本着色 法華寺藏

持轡童子像(阿彌陀)(同) 一幅 同

慧文禪師像(天台高僧像)(八幅ノ内)(同) 一幅 同

彌勒菩薩像(同) 一幅 同

山王本地佛像(同) 一幅 同

國魔王圖(同) 一幅 同

信貴山緣起繪卷(飛倉卷) 一卷 絹本着色 朝護孫子寺藏

般若多羅十六善神圖(同) 一面 板漆繪 七寺藏

天臺大師像(同) 一幅 絹本着色 延曆寺藏

五百羅漢圖(二十幅ノ内) 二幅 絹本着色 大德寺藏

周季常筆(同) 一幅 絹本着色 當麻寺藏

法然上人行狀繪卷(十二卷ノ内) 一卷 絹食時代 妙智院藏

夢窓國師像(同) 一幅 同 多田來迎寺藏

觀經曼荼羅圖 一幅 同 石山寺藏

佛涅槃圖(國寶) 一幅 同 寶山寺藏

愛染明王像(同) 一幅 絹本着色 石山寺藏

不動明王二童子像(同) 一幅 同 石山寺藏

十王圖(十幅ノ内、關魔王(平等王、都市王) 四幅 同 二尊院藏

弘法大師行狀繪卷(六卷ノ内) 一卷 紙本着色 教王護國寺藏

梵天像(十二天ノ内) 二幅 絹本着色 西明寺藏

地天像(十二天ノ内) 二幅 絹本着色 西明寺藏

觀世音菩薩像 二幅 絹本着色 南法華寺藏

地藏菩薩像 二幅 明時代

四月 月

嵯峨天皇御宸影奉展

四月三日—二十三日 上野・日本美術協會
嵯峨天皇御宸影が、二十餘年前畏多くも海外に搬出せ

られ、ベルリン博物館に奉藏せられてあつたものを、ヒツトラー總統は我が皇室に献上されることとなり、昨夏武者小路大使賜暇歸朝に際し、特に嚴肅な式典を設けて同大使に之を委託し、大使は歸朝後無事其の使命を果したが、日獨文化協會では今回特に此の御宸影の御貸下を願ひ併せて左記目錄の通り、近衛公爵家及青蓮院所藏嵯峨天皇御宸翰、竝に傳教、弘法兩大師の墨蹟を加へて奉展した。

峨嵋天皇御宸影

飛鳥文化展覽會

昭和九年倒壊した四天王寺五重塔再建奉賛の爲、大阪朝日新聞社の主催で開かれた。飛鳥時代の貴重な資料竝に聖德太子關係の御遺品等を蒐め、陳列點數百十二點の中國寶三十九點に及ぶ名品を蒐めた大規模な展覽會であつた。主要なるものは、飛鳥時代諸佛像、聖德太子信仰を徴すべき太子彫像、繪像、繪傳類及び太子關係の諸文獻竝に過般の風水害後發見された四天王寺出土飛鳥瓦、同五重塔基壇下出現千體佛其他同寺出品の數點等であつた。陳列品の中國寶佛像及び聖德太子信仰關係の美術品は左記の通りである。

觀世音菩薩半跏像

菩薩立像	金銅製一軀	法起寺藏
彌勒菩薩半跏像	同	野中寺藏
釋迦如來半跏像	同	觀心寺藏
觀世音菩薩立像	同	同
菩薩半跏像	同	神野寺藏
聖觀音立像	同	鶴林寺藏
聖觀音菩薩立像	同	一乘寺藏
十一面觀世音立像	同	大山寺藏
觀世音菩薩立像	同	同
如意輪觀音半跏像(傳百濟國傳來)	木造一軀	廣隆寺藏
菩薩立像	同	金龍寺藏
阿彌陀如來及比丘像	銅板押出一面 押出銅造一面	法隆寺藏
三尊佛	同	唐招提寺藏
阿彌陀如來像	磚製一面	同
太子關係		
五尊像(國寶)	一幅	絹本著色
聖德太子像	一幅	同
聖德太子勝覺經御讚讀圖	一幅	同
聖德太子御十六歲御影(國寶)	一幅	同
聖德太子像(水鏡御影)	一幅	同
聖德太子勝覺經御讚讀圖(國寶)	一幅	西來寺藏
聖德太子及道慈律師像	二幅	同
聖德太子像孝養御影(國寶)	一幅	額安寺藏
聖德太子像(孝養御影)	一幅	仁和寺藏
聖德太子像(國寶)	一幅	伯耆大谷光照藏
聖德太子像(同)	一幅	鶴林寺藏
聖德太子二王子御像	一幅	一乘寺藏
聖德太子繪傳(國寶)	八幅	觀音寺(滋賀)藏
聖德太子繪傳	八幅	橘寺藏
聖德太子繪傳	四幅	敏福寺藏
聖德太子二童子像	木造三軀	談山神社藏
聖德太子像十六歲御影(國寶)	木造一軀	勝軍寺藏
聖德太子像(攝政御影)	同	道明寺藏
聖德太子像(孝養御影)	同	達磨寺(奈良)藏
聖德太子像(南無太子御像)(同)	同	唐招提寺藏
聖德太子像(孝養御影)	同	善福寺(兵庫)藏
聖德太子像(孝養御影)	同	淨土寺(尾追)藏

桃山時代障屏畫展覽會

藏柳橋水車圖其の他があつた。

古美術展覽會及展觀

蘇薄圖	六曲屏一雙	紙本著色	慈照寺藏
柳牧牛圖	模二枚	傳野山墨	等持院藏
花車圖	六曲屏一雙	紙本著色	眞正極樂寺藏
菊花圖	模四枚	同	寶鏡寺藏
雜木林圖	六曲屏一雙	同	西川忠次郎藏
梅花雉子圖	八曲屏一雙	同	杉浦三郎兵衛藏
蘇鐵孔雀圖	模四枚	同	聖護院藏
風神雷神圖(國寶)	二曲屏一雙	傳野々村宗達筆 紙本著色	建仁寺藏
首引圖	二曲屏一雙	對青軒の印あり 紙本著色	入江幾治郎藏
草花圖	六曲屏一雙	紙本著色	飯田新七藏
牡丹梅花圖(國寶)	同	海北友松の落款 あり紙本著色	妙心寺藏
花鳥圖	模四枚	傳海北友松筆 紙本著色	竹田顯川藏
琴棋書畫圖	六曲屏一雙	傳海北友松筆 紙本著色	西村總左衛門藏
雲龍圖	模四枚	紙本水墨	麟祥院藏
高士隨馬圖	二曲屏一雙	紙本水墨	杉浦三郎兵衛藏
花鳥圖	六曲屏一雙	雲谷等筆の印 あり紙本著色	東福寺藏
山水人物圖	模四枚	紙本水墨	聚光院藏
經起持經圖	六曲屏一雙	雲谷等筆の落款 あり紙本著色	禪林寺藏
竹林七賢圖	同	長谷川等伯の落 款あり紙本著色	兩足院藏
眞山水圖	模八枚	傳長谷川等伯筆 紙本水墨	奥村儀道藏
松樹圖	模四枚	傳野山墨筆 紙本著色	妙蓮寺藏
竹鶴圖	六曲屏一雙	紙本水墨	入江幾治郎藏
竹虎圖	模二枚	傳野山墨筆 紙本著色	禪林寺藏
柳橋水車圖	六曲屏一雙	長谷川宗也の印 あり紙本著色	市田彌三郎藏
柏廬盛鬘圖(國寶)	同	曾我二直庵の落 款あり紙本水墨	大德寺藏

奈良時代出土品展覽會

四月十六日—三十日 東京帝室博物館

同館春季特別展覽會として開催された。從來各地に於て發掘され、分散して保存される奈良時代遺品の、御物

國寶はもとより重要なものの殆ど總てを網羅し、一堂に展觀して頗る偉觀を呈した。品目を大別すれば鎮境具、塔心礎發掘品、佛像、墳墓埋葬品、建築遺物、泉貨其の他雜品とすべく、陳列番號は二百六十を數へたが、點數にすれば夥しき數に上つた。

繪卷佛畫特別展覽會

四月十七日—三十日 奈良帝室博物館

奈良帝室博物館では春季特別展觀として、繪卷物及び佛畫を蒐めて、標題の展覽會を開いた。繪卷では左記目錄の通り六點の名品を陳列した外、今回初めて公開された粉河寺、御池坊、鹽川三家等に藏せらるる粉河寺緣起の模本が出品され、何れも徳川時代の寫しながら、原本の復原等に興味ある資料を提供した。

佛畫は國寶九點を蒐めたが、その中鎌倉家藏品は圓心筆樣を傳へるもので今年新指定の國寶であり、瑠璃寺、溫泉寺、國分寺等の藏品と共に目新しい作品であつた。展觀目錄に繪卷の詞書を收載したことも、研究者の便を計る親切な企てであつた。

目錄

佛涅槃圖(國寶)	一幅	絹本著色	藤原時代	金剛峯寺藏
不動尊像(同)	一幅	同	同	甚目寺藏
釋迦如來像(同)	一幅	同	同	神護寺藏
五大明王像(同)	一幅	同	同	鎌倉時代
不動明王二童子像(同)	一幅	同	同	同
十六善神像(同)	一幅	同	同	同
信貴山緣起(同)	三卷	紙本著色	藤原時代	朝護孫子寺藏
華嚴五十五所繪卷(同)	一卷	同	同	東大寺藏
地獄繪卷(同)	一卷	同	同	安住院藏
俄鬼雙紙(同)	一卷	同	同	曹源寺藏
粉河寺緣起繪卷(同)	一卷	同	同	粉河寺藏
粉河寺緣起模本	一卷	紙本著色	江戶時代	同

粉河寺緣起海岸院繪本	二冊	紙本著色	江戶時代	御池坊藏
粉河寺緣起繪本	二冊	同	同	鹽川正三藏
過去現在因果經	一卷	紙本著色	鎌倉時代	益田孝藏
兩界曼荼羅圖(國寶)	二幅	同	同	救王護國寺藏
安鎮曼荼羅圖(同)	一幅	同	同	國分寺藏
大日如來像(同)	一幅	同	同	金剛峯寺藏

美術懇話會展觀

四月二十五日 美術研究所

美術懇話會例會として、徳川時代の人形を帝室博物館及び西澤笛藏所藏品の中より借用展觀し、同人の講話を行った。

法華經曼荼羅圖展觀

四月二十五日—五月十日 高岡市商工會議所

高岡市主催で、富山縣婦負郡黑瀨村本法寺所藏の國寶法華經曼荼羅圖二十一幅を陳列展觀した。

奈良帝室博物館繪畫陳列

四月中 同館

奈良帝室博物館四月陳列替繪畫は左の通りであつた。

目錄

兩界曼荼羅圖(國寶)	二幅	絹本著色	藤原時代	救王護國寺藏
帝釋天像(十二天)(同)	一幅	絹本著色	同	西大寺藏
阿彌陀如來像(阿彌陀三尊)(同)	一幅	同	同	法華寺藏
慧思禪師像(天台高僧像)(同)	一幅	同	同	一乘寺藏
增長天像(同)	一幅	同	同	興福寺藏
信貴山緣起繪卷(三卷ノ内卷)(同)	一卷	紙本著色	藤原時代	朝護孫子寺藏
登勝曼荼羅圖(同)	一幅	同	同	園城寺藏
十界圖(五道ノ内相圖)(同)	一面	同	同	來迎寺藏
十六羅漢圖(十六國ノ内第一卷)(同)	二幅	同	同	寶嚴寺藏
東征繪傳(五卷ノ内第一卷)(同)	一卷	同	同	唐招提寺藏

佛涅槃圖 (國寶)	一幅	鎌倉時代	正曆寺藏
釋迦三尊十六善神像	一幅	同	下部神社藏
鑑真和尚像	一幅	室町時代	東大寺藏
普賢菩薩像	一幅	同	淨信寺藏
興正菩薩像	一幅	同	西大寺藏
聖德太子繪像 (八幅ノ内)	二幅	同	橘寺藏
十六羅漢圖 (八幅ノ内)	三幅	同	高臺寺藏
厨子繪屏 (日天、月天)	二面	鎌倉時代	唐招提寺藏
慈恩大師像	一幅	室町時代	藥師寺藏
大勝金剛像	一幅	同	能滿院藏
弘法大師行狀繪卷 (六卷ノ内第三)	一卷	室町時代	教王護國寺藏

五月

白鶴美術館第五回春季展覽會

五月一日——二十日 兵庫縣住吉村・同館

今春は同美術館設立者、理事長嘉納白鶴翁夫妻の金婚の賀に相當する爲、之に因み、本邦古金銀貨幣並に支那金銅器其の他雙對品を擇んで陳列された。又本年二月十一日紀元の佳節を卜し、翁自ら其の雙壽を記念せんが爲に時局柄一切の祝宴等を廢し、年來蒐集の古美術品の中刀劍類二九、勾玉類三、鏡鑑類六、銅器類二六、金屬器類一八、石屬品類二、陶磁器類五、漆器類九、繪畫類二總計百點を選んで同美術館に寄附し、義に設立に際し寄附した五百點と合せて、六百點の什寶を有することとなつた。今回の列品の一部はそれ等の中より擇ばれたものであつた。

陳列目録

第一室 支那金銅器類 (雙對品)
周銅饗餞紋方鼎

古美術展覽會及展觀

周銅饗餞紋方鼎	在銘	一對
漢銅素文鼎	有蓋	一個
秦銅金錯銀首環渦雲紋帶	共蓋付	一個
秦銅金錯銀變樣獸紋帶		一個
六朝大魏鎏金寶珠蓋大香爐		一對
六朝鎏金寶珠蓋香爐		一對
唐鎏金鳳紐獅子足香爐		一個
唐金銀平脫八華鏡		一對
唐金銀平脫飾鳳花陰鸞八華鏡		一面
同上附屬出土品		四箱
金地極彩色紫桐雙鳳凰圖 (狩野永徳筆)	六曲屏風	一雙
第二室 本邦古金銀貨幣類		
天正大判金其他	太閤大判金其他	四枚
天正大判金其他	慶長大判金其他	四枚
古慶長大判金其他	享保大判金	四枚
享保大判金其他	天正大判金	三枚
慶長大判金其他	享保大判金其他	三枚
慶長一兩小判金其他	寶永小判金其他一二分金等	十三枚
分朱金	天保五兩判金其他一二分朱金等	十枚
元文小判金其他一二分金等	天明鑄造新舊金貨類	十九枚
安政一兩小判金其他分朱金等	天正大々大判金	一枚
道打分朱金銀類	信玄大判金其他	二枚
織田信長軍用大判金	無文上字金	三枚
文祿甲子大黒福字大判金	甲子大黒其他圓金	七枚
厘金大小判金	善光寺小判金其他	六枚
奥州大判金其他	天正大小判金其他一二分金	八枚
菊小判金其他	豐公圓大判金其他	六枚
豐公軍用圓金其他	鎮宅大判金其他	八枚
稻荷小判金其他	土浦小判金其他	八枚
鶴千代小判金其他	ひも金其他	七枚
甲州判金及分朱金其他	福壽稻荷小判金其他九枚六個	三個
分銅金及丁銀	丁銀類	三個
眞文一兩小判金		
丁銀類		

唐宋繪畫展覽會

五月二日 京城帝大美術史研究室

京城帝國大學では創立十周年を記念して、祝賀式其の他諸種の催しが行はれたが、其の一として、美術美術史研究室で唐宋繪畫展覽會を開き、繪畫の外、唐碑の拓本、繪畫寫眞等多數を陳列した。主要なるものに、田中豐藏藏燉煌出土唐寫大般涅槃經殘片(紙背に佛圖像あり) 鮎貝房之進藏傳釋巨然筆山水圖卷一卷、田中豐藏藏傳馬遠筆洞山渡水圖一幅等があつた。

史學會大會展觀

五月十日 小石川區原町・酒井伯傳家

史學會では五月九日及十日の兩日、同會第三十七回大會を開催し、その第二日に酒井忠正伯傳家の什寶展觀を行つた。點數二十二、其の中美術關係のものは左の如くであつた。

草花圖	六曲屏一雙	宗達筆(無款)
三十六歌仙色紙屏風	六曲小屏一雙ノ内	抱一上人筆
福祿壽圖	三幅對	雪村筆
橘直幹申文繪詞(國寶)	一卷	
花鳥圖(重要美術品)	六曲一雙	葛愛筆
布引之瀧圖	對幅	酒井忠以筆
有馬溫泉圖	一幅	酒井忠以筆
道成寺繪卷	一卷	
東海道繪圖	一卷	
西海道繪圖	一卷	
太刀銘信房(重要美術品)	一口	
太刀銘長光	一口	

時代錦織、人形、蒔繪、肉筆浮世繪展

五月十二日——十四日 大阪美術俱樂部

山中商會主催。

「桃山、徳川時代各期の能衣裳、小袖や、天半以下各時代の古裂約二百五十點、蒔繪は棚、卓、小道具類合せて百五十點、嵯峨人形、木彫人形、木目込人形、からくり人形、伊豆倉人形などの人形類四百七十七點、時代屏風、風爐先屏風五十點、浮世繪は初期より末期に至る各派の肉筆ものを集めて百餘點あり、内容頗る豊富である。」(大朝五・一二)

高野山靈寶館特別展觀

五月十五日—二十一日 同館

高野山靈寶館では例年の如く特別展觀を催し、同山に於ける最も優れた什寶を陳列した。

出陳目錄(國寶のみ抄録)

佛畫

無量力吼菩薩

十力吼菩薩

清盛血曼荼羅 二幅

八字文殊菩薩

丹生明神 高野山地主ノ神

狩場明神 高野明神ノ化現

紅玻璃色阿彌陀如來

阿彌陀如來三尊

普賢延命菩薩

地藏菩薩

不動明王及三童子

外二

狛犬 四對ノ内二對

經卷古書繪卷等

弘法大師行狀繪卷(六卷ノ内二卷)

花園天皇宣旨

後白河院々宣

五辻齋院ノ寄文

前齋院廳下文

刀工相州進藤五一流系圖

武田信玄書狀

高野山古圖繪卷

羽柴秀吉朱印狀

豐臣秀次禮狀

聖賢指歸

後村上天皇勅書

法華經

續寶副書

佛像佛器及諸品

渡金寶篋印塔

銅板鑄出三尊佛像

成身會八葉春日厨子

胎藏界板曼荼羅

阿彌陀三尊金銅像

兩界曼荼羅

五銖鈴 二個

獨鈷鈴

阿闍如來

水神金像

金銅佛師鉢

佛像

如意輪觀音

阿陀彌三尊

烏俱婆伽童子

清淨比丘

惠喜童子

惠光童子

矜羯羅童子

制多伽童子

阿耨達童子

指德童子

十一面千手觀音

不動明王

大日如來

藥師如來

藥師如來

龍猛菩薩

毘沙門天王

金剛峯寺藏

同

同

弘法大師筆

同

弘法大師筆

同

同

金剛峯寺藏

同

同

同

不動院藏

同

明王院藏

同

弘法大師請來

同

弘法大師請來

同

親王院藏

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

鎌倉時代

同

同

同

同

同

毘沙門天王

赤不動尊

增長天王

毘沙門天

愛染明王

阿彌陀如來

阿彌陀如來

持國天王

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

鎌倉時代

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

正智院藏

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

法然上人繪傳特別展觀

五月二十三日、二十四日 美術研究所

美術懇話會例會として、五月二十三日左記の通り東京所在の法然上人關係の繪卷四點(何れも國寶)を蒐めて展觀し、田中一松の講話を行つたが、美術研究所では翌日特別展觀として之を公開し、一般研究者の展觀に供した。法然上人繪傳の大規模な展觀は曾て昭和七年四月恩賜京都博物館に依つて催されたが、今次陳列された前川家本は其の後の發見にかゝるもの、此の一巻は所謂琳阿本の第八卷に當り、圓家の第七卷に續く一本中のもので、同時に比較し得たことは欣ばしかつた。陳列品目は左の通りである。

法然上人繪傳 一卷 紙本著色 男爵園 伊能藏
法然上人繪傳 一卷 同 前川道平藏

法然上人傳 二卷 紙本著色 增上寺藏
拾遺古德傳 一卷 同 西脇濟三郎藏

考古學會總會展覽觀

五月三十日、三十一日 品川・松田福一郎邸

考古學會では五月三十日、三十一日の兩日に互り同會總會を開催したが、其の第二日品川區上大崎松田福一郎別邸で同家所藏品の展覧を行つた。

「第一室の洋間には主として、石造、木造、金銅製の佛像類を陳べ、中には坐高一尺七寸前後の木彫延喜式神像（五軀のうち男神像、女神像、僧形八幡像三軀）、藤原、弘仁期の木彫觀音立像（三尺余）、天部像（四尺余）、或は太和二年造像銘ある金銅釋迦坐像等があり、其他のものには六朝畫象石、當麻曼荼羅、彩文土器（甘肅出土）、唐三彩壺等が注目され、第二室には住吉具慶の五大尊下圖、職人畫圖等の畫幅を主とし第三室には、永保三年九月二十二日供養在銘の經簡を始め至元八年五月造銘の雲版錫杖の如き佛具類の外三昧耶印種子曼荼羅、紫綬種子曼荼羅或は寛弘より壽永に至る間の東大寺文書の一部や數種の經卷類又は鎌倉初期の十六羅漢圖、舞樂面等とりとりに陳べられて、いづれも記念銘あるものを目的に蒐集されてゐるの殊に來觀者の注目を惹くものが多かつた様である。」（考古學雜誌二六ノ六抄録）

東京帝室博物館繪畫陳列

五月中 同館

東京帝室博物館五月陳列替繪畫は左の通りであつた。

目録

平安時代

繪取太子繪傳屏風（御物） 五隻ノ内 二曲屏風 本館藏
涅槃圖（國寶） 一幅 絹本著色 達磨寺藏
黃不動尊像（國寶） 一幅 同 曼珠院藏
寶樹園曼荼羅圖（國寶） 一幅 同 寶菩提院藏
地藏菩薩像（國寶） 一幅 同 知恩院藏
桃山時代
大江山繪卷（三卷ノ内） 傳狩野孝信筆 紙本著色 本館藏
詞傳流君筆

古美術展覽會及展觀

牧馬圖屏風 一双 傳長谷川信春筆 紙本著色 本館藏
大原御幸圖屏風 一双 長谷川久義筆 紙本金地 六曲屏風 同

江戸時代

花鳥圖押繪屏風 一双 岡本秋暉筆 紙本著色 同
花鳥圖小屏風 一隻 岡本秋暉筆 紙本著色 同
洛中洛外圖 一卷 傳住吉具慶筆 六曲屏風 同
風俗畫卷 一卷 荻川師宣筆 同
明治時代
秋景山水圖 一幅 橋本雅邦筆 絹本淡彩 同
壽老圖 一幅 橋本雅邦筆 紙本墨畫 大島文義藏
山水圖 一幅 川端玉章筆 同 本館藏
老樹水禽圖 一幅 川端玉章筆 同
盤猿圖 一幅 今尾景年筆 絹本著色 同
五浦の月 一幅 横山大觀筆 紙本墨畫 同

奈良帝室博物館繪畫陳列

五月中 同館

奈良帝室博物館五月陳列替繪畫は左の通りであつた。

目録

地天像（十二天）（國寶） 一幅 紙本著色 西大寺藏
阿彌陀來迎圖（國寶） 一幅 絹本著色 長谷寺藏
圓座天曼荼羅圖（國寶） 一幅 絹本著色 圓城寺藏
諸神像（國寶）（寄託二面ノ内） 一面 法眼寺藏 一面 藥師寺藏
勢至菩薩像（國寶） 一幅 絹本著色 長命寺藏
當麻曼荼羅圖 一幅 同 曼珠院藏
扇面法華經（國寶） 二面 紙本著色 四天王寺藏
醫王曼荼羅圖 一幅 絹本著色 藥師寺藏
普賢菩薩像 一幅 同 法起寺藏
十六羅漢圖（國寶） 十六幅ノ内 第三卷者（二幅同） 寶藏寺藏

六月 月

時代屏風展覽會

六月二日—六日 上野・日本美術協會

山中商會主催で、多年蒐集した時代屏風約二百五十點を陳列した。土佐、狩野、雲谷、圓山、浮世繪、琳派の諸派に互り、主として祝祭用の調度に作られた「きれい物」のみで、繪畫の質の點で玉石混淆を免れぬことは固より當然であるが、從來例を見ぬ大規模の蒐集であり華麗を極めた大展覧であつた。

大塚移巧藝畫展覽會

六月九日—十二日 京都・高島屋

朝鮮古陶器陳列會

六月九日—十二日 大阪・三越

富岡文庫舊本展覽會

六月十二日—十四日 大阪府立中之島圖書館

富岡鐵齋、謙藏父子遺藏の圖書數萬冊の中から稀觀書のみを選び、版本、鈔本、畫譜類に分類して九十點が展觀された。

上代佛教版畫展觀

六月十三日 美術研究所

美術懇話會例會として平塚運一蒐集の古版畫中、奈良時代より江戸初期に互る佛教關係の版畫約百點を借用展觀し、併せて同人の講話を行つた。

朝鮮出土古陶展觀

六月二十六日—二十八日 青山高樹町・春海

新に朝鮮の鴛龍山、康津、長興、寶城等各地で掘出した井戸、瀝麥、井戸脇、粉引、三島、熊川、刷毛目等の高麗時代の陶器を蒐めて展觀した。

東京帝室博物館繪畫陳列

六月中 同館

東京帝室博物館六月陳列替繪畫は左の通りであつた。

目錄

聖德太子繪傳(御物)	四幅	絹本着色	鎌倉時代	本館藏
十王圖	十幅	絹本着色	鎌倉時代	同
春日權現驗記(摹本)	(廿卷) 原本高階隆義筆	紙本着色	鎌倉時代	同
花鳥人物畫帖	一帖 傳野元信筆	紙本着色	室町時代	同
花鳥圖屏風	一隻 曾我直庵筆	紙本着色	桃山時代	同
花鳥圖屏風	一隻 曾我直庵筆	紙本着色	桃山時代	同
獅子圖	一幅 周全筆	紙本着色	江戶時代	同
秘陵春早圖	一幅 謝時臣筆	絹本墨畫	明時代	同
瀬川積雨圖	一幅 謝時臣筆	絹本墨畫	明時代	同
松林山水圖	一幅 姚綬筆	絹本淡彩	明時代	同

奈良帝室博物館繪畫陳列

六月中 同館

奈良帝室博物館六月陳列替繪畫は左の通りであつた。

目錄

花鳥圖	一幅 舜 筆	絹本着色	明時代	本館藏
花鳥圖	一幅 呂 紀 筆	紙本着色	明時代	同
花下鴛鴦圖	一幅	絹本着色	明時代	同
秋山行旅圖卷	一卷 蕭尺木筆	紙本淡彩	清時代	同
羅漢畫帖	一帖 藤本鐵石筆	紙本淡彩	江戶時代	同
野外遊行圖屏風	一雙 與謝蕤村筆	絹本着色	大島文義藏	
扇面梅園圖	雙幅 池大雅筆	紙本墨畫	本館藏	
墨竹圖	一幅 池大雅筆	紙本墨畫	江戶時代	同
梅圖	一幅 田能村竹田筆	絹本墨畫	同	同
日天像(十二天)(國寶)	一幅 真觀時代	西大寺藏		
善無畏三藏像(天台高僧傳)(國寶)	一幅 藤原時代	一乘寺藏		
聖德太子勝鬘經御讚讚圖	一面 鎌倉時代	法隆寺藏		
淨影大師像	一幅 同	東大寺藏		
聖衆來迎圖(國寶)	一幅 同	雲邊寺藏		
佛涅槃圖	一幅 同	西大寺藏		
法然上人行狀繪卷(國寶)(十二卷中)	一卷 鎌倉時代	當麻寺藏		
聖德太子二王子隨侍像(國寶)	一幅 觀音寺藏			
十羅曼荼羅圖	一幅 寶山寺藏			
如意輪觀音菩薩像	一面 同	松尾寺藏		
來迎阿彌陀如來像	一幅 同	寶嚴寺藏		
淨土曼荼羅圖	一幅 同	能滿院藏		
法華曼荼羅圖	一幅 同	下部神社藏		
十二天圖屏風	一隻 絹本着色	長谷寺藏		
聖德太子繪傳	三幅 同	談山神社藏		
十六羅漢像(國寶)(第八、九、十卷)	四面 同	唐招提寺藏		

七月

ボストン日本古美術展出品展觀

七月八日 丸之内・國際文化振興會

今秋、ボストン美術館で開催される日本古美術展覽會出品の美術品は七月十四日發送されることとなつたが、之に先だち、國際文化振興會では關係者等に内覽を乞ふ爲、八日午後同會内で特別展觀を行つた。(二七八頁參照)

東京帝室博物館繪畫陳列

七月中 同館

東京帝室博物館の七月陳列の繪畫は、左の通りであつた。

目錄

鎌倉時代	一幅 絹本着色	常念寺藏		
善賢十羅刹女圖(國寶)	二幅 同	本館藏		
十六善神圖	一幅 同	同		
十一佛圖	一幅 同	同		
室町時代	一幅 絹本着色	本館藏		
日吉曼荼羅圖	一幅 同	同		
辨天十五童子圖	一幅 同	同		
法相曼荼羅圖	一幅 同	同		
兩界種子曼荼羅圖	二幅 同	同		
春日曼荼羅圖	一幅 同	同		
春日權現驗記(摹本廿卷ノ内)	二卷(原本紙本着色)	鎌倉時代		

桃山時代

山水圖屏風 一隻 海北友松筆 紙本墨畫 本館藏
仙人圖 十幅ノ内 同 紙本墨畫 神谷傳兵衛藏

江戸時代

樟子、牧童、猿猴、 四幅 狩野探幽筆 紙本淡彩 本館藏
竹雀圖 三幅 同 紙本著色 同
果實圖 三幅 同 紙本著色 同
富士三保、清見寺圖 三幅 狩野常信筆 紙本淡彩 同
花鳥圖 二幅 狩野雪信筆 紙本著色 同
縮圖卷 三卷 狩野探幽筆 紙本墨畫 同
耶馬溪圖卷 一卷 杜秋筆 紙本著色 同
墨畫鳥圖卷 一卷 山本梅逸筆 紙本墨畫 同
芭蕉圖屏風 一雙 木下逸雲筆 金地墨畫 同
百花圖芳圖 一幅 原丹橋筆 紙本著色 同
雜花果圖 一幅 椿山筆 紙本著色 同

奈良帝室博物館繪畫陳列

七月 同館

奈良帝室博物館七月陳列替繪畫は左の通りであつた。

目錄

羅刹天像(十二天) 國寶 一幅 絹本著色 西大寺藏
慈恩大師像(國寶) 一幅 絹本著色 興福寺藏
釋迦三尊像(國寶) 三幅 同 總持寺藏
淨土曼荼羅圖(國寶) 一幅 同 長谷寺藏
不動明王像(國寶) 一幅 同 園城寺藏
軍奈利明王像(四大尊) 國寶 二幅 同 觀音寺藏
降三世明王像(四尊) 國寶 二幅 同 觀音寺藏
局面法華經(十二面) 國寶 二幅 藤原著色 四天王寺藏
愛染明王像 一幅 絹本著色 金剛寺藏
十界圖(殺父因圖) 國寶 一面 同 來迎寺藏
閻魔天曼荼羅圖 一幅 同 法隆寺藏
繪 一面 木板著色 唐招提寺藏
阿彌陀如來像 一幅 絹本著色 極樂寺藏

古美術展覽會及展觀

八月 月

比叡山史蹟觀光展覽會

八月一日—十一日 日本橋・三越

傳教大師奉讃會の主催に依り、叡山開創一千百五十年を記念して開催された。其の名の示す如く美術品を中心とするものではないが、尙、叡山を初め天台宗關係の諸寺院から什寶の繪畫筆蹟などが出陳され、夏枯れ時の斯界に一味の清涼劑を投じたものとして喜ばれた。禪林寺藏山越阿彌陀圖、曼珠院藏雪舟筆夏冬山水圖双幅、同院藏猿猴圖等の著名なる國寶畫幅の外、生源寺藏山靈驗記一卷があつた。之は同時に陳列された蓮華寺の國寶山王靈驗記と繪は恐らく同筆で、一聯の作の何時か散逸して所藏を異にしたものかと思はれる。其の他坂本來迎寺藏國寶阿彌陀二十五菩薩來迎圖、圓乘院藏慈惠大師像等を見るべく、又吉川靈華筆傳教大師像を中心とする當代八家の聯作大師傳の八幅も亦記録すべきものであらう。

高野山靈寶館特別展觀

八月十五日—二十一日 同館

高野山靈寶館では例年の如く特別展觀を催し、名品を蒐めて陳列した。

出陳目錄(國寶のみ抄録)

佛畫

阿彌陀廿五菩薩來迎圖 惠心僧都筆 有志八幡講藏
清盛血曼荼羅 二幅 平清盛寄附 金剛峯寺藏
大日如來 同 同 同
丹生明神 高野山地主ノ神 同 同 同
狩場明神 高野明神ノ化現 同 同 同
愛染明王 傳定智筆 清淨心院藏
淨土曼荼羅 傳惠心僧都筆 櫻池院藏
善女龍王 文殊菩薩 寶壽院藏
八宗論大日如來 花鳥屏風 直庵筆 北室院藏
五大菩薩 外二 丹生都比賣神社寄托
經卷古書繪卷 弘法大師行狀繪卷(六卷ノ) 詞書近衛關白 地蔵院藏
護良親王御立願文(内二卷) 長慶天皇宸翰御立願文 金剛峯寺藏
後村上天皇寶珠御寄進狀 織田信長朱印狀 同 同 同
鳥羽院々宣並東寺長者御教書案 高野山大湯屋釜鑄目録 同 同 同
阿氏河庄上村百姓等言上狀 尼金收起譜文 同 同 同
百姓免家役等免除狀 即身成佛義 弘法大師筆 寶壽院藏
文館詞林 佛像佛器及諸品

古美術展覽會及展觀

一六六

楠木九尊佛

金剛峯寺藏

金銅寶篋印塔

同

釋迦如來諸尊像

同

阿彌陀三尊金銅像

不動院藏

五銚杵

金剛峯寺藏

三銚杵

同

獨銚杵

同

阿闍如來

親王院藏

水神金像

金剛峯寺藏

金銅佛餉鉢

同

佛像

同

東京帝室博物館繪畫陳列

八月 同館

東京帝室博物館八月陳列替繪畫は左の通り。

目録

十六羅漢圖(國寶)(十六幅)

絹本着色 鎌倉時代 碑林寺藏

眞言八祖像

八幅 替筆一山其他各筆 同 本館藏

信貴山緣起

三卷ノ内 原本絹本着色 平安時代 同

墨畫山水圖屏風

一雙 内 秀峰筆 紙本水墨 室町時代 同

夏冬山水圖屏風

一雙 傳雲谷等筆 紙本淡彩 桃山時代 同

扇面散屏風

一雙 (狩野派) 紙本淡彩 江戶時代 同

扇面散屏風

一雙 酒井翁筆 金地著色 二曲屏風 江戶時代 同

扇面雜畫

(六拾枚) 酒井抱一筆 紙本著色 江戶時代 同

四條派畫卷

一巻 義董、素納、岸駒、各筆 絹本淡彩 江戶時代 同

波濤圖(國寶)

(廿八幅) 圓山應舉筆 紙本淡彩 江戶時代 金剛寺藏

奈良帝室博物館繪畫陳列

八月 同館

奈良帝室博物館八月の繪畫陳列は左の通りであつた。

目録

炎魔天像(十二天)(國寶)

一 絹本着色 貞觀時代 西大寺藏

鎌倉時代

文殊菩薩像(國寶)

一 絹本着色 西大寺藏

蓮花水鳥圖(國寶)

一 絹本着色 法隆寺藏

引接曼荼羅圖

一 絹本着色 金剛寺藏

千手觀世音曼荼羅圖

一 絹本着色 千光寺藏

淨土曼荼羅圖(國寶)

一 絹本着色 常樂寺藏

法念上人行狀繪卷(國寶)(十二卷)(第七卷)

一 絹本着色 當麻寺藏

十一面觀世音菩薩像

一 絹本着色 金心寺藏

紅玻璃阿彌陀如來像

一 絹本着色 松尾寺藏

不動明王二童子隨侍像

一 絹本着色 當麻寺藏

藤原鎌足像

一 絹本着色 談山神社藏

愛染明王像

一 絹本着色 松尾寺藏

不動明王像

一 絹本着色 東大寺藏

普賢菩薩十羅刹女圖

一 絹本着色 成菩提院藏

室町時代

釋迦如來十六羅漢像

三 絹本着色 傳香寺藏

藥師如來像

一 絹本着色 長谷寺藏

慈覺像

一 絹本着色 法華寺藏

十一面觀世音菩薩像

一 絹本着色 長谷寺藏

六字經觀世音菩薩像

一 絹本着色 法隆寺藏

弘法大師行狀繪卷(國寶)(六卷)(第六卷)

一 絹本着色 教王護國寺藏

地藏菩薩像

一 絹本着色 金剛寺藏

文殊菩薩像

一 絹本着色 法華寺藏

十六羅漢圖(十面ノ内、因幡院)(國寶)

二 絹本着色 唐招提寺藏

大佛緣起繪卷(三卷ノ内、中)

一 絹本着色 東大寺藏

南蠻文様蒔繪品特別陳列

九月一日—十月九日 東京帝室博物館

同館では南蠻文様の蒔繪螺鈿の漆器三十點を陳列して特別展觀を催した。甚だ珍奇なる資料であつて今日世に知られるものは極めて少數であり、殊に南蠻人物や明瞭なる耶蘇教器物は、曉天の星にも比すべき程であると云はれる。此の蒐集陳列には同館當事者が數年の努力を費したとこのことで、研究者の見逃し得ざる貴重な展觀であつた。

陳列目録

南蠻人物の部

南蠻人蒔繪曲桌

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

南蠻人蒔繪鞍

黒漆螺鈿手箱
南翠螺鈿螺鈿提箱
松竹梅螺鈿文庫
南翠大漆繪色紙箱
ウンスン加留多蔭繪文箱
ウンスン加留多蔭繪文箱
ウンスン加留多蔭繪文箱
ウンスン加留多蔭繪文箱
ウンスン加留多蔭繪文箱
前田 青 郎 藏

増上寺寶物特別展覧

九月三日—十六日 芝・増上寺
増上寺では數多の寺寶を蟲干の爲陳列し、一般の參觀に供した。

大阪市立美術館開館記念名寶展覧會

九月十一日—三十日 同美術館

大阪市立美術館は、九月十一日より開館することとなつたが（一七九頁参照）、開館記念として、常設陳列の外御貸下の御物を初め、阪神地方諸家秘藏の名寶出陳を乞うて特別展覧會を開催した。繪畫百七十餘點、西洋畫三十餘點、西洋彫刻九點、陶瓷器五十餘點の大展覧であつた。

「繪畫の多數は我國近代諸家の蹟で、蓋し大阪の地に最も馴染深きものが中心とされた爲であらう。品目甚だ多數の爲に數度の陳列替が行はれたと云ふが、偶々管見に上つたものとして之等のうち御物應舉筆群獸圖屏風以下、中村準策氏藏竹田筆亦復一樂帖（國寶）、水原金兵衛氏藏同筆高瀬川舟遊圖（重要美術品）、中村作次郎氏藏半江筆中竹石蘭左右山水圖（同前）、瀧池善右衛門氏藏中應舉左右源琦筆美人圖等の著名なる作品に始つて特に圓山四條の諸家の未だ公開されなかつた諸作も多く、また目錄外のものにも開口神社藏光起筆大寺緣起（國寶）等の名品があり、やゝ湧つては池戸宗三郎氏藏稚兒觀音緣起（國寶）、野村徳七氏藏雪村筆風雨歸帆圖（重要美術品）があるが、就中その名を聞くこと久しかつた男爵住友家藏默庵筆布袋圖に親しく接し得た事は最も多幸であつた。

古美術展覧會及展覧

その他にも小西新右衛門氏藏北畠顯家筆篝火御役所御免願文（重要美術品）、水落庄兵衛氏藏佛伽經（國寶）、武居巧氏藏米雷筆元日帖（同上）等の出陳がある。（美術研究十月）
西洋畫及び彫刻は十九世紀以降現代のフランスに於ける名家の作を、夫々代表するとは言ひ難くも、油、水彩、素描、青銅、大理石等に示して、我が國では稀なる鑑賞の好機會を與へたものであり、陶器では宋、明、高麗、及び古九谷等の佳品が主に蒐められてゐた。
尙常設陳列の部では社寺及び個人等の寄託又は出陳を陳べ、彫刻三十三點の外、金工には古銅器、鏡鑑、懸佛、佛具の類があり、其の他陶瓷器、及び考古品の各部に分けられてゐて、繪畫のみは名寶展覧會終了後に陳列されることになつた。

朝鮮古墳壁畫模寫展覧

九月十五日—十九日 東京美術學校陳列館

同校講師小場恒吉が朝鮮總督府の依頼に依り、多年の辛苦に依つて、製作中であつた平安南道遇賢里大墓玄室壁畫の模寫が完成したので、其の展覧が行はれた。同壁畫は四神を描いた四面と唐草文の天井、蓮、忍冬文の持送り等より成り、高句麗時代の貴重な遺物である。尙平壤附近長水院所在の古墳壁畫の一部分の模寫も、併せ陳列された。

大阪府立博物館所藏品展覧

九月十五日—二十三日 大阪府立産業會館

大阪府立博物館所藏品の繪畫、彫刻、古錢等の蒐集が陳列公開された。

大塚珍巧藝畫古名畫展覧

九月二十四日—三十日 日本橋・高島屋

新井謹也蒐集北鮮古陶器展覧

九月二十五日、二十六日 京都總手三條下ル養福寺

装剣具金工品展覧

九月二十六日 美術研究所

美術懇話會例會として、故加納夏雄舊藏現東京美術學校所藏の、足利以降明治に亙る目貫、小柄、縁頭、笄等の装剣具約百點を展覧し、併せて同校教授海野清の講話を行つた。

時代衣裳と時代裂展覧會

九月二十六日—三十日 大阪長堀・高島屋

東京帝室博物館繪畫陳列

九月中 同館

東京帝室博物館九月陳列替繪畫は左の通りであつた。

目録

維摩居士像（國寶）	一幅	絹本墨畫	東 福 寺 藏
山水圖（國寶）	二幅	同	高 桐 院 藏
千手觀音像（國寶）	一幅	絹本著色	永 保 寺 藏
牡丹圖（國寶）	二幅	絹本著色	高 桐 院 藏
蓮華圖（國寶）	二幅	傳錢舜舉筆	本 法 寺 藏
天狗草紙畫卷（延暦卷）（二卷）	二幅	傳錢舜舉筆	本 館 藏
雪霽歸帆圖	二幅	周 耕 筆	本 館 藏
破墨山水圖	一幅	周 元 筆	清野暢一郎藏
白衣觀音圖	一幅	同	本 館 藏
文殊圖	一幅	慧 庵 筆	同
破墨山水圖	一幅	雪 村 筆	紙本墨畫 神谷傳兵衛藏
觀音猿蓑圖	一幅	雪 溪 筆	同
山水圖	一幅	興 悅 筆	同
出山釋迦圖	一幅	傳一之筆	同
山水圖	一幅	岳 翁 筆	紙本淡彩 室町時代 同

古美術展覽會及展觀

栗鼠圖	一幅	宗休筆	紙本墨畫	本館藏
眞山水圖屏風	一雙	狩野山樂筆	紙本墨畫	同
瀟湘八景圖屏風	一雙	狩野尚信筆	紙本墨畫	同
扇面各種	百本ノ内	同	同	同
清水寺圖	土佐千代筆	野々宮圖	土佐光元筆	同
羅生門圖	海北友雪筆	金魚圖	長谷川雪且筆	同
菊圖	伊藤若冲筆	雀圖	長澤蘆雪筆	同
糸車圖	立原春所筆	水馬圖	谷文一筆	同
林和塔圖	酒井抱一筆	武藏野月圖	酒井抱一筆	同
草花圖	蓮英月船筆	朝顔夕顔圖	上條交山筆	同
美人圖	高嵩之筆	會我圖	鳥居清長筆	同
九紋記	葛飾北齋筆	遊女圖	歌川國貞筆	同
乘鶴美人圖	歌川國芳筆	俳優圖	歌川國貞筆	同
萬歲圖	一幅	官川長春筆	絹本著色	本館藏
遊女聞香圖	一幅	同	同	同
婦女圖	一幅	同	同	同
伊勢圖	一幅	同	同	同
婦女圖	一幅	同	同	同
柳下美人圖	一幅	官川一筆	同	同
見立文殊圖	一幅	同	同	同
婦女圖	一幅	宮川春水筆	同	同
美人彈三味線圖	一幅	同	同	同

奈良帝國博物館繪畫陳列

九月 同館

奈良帝國博物館九月陳列替繪畫は左の通りであつた。

火天像(十二天)	國寶	一幅	絹本著色	西大寺藏
持國天像(國寶)	國寶	一幅	絹本著色	興福寺藏
淨土曼荼羅圖(國寶)	國寶	一幅	絹本著色	極樂寺藏
當麻寺繪緣起	國寶	二幅	同	當麻寺藏

藤原武智曆像	一幅	絹本著色	榮山寺藏
藥師三尊像(國寶)	一面	同	同
扇面法華經(國寶)	二面	同	同
延命地藏像	一面	同	同
稚兒文殊菩薩像	一幅	同	同
興正菩薩像	一幅	同	同
法然上人入行狀繪卷(十二卷)	一卷	同	同
不動明王像	一面	同	同
十六羅漢像(第九第十尊者)	二幅	同	同
觀無量壽經變奈羅圖	三幅	同	同
大威德明王像(四大尊)	二幅	同	同
金剛夜叉明王像(ノ内)	一幅	同	同
多聞天像	一幅	同	同
七曜曼荼羅圖	一幅	同	同
釋迦如來十六善神圖	一幅	同	同
文殊菩薩騎獅子像	一幅	同	同
觀經曼荼羅圖	一幅	同	同
忍性菩薩像	一幅	同	同
弘法大師行狀繪卷(十二卷)	一卷	同	同
如來荒神像	一幅	同	同
小野篁像	二面	同	同
滿上人像	一幅	同	同
執金剛神像	一幅	同	同

十月

關東局施政三十周年特別展覽會

十月一日—七日 旅順博物館

西域本邦繪畫壁畫(模寫)展並に大山元帥遺品展の二部に分けて開かれた。前者は大英博物館、ルーブル、ギメ、フエルケンデ等歐洲諸博物館所藏の西域佛畫類の模本三十四點及び鳳凰堂、法界寺の壁畫二點、總て京都帝國大學所藏のものを陳列した。

茶わん俱樂部展觀

十月四日 築地・八百善

仁清作品及窯址發掘品を陳列し、併せて蟠川第一の仁清研究の發表等があつた。

開城博物館古書畫特別展覽會

十月四日—八日 開城府立博物館

大乗寺寶物展覽會

十月六日—十二日 金澤・大乗寺

曹洞宗の名刹金澤市の大乗寺では、三百點を超える什寶を公開して展覽會を開いた。

仙臺和尚百年記念展觀

十月十一日、十二日 日本橋・東美俱樂部

仙臺和尚入寂後百年に當るのでこれを記念して、仙臺作品の蒐集家久留米市の岡來藏が主催し、本山幽堂堂及び石井三柳堂の後援で開いた。陳列品百點。

江戸時代衣裳展觀

十月十五日—二十五日 恩賜京都博物館

京都野村正治郎所藏の服飾物の中、江戸時代の武家婦人衣裝の優秀なもの百點を選んで陳列展觀した。江戸時代中期及び末期に屬するもので、當代の公家、町家等の女衣裝に對して別種の特色を有するもの。尙、右の外同時代の婦人髪飾具、袋物、化粧具等が併せ展觀された。

南蠻屏風展覽會

十月十五日—十一月十四日 大阪城天守閣

大阪市主催で開かれた。初期洋風畫、古地圖及び南蠻好みの器財等をも陳列し、廣い意味の南蠻美術展觀とも稱すべきものであるが、主として南蠻人渡來乃至交易を材とした所謂南蠻屏風を蒐め、近畿地方に傳存するそれ等の大部分を一堂に陳列し、研究者の爲に好機會を提供したものであつた。

古美術展覽會及展觀

十月二十一日—二十五日 日本橋・高島屋
條幅、横物、短冊、扇面等總て四十一點を展觀した。
主として信州某家の舊藏品なる由。

隆能源氏物語繪卷並に信長、秀吉、家康遺墨
遺品展觀

十月二十七日—二十九日 名古屋・徳川美術館

十月二十五日、二十六日の兩日、名古屋市徳川園で信長、秀吉、家康の三傑を偲ぶ三傑會茶會が開かれたが、其の記念として徳川美術館では、侯爵徳川義親所藏の隆能源氏繪卷と、益田孝所藏の同一卷とを併せ展觀した。何れも門外不出の秘寶とされるもの、徳川家本は曾て改裝と摸本完成を機會に、昨年六月東京帝室博物館で短期間特別公開されたのであつたが、茲に再び展觀更に益田家本を加へて兩者同時に觀覽に供せられたことは研究者に取つては絶大の欣びであつた。

益田家一巻も徳川家本と同様に、田中親美の周到なる技術に依つて、繪四紙、詞十五紙に分離改裝し、各桐箱に納めて保存の萬全を計つたものである。尙三傑會茶會に因んで、長興寺所藏國寶信長畫像、妙興寺所藏秀吉畫像、徳川家所藏家康畫像の外、名物無準自畫畫蘆葉達磨圖、及び長次郎作水指、花入古銅きねのをれ、茶入古瀬戸肩衝、利休泪の茶杓、平蜘蛛釜等の名器が同時に出品された。源氏物語繪卷の中、徳川家本三卷は三傑茶會終了後も引續き二十七日から三日間公開された。

朝鮮系九州古陶磁展

十月二十七日—三十一日 銀座・資生堂

港屋主催

古作茶の湯鑑賞會

十月二十九、三十日 上野・松坂屋

陳列品四十三點。

美術懇話會展觀

十月三十一日 美術研究所

美術懇話會例會として、子爵岡部長景所藏北齋の富岳三十六景に、所謂裏富士と稱せらるもの合せて版畫四十八枚を展觀し、藤懸靜也博士の講話を行つた。

奈良帝國博物館十月繪畫陳列

十月中 同館

奈良帝國博物館十月陳列の繪畫は左の通りであつた。

目録

水天像(十二天)(國寶)	一幅	絹本著色	西大寺藏
孔雀明王像(同)	一幅	絹本著色	法隆寺藏
慈恩大師像(同)	一幅	藥師寺藏	
天台高僧像(瀧真、湛然像)(同)	二幅	一乘寺藏	
不動明王八大童子像(同)	一幅	國城寺藏	
安鎮曼荼羅圖(同)	一幅	絹本著色	國分寺藏
扇面法華像(法師功德品)(神方品)(同)	二面	紙本著色	四天王寺藏
聖衆來迎圖(同)	一幅	絹本著色	阿日寺藏
十界圖(五面等活佛)(同)	二面	絹本著色	來迎寺藏
地藏菩薩像(同)	一幅	紙本著色	阿日寺藏
東征繪傳(五卷)(同)	一卷	紙本著色	唐招提寺藏
大威德明王像(同)	一幅	絹本著色	談山神社藏
五大力吼像(同)	一幅	絹本著色	一乘寺藏
地藏菩薩繪緣起	二幅	同	金剛山寺藏
華嚴海會善智識圖	一幅	絹本著色	東大寺藏
地藏曼荼羅圖	一幅	布地著色	七寺藏
金剛界曼荼羅圖(國寶)	一幅	紫綾金銀泥	子島寺藏
十二天像(水天像)(同)	一幅	繪唐時代	西明寺藏
十六羅漢圖(十面ノ内)(同)	一幅	室町時代	唐招提寺藏

伊舍那天像彫繪

十王圖(宗帝王圖)(國寶)

融通念佛緣起(二卷)(同)

十一月

傳教大師奉讃展覽會

十一月一日—三十日 大阪市立美術館

來春延曆寺で、比叡山開創千五十年記念大法要の嚴修せられるに先ち、之に因んで標記の展覽會が開催された。延曆寺を初め、山門派諸寺院所藏の繪畫、彫刻、文書類を蒐集したもので、多數の國寶をも含み、目錄に依れば繪畫五十一點、彫刻五點、文書二十三點、工藝品八點等、尙會期中に多少の陳列替もあり、又目錄外の番外出陳も數點あつた。

出品の中特に珍しく見られたものは、從來殆んど展觀されたことのなかつた太山寺の佛畫類、例へば南北朝頃の作ながら、年代の降つた佛畫中では有数の名品とも云ふべき不動明王二童子像の如き、又種拙の畫品に却つて一種の興味を思はせる法華曼荼羅の如きと共に、寺傳に元信と云ふ山水圖一雙等であつた。又延曆寺藏品中の「慧可」「道信」二類の印記を見る山王祭圖六曲屏一雙は元祿を僅に上るばかりで、畫品亦高からぬものながら珍蹟の一種として興味深く、又極めて繊細な線を自由に驅使した泥描見返繪を有する鎌倉期の法華經も注意されるものであつた。

彫刻類中には平安初期と鑑せられ、其の來迎らしい像容に近時學界の注意を喚んだ四天王寺の阿彌陀三尊像、及び板彫念持佛中の優品として、定評ある横藏寺藏法華曼荼羅等があり、一乘寺の高僧像、來迎寺の十二天、十界、十六羅漢など他の國寶の名品と共に、觀者を刮目さ

一面 木板著色 雲山寺藏

一幅 絹本著色 二尊院藏

一卷 室町時代 清涼寺藏

	周銅車器	陝西省西安府近郊出土	一冊二號
	周銅車器	八號	
	周銅車器		
	周銅車器	河南省臨縣出土	
	秦漢銅金銀錯鞶車器	金村出土	
	秦銅金銀錯把手金具	金村出土	
	秦銅金銀錯杖頭脚	金村出土	
舞	戚		
主			
	唐玉帶	河南省洛陽近郊出土	
	唐流金透影帶金具殘缺	河南省洛陽近郊出土	
	唐流金雲鸞形帶金具	河南省洛陽近郊出土	
帝	鈎	金村出土	
帝	鈎	金村出土	
帝	鈎	金村出土	
床			
	紙本墨畫山水圖	谷文晁筆	

成田山開基一千年祭祀念大展覽會

成田山開基一千年記念大展覽會
十一月一日—二十五日 名古屋・十一屋

東洋美術展覽會

十一月一日—五日 上野・日本美術協會
世話人川部商會及小山青龍堂、後援東京美術俱樂部。

醍醐寺秋季特別展觀

十一月一日—三十日 醍醐寺寶聚院
京都醍醐寺靈寶館寶聚院の第二回秋季特別展觀として寺寶中の繪畫、彫刻、典籍等が陳列された。著名なる同寺の粉本圖像の優品も、多く出陳されてゐた。

陳列目

後冷泉天皇繪旨
粉本五大虚空藏坐居圖像(國寶)
粉本十二天形像(同)
粉本不動明王像(同)

天喜二年二月十二日右近中將
隆俊奉醺醺座主覺源僧正宛
正治元年八月深賢書寫

四箱	粉本不動明王像(國寶) 建久六年八月十七日書寫了圓 心真筆也在三寶院經藏	一	幅	地藏菩薩立像	絹本着色 鎌倉時代	一	幅	地藏菩薩立像	絹本着色 鎌倉時代
三箱	粉本妙見菩薩圖像(同) 二卷ノ内	一	卷	山水屏風	室町時代	一	幅	山水屏風	室町時代
一雙	粉本三昧耶形圖像(同) 寛喜三年五月十二日實深書寫	一	卷	虚空藏菩薩像(國寶)	絹本着色 鎌倉時代	一	幅	虚空藏菩薩像(國寶)	絹本着色 鎌倉時代
一雙	粉本不動明王圖像(同)	一	卷	粉本仁王經曼荼羅五方諸尊圖(同) 中央、南方、五幅ノ内	二	幅	粉本仁王經曼荼羅五方諸尊圖(同) 中央、南方、五幅ノ内	二	幅
二箇	粉本十二神將圖像(同) 嘉藏三年三月廿二日實深本	一	卷	粉本塔羅菩薩像(同) 八幅ノ内	二	幅	粉本塔羅菩薩像(同) 八幅ノ内	二	幅
四箇	四家鈔圖像(同) 三卷ノ内	一	卷	粉本仁王經曼荼羅圖長卷二年弘宣書寫	一	幅	粉本仁王經曼荼羅圖長卷二年弘宣書寫	一	幅
一雙	天部圖像(同)	一	卷	如意國寶	二	柄	如意國寶	二	柄
三箇	十八會曼荼羅圖像(同) 安貞二年書寫	一	卷	古鏡	二	面	古鏡	二	面
四枚	太元明王圖像(同)	一	卷	五重塔内裝飾板繪菩薩像	二	面	五重塔内裝飾板繪菩薩像	二	面
六條	佛眼、金輪、佛頂、熾盛光、五秘密、寶樓閣圖像(同)	一	卷	五重塔内裝飾九板模様	十二	個	五重塔内裝飾九板模様	十二	個
一具	毘沙門天像	一	幅	豐公花見屏風	半	双	豐公花見屏風	半	双
五箇	七星如意輪像	一	幅	楓圖屏風	半	双	楓圖屏風	半	双
三箇	妙見菩薩像	一	幅	生駒等漆筆	一	双	生駒等漆筆	一	双
雙	諸制比丘六物圖(國寶) 久安三年書寫	一	卷	色紙貼交屏風	色紙小野於通筆	一	双	色紙貼交屏風	色紙小野於通筆
雙	諸寺緣起(同)	一	帖	正倉院御物參考品特別展觀	十一月一日——三十日 奈良帝室博物館	一	帖	正倉院御物參考品特別展觀	十一月一日——三十日 奈良帝室博物館
雙	根本尊師傳記	一	帖	正倉院拜觀を許される時期に因んで、御物の参考となるべきもの、即ち同時代の工藝品を蒐めて特別展觀を催した。	陳列目錄	一	帖	正倉院拜觀を許される時期に因んで、御物の参考となるべきもの、即ち同時代の工藝品を蒐めて特別展觀を催した。	陳列目錄
雙	醍醐寺新要錄	一	冊	天平型	十三面	一	冊	天平型	十三面
雙	義演准后日記(國寶)	一	冊	金銀嵌金銅澤佛盤(國寶)	一口	一	冊	金銀嵌金銅澤佛盤(國寶)	一口
雙	義演撰二十二帖ノ内	一	冊	大佛殿鎮壇具(同)	一具	一	冊	大佛殿鎮壇具(同)	一具
雙	滿濟准后日記(同)	一	冊	京都府山科西野山古墓出土品(同)	京都帝國大學文學部保管	一	冊	京都府山科西野山古墓出土品(同)	京都帝國大學文學部保管
雙	多羅葉記(同)	一	冊	福岡縣宮地嶽古墳出土品(同)	宮地嶽神社藏	一	冊	福岡縣宮地嶽古墳出土品(同)	宮地嶽神社藏
雙	法華經釋文(同)	一	冊	嵌石細金細工飾金具殘闕	七點	一	冊	嵌石細金細工飾金具殘闕	七點
雙	江談抄(同)	一	冊	瑞圖八花鏡	一面	一	冊	瑞圖八花鏡	一面
雙	大日如來坐像	一	幅	伯牙彈琴鏡	一面	一	冊	伯牙彈琴鏡	一面
雙	焰魔天像(國寶)	一	幅	海獸葡萄鏡	一面	一	冊	海獸葡萄鏡	一面
雙	吉祥天立像(同)	一	幅	鴛鴦寶相華螺鈿八花鏡(重要美術品)	一面	一	冊	鴛鴦寶相華螺鈿八花鏡(重要美術品)	一面
雙	阿彌陀如來坐像(同)	一	幅	花枝文様金銀平脱八花鏡(重要美術品)	一面	一	冊	花枝文様金銀平脱八花鏡(重要美術品)	一面
雙	如意輪觀音半跏像	一	幅	雙鳳金銀平脱鏡(重要美術品)	一面	一	冊	雙鳳金銀平脱鏡(重要美術品)	一面
雙	如意輪觀音半跏像	一	幅	雙鳳後脱貼銀漆八稜鏡(重要美術品)	一面	一	冊	雙鳳後脱貼銀漆八稜鏡(重要美術品)	一面
雙	地藏菩薩立像(國寶)	一	幅	迎陵類八花鏡(重要美術品)	一面	一	冊	迎陵類八花鏡(重要美術品)	一面
雙	阿彌陀如來坐像	一	幅			一	冊		
雙	粉本虚空藏菩薩像(國寶) 仁安頃書寫	一	幅			一	冊		
雙	粉本不動明王像(同)	一	幅			一	冊		
雙	粉本普賢延命像(同)	一	幅			一	冊		
雙	粉本愛染明王像	一	幅			一	冊		
雙	五秘密像(國寶)	一	幅			一	冊		
雙	大勝金剛曼荼羅	一	幅			一	冊		
雙	彌勒菩薩像	一	幅			一	冊		

舞鳳樓兒八長鏡	一	面	山川七左衛門藏
伎樂面圖寶	十	面	東大寺藏
御物七絃琴	二	張	同
弓箭胡錄	一	張	般若寺藏
四枚居木敷(國寶)	一	背	手向山神社藏
花鳥文箱(同)	一	合	東大寺藏
染革(同)	一	枚	同
香水壺(同)	一	合	法隆寺藏
水瓶	一	口	同

仙崖和尚百年遠忌書畫遺物展觀

十一月七日、八日 福岡市御供所町幻住庵内
虛白院

圓山應舉展覽會

十一月十日—二十五日 恩賜京都博物館

傳山跡鶴嶺筆應舉肖像、眞仁法親王御筆應舉墓誌、遺印二十二類及び肉池、印譜、潤筆料領收書、繪入消息、版本人物圖法等の外、遺作品には御物修學院初度御幸圖巻を初め百一點の多數が出陳された。其の中圓満院藏難福圖卷、觀智院藏雲龍圖、金剛寺藏障屏畫、圓光院藏竹圖等の如き、國寶として著聞するものを除き、

群虎圖	金地著色	六曲屏一雙	田中一馬藏
孔雀圖	紙本水墨	六曲屏一雙	原邦造藏
群仙圖	紙本淡彩	六曲屏一雙	保昌山保存會藏
松鶴梅獅子圖	紙本著色	六曲屏一雙	平井仁兵衛藏
藤花圖	金地著色	六曲屏一雙	根津嘉一郎藏
深山大澤圖	紙本淡彩	六曲屏一雙	仁和寺藏
雪梅圖	紙本水墨	六曲屏一雙	仁和寺藏

此の畫宗の過去の道程を遺憾なく示し得たことは、意義深きものがあつた。眼鏡繪及び眼鏡繪類似の作品二十一枚、九幅、一帖等には應舉の正筆と認め得るものの無いことは既に定評のある所であるが、是等を除いては、偽跡贋作の無數とも云ふべき應舉作品の中から選ばれた、此の大規模な展觀に、殆ど贋偽の作と認むべきもの無かつたことは多とすべきものであらう。

國華社茶話會

十一月十四日 麻布區市兵衛町・國華社

國華社では十一月十四日午後國華社茶話會を開き、左記名品の展觀及び、「唐代の四佛淨土變相に就て」松本榮一の講演を行つた。展觀の品目は左の六點である。

- 一、燉煌出觀世音曼荼羅(國寶) 長尾 欽彌藏
- 一、陳容筆五龍圖(重要美術品) 鈴木 正夫藏
- 一、土佐光起筆鳳凰圖 長尾 欽彌藏
- 一、池大雅筆密林草堂圖 小坂 順造藏
- 一、野田龍村筆輿圖(重要美術品) 橋本辰二郎藏
- 一、長澤藍雪山月圖 長尾 欽彌藏

江戸時代繪入本展覽會

十一月十三日、十四日 淺草傳法院大書院

稀書複製會主催で開かれた。嵯峨本、假名草子、浮世草子、繪入淨瑠璃本、繪入狂言本、役者評判記、役者繪本、遊女評判記、風俗繪本、噺本、地誌附繪圖、赤本、黒本、黄表紙、洒落本、人情本、滑稽本、讀本、合繪卷聲曲本、繪入俳書、繪入狂歌本、雜の二十三種目に分けて代表的な稀書を蒐め年代的に陳列した。

東洋古陶磁名品展

十一月十三日—十五日 銀座・松坂屋

建部綾足遺墨展覽會

十一月十五日—十七日 弘前市公會堂

寒葉齋綾足顯彰會の主催で開催された。
支那古研展觀
十一月十六日—二十一日 上野・松坂屋

筆匠平安堂主催で、坂東貫山が多年支那で蒐集した古研二百點を陳列した。漢研二千年記念と銘うつたのは参考品として並べたものの中に、元康元年の銘ある鳳字研があり、研銘中最古のものと云はれ此の年より二千年に當る爲である。尙坂東貫山の鰐魚圖五十點が併せ展觀された。

歌舞伎屏風特別展觀

十一月十七日—二十六日 早大演劇博物館

早稻田大學坪内博士記念演劇博物館では、特別展覽會を開催し、前川道平藏元祿初期歌舞伎屏風(春秋六曲屏一雙)、一筆齋文調筆劇畫五十點等を展觀した。右歌舞伎屏風は師重に推されるものと謂はれ、公開は今回が最初である。

九州系古陶磁展

十一月十九日—二十一日 神戸畫廊

東京港屋美術部主催。

古書畫骨董茶道具展觀即賣會

十一月二十一日—二十五日 日本橋・白木屋

京都善田喜一郎主催

龍澤寺寶物特別展觀

十一月二十三日 静岡縣三島町・龍澤寺

名刹龍澤寺では寺寶蟲子の爲、書畫、什器類三百餘點を陳列、特別觀覽をさせた。

日本民藝館竣工記念陳列

十月二十四日、五日 日本民藝館

古美術展覽會及展觀

古陶磁展

十一月二十四日—二十六日 高松市・池田屋

櫻間青崖作品展觀

十一月二十八日—三十日 美術研究所

十一月二十八日美術懇話會展觀として、岡崎、東京、京都各地所在の櫻間青崖作品を左の通り陳列し、菅沼貞三の講話を行ったが、翌日より二日間此の展觀を公開し研究者の參考に供した。

陳列目錄

花鳥圖	杉戸改裝	二曲屏	本多忠昭藏
高士觀瀑圖	文政八年	紙本著色	宮原
宮原逸八像	文政九年	紙本著色	村山てい藏
孔明像	文政九年	扇面淡彩	萩須藏
張仲景像	弘化二年	紙本著色	宮原敦藏
墨竹圖	天保六年	扇面著色	星田重吉藏
大黒天圖	弘化三年	紙本著色	渡邊裕藏
菊臣持桃圖	同	紙本著色	萩須藏
韓信忍耻圖	同	同	宮本環藏
山水圖	弘化元年	同	木津泰藏
楓林停車圖	弘化四年	紙本著色	近藤半助藏
春景山水圖	同	紙本著色	柴田淺吉藏
枯木雀圖	同	同	岡田撫琴藏
山水圖	同	同	千賀平四郎藏
大黒天圖	嘉永三年	同	宮原敦藏
壽星圖	同	同	小柳津邦太藏
郭子儀圖	同	紙本著色	今村雄久馬藏
林和靖圖	同	同	植田宗七藏
山水圖	嘉永三年	紙本著色	宮原敦藏
山間梅林圖	同	同	東京帝室博物館藏
竹林書屋圖	同	紙本著色	京極德順藏
楓林停車圖	同	紙本著色	星田重吉藏
漁夫圖	同	同	成瀬一三藏
草廬三顧圖	同	同	星田重吉藏
花鳥圖	同	同	同

高士觀瀑圖

紙本著色 竹中鼠一藏

東京帝室博物館繪畫陳列

十一月、十二月、同館

東京帝室博物館十一月、十二月陳列の繪畫は左の通りであつた。

目錄

地藏菩薩像(國寶)	一幅	絹本著色	知恩院藏
黃不動尊像(國寶)	一幅	絹本著色	曼殊院藏
釋迦如來像(國寶)	一幅	同	神護寺藏
普賢菩薩像	一幅	同	本館藏
普賢延命菩薩像(國寶)	一幅	同	松尾寺藏
不動尊像(國寶)	一幅	同	甚目寺藏
虚空藏菩薩像	一幅	絹本著色	本館藏
愛染明王像	一幅	絹本著色	同
先德圖像	一卷	玄證筆	同
北野天神緣起繪卷殘闕二卷	一幅	紙本墨畫	同
達磨像(國寶)	一幅	紙本著色	同
惠可斷臂圖(國寶)	一幅	紙本著色	同
祖師像(雲觀觀桃圖二幅ノ内)	一幅	紙本著色	同
蝦蟇鐵拐圖	一幅	紙本著色	同
高雄觀楓圖屏風(國寶)	一隻	紙本著色	同
拾圖屏風	一隻	傳永德筆	同
車爭圖屏風	一隻	傳山樂筆	同
江戶名所圖	九枚	亞威堂田善	同
歌麿版畫	一帖	江戶時代	同
梅花圖	一幅	紙本著色	同
山水圖	一幅	紙本著色	同

奈良帝室博物館繪畫陳列

十一月、同館

奈良帝室博物館十一月陳列の繪畫は、左の通りであつた。

目錄

花鳥圖	一幅	樟山筆	絹本著色	本館藏
武陵桃源圖	一幅	鈴木我古筆	同	同
秋景山水圖	一幅	浦上春琴筆	紙本淡彩	同
花鳥圖	一幅	岡本秋暉筆	紙本著色	同
雪中鴨圖	一幅	山本梅逸筆	絹本著色	同
青綠山水圖	一幅	桑山玉洲筆	紙本著色	同
武陵桃源圖	一幅	渡邊玄對筆	絹本著色	同
山水圖	一幅	帆足杏雨筆	江戶時代	同
秋景山水圖	一幅	藤本鐵石筆	紙本著色	同
吉祥天像(國寶)	一面	麻布著色	藥師寺藏	
月天像(十二天ノ内)	一幅	絹本著色	西大寺藏	
大威德明王像(同)	一面	絹本著色	唐招提寺藏	
天台高僧像(八幅ノ内、傳)	二幅	同	一乘寺藏	
俱舍曼荼羅圖(同)	一幅	同	東大寺藏	
不動明王二童子像(同)	一幅	絹本著色	瑠璃寺藏	
信貴山緣起繪卷(三卷ノ内、尼公卷)	一卷	藤原時代	朝護孫子寺藏	
扇面法華經(本物品、觀音寶)	四面	同	四天王寺藏	
一字金輪曼荼羅圖(同)	一幅	絹本著色	南法華寺藏	
十界圖(五面ノ内、天通歡樂圖)	一面	同	來迎寺藏	
來迎阿彌陀如來像(同)	一幅	同	寶嚴寺藏	
天台大師像(同)	一幅	同	園城寺藏	
八大佛頂曼荼羅圖(同)	一幅	同	同	
香象大師像(同)	一幅	同	東大寺藏	

聖德太子繪傳(八幅ノ内第六ノ)	國寶	一幅	絹本着色	橘	寺藏
施餓鬼圖(同)		一幅	麻布著色	葉仙	寺藏
胎藏界曼荼羅圖(同)		一幅	泥唐時代	子島	寺藏
五百羅漢圖(第二十幅ノ内第九十ノ)	同	二幅	絹本着色	大德	寺藏
林庭珪、周季常畫		一幅	絹本着色	松尾	寺藏
釋迦八大菩薩像(同)		一卷	紙本著色	唐招提寺藏	
東征繪傳(五卷ノ内第四ノ)	同	一幅	絹本着色	能滿	院藏
地蔵菩薩十王曼荼羅圖(同)		一幅	室町時代	成菩提院藏	
聖德太子御像(同)		二幅	同	二尊	院藏
十王圖(泰廣王、初江王國)	同				

十二月

充美會主催書畫古美術品特別展觀

十二月十七日—二十一日 大阪・阪急百貨店

古渡りギヤマン並支那耶蘇會古版畫展觀

十二月二十三日—二十七日 銀座・西野屋

奈良帝國博物館繪畫陳列

十二月 中旬 同館

奈良帝國博物館十二月陳列の繪畫は、左の通りであつた。

目録

千手千眼觀世音菩薩像(國寶)	一幅	絹本着色	鎌倉時代	金峯山寺藏
寶冠阿彌陀如來像(同)	一幅	同	同	長命寺藏
觀經曼荼羅圖	一幅	同	同	專稱寺藏
不動明王二童子像(國寶)	一幅	同	同	園城寺藏
阿彌陀如來十六尊像	一幅	同	同	松尾寺藏
普勝佛頂圖	一幅	同	同	西大寺藏
東征繪傳(五卷ノ内第三ノ)	一卷	紙本著色	鎌倉時代	唐招提寺藏

古美術展覽會及展觀

如意輪觀世音像(國寶)	一幅	絹本着色	鎌倉時代	寶嚴寺藏
十六羅漢像(第十一尊者ノ同)	二幅	同	同	寶嚴寺藏
淨土曼荼羅圖	一面	同	同	極樂院藏
千手觀音廿八部衆像	一幅	同	同	法起寺藏
執金剛神緣起	一卷	紙本著色	室町時代	東大寺藏
春日曼荼羅圖	一幅	絹本着色	鎌倉時代	興福寺藏
春日曼荼羅圖(國寶)	一幅	絹本着色	室町時代	寶山寺藏
春日淨土曼荼羅圖(同)	一幅	同	同	能滿院藏
東大寺曼荼羅圖	一幅	同	同	東大寺藏
春日宮曼荼羅圖	一幅	同	同	奈良市南町藏
春日神社寺曼荼羅圖	一幅	同	同	興福寺藏
春日鹿曼荼羅圖	一幅	同	同	同
春日曼荼羅圖	一幅	同	同	久度神社藏
二月堂曼荼羅圖	一幅	同	同	稻垣祐義藏
生駒宮曼荼羅圖	一幅	絹本着色	江戸時代	伊古馬郡比古神社藏
花鳥圖	二幅	紙本著色	明時代	長谷寺藏
大佛緣起繪卷(三卷ノ内下)	一卷	紙本著色	室町時代	東大寺藏
繪屏	二面	木板彩色	鎌倉時代	唐招提寺藏
慈恩大師像	一幅	絹本着色	室町時代	毛利喜右衛門藏
地蔵菩薩像	一幅	同	同	辰巳外五家藏

古美術關係彙報

一月

フレッド・ゲーキン逝去 浮世繪研究の權威であり、其の紹介者として著名なアメリカのフレッド・W・ゲーキンは、一月十七日其の故郷シカゴ近郊のウインネツカで八十二歳の高齢で逝去した。

三月

國寶保存會々議 國寶保存會は二月二十七日及三月六日午前十時文部省で會議を開き、細川會長以下各委員及び臨時委員等合計二十一名出席、左の諸項

二月

國寶觀音像盜難 京都府久世郡宇治町宇白川の白山神社所藏國寶十一面觀音立像一軀は、何者かに盗まれてゐることを二月十八日同神社々掌が発見し、當局では直ちに嚴重な捜査を開始した。同像は藤原末の作で木造漆箔、精巧な透彫の舟形光背蓮座等の莊嚴を具備するが、盗み出す際に光背は境内に遺棄されてゐた。

法隆寺の地震被害 昭和十一年二月二十一日大阪奈良地方に強震があり、大したことはなかつたが法隆寺に左の如き被害があつた。

金堂上層の壁に龜裂を生じ、同じく金堂基壇の凝灰岩の目地が開き、東院傳法堂の東側間仕切壁が倒壊し、同じく西妻の壁に小龜裂を生じ、東院繪殿の北側面の壁面にも小龜裂を生じた。尙境内の石

燈籠が數基顛倒し、築地塀等に小破損があつた。其他金堂内の多聞天所持の寶塔が轉落し、東院傳法堂内の廣目天が破損したが、主要部に被害がなかつた。

國寶保存會々議 國寶保存會は二月二十七日及三月六日午前十時文部省で會議を開き、細川會長以下各委員及び臨時委員等合計二十一名出席、左の諸項

一、建造物國寶指定の件

二、寶物類國寶指定の件

三、國寶建造物修理費補助の件

四、國寶寶物類修理費補助の件

五、國寶建造物現狀變更許下の件

を附議し、協議の結果、建造物七件、寶物類百七十七點の國寶指定、及び國寶修理費補助額の細目を決定した。尙是等の指定は四月二十日及五月六日の官報を以て告示された。(國寶指定目録一八八頁、修理費補助額二〇五頁参照)

浮世繪界創刊 浮世繪同好會では從來發行してゐた「浮世繪藝術」を舊臘を以て終刊したが、再び浮世繪研究を主とする月刊雜誌「浮世繪界」を發行することとなり三月十日その創刊號を出した。

金刀比羅宮學藝館増築落成 香川縣金刀比羅宮學藝館は同圖書館附屬として

四月

昭和三年に設立されたが、狹隘の爲工費五萬圓を以て第二號館、第三號館を増築中の處三月三十日落成した。(便覽五九頁参照)

九條記念館並應舉館開館 公卿九條道秀及益田孝より東京帝室博物館に寄贈された九條公卿記念館及應舉館の二棟は博物館構内に建立が完成し、同館では四月十八日寄贈者を招待して開館式を舉行、同時に一般に公開することになった。

九條記念館はもと東京赤坂福吉町なる九條公卿邸内の前公卿道實の居室で、昭和九年現公卿道秀が先考の記念として、この建物を宮内省に獻納したものである。同館は間口七間半、奥行五間半、總坪凡四十四坪、二室、廻廊下附で、一の間の二の間を通じて床張付、襖、腰障子に狩野の筆致を以て、四季著色樓閣山水圖が描かれてある。此等とはもと京都御所内九條邸にあつたのを東京邸に應用したもので筆者は山樂、山雪と傳へる。應舉館はもと舊尾張國海部郡大治村字馬島なる明眼院の書院で寛保二年の建立、明治二十二年二月、益田孝男により東京御殿山の邸内に移築され、昭和八年同氏より宮内省に獻納された。間口八間餘、奥行五間餘、總坪凡四十三坪、書院造、二室、廻廊下附、一の間には床張付、襖、腰障子に墨畫の松梅笹稚松が、二の間には壁張

付、襖、腰障子に墨畫盧雁圖が描かれ、何れも圓山應舉の筆で、落款によれば應舉五十二歳の作である。

平壤博物館の樂浪出土漆器陳列 平壤博物館では工事中の漆器特別陳列室がこのほど竣工したので京城の總督府博物館に保存されてゐた樂浪古墳出土漢代の飯盤、鏡盒、案、耳杯等の樂浪漆器を陳列して四月廿五日より一般に公開した。

五月

三十三間堂出火 五月四日午前四時頃京都の名刹蓮華王院本堂の中央本尊の安置された眞下の床下から出火し、柱、床板等一部分を焼いたが、幸ひに前年修理の際附設した警火裝置が效を奏し、大事に至らず消し止める事が出来た。堂内には出火の原因が考へられず怪火として放火の疑が濃厚であるといふ。

天沼博士歸朝 京大の天沼俊一博士は昨年九月に出發、エジプト、ギリシヤ、トルコ、シリヤ、アラビヤ等の古建築巡禮をなし、十二月印度へ赴き佛蹟及古建築の視察を終へ、去る三月ネパール王國に入國、六日間同國に滞在してその寺院建築を視察の上、五月四日歸朝した。(大毎五月七日に依る)

東京府下多西村發掘 東京府では西多摩郡多西村大字草花字草花前に於ける石器時代住居跡を發掘することとなり、去る五月六日より同二十三日に至る十八

日間史蹟調査囑託後藤守一を派してこれが調査を爲さしめたが、遺蹟は未だ前例を見ざる幾多の特異の點を有し、學界に興味ある結果を齎らした。遺蹟は多摩川の支流平井川の北方段丘上に在り、昨年末同地の鹽野半十郎によつて發見されたものであるが、同遺蹟は夫々圓弧を描く二ヶ所の陸の如きもの（幅員約二米深約八〇釐）によつて圍まれた中に直径一〇米の圓形臺狀を呈する平坦部があり、その外周を爲す陸の外側の各々に直径約六米の堅穴を一ヶ所宛附隨せしめて居るのであり、堅穴内には十數個の自然石を直径五〇釐許りの範圍に圓形中凹みに疊んで爐の如き設備を爲し、或は堅穴中央に下半部を缺きたる大形土器（膝坂式に屬せしめ得べき縄文土器）を埋設してこれを細長き自然石を以て二方又は三方を圍んであるものとか又容易なる解釋を許さざる狭長にして淺い直線的の溝狀部分や多くの柱穴なども發見された。かかる様式のものと同小異の住居跡は同所に於て約一六米を隔てゝ他に一ヶ所を有し、兩者相俟つて特色ある住居形式を傳へてゐるのであり、石器時代住居跡研究上に多大の疑問を提供し、考古學者のみならず建築學者にも異常の興味を與へてゐる。尙同村羽ヶ田には二ヶ所に表面を平めたる自然石を以てせる敷石住居跡（一は直径五米餘、他は三米餘）があり、これが實地調査も併せ行つた。（考古學雜誌第二十六ノ七號報）

朝鮮寶物等指定 朝鮮寶物古蹟名勝天然記念物保存令に依る指定は、五月二十三日朝鮮總督府から發表された。（二〇六頁参照）

六月

飛鳥須彌山遺蹟の發掘調査 東京帝國博物館の庭に所謂須彌山像と稱する山形の石造物と道祖神の石像とがあり、共に明治三十四年奈良縣高市郡飛鳥村大字飛鳥の地より發見されたものであるが、其の遺蹟に就ては從來全然未調査のところ五月下旬帝國博物館の人々によつて同所の發掘調査が試みられた。其の結果同館にある所謂須彌山像の破片と思はれる石一個並に多數の土器破片が發見され、又其處に大規模の築溝の埋没遺存せる事が判明した。この溝は水田の表面より約七尺の地下にあり幅は三尺乃至三尺五寸で、兩側は大小の自然石を以て積み、底には栗石を見事に敷きつめたところもあり、嘗つて石神並須彌山像を發掘した地點の東に接して正南北に約二百尺連り、其れは南方に於て西に曲り、更に北に曲り、又西に曲り北に曲り、恰も石像及須彌山像の發見地域をとり圍むが如き姿をなし、溝の中にはいづこも綺麗な河原砂堆積し淨水の流行を思はせる。又須彌山像石神の發掘地附近には栗石特に多く散在し、其の一角にあつて井戸の痕かと察せられるところも見出された。思

ふに此の井水を何らかの裝置で所謂須彌山の噴水塔に導き、溝はその水をうけて迂回曲折するよう計畫されたものではあるまいか。此の地は日本書紀齊明天皇五年條の「甲午甘檮丘東之川上造須彌山而鑿陸奥興越蝦夷」とあるのに一致し、甘檮丘まではその距離直徑にして一丁足らず、飛鳥川までは約四十間である。（考古學雜誌二六七、彙報による）

古美術複製國際協會の設立計畫 我が國古美術品の忠實な模寫複製を作り、之を外國に貸與、寄贈し、或は外國作品と交換することに依つて我邦文化の粹を海外に宣揚すると共に對內的にも一般美術文化の發展に寄與するを目的とし、子爵大河内正敏を準備委員總代として古美術複製國際協會の設立が計畫され、六月同會設立趣意書が各方面に配布された。

國寶保存會々議 國寶保存會は六月十七日文部省で會議を開き、細川會長外各委員出席、諮問事項一、國寶木造エラスムス立像海外搬出許可に關する件二、國寶建造物修理費補助の件を審議の結果孰も原案通り許可することに決定。（補助細目二〇五頁参照）

瀧重美術品等調査委員會會長辭職 重要美術品等調査委員會會長瀧精一は昨秋來辭表提出中であつたが、六月二十三日附を以て其の職を解かれ、後任として文部次官河原春作が會長を命ぜられた。

七月

重要美術品等調査委員會々議 重要美術品等調査委員會は七月八日文部省で會議を開き、河原會長、委員二十一名の外、特に細川國寶保存會長及び大藏省よりも關係官出席、協議の結果左の諸件を可決した。

一、重要美術品認定の件
繪畫四十九點、彫刻三點、建造物五件、工藝品及び考古學資料五十五點、文書典籍書蹟二百五十八點、刀劍五十八點、合計四百二十八點、

二、今秋アメリカ、ボストン美術館に於いて開催される日本古美術展覽會に出品すべき重要美術品等認定物件輸出許可の件、繪畫二十四點、彫刻一點、尙輸出を許可したものの十六點は今次新に認定されたものである。

國寶保存會々議 國寶保存會は七月十日文部省で會議を開き、細川會長以下委員二十二名出席、「建造物國寶指定の件」外六件に就き審議の結果、建造物八件、繪畫七點、彫刻三十點、工藝五點、典籍一點、刀劍十二點、合計六十三點の國寶指定、國寶建造物維持修理費補助は京都知恩院以下二十四件に對し總額約二十五萬二千四百餘圓を、國寶寶物類維持修理費補助は法隆寺以下十三社寺に對し合計三萬三千六百餘圓を支出することに決定、三井男所藏の如庵附路地はか十二

點の國寶の現狀變更の件許可、今年北米ボストン美術館で開かれる日本古美術展に出品の細川侯所藏長谷雄草紙一卷、京都土橋嘉兵衛氏所藏の三十六歌仙切一卷の輸出許可を決議した。

日吉臺に於ける住居址發掘

神奈川

縣日吉臺の慶應義塾豫科の敷地南西丘陵地に太古人の住居址が發見され七月廿九日、卅日の兩日に亘つて東京帝室博物館鑑査官後藤守一が調査した。これは彌生式土器を使用した先住民の住居址六個で、内一個は我國最大のもので附近一帯からは土器、石斧等精巧なものが多數發見された。

近江安土瓢箪山古墳の調査

滋賀縣

史蹟調査會では昨年五月古文化研究所で現狀調査を行った同縣蒲生郡安土村大字宮津字小山の俗稱瓢箪山なる前方後圓墳の發掘調査を本年七月より行ひ、京大の梅原未治ほか同校考古學教室員がその實際の調査を擔當したが、その結果、前方部には塚の主軸と並行の位置に南北に並ぶ二個の箱式棺を、後圓部には墳の主軸と直角の方向に東西に並ぶ三個の細長い石室を現出し、内中央のものは堅穴式石室で同室よりは鏡、石製品、刀劍、銅鏡、鐵鐵等が發見され、鏡の一是後漢の夔鳳鏡で銅鏡は二種三十個を數へ、之等は石製品が存在と併せて時代の遡ることを考へしめた。同墳は一墳に五個の構造を有し、從來明瞭ならぬ點の多かつた堅穴式石室の構造に確實な一資料を提供し、

また封土と石室との關係が究められ古墳墓一般の研究に寄與する所が大であつた。(考古學雜誌二六の一〇號報に依る。)

八月

天沼博士京大を退く

京大工學部教

授天沼俊一博士は大正九年八月京大工學部助教就任以來教壇生活こゝに十七年、八月三十一日をもつて還暦を迎へ停年制により學園を去ることになった。

御所離宮拜觀資格擴大

京都御所、

仙洞御所、三條、桂、修學院の三離宮、新宿御苑の個人及團體の拜觀規程が八月三十一日附の官報により發表され、従前より拜觀資格が擴大された。

九月

美術研究所研究資料閱覽開始

美術

研究所では收藏の圖書寫眞等の美術に關する研究資料を、研究所の事業に支障なき限り研究者の爲に公開閱覽せしむることとし、豫てより準備中であつたが九月一日から之を開始した。(閱覽に關する規定は便覽四九頁參照)

ボストン日本古美術展覽會

米國ボ

ストン市美術館に於て、今秋、ハーバード大學創立三百年祭の行はるに當り、その祝典行事の一として日本古美術展覽會を開き度き希望は昨年末に齋藤駐米大使を通じて我が外務省に傳達せられ、本

年二月廣田外相は朝野の名士を招待してボストン美術館の希望を傳へ、その援助を依頼した。四月、同館東洋部長富田幸次郎は出品蒐集の命を帯びて歸朝し、次で五月十六日に同館長エツヂエル博士が自ら來朝した。これよりさき、五月六日

徳川家達公を長とする委員會が組織せられ、國際文化振興會また其の劃策に斡旋の勞を執り、各方面に出品を勸請せる結果、多少の論議はあつたが、六月三十日御物二點、高松宮御所藏品一點の御貸下げをはじめ一般所藏家の貸與品も集まり、七月八日國際文化振興會事務所に出品物下見展覽會を開催した。出品物は前記皇室御貸下品の外に國寶二點、重要美術品二十五點を含む九十七點、計百點で、重要美術品中十六點は輸出を前にして七月八日新に認定されたものである。同月十五日、出品物全部を發送、八月十七日ボストン着荷、展覽會は九月十日より十月二十五日まで開會され、非常なる盛會にて、觀覽者は十一萬餘人の多きに上り、日本文化の紹介に、兩國親善の上に大なる實績を收めた。尙同展の會場設備には美術館當事者の熱意により、周到なる注意が拂はれて良き陳列効果を擧げた。十月三十一日出品物はボストン港より返送、十二月十四日横濱に安着した。尙東京帝室博物館の溝口禎次郎は出品物の責任監督者として八月七日渡米したが出品物と同時に歸朝した。又十二月十二日にはエツヂエル博士が答禮の爲再度來朝、

同月十七日宮中に參内御禮を言上した。

出品目録

- 帝室御物
- 一、若冲花鳥圖 絹本着色 二幅
- 二、伎樂圖 二面
- 高松宮家御所藏
- 三、宗雪筆秋花圖 紙本着色 六曲屏風 一雙
- 東京帝室博物館藏
- 四、蕉村筆野馬圖 紙本着色 六曲屏風 一雙
- 五、志貴山縁起(模本) 紙本着色(飛倉卷) 一卷
- 六、戲畫殘缺 紙本水墨 一幅
- 七、住吉畫卷殘缺 紙本着色 一卷
- 八、長谷川久藏筆大原御幸圖 紙本着色 六曲屏風 一隻
- 九、岡本秋暉筆牡丹軍鶏圖 紙本着色 一幅
- 一〇、阿彌陀二十五菩薩來迎圖(模本) 紙本着色 三幅
- 京都帝國大學文學部陳列館藏
- 一一、狛犬木造 一對
- 東京美術學校藏
- 一二、善隆立像 金銅 一軀
- 一三、飛天續像(法隆寺舊藏) 二枚
- 一四、孔雀明王像 絹本着色 一幅
- 一五、彌勒來迎圖 絹本着色 一幅
- 一六、雪村筆竹林嘯虎圖 紙本水墨 一幅
- 一七、常信筆桐ニ鳳凰圖 紙本金地著色 一雙
- 戸田彌七藏
- 一八、傳藤原長隆筆舟遊圖 紙本着色(重要美術品) 一幅
- 岡橋治助藏
- 一九、應舉筆雌雄雞圖 絹本着色 一幅
- 寺田甚吉藏
- 二〇、吳春筆松鯉圖 絹本着色 一幅
- 武藤金太藏
- 二一、光悅筆鹿圖殘缺 紙本金銀泥 一卷
- 二二、傳雲信筆阿佛尼像圖 絹本着色 一幅
- 益田孝藏
- 二三、一字輪曼荼羅圖 絹本着色(重要美術品) 一幅

二四、持國天立像 本造、重要美術品 一編

二五、多聞天立像 本造著色 一編

二六、隆能筆源氏畫卷 (模本 紙本著色) 一卷

室本印象藏

二七、土佐經隆筆聖德太子繪傳 (第一、第四) 二卷

土橋嘉兵衛藏

二八、三十六歌仙切 兼盛 (紙本著色、國寶) 一幅

玉井久次郎藏

二九、懸佛 銅製 一個

村山長舉藏

三〇、岩佐勝以又兵衛筆堀江物語畫卷 紙本著色 三卷

男爵 住友吉左衛門藏

三一、信實筆聖德太子御像 絹本著色 一幅

三二、雪舟筆漁樵問答圖 紙本水墨 一幅

前田久吉藏

三三、過去現在因果經殘缺 (紙本著色) 一卷

三四、清瀧權現圖 絹本著色 一幅

三五、肖像畫 絹本著色 一幅

松永安左衛門藏

三六、極夫人厨子 (模造) 一基

三七、大日如來坐像 本造漆箔 一編

三八、文殊菩薩像 絹本著色 一幅

三九、阿彌陀如來像 絹本著色 一幅

根津嘉一郎藏

四〇、菩薩像 本造漆箔 (法隆寺傳來六菩薩ノ内) 一編

四一、白鳳時代金銅立像 一編

四二、日光菩薩立像 本造 藤原時代 一編

四三、犬追物圖 (紙本著色、六曲屏風、重要美術品) 一雙

四四、宗達筆浮船圖 紙本著色六曲屏風 一雙

四五、永德筆誰袖圖 紙本著色六曲屏風 一雙

四六、元信筆猿蓑圖 紙本淡彩六曲屏風 一雙

四七、普賢十羅刹女圖 絹本著色 (重要美術品) 一幅

四八、傳金剛筆聖觀音坐像 絹本著色 一幅

四九、釋迦經圖 (重要美術品) 一幅

五〇、榮賀筆五髻文殊像 絹本著色 一幅

五一、雪村筆柳鷺圖 紙本水墨 一幅

五二、祥雲筆真山水圖 (紙本淡彩、重要美術品) 一幅

五三、雪舟筆真山水圖 紙本水墨 一幅

五四、雪舟筆福祿壽圖 紙本水墨 一幅

五五、雪舟筆彼岸圖 紙本水墨 一幅

五六、傳宗丹筆周茂叔圖 (紙本淡彩、重要美術品) 一幅

五七、芝觀筆筆管公像 紙本著色 一幅

五八、風俗圖 (紙本著色、重要美術品) 三幅

五九、法隆寺玉蟲厨子 (模造) 一基

橋本關雪藏

六〇、彌勒半跏像 金銅 一編

六一、觀音立像 金銅 一編

六二、聖觀音立像 金銅 一編

小林一三藏

六三、謝春星筆開夜漁舟圖 絹本淡彩 一幅

侯爵 井上三郎藏

六四、傳元信筆畫藏圖 (紙本淡彩、重要美術品) 一雙

松方正作藏

六五、探幽筆四季花鳥圖 紙本淡彩六曲屏風 一雙

六六、始興筆杜若圖 紙本金地著色六曲屏風 一雙

岡崎正也藏

六七、雪舟筆破墨山水圖 紙本水墨 一幅

六八、鑿馬圖 (紙本著色、重要美術品) 一雙

六九、岳翁筆山水圖 紙本水墨 (重要美術品) 一幅

男爵 岩崎小彌太藏

七〇、傳周文筆山水圖 紙本淡彩 (重要美術品) 一幅

七一、抱一筆麥穗菜花圖 (紙本著色、重要美術品) 雙幅

牧田敏藏

七二、守景筆山水圖 紙本淡彩 一幅

七三、光起筆鸞圖 絹本著色 一幅

子爵 吉川元光藏

七四、冷泉爲恭筆紫式部日記、枕草紙圖 雙幅

侯爵 德川義親藏

七五、隆能筆源氏物語圖 (紙本著色模寫) 三卷

男爵 團伊能藏

七六、等伯筆鳥鷺圖 (紙本水墨、重要美術品) 一雙

七七、稚兒大師像 絹本著色 (重要美術品) 一幅

七八、宗達筆伊勢物語帖 紙本著色 一冊

金光唐夫藏

七九、光起筆須磨明石圖 紙本著色六曲屏風 一雙

伯爵 渡邊昭藏

八〇、松花堂贊花鳥圖 (紙本著色、重要美術品) 一雙

伯爵 德川宗敬藏

八一、蛇足筆夏冬山水圖 紙本水墨 雙幅

安田善次郎藏

八二、播磨邸宅圖 (絹本著色、重要美術品) 一幅

大橋新太郎藏

八三、傳雪舟筆花鳥圖 (紙本著色、重要美術品) 一雙

井上辰九郎藏

八四、雪村筆山水圖 紙本水墨 一幅

保坂潤治藏

八五、雪舟筆中布袋左右花鳥圖 紙本水墨 三幅對

八六、岳翁筆靈昭女圖 紙本水墨 (重要美術品) 一幅

下村仙藏

八七、華山筆市河米庵像 (絹本淡彩、重要美術品) 一幅

侯爵 細川護立藏

八八、觀音立像 金銅 一編

八九、長谷雄章紙 紙本著色 (國寶) 一卷

九〇、武藏筆梅鳩圖 紙本水墨 (重要美術品) 一幅

池田成彬藏

九一、蘆舟子都山圖 紙本著色六曲屏風 一雙

福井菊三郎藏

九二、祖仙筆鹿圖 絹本著色 一幅

九三、雪舟筆山水圖 紙本水墨 一幅

西脇健治藏

九四、探幽筆山水圖 (紙本淡彩、重要美術品) 一雙

男爵 大倉喜七郎藏

九五、光琳筆鸛圖 紙本著色六曲屏風 一雙

溝口宗彥藏

九六、宇治橋圖 紙本金地著色六曲屏風 一雙

侯爵 前田利爲藏

九七、探幽筆中觀音左右龍虎圖 絹本淡彩 三幅對

遠山元一藏

九八、半江筆春雷起孤圖 (絹本著色、重要美術品) 一幅

伊勢傳一藏

九九、雪村筆山水圖 紙本水墨 一幅

新納忠之介藏

一〇〇、彌勒半跏像 金銅 一編

大阪市立美術館開館 池上市長の時に發案され工事に多年を費した大阪市立美術館は本年五月一日竣工落成式を舉行し、同時に第一回新帝展作品の陳列を行つたが、九月十一日より愈々正式開館の運びに至り、同月中その記念陳列を行つた。(便覽五五頁参照)同館は爾後古美術博物館としての事業を主體と爲し、併せて一般美術展のギャラリーとしての働きをなすことになつた。

朝鮮扶養に於ける發掘調査 東京帝室博物館鑑査官石田茂作は朝鮮總督府の依頼により昨年の秋と本年の秋との二回に互り朝鮮忠清南道扶餘郡扶餘面軍守里の故地を發掘調査した。同發掘は朝鮮に於ける佛寺址の調査研究を目的とし、従つて朝鮮(百濟)佛教と我が飛鳥佛教との佛寺伽藍配置との關係を究明する事がその眼目であつた。本年第二回の發掘は九月中旬に開始され、昨年度の發掘を續行したがその結果、南北一直線上に於

る。(大朝 九、二三に依る)

十月

滿洲國安東省輯安縣高勾麗遺跡の第二回調査

京大濱田博士等により、その年新たに発見された壁畫古墳が調査され、輯安縣の名が再び學界に著聞した事は周知のことである。本年も九月三十日より十月四日に互る滿五日間第二回の調査が行はれた。此度の調査は將軍墳、大王陵、牟頭妻塚、環文塚、四神塚、三室塚其他、昨年實測をし残した古墳の實測、輯安縣城の調査、山城子山城の踏査及び一部の實測等が主なるもので、その他にも諸所の調査を行つた。今その主なるものに就て云へば、將軍墳に在つては、石築の最下段の周圍には巨大な敷石が敷きつめられて居り、更にそれを廻つて一面に玉石が敷かれてゐる。玉石は墓域全體に敷きつめられてゐたらしく、又墓域の四圍は土壘を築いて境としてあつたやうである。將軍墳の背面には既に知られてゐるドルメンの如き形をした陪塚の他に數個の陪塚も発見された。墓域は何れの古墳にも定められてゐたらしい事は大王陵の北方に土壘の跡のあるのによつて察せられる。又墓域の附近に建築物のあつた事は千秋塚の例に依つて考へられる。尙、土墳の封土は胴強りの甚だしい矩形である事も明かにされた。

次に輯安縣城の調査の結果北壁の一部に古い部分の遺存する事、その外方に外濠の存する事、又南壁内に礎石の遺存する事等も確かめられた。現在の縣城は一邊六町、ほぼ正方形である。

山城子山城は雞兒江に沿つて輯安縣城北、約廿町、雞兒江が東より來つて南へ轉ずる屈曲點附近に南門址がある。城内には物見石、池塘、建築物址が遺存する。城壁は踏査の結果、南門址のある一邊を南壁とし、四周の峻險なる山顛を繞つて遺存する事が確かめられた。堅固に構築された石壘で、よく原型を保てる個所多く、北壁の如きは十七尺の高きに及んでゐる。

調査の一行は東京よりは池内博士、三上、座右寶の齋藤、岡崎兩名、京都よりは濱田博士、梅原助教、水野、京城よりは田中教授、今關、平壤よりは小泉、滿洲よりは黒田教授、伊藤、河瀬其他の諸氏であつた。(考古學雜誌二六ノ一二彙報に依る)

北野大猷茶會

天正十五年の豐太閤

北野大茶湯を記念する「北野大茶湯三百五十年記念大猷茶會」は前田利爲侯を名譽會長、平井仁兵衛を會長と爲し十月八日より五日間に互り開會され、茶道各流の宗家の協賛を得て日々盛大な猷茶會が舉行されたが、開期中北野神社を中心に京洛中で開會せられた茶湯は席數二十八個所で五日間に開席せるもの一百一座の盛觀を呈し、北野神社寶物殿をはじめ各

茶席には豐公關係の名器秘寶が出陳せられ、全國の茶人を京都の地に蒐めた。

全國博物館大會

日本博物館協會で

はその總會並に第七回全國博物館大會を十月八日大阪府濱寺公園農業博物館に於て開會し、續いて同大會を九日大阪市美術館に、十日法隆寺に開催した。全國より博物館關係者百餘名の參會者があり、協議、講演、見學等が行はれ、大會初日にはJ O B Kより正木直彦の「博物館の使命」と題する放送があつた。尙十一月一日より七日迄、明治館を中心に第四回博物館週間を催し、期間中には各博物館に於てそれぞれ特殊の催しがあり博物館事業の宣傳に努めた。

高勾麗古墳壁畫の撮影

朝鮮京城帝

大法文學部美學研究室では服部報公會の資金を得て、十月初旬より約四十日に亘り幾多の不便を冒して平安南道江西郡江西面三墓里の大小二墓の高勾麗古墳の壁畫の撮影を完了した。此等兩墓は墳丘内に方形に近い墓室を作り、室は四面の壁と、四壁より數段の持送りを出して支へられる天井とよりなり、南壁に淺道を開いた形式である。墓室の殆んど全面に彩畫が描かれ、その題材は頗る多種に亘るもので、先づ東、西、南、北の四壁に蒼龍、白虎、朱雀、玄武を畫き上方數段の持送り及び天井面には、日、月、飛仙、天人、魚、鳥、蛇或は唐草模様等が描かれてゐる。先づ大墓は東壁及西壁を三十六區に、北壁を二十四區に區分して、半

て北より南に向ひ、講堂址(東西百五十尺、南北六十尺平方)、三十尺離れて金堂址(東西九十尺、南北六十五尺平方)、更に三十尺の地點に塔址(四十七尺平方)と推定さるべき遺構を発見した。塔趾の中心に於ては地下六尺の所より三尺一寸の正方形の造出しある礎石を発見、更にその周圍には木造物の炭化せるものが著しく現はれ塔中心柱の炭痕と推定され木造重層塔の存立せる事が判明した。以上により我が四天王寺式伽藍配置を朝鮮百濟佛教の中に發見することを得た譯で佛教文化史の研究の上に一黎明を齎したものであらう。その外、東西廻廊址及その各北端に於て講堂址の東西兩外側の地點に經藏、鐘樓と推定さる可き建築址を発見、又塔址の南五十尺の地點に中門址と推定出来る遺構を発見した。又更に各建築址の周圍より各種の瓦、金銅製の光背殘片、其他我が飛鳥時代の佛像に見る手法と同一形式の金銅製菩薩像、石製如來坐像等を發掘した。

尙同發掘の主査は石田茂作で、外に慶州博物館の齋藤忠、及東京帝室博物館の關根龍雄が従事した。(考古學雜誌二六ノ一〇彙報に依る)(圖版一〇五頁參照)

奈良帝室博物館佛像佛畫供養會

奈良

帝室博物館では彼岸の中日である九月二十三日、興福寺板橋貞俊師を導師とし山口館長以下全館員參列して、同館に陳列中の佛像、佛畫に對する供養會を執行した。今後春秋の彼岸毎に行ふ由であ

折乾板を以てそれぞれ實大撮影を試み、南壁は左右各々四區に區分して二分の一縮寫を行ひ、又持送りは下方より數へて第一段、第二段をそれぞれ實大に撮影し、第三段、第四段並に天井は適宜縮寫を行つた。小墓は西壁を三十六區に區分して半折乾板を以て實大撮影を行ひ、他の三壁及持送面、天井面は四切判又はカビネ判を以て適宜縮寫を行つた。この外に他日の原色版複製の用意としてそれぞれ四色版撮影を行ひ、又剥落して畫様の辨じ難い部分は特に赤外線用乾板を使用した。尙、寫眞の一部を掛幅並に巻物仕立として、大墓壁面五大幅、持送面六卷、小墓壁面一大幅を作り、墓室現狀の實大複製を試みた。

正倉院曝涼 正倉院の恒例曝涼は十月十七日より十一月十五日迄と定められ、十月十七日より十一月二日迄は御物曝涼、調査及寫眞撮影、十一月三日より同十二日迄は御物拜觀、同十三日十四日の兩日は、寶器點査及庫内清掃に充てられた。尙曝涼中許可を得て拜觀を終へたる人員は邦人五百八十二名、外人六十名であつた。

北見郷土館開館 北海道網走郡網走町に同地方の郷土史、産業、教育上の參考資料を蒐蔵する綜合的郷土博物館が設立された。陳列品中にはアイヌ人の土俗工藝品約一千點、考古學資料三千餘點が含まれてゐる。(便覽五一頁参照)

日本民藝館開館 柳宗悅、河井寛次

郎、濱田庄司等の建設にかゝる日本民藝館が東京市目黒區駒場町に竣工し十月廿四日開館式を舉行した。同館の設立計劃は大正十五年に着手され、爾來民藝品の蒐集に、地方工藝との接觸に、展覧に、出版にその事業を進めて來たが、昭和十一年十月大原孫三郎の好誼に依つて建物が竣成した。(便覽四九頁参照)

三傑大茶會 尾張の地に縁の深い信長、秀吉、家康三英傑の遺徳を顯彰する三傑會茶會がその發會式を兼ねて十月廿五、六兩日名古屋徳川家園内に舉行された。徳川美術館には同館所藏と益田家所藏の隆能源氏物語繪卷四卷をはじめ三傑に因む遺品遺墨が陳列され廿八、九の兩日には一般に公開された。

十一月

平壤附近高句麗古墳の發掘 日本學術振興會は朝鮮古蹟研究會に對し昭和十一年度より三ヶ年間「朝鮮の古蹟調査」のため年八千圓宛を補助することとなり、よつて同會では從來殆んど顧みられなかつた高句麗及百濟の遺蹟の調査に力を注ぎ、尙ほ新羅、任那の遺蹟にも餘力を向け、個々の遺蹟の精密なる發掘調査と共に、全面的の遺蹟の分布配置等をも調査する方針を執つた。よつて十一年度にあつては藤田、原田、梅原、小場、四研究員の合議の下に左の三種の調査計畫を立て本年七月より之が準備に着手し、

九月より實施した。

一、高句麗時代の古墳の發掘調査

二、高句麗時代の遺蹟の地理的調査

三、百濟時代古墳の發掘調査

以上の中第二の調査は藤田研究員の擔當で、主として遺蹟の分布狀態を調査し古代の邑落、城址、古墳、寺址等の關係を明にし、其の範圍を知らんとするものであるが、本年夏期の天候不順に禍せられ、黃海道の一部を調査し得たに過ぎず、十二年に調査續行の筈。第三は梅原研究員の擔當で、昭和十二年四月に忠清南道扶餘郡内に實施する豫定。さて、第一の高句麗時代古墳の發掘調査は主として古墳の構造様式の研究と壁畫の發見とを目標とし、寫眞撮影並模寫をも併せ計畫し從來より壁畫古墳の所在地として知られた平安南道大同郡林原面及び柴足面に調査地域を選定し、九月十日作業を開始し、十一月一日に至る迄に二十一基の古墳調査を實施した。その内發掘調査を終了せるもの七基、外形の調査に止めたもの二基、種々の理由によつて概観或ひは中止せるもの十一基で、他に盜掘墳一基の調査を行つた。これ等の古墳の多くは高句麗式持送り天井を有する石槨、土塚であるが、その中二基の壁畫古墳、一基の異式石槨を有する古墳が發見された。異式の古墳とは、柴足面土浦里第一號墳で、本古墳の特長は「一、玄室の形が方形又は是に近き矩形にあらずして、細長き楕形をなして、幅、高さ等狭

く、個人墓の形式を採り、彼の石棺と趣を同じくすること、二、從つて天井は持送り式にあらずして平天井をなすこと、三、玄室各壁は一枚宛の長大なる花崗岩の切石を以てし痘痕仕上に似たる面は漆喰の化粧塗にも優る美的效果を有すること」で、當事者はかゝる構造を百濟古墳と何等かの關係にあるであらうと考へてゐる。

次に二基の壁畫古墳のうち、第一は内里第一號墳、第二は高山里第一號墳である。前者は持送天井を有する單室土塚で、主室の四壁には四神が畫かれてゐたのであるが、今は剥落甚だしく明かではない。然し持送部にはあざやかなる彩畫が残り、殊に六朝式の唐草と、それに連る山と樹とを畫いた見事な風景、或は環文など注意を要する。

次に高山里第一號墳は現在天井部全く失はれてゐる程破壊甚だしきものであるが、構築當時は玄室はもとより羨道に到るまで壁畫が描かれてゐたもので、玄室四壁に雄勁なる筆致を以て描いた四神はよく六朝時代の畫風を窺ふに足り、本壁畫中に壁畫の銘と覺しき文字が記るされてゐるのは、輯安縣牟頭裏塚の銘文と共に貴重な資料であつた。(考古學雜誌二十

七ノ二號報による)(圖版一〇六頁参照)

エラスムス像オランダに貸與 オラ

ンダではエラスムスが死んで本年は四百年に當るので七月ロッテルダム市の主催で四百年記念祭を行ふことになり、去る

一月同市より東京帝室博物館陳列の國寶エラスムス立像の借用を外務省へ依頼して來た。貸出に就て所蔵主栃木縣足利郡吾妻村淨土宗龍江院側は萬一の事故を惧れて一時反對したが、竟に應諾し、六月

十六日國寶保存會の承認の上七月十一日横濱出帆の郵船靖國丸で發送、八月十七日ロツテルダム入港、ボイマン博物館に陳列され非常な人氣を博した。記念祭終了後九月十八日國際汽船衣笠丸に積まれ十一月二日横濱に安着した。尙國際文化振興會では同像の複製木彫二體を造り一體はロツテルダム博物館に、他の一體はベルギーのエラスムス博物館に寄贈することになった。

書道博物館開館 中村不折が日清戰役當時から全財産を投じて蒐集した書道に關する珍書、古美術品一萬六千點を收藏する「書道博物館」が下谷區上根岸町一二五の同邸内に昨年末から本年にかけて竣工し、同人は一月中旬之を財團法人となし、四月頃より一般に假公開したが、十一月三日の明治節に正式の開館式を舉行した。(便覽四八頁參照)

「東京美術研究所」の設立 脇本十九郎、大口理夫の兩名は十一月三日東京市芝區翠平町虎之門會館内に東京美術研究所を設立した。さし當つての事業として明年より東洋美術史研究の月刊雜誌「畫說」を發刊する筈。(便覽三一頁參照)

シュブランガー博士來朝 ベルリン大學哲學教授、日獨文化協會總裁シュブランギー博士は十一月九日學者使節として來朝したが、其際日獨文化協會への贈物としてドイツ政府から託された十六世紀の木版、銅版、繪畫等約一千六百種を持參した。

保存協會の記念祝賀式 史蹟名勝天然紀念物保存協會の創立二十五週年記念祝賀式は十一月十日午後五時から上野精養軒に開催、細川護立侯、黑板勝美博士以下協會關係者約五百名出席、會長平生文相の挨拶に次いで物故功勞者追悼式、地方功勞者表彰式が行はれ、全國の保存事業功勞者二百八十名が表彰された。

四天王寺五重塔再建 一昨年の近畿大風水害で倒壊した大阪四天王寺の五重塔再建に關する材料の問題で、寺務當局の希望である木造再建の計畫が市街地建築物法に牴觸する爲、府建築課では耐震耐火を慮り、基礎及中心工事を鐵筋にすべしとの見地を執り、寺院側はこれに對しその傳統的立場から木造建を極力主張し、世人の注目を惹いたが、九月下旬内務省より木造差支へなしとの許可が下りたので、同寺では十月十三日盛大な地鎮祭を執行、十一月十日正式に府建築課に建築許可願を提出した。

西澤玩具研究所開所 日本畫家西澤篤畝は先考故西澤仙湖翁の二十三回忌を記念して仙湖翁及同人の蒐集による人形玩具研究文獻並參考品を收藏する「仙湖記念西澤玩具研究所」を東上線武藏常盤臺に建設し、十一月十一日開所した。

尙同所は紹介ある者に限り觀覽を許す筈。(便覽四八頁參照)

史蹟名勝天然紀念物調査會官制の公布 史蹟名勝天然紀念物の保存に關する重要な事項を調査審議する史蹟名勝天然紀念物調査會官制が十一月十一日新に勅令に依り公布せられ、從來の史蹟名勝天然紀念物調査委員會規程は十一月十二日附を以て廢止となった。(便覽七頁參照)

帝室博物館社寶物受託規程 十一月三十日宮内省令第十二號を以て帝室博物館社寶物受託規程が公布され、翌十二月一日から施行された。(便覽四七頁參照)

十二月

坂崎坦に學位授與 坂崎坦は豫て早大文學部に「十八世紀フランス繪畫の研究」の論文を提出中であつたが、十二月三日文學博士の學位を授與された。西洋美術史專攻では最初の學位である。

榮厚湯島聖堂に古銅器寄進 滿洲國中央銀行總裁榮厚は日滿文化協會總會の爲來朝中であつたが、十二月四日湯島聖堂に參拜し秘藏の古銅器五點(爵二、鼎二、觚一)を聖堂に寄進した。

秋津野古美術館 奈良縣吉野郡川上村西河、徳田公作方では今夏家屋修理の際屋根裏から古文書、刀劍、佛畫等約四百點を發見、同家ではその散佚を防ぎ且つ一般に公開するため居宅に隣接して陳

列室を建て、秋津野古美術館と命名、十二月六日開館式を行つた。

新田神社寶物殿開館 鹿兒島縣薩摩郡川内町國幣中社新田神社寶物殿は校倉式鐵筋コンクリート造、建坪十五坪、總工費一萬圓を以て建築中であつたが、此の程竣工し、十二月十五日修祓式を行ひ即日開館した。(大朝鹿兒島版一二・一七ニ據ル)

重要美術品等認定 重要美術品等調査委員會は十二月十七、十八兩日文部省で會議を開き、河原會長外各委員出席審議の結果、文書典籍書蹟、百十點、繪畫四十三點、彫刻二十五點、建造物十一點、工藝品四十四點、考古學資料二十八點、刀劍四十一點、合計三百三十二點を新に重要美術品として認定することに決定した。

ロンドンの日本古美術展沙汰止み

英國ローヤルアカデミーでは一九三九年から四〇年にかけて日本古美術展覽會を開催せんとして、英國政府を通じて今夏外務當局に對し公式に出品を招請して來た。該計畫は日本文化の宣揚及國際親善の點から極めて有意義であるが、同展は出陳點數千二百點、内國寶百餘點の出品を希望する大規模な計畫であるため、國寶並重要美術品の貴重性から、其の大量搬出は危険視され、又最近、國寶保存委員多數の國寶搬出絶対禁止の強硬論もあり、成行は一般注視の的となつてゐたが、本年末の回答期限を前にして、十二月廿二日外務次官々邸に於て、外務、文

部、宮内三省の聯合會議が開催された。その結果、終に自重論が勝を占め、申し込みを謝絶する事に決定した。開催希望の外務省側も國寶保存會の意圖が、國寶の大量搬出に反對なことが明白である以上、姑息的に行ふよりは寧ろ謝絶す可しとの意見に一致した譯である。外務省では早速此旨を吉田駐英大使を通じてローヤルアカデミー宛通告した。(都新聞一二、二三に依る)

探幽の遺骨埋葬式 狩野探幽の墓は目黒區中目黒天台宗永隆寺に在り、大森池上本門寺南之院の狩野家墓所には探幽の碑があるだけであつたが後裔の狩野探道は十一月二十日永隆寺の墓を發掘、翌十二月二十五日南之院に遺骨を埋葬した。尙狩野家墓所は目下史蹟假指定になつてゐるが、近く史蹟に指定される筈。

曼殊院國寶、帝室博物館に買上 由緒深い寺院の財政上の窮乏を救ひ且つ國寶保存の萬全を期する爲、東京帝室博物館では、京都の名刹曼殊院所藏の國寶繪畫文書等の中九點を買上げることとなり、十二月二十六日國寶保存會常務委員會は此の件を可決した。(一九三頁参照)

藤原京發掘經過 本年は二月より前年に發掘した大宮土壇附近一帯の地を徹底的に發掘して遺構の有無を調べたが、學校役場等の建築のため破壊されて確かな痕跡を發見出来なかつた。但し大宮土壇西方の殿堂の北側に接續する廻廊址の一部分を見出した。次に大宮土壇南方一

帯にある建物の遺址を調べんとして先づ大宮土壇西南方約一町半の所にある瓦塚の附近を發掘した。然るに此處より地下一、二尺の地點から根石を發見し、續いて正面七間、側面四間の殿堂址を發見した。次にその南方約七十尺の地點よりも又同じ性質の遺構を發見した。以上は五月頃迄の調査であるが、六月以降農繁期に入つたので一時調査を中止し、收穫を待つて十一月より發掘を開始したところ、さきに發見した殿堂址の南方約百尺の地點にある瓦塚の附近より又正面七間、側面四間の殿堂址を見出した。今のところ此の二つの建物は南北線上にならび何れも大規模なもので一番北のものは間口百二十三尺、奥行三十九尺、第二のものは九十六尺に三十九尺、第三のものと同じく九十六尺に三十九尺で、之等の位置竝に規模から見て或ひは平城平安兩宮などに於ける十二堂などに該當するものではないかと見られてゐる。先年發掘せる大宮土壇北側の北門址より今回發掘せる第三の殿堂の南端迄は約千三百尺ばかりである。尙此附近に多くの殿堂址が發見される見込である。

從來喜田貞吉博士は耳成山の南を藤原宮の位置と主張してゐたが、今次、高殿發掘の結果を認め、こゝをも藤原宮と認するに至つたので博士は高殿と耳成山の南との二ヶ所に藤原宮址を認めることになつた。而して博士は高殿遺跡を持統天皇の宮となし、耳成山南方を文武天皇の

藤原の宮と認めてゐる。之に對して足立康博士は高殿以外には藤原宮址を認め難いことを擧げて喜田博士説を反駁した。尙十一年度に於て足立、喜田博士は藤原宮址に關し左の如く討論を行つてゐる。

喜田 藤原京再考(夢殿六月)

足立 藤原京擴張説(史蹟名勝天然紀念物 七月)

喜田 藤原宮移轉説(同 八月)

足立 再び喜田博士の藤原宮説に就て(同 九月)

喜田 藤原京と藤原宮とのことに就て(同 十月)

足立 三たび藤原宮説に就て(同 十一月)

喜田 藤原宮と藤原京とに就て(同 十二月)

(圖版一〇五頁解説) 五八三發掘地城の大觀、南方の空中より見る、中央の森が大宮土壇、後方の山は耳成山、昭和十一年中に於いては、大宮土壇の西側を南北に走る小路の西側から東面せる大殿宮址が四棟分發見された。五八四根固め栗石、礎石は全部移動されてゐるが、その地盤を固めてゐた栗石がよく残つてゐるので建物の平面が判る。

上代皇居址の研究 日本古文化研究所では神武天皇から天武天皇迄の皇居址の研究をなす材料を蒐集するを目的として、一方ではそれ等に關する文獻を集成し、他方ではそれ等の宮址の傳説地を踏査して寫眞の撮影、地籍圖の複寫、實測圖の作製等を行ひ、之等の兩方面から

歷代皇居址の位置を出来るだけ調査することとなり、十一年中には神武天皇より崇神天皇迄の皇居址に就て調査を完了した。主査は宮内省の圖書寮編輯課長芝葛盛博士で、現地調査には足立康博士が當つてゐる。

十一年度國寶建造物修理

十一年度修理竣工建造物 十一年度に於て修理竣工せる建物左の如し

竣工月	名	所在地
一月	錦織神社本殿	大阪府
二月	淨妙寺多寶塔	和歌山縣
四月	當麻寺講堂	奈良縣
五月	春日神社著到殿	同
六月	妙心寺山門	京都府
同	大龍念佛寺本堂	同
七月	長弓寺本堂	奈良縣
同	意賀美神社本殿	大阪府
同	天滿宮本殿	和歌山縣
八月	鶴ヶ岡八幡宮石鳥居	神奈川縣
九月	石手寺塔婆	愛媛縣
同	寶嚴寺觀音堂	滋賀縣
同	三寶院純淨觀及唐門	京都府
十月	玉村八幡宮本殿	群馬縣
同	筑摩神社本殿	長野縣
同	若一王子神社本殿	長野縣
十一月	延曆寺開山堂	滋賀縣
同	石手寺三重塔	同

愛媛縣溫泉郡道後町石手寺の三重塔の修理工事は昭和十年七月十日に起工し十一月九月九日に竣工した。總工費二萬八

千九百餘圓。塔婆はその構造形式から大體鎌倉後期の建築と推定され、創建以後永正、元和、寛文、寛延、明治等に補修が行はれたが、殊に永正十一年及寛延二年には大規模な修理が行はれた事が今回判明した。又初重の内部に於ては來迎壁の表裏の佛畫及周圍羽目板の八祖像、小壁の飛天等の壁畫があり、修理前には指頭を觸るも脱落する程に破損してゐたが剝落止めの工法により完全な修理が施された。同壁畫は修補の部分が多いが大體塔と同年代のものである。(圖版一〇五頁、五八二参照)

十一年度修理續行主要建造物

法隆寺

昭和十一年度に竣工した建造物は西圓堂で、之は昭和十年九月一日に着手、昭和十一年十一月三十日に工期十五ヶ月で修理竣工した。西圓堂は寺傳に元正天皇の養老二年橘夫人の本願により僧行基の創立と稱す。永承三年顛倒せるを建長元年再建せるものが現存の堂宇で其後應永五年、弘化二年兩度の大修理をうけ、尙文政八年に向拜が附せられた建物である。今回の修理に際し後世附加の向拜とその基壇を撤去された。修理中に發見せるものに、小屋組貫束の建長二年の墨書、應永五年、弘化二年の棟札、その他應永四年、文久二年、天保、弘化等の刻名ある瓦、舊須彌壇の遺構、天文十八年、二十年、慶長三年等の壁落書等がある。この工事費は約三萬五百圓であつた。

尙修理續行中の建造物には大講堂が昭和十年八月に起工せられ、十三年十一月末日竣工の豫定で清々工事が進められてゐる。十年度に於て、建物解體の結果今迄判明しなかつたものと構造形式が發見せられ、嚴密な調査を経て多くの現状變更がなされた。大講堂は延長三年雷火にものと講堂が焼失して、正暦元年京都法性寺中普明寺の建物を移建したのが現存の堂宇である。當時堂は桁行八間、梁間四間、須彌壇は土壇で四周石積、正面は扉構へ六であつたらしい。それが鎌倉室町の補修を経て多少變更が加へられその後慶長に屋根を解體修理し、入母屋の妻飾が鳳凰堂のそれに見るやうな家紋首であつた形式を虹梁大瓶束に變へ屋根の形式を變更した。その後元祿に廂を本屋に取り入れて、現状の如き九間堂としたことが判明した。その他現在の佛壇を除去せるに須彌壇の下に舊瓦敷須彌壇が發見された。十一年の修理再建に際し之等を舊狀に復すため左の現状變更が行はれた。

- 一、妻飾ノ三斗虹梁大瓶束組ナルヲ扱首組ニ改メ軒出及ビ軒反リヲ變更シ、之ニ伴ヒ屋根ノ形ヲ調整セントス
- 二、化粧種間ノ板張りナルヲ漆喰塗ニ改メントス
- 三、外周間斗束兩側ノ添木ヲ除去セントス
- 四、後補ノ貫及ビ長押ヲ撤去セントス
- 五、建具裝置ヲ變更セントス
- (イ) 正面中央五間及ビ背面左右各一間ノ扉構ヘノ高サヲ増シ地長押ヲ地覆ニ改メ扉建込方式ヲ變更セントス
- (ロ) 兩側面及ビ背面中央各一間ノ扉釣方式ヲ改メントス
- (ハ) 正面兩端ヨリ各第二間ノ葺戸ナルヲ扉構ヘニ改メントス
- 六、内陣大虹梁下方中央ニ補入シアル三所ノ柱、斗拱、及ビ貫ヲ撤去セントス
- 七、木造佛壇(勾欄付)及ビ來迎壁正面ノ板張りヲ撤去セントス
- 八、前二項ニ隨伴シ、桁行六門、梁間二間ノ内陣天井及ビ同所ノ斗拱ヲ復舊整備セントス
- 九、内部後方兩隅方一間ノ物置ヲ撤去セントス

之により大講堂は桁行九間の外は藤原時代の舊規に復原され、十三年末には、その堂々たる外觀を現はす譯である。

今回の根本修理に際し礎石を掘り起した所、底の面にも元礎石として使つた縁形があり、尙又現在の礎石の位置を少し外れてこの礎石を使用した痕跡が發見され、興味ある資料が學界に與へられた。地藏堂は西圓堂の竣工に引き續いて直ちに着手され、昭和十一年度に於て解體を終つた。此の堂はもと法隆寺伽藍の本堂であつたのを近世現在の位置に移建したものと云はれてゐる。棟木の銘によれば應安五年の建立で、初めは檜皮葺であつたのを永正十五年瓦に葺替へたこと、天正十三年に修理された事が須彌壇、後壁に記されてゐた。現在の建物を見るに前面向拜部は桃山時代に附加されたものと思はれ、背面軒下には物置を假設し、左右軒廻りには支柱を建て、軒垂下を防ぎ、更に正面兩端の間、側面後端の間は葺戸を白壁に改造し、正面及左右の建具にも夫々變改の跡が認められ周圍に廻縁のあつた痕跡をも残してゐる。

上記建造物の修理の他、金堂の壁畫の壁體振動實驗、同じく遮蔽裝置取附等が行はれた。又昭和十年度に於て撮影した金堂壁畫の原寸大の寫眞は十一年度に於て保存のために寺院に於て之をコロタイプに印刷し帝室博物館及内外の各大學圖書館、公私の美術館、博物館等に頒布することとなり、目下印刷中である。頒布數は廿部に達する由である。之に引續き十二年度の計畫は大講堂、地藏堂の修理を續行し新に東院の夢殿及廻廊の修理に着手し、又東大門北側に鐵筋コンクリート造の寶藏が南北二棟新に二年計畫で建てられ、多くの佛像經卷、その他の寶物類がここに蒐藏される筈である。

(圖版一〇四頁解説) 五七四は解體を終り礎石を掘り起した法隆寺西院大講堂の修理進行中の狀況。圖中、中央部上の破損せる瓦の散亂せる部分が發見された佛壇。根柢ぎした柱、凝灰岩の礎石、礎石の穴等が見られる。五七五は大講堂がもと八間堂であつたことの一つが此の圖の柱頭の構造によつて知られる。もと此の柱は内陣の西北隅の柱であつたのに西へ一間、元祿の修理の時柱間をふやしたため現在は内陣の隅柱になつてゐない。然

し解體の結果内陣の隅柱であつた證據は此の圖に歴然としてゐる。五七六、五七七は屋根を解放した結果、元祿追加の部分と、もとの部分との飛簷垂木の納め方に土居の上に乘つた部分と土居の下に納つてゐるものとの手法の相違があつて、追加部分が歴然としてゐる。五七八、この事は五圖の母屋に就ても明瞭であらう。五七九、慶長修理の際もとの家紋首の屋根を變更して圖に見るやうな形式に變へた。五八〇、ところが今回解放し苦心探査の結果藤原時代屋根妻の形を決定し得る主要な古材を見出した。この圖はそれをもとあつた姿に組み立てゝ見た圖で今回之を本として藤原の形式に復原されることになつた。五七三、修理竣工した西圓堂、文政八年に附加された大きな向拜が撤去されて、この圖のやうに堂の姿がその全容を現はすやうになつた。

東大寺大湯屋

室町初期のもので所謂大湯屋の形式の重要なものであるが殘念なことにはその後特に江戸時代姑息な修理を行ひ改惡をした。殊に嘉永二年の修理は最も形式を亂してゐる。今回修理に際し種々調査し主として嘉永二年の修理を舊規に戻さうとして屋根、軒、入側の構架を委しく調査の上原狀に變更した。更に風呂の釜のある部分、背部の焚口の調査を充分にして其結果に基づき舊狀をはつきり示すやうにした。之により所謂大湯屋の形式がよく解るやうになつた。

姫路城

西ノ丸の保存工事に着手したのは昭和十年二月の事で其の後第二豫備金支出や豫算の追加があり工事は前後三ヶ年に互

り昭和十二年度で終る事になつてゐる。此の西の丸の工事中最も注意すべきものは化粧櫓とその長局と呼ばれてゐる渡櫓との意匠特に室内の裝置である。此の部分分は當時の本多家へ興入れした千姫の居住にあてたものと傳へられ（御殿は別に三の丸に作つた）化粧櫓は千姫が日々その廊下の窓から山向ふの八幡を禮拜した所と言ひ傳へられ立派な書院式の造りになり壁模等は極彩色の貼付になつてゐた跡が今も残つてゐる。長局は其の扨從する女官の部屋で十幾つの部屋が廊下に沿つて並び夫々の主室には控室がつき、室内内法下は板壁にやはり極彩色がしてあつた。今も壁や柱の一部にその跡が明かに残つてゐる。斯うした規模の建物も其の後年を経て改修され殊に江戸晩年から明治初年にかけて蕪雜極まる手入れに遭ひ昔時の面影を残す所が尠くなつてゐたのであつたが、今回の修理に際しては是等の點を残存手法資料等によつて詳細調査し夫々復舊するの手續を重ねた。化粧櫓等は東側一杯の出格子窓、南入側一面の大きい窓等が復舊されて城郭建築中に珍しい書院風の遺構が見られるやうになつた。城郭建築中にはよく月見櫓等と呼ばれて眺望を主とした櫓建築があるが此の化粧櫓程の豪華なもの他に例をあまり見ない。長局の内部裝置や裝飾も他例がないものと言つて良い。

尚修理保存に關し、姫路市文部省協力の下に姫路城全部にわたつての調査を

十、十一、十二の三ヶ年に互つて行ふ事とし十一年度には天守閣その他最も重要な部分の調査を行つた。

（圖版一〇五頁解説）五八一は姫路城西ノ丸の渡櫓の中部折れ曲りの部分を修理に着手して屋根を下し壁を除いた後の柱や貫梁ばかりの云はば骨組のみの姿である。此の折曲りの部分は中世石垣が崩れ渡櫓の一部も壊れたので是を姑息的に修理をして斯う言ふ不自然な形に納めたものであつたが、今回の修理では此の骨組に残る貫や梁の痕を調べ石垣の根石の埋れてゐたのを探し出して立派に舊形に復す計劃である。竣工は十二年夏になるが出來上つた後の姿と較べて見ると興味多い事であらう。

松生院本堂

鎌倉時代の建築で意匠の面白い纏つた建物であるが、桃山時代に海草郡東山東村宇黒岩より現位置に移建した際屋根の形を變へ軒も切りちぎめて全く舊觀を損ひ、周圍に雜然たる加設物を加へた。今回の修理に際し小屋の中から發見された

古美術講演會及講座

一月

佛教美術研究會 一月十二日

新樂師寺香樂師拜觀 明珍恒男解説講演

史學會講演會 一月十八日 於帝大山

上會議室

「日本古文書の分類法に就いて」黒板勝美

奈良帝室博物館列品講座 一月十八日

復舊の資料に基いて、縮めた軒を舊規に復し、屋根を入母屋造の立派なものに復

原し、尙加設物は全く除いて窓や建具を復舊し鎌倉時代の特徴を發揮せしめた。工事は十二年に竣工の豫定。

伊豫松山城

数年前より種々計畫中であつたが愈々九月着手、國寶の一部である筒井門及乾門の修理に着手し目下續行中である。更に先年焼失した天守の一郭を十數萬圓を投じて復舊する計畫も着々進められてゐる。

瑞龍寺

曹洞宗の伽藍として注意すべき平面を持ち、前田利常の經營にかゝり、當時の名工の手になつたものである。國寶總門、佛殿、法堂を全部修理することになり、十一年から十三年にかけて修理を行ひつゝある。工費は約八萬圓、その他消火施設費等一萬圓である。

「嚴子陵及び虎溪三笑圖を中心としたる山樂に就て」土居次義

第一回大和談話會 一月二十五日

於奈良市高天市町合同電氣支店、大和國史會主催

二月

奈良帝室博物館列品講座 二月一日

「日本建築の三様式に就て」岸熊吉

浮世繪同好會講演 二月四日 於日本橋經濟俱樂部 石割松太郎
藤森成吉講演 二月八日 於東京美術學校「渡邊羅山に就て」

三月

奈良帝國博物館列品講座 三月七日
「日本古代の鑄銅術に就て」梅原未治
浮世繪同好會講演 三月十三日 於日本橋經濟俱樂部
「元祿期舞臺の實際」石割松太郎
飛鳥文化大講演會 三月二十日 於大阪朝日會館、大阪朝日新聞主催

四月

奈良帝國博物館列品講座 四月四日
「琵琶に就て」大宮武磨
浮世繪同好會講演 四月十七日 於日本橋經濟俱樂部
「錦繪はどうして作られたか」藤懸靜也
「印度藝術の變遷」野口米次郎
奈良帝國博物館列品講座 四月十八日
「粉河寺繪緣起に就て」葛城正盛
繪卷佛畫特別展記念講演 四月十九日 於奈良縣師範學校
「繪卷物の日本化」福井利吉郎
「藤原時代の法華經を中心とした美術」望月信成

奈良朝文化展記念講演 四月二十五日 於上野・東京科學博物館、東京帝室博物館主催
「奈良朝の文化に就いて」黑板勝美

「奈良時代出土品と正倉院御物」石田茂作
奈良帝國博物館列品講座 四月廿五日
「裝飾的繪畫と粉本」龜田孜

五月

奈良帝國博物館列品講座 五月二日
「栗原寺の露盤に就て」足立康
浮世繪同好會講演 五月十四日 於日本橋經濟俱樂部
「長唄表紙繪の變遷に就て」木村捨三
「宮崎友禪に就いて」田中喜作
奈良帝國博物館列品講座 五月十六日
「奈良朝彫刻に就て」新納忠之介
第三回東方文化學院東京研究所講演會 五月二十一日 於東大法學部第二十五番講堂
「支那建築の發生と發達」伊東忠太
啓明會講演 五月二十二日 於麴町日本生命館講堂
「印度文化の大觀」野口米次郎
源豐宗放送五月二十三日 JOAK第二
「日本彫刻の特徴」
國際文化振興會講演會 五月二十九日 於京都ホテル
「日本畫の鑑賞」矢代幸雄
考古學會講演會 五月三十日 於東京美術學校大講堂
「滿洲國輯安縣に於ける高句麗の遺蹟」池内宏
「考古學と建築史學」藤島亥治郎

六月

奈良帝國博物館列品講座 六月六日
「孔雀明王に就て」春山武松
浮世繪同好會講演 六月十九日 於日本橋經濟俱樂部
「浮世繪と江戸の名橋」鷹見安二郎
奈良帝國博物館列品講座 六月二十日
日本彫刻史連講、其の一「飛鳥時代」金森遼

七月

奈良帝國博物館列品講座 七月四日
「塔婆の話」岸熊吉
浮世繪同好會講演 七月十日
「近世初期の風俗畫に就いて」藤懸靜也
「版畫について」吉田博
奈良帝國博物館列品講座 七月十八日
「彫刻史に於ける貞觀樣式の源流」源豐宗

八月

恩賜京都博物館夏季講習會 八月二日
日程は左の通り、
第一日午前「技法上より見たる 明珍恒男
午後岩栖時代（後藤所乘遺蹟）參觀
第二日午前「佛教經典の裝飾 秀氏祐祥
に就て」
第三日午前「支那陶磁器の技 小林 忍
術的考察」
午後 京都御所拜觀
第四日午前「山樂と山雪」 土居次義
第五日 大和當麻寺參觀

聖樂古寺巡禮講演會 八月二日—七日
日程は左の通り

第一日 東大寺見學
「法華堂の佛像について」望月信成
第二日 淨瑠璃寺、恭仁京址見學
第三日 法隆寺見學

「法隆寺の諸問題」足立 康
第四回 西之京見學
「華嚴五十五所繪卷」福井利吉郎
第五日 室生寺見學

「弘仁期の佛像」金森 遼
第六日 當麻寺、道明寺見學
「伽藍配置と時代精神」中村直勝

高野山夏季大學 八月三日—五日 於
大師教會、古義眞言集宗務所、大阪朝日新聞社共同主催
美術に關する講演は左の通りであつた。
第二日「書及び墨拓の妙味」岡野養之助
第三日「美術に及ぼしせ密教 堀田眞快
の影響」
「能と面」 金剛 巖

大和史蹟臨地講座 八月五日—十一日
奈良縣學務部、大和國史會共同主催
日程は左の通りであつた。

第一日午前 奈良縣公會堂にて
「美術史より觀たる 足立 康
日本國民性」
午後 春日神社、興福寺見學
第二日 聖武天皇御陵、平城宮址、藥
師寺、唐招提寺、生駒山上見
學

第三日午前 法隆寺三經院にて
「聖德太子の憲法」 佐伯定胤
午後法隆寺、當麻寺見學

第四日午前 畝傍建國會館にて

「日本建國精神」 魚澄惣五郎
午後飛鳥地方見學

第五日 午前 吉野山見學

午後 吉野町公會堂にて

「大和を主とした 喜田貞吉
の古代史」
第六日 午前 室生寺にて
「神武天皇の聖蹟
に就て」 藤田元春

午後室生寺見學
第七日 宇陀櫻井地方見學

九月

奈良帝室博物館列品講座 九月五日

「般若寺藏弓箭に就て」 大宮武磨
同九月十九日

「彫刻の鑑賞」 明珍恒男

浮世繪同好會講演 九月二十二日

「浮世繪の發生に就て」 奥平英雄

「無題」 三原繁吉

考古學會講演 九月二十六日 於東京

美術學校第一講義室

「金文に現はれたる歸物師の本貫」 香取

秀眞
「佛領印度支那東京平野出土
の青銅器物に就ての「考察」 小林知生

啓明會講演會 九月二十六日 於日本

工業俱樂部

「熱河遺蹟の建築史的價值」 伊東忠太

十月

奈良帝室博物館列品講座 十月三日

「安鎮曼茶羅圖などに就て」 龜田孜

茶わん俱樂部講演會 十月四日 於京

古美術關係彙報

橋八百善

ゾルタン・タカチ講演 十月十二日

於國際文化振興會

The Art of Greater Asia 通譯附

浮世繪同好會講演 十月十三日 於有

樂町・電氣獎勵館

「歌舞伎繪の興味」 井上和雄

「藝術的技巧を中心としたる
分身の話」 玉林晴朗

ゾルタン・ド・タカチ講演 十月二十

二日 於東洋文庫

十一月

奈良帝室博物館列品講座 十一月八日

「正倉院御物參考特別展觀品
に就て」 松島順正

第四回東方文化講演會（第三回）十一

月十三日 於東京帝國大學部第二十五番

講堂

「高勾麗丸都の遺蹟」 池内 宏

國華社茶話會講演並二展觀 十一月十

四日 於麻布國華社

浮世繪同好會講演 十一月十八日 於

日本橋經濟俱樂部

「懷月堂流の美人畫に就いて」 藤懸靜也

大阪市美術館第三回美術講演會 十一

月二十一日 於同館講堂

「支那陶甕の鑑賞」 小林太市郎

「世界文化と日本美術」 矢代幸雄

奈良帝 室博物館列品講座十一月二十

一日

「日本彫刻史聯講、其の二、奈良時代」

金森遵

日本繪畫史放送十一月二十七日—十二

月二十三日

JOAKでは右期間中國民講座として毎
月、水、金の午後八時第二放送で左記の
通り行つた。

上代——天平時代 望月信成

平安——明治時代 田中一松

考古學會講演 十一月二十八日 於東

京美術學校第一講義室

「彌勒信仰とその造像に就いて」 田中一

松

十二月

野生司香雪放送 十二月十日

「印度鹿野苑の壁畫を語る」

浮世繪同好會講演 十二月十六日 於

日本橋經濟俱樂部

「享寶曆期の浮世繪」 檜崎宗重

「江戸の呉服店に就いて」 齋藤隆三

建築學會講演會 十二月十七日 於京

橋同會事務所

「印度ネバル旅行談」 天沼俊一

「熱河遺蹟に就いて」 伊東忠太

紙本墨書內典隱函音疏 第三十七小乘律之一行治製	一卷	京都府京都市東洞院通丸太町南人三木町	守屋孝藏	紙本墨書楞伽經 卷第二 (天平廿年六月廿三日願俊願經)	一卷	大阪府大阪市東區安土町	水落庄兵衛
紙本墨書大般若經 卷第五百廿二 天平二年三月上旬書寫ノ奥書アリ	一卷	同	同	紙本墨書東大寺領國防國宮野庄田畠等立券文 (建久六年九月日) 俣桑坊重源ノ棟札裏判アリ	一卷	同	上 司 暢
紙本墨書法華經 法華品	一卷	同	同	紙本墨書周防國阿彌陀寺田畠注文 (正治二年十月日)	一卷	同	同
紙本墨書華嚴孔目章發悟記 卷第二十一 凝然筆	一卷	同	同	紙本墨書後鳥羽天皇宸翰御消息 (五通) 奥ニ賀茂氏久ノ置文三通アリ	一卷	同中區本牧町	原 富太郎
紙本墨書華嚴七科章義瓊記 卷第三 凝然筆	一卷	同	同	紙本墨書後鳥羽天皇宸翰古今集拔書 (二十首) 承久四年六月廿一日ノ御奥書並ニ文永四年七月十三日賀茂氏久ノ跋アリ	一卷	同	同
紙本墨書東大寺庄園文書目錄殘卷(仁平三年四月廿九日)	一卷	同	同	紙本墨書後鳥羽天皇宸翰御詠草 (きみかよは)	一幅	同	同
紙本墨書校生勘紙帳 (八枚綴) 藏ニ天平十一年七月トアリ	一卷	左京區鷹ヶ谷宮ノ前町	小川睦之輔	紙本墨書賀茂氏久置文 (同十二年卯月廿八日)	一卷	同	同
紙本墨書錢納帳 藏ニ神護景雲四年トアリ	一卷	同	同	紙本墨書賀茂氏久置文 (同十二年卯月廿八日)	一卷	同	同
紙本墨書寫經料紙充帳	一卷	同	同	紙本墨書西蓮假名消息 (五通)	一卷	同	同
紙本墨書聖田立券文 (延暦二十二年正月十日) 愛智郡判アリ	一通	同	同	紙本墨書最澄書狀 (弘仁四年十一月廿五日泰範宛)	一幅	同	同
紙本墨書家地立券文 (嘉祥二年十一月廿日) 葛野郡判アリ	一通	同	同	紙本墨書一字蓮臺法華經 普賢勸發品 見返シニ讀經ノ圖アリ	一卷	同	同
紙本墨書孔雀經單字音義 上卷 紙背ニ文治六年ノ具注曆アリ「高山寺」ノ朱印アリ	一卷	同	同	紙本墨書源氏物語 浮舟卷殘卷 内ニ箇所ニ白描繪アリ	一帖	同	同
紙本墨書扶桑略記卷第二 殘卷(真福寺本)	一卷	同	同	紙本墨書圓覺寺禁制 (永仁二年正月日)	一幅	同鎌倉郡大船町	圓 覺
紙本墨書宋徽宗文集序 傳高宗筆	一卷	同	同	紙本墨書佛日庵公物目錄 貞治二年同四年法清、崇瑞、圭照ノ勸記アリ	一卷	同	同
紙本墨書曹助迎鑾記	一卷	同	同	紙本墨書大休正念法語 (弘安元年五月)	一卷	同	同
紙本墨書文殊八字法 寛元四年四月一日兼應書寫ノ奥書アリ	一卷	同下鴨泉川町	岩井武俊	紙本墨書劉子 殘卷 (敦煌出土)	一卷	同兵庫縣西宮市結善町	武 居
紙本墨書周書卷第十一 斷簡	一帖	同 兼寺町	猪熊信男	紙本墨書米苴草書 (元日帖) 米友仁ノ跋アリ	一帖	同	同
紙本墨書肥前國風土記	一卷	同	同	紙本墨書金光明最勝王經注釋 斷簡(飯室切) 卷第二、第六、(正應二年七月廿一日)	一卷	同武庫郡精道村	松山與兵衛
紙本墨書令義解神尼合第六 正平十七年五月十五日傳授ノ奥書アリ	一卷	同	同	紙本墨書異國降伏御祈供養注進案 (正應二年七月廿一日)	一卷	同住吉村	武 藤 金 太
紙本墨書香字鈔 上卷	一卷	同	同	紙本墨書附法傳 殘卷 (敦煌出土)	一卷	同奈良縣生駒郡法隆寺村	法 隆 寺
紙本墨書梵字形音義 卷第四 明覺撰 保安三年五月廿七日書寫校點ノ奥書アリ	一卷	同	同	紙本墨書彌勒上生經疏 上卷	一卷	同	同
紙本墨書神皇正統記 上中下	三册	同	同	紙本墨書大方廣佛華嚴經 卷第四十二 「法隆寺一切經」ノ黒印アリ	一卷	同	同
紙本墨書大般若經 附版本二十三帖	五百七十七帖	同 同慶寺部八幡町	同	紙本墨書崇俊塔銘 善承筆	一卷	同	同
紙本墨書禪定文書	百二十五通	同	同	紙本墨書七大寺巡禮私記 殘卷	一册	同	同
附紙本 禪定寺通經年次日記 (自弘長至正應) 禪定寺通經年次日記 (自正應二年至延慶二年) 禪定寺通經年次日記 (自正應二年至延慶二年) 禪定寺通經年次日記 (自正應二年至延慶二年)	册 册 册 册	同 同 同 同	同 同 同 同				

刀 無銘 傳助真 一口 東京府東京市目黒區駒場町
刀 無銘 傳正宗 一口 同
刀 無銘 傳義弘 一口 同
刀 金象嵌銘 天正三十二年江本阿彌磨上之花押 一口 同上目黒八丁目 子爵松平康春
所持箱集勘右衛門尉

工藝品之部

山科西野山古墓出土品

一、金裝大刀殘圖 附帶執革飾金具 四箇 一口
一、革帶飾石殘片 附金銀一二二箇 一口
一、金銀平股及鳳文鏡 附鏡蓋殘片 二箇 一口
一、刀子殘圖 一口
一、鐵板(一枚) 一口
一、瓦硯殘圖 一口
一、陶製水滴 一口
一、鐵釘 若干

磁製法花蓮鶯文壺

木造黑漆厨子

銅經筒

附刀子

宮地嶽古墳出土品

一、金銅製燈籠 附金銅製尾錠 三箇 一口
一、金銅製燈籠蓋輪金具 附金銅製尾錠 三箇 一口
一、金銅製燈籠蓋付輪 二箇 一口
一、金銅製燈籠金具殘圖 二箇 一口
一、金銅製燈籠 二箇 一口
一、金銅製頭推大刀柄頭小 一箇 一口
一、金銅製頭推大刀柄頭殘圖(大) 一箇 一口
一、附金銅製燈籠殘圖一箇 刀身殘片三箇 一口

昭和十一年國寶所有者變更

文部省告示第十五號

一月二十八日

舊名稱

新名稱

萬壽寺愛染堂 三聖寺愛染堂

舊所有者

新所有者

京都府京都市東山区本町十五丁目 萬壽寺 京都府京都市東山区本町十五丁目 東福寺

國寶及重要美術品

萬壽寺鐘樓 東福寺鐘樓

萬壽寺二王門 東福寺二王門

文部省告示第百號 三月十四日

千鳥蒔繪面笄 一合

文部省告示第百三十二號

木造藥師如來坐像 一軀

木造聖觀音立像 一軀

文部省告示第百五十號

紙本淡彩蘆雁圖 秋月筆 二幅

文部省告示第百八十號

紙本法華經 卷第二 一卷

文部省告示第百二十七號

太刀 銘 國光 一口

文部省告示第百二十號

紙本著色 十便圖 池大雅筆 二帖

文部省告示第百四十八號

太刀 銘 光忠 一口

京都府京都市左京區一乘寺竹ノ内町曼珠院所有ニ係ル左記國寶ハ昭和十二年二月二十八日帝室博物館ノ所有トナレリ

指定告示

明治三十九年内務省告示第百九號

明治四十一年内務省告示第百四號

大正六年文部省告示第七十二號

大正三年文部省告示第八十六號

昭和十年文部省告示第百七十二號

京都府京都市東山区本町十五丁目 萬壽寺

同上 東福寺

新所有者

兵庫縣武庫郡吉岡町 野村德七

五月二十日

東京府東京市世田谷區深澤町 長尾欽彌

同

東京府東京市深川區大橋一丁目 渡邊善十郎

七月十日

東京府東京市豊島區平河町二丁目 安田善次郎

九月七日

東京府東京市豊島區上野町二丁目 男爵岩崎小彌太

九月十一日

山口縣下關市大字關後地村 山口縣下關市丸山町 榎谷晴弘

十一月二日

東京府東京市京橋區京橋一丁目 吉田吉之助

東京府東京市豊島區水田町一丁目 伯爵伊東治正

種類

繪畫

紙本墨畫夏冬山水圖(雪舟筆)

同上

紙本墨畫松ニ鷹圖(雪村筆)

同上

紙本墨畫雪景山水圖(朱端筆)

品目

二幅

二幅

一幅

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

大正五年文部省告示第八十四號

筆蹟 紙本墨書光嚴天皇宸翰御消息

一幅

同

同上 紙本墨書御花園天皇宸翰御消息

一幅

同

同上 紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息并一通

一卷

昭和十一年重要美術品認定

文部省告示第二十六號

昭和十一年二月五日

品目

繪畫之部

絹本着色四季山水圖 興謝齋村筆 壬寅ノ年記アリ

四幅 東京府東京市深川區新大橋一丁目 渡邊善十郎

絹本着色湖石睡猫圖 渡邊華山筆 戊戌八月朔 干有五日ノ年記アリ

一幅 東京府東京市下京區今宮町 今宮神社

油畫海戰圖 若杉磯八筆

一面 東京府東京市下京區今宮町 今宮神社

絹本着色武陵桃源李白觀瀑圖 岳翁筆 絹本着色梅花書屋圖 高橋草坪筆 庚寅仲冬ノ年記アリ

二幅 福岡縣久留米市篠山町 石橋徳次郎

彫刻之部

四面線彫石佛 天治二年七月十三日ノ銘アリ

一箇 京都府東京市上京區今宮町 今宮神社

文書典籍書蹟之部

彩箋墨書古今集卷第四斷簡 (傳俊賴筆(くもの)

一幅 東京府東京市芝區白金台里町 品山一清

彩箋墨書和漢朗詠集上卷斷簡 (傳俊賴筆(子日する)

一幅 同麻布區宮村町 侯爵井上三郎

紙本墨書伊勢物語 鳥丸光廣筆

一帖 同東區居坂町 松村精一

紙本墨書後撰集卷第七斷簡 (白河切(たいしらすいくちばた)

一幅 同赤坂區青山南町 菊本直次郎

紙本墨書後拾遺集卷第九斷簡 (中庭切)

一幅 同本區馬町二丁目 瀬川昌世

彩箋墨書伊勢集斷簡 (石山切(かへしころにや

一幅 同品川區下大崎二丁目 宮地茂秋

紙本墨書柴山監物消息 卯月廿八日小田原より芝罘八郎宛

一幅 同區世田谷區澤澤町四丁目 長尾欽彌

紙本墨書堺色紙 (いたつらに)

一幅 同 同 同上

紙本墨書最勝王經註釋斷簡 (仮切室(無明隱云々)

一幅 京都府京都市下京區四條東入立賣中區之町 土橋嘉兵衛

紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡 (伊豫切(虫

一幅 大府府大阪府住吉區松崎町一丁目 山崎一保

彩箋墨書伊勢集斷簡 (石山切(ふりいてつ)

一幅 同岸和田市堤町 寺田利吉

紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡 (伊豫切(扇

一幅 兵庫縣神戸市須磨區東灘町 川西清兵衛

彩箋墨書和漢朗詠集下卷斷簡 (大内切(田家)

一幅 三重縣河津郡若松村 伊坂又右衛門

紙本墨書高光集斷簡 (傳俊賴筆(たきよの)

一幅 愛知縣名古屋市中區西堀詰町 關戸有彦

彩箋墨書貫之集下斷簡 (石山切(さくらなき)

一幅 福岡縣福岡市大字藥院 兒玉桂三

銅製流雲規矩文四神鏡 泰山作意云々ノ銘アリ

一面 京都府京都市上京區室町通一條下ル藥屋町 富岡益太郎

銅製流雲規矩文四神鏡 漢有名銅出丹陽云々ノ銘アリ

一面 同上 同上

銅製歌帶畫象鏡 張氏作ノ銘アリ

一面 同上 同上

銅製歌帶畫象鏡 吾作明意云々ノ銘アリ

一面 同上 同上

銅製畫文帶神獸鏡 仁壽始鑄云々ノ銘アリ

一面 同上 同上

銅製團華鏡 瑞牙作 安永十丑初反ノ銘アリ

一面 三重縣三重郡朝日村 小向神社

陶製神酒德利 瑞牙作 安永十丑初反ノ銘アリ

二對 同上 同上

文部省告示第二百八十五號

昭和十一年七月十三日

品名

繪畫之部

絹本着色指紳邸宅圖

一幅 東京府東京市麹町區平河町二丁目 安田善次郎

紙本著色過去現在因果經殘闕

一卷 同下六番町 前山久吉

紙本著色花鳥圖 傳雪舟筆 六曲屏

一雙 同三番町 大橋新太郎

紙本著色花鳥圖 松花堂ノ授アリ 六曲屏

一雙 同芝區高輪南町 伯爵渡邊昭

絹本着色麥穗菜花圖 酒井抱一筆 六曲屏

二幅 同麻布區島居坂町 男爵岩崎小彌太

紙本著色繫馬圖 六曲屏

一雙 同本村町 岡崎正也

紙本金地著色大迫物圖 六曲屏

一雙 同赤坂區青山南町 根津嘉一郎

絹本着色普賢十羅刹圖

一幅 同 同上

絹本着色釋迦經歷圖

一幅 同 同上

紙本著色山水圖 祥啓筆

一幅 同 同上

紙本著色周茂叔圖 傳小栗宗丹筆

一幅 同 同上

紙本著色風俗圖

三幅 同 同上

紙本著色山水圖 狩野探幽筆 六曲屏

一雙 同牛込區若松町 西脇健治

紙本著色靈昭女圖 岳翁筆 了庵ノ授アリ

一幅 同小石川區雜司ヶ谷町 保阪潤治

絹本着色一字金輪曼荼羅圖

一幅 同品川區北品川三丁目 益田孝

木造持國天立像

一軀 東京府東京市品川區北品川三丁目 益田孝

文部省告示第三百二十一號 昭和十一年九月十二日

品 繪 畫 之 部 目 所 有 者

絹本着色十六羅漢圖	十六幅	東京府東京市芝區高輪南町	公爵毛利元昭	一畫稿綴込 七枚 初二層面形波瀾圖アリ	一冊	群馬縣佐波郡名和村	泉龍寺
絹本着色百人一首畫帖	一帖	同	同	一百人一首畫稿綴込 六枚	一冊	同	同
絹本着色風雨渡江圖	一幅	同	同	一住吉名所圖繪稿 奥書ニ延寶六年四月十日藤谷理好書之トアリ	一卷	同	同
絹本着色大阪役圖	一幅	同	同	一北野天神緣起繪卷稿 奥書ニ主左近定重トアリ	一卷	同	同
絹本着色維摩居士圖	一雙	同	同	一動物戲畫稿	一卷	同	同
絹本着色寒江獨釣圖	一幅	同	同	一「長生證」稿本	一冊	同	同
絹本着色聖德太子勝曼經講讃圖	一幅	同	同	一石印	十九顆	同	同
絹本着色山水圖 曾我紹仙筆	一幅	同	同	一口宣案 (元祿十四年二月廿七日)	一通	同	同
大永三年癸未小春壽桂ノ授アリ	一幅	同	同	一尾形宗謙讓狀 (貞享元年五月十二日)以下	十通	同	同
絹本着色羅漢圖	三幅	同	同	一雁金屋臺帖	四冊	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	一尾形宗謙歌書並詩歌寫	三冊	同	同
永藏甲子曆仲冬辰日假ノ授アリ	一幅	同	同	一尾形光琳同乾山覺書帖	二帖	同	同
絹本着色妙然尼壽像	一幅	同	同	一兒島宗眞消息 (尾形宗謙宛)以下	五點	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	一慶長十七年御服分注文書以下	二十五通	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	一慶長十七年十月廿七日支拂覺書以下	二十四通	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	一光琳墓誌 (小西彦右衛門)以下	十點	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	一西吉右衛門日記以下	八點	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	一尾形宗謙覺書以下	三十一點	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	一尾形光琳新町屋敷造作控並繪圖	七點	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	一尾形家由緒覺書以下	八點	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	附、粉本畫稿切紙及型紙類等一切	八點	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	絹本着色白崖寶生禪師像 行年七十五明兆筆トアリ	一幅	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	應永龍集四年六月上齋周顯ノ授アリ	一幅	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	絹本着色東照權現像 天海ノ授アリ	一幅	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	絹本着色兒童愛犬圖 小野田直武筆	一幅	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	絹本着色紅毛軍人圖 佐竹曙山筆	一幅	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	絹本着色龍龜昆虫寫生圖 佐竹曙山筆	一幅	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	佐竹曙山寫生圖 內一冊ノ初二畫法綱領アリ	二冊	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	絹本着色燕子花ニナイフ圖 佐竹曙山筆	一幅	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	絹本着色竹ニ文鳥圖 佐竹曙山筆	一幅	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	絹本着色湖山風景圖 佐竹曙山筆	一幅	同	同
絹本着色羅漢圖	一幅	同	同	絹本着色兩國圖 亞歐堂田善筆	一幅	同	同

彫刻之部

木造觀音菩薩立像
銅造阿彌陀如來立像
背面ニ文永八年八月十一日ノ銘アリ

一軀
京都府京都市左京
區廳々谷宮ノ前町
福島縣郡郡落苗
代町
小川睦之輔
安穩寺

文書典籍書蹟之部

彩箋墨書大貳三位家集斷簡 (端白切、よこぎに)

一幅
東京府東京市麴町
區元國町
加藤正治

紙本墨書古今集卷第十七斷簡 (通切、方違に)

一幅
同
同
上
上

紙本墨書 (傳教家筆萬葉集切、呼爲部、
傳逸勢筆萬葉集注切、上り、手鑑ノ内
傳逸勢筆古鈔本切、以注略者)

三葉
同日本橋區室町二
丁目
久能木慎治

紙本墨書天正十四年禁庭櫻花歌卷

一幅
同芝區西久保廣町
七條憲三

彩箋墨書貫之集下斷簡 (石山切、よみくはへて)

一幅
同
同
上
上

紙本墨書藤原俊成筆古今集卷第三斷簡
(昭和切、さみたれ)

一幅
同
同
上
上

紙本墨書十卷抄 各卷ニ延慶二年書寫ノ奥書アリ

十卷
同中門前、丁目
松田福一郎

紙本墨書理趣釋重釋記 奥ニ天慶元年ノ識語アリ

一帖
同
同
上
上

紙本墨書大方廣菩薩文殊師利根本儀軌經卷第七一
「高山寺」ノ朱印アリ

一卷
同
同
上
上

紙本墨書梵漢大隨求明王經
嘉祿四年五月十七日修寫ノ奥書アリ

一卷
同
同
上
上

紙本墨書通明抄 第六、第七、第八、第九
宋刊辯非集 「高山寺」ノ朱印アリ

六帖
同
同
上
上

宋刊起信論疏卷下之二 奥ニ嘉定四年十月二十八日
單トアリ 「高山寺」ノ朱印アリ

一帖
同
同
上
上

紙本墨書俱舍論疏卷第五 寫嘉三年二月十八日
書寫ノ奥書アリ

一帖
同
同
上
上

紙本墨書瑜祇經口傳 德治二年四月七日
書寫ノ奥書アリ

一帖
同
同
上
上

紙本墨書華嚴經卷第十三
嘉元三年三月二日加點ノ奥書アリ

一卷
同
同
上
上

紙本墨書維摩經義疏卷第一 弘安七年十一月六日
重然加點ノ奥書アリ

一帖
同
同
上
上

紙本墨書新編佛法大明錄 卷第十、第十一、
第十八、第十九、

二帖
同
同
上
上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙 (早涼判寄社祝)

一幅
同
同
上
上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙 (詠一首和歌)

一幅
同
同
上
上

紙本墨書後水尾天皇宸翰御色紙 (山の井も)

一幅
同
同
上
上

紙本墨書後水尾天皇御添削道見法親王御連歌
附覽壹添狀 一卷

一幅
同
同
上
上

紙本墨書後水尾天皇御宸翰色紙 (よもの海を)

一幅
同
同
上
上

附覽 銘四方之海 一箇

同
同
同
上
上

紙本墨書後水尾天皇宸翰御色紙 (恨すや)
紙本墨書後水尾天皇宸翰御色紙 (深緑)
紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙 (浦人の)
紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙 (五月やみ)
紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙 (大江千里)
紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙 (詠深夜虫聲和哥)
紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙 (詠松蔭榮色和歌)
紙本墨書明國書 (萬曆二十三年一月)
紙本墨書古今集卷第十八斷簡 (萬野切、
ものをおもひ)
紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡 (伊豫切、
露)
紙本墨書文緯略 山梨稻川自筆稿本
紙本墨書伊勢物語
紙本墨書造寺料物注文斷簡 紙背ニ寫經科
紙充帳アリ
紙本墨書傳法灌頂相承略記 安貞二年十一月二十
六日書寫ノ奥書アリ
紙本墨書小野流作法傳受 建治二年五月十八日
興尊書寫ノ奥書アリ (法善寺本)
紙本墨書大般若經卷第四百 (源信長願經)
紙本墨書臨時祭樂調樂 藤原定家筆
紙本墨書相模集 嘉祿三年五月廿日藤
原定家ノ奥書アリ
紙本墨書定考次第
紙本墨書後二條天皇宸翰御消息 (二月十日、御名)
紙本墨書後花園天皇宸翰假名御消息 (冬云々)
紙本墨書後花園天皇宸翰後崇光院御月次御和歌
(嘉吉二年三年) 各卷ニ貞享元年近衛基經ノ跋アリ
紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙 (夕和調中七)
紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙 (吟三首後哥、
鳴郭公)
紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙 (玉しきの)
紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙 (磯雪)
紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙 (冬のくさ)
紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙 (分一字詩、
賦體各)
紙本墨書後土御門天皇宸翰諸社御法樂御和歌
(自明應六年八月十五日、至同八年二月二十五日)
紙本墨書後柏原天皇宸翰詞花和歌集
天正三年近衛龍山ノ跋アリ

金銀泥繪料紙墨書後柏原天皇宸翰三十首御倭哥〔卷〕東京府東京市品川區大井林町

伯爵伊達興宗

紙本墨書後柏原天皇宸翰御詠草〔每家有春〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御小色紙〔たへてやは〕一幅東京府東京市品川區大井林町

紙本墨書後柏原天皇宸翰御懷紙〔冬日詠三首和歌御名アリ〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰道寛法親王御連歌御添削御消息〔御花押アリ〕一幅

紙本墨書後奈良天皇宸翰御詠草〔二十首〕一卷

紙本墨書明正天皇宸翰御懷紙〔夕立の〕一幅

紙本墨書後奈良天皇宸翰御懷紙〔香陽對菊待月〕一幅

紙本墨書後光明天皇宸翰御懷紙〔さよふけて〕一幅

紙本墨書後奈良天皇宸翰御詠草〔梅雨〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御小色紙〔明日よりは〕一幅

紙本墨書後奈良天皇宸翰御詠草〔よるへありこ〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰廿首勅題

紙本墨書正親町天皇宸翰御懷紙〔九日詠歌宮〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙〔詠初秋朝和哥〕一幅

紙本墨書正親町天皇宸翰御懷紙〔庭菊和歌宮〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙〔詠松迎春新和哥〕一幅

紙本墨書正親町天皇宸翰御懷紙〔詠今昔織女〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙〔補陀落の〕一幅

金銀泥繪料紙墨書後陽成天皇宸翰御色紙〔あさかほの〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御消息〔奥之哥云々〕一幅

紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息〔後一月廿八日〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙〔詠雲外郭和哥〕一幅

色紙墨書後陽成天皇宸翰〔顯明、御花押〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御色紙〔春すきて〕一幅

金銀泥繪料紙墨書後陽成天皇宸翰御色紙〔むらさきの〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御小懷紙〔月きよみ〕一幅

紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息〔春景九鳥、御花押式部卿宮宛〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御小懷紙〔むめか枝に〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙〔詠柳櫻交枝和哥〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰御小懷紙〔ゆめかよふ〕一卷

紙本墨書後水尾天皇宸翰御小懷紙〔春の夜の〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰繪卷御贊〔ゆめかよふ〕一卷

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙〔詠遠山和哥〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰四季花鳥御和歌

紙本墨書後水尾天皇宸翰御消息〔中務宛〕一幅

附扇本著色四季花鳥圖一卷

紙本墨書後水尾天皇宸翰御消息〔別宮宛〕一幅

紙本墨書後西天皇宸翰百人一首〔延寶八年近衛基綱ノ歌アリ〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御詠草〔旅後〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙〔詠早春風和歌〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰白衣觀音御贊

紙本墨書靈元天皇宸翰御消息〔八月十四日、御花押内大臣宛〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御消息〔霜廿六攝政宛〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰延寶四年御會始御懷紙〔殘菊〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御小色紙〔をく露の〕一幅

附五月廿一日持明院時添狀一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙〔池月久明〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰御色紙〔詠山夕露和哥〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙〔海眺望〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰御消息〔午月九災、御花押〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙〔詠三首和歌〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙〔詠梅交松和哥〕一幅

色紙墨書後水尾天皇宸翰御色紙〔右小侍從〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙〔詠寄松祝和歌〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御色紙〔こゝろして〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙〔詠伴菊延齡和歌〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙〔詠岸千鳥和歌〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰御詠草〔初春驚〕一幅

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙〔詠遠山和歌〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙〔松かせ〕一幅

紙本墨書靈元天皇宸翰御消息 (極月十六日、御 花押右大臣宛)	一幅	東京府東京市品川 區大井町	伯耆伊達興宗	上	紙本墨書貞觀政要 卷第十 上卷、紙背ニ華嚴 紙本墨書李崎百廿詠 原稿鈔ノ書寫アリ	一卷	東京府東京市大森 區山王二丁目	德富猪一郎	上
紙本墨書靈元天皇宸翰中古三十六歌仙 寛文八年正月廿七日ノ御書アリ	一帖	同	同	上	紙本墨書不空三藏表制集卷第一斷簡	一卷	同	同	上
紙本墨書東山天皇宸翰御懷紙 (詠毎日春和哥)	一幅	同	同	上	紙本墨書大唐西域記卷第十殘卷 長曆五年正月廿九日書寫ノ奥書アリ	一卷	同	同	上
紙本墨書東山天皇宸翰御懷紙 (詠菊長生種和哥)	一幅	同	同	上	紙本墨書慈恩傳卷第十 「高山寺」ノ朱印アリ	一卷	同	同	上
紙本墨書中御門天皇宸翰御懷紙 (初春待花和哥)	一幅	同	同	上	紙本墨書涅槃經集解卷第四十二 大唐福朝二年五月廿日ノ譯經記アリ	一卷	同	同	上
紙本墨書中御門天皇宸翰御消息 (此比は)	一幅	同	同	上	紙本墨書維摩經卷中 建久〇年正月十八日 公風供養ノ奥書アリ	一卷	同	同	上
紙本墨書中御門天皇宸翰御懷紙 (花春友)	一幅	同	同	上	紙本墨書善薩藏阿毗達摩古述之記卷第一殘卷	一卷	同	同	上
紙本墨書後醍醐天皇宸翰御懷紙 (久かたの)	一幅	同	同	上	治暦〇年四月廿八日書寫ノ奥書アリ	一帖	同	同	上
紙本墨書孝明天皇宸翰御懷紙 (仙臺の中將より)	一幅	同	同	上	紙本墨書新編古今往生淨土寶珠集 宋陸師壽撰	一帖	同	同	上
紙本墨書傳伏見天皇宸翰後拾遺集拔書馬内侍	一卷	同	同	上	紙本墨書金剛手菩薩降伏一切部多大教王經卷中一卷 大承淳化五年正月 日ノ譯場刻位アリ 「高山寺」ノ朱印アリ	一卷	同	同	上
紙本墨書古今集 藤原定家筆	一帖	同	同	上	紙本墨書新編古今往來聖賢集 宋陸師壽撰	一帖	同	同	上
永仁二年京極爲範院ニ冷泉爲相ノ奥書アリ	同	同	同	上	紙本墨書華嚴經卷第十要文抄下 表紙ニ沙門釋宗性トアリ	一卷	同	同	上
紙本墨書芳野花樹會懷紙 (文祿三年二月廿九日)	三卷	同	同	上	紙本墨書初後夜作法 (慶長元年十月三日御 阿書寫ノ奥書アリ)	一卷	同	同	上
紙本墨書新井白石書翰 (住久間洞巖宛)	十卷	同	同	上	紙本墨書佛頂抄 紙背ニ消息アリ	一卷	同	同	上
紙本墨書後伏見天皇御願文案 (元亨四年五月十一日)	一卷	同大森區山王二丁 日	德富猪一郎	上	紙本墨書地藏講式 「仁和寺心遠院」ノ朱印アリ	一卷	同	同	上
紙本墨書作文大體等 紙背ニ文書アリ	一卷	同	同	上	紙本墨書地蔵講式 「仁和寺心遠院」ノ朱印アリ	一卷	同	同	上
紙本墨書承久三年具注曆 (紙背ニ「三井寺兼 林院」ノ黒印アリ)	一卷	同	同	上	宋刊廬山記 (卷第一、第四、第五、補寫)	五册	同	同	上
紙本墨書類聚世要抄 (附紙本墨書類聚記一卷) 二十一卷	二十一卷	同	同	上	宋刊物初撰語	十册	同	同	上
紙本墨書大乗院御寺務部 自卷第一 至卷第五 卷第一、第五ニ元應二年清玄書寫ノ奥書アリ	五卷	同	同	上	宋刊虛堂和尚語錄 (第一册ノ一、第二册補寫) 「蟠桃院」ノ眞珠庵ノ朱印アリ	四册	同	同	上
紙本墨書河内國通法寺供僧訴狀 (文治元年十二月 日) 北條時政ノ捨書アリ	一卷	同	同	上	宋重刊古尊宿語錄	二十二册	同	同	上
紙本墨書寛喜二年正月一日洞院教實記	一卷	同	同	上	宋刊圓覺經心鏡 卷第一、第六殘卷 第十二殘卷 各卷ニ「高山寺」ノ朱印アリ 卷第十二ニ紹定元年智恩ノ題銘アリ	三帖	同	同	上
紙本墨書文永五年後嵯峨上皇御出家次第	一卷	同	同	上	宋刊大唐三藏取經記 卷第一殘卷 卷第三 卷第三ニ「高山寺」ノ朱印アリ	一册	同	同	上
紙本墨書東巖和尚蒙古降伏祈禱文殘卷 (文永八年九月十五日)	一卷	同	同	上	宋刊北磬詩集 各册ニ「青龍軒常住」ノ墨書アリ	三册	同	同	上
紙本墨書嘉元三年寛性親王灌頂記 紙背ニ文 書アリ	一卷	同	同	上	版本仁王般若經卷上下 成實以後相傳ノ記アリ	二帖	同	同	上
紙本墨書南都高僧傳 紙背ニ文 書アリ	一卷	同	同	上	宋刊纂圖互註尚書 「書門院」ノ朱印アリ	四册	同	同	上
紙本墨書興福寺年代記	一册	同	同	上	宋刊新編翰苑新書後集	一册	同	同	上
紙本墨書性靈集 卷第一、第二各殘卷	二卷	同	同	上	紙本墨書華嚴經卷第五十七 「法隆寺一切經」 ノ黒印アリ	一帖	同	同	上
紙本墨書性靈集 卷第二、第八、第九 卷第八、第九ニ建久七年書寫ノ奥書アリ	三卷	同	同	上			同	同	上
紙本墨書性靈集卷第四殘卷 奥ニ「世尊院 之本」トアリ	一卷	同	同	上			同	同	上

京都府京都市上京
區藥屋町

富岡益太郎

紙本墨書華嚴經卷第十八	貞觀十九年三月一日校合	一卷	京都府京都市上京區藥師町	富岡益太郎	尼崎切(らむいもを、東大寺切(みもすてに)、山名切(懷切、中院切(くるきこも)、同(おやなくなりて)、廣澤切(除夜言志、物部常石解、寶龜五年八月九日)、下繪經切(舊時大王アリ
紺紙金銀字廣弘明集卷第十七	(中尊寺經)	一卷	同	上	彩箋墨書貫之集下斷簡 (石山切(しらつゆも)
紙本墨書(彌勒下生經	紙背ニ天臺ノ抄物アリ	二十七葉	同	上	彩箋墨書貫之集下斷簡 (石山切(めのみへに)
紙本墨書法苑義林二諦	紙背ニ長保五年書寫ノ天臺ノ抄物アリ	五葉	同	上	色紙墨書貫之集下斷簡 (石山切(きみ、すて)
紙本墨書榮花物語	十帖	同	同	上	彩箋墨書貫之集下斷簡 (石山切(やをよろつよの)
紙本墨書異本枕草子	天正十一年二月八日校合ノ奥書アリ附目錄一册	三册	同	上	色紙墨書貫之集下斷簡 (石山切(こあるかへし)
紙本墨書古今和歌集註	應永卅二年臘月廿八日笠澤書寫ノ奥書アリ	一册	同	上	紺紙金銀字賢劫經卷第六 (中尊寺經)
紙本墨書新葉和歌集	寛正四年十月七日銘至書寫校合ノ奥書アリ	一册	同	上	紙本墨書藤原俊成筆古今集卷第十斷簡 (昭和切(うたんのほな)
紙本墨書永樂大典	卷二千三百九十八、九蘇卷七千三百三十四(賜)卷一萬四千六百二十八、九(草)	三册	同	上	紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙 (身をづめは)
紺紙金銀字賢劫經	卷第十二(中尊寺經)	二卷	同相國寺東門前町	藤井孝昭	紙本墨書靈元天皇宸翰御詠草 (中二日十日御法樂トアリ
紙本墨書後撰集卷第九斷簡	(鳥丸切(人のもこに)	一幅	同京區大坂材木町	里見忠三郎	紙本墨書古今集下 (滿朝本)
紙本墨書藤原俊成筆古今集卷第二斷簡	(昭和切(うつろふいろに)	一幅	同	上	紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡 (多賀切(十五夜)
紙本墨書穗積三立手實	(天平十八年潤九月廿五日)	一卷	同	上	紙本墨書後撰集卷第一斷簡 (鳥丸切(中宮内侍母)
紙本墨書二條爲氏懷紙	(詠早春湖和哥)	一幅	同	上	紙本墨書新撰朗詠集上卷斷簡 (山名切(あさみどり)
紙本墨書松花堂行狀記	佐川田昌俊筆	一卷	同	上	紙本墨書伏見天皇御願文 (正和五年十一月廿五日)
彩箋墨書貫之集下斷簡	(石山切(あつよしの)	一幅	同河原町通一條上	寺村助右衛門	紙本墨書夢窓國師消息 (八月十一日正詠庵宛)
紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡	(伊豫切(登)	一幅	同東屋町二條下ル	阿部市太郎	紙本墨書無學祖元墨蹟 (普門院ノ朱印アリ
紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙	(詠卯花和哥)	一幅	同東屋町二條下ル	土橋嘉兵衛	彩箋墨書貫之集下斷簡 (石山切(るのかたに)
彩箋墨書貫之集下斷簡	(石山切(はるは、な)	一幅	同同下京區立賣中之町	上	彩箋墨書伊勢集斷簡 (石山切(我やさも)
彩箋墨書伊勢集斷簡	(石山切(六月に)	一幅	同	上	彩箋墨書伊勢集斷簡 (石山切(またをさし)
彩箋墨書貫之集下斷簡	(石山切(一葉)	一幅	同	上	紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡 (伊豫切(十五夜)
紙本墨書藤原俊成筆古今集卷第十斷簡	(昭和切(かたひ)	一幅	同	上	紙本墨書光格天皇宸翰百首御詠草 (文化七年)
紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡	(伊豫切(前裁)	一幅	同	上	紙本墨書平野社法樂短冊 (御陽成天皇宸翰(以下三十一葉)
紙本墨書古今集卷第十一斷簡	(堺色紙(ゆふくれの)	一幅	同	上	紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集斷簡 (廣澤切(五首)
手鑑月臺	七十九集	一帖	同	上	紙本虛堂和尚語錄 第八冊二正和二年ノ刊記アリ
	中ニ法輪寺切(戀、同(金谷、針切(ものをのみ、香紙切(ければ入丸、鳥丸切(あつさのみ、民部切(はむはしき)				紙本墨書惠露草 谷川士清自筆歌集
					紙本墨書玉篋集(卷第四、第五、第六、玉木正英著(卷第七、第八附錄)(谷川士清筆)
					紙本墨書和漢朗詠集私注 自卷第一至卷第六
					大永六年八月十七日書寫ノ奥書アリ

國寶及重要美術品

紙本墨書萬葉集卷第六第七問答 <small>(芝原春房問 本居宣長答)</small>	二冊	三重縣安濃郡藤水村	川喜田久太夫	彩箋墨書三寶繪斷簡 <small>(東大寺切(は、また) 彩箋墨書古今集卷第十二斷簡 (本阿彌切(べたいしらすつらゆき))</small>	一幅	山形縣酒田山下整町	白崎良彌
紙本墨書問月答語 <small>(元禄十二年(1701年) 淺見綱齊答)</small>	二冊	同	同	紙本墨書朝鮮王教旨 <small>(萬曆二十二年八月十九日) 萬曆二十二年九月九日、同十月十八日</small>	一通	石川縣金澤市上今町	乾益次郎
紙本墨書佐藤文書	七卷	同	同	紙本墨書朝鮮觀祭使兼巡察使書狀 <small>(萬曆二十二年九月九日、同十月十八日)</small>	一通	山口縣山口市湯田山口野アキ方	栗屋直衛
彩箋墨書貫之集下斷簡 <small>(石山切(むはたまの) 延祐己未立款)</small>	一幅	愛知縣縣名古屋市東區白雲町二丁目	豐田利三郎	刀 劍之部	二通	同	同
紙本墨書明極楚俊墨蹟 <small>(延祐己未立款)</small>	一幅	同東本重町四丁目	野崎森一	太刀 銘國定	一口	東京府東京市麹町區龜町五丁目	鏡富三
紙本墨書明惠上人夢記 <small>(一月七日云々)</small>	一幅	同千種町	中村貫之助	太刀 銘貞守	一口	同北多摩郡武藏野町吉祥寺	赤星鐵馬
紙本墨書陽光院誠仁親王御消息 <small>(織田信長宛)</small>	一幅	同田代坂上町	森川勘一郎	太刀 銘大和國反懸住則兼作	一口	同	同
紙本墨書平光盛消息 <small>(七月四日)</small>	一幅	同西區堀詰町	關戸有彦	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書源仲家筆懷紙 <small>(詠曉紅葉和番)</small>	一幅	同	同	太刀 銘則重	一口	同	同
彩箋墨書傳公任筆色紙 <small>(かりこもの)</small>	一幅	同	同	太刀 銘繁慶	一口	同	同
紙本墨書麗華集斷簡 <small>(香紙切(山のあははこ) 蠟丸)</small>	一幅	同	同	太刀 銘安綱 祐平ノ磨上銘アリ	一口	同	同
紙本墨書歌仙切 <small>(能宣)</small>	一幅	同	同	太刀 銘吉平	一口	同	同
紙本墨書傳俊成筆假名消息 <small>(かくこ候はねは)</small>	一幅	同	同	太刀 銘傳國行	一口	同	同
紙本墨書寂室元光墨蹟 <small>(康安辛丑款)</small>	一幅	同	同	太刀 銘相模國住人廣光 貞治三年十二月日	一口	同	同
紙本墨書歌仙切 <small>(能宣)</small>	一幅	同	同	太刀 銘則重	一口	同	同
絹本墨書松花堂昭乘筆書卷 <small>(省三阿房宮版アリ) 金泥描ノ下繪アリ</small>	一卷	同中區御器所町	後藤幸三	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書寛和二年六月九日内裏歌合	一卷	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙 <small>(詠早春風和歌)</small>	一幅	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書朝鮮國書 <small>(天和二年五月日)</small>	二通	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
金銀箔料紙墨書德川將軍答朝鮮國王書控 <small>(天和二年九月日 延享五年六月日 寶曆十四年三月日)</small>	六通	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書朝鮮國東萊府使奉書 <small>(崇禎九年九月日 宗義成宛)</small>	一通	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書朝鮮國禮曹參議奉書 <small>(寶永三年十月日 同十二月日 宗義成宛)</small>	三通	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書琉球中山王信書 <small>(正徳四年四月二十七日) 寶永七年五月三日</small>	二卷	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
附紙本墨書中山王狀路日録四通	三通	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書德川幕府老中答琉球王書控 <small>(正徳二年十月七日 同四年八月十八日)</small>	三	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書筆者未詳詠草斷簡 <small>(浮雲野水)</small>	一幅	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書德川家康日課念佛 <small>(中ニ慶長十七年子 八月四日トアリ)</small>	一幅	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
紙本墨書德川家康日課念佛 <small>(中ニ慶長十七年子 九月十五日トアリ)</small>	一幅	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
彩箋墨書寸松庵色紙 <small>(ふみわけて)</small>	一幅	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同
彩箋墨書伊勢集斷簡 <small>(石山切(おほろけの)</small>	一幅	同中區御器所町	同	太刀 銘則重	一口	同	同

短刀	銘國廣	一口	東京府東京市渋谷區元廣尾町	松本 まさ
太刀	銘長光	一口	同前區戸塚町三丁目	伯野 南部利英
太刀	銘長光	一口	同杉並區高圓寺四丁目	子爵 北條 雋八
太刀	銘吉房	一口	同豐島區駒込三丁目	子爵 本多 忠昭
太刀	銘光忠	一口	同北多摩郡砧村	子爵 相良 頼綱
短刀	銘國光	一口	京都府京都市上京區鞍馬口鳥丸西入上ル小山中瀬	新村 出
短刀	銘字都宮大明神相模國住人廣光八幡大菩薩文和五年卯月日	一口	同與謝郡石川村	末次 喬
短刀	銘國定	一口	同大坂府大坂市東區清水谷西之町	加島 勳
短刀	銘左 筑州住	一口	同港區九條南邊一丁目	中宮 峯二
太刀	銘備州長船康光 應永三十二年三月日	一口	同天王寺區上本町八丁目	黒川 福三郎
太刀	銘包平作	一口	同淀川區十三西ノ町三丁目	田中 金之
太刀	銘正恒	一口	兵庫縣神戶市須磨區大手町八丁目	崎山 好春
太刀	銘來國次 丹波守吉道ノ摺上銘アリ	一口	同神戶區北野一丁目	中村 準策
太刀	銘來國光	一口	同荏合區龜通五丁目	木村 岩五郎
刀	無銘志津	一口	同武庫郡精道村	同 戸保太郎
短刀	銘則重	一口	同 同	同 上
太刀	銘長光	一口	同 同	同 上
短刀	銘來國俊	一口	同 同	同 上
短刀	銘信國	一口	新潟縣新潟市本町通七番町	同 間要吉
刀	無銘傳長光	一口	同東淡町通三ノ丁	小幡 啓二
太刀	銘長光	一口	愛知縣名古屋市中區大船町	岡島 吉郎
短刀	銘日州古屋住國廣作 天正十四年八月日	一口	山形縣東村山郡金井村	齋藤 武一郎
太刀	銘爲清	一口	同西村山郡大谷村	鈴木 清助
太刀	無銘傳光忠	一口	秋田縣雄勝郡馬場町	柴田 興之助
太刀	銘爲利	一口	石川縣金澤市田丸町	石黒 久呂
短刀	無銘 (名物寺澤貞宗)	一口	富山縣富山市徳曲	近郷 重孝
太刀	銘直潤作	一口		
短刀	銘長谷部國重 延文二年己巳二月日	一口		

國寶及重要美術品

短刀	銘安吉	一口	富山縣富山市徳曲	近郷 重孝
刀	無銘傳當麻	一口	同 同	高島 辰之助
短刀	銘相州住秋廣 應安三	一口	熊本縣熊本市新町二丁目	長崎 伊太郎
樂燒黑茶碗	銘雨雲 本阿彌光悅作	一箇	東京府東京市麻布區今井町	男爵 三井 高公
陶製黑花文太白尊		一箇	同赤坂區青山南町六丁目	山田 三次郎
陶製定窯割花蓮花文盤		一箇	同牛込區矢來町	梅澤 彦太郎
銅製多鈕細文鏡		一面	同本郷區湯島三組町	小倉 武之助
クリス形銅劍	朝鮮慶尚北道慶州附近出土	一口		
附銅製鎧 一箇				
銅製肩甲	傳朝鮮慶尚北道慶州附近出土	一箇		
透彫銀金具付佩礪	傳朝鮮慶尚北道慶州附近出土	一箇		
傳朝鮮慶尚北道	銀製鎧文紋唐草文	八箇		
星州出土品	銀製鎧文紋唐草文			
銀平脫葡萄唐草文龜甲形小匣	傳朝鮮慶尚南道出土	一合		
傳朝鮮慶尚南道陝川附近出土品	金製冠金具	一箇		
金銅透彫鞍金具殘闕	傳朝鮮慶尚南道昌寧附近出土	一具分		
附附屬金具				
傳朝鮮慶尚北道	銀製鎧文紋唐草文	四點		
慶州南山出土品	銀製鎧文紋唐草文			
傳朝鮮慶尚北道	銀製鎧文紋唐草文	三點		
慶州南山出土品	銀製鎧文紋唐草文			
綠琉璃小尺	二片二破損	一箇分		
鐵製方形磬		一箇		
陶製柿蒂茶碗	銘毘沙門堂	一箇		
樂燒赤茶碗	銘毘沙門堂 本阿彌光悅作	一箇		
青磁花生	宣德元年ノ銘アリ	一箇		
厨子入銅製春日曼荼羅	(廻明神)	一體		
附宋漆唐櫃一合	弘安四年十月十四日仁真納人文書一通	一箇		
陶製狛犬		一對		
銅製四雲三瑞鏡	銅製作雲々ノ銘アリ	一面		
大阪府豐能郡豐中町附近出土				

梅花鮫皮包鞍鎧	鑊ノ紋板ニ開傘機軸透影鎧ニ天文廿二年癸丑三月日明珍云々ノ銘アリ	工藝品及考古學資料之類
陶製曜變天目茶碗	一箇	東京府東京市神田區宮本町
陶製曜變天目茶碗	一箇	同亦坂區青山南町六丁目
陶製曜變天目茶碗	一箇	大阪府大阪市東成區猪飼野西四丁目
石製鳩尾殘片	一箇	群馬縣群馬郡總社町
石製鳩尾	一箇	群馬縣群馬郡總社町山王廢寺趾出土
根卷石	一組	群馬縣群馬郡總社町山王廢寺趾出土
金銅雙龍雙鳥文磬	一面	福島縣若松市大和町
持佛堂寫「正應六年十月日「阿佛」大工作貞吉」ノ銘アリ	一箇	同耶麻郡喜多方町
鐵鉢	一箇	冠木吉郎次
鐵製釣燈籠	一箇	同
銅鉢	一箇	熊野神社
銅鐘	一箇	同
銅製三鈴	一箇	同

銅製鯉口	至德四年十一月十五日大旦那三浦基名性覺大工圓性等ノ銘アリ	一箇	同河沼郡八幡村	心清水八幡神社
廚子入金銅舍利塔	圓相ニ銅製菊花草堂鏡ヲ用フ	一箇	同石城郡大野村	藥王寺
銅製雙轆八稜鏡	福岡縣糸島郡前原町泊神社境内出土	一面	福岡縣福岡市船町	許斐儀一郎
福岡縣早良郡油山	銅製六角形經筒 保安元年八月廿五日ノ銘アリ	十二箇		
天福寺趾	銅製環珞付經筒			
經塚出土	白磁製經筒			
品	陶製經筒			
	磁製香合	同	同	同上

石人	石櫛	武裝石人殘闕	土品	山古墳出土品	都郡石塚	福岡縣京
萩福岡縣八女郡吉田村岩戸山古墳所在	萩福岡縣八女郡吉田村岩戸山古墳所在	福岡縣八女郡長峰村豐福所在	銅製四神歌帶鏡 銅製六神四歌帶鏡 銅製三神四歌帶鏡 刀劍類殘闕	天日月ノ銘アリ 天日月ノ銘アリ 天日月ノ銘アリ 天日月ノ銘アリ	同小食市坪町	廣瀬鎌三郎
一箇	一箇	一箇	五面	同小食市坪町	廣瀬鎌三郎	廣瀬鎌三郎
同	風浪神社上	長峰村豐福	同八女郡	同三藩郡大川町	同	同

重要美術品等認定物件中國寶保存法第一條ニ依リ國寶ニ指定セラレタル爲認定物件
タル資格消滅セルモノ左ノ如シ

文部省告示第二百二十七號 昭和十一年五月六日

認定告示

品目

所著者

昭和八年文部省告示
第二百七十四號

紙本著色源順像 三十六歌仙切
佐竹家傳來

一幅 京都府京都市上京
區堀井町 山口玄洞

同

紙本著色亦復田能村竹田筆
一樂畫冊 藤岡小竹ノ題字
頼山陽等四名跋アリ

一帖 兵庫縣神戸市神戶
區北野一丁目 中村準策

同

紙本墨書朝野群載卷第一

一卷 京都府京都市左京
區一乗寺下り松町 猪熊信男

同

紙本墨書肥前風土記

一帖 同 同上

同

紙本墨書令義解 神祇令、僧尼令
別筆ニテ正平十七年五月十五日ノ奥書アリ

一卷 同 同上

同

太刀 銘 國光

一口 東京府京都市堀
區平河町六丁目二
三松方 赤星鐵馬

同

太刀 銘 備前長船住長義

一口 同世田谷區深澤町
四丁目 長尾欽彌

同

太刀 銘 無銘 (名物龜甲貞宗)

一口 同 同上

同

太刀 銘 備前長船住長義

一口 同 同上

同

太刀 銘 一助成

一口 同 同上

同

紙本墨書後鳥羽天皇宸翰

二卷 同 同上

同

紙本墨書最澄自筆書狀

一幅 同 同上

同

紙本墨書慶滋保胤(寂心)自
筆書狀

一幅 同 同上

同

紙本墨書最勝王經註釋斷簡
(飯室切)

一卷 同 同上

同

紙本著色大中原頼基像
三十六歌仙切、佐竹家傳來

一幅 同 同上

同

紙本墨書東大寺鎮國防國宮野
庄田島等立券(建久六年九月一日)
佐藤坊重源ノ抽判及ビ蓋判アリ

二卷 同 同上

同

紙本墨書太政官宣(延暦廿三年)
十二月廿五日

一通 同 同上

同

紙本墨書下總國司解(天平勝寶
三年五月廿一日)

一通 同 同上

同

紙本墨書七寺巡禮私記殘卷

一册 同 同上

同

紙本墨書建春門院中納言日記
(たまきはる)(金澤文庫)
乾元二年北條貞顯書寫校合ノ奥書アリ

一帖 同 同上

同

國寶及重要美術品

同

國寶及重要美術品

同

國寶及重要美術品

同

國寶及重要美術品

同

國寶及重要美術品

同

國寶及重要美術品

昭和八年文部省告示
第三百十二號

太刀 銘 大和則長

一口 兵庫縣武庫郡精道
村 瀬戸保太郎

昭和八年文部省告示
第三百十五號

紙本著色船窓
小戲帖 田能村竹田筆
庚寅正月二十日ノ
年記アリ、田能村
如仙ノ跋アリ

一帖 大阪府大阪市東區
淡路町二丁目 水原金兵衛

昭和九年文部省告示
第一百一號

紙本著色十二月山水圖 池大雅筆
附 大雅消息一通

一雙 東京府京都市本郷
區金助町 大塚稔

同

紙本著色小野小町像
三十六歌仙切、佐竹家傳來

一幅 岐阜縣岐阜市松屋
町 渡邊甚吉

同

紙本著色藤原興風像
三十六歌仙切、佐竹家傳來

一口 京都府與謝郡石川
町 末次喬

同

紙本著色不動利益緣起繪卷
三十六歌仙切、佐竹家傳來

一幅 同 同上

同

紙本著色山水圖 雪舟筆、牧松、
了庵ノ賛アリ

一幅 同 同上

同

紙本著色源公忠像 三十六歌仙切
佐竹家傳來

一幅 同 同上

同

紙本著色源重之像 三十六歌仙切
佐竹家傳來

一口 東京府京都市小石
川區高田老松町 池戸宗三郎

同

紙本墨畫六祖挾擔圖 傳善翁筆
直翁ノ印、二儀漢黃閣ノ賛アリ

一幅 同 同上

同

紙本著色大江山繪詞

二卷 同 同上

同

紙本著色紫式部日記繪詞

一卷 同 同上

同

紙本著色最勝王經註釋斷簡
(飯室切)

一卷 同 同上

同

紙本著色五字文殊像
建武元年六月九日ノ年記アリ

一幅 同 同上

同

紙本墨畫山水圖 傳周筆
六曲屏

一雙 同 同上

同

紙本著色律師素性像
三十六歌仙切、佐竹家傳來

一幅 同 同上

同

紙本著色壬生忠祝像
三十六歌仙切、佐竹家傳來

一幅 同 同上

同

紙本著色玄非法師行脚圖

一卷 同 同上

同

紙本著色妙法蓮華經普賢勸發
品

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

同

紙本著色地獄草紙

一卷 同 同上

國寶及重要美術品

昭和十年文部省告示
第四百二十一號

絹本着色一字金輪像

一 幅
神奈川横濱市中區
本牧町

原 富太郎

絹本着色小大君像三十六歌仙切
附松下文書六卷一幅一帖

一 幅

同 上

絹本着色後鳥羽天皇宸影

一 幅

同 上

絹本着色多武峰曼茶羅圖

一 幅

同 上

源氏物語浮舟之卷白描畫入册

一 册

同 上

紙本着色山水圖 横川ノ賛アリ

一 幅

同 上

紙本墨畫維摩像 文清筆
祖默ノ賛アリ

一 幅

同 上

絹本着色四季山水圖
日本禪人等賜ノ賛アリ

四 幅

同 上

紙本墨畫布袋圖 則德筆
宗柱ノ賛アリ

一 幅

同 上

絹本着色猫圖 傳毛益筆

一 幅

同 上

絹本着色狗圖 傳毛益筆

一 幅

同 上

絹本着色柿本宮曼茶羅圖
附文明八年卯月日慶範勅進帳一卷

一 幅

同 上

木造地藏菩薩立像

一 軀

同 上

木造不動明王立像

一 軀

同 上

文部省告示第三百二十七號 昭和十一年九月十八日

認定告示

昭和八年文部省告示
第二百七十四號

絹本着色鷹見泉石像渡邊山筆

一 幅
東京府東京市本郷
區駒込曙町

有 者
鷹見久太郎

紙本墨畫鶴圖 宮本武藏筆

一 幅
同小石川區高田老
松町

同 上

石造浮彫阿彌陀三尊佛龕

一 面

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)
長安三年七月十五日敬造ノ銘アリ

一 面

同 上

石造浮彫彌勒三尊佛龕
(舊寶慶寺佛) 長安三年九月十五日彫鐫ノ銘アリ

一 面

同 上

石造浮彫阿彌陀三尊佛龕
(舊寶慶寺佛) 長安三年九月十五日雕西李承嗣造像ノ銘アリ

一 面

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)
長安四年九月十八日ノ銘アリ

一 面

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)

一 面

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)
朝語大夫内常侍上柱國源風黨等ノ銘アリ

一 面

同 上

昭和八年文部省告示
第二百七十四號

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)

一 面
東京府東京市小石
川區高田老松町

侯爵 細川護立

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)

一 面

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)

一 面

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)

一 面

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)

一 面

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)

一 面

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)

一 面

同 上

石造浮彫十一面觀音龕
(舊寶慶寺佛) 長安三年九月十五日僧德威敬造ノ銘アリ

一 面

同 上

石造浮彫十一面觀音龕
(舊寶慶寺佛)

一 面

同 上

太刀 金象嵌銘 本多安房守所持
長光磨上光德花押
(名物大包平)

一 口

同 上

太刀 金象嵌銘 城和泉守所持
正宗磨上本阿花押(光德)

一 口

同 上

太刀 金象嵌銘 長谷部國重本阿花押
(名物大包平)

一 口

同 上

太刀 無銘 (名物富田郷)

一 口

同 上

石造浮彫三尊佛龕 (舊寶慶寺佛)
開元十二年十月八日ノ銘アリ

一 面

同 上

石造浮彫十一面觀音龕
(舊寶慶寺佛)

一 面

同 上

太刀 金象嵌銘 天正三十二年二月日
江本阿彌磨上之花押(光德)
所持(舊寶慶寺佛)

一 口

同 上

太刀 無銘 (傳助真作)

一 口

同 上

鐵製法花蓮露文壺

一 箇

同 上

絹本着色弘法大師像

一 雙

同 上

紙本金地著色山水圖 池大雅筆
六曲屏

一 雙

同 上

紙本着色牧牛圖 文成外史筆
三條ノ賛アリ

一 幅

同 上

太刀 無銘 (傳光忠)

一 口

同 上

昭和十一年文部省告示
第四百二十二號
木造菩薩立像 一軀 神奈川縣横濱市中
木造傳源賴朝坐像 一軀 區本牧町
木造十一面觀音立像 一軀 同
原 善一郎
原 壽枝子

國寶修理

國寶保存法第十四條ニ依リ災害地方被害國寶建造物並ニ寶物類ノ維持修理ノ爲、昭和十一年ニ於テ補助金交付ヲ決定セルモノ左ノ如シ

建造物

昭和十一年六月九日決定（修理補助本年度交付額五八、九七六圓六八）
知恩院大方丈 京都府京都市東山區林下町 知 恩 院
三寶院純淨觀唐門 同 伏見區醍醐 三 寶 院
朝光寺本堂 兵庫縣加東郡米田村 朝 光 寺
延曆寺大乘戒壇院堂 滋賀縣滋賀郡坂本村 延 曆 寺
昭和十一年七月三日決定（修理補助本年度交付額一〇四、〇八一圓三一）
本願寺飛雲閣、能舞臺、附橋掛、鐘樓 京都府京都市下京區堀川通花屋町下ル本願寺門前町 本 願 寺
勝覺院塔婆 大阪府大阪市天王寺區夕陽丘町 勝 覺 院
觀心寺書院 同 南河內郡川上村 觀 心 寺
聖神社本殿 同 泉北郡信太村 聖 神 社
松生院本堂 和歌山縣和歌山市片岡町 松 生 院
護國院鐘樓 同 海草郡紀三井寺町 護 國 院
瀧山寺三門及本堂 愛知縣額田郡常盤村 瀧 山 寺
都久夫須麻神社本殿 滋賀縣東淺井郡竹生村 都久夫須麻神社

寶物

昭和十一年七月決定（修理補助本年度交付額六、七七九圓四〇）
紙本墨畫竹林七賢圖 裱貼付十六面 京都府京都市東山區小松町 建 仁 寺
紙本墨畫花鳥圖 裱貼付二面 同 同
紙本淡彩琴棋書畫圖 裱貼付二十面 同 同
紙本墨畫雲龍圖 裱貼付八面 同 同

國寶及重要美術品

紙本墨畫山水圖 裱貼付八面 京都府京都市東山區小松町 建 仁 寺
國寶保存法第十四條ニ依リ、國寶修理費豫算ヲ以テ、昭和十一年度（會計年度）ニ修理ヲ補助スルニ決定セル國寶建造物並ニ寶物左ノ如シ

建造物

昭和十一年七月三日決定（修理補助本年度交付額一四八、三七七圓八一）
本願寺四脚門 京都府京都市下京區堀川通花屋町下ル本願寺門前町 本 願 寺
東福寺禪堂 同 東山區本町通十五丁目 東 福 寺
知恩院小方丈附步廊 同 林下町 知 恩 院
東大寺大湯屋、法華堂、北門 奈良縣奈良市雜司町 東 大 寺
南明寺本堂 同 添上郡大柳生村 南 明 寺
穴切大神本願 山梨縣甲府市穴切町 穴 切 大 神
金樓神社東宮本殿、中宮本殿 同 中巨摩郡宮本村 金 樓 神 社
石津寺本堂 滋賀縣栗太郡老上村 石 津 寺
鞭崎神社表門 同 同 鞭 崎 神 社
瑞龍寺法堂、佛殿、總門 富山縣高岡市下關 瑞 龍 寺
染羽天石勝神社本殿 島根縣美濃郡益田町 染 羽 天 石 勝 神 社
古熊神社本殿 山口縣山口市 古 熊 神 社
松山城（乾門、同東續櫓、倚井門、同東西續櫓、隱門、同續櫓） 愛媛縣 松 山 市
興隆寺本堂 同 周桑郡德田村 興 隆 寺
首里城守護門 沖繩縣 首 里 市
若一王子神社本殿 長野縣北安曇郡大町 若 一 王 子 神 社
昭和十二年二月十六日決定（修理補助本年度交付額一五、〇三九圓八五）
仁和寺仁王門 京都府京都市右京區御室大内町 仁 和 寺
寶塔寺塔婆、四脚門 同 伏見區深草寶塔寺山町 寶 塔 寺
妙成寺書院、鎮守室 石川縣羽咋郡上甘田 妙 成 寺
八幡宮本殿 愛媛縣額田郡福岡町 八 幡 宮
春日神社本殿 和歌山縣海草郡加太町 春 日 神 社

寶物

昭和十一年七月三日決定（修理補助本年度交付額二六、八四八圓四九）
絹本著色春日曼荼羅圖 一幅 奈良縣生駒郡生駒町 寶 山 寺

朝鮮寶物古蹟名勝天然記念物保存令ニ依リ昭和十一年度指定セラレタル寶物及古蹟

[illegible]

昭和十一年五月二十三日決定

京城文廟	京城東廟	修德寺大雄殿	開心寺大雄殿	寶林寺大雄殿	通度寺大雄殿	深源寺大雄殿	龍門寺大雄殿	觀龍寺藥師殿	密陽嶺南樓	安州百祥樓	安邊駕鶴樓	道岬寺解脫門	江陵客舍門	成川東明館	海印寺藏經板庫	公州本町石槽	公州旭町石槽	公州旭町幢竿支柱	谷寺三層石塔	舊谷寺玄覺禪師塔碑	舊谷寺東浮屠	舊谷寺東浮屠碑	舊谷寺西浮屠	舊谷寺北浮屠	寶林寺東浮屠	寶林寺西浮屠	寶林寺普照禪師彰聖塔	寶林寺普照禪師彰聖塔碑	鶴林寺五層石塔
京城畿道京城府明倫町三丁目	京城畿道京城府崇仁町	忠清南道禮山郡德山面斜川里	忠清南道瑞山郡雲山面新昌里	全羅南道長興郡有治面鳳德里	慶尙南道梁山郡下北面芝山里	平安北道定州郡高安面鳳鳴洞	慶尙北道醴泉郡龍門面內地洞	慶尙南道昌寧郡昌樂面玉泉里	慶尙南道密陽郡密陽邑內一洞	咸鏡南道安邊郡鶴城面紅門里	全羅南道靈巖郡郡西面道岬里	江原道江陵郡江陵邑龍岡町	平安南道成川郡成川面上部里	慶尙南道陝川郡伽倻面縮仁里	忠清南道公州郡公州邑本町	忠清南道公州郡公州邑本町	忠清南道公州郡公州邑本町	忠清南道公州郡公州邑本町	忠清南道求禮郡土旨面內東里	全羅南道求禮郡土旨面內東里	同	同	同	同	同	同	同	同	同
國	同	修德寺	開心寺	寶林寺	通度寺	深源寺	龍門寺	觀龍寺	國	同	同	道岬寺	國	同	海印寺	國	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
有	有	慈惠寺五層石塔	慈惠寺石燈	防樂山磨崖佛	安東柳氏文書	京城城郭	京城老人亭	廣州風納里土城	公州公山城	公州宋山里古墳群	扶餘陵山里古墳群	慶州興論寺址	慶州月城	慶州邑南古壘	慶州臨海殿址	慶州雞林	新羅武烈王陵	傳金陵信墓	慶州南山城	新羅景德王陵	新羅眞德王陵	慶州富山城	慶州掛陵	慶州九政里方形墳	同	同	同	同	同

古蹟

黃海道信川郡南部面青陽里	慈惠寺
同	同
慶尙南道咸安郡北面下林里	國
一三一	有
慶尙北道安東郡豐川面阿同洞	柳承祐
京城府社稷洞、同樓上洞、同玉仁洞、同清雲洞、同三清洞、同臥龍洞、同崇一洞、同惠化洞、同東崇洞、同梨花洞、同昌信洞、京畿道高陽郡崇仁面敦岩里、同城北里、同恩平面弘濟內里、同付岩里	
京畿道京城府大和町二丁目、同西四軒町	
京畿道廣州郡九川面風納里	
忠清南道公州郡公州邑山城町、同州外面、玉龍里、同公州邑錦城里	
忠清南道公州郡州外面錦城里、同龍堂里	
忠清南道扶餘郡扶餘面陵山里	
慶尙北道慶州郡慶州邑沙正里	
慶尙北道慶州郡慶州邑仁旺里、同校里	
慶尙北道慶州郡慶州邑城東里、同皇吾里、同仁旺里、同皇南里	
慶尙北道慶州郡慶州邑仁旺里	
慶尙北道慶州郡慶州邑校里	
慶尙北道慶州郡慶州邑西岳里	
慶尙北道慶州郡慶州邑忠孝里	
慶尙北道慶州郡慶州邑仁旺里、同內南面拜里、同塔里、同內東面南山里、同排盤里	
慶尙北道慶州郡內南面龜池里、同德泉里	
慶尙北道慶州郡見谷面五柳里	
慶尙北道慶州郡西面松仙里	
慶尙北道慶州郡外東面掛陵里	
慶尙北道慶州郡內東面九政里	

新羅聖德王陵

新羅憲德王陵

新羅興德王陵

慶州感恩寺址

帶方太守張撫夷墓

大華宮址

大聖山城

傳安宮鶴址

龍岡於乙洞土城

泰川龍吾里山城

洪原富民洞古墳群

洪原城嶺石城

洪原天鶴峰山城

昭和十一年五月二十三日決定

京城社稷壇

京城獨立門

京城迎恩門柱礎

扶餘青馬山城

釜山日本城

馬山日本城

北青青海土城

五臺山史庫

昭和十一年八月二十七日決定

鳳山唐土城

慶尙路東里古墳群

慶州路西里古墳群

慶州皇南里古墳群

慶州皇吾里古墳群

慶州仁旺里古墳群

慶尙北道慶州郡內東面朝陽里

慶尙北道慶州郡川北面東川里

慶尙北道慶州郡江西面六通里

慶尙北道慶州郡陽北面龍堂里

黃海道鳳山郡文井面九龍里

平安南道大同郡斧山面南宮里

平安南道大同郡柴足面三石里、同聖山里、同魯山里、同林原面魯聖里、同北四里、同高山里、同松岩里

平安南道大同郡林原面北四里

平安南道龍岡郡海雲面城峴里

平安北道泰川郡西城面山城洞、同松貴洞

咸鏡南道洪原郡鶴泉面豐湖里

咸鏡南道洪原郡鶴泉面富南里、同中上里

咸鏡南道洪原郡鶴泉面龍陵里

京畿道京城府社稷町

京畿道京城府橋北町

京畿道京城府橋北町

忠清南道扶餘郡扶餘面陵山里、同龍井里、同佳俗里、同松谷里、同草村面莘岩里

慶尙南道釜山府凡一町、同佐川町

慶尙南道昌原郡內西面山湖里

咸鏡南道北青郡青海面土城里

江原道平昌郡珍富面東山里

黃海道鳳山郡文井面石城里、同西鍾面妙松里

慶尙北道慶州郡慶州邑路東里

慶尙北道慶州郡慶州邑路西里

慶尙北道慶州郡慶州邑皇南里

慶州北道慶州郡慶州邑皇吾里

慶尙北道慶州郡慶州邑仁旺里

古蹟及名勝

昭和十一年二月二十一日決定

平壤牡丹臺

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

慶州佛國寺境內

美術市場

美術市場に現はれた重要な新古美術品及び其の市價の記録として、我が國の四大美術市場たる東京、大阪、京都、名古屋の各美術俱樂部に於て昭和十一年中に行はれた主なる賣立に就き、二千圓以上の高値表を以下に記載する。

昭和十一年度新古美術品賣立高値表（金二千圓以上）

東京美術俱樂部

甲州汲古庵村松家賣立 二月二十四日
雅邦春秋山水双幅 二、一九三

春陽莊藏品賣立 三月二十三日
大觀碧山朝陽 四、〇五〇
大觀春酣 二、八三九
玉堂蓬萊遷鶴 二、二〇〇
大觀春寒 二、三九〇
雅邦松林山水 一六、〇〇〇
廣業夏溪積翠 二、八九〇
古徑秋 二、一九九

山根家、某家賣立 三月三十日
山陽五字額 二、六九〇
雅邦秋山喬松 三、一三〇
唐物青貝花鳥人物高欄付平卓 二、〇八〇
大雅堂山水二枚折屏風 四、三九八

美術市場

靈華春光

春草牧童

白磁雙獅子摘共蓋遊環香爐 二、〇六一
白磁獅子摘共蓋遊環香爐 二、四三一
毛拔形太刀盛景 三、三〇〇
拵付刀無銘樊噲一文字 二、七〇〇

拵付刀無銘樊噲一文字 二、七〇〇

鈴木家並某家賣立 四月二十日

雅邦秋山行旅 二、六三〇
百穗富士筑波二枚折屏風 三、五二六
雅邦江山晴霽 二、二二九
春草月夜遊鴨双幅 三、五八九
松園春の野 二、三五〇
雅邦雪中祥鸞 二、八八〇

黃鶴園所藏品賣立 四月三十日
芳崖愛染明王 四、一八〇
芳崖水墨山水 三、五五八
靈華東方朔 二、二三八

春陽軒並某家賣立 五月十二日
畢山徒然草六枚折中屏風 二、三八〇
竹田柳塘吟月 一五、九〇〇
畢山雛祭 七、二〇〇
木米寒柯煎茗 二六、一〇〇
畢山吉野懷古畫簀 七、三九〇
梅逸秋卉双鴨 三、五三〇
蕪村應舉猫杓子畫簀 六、八九八
畢山孔子像 二、一三〇

蕪村枯木蒼鷹 二、八八〇
寬齋竹林讀書 五、四一〇
春琴海嶺山陽合作花鳥 二、五九一
雅邦雪山歸獵 七、〇〇〇
雅邦盆踊 三、五〇〇
雅邦櫻花歸雁 二、〇八〇
雅邦江上納涼 七、四一〇
雅邦江村首夏 二、八九五
雅邦秋景山水 七、〇〇〇
雅邦蓬萊春色 二、六八〇
雅邦寒汀飛禽 二、〇五〇
雅邦中畫額三幅對 三、六〇〇
雅邦雪山歸牧 二、三五九
雅邦雪中歸農 二、九三九
雅邦秋山暮靄 三、五一〇
雅邦雪景山水 二、〇六〇
雅邦瀟江渡牧 二、一〇〇
雅邦柳蔭牧童 二、三〇〇
春草及美摘草 五、三九八
草雲陶人尋春 三、五八九
廣業唐美人 二、六五〇
古徑冬日 二、二九〇
玉堂松峽春鶯 三、〇九〇
直入碧山歸隱 三、二四三
景年臘月絲櫻 五、七九八
廣業琵琶行双幅 四、六八〇
玉堂金地波千鳥二枚折屏風 三、五九〇
大觀松下清談 二、七九八
春草湖邊 二、五一五
春草飛泉 二、六九八
百穗松林歸牧 六、七九八
百穗澗水 四、一三〇

百穗靈峰

百穗秋苑

百穗猛虎

百穗峠路

百穗富嶽春望

文舉金地嵐山春景高尾秋景

六枚折屏風一雙

青磁獅子摘共蓋大香爐

白磁龍摘共蓋大香爐

平目地牡丹唐獅子

蔀繪料紙硯箱

拵付刀無銘備前長義

拵付大小栗田口一竿子忠綱

拵付脇差長曾禰興里入道虎徹

拵付合口信國

伊東子爵家賣立 五月二十五日

白鞘刀包平

能面三十一面

釘彫伊羅保茶盤

古永德春秋大内賀宴一雙

紹仙眞山水

時代青貝春日草

唐銅耳付筋花生

清源氏十二月十二幅對

古筆手鑑

懸鐘

銀七寶模樣彫臺子拵

得壽莊並某家賣立 六月二日

雅邦雨中歸農

梨子地春秋山水蔀繪料紙硯箱

推古時代如意輪觀音

二、八九三

二、三八八

四、一〇〇

二、三九八

二、一〇〇

二、五九〇

三、二〇〇

二、八〇〇

三、六一〇

二、一八

二、三九〇

三、六〇〇

二、一〇〇

二、一五〇

二、二八〇

二、二一〇

四、三〇〇

七、一〇〇

一三、〇〇〇

四、五九〇

四、三〇〇

五、一一〇

三、八九一

二、三、九〇〇

三、三二九

二、五六〇

二、六九〇

五、五一〇

某家賣立 六月八日

爲恭俊成卿	三、四〇〇
天龍寺青磁三足香爐	二、一五〇
琅玕獅子耳遊環香爐	二、三五九
唐物青貝樓閣人物大半卓	一、〇一〇
雅邦秋湖歸牧	四、三一〇
宋版阿彌陀經	二、〇〇〇
雅邦旅人觀瀑	八、〇〇〇
緋絨大袖大鏗	七、一〇〇
鐵齋溪居清話	二、一三九
雅邦夏景山水	三、三八〇
百穗阜月古鸞	二、二八八
時代鳴門硯箱	三、四〇〇
雅邦霧降瀑布	三、七九〇
直入瀧之川紅葉山水	二、〇三〇
竹溪青綠山水及幅	二、一九三
靈華西王母	三、三〇〇
光琳繪變團扇六本	八、九八一
鐵齋山居清適	二、六〇〇
春草薊鳩	七、一九八
春草老松鶴	五、一八八
春舉雪松靈鷹	二、四〇〇
雅邦月下双鹿	二、二五〇
翡翠角形共蓋香爐	七、三九九
春草月下海邊松	四、五〇〇
磁青磁浮牡丹香爐	七、八九八
雅邦春畔逐牛四幅對	八、〇〇〇
雅邦蓬萊山	四、六〇〇

某家賣立 六月二十二日

景年春園錦鶴	二、二一〇
五山版黃山谷詩集	二、五三九
雅邦松林飛鶴	四、五八〇
大觀瀑布	二、六九〇
國寶版本法華經一卷	五、三八〇
玉堂秋溪遊猿	二、三〇〇
足利本古文尙書	二、一〇二
舊大名某大家賣立 六月二十九日	
松花堂布袋六枚折屏風一雙	三、一〇〇
探幽和歌三神三幅對	五、一九三
コラン綠衣女油繪額	三、一七〇
朝鮮銅羅二個	二、〇三〇
網吉壽老	二、一〇〇
一休陳蒲鞋畫贊	六、六一〇
萬曆ツツレ大敷物	二、四〇〇
尙信達磨	二、〇〇〇
慈惠大師紺紙金泥經切	二、〇〇〇
元信適周問禮	四、三九〇
溜七寶金具箱	二、〇五〇
呂紀花鳥	四、五〇〇
相阿彌山水帖十二幀	二、三九〇
洲濱形黑地田植時繪香道具	四、一九〇
黑地松竹梅時繪重硯箱	二、五七〇
能面四十七面	八、一九八
銀臺子揃	二、八〇〇
時代菊地紋獅子耳丸爐	二、二〇〇
抱一隅田川雪月花三幅對	五、八九三
能面四十六面	七、七五九
紅地摺箔桐鳳風模樣長絹	六、一〇〇
他長絹十四枚	三、三〇〇
目貫小柄斧十段箱入	三、三〇〇

白地龜甲丸龍鳳模樣厚板	二、三〇〇
他九枚	二、三八〇
萌黃地模樣大口他十三枚	三、八九〇
染付四方鬼面耳花入	二、三九三
白地金輪進七寶模樣狩衣	三、八九〇
他九枚	三、九一〇
金唐花法被外法被十一枚	六、一八〇
紫地立杵模樣單狩衣他九枚	三、一〇〇
元信四季山水六枚折屏風一雙	七、〇〇〇
紫地卷物筆車模樣長絹	七、〇〇〇
他十二枚	七、八八〇
茶地鳳凰丸壽字筋違格子翁	八、六五九
狩衣他八枚	三、五〇〇
摺箔白襪子地紋犀銀蔓唐草	六、五九八
模樣能衣他九枚	六、五〇〇
縫箔淺黃銀摺藤之花丸縫模	六、五〇〇
樣能衣他四枚	六、五〇〇
白紺桃色重菱菱紋厚板唐織	六、五〇〇
能衣他八枚	六、五〇〇
紅地花車紅葉散唐織能衣	六、五〇〇
他二枚	六、五〇〇
某華族並某家賣立 七月三日	
拵付大小藤原村正	二、〇五九
石州直綱刀	二、六八〇
石州直綱短刀	二、〇五八
國寶光忠刀	二、三、五〇〇
名物庖丁正宗短刀	一四、七〇〇
古青江包次刀	六、五八八
備中國住次直短刀	六、三八〇
二字國俊刀	四、六二〇
觀山郭子儀双幅	七、三〇〇
竹溪深山祥猿	七、三九〇
栗田口國安刀	二、〇三九
古備前友成刀	三、二三〇
來國行刀	二、六九八
拵付大小	二、五八八
大判小判數々	二、〇一八

拵付大小	二、一九八
篠霰左文字短刀	二、一八〇
神保長光刀	六、九八〇
拵付大小虎徹	三、一一〇
正宗刀	二、五九〇
觀山澤市	三、三〇〇
鳩居莊澤井家賣立 十月三日	
諸大家畫帖	七、五〇〇
大觀寒山拾得	二、八六〇
某伯爵家、豐後森家並 十月二十六日	
助眞刀	五、〇五六
梅逸淺絳秋景山水	二、〇六〇
一文字大小	三、八九八
古青江鹿次刀	三、一八〇
竹田枯木叭々鳥	五、一七〇
吳春栗小禽	三、八九三
竹田秋晴晚歸	四、一〇〇
竹田芭蕉鸚鵡	六、五九八
應舉琴高仙人	五、一一一
竹田花果紫笥	三、九一〇
竹田風標公子	一、二一〇
竹田雲華双幅	五、八九三
竹田七香	三、一一〇
竹田月下秋蟲畫贊	二、一九八
山陽寒林山水	四、三〇〇
竹田月下蘆雁	二、五八〇
壽得莊並某家賣立 十一月二十六日	
雅邦巖上遊鶴	四、〇九八

雅邦老松白梅鶴二枚折屏風 一、五〇〇
一雙
雅邦瀧見觀音 三、三九〇

井上家、小林家賣立 十一月三十日
白磁遊環獅子摘香爐 三、六八〇
竹泉寫乾山水仙花鉢 二、二五〇
大觀春曙 二、七三〇

某男爵家、某大家賣立 十二月七日
春草三保之富士 三、八九三
御舟紅葉 二、〇八八

溪舟居所藏品賣立 十二月十四日
草雲十指春風 三、三〇〇
白磁獅子摘共蓋香爐 三、三九八
華山芝嶺祝壽 一、九〇〇
其一金地槍山六枚折屏風 七、八九〇
古滿安臣御側簞笥 二、四九八
杏所袋田瀑布 五、六九〇
岡田三郎助水浴之前油繪 二、九〇〇
探幽外百人一首帖 四、三一〇
梅逸四季花鳥六枚折屏風一雙 四、五一九
伊年扇面散紅葉鹿六枚折屏風 二、三九〇
是眞中月宮殿三幅對 五、五九〇
燕村梅溪春色 一、三〇〇
木米秋景山水 三、〇〇〇
大雅堂四季山水四幅對 三、一三〇
大雅堂四季山水六枚折屏風 二、二九九
一雙

某家刀劍小道具賣立 十二月十六日
拵付大小定慶宗助 二、三八九
國寶鞘卷太刀助包 二、八、五〇〇

拵付大小眞長則光 二、〇三〇
拵付大小長義兼光 二、五二〇
鞘卷太刀兼利 二、二九〇
衛府太刀康光 二、六〇〇
白鞘短刀兼氏 五、七〇〇
鞘卷太刀康光 二、六九〇
鞘卷太刀直則 二、六九〇
金無垢雲龍彫太刀兼氏 六、三八〇
毛拔形白太刀海野勝珉 四、五〇〇

白雲居所藏品賣立 十二月二十一日
木目地扇面蒔繪硯箱 二、五九八
提籃一組 五、〇〇〇
龍子爐前春秋 二、八九三
雅邦春秋山水又幅 一、五九一
周銅鑒簞章 二、一三九
雅邦松上雙鶴 三、三九八
竹田春宵山水 三、三九八
山陽題畫七律又幅 三、三九八
百穗松上鶴 四、一九八
芳崖山水花鳥人物寄書 三、一二八
景年月下掃衣 五、八九〇
景年紅楓啄木鳥三幅對 二、三八〇
雅邦冬江祥雁 七、三八八
雅邦寒梅鴛鴦 七、三九八
直入聖德萬歲 二、七九八
百穗林靄層巒 二、〇五九
松園新堂 五、三〇〇
雅邦老松積雪 二、〇九八
雅邦靈峰遊鶴 三、五〇〇
松園花下美人 二、七八〇
抱一菊小禽 五、二六八
景年水汀祥禽六枚折屏風一雙 八、〇〇〇

廣業唐美人 二、七五〇
雅邦松林曉靄 四、三九八
百穗中淡彩壽老三幅對 三、一〇〇
直入蓬島春曉 四、一五〇
大觀八哥鳥 三、三九八
雅邦中壽老人三幅對 一、〇八〇
雅邦龍虎又幅 二、八五〇

雲松軒並某家賣立 十二月二十六日
大觀瀑布 二、三九〇
雅邦秋江網舟 三、九五九
古徑晚豆 二、六九八
中雅邦旭日三幅對 二、〇一〇
翡翠梅鳥彫花瓶 二、六〇〇
雅邦朝陽海邊又幅 九、六八〇
古徑菊 三、五八九
光琳松樹 五、一〇〇
中如是觀書三幅對 一、〇一〇

大阪美術俱樂部

北攝岸上家並某家賣立

二月十日

竹田山茶梅花山陽贊 五、一九〇
竹田野餐橫物 一、二〇〇
竹田竹裏茅舍 四、三九五
大雅堂中富嶽三幅對 七、三九五
木米天台紅葉 三、三九〇
燕村桃花仙源 六、七一〇
謝春星松頭富岳橫物 四、一一〇
燕村山月夕嵐 五、六九〇
山陽水墨山水畫贊 三、六一〇
山陽天草洋詩 一、五五九八

山陽謝大鹽士超贈刀 三、二八九
長句大橫物 三、三一〇
山陽通議七絕 三、五九五
半江春山煙雨畫贊 六、八九〇
半江新綠山水畫贊 一、三三九
半江青綠柳桃山水 二、〇九〇
春琴水墨交魚山陽贊橫物 二、六九三
梅逸花鳥條幅 一、五〇〇
梅逸蓮鴛蜻蛉 三、八〇〇
梅逸茸狩畫贊 九、一八〇
梅逸芝居見物畫贊 三、三一九
梅逸觀月美人畫贊橫物 七、九六八
梅逸雷神夕涼畫贊橫物 三、七〇〇
梅逸雪中義士畫贊橫物 二、二〇〇
竹溪曉野雙馬 一、〇〇〇
竹溪山陰避暑林泉高隱又幅 一、一五八
直入雙壽齋眉 二、八九三
直入柳下觀音三幅對 二、〇六〇
直入沈墮秋色橫物 二、五九五
應舉撫子花雙鬼橫物 二、三九〇
應舉稻穗雀橫物 三、三〇〇
吳春豐年 三、〇〇〇
景文秋景山水 二、八九〇
一鳳新綠通天紅葉高雙幅 三、三一〇
一鳳巖上雙猿 二、一九三
狙仙山水遊猿橫物 二、〇八〇
爲恭高砂 二、二九九
芳園高砂 二、六〇〇
寬齋新綠山水 四、三六三
寬齋溪流野鹿橫物 二、八一〇
寬齋紅葉溪山歸樵 七、六〇〇
岸岱紅梅雉子錦木又鬼又幅 三、七一〇

長春納涼美人	二、五九五	唐物青貝山水人物折足卓	二、四七三	雅邦馬師皇	三、九〇〇	印舟江墨蹟	四、八〇〇
長春士女遊樂橫物	三、七九〇	伊賀耳附花生	二、一〇〇	推朱蓮彫盆	二、七〇〇	松花堂佐野渡	三、九一〇
芭蕉秋の野日畫賛	二、六九五	青磁中燕四方花生	二、〇〇〇	仁阿彌道八座禪狸	二、一九八	山陽伊達政宗詠詩	五、〇〇〇
江月一行(三盃々々又三盃)	二、〇〇〇	砧青磁筍花生	三、六三九	祥瑞捻鉢	二、〇〇〇	竹田富嶽	三、四〇〇
一蝶竹白雀	四、三〇〇	青漆麥瓢式花餅	八、〇〇〇	當市森小竹園	二、一一一	山陽鉢ノ木詠詩	二、六八〇
景年高砂	二、三〇〇	均窓掛子口大花餅	三、六九〇	茨木内田家賣立	四月八日	山陽楠公詠詩	二、五〇〇
景年名妓歌妓舞妓三幅對	三、八一〇	周青銅地紋壺花餅	二、〇九〇	四月八日		梅逸春秋花鳥及幅	三、八五〇
鐵齋青綠龍山飛泉	三、一九五	黃伊羅保茶碗 銘山櫻	四、六〇〇	榎嶺荒磯群魚	二、一一一	對山西園雅集	三、一〇〇
松園月かけ美人	三、三八九	志野茶碗 銘見瓦	六、七〇〇	某家賣立	四月二十四日	耕石三幅對	二、一九〇
鳳山倭美人	三、六五〇	呂宋眞壺 銘澤水	三、五一九	吳春壽星拜日	一、三、九〇〇	景文大小蓮相思鳥	五、一八〇
梅逸淡彩山水畫冊	二、〇〇〇	阿蘭陀色繪水指	一〇、六〇〇	蕪村春秋山水及幅	四、六〇〇	孝敬雪中松狗兒	二、六九〇
素絢粧美帖	七、〇〇〇	南蠻横繩四ツ耳水指	二、六〇〇	芳園四幅對	一、二、〇〇〇	雅邦山水及幅	二、一八〇〇
古筆手鑑(二)	五、一〇〇	唐物獨樂盆	三、四三〇	芳園南蠻泰朝顔	一、二、〇〇〇	芳崖松露瀑布	七、三八〇
山陽紀行書畫卷	二、六九〇	青瑯玕曲玉大小六個	一、六〇〇〇	完瑛秋景嵐山	五、四一〇	竹邨松林山水屏風一及	二、八三九
長春美人遊卷	二、一九〇	神代器	三、六九八	完瑛月ヶ瀬風景	三、二五〇	伊賀花生	一〇、五〇〇
直入百華畫卷卷捲り	三、五〇〇	古渡り白地唐華紋金更紗	九、三〇〇	完瑛月ヶ瀬風景	二、〇〇〇	祥瑞福壽香爐	六、一九〇
山陽四字額(嘔香竹聲)	二、五一九	烏泥萬寶順記茶鉢	二、五〇〇	雪鶴筒形小香爐	三、七〇〇	正阿彌勝義作銀鱗鳳龜龍香	一、三三〇
山陽五字額(時還讀我書)	三、四九〇	古染付六捻茶碗十客	三、〇〇〇	青磁三足香爐	二、六〇〇	萬曆赤繪仙人鉢一對	二、七二一
菴翁三字額(天無私)	二、六〇〇	吳洲赤繪玉之字鉢	三、一〇〇	交趾拓榴香合	一、四、一〇〇	交趾菊蟹香合	三、五〇〇
對山越溪秋色額	二、三二〇	吳洲赤繪福之字鉢	四、八九〇	染付隅田川香合	六、二〇〇	吳洲月茂叔香合	二、五九八
古代春郊遊樂街立	二、五九三	推朱對葵彫丸盆	八、九〇〇	染付鞠狹香合	二、四一〇	祥瑞松竹梅茶器	二、二〇〇
重要美術品認定古代加茂	一、六五〇	推朱蓮鷺彫丸盆	二、七〇〇	瀬戸唐津平茶碗	八、四一〇	高取茶入みをつくし	二、〇〇〇
神社鏡馬六曲屏風一及	二、一九〇	梨子地松櫻山水蒔繪文臺硯	二、一一九	覺々齋手造黒赤茶碗一及	二、八一〇	黃伊羅保茶碗松花	一、二〇〇〇
時代金地櫻花屏風一及	二、三五八	木米金欄手酒吞	二、四〇〇	記三紹鴨中棗	二、四一〇	ノンカウ赤茶碗長生	三、五〇〇
海僻山水人物屏風一及	二、六五八	祥瑞口紅丸紋中皿 二十	三、三一九	碌々齋好既裏棗	二、九五〇	仁清色繪梅鉢茶碗	二、七〇〇
寬齋四季花鳥中屏風一及	三、九一〇	祥瑞大皿 外販交上	二、一九〇	鐵刀木茶箱皆具	三、三〇〇	染付山水水指	三、八〇〇
唐物茶入水戸文琳	六、五〇〇	乾山色繪々替り上器皿 十	三、〇〇〇	木原竹壁庵並某家賣立	五月二十八日	螺螄龍炭斗	二、〇〇〇
光琳蒔田鹿蒔繪硯箱	五、三〇〇	青磁大平鉢	四、五九〇	清巖一行	三、五九三	與次郎薄月地紋四方釜	二、〇〇〇
祥瑞蜜柑香合	四、〇〇〇	某家賣立	三月二十八日	古筆手鑑	二、〇〇〇	田村家賣立	十一月十八日
乾山薄鹿香合	三、二〇〇	又兵衛中屏風一及	六、七〇〇	岡山市尾谷家並某家賣立	十月三日	周文眞山水了庵賛	一、八〇〇
白磁獅子摘共蓋遊銀香爐	六、六八〇	完瑛四季四幅對	二、二五〇				
白磁玉取龍摘共蓋遊銀方	三、六九三						
祥瑞山水水對話繪三足香爐							

牧溪政黃牛北欄贊	七、三〇〇	景文高鈔	九、〇〇〇	井戶雨漏茶碗 銘優華	三、〇〇〇	吳洲八角火入一雙	五、三〇〇
舜舉茄子	六、七〇〇	爲恭中神功皇后三幅對	一、一〇〇	熊川茶碗歌 銘夏山	九、五〇〇	半入木地爐緣	四、五九〇
雪舟破墨山水惠菊贊	二、一九〇	爲恭持統天皇行幸雪城人麿	二、五〇〇	長次郎黑茶碗 銘羽衣	二、九〇〇	豐公時代高臺寺蒔繪爐緣	三、一三〇
雪舟枯木寒鴉	三、〇〇〇	和歌雙幅	二、九〇〇	綴部黑茶碗 銘山道	七、〇〇〇	唐物脛當炭斗	四、一〇〇
秋月杉林鳥	三六、九〇〇	狙仙蜂猿	二、〇〇〇	仁清黑釉文字筒茶碗	五、六三〇	紹鴨所持紙より釜敷	四、一九〇
宗丹四季山水四幅對	一、〇〇〇	素絢祇園詣	二、〇〇〇	保全金欄手葵紋寶蓋茶碗	三、〇五〇	名物風字硯	一、二〇〇
珍海僧都當麻曼茶羅	三、八九〇	狙仙櫻五猿	六、五〇〇	遠州共筒茶杓歌銘 銘く春	四、〇〇〇	推朱松下仙人彫硯箱	三、六〇〇
宅摩勝賀八陽經本尊釋迦牟尼佛	四、六九〇	狙仙秋草睡猪	二、〇〇〇	交趾柘榴香合	五、九五一	唐物青貝軸盆	二、九六九
兆殿司普賢菩薩	二、一九〇	寬齋豐公清正茶室密談	四、一〇〇	染付臺布袋香合	二、四〇〇	光悅蝦蟇仙人繪硯箱	三、〇〇〇
大燈國師墨蹟	三、〇〇〇	清輝雲雀、雨中早苗、流水鹿、雪中松四幅對	四、〇〇〇	堆黑達磨香合	二、三八〇	梨子地吉野山蒔繪料紙文庫	一、〇〇〇
石室禪師枯木叭々鳥畫贊	五、〇〇〇	一鳳月下海邊松	五、九〇〇	名物利休尺八花入	三、八九〇	平目地閑鼓鷄蒔繪硯箱	五、四〇〇
中興名物澤庵江月兩筆一行	八五、〇〇〇	雪巾散櫻昌點、瀑布、月二薄	七、六〇〇	遠州二重切花入 歌銘	六二、〇〇〇	村梨子地菊蒔繪重硯箱	三、八〇〇
定家和歌	四、一〇八	芳園御室春景	四、三〇〇	宗全籠花入	三、六〇〇	九紋蒔繪印籠筆筒 印籠二	一、九〇〇
爲家消息	三、〇〇〇	一鳳邊狸	七、一〇〇	碾青磁不遊環廣口花生	五、三〇〇	唐物青貝樓閣人物大平卓	四、〇八九
澤庵三行	三、〇〇〇	芳園鄧陽雄子	二、二九〇	碾青磁不遊環花生	三、四九八	仁阿彌道八猿置物	七、一〇〇
信尹公懷紙	三、二〇〇	北齋來燕歸雁千蔭贊	二、六九九	古備前大德利花入 銘きける	四、六〇〇	時代梨子地山水蒔繪冠卓	六、五九八
松花堂西行像畫贊	三、九五〇	春章江口君千蔭贊	七、三〇〇	南蠻切溜花入	二、〇〇〇	祥瑞口紅丸紋山水詩入鉦鉢	一、〇〇〇
江月和尙無字	二、三九八	蕪村秋溪樵夫翠山碧樹雙幅	五、二九三	同	五、七一八	吳州赤繪魁鉢	四、七〇〇
清巖一行	八、三九〇	山陽菰翁水墨山水雙幅	二、一九三	青磁鐵鉢水指	三、四〇〇	志野橋繪四方額鉢	二、七六〇
松花堂梅見布袋澤庵贊	一、〇〇〇	半江米法秋景山水	一、二九〇	青磁鐵鉢水指	五、七〇〇	乾山菊形金入向付五人	二、〇〇〇
石州一行	四、一八	海嶠三社三幅對	二、一九〇	南蠻繩簍水指	一、九〇〇	祥瑞瓊形德利	四、四〇〇
松花堂一本菊江月贊	一〇、五〇〇	雅邦竹林彈琴	五、三〇〇	青磁鐵鉢水指	二、二一〇	祥瑞鹿人物酒吞	五、九五〇
信實秋野家隆贊	三、五九八	古筆手鑑濱千鳥	一五、一〇〇	染付昆布畫水指	四、一九〇	染付山水人物五ッ入子酒吞	七、一九〇
探幽瀧河鶴	二、一〇〇	文晁京名所畫帖十五枚	二、五〇〇	菊桐紋彫茶箱	二、三九〇	名物小夜左文字短刀	二、一九八
探幽中觀音三幅對	七、一〇〇	惟久蘆引ノ繪五卷	六、五九〇	仙叟好淨久夕顏釜	二、三九〇	南蠻鉦 磨 禾添	八、三九〇
常信中蓬萊三幅對	七、一九〇	光悅和歌卷	三、九〇〇	名物利久四方釜 古澤味作	四三、九〇〇		一八、九九〇
尙信水月猿猴澤庵贊	五、九九〇	又平元祿踊二枚折屏風光悅贊	五、〇〇〇	古天貓刷毛目筒釜	三、五〇〇	春松庵並某家實立 十一月二十七日	四
應舉中日ノ出三幅對	八二、〇〇〇	探幽樓閣人物六枚折屏風一雙	二、六九〇	初代寒雄子枝菊地紋釜	二、一九〇	芳園萩喜雀	二、一七〇
吳春菱源五郎鮎茶山贊	三、二〇〇	大名物山ノ井肩衝茶入	二〇、〇〇〇	朝鮮唐津切蓋置	二、八九八	寬齋二枚折屏風一雙	六、一六〇
應舉香山九老	五、〇〇〇	瀨戶茶入銘 鹽屋	六、一一〇	唐物雁竹方盆	三、五〇〇	寬齋海邊老松飛雁屏風一雙	三、〇〇〇
應舉晚鴉	二、六九八	古薩摩耳付茶入 銘可卜	三、一九〇	南蠻砂張青海盆	二、一九三	古赤繪金欄手盛盞瓶	二、〇〇〇
景文紅白牡丹	一八、九〇〇	高麗片手茶碗	六、五九〇	唐物青貝四方緣樹下人物盆	四、五一		
		青井戸茶碗 銘孤月	二、三〇〇				

京都遠藤家賣立 十二月九日

印陀羅塞山拾得双幅	文林贊 一〇、〇〇〇円
熊野懷紙飛鳥并雅經卿筆	二四、九〇〇
利休白餅文	一八、九一〇
西行假名文	二、八四〇
周文眞山水 岐翁玉腕贊	二、〇〇〇
雪舟眞山水	四、六〇〇
江月書一行	四、五九〇
丈山後赤壁畫贊橫物	二、〇五〇
守景旭鳴門双幅	三、三一〇
探幽枯木寒鴉畫贊	二、六九〇
宮川長春美人之圖	三、九〇〇
光悅扇面畫贊	二、七八九
抱一伊勢物語橫物	五、七一〇
景文八重櫻春草薙子圖	一六、三〇〇
景文岩上蛭子之圖	二、二一〇
清暉猊々圖	四、六九八
應舉水月橫物	二、三一〇
吳春蓬萊畫贊橫物	二、三九八
清暉山水双幅	七、三九八
一鳳菩提樹佛法鳥	一、九三〇
清暉十二月十二幅對	四、三〇〇
連山猿	二、一〇〇
始興牧童草花蜻蛉鈐畫屏風 一雙	三〇、〇〇〇
雪信四季花鳥山水中屏風 一雙	二、一一九
磁青磁袴腰香爐	一七、七〇〇
唐物螺鈿螺蛸鈴春日卓	一〇、一九〇
唐物青貝松下人物平卓	五、三九〇
鈐瀾籬菊螺鈿料紙文庫	三、一九八
古銅柑子口花生	二、七〇〇
磁青磁算木花生	二、三九八

劍中一重切花入	八、八八〇
唐物曙茄子茶入	一、一〇〇〇
膳所燒肩衝茶入歌 銘老松	二、六一一
朝日春慶肩衝入 銘連城壁	二、〇〇〇
宗和侯好松ノ木聚	三、七〇〇
祥瑞寶蓋共蓋茶器	二、七〇〇
藤屋井戸茶碗	二、〇〇〇
黃伊羅保茶碗 銘中やめ	五、一一〇
斗々屋茶碗 銘小倉山	三、〇〇〇
無地志野茶碗 銘鳴戸	二、六一一
禮賓三島平茶碗	二、三九〇
朝日筥目茶碗	三、八六〇
唐物獨樂香合	二、一一一
劍翁茶杓	四、〇〇〇
竹心共筒茶杓 銘無雜	三、一九〇
牡丹花宵柏共筒茶杓 銘東方朔	二、三一〇
磁青磁外シノキ水指	四、〇〇〇
松木萩耳付至水指	二、〇〇〇
蘆屋住吉釜	四、三九八
霞猿釜	三、三九八
談古堂釜	二、〇〇〇
古天貓姥口手取釜	二、七八〇
與二郎鐵欠風爐	二、七〇〇
唐物藤組透炭斗	五、三九八
南疊砂張合子建水	四、三〇〇
時代九太椽	三、二〇〇
唐物獨樂盆	二、六九三
時代龍地鈐瀾菊蒔繪手焙	四、一九
織部菊之繪手鉢	一七、四〇〇
御本刷毛目三角鉢	五、四一〇
乾山扇面繪替向附 五人前	三、五一九
志野四方向附 五人前	七、五九〇

古備前德利	二、五〇〇
井源眞黑扇面蒔繪煮物椀 二十人前	三、二七〇
菩提樹念珠	三、五一〇

丘甫庵賣立 十二月二十三日

清巖一行	三、〇〇〇円
秋暉柘榴小禽	二、四一〇
清暉中西王母三幅對	二、八九〇
來章子母鷄	二、二〇〇
芳園通天華頂山双幅	二、一九〇
清暉老松櫻小禽	二、八九〇
來章嵐山通天双幅	二、二一〇
容齋高砂双幅	二、四三九
松園夏美人	七、〇〇〇
芳文小鷹狩	二、二〇〇
瀬戸尻張茶入 銘澤水	二、一一〇
織部紅葉繪香合	二、七〇〇
黨伊羅保茶碗 銘宇治山	六、七〇〇
御本鹿ノ子茶碗 銘住之江	二、〇〇〇
古染付雁水水指	三、四一〇
染付芋頭山水共蓋水指	二、一一〇
萬曆赤繪花鳥四方水指	二、二三〇
染付芋頭風繪共蓋水指	三、四一〇
玄々齋好四季銘一閑溜塗茶箱 皆具	三、〇〇〇
了全交趾寫眞形振出	二、〇〇〇
志野山水繪四方鉢	一〇、〇〇〇

京都美術俱樂部

廣岡家賣立 三月二十三日	五、〇三三円
蕪村群仙百老	

吳春早春殘雪、風雨漁艇、秋山流水、寒林水禽、四幅對	二、一三〇
蕭白梅及鶴老松鹿双幅	三、一八〇
吳春書畫張交屏風一雙	三、六九〇
長寬萬曆色繪輪花喰籠	四、〇〇〇
青磁菊花生	三、〇〇〇
唐物籠菱形手付花生	二、五九八

某家賣立 四月二十七日

竹溪西行法師	二、二三九円
來章麥ニ雀雀稻ニ雀屏風一雙	二、四〇〇
祥瑞針木唐子中皿	二、七一〇

某家賣立 五月十八日

雲華竹林	二、二〇〇円
山陽安土公詩	二、一〇〇
清暉春景嵐山、壽老、秋景高雉三幅對	三、二二六
寬齋雪中炭竈	二、〇〇〇
祥瑞振出	二、四〇〇

鐮川家賣立 五月二十五日

天平時代迦陵頻迦羽衣	三、〇〇〇円
天平時代青瑠小尺鐵方磬殘闕	二、〇〇〇
天平時代進走德、新鳥蘇	五、〇〇〇
東山時代菊蒔繪錫機手宮	七、〇〇〇
織部耳付茶器	二、〇〇〇

某家賣立 六月八日

梅逸青綠瀑布圖	七、五一〇円
春翠中蓬萊山三幅對	二、〇五八
梅逸不老長春圖	三、六三八
景文四季花鳥押繪張屏風一雙	三、〇五九
南疊砂張椿先建水	二、六一八

江州某家賣立 九月二十八日

吳春雨雪山水双幅 三、七〇〇 円
應舉老松鶴 二、六六〇
清贖都名所四季四幅對 二、六九〇
竹堂四季花鳥四幅對 二、一〇〇
仁阿彌道八櫻繪手鉢 三、三九〇

中島半兵衛氏賣立 十一月二十三日

素絢金地四季草花繪屏風一雙 五、〇〇〇 円
吳州赤繪見込タンパン鹿壽老平鉢 三、〇〇〇
時代梨子地櫻川蒔繪書見臺 六、〇〇〇
時代梨子地草花蒔繪提重 五、〇〇〇
家熙公懷紙 二、六九八
光成金地大井川三船之圖 二、五九八
道市鳴戸蒔繪硯箱 四、三〇〇
傳又兵衛金地繪中屏風一雙 三、三三九
古赤繪六角高欄付香合 二、三一〇
唐物青貝樓閣山水人物平卓 二、五〇〇
應舉蓬萊山 二、一〇〇
春正研出桐蒔繪內秋草平棗 二、二三〇

入札及賣立 十二月十四日

祥瑞枕香合 三、一〇〇 円
直入秋林夕陽 四、七一〇
鐵齋扶桑神鏡 四、六八〇
鐵齋椿樹仙鏡 二、二〇〇
寬齋中旭日波濤三幅對 五、三九〇
景年三羽鶴 四、六〇〇

某家賣立 十二月二十一日

古渡絞五色氈 二、三八九 円

美術市場

保全金欄手四方香合 二、一〇〇
松花堂布袋 二、一〇〇
紫式部久海切 一、一三〇
古金銀一揃 五、五五〇
慈鎮丸山切 二、〇〇〇
俊頼古今集切 一七、〇〇〇
古金銀一揃 三、六〇〇

名古屋美術俱樂部

村瀨庸庵賣立 一月二十四日

黃瀬戸筒火入 三、〇〇〇 円
梅逸着色春景嵐山繪襖 二、〇〇〇
二開四本

岡田松濤庵並某舊家賣立 三月十九日

梅逸淺絳山水 二、五〇〇 円
梅逸老梅幽禽 二、三〇〇
粉吹茶碗 二、一〇〇
雁木胴紐煎茶茶碗 二、四〇〇
赤地金欄手向付 二、二〇〇

西區村瀨家東區

鈴木松柏亭賣立 三月二十九日

梅逸淡彩占出山 二、二〇〇 円

岐阜宮島華陽莊賣立 五月十七日

寬齋古猿以木報仲景 四、〇〇〇 円
吳春秋景山水 二、五〇〇
志野茶碗 三、五〇〇

故西垣西屋翁並平田家賣立 六月五日

行成伊豫切 四、五〇〇 円

伊勢鈴木養老庵賣立 十月五日

芭蕉八九間雨柳之句 八、〇〇〇 円
吳春夜半翁像畫贊 二、二〇〇
染付葡萄水指 五、五〇〇
瀬戸澁紙手建水 二、四〇〇
樂翁茶杓定邦茶杓 二、〇〇〇

某家賣立 十月十七日

石山切貫之集之內 四、〇〇〇 円
戌辰切 三、五〇〇
不昧公手造飴藥茶碗 六、〇〇〇
瀬戸黑茶碗 二、〇〇〇
唐物獨樂香合 二、〇〇〇
雲鶴茶碗 二、五〇〇
蕎麥平茶碗 二、〇〇〇
志野頭巾香合 二、〇〇〇
黃瀬戸桐繪椽鉢 二、〇〇〇
井戸茶碗 三、五〇〇

故深田仙太郎氏並

某家賣立 十一月二十四日

雪舟中壽老三幅對 二、〇〇〇 円
景年雪吹双雁 二、二〇〇
古伊賀耳付花生 六、五〇〇
余三棗 三、〇〇〇
石州公共筒茶杓 二、〇〇〇
梨子地山水蒔繪文臺硯箱 四、三〇〇
有職蒔繪臺子 二、七〇〇

鈴木權六氏並堀田
麗聖軒並某大家賣立 十二月七日
二、六〇〇 円
華山鐘爐

昭和十一年度美術文獻目錄

凡例

一、此處に採録する美術文獻は我が國に於て昭和十一年中に發行された單行本、定期刊行物及諸新聞掲載のものに限つた。

一、東洋古美術文獻探錄の範圍は原則として美術關係のものに限つたが、考古學、歴史地理其の他のものに就ても美術に關係あるものは適宜採録した。

一、現代美術文獻目録は東洋古美術關係を除き、明治大正以後の現代美術及び美術一般に關するものを輯めた。

一、西洋美術に關する文獻は便宜上現代美術文獻目錄中に西洋現代美術及其の他外國美術の二項を設けて採録した。

一、建築に關しては、本書本文の凡例に記した範圍に限定した。竣工建築物報道の記事は工事概要のみを記したるもの、或は寫眞のみを載せたるものは省略し、紹介批評の記事あるもののみを採録した。

一、物故作家及美術關係者の項は本年度中に歿した人々の記事に限つた。

一、各項目内の配列は單行本にあつては書名による五十音順、定期刊行物所載文獻にあつては所載雜誌名による五十音順とした。同一雜誌の配列はその發行順である。但し展覽會批評及昭和十一年出版物作家評傳は雜誌別に據らずして題目別にまとめた。

一、本目錄に採録せる定期刊行物及新聞紙は左の通りである。

現代美術文獻目錄採錄定期刊行物目錄（五十音順）

アトリエ
浮世繪界
繪畫教習
改造
學校美術
現代美術
建築雜誌
建築世界
工藝ニュース
國際建築
思想

新建築	帝國工藝	日本建築士	美術街	文藝春秋	新聞目錄(五十音順)	大阪朝日	週刊朝日	東京朝日	報知	古美術文獻目錄探錄定期刊行物目錄(五十音順)	アトリエ	鴨臺史報	京都美術青年會誌	工藝	國語文藝	史迹と美術	四天王寺	書道	中央公論	東方學報	東洋文化	美術研究	文藝學	星岡	大和志	歷史學研究
中央公論	中央美術	美塔	美術評論	美術研究	洋畫研究	大阪毎日	新愛知	東京日日	每夕	以可留我	浮世繪界	繪畫教習	現代美術	考古美術	國華	史蹟名勝天然紀念物	神社協會雜誌	中央美術	東洋學報	南畫鑑賞	美術	ビタカ	佛敎	滿蒙	夢殿	歷史公論
中央美術	美術影	美術評	美術教育	美術教育	歷史教育	京城日報	中外商業	福岡日日	都	瓜茄	建築雜誌	考古學雜誌	史苑	史觀	思想	書畫骨董雜誌	圖畫と手工	塔影	東洋史研究	日本美術協會報告	美術及美術史	美之國	瓶史	みづ	林泉	歷史地理
圖畫と手工	南畫鑑賞	美術之國	美術	美術	美術	時事新報	中外日報	美術通信	讀賣	漆と工藝	學校美術	建築世界	考古學論叢	史蹟と古美術	史蹟と古美術	書藝	茶わん	陶磁	東洋美術	汎工藝	美術街	文藝化	寶雲	燒もの趣味	歷史教育	

目次

現代美術定期刊行物所載文獻

論文及隨筆

總說	雜誌別五十音順	二一八
日本畫	"	二一八
洋畫	"	二一九
彫刻	"	二二〇
建築	"	二二〇
工藝	"	二二三
版畫	"	二二四
壁畫	"	二二四
挿繪	"	二二四
漫畫	"	二二五
作家論	"	二二五
物語作家及美術關係者	人名別五十音順	二二六
批評論	雜誌別五十音順	二二八
時評	"	二二八
身邊雜記	"	二二九
雜	"	二三一
都市施設	"	二三一
明治大正美術	"	二三二
外國現代美術	"	二三二
繪畫		
彫刻		
建築		
工藝		

展覽會記事

其他外國美術	"	二三五
舞臺美術	"	二三五

綜合展覽會

日本畫展覽會	題目別五十音順	二三六
洋畫展覽會	"	二四〇
彫刻展覽會	"	二四三
工藝展覽會	"	二四七
版畫展覽會	"	二四七
圖案及商業美術展覽會	"	二四八
雜	雜誌別五十音順	二四八

美術行政

帝院及官展關係	雜誌別五十音順	二四九
法規	"	二五〇
美術關係施設	"	二五〇
美術教育	"	二五一

美術教育

現代美術單行圖書文獻

總說・綜錄	書名五十音順	二五四
日本畫	"	二五四
洋畫	"	二五四
彫刻	"	二五五
建築	"	二五五
工藝及圖案	"	二五五
版畫	"	二五七

教育	"	二五七
外國古美術及近代美術	"	二五八
雜	"	二五八
補遺	"	二五八

古美術定期刊行物所載文獻

總說・綜錄	雜誌別五十音順	二五九
繪畫	"	二五九
書蹟文書、附篆刻	"	二六三
彫刻	"	二六四
建築及庭園	"	二六五
工藝	"	二六七
雜	"	二六九
其他	"	二六九
考古學・金石關係		
佛教及歷史關係		

古美術單行圖書文獻

總說・綜錄	書名五十音順	二七二
繪畫	"	二七二
書蹟	"	二七三
彫刻	"	二七三
建築及庭園	"	二七三
工藝	"	二七四
雜	"	二七四
其他	"	二七四

現代美術定期刊行物所載文獻

論文及隨筆

總説

人生のための藝術

日本美術の眞髓

傳統の偶像化其他

半眼微笑—東方の智慧と

その發想—

遠近法と東洋精神

けてもの即はいから乎

新東洋美術概論及點的話

線の話(一)

濕度的表現

東西藝術の生理的考察

繪畫史上に於ける現代

作家と生活の問題

閑秀作家の道

美の追求

展覧會の過去及び將來

風土と美術

ガートルード・ボイル

岡登 貞治

中山 巍

吉田 一穂

山際 靖

ブルーノ・グット

龍村 謙

同

金原 省吾

高村 眞夫

荒木 十畝

仁木 烈

神崎 憲一

武者小路實篤

正木 直彦

荒木 十畝

石川欽一郎

アトリエ 一三ノ一

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

灰色を排撃する

日本の傾向

青年と美術

民族に依る藝術と文化の

特異性—主として色に就て—

美術家の苦心

藝術價値の評價

内容と表現

科學的藝術論

藝術精神の没落

新開所載文獻

美術半宵記

美術と大衆

美術的ヒューマニズム

に就て

日本畫

日本畫の洋風傾向に就て

雷聲畫趣

日本畫洋畫の對立關係

堂本印象氏の新作醍醐寺の純淨觀の模繪

熊岡 美彦

碓 伊之助

南 鸞造

大隅 爲三

川路 柳虹

依 續三

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一三ノ二

一三ノ一

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

一三ノ二

秋の花

「秋の山水」と題して

秋の魚に就て

秋の花鳥

冬の花隨感

日本畫に表れた日本精神

床間藝術と純藝術

外人に日本畫を教へて

雁と鴨

日本畫の貧困と染織の興趣

筆から見た日本畫

日本畫の傳統と新意

繪畫寸言

展覧會による日本畫樣式

の破壊

會場藝術の主張

新歷史畫の提唱

眼

日本畫と西洋畫

西洋畫の材料に就て

望月 春江

大智 勝觀

堅山 南風

木本 大果

吉田 秋光

赤津 隆助

川崎 小虎

井上 恒也

望月 春江

上 恒也

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

繪畫教習 四ノ九

同 四ノ一〇

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

私の水墨畫に就て	近藤浩一路	塔影	一二ノ九	自娛と信念	赤松 義麿	南畫鑑賞五ノ九	新聞所載文獻	松瀬 青々	大阪朝日八・二五
花鳥畫に就て	吉田 秋光	同	同	雅感一束	藤田 嗣治	同	此畫の話	津田 青楓	京城日報六・一四
裝飾といふこと	高木保之助	同	同	秋草の美	川路 柳虹	同	東洋畫の新方向	讀賣	一・二二
室本印象氏筆三寶院純淨觀模繪	神崎 憲一	同	一二ノ一〇	餘白に就て	今村 龍一	同	大觀藝談—脇本樂之軒との一問一答	川路 柳虹	九・一八、一九
風俗畫について—新文展の作例二三—	伊東 深水	同	一二ノ一一	宗文先生の破墨「線」漫談	廣瀬 憲六	美術	川端龍子氏に訊く	同	同
書と畫	中村 不折	同	一二ノ一二	繪畫と日本精神	富田 十敏	美術街	洋畫	須田國太郎	アトリエ一三ノ一
初轉法輪寺の壁畫	野生司雪雪	同	同	畫に現れたる初夏の鳥	堅山 南風	同	色彩と明暗	福澤 一郎	同
舞踊畫に就て	山川 秀峰	同	同	阜月宵雅談	川合玉堂、青木大乗、大山廣光	同	ヨーロッパの傳統的技術への追究と克服、その他	安井曾太郎	同
南畫家の新年	竹内 梅松	南畫鑑賞五ノ一	同	欽法私考	下店 靜市	同	デフォルマシヨンの意義	安井曾太郎	同
畫に於ける詩精神	高村光太郎	同	同	(座談會)	土牛、壽雨、響、周榮、	美術評論五ノ三	デフォルマシヨンの思索	安井曾太郎	同
繪畫に於ける詩的なものに就て	諸 家	同	同	新しい様式の創造へ	兵戸 儀一	同	デフォルマシヨンの材料所感	里見 勝藏	同
線の感情	長谷川如是閑	同	五ノ二	親彦の「役の優美奏」	藤森 順三	同	デフォルマシヨンの材料所感	宮本 三郎	同
梅の畫趣	黒田 鵬心	同	同	十畝の「東洋錦」	同	同	材料所感	伊原宇三郎	同
畫梅雜筆	金井 紫雲	同	同	日本畫に就て	石井柏亭、太田三郎等	同	Oldroseを奉ずる者	長谷川三郎	同
南畫の將來性に就て	信時 潔	同	同	親彦の「二天」	小杉放庵、牧野虎雄等	同	古い日本と新しい西歐—クルト・モリグマンは語る	同	同
畫事斷想(二、四)	水澤 澄夫	同	五ノ二、三	放庵、虎雄放談會(座談會)	高橋 周榮	同	畫家の態度に就て	官坂 勝	同
繪墨の重厚味	後藤朝太郎	同	五ノ三	偶感一束	杉山 寧	同	「アカデミツク」の検討	中村 研一	同
「白乾坤」に就て	編輯 部	同	五ノ四	日本畫に就て	福田豊四郎	同	バステルとその材料に就て	瀬本作次郎	同
我觀俳畫	寒川 鼠骨	同	同	新しい日本畫	安田親彦、太田藤雨等	同	天保山觀覽式について	岡田三郎助	同
俳畫と俳句の心	白田 亞浪	同	同	關雪「高原清秋」	佐藤 順三	同	シュールレアリスムの人々とその畫論	内田勇三郎	同
俳畫の味	中西 悟堂	同	同	批評家のある作家	佐藤 一英	同	「舞妓」のこゝろ	中澤 弘光	同
僕の俳畫觀	岡本 一平	同	同	「夏座」の制作に就て	竹内 福鳳	同	硬質作畫術	鹽田 力藏	同
鳴雪翁の俳畫	島田 青峰	同	五ノ五	一枚の絵—麥僊の「歌妓圖」に就て—	佐藤 一英	同	描線美學(七—一二)	川路 柳虹	同
俳畫考	水澤 澄夫	同	五ノ六	墨仙の「明中」	藤森 順三	同	山の繪に關して	伊藤 康	同
南畫院第十五回展に際して	小室 翠雲	同	同	日本畫と近代精神—市民繪畫の提唱—	佐波 市	美之國	繪の話(座談會)	橋本八百二	美術
南畫の新生	松本亦太郎	同	同	新日本畫思潮	鈴木 武久	同	繪畫に於ける構成の研究(八、九)	堀田清治等	同
將來の畫祖たる覺悟	鎌倉芳太郎	同	同	印象作醜三寶院の模繪を觀る	佐波 市	同	線	安井曾太郎	同
南畫の將來性に就て	兒島善三郎	同	同	日本畫を如何に考へるか	佐波 市	同	角のある言葉	伊藤 康	同
南畫の本質と「心がまへ」	村田 良策	同	同	水墨雜感	鍋井 克之	同	我々のレアリズムに就て	難波田龍起	同
南畫の自然感	正宗得三郎	同	同				アンデパンダン	村松 三河	同
南畫の將來	我所 篤二	同	同						
コクトオ、マルロオ、南畫	小松 清	同	五ノ七						
南畫とリアリズム	田部井石南	同	同						
畫六法の思想に就て	小室 翠雲	同	五ノ八						
日本畫識習を受けて	ベドロ・ド・レモス	同	同						

建築と陶瓦	佐藤 功一	建築雑誌 三〇ノ六一七	建築用諸材料時價表	編輯 部	建築世界 三〇ノ一一三	花窓(ブルーメン・エンスター)小池新二譯國際建築	一二ノ一
構造物の破壊と安全性	坂 靜雄	同 同	小島邸の建築と庭園に就て十代田三郎	同 同	三〇ノ二	國際文獻	三ノ一一三
建築學會創立五十周年記念展覽會	同 同	同 同	第十回國際オリビック藝術	同 同	同 同	展開するはマトリックスで	一二ノ二
建築統計資料	建築統計部	同 同	競技參加豫選出品應募規定	同 同	三〇ノ二二	建築正作邸	同 同
同潤會に於て實施せるメートル法	メートル法	同 同	建築材料の批評と紹介	建築材料調	三〇ノ三	北鎌倉の現場が了つた	一二ノ三
現代和風住宅に關する二	清水 一	同 同	早大武道館柔剣道々場床	桐山 均一	同 同	機械の形	一二ノ四
三井銀行大阪支店(會福中條建築事務所設計)	石原 憲治	同 同	山脇高等女學校の設計報告	山越邦彦	同 同	考察の態度に就て	同 同
東京市家畜市場並に屠場	市浦 健	同 同	川合玉堂畫伯の畫室を語る	吉田五十八	三〇ノ四	現代工學と意匠の座談會	同 同
日本の建築と合理主義	同 同	同 同	京城市民館新築工事概要	萩原孝一	三〇ノ五	航空機の形	守屋富次郎
日本建築の様式に關する座談會	同 同	同 同	紀元二千六百年記念日本萬國大博覽會計畫	吉屋 信子	同 同	船の設計	淺川 彰三
大阪青年塾堂(大阪府營繕設計)	同 同	同 同	吉屋さんの家	吉田五十八	三〇ノ六	橋梁の形態と特質	成瀬 勝武
小國民道場(東京府總務部營繕設計)	同 同	同 同	わたくしの家	吉屋 信子	同 同	機械設計の目標	野口 尙一
野々宮ビルディング(土浦鐵道建築事務所設計)	同 同	同 同	東京帝國大學室內プール設計概要	同 同	三〇ノ七	電機と電機具の傾向	堤 秀夫
野々宮ビルに就て	清水 一	同 同	農村住宅新設計懸賞募集趣意及募集規定	同 同	同 同	最近の機械の傾向と建築に即した美	伊原 貞敏
市街地建築物法適用區域内に於ける競功建築物調査	建築統計部	同 同	東國敬神道場設計工事概要	森口三郎	三〇ノ八	新鐵道博物館	伊藤 滋
山中觀光ホテル(河鹿莊)	同 同	同 同	建築の統一性	田中 昌穂	三〇ノ九	鐵道博物館設計後記	土橋 長俊
(大林組住宅部設計)	同 同	同 同	訪日宣詔記念建造物建築設計競拔圖案	千種 章	同 同	自余の解	谷口 吉郎
經井澤萬平ホテル(久米建築事務所設計)	同 同	同 同	特輯日本住宅構成(圖譜)	同 同	三〇ノ一〇	M氏住宅と附屬齒科治療室	山脇 巖
富士ニユングランドホテル(志村太七建築事務所設計)	同 同	同 同	新日本建築の誕生	ブルノ・タウト	三〇ノ一一	等々力住宅區の計劃と實際	藏田周忠
京都、都ホテル(村野建築事務所設計)	同 同	同 同	設計畫私案展覽會報告	早大建築科	同 同	アパートの第一作	山口 蚊象
裝飾の再興か	野村 茂治	建築世界 三〇ノ一	日本赤十字社病院改築第一期工事要覽	學生	三〇ノ一二	農村住宅設計懸賞募集	關根要太郎
住宅改造に就いての一考察	渡部安吉	同 同	床の間の構成美論	北尾 奉道	同 同	建築時事雜感	前川 國男
高山病院建築に就て	長根 助八	同 同	飾花と床	山本 喜一	現代美術 三ノ一	日本赤十字滋賀支部病院本館設計に就て	岸田日出刀
靜岡驛に就て	伊藤 克己	同 同	床の間の種類に就て	金澤 康治	同 同	日本九州の一住宅	藏田 周忠
茶室瑞暉亭	同 同	同 同	床の間の語る會	野田九浦、松岡映丘等	同 同	希町の家に就て	山口 蚊象
おほかべとしんかべ	木村葵二郎	同 同	洋室と床の間	鈴木 清方	同 同	野々宮アパートメントと寫眞館	土浦 龜城
建築相談(建築關係法規)	警視廳建築課相談係	同 同	床の間のことども(談)	牧野 虎雄	同 同	訪日宣詔記念建造物建築設計圖案懸賞募集	同 同
東山莊閑話	高木 實	同 同	森永キャンデーストア銀座賣店	杉山 雅則	國際建築 一二ノ一	農村住宅設計懸賞競拔當選發表	吉田 鐵郎
批評と紹介(建築文獻)	同 同	同 同		前川 國男	同 同	改造日向氏別荘地下室の改造	同 同
						タウト氏の建築を見るー東京のO氏邸ー	齋藤 寅郎

○氏邸に就て	久米權九郎	國際建築	一二ノ二	堀野邸(藤井厚二設計)	新建築	一二ノ五	株式會社不動貯金銀行岐阜支店(關根要太郎設計)	日本建築士一八ノ一
建築雜誌一九三六年	板垣 康雄	同	同	日本中學校今井兼次設計)	同	同	店(關根要太郎設計)	同
國際建築第十二卷總目次	同	同	同	鐵道博物館(鐵道省東京改良事務所建築課設計)	同	同	日本勸業銀行青森支店(日本勸業銀行工務係設計)	同
大阪市水道部廳舍(大阪市政建築課設計)	新建築	一二ノ一	同	南滿洲鐵道株式會社東京支社(安井武雄設計)	同	一二ノ六	臺灣の民家と土角造り(二本田 修)	同
東京工業大學實驗試作工場(工大復興部工務課設計)	同	同	同	住宅(谷口吉郎設計)	同	同	建築制作小觀	同
長谷川三郎氏邸(土浦龜城設計)	同	同	同	M氏邸と附屬齒科治療室(山脇巖設計)	同	同	白鳳城天守閣	同
大阪朝日新聞社名古屋支社(竹中工務店設計)	同	同	同	森竹氏邸(永井實城設計)	同	同	旅泊餘滴(四、五、六)	同
新議院建築細部集	同	同	三ノ一二	關西日佛學館(木子七郎設計)	同	一二ノ七	關根要太郎	一八ノ三、四
神戸市公會堂廳實競技入選圖案	同	同	一二ノ一	六梧莊(池田總一郎設計)	同	同	橫濱正金銀行神戸支店(櫻井小太郎設計)	一八ノ四
鎌富正作氏邸(村田政真設計)	同	同	一二ノ二	森永キャンブスストア入選圖案(石本喜久治設計)	同	同	大阪齒科醫學專門學校附屬醫院(木子七郎設計)	同
N邸(安井武雄設計)	同	同	同	日本タイプライター株式會社(石本喜久治設計)	同	同	神戶市公會堂建築設計懸賞競技審査報告書及當選圖	同
鐘紡サービスステーション(松田軍平設計)	同	同	同	武井氏邸(伊東恒治設計)	同	同	日本勸業銀行臺北支店(日本勸業銀行工務係設計)	一八ノ五
森永製菓銀座賣店(前川國男設計)	同	同	同	新舞子水族館(久米權九郎設計)	同	一二ノ八	株式會社不動貯金銀行仙臺支店(關根要太郎設計)	同
京都帝國大學中央實驗所(京大營繕課設計)	同	同	同	渡邊氏邸(村田政真設計)	同	同	滿洲電信電話株式會社總社社宅(伊藤文四郎設計)	同
京都松竹座改裝(白波瀬工務店設計)	同	同	同	E氏の田園小住宅(山脇巖設計)	同	同	滿洲に於ける建築設計施工に關して	同
最近施工の通信建築(通信省營繕課設計)	同	一二ノ三	同	都ホテル新館(村野藤吾設計)	同	一二ノ九	三村準平氏邸(渡邊靜設計)	一八ノ六
宇都郵便局電話事務室	同	同	同	東京市家畜市場及屠場(東京市建築課設計)	同	同	帝塚山學院(岡部顯則設計)	同
小倉郵便局電話分室	同	同	同	輕井澤萬平ホテル(久米權九郎設計)	同	同	應慶義塾大學日吉臺豫科第二次校舍(會禰中條建築事務所設計)	同
八戸郵便局電話分室	同	同	同	野々宮寫真館(土浦龜城設計)	同	一二ノ一〇	南滿洲鐵道株式會社東京支社(安井武雄設計)	一九ノ一
廣島逓信診療所	同	同	同	林榮鐵設計)	同	同	關西日佛學館(木子七郎設計)	同
大垣電話中繼所	同	同	同	小龜德三邸(石本喜久治設計)	同	同	飛行機内部の旅客設備	同
赤羽郵便局電話分室	同	同	同	○氏邸(久米權九郎設計、顧問ブルーノ・グロウ)	同	一二ノ二	日本生命保險株式會社神戸支店(東畑謙三設計)	一九ノ二
青森郵便局電話分室	同	同	同	ギヤラリー日本サロン(構造社設計)	同	同	村尾武夫氏邸(渡邊靜設計)	同
北鎌倉に建つ一住宅(山口紋象設計)	同	同	同	自由學園體育館(遠藤新設計)	同	同	農村住宅設計懸賞募集趣意及募集規程	同
鐵道大臣官邸(鐵道省建築課設計)	同	同	一二ノ四	目黒區役所(東京市役所建築課設計)	同	同	仙臺の鐵造り	同
小川氏邸(藤井厚二設計)	同	同	同	東京オリエンビッタ大會試案	同	同	東京帝國大學附屬水產實驗所(久米權九郎設計)	一九ノ四
N氏のアトリエ(吉原實一郎設計)	同	同	同	新議事堂特輯	同	一二ノ一二	住宅號	一九ノ五
山脇高等女學校の床暖房設備(山脇升彦設計)	同	同	同	新議事堂々々々々	同	一二ノ一二	V氏邸(初鹿野市藏設計)	同
東京帝國大プール(東大營繕課設計)	同	同	同	住宅と太陽	同	一二ノ一三		同
東京書籍株式會社(西谷健吉設計)	同	同	一二ノ五	中田 滿雄	同	同		同
				東陽 周忠	同	同		同

○氏邸(久米權九郎設計)

安川邸(藏田周忠設計)

金子邸(同)

某氏邸(村野藤吾設計)

T氏邸(西村好時設計)

石館氏邸(齋藤嚴設計)

柳井氏邸(關根安太郎設計)

福澤氏邸(渡邊靜設計)

兵藤氏邸(同)

山脇氏邸(山脇嚴設計)

齒科治療室を持つ住宅(同)

山川秀峰畫伯邸(吉田五十八設計)

吉屋信子邸(同)

アトリエの建築

熊倉 末男

美術 一一ノ五

工 藝

漆の話

木材の着色とワニス塗

百貨店と流行服飾

模様染色と工芸美術

新春の二課題

解體家具の研究試作に就て

プライウッド家具に就て

兒童椅子の寸法問題に就て

「安」の曲木工業

電気ヒーター(新商品に就て聴く)

カゼイン

新工芸材料、技術、用途

地方工芸ノート―岐阜縣

産業工芸品の意匠家

地方工芸物産は如何に中央進出しつつあるか

美装銅鍍銀用品の研究試作

新興合成樹脂可塑物工業

ゼンマイ玩具(新商品に就て聴く)

ブリスライトマープロイド

松岡 正雄

山下 泰助

松江 里元

野口 眞造

國井喜太郎

齊藤 四郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

學校美術 二〇ノ二、三、六

同 二〇ノ七、九、一

現代美術 三ノ九

同 三ノ一〇

工芸ニュース 五ノ一

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

地方工芸ノート―福島縣
新材料への關心を喚起す
漆皮に就て

金型製作に關する研究

つき板の接着劑と漂白に就て

厨房調理器具

スリライイトランプ用「明視ス

タンド」(新商品に就て聴く)

意匠資料抄、照明器具用スキッチ

合成樹脂塗料

地方工芸ノート―神奈川縣

テックスの工藝的利用の一例

曲木、藤、折疊家具の研究

兒童用折疊ひたし機

(新商品に就て聴く)

ヴァニティーケース

金屬張付、擬貴金屬合金

地方工芸ノート―徳島縣

理解せよ! 商工展開催

の趣旨

タウト氏指導の小木工藝品

自由學園工芸研究所

折疊式兼用洋傘(新商品

に就て聴く)

經合金ジュラルミン

地方工芸ノート―群馬縣

昭和十一年度本所事業に

就て

全國木、漆、金工技術官會

議記事

紙育に開かれた輸出工藝

展出品物の技術的方面

ガラス器(新商品に就て聴く)

地方工芸ノート―宮城縣

工藝の著作權問題に關して

半島の工藝

小木工藝品の研究

カクテルキャビネットとク

ラーの試作

新しい厨房用器具

國井喜太郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

工芸ニュース 五ノ二

同 五ノ三

同 五ノ三、四

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

浮動椅子竝にハンディベ
ット(新商品に就て聴く)

ニツケル合金

地方工芸ノート―兵庫縣

輸出漆器懇談會に於て

反狂防止着後策商工省主

催輸出漆器懇談會

海濱用新製品

鐵樣地を如何に防錆するか

新技法になる漆器加飾法

ひとりて火の付くライ

タイ(新商品に就て聴く)

新型の家庭園藝用具(圖錄)

編組用材料

地方工芸ノート―京都府

固有工藝と現代

寫眞應用輕金屬製品の研究

二つの新興クワシヨン、

ダンビロとヘヤローツク

「平野屋」と日本趣味

レストステツキ(新商

品に就て聴く)

ステンレススチール

地方工芸ノート―東京府

指摘された我が漆器の缺

點(内外工芸産業情報)

輸出工藝展に對する本所の

出品意匠竝に地方工業化に

伴ふ地方出品指導の概要

(新商品に就て聴く)

喫煙室、あの手、この手

(新商品に就て聴く)

把手の考察(圖錄)

パウダーボックス(新品(圖錄)

ピクニック用小物(圖錄)

ステンレススチール工

藝品の試作に就て

工藝圖案技術官會議記事

臺灣の工藝材料

國井喜太郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

工芸ニユ 五ノ七

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

電氣絶縁塗料	工藝ニュース五ノ二	鮮潢に工藝を採る	宮下 孝雄	帝國工藝二〇ノ二、三	明日の工藝	清水正太郎	美術術	三ノ一
地方工藝ノート一千葉、大分、宮崎縣	同	海外進出を期する宮島細工	田邊 至	一〇ノ一	明日の工藝界への希望、機械工藝と手工藝は兩立せぬか？	諸 家	同	同
年末偶感	五ノ一二	身邊雑感—日本畫と工藝—	香取 秀真	一二ノ六	實在の工藝	渡邊 素舟	美之國	一二ノ三
輸出漆器標地の研究(一)	同	工藝雜考	大山 廣光	一四ノ一	新聞所載文獻	棚橋 啓三	中外商業	二〇四一六
形而工房第二回標準家具發表	同	工藝に於ける手工と機械	杉田 禾堂	同				
室内の新しい布帛(新商品に就て應)	同	大正昭和の生んだ漆工迎	柴崎 風碑	一四ノ二、二				
意匠資料抄織物ABC	同	田秋俊傳	同	同				
販はふ輸入小物雜貨(圖錄)	同	第四回全國漆商聯合大會	同	一四ノ四				
膠着劑(一)	同	京都市立美術工藝學校漆工科存續願書	同	同				
地方工藝ノート—大阪府	同	乾漆法に就て	深口 悟一	同	版畫身邊語	深澤 索一	みづゑ	三七二
米誌に表れた日本輸出品の分析(内外工業參情報)	同	漆樹栽培の要訣	川添 孝藏	一四ノ五	エツチングの實際	西田 武雄	同	三七四
昭和十一年度日本工藝品市俄古陳列會(日本輸出工藝聯合會ニリス)	同	巡る	中村 甚茂	同	三六年春の版畫(國展、春陽)恩地孝四郎	同	同	三七五
工藝ニュース第五卷總目次	同	第四回全國漆商聯合大會記事	同	同				
新興染織工藝に就て	明石 染人	漆液について	三鼓幸三郎	同	壁畫の新しい方向	藤田 嗣治	アトリエ	一三ノ七
スピード要求の尖銳化と新しい美の形式	帝國工藝一〇ノ一	竹籠のはなし	山本 笙園	一四ノ六	現代壁畫の理論と方法	野田 英夫	同	同
新しいラヂオセット	同	本邦硝子工藝の推移	吉田 岩平	同	壁畫風談義	福澤 一郎	同	同
マネキン人形について	同	ホン、ウルシの出現	同	同	壁畫雜考	伊藤 廉	同	同
品の把握作用に伴ふ工藝品の附加物形態の研究	一〇ノ三、四	北海道陶磁器工業	松田富佐雄	同	此の頃の壁畫運動と建築	山脇 巖	同	同
某應接室家具	同	工藝を見る眼	津田 信夫	一四ノ七	現代壁畫論	藤田 嗣治	改造	一八ノ三
Modern Furnishing Fabrics	一〇ノ二	染色の話	山崎尙三郎	同	壁畫に就て	日本壁畫會同人	美術	一一ノ六
麻織物の工藝的利用	一〇ノ四	大和の工藝	宮本 忠平	同	壁談義	大内 青坡	同	一一ノ七
帝國工藝理事會報告	一〇ノ五	工藝家に大切な塑像	松田富佐雄	同	近代壁畫總説	荒城 季夫	みづゑ	三七一
夏の庭園家具	一〇ノ六	スプレー變塗法の研究	黒岩 淡哉	一四ノ八	壁畫の恒久性	中山 正實	同	同
女性と裝飾	一〇ノ七	日本陶磁器界の展望	福岡經太郎	同	京都朝日會館の壁畫に就て	林 重義	同	同
各務クリスタルガラス工場參觀	一〇ノ八	漆樹栽培組合とその人員比較數	松田富佐雄	同	新聞所載文獻	壁 生 草	中外日報	九・三、二四
朝鮮燈火器具の紹介	同	漆工のはなし	柴崎 風碑	一四ノ九	壁畫本格論	杉本 哲郎	同	一〇・一三
高工省主催輸出漆器に關する懇談會經過概要	一〇ノ九、一〇	陶器の鑑賞から實技へ	大森 光彦	同				
ランズスタンド	一〇ノ一〇	日本陶磁器界の展望	松田富佐雄	同	挿繪	花岡乾太郎	東陽	一ノ五
規格統一の第一歩家具仕様書成る	同	日本彫金會の動靜	池上 光則	同	挿繪の藝術性と社會性	鑑木 清方	同	同
鳥津マネキン發表會を見る	同	漆の鑑定法に就て	益谷 漆生	同	映畫と挿繪の關係	石井鶴三、木村莊八等	同	同
	同	古萬古焼雜談	加賀 月華	一四ノ一一	挿繪座談會	岡田三郎助	同	同
	同	漆の話	松田 權六	一四ノ一二	挿繪雜談	矢野 橋村	同	同
	同	實在工藝界の認識誤謬に就て	高村 豐周	一四ノ一三	新聞小説挿繪について	同	同	同
	同		美術街	三ノ一				

土田麥僂君を憶ふ	大原孫三郎	塔影	一二ノ七	溪山人の藝風	橋川毅一郎	アトリエ一三ノ八	富田溪仙の死	緑川春之助	都	七・二一
互人地に墜つ	西村 五雲	同	同	思ひ出	山内 義雄	同	富田溪仙の死と藝術	橋山 大觀	讀實	七・二〇
しのぶぐさ	鍋木 清方	同	同	富田溪仙小傳	下店 静市	現代美術三ノ八	鳴神三也追憶	同	同	同
二つの面	菊池 契月	同	同	理想主義者富田君	橋山 大觀	塔影 一二ノ八	鳴神三也氏近く	柴崎 風岬	汎工藝	一四ノ二
麥僂の急逝を惜む	梅原龍三郎	同	同	富田も死んだ	内貴清兵衛	同	鳴神さんに對する印象	同	同	同
土田さんの藝術	上村 松園	同	同	富田溪仙氏のこと	吉江 喬松	同	橋本平八追憶	石井 鶴三	アトリエ一三ノ二	同
その人と作品	神崎 憲一	同	同	富田君	西村 五雲	同	橋本君を憶ふ	喜多武四郎	同	同
麥僂氏を偲ぶ	添田 達嶺	同	同	富田さんの思ひ出	福田平八郎	同	原田和周追憶	山本 鼎	同	同
終焉記	土田千代子	同	同	クロオデル、溪仙の交遊	山内 義雄	同	原田君の畫業	窪田 空穂	同	同
土田麥僂氏略年譜	同	同	同	卅餘年前の片影	飛松 甚吾	同	原田君の歌集に就て	福士幸次郎	美術	一一ノ五
亡友麥僂	梅原龍三郎	美術	一一ノ七	ありし日の溪仙畫伯	辻本 和一	同	原田和周君の回想	石山 太柏	美之國	一二ノ五
土田麥僂の死を悼む	竹内 楓風	同	同	一言撫象記	神崎 憲一	同	原田和周を憶ふ	鬼塚 金華	同	同
畫壇は寂し麥僂の死	小野 竹齋	同	同	苦學時代の富田先生	佐藤 梅軒	同	原田和周君をおもふ	石井 鶴三	アトリエ一三ノ二	同
麥僂兄の死は悲し	同	美術街 三ノ八	同	溪仙先生追憶	河原田平助	同	牧雅雄追憶	新海 竹藏	同	同
麥僂君回想	鍋木 清方	美術評論 五ノ四	同	魂を牽引する力	増井 榮	同	牧雅雄に橋本平八	同	同	同
曉麥僂君	川路 柳虹	美之國 一二ノ七	同	家系や少年時代―溪仙氏令姉摩子刀自談話―	同	同	詩・ノート・追憶	同	同	同
麥僂さんと私	辻本 和一	同	同	溪仙を想ふ	河東契梧桐	美術 一二ノ八	滿谷國四郎追憶	牧野 虎雄	同	同
澄みきつた藝術家	西村 五雲	同	同	理解の力	安田 靉彦	同	滿谷さん	高村 真夫	同	同
悲しき憶出未來への憾み	榊原紫峰	同	同	富田君を惜しむ	小林 古徑	同	畏友滿谷國四郎君	三上 知治	同	同
回想それからそれ	小野 竹齋	同	同	溪仙逝く	齋藤 與里	同	その頃	石井 柏亭	中央美術三七	一一ノ九
土田さんの教訓	池田 遙邨	同	一二ノ八	富田溪仙君	橋山 大觀	美術評論 五ノ五	滿谷先生追憶	同	同	同
故土田麥僂氏年譜	同	同	同	富田君の特徴	小林 古徑	同	滿谷國四郎氏の訃	同	同	同
土田麥僂氏を偲ぶ	中村萬壽美	同	同	富田君に就て	安田 靉彦	同	滿谷國四郎君を憶ふ	同	同	同
竹杖會の理想の先輩	大村 廣陽	同	同	富田溪仙君の「山海經」	徳美大容堂	美之國 一二ノ八	滿谷先生を惜む	同	同	同
かへらぬこと	土田 千代	同	一二ノ九	特異な作家富田君	安田 靉彦	同	「おぢいさん」は死んだ	同	同	同
思出	小林 和作	同	同	富田さんの追憶	福田平八郎	同	思出片々	同	同	同
あゝ麥僂！あゝ溪仙！	石川幸三郎	同	三七八	溪仙氏と私	榊原 紫峰	同	滿谷さんの事	同	同	同
麥僂と溪仙	橋川毅一郎	同	同	溪仙の藝術と逸話	依 衿三	同	日暮里時代の滿谷さん	同	同	同
新聞所載文獻	飛田 周山	時事 六・一三	同	あゝ麥僂！あゝ溪仙！	石川幸三郎	一二ノ九	畫人滿谷先生を顧る	同	同	同
麥僂氏の憶ひ出	小川 實也	中外日報 六・一六	同	麥僂と溪仙	橋川毅一郎	三七八	滿谷先生を憶ふ	同	同	同
畫壇は寂し麥僂の死	小野 竹齋	東朝、大朝 六・一二	同	新聞所載文獻	橋山 大觀	大阪朝日 七・八	滿谷さん	同	同	同
麥僂を悼む	鍋木 清方	東京日日 六・七・一八	同	逝ける溪仙君	同	大阪毎日 七・九	滿谷先生を偲びて	同	同	同
土田麥僂の死	緑川春之助	六・一三	同	富田溪仙氏を憶ふ	山村 耕花	七・一〇	滿谷先生を偲びて	同	同	同
土田麥僂の死を悼む	竹内栖鳳談	六・一三	同	富田溪仙氏を憶ふ	筑紫春三郎	新愛知 七・一三	滿谷國四郎氏略歴	同	同	同
富田溪仙追憶	正宗得三郎	アトリエ一三ノ八	同	富田溪仙氏を憶ふ	同	同	同	同	同	同
溪仙君の人と趣味性	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

瀧谷國四郎追悼座談會

藤島武二、小杉放庵等

美術 一一ノ九

團體論 齊藤與里 一一ノ五

瀧谷先生

小杉放庵等

美術 一一ノ九

美術半宵記 齊藤與里 一一ノ五

追憶

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

途上の瀧谷さん

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

追憶

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

最後の寫生旅行

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

新開所載文獻

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

瀧谷氏を悼む

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

瀧谷國四郎の死

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

美術批評と「専門化」

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

現代畫壇の行詰りと美術批評の自律性に就て

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

美術批評家總まくり

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

美術時評—南方大人の言

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

獨創の貧困

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

二三の繪畫現象に就て

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

七彩會のこと

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

オリムピック美術競技へ

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

参加を勧むる書

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

美術家と時局

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

戦争と美術家

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

豫想する新精神の發生—

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

新派協会の具體的進行—

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

繪畫資本の對象としての

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

美術の社會性

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

時事偶感

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

新制作派協會の出発に際

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

して

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

八月の光宅

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

私と新制作派協會

小柴 久太

美術 一一ノ九

美術界鳥瞰 齊藤與里 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

美術 一一ノ五

新聞所載文獻

藝術局新設の計畫(社説)

大阪洋畫壇の人々

グラフィック藝術の時代性

美術界時談

一彫刻家の要求

日本工作文化聯盟の結成

現代美術の方向

動搖下の二科會と畫壇の動向

美術界の行方—明日を描く人々—

青年美術家の發表機關

畫壇と文壇

一水會の結成に際して

身邊雜記

酒談

世間並の醉境

酒の功德

酒雜言

改宗者酒記

吾汝同醉

昭和見聞誌

猶

狂歌曲

巴里・夜

別離の冬

犬飼現八

「ニヤリ」前後

巴里散文

中野雜話

蒐集悲喜

私のコレクション

?

郷土玩具の蒐集

哈爾濱夏冬記

次男

コドモ

子供

とはいふものの

理窟嫌ひの理窟

龍

頭が割れた音

夢を止揚する

旅に病みて

大島の宿

ホテル推薦文

経る里

博多

故郷のはなし

食へ物自慢

愛犬記

犬とシルクハット

滿洲游草

鎌倉

我藝術觀現在の心境

動亂と西班牙

アヅキラ界隈

トレドの回想

トレドの孤

一昔の馬德里を中心として

我が藝術觀斷分と斷分

承德へ

秋装

このごろ

私の癖

夢

描かざる繪

清澄庭園を見る

P・C・L撮影所訪問

北滿の旅

雪の日に小島と遊ぶ

中川 一政

鍋井 克之

伊藤 康

恩地孝四郎

東郷 青兒

野間 仁根

鈴木信太郎

高田 力蔵

里見 勝蔵

中村 善策

高岡徳太郎

倉田 白羊

兒島善三郎

曾宮 一念

橋 貞雄

佐藤 敬

妹尾 正彦

横川毅一郎

長谷川榮作

兒島善三郎

川島環一郎

向井 潤吉

小山 敬三

栗原 信

須田國太郎

里見 勝蔵

甲斐 仁代

谷口富美枝

仲田 菊代

藤川 榮子

深澤 紅子

三岸 節子

島 あふひ

酒井 善策

中村 善策

野長瀬晚花

金島 桂華

アトリエ 一三ノ四

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

春への聯想

さくら

ばら

「冬の風景」雜感

新春閑話

五合庵

三津

或る老僧の話

廣田首相素描

「愉快なる仲間十七人」三景

伊太利の旅より

花を愛するの癖

鮎鯉禁日

畫室の思索

トルコ回想

暹羅の思ひ出

佛蘭西行思ひ出の記

伊太利行の思ひ出

スコットランド日記抄

支那周遊回顧

十年前のマドリッド景観

人間良寛

朝鮮を巡りきて

新居雜筆

汽車を積む汽船の話

冬知らぬ大島から南伊豆へ

燈下偶感

北海道の野鶴

丹波の旅の事など

屋上制作

雲雜筆

鳥羽稲の山

南洋比律賓臺灣を旅して

春夢漫筆

臨朝雜言

釣魚風景

鍋本 清方

小川 翠村

竹原 嘲風

田中剛哉州

竹原 嘲風

津田 青楓

中村 研一

小林 三季

上野山清賞

佐藤敏、朝井

関右衛門等

明石 染人

石崎 光瑛

福田平八郎

難波田龍起

岡田三郎助

荒木 十畝

藤島 武二

松岡 映丘

辻 永

飛田 周山

津田國太郎

津田 青楓

久保田米所

宮本 三郎

東郷 青兒

西澤信敬

高木 背水

上野山清賞

小川 千襲

天井 陸三

金井 紫雲

青木 大乗

和田 香苗

小早川秋聲

木下 孝則

内田 青薫

繪畫教習 四ノ四

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

澤伊斷草	別府貫一郎	中央美術三三	身邊雜感	小村 雪岱	一二ノ二	かひつぶり	富田 深仙	美術	一一ノ八
畫房風景	高木 長葉	同	熱田神宮遷座祭(和歌)	森村 宜稻	同	夏雜詠	川合玉堂、 太田三郎等	同	同
旅と	栗原 信	同	散木會のはなし	畑 耕一	同	榛蔭放談	朝倉 文夫	同	一一ノ九
大小	新海 竹藏	三四	湖畔と室戸崎	藤島 武二	一二ノ六	松田前文相と僕	小室 翠雲	美術街	三ノ二
昭和つれづれ草	吉田 喜藏	同	牡丹を寫す	石崎 光瑤	同	緑蔭六題	中村土牛、 中村岳陵等	美術評論	五ノ五
戦ふべき武器	石川欽一郎	三五	盲人の世界	川島環一郎	一二ノ七	山石八首	兒玉 希望	美之國	一二ノ一
古畫の感情	廣瀬 薫六	同	觀世音	富田 溪仙	一二ノ八	離路社觀光記	原田 信造	同	同
盜まれなかつた犬の話	鈴木 亞夫	同	身邊雜感	奥村 土牛	一二ノ九	感想、アカデミックとク ラシック	兒島善三郎	同	同
臺灣見たり聞いたり	長谷川路可	同	吾妻溪谷を行く	田中宇一郎	同	鳳翼漫筆	川端 龍子	同	同
キーサンとカルボ	田口 省吾	三六	加筆	林 癸未夫	一二ノ一一	千日前	鍋井 克之	同	一二ノ三
隨想	里見 勝藏	三七	身邊雜感	和田 英作	同	紙の話	金原 省吾	同	同
革命マドリッドの印象	栗原 信	三八	風俗偶感	島田 墨仙	同	雪と美術そのほか	金子 達吉	同	同
南スベインの二つの街	伊藤 康	同	清津峽谷を探れて	堅山 南風	一二ノ一二	二・二六	藤井 達吉	同	同
コルドバの一日	田口 省吾	同	一樹梅花一放翁	三田村富魚	同	迎へて	津田 青楓	同	一二ノ五
マラガ	石井 柏亭	同	梅に就て	宮川 曼魚	同	御舟一周忌	大智 勝觀	同	同
戦禍に悩むトレンドを想ふ	小山 敦三	同	杭州見物	松村 雄藏	五ノ三、五	「萬葉春秋」寸説	廣瀬 薫六	同	同
變つた滿洲	鶴田 吾郎	同	山莊偶語	小室 翠雲	五ノ六	「豊饒雲」制作の苦心談を 求められて	富田 溪仙	同	同
長夜放談	小早川秋聲	同	隨想隨筆	宇野 浩二	五ノ七	日記から	中村 岳陵	同	同
押賞	内田 巖	四〇	山を樂しむ心	長谷川如是閑	五ノ八	春の一日	池田 遙郎	同	同
支那の旅	赤城 泰舒	同	山の姿	田部 重治	同	春晝無題	根上 富治	同	同
ベルノ	高橋 康男	同	山の中の生活	熊谷 守一	同	新緑の白河關址	鷗田 吾郎	同	同
谷川の音	平田 松堂	同	夏のと和田と奥人瀬	川路 柳虹	同	新芽	萩生 天景	同	同
石を抱く	兒玉 希望	東陽	山を見る	深田 久彌	同	春宵を描く	池部 鈞	同	同
思ふこと	島田 墨仙	同	錫杖岳	足立源一郎	同	東風	中川 紀元	同	同
父	富本 一枝	同	嵐山は煙雨浙江は潮	古川 北華	同	春・山	藤川 榮二	同	同
諸行無常	三谷十絲子	同	山と淨化	齊藤黄葉郎	同	春と私	石川 昂水	同	一二ノ六
浮世給安言	三田村富魚	同	名所圖繪と道中日記	三井 光彌	五ノ九	近事雜筆	津田 青楓	同	同
きれについて	岡田三郎助	一ノ三	伊香保日誌抄	高村 豊周	一四ノ八	寫生地のエピソードとそ の後篇	黒田重太郎	同	同
實生活と藝術	岡田三郎助	同	秋宵寸語	津田 信夫	一四ノ一一	寧樂賦詠	赤川 菊村	同	一二ノ七
偶語	木村 莊八	同	時去り時來る	田中佐一郎	美術	散漫問答	倉田 白羊	同	同
風俗漫話	長谷川榮作	同	元旦のトラツク	野方 木入	同	滯歐雜記(モンパルナス邊)林	武	同	同
溫泉第一樓夜話	池部 鈞	一ノ六	灰皿雜記	金子 義男	二ノ三、四				
身邊閑談	竹内 栖鳳	同	旅四題	渡邊 浩三	同				
酒と風	小川 半鐘	同	山岳偶感	堀田 清治	同				
雪國旅情	牧野 虎雄	同	タラスコンの日記	鬼頭襄二郎	同				
銀閣寺の庭園	川合 玉堂	一二ノ二	岩谷寺藥師に就て	木村 武山	同				
雪を描く	五十嵐 力	同	バラック美術館	大森 啓助	同				

朝鮮を旅して	見玉 希望	美之國	一二ノ七
臺灣遊記	能勢通太郎	同	同
綠蔭閑話	鍋井 克之	同	一二ノ八
北海道の旅	西澤 笛吹	同	同
料理譚解	貴 慶生	同	一二ノ九
關北旬屑	太田 三郎	同	同
畫業五十年	橋本 關雪	文藝春秋	一四ノ四
櫻春記	橋本 清方	同	同
春の旅路の花	小室 翠雲	同	同
陽成二君のこと	齋藤 素蔵	同	一四ノ七
趣味と蒐集	里見 勝蔵	同	同
年頭雜筆	佐分 眞	同	三七一
九州とところどころ	伊藤 康	同	三七二
熱河への旅	栗原 信	同	三七三
冬日斷片	中山 巍	同	同
ジャワ寫生日記	水木 伸一	同	三七五
ルオ・聖散布・由來記	宮田 重雄	同	同
松の雜感	金子 博信	同	同
仁科ゆき	曾宮 一念	同	三七六
讃岐を訪ねて	橋井 弘三	同	同
北方への旅	三岸 節子	同	三七八
夏の花	中村 節也	同	同
ヤツプから離島へ	太田 壽	同	同
聖者の轉倒・生きる力	里見 勝蔵	同	三八二
新聞所載文獻			
心城走馬燈	藤田 銅治	大阪朝日	一二・二七
壺を割る男	式場隆三郎	東京朝日	二・二六、二七

雑

給になる景色	加藤 静見	アトリエ	三ノ一、九
給になる風景	中川 紀元	同	一三ノ六
或る日の北齋	池 善一	同	一三ノ八
都會の美しさ	伊藤 康	同	一三ノ一〇
都市醜	石井 柏亭	同	同
表座館より	廣瀬 煮六	同	同
映畫に於ける繪畫的要素	高田 稔	同	一三ノ一二

現代美術定期刊行物所載文獻

船乗りになるマネエ	アルベール・フラ	アトリエ	一三ノ一二
湯河原對話	マン・大森啓助譯	同	同
明治以後の服飾の變遷	竹内 福鳳	改造	一八ノ三
著物の流行を語る會	竹内 逸	同	同
名蹟過眼漫錄——濱松の駿	鍋本 清方	現代美術	三ノ七
遠參名蹟展——	岡田三郎助	同	同
昭和十年下半期の古美術	金山平三	同	同
畧概況	西村 南岳	中央美術	三〇、三一
近世婦人の装身具を觀る	田澤 田軒	同	同
山村風俗の素描	伊藤 樸堂	同	三、四、五
昭和十一年夏上半期古美術の動き報告	同	同	同
風景座談會	田澤 田軒	同	三六、三九
武田耕雲齋のこと	岡田三郎助	東陽	一ノ四
水藩に於ける杏所と東湖	和田三造等	同	同
渡邊如興・立林何昂其他	高橋 峰	塔影	一二ノ一
その後の南蠻もの	池上 秀畝	同	同
芝居繪雜感	長野 草風	同	一二ノ九
維新志士遺墨展を觀る	河竹 繁俊	同	同
中京三傑會略評	添田 達嶺	同	同
「隆能源氏」の顔合せ——徳川美術館の三傑茶會——	高橋 等庵	同	一二ノ一二
柳里恭	杉浦 冷石	同	同
蕨村と狸	清見 味郎	南畫鑑賞	五ノ二、三
竹田と山陽	同	同	五ノ四
ミレーが生きてゐたといふ話	同	同	五ノ九
聖徳記念壁畫完成秘話	竹原 英人	美術	一一ノ四
モデル坂附近	秋庭 義次	同	一一ノ六
木枯し前	加藤 信也	同	一一ノ九
龍岡道場と名所圖繪	同	同	一一ノ一〇
藝術に現れたる霧	原田 信造	同	一一ノ一二
人形藝術座談會	金井 紫雲	同	一一ノ一二
植鳳畫伯の言葉から	津田信夫、西澤笛吹等	美術街	三ノ一〇
アトリエを廻る記	徳美大容、篠原生	美之國	一二ノ一九

都市施設

春陽懸觀會風景	金井 紫雲	美之國	一二ノ五
藝術に現れたる虹	同	同	一二ノ八
美術の秋を飾る各派作家の出品作——諸家同答——	同	同	一二ノ九
月下談片（未完成畫家の手記）	石田幸太郎	同	同
新聞所載文獻			
書道の振興如何	瀧 精一	東京朝日	五・三、六
装幀ベストテン	庄田 淺水	報知	二、四、三・三
町の鑑賞	鈴木 清方	アトリエ	一三ノ一一
往來安全を第一とす	正宗得三郎	同	同
昭和十五年の都市美	石原 憲治	同	同
都市美に就て	佐藤 次夫	同	同
日本は夜の都市美	鍋井 克之	同	一三ノ一二
一に清潔二に美装	藏田 周忠	同	同
大阪市緑地問題の現状及將來	福留 直喜	建築雜誌	五ノ六〇八
地域指定の基礎理論としての適地論	中村 綱	同	五ノ六一三
奉天の都市計畫に就て	李 鴻祺	同	五ノ六一五
都市美と都市美化運動	佐藤善兵衛	建築世界	三〇ノ一
都市の騒音と其の對策	船越 義房	同	三〇ノ二、三
市民の爲の空襲避難所	佐間 一夫	同	三〇ノ八
都市防空原則の概要	同	同	三〇ノ九
都市公衆の緊急避難機の使用兵器とその威力	同	同	三〇ノ一二
防空と建築	熊井 安義	同	同
中華民國防空パンフレットを読む	同	同	同
都市計劃と建築家	中村 綱	國際建築	一二ノ一
建築家と都市計劃	香川 三郎	同	一二ノ六
都市計劃への一論點	中野 一夫	同	一二ノ七
香川氏の「建築家と都市計劃」を讀みて	佐藤喜兵衛	同	一二ノ一〇
町の發展形態	小倉 強	日本建築士	一八ノ三
新聞所載文獻			
都市美化四年計劃を樹てよ（社説）	報知	八・二二	

明治大正美術

繪の裏(一〇一七)	西田 武雄	アトリエ 三ノ一、三ノ四、五七〇一三	夢二小論	仁木 烈	東陽	一ノ五	鐵齋の作風	下店 靜市	南畫鑑賞 五ノ一〇
夢二の版畫	永見徳太郎	浮世繪界 一ノ七	明治時代の漫畫	北澤 樂天	同	一ノ六	鐵齋年譜	同	同
夢二の藝術	大野 芳郎	同	草雲先生の藝術壇を語る	小室 翠雲	同	一ノ六	草雲先生の私生活	大串 純夫	同
夢二君と震災	井上 和雄	同	勤王の畫家菊池容齋に就て	結城素明	同	一ノ一	金井島洲と田崎草雲	竹内 梅松	同
夢二の挿繪に就て	岡 直己	同	文麟、鐵齋、寛齋	神崎 憲一	同	同	時湖逸事	清見 陸郎	同
港屋の千代紙	古井 孤隣	同	是眞の魚類圖	西澤 笛歌	同	一ノ二	二重橋なる名稱	堀越 三郎	同
美術界鳥瞰圖(一〇一四)	金井 紫雲	同	橋本雅邦—日本畫壇回顧	關 如來	同	一ノ二、四	平福穂庵傳を訂す	三森 連象	同
本邦手工教育思潮の變遷	高田 肇吾	同	明治畫壇の女優奥原晴湖	藤懸 靜也	同	一ノ三	明治大正の圖畫教科書	杉山 司七	同
畫學初期について、備忘	木村 莊八	同	私の母野口小菰	野口 小惠	同	同	舊友會合の記	丹羽五十吉	同
明治前期に於ける營繕事務官制の變遷	田中 義次	同	野口小菰女史略年譜	跡見 泰	同	同	幸野榛嶺翁のことども	川合 玉堂	同
建築學會五十周年記念同願座談會	同	同	伯母跡見花露の思ひ出	野田 九浦	同	同	幸野榛嶺翁遺作展に就て	雄山 亘	同
往時の懷想	曾禰 達藏	同	河崎蘭香と栗原玉葉	荒井 寛方	同	同	高橋由一の生涯と作品	隈元謙次郎	同
建築界落種拾ひ	中村達太郎	同	池田蕉園女史	小山 榮達	同	一ノ五	多門遺作展を見て	藤森 順三	同
本邦建築界發達の趨勢	内田 祥三	同	武者繪と小堀先生	野田 九浦	同	一ノ六	美術記者二十七年	金井 紫雲	同
工部省に關係せる外國建築家	田中 義次	同	正道を行く藝術—山内多門氏遺作展を觀て—	關 如來	同	一ノ七	文展、舊帝展審査員並に授賞者	六角 紫水	同
亡き父博士	關野 克	同	橋本雅邦	木村 武山	同	一ノ八	關倉天心先生の想出	川合 玉堂	同
畫壇暗闘回顧録	高木 背水	同	下村さんの若い頃	伊東 深水	同	同	山内多門遺作展に際して	古屋 正壽	同
亡父多門の遺出	山内 誠二	同	處女作「のどか」とのこと	鈴木 清方	同	一ノ九	山内多門氏の遺作展を觀て	田澤 田軒	同
日本美術院創立當時の思ひ出	關田 力藏	同	「曲亭馬琴」の思ひ出	松原 寛	同	一ノ一〇	些か所懷を述ぶ	金井 紫雲	同
父を語る	橋本 關雪	同	美術記者の頃	六角 紫水	同	一ノ一〇	山内多門氏遺作展	相良 徳三	同
現代美術の搖籃時代	長沼 守敬	同	ボストンに於ける天心先生の思出	關 如來	同	三ノ一〇、三	明治大正の美術	長沼 守敬(談)	同
椿岳と樂月	高村光太郎編	同	東京美術學校紛擾事件—隠れたる南畫の二名家	編 輯 部	同	五ノ三	伊國の奇遇若き原敬	野田 九浦	同
成田新勝寺の繪馬	伊藤 樸堂	同	信州の畫家長井雲坪	土方 定一	同	五ノ九	畫壇星霜三十年	阪井久良伎	同
南窓懷古錄	久保田米所	同	川上冬崖の生家を訪ふ	正宗得三郎	同	五ノ一〇	美術紹介の元祖—創刊六十五年報知の思出—	山村 耕花	同
明治石版畫に現れた東部名所繪	山口 蓬春	同	富岡先生を語る	鍋井 克之	同	同	繪日記のゆかり—創刊六十五年報知の思出—	山村 耕花	同
山内多門の畫蹟	小林源太郎	同	富岡鐵齋	中川 一政	同	同	廢佛毀釋の回顧	鷺尾 順敬	同
下村觀山の遺業を觀て	福田 眉仙	同	鐵齋翁の思ひ出	西川 一草亭	同	同			
棺側に描く(芳崖翁追憶)	小林源太郎	同	鐵齋先生に就て	本田 成之	同	同			
銅版畫の話	西田 武雄	同	鐵齋臨感	中川 紀元	同	同			
明治初期の挿畫	馬場 孤蝶	同	鐵齋と隆古	小川 千葵	同	同			
			鐵齋の畫境	山下新太郎	同	同			
				水澤 澄夫	同	同			
				齋藤真葉郎	同	同			
					同	五ノ一〇			

外國現代美術

繪畫

ディナルのピカソ	クリスチヤン・ゼルヴオス	アトリエ 一三ノ六
アメリカに於ける壁畫運動	成田 重郎譯	同
	寺田竹雄	同

ロツテルダムボイマンス美術博物館 (A. van der Steen) 設計	國際建築	一二〇五	アンカラの外相官舎	新建築	一二〇三	スイス、チューリッヒの小學校	新建築	一二〇一
U. A. V. K. 設計	同	同	Lupsketen の週末別荘	同	同	ブライ、ウツドハウス	同	同
維納トービス・サーシャトーキー・スタディオ	同	同	チーリツヒ工科大学増築 (O. R. Salvisberg 設計)	同	一二〇四	コロラドの美術館	同	同
將來の田園都市計畫	同	一二〇六	デイメンジョン園説	同	一二〇五	郵便爲替局	同	同
建築家の養成に就て	同	一二〇七	オリンピア一九三六	同	同	近代建築に於ける東洋の影響	同	中央美術三一
バウハウス理論とリ大学の實踐	同	同	スイスの病院	同	同	フィンランドの新建築	同	日本建築士一九〇一
西歐建築の危機	同	同	Preisner 博覽會の中央會館	同	同	現代イギリス建築	同	一九二、四、六
ル・コルビュジェの近作	同	同	シカゴの屋内テニスコート	同	同	英國皇立建築士會業務常習規程	同	一九〇二
ナクソス島の海水浴場計劃	同	同	ロツテルダムの Boymans ミュージアム	同	同			
百貨店建築	同	同	リルストロメンの教會堂	同	同			
建築と技術	同	同	Ingerstrand の週末避暑地	同	同			
ベルツイヒ	同	一二〇八	ドイツの貯水塔	同	同			
ノイトラの學校建築	同	一二〇九	カナダのボート、ハウス	同	同			
工業都市 Zlin	同	一二一〇	ミラノの集合住宅	同	同			
ポール・ネルソン・スエズ運河の病院計劃	同	一二一一	第三回住宅展	同	同			
觀望藝術の鬼才モホリ・ナギー	同	同	ボロニヤの工科大学	同	一二〇六	獨逸製育兒用解體家具二題	同	工藝ニュース五〇一
國際建築家會議報告	同	同	アルジェリヤ總督府新廳舎	同	同	エナ耐熱硝子 Durax の進出	同	五〇二
パイオニア・ヘルス・セント	同	一二〇一	ハイムゲシタルタの家具工作	同	一二〇七	實用化の一途を辿る新可塑物「ボロバス」	同	同
シュレヴボート塵埃焼却場	同	同	スイスの市場	同	同	エナ耐熱硝子器 Durax (圖録)	同	同
ノルマンディ	同	一二〇二	ヘルシングフォオルスの祭典場	同	同	ボロバス (圖録)	同	同
航空船の試案 (ノルマン・ベル・ゲッデス設計)	同	同	ベルリンのジートルンク	同	同	埃及に於ける趣味嗜好 (内外工藝産業情報)	同	同
ブルユツセル博覽會のフランス館	同	同	國有調度品館	同	同	海外照照器具 (圖録)	同	同
第三回照明サロン	同	同	ミラノのアパートメント	同	一二〇八	蘭領印度に於ける趣味嗜好 (内外工藝産業情報)	同	同
チュービンゲン大學附屬外科病院 Hans Pader 設計	同	一二〇三	フロレンスのサンタマリア停車場	同	同	上海香港兩市場に於ける歐洲工藝品 (内外工藝産業事情)	同	同
ハンス・シュモール設計の住宅	同	同	アルゼーの小學校	同	同	英國市場優秀品選定の意義	同	五〇四
INLOCH のスタディオ	同	同	Chescheil の幼稚園	同	同	獨逸、北歐諸國の工藝品の近況と同様に輸入される日本雜貨の質と意匠	同	同
			ガラスプロックの建築	同	同	デザインに寄する諸サビーニング卓子 (英國優秀市場商品・圖録)	同	同
			ベルリンオリンピック競技場	同	一二〇九	椅子 (圖録)	同	同
			リンツの煙草專賣局工場	同	同	文房整理具、蛇口、ハンドル其他 (圖録)	同	同
			ドイツ航空省廳舎	同	一二一〇	洗面、浴室用具 (圖録)	同	同
			ベルリン、オリンピック村	同	同	佛國並に英國工藝界の近況	同	五〇五
			ローマ綜合大學	同	同			
			オリンピック藝術展覽會場	同	同			
			スイス、チューリッヒの住宅	同	一二一一			

舞臺美術・私議 木村 莊八 アトリエ 一三〇九
レヴューに於ける舞臺装 荒島 鶴吉 同 同
置の特徴 同 同
映畫装置難考 北 猛夫 同 同
舞臺装置とリアリズム 金須 孝 同 同
装置今昔 鍋木 清方 同 同
舞臺装置二十年 小糸源太郎 同 同
虹物語の装置 山村 耕花 同 同
ソヴェート舞臺美術の展望 杉本良吉 同 同
芝居の床の間 須澤 孫郎 現代美術三〇一
芝居の衣裳の話 小村 雪岱 同 三〇七
座談會でない座談會(二) 直木友次良 同 同
演劇と美術 上泉 秀信 東陽 一〇三

展覽會記事

綜合展覽會

秋田美術會餘録 東海林恆吉 塔影 一二〇六
オリンピック美術展に就て 東郷青兒 みづゑ 三七五
國畫會 同 同

國展の畫を見る 田口 省吾 アトリエ 一三〇五
國展の彫刻 雨田 光平 同 同
憂會記 宮田 重雄 現代美術三〇五
國展洋畫部寸感 大森 啓助 同 同
國畫會展を観る 佐波 市 中央美術三四
國展評 佐波 市 美術 一一〇五
國展鑑査 宮坂 勝 美之國 一二〇五
第十一回國展洋畫評 倉田 三部 同 同
國展で目についた作品 脇田 和 同 同
國展の彫塑 大藏 雄夫 同 同
第十一回國展評 佐藤 敬 同 同
佐波 市 同 三七五
新聞所載文獻 梅原龍三郎 大阪朝日 四二四
國展關西開催に際して 豊田 勝秋 時事 四〇九・一一二
國展難感 森口 多里 東京朝日 四二七・一八
國畫會と春陽會 中川 一政 讀賣 四二一

新古典派協會展(月評) 佐波 市 美術 一一〇五
新構造社展 帝國工藝 一〇一・一二
新燈社 同 同
新燈社美術展 中央美術三五
青木大衆の日本畫十 豊田 豐 塔影 一二〇六
七點 同 美術街 三〇五
第十四回新燈社大阪展 大山 廣光 同 三〇六
に就て 同 同
新燈社美術展及春の諸 豊田 豐 同 三〇六
展覽會 同 同
青木大衆の「新日本畫」 藤森 順三 美術評論五〇四
展覽會 同 同
新燈社展評 同 同
春臺美術展 田邊 至 現代美術三〇三
春臺美術展評 同 中央美術三一
春臺美術展 能勢龜太郎 美之國 一二〇二
春臺展を観る 同 同
太平洋畫會 同 同
太平洋畫會展 池田永一治 中央美術三二
太平洋畫會展覽會をの 美之國 一二〇三
ぞく 同 同
大東會(十年十一月) 同 同
第一回大東展を見る 淺野 秀一 學校美術 一〇〇一
大東會第一回展 五島 盛寛 塔影 一二〇一
大東會展感想 岩佐 新 美術 一一〇一
大東會繪畫展 鈴木 武久 美之國 一二〇一
大潮展について 白井 次郎 圖畫と手工 二〇一・一二
大美展(第九回)短評 中村萬壽美 美之國 一二〇八
第一美術協會展 鈴木 武久 美術 一一〇七
第一美術協會展評 風明 山人 美之國 一二〇七
第一美術展の彫刻 同 同
筑前美術展 同 同
筑前美術第四回展 同 同
筑前美術展 古山 順一 塔影 一二〇八
筑前美術展 矢野 儀一 美術街 三〇八
筑前美術展 同 美術評論五〇五
中央美術展 美之國 一二〇七
昭和十一年中央美術展 中央美術 三六
覽會記録 同 同
中展日本畫評 同 同
中展洋畫寸評 川路 柳虹 中央美術 三六
中央美術展 藤森 順三 美術評論五〇五
帝國美術院展覽會 同 同
新帝展の日本畫評 下店 靜市 アトリエ 一三〇四
新帝展巡り(日本畫部) 川路 柳虹 同 同
橋本關雪氏の唐犬圖 古川 修 同 同
第一回帝展鑑畫後の所感田澤 田軒 同 同
鑑畫後記 鍋木 清方 同 同
鑑畫後感 川端 龍子 同 同
帝展彫刻評 柳 亮 同 同
帝展の工藝美術 大島 隆一 同 同
工藝の鑑畫をして 富本 憲吉 同 同
工藝鑑畫感 清水 龜藏 同 同
新帝展の具體的成果に 荒城季夫 同 同
對する一般的檢討(座談會) 尾川多計等 同 同
新帝展所感 芳川 尙 繪畫教習 四〇三
帝展誌上案内記 松川 亨二 學校美術 一〇〇四
帝展縱橫談 城西 閑人 現代美術三〇四
帝展日本畫評 中山 貞夫 同 同
問題の帝展 谷川 徹三 中央公論 五〇一・四
新帝展 石井 柏亭 中央美術 三二
帝展第一部 金原 省吾 同 同
帝展工藝概評 渡邊 素舟 同 同
帝展第四部評 同 同
帝展雜感(第四部) 中田 滿雄 帝國工藝 一〇〇三
思ふがままに 牧野 吉晴 同 一〇〇四
龍蛟圖を中心として 長谷川三郎 同 同
帝院日本畫論 富澤有爲男 同 同
第一回帝院展を見る 村山 知義 同 同
技術を観る 鍋木 清方 同 同
帝展彫刻作品評 村田勝四郎 同 同
帝展工藝作品評 大隅 爲三 同 同
帝展の犬、鳥、虫 内田清之助 同 同
花鳥風物 金井 紫雲 同 同
新帝展の一大收穫 溝口順次郎 塔影 一二〇四
帝展所感 長谷川如是閑 同 同
帝展總觀 紀 淑雄 同 同

新帝展「門外観」	宇野 浩二	塔影	一二ノ四	新帝展出品制作を調べる	美之國	一二ノ二	新帝展彫刻評	春山 武松	大阪朝日三・一八
感想と短評	黒田 颯心	同	同	新帝展第三部出品の情勢大観	同	一二ノ三	新帝展雜感	渡邊 浩三	京城日報三・七
帝展入選畫の中から	金井 紫雲	同	同	新帝展の作品から	同	一二ノ四	新帝展批評	横川毅一郎	三・四一六
帝展の欲しい作品二つ	本山 豊實	同	同	新帝展観	同	同	第四部工藝雜感	豊田 勝秋	三・九三〇
帝展の三作品	關 長次郎	同	同	新帝展の日本畫	同	同	新帝展を見る	中川 一政	三・七三二
新帝展第一回の工藝を視る柴崎風岬	同	同	同	新帝展日本畫評	同	同	第四部を見る	高村 豊周	三・六八
帝展の工藝所感	同	同	同	新帝展「書きのぞ記」	同	同	帝展を觀る	脇本樂之軒	週刊朝日三・八
帝展工藝の覺えがき	廣川松五郎	同	同	新帝展の日本畫概評	同	同	第三、四部を觀く	高村 豊周	同
大阪の帝展工藝の陳列	柴崎 風岬	同	同	帝展を一巡して	同	同	帝展の日本畫	筑紫春三郎	新愛知 三・〇一四
に就て	同	同	同	帝展の日本畫から一會	同	同	新帝展を一見す	外狩素心庵	中外商業 三・五、六
大阪の帝展を視て	十六 生	同	同	員の作品を見る	同	同	帝展の日本畫	仲田勝之助	東京朝日二・六三三
帝展第一部評	鋼木 清方	美術	一四ノ五	新帝展に對する諸家批評集	同	同	新帝展の日本畫	藤田 嗣治	東京毎日二・六三三
第一部我観	有島 生馬	同	同	新帝展第一部を觀る	同	同	帝展の人物雜感	廣川松五郎	東京日日三・四一〇
新帝展の彫刻二、三	相良 徳三	同	同	帝展名作巡詠	同	同	帝展の工藝と彫刻	大隅 爲三	東京日日三・四、五
第四部瞥見	志立 深爾	同	同	新帝展日本畫の思想的相剋豊田 豊	同	同	新帝展の日本畫	川路 柳虹	報知 三・六、七
帝展評	諸 家	同	同	新帝展に鎮脈を探る	同	同	帝展の工藝おぼえがき	廣川松五郎	同
私の出品作	同	同	同	巧緻なる人々	同	同	帝展あちこち評	田澤 田軒	同
帝展感想	クルト・セリ グマン	同	同	帝展の彫刻	同	同	美術工藝短評	同	同
不評帝展の好印象	フランク・ヘ ツデエス	同	同	新帝展彫刻評	同	同	帝展日本畫評	碓 伊之助	同
新帝展日本畫概観	下店 静市	美術街	三ノ三	新帝展の第三部を語る	同	同	帝展日本畫評	橋本 關雪	同
新帝展の日本畫	高澤 初風	同	同	第一回帝展工藝評	同	同	帝展評	落合 助風	同
新帝展の新人スタッフ	古田 順一	同	同	新帝展第四部を歩きなが	同	同	帝展評	島田 墨仙	同
帝展日本畫の宗門合戦	豊田 豊	同	同	ら想ふこと	同	同	帝展評(彫刻)	内藤 伸	同
第一回新帝展を語る	松岡 映丘	同	同	第三部優作のピツクア	同	同	帝展評(工藝)	渡邊 素舟	同
帝展第四部の作品	大島 隆一	同	同	鑑別雜感	同	同	童寶展	同	同
新帝展の工藝漫評	樂壽 山人	同	同	卓上語	同	同	童寶展と女流作家	西澤 笛歌	同
帝展第四部にて	藤井 達吉	同	同	帝展寸感補遺	同	同	童寶美術院第六回展	藤森 順三	同
人形の帝展進出	西澤 笛歌	同	同	鑑査を受ける人々に	同	同	童寶展に就いて	西澤 笛歌	同
出品するかもしれないか	諸 家	美術評論	五ノ一	鑑査を終へて	同	同	二科展	同	同
審査員の一人として	鋼木 清方	同	五ノ二	帝展の彫刻を鑑査して	同	同	二科展評	荒城 季夫	同
新帝展の印象	藤森 順三	同	同	帝展推薦作家の手記	同	同	二科概観	福澤 一郎	同
新帝展雜俎	村雲 大様子	同	同	新帝展入選者を各鑑別	同	同	二科會畫評	水谷 清	同
帝展漫評	吉田 一穂	同	同	に拾ふ	同	同	二科彫塑を評す	中村 恆夫	同
帝展の中堅と新人	佐藤 一英	同	同	新帝展入選者略歴集	同	同	二科の新人たち	佐波 重	同
帝展一巡後記	富澤有爲男	同	同	新帝展の決算	同	同	二科展新人の傾向	田口 省吾	同
京都畫人の帝展出品作は？辻本和一	同	美之國	一二ノ二	新聞所載文獻	同	同	二科展新人評	碓 伊之助	同
				新帝展評	春山 武松	大阪朝日三・〇一三	二科展關西新人評	黒田重太郎	同

二科展瞥見	石井 柏亭	美術	一一ノ一〇	日本美術院	勝本清一郎	アトリエ 一三ノ一〇	日本美術學校生徒習作展 (月評)第十六回。(十 年十二月)	佐波 市	美術	一一ノ一
二科評	福澤 一郎	同	同	氣力のない院展	太田 三郎	同	日本美術協會	齊田 素州	塔影	一二ノ六
二科一般人選作	田中佐一郎	同	同	日本美術院を觀る	重木友次良	現代美術三ノ九	協會第百回展の日本畫	美之國 一二ノ六	美之國	一二ノ六
鑑査後感	小山 敦三	美之國	一二ノ一〇	第二十三回院展を評す	中川 紀元	美術 一一ノ一〇	美術協會の第百回記念展竹内伊太郎	中央美術三一	同	同
鑑査後感	渡邊 義知	同	同	院展所載	林 倭衛	美術街 三ノ一〇	白日會	白日會展	同	同
二科會を鑑査に觀る	外山卯三郎	同	同	院展所載	古山 順一	美術評論五ノ六	白日會展	白日會展	同	同
二科展を見つつ	新居 格	同	同	院展所載	藤森 順三	同	白日會展	白日會展	同	同
二科展の傾向	佐波 市	同	同	我觀院展	村雲 毅一	同	白日會展	白日會展	同	同
二科展を眺めて	内田 巖	同	同	院展合評(座談會)	佐藤一英等	同	白日會展	白日會展	同	同
二科走書	三岸 節子	同	同	鑑査後感	安田 靉彦	同	白日會展	白日會展	同	同
二科を傾向別に見て	中村 節也	同	同	鑑査後感	石井 鶴三	同	白日會展	白日會展	同	同
二科會の青年作家二、 三に就て	林 武	同	同	鑑査寸評	川路 柳虹	同	白日會展	白日會展	同	同
二科會見物記	四行會員	同	同	院展垣觀記	宇都野 研	同	白日會展	白日會展	同	同
二科評	佐波 市	同	同	院展を觀る	今井 邦子	同	白日會展	白日會展	同	同
今年の二科	内田 巖	同	同	院展日本畫全部の印象	石川宰三郎	同	白日會展	白日會展	同	同
二科會評	有岡 一郎	同	同	院展彫刻私感	渡邊 義知	同	白日會展	白日會展	同	同
二科展評	中村 節也	同	同	院展・人物畫を中心と して	向井 潤吉	同	白日會展	白日會展	同	同
第二十三回二科會	外山卯三郎	同	同	院展評	春山 武松	大阪毎日九・八・一〇	新入展の優作は?	新入展	山本 鼎	アトリエ 一三ノ一二
新聞所載文獻	春山 武松	大阪朝日九・一六	院展・青龍展評	河野 通勢	時事 九・八・九	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	林 武	同
二科展評	海老原喜之助	時事 九・四・五	彫刻三展覽書	野村 公雄	同 九・一二	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	郷倉 千靱	同
彫刻三展覽書	野村 公雄	同 九・一一	院展	藤本樂之軒	同 九・一二	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	山内 壯夫	同
二科展評	猪熊弦一郎	新愛知 九・三・一六	院展本領に安堵	外狩素心庵	同 九・一二	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	森口 多里	同
二科展評	外狩素心庵	中外商業 九・三・一五	二科・院展・三部會の 彫刻	黒田 鵬心	同 九・一六	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
二科・院展・三部會の 彫刻	黒田 鵬心	同 九・一六	院展批評	藤本樂之軒	東京朝日 九・六・一八	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	藤井 造祐	同
二科展評	森口 多里	東京朝日 九・九・一二	二科・院展・三部會彫 塑評	森口 多里	同 九・一二	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
二科・院展・三部會彫 塑評	同	同 九・一二	院展觀見	中川 一政	東京朝日 九・六・一八	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
二科展洋畫評	伊原宇三郎	東京日日 九・二・一五	院展の彫刻	大隅 爲三	大阪毎日 九・一〇・一五	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
「二科」三部の彫刻	大隅 爲三	同 九・一二	院展を觀る	大隅 爲三	東京日日 九・一・一五	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
二科展評	植村騰千代	美術通信 九・四	院展を觀る	大隅 爲三	東京日日 九・一・一五	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
二科	福澤 一郎	報知 九・七・九	院展を觀る	大隅 爲三	東京日日 九・一・一五	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
二科會	木村 莊八	同 九・一五	院展を觀る	大隅 爲三	東京日日 九・一・一五	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
二科會の社會性	荒城 季夫	同 九・一五	院展を觀る	大隅 爲三	東京日日 九・一・一五	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
動いて來た二科	中川 一政	讀賣 九・五・六	院展を觀る	大隅 爲三	東京日日 九・一・一五	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同
二科展の彫塑	相良 德三	同 九・一二	院展の彫塑	相良 德三	東京日日 九・一・一五	新入展を見る	新入展の洋畫を見る	新入展	高村 豊周	同

新文展の招待展	石井 柏亭	中央美術四〇	文展工藝雅感	大山 廣光	美術街	三ノ一二	招待展の日本畫總評	石川 昂水	美之國	一二ノ一二
新文展の彫刻評	森口 多里	同	新人展入賞作に就て	松岡映丘、 川端龍子等	同	同	文展所感(第二部)	鈴木千久馬	同	同
新文展の工藝	渡邊 素舟	同	文展概観	藤森 順三	美術評論	五ノ七	キヤウスー文展	水谷 清	同	同
文展第四部座談批評	神崎 憲一	帝國工藝	文展連評(新人展)	村雲毅一、 佐藤一英等	同	同	招待展評	中野 和高	同	同
新文展概観	豊田 豊	同	「夏鹿」の制作に就いて	竹内 福鳳	同	五ノ八	過渡期の生んだ悲劇	内田 巖	同	同
各新聞の新文展招待展評	同	同	文展合評	石田幸太郎 川路柳虹等	同	同	文展第二部總評	松本 茂	同	同
新文展日本畫部總圖 (鑑査展)	同	同	鑑査後感	諸 家	美之國	一二ノ一二	招待日の對話	大内 青圃	同	同
新文展の工藝を見る	柴崎 風碑	汎工藝	新人展の日本畫	石田幸太郎	同	同	招待展の彫刻	大藏 雄夫	同	同
新文展の工藝を見ての 寸談	同	同	新文展第一部の構成	加藤 信也	同	同	文展第三部	石川 確治	同	同
文展の諸作(第二部)	齋藤 與里	美術	鑑査展第一部雅感	杉山 寧	同	同	文展工藝概評	松本 茂	同	同
第二部感想	中山 巍	同	鑑査展評	兒玉 希望	同	同	文展グラフ(文展總決 算記)	同	同	同
文展第一部感想	吉岡 堅二	同	太陽と月	望月 春江	同	同	文展二部評	福澤 一郎	同	三ノ八
掛替之後の第一部	岩佐 新	同	第一部總評	石川 昂水	同	同	水畫と版畫の場合	小野 忠重	同	同
彫刻寸評	志立 深爾	同	文展とモラル	佐波 甫	同	同	文展洋畫新人展	酒井 亮吉	同	同
文展の彫刻	雨田 光平	同	第一部、第二部新人評	里見 勝藏	同	同	招待展第二部を觀る	中山 巍	同	三八二
文展第四部招待室にて	廣川松五郎	同	第二部の作品を觀る	外山卯三郎	同	同	第一回・文展・第二部評外山卯三郎	洋畫研究	十二月號	
第四部を觀て	錦老 巍雄	同	文展第二部を見て	岡山 巖	同	同	新新聞所載文獻(鑑査展)	春山 武松	大阪朝日	二〇三二
新人展鑑査の後に	山本 鼎	同	第二部總評	高橋 新吉	同	同	新文展新人展評	石井 柏亭	時事	二〇九一
昭和十一年文展第二部 出陳目錄	同	同	文展版畫感想	津田 正周	同	同	文展の洋畫	中川 一政	同	二〇三三
私の出品作	諸 家	同	文展の彫刻	平塚 運一	同	同	文展彫塑所感	清水三重三	同	二〇五二
招待展洋畫評	荒城 季夫	同	新人展の彫刻	山本 豊市	同	同	文展の工藝	式場隆三郎	同	二〇六二
招待展の洋畫	福澤 一郎	同	彫刻を見る(鑑査展)	大藏 雄夫	同	同	文展第一部陳列替評	中川 一政	同	二〇七二
日本畫の感想	相良 德三	同	第四部の新人	薄金兼次郎	同	同	文展第四部評	伊藤 慶	同	二〇八二
招待展の日本畫	渡邊 浩三	同	文展の工藝美術(鑑査展)	高村 豊周	同	同	文展を一巡して	仲田勝之助	東京朝日	二〇九二
招待展彫刻評	志立 深爾	同	第四部總評	渡邊 素舟	同	同	文展評(洋畫)	荒城 季夫	同	二〇一〇
招待展第三部雜記	鈴木 史郎	同	第四部の人形に就て	西澤 笛吹	同	同	文展評(彫刻・工藝)	森口 多里	同	二〇二〇
文展招待展出品作につ いてその作家は語る	諸 家	同	新人展の覽選をかく見る尾川	多計 田軒	同	同	新人展の作品	木村 莊八	同	二〇三〇
招待展の日本畫評	下店 靜市	美術街	文展第一部鑑査員に問ふ田澤	田軒	同	同	文展の彫刻室	山本 豊市	東京日日	二〇三二
新人展の近代色	古山 順一	同	文展新人略歴	石田幸太郎	同	同	文展洋畫評	大隅 爲三	東京日日	二〇三三
新文展日本畫作品私感	大山 廣光	同	招待展の日本畫	川路 柳虹	同	同	文展工藝	伊藤 慶	大阪毎日	二〇三三
招待展日本畫東京派 の作品	豊田 豊	同	文展私見(第一部)	廣瀬 熹六	同	同	文展工藝	同	同	二〇三三
招待展花形選集	古山 順一	同	文展日本畫を觀る	佐波 甫	同	同	賑々しく開かれた文展 新人展	青柳喜兵衛	同	二〇三三
第四部新人展の感想	津田 信夫	同								

浩然社

浩然社第四回展

齋田 素州
塔影 一二〇七

浩然社第四回展

大山 廣光
美術街 三〇八

浩然社展評

美之國 一二〇七

阜月吟社展

安戸 儀一
美術評論 五〇八

近藤浩一路個展 (十年十二月)

齋田 素州
塔影 一二〇一

近藤浩一路個展

齋田 素州
美術評論 五〇一

近藤浩一路第二回個展 (十一年十一月)

齋田 素州
塔影 一二〇二

燦木社

游 心子
美術街 三〇一〇

燦木社第十一回展評

安戸 儀一
美術評論 五〇六

自由畫壇展評 (第十五回)

中村萬壽美
美之國 一二〇一

自由畫壇名古屋展

杉浦 冷石
塔影 一二〇二

七絃會

神崎 憲一
同

七絃會第七回展

雄山 亘
美術街 三〇一二

七絃會第七回展

藤森 順三
美術評論 五〇八

七絃會評

今井繁三郎
美之國 一二〇二

春虹會

伊奈 松雄
アトリエ 一三〇五

春虹會第二回展

齋田 素州
塔影 一二〇五

春虹會第二回展

圓城寺良夫
美術街 三〇五

春虹會第二回展

藤森 順三
美術評論 五〇三

春虹會展評

鈴木 武久
美之國 一二〇五

尙美堂展

藤森 順三
美術評論 五〇六

尙美堂展評

美之國 一二〇八

松榮堂記念展 (十年十一月) 神崎 憲一

塔影 一二〇一

農鳥社

山口 華楊
現代美術 三〇八

農鳥社展評

神崎 憲一
塔影 一二〇九

現代美術定期刊行物所載文獻

新筑會第一回展

神崎 憲一
塔影 一二〇二

鈴木雪霰氏個展を觀る

川上 天山
美之國 一二〇六

井南居展

美術評論 五〇八

青柿社

安戸 儀一

青柿社第五回展

齋田 素州
塔影 一二〇六

青柿社第五回展

藤森 順三
美術評論 五〇三

青松會第一回展 (十年十一月)

神崎 憲一
塔影 一二〇一

青龍社春季展

伊奈 松雄
アトリエ 一三〇六

春の青龍展

山本 直介
現代美術 三〇五

精彩を放つ春の青龍展

東陽 一〇三
美術街 三〇六

春の青龍社第四回展

古山 順一
美術評論 五〇三

春の青龍社展評

安戸 儀一
美之國 一二〇五

青龍社 (秋季)

川路 柳虹
アトリエ 一三〇一

青龍社展の印象

同

青龍社展評

猪熊弦一郎
現代美術 三〇九

青龍展批判

横川毅一郎
美術 一一〇一〇

青龍展展評

兒島善三郎
美術街 三〇一〇

青龍展を評す

五島 盛寛
美術評論 五〇七

青龍展の印象

安戸 儀一
美術評論 五〇七

鑑査後感

川端 龍子
美之國 一二〇九

青龍展雜感

宮本 三郎
みづゑ 三八〇

新聞所載文獻

春山 武松
大阪朝日 九〇一一

青龍社展評

時事 九〇八、九

院展・青龍展評

週刊朝日 九〇二〇

青龍社

新愛知 九七二

青龍社展を觀る

中外商業 九六八

青龍社展を觀る

東京日日 九〇四、五

激情表現の困難 (龍子の二點)

報知 九〇四

青龍社第八回展

田澤 田軒
毎夕 九三二、五

現實 (の背馳) (青龍社展評)

藤森 成吉
都 九〇一〇

新鮮にして潑刺! 青龍社展!

田中 一松
讀賣 九〇二

ターレットの部

高島屋新作畫展 (十年十一月)

齋田 素州
塔影 一二〇一

高島屋新作畫展

佐藤 一英
美術評論 五〇一

高島屋展覽會

美之國 一二〇一

高島屋現代名家新作畫展

藤森 順三
美術評論 五〇八

高島屋現代名家新作畫展

今井繁三郎
美之國 一二〇二

現代名家新作畫展評

藤森 順三
美術評論 五〇六

高島屋四人展

同

新作四人展に就て

同

多聞洞展

美術街 三〇八

多聞洞展

美術評論 五〇六

多聞洞展評

美之國 一二〇八

丹阿彌岩吉個展

藤森 順三
美術評論 五〇四

丹阿彌氏小品展評

同

津田青楓氏個展評

同

戸田觀美堂新作畫展

齋田 素州
塔影 一二〇六

東京會展 (十年十一月)

同

東京會展新作畫展

同

東京會展覽會

佐藤 一英
美術評論 五〇一

東京會展評

美之國 一二〇一

東京會展 (十一年六月)

齋田 素州
塔影 一二〇八

東京會展

藤森 順三
美術評論 五〇五

東臺邦畫會

齋田 素州
塔影 一二〇七

東臺邦畫會第十一回展

古山 順一
美術街 三〇八

第十一回東臺邦畫會展

藤森 順三
美術評論 五〇五

東臺邦畫展

羽黒 泉
美之國 一二〇七

東臺邦畫會評

踏青會

踏青會第二回展

齋田 素州
塔影 一二〇六

踏青會第二回展

大山 廣光
美術街 三〇六

踏青會第二回展

安戸 儀一
美術評論 五〇四

踏青會展評

美之國 一二〇六

同人會表展(第十一回)	栗山弘三郎	塔影	一二ノ五	日本南畫院例展瞥見	葉山 滋	美術評論五ノ四	桂月個展を觀る	石川 帛水	美之國	一二ノ二	
桐華會				南畫院展評		美之國	天香畫藝展評	同	同	同	
桐華會第一同展	大森 富平	同	一二ノ六	新聞所載文獻	中外商業五・二九	讀賣 五・七・元	案本一洋氏個展	神崎 憲一	塔影	一二ノ九	
桐華會展	藤森 順三	美術評論五ノ四		コクトオの南畫院評	藤田 嗣治	美術評論五ノ三	案本一洋氏個展	小笠原秀實	美之國	一二ノ八	
讀畫會	豐田 豐	現代美術三ノ七		日本美術院々友展(松坂屋四月)	佐藤 一英	美術評論五ノ三	案本一洋氏大和繪個展を觀る				
構圖から觀た讀畫會評	金井 紫雲	塔影	一二ノ七	日本美術院同人展(松坂屋十月)	齋田 素州	塔影	三越小品新作畫展	齋田 素州	塔影	一二ノ八	
讀畫會を觀る	大山 廣光	美術街	三ノ八	松坂屋展同人展	大山 廣光	美術街	三越小品新作畫展	藤森 順三	美術評論五ノ五		
第二十九回讀畫會展を見る	藤森 順三	美術評論五ノ五		日本美術院同人展	矢戸 儀一	美術評論五ノ七	三越新作小品畫展	神崎 憲一	塔影	一二ノ二	
讀畫會展		美之國	一二ノ七	日本美術院同人展	今井繁三郎	美之國	三越日本畫展	大山 廣光	美術街	三ノ一	
讀畫會展評		帝國工藝	一〇ノ二	梅軒畫廊記念展		一二ノ二	三越日本畫展	藤森 順三	美術評論五ノ一		
富本憲吉氏日本畫展				梅軒記念展その他	黒川 潤	現代美術三ノ八	三越日本畫展	山脇 直哉	美之國	一二ノ一	
ナ——ホの部				梅軒畫廊記念展	神崎 憲一	一二ノ八	三越の日本畫展	佐藤 順三	美術評論五ノ一		
長野草風個展	金井 紫雲	アトリエ	一三ノ五	白日莊東西大家新作展(十年十一月)	五島 盛寛	一二ノ一	三越大展覽會	山脇 直哉	美之國	一二ノ一	
草風氏の個展作品	齋田 素州	塔影	一二ノ五	白日莊新作畫展(十一年九月)			三越綜合展を見る	鈴木 仁一	アトリエ	一三ノ一〇	
長野草風個展	藤森 順三	美術評論五ノ三		白日莊新作畫展	齋田 素州	塔影	三越綜合展を見る	直木友次良	現代美術三ノ一〇		
長野草風氏個展を觀る	矢戸 儀一	美之國	一二ノ五	白日莊展覽會	藤森 順三	美術評論五ノ七	三越綜合展を見る	荒井 草雨	東陽	一ノ七	
鍋井克之日本畫展		美術評論五ノ六		平林清輝畫伯の佛畫展を觀る	逸見 梅榮	一二ノ九	三越綜合展を見る	五島 盛寛	美術	一一ノ一〇	
南畫鑑賞會習畫展	小笠 翠雲	南畫鑑賞五ノ八		福岡青風氏個展	大森 富平	一二ノ二	三越綜合展を見る	古山 順一	美術街	三ノ一〇	
第三回習畫展展評	矢戸 儀一	美術評論五ノ六		古家苔軒個展	藤森 順三	美術評論五ノ六	三越綜合展を見る	佐藤 一英	美術評論五ノ七		
南畫鑑賞會習畫展	藤森 順三	同	五ノ三	平安大家展(十年十一月)	紅葉谷楠一	同	三越綜合展を見る	落合 朗風	美之國	一二ノ一〇	
二葉堂展覽會				靈心莊展			三越綜合展を見る	尾川 多計	同	同	
日本畫會				靈心莊展の納涼情緒	豐田 豐	一二ノ九	三越綜合展を見る	内山 義郎	同	同	
日本畫會の審査に出席して望月春江		現代美術三ノ七		靈心莊展	矢戸 儀一	美術評論五ノ六	三越綜合展を見る	相良 德三	東京日日	九・一六	
日本畫會展を觀る	大山 廣光	同		マ——ロの部			三越綜合展を見る	豐田 豐	塔影	一二ノ二	
日本畫會展	小林源太郎	中央美術三五		松島畫舫展(十年十二月)	齋田 素州	塔影	三越綜合展を見る	雄山 亘	美術街	三ノ一二	
日本畫會展を觀る	添田 遠嶺	塔影	一二ノ六	松島畫舫新作畫展	佐藤 一英	美術評論五ノ一	三越綜合展を見る	矢戸 儀一	美術評論五ノ八		
日本畫會展を基として	大山 廣光	美術街	三ノ六	松島畫舫展			三越綜合展を見る				
日本畫會展	佐藤 一英	美術評論五ノ四		松島畫舫展(十一年五月)	齋田 素州	塔影	三越綜合展を見る	山川秀峰氏第一回個展	齊田 素州	塔影	一二ノ二
日本畫會展評	金井 紫雲	美之國	一二ノ六	松島畫舫新作畫展	佐藤 一英	美術評論五ノ四	三越綜合展を見る	山川秀峰氏第一回個展	羽黒 泉	美之國	一二ノ二
日本南畫院				松島畫舫展	杉浦 冷石	塔影	三越綜合展を見る	山口蓬春個展			
第十五回南畫院展を觀る	添田 遠嶺	現代美術三ノ七		松島畫舫新作畫展	佐藤 一英	美術評論五ノ四	三越綜合展を見る				
南畫院展の印象	川路 柳虹	塔影	一二ノ七	松田杏亭氏個展	杉浦 冷石	塔影	三越綜合展を見る				
コクトオの南畫院評	藤田 嗣治	南畫鑑賞五ノ七		松林桂月並天香畫藝展	杉浦 冷石	塔影	三越綜合展を見る				
第十五回南畫院展を觀る	大槻憲二等	同		松林桂月山人個展と天香畫藝展	添田 遠嶺	同	三越綜合展を見る				
日本南畫院第十五回展	雄山 亘	美術街	三ノ六			一二ノ二					

山口蓬春の再出發	山口蓬春	アトリエ	一三〇七	安宅安五郎個展(月評)	佐波 市	美術	一一ノ六	エミール・ベルナル展	石井 柏亭	美術	一一ノ五
花鳥畫十年	山口 蓬春	アトリエ	一一〇七	安宅安五郎氏の個展	鹿子木道雄	美術	三七六	ベルナル展	佐波 市	美術	一一ノ五
山口蓬春氏第一回個展	齋田 素州	同	同	安宅安五郎氏(月評)	佐波 市	美術	一一ノ六	展評	佐波 市	美術	一一ノ五
山口蓬春君に就て	横川毅一郎	美術街	三ノ八	臨地社第一回展(月評)	有島 生馬	美術	三七六	S.P.A.展(第三回)(月評)	同	美術	一一ノ四
山口蓬春の作品	藤森 順三	美術評論	五ノ五	青丹會第五回展評	鈴木 武久	美術	一一ノ二	小城基個展	同	美術	一一ノ四
山口蓬春個展雜感	尾川 多計	美之國	一一ノ七	青丹會第六回展(月評)	加藤 信也	美術	一一ノ五	小城基氏個展	荒城 季夫	美術	一一ノ八
山口蓬春個展評	鈴木 武久	同	同	明石哲三個展評	佐波 市	同	同	大阪女流畫家第二回展評	太田 昇	同	三七七
山口蓬春個展	神崎 憲一	塔影	一一ノ二	油繪ミニオン展(月評)	鈴木 武久	美術	一一ノ二〇	太田壽個展	佐波 市	美術	一一ノ六
山村耕花氏第三回個展	大山 廣光	美術街	三ノ一二	荒井龍男個展	佐波 市	美術	三八〇	太田壽氏(月評)	鈴木 信太郎	美術	一一ノ六
山村耕花氏個展	佐藤 一英	美術評論	五ノ八	荒井龍男氏(月評)	佐波 市	美術	一一ノ二	太田壽氏洋畫展覽會評	鈴木 信太郎	美術	一一ノ六
山村耕花氏個展評	松本 茂	美之國	一一ノ一二	アニマ第四回展(十年十二月)	佐波 市	美術	一一ノ二	旺玄社即賣展	小林 治郎	美術	一一ノ二
龜興會第一回日本畫展	齋田 素州	塔影	一一ノ八	第四回アニマ展(月評)	福澤 一郎	美術	三七二	旺玄社	別府 實一郎	アトリエ	一三〇三
橋尾芳月個展	藤森 順三	美術評論	五ノ三	アニマ第四回展	佐波 市	美術	一一ノ五	旺玄社展覽會を評す	青柳 喜兵衛	現代美術	三ノ三
橋尾芳月氏の個展を觀	今井繁三郎	美之國	一一ノ五	伊藤慶個展(月評)	鈴木 武久	同	一一ノ二	旺玄社展を斬る	鈴木 武久	中央美術	三二
橋山龜生個展	佐藤 一英	美術評論	五ノ八	伊藤慶氏個展	荒城 季夫	美術	三七一	旺玄社展の印象	鹿子木道雄	美術	一一ノ三
關交會第七回表裝展(十年十二月)	塔影	一一ノ一	一	伊藤慶氏(月評)	佐波 市	美術	一一ノ二	旺玄社有志展(六月)	鈴木 武久	同	一一ノ八
則峰畫展	中央美術	四〇	一	齋藤弦一郎君の個展を觀	佐波 市	美術	一一ノ五	旺玄社同人展(八月)	同	同	一一ノ〇
第六回則峰畫展評	古山 順一	美術街	三ノ一二	齋藤弦一郎素描展	羽黑 泉	美術	一一ノ五	旺玄社社友小品展(十月)	同	同	一一ノ二
則峰畫展	尖戸 儀一	美術評論	五ノ八	(月評)	川路 柳紅	中央美術	三六	歐洲繪畫展	荒城 季夫	美術	一一ノ五
第六回則峰畫展覽會	小林源太郎	美之國	一一ノ一二	石井柏亭個展	鈴木 武久	美術	一一ノ八	歐洲繪畫展(天城畫廊主催、月評)	鈴木 武久	同	一一ノ九
日本畫巡禮(四月—七月)	金井 紫雲	アトリエ	一三〇六	石井柏亭小品展	佐波 市	美術	一一ノ五	歐洲繪畫展	佐波 市	同	一一ノ三
春の青龍社展と革丙會第十五回展	同	塔影	一一ノ六	石川欽一郎、三宅克己水彩畫展(月評)	宮本 三郎	圖畫と手工	二〇ノ六	加治屋隆二個展(月評)	佐波 市	美術	一一ノ五
南畫院と日本畫會	岩佐 新	美術	一一ノ七	一軌社	佐波 市	美術	一一ノ五	飾畫第三回展	川島 環一郎個展	美術	一一ノ二
洋畫展覽會	ア——オの部	一	一	一軌社展を觀る	宮本 三郎	美術	三七五	川島環一郎氏の個展	横川 毅一郎	中央美術	四〇
安宅虎雄個展(月評)	佐波 市	美術	一一ノ二	一軌社四回展(月評)	佐波 市	美術	一一ノ五	川島環一郎氏個展	大山 廣光	美術街	三ノ一二
安宅虎雄氏個展評	佐分 眞	美術	三七二	第四回一軌社展評	宮本 三郎	美術	一一ノ六	關西水彩畫協會展	今井繁三郎	美之國	一一ノ二
現代美術定期刊行物所載文獻	海老原喜之助氏個展	佐波 市	美術	内田嚴君の個展	佐藤 敏	現代美術	三ノ一	岸田劉生遺作回顧展(月評)	鈴木 武久	美術	一一ノ八

九夏會

第一回九夏會展(月評)

第一回九夏會小品展

九夏會評

九年會

九年會展評

九年會展覽會評

銀座美術展

さんぽしながらみる
てんらんかい

銀座街頭展(月評)

銀座社展

(十年十二月、月評)

倉田白羊個展

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展(月評)

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

倉田白羊氏個展評

五月會

五月會第五回展(月評)

五月會第五回展評

五支會第一回展評

光風會

光風會展所載

光風會展

第二十三回光風會展

光風會展評

光風會展を觀る

新聞所載文獻

光風會と獨立展

國畫會小品一回展(月評)

黑色洋畫展(第八回)

黑色展(第九回、月評)

黑色展(第十回、月評)

黑色展(第十一回、月評)

黑色展(第十二回、月評)

黑色展(第十三回、月評)

佐々木永秀氏個展

佐分真遺作展(月評)

佐伯米子氏第二回個展

彩々會展(月評)

坂本善三個展(月評)

三六年度展評

三春會

三春會評

第三回三春會展を觀る

第三回三春會展評

四行會展(第一回、月評)

四行會展(第二回)

四行會展

四行會展所載

四結會評

七彩會

七彩會展(月評)

七彩會評

七彩會第一回展評

朱葉會展(月評)

春陽會

春陽會

春陽會評

春陽會入選畫評

春陽會第十四回展

春陽會展評

春陽會の鑑査を終へて

春陽會評

春陽會入選畫評

春陽會第十四回展入選

作品合評

第十四回春陽會展評

新聞所載文獻

美術展の鑑査と

いふこと

春陽會雜感

春陽會と國展

國畫會と春陽會

春陽會展と國展

陽春雜筆——春陽會を

贊す

春陽會展評

女舞會

女舞會(月評)

女舞會第三回展

女舞會秋季展

女流四人畫家展

(十年十二月)

上杜會

上杜會を觀て

上杜會評

上杜會一瞥

新自然派展

二四四

佐波 市

美術

美之國

宮本 三郎

美術

佐波 市

美術

海老原喜之助

アトリエ

松本 弘二

同

鳥海 青兒

同

中央美術三四

鈴木 武久

美術

水谷 清

美之國

佐波 市

同

同

益田 義信

同

同

諸 家

同

同

矢橋 六郎

同

同

同

同

同

同

同

同

美術

美之國

一ノ六

一ノ六

三七六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

一ノ六

商工展開かる(圖録)	宮下 孝雄	工藝ニュース五ノ五	東陶會展(十年十二月)	美之國 一二ノ一	日本現代版畫展感想	前川 千帆	美術 一一ノ一
圖案概評	同	帝國工藝 一〇ノ六	東陶會展	帝國工藝 一〇ノ五	日本版畫協會	逸見 享	浮世繪界 一ノ四
陶磁器ガラス器概評	X Y Z	同	東陶會第八回展覽會	美之國 一二ノ五	版畫展一巡	千帆	美術 一一ノ六
木竹工藝品に就て	木杔 恕一	同	東陶會第八回展を觀る	帝國工藝 一〇ノ六	第五回版畫展事務所より前川	小野 忠重	みづゑ 三七六
漆藝概評	六角 紫水	同	陶磁百種展覽會	同	日本版畫協會第五回展	同	同
雜工藝に就て	豐泉 益三	同	富本憲吉個展(十年十一月)	同	圖案及商業美術展覽會	同	同
商工省輸出工藝展覽會	同	同	作者の言葉	一〇ノ一	新圖案家集團展	杉浦 非水	アトリエ 一三ノ八
輸出展に於ける本所指	國井喜太郎	同	富本憲吉氏個展	美之國 一二ノ一	立體圖案展とバル創案圖	佐波 市	美術 一一ノ五
導地方出品物	同	同	富本憲吉氏第二回近作陶器展	帝國工藝 一〇ノ二	國展(月評)	同	同
輸出工藝展に對する本所の	同	同	那智瀧子氏工藝展覽會	同	展覽會月評	尾川 多計	アトリエ 一三ノ一
出品意匠並に地方工業化に	同	同	紙育日本工藝展	工藝ニュース五ノ五	春國兩展版畫寸語	深澤 栄一	同
伴ふ地方出品指導の概要に	同	同	紙育に於ける日本工藝	同	國展合評(座談會)	高田力 藏等	同
輸出工藝展審査後感	國井喜太郎	同	品陳列會の概況(内外工	五ノ六	美術の秋、批判座談會	尾川 多計	同
輸出工藝展出品物審査員	同	同	藝產業情報)	一〇ノ二	美術、青龍社、二科展の	大島隆一等	同
議論	同	同	紙育日本工藝展批評一東	同	諸動向	柳 亮	同
外人の眼から・輸出工藝展評	同	同	(内外工藝產業情報)	同	モチーフとテーマの問題	同	同
第四回輸出工藝展覽會概況	同	同	紙育日本工藝展批評一東	同	(院展、二科、三部會彫刻	同	同
輸出工藝展出品物(圖録)	同	同	野口道方布摺展(十年十	同	評)	同	同
商工省輸出工藝展覽會出品	同	同	二月、月評)	同	院展と青龍展雜感	芳川 起	繪畫教習四ノ一〇
品物受賞決定(日本輸出	同	同	ハンガリー展	同	春陽會・國展を見る	後藤福次郎	學校美術 一〇ノ五
工藝會聯合ニュース)	同	同	藤井達吉氏個展(十年十	同	秋の美術展巡禮	金井 紫雲	同
商工省輸出工藝展審査報告	日野 委員	同	一月)	同	院展・二科・青龍展の印象	柳 虹	中央美術 三八
陶磁器及其他工業品	同	同	三木義榮作新興陶漆展	同	院展・青龍・二科合評	佐藤 春夫	東陽 一ノ七
漆器について	國井 委員	同	レイモンド夫人作品展	同	非常時の野展概観(院展	神崎 憲一	塔影 一二ノ一〇
染織製品について	永井 委員	同	品展	同	青龍展、明助展)	同	同
木竹製品及綜合工藝	宮下 委員	同	渡邊明氏家具展覽會	同	各新聞の院展、青龍展、	同	同
其他の製品について	同	同	版畫展覽會	同	明助展評	同	同
新漆藝應用家具の展示	同	同	川西英氏神戸百景版畫展	同	諸展覽會評	同	同
(東京、高島屋)	同	同	現代版畫展(松屋・月評)	同	春臺展と白日展	同	同
新設計室内裝飾展概評	同	同	新版畫集團第六回展	同	太平洋展と日本水彩展	同	同
(十年、東京三越)	同	同	日本現代版畫展(十年十一	同	春陽會と國畫會	同	同
新藤工藝品展覽會	同	同	月)	同	院展・青龍展	同	同
創工社	同	同	澁木版畫展	同	同	同	同
創工社第一回展終了	同	同	同	同	同	同	同
創工社第一回展を評す	柴崎 風岬	同	同	同	同	同	同
蒼潤社	同	同	同	同	同	同	同
蒼潤社第一回工藝展評	桂田 榮明	同	同	同	同	同	同
第一回蒼潤社展評	樂壽 山人	同	同	同	同	同	同
蒼潤社第一回工藝展評	桂田 榮明	同	同	同	同	同	同
大衆向工藝品競技展覽會	同	同	同	同	同	同	同

二科・院展・三部會彫刻評志立	深爾	美術	一一ノ一〇	文展委員銓衡の結果を許す田澤	田軒	現代美術三ノ一〇	帝展が若し意のままに	諸家	一一ノ六
初秋の作品を拾ふ	大田 廣光	美術街	三ノ一〇	第一回帝展開催前後の諸問題	同	中央美術三二	なるならば	岩佐 新	同
前田、島崎(院展、二科)	鶴木 清方	美之園	一一ノ一〇	帝國美術院懇談會顧末	同	三六	平生文相と大口氏の討議	同	同
院展と青龍社	石田幸太郎	同	同	帝國美術院改組と再改組	森口 多里	一ノ一	平生文相と大口喜六氏	同	同
院展、青龍、明則側面評	豊田 豊	同	同	帝國改組と現代美術の標高花園草太郎	同	同	美術問答(議會速記)	同	同
院展と青龍社の指導精神	加藤 信也	同	同	野人放談	牧野 吉晴	一ノ一、五	帝展その後	東敏 隠士	一一ノ七
新秋在野展新聞評集	同	同	同	改組と帝展型	川路 柳虹	一二ノ四	最近の美術界感想	諸家	同
上野の彫塑	大塚 雄夫	同	同	新帝展に對する肯定的見解と否定的見解	橋川毅一郎	同	帝國美術院の改組	和田 英作	一一ノ八
		同	同	大口代議士の美術に關する質問とそれに對する感想	田澤 田軒	一二ノ六	玉石同群——帝院問題の檢討	兒島喜久雄	同
		同	同		同	同	綜合が混合か	森口 多里	同
		同	同		同	同	畫面に墨を塗る——文相の亂暴な態度	斯波 貞吉	同
		同	同		同	同	文展をめぐりて	東敏 隠士	一一ノ八
		同	同		同	同	昭和十一年度文部省美術展覽會に就て	文部省	同
		同	同		同	同	帝國美術院に就て	文部當局談	同
		同	同		同	同	現代美術館建設運動の根本はこれだ	田澤 田軒	一一ノ一〇
		同	同		同	同	美術界安定策は如何にすべきか	諸家	一一ノ一一
		同	同		同	同	美術界安定方策座談會	青野 季吉	同
		同	同		同	同	平生文相に抱負を聞く	岩佐 新	同
		同	同		同	同	美術界の混亂を解くの鍵	津田 嚴	同
		同	同		同	同	文部大臣實その他	田舎素人觀	同
		同	同		同	同	加筆事件	岩佐 新	同
		同	同		同	同	加筆問題	岩崎 永錫	同
		同	同		同	同	帝展改組私感	結城 素明	美術街 三ノ六
		同	同		同	同	第一會の主張	飛田 町田	美術評論 五ノ一
		同	同		同	同	參與辭退に就て	水上 蓮春	同
		同	同		同	同	出品問題に就て	山口 蓮春	同
		同	同		同	同	余の再改組案	西村 五雲	五ノ二
		同	同		同	同	制度よりも人間	小室 翠雲	同
		同	同		同	同	松岡映丘氏の所説について	菊池 契月	同
		同	同		同	同	小室翠雲を圍んで(座談會)	藤三 順三	五ノ三
		同	同		同	同	文部大臣の暴言	野田 九浦	五ノ四
		同	同		同	同	新文展と或る種の日本畫	伊東深水等	五ノ五
		同	同		同	同		村雲 毅一	五ノ六

美術行政

帝院及官展關係

文部省は美術活動がお好き田澤	田軒	アトリエ	一三ノ一	何故帝展は改組したか	高田 早苗	同	文展をめぐりて	東敏 隠士	一一ノ八
第一部會の動行を觀て	同	同	一三ノ二	帝展は善處すべしといふ聲諸家	田澤 田軒	同	昭和十一年度文部省美術展覽會に就て	文部省	同
美術界に國家的指導機關は必要か	諸家	同	一三ノ三	至められた新帝展	横越 自人	同	帝國美術院に就て	文部當局談	同
新帝展の具體的成果に對する一般的檢討(造型文化協會座談會)	荒城 季夫 尾川多計等	同	一三ノ四	帝國懇談會プリントに就ての管見	實任 工藝會	同	現代美術館建設運動の根本はこれだ	田澤 田軒	一一ノ一〇
美術家に惡人はない	田澤 田軒	同	一三ノ六	工藝家の立場として綜合展に就て考へる(諸家回答)	番浦 省吾	同	美術界安定策は如何にすべきか	諸家	一一ノ一一
平生文相の試案檢討	同	同	一三ノ七	秋の帝展集	石井 柏亭	同	美術界安定方策座談會	青野 季吉	同
十六會員は何故辭めたか	同	同	一三ノ八、九	帝展に就て	梅原龍三郎	同	平生文相に抱負を聞く	岩佐 新	同
文展委員銓衡の過誤を非難す	同	同	一三ノ一〇	帝展諸感	松林 桂月	同	美術界の混亂を解くの鍵	津田 嚴	同
最近の美術界情勢に就て	同	同	同	展望臺	田邊 至	同	文部大臣實その他	田舎素人觀	同
藤島武二の心機を聽く	同	同	同	聞かれぬ不満	添田敬一郎	同	加筆事件	岩佐 新	同
藤島武二の心機を聽く	同	同	同	第一部會出現	矢澤 弦月	同	加筆問題	岩崎 永錫	同
帝展問題の批判	芳川 趕	繪畫教習 四ノ一	同	東光會聲明書發表に至る經過	熊岡 美彦	同	帝展改組私感	結城 素明	美術街 三ノ六
平生文相に與ふ	福澤 一郎	改造	一八ノ七	藝苑漫語	朝倉 文夫	同	參與辭退に就て	飛田 町田	美術評論 五ノ一
一部會所感	和田 英作	同	一八ノ八	帝院問題再吟味	荒城 季夫	同	出品問題に就て	山口 蓮春	同
人物養成機關の缺乏	野田 九浦	現代美術 三ノ三	同	竹内栖鳳氏にお尋ねする	三上潤次郎	同	余の再改組案	西村 五雲	五ノ二
文相、帝國美術院長、同	小室 翠雲	同	三ノ五	帝院雅感	浦島 永錫	同	制度よりも人間	小室 翠雲	同
會員への進言	田澤 田軒	同	同	帝國美術院再改組と帝展存廢の是非	齋藤 與里	同	松岡映丘氏の所説について	菊池 契月	同
和田英作氏の讒辯	中山 貞夫	同	三ノ九	帝院會員諸氏の反省を促す	垣見 宣修	同	小室翠雲を圍んで(座談會)	藤三 順三	五ノ三
美術問題匿名座談會	同	同	同	帝展問題返花	同	一一ノ六	文部大臣の暴言	野田 九浦	五ノ四
		同	同		同	同	新文展と或る種の日本畫	伊東深水等	五ノ五
		同	同		同	同		村雲 毅一	五ノ六

新文展を迎へて	伊東 深水	美術評論五ノ六	竹内橋風氏と語る	筑紫春三郎	新愛知	四〇九・一三	工芸の著作権問題に關し	國井喜太郎	工芸ニユ五ノ七
年頭に際し帝展必要を力説す	田澤 田軒	美之國 一二ノ一	在野展への希望	同	同	六〇九	新に改訂された日本建築士會の建築士法案	堀越 三郎	日本建築一九ノ六
新帝展開催中止しる	筑紫春三郎	同	再改組後の帝展(社説)	同	中外商業	二〇一六	挿繪の著作権について	小川 倩腹	美之國 一二ノ八
第一部會の動勢	同	同	帝展問題と畫壇	杉本 哲郎	中外日報	六〇三・一三	新開所載文獻	同	同
第一部會の結成	同	同	帝院問題の試案と解決(社説)	同	東京朝日	一〇一〇	挿繪對映畫	木村 莊八	時事 二〇〇一三
新帝展八面觀——會員を中心としての出品豫想——	山下 行男	一二ノ二	文相の斷案と帝展問題(社説)	同	同	五・三一	國寶の海外搬出(社説)	齋藤 佳三	東日、大毎 一一・二八
新帝院開催直前暗録——各會員、諸作家の心境打診——	豊田 豊	同	帝院の紛糾と解消(社説)	同	同	六・一六	國案の著作権に就て	同	讀賣 五・二八
帝展改組藝術上差別待遇と階級制度の考究	櫻 本生	同	玉石同碎——帝院問題の検討——	兒島喜久雄	同	六・二九	美術關係施設		
美術界時事數言	田澤 田軒	一二ノ三	綜合か、混合か——帝院問題の検討——	森口 多里	同	六・三〇			
新帝展開催迄の経緯	田澤 田軒	一二ノ五	美術の秋の當面の問題(社説)	同	東朝、大朝	九・八	博物館の採光及溫湿度調査の經過に就て	内田 祥三	建築雜誌 五〇ノ六一
新帝展と各方面作家の意圖	諸 家	一二ノ六	帝院問題の解決點(社説)	松岡 映丘	東京朝日	九・二七	博物館の採光及溫湿度調査に就て	中村 清二	同
帝展問題について川端龍子氏に心境を訊く	大口 喜六	同	改組の失敗、獎勵の方法	同	東京日日	五・一二	博物館の採光方法の實驗的研究	井上鴻太郎	同
美術雜感	田澤 田軒	同	常設美術館と帝展問題(社説)	同	同	五・二二	博物館の適當なる畫面照度に就て	神谷 鍾吉	同
帝國美術院總會を前に平生文相と會員諸氏へ	同	同	美術界の問題	相良 德三	同	六・三三・三	大阪市美術館(大阪市役所營繕課設計)	渡邊 久雄	同
私は帝展の存続を切望する	石川寧三郎	一二ノ七	帝國美術院改組の再検討	清水 良雄	報知	六・三一・五	大阪市美術館の採光法その他に就て	同	同
帝展問題の最後の決定	篠原巢一郎	同	帝院脱退劇の筋書	小室 翠雲	同	六・三三・三	大阪市立美術館の採光法及工事概要	同	建築世界 三〇ノ九
改組精神よりの二收獲	石川寧三郎	一二ノ八	帝展の改組問題——予が會員を辭任した理由——	同	讀賣	四・二五	日本民藝館	谷川 徹三	思想 一七四
熱罵冷評	田澤 田軒	同	帝國美術院の問題	長谷川如是閑	同	四・三三・三	大阪市立美術館	今井 寛一	中央美術 三五
面目論	篠原巢一郎	同	帝院問題に就て ある日の偶語——	橋本 關雪	同	六・六・七	大阪美術館の理想を語る	結城 素明	汎工藝 一四ノ七
新文展要綱及被招待者氏名	編輯子	一二ノ一〇	帝院は土崩瓦解か(社説)	石井 柏亭	同	六・一六	現代美術館への要望	齋藤 與里	美術 一一ノ九
新文展委員詮衡評	本仁 九郎	文藝春秋 一四ノ七	暫定的文展に就て	荒城 季夫	同	七・二・三	一彫刻家の要求	高村光太郎	同
帝國美術院の崩壊	大口 喜六	同	帝院問題再吟味	同	都	二・八・一〇	常設現代美術館と展覽會場への希望	諸 家	一一ノ一〇
所謂帝展の改組に就て	同	同	法規			同	現代美術館建設運動の根本はこれだ	田澤 田軒	同
新開所載文獻	同	同				同	現代美術館に對する希望	小島善太郎	一一ノ一一
危機の帝院——期待出來ない文相案の秋季展——	春山 武松	大阪朝日 六・一七				同	日本民藝館の開設	式場隆三郎	大阪毎日 二・二一・三
聞かれぬ不満	瀧田敏一郎	時事 二〇・二三・四	特殊建築物規則の公布に當りて	内田 祥三	建築雜誌 五〇ノ六一	八	新開所載文獻		
第一部會出現	矢澤 弦月	時事 二〇・二二	特殊建築物規則に就て	夢田 厚介	同	同			
美術界紛糾の清算期(社説)	同	六・一四	法規ニユ一ス(自動車庫取締規則)	同	建築世界 三〇ノ一二	同	新開所載文獻		
官展は廢止せよ	川路 柳虹	七・七八	同	同	同	同			

美術教育

中等學校美術展を見て	相良 健三	アトリエ一三〇八	新聞紙應用の記憶畫	八田 了介	學校美術一〇ノ四	文檢圖畫教育手工本試驗問題	學校美術一〇ノ九
美術學生の話	上村 松篁	繪畫教育四ノ六	巢箱製作と其價值	川上 正直	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
國際美育會議の中心議題	岡登 貞治	學校美術一〇ノ一	第一圖案指導記錄	赤山 俊治	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
想畫と構成教育	中西 良男	同	眞の美育は奈邊にありや	吉金 一郎	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
各國の手工教育	アール・ト ムリンソン	同	回想漫言	武井 勝雄	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
圖畫科の觀點	山崎 益哉	一〇ノ一	色彩反應調查	竹田源太郎	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
新しいロマンチック	水谷 武彦	一〇ノ一	養護上より見たる圖畫指導多田 日吉	萬 富三	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
手工五十年記念大會	同	同	國際美育會議の主要議題	中谷 健次	一〇ノ五、六	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
手製圖畫指導掛圖の製作	小塚源一郎	一〇ノ二	其解決	宮下 孝雄	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
農村學校の稻藁手工	貴田 豊	同	圖案及構成教育と著作權	藤原 英之	一〇ノ六、七	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
圖案指導要諦(一六)	武井 勝雄	一〇ノ一、五	學校園の設計について	青木實三郎	一〇ノ六	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
木工指導要諦(三、五)	川邊 甫	一〇ノ一、三	更に勞作教育の見地に進めん	松田 操	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
寫生畫指導要諦(九、十)	中谷 健次	一〇ノ一、三	自然觀察の圖畫教育	武井 勝雄	一〇ノ六、七	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
金工指導要諦(四、八)	高橋千代三郎	一〇ノ一、五	線のリズムによる想畫的圖案	伊藤好太郎	一〇ノ七	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
日本美術の觀賞及説話(十一、十四)	赤津 隆助	一〇ノ一、一	日本畫基調の新圖畫指導	板倉 實治	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
美についての研究	佐藤 十蟻	一〇ノ一、六	文檢の圖案に就て	後藤福次郎	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
描畫美育法是非(二)	後藤福次郎	一〇ノ二	議會に於ける學校學科の存廢問題	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
小學圖學の檢討	竹田源太郎	同	名古屋市に於ける全國圖畫教育大會概況	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
寫生畫に於ける材料の認識問題	春	同	全國圖畫教育大會所感	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
フォトグラムによる新し	武井 勝雄	同	名古屋より北陸へ	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
い感覺	同	同	全國圖畫教育大會を聞いて	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
針金細工新教材	山崎 壽郎	同	毛筆畫指導の急所	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
「農山村美育の確立」を讀む	良男	同	想畫指導の急所	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
歐洲美術教育觀察より歸	横田 仁郎	一〇ノ三	構成教育指導の急所	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
圖畫科と他教科との關係	淺野 秀一	同	新圖案指導の要點	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
農村圖畫教育への疑問	田原 恭二	同	鑑賞指導の要領	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
ボール紙で菓子器の製作	川上 正直	同	圖畫科施設觀の變遷	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
畫用紙による曲線の描寫	武井 勝雄	同	教育圖畫時代	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
展覽會肅正と兒童作品の見方	宮崎 元	同	櫛の寫生と手工圖案	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
竹工教材指導要諦	谷間 勇	一〇ノ三、五、七	毛筆による材料感の描出	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
圖畫教育と指導過程	矢崎 好幸	一〇ノ四	漁村圖畫教育の二研究	同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同
農村圖畫教育の特異性	笹島 眞	同		同	同	文檢圖畫手工本試驗合格者名	同

全國中等學校美術展覽會 に就て	三尾與喜藏	圖畫と手	二〇ノ四	畏友小島君の死を悼む 學校工藝特輯	藤葉嘉一郎	圖畫と手	二〇ノ三	重心に還る	志村 開一	美術	一、二、三、九
中學校に於ける想畫教育 研究の一端	武藤 秀雄	同	同	名古屋市立工藝學校	帝國工藝	一〇ノ六	構成教育の疑問に答へて 圖畫不用論の撲滅	武井 勝雄	同	同	一、二、三
美術教育が圖畫教育か	光岡 始	同	二〇ノ五	東京府立工藝學校	同	同	情操偏重	赤池 悟	同	同	同
圖畫展覽會の使命と其の 機構	林 繁男	同	同	京都市立第一工業學校	同	同	關西女子美術學校參觀記	長尾 豊	同	同	同
歐米諸國の手工科成績に 就て	内藤 秀因	同	二〇ノ五、六	岐阜縣多治見工業學校	同	同	圖畫手工教育の推移とこ れからの圖案教育	眞先 雷苗	同	同	同
子の圖畫教育觀	小林 萬吾	同	二〇ノ六	濱松工業學校圖案科	同	同	私の圖畫教育	矢崎 好幸	同	同	一、二、四、
全國中等學校美術展覽會 に就て	倉田 三郎	同	同	奈良縣立吉野工業學校	同	同	大阪府下中學校圖畫研究 會の記	伊川 藤義	同	同	一、二、四
教育圖畫の基礎とする我 が國民性	長澤 菊慈	同	二〇ノ六、 八、一〇	學校工藝第二輯	同	一〇ノ七	全國中等學校圖畫成績批判宮崎 第二回福岡縣圖畫研究會 所感	大阪美術協 會	同	同	同
手工作業科覺帳	A、B 生	同	二〇ノ六	大阪市立工藝學校	同	同	全國圖畫教育大會豫報	山下 一雄	同	同	同
日本大學藝術科に寄す	三尾與喜藏	同	二〇ノ七	秋田縣能代工業學校	同	同	中等學校入學試験と圖畫科杉山 工藝振興と作家美術家	司七	同	同	三、四、六
圖畫教育者の修養	尾藤 武夫	同	同	和歌山縣立工藝學校	同	同	生活圖畫の教材配當一考察松田 宮崎女師大展覽會覺書	山崎覺太郎	同	同	一、二、四
全國圖畫教育大會記	岩田 民也	同	同	群馬縣立伊勢崎工業學校	同	同	明治大正の圖畫科教科書	川村 伊作	同	同	一、二、五
勞作教育の價值	小林 澄光	同	二〇ノ八	名古屋高等工業學校	同	一〇ノ八	全國圖畫教育大會への希 望一つ二つ	杉山 司七	同	同	同
埼玉縣圖畫研究會と平田 先生の御講演	伊藤好太郎	同	同	學校工藝第三輯	同	同	入學試験と圖畫科	板倉 贊治	同	同	一、二、五、 七、一〇、 一一
福岡の圖畫教育界近況	山下 一雄	同	同	京都市立工藝學校	同	同	學校に於ける色彩教育	武藤 秀雄	同	同	同
懸賞論文發表に際し	平田 松堂	同	二〇ノ九	東京美術學校	同	同	全國圖畫教育大會開催 に關して	青山 秀雄	同	同	一、二、六
懸賞論文審査發表	日本圖畫手 工協會	同	同	愛知縣工業學校	同	同	三重縣美術研究會第二回 大會協議研究の概要	郎譯	同	同	一、二、六
非常時日本に於ける手工 教育を論じ其の擴充強化 策を述ぶ	伊藤好太郎	同	同	京都市立美術工藝學校漆 工科存續請願書	汎工藝	一四ノ四	三重縣美術研究會第二回 大會見學の記	谷 德藏	同	同	同
芝田美術學校長の訓示	同	同	二〇ノ一〇	鑑賞教育に於ける日本精神原 能力に就て	關 衡	二、一、一、	圖畫教育と藝術鑑賞	原 貫之助	同	同	一、二、七
手工教育の使命と其の經營 花尻 義雄	同	同	同	或る美術家の會話	伊藤好太郎	同	圖畫教育者修養の一面	小西 美良	同	同	同
全國中等學校入學考査圖 畫實施狀況	大阪美術協 會中學部	同	同	東北の一角に上る烽火	森山 一虎	同	構成教育とモンタージュ 教育	岡田 秀雄	同	同	同
朝香宮攝王殿下より授 業の台覽を拜受す	宮本 竹治	同	二〇ノ一一	手工教育五十周年記念大 會記	笠原 山翠	同	其の後の福岡縣圖畫教育 全國圖畫教育大會報告	山下 一雄	同	同	同
日本畫基調の新圖畫指導	伊藤好太郎	同	同	第拾回靜岡縣圖畫教育研 究大會	高橋 和雄	同	全國圖畫教育大會開催 に關して	原田 隆彌	同	同	同
世界の黎明に當つて我が 手工教育を論ず	出町寛一郎	同	二〇ノ一二	自然瀧觀と勞作	松田 操	同	感謝の辭	堀 孝雄	同	同	同
第二回長崎縣中等學校圖 畫教育研究大會報告	石橋 孟	同	二〇ノ一二	教育圖畫の樹立(一、四)	長澤 菊慈	同	全國圖畫教育大會報告	原田 隆彌	同	同	同
圖畫教育時評	江見 重吉	同	二〇ノ一二	少しの工夫	栗野 豊	同	全國圖畫教育大會開催 に關して	堀 孝雄	同	同	同
文部省圖畫講習會について 土屋 常義	同	同	同	第六回茨城縣圖畫研究會 美術家を訪ねて	川邊 外治	同	全國圖畫教育大會開催 に關して	堀 孝雄	同	同	同
	同	同	同	第三回京都府美術研究會 記録田 清吉	同	同		堀 孝雄	同	同	同

表彰事務の経過	小枝 吉平
会場會員係として	鈴木美和治
議事に關する経過報告	細島 昇一
圖畫教育品陳列會の全覽	加藤伸一郎
展覽會の計畫と實況	鈴木三五郎
見學と案内の概要	加納 潔
有志懇親會の概況	神川 一郎
全國圖畫教育大會決算報告	猪飼 俊二
普通教育に於ける圖教科の効果を就て	正木 直彦
全國圖畫教育大會への後援各種人名簿	杉山 司七
全國圖畫教育大會感想	美術 一二ノ八
大會の意義	細島 昇一
大會に列して	原 貫之助
文部省諮問案に就て	横井 曹一
獎勵會の展開を見て	多賀谷健吉
時勢は圖畫科を重視す	藤井頼三郎
殘された問題	田崎 拾三
愛知縣教員作品展を觀る	小西 美良
反省自警の好機	内山 市郎
感謝と一つの提言	谷田藤四郎
大會によりて獲たる	武田新太郎
大會の横顔	眞先 香苗
帝國將來と圖畫教育に就て	武田 忠雄
愛知縣小學校の圖畫展を觀て	島戸 繁
大會の感想二三	土屋 常義
大會に列して思ふ	三澤 佐助
特別陳列展覽會印象錄	田中 宗一
日本畫及圖畫教科書	武藤 完一
恆友氏の畫帖	岩田覺太郎
現代日本畫展の教訓	敦良
文檢用器畫豫備試驗問題解答	同
第六回山口縣圖畫教育研究會	村井 勇治

生徒作陶扇扇子展覽會	宮原 賢三	美術 一二ノ九
校舍改築記念展のことなど	伊達 孝	同
對成績競技の實際	佐藤 正己	同
圖畫教育功勞者	眞先 香苗	同
提唱二題	伊藤好太郎	同
日本畫基調新圖畫指導の提唱	同	同
文檢用器畫本試驗問題解答	敦良	同
全國中學校入學考査と圖畫	大阪美術協會中學部	同
美術教育會當面の諸問題	一氏 義良	同
冬屋川上寛譯洋畫新式初編の版本に就て	岡田 秀雄	同
鮮滿美育スケッチ	矢崎 好幸	同
第二回長崎縣圖畫教育大會	石橋 孟	同
吾等の時代は來た!	金子 清次	同
圖畫科教授の實際	石橋 孟	同
普通教育に於ける圖畫教育	石井 柏亭	美術 一一ノ七
全國中等學校美術展に就て	美育守之助	同
日本畫と何處へ往く! 美術校改革必要なきや	田澤 田軒	同
文化學院女學部に於ける繪畫教授の實際	赤城 泰舒	同
版畫教育に就て	武藤 完一	同
兒童版畫鑑賞	平塚 運一	同
繪畫鑑賞指導の新しい試み	高田 力藏	同
私の見た歐洲の圖畫教育	岡登 貞治	同
三年生頃の兒童畫	外山卯三郎	同
圖畫教育の根本問題	同	同

現代美術單行圖書文獻

總說

書名	編著者	發行所
圖書天心全集 天地人之卷	岡倉一雄編	聖文閣
オリビック藝術競技參加報告	大日本體育藝術協會編	同會
山陽美術展覽會紀念帖	山陽新報社編	同社
始政四十周年紀念臺灣博覽會寫真帖	同博覽會編	同會
聖德紀念と畫集 坤之卷	明治神宮奉贊會編	同會
世界美術鑑賞 解説編、鑑賞編	一氏 義良	成武堂
鮮展圖錄(第十五回)	朝鮮寫真通信社編	同社
大日本畫家名鑑	大日本繪畫講習會編	同會
朝鮮美術展覽會圖錄(第十五回)	朝鮮總督府同展覽會編	同會
帝國美術院展覽會原色畫帖	美術工藝會編	同會
第一帝國美術院展覽會圖錄	文部省編	審美書院
帝展號(アサヒグラフ臨時增刊)	朝日新聞社編	同社
帝展集 第一回	巧藝社編	同社
東西美術の知識	齋川 梧堂	昭和出版社
二科畫集(第二十三回、週刊朝日臨時增刊)	朝日新聞社編	同社
二科展圖錄(第二十三回)	刊行會編	同會
日本美術展覽會圖錄(第二十三回)	日本美術院編	大塚巧藝社
日本美術年鑑 昭和十一年版	美術研究所編	同所
日本美術年鑑 昭和十一年版	美術日報社編	同社
日本文化私観	ブルーノ・オット著 森 佛郎譯	明治書房

日本畫

美一九三六版 美術概論 其他	松野 一夫	平凡社
美術年鑑昭和十一年版	兒島喜久雄	小山書店
美術の秋(週刊朝日臨時增刊)	美術年鑑社編	同社
美術の春(週刊朝日臨時增刊)	朝日新聞社編	同社
美術批評と美術問題	朝日新聞社編	同社
表現の日本的特性	兒島喜久雄	小山書店
復興廣演大博覽會日誌	金原 省吾	古今書院
文展號(アサヒグラフ臨時增刊)	同博覽會編	同會
文部省美術展覽會原色畫帖(昭和十一年)	朝日新聞社編	同社
文部省美術展覽會圖錄(昭和十一年)	美術工藝會編	同會
花鳥風月 第二十六輯	文部省編	審美書院
川合玉堂	岡本 東洋	芸 艸堂
寛方丙子佛畫集	兒玉 希望	美術往來社
現代日本畫大鑑	荒井寛方畫	岡村多聞堂
色紙短冊範本	岡村展雄編	同社
四君子の畫法	石井柏亭監修	昭 森 社
如洋畫集 第二卷	桑原 江南	興文社
青龍社展覽會目錄(第八回)	石井 雨光	日本圖書刊行會
倉丘作畫集	野澤如洋畫	中山 忠直
續日本畫實習帖 第四一六輯	中田忠直編	同社
竹坡遺芳	川端 清編	青 龍 社
鳥獸百種	大森 茂	芸 艸堂
鳥類寫生圖譜 第四期第九卷	大智勝觀等著	アトリエ社
	尾竹 永一	竹坡未發表遺作展後援會
	岡本 東洋	芸 艸堂
	小泉勝衛、土岡泉共著	同圖書刊行會

洋畫

南畫展 第十五回	朝日新聞社編	同社
南畫の描き方	松林 桂月	崇文堂
日本畫會展覽會圖錄	日本畫會編	芸 艸堂
日本畫と其技法	川合玉堂等著	東洋圖書株式會社
日本自由第十五回展覽會圖錄	日本自由畫壇	芸 艸堂
日本南畫院十五年	日本南畫院編	南畫鑑賞會
日本南畫院展覽會圖錄 第十五回	日本南畫院編	同院
榎嶺遺芳	恩賜京都博物館編	便利堂
平福穂庵畫集	田口掬汀編	日本美術學院
婦人風俗三十二相(複製)	芳 年 畫	網島書店
鳳白歌舞伎繪	三宅鳳白畫	芸 艸堂
北滿國境線を描く	野長瀬晚花畫	同社
默契帖	小室 翠雲	南畫鑑賞會
山内多門畫集	山内多門編	同畫集刊行會
龍子第六回個展作品圖錄	山内多門編	大塚巧藝社
油繪みにあちゆる展覽會圖錄	中野治三郎	河内洋畫材料店
石川寅治畫集 第一輯	石川寅治畫	美術工藝會
池島清記念畫集	池島 清畫	池島三省
川上涼花畫集	河井清一編	酒井 儼尋
現代素描全集 第一卷	川上涼花畫	同社
現代素描全集 第三、十四卷	大森商二編	同社
現代洋畫大全集 第二十三回	アトリエ社編	同社
光風會作品集 第二十三回	同會作品集	同會
小柴近作油繪展覽會目錄	刊行會編	同會
佐分眞	小柴錦侍編	同社
素描の基礎研究	佐分 眞畫	春 鳥 會
獨立展覽 第六回	東門正太郎	綠 蔭 社
訪伯紀行圖繪	朝日新聞社編	同社
三井安尾研究作品集	岩井尊人畫	第一書房
	三井安尾畫	同人

薰染	市田商店考案部編	芸 堂	國産漆獎勵會十年史	國産漆獎勵會	同 會	新星	新創展圖錄 第一、二回	新星會編	芸 堂
華業會作品集 第二	田中源商店編	芸 堂	探華譜 下	河原崎晃洞	內田美術書肆	新創展圖錄 第一、二回	新創展圖錄 第一、二回	內田美術書肆	同 書肆
學校家具設計圖集	下島 萬夫	東 邦 社	最新椅子張法とクッションマツト	加納四十二	太 陽 堂	新圖考 上卷	新日本形集	白澤會編	同 會
玩具の研究と制作	西川 友武	金星 堂	最新實用鑄造法	澤井 寛一	啓 業 社	新編三十六華選 上	新編三十六華選 上	都路崎陽畫	芸 堂
菊百趣 上下卷	河原崎晃洞	内田美術書肆	最新實用鑄造法	川喜田煉七郎	文 錄 社	新編色染學 上卷浸染編	新編色染學 上卷浸染編	外川昇、齋藤幸七共著	工業圖書株式會社
紀州郷土玩具 第四	具研究會編	同 會	最新實用鑄造法	室田康造共著	綜合美術研究所	透彫欄間圖案集	透彫欄間圖案集	阿部 正雄	同 所
京都圖案協會圖錄	高坂三之助編	内田美術書肆	最新實用鑄造法	上野正之輔	創 文 社	世界文様圖案大成 上、中、下卷	世界文様圖案大成 上、中、下卷	鹿島 英二	芸 堂
京都府織物試驗場業務功程報告	同試驗場編	同 場	最新實用鑄造法	富田 輝夫	同 譯	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	中島武太郎	芸 堂
昭和十年版	同試驗場編	同 場	最新實用鑄造法	樋下 又平	同 譯	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	九紅商店京支店編	芸 堂
近畿聯合輸出工藝試作品展覽會報告 第二回	務所編	同 所	最新實用鑄造法	靜岡縣統計課	同 譯	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	松坂屋意匠研究部編	芸 堂
近世色染學綱要	小川 省吾	工業圖書株式會社	最新實用鑄造法	大塚 大吉	工業圖書株式會社	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	九紅商店京支店編	芸 堂
近世色染學實驗法	小川 省吾	工業圖書株式會社	最新實用鑄造法	近藤としを	學術出版社	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	內藤 良治	行會
近代家具裝飾資料 第一八輯	洪洋社編	同 社	最新實用鑄造法	的場三木次	太 陽 堂	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	研美會編	同 會
英羽會二十周年記念展 第一八輯	丸紅商店吳羽會編	內田美術書肆	最新實用鑄造法	加藤土師磨	日本陶磁器工業組合聯合會	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	內田美術書肆	同 書肆
全國染織豪華展 第一八輯	丸紅商店京都支店考案部編	芸 堂	最新實用鑄造法	工藤 折平	高橋 傳吉	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	明光堂	同 堂
啓明帖 第一一三輯	桂友 第三十八回染織夏帯展集	芸 堂	最新實用鑄造法	辻 克己	同 會	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	高坂三之助	芸 堂
桂友 第三十八回染織夏帯展集	桂友同機會編	芸 堂	最新實用鑄造法	名古屋高商商業美術研究所編	古 今 堂	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	上野 爲二	芸 堂
桂友同機會 第十七第二十回	後藤 泰一	工業圖書株式會社	最新實用鑄造法	商工省編	同 館	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	同試驗場編	同 場
顯色色染法	豐口克平、西川友武共著	東 學 社	最新實用鑄造法	府立東京商工獎勵館	同 館	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	森 規矩郎	東 學 社
現代家具製作の知識	吉田長世譯編	廣告文化研究所	最新實用鑄造法	長虹會編	內田美術書肆	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	塗工之魁新開社編	同 社
現代陳列窓に於ける美術家ボス	大毎經濟部編	同 部	最新實用鑄造法	木村 貞	家具之友社	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	名匠會編	芸 堂
原料圖案ステープル、ファイバの對象	内田美術書肆編	同 書肆	最新實用鑄造法	大沼 知之	大 修 堂	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	上村 百代	同 館
交響展 第三四回	廣告界編輯部編	誠文堂新光社	最新實用鑄造法	及川 達男	日本織物研究社	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	河原崎晃洞	芸 堂
廣告圖案と文案の實際	長岡 逸郎	文 錄 社	最新實用鑄造法	和田 三造	博 美 社	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回	梅原與惣次	同 人
工人社回顯錄	北原千祿編	同 人	最新實用鑄造法	成田 綺那	內田美術書肆	染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回		
紅選會逸品圖錄 第一輯	塚本商店吳服部	芸 堂	最新實用鑄造法			染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回		
構造和家具の製作と飾り方	小泉吉兵衛	東 學 社	最新實用鑄造法			染織美術展覽會圖錄 第二十回	染織美術展覽會圖錄 第二十回		

美術工藝品の蒐集とその鑑賞
ひくく名
美服三昧
百選會圖錄第五十四、五十六回
百一人小倉のしき第三、四輯
表装備考
服飾調和展 第十回
冬小袖名曲新繪卷
滿支圖案精華大成
民藝と實松
民藝美觀
木工、金工、竹工と洋着色並塗工
漆工、其他一般
術要諦
木材工藝叢書

版畫

牧ヶ野教信 高知縣教育會
市田商店編 芸 堂
柏壽園編 芸 堂
百選會編 芸 堂
飯田 始晃 芸 堂
岡村 辰雄 和風堂
柏壽園編 芸 堂
名匠會編 芸 堂
鹿原 三 堂
中村 精 同人
廣隆 詳 建設社
加藤 喜作 興學會出版部
洪 洋 社

第一輯 住宅室內計畫
第四輯 居間家具
第五輯 寢室家具
第七輯 同
第十一輯 金屬家具
第十六輯 座机と書棚
第十八輯 家具製圖
第二十四輯 ラックとラツカ
木竹基本工作講座 第一一六卷
元石川縣工業試驗所業務功程書
昭和十年度
元石川縣工業試驗所業務功程書
昭和十年度
有職玩具 第五輯
輸出陶磁器に關する參考資料第
二輯
略畫と圖案
琉球玩具圖譜
柳文 東京第四輯
柳選 第十五輯
瀧藤染の實際
六人の村圖錄 第十三、十六輯
わそめゑかたり

教育

東京一外人の見た印象 上下
近世錦繪世相史 第四、第十二卷
新時代版畫集 前後輯
翠光花鳥 第一、第六輯
創作京名所
版畫京洛三十題
版大阪名所
版畫手本
六潮版畫 第一輯
ノエル、ヌエ
浅井勇助編
齋藤 俊雄
福田 翠光
徳力富吉郎
徳力富吉郎
徳力富吉郎
武藤完一編
西川武郎編
ジャパン・タ
イムス社
平凡社
日本新版畫協
會
芸 堂
内田美術書肆
内田美術書肆
内田美術書肆
内田美術書肆
東 邦 社
同 人
手工科
新教材趣味の羊齒細工
手工科
新教材趣味の松かさ細工
手工教育原論
手工折紙細工
小學教員檢定試驗
受驗合格要領圖畫科受験の
眞體
小學圖畫の新指導(等二、三、六)
新時代の手工工業教材集成
粘土工藝
新時代の圖畫科施設
圖案指導大系
綜合圖畫事典
中等學校作業科コンクリート
東京高等工藝學校一覽 昭和十一
年度
東京美術學校一覽 昭和十一年至
十二年
童心的手工教材と其實踐
日本繪畫史讀本
日本繪畫調の新圖畫指導
日本標準兒童畫集 第一輯三年生
農村
本位生産的の手工教育の實際
美術教育論
文檢手工科の新研究
模範家具製圖
私の手工教育指導
西山 孝一 啓文社
永原 與藏 啓文社
阿部七三吉 培風館
中島 種二 建設社
武藤 完一 教員受驗社
松原郁二等著 弘學社
三吉 正雄 明治圖書株
式會社
山崎 壽郎 學校美術協會
武井勝雄等著 學校美術協會
會
中村 啓市 成美堂
同 校 編 同 校
大竹 拙三 賢文館
岡登 貞治 東邦美術協會
伊藤好太郎 學校美術協會
外山卯三郎 學校美術協會
藤田武雄門 東苑書房
原余夫共著 成美堂
石井 柏亭 文泉堂
村田 良三 中央工學會
小栗 吉隆 明治圖書株
式會社
横井 曹一

永原 與藏 東學社
同縣工藝指
導所編 同 所
同縣染織試
驗場編 同 所
聚美會編 芸 堂
名古屋陶磁器
輸出組合編 同 組合
日本美育會編 厚生閣
尾崎 清次 笠原小兒保險
研究所
柳交會編 芸 堂
柳選會編 芸 堂
北室清一郎 同志社專門學
校學友會
内田美術書
肆編 同 書肆
芹澤 銑介 同人

外國美術

繪入文化叢書
第一輯 歐洲美術の歴史
歐洲繪畫展覽會目錄
歐洲服裝史
瀧和書店編
相良徳三
青樹社編
高橋イネ加
藤とし共著
培風館

近代フランス繪畫思潮論

荒城 季夫

綜合美術研
究所現代三大畫家論
古典美術の再批判外山卯三郎
ヴェルツマン
著 大平章譯編

芝 書店

支那藝術考

高木 英彦

泰山 房

超現實主義の交流

山中散生編

ボン 書店

ヒカソ素描集(アトリエ三ノ
七臨時増刊)

アトリエ社

同 社

美術史の基礎概念—近世美術
於ける様式發展の問題—ヴェルツマン
著 守屋謙二譯

岩波 書店

マリイ・ロランサン詩畫集

マリイ・ロランサン
著 堀口大學譯

昭 森 社

ミルトン失樂園畫集

帆立理一郎編

新 生 堂

裸體藝術社會史

ハウゼンスタ
イン著 阪本勝
譯

栗田 書店

美術評論
第一部 ロマン派の繪畫想像力ボードレル著
望月百合子譯

ふらんす書房

雜

天の眞神

香取 秀眞

學藝書院

異端者の奇蹟

里見 勝藏

龍 星 閣

印刷美術年鑑 昭和十一年版

島屋政一編

大阪出版社

歐洲見聞記

武者小路實篤

山本 書店

思ひ出づるまゝ

三宅 克己

三宅 畫 房

獄陽長尾建吉

長尾 一平

同 人

畫房隨想 一流畫家隨筆集

廣瀬操吉編

信 正 社

カルパドスの唇

東郷 青兒

昭 森 社

紀世界圖繪

柳澤 健著

同 倉 書 房

雲の流れ

藤田 治畫

原田 睦子

藝術の宣傳に及ぼす効果と實際

鈴木 吉祐

太 陽 堂

藝林間歩

木下全太郎

岩波書店

現代世界漫畫集

須山計一編

日本漫畫研究
會 社

現代連續漫畫全集

アトリエ社編

同 社

第四卷 池田永一治、河盛久夫
第六卷 市川十士、近藤日出造

第七卷 松下井知夫、横山隆一

建築はつり屑

八 島 知

雜 草 社

水邊手帖

大田黒克彦

竹村書房

生活と精神の科學叢書 第六輯

立花 祐雄

東苑書房

色彩の心理

竹内 逸

改造社

緬風閑話

中山 修三

大阪府工業
獎勵館

世界各國人の趣味性

村松 梢風

養文堂

續本朝畫人傳

佐分 眞

春 鳥 會

素麗

小出 裕重

昭 森 社

大切な零園氣

中里介山著

隣人之支社

大菩薩時繪本 第一輯

野口昂明畫

同 館

大禮記念京都美術館年報

竹久夢二畫

アオイ書房

竹久夢二遺作集

川島理一郎

龍 星 閣

旅人の眼

鍋木 清方

雙 雅 房

築地川

建築研究社

雜 草 社

庭園圖集

同 館

同 館

帝室博物館年報 昭和十年一月—
十二月

同 館

同 館

帝室博物館復興興業會事業報告

同 會 編

同 會

帝展問題の鳥瞰

猪木 卓爾

資文堂書店

東方への港

有島 生馬

同 倉 書 房

日本繪業書史潮

樋畑 雪湖

日本郵券俱
樂部

日本庭園史圖鑑 第二十一輯

重森 三玲

有 光 社

明治大正昭和(三)

中川 一政

竹村書房

庭の眺め

大日本聯合青
年團郷土資料
陳列所編

同 所

表我國に於ける郷土博物館の發
展

同 會 編

同 會

瑛九氏フオート
デッサン作品集眼りの理由

柳 亮

昭 森 社

巴里うぶに在る

田邊 孝次

東邦美術協會

美術巴里から葛飾へ

同 會 編

同 會

復興橋廣大博覽會誌

同 會 編

同 會

ブラ胸一本

藤田 嗣治

東邦美術協會

正岡子規を中心

香取 秀眞

學藝書院

漫畫カット、題字の描方

須山 計一

日本漫畫研
究會

漫畫投書の手引

須山 計一

日本漫畫研
究會

名作挿繪全集 第七—第十二卷

平凡 社編

同 社

旅窓讀本

小杉 放庵

學 藝 社

旅窓讀本

中川 一政

學 藝 社

補遺 (十一年版に掲載洩れの分)

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

鏡花著

泉 鏡花著

新小説社

古美術定期刊行物所載文獻

總説・綜録

新東洋美術概論及び點の話龍村 謙二	アトリエ	一三ノ一一
造型美術新講座一		
傳教、弘法、明照三大師 脇本十九郎	鳴臺史報	四
の肖像に就て(講演)		
法隆寺の建造物と其佛像 岸 熊吉	恩賜京都博物館講義集	一三
日本全美術年表二二三三原田 信造	繪畫教習	四ノ一四 四ノ六三 四ノ六三
北魏像碑の維摩變相圖に就て	考古學雜誌	二六ノ一〇
美術史と考古學	考古學論叢一	
慶光明山寺の研究	角田 文衛	同
祥雲寺から智積院へ	栗野 秀雄	史蹟と古美術 一六ノ三
岩船寺から淨瑠璃寺へ	石崎 達二	同 一七ノ二
佛教尊像講話 四一九	吉祥 眞雄	史蹟と美術 七ノ三、四、六、九、一〇、一一
周防阿彌陀寺の重源の遺品	太田 古朴	同 七ノ三
二尊院空行狀碑と法然上人繪傳	川勝政太郎	同 七ノ四
南海の佛蹟	佐藤 虎雄	同 七ノ五
白沙村莊の佛像と石造美術 岡崎 守藏	川勝政太郎	同 七ノ六
安藝の光明坊と向上寺	川勝政太郎	史蹟と美術 七ノ一三
山陰關金之地蔵院	同	史蹟名勝天 一一ノ八
多武峰素描	高橋 城司	同 一ノ一三
美術史學の立場	井島 勉	史 林 二一ノ四
官國藝社寶物語一三	谷 重雄	神社協會雜誌 三五ノ八
近畿古美術巡禮四二五二大河内定雄	圖書と手工	二〇ノ一六 一〇〇一、二
磐城平町周圍の古蹟を巡覽して	米處士滿月	中央美術 三五

古美術定期刊行物所載文獻

會津地方訪古巡禮一、二	久保田米所	中央美術	三六、三七
舊洲古美術遊記	橋川毅一郎	同	三九
長安佛教史蹟巡訪記	結城 令開	東方學報	東京六別篇
六朝佛教藝術に於ける漢代の傳統	水野 清一	東洋史研究	一ノ四
朝鮮古美術史迹巡禮記	下店 靜市	東洋美術	二三
書畫骨董道史話一、二	谷 信一	南畫鑑賞	五ノ二、三
飛天雜話	大川 逸一	美術研究	四九
君臺觀左右帳記(公刊)	細川政御(同)	同	五二
明和五年板平安人物志(同)	同	同	五三
安永四年板平安人物志(同)	同	同	五四
東洋美術研究文獻目錄昭和十年	同	同	五七
本井目六(公刊)	同	同	五八
塔婆と佛像	内藤藤一郎	美術及美術史	一
三人の相阿彌	外山 英策	瓶 史	七ノ一
「建武藝術」序論抄	木下至太郎	同	七ノ一、春夏
可無流知五、六佛國寺と石窟庵二、三	東伏見邦英	寶 雲	一六
印度に於ける佛傳圖と本尊佛	上野 照夫	同	一七
達磨寺の研究	福田 敏男	大和志	三ノ三
和州寺社記	同	同	三ノ三、六
藤原京時代の藝術	佐藤 虎雄	夢 殿	一五
日本美術史概觀	笹川 臨風	歴史公論	五ノ一
肖像畫及び肖像彫刻に就いて	齊藤 隆三	歴史地理	六八ノ二
多古邊齋と渡邊華山	古川 修	アトリエ	一三ノ二
琉球の風俗繪、實思九の綱挽圖	比嘉 朝健	同	一三ノ三

繪畫

清朝の畫聖王石谷筆春景樓閣山水圖	比嘉朝健一	アトリエ	一三ノ一〇
遠近法と東洋精神	山際 靖	同	一三ノ一一
線の話、線觀念の再吟味	龍村 謙二	同	一三ノ一二
講義二			
「四種護摩本尊眷屬圖像」に就て	吉祥 眞雄	臥可留我	一ノ二
別所溫泉常樂寺の三浦屋店頭圖繪額	藤懸 靜也	浮世繪界	一ノ一
新川御浮世繪神紙	田中 草人	同	同
洋風風景畫の發達	外山卯三郎	同	一ノ一、二
司馬江漢の「吉野紀行」	井上 和雄	同	一ノ一
葛飾北齋と歌川豐國	鈴木 仁一	同	同
支那版畫の我芝居番付への影響	石割松太郎	同	一ノ二
北齋の狐狸圖に就て	同	同	同
平民藝術と菱川師宣	藤懸 靜也	同	同
元祿期の鳥居清信	井上 和雄	同	同
大津繪に就て	和田 辰雄	同	一ノ三
金刀比羅宮祭禮圖に就いて	和崎 宗重	同	同
祐信以前(上方の美人畫)に就いて	木村 直己	同	同
元祿期の新吉原の狀況に就いて	同	同	同
元祿期の花見と師宣の東飯田名所	玉林 晴則	同	同
ふきゑ所	同	同	同
上方の美人畫に就て	同	同	同
長眼表紙繪の變遷に就て	木村 直己	同	一ノ四
在土自慢の名産杖	森 銑三	同	一ノ五、八
浮世繪師入甲記	同	同	一ノ五
安永風俗と中洲の納涼	玉林 晴則	同	一ノ五、六
浮世繪と江戸の名橋	廣見安二郎	同	一ノ六、七
三代豐國「江戸五大橋」圖	和田 辰雄	同	一ノ六
天保期の北齋	吉野 建雄	同	一ノ七
立齋試話	同	同	同
浮世繪雜論一、二	餅田 宗重	同	一ノ七、八
近世初期の風俗畫に就て	藤懸 靜也	同	一ノ八
浮世繪の發生	奧平 英雄	同	一ノ八、九

歌川國直研究	津金巨摩雄	浮世繪界	一ノ八一	楊文總筆夏景山水圖解	國華	五四二	王原祁筆南山積翠圖解	國華	五四七
英泉の美人畫の目と口一	岡直己	同	同	長崎橋本辰二郎氏藏	同	同	東京内野晉氏藏	同	五四八、五
役者繪の興味	井上和雄	同	一ノ九	田能村竹田と護國學派下	同	五四三	西城華嚴經美術の東漸	松本榮一	五四八、五
浮世繪と文身の話	玉林晴明	同	同	院畫鶴頭花圖解東京男爵郷誠之助氏藏	同	同	立原杏所筆鸞鷺圖解	橫濱原善一郎氏藏	同
寫樂に就て	森清太郎	同	同	愛染明王像解	同	同	伊勢物語圖卷解	橫濱原富太郎氏藏	同
北齋未開板々下四拾種	佐藤章太郎	同	同	長澤盛雪筆松鶴圖解	同	同	老子渡關圖解	橫濱原富太郎氏藏	同
北齋と曉齋の信州旅行	吉野建雄	同	同	廣島保田七兵衛氏藏	同	同	王鑑筆雲經長松圖解	東京内野晉氏藏	同
宗達から光琳	春山武松	恩賜京都博 物館講演集	一三	田能村竹田筆松溪載鶴圖解	同	同	南蠻人上陸圖卷	橫濱原善一郎氏藏	同
亞歐堂田善の研究	油井夫山	同	一ノ一〇	盛茂輝筆山居訪問圖解	同	同	薰行書畫奧細道竝に野磨	藤懸靜也	五四九、
扇面屏風の意匠に就て	野間清六	漆と工藝	四一七	東京男爵團伊能氏藏	同	五四四	紀行に就て上下	同	五四〇
松花堂昭乘	粟野秀徳	史迹と美術	一七ノ一	鑑貞筆櫻圖解	同	同	宋院畫桃花小禽圖解	橫濱原善一郎氏藏	同
後園融天皇宸影	岩橋小彌太	同	一七ノ三	彌勒菩薩圖解	同	同	橫濱原善一郎氏藏	同	同
芥子園畫傳要訣	草野桂雲	繪畫教習	四ノ一四六	關本秋暉筆花鳥圖解	同	同	十王圖解	橫濱原富太郎氏藏	同
畫筌新講	西澤信敏	同	四ノ一四、 六ノ一一	長崎橋本辰二郎氏藏	同	同	吳振筆山水圖卷解	同	同
繪卷に現れた武者繪	服部有恒	同	四ノ一三	司馬江漢金澤雪景圖解	同	同	青木木末筆山水圖解	同	同
七一九	同	同	同	圓山應舉筆壽老、鷺鸞、鴨圖解	同	五四五	大阪福田松之助氏藏	同	同
故宮本夏珪筆長江萬里圖	瓜茄	同	二	橫濱原富太郎氏藏	同	同	畫龍說	龍精一	五四〇
夏珪筆十二景圖卷に就て	同	同	同	沉石田筆贈吳寬行畫卷解	同	同	陳容筆五龍圖解	東京鈴木正夫氏藏	同
夏珪の落款	同	同	同	兵庫原田哲朗氏藏	同	同	彰城百川筆春秋江山圖屏風解	同	同
立意	同	同	同	野村宗達筆蓮花水禽圖解	同	同	大阪佐々木昌興氏藏	同	同
本朝裝飾畫考	矢野謙作	現代美術	三ノ三	橫濱原善一郎氏藏	同	同	渡邊華山筆鐘馗妹圖解	同	同
築島繪卷を見て	宗悦	工藝	六三	菅井梅園筆歸去來辭圖解	同	同	靜岡森淑氏藏	同	同
築島物語の梗概	同	同	同	長崎橋本辰二郎氏藏	同	五四六	漱邊出爐盛光佛五星圖解	同	五五一
築島の本文	同	同	同	惲南田筆扇面山水花卉帖解	同	同	ロンドン大英博物館藏	同	同
築島に關する文獻	同	同	同	千手觀音坐茶臺圖解	同	同	雪谷等顏筆山水人物圖屏風解	同	同
香取本大江山繪詞に就て	小川壽一	國語國文	六ノ九	廣島侯爵淺野長勳氏藏	同	同	酒井抱一筆雪月花圖解	同	同
宋初の院畫上、下	瀧精一	國華	五四二、 五四三、 五四四	雪村筆鷹圖屏風解水戸中村忠兵衛氏藏	同	同	東京安藤兵部氏藏	同	同
安徳天皇御玩具人物山水 圖繪扇解	同	同	同	酒井抱一筆月下秋草圖解	同	同	椿椿山筆枯木群禽圖解	同	同
廣島殿島神社藏	同	同	同	廣濟原屋壽子氏藏	同	同	東京男爵郷誠之助氏藏	同	同
柿本宮曼茶羅圖解	橫濱原富太郎氏藏	同	同	陽炎、摩利支天像の實例	松本榮一	五四七	玄駐三藏繪と春日驗記繪	谷信一	五五二
靈澤筆寒山圖解	橫濱原善一郎氏藏	同	同	狩野探幽筆觀楓圖解	同	同	松村吳春筆碁圖解	同	同
渡邊始興筆四季花木圖屏風解	同	同	同	廣島侯爵淺野長勳氏藏	同	同	東京男爵郷誠之助氏藏	同	同
橫濱原富太郎氏藏	同	同	同	敦王護國寺兩界曼茶羅圖解	同	同	虛空藏菩薩圖解	東京男爵團伊能氏藏	同
泰山筆瀟湘圖解	橫濱原善一郎氏藏	同	同	周文派筆山水圖屏風解	橫濱原善一郎氏藏	同	同	同	同

松花堂自畫像解	橫濱原屋壽子氏藏	國	五五二	磯野文齋と畫著を見て	竹内 梅松書畫骨董雜誌三三三	水中描寫に就いて	鈴木 仁一	中央美術	三七
狩常野信筆文雅著薩花島圖解	同	同	同	鄭板橋に就いて	古川 修 同	樂翁公と古畫の模寫に就いて	廣巢 豊治	同	三八
長崎橋本辰二郎氏藏	同	同	同	平井顯齋のこと	竹内 梅松 同	古畫類聚目錄 駒澤抄出	同	同	三九
王建草筆景山水圖解	同	同	同	大津繪の起原	仲田勝之助 同	東京博物館所藏の二琉球畫比嘉	朝健	同	同
兵庫阿部房次郎氏藏	同	同	同	雲坪の桂山吳江時代	丸山 良策 同	老龍庵星殿先生	飯塚 鶴涯	同	一二〇一
中林竹洞筆蘭亭曲水圖解	同	同	同	大津繪起原の續貂	今井 爽邦 同	勤王畫人略傳	添田 達嶺	同	同
大坂見島齋助氏藏	同	同	同	孤獨の畫人山本竹雲	龜畑 雪湖 同	頼山陽の畫筆一抹	木崎 好尙	同	同
大雅筆密林草堂圖解	同	同	五五三	竹田翁雜感	吉備 外史 同	華山先生の畫業	松林 桂月	同	同
傳馬遠筆樓閣山水圖及題贊解	同	同	同	竹山先生とその藝術	河野 桐谷 同	水戸志士藤田小四郎の畫蹟齋藤	隆三	同	同
兵庫阿部房次郎氏藏	同	同	同	張月藤逸傳 上、下	山田 秋衡 同	一蕙齋浮田可爲先生	森村 宜稻	同	同
狩野探幽筆和歌三聖圖解	同	同	同	東洋畫の眞體	小室 翠雲 同	藤本鐵石の一挿話	古川 修	同	同
東京小坂順造氏藏	同	同	同	宗達と宗仙のことども	平木 清光 同	村山半牧のこと	橋尾 翠田	同	一二〇二
狩野探幽畫像解	東京狩野探道氏藏	同	同	紅樓夢之圖に就て	田能村小竹 同	秘贊光琳筆扇面散し屏風	大森 富平	同	同
立原若所筆駒郊向蘭花何圖解	同	同	同	昆明池の障子	赤堀又次郎 同	懷月堂安慶と繪島生島事件添田	達嶺	同	同
瑞球の歷代國王畫像に就て上	比嘉 朝健	同	同	廣重と清親	竹内 原風 同	女雪信の話	同	同	一二〇三
胎生期の大和繪と光俊の畫風に就て	石崎 達二	史蹟と古美術	一六〇一	大和繪師大石直虎	古川 梅松 同	大雅堂夫人玉瀾女史	人見 少華	同	同
歌仙畫を描く	粟野 秀穂	同	同	山陽と雲華	竹内 修 同	文晁夫人幹々女史	佐竹 永陵	同	同
智積院藏畫の傳來と筆者	木村捷三郎	同	一六〇三	乾隆帝の繪畫趣味 上、下	後藤 末雄 書	江馬細香と梁川紅蘭	添田 達嶺	同	同
養源院の杉戸繪	栗野 秀穂	同	同	宋徽宗の桃鳩圖	西川 幸 同	立原春沙女史	飛田 周山	同	同
松花堂昭乘	同	同	一七〇一	春日權現靈驗記に就て	相澤 春彦 同	齋藤香玉のことども	竹内 原風	同	同
後圓融天皇宸影	岩橋小彌太	同	一七〇三	賴壽法橋の道風像に就て	萩野三七彦 同	古今閑秀畫人略傳	松の 里人	同	同
高台寺と狩野光信	土居 次義	史迹と美術七〇二	七〇五	道風像其他	岡山 高蔭 同	紀樸亭の畫蹟に就いて	望月 信成	同	一二〇四
中世繪畫の技法に就て一	下店 靜市	同	七〇七	南北畫派論とその他	富田 義彦 史	琉球の畫家吳著溫	比嘉 朝健	同	一二〇五
建仁寺所藏の座屏畫に就て	次義	同	七〇七	平家納經雜巧	端山聽雨譯	酒韻童子繪卷考	服部 有恒	同	同
山樂山雪研究上の一資料	小林 剛	同	七〇一〇	郭熙と宋朝の山水畫	瀧 精一	武者繪の名作	山口 玄珠	同	同
法隆寺金堂壁畫の名題に就て	源 豐宗	同	七〇一一	成田新勝寺の繪馬	久保田米所	かつしか榮女	添田 達嶺	同	同
「法隆寺金堂壁畫の名題に就て」を読む	同	同	同	野々口立圃の新考察一	同	隠れたる南畫家	原田 尾山	同	同
等伯研究の三資料	土居 次義	同	同	日本畫に現はれたる野草	小林源太郎	十市石谷及其の子王洋	相見 香雨	同	一二〇九
四天王寺扇面古寫經の復原廣瀬	直彦	四天王寺	二〇一	實茶翁畫像に就て	西村 南岳	墨畫の瞥見	杉浦 冷石	同	一二〇一〇
華山とその作品の特長	小室 翠雲	書畫骨董雜誌	三三一	模本の話	廣巢 豊治	新説乞食月倦	狩野 探道	同	一二〇一一
名蹟過眼漫錄	西村 南岳	同	三三一	筆者不詳南蠻屏風を見る	川路 柳虹	探幽の墓所を繞つて	比嘉 朝健	同	一二〇一二
白井直賢に就いて	竹内 梅松	同	三三一	寒葉齋海鏡圖考	西村 南岳	琉球の肖像畫と其進展	鳥居 龍藏	東京學報	東京六
				寒葉齋綾足への新しき認識本多	夏彦	「文姫歸漢圖」に就て	土井 次義	東洋美術	二三

金剛峯寺佛涅槃圖(解説)	龜田 孜	東洋美術	二三	文殊菩薩像	京都高山寺藏	日本國寶	七〇	繪馬	玉生 道經	美術	一一ノ一三
畫題辭典(稿本) 一六—二五小室 翠雲	南畫鑑賞	五ノ一一七	運池小僧圖	東京三井合名會社藏	同	同	同	日本古代繪畫の解釋	同	同	一一ノ一〇
東洋の畫論 三四—四〇 同	同	五ノ一一五	弘法大師行狀繪詞	京都教王護國寺藏	同	同	同	失明時の八犬傳稿本と馬	金井 文彦	同	一一ノ一二
畫と詩との關係 松本亦太郎	同	五ノ一	湖山小景圖	新潟中野忠太郎氏藏	同	同	同	琴の挿繪	同	同	同
南畫巡禮その一收藏家歴訪	同	同	僧形八幡像	京都石清水八幡宮藏	同	同	同	高野山の國寶	同	同	同
後崎都香佐氏	同	同	二十五菩薩來迎圖	京都淨福寺藏	同	同	同	山越阿彌陀圖考	豐岡 益人	美術史	一
石濤の年輪と有髮無髮	今關 天影	同	五大尊像	京都醍醐寺藏	同	同	同	十便十宜畫冊小攷	島本十九郎	美術研究	四九
歴代名畫記の價值並に其	芹澤 閑	五ノ一、二	華嚴五十五所繪卷	東京安田善次郎氏藏	同	同	同	亞歐堂田善の銅版畫に就	西村 貞	同	四九、五一
紙談指摘 三四(元)	同	同	蜀葵遊獵圖	神奈川原富太郎氏藏	同	同	同	上下	同	同	同
華光梅譜 一、二	八幡關太郎	五ノ二、三	益田兼堯像	山口男爵益田兼施氏藏	同	同	同	楊月筆瓜笏圖	和歌山寶壽院藏(圖版解説)	同	四九
祇園南海の事ども	今關 天影	五ノ三	道成寺緣起	和歌山道成寺藏	同	同	同	和歌山寶壽院藏(圖版解説)	森 鉄三	同	四九
信濃の畫人長井雲坪	同	同	楠公訣見圖	東京侯爵前田利爲氏藏	同	同	同	大雅堂遺聞 上下	同	同	五〇、五一
浮世繪と俳諧 一—六	鈴木 仁一	五ノ四—九、	船窓小戲圖	大阪水原金兵衛氏藏	同	同	同	天狗草紙	東京根津嘉一郎氏藏(圖版解説)	同	五〇、五一
純正繪畫としての俳畫	鈴木 進	一〇—四—六	胎藏舊圖樣	兵庫武庫金太氏藏	同	同	同	東京根津嘉一郎氏藏(圖版解説)	同	同	同
俳畫家點描 一—四	井上辰九郎	五ノ四—六	眞言八祖像	京都神護寺藏	同	同	同	大雅筆洞庭赤壁圖	東京小西幸實氏藏(圖版解説)	同	同
俳畫小談	小川 千麿	五ノ四	求聞持曼荼羅圖	京都觀智院藏	同	同	同	東京小西幸實氏藏(圖版解説)	同	同	同
蕨村の俳畫 一、二	河東碧梧桐	五ノ四、五	地蔵十王像	奈良能滿院藏	同	同	同	根津家藏天狗草紙詞書	同	同	同
蕨村の芭蕉涅槃圖	下島 勳	五ノ四	法然上人繪傳	京都知恩院藏	同	同	同	扇面散屏風に就て	當麻曼陀羅緣起詞書(公刊)	田中 喜作	五一
俳畫管見	飯田 九一	同	松林圖	東京子爵福岡孝紹氏藏	同	同	同	室町時代唐繪論中世に於ける支那畫の鑑賞の一節	谷 信一	同	五一
八大山人傳 一—四(完)	八幡關太郎	五ノ五—七、	觀音曼荼羅圖	東京長尾彌彌氏藏	同	同	同	山樂繪補考	田中 喜作	同	同
南畫の意味	金原 省吾	五ノ七	扇面法華經	大阪男爵藤田平太郎氏藏	同	同	同	再び彼の印記に就いて	同	同	同
南北兩畫派の本質的特徴	小室 翠雲	五ノ九	兩界曼荼羅	山形上杉神社藏	同	同	同	法華曼荼羅	京都海住山寺藏(圖版解説)	同	同
南畫の本質	鼓 常良	五ノ九、一〇	後鳥羽天皇宸影	神奈川原富太郎氏藏	同	同	同	孔雀明王像について	渡邊 一	同	五三
俳畫華	古川 北華	四ノ九—一二	周茂叔圖	東京小倉乃ぬ氏藏	同	同	同	能阿彌私考	裏辻 憲道	同	同
江戸時代に於ける日本の南畫 一—二	一氏 美良	五ノ一、二	松に梅圖	京都知恩院藏	同	同	同	天台高僧像兵庫一乘寺藏(圖版解説)	同	同	同
外國人の東洋畫に對する鑑識に就て	岩村 成充	五ノ一、二	十便十宜圖	山口側谷管三氏藏	同	同	同	中觀智左右衞山拾得圖	同	同	同
三十八歌仙切	日本國寶	六九	谷文晁の研究 一〇—一二	日本美術協會報告	同	同	同	廣島侯爵淺野長勳氏藏(同)	同	同	同
東京男爵大倉喜七郎氏藏	全集	同	芳中漫談	同	同	同	同	蕭白筆柳下鬼女圖	東京美術學校藏(同)	同	同
佛眼曼荼羅	同	同	節三居後素譚 一、二	久保田米所	同	同	同	畫師周德	田中 喜作	同	同
聖德太子像	同	同	俊賢法橋に就いて	田中 一松	同	同	同	寒巖尺牘(研究資料)	梅津 次郎	同	五四
兵庫鶴林寺藏	同	同	雲舟等楊と拙宗等楊	松下 隆章	同	同	同	彌勒菩薩像	同	同	同
達磨、豐干、布袋像	同	同	彰百川近江京都名所圖卷	相見 香雨	同	同	同	福島藥王寺藏(圖版解説)	同	同	同
織田信長像	同	同	天稚産草紙と住吉廣周	相見 香雨	同	同	同	寒巖筆山水圖	同	同	同
繪杉戸	同	同	海北派の畫家 上	相見 香雨	同	同	同	東京友枝高彦氏藏(同)	同	同	同
淨土曼荼羅圖	同	七〇	本居宣長と寫實主義	西田 正秋	同	同	同	同	同	同	同
京都大心院藏	同	同	同	美 育	同	同	同	同	同	同	同

上宮太子繪傳考

正木 篤三

美術研究 五五

法華諸尊集會野子圖

同

同

傳周文筆山水圖

同

同

神奈川原富太郎氏藏(同)

同

同

宋寧周文矩宮中圖的新斷片矢代

幸雄 同

五六

小西家光琳關係資料ノ一二

田中 喜作 同

五六、五七、六〇

舊藏(研究資料)

同

同

傳張思恭筆釋迦三尊像

同

五六

神奈川建長寺藏(圖版解説)

同

同

等伯筆猿猴圖

同

同

京郡龍泉庵藏(同)

同

同

室藏問雲一采(公刊)

三村清三郎 同

同

十二天像

同

五七

京郡教王護國寺藏(圖版解説)

同

同

法然上人像

同

同

茨城縣常福寺藏(同)

同

同

大雅筆漁樂圖

同

同

大和繪十六羅漢像に就て

田中 喜作 同

五八

法華堂根本曼荼羅追記

矢代 幸雄 同

五八

四凸堂中亥とその銅鑄作

西村 貞 同

五八、六〇

品上下

同

同

御物御書目録(研究資料)

谷 信一 同

五八

二天筆枯木鳴鶴圖

同

同

東京長尾欽彌氏藏(圖版解説)

同

同

徐祥筆漁夫圖

同

同

東京侯爵井上三郎氏藏(同)

同

同

法隆寺の聖皇曼荼羅

萩野三七彦 同

五九

彌勒曼荼羅

同

同

之庵和尚像

同

同

神奈川歸順院藏(同)

同

同

抱一筆風雨草花圖

同

同

東京伯爵德川宗敬氏藏(同)

同

同

石園筆山水圖

三重縣古森收蔵氏藏(圖版解説)

美術研究 六〇

東洋畫構圖法概論

下店 靜市 同

美之國 一二〇

古畫雜記

廣瀬 嘉六 同

一二〇

歌舞妓草子に就て

藤懸 靜也 同

一二〇

日本に於ける洋風景版

外山卯三郎 同

一二〇

畫の發達について

同

一二〇

黃樂の東傳と藝術上の影響

西村 貞 同

七〇

青蓮院の襖繪猿蓑圖に就て

中井宗太郎 寶 同

一六

黃公望富春山居圖卷考

青木 正見 同

一七

禪林寺の襖繪と等伯派

土居 次義 同

同

北斗曼荼羅に就て

吉祥 眞雄 同

同

末期浮世繪の展開

鈴木 仁一 同

一八

鎌倉時代不動明王繪卷解説

鈴木 進士 同

六七

北大路氏藏の不動繪卷に就て

山村 耕花 同

同

神護寺藏山水屏風に就て

田中 喜作 同

七〇

法隆寺金堂の壁畫に就いて

龜田 致 同

同

鎌倉期の佛像抄

關 靖 同

同

舞踊圖屏風に就て

青 琅 同

七一

玉樂と宗詰

田中 一松 同

七二

金箱出現圖禮讃

秋山 光夫 同

七三

光悅の繪に就て

望月 信成 同

同

兩足院にて等伯派の襖繪を見出すの記

土居 次義 同

一四

司馬江漢その啓蒙者としての斷面(二三)(完)

今井 敬積 同

二、一四

長崎繪畫の發達

永見德太郎 同

五、二

戲畫鳥羽繪

今井 秀正 同

同

長崎版畫

永見德太郎 同

同

本朝畫人逸話

今井 慧花 同

五、四

本朝畫人傳 續

同

五、五

織田信長畫像考

谷 信一 同

五、六

平家納經に對する私見

山田 繁雄 同

五、九

寢覺物語繪卷に就て

吉村 靖子 同

同

豐臣秀吉畫像考

谷 信一 同

五、一〇

書蹟・文書附彙刻

宸筆心經に就て

下 伊木 壽一 史

一四〇

後奈良天皇宸筆般若心經に就ての研究

花見 朔己 史

九

世尊寺書流系證勅校上、下田中

塊堂 史迹と美術七、九、一〇

二、一

寫經の復興

奧田 慈應 同

二、三

寫經に於ける一行十七字

山本 禪堂 同

二、三

山陽遺墨鑑賞餘談一、二

奧田祥太郎 同

三、二、三、三

書の大衆的研究に就て

中村 不折 同

三、四、一

寫經の事一

赤堀又次郎 同

三、四、一

楊守敬平帖記國字解三、八池田

古日 書 同

六、一、一六

元永本古今集に就て

六、七飯島 春敬 同

六、一、二

入道右大臣集に就て

同

六、三、一五

一、三

同

六、三

古筆名彙集

眞田 收軒 同

同

恒山詞碑跋譯

萬石 齋 同

同

清人書の清人評

卓 君庸 同

六、三、一六

章草考一、一四

佐々木信綱 同

六、四

元永本古今集

玉 潛剛 同

六、四、一五

清人書評一、一三

飯島 春敬 同

六、六

伊豫切の二書風に就て

石田直太郎 同

同

石田無得傳清遺

野村 白雲 同

同

鄧陽の對光符と綾帖

中村 靈樹 同

道

羣臣上醜刻石

楠瀬 日年 同

五、一

漢印概説

相澤 春洋 同

同

賀歌三種に就て

今關 天彰 同

同

日本刻帖開話

高橋 梅園 同

同

茶器の箱書附

中村 春堂 同

五、三

子樂院公略傳

尾上 柴舟 同

同

子樂院雜感

松下 太虛 同

同

遺墨より見たる子樂院公

田中 塊堂 同

同

家熙公の古書畫觀堂

神郡 晚秋 同

同

八部衆像 奈良興福寺藏 日本國寶 七〇

兜跋毘沙門天像 和歌山親王院藏 全集 同

藏王權現像 東京總持寺藏 同

吉祥天像 京都六波羅密寺藏 同

釋迦如來像 神奈川眞福寺藏 同

善導大師像 兵庫昌林寺藏 同

菩薩像 兵庫大龍寺藏 同

行教律師像 京都神應寺藏 同

地藏菩薩像 京都廣隆寺藏 同

大黑天像 滋賀明壽院藏 同

千手觀音像 長野清水寺藏 同

阿彌陀如來及兩脇侍像 京都三千院藏 同

聖德太子像 廣島淨土寺藏 同

善女龍王像 奈良法隆寺藏 同

三尊佛像 奈良唐招提寺藏 同

釋迦如來及兩脇侍像 兵庫圓教寺藏 同

菩薩像 京都寶菩提院藏 同

不動明王像 福井常禪寺藏 同

阿闍如來像 奈良法隆寺藏 同

阿彌陀如來像 長野阿彌陀堂藏 同

寂室和尚像 滋賀永源寺藏 同

觀世音菩薩像 奈良法隆寺藏 同

梵天帝釋天像 奈良唐招提寺藏 同

千手觀音像 京都廣隆寺藏 同

四天王像 奈良興福寺藏 同

阿彌陀如來像 新潟長安寺藏 同

十一面觀音像 愛媛太山寺藏 同

藏王權現像 宮城御嶽神社藏 同

會津に殘る佛教美術 川口 只夫 美術 二ノ三、四

樣式史的見地より見たる 内藤藤一郎 美術史及 一

夢殿本尊に就て 渡邊 一 美術研究 五〇

智滿寺藏刻出小佛像に 同 同 五四—五六

佛造像作法考上、中、陶 谷 信一 同 同

細川侯爵家藏及製立女像 矢代 幸雄 同 同

不動明王及八大童子像 同 同 五四

和歌山金剛峯寺藏(圖版解説) 同 同 同

古美術定期刊行物所載文獻

文殊菩薩騎獅像 福島樂王寺藏 美術研究 五五

快慶作六日如來像 東京美術學校藏 同 五六

ボストン美術館所藏の 矢代 幸雄 同 五七

銘記ある日本彫刻 同 同 同

佛造像史綱 佛像が出来 谷 信一 佛 教 二ノ三

上るまで 同 同 同

般若の面と蛇の面 野上豊一郎 寶 雲 一八

印度の四天王像に就て 逸見 梅榮 夢 敷 一六

古代朝鮮の四天王像 三品 彰英 同 同

日本の四天王像に就て 内藤藤一郎 同 同

奈良時代の四天王像に就て 佐藤 虎雄 同 同

東大寺法華堂塑像諸佛と 内藤藤一郎 同 同

戒壇院四天王 同 同 同

四天王寺の四天王 出口 常順 同 同

勝軍寺の四天王像 石崎 達三 同 同

鎌倉大佛と日元貿易 森 克己 歴史地理 六七ノ三

岩倉大雲寺の石佛 佐々木利三 林 泉 二二

平安朝時代に於ける四天 廣瀬 直忍 四天王寺 二ノ九

王寺の佛像 同 同 同

推古彫刻の特異性に關す 石崎 達二 以可留我 一ノ一

る考察 同 同 同

法隆寺大講堂本尊と西園 松雨 學人 同 一ノ二

堂本尊 同 同 同

船大寺造像銘の研究 田中 重久 同 一ノ三

傳甲良豐後守宗廣の木像 田邊 泰 史蹟名勝天 一一ノ二

に就て 同 同 同

金剛寺の本尊に就て 服部清五郎 同 一一ノ二

建築及庭園

樂浪紋瓦紋 八百谷孝保 鴨臺史報 四

庭園常識 上、中、下 金井 紫雲 學校美術 一〇ノ九

茶庭より觀たる床の間 大西 政男 現代美術 三ノ一

住宅樣式の變遷と床の間 吉村 忠夫 同 同

日本建築の文法 津澤 眞弓 建築雜誌 六〇八

江戶幕府大棟梁甲良氏に 田邊 泰 同 六〇九

就て 同 同 同

郷土古建築調査報告 淺野 清 同 六〇九

名古屋市内の部 一、三 同 同 六一一

建築學會論文梗概 同 同 六一〇

虫害に對する木材保存 森 徹

法の研究 田邊 泰

崇源院靈勝所造營私考 大岡 實

淨土寺露滴菴 川上 邦基

九林阿彌陀堂に就て 足立 康 建築雜誌 六一一

法界寺阿彌陀堂に就て 同 同 同

隱岐の建築 藤島亥治郎 同 同

大阪南河内吉村邸の建築 政岡 基次 同 同

豐樂寺藥師堂に就て 川上 邦基 同 同

九林阿彌陀堂の平面に就て 足立 康 同 同

奈良に於ける校倉建築内 一樹悦三郎 同 同

の溫度 同 同 同

在信樂藤原盛成殿板敷復 關野 克 同 同

原考 同 同 同

神泉苑考 太田 靜六 同 同

數寄屋造と其の庭の研究 川上 邦基 建築世界 六二〇

に就て 同 同 同

粉河寺緣起繪卷に現れた 太田 靜六 同 同

る豪族の住宅 宇野 武文 同 同

茶室建築 一—六 川上 邦基 三〇ノ五

三德山三佛寺 同 同 同

石屋根の家 深山泰三郎 工 藝 三〇ノ五

後堀河帝皇后喜門院の御 藤田 一夫 考古學 七ノ一、二

寧觀要 同 同 同

一石輪塔—墓標資料 坪井 良平 同 同

天王寺の庚申塔 三輪善之助 同 同

大阪の庚申塔資料 藤澤 一夫 同 同

奈良時代の石燈籠 川勝政太郎 同 同

法隆寺金堂の臺殿と廻廊 杉山 信三 同 同

の合掌 同 同 同

飛鳥期瓦の再吟味 藤澤 一夫 同 同

營塚古墳の碑 足立 康 考古學雜誌 二六ノ一

鎌倉出土の菊花紋瓦製品 赤星 直忠 同 同

平壤附近出土の高勾麗の 笠原 烏丸 同 同

地に就て 同 同 同

延曆寺相輪檼の形式 足立 康 同 同

寶篋印塔に於ける關西形 川勝政太郎 同 同

式關東形式 相川 龍雄 同 同

上植木農寺考 同 同 同

二六五

寶篋印塔式の笠部手法に就て	川勝政太郎	考古學雜誌二六ノ九	清水寺塔頭蓮華院の茶室と庭園に就て	川上邦基	史蹟名勝と庭園に就て	一一ノ四	鳥居の新研究	喜田貞吉	文化	三ノ二
上野國に於ける足利時代石室に就て	相川龍雄	同	常陸笠間築城考	佐藤行哉	同	一一ノ五	大宰府鐵司の礎石と正倉院鏡山	澤島英太郎	史	一四
軒瓦の名跡に就て	足立康	二六ノ一二	文永寺庫裡の庭	川上邦基	同	一一ノ六	遠州の茶室	安倍能成	史	七ノ一
「禁裏實寶」の石塔に就て	秋山吉次郎	同	大原慶寺塔址の指定に至るまで	川勝政太郎	同	同	秘苑の印象	澤島英太郎	同	七ノ春
桂宮と桂離宮の庭園に就て	外山英策	華五四三	藤原京擴張説	足立康	同	一一ノ七	足利時代に於ける建築趣味	今村龍一	雲	一八
藤原宮に就て	足立康	五四四	藤原京移轉説に就て	喜田貞吉	同	一一ノ八	(日本のなるもの)	五十嵐賢隆	蒙	一七ノ五
法界寺の光堂	同	史迹と美術七ノ四	再び喜田博士の藤原宮説に就て	足立康	同	一一ノ九	鐵山領龍首山及び圓通寺白塔の銅碑について	佐谷良造	大和志	三ノ五
朝鮮古建築雜信 一	杉山信三	同	藤原京と藤原宮との事に就て	喜田貞吉	同	一一ノ一〇	吉野群山記と名山圖誌	足立康	同	三ノ七
藤原山清平寺	川勝政太郎	同	三たび喜田博士の藤原宮説に就て	足立康	同	一一ノ一二	藤原京に關する新説にて	田村吉永	同	同
信州別所の建築、石塔	竹内秀雄	七ノ五	明確に知られてゐない常陸の中郡城址	中村寶水	同	一一ノ一二	余の藤原京の研究に就て	足立康	同	三ノ八
北野石塔考	中野楚溪	同	四天王寺の門を見る四一六吉村	孝義	四天王寺	一一ノ四、七、	再び田村氏の藤原京説に就て	田村吉永	同	三ノ一〇
古瓦新講 一―六	大脇正一	七ノ六―八	嵐院尼園參詣記	天沼俊一	同	二ノ七	藤原京に就て	新井和臣	同	同
印度に於ける石燈の數例	大昔岩治	同	塔婆史上より見たる四天王寺五重塔 一―三	足立康	同	二ノ七、八	法隆寺講堂復原問題に關しての私見	福井堅二	同	三ノ一二
相國寺塔と北山大塔	今村龍一	同	祇園精舍址と舍衛城址	天沼俊一	同	二ノ八	不遇寺多寶塔復原考	日色四郎	同	同
「相國寺大塔」と「北山大塔」との關係	足立康	七ノ八	涅槃塔と茶毗塔	同	同	二ノ九	舊極版と藤原宮	喜田貞吉	夢	一五
周防敷山城址と國分寺	太田古朴	同	印度佛塔巡禮記 二	同	同	二ノ一一	朝鮮都制と藤原京	齊藤忠	同	同
朝鮮古建築雜信 二	天磨山觀音寺 附 大興寺 杉山信三	七ノ九、一〇、一一	春日神社の創立と春日造の創始	福山敏男	神社協會雜誌	三ノ六	藤原京と大宰府都城	長崎二三	歷史公論	五ノ一
秀頼の社寺建築再興	川勝政太郎	七ノ一一	慶州石窟庵の布置構造に就て寺田春一	桑原雙蛙	圖畫と手工二〇ノ四	六ノ六、九、	桃山時代の建築	服部清五郎	同	五ノ二
八坂神社樓門の再建年代に就て	福山敏男	七ノ一二	不昧公大崎茶屋の圖面	同	同	一一	千葉市塔攷	龍居松之助	同	五ノ一〇
「室生寺の建立」に就て	同	同	實相寺と百丈庵	藤島亥治郎	中央美術	四〇	豐太閣と庭園	鳥羽正雄	同	同
姫路地方發見の文字瓦に就て	島田清	同	塔婆巡禮 附古塔婆年表	棚田曉山	同	三八	豐臣秀吉と城廓	藤田寛雅	歷史地理	六七ノ一
曼殊院の書院及茶室に就て	澤島英太郎	七ノ一三	松島安田翁の深秀園	同	同	一一ノ九	四天王寺西門念佛堂攷	足立康	同	六七ノ六
寶篋印塔の形式に就て	杉山信三	同	大震災に亡びた名園の一市島	春城	影	一一ノ九	平城京東西門の設置年代	重森三玲	林	一三、一四
志賀寺の「内塔」に就て	足立康	同	北支出張に依りて得たる建築的小問題數種	飯田須賀新	東方學報	東京六別篇	岡山縣の石造美術	川勝政太郎	同	一三、一六
禪院庭園	中野楚溪	同	北鎮廟の建築	竹島卓一	同	同	石組の築造と觀賞	重森三玲	同	三、七、八
川越東照宮建築考	田邊泰	史蹟名勝と庭園に就て	支那五山建築に現れたる支那建築手法	飯田須賀新	同	東京六	(庭園講座)	清水翠	同	一三、一四
河村城址の考究	石野英	一一ノ二	建長寺華嚴塔に就て	足立康	東洋美術	二三	庭園文獻資料集成	川勝政太郎	同	一四、一五
淺草東照宮創建年代私考	田邊泰	同	東大寺法華堂に關する問題	堀江繁太郎	同	一一ノ五	建仁寺の諸庭園に就て	清水卓夫	同	同
圓覺寺の華嚴塔	足立康	一一ノ三	史蹟「下鳥渡供養石塔」に就て	山下雄美	育	一一ノ六	作庭記解説	重森三玲	同	同
大安寺及び元興寺の平城京への移建時代	福山敏男	同	國寶利休の溝治庵	同	同	同	(庭園講座)	同	同	同

四天王寺五重塔基壇下に於ける須彌山の遺構	出口 常順 林 泉	一五
日本庭園に於ける須彌山石組に就て	重森 三玲 同	同
堺の名園と名席	重森 三玲 同	一六
庭園雜感 下	井川 定慶 同	同
鹿苑寺の林泉	小宮山修康 同	一七
石燈籠觀賞の藝 四一七	川勝政太郎 同	一七、一八
(庭園講座)	重森 三玲 同	二一、二二
坂本の庭園	清水 卓夫 同	一八
石鳥居に現れたる刻銘に就て 上、下	吉村 孝義 同	一八、一九
藤原時代に於ける蓮葉園	印牧 義雄 同	一九
永井信濃守尙政と石造美術川勝政太郎	清水 卓夫 同	同
三成就院庭園に就て	佐々木利三 同	同
吉野山の石造美術	堀川辰之助 同	二〇
蓮葉石組の一つの見方	清水 卓夫 同	同
水と淨土園	小宮山修康 同	同
私の見た實相院の庭園	重森 三玲 同	二二
中井氏居然亭庭園と平井氏	小宮山修康 同	二二
靈鷲山莊庭園	重森 三玲 同	二二
妙法院の三庭園	小宮山修康 同	二二
慈光院の庭園及び茶席	重森 三玲 同	二三
楊谷寺庭園を見て	清水 卓夫 同	二四

工藝

髹漆重要美術品目録	岡田 謙 漆と工藝 四二一
鍍金名器錄	吉野 富雄 同 四二二
鍍金經箱銘文に就て	岡田 謙 同 同
髹漆國寶目録	郷大 貞治 同 四二三
南蠻文様の蒔絵品に就て	吉野 富雄 同 四二四、四三六、四三九
仁清と京焼	脇本十九郎 恩賜京都博 物館講演集 一三
仰留	水谷 良一 瓜 茄 二
鬚髹裂二個	宗 悦 工 藝 六一
魚襖紗	濱田 庄司 同 同
和染二つ	同 同 同

古美術定期刊行物所載文獻

三つの染物に題す	河井寛次郎 工 藝 六一
染物三題	芹澤 銈介 同 同
波佐見雜感	今西 洋 同 六二
くらはんか雜話	水谷 良一 同 同
植物染料	橘島 直道 同 六四
徳川時代に於ける染色文獻解題	同 同 同
家傳紺屋獨案内百品傳	同 同 同
繪漆の傳統	水谷 良一 同 六六
高麗茶碗と大和茶碗	柳 宗悦 同 六七
光悅論	同 同 同
多鈕文鏡の一新例	梅原 末治 考 古 學 七ノ三
その後の金海出土品	榎本龜次郎 同 同
樂浪出土在銘漆器の一二に就て	同 同 同
漢以前の古鏡	同 同 同
美濃國眞禪院の鐘	坪井 良平 同 七ノ四増刊
朝鮮發見銅鐸の集成	榎本 龜生 同 七ノ五
新羅金製耳飾最近の出土例に就て	有光 敦一 同 七ノ六
青銅柄付鐵劍及青銅製飾柄頭に就て	榎本 龜生 同 七ノ九
越後馬高遺跡と滑車形耳飾近藤勲次郎	近藤 萬三郎 同 七ノ一〇
石造弘法國師實相塔朝鮮の石造美術資料	榎本 龜生 同 同
懸佛記銘年表	鹽田 敏郎 考 古 學 雜誌 二六ノ五
支那古代の簪制に就て	榎本 龜生 同 二六ノ六
兵庫鐳大刀	末永 雅雄 同 同
夜光の璧に就て	原田 淑人 同 二六ノ七
緩遠地方出土古銅鏡の二に就きて	江上 波夫 同 同
「雙脚」足金物に就て	神林 淳雄 同 同
頭椎大刀に就て一、二	後藤 守一 同 二六ノ八、一二
蛇行狀鐵器	末永 雅雄 同 二六ノ九
中亞發見の指輪	森 修 同 同
平泉中尊寺梵鐘考	大島延次郎 同 同
水神社佛影鏡考	武藤 一郎 同 同
古代支那動物文様特に三代古銅器文様の遡源と其意義	中村 清見 考 古 學 論叢 一 二六ノ一二
南蠻大圖蒔繪硯箱解金澤石黒傳六氏藏	國 華 五四三
茶器としての茶碗に就て	奥田 誠一 同 五四六
黒漆螺鈿櫻花文鞍解	同 同 五五〇
廣島侯爵淺野長勳氏藏	同 同 五五一
河南安陽の出土と推定せられる二個の彝器	梅原 末治 同 同
天壽國繪帳銘成立私考	宮田 俊彦 史 學 雜誌 四七ノ七
光悅の美術と其家族的背景西郷 一三	史 蹟 と 古 美 術 一六ノ一
光悅と灰屋紹益	江馬 務 同 同
本阿彌光悅	岩見 護 同 同
光悅の下繪藝術	木村捷三郎 同 同
鞍馬寺の銅製燈籠	同 同 同
古鏡研究の藝二〇一二五	佐藤 虎雄 史 迹 と 美 術 七ノ三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
土版塔器に就て	太田 陸郎 同 七ノ一〇
國寶菅田天神社藏小機威鎧に就て	關 保之助 同 同
房總金石志墓 五一一三	篠崎 四郎 史 蹟 名 勝 天 一一ノ三一
支那の古銅器	和辻 哲郎 思 想 一七一
吉岡家の歴代	桑原半次郎 書 畫 骨 董 三三二、三三三、三三四、三三五、三三六、三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五十、三五一、三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七九、三八〇、三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇
名陶工長次郎一七一九	平木 清光 同 同
陶界飛塵 上、中	鹽田 力藏 同 同
彫金工の順位 七一	桑原 雙蛙 同 同
蟲明鏡に就て	吉備 外史 同 同
小杉燒盛衰記 下	郷倉 千親 茶 わ ん 六ノ一
崎陽館山機に就て	園登 貞治 同 同
日本の美術工藝を語る	アルネスト ハーリルト 同 同
韓羅起原考一三、陶片の抜き書七一九	ラルフワルド 故 原 文 次 郎 著 同 六ノ一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
周防長門の陶窯考	加藤 藤雄 同 同
橘南銘と苗代川陶庵燒	高橋 青丘子 同 同
陶片余話 二	山田 萬吉郎 同 同
肩衝茶人の解	加藤 雲山 同 同
西の九御庭燒	石村賢次郎 同 同
萬曆銘三島墓誌	山田 萬吉郎 同 同

炸灰について

太田 能壽

二ノ四

越州窯青磁の源流

神谷 泳山

同

樂茶鉢について

樂吉左衛門

二ノ五

南蠻焼印書

村田 泥庵

同

羽前千歳窯の沿革

西山 寒風子

同

備前焼と伊部焼

岡 長平

二ノ六

炸灰文書

前田 幾千代

同

薩摩焼と島津義弘

鈴木 經緯

同

粉引と務安

小田 三郎

同

尾張瀬戸地名考

寺内 半月

二ノ七

佐渡陶窯考

大平 逸人

同

樂燒與説文獻

堤 不耳庵

同

備前虫明焼の研究

高草 藍山

二ノ八

加賀樂焼山本與興に就て

宮本 謙吾

同

先祖抄 一—四

宮島 榮

二ノ八—二

津輕の陶磁文獻に就て

香取 秀真

二ノ九

舊津輕地方の古陶窯研究

岩淵 清江

二ノ九、一〇

永樂銘印起原考

石村 賢次郎

二ノ九

炸灰小考

寺内 半月

同

善好茶碗に就て

滿岡 忠成

二ノ一〇

古九谷の看方

彩雅房主人

同

井戸茶碗は朝鮮の何處

小田 三郎

同

紀伊古陶磁概説

石村 賢次郎

二ノ一一

紀州焼についての感想

鈴木 佐右衛門

同

茶陶雜記 隨想錄 二

吉田 堯文

同

備前虫明焼研究補遺

高草 平助

同

古代焼と加藤風庵

宮本 謙吾

同

奈良の鑄物師久怡について

吉永 大和志

三ノ一二

新山發掘のT・L・V式鏡に

近藤 英雄

一ノ一四

於ける擬銘帶文攷釋

香取 秀真

五ノ一

日本工藝史概観

豊田 武

六七ノ一、

雑

中世の鑄物業 上、下

水野 駒雄

三ノ七八、

日本文學と美術との交流

現代美術

一〇—一

鎌倉時代の武裝美に就いて服部 有恒 現代美術 三ノ七

繪巻物に見る平安朝の 吉村 忠夫 同

所謂十二單衣 野間 清六 考古學雜誌 二六ノ四

「古代佛像の題學的研 究」に就いて 長尾 雨山 書 道 五ノ一二

文房四寶發達史 神谷宗湛日記 坤一—二 茶わん 六ノ一一〇

組紐の話 吉村 忠夫 同 六ノ五

鎧の美について 前田 青郎 塔 影 一二ノ五

美術擁護者としての白川 添田 達雄 同 一二ノ一二

樂翁公 附谷本教、谷文晁、田善、白雲等の事 江上 波夫 東京六

漢代に於ける連本文とそ の西方への流轉 後藤朝太郎 南畫鑑賞 五ノ三

古視繪畫談 淺草寺藏國寶元板一切經 上村 眞肇 ビタカ 史 七ノ一、秋、夏

「宗藩日記」を讀む 正木直彦、相 瓶 見香雨、堀口 拾己、西川一 草亭、秋山光 夫 肥後和男 七ノ一

有樂流祕書 神谷宗湛 肥後 和男 同 七ノ夏

桃山時代の藝術に現れた藤栗野 秀穂 同 七ノ秋

我が國初期の活字版と勅版森島彦三郎 大和志 三ノ七

ぐりて 宋元板藏經印造の二新史料岩井 大慈 歴史教育 一一ノ一二

原始藝術論 美術史上の豐太閤 玉生 道經 歴史公論 五ノ二

齋藤 隆三 同 五ノ一〇

樂浪封泥續攷 藤田 亮策 京城帝國大學創立史學編 十周年記念論文集 史學編

美濃の彌生式文化に就て 吉田 富夫 考古學 七ノ一、二

須和田遺跡に於ける考古學 的調査の重要意義に就て 杉原 莊介 同 同

伯耆上原古墳に於ける舍 口實の新例 倉光 清六 同 七ノ四

其他

考古學・金石關係

墓誌銅版を出した美努岡 森本 六爾 考古學 七ノ五

萬の墳墓 火葬墳墓に於ける一二の 島本 一同 同

夥伴遺物 房總の奈良時代遺物 三輪善之助 同 同

漢代朝鮮の文物に就ての 梅原 末治 同 七ノ六

一考察 金海會館里貝塚の銅製品 榎本 龜生 同 同

に就て 新羅の石井 齊藤 忠 同 同

信濃の彌生式土器と彌生 式土器 藤森 榮一 同 七ノ七

北信濃栗林の彌生式土器 神田 五六 同 同

南信濃庄之畑の土器 藤森 榮一 同 同

三河國彌生式文化に就て 安房に於ける彌生式遺跡 吉田 富夫 同 同

に就て 杉原 莊介 同 同

下野、野澤遺跡及び陸前、 同 同 七ノ八

土器の位置に就て 同 同 同

安藝沼田川沿岸の彌生式 遺跡 加藤 貞雄 同 同

豐田郡沼田西村松江遺跡 古式土器の一形式として 赤星 直忠 同 七ノ九

の三戸式土器に就て 靜岡縣下に於ける細線紋指加藤 朋秀 同 同

痕澤手土器と其伴出石器 藤澤 長介 同 同

藤原國伊佐郡日勝山土器 木村 幹夫 同 同

に就て 八ヶ岳山麓尖石遺蹟發掘 宮坂 英式 同 七ノ一〇

把手 伊豆國發見の土偶と顔面 江藤 千萬樹 同 同

鎌倉鐘の功徳文—下總大慈恩寺 同 同 同

と上總報恩寺の鐘銘に就て篠崎 四郎 同 二六ノ一

信濃宮川村の一古墳 宮崎 紇 考古學雜誌 二六ノ一

和同開珎神功開寶等出土 同 同 同

掛甲と短甲 支那先史土器の一例 喜田 貞吉 同 二六ノ二

尖底甕に就て落と繩文技術 水野 清一 同 二六ノ三

周防御堀出土の彌生式遺 物石蓋土壙 山本 博 同 同

公州に於ける百濟古墳 七七八 經部 慈恩 同 二六ノ三、

砂丘を利用したる古墳例	石野 瑛	考古學雜誌	二六ノ四
播磨神野村二塚古墳	太田 陸郎	同	同
遠江國前方後圓墳地名表	西郷 藤八	同	同
下野山邊村八幡古墳發掘	森 貞成	同	二六ノ七
北九州の縄文土器	田中 幸夫	同	同
史蹟保存と考古學	黒板 勝美	同	二六ノ八
周防御掘出土の彌生式遺物山本	博 同	同	同
甕の遺蹟	吉野 益見	同	二六ノ一〇
佛領印度支那東京平野の古文化	小林 知生	同	二六ノ一一
下總國香取郡米澤村及其附近の遺蹟並に遺物に就て	鹽原 壽一	同	同
西南日本縄文土器の研究一三	森 定男	考古學雜誌	一
北海道の突嶺土器	八幡 一郎	同	二
近畿地方の縄文土器	三森 定男	同	同
新羅火葬骨壺考	齋藤 忠	同	同
所謂袈裟衣着用植輪に就て	後藤 守一	同	三
卜辭復合の一新例	郭 沫若	同	同
陸前船入島貝塚の研究	角田 文衛	同	同
飛彈の纖維土器	赤木 清	同	同
遠江現貝塚出土土器に就て	三森 定男	同	同
河南安陽と金村の古墓	梅原 末治	史學雜誌	四七ノ九
傳中上有漢に於ける石匠	川勝政太郎	史蹟と美術	七ノ八
井野行恒の遺品	史蹟と美術	七ノ八	同
吳楚齊赤堇 一一三	桂下學人	書 道	五ノ四六、
滿洲に於ける漢代遺跡	中川 徳治	東方學報	東京六
金上京遺址の一問題	村田 治郎	滿 蒙	一七ノ一
考古二十年	島田 貞彦	同	同
國立博物館の「北魏墓誌銘」就て	園田 一重	同	一七ノ一二
大和の墓標	坪井 良平	大和志	三ノ二
奈良石橋文庫の金石文記録	高田 十郎	同	同
大和に於ける形象埴輪出土一覽表	島本 一	同	三ノ三
保井氏所藏の金石文	高田 十郎	同	三ノ四
奈良市中に散在する古金	同	同	三ノ六

佛教及歴史關係

大和に残れる吉野朝時代の紀年銘上、中、下	高田 十郎	大和志	三ノ七八、
大和磯城郡多村矢の一古墳島本	一 同	同	三ノ八
大和櫻井町島見山麓發見の形象埴輪について	同	同	三ノ九
近頃目についたる二三の金石文	樋口 清之	同	三ノ一〇
新發見の縄紋式土器出土遺蹟一	大和下田村・狐井	同	三ノ一一
土製品に對する製作者の問題	島本 一	同	三ノ一二
殷虛文化私考	駒井 和愛	歴史教育	一一ノ一
緩遠地方旅行略記	江上 波夫	歴史學研究	六ノ一
千葉市金石遺物攷	服部清五郎	歴史公論	五ノ四
勝臺經講話 一一三	奥田 慈應	以可留我	一ノ一三
聖德太子と本地垂迹思想	小倉 豊文	同	一ノ一
飛鳥時代文化の推移に就て 一一三	金原 省吾	同	一ノ一三
遠東大師に就ての管見	霄 益道	同	一ノ一
聖德太子と秦河勝	肥後 和男	同	一ノ二
明必律師の正法律復興運動に就て	井上 慶覺	同	同
飛鳥時代に於ける大陸系の舍利安置法に就て	小杉 一雄	同	一ノ三
南蠻文化の傳播と其保護者近藤市太郎	漆と工藝	同	四二四
江戸時代の職人の組織に就て 一一三	遠藤 元男	工 藝	六一一六三
近世職人の生活 一一三	同	同	六五、六七、
中世前期時給師の生活姿相同に於ける	同	同	六六
四圓寺法性法成寺の研究	瀧 善成	史 苑	一〇ノ三
聖德太子傳古今目錄抄の基礎的研究 一一三	萩野三七彦	史學雜誌	四七ノ五、
漢代の將作大匠と其の設徒漢口	重國 同	史蹟と古美術	四七ノ一二
覺鑒上人	石橋 達二	同	一六ノ三
安土城考	木村捷三郎	史蹟と古美術	一六ノ四
南朝と鞍馬寺	栗野 秀雄	同	一六ノ五
貴船神社に就て	同	同	同
男山八幡宮に關する考察	同	同	一七ノ一
文觀弘真と淨瑠璃寺	同	同	一七ノ二
平安朝に於ける淨土信仰	岩見 護	同	同
雲龍院	栗野 秀雄	同	一七ノ三
近世に於る觀音巡禮	岩見 護	同	同
即成院考	木村捷三郎	同	同
長命寺の創立と信仰	同	同	一七ノ四
難波遷都と鼠の話	足立 康	史蹟と美術	七ノ二
野寺一名常住寺草創に就て中郷	欽夫 同	同	七ノ三
與羽地方に於る蝦夷の文化と藤原氏の文化	喜田 貞吉	同	七ノ六
古代の但馬	魚澄惣五郎	同	七ノ七
民家に現はれた生活様式の變遷	藤田 元春	思想	一六九
後村上天皇と四天王寺	小笠原白也	四天王寺	二ノ一、二、
日唐外交史上より見たる四天王寺 二一四	八木 博	同	二ノ一、四、
四天王寺誌史料集成	碓 慈弘	同	二ノ一、五、
聖德太子と四天王寺	黒板 勝美	同	二ノ四、五
鎌倉期の難波大寺を管見	中谷 政一	同	二ノ七
嵯峨天皇と平安文化	黒板 勝美	書 道	五ノ六
豊臣秀吉と茶の湯文化は南より	今井林太郎	茶わん	六ノ四
指定せられたる佛教教育機關の史蹟	上田 泰輔	陶 磁	八ノ四
佛教教育機關指定史蹟論	古谷 清	東方學報	東京六
考補遺	同	同	同七
晉末宋初の僧徒智猛と曇無讖の行記に就て 一一五	小野 玄妙	ヒタカ	四ノ五、七、
室町時代信仰の一断面板碑に現れた民間信仰に就て	服部清五郎	佛 教	二ノ二
飛鳥時代研究の一方法	東伏見邦英	寶 雲	一八
般若尼寺の研究	田中 重久	大和志	三ノ四
日本の佛教	橋本 凝胤	同	三ノ五

重源上人没年に關する東大寺内の説	黒田 昇義	大和志	三ノ二一
藤原京再考	喜田 貞吉	夢 敷	一五
國史上に於ける藤原京	小酒井儀三	同	同
萬葉集に見える藤原京	岩城準太郎	同	同
藤原京時代の文化	栗野 秀穂	同	同
明日香清御原宮と藤原宮	大屋 徳城	同	同
兩宮時代の佛教史的意義	彌富破摩雄	同	同
國文學史上より見たる藤原京	同	同	同
藤原京に關する論文抄	崎山卯左衛門	同	同
聖德太子の精神信念	常盤 大定	同	一六
四天王思愆の起源と印度の四天王	小野 玄妙	同	同
佛教々環史上より見たる四天王の一考察	橋本 凝胤	同	同
武家貴族の歌合 一	秋山 謙藏	歴史教育	二ノ一一
畝米人の支那學研究文獻目錄 七	青木富太郎	歴史學研究	六ノ一
中世職人の座の獨占型態	遠藤 元男	同	六ノ八
興福寺をめぐる建築業者の座	豊田 武	同	六ノ一〇
奈良朝に於る手工業に就て	遠藤 元男	史 潮	六ノ二
豊臣秀吉と大阪築城	高柳 光壽	歴史公論	五ノ一〇
豊太閤と桃山時代の文化	渡邊 世祐	同	五ノ一一
茶祖榮西禪師	中野 楚溪	林 泉	一三
須彌山に就て	吉祥 眞雄	同	一五

古美術單行圖書文獻

總說・綜錄

飛鳥文化(飛鳥文化講演集) 朝日新聞社 大阪朝日新聞社

飛鳥文化大觀 同 同

飛鳥文化展覽會目錄と年譜 同 同

恩賜京都博物館講演集 恩賜京都博物館 恩賜京都博物館

開館名寶展覽圖錄 大阪市立 京都便利堂

記念名寶展覽圖錄 美術資料 金井紫雲 京都芸興堂

藝術資料 一ノ一 櫻 一ノ二 牡丹、芍藥、藤

一ノ三 燕子花、花菖蒲、卯の花

一ノ四 柳、薔薇 一ノ五 竹

一ノ六 蓮、睡蓮 一ノ七 秋草

一ノ八 菊 一ノ九 紅葉

國寶略説 昭和十一年度 文部省宗教局 大阪 香山

古美術寫真集 一 寶山寺五大明王像 文部省宗教局 大阪 香山

七大寺巡禮私記(複製)解説付 船養書刊行會 船養書刊行會

(船養刊第四) 同 同

國七大寺日記(複製)解説付 同 同

(船養刊第五) 同 同

重要美術品認定物件目錄一 文部省宗教局 文部省宗教局

重要美術品目錄 華頂大鑑 章華社

知恩院名寶集(華頂大鑑八) 刊行會 京都山本湖

光城の儀衛と表飾 田中萬宗 卍宗藝術事務所

帝室博物館圖錄 四ノ一〇 帝室博物館 同

帝室博物館年報 昭和十年度 同 同

東西美術の知識 齋川梧堂 大阪昭和出版

東洋美術史 一氏 美良綜合美術研究所

日本美術史資料 小川 晴陽 奈良飛鳥園

平安時代後期 下 鎌倉時代後期 上、下

室町時代 桃山時代

美術思想(緒論) 田中 豐藏 岩波書店

秘寶珍奇圖鑑 東洋文化協會 雄山閣

佛教考古學講座 一―八 逸見 梅榮 三省堂

佛教美術 青年佛教叢書七

桃山美術工藝展覽圖錄昭和十年大阪役所 大阪役所

時代美術工藝展覽圖錄昭和十年大阪役所 大阪役所

繪畫

浮世繪大觀 小泉 準一 一心社

浮世繪肉筆大觀 一 上村 益郎 丹綠畫堂

江戸版畫名作稀版 同 同

應舉名畫譜 恩賜京都 宮真出版部

應舉洋風畫集 外山 卯三郎 マタン社

全芥子園畫傳 小杉放庵註解 フトリエ社

譯芥子園畫傳 公田連太郎譯

五 摹倣名家畫譜 九 菊譜 森田但山譯 三笠書房

芥子園畫傳 下 添田 達嶺 雄山閣

畫人宮本武藏 內田 六郎 靜岡紅白書樓

畫僧高城秋月 佐多 芳久 鹿兒島高城村

花鳥研究 金井 紫雲 京都芸興堂

歐舞伎繪 二 三宅 鳳白 同

源氏物語繪卷一(繪卷物叢書) 內藤 藤一郎 同

源氏物語繪卷 德川美術館 名古屋德川

陸能源氏物語繪卷 美術館

古畫禽獸抄

小禽篇 鷺鷥篇

水禽魚貝篇 動物篇

猛禽雜鳥篇 長尾篇

金刀比羅繪馬鑑 二

時代屏風名畫集 二―五

十竹齋書畫譜

果譜上、下 石譜上、下 羽毛上、下 書畫上

支那南畫大成 興文社 興文社

三 梅花、水仙 四 花卉、樹石

五 花卉、蔬果

六 花卉、翎毛、虫魚

七 道釋人物、士女、動物

八 山水扇面

九 山水軸 一〇 山水軸二

一一 山水 一二 山水二

一三 大版山水 一五 長卷一解説三添

續一 明清十一家、山水集錦

續二 清十六家、山水集錦

續三 揮壽平畫譜之、

吳俊卿花卉集錦附張賢教授畫稿

支那名畫寶鑑 原田謹次郎 大塚巧藝社

畫雲秋山行旅(複製) 審美書院

從畫秋山行旅(複製) 秋山 光夫

沈南蘋動植帖 野口 駿尾 京都審美書院

仙居和尚 小島 文鼎 福岡聖福寺

田能村竹田全書 文集、遺著 木崎 好尙 帝國地方會

東洋名畫類聚 一ノ一 吉浦 祐全 東洋名畫類

叢刊 豐明繪草子(複製) 育德財團 育德財團

附田中一松解説 源 豐宗 京都芸興堂

南禪寺花鳥扇面畫集 上 大阪役所 京都便利堂

南禪屏風展覽圖錄 大阪役所 京都便利堂

日本繪畫史讀本
日本文化小叢
一五 日本畫の本質
寶鏡寺金碧貼付
中野 健彌
京都市中野藝術院
藝鑑繪(複製)
名作屏風繪卷展覽會圖錄一—三帝室博物館
恩賜京都帝國博物館
京都本願寺
名山時代障屏畫集
博物館
京都芸興堂
日本
風井金之助
國民新聞社
名寶桃山屏風大觀
木村 拾三
巧藝社
盲文畫話(複製)

書 蹟

赤城和漢名蹟叢書
一 隆寶郎書中阿含經
王羲之書蘭亭序
弘法大師書請來目錄上
傳教大師書天臺法華宗年分緣起上、下
嵯峨天皇宸翰李端詩
智永書真草千字文上下
褚遂良書孟法師碑
加越能古俳書大觀 上、下
日置 謙
金澤石川縣圖書館
興文社
興文社
吉岡 貞雄
赤城出版社
王羲之書館本十七帖
弘法大師書風信帖
褚遂良書雁塔聖教序上
顏真卿書建中告身帖
傳教大師書伊都內親王願文
趙子昂書行書千字文

假名名跡集
傳藤原行成書御物と漢朗詠集
傳紀貫之書桂宮萬葉集寸松庵色紙
傳小野道風書經色紙、秋萩帖、本阿彌切
本願寺三十六人集抄
傳藤原佐理書簡切下
傳藤原行成書關戸本古今集
傳源俊賴書元永本古今集
かな名蹟全集
刊行會
武田墨彩堂
傳藤原行成書と漢朗詠集二
傳小野道風書秋萩帖

傳源俊賴書元永本古今集 乾
傳藤原行成書關戸本古今集 人
傳藤原行成書と漢朗詠集 三
傳紀貫之書高野切 第二種
傳藤原公任書金澤本萬葉集 地
傳藤原行成書伊豫切と漢朗詠集上
傳藤原佐理書簡切 四
傳藤原行成書と漢朗詠集 四
傳紀貫之書 高野切第三種丙
傳藤原行成書升色紙五首一紙
卷經閣後撰集(複製)
嵯峨天皇宸翰李端詩殘卷
支那書道年表
卷經閣拾遺集(複製)
眞蹟選集(複製)
三 嵯峨天皇宸翰李端詩殘卷
四 劉石庵書東方朔畫
大雅堂草書千字文(複製) 一—四
展大古法帖
興福寺斷碑
雁塔聖教序 上、下
皇市府君碑 上、下
智永千字文 上
日本名蹟全集
傳教大師筆寫金剛目錄、
請來目錄一
橘逸勢筆伊都內親王願文
藤原行成筆白樂天詩卷
傳弘法大師筆新撰類林抄
昭和傳法帖大觀(複製)
新選
一ノ一一 王羲之趙子昂書
洛神賦二種
二ノ一 隋蘇孝慈墓誌銘
育德財團
育德財團
赤城出版社
育德財團
育德財團
赤城出版社
京都山本文華堂
育德財團
赤城出版社
千葉庄一郎
中央書道協會
中根佐一郎
蘇使君之墓誌銘下
孟法師碑銘
孔子廟堂碑 上、下
日本名蹟全集
武田墨彩堂
刊行會編
聖武天皇宸翰寶曆經
光明皇后御書杜家立成
雜書要略
臨關天皇宸翰白樂天詩卷
寧樂書道會
奈良寧樂書道會
一ノ一二 李懷琳絕交書
附萬歲通天進帖抄
趙子昂書趙松雪蘭亭十三跋

彫 刻

二ノ三、四 安氏刻原拓書譜 二ノ五 虞恭公盤公碑
上、下
二ノ六 遼惠堂本靈飛經 二ノ七 漢曹全碑
法帖書論集 石鼓文詳說上、下 中村不折
國寶北山抄紙背草假名消息
解說釋文付
名碑帖選
王羲之全集 全
北魏集 一
唐太宗全集 全
蘭亭集 全
王羲之全集 二、三、四
歷代帝王名 一、二
臣法帖集 一、二
行成卿 倭漢朗詠抄
眞蹟
蘇東坡集 全
西東書房
考古學會
考古學會
奈良帝國博物館
奈良帝國博物館
奈良帝國博物館
岩波書店
京都スヰカケ出版部
美術懇話會
石田 茂作
大塚巧藝社
中野 楚溪
昭 森 社
伊東忠太建築文獻編輯會
見學紀行
伊東 忠太
啓 明 會
飛鳥時代寺院址の研究
圖鑑近江の林泉
伊東忠太建築文獻
東洋建築の研究 上
日本建築の研究 下
建築に現はれたる日本精神
(啓明會第六十四回講演集)

建 築 及 庭 園

飛鳥時代寺院址の研究
圖鑑近江の林泉
伊東忠太建築文獻
東洋建築の研究 上
日本建築の研究 下
建築に現はれたる日本精神
(啓明會第六十四回講演集)

國寶建造物

國寶建造物
刊行會

國寶建造物
刊行會

三ノ二 唐招提寺金堂唐招提寺寶藏及經

三ノ三 淨土寺伽藍

三ノ四 本願寺黑書院及傳廊

三ノ五 室生寺金堂及塔婆

三ノ六 嚴島神社

四天王寺圖錄

伽藍編、古瓦編

數寄屋聚成

三 數寄屋建築史圖聚德川時代後期

五 數寄屋名席聚 名流茶祖好

七 同 名流茶匠好

八 數寄屋名圖聚

庭園圖集

庭園と日本精神

東洋建築史參考圖集

日光東照宮寫真帖

校外教 日本建築史

授資料 日本建築史

日本城郭考

日本城郭史

日本庭園史圖鑑

六 桃山時代二

一一 江戸時代初期二

藤原宮跡傳説地高殿の調査

日本古文化研究所報告二

八 江戸時代初期一

一一 江戸時代中期一

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

日本古文化研究所

工藝百科大圖鑑

國府田範造

工藝百科大圖鑑刊行會

古九谷の再検討

古骨部鑑研究

庶敷節次第

信樂やき

時代型拾遺 一、二

時代型名品集 七、一〇

志野黃瀬戸織部

正倉院御物圖錄 九

戰國式銅器の研究 上

東方文化學院京都研究所報告第七冊

陶器講座 八、一六

陶器大辭典 四、一六

茶道全集 茶室篇、器物篇

茶碗鑑賞の書

朝鮮陶磁鑑賞

朝鮮陶磁史文獻考

帝室博物館學報 昭和十年

第七冊 帝室博物館藏釋尊圖篇

泥中庵今昔閑話

日本工藝沿革史

日本の根付

能佳雅美 七、一九

能裝束名品集

肥前陶磁史考

本邦やきもの盃臺小誌

名物錦繡類纂 七、一九

増補やきもの讀本

小野賢一郎

明石 染人

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

實 雲 會

有職玩具 五

聚 集 會

京都芸興堂

其他

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

香川縣史蹟名勝天然記念物調査報告七

福岡縣史蹟名勝天然記念物 調査報告 一〇	福岡縣 福 岡 縣
別當記（複製）（船叢刊第二）	船叢書刊行會
兵庫縣史蹟名勝天然記念 物調査報告 一三	兵 庫 縣 兵 庫 縣
滿洲國安東 高句麗の遺蹟	池內宏 述 鶴 稻 孫 譯 新 京 滿 日 文 化 協 會
省輯安縣 高句麗の遺蹟	鳥居 龍藏 岡 倉 書 房
滿蒙其他の思ひ出	
三重縣に於ける主務大臣指定 史蹟名勝天然記念物	三 重 縣 三 重 縣
武相叢書	
第三篇考古集錄第三 考古篇相模中部以西踏査雜記 相模（大住、餘綾）國 府趾研究	野 茨 機 濱 武 相 考 古 會
樂浪遺蹟古蹟 調査報告昭和 十年度	朝鮮古蹟研究 會 京 城 朝 鮮 古 蹟 研 究 會
歷史學年報 一	歷史學研究會 四 海 書 房
和歌山縣史蹟名勝天然記念物 調査報告 一五	和歌山縣 和歌山縣

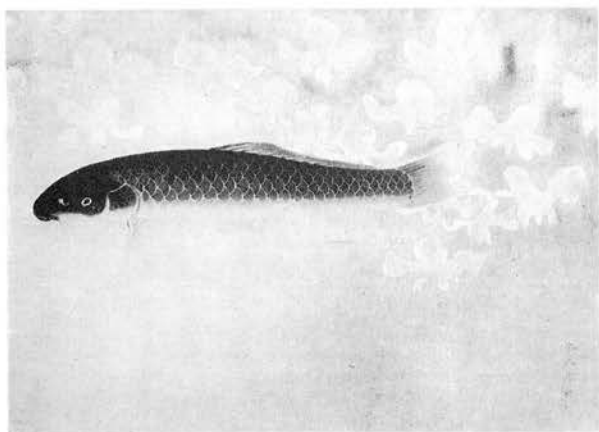
插

圖

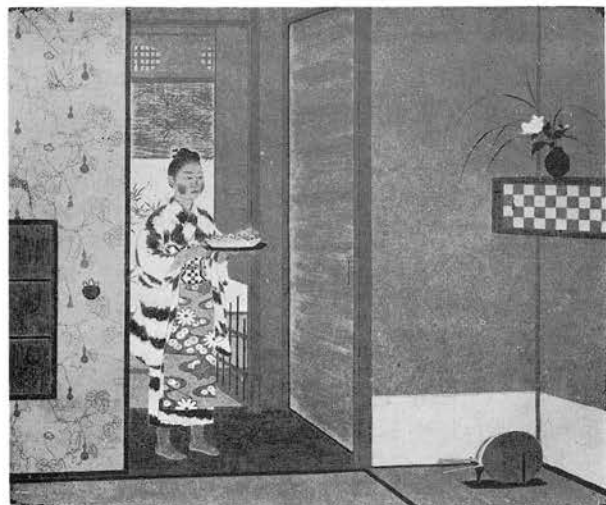
一汀(六湖會展) 山口 蓮春



二五月晴(六湖會展) 福田平八郎



四夏座敷(帝展) 磯田又一郎

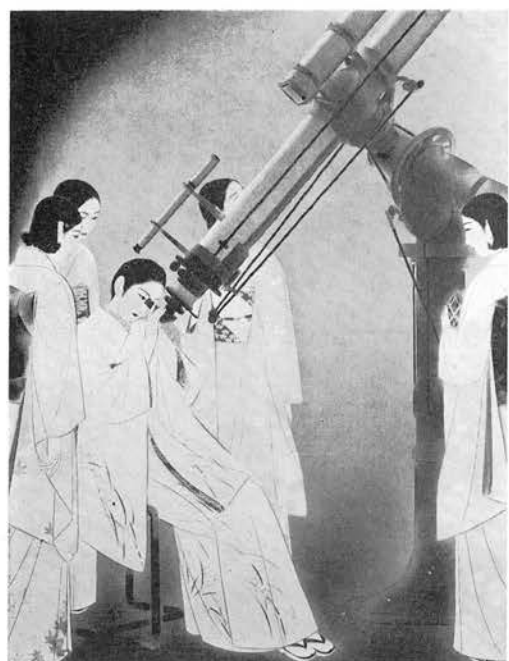


三南枝早春(個展) 小杉放庵

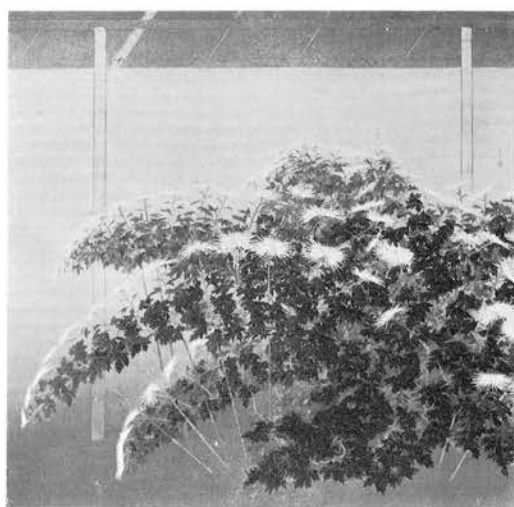


五牡丹(帝展) 林 司馬

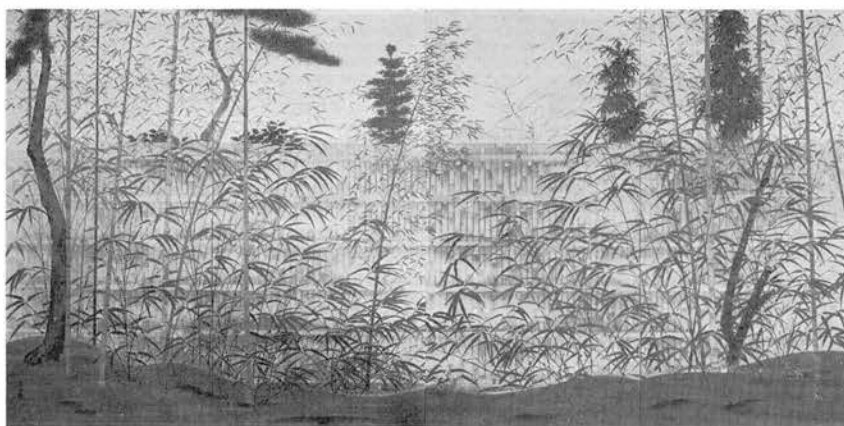




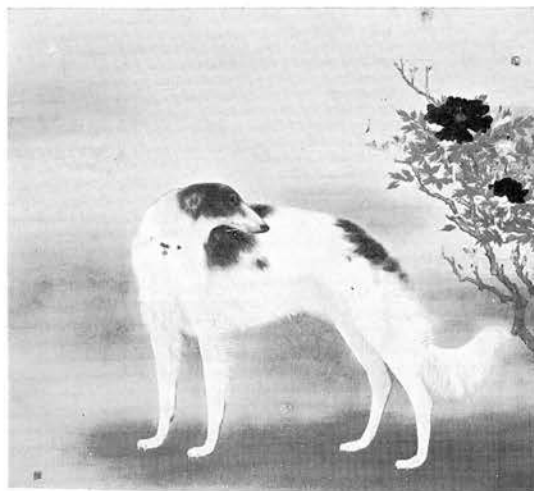
七
星をみる女性(帝展) 太田 聰 雨



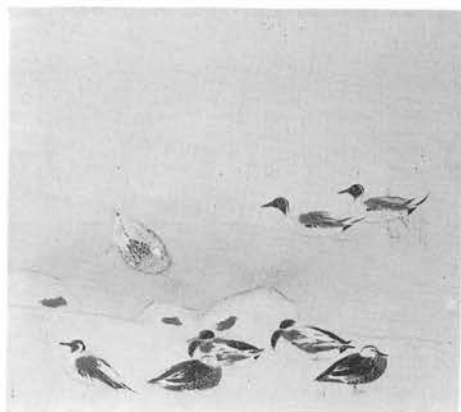
六
菊(帝展) 徳永 観 林



八
春隣り(帝展) 大智 勝 観



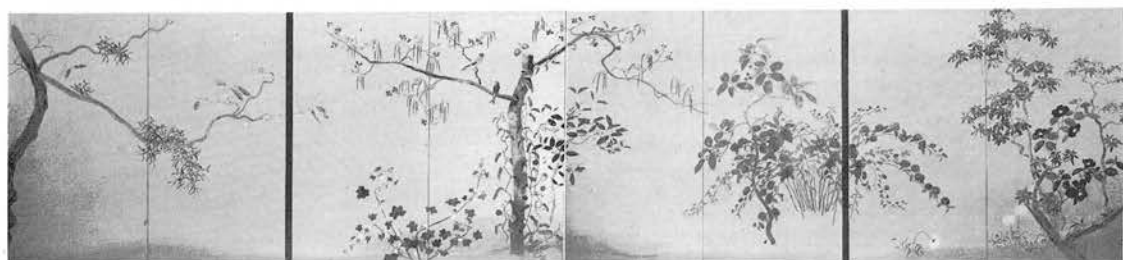
九
唐犬圖(帝展) 橋本 關 雪



子錢芋川 (展 帝) 烟 曉 一一



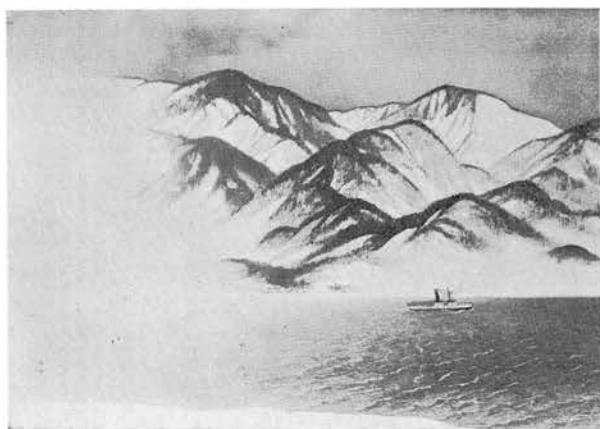
仙 溪 田 富 (展 帝) 秋 春 葉 萬 二一



一四 慶喜恭順(帝展) 錦木清方



堂 玉 合 川 (展 帝) 戸 瀬 く ま し 雪 三一





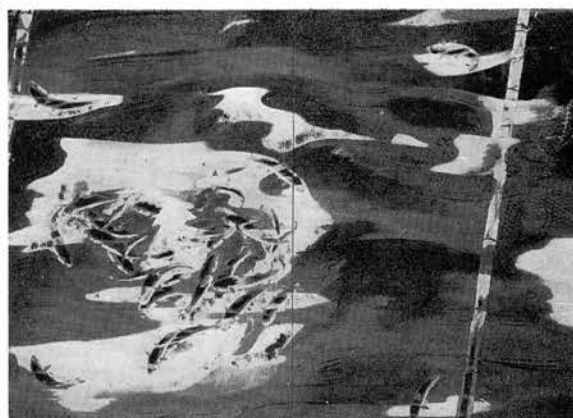
一五 龍蛟躍四溟（帝展）横山大観



六一 小春の泉神（帝展）田見青



一八 優婆塞（帝展）安田頼彦



一七 網（帝展）堅山南風



三二 細雨 (帝展) 河野秋都



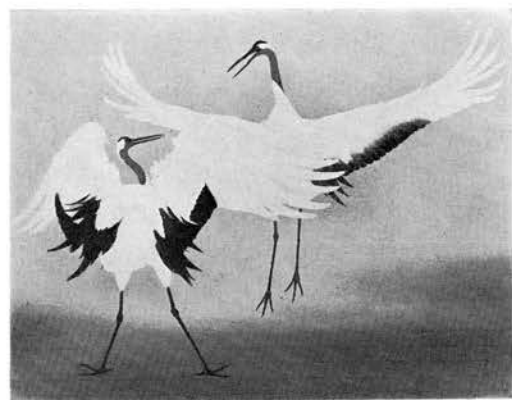
一九 觀畫 (帝展) 前田青都



三二 豐幡雲 (帝展) 中村喬陵



二〇 大威德明王 (帝展) 山村耕花



二四 白鶴 (帝展) 小林柯白



二一 湖の鵜 (帝展) 矢野鐵山



望希玉見 (展帝) 野 枯 五二



二六 五月雨 (帝展) 中村貞以



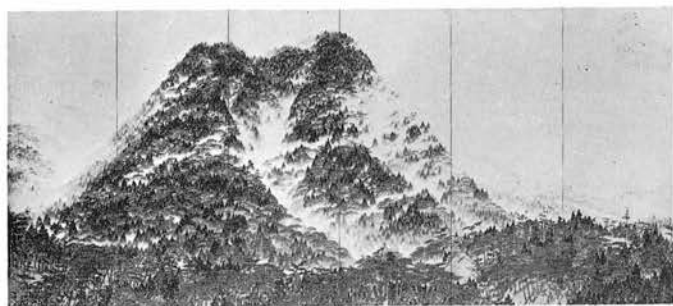
二八 山の秋 (帝展) 郷倉千鶴



二七 冬暖 (帝展) 酒井三良



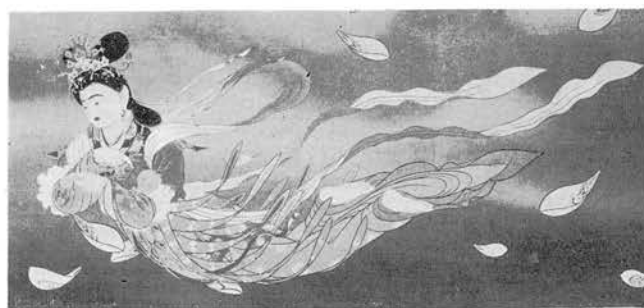
二九 茸 (帝展) 川端龍子



村橋野矢 (展帝) 創草野高 ○三



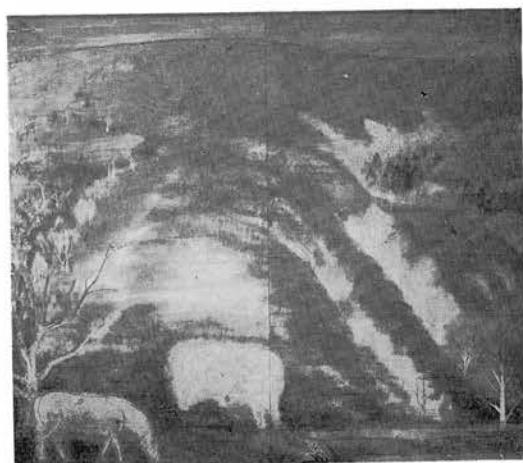
方寛井荒 (展帝) 母子鬼 三三



山武村木 (展帝) 女 天一三



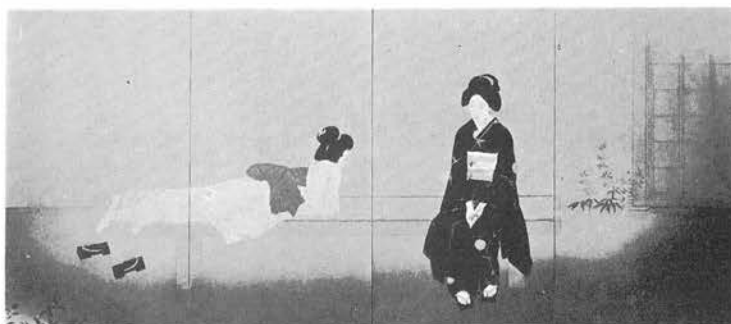
年乾藤近 (展帝) 鳧る 凍 四三



三三 菩薩嶺 (帝展) 村島西一



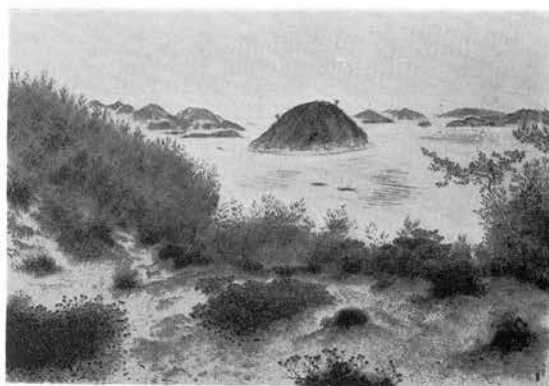
雲翠室小 (展帝) 坤乾白五三



富恆野北 (展帝) んさいこ、んさいとい 六三



三九野 梅 (帝展) 結城素明



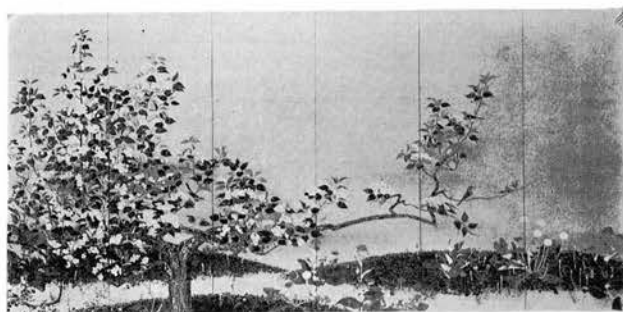
三七 遠帆連浪 (帝展) 森谷南人子



三八 婦女群像 (帝展) 杉山 寧



四三 吉野春風(春虹會展) 富田溪仙



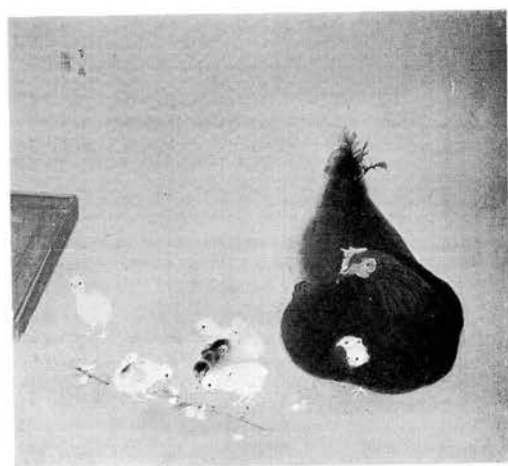
子主木鈴(展帝)春和〇四



郎三大村中(展會虹春)霽雨一四



四四 猫(春虹會展) 金島桂華



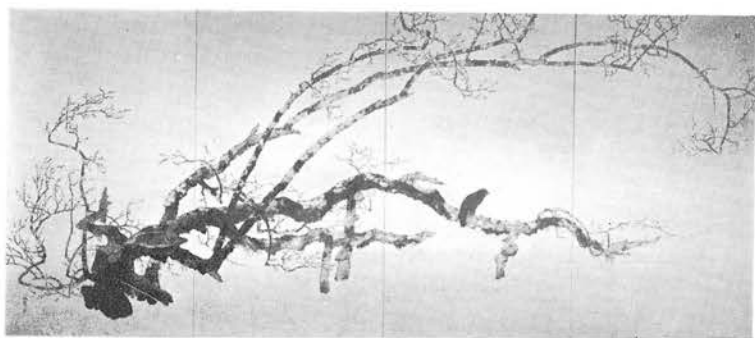
四二 春光(春虹會展) 山口華楊



四八 桐花(個展) 落合朝風



風草野長(展個)芽芳五四



庵放杉小(展會陽春)斜橋六四



四九 椿(春の青龍社展) 石塚連



楓青田津(展個)蘭春に籠七四

五〇 華榮圖（春の青龍社展） 加納三樂



五一 花垣（春の青龍社展） 川端龍子



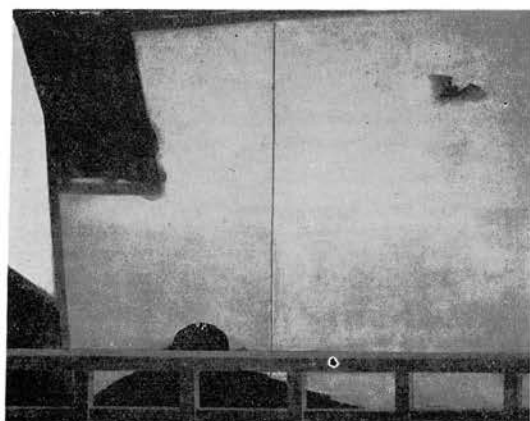
五二 めらはど（春の青龍社展） 柴田安子



五三 春韻（春の青龍社展） 坂口一草



雄綱邊渡（展社龍青の春） 宵清四五



雲翠室小（展個） 涼午五五



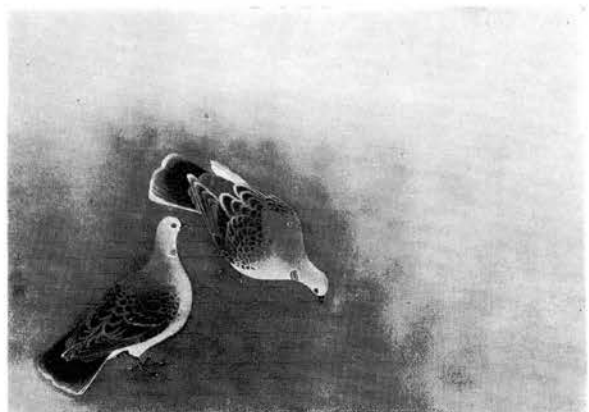
五六 白鷺 (踏青會展) 前田 青都



五七 ほとぎす (踏青會展) 鍋本 清方



五八 鳩 (踏青會展) 小林 古徑



五九 華會 (踏青會展) 安田 鞠彦



六〇 海風 (踏青會展) 大智 勝觀



六一 萬葉の花 (踏青會展) 富田 溪仙



六二 皇殿の妻（九阜會展） 太田 聰 雨



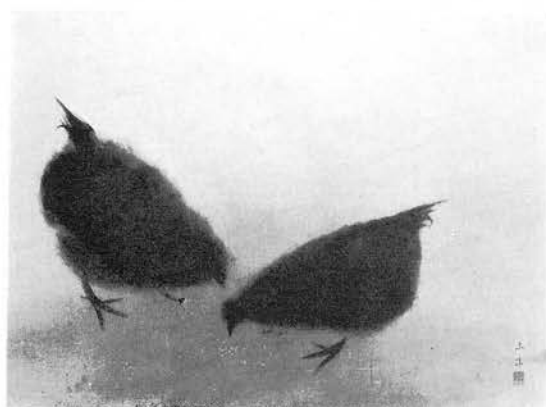
六三 春の夜（九阜會展） 吉岡 堅二



六四 役の優婆塞（革内會展） 安田 勲 彦



六五 餌（九阜會展） 奥村 土牛

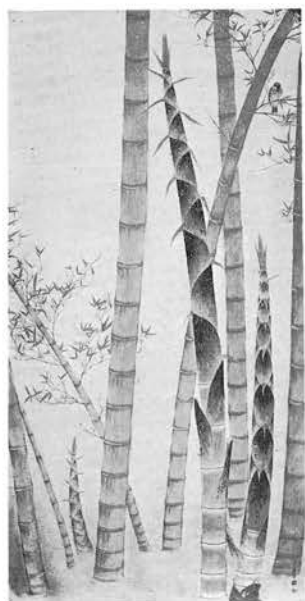


六六 白絲漣（新燈社展） 青木 大 乘



六七 河 霞 む（燈土社展） 野田 九 浦

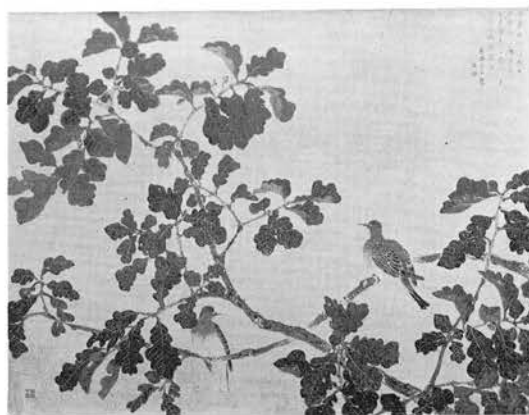




七一 新 筍 (讀畫會展) 荒木十畝



八六 殘 寒 (展院畫南) 須 網 雨 亭



六九 三枝禮 (南畫院展) 小室翠雲



二七 菊 慈 童 (展畫品小作新家大西東) 橫 山 大 觀



三七 寒 庭 一 角 (展院畫南) 水 田 竹 園



七〇 黃花白鷄 (個展) 山口蓬春



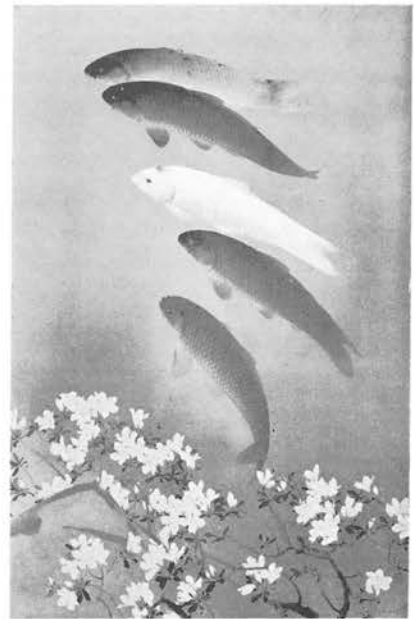
七七 老松栗鼠 (尙美堂展) 橋本關雪



七四 機帶 (個展) 錦木清方



七八 金風 (尙美堂展) 川合玉堂



七五 魚彩 (個展) 川端詔子



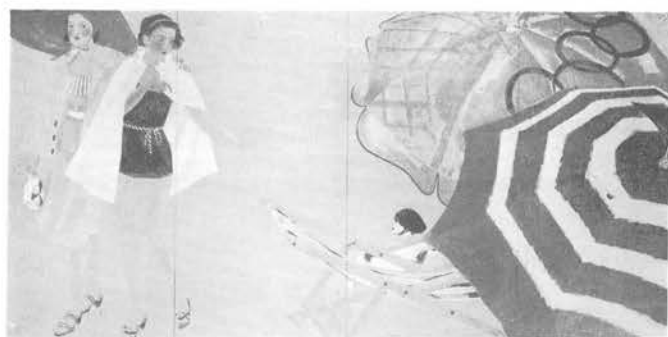
七九 五月の頃 (尙美堂展) 榎原紫峰



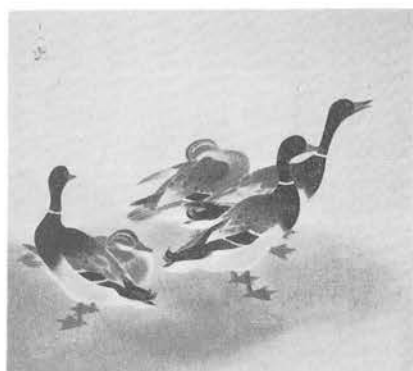
七六 葱の花 (尙美堂展) 西村五雲



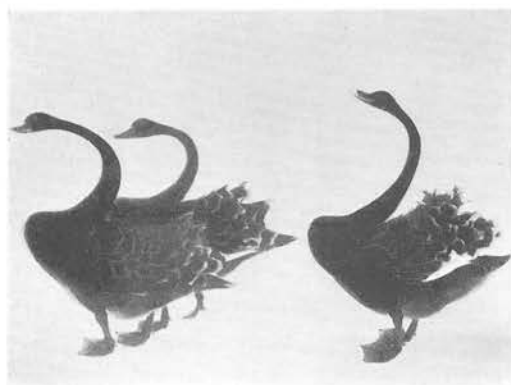
八二 海洋を制するもの (青龍社展) 川端龍子



枝美富口谷 (展社龍青) ひ憂の海 三八



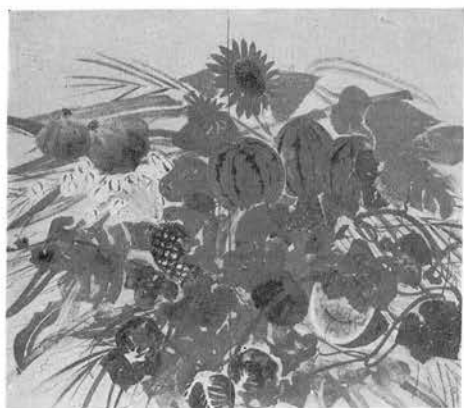
明守森 (展會葉五) 汀砂 〇八



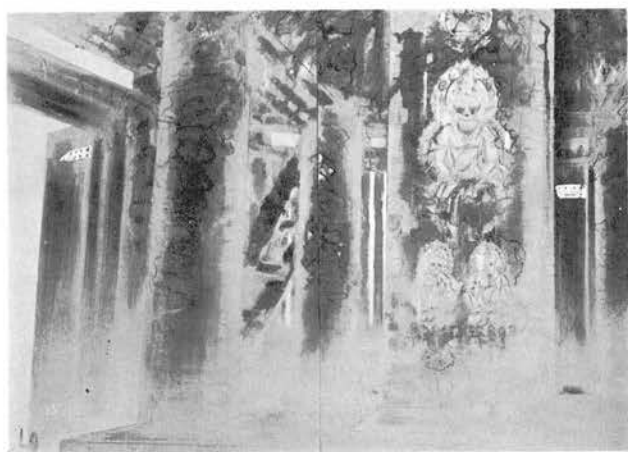
八四 黒鳥 (青龍社展) 坂口一草



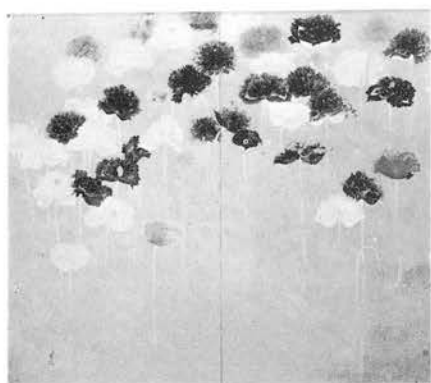
光波江入 (展會葉五) 舟渡雨風 一八



樂三納加 (展社龍青) 菜好日夏 七八



豐崎山 (展社龍青) 湖龍 五八



介之鹿村木 (展社龍青) 宴花 八八



枝美富口谷 (展社龍青) ひ戀の山 六八



八九雷 雨 (青龍社展) 川端龍子



九三
みづかけ(院展) 中村 岳陵



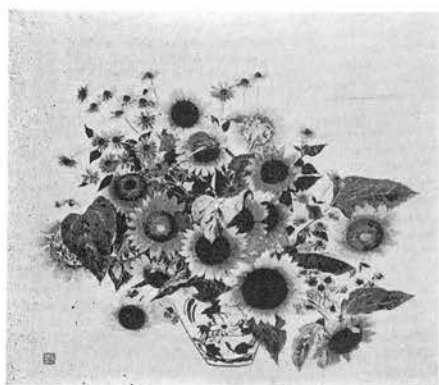
明 啓 西 安 (展社龍青) 鹿 集 〇九



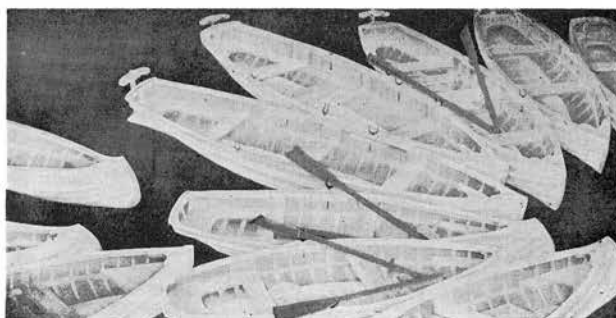
九四 寒 巖 主(院展) 山村 耕花



嵐 青 岡 福 (展社龍青) 光 一九



九五
ヒマハリ(院展) 田中 青坪



京 左 宮 松 (展社龍青) 朝 白 二九



花の野 六十九 (院展) 横山 大観



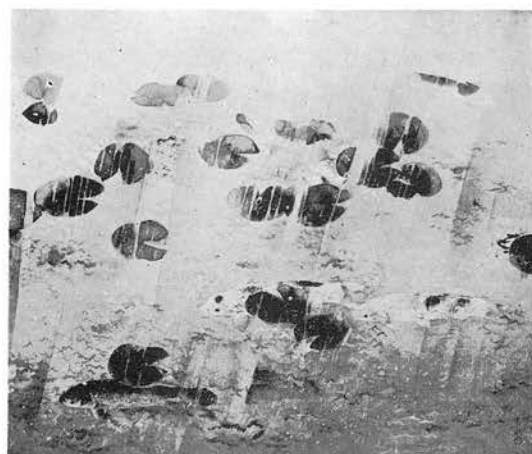
九九船路 (院展) 太田 聰雨



晨雪 七十九 (院展) 大智 勝観



一〇〇 歸路 (院展) 田中 案山子



風南山堅 (院展) 雨 白 八九



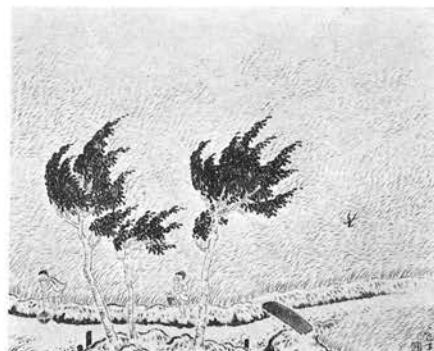
一〇四 岩つゝじ (院展) 長野草風



錢 芋 川 小 (展 院) 秋 聽 一〇一



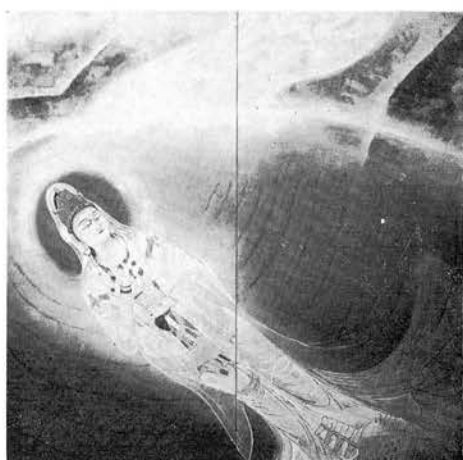
徑 古 林 小 (展 院) (一其) 葵 蜀 紅 菫 華 五〇一



一〇二 青田風 (院展) 酒井三良



藪 千 倉 郷 (展 院) 明 月 六〇一



一〇三 澄潭映大悲 (院展) 荒井寛方



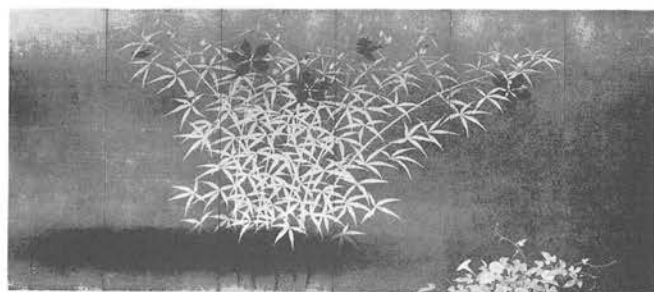
一〇九 白河樂翁 (院展) 前田青邨



一〇七 湯上遊龜 (院展) 諷を洗を受 (院展)



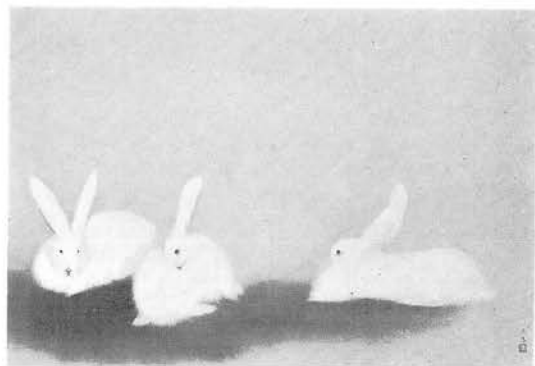
一一〇 雨月物語 (其三) (院展) 小林三季



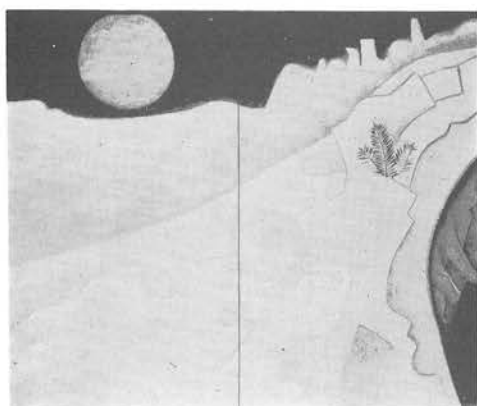
同 (其二)



一一一 大和當麻寺 (院展) 小島一谿



一〇八 兔 (院展) 奥村土牛



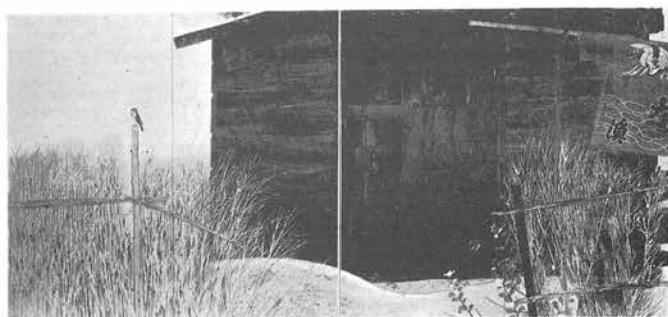
風朗合落 (展明朗) らくまか 二一一



一一三 秋の林 (明朗展) 川口春波



一一五 度 (文展鑑査展) 西村卓三



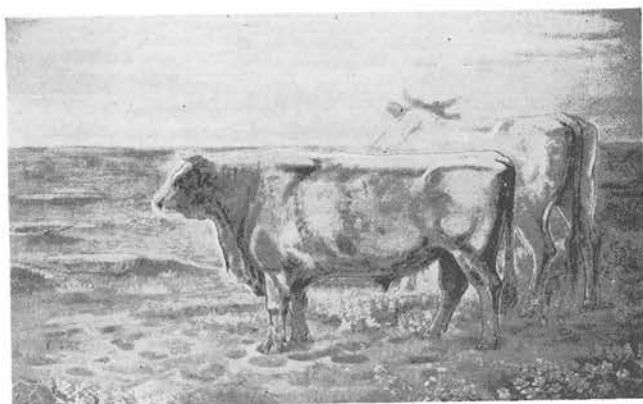
四一一 網小屋 (明朗展) 華陵上井



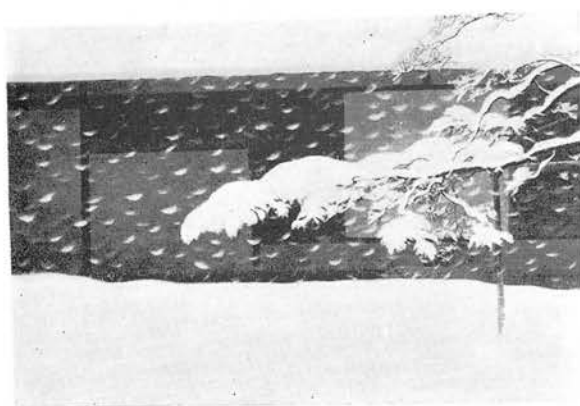
六一六 運を聴く (文展鑑査展) 橋木明



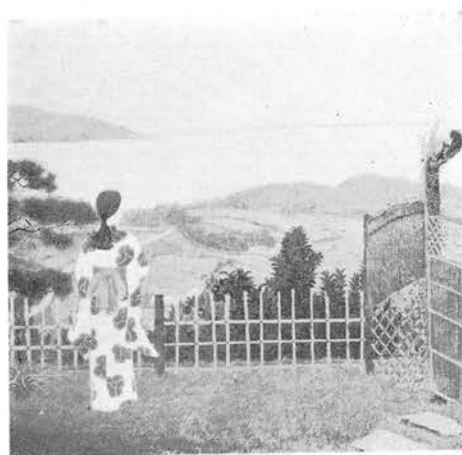
一二〇 防人歌 (文展鑑査展) 増田 正宗



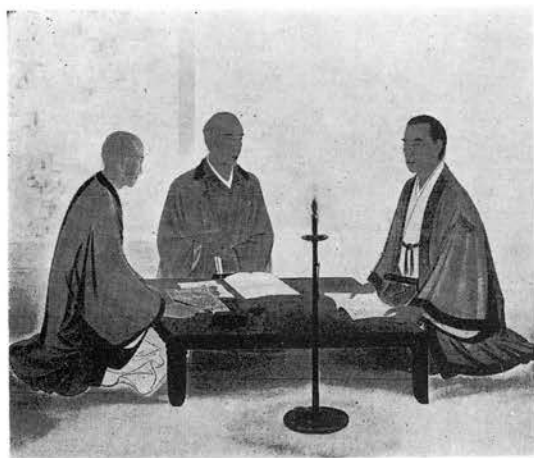
三榮藤加 (展査鑑展文) 暮 薄 七一一



一 厚村 奥 (展査鑑展文) 昔 の 雪 一二一



人 丘 木 山 (展査鑑展文) 風微の海 八一一



一二二 蘭學事始 (文展鑑査展) 長谷川 路可



一一九 映像 (文展鑑査展) 羽谷 鸞行



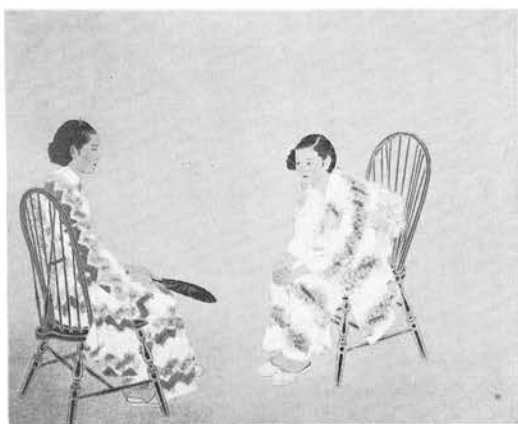
男光子曲 (展査鑑展文) 丘の綿木濱 六二一



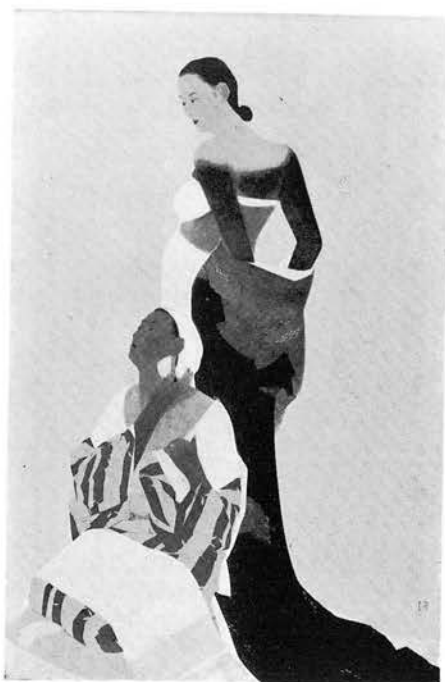
一一三三 山 (谷川岳) (文展鑑査展) 木本大果



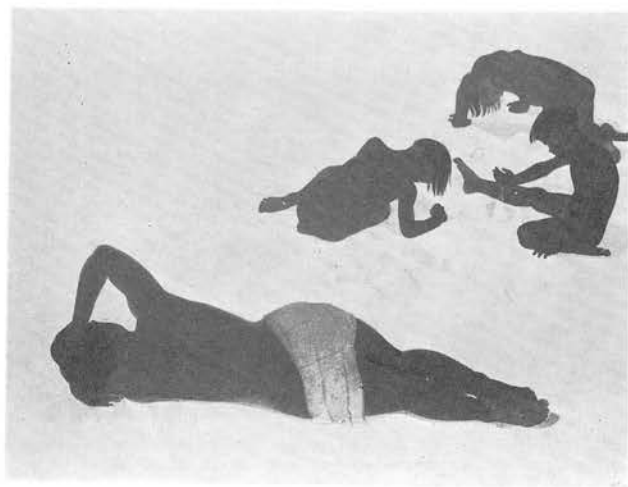
一二二七 秋 溪 (文展鑑査展) 小坂勝人



一二二四 姉妹 (文展鑑査展) 立石春美



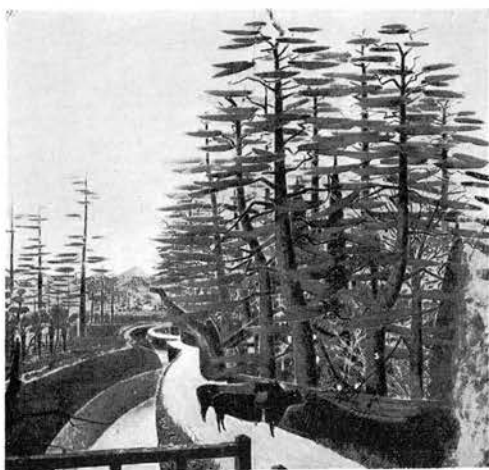
一二五九 月 (文展鑑査展) 寺島紫明



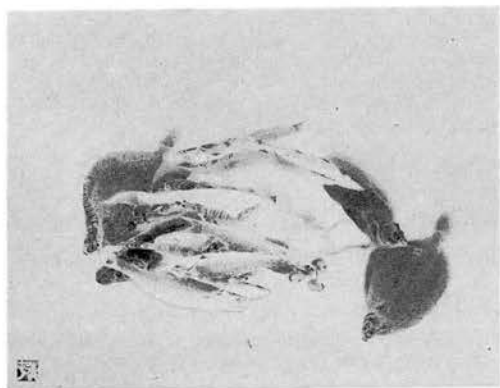
一二二八 坪上 (文展鑑査展) 秋野不矩



一三二 伽羅(七絃會展) 竊木 清方



吉有家南 (展査鑑展文) 冬 初 九二一



一三三 魚(七絃會展) 前田青郎



山春岡木八 (展 個) 興秋山湖 ○三一



一三五 竹 千代(七絃會展) 菊池契月



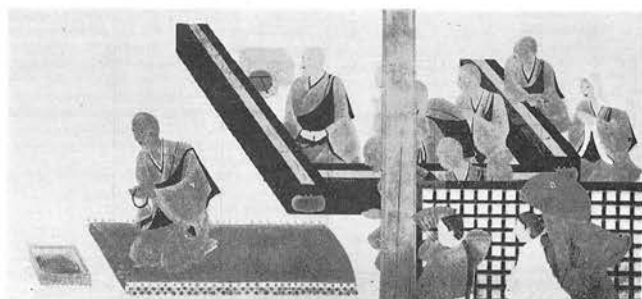
一三四 吉 法師(七絃會展) 菊池契月



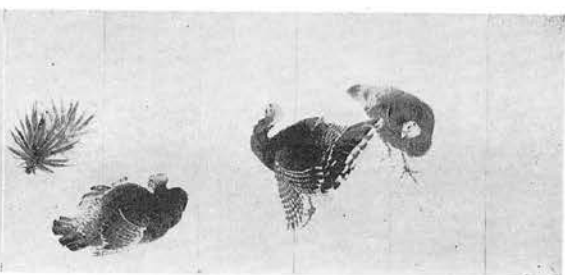
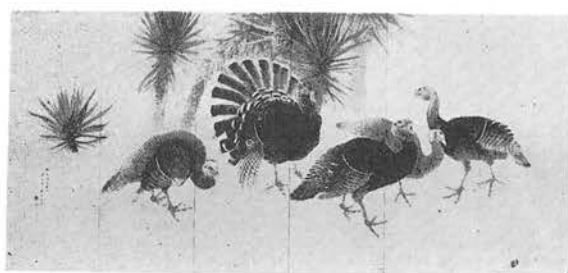
一三一 佛性房(七絃會展) 安田靉彦



一三六 其目寺の一遍上人
(文展招待展)
堂本 印象



上 同



七三一 吐 綬 雞 (展待招展文) 池 上 秀 敬



九三一 堀 河 夜 討 (展待招展文) 服 部 有 恆



八三一 竹 生 島 (展待招展文) 西 山 翠 峰



川小虎 (文展招待展) 濱 一四一



山小虎 (文展招待展) 山 〇四一



一四四 渚 (文展招待展) 高木保之助



川村曼舟 (文展招待展) 氷霧 二四一



一四五 讀 書 (文展招待展) 中村大三郎



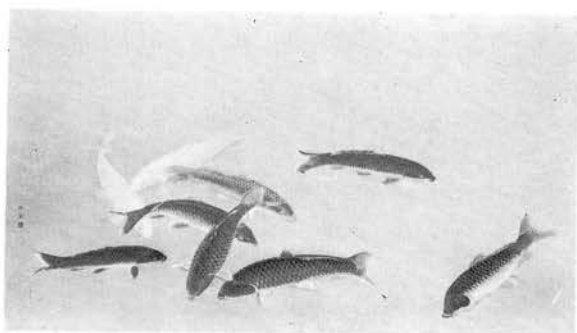
小竹野 (文展招待展) 戸室 三四一



一四六 夏鹿(其一) (文展招待展)
竹内栖鳳



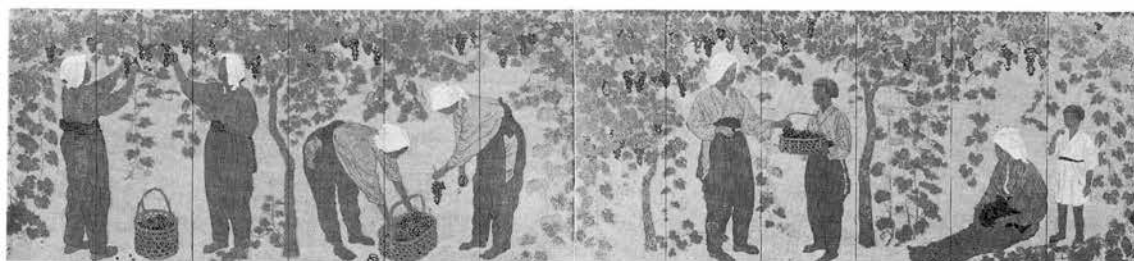
一四九 序之舞 (文展招待展)
上村松園



華桂島金 (展待招展文) 冬 暖 心 魚 七四一



龜 文 岡 常 (展待招展文) 秋 八四一



月 弦 澤 矢 (展待招展文) 圖 果 採 〇五一



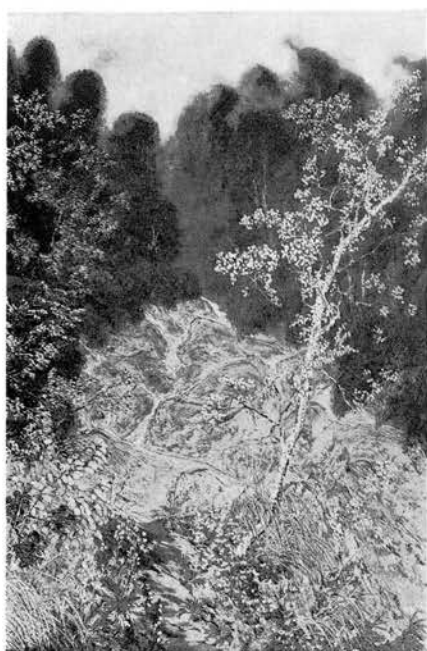
一五五 出師表(文展招待展) 烏田墨仙



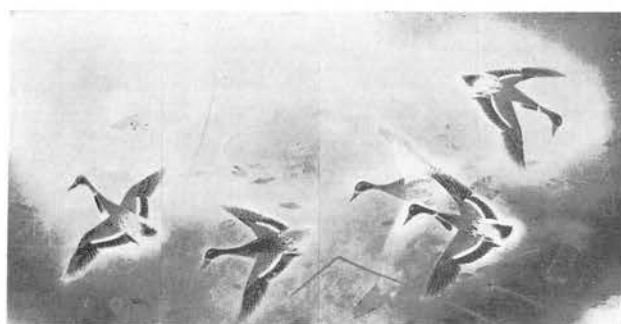
風栖内竹(展待招展文)(二ノ其)鹿夏一五一



夫鼠村吉(展待招展文)臣大籠燈二五一



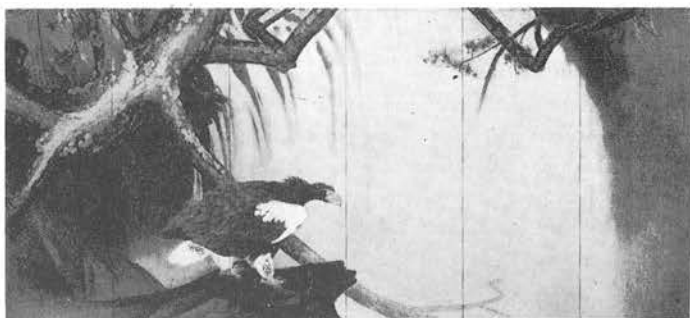
一五六 深光(文展招待展) 結城素明



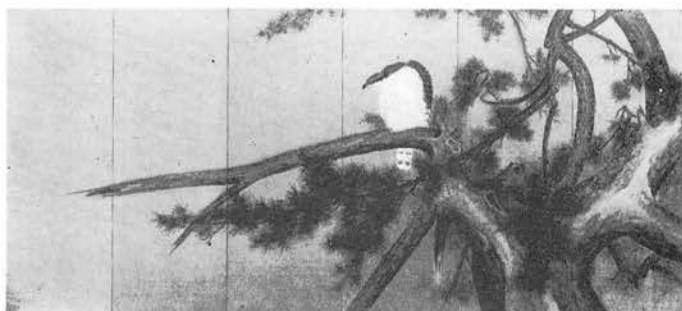
市白森(展待招展文)鴨飛三五



一五四 鵝(文展招待展) 齋本一洋



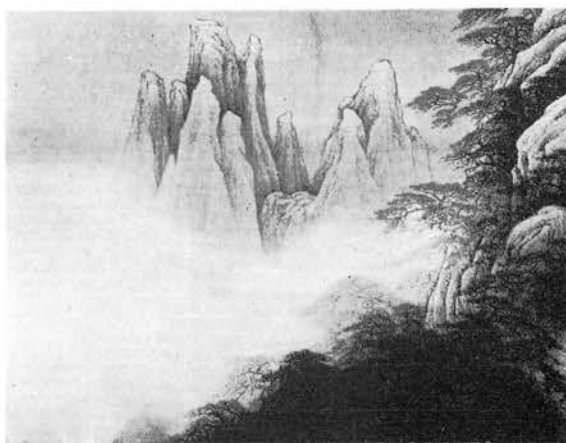
一五七 雄風 (文展招待展)
荒木十畝



同上



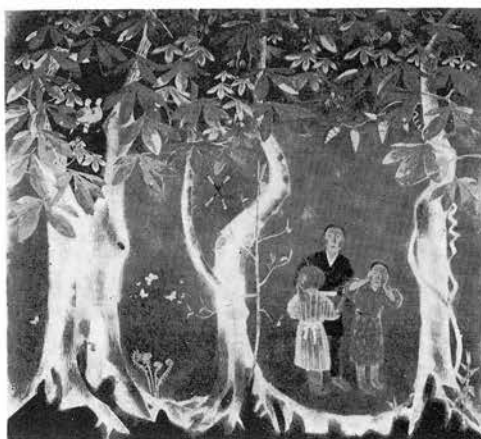
一六〇 あさがほ (文展招待展) 廣島見市



一五八 塙山雲 (文展招待展) 飛田周山



一六一 高原の夜 (文展招待展) 吉岡堅二



一五九 六月の森 (文展招待展) 福田豊四郎



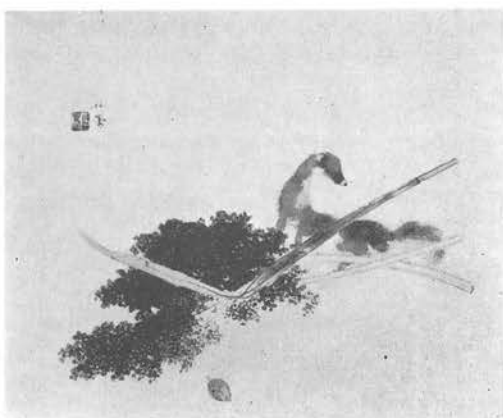
一六二 溪山秋色（個展）
松林 桂月



同上



一六五 白鷺（個展） 池上秀敏



一六三 秋興（現代名家新作展） 竹内栖鳳



一六六 煙草（個展） 山村耕花



一六四 鏡獅子（個展） 山川秀峰



一六七 涼(仲秋)(個展) 近藤浩一路



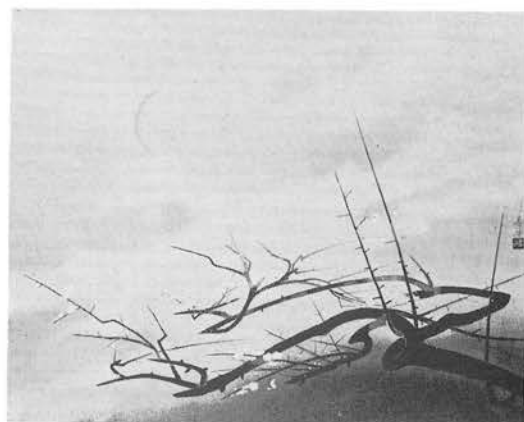
一七〇 仙 郷(三越日本畫展) 川合玉堂



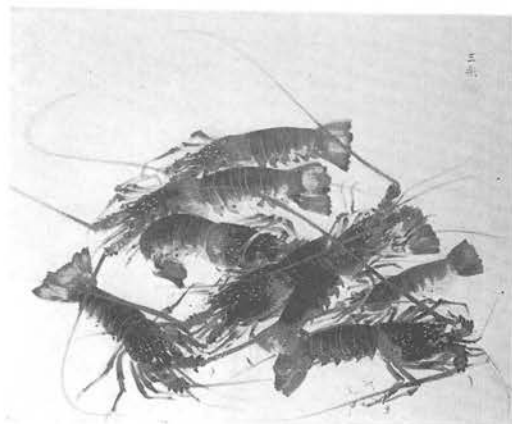
一六八 風景(三越日本畫展) 堂本印象



一七一 水邊千鳥(三越日本畫展) 荒木十畝



一六九 如月(三越日本畫展) 山口蓬春



一七二 海老圖(三越日本畫展) 加納三樂

一七三 樹と魚（三越日本畫展） 落合朗風



一七六 千岩秋氣高（現代邦畫結集展） 竹内栖鳳

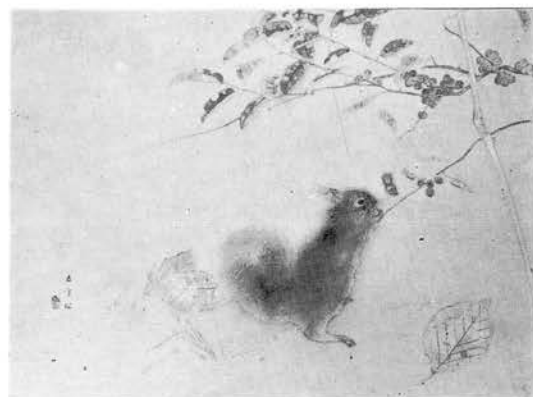


一七七 春汀（松島畫舫展） 杉山寧



雲翠室小（展集結畫邦代現）雪 飄 四七一

一七八 凱旋の旗士（松島畫舫展） 前田青郎



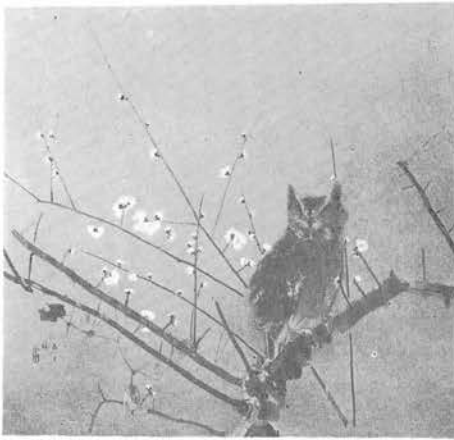
雲五村西（展集結畫邦代現）味秋果山 五七一



雪 關 本 橋 (展會京東) 鶴 巢 二八一



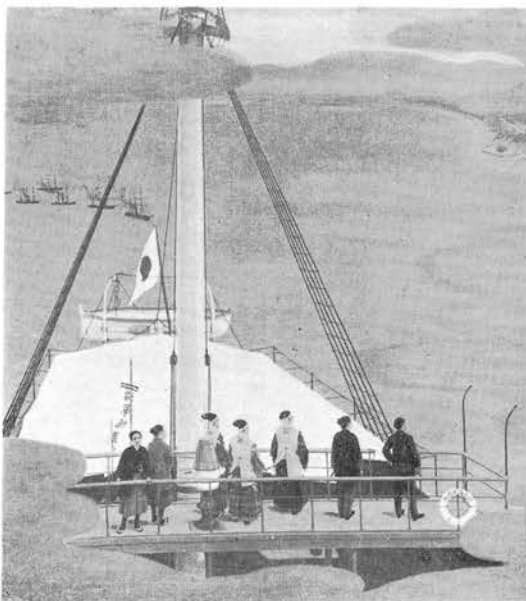
堂 玉 合 川 (展美尙) 雪 九七一



雲 五 村 西 (展會京東) 寒 春 三八一



月 契 池 菊 (展美尙) 平 樂 原 在 〇八一



一八四 大阪行幸諸藩軍艦御覽(聖德記念繪畫館壁畫) 岡田三郎助



一八一 向日葵(遺作展) 故尾竹竹坡

一八五 神宮親謁（聖德記念繪畫館壁畫） 松岡映丘



一八六 内國勸業博覽會行幸啓（聖德記念繪畫館壁畫） 結城素明



一八七 三寶院純淨園模繪（其一） 堂本印象



一八八 同上（其二） 堂本印象

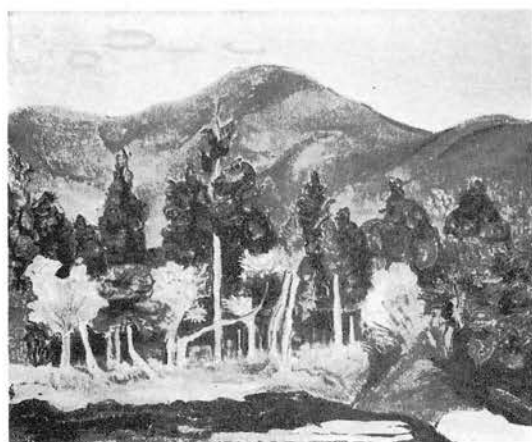




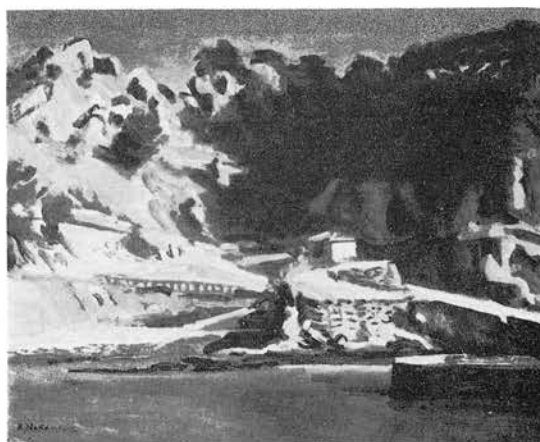
元紀川中 (展會潮六) 陽殘島松 二九一



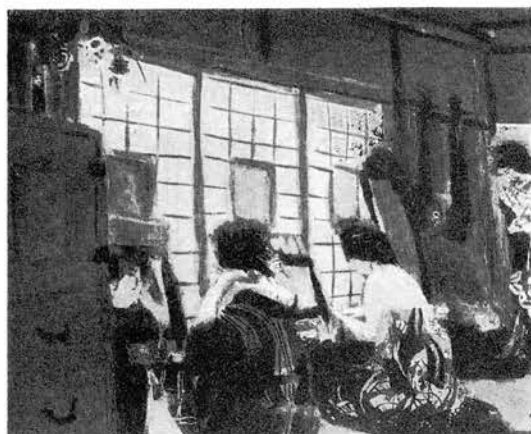
吉潤井向 (展個) 山の雪新 九八一



雄虎野牧 (展會潮六) (A) 山の枯冬 三九一



研村中 (展臺春) 朝ノ場切石 〇九一



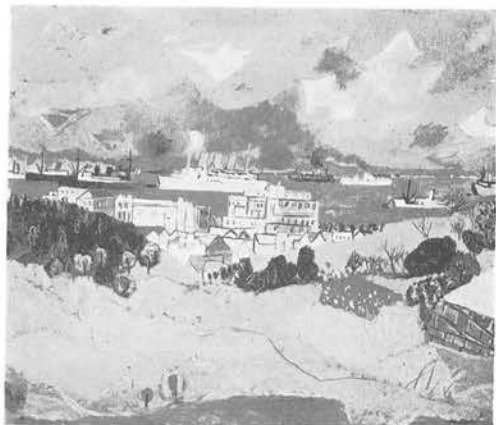
一九四 歌妓午後三時 (六潮會展) 木村莊八



一九一 浅草の女 (白日會展) 池部 鈞



雄虎野牧 (展社玄旺) 陽夕嶺 八九一



猪絛 (展品小會部二第) 景風濱橫 五九一



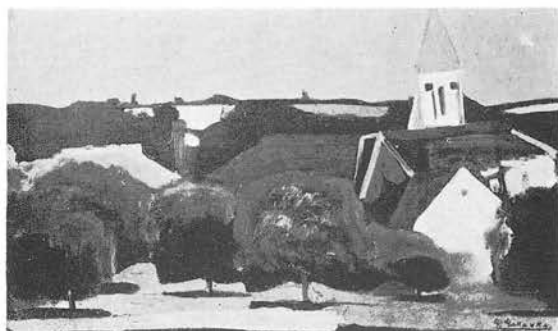
一九九 茶房 (旺玄社展) 坂田虎一



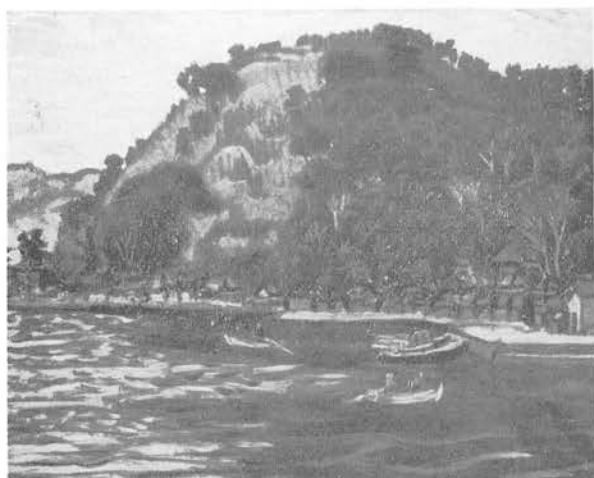
一九六 踊り子 (第二部會小品展) 小磯良平



二〇〇 紅衣 (旺玄社展) 青柳喜兵衛



高岡徳太郎 (展科二季春) 景風 七カ一



二〇四 江戸の浦 (國畫會展) 梅原龍三郎



二〇一 ジャンプ (オリンピック美術展) 前川千帆



二〇五 無花果圖 (國畫會展) 梶 貞雄



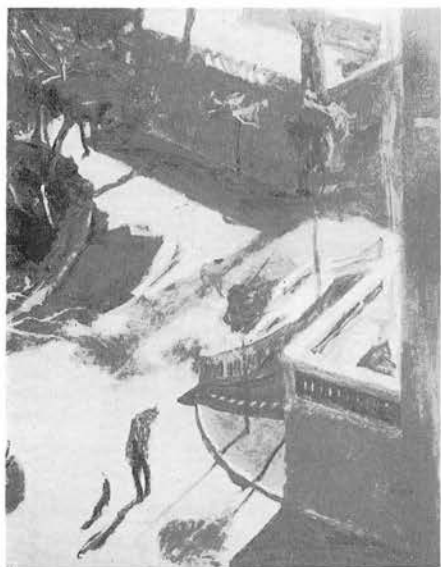
二〇二 伊豆の海 (個展) 兒島善三郎



二〇六 白衣の婦人 (國畫會展) 久保 守



三〇二 泉のオヨチンピ・テンモ 郎一貴府別 (展會畫國)



二一〇 南佛風景(國畫會展) 青山義雄



一 俊 木 柏 (展會畫國) 士富の寺善修 七〇二



二〇八 八丈島の海(朝)(國畫會展) 山下品藏

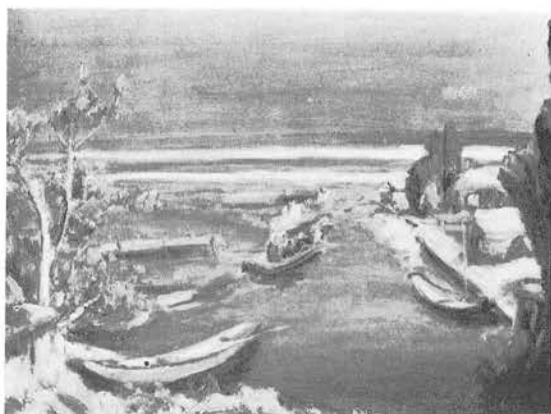


二一一 赤いベレエ(國畫會展) 大森啓助



二〇九 佛國寺(國畫會展) 平塚 進一

二二二 水郷晩秋（春陽會展） 今關啓司



二二三 冬の海（春陽會展） 國盛義篤



二二四 煙草のむ男（春陽會展） 原 精一



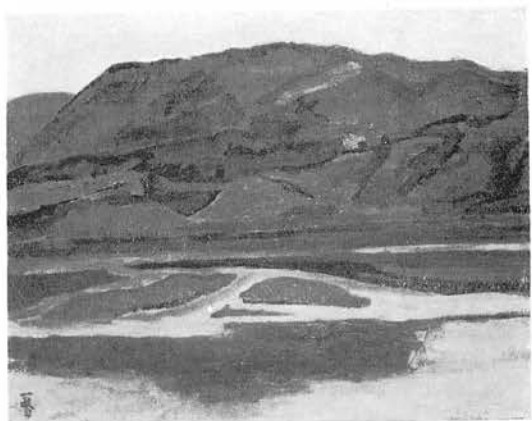
二二五 淺草寺春（東京風景ノ六）（春陽會展） 木村莊八



二二六 温 泉（春陽會展） 石井鶴三



二二七 富士川（春陽會展） 中川 一政



二二〇 甲斐駒ヶ嶽（春陽會展） 足立源一郎



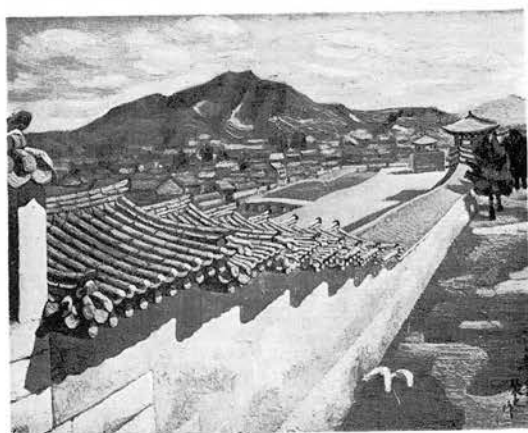
二二八 白き部落（春陽會展） 倉田白羊



二二二 虎の静物（春陽會展） 新沼 杏一



二二九 南山を眺る（遺作展） 原田和周



二二二 赤城殘雪（春陽會展） 横堀角次郎





二二六 初春風景 (現代十大家洋畫展) 石井柏亭



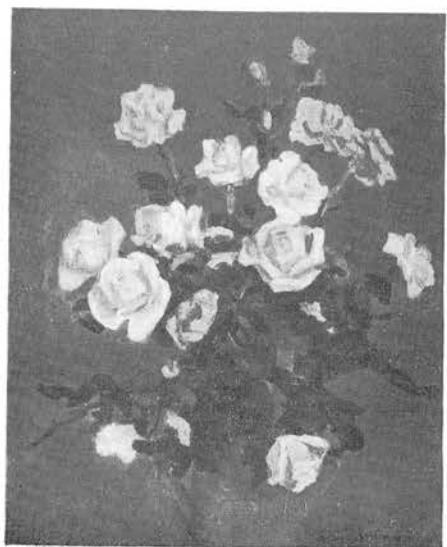
二二三 月見運山 (春陽會展) 小栗哲郎



二二七 女 (現代十大家洋畫展) 安井曾太郎



二二四 濱海 (春陽會展) 田倉三郎



二二八 花 (現代十大家洋畫展) 川島理一郎

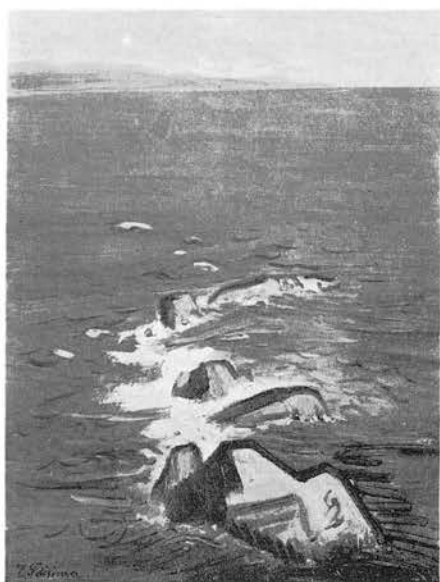


二二五 青海島 (春陽會展) 田水五郎

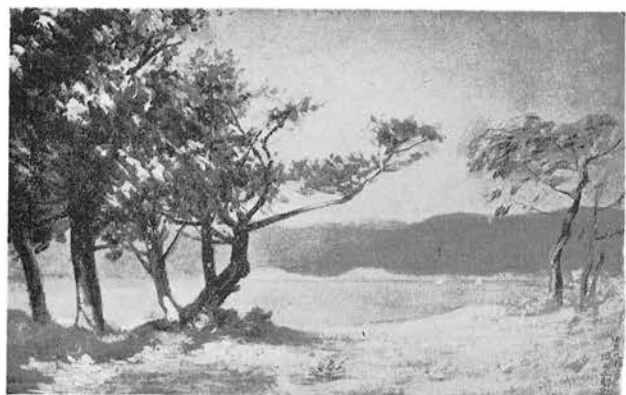
二二九 風景（現代十大家洋畫展） 山下新太郎



二三〇 室戸遠望（現代十大家洋畫展） 藤島武二



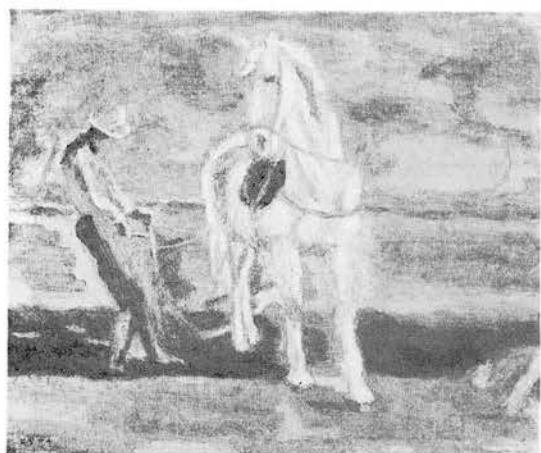
二三一 風景（現代十大家洋畫展） 岡田三郎助



二三二 秋田風景（現代十大家洋畫展） 藤田嗣治



二三三 白馬耕作（現代十大家洋畫展） 坂本繁二郎





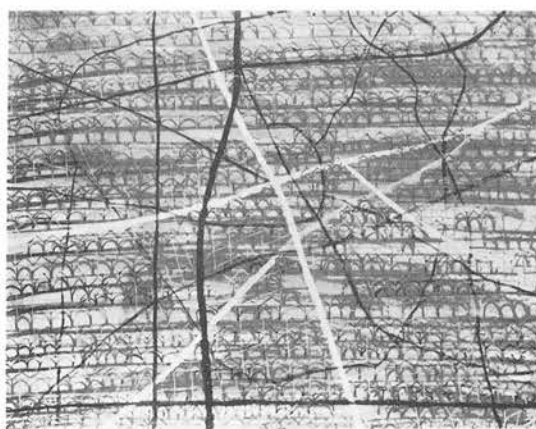
二二七 花屋 (新美術家協會展) 松本弘二



二二八 静風景 (現大十家畫展) 梅原龍三郎



二二九 早川國彦 (新美術家協會展) 伊豆白濱景



二三〇 メトロポリス (個展) 長谷川三郎



二三一 青い敷物 (新美術家協會展) 宮本三郎



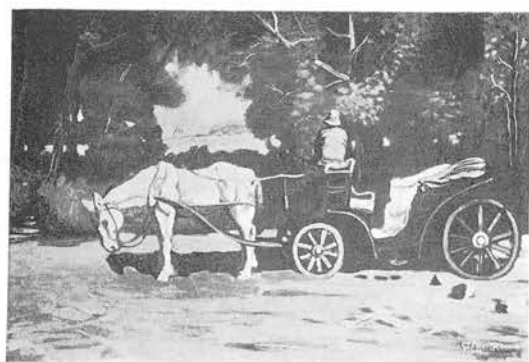
二三二 三人の裸婦 (新美術家協會展) 伊藤龍久



二四三 女二人(新美術家協會展) 清水刀根



二四〇 雪のハルビン(新美術家協會展) 荒原信



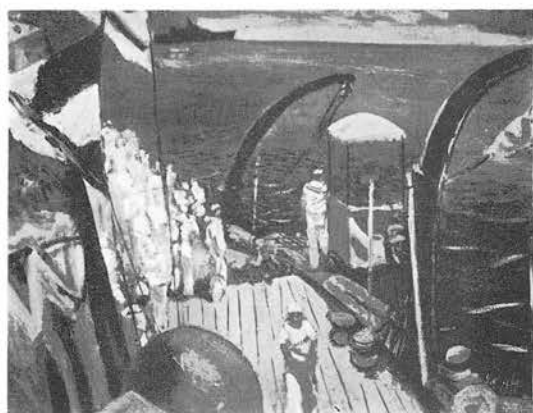
二四四 馬車(新美術家協會展) 田村孝之介



二四一 椿の庭(新美術家協會展) 中村善策



二四五 樂屋裏(新美術家協會展) 酒井亮吉



二四二 艦上風景(新美術家協會展) 田邊三重松



光 弘 澤 中 (展會風光) 雪の澤湯後越 九四二



七 惣 間 高 (展 個) 禽小と蘭洋 六四二



二五〇 女 (光風會展) 寺内萬治郎



子 節 岸 三 (展會彩七) 馬稿の夜月 七四二



二四八 支那服の女 (光風會展) 猪熊弦一郎

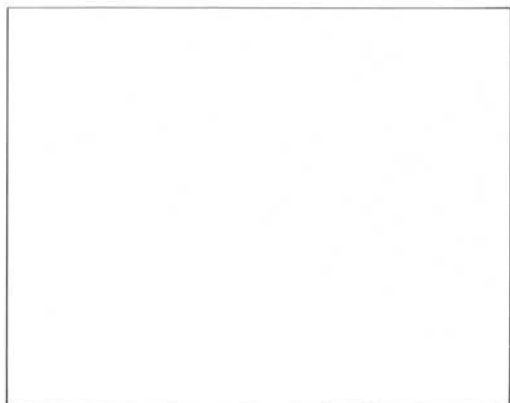


二五一 雨後 (光風會展) 白瀧幾之助

二五二 座像(光風會展) 伊勢正義



二五五 群猿(獨立展) 伊藤 隆

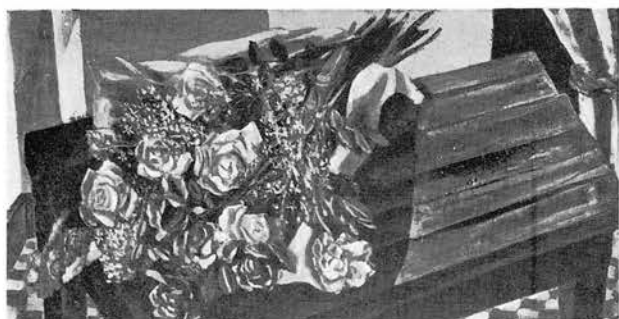


二五三 畫室の一隅(未完成)(光風會展) 脇田 和



義重林 (展立獨) 雪 殘 六五二

二五四 人物(光風會展) 中西利雄



郎四達高 (展立獨) 東 花 七五二



野口源太郎 (展立獨) 象印のヤシリギ 一六二



曾宮一 (展立獨) (島かた科仁豆伊) 海の冬 八五二



福澤一 (展立獨) 牛 二六二



中山 (展立獨) 丘砂 九五二



川口軌外 (展立獨) 女浴 三六二



二六〇 裸婦 (獨立展) 林武



二六二 山上 (獨立展) 小林和作



二六四 果物と女 (獨立展) 松島一郎



二六八 秋 (獨立展) 鈴木亜夫



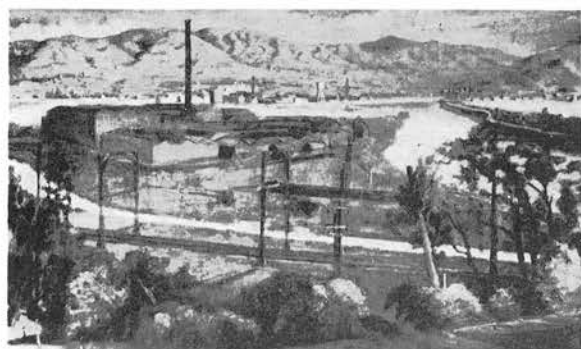
二六六 南国 (獨立展) 小島善太郎



二六九 女 (獨立展) 里見勝藏



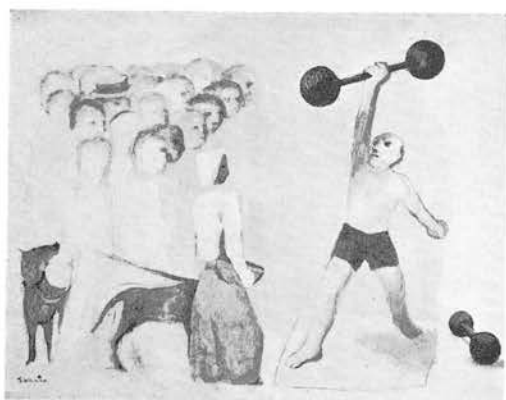
二六六 瀬戸の風景 (獨立展) 兒島善三郎



宇村 太田 (展立獨) 帯地場工 三七二



二七〇 平和ナル風景 (獨立展) 妹尾正隆



高木 功二 (展立獨) 藝 四七二



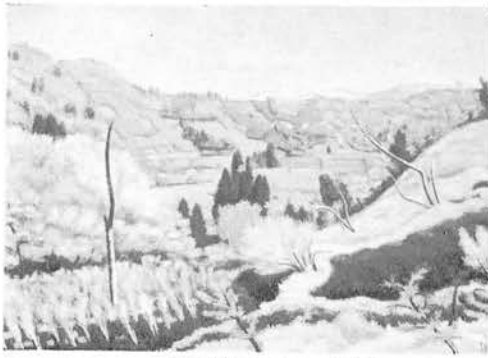
堀内 徳保 (展立獨) 人上淵滿るれはた横 一七二



高木 功二 (展會杜上) A 場切石 五七二



二七二 鳥・魚 (獨立展) 清水登之



一 兵 田 山 (展社燈新) 川ふぬを原高 九七二



郎 太 重 田 黒 (展 個) 物 静 る あ の 藍 甘 赤 六 七 二



雄 利 西 中 (展 個) 景 風 林 栗 〇 八 二



二 七 七 椿 (日本版畫展) 平塚 運 一



二 八 一 漁 村 一 局 (個 展) 倉 田 白 羊



三 種 村 北 (展社燈新) 丘く咲杏 八 七 二



二八二 藤咲く庭其ノ二(個展) 牧野虎雄



二 武島 藤 (展會詰四) 女 浴 五八二



二八三 杏咲く村(四詰會展) 岡田三郎助



二八六 粟(四詰會展) 滿谷國四郎



二八四 畫 室(四詰會展) 和田三造

二八七 風 景（個展） 伊原宇三郎



二八八 松（個展） 水船三洋



二九〇 子供三態の圖（二科展） 伊藤織郎



二九一 夏の午後（二科展） 碓 伊之助



光 澤 田 濱 （展科二）鹿 群 九八二



二九五 著 衣(二科展) 高岡徳太郎



二九二 時(二科展) 岡田謙三



二九三 砂丘(二科展) 大澤昌助



二九六 洗 濯(二科展) 柏原覺太郎

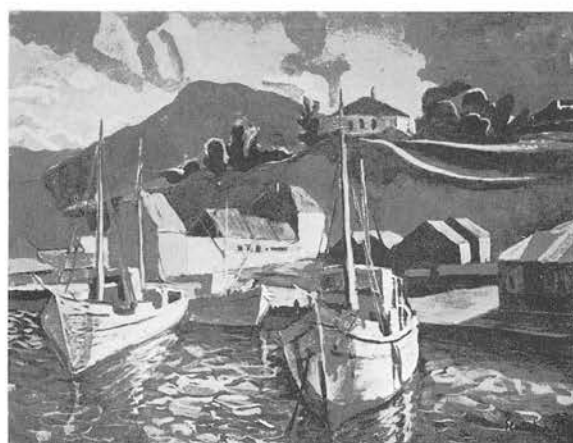


二九四 田口の日(二科展) 田口省吾

二九七 橄欖の花(二科展) 國枝金三



二九八 獨航船(二科展) 中村善策



二九九 花園の友人(二科展) 野間仁根



三〇〇 バルコン(二科展) 東郷青児



三〇一 海風(二科展) 田村孝之介

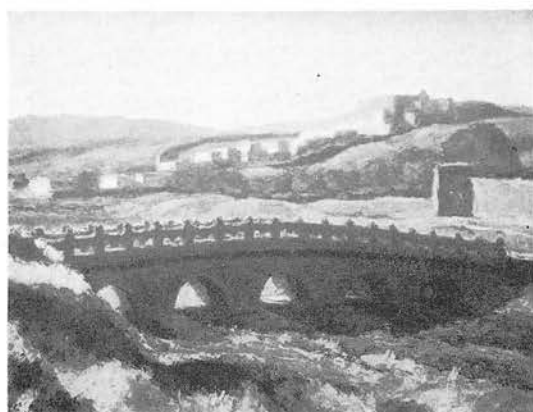




三〇五 行 水(二科展) 鍋井克之



三〇二 霧れゆく寒霞溪(二科展) 向井潤吉



三〇六 秋の熱河承德(二科展) 栗原 信



三〇三 黒田重太郎 (展科二) 合百子鹿と瓜西

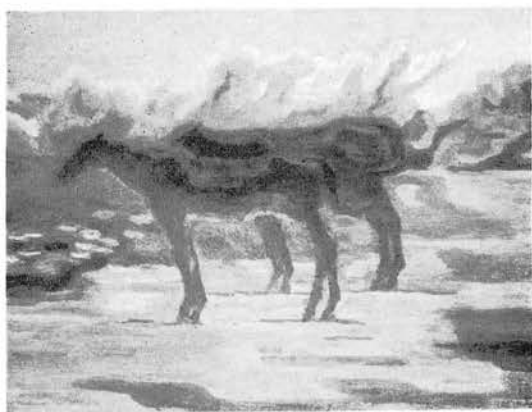


三〇七 野に鯉ふ(二科展) 宮本三郎

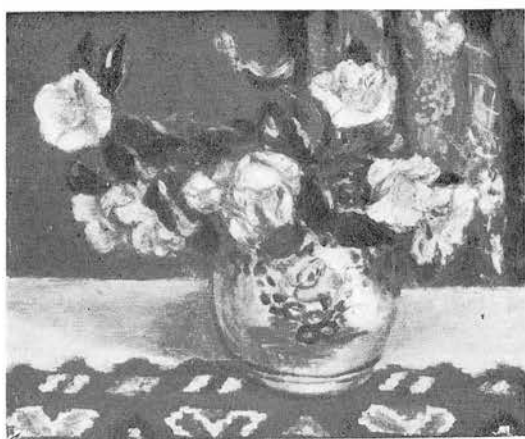


三〇四 青い團扇(二科展) 中川紀元

三〇八 放牧二馬(二科展) 坂本繁二郎



三一 椿(二科展) 正宗得三郎



三〇九 自画像(二科展) 藤田副治



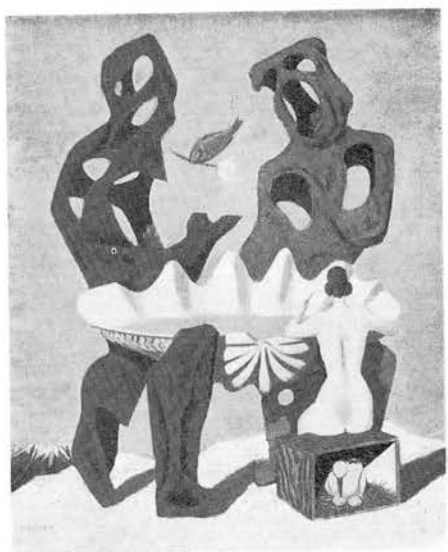
三一二 鸚鵡と少女(二科展) 安宅虎雄



三一〇 志摩の海女(二科展) 小山敬三



三一三 兇暴なる饗宴(二科展) 高田力蔵

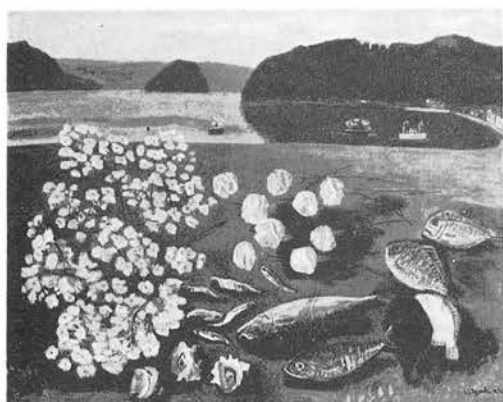




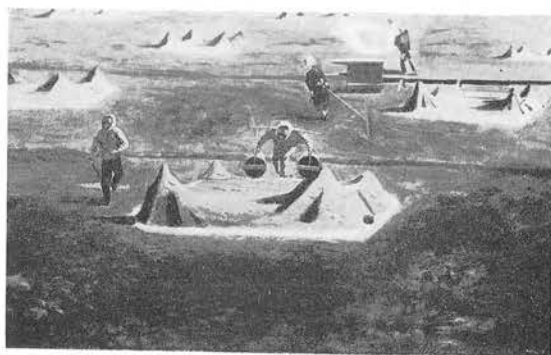
三一七 イオンヌ河畔 (二科展) 木下孝則



三一四 水 (二科展) 島崎鶏二



郎太 信木鈴 (展科二) 魚と花 八一三

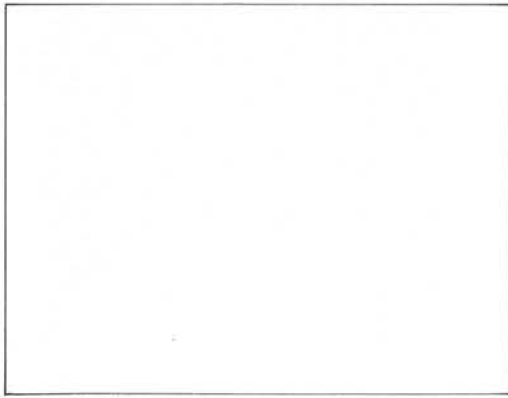


三一五 田 (二科展) 松井 正



三一六 舞台上三人 (二科展) 清水刀根

三一九 静物 (個展) 伊藤 屋



彦 滋 川 石 (展査鑑展文) 沿岸のーリガンス 三二三



三二〇 磯 人 (文展鑑査展) 伊藤 清永



三二四 釋尊降誕圖 (文展鑑査展) 林 明善



星 仁 李 (展査鑑展文) 庭 閑 一二三



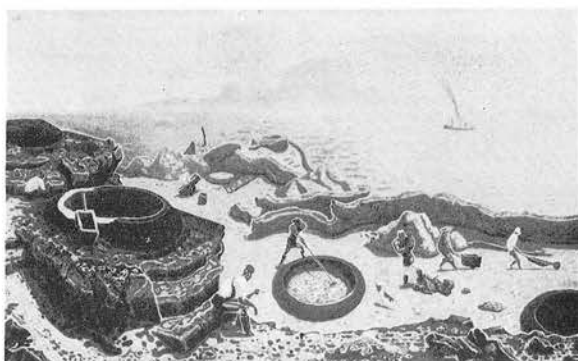
三二五 遊 樂 (文展鑑査展) 大沼かねよ



三二二 小 憩 (文展鑑査展) 岩崎 勝平



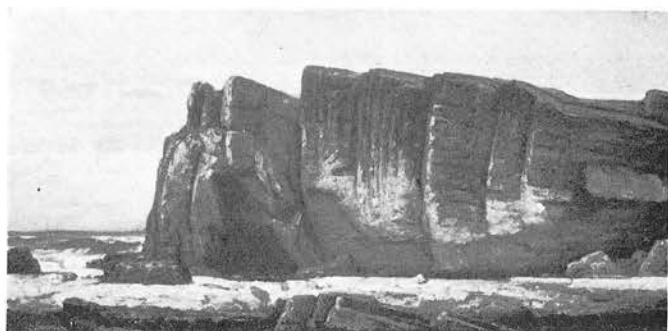
一 源 澤 桃 胡 (展 査 鑑 展 文) 庭 秋 九 二 三



之 憲 島 牛 (展 査 鑑 展 文) 焼 貝 の 島 六 二 三



三 三 〇 湖 畔 (文 展 鑑 査 展) 山 崎 坤 象



雄 辰 貝 倉 (展 査 鑑 展 文) 巖 七 二 三



三 三 一 海 邊 (文 展 鑑 査 展) 川 端 實



三 二 八 畫 房 の 女 (文 展 鑑 査 展) 野 口 良 一 呂



善 政 南 (展査鑑展文) ぶらな馬 五三三



三三二 丘の上 (文展鑑査展) 朝井 関右衛門



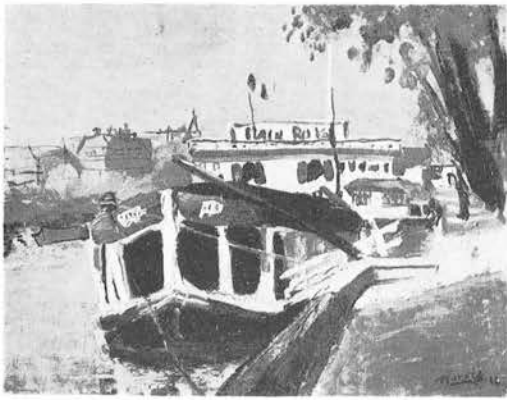
三三三 草 丘 (文展鑑査展) 鈴木 栄二郎



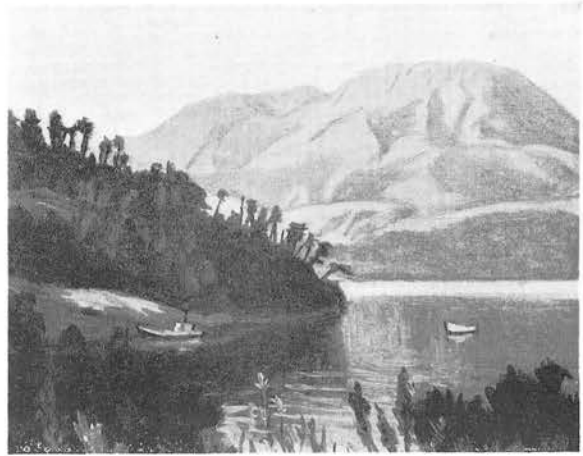
男 武 通 平 (展査鑑展文) 屋 濯 洗 六三三



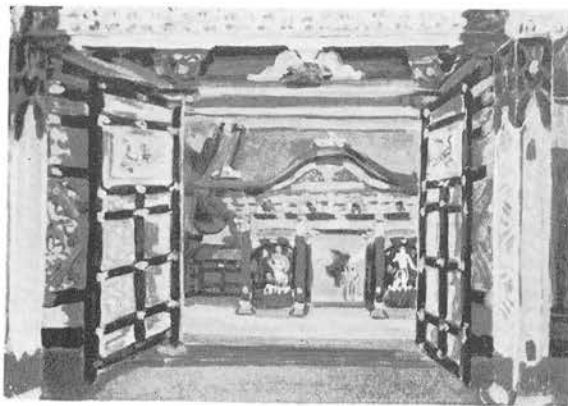
太 剋 田 須 (展査鑑展文) 間 時 憩 休 四三三



男 庸 橋 高 (展品小佛澤) 畔河ヌーセ ○四三



三三七 葦の湖(三昧堂洋画展) 石井 柏 亭



郎一理島川 (展 個) 門 叉 夜 一四三



三三八 少 女 (三昧堂洋画展) 長谷川 昇



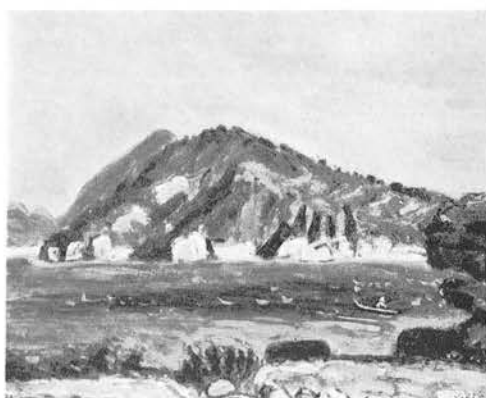
彦 美 岡 熊 (展品小會光東) 婦 裸 二四三



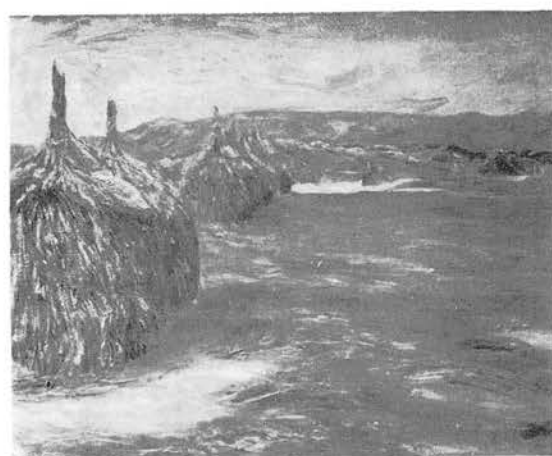
三三九 朝 顔 (獨立秋季展) 中村 節 也



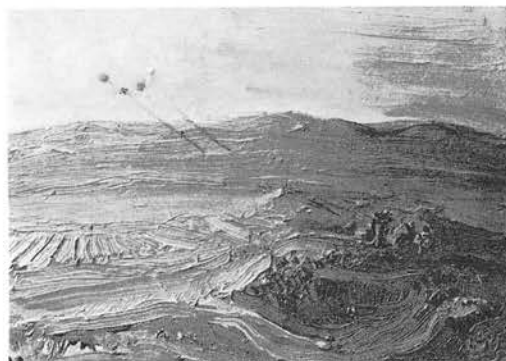
三百八 木橋 (展待招展文) 群 沼 六四三



里與 藤齋 (展品小會光東) (一其) 景風羽鳥 三四三



三四七 積 蔬 (文展招待展) 林 俊 衛



藏 謙 口 野 (展品小會光東) 景風のげ上風 四四三



三四八 青服の少女 (文展招待展) 長谷川 昇



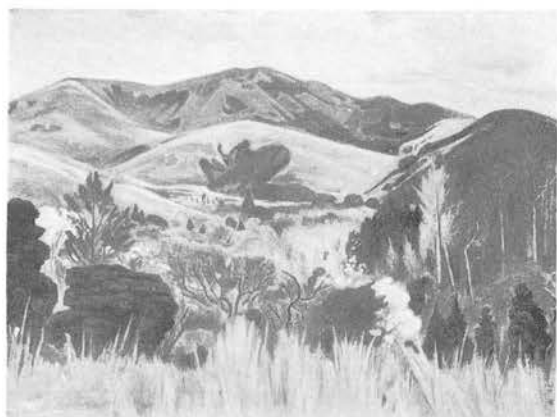
章 一 藤 佐 (展品小會光東) 家るが群 五四三



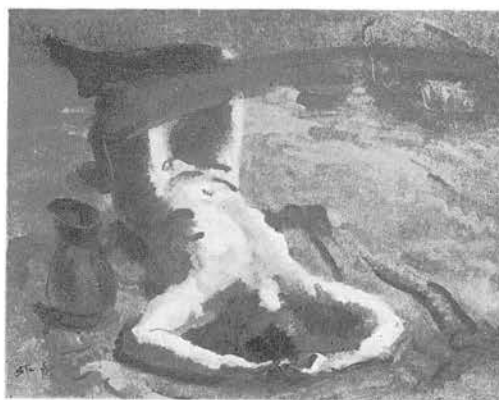
角野判次郎 (展待招展文) テンアシ 二五三



三四九 按摩さん (文展招待展) 和田三造



奥瀬英三 (展待招展文) 春 三五三



三田太 (展待招展文) (説傳牙日之天) 虹 靈 〇五三



三五四 婦人半身像 (文展招待展) 岡田三郎助



三五一 働く漁婦 (文展招待展) 大久保 作次郎



加賀山野上 (展待招展文) 山雪大の明察 八五三



折不村中 (展待招展文) 山美妙 五五三



三五九 裸婦 (文展招待展) 田邊至



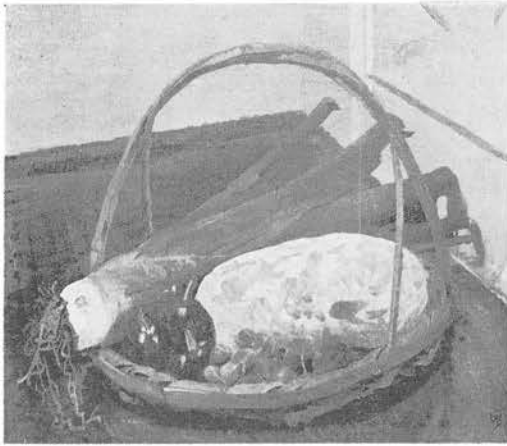
永辻 (展待招展文) 春 六五三



三六〇 水邊 (文展招待展) 中野和高



三五七 飼 (文展招待展) 中野和高



三六四 冬 瓜 (文展招待展) 山本 暲



三六一 花 火 (文展招待展) 矢島 堅士



男 種 藤 權 (展待招展文) 山の後雨 五六三



三六二 三部試作「成長」(手傳) (文展招待展) 草光 信成



三六六 アリアメと祖父 (文展招待展) 有岡 一郎



三六三 カナカカの娘 (文展招待展) 小林 萬吾



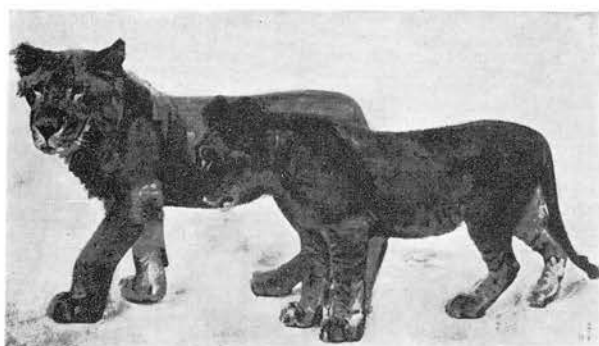
太 久 木 柚 (展待招展文) 青 漸 色 山 〇七三



雄 良 水 清 (展待招展文) 原 草 一七三

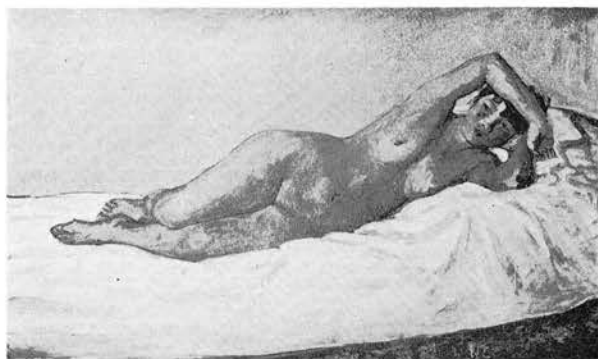


郎 次 德 竹 佐 (展待招展文) 子 獅 仔 二七三





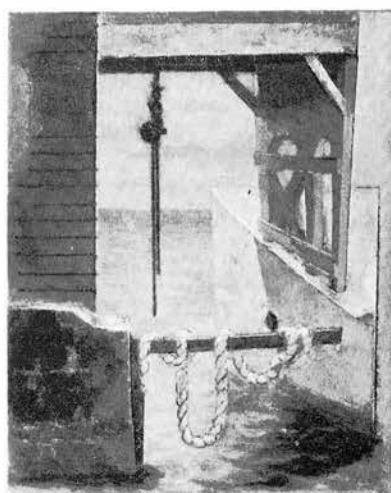
三七六 談る人 (新制作派協會展) 今村俊夫



馬久千木鈴 (展待招展文) 婦裸をせ臥横 三七三



義正勢伊 (展會協派作制新) シコルバ 七七三



三七四 くさりとなわ (個展) 庫田 燦



和田 昭 (展會協派作制新) スンダ 八七三



和田 昭 (展會協派作制新) ドンバズヤジ 五七三



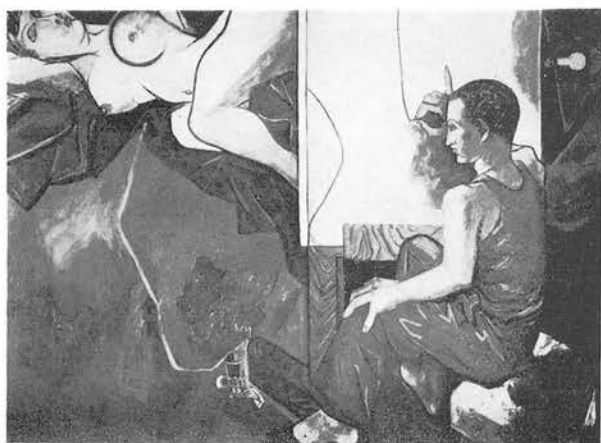
郎一 盛熊猪 (展會協派作制新) 婦裸と馬 二八三



三七九 書 女(新制作派協會展) 藤島武二



三八三 黒い帽子(新制作派協會展) 小磯良平



三八〇 制作(新制作派協會展) 佐藤敬



巖 田 内 (展會協派作制新) 想構る巡を婦裸 四八三



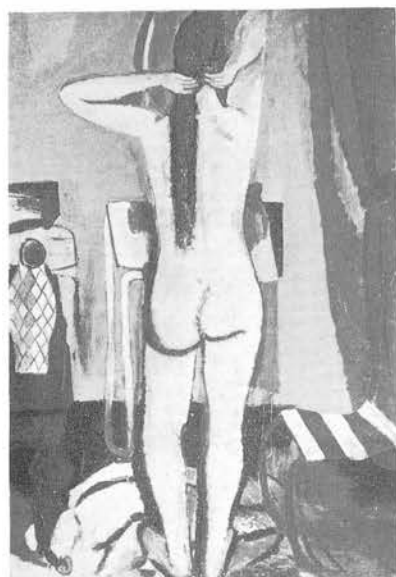
三八一 人 物(新制作派協會展) 中西利雄



三八八 ばらC(小絲、寺内作品展)小絲源太郎



三八五 裸婦(新制作派協會展) 鈴木 誠



三八九 浴後(新制作派協會展) 坂井 範一



三八六 蔭(新制作派協會展) 三田 康



三九〇 菊(青樹社洋畫展) 安井曾太郎



三八七 椅子による裸婦(小絲、寺内作品展) 寺内 萬治郎

三九一 曇り日(個展) 和田英作



三九二 神苑(青樹社洋畫展) 山下新太郎



三九三 薔薇(青樹社洋畫展) 和田英作

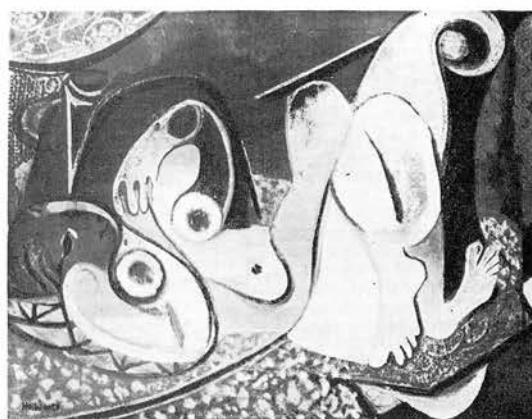
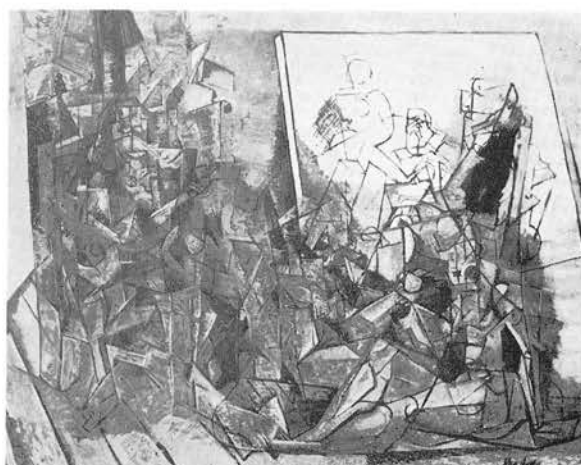
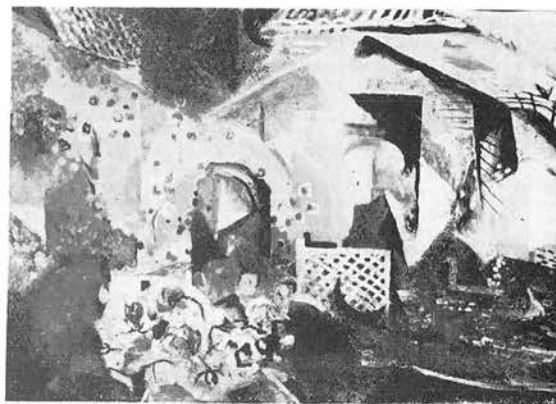


三九四 少女(個展) 岡田謙三



三九五 水邊(新興美術家協會展) 大内青坡

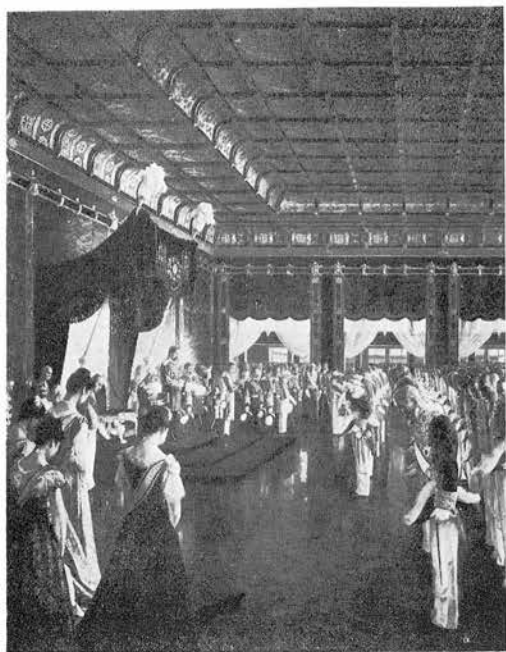




四〇一 東京帝國大學行幸（聖德記念繪畫館壁畫） 藤島武二



四〇二 憲法發布式（聖德記念繪畫館壁畫） 和田英作



四〇三 丸物百貨店壁畫 東郷青兒



四〇四 丸物百貨店壁畫 藤田嗣治





四〇八 八咫鳥(帝展) 佐藤朝山



四〇五 風(帝展) 石井鶴三



四〇六 岩戸神樂(帝展) 山本豊市



四〇七 結髪(帝展) 新海竹藏



四一〇 靈龜(帝展) 平柳田中



四〇九 牧神クリシュナの麗夕(帝展) 大内青圃

四一 裸婦 (國畫會展) 清水多嘉示



四一四 無馬 (日本木彫會展) 佐々木太樹

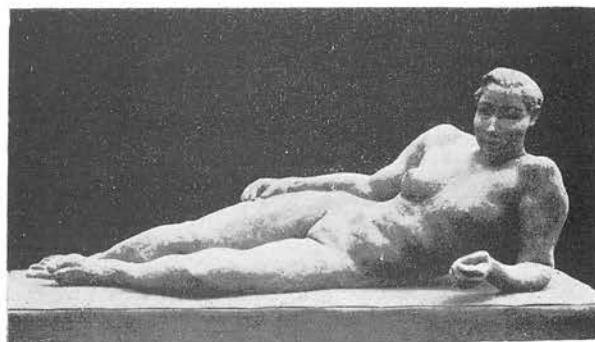
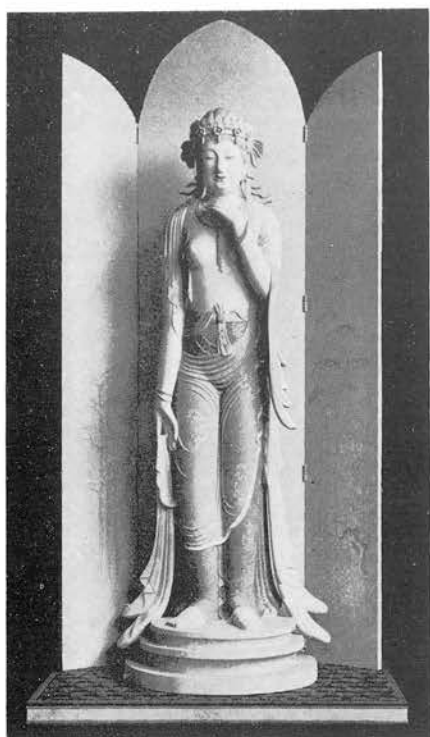


四一五 女 (立像) (新彫塑協會展) 菊池一雄



象圓野森 (展會彫木本日)ービグラ 二一四

四一六 光明佛身 (日本木彫會展及文展招待展) 澤田晴廣



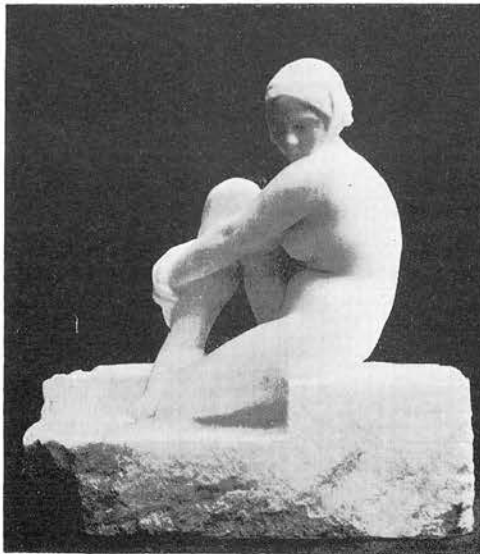
恆 見 酒 (展會協塑彫新) (果効きな臺) 作 試 三一四



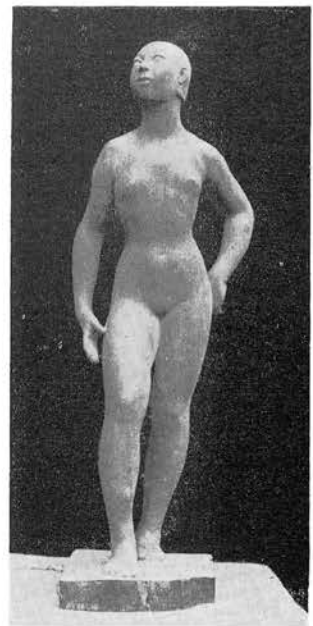
四一九 空魔來 (三部會展) 吉田久繼



四一七 朝霧 (日本木彫會展) 中野桂樹



四二〇 浴 泉 (三部會展) 日名子實三



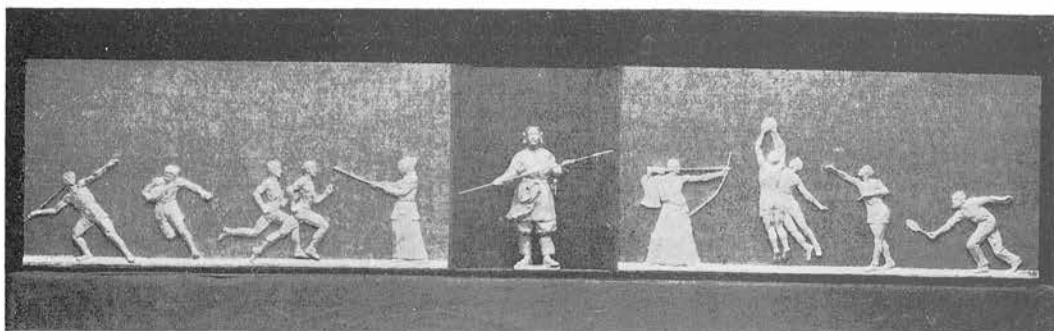
四一八 明けゆく (三部會展) 開發芳光



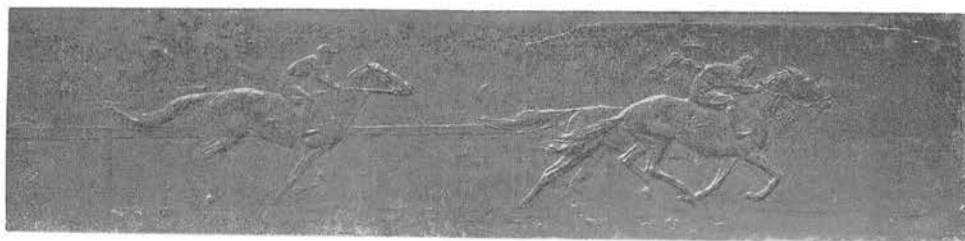
四二二 胸像B (三部會展) 野口安友



四二一 雌雞 (三部會展) 川城良



吉 正 畑 (展會部三) 利 勝 飾装面壁のンロサ館會育體 三二四



八 勇 田 池 (展會部三) ルーゴのービーダ 四二四



四二八 母と子(二科展) 松村外次郎



四二六 若き女(二科展) 上田 曉



四二七 女の胸像(二科展) 土田 實



四二五 加藤元帥銅像(三部會展) 上田 直次

四二九 男の首(二科展) ザツキン



四三〇 少年工(二科展) 笠置季雄



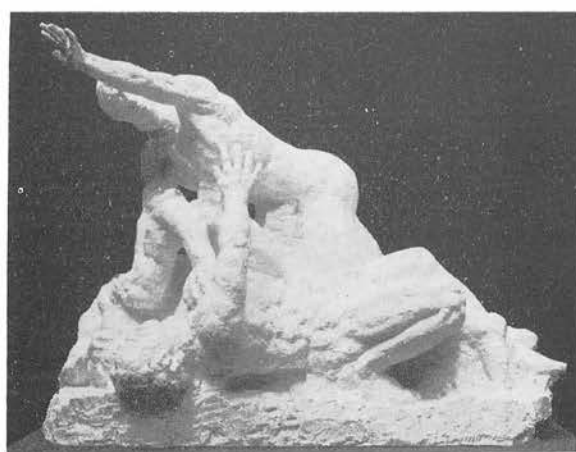
四三一 首(院展) 長谷川豊雄



四三二 彫刻家(二科展) 渡邊義知



四三三 闘争(二科展) 川崎榮一



四三四 大魚先生(院展) 關谷 充





四三八 吉岡訓導殉難群像(院展) 保田龍門



四三五 老婦袒裼(院展) 石井鶴三



四三六 おのころ島由來(院展) 山本豊市



四四〇 少女立像(院展) 松原松造



四三九 明暗相(三部作ノ内宇受賣)(院展) 中村直人



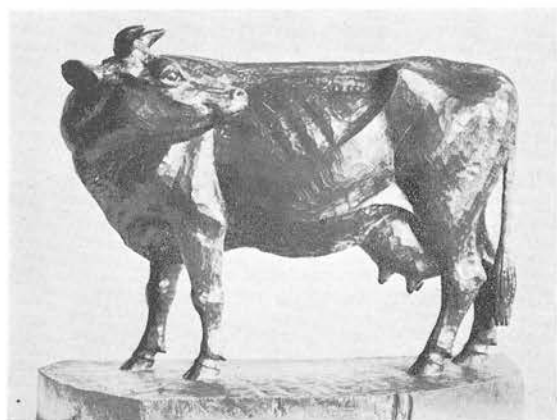
四三七 青年(院展) 武井直也



四四四 平安老母(院展) 平柳田中



圖青內大(展院)人夫耶摩母佛 一四四



四四五 乳牛(院展) 宮本理三郎



四四二 蚊相撲(院展) 入江美法



四四七 旅人芭蕉像(院展) 宮本重良



四四六 迦陵仙(院展) 吉田白嶺



四四三 試作(院展) 新海竹藏



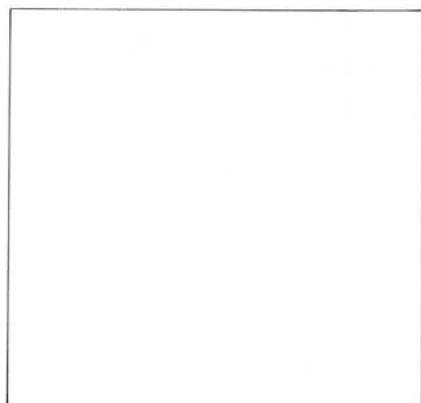
四五三 鐵工（文展鑑査展） 藤野舜正



四五一 薔苑（文展鑑査展） 中野四郎



四四八 海邊（文展鑑査展） 山内倉藏



四四九 かわうそ（文展鑑査展） 佐藤靜司



四五四 腰かけた女（文展鑑査展） 星野直弘



四五二 少女像（文展鑑査展） 高橋英吉



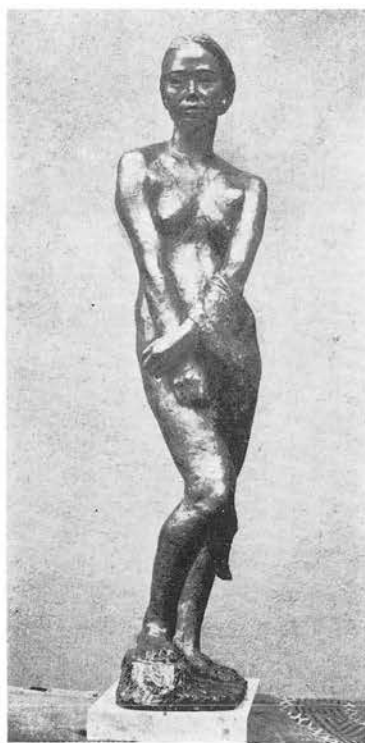
四五〇 働キニ行ク男（文展鑑査展） 吉田敬示



四五九 雪ぞら (文展鑑査展) 太田南海



四五五 銀線を描く (文展鑑査展) 宮本朝詩



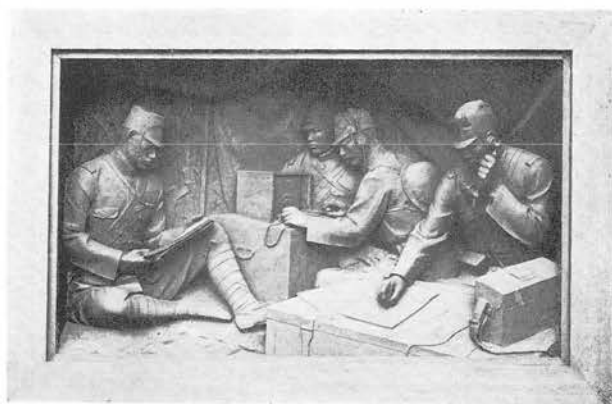
四六〇 十七の女 (文展招待展) 建畠大夢



四五七 寶華素影 (文展招待展) 長谷川榮作



四五六 眼 (日本木彫會展及文展鑑査展) 山口四郎



四五八 陸軍電信兵 (文展招待展) 一色五郎



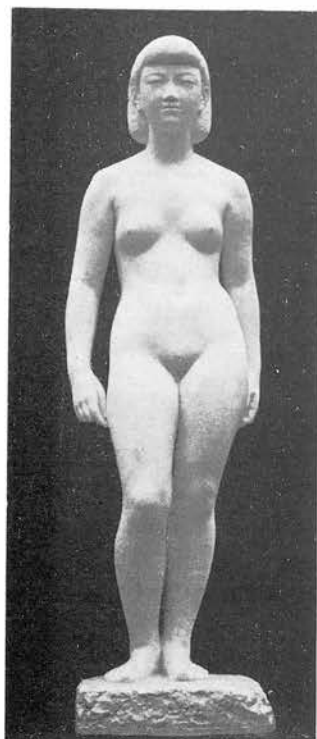
四六五 菅 公(文展招待展) 山崎朝雲



伸 藤 内 (展招待展文) (部一ノ其)原河安之天 一六四



四六二 手 鏡(文展招待展) 藤井浩祐



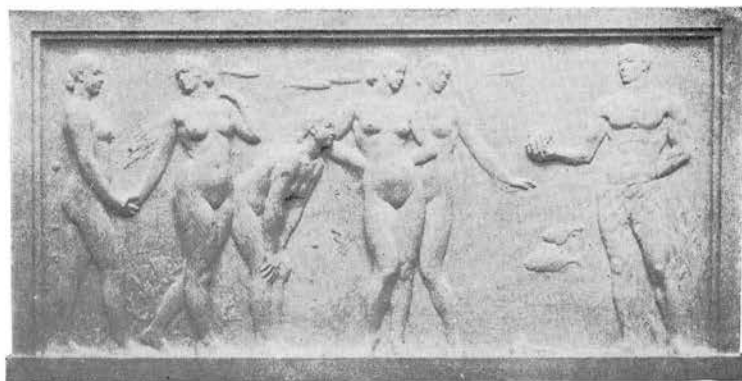
四六六 裸女(文展招待展) 國方林三



四六四 フロラリヤ(文展招待展) 安永良徳



四六三 女の群(文展招待展) 野村公雄



巖 素 藤 齋 (展待招展文) 貝 七六四



四七一 羞
恥 (文展招待展) 北村 正信



四六九 胸像 (文展招待展) 安 藤 照



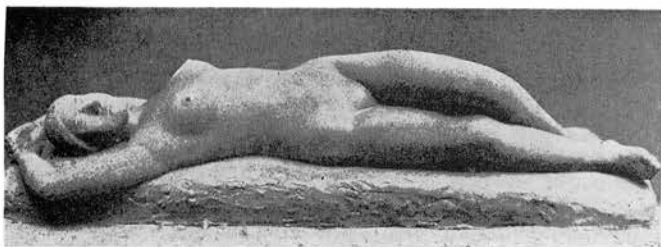
四六八 寶生重英匠能姿國橋 (文展招待展) 後 藤 良



四七二 丹花綻ぶ (文展招待展) 三 木 宗 策



四七〇 九世團十郎之像 (文展招待展) 朝 倉 文 夫



達 室 小 (展會協術美線主) 夏 五七四

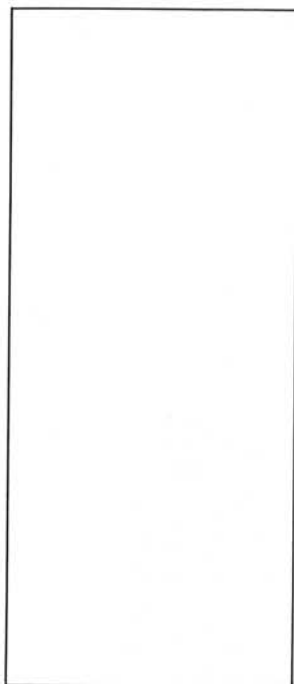


四七三 旭日登天(文展招待展) 北村 西望



四七六 胸像(主線美術協會展) 藤澤 古實

四七八 立 像(主線美術協會展) 村田 勝四郎



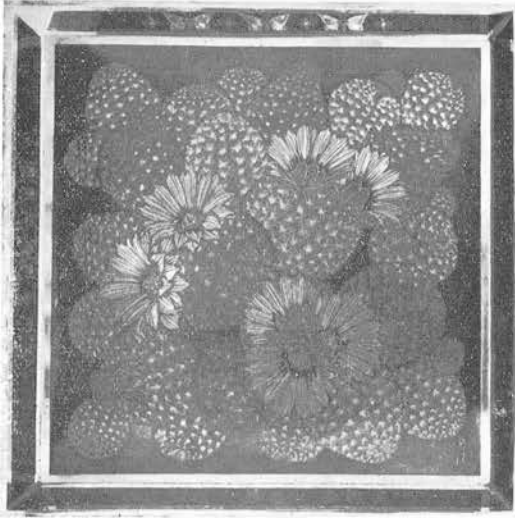
四七九 母と子(新構造社展) 寺 畑 助之丞



四七七 トルソ(主線美術協會展) 安藤 照



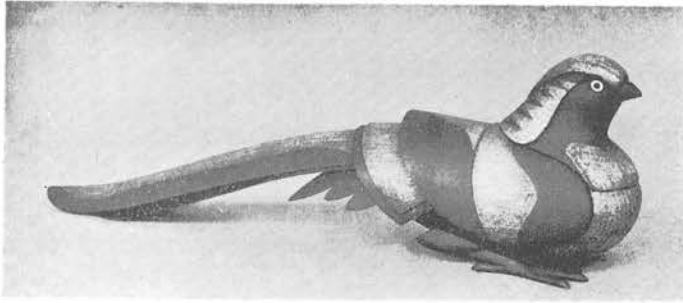
四七四 つ め(文展招待展) 三 國 慶 一



四八三 彫金仙人掌文香盆（帝展） 大須賀 喬



曼安本山（展帝）師法藏三〇八四



大蘇安井三（展帝）爐香雄錦金銀饌 四八四



四八一 黃銅栴檀形花瓶（帝展） 杉田 禾堂



四八五 鑄銅瓶掛（帝展） 香取 正彦



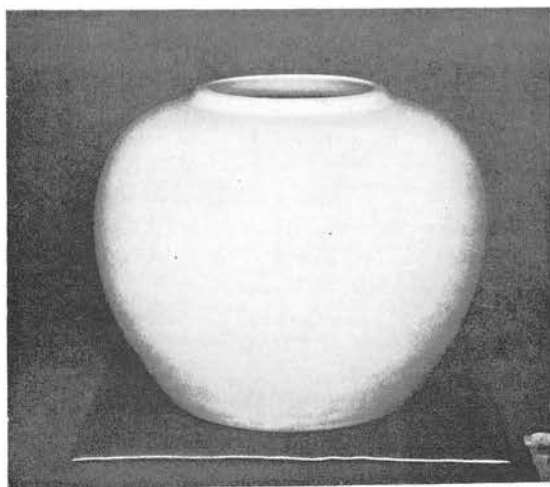
四八二 鑄銅柳鶯繪花瓶（帝展） 山本自爐



四八九 陶器 瑠璃水注 (帝展) 新開邦太郎



藏龜水清 (展帝) 屏風圖の撰相胸 六八四



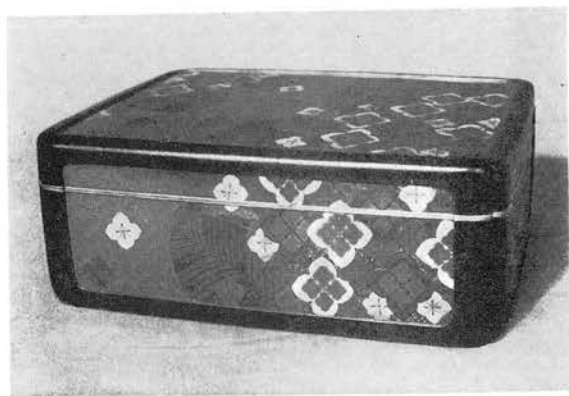
四九〇 白磁大壺 (帝展) 富本憲吉



四八七 曜變磁瓶首花瓶 (帝展) 板谷波山



四九一 耀星花瓶 (帝展) 清水六兵衛



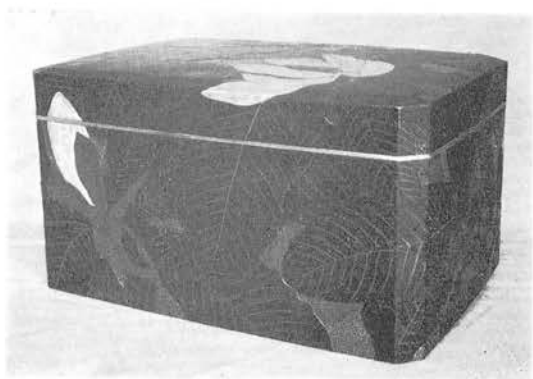
城霞村奥 (展帝) 箱手花陽紫器漆 八八四



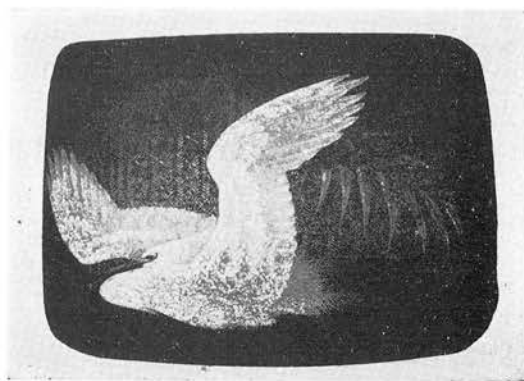
四九五 乾漆花文飾壺（未完）（帝展） 故赤塚自得



二九四 漆器春融白映手篋（帝展） 平館酒



六九四 漆器朴花文庫（帝展） 大下雪香



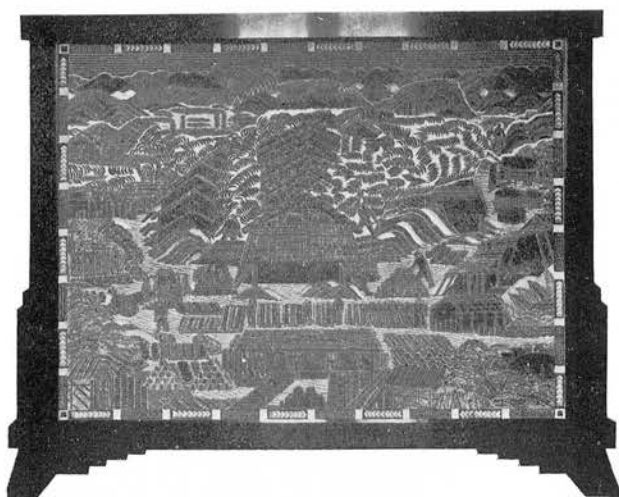
三九四 漆器鸛文庫（帝展） 松田權六



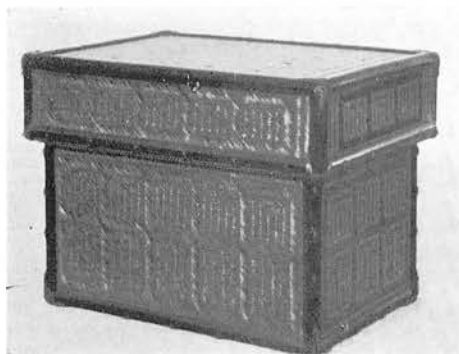
四九七 漆あざみ棚（帝展） 吉田源十郎



四九四 蝦蟇様蒔繪手箱（帝展） 高野松山



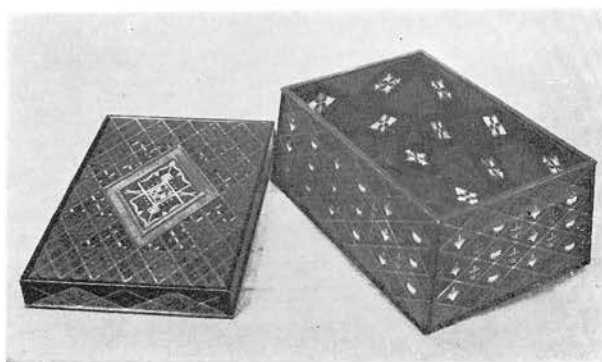
洞霞井櫻 (展帝) 立漸色染景風戸瀬 一〇五



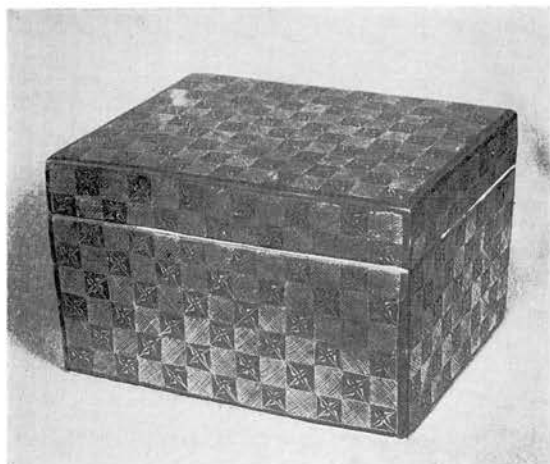
四九八 竹茶籠 (帝展) 飯塚琅玕



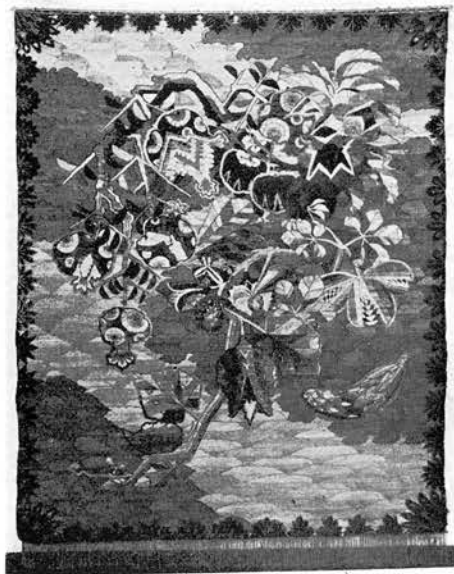
五〇二 鐵繪壺 (國畫會展) 澤田庄司



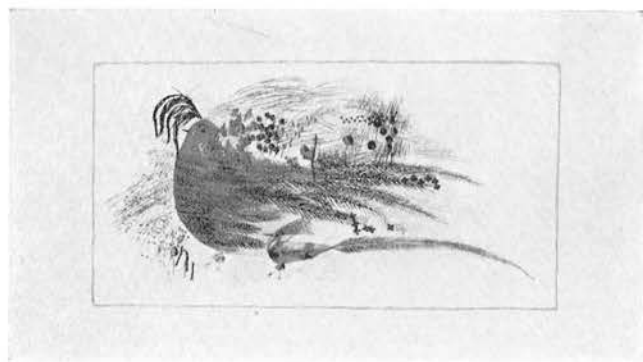
里千春木箱 (展帝) 宮製木 九九四



五〇三 金欄手大角箱 (國畫會展) 富本憲吉



五〇〇 手織綿木の實敷物 (帝展) 山鹿清華



場驗試織染都京 (展工商) 額飾繡刺圖ノ鳥 六〇五



五〇七 果物文沈金手箱(商工展)

塚田重吉
大良



五〇四 クリスタル硝子花瓶(商工展) 各務 鑑三

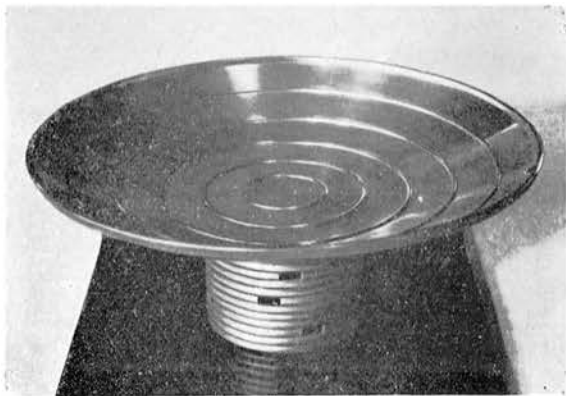


五〇八 象嵌吉壇(商工展)

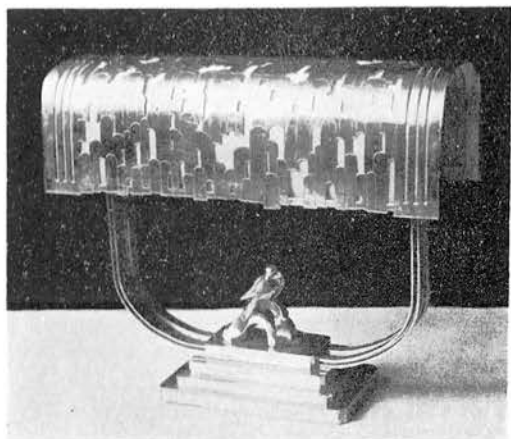
官之原 謙



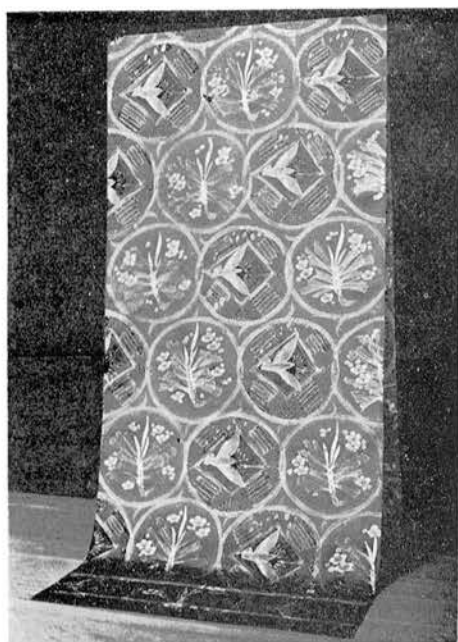
秋 藤 田 豊 (展工商) 器 花 五〇五



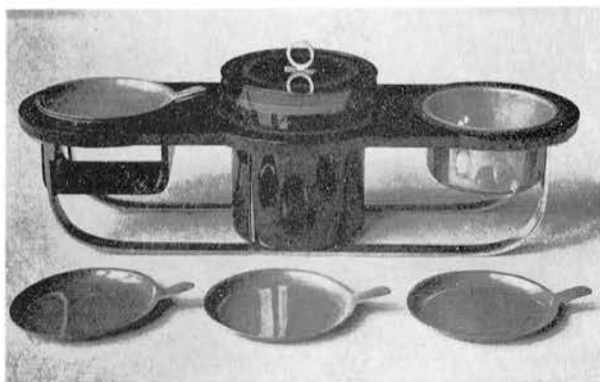
周 豐 村 高 (展會術美藝工在實) 盛實果銀洋 二一五



五〇九 電氣スタンド (實在工藝美術會展) 内藤春治



五一三 縐子丸帯 (實在工藝美術會展) 廣川松五郎



郎太覺崎山 (展會術美藝工在實) 具煙喫 〇一五



九一

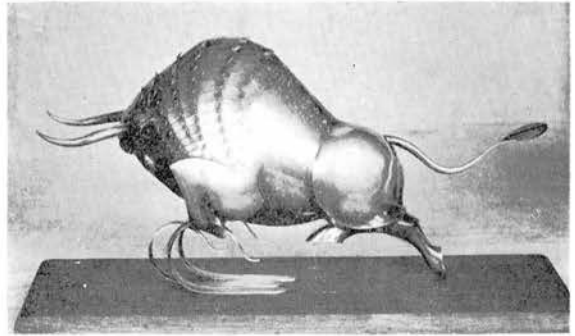
五一四 銘銅とんぼ文花瓶 (文展鑑査展) 渡邊紫鳳



五一 青銅花瓶 (文展鑑査展) 林萬壽人



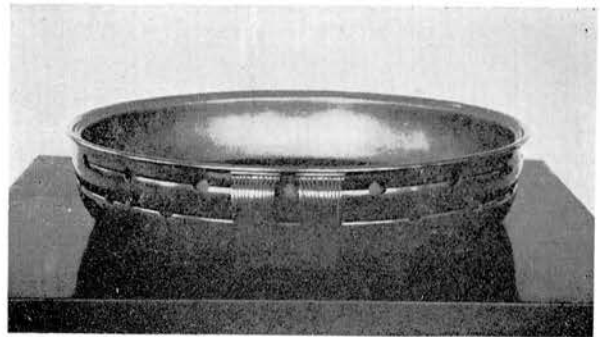
大森光彦 (展覧鑑査文) 指水文草製陶 八一五



山脇洋二 (展覧鑑査文) 物置牛野金鋳 五一五



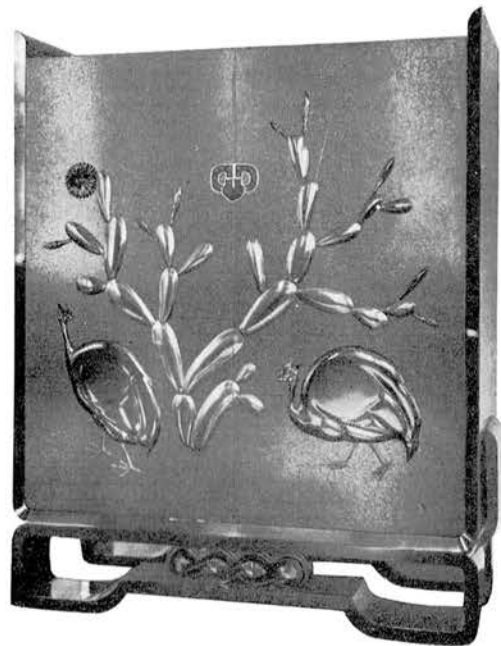
五一九 紅葉葵繪花瓶 (文展鑑査展) 近藤悠三



廣瀬英五郎 (展覧鑑査文) 盤水銅青 六一五



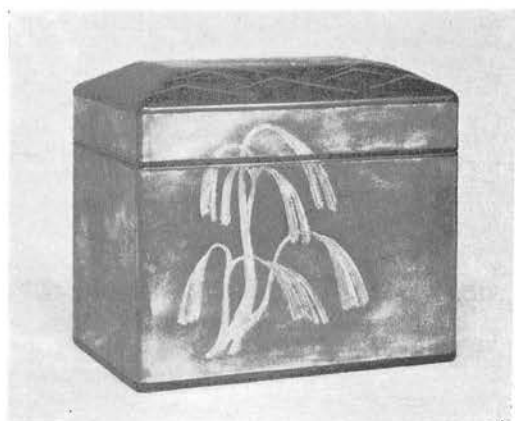
五二〇 金錯芙蓉紋花瓶 (文展鑑査展) 山本純民



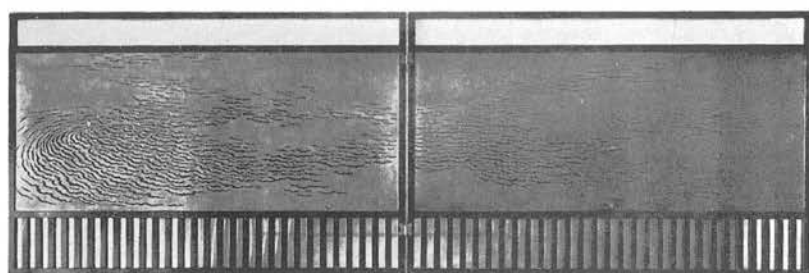
五二七 漆サボテンにオロオロ鳥飾棚 (文展鑑査展) 磯井如真



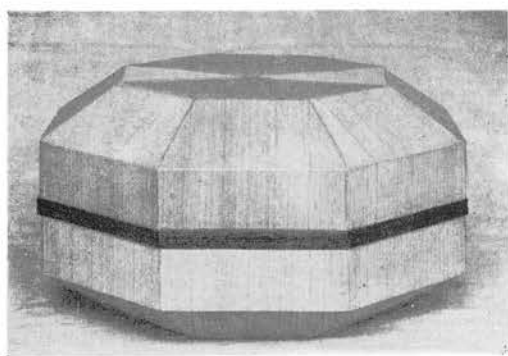
五二二 草花圖彩漆衝立(文展鑑査展) 番通青苔



四 藤 内 (展査鑑展文) 箱小脱平文波柳 一二五



山 尾 田 越 (展査鑑展文) 風屏先爐風波々漆 三二五



齊 謹 柳 青 (展査鑑展文) 篋り造め提挽 四二五



五二六 漆器鶴手箱(文展鑑査展) 河面冬山



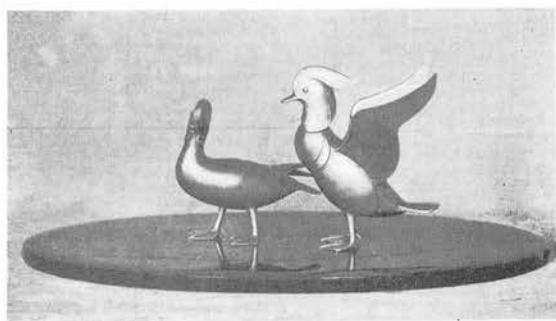
一 健 澤 福 (展査鑑展文) 立衝秋春器漆 五二五



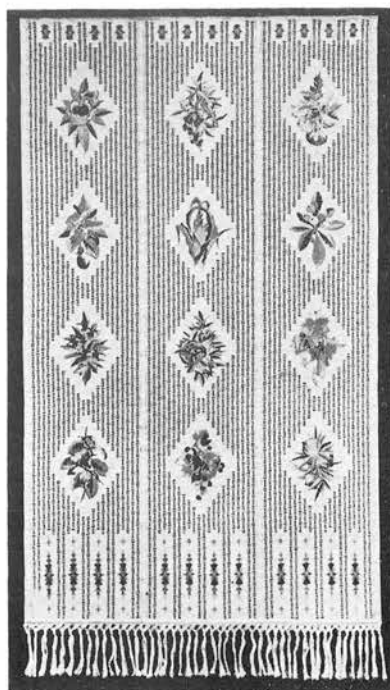
五三〇 吹込み硝子花瓶（文展招待展） 岩田 肇七



助之友合小（展査鑑展文）風屏圖之川山北洛 七二五



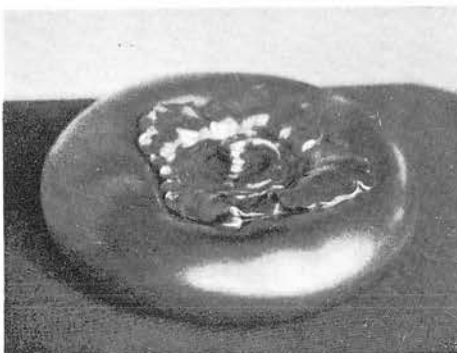
堂象木々佐（展待招展文）物置鶯鷺銀蹄 一三五



五二八 みのり刺繡壁掛（文展鑑査展） 平野 利太郎



五三二 金銀彩鹿文花瓶（文展招待展） 北原 千庵



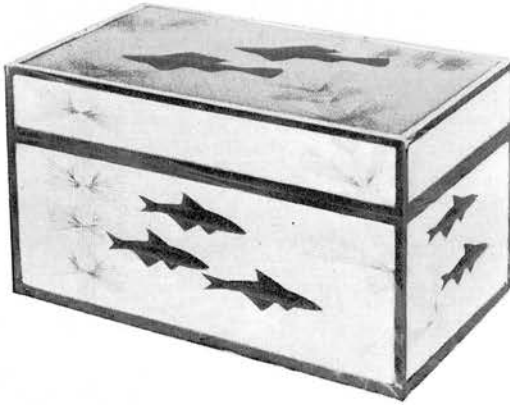
五二九 柿香盆（文展招待展） 船越 春根



五三六 建築天鷲絨胸繖
鳩之圖額 (個展)
鹿島英二



五三三 青金色繪瓶 (文展招待展) 海野清



五三七 硝子魚文飾箱 (文展招待展)
各務藏三



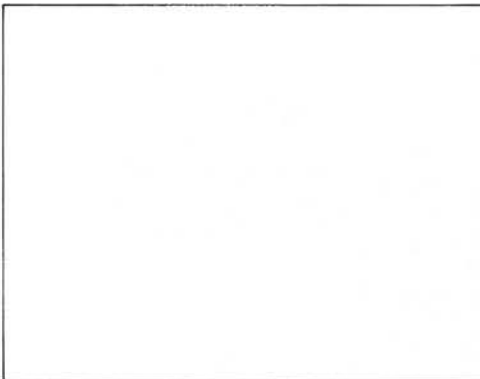
五三八 紫翠渤花瓶 (文展招待展) 清水正太郎



五三四 陶甗飛渤花瓶 (文展招待展) 清水六兵衛



五三五 青銅獅子鈕水次 (工藝濟々會展) 香取秀真



五三九 双鶴圖圓硯宮 (工藝濟々會展)
堆朱楊成



面東南棟病二第室病科內院醫屬附部學醫大京 ○四五



計設課築建所務事良改京東省道鐵 館物博道鐵 一四五



五四三 新舞子水族館中央ホール 久米権九郎設計 新建築社寫眞



眞寫社界世築建 計設郎七子木 所察診來外院病社字十赤本日 二四五

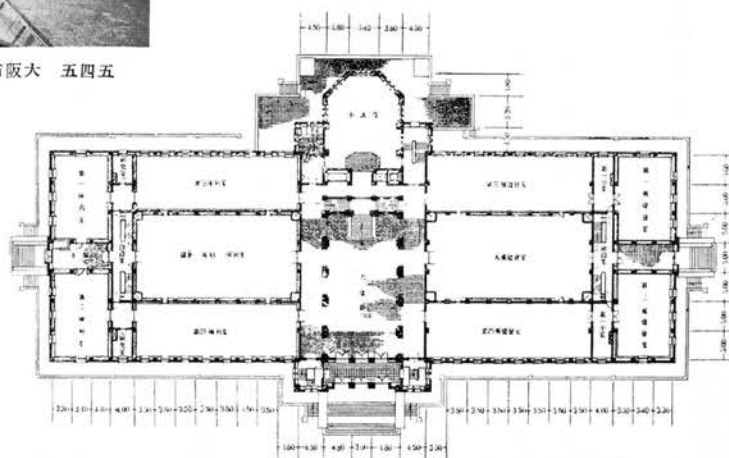


設計課繕營市阪大

面正館術美市阪大 四四五



室列陳館術美市阪大 五四五



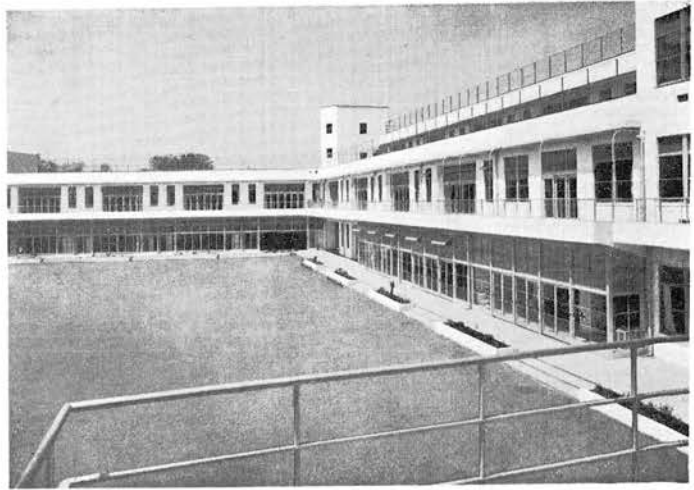
一階平面圖

圖面平階一館術美市阪大 六四五



設計監順田和

店支機構社會式株郵本日本 七四五



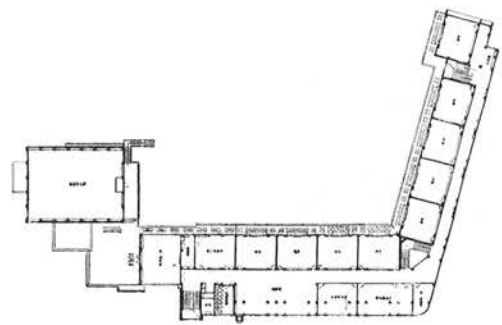
影撮雄義邊渡

計設郎吉口谷 景全舎稚幼藝義座歴 八四五



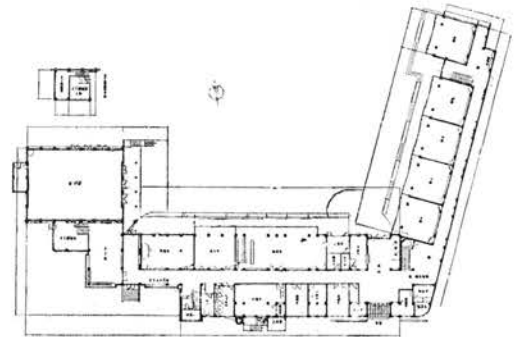
五五〇 野々宮ビルディング正面外観 上浦勉城設計

新建築社写真



二階平面図

2nd floor plan



一階平面図

1st floor plan

五四九 同上平面図

新建築一三ノ五ヨリ轉載

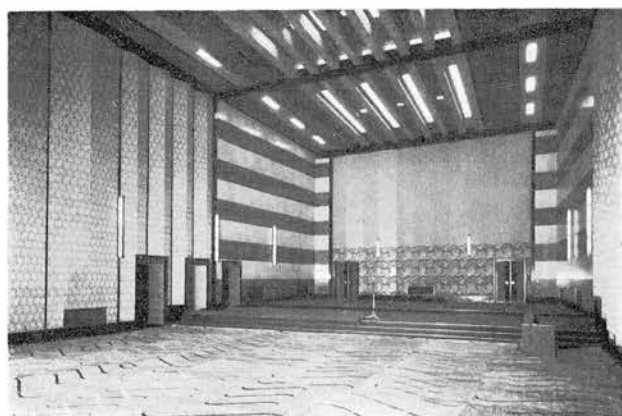


眞寫社築建新

室號一階七・六・五グンイデルビ宮々野 一五五



設計 渡邊 仁 面正館會送放阪大 三五五



五五四 同上第一演奏室正面

二三四階平面圖



五五二 野々宮ビルディング平面圖

一階平面圖



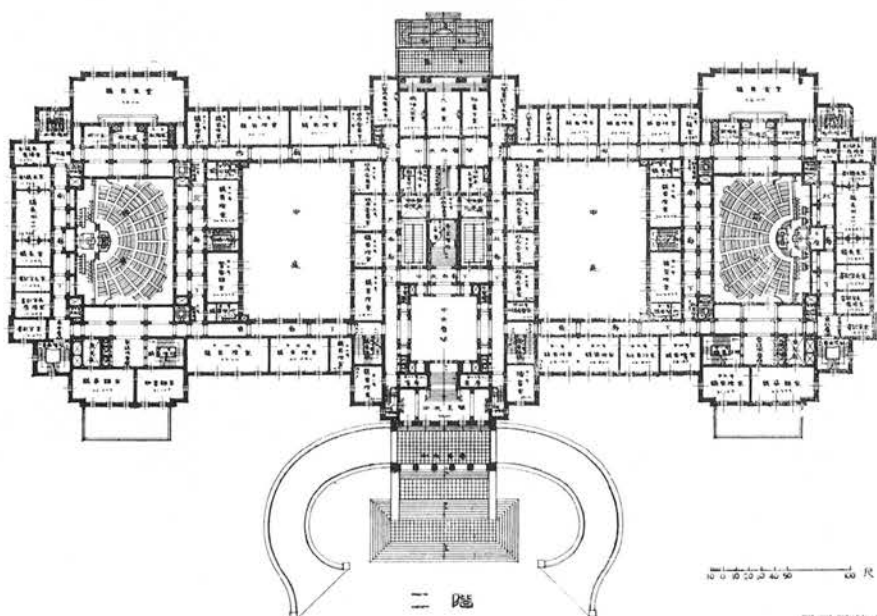
新建築二二ノ一〇ヨリ轉載



五五五 同上第一階廣間

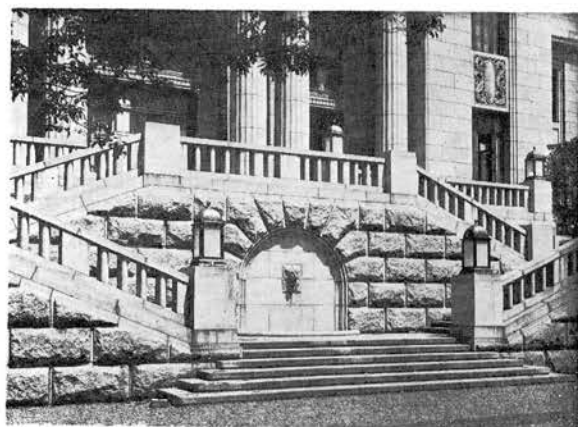


景全面正堂事議會議國帝 六五五



五五七 同上本館二階平面圖

圖面平館本



五五九 同上西側中央部テラス



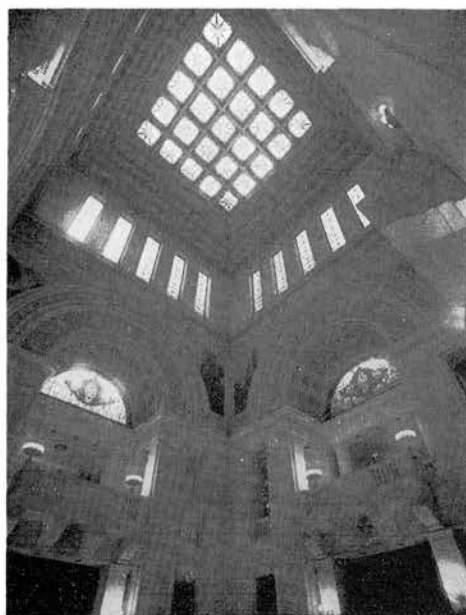
五五八 同上中央車寄



散便同二六五



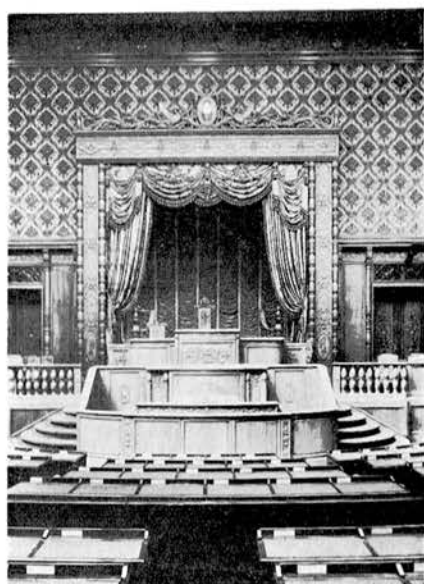
五六〇 同中央廣間



五六三 同帝室階段



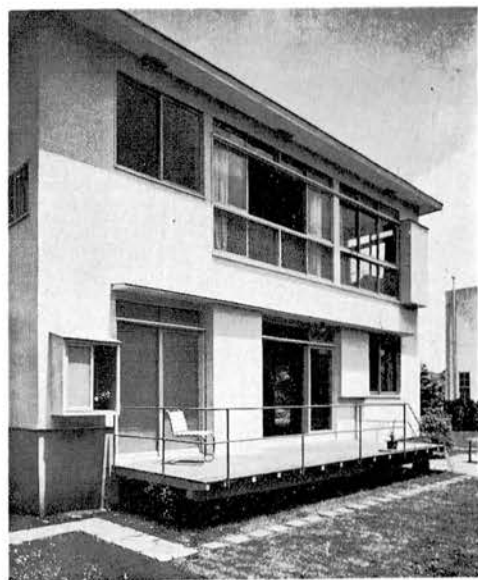
五六一 同中央玄關



五六五 同右正面



席議場議院族貴堂事議會議國帝 四六五

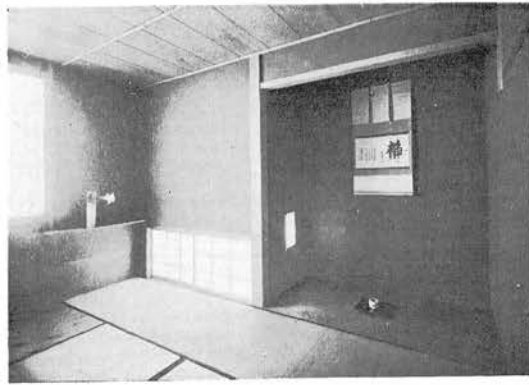


五六七 谷口邸南側外觀 谷口吉郎設計

國際建築協會寫真



トウタ・ノルフ問鎮 計設郎九權米久 觀外間南邸倉大 六六五
眞寫會協築建際國



五六八 谷口邸二階客間 國際建築協會寫真

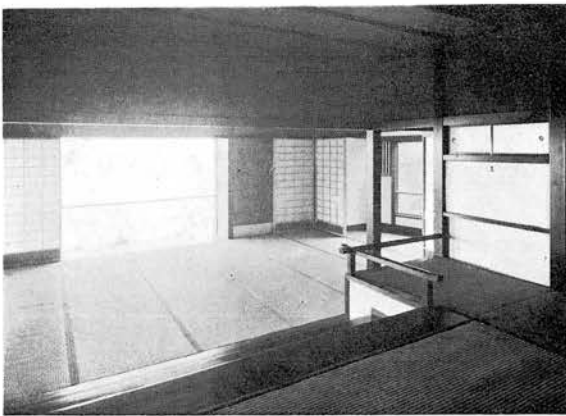


眞寫社世界建築 計設八十五田吉 面庭邸川山 一七五



五六九 同上廣間

國際建築協會寫真



眞寫會協築建際國 計設トウタ・ノルブ 間本日邸別向日 二七五



五七〇 同上一階及二階平面圖

法隆寺修理状況

(本欄一八四頁参照)

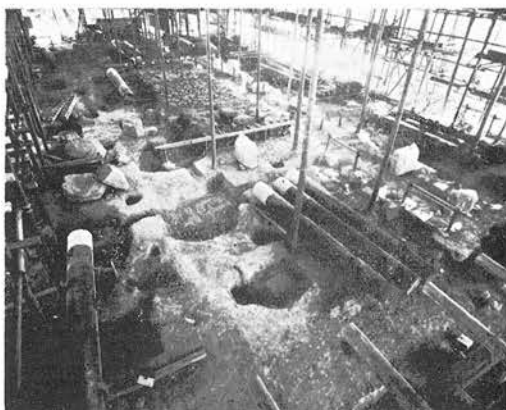


堂圓西ノ工竣理修 三七五

五七七 同前(其ノ四)



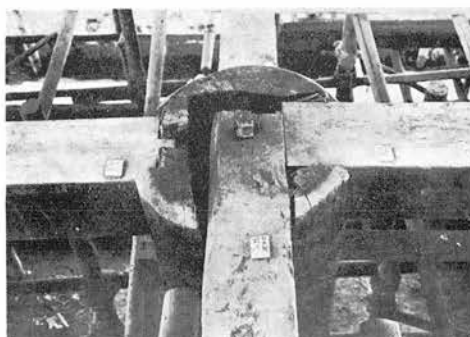
五七四 解体セル大講堂(其ノ一)



五七八 同上(其ノ五)



五七五 同上(其ノ二)



五七九 同上(其ノ六)



五七六 同上(其ノ三)



五八〇 同上(其ノ七)



五八一 修理中ノ姫路城ノ渡櫓
(本欄一八五頁参照)



五八二 修理竣工ノ石手寺塔婆
(本欄一八四頁参照)



五八三 藤原京發掘(其ノ一) 發掘地城ノ大觀
(本欄一八三頁参照)

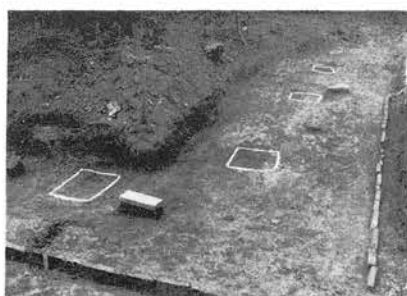


石栗メ固根(二ノ其)上 同 四八五



(三ノ其)上 同 五八五
例一ノ石礎ルダレサ動移

五八六 朝鮮扶餘發掘(其ノ一)
塔址基壇ノ一部ト木炭區ノ配列



五八七 同上(其ノ二)
金堂址南側ノ瓦積



五八八 同右(其ノ三) 石製如來像



五八九 同右(其ノ四) 金銅菩薩像



(本欄一七九頁参照)



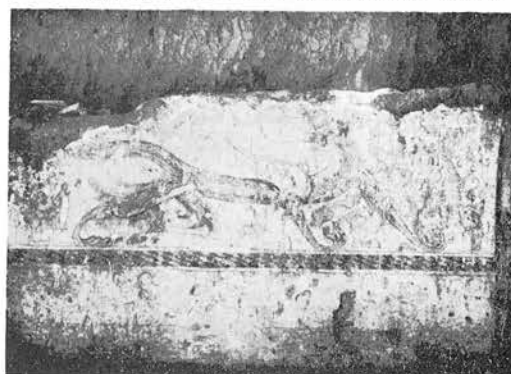
景全西南（一ノ其）墳號一第里内面足柴 四九五



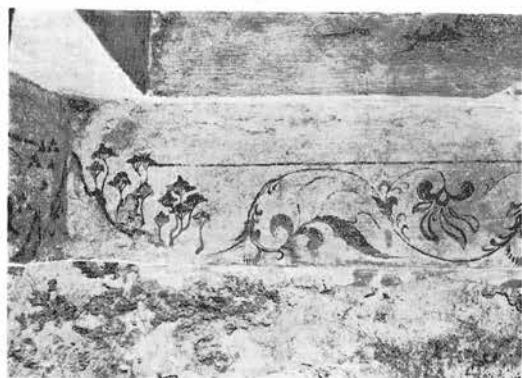
景全面西（一ノ其）墳號一第里山高原林 〇九五



壁北一畫彩送持井天室玄（二ノ其）上 同 五九五



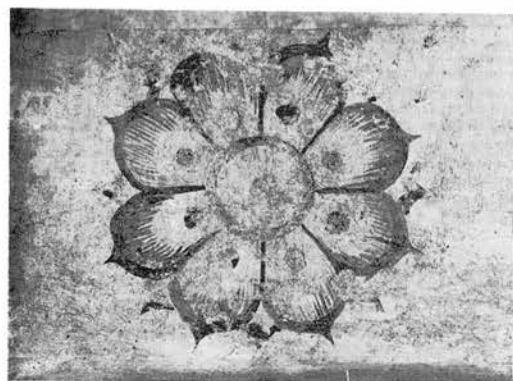
龍青一畫壁壁東室玄（二ノ其）上 同 一九五



畫彩隅北東層下送持室玄（三ノ其）上 同 六九五



武玄一畫壁壁北室玄（三ノ其）上 同 二九五



文華運送持室玄（四ノ其）上 同 七九五



部 細 （三ノ其）上 同 三九五

五九八 中條精一郎 一月三十日逝去



五九九 赤塚自得 二月一日逝去



六〇〇 河合新藏 二月二十五日逝去



六〇一 石川寒巖 三月二十五日逝去



六〇二 紀 淑雄 四月十五日逝去



六〇三 佐分 眞 四月二十三日逝去



六〇四 尾竹竹坡 六月二日逝去



六〇五 土田菱僊 六月十日逝去



六〇六 富田溪仙 七月六日逝去



六〇七 藤谷國四郎 七月十二日逝去



六〇八 山中定次郎 十月三十日逝去



六〇九 栗原忠二 十一月十二日逝去



便

覽

シタル國寶ノ管理者又ハ神社若ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理者怠慢ニ因リ其ノ管理スル國寶ヲ滅失又ハ毀損スルニ至ラシメタルトキハ五百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十五條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ本法ニ規定スル過料ニ付之ヲ準用ス

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
(昭和四年勅令第百九號ヲ以テ同年七月一日ヨリ施行)

古社寺保存法ハ之ヲ廢止ス

古社寺保存法ニ依リテ特別保護建造物又ハ國寶ノ資格アルモノト定メラレタル物件ハ之ヲ本法ニ依リテ國寶トシテ指定セラレタル物件ト看做ス古社寺保存法ニ依リテ下付シタル保存金ハ之ヲ本法ニ依リテ交付シタル補助金ト看做ス

國寶保存法施行令

昭和四年六月二十九日
勅令 第二百十號

第一條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ出陳セシメタルトキハ當該博物館又ハ美術館ノ長、當該博物館又ハ美術館ノ長故障アルトキハ當該職制ノ定ムル所ニ依リ其ノ職務ヲ代理スル者ニ於テ出陳國寶ヲ管理ス
前項ノ管理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス

第二條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ

テ博物館又ハ美術館ニ出陳シタル國寶ノ出陳ニ要スル荷造運搬費等ハ當該博物館又ハ美術館ニ於テ負擔スルモノトス返送ニ要スル荷造運搬費等亦同ジ

第三條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケタル國寶ノ維持修理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス

文部大臣ハ前項ニ規定スル權限ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

第四條 文部大臣國ノ所有ニ屬スル物件ヲ國寶トシテ指定シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所管大臣ニ通知スベシ國ノ所有ニ屬スル國寶ノ指定解除ヲ爲シタルトキモ亦同ジ

第五條 國ガ其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分シ、輸出若ハ移出シ又ハ其ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所管大臣ニ於テ文部大臣ノ同意ヲ得ベシ

第六條 文部大臣前條ノ規定ニ依ル同意ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ

第七條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ付滅失、毀損又ハ管理換アリタルトキハ其ノ旨ヲ所管大臣ヨリ文部大臣ニ通知スベシ國ガ國寶ヲ取得シタルトキ亦同ジ

附 則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)

明治三十年勅令第四百四十六號ハ之ヲ廢止ス

國寶保存法施行規則

昭和四年六月二十九日
文部省令第三十七號

第一條 文部省ニ國寶臺帳ヲ備ヘ國寶ヲ登錄ス

第二條 國寶臺帳ニハ左ノ事項ヲ記載シ寫眞ヲ添付ス

建造物ノ類ニ付テハ

一 名稱及所在地

二 所有者ノ氏名(名稱)及住所

三 員數

四 構造及形式

五 大サ

六 創建及沿革

七 其ノ他參考トナルベキ事項

八 實物ノ類ニ付テハ

一 名稱

二 所有者ノ氏名(名稱)及住所

三 種類

四 員數

五 品質

六 形狀

七 法量

八 作者及傳來

九 其ノ他參考トナルベキ事項

第三條 國寶ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 輸出又ハ移出ノ期間

三 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地

四 荷造運搬ノ方法

五 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

六 保險ノ方法

七 摸寫模造等ニ關スル約束アラバ之ニ關スル事項

第四條 國寶ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ運搬ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第五條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 現狀ノ變更ニ關スル設計仕様、計畫圖並ニ工事擔當者ノ氏名(名稱)

三 建造物ノ類ニシテ位置ノ變更ヲ生ズル場合ニ在リテハ其ノ移轉先

四 著手ノ時期及竣成期限

第六條 國寶ノ現狀變更ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ノ現狀變更ヲ竣リタルトキハ實施仕様書、寫眞並ニ圖面ヲ添ヘ運搬ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第七條 國寶ノ所有者其ノ氏名(名稱)又ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

國寶ヲ取得シタル者ハ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日內

ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

國寶滅失又ハ毀損シタルトキハ國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ出陳中ニ係ル場合ヲ除クノ外所有者ヨリ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ滅失又ハ毀損ノ事實ヲ知リタル日ヨリ

五日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

第八條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ヲ受領シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ所有者ニ受領證書ヲ交付シ返付スルトキハ之ト引換フベシ

第九條 前條ノ國寶ヲ受領又ハ返付シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ都度文部大臣ニ報告スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十條 第八條ノ國寶滅失又ハ毀損シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ直ニ文部大臣ニ報告シ且所有者ニ通知スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十一條 國寶保存法第八條ノ規定ニ依リテ支給スベキ補給金ハ國寶一件ニ付一年六圓以上百圓以下トシ文部大臣ニ於テ出陳ヲ命ズル都度之ヲ定ム
前項ノ補給金ノ支給ニ付テハ月割ヲ以テ計算シ一月ニ滿タザル日數ハ之ヲ一月ト看做ス

第十二條 國寶保存法第九條ノ規定ニ依

ル補償ヲ受ケントスルトキ滅失又ハ毀損シタル國寶ノ所有者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ申請スベシ

一 國寶ノ名稱及員數

二 國寶ヲ出陳シタル博物館又ハ美術館ノ名稱及所在地
三 滅失又ハ毀損スルニ至リタル事由

並ニ毀損ニ付テハ其ノ程度

第十三條 國寶ノ指定解除アリタルトキハ國寶臺帳ヨリ當該國寶ノ登錄ヲ抹消ス

第十四條 國寶保存法第十二條但書ノ規定ニ依リテ別ニ管理者ヲ定メントスルトキハ當該神職又ハ住職(佛堂ニ在リテハ受持僧侶)ニ於テ其ノ事由ヲ具シ新ニ管理者ト爲ルベキ者ト連署ノ上文部大臣ニ申請スベシ

第十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 處分ノ方法

三 對價、報酬又ハ之ニ準ズベキモノ

四 處分ノ相手方ノ氏名(名稱)及住所

五 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十六條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ擔保ニ供セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルト

キ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 擔保ノ期間

三 擔保權者ノ氏名(名稱)及住所
四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十七條 國寶ヲ擔保ニ供スル許可ヲ受ケタル神社又ハ寺院當該國寶ヲ擔保ニ供シ又ハ擔保契約ヲ解除シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第十八條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ

一 維持修理スベキ國寶ノ名稱及員數
二 維持修理ニ要スル工費豫算、設計仕様並ニ計畫圖及寫眞

三 著手ノ時期及竣成期限

四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十九條 國寶ノ維持修理費ニ對シ國庫ヨリ補助金ヲ交付スル場合ニ於テハ當該國寶ノ所有者ハ少クトモ維持修理費總額ノ百分ノ五十ヲ負擔スベキモノトス但シ特別ノ事情アルモノニ限り其ノ負擔ヲ輕減スルコトヲ得

第二十條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ管理方法ヲ定メ地方長官ノ許可ヲ受ケベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

第二十一條 補助金ノ交付後ニ於テ設計仕様又ハ著手ノ時期若ハ竣成期限ノ變

更ヲ要スルトキハ其ノ事由及變更設計仕様並ニ計畫圖ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受ケベシ

文部大臣必要ト認ムルトキハ前項ノ規定ニ拘ラズ設計仕様ノ變更ヲ命ズル事ヲ得

第二十二條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ國寶ノ維持修理竣リタルトキヨリ二月內ニ實施仕様書、寫眞、圖面並ニ精算書ヲ添ヘ文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十三條 本令ノ規定若ハ補助金交付ノ條件ニ違反シ又ハ補助金交付ノ目的ヲ遂行スルコト能ハズト認ムルトキハ文部大臣ハ補助金ノ全部又ハ一部ノ返還ヲ命ズルコトヲ得

第二十四條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理不適當ニシテ滅失又ハ毀損ノ虞アリト認ムルトキハ文部大臣ハ其ノ管理方法ヲ指定スルコトヲ得

第二十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ博物館、美術館又ハ之ニ準ズベキ場所ニ出陳シ其ノ他當該神社又ハ寺院外ニ搬出セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受ケベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 搬出ノ期間

三 搬出先ノ場所及其中ノ所在地

四 荷造運搬ノ方法

五 搬出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第二十六條 前條ノ規定ニ依リテ許可ヲ

受ケタル神社又ハ寺院當該國寶再ビ當該神社又ハ寺院内ニ搬入シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十七條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ摸寫摸造シ又ハ摸寫摸造ヲ承認セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 摸寫摸造ノ期間

三 摸寫摸造ノ方法

四 摸寫摸造ニ從事スル者ノ氏名及住所

第二十八條 國寶ノ維持修理、現狀變更等ノ場合ニ於テ佛像、經文、器物、銘文、棟札、埋藏物ノ類ヲ發見シタルトキハ當該國寶ノ所有者ヨリ其ノ實況ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十九條 本令ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體ヨリ文部大臣ニ差出ス書類ハ地方長官ヲ經由スベシ第十八條、第二十一條及第二十二條ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體以外ノモノヨリ文部大臣ニ差出ス書類ニ付亦同ジ

附 則
本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)
古社寺保存法施行細則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會官制

昭和四年六月二十九日
勅令第二百一十一號

第一條 國寶保存會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ國寶保存法第一條、第五條、第十一條、第十三條及第十四條ニ規定スル事項其ノ他國寶保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

國寶保存會ハ國寶保存ニ關スル事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 國寶保存會ハ會長一人、副會長一人及委員三十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、副會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

會長及副會長共ニ事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長及副會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 國寶保存會ニ常務委員會ヲ置ク國寶保存會ノ委任ヲ受ケ其ノ權限ニ屬スル事項ノ一部ヲ處理ス常務委員會ハ國寶保存會ノ會長及副會長並ニ國寶保

存會ノ委員ニシテ文部大臣ノ指名シタル者十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第七條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ國寶保存會ノ要求アルトキハ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第八條 國寶保存會ノ議事ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 國寶保存會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長及副會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第十條 國寶保存會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則
本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)
古社寺保存會規則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會職員

會長 侯 細川 護立

委員 三矢 宮松

溝口 積次郎

辻 善之助

濱田 耕作

福井利吉郎

奥田 誠一

德富猪一郎

田中 豐藏

伊東 忠太

塚本 靖

幹事

香取秀治郎

山田準次郎

荻野仲三郎

子 大河内正敏

藤懸 靜也

杉 榮三郎

武田 五一

山田 孝雄

和田 英松

三上 參次

瀧 精一

館 哲二

黒 哲二

高田 休廣

神津 伯

藤島亥治郎

武内 義雄

常盤 大定

新納忠之介

柴沼 直

阪谷良之進

丸尾彰三郎

重要美術品等保存ニ關スル法律

重要美術品等ノ保存ニ關スル法律

昭和八年四月一日
法律第四十三號

第一條 歷史上又ハ美術上特ニ重要ナル價值アリト認メラル物件(國寶ヲ除ク)ヲ輸出又ハ移出セントスル者ハ主

務大臣ノ許可ヲ受クベシ但シ現存者ノ製作ニ係ルモノ、製作後五十年ヲ經ザルモノ及輸入後一年ヲ經ザルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第二條 前條ノ規定ニ依リ其ノ輸出又ハ移出ニ付許可ヲ要スル物件ハ主務大臣之ヲ認定シ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知スベシ

前項ノ規定ニ依リ認定ノ告示アリタルトキハ賣買、交換又ハ贈與ノ目的ヲ以テ當該物件ノ寄託ヲ受ケタル占有者ハ其ノ認定アリタルコトヲ知リタルモノト推定ス

第三條 主務大臣第一條ノ規定ニ依リ許可ノ申請アリタル場合ニ於テ許可ヲ爲サザルトキハ許可申請ノ日ヨリ一年ヨリ長カラザル期間内ニ當該物件ヲ國寶保存法第一條ノ規定ニ依リテ國寶トシテ指定シ又ハ前條ノ規定ニ依リ認定ヲ取消スベシ

第四條 認定、其ノ取消及第二條ノ規定ニ依リ認定物件ノ所有者ニ付變更アリタル場合ノ届出ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 主務大臣ノ許可ナクシテ第二條ノ規定ニ依リ認定物件ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ三年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

附 則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

重要美術品等ノ保存ニ關スル法律施行規則

昭和八年四月一日
文部省令第十號

第一條 昭和八年法律第四十三號（以下單ニ法ト稱ス）第二條ノ規定ニ依リ認定ヲ爲ス物件概ネ左ノ如シ

- 一 繪畫
- 二 彫刻
- 三 建造物
- 四 文書
- 五 典籍
- 六 書蹟
- 七 刀劍
- 八 工藝品
- 九 考古學資料
- 第二條 重要美術品等ノ所有者、管理者又ハ占有者ハ當該吏員ノ請求アリタルトキハ法第二條ノ規定ニ依リ認定（以下單ニ認定ト稱ス）ノ前後ヲ問ハズ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ムコトヲ得ズ但シ正當ノ事由アル場合ハ此ノ限ニ在ラズ
- 第三條 重要美術品等ニ付認定ヲ受ケントスル者ハ左ノ事項ヲ具シ現狀ノ寫眞ヲ添付シテ文部大臣ニ申請スベシ
- 一 名稱
- 二 所有者ノ氏名（名稱）及住所
- 三 種類
- 四 員數
- 五 品質

六 形狀
七 法量
八 作者及傳來

前項ノ申請アリタル場合ニ於テ必要アルトキハ文部大臣ハ當該物件ヲ文部省ニ提出セシムルコトヲ得

第四條 法第二條ノ規定ニ依リ認定物件（以下單ニ認定物件ト稱ス）ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

- 一 認定物件ノ名稱及員數
- 二 輸出又ハ移出ノ期間
- 三 輸出又ハ移出港
- 四 輸出先又ハ移出場所及其ノ所在地
- 五 荷造運搬ノ方法
- 六 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第五條 認定物件ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受ケタル者當該物件ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ運搬ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第六條 認定物件ノ所有者其ノ氏名（名稱）又ハ住所變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

認定物件ヲ取得シタル者ハ當該物件ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

認定物件滅失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シキ現狀變更アリタルトキハ所有者ヨリ其ノ事由、實況並ニ認定物件ノ名稱及員數ヲ具シ滅失、毀損又ハ現狀變更ノ事實ヲ知リタル日ヨリ五日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

第七條 認定物件が國寶保存法第一條ノ規定ニ依リ國寶トシテ指定セラレタルトキハ其ノ認定ハ取消サレタルモノト看做ス

法第三條ノ規定ニ依リ認定取消ノ外認定物件滅失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シキ現狀變更アリタルトキ其ノ他正當ノ事由アルトキハ文部大臣其ノ認定ヲ取消スコトヲ得

前二項ノ規定ニ依リ認定取消アリタルトキハ其旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

第八條 第二條ノ規定ニ違反シ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ミタル者ハ拘留又ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第九條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

附 則

本令ハ昭和八年法律第四十三號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

重要美術品等調査委員會規程

昭和八年四月十一日
文部省訓令第九號

第一條 重要美術品等調査委員會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ重要美術品等ノ保存ニ關スル法律（以下單ニ法ト稱ス）第一條ノ規定ニ依ル輸出及移出ノ許可並ニ法第二條ノ規定ニ依ル認定（以下單ニ認定ト稱ス）及其ノ取消ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條 重要美術品等調査委員會ハ會長一人及委員二十五人以內ヲ以テ之ヲ組織ス
特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣之ヲ依囑シ又ハ之ヲ命ズ
第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス
會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得
第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得第七條 重要美術品等調査委員會ノ議事ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム
第八條 重要美術品等調査委員會ニ幹事若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
第九條 重要美術品等調査委員會ニ書記若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ
書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
第十條 文部大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ會長、委員、臨時委員又ハ其ノ他ノ者ヲシテ認定及其ノ取消其ノ他重要美術品等ニ關スル調査ヲ爲サシムルコトヲ得

重要美術品等調査委員會職員

會長 河原 春作
委員 伊東 忠太
子大河内正敏
三矢 宮松
黒板 勝美
濱田 耕作
和田 英松
萩野仲三郎
井上 清
溝口順次郎
奥田 誠一
原田 淑人
藤懸 靜也
神津 伯
香取秀治郎
佐々木信綱
阪谷良之進
丸尾彰三郎

文部技師 文部省國寶鑑定官 關保之助

史蹟名勝天然紀念物保存

史蹟名勝天然紀念物保存法

大正八年四月十日
法律第四十四號第一條 本法ヲ適用スヘキ史蹟名勝天然紀念物ハ內務大臣之ヲ指定ス
前項ノ指定以前ニ於テ必要アルトキハ地方長官ハ假ニ之ヲ指定スルコトヲ得

第二條 史蹟名勝天然紀念物ノ調査ニ關シ必要アルトキハ指定ノ前後ヲ問ハス當該吏員ハ其ノ土地又ハ隣接地ニ立入り土地ノ發掘障礙物ノ撤去其ノ他調査ニ必要ナル行爲ヲ爲スコトヲ得

第三條 史蹟名勝天然紀念物ニ關シ其ノ現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ影響ヲ及ホスヘキ行爲ヲ爲サントスルトキハ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ
第四條 內務大臣ハ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關シ地域ヲ定メテ一定ノ行爲ヲ禁止若ハ制限シ又ハ必要ナル施設ヲ命スルコトヲ得
前項ノ命令若ハ處分又ハ第二條ノ規定ニ依ル行爲ノ爲損害ヲ被リタル私人ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ政府之ヲ補償ス第五條 內務大臣ハ地方公共團體ヲ指定シテ史蹟名勝天然紀念物ノ管理ヲ爲サシムルコトヲ得
前項ノ管理ニ要スル費用ハ當該公共團體ノ負擔トス
國庫ハ前項ノ費用ニ對シ其ノ一部ヲ補助スルコトヲ得第六條 第三條ノ規定ニ違反シ又ハ第四條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者ハ六月以下ノ禁錮若ハ拘留又ハ百圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス
附 則
本法施行ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
（大正八年五月勅令第四百六十一號ヲ以テ同年六月一日ヨリ施行）
古社寺保存法第十九條ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

史蹟名勝天然紀念物保存法施行令

施行令

大正八年十二月二十九日
勅令第四百九十九號

第一條 當該吏員史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依ル行爲ヲ爲サム

トスルトキハ少クトモ三日前ニ關係土地物件ノ所有者及占有者ニ其ノ旨ヲ通知スヘシ

史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依ル行爲ヲ爲ス當該吏員ハ其ノ證券ヲ携帶シ關係者ノ請求アリタルトキハ之ヲ示スヘシ

日出前又ハ日没後ニ於テハ占有者ノ承諾アルニ非サレハ史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依リ邸内ニ立入ルコトヲ得ス

第二條 行政廳史蹟名勝天然紀念物保存法第三條ニ規定スル行爲ヲ爲サントスルトキハ地方長官ノ承認ヲ受クヘシ

第三條 史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依リ古墳ヲ發掘スル場合ニ於テハ當該吏員ハ地方長官ヲ經由シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

史蹟名勝天然紀念物保存法第三條又ハ前條ノ規定ニ依リ古墳ヲ發掘セムトスル場合ニ於テ地方長官許可又ハ承認ヲ與フルトキハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

前二項ノ規定ニ依リ文部大臣認可ヲ爲ス場合ニ於テハ豫メ宮内大臣ニ協議スヘシ

第四條 史蹟名勝天然紀念物保存法第四條第二項ノ規定ニ依リ補償ハ通常生スヘキ損害ニ限り之ヲ爲ス

前項ノ補償ノ額ハ地方長官ト損害ヲ被リタル私人トノ協議ニ依リ之ヲ定ム協議調ハサルトキハ文部大臣鑑定人ノ意

見ヲ徴シ之ヲ決定スヘシ

前項ノ規定ニ依ル決定ニ不服アル者ハ文部大臣ニ訴願スルコトヲ得

第五條 史蹟名勝天然紀念物ニシテ國有地ニ屬スルモノハ文部大臣之ヲ管理ス但シ官用地又ハ國有林ニ屬スルモノニ付テハ主管ノ大臣ト文部大臣ト協議シテ其ノ管理大臣ヲ定ム

第六條 文部大臣ハ史蹟名勝天然紀念物ニシテ國有ニ屬スルモノヨリ生スル收益ヲ管理ノ費用ヲ負擔スル地方公共團體ノ所得ト爲スコトヲ得

第七條 史蹟名勝天然紀念物ノ管理ノ費用ヲ負擔スル地方公共團體ハ其ノ管理スル史蹟名勝天然紀念物ニ付觀覽料ヲ徴收スルコトヲ得

附 則

本令ハ大正九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物保存法

施行規則

大正八年十二月二十九日
內務省令第二十七號

第一條 文部大臣史蹟名勝天然紀念物ノ指定ヲ爲シ又ハ其ノ指定ヲ解除シタルトキハ官報ヲ以テ之ヲ告示ス地方長官

假指定ヲ爲シ又ハ其ノ假指定ヲ解除シタルトキ亦同シ但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認メタルトキハ告示セサルコトヲ得

第二條 史蹟名勝天然紀念物保存法第四條第一項ノ禁止若ハ制限ヲ爲シタルト

キハ官報ヲ以テ之ヲ告示ス但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認メタルトキハ告示セサルコトヲ得

第三條 史蹟名勝天然紀念物ノ所有者、管理者又ハ占有者ニ變更アリタルトキハ十日以内ニ新ナル所有者、管理者又ハ占有者ヨリ之ヲ地方長官ニ申告スヘシ

史蹟名勝天然紀念物ノ所有者、管理者又ハ占有者其ノ住所氏名ヲ變更シタルトキハ十日以内ニ之ヲ地方長官ニ申告スヘシ

第四條 土地ノ所有者、管理者又ハ占有者古墳又ハ舊蹟ト認ムヘキモノヲ發見シタルトキハ其ノ現狀ヲ變更スルコトナク發見ノ日ヨリ十日以内ニ左ノ事項ヲ具シテ地方長官ニ申告スヘシ

一 發見ノ年月日

二 所在地

三 現狀

第五條 文部省ニ史蹟名勝天然紀念物ノ臺帳ヲ備フ

第六條 第三條及第四條ノ規定ニ違反シタル者ハ二十圓以下ノ科料ニ處ス

附 則

本則ハ大正九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物調査會

官制

昭和十一年十一月十一日
勅令第三百九十七號

第一條 史蹟名勝天然紀念物調査會ハ文

部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

調査會ハ前項ノ事項ニ付關係各大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 調査會ハ會長一人及委員二十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ス

第四條 會長ハ會務ヲ總理ス

會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ會長ノ請求アルトキハ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 調査會ノ議事ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第八條 調査會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ス

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 調査會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ス

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

文部省訓令第二十五號

史蹟名勝天然紀念物調査委員會規定ハ之ヲ廢止ス

昭和十一年十一月十二日

文部大臣 平生鈺三郎

史蹟名勝天然紀念物調査會

職員

會長

三上 參次

委員

諸般頭

渡部 信

審察林野局長官

三矢 宮松

内務省神社局長

館 哲二

内務省土木局長

岡田 文秀

文部省普通學務局長

菊池豐三郎

文部省宗教局長

高田 休廣

農林省山林局長

村上龍太郎

中野 治房

楠木外岐雄

三好 學

脇水鐵五郎

宮地 直一

黑板 勝美

和田 英作

荻野仲三郎

内田清之助

辻村 太郎

平泉 澄

國府 種德

龍居松之助

佐竹保治郎

臨時委員

陸軍少將

幹事

齋藤管財局書記官 原口 武夫

文部書記官 柴沼 直

農林技師 貴島 圭三

朝鮮寶物古蹟名勝天然紀念物保存

朝鮮寶物古蹟名勝天然紀念物保存令

朝鮮寶物古蹟名勝天然紀念物保存令

物保存令

昭和八年八月九日
制 令 第六號

第一條 建造物、典籍、書蹟、繪畫、彫刻、工藝品其ノ他ノ物件ニシテ特ニ歴史ノ證徴又ハ美術ノ模範ト爲ルベキモノハ朝鮮總督之ヲ寶物トシテ指定スルコトヲ得

景勝ノ地又ハ動物植物地質礦物其ノ他學術研究ノ資料ト爲ルベキ物ニシテ保存ノ必要アリト認ムルモノハ朝鮮總督之ヲ古蹟、名勝又ハ天然紀念物トシテ指定スルコトヲ得

第二條 朝鮮總督前條ノ指定ヲ爲サントスルトキハ朝鮮總督寶物古蹟名勝天然紀念物保存會（以下單ニ保存會ト稱ス）ニ諮問スベシ

前條ノ指定以前ニ於テ急施ヲ要シ保存會ニ諮問スル暇ナシト認ムルトキハ朝鮮總督ハ假ニ指定スルコトヲ得

第三條 朝鮮總督ハ寶物、古蹟、名勝又ハ天然紀念物ニ關スル調査ヲ爲ス爲必要アリト認ムルトキハ當該官吏ヲシテ

必要ナル場所ニ立入り、調査ニ必要ナル物件ノ提供ヲ求メ、測量調査ヲ爲シ又ハ土地ノ發掘、障礙物ノ變更除却其ノ他調査ニ必要ナル行爲ヲ爲サシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ當該官吏ハ其ノ身分ヲ證明スベキ證票ヲ携帯スベシ

第四條 寶物ハ之ヲ輸出又ハ移出スルコトヲ得ズ但シ朝鮮總督ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ
朝鮮總督前項ノ許可ヲ爲サントスルトキハ保存會ニ諮問スベシ

第五條 寶物、古蹟、名勝又ハ天然紀念物ニ關シ其ノ現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ影響ヲ及ボスベキ行爲ヲ爲サントスルトキハ朝鮮總督ノ許可ヲ受クベシ

第六條 朝鮮總督ハ寶物、古蹟、名勝又ハ天然紀念物ノ保存ニ關シ必要アリト認ムルトキハ一定ノ行爲ヲ禁止若ハ制限シ又ハ必要ナル施設ヲ命ズルコトヲ得

前項ノ施設ニ要スル費用ニ對シテハ國庫ヨリ豫算ノ範圍内ニ於テ其ノ一部ヲ補助スルコトヲ得

第七條 朝鮮總督第五條ノ規定ニ依ル許可又ハ前條第一項ノ規定ニ依ル命令ヲ爲サントスルトキハ保存會ニ諮問スベシ但シ輕易ナル事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第八條 寶物ノ所有者ニ付變更アリタルトキハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ所有者ヨリ之ヲ朝鮮總督ニ届出ヅベシ寶物減失又ハ毀損シタルトキ亦同ジ

第九條 寶物ノ所有者ハ朝鮮總督ノ命令ニ依リ一年内ノ期間ヲ限リ李王家、官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ其ノ寶物ヲ出陳スル義務アルモノトス但シ祭祀法用又ハ公務執行ノ爲必要アルトキ其ノ他已ムコトヲ得ザル事由アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十條 前條ノ規定ニ依リ寶物ヲ出陳シタル者ニ對シテハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ補給金ヲ交付スルコトヲ得

第十一條 第三條ノ規定ニ依ル行爲若ハ第六條第一項ノ規定ニ依ル命令ノ爲損害ヲ被リタル者アルトキ又ハ第九條ノ規定ニ依リテ出陳シタル寶物其ノ出陳中不可抗力ニ因ルニ非ズシテ減失若ハ毀損シタルトキハ朝鮮總督ハ其ノ定ムル所ニ依リ損害ヲ補償スルコトヲ得

第十二條 第九條ノ規定ニ依リテ出陳シタル寶物ニ付其ノ出陳中所有者ノ變更アリタルトキハ新所有者ハ當該寶物ニ關シ本令ニ規定スル舊所有者ノ權利義務ヲ承繼ス

第十三條 朝鮮總督ハ地方公共團體ヲ指定シテ寶物、古蹟、名勝又ハ天然紀念物ノ管理ヲ爲サシムルコトヲ得

前項ノ管理ニ要スル費用ハ當該公共團體ノ負擔トス
前項ノ費用ニ對シテハ國庫ヨリ豫算ノ範圍内ニ於テ其ノ一部ヲ補助スルコトヲ得

第十四條 公益上其ノ他特殊ノ事由ニ依リ必要アリト認ムルトキハ朝鮮總督ハ保存會ニ諮問シ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ指定ノ解除ヲ爲スコトヲ得

第十五條 朝鮮總督第一條若ハ第二條第二項ノ規定ニ依リ指定ヲ爲シ又ハ前條ノ規定ニ依リ指定ノ解除ヲ爲シタルトキハ其ノ定ムル所ニ依リ之ヲ告示シ且當該物件又ハ土地ノ所有者、管理者又ハ占有者ニ通知スベシ但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認ムルトキハ告示セザルコトヲ得

第十六條 朝鮮總督ハ國ノ所有ニ屬スル寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ニ關シ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

第十七條 寺刹ノ所有ニ屬スル寶物ハ之ヲ差押フルコトヲ得ズ

前項ノ寶物ノ管理ニ關スル事項ハ朝鮮總督之ヲ定ム

第十八條 貝塚、古墳、寺址、城址、窯址其ノ他ノ遺蹟ト認ムベキモノハ朝鮮總督ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ發掘其ノ他現狀ヲ變更スルコトヲ得ズ

前項ノ遺蹟ト認ムベキモノヲ發見シタル者ハ直ニ其ノ旨ヲ朝鮮總督ニ届出ヅベシ

第十九條 朝鮮總督ハ本令ニ規定スル其ノ職權ノ一部ヲ道知事ニ委任スルコトヲ得

第二十條 朝鮮總督ノ許可ナクシテ寶物ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ五年以下ノ

懲役若ハ禁錮又ハ二千萬圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 寶物ヲ損壞、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百萬圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ寶物自己ノ所有ニ係ルトキハ二年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百萬圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第二十二條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百萬圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

一 許可ヲ受ケズシテ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ニ關シ其ノ現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ影響ヲ及ボスベキ行爲ヲ爲シタル者

二 第六條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者

三 第十八條第一項ノ規定ニ違反シタル者

四 第五條若ハ第十八條第一項ノ規定ニ違反シ又ハ第六條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シテ得タル物件ヲ讓受ケタル者

第二十三條 第三條ノ規定ニ依ル當該官吏ノ職務執行ヲ拒ミ妨ゲ若ハ忌避シ、調査ニ必要ナル物件ノ提供ヲ爲サズ又ハ調査ニ必要ナル物件ニシテ虚偽ナルモノヲ提供シタル者ハ二百萬圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條 第八條又ハ第十八條第二項ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

附 則

本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

朝鮮總督府寶物古蹟名勝天

然記念物保存會官制

昭和八年八月八日
勅令第二百二十四號

第一條 朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然記念物保存會ハ朝鮮總督ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

保存會ハ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關スル事項ニ付朝鮮總督ニ建議スルコトヲ得

第二條 保存會ハ會長一人及委員四十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長ハ朝鮮總督府政務總監ヲ以テ之ニ充ツ

委員及臨時委員ハ朝鮮總督ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ總理ス
會長事故アルトキハ會長ノ指定シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 保存會ノ議事ニ關スル規則ハ朝鮮總督之ヲ定ム

第六條 保存會ニ幹事ヲ置ク朝鮮總督ノ奏請ニ依リ朝鮮總督府高等官ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第七條 保存會ニ書記ヲ置ク朝鮮總督府判任官ノ中ヨリ朝鮮總督之ヲ命ズ
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
附 則
本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

朝鮮總督府寶物古蹟名勝天
然記念物保存會職員

會長 政務總監
委員 大野綠一郎
池内 宏
鍋木外岐雄
藤島亥治郎
原田 淑人
濱田 耕作
天沼 俊一
梅原 末治
眞室 亞夫
大竹 十郎
林 繁藏
穂積眞六郎
矢島 彬造
富永 文一
三橋孝一郎
吉田 浩
山澤和三郎
藤本 修三
金 大羽
立岩 巖
柳 正秀
崔 南 善
田中 豐藏
藤田 亮策

幹事

總督府事務官

金 大羽

著作權保護

著作權法

明治三十二年三月四日
法律第三十九號

- 第一章 著作權者ノ權利
第二章 出版權
第三章 偽作
第四章 罰則
第五章 附則

著作權法

第一章 著作權ノ權利

第一條 文書演述圖畫建築彫刻模型寫眞演奏歌唱其ノ他文藝學術若ハ美術（音樂ヲ含ム以下之ニ同ジ）ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ヲ複製スルノ權利ヲ專有ス

文藝學術ノ著作權ハ翻譯權ヲ包含シ各種ノ脚本及樂譜ノ著作權ハ興行權ヲ包含ス

第二條 著作權ハ其ノ全部又ハ一部ヲ讓渡スコトヲ得

第三條 發行又ハ興行シタル著作物ノ著作權ハ著作權ノ生存間及其ノ死後三十年間繼續ス

伊東 忠太

小田 省吾

李 能和

鮎貝房之進

小場 恒吉

金 容鎮

金 大羽

第五條 無名又ハ變名著作物ノ著作權ハ發行又ハ興行ノトキヨリ三十年間繼續ス但シ其ノ期間内ニ著作權者其ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルトキハ第三條ノ規定ニ從フ

第六條 官公衙學校社寺協會會社其ノ他團體ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ發行又ハ興行シタル著作物ノ著作權ハ發行又ハ興行ノトキヨリ三十年間繼續ス

第七條 著作權者原著作物發行ノトキヨリ十年内ニ其ノ翻譯權ヲ發行セサルトキハ其ノ翻譯權ハ消滅ス前項ノ期間内ニ著作權者其ノ保護ヲ受ケントスル國語ノ翻譯權ヲ發行シタルトキハ其ノ國語ノ翻譯權ハ消滅セス

第八條 冊號ヲ逐ヒ順次ニ發行スル著作物ニ關シテハ前四條ノ期間ハ每冊若ハ每號發行ノトキヨリ起算ス

一部分ツツ漸次ニ發行シ全部完成スル著作物ニ關シテハ前四條ノ期間ハ最終部分ノ發行ノトキヨリ起算ス但シ三

年ヲ經過シ仍繼續ノ部分ヲ發行セサルトキハ既ニ發行シタル部分ヲ以テ最終ノモノト看做ス

第九條 前六條ノ場合ニ於テ著作權ノ期間ヲ計算スルニハ著作權者死亡ノ年又ハ著作物ヲ發行又ハ興行シタル年ノ翌年ヨリ起算ス

第十條 相續人ナキ場合ニ於テ著作權ハ消滅ス

第十一條 左ニ記載シタルモノハ著作權ノ目的物ト爲ルコトヲ得ス

一 法律命令及官公文書

二 新聞紙又ハ雜誌ニ掲載シタル雜報及時事ヲ報道スル記事

三 公開セル裁判所、議會並政談集會ニ於テ爲シタル演述

第十二條 無名又ハ變名著作物ノ發行者又ハ興行者ハ著作權者ニ屬スル權利ヲ保全スルコトヲ得但シ著作權者ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 數人ノ合著作ニ係ル著作物ノ著作權ハ各著作ノ共有ニ屬ス

各著作ノ分擔シタル部分明瞭ナラサル場合ニ於テ著作權者中ニ其ノ發行又ハ興行ヲ拒ム者アルトキハ他ノ著作權者ハ其ノ者ニ賠償シテ其ノ持分ヲ取得スルコトヲ得但シ反對ノ契約アルトキハ此ノ限ニ在ラス

各著作ノ分擔シタル部分明瞭ナル場合ニ於テ著作權者中ニ其ノ發行又ハ興行ヲ拒ム者アルトキハ他ノ著作權者ハ自己ノ部分ヲ分離シ單獨ノ著作物トシテ發行又ハ興行スルコトヲ得但シ反對ノ契約アルトキハ此ノ限ニ在ラス

本條第二項ノ場合ニ於テハ發行又ハ興行ヲ拒ミタル著作權者ノ意ニ反シテ其ノ氏名ヲ其ノ著作物ニ掲クルコトヲ得ス

第十四條 數多ノ著作物ヲ適法ニ編輯シタル者ハ著作權者ト看做シ其ノ編輯物全部ニ付テノ著作權ヲ有ス但シ各部ノ著作權ハ其ノ著作權者ニ屬ス

第十五條 著作權ノ相續讓渡及質入ハ其ノ登錄ヲ受ケタルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

無名又ハ變名著作物ノ著作權者ハ現ニ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルコトヲ得

第十六條 登錄ハ行政廳之ヲ行フ

登錄ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

行又ハ興行スルコトヲ得但シ反對ノ契約アルトキハ此ノ限ニ在ラス

本條第二項ノ場合ニ於テハ發行又ハ興行ヲ拒ミタル著作權者ノ意ニ反シテ其ノ氏名ヲ其ノ著作物ニ掲クルコトヲ得ス

第十四條 數多ノ著作物ヲ適法ニ編輯シタル者ハ著作權者ト看做シ其ノ編輯物全部ニ付テノ著作權ヲ有ス但シ各部ノ著作權ハ其ノ著作權者ニ屬ス

第十五條 著作權ノ相續讓渡及質入ハ其ノ登錄ヲ受ケタルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

無名又ハ變名著作物ノ著作權者ハ現ニ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルコトヲ得

第十六條 登錄ハ行政廳之ヲ行フ

登錄ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十七條 未タ發行又ハ興行セサル著作物ノ原本及其ノ著作權ハ債權者ノ爲ニ差押ヲ受クルコトヲ得但シ著作權者ニ於テ承諾ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十八條 他人ノ著作物ヲ發行又ハ興行スル場合ニ於テハ著作權者ノ生存中ハ著作權者ガ現ニ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ同意ナクシテ著作權者ノ氏名稱號ヲ變更若ハ隱匿シ又ハ其ノ著作物ニ改竄其ノ他ノ變更ヲ加ヘ若ハ其ノ

題號ヲ改ムルコトヲ得ズ

他人ノ著作物ヲ發行又ハ興行スル場合ニ於テハ著作ノ死後ハ著作權ノ消滅ニタル後ト雖モ其ノ著作物ニ改竄其ノ他ノ變更ヲ加ヘテ著作ノ意ヲ害シ又ハ其ノ題號ヲ改メ若ハ著作ノ氏名稱號ヲ變更若ハ隱匿スルコトヲ得ズ

前二項ノ規定ハ第二十條、第二十條ノ二、第二十二條ノ五第二項、第二十七條第一項第二項、第三十條第一項第二號乃至第九號ノ場合ニ於テモ之ヲ適用ス

第十九條 原著物ニ調點、傍調、句讀、批評、註解、附錄、圖畫ヲ加ヘ又ハ其ノ修正増減ヲ爲シ若ハ翻案シタルカ爲新ニ著作權ヲ生スルコトナシ但シ新著作物ト看做サルヘキモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十條 新聞紙又ハ雜誌ニ掲載シタル政治上ノ時事問題ヲ論議シタル記事(學術上ノ著作物ヲ除ク)ハ特ニ轉載ヲ禁ズル旨ノ明記ナキトキハ其ノ出所ヲ明示シテ之ヲ他ノ新聞紙又ハ雜誌ニ轉載スル事ヲ得

第二十二條ノ二 時事問題ニ付テノ公開演述ハ著作ノ氏名、演述ノ時及場所ヲ明示シテ之ヲ新聞紙又ハ雜誌ニ掲載スルコトヲ得但シ同一著作ノ演述ヲ蒐輯スル場合ハ其ノ著作ノ許諾ヲ受クルコトヲ要ス

第二十一條 翻譯者ハ著作ト看做シ本法ノ保護ヲ享有ス但シ原著者ノ權利

ハ之カ爲ニ妨ケラルルコトナシ

第二十二條 原著物ト異リタル技術ニ依リ適法ニ美術上ノ著作物ヲ複製シタル者ハ著作ト看做シ本法ノ保護ヲ享有ス

第二十二條ノ二 文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ヲ活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ複製(脚色シテ映畫ト爲ス場合ヲ含ム)シ及興行スルノ權利ヲ包含ス

第二十二條ノ三 活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物ノ著作權ハ文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作トシテ本法ノ保護ヲ享有ス其ノ保護ノ期間ニ付テハ獨創性ヲ有スルモノニ在リテハ第三條乃至第六條及第九條ノ規定ヲ適用シ之ヲ缺クモノニ在リテハ第二十三條ノ規定ヲ適用ス

第二十二條ノ四 他人ノ著作物ヲ活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ複製(脚色シテ映畫ト爲ス場合ヲ含ム)シタル者ハ著作ト看做シ本法ノ保護ヲ享有ス但シ原著者ノ權利ハ之カ爲ニ妨ケラルルコトナシ

第二十二條ノ五 文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ノ無線電話ニ依ル放送ヲ許諾スルノ權利ヲ包含ス

無線電信法及之ニ基キ發スル命令ニ依リ主務大臣ノ許可ヲ受ケタル放送無線電話施設者ハ既ニ發行又ハ興行シタル

他人ノ著作物ヲ放送セントスルトキハ著作權者ト協議ヲ爲スコトヲ要ス協議調ハザルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣ノ定ムル相當ノ償金ヲ支拂ヒ其ノ著作物ヲ放送スルコトヲ得

前項ノ償金ノ額ニ付異議アル者ハ民事裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十二條ノ六 文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ヲ音ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ寫調シ及その機器ニ依リ興行スルノ權利ヲ包含ス

第二十二條ノ七 音ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ他人ノ著作物ヲ適法ニ寫調シタル者ハ著作ト看做シ其ノ機器ニ付テノ著作權ヲ有ス

第二十三條 寫眞著作權ハ十年間繼續ス前項ノ期間ハ其ノ著作物ヲ始メテ發行シタル年ノ翌年ヨリ起算ス若シ發行セサルトキハ種板ヲ製作シタル年ノ翌年ヨリ起算ス

寫眞術ニ依リ適法ニ美術上ノ著作物ヲ複製シタル者ハ原著物ノ著作權ト同一ノ期間内本法ノ保護ヲ享有ス但シ當事者間ニ契約アルトキハ其ノ契約ノ制限ニ從フ

第二十四條 文藝學術ノ著作物中ニ挿入シタル寫眞ニシテ特ニ其ノ著作物ノ爲ニ著作シ又ハ著作セシメタルモノナルトキハ其ノ著作權ハ文藝學術ノ著作物ノ著作權ニ屬シ其ノ著作權ト同一ノ期間内繼續ス

第二十五條 他人ノ嚮托ニ依リ著作シタル寫眞肖像ノ著作權ハ其ノ嚮托者ニ屬ス

第二十六條 寫眞ニ關スル規定ハ寫眞術ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物ニ準用ス

第二十七條 著作權者ノ不明ナル著作物ニシテ未タ發行又ハ興行セサルモノハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ發行又ハ興行スルコトヲ得

著作權者ノ居所不明ナル場合其ノ他命令ノ定ムル事由ニ因リ著作權者ト協議スルコト能ハザルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣ノ定ムル相當ノ償金ヲ供託シテ其ノ著作物ヲ發行又ハ興行スルコトヲ得

前項ノ償金ノ額ニ付異議アル者ハ民事裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十八條 外國人ノ著作權ニ付テハ條約ニ別段ノ規定アルモノヲ除ク外本法ノ規定ヲ適用ス但シ著作權保護ニ關シ條約ニ規定ナキ場合ニハ帝國ニ於テ始メテ其ノ著作物ヲ發行シタル者ニ限リ本法ノ保護ヲ享有ス

第二章 出版權

第二十八條ノ二 著作權者ハ其ノ著作物ヲ文書又ハ圖畫トシテ出版スルコトヲ引受クル者ニ對シ出版權ヲ設定スルコトヲ得

第二十八條ノ三 出版權者ハ設定行爲ノ定ムル所ニ依リ出版權ノ目的タル著作物ヲ原作ノ儘印刷術其ノ他ノ機械的又

ハ化學の方法ニ依リ文書又ハ圖畫トシテ複製シ之ヲ發賣頒布スルノ權利ヲ專有ス但シ著作權者タル著作ノ死亡シタルトキ又ハ設定行爲ニ別段ノ定ナキ場合ニ於テ出版權ノ設定アリタル後三年ヲ經過シタルトキハ著作權者ハ著作物ヲ全集其ノ他ノ編輯物ニ輯録シ又ハ全集其ノ他ノ編輯物ノ一部ヲ分離シテ別途ニ之ヲ出版スルコトヲ妨グズ

第二十八條ノ四 出版權ハ設定行爲ニ別段ノ定ナキトキハ其ノ設定アリタルトキヨリ三年間存続ス

第二十八條ノ五 出版權者ハ出版權ノ設定アリタルトキヨリ三月以内ニ著作物ヲ出版スルノ義務ヲ負フ但シ設定行爲ニ別段ノ定アルトキハ此ノ限ニ在ラズ出版權者ガ前項ノ義務ニ違反シタルトキハ著作權者ハ出版權ノ消滅ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條ノ六 出版權者ハ著作物ヲ繼續シテ出版スルノ義務ヲ負フ但シ設定行爲ニ別段ノ定アルトキハ此ノ限ニ在ラズ出版權者ガ前項ノ義務ニ違反シタルトキハ著作權者ハ三月以上ノ期間ヲ定メテ其ノ履行ヲ催告シ其ノ期間内ニ履行ナキトキハ出版權ノ消滅ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條ノ七 著作者ハ出版權者ガ著作物ノ各版ノ複製ヲ完了スルニ至ル迄其ノ著作物ニ正當ノ範圍内ニ於テ修正増減ヲ加フルコトヲ得

出版權者ガ著作物ヲ再版スル場合ニ於テハ其ノ都度豫メ著作者ニ其ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第二十八條ノ八 著作權者ハ其ノ著作物ノ出版ヲ廢絶スル爲何時ニテモ損害ヲ賠償シテ出版權ノ消滅ヲ請求スル事ヲ得

第二十八條ノ九 出版權ハ著作權者ノ同意ヲ得テ其ノ譲渡又ハ質入ヲ爲スコトヲ得

第二十八條ノ十 出版權ノ得喪、變更及質入ハ其ノ登録ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ズ第十六條ノ規定ハ出版權ノ登録ニ付之ヲ準用ス

第二十八條ノ十一 出版權ノ侵害ニ付テハ本法中第三十四條及第三十六條ノ二ノ規定ヲ除クノ外偽作ニ關スル規定ヲ準用ス

第三章 偽作
第二十九條 著作權ヲ侵害シタル者ハ偽作者トシ本法ニ規定シタルモノノ外民法第三編第五章ノ規程ニ從ヒ之ニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スルノ責ニ任ス
第三十條 既ニ發行シタル著作物ヲ左ノ方法ニ依リ複製スルハ偽作ト看做サス
第一 發行スルノ意思ナク且器械的又ハ化學的方法ニ依ラスシテ複製スルコト
第二 自己ノ著作物中ニ正當ノ範圍内ニ於テ節錄引用スルコト
第三 普通教育上ノ修身書及讀本ノ目

的ニ供スル爲ニ正當ノ範圍内ニ於テ拔萃蒐輯スルコト
第四 文藝學術ノ著作物ノ文句ヲ自己ノ著作シタル脚本ニ挿入シ又ハ樂譜ニ充用スルコト

第五 文藝學術ノ著作物ヲ説明スルノ材料トシテ美術上ノ著作物ヲ挿入シ又ハ美術上ノ著作物ヲ説明スルノ材料トシテ文藝學術ノ著作物ヲ挿入スルコト

第六 圖畫ヲ彫刻物模型ニ作り又ハ彫刻物模型ヲ圖畫ニ作ルコト
第七 脚本又ハ樂譜ヲ收益ヲ目的トセズ且出演者ガ報酬ヲ受ケザル興行ノ用ニ供シ又ハ其ノ興行ヲ放送スルコト

第八 音ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ著作物ノ適法ニ寫調セラレタルモノヲ興行又ハ放送ノ用ニ供スルコト
第九 専ラ官廳ノ用ニ供スル爲複製スルコト

本條ノ場合ニ於テハ其ノ出所ヲ明示スルコトヲ要ス
第三十一條 帝國ニ於テ發賣頒布スルノ目的ヲ以テ偽著作物ヲ輸入スル者ハ偽作者ト看做ス
第三十二條 練習用ノ爲ニ著作シタル問題ノ解答書ヲ發行スル者ハ偽作者ト看做ス

第三十三條 善意ニシテ且過失ナク偽作ヲ爲シテ利益ヲ受ケケル爲ニ他人ニ損

失ヲ及ホシタル者ハ其ノ利益ノ存スル限度ニ於テ之ヲ返還スル義務ヲ負フ
第三十四條 數人ノ合著作ニ係ル著作物ノ著作權者ハ偽作ニ對シ他ノ著作權者ノ同意ナクシテ告訴ヲ爲シ及自己ノ持分ニ對スル損害ノ賠償ヲ請求シ又ハ自己ノ持分ニ應ジテ前條ノ利益ノ返還ヲ請求スルコトヲ得

第三十五條 偽作ニ對シ民事ノ訴訟ヲ提起スル場合ニ於テハ既ニ發行シタル著作物ニ於テ其ノ著作者トシテ氏名ヲ掲ケタル者ヲ以テ其ノ著作者ト推定ス無名又ハ變名著作物ニ於テハ其ノ著作物ニ發行者トシテ氏名ヲ掲ケタル者ヲ以テ其ノ發行者ト推定ス未タ發行セサル脚本、樂譜及活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物ノ興行ニ關シテハ其ノ興行ニ著作者トシテ氏名ヲ顯ハシタル者ヲ以テ其ノ著作者ト推定ス

著作者ノ氏名ヲ顯ハササルトキハ其ノ興行者ヲ以テ其ノ著作者ト推定ス
第十五條第三項ノ規定ニ依リ著作年月日ノ登録ヲ受ケタル著作物ニ在リテハ其ノ年月日ヲ以テ著作ノ年月日ト推定ス

第三十六條 偽作ニ關シ民事ノ出訴又ハ刑事ノ起訴アリタルトキハ裁判所ハ原告又ハ告訴人ノ申請ニ依リ保證ヲ立テシメ又ハ立テシメスシテ假ニ偽作ノ疑アル著作物ノ發賣頒布ヲ差止メ若ハ之ヲ差押ヘ又ハ其ノ興行ヲ差止ムルコト

ヲ得

前項ノ場合ニ於テ偽作ニ非サル旨ノ判決確定シタルトキハ申請者ハ差止又ハ差押ヨリ生シタル損害ヲ賠償スルノ責ニ任ス

第三十六條ノ二 第十八條ノ規定ニ違反シタル行爲ヲ爲シタル者ニ對シテハ著作ハ著作タルコトヲ確保シ又ハ訂正其ノ他其ノ聲望名譽ヲ回復スルニ適當ナル處分ヲ請求シ及民法第三編第五章ノ規程ニ從ヒ損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得

第十八條ノ規定ニ違反シタル行爲ヲ爲シタル者ニ對シテハ著作ノ死後ニ於テハ著作ノ親族ニ於テ其ノ著作タルコトヲ確保シ又ハ訂正其ノ他其ノ聲望名譽ヲ回復スルニ適當ナル處分ヲ請求スルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依ル民事ノ訴訟ニ付テハ前二條ノ規定ヲ準用ス

第三十六條ノ三 本法ノ規定ニ依ル登錄、第二十二條ノ五第二項若ハ第二十七條第二項ノ規定ニ依ル償金ノ額又ハ著作ニ關スル一般ノ事項ニ付主務大臣ノ諮問ニ應ジ又ハ此等ノ事項ニ付調査審議スル爲著作權審査會ヲ置ク著作權審査會ノ組織ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四章 罰則

第三十七條 偽作ヲ爲シタル者及情ヲ知テ偽作物ヲ發賣シ又ハ頒布シタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十八條 第十八條ノ規定ニ違反シタル者ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十九條 第二十條、第二十條ノ二及第三十條第二項ノ規定ニ違反シ出所ヲ明示セスシテ複製シタル者並第十三條第四項ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十條 著作者ニ非サル者ノ氏名稱號ヲ附シテ著作ヲ發行シタル者ハ三十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十一條 (削除)

第四十二條 虛偽ノ登錄ヲ受ケタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十三條 偽作物及専ラ偽作ノ用ニ供シタル器械器具ハ偽作者、印刷者、發賣者及頒布者ノ所有ニ在ル場合ニ限り之ヲ沒收ス

第四十四條 本章ニ規定シタル罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス但シ第三十八條ノ場合ニ於テ著作ノ死亡シタルトキ並第四十條乃至第四十二條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第四十五條 本章ノ罪ニ對スル公訴ノ時効ハ二年ヲ經過スルニ因リテ完成ス

第五章 附則

第四十六條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(明治三十一年六月二十八日勅令第三百十三號ヲ以テ同年七月十五日ヨリ施行)

明治二十六年法律第十六號版權法明治二十年勅令第七十八號脚本樂譜條例明治二十年勅令第七十九號寫真版權條例ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十七條 本法施行前ニ著作權ノ消滅セサル著作物ハ本法施行ノ日ヨリ本法ノ保護ヲ享有ス

第四十八條 本法施行前偽作ト認メラレサリシ複製物ニシテ既ニ複製シタルモノ又ハ複製ニ著手シタルモノハ之ヲ完成シテ發賣頒布スルコトヲ得

前項ノ複製ノ用ニ供シタル器械器具ノ現存スルトキハ本法施行後五年間仍其ノ複製ノ爲之ヲ使用スルコトヲ得

第四十九條 本法施行前翻譯シ又ハ翻譯ニ著手シ其ノ當時ニ於テ偽作ト認メラレサリシモノハ之ヲ完成シテ發賣頒布スルコトヲ得

但シ其ノ翻譯物ハ本法施行後七年内ニ發行スルコトヲ要ス

前項ノ翻譯物ハ發行後五年間仍之ヲ複製スルコトヲ得

第五十條 本法施行前既ニ興行シ若ハ興行ニ著手シ其ノ當時ニ於テ偽作ト認メラレサリシモノハ本法施行後五年間仍之ヲ興行スルコトヲ得

附則

第五十一條 第四十八條乃至第五十條ノ場合ニ於テハ命令ノ定ムル手續ヲ履行スルニ非サレハ其ノ複製物ヲ發賣頒布シ又ハ興行スルコトヲ得ス

(昭和九年法律第四十八號) 本法施行ノ期日ハ各規定ニ付勅令ヲ以テ之ヲ定ム (昭和十年勅令第八十九號ヲ以テ同年七月十五日ヨリ施行)

登錄稅法第十條第四號ノ二ノ次ニ左ノ

四號ヲ加フ

四ノ三 滯納處分以外ノ原因ニ因ル

第一號及第二號ノ權利ノ處分ノ制限

四ノ四 著作年月日ノ登錄

四ノ五 抹消シタル登錄ノ回復

四ノ六 假登錄

同法ニ左ノ一條ヲ加フ

第十條ノ二 出版權ニ關シ登錄ヲ受ケルトキハ左ノ區別ニ從ヒ登錄稅ヲ納ムベシ

一 出版權ノ設定

二 出版權ノ移轉

三 出版權ヲ目的トスル質權ノ設定

四 前號ノ權利ノ移轉

五 信託ノ登錄

六 滯納處分以外ノ原因ニ因ル第一號乃至第三號ノ權利ノ處分ノ制限

七 抹消シタル登錄ノ回復

每一件 金五十圓
每一件 金五十圓
每一件 金五十圓
每一件 金五十圓
每一件 金五十圓
每一件 金五十圓
每一件 金五十圓
每一件 金五十圓
每一件 金五十圓
每一件 金五十圓

八 假登錄 每一件 金五十錢
九 登錄ノ更正、變更又ハ抹消 每一件 金二十錢

(備考) 昭和六年法律第六十四號ハ昭和六年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

著作權審查會官制

昭和十年七月八日
勅令第九十一號

第一條 著作權審查會ハ內務大臣ノ監督ニ屬シ著作權法ノ規定ニ依ル登錄、同法第二十二條ノ五第二項若ハ第二十七條第二項ノ規定ニ依ル償金ノ額又ハ著作ニ關スル一般ノ事項ニ付內務大臣ノ諮問ニ應ジ又ハ此等ノ事項ニ付調査審議ス

第二條 審查會ハ會長一人及委員二十五人以內ヲ以テ之ヲ組織ス
前項定員ノ外必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長ハ內務大臣ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 委員及臨時委員ハ內務大臣ノ奏請ニ依リ關係各廳高等官及學識經驗アル者ノ中ヨリ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

委員ノ任期ハ二年トス但シ特別ノ事由アル場合ニ於テハ任期中之ヲ解任スルコトヲ妨ゲズ

第五條 會長ハ會務ヲ總理ス

會長事故アルトキハ內務大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス

第六條 審查會ニ幹事ヲ置ク內務大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
第七條 審查會ニ書記ヲ置ク內務大臣之ヲ命ズ
書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ昭和十年七月十五日ヨリ之ヲ施行ス

著作權審查會職員

會長
委員

內務大臣

潮 惠之輔

水野練太郎

總務 重遠

近衛 秀磨

乘杉 嘉壽

大森 洪太

萱場 軍藏

栗山 茂

大養 健

島崎 春樹

德田 末雄

菊池 寬

山本 勇造

横山 秀磨

山田 耕作

小林 一三

城戸 四郎

増田 義一

目黒 甚七

阿南 正茂

小野賢一郎

東京音樂學校長

司法省民事局長

內務省警保局長

外務省條約局長

改正ベルヌ條約

昭和六年七月十七日
條約 第四號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ昭和三年六月二日「ローマ」ニ於テ帝國全權委員ガ關係各國全權委員ト共ニ署名シタル千九百八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和六年七月十七日

內閣總理大臣男爵若槻禮次郎

外務大臣男爵幣原喜重郎

內務大臣 安達 謙藏

條約第四號

千九百八十八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二十八年六月二日

「ローマ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ文學的及美術的著作物保護ニ關スル「ベルヌ」條約

獨逸國大統領、奧太利共和國聯邦大統領、白耳義國皇帝陛下、「ブラジル」合衆國大統領、「ブルガリア」國皇帝陛下、「エストニア」共和國大統領、「フィンランド」共和國大統領、佛蘭西共和國大統領「グレート・ブリテン」、「アイルランド」及「グレート・ブリテン」海外領土皇帝印

度皇帝陛下、希臘共和國大統領、「ハンガリー」國攝政殿下、伊太利國皇帝陛下、日本國皇帝陛下、「ルクセンブルグ」國大公殿下、「モロッコ」國皇帝陛下、「モナコ」國公殿下、諾威國皇帝陛下、和蘭國皇帝陛下、「ポーランド」國及「ダンチツヒ」自由市ノ名ニ於ケル「ポーランド」共和國大統領「ポルトガル」共和國大統領「ルーマニア」國皇帝陛下、瑞典國皇帝陛下、瑞西聯邦政府、「シリア國」及「グレート・レバノン」國、「チエツコスロヴァキヤ」共和國大統領、「テュニス」國公殿下ハ文學的及美術的著作物ニ關シ著作權ノ權利ヲ能フ限り有效且均等ノ方法ヲ以テ保護センコトヲ均シク希望シ千九百八十八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ署名セラレタル條約改正シ且補足スルコトニ決シ之ガ爲各左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ

(全權委員氏名省略)

各全權委員ハ之ガ正當ナル委任ヲ受ケ左ノ如ク協定セリ

第一條

本條約ノ適用セラルル國ハ文國的及美術的著作物ニ關スル著作權ノ權利ノ保護ノ爲同盟ヲ組織ス

第二條

(一) 「文學的及美術的著作物」ナル用語ハ表現ノ方法又ハ形式ノ如何ヲ問ハズ書籍、小冊子及其ノ他ノ文書、講演、演說、說教及其ノ他同性質ノ著作物、演劇脚本、樂譜入演劇脚本、演出ガ文

書其ノ他ノ方法ヲ以テ定メラレタル舞

譜及無言劇、歌詞入り又ハ歌詞ナシノ

樂譜、素描、繪畫、建築、彫刻、銅版

及石版ノ著作物、圖解及地圖、地理學、

地形學、建築學又ハ科學ニ關スル圖面、

略圖及模型ノ如キ文藝、學術及美術ノ

範圍ニ屬スル一切ノ著作物ヲ包含ス

(二) 翻譯、翻案、編曲及其ノ他文學的又

ハ美術的著作物ノ變形複製物並ニ異リ

タル著作物ノ編輯物ハ原作物ノ著作

者ノ權利ヲ害セザル範圍ニ於テ原著作

物トシテ保護セラルベキモノトス

(三) 同盟國ハ前記著作物ノ保護ヲ確保ス

ベキ義務ヲ有ス

(四) 工業ニ應用セラレタル美術的著作物

ハ各國ノ國內法ノ認ムル限り保護セラ

第二條ノ二

(一) 政治演説及裁判所ニ於ケル辯論中ニ

爲サレタル演説ヲ前條ニ定ムル保護ヨ

リ一部又ハ全部排除スルノ權能ハ同盟

各國ノ國內法ニ留保セラル

(二) 講演、演説、説教及其ノ他同性質ノ

著作物ヲ新聞紙雜誌ニ複製スルコトヲ

得ル條件ヲ規定スルノ權能モ亦同盟各

國ノ國內法ニ留保セラル尤モ前記著作

第三條

本條約ハ寫眞的著作物及寫眞術ト類似ノ

方法ヲ以テ作リタル著作物ニ之ヲ適用ス

同盟國ハ之ガ保護ヲ確保スベキ義務ヲ有

ス

第四條

(一) 同盟ノ一國ニ屬スル著作人ハ公ニセ

ザル又ハ同盟ノ一國ニ於テ初テ公ニシ

タル著作物ニ關シ著作物ノ本國以外ノ

國ニ於テ、其ノ國法ガ内國民ニ現ニ許

與シ又ハ將來許與スベキ權利及本條約

ニ依リ特ニ許與セラレタル權利ヲ享有

ス

(二) 右權利ノ享有及行使ハ何等方式ノ履

行ヲ要セズ其ノ享有及行使ハ著作物ノ

本國ニ於ケル保護ノ存在ニ係ルコトナ

シ從テ本條約ノ規定ノ外保護ノ範圍及

著作人ノ權利保全ノ爲右著作人ニ保障

セラレタル救済ノ方法ハ保護ノ要求セ

ラルル國ノ法律ニ準ラ依ルベキモノト

ス

(三)

公ニセザル著作物ニ關シテハ著作人

ノ屬スル國ヲ以テ著作物ノ本國トシ公

ニシタル著作物ニ關シテハ第一發行ノ

國ヲ以テ本國トシ同盟ノ數國ニ於テ同

時ニ公ニシタル著作物ニ關シテハ右諸

國ノ中其ノ國法ノ許與スル保護ノ期間

最短期間ヲ以テ其ノ本國トス同盟ニ屬

(四)

「公ニシタル著作物」トハ本條約ノ意

義ニ於テハ刊行シタル著作物ヲ謂フ演

劇脚本又ハ樂譜入演劇脚本ノ上演、音

樂的著作物ノ演奏、美術的著作物ノ展

覽及建築的著作物ノ建設ハ公ニスルノ

意味ニ非ザルモノトス

第五條

同盟ノ一國ニ屬スル者ニシテ同盟ノ他ノ

一國ニ於テ初テ其ノ著作物ヲ公ニシタル

モノハ其ノ國ニ於テ内國著作人ト同一ノ

權利ヲ有ス

(一) 同盟ノ一國ニ屬セザル著作人ニシテ

同盟ノ一國ニ於テ初テ其ノ著作物ヲ公

ニシタルモノハ其ノ國ニ於テハ内國著

作者ト同一ノ權利ヲ享有シ同盟ノ他ノ

諸國ニ於テハ本條約ノ許與スル權利ヲ

享有ス

(二) 尤モ同盟ニ屬セザル國ガ同盟ノ一國

ニ屬スル著作人ノ著作物ニ對シ充分ノ

保護ヲ與ヘザルキハ該同盟國ハ著作

物ノ第一發行ノ當時該非同盟國ニ屬シ

且同盟ノ一國ニ於テ現實ノ住所ヲ有セ

ザル著作人ノ右著作物ノ保護ヲ制限ス

ルコトヲ得ベシ

(三)

前項ニ基キ規定セラレタル如何ナル

制限モ著作人ガ右制限ノ實施前同盟ノ

一國ニ於テ公ニシタル著作物ニ關シ既

ニ取得シタル權利ヲ妨グルコトナカル

ベシ

(四) 本條ニ基キ著作人ノ權利ノ保護ヲ制

限スベキ同盟國ハ右保護ノ制限ヲ受ク

ベキ國及該國ニ屬スル著作人ノ權利ニ

加フル制限ヲ示セル宣言書ヲ以テ其ノ

旨ヲ瑞西聯邦政府ニ通告スベシ瑞西聯

邦政府ハ直ニ右ノ事實ヲ同盟ノ一切ノ

國ニ通知スベシ

第六條ノ二

(一) 著作人ノ財産的權利ニ係ルコトナク

且該權利ノ移轉後ト雖モ著作人ハ著作

物ノ創作人タルコトヲ主張スルノ權利

及右著作物ノ改竄、截除又ハ其ノ他ノ

變更ニシテ著作人ノ名譽又ハ聲望ヲ害

スルコトアルベキモノニ對シ異議ヲ

述ブルノ權利ヲ保有ス

(二) 右權利行使ノ條件ヲ定ムルコトハ同

盟國ノ國內法ニ留保セラル右權利保全

ノ爲ニスル救済ノ方法ハ保護ノ要求セ

ラルル國ノ法律ニ依ルベキモノトス

(一) 第七條

本條約ニ依リ許與セラルル保護ノ期

間ハ著作人ノ生存間及死後五十年

トス

(二) 尤モ前項ノ期間ガ同盟ノ一切ノ國ニ

依リ等シク採用セラレザル場合ニ於テ

ハ保護ノ期間ハ保護ノ要求セラルル國

ノ法律ニ依ルベク且著作物ノ本國ニ於

テ定メラレタル期間ヲ超過スルコトヲ

得ザルベシ從テ同盟國ハ其ノ國內法ニ

合致スル範圍内ニ非ザレバ前項ノ規定

ヲ適用スルヲ要セザルベシ

(三) 寫眞的著作物及寫眞術ト類似ノ方法

ヲ以テ作リタル著作物、遺著、無名又

ハ變名著作物ニ關シテハ保護ノ期間ハ

保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依ルモ

ノトス但シ著作物ノ本國ニ於テ定メラ

レタル期間ヲ超過スルコトヲ得ズ

第七條ノ二

著作物ノ合著作人ノ共有ニ屬スル著

作者ノ權利ノ期間ハ合著者中最終ノ生存者ノ死亡ノ日ニ依リテ計算セラル

- (二) 第一項ニ定ムル保護ノ期間ヨリ短キ保護ノ期間ヲ許スル國ニ屬スル者ハ同盟ノ他ノ諸國ニ於テ之ヨリ長キ期間ノ保護ヲ要求スルコトヲ得ズ

- (三) 如何ナル場合ニ於テモ保護ノ期間ハ合著者中最終ノ生存者ノ死亡前ニ滿了スルコトヲ得ザルベシ

第八條

公ニセザル著作物ノ著作者ニシテ同盟ノ一國ニ屬スルモノ及同盟ノ一國ニ於テ初テ公ニシタル著作物ノ著作者ハ原著物ニ關スル權利ノ全存續期間中同盟ノ他ノ諸國ニ於テ其ノ著作物ノ翻譯ヲ爲シ又ハ之ヲ許諾スルノ特權ヲ享有ス

第九條

(一) 同盟ノ一國ノ新聞紙又ハ定期編輯中ニ於テ公ニシタル新聞小説、讀物及其ノ他題材ノ如何ヲ問ハズ文藝、學術又ハ美術ノ一切ノ著作物ハ著作者ノ承諾アルニ非ザレバ他國ニ於テ之ヲ複製スルコトヲ得ズ

(二) 經濟上、政治上又ハ宗教上ノ時事問題ヲ論議シタル記事ハ其ノ轉載ガ明白ニ留保セラレザルトキハ新聞紙雜誌ニ之ヲ轉載スルコトヲ得但シ其ノ出所ハ常ニ之ヲ明瞭ニ示スコトヲ要ス此ノ義務ノ制裁ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム

(三) 本條約ノ保護ハ時事ノ記事又ハ單ニ新聞紙雜誌ノ報道ニ過ギザル雜報ニハ

之ヲ適用セズ

第十條

教科用ニ供シ若ハ學術的ノ性質ヲ有スル刊行物ノ爲又ハ節用編輯ノ爲ニ文學的又ハ美術的著作物ヲ適法ニ引用スルノ權能ニ關シテハ同盟國ノ法律及同盟國間ニ現存シ又ハ將來締結スベキ特別ノ取極ノ定ムル所ニ依ル

第十一條

(一) 本條約ノ規定ハ公ニシタルモノト否トヲ問ハズ演劇脚本又ハ樂譜入演劇脚本ノ公ノ上演及音樂的著作物ノ公ノ演奏ニ之ヲ適用ス

(二) 演劇脚本又ハ樂譜入演劇脚本ノ著作者ハ原著物ニ關スル其ノ權利ノ存續期間内ハ其ノ翻譯物ノ許諾ナキ公ノ上演ニ對シテ保護セラルルモノトス

(三) 本條ノ保護ヲ享有スルガ爲ニハ著作者ハ其ノ著作物ヲ公ニスルニ際シ其ノ公ノ上演又ハ公ノ演奏ヲ禁止スルコトヲ要セズ

第十一條ノ二

(一) 文學的及美術的著作物ノ著作者ハ其ノ著作物ヲ無線放送ニ依リテ公衆ニ傳フルコトヲ許諾スルノ特權ヲ享有ス

(二) 前項ニ掲グル權利ヲ行使スルノ條件ハ同盟國ノ國內法ノ規定スル所ニ依ル但シ右條件ハ之ヲ規定セル國ニ於テノミ效力ヲ有スベシ右條件ハ如何ナル場合ニ於テモ著作者ノ人格權ヲモ又協議調ハザル場合ニ於テ權限アル機關ノ定ムル公正ナル補償ヲ受クル著作者ノ權

利ヲモ害スルコトヲ得ザルベシ

第十二條

續案、編曲及小説、讀物又ハ詩歌ト演劇脚本トノ相互ノ變作等ノ如キ文學的又ハ美術的著作物ノ許諾ナキ間接ノ轉用ガ同一ノ形態又ハ他ノ形態ニ於ケル右著作物ノ複製ニシテ主要ナルザル變更、増補又ハ省略ヲ爲シ且新ナル原著物タル性質ヲ具備セザルモノニ過ギザルトキハ本條約ヲ適用スベキ不法複製中ニ之ヲ特ニ包含スルモノトス

第十三條

(一) 音樂的著作物ノ著作者ハ左ノ事項ヲ許諾スルノ特權ヲ有ス

一 音樂的著作物ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ右著作物ヲ寫調スルコト

二 前號ノ機器ヲ以テ右著作物ヲ公ニ演奏スルコト

(二) 本條ノ適用ニ關スル留保及條件ハ各國ニ關スル限リ其ノ國ノ國內法ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得ベシ但シ此ノ種ノ留保及條件ハ之ヲ規定セル國ニ於テノミ效力ヲ有スベシ

(三) 第一項ノ規定ハ溯及效ヲ有セズ從テ同盟ノ一國ニ於テハ千九百八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ署名セラレタル條約ノ實施前又同日以後ニ同盟ニ加盟シ又ハ將來加盟スルコトアルベキ國ニ付テハ其ノ加盟ノ日前其ノ國ニ於テ適法ニ機械的器具ニ寫調セラレタル著作物ニハ之ヲ適用セズ

(四) 本條第二項及第三項ニ基キ作成セラレタル寫調ニシテ右寫調ガ適法ニ非ザル國ニ利害關係人ノ許諾ナクシテ輸入セラレタルモノハ其ノ國ニ於テ之ヲ差押フルコトヲ得ベシ

第十四條

(一) 文學的、學術的又ハ美術的著作物ノ著作者ハ其ノ著作物ノ活動寫眞術ニ依ル複製、翻案及公ノ上映ヲ許諾スルノ特權ヲ有ス

(二) 活動寫眞的製作物ハ著作者ガ著作物ニ獨創的性質ヲ與ヘタルトキハ文學的又ハ美術的著作物トシテ保護セラル若シ此ノ性質ヲ缺クトキハ活動寫眞的製作物ハ寫眞的著作物ノ保護ヲ享有ス

(三) 活動寫眞的著作物ハ複製又ハ翻案セラレタル著作物ノ著作者ノ權利ヲ害セザル範圍内ニ於テ一ノ原著物トシテ保護セラルベキモノトス

(四) 前諸規定ハ活動寫眞術ト類似ノ他ノ一切ノ方法ヲ以テ作リタル複製物又ハ製作物ニ之ヲ適用ス

第十五條

(一) 本條約ニ依リ保護セラルル著作物ノ著作者ガ反對ノ證據アル迄眞正ノ著作ト看做サレ從テ同盟ノ諸國ノ裁判所ニ於テ偽作者ニ對シテ訴訟ノ提起ヲ許容セラルルガ爲ニハ其ノ名ガ通例ノ方法ニ依リ其ノ著作物ニ表示セラルルヲ以テ足ル

(二) 無名又ハ變名著作物ニ關シテハ發行者ニシテ其ノ名ガ著作物ニ表示セラレ

タルモノニ於テ著作ニ屬スル權利ヲ保全スルニ權能ヲ有ス右發行者ハ他ノ證據ヲ要セズシテ無名又ハ變名著作ノ承繼人ト認メラルベキモノトス

第十六條

(一) 一切ノ偽作物ハ原著作物ガ法律上ノ保護ヲ享有スルノ同盟國ノ權限アル機關ニ於テ之ヲ差押フルコトヲ得

(二) 右同盟國ニ於テハ著作物ガ保護セラレザルカ又ハ保護ノ止ミタル國ヨリ來ル複製物ヲモ差押フルコトヲ得

(三) 差押ハ各國ノ國內法ニ從ヒ之ヲ行フ

第十七條

本條約ノ規定ハ一切ノ著作物又ハ製作物ノ頒布、上演展覽ヲ國內ノ立法又ハ警察上ノ措置ニ依リ許可シ、取締リ、禁止スルノ同盟各國ノ政府ニ屬スル權利ヲ何等害スルコトナシ該權利ハ權限アル機關之ヲ行使スベシ

第十八條

(一) 本條約ハ本條約實施ノ際其ノ本國ニ於テ保護ノ期間ノ滿了ニ依リ既ニ公有ニ屬シタルモノニ非ザル一切ノ著作物ニ之ヲ適用ス

(二) 尤モ著作物ガ從前認メラレタル保護ノ期間ノ滿了ニ依リ保護ノ要求セラルル國ニ於テ公有ニ屬シタルトキハ其ノ著作物ハ其ノ國ニ於テ新ニ保護セラレザルベシ

(三) 右原則ノ適用ハ之ニ關シ同盟國間ニ現存シ又ハ將來締結スベキ特別條約ノ規定ニ從フベキモノトス此ノ種ノ規定

ノ存在セザルトキハ各國ハ各自國ニ關シ右原則ノ適用ニ關スル方法ヲ定ムベシ

(四) 前諸規定ハ同盟ニ新ニ加盟アリタル場合及保護ガ第七條ノ適用又ハ留保ノ拋棄ニ依リ擴張セララルベキ場合ニモ亦之ヲ適用ス

第十九條

本條約ノ規定ハ同盟ノ一國ノ法律ニ依リ一般ニ外國人ノ爲ニ定メラルベキ一層寬大ナル規定ノ適用ヲ求ムルコトヲ妨ゲズ

第二十條

同盟國政府ハ特別ノ取極ガ同盟ニ依リ付與セラレタル權利ヨリ廣大ナル權利ヲ著作ニ付與スベキ限リ又ハ本條約ニ牴觸セザル他ノ規定ヲ包含スベキ限リ各國相互間ニ右取極ヲ締結スルノ權利ヲ留保ス現存ノ取極ノ規定ニシテ右條件ト合致スルモノハ引續キ適用アルモノトス

第二十一條

(一) 「文學的及美術的著作物保護國際同盟事務局」ナル名稱ノ下ニ設立セラレタル國際事務局ハ之ヲ維持ス

(二) 右事務局ハ瑞西聯邦政府ノ管理ノ下ニ之ヲ置ク瑞西聯邦政府ハ其ノ組織ヲ定メ且其ノ事務ヲ監督ス

(三) 事務局ノ公用語ハ佛蘭西語トス

第二十二條

國際事務局ハ文學的及美術的著作物ニ付テノ著作人ノ權利ノ保護ニ關スル各種ノ報告ヲ蒐集シ之ヲ編纂發行ス事務局ハ同盟共同ノ利益ニ關スル事項ヲ

講究シ且諸政府ヨリ受領シタル書類ニ依リ同盟ノ目的ニ關スル諸問題ニ付佛蘭西語ヲ以テ定期刊行物ヲ編纂ス同盟國政府ハ經驗上必要ト認メラルベキ場合ニ於テハ合意ヲ以テ事務局ガ一又ハ二以上ノ他ノ國語ヲ以テ別版ヲ發行スルコトヲ許諾スルノ權利ヲ留保ス

(二) 國際事務局ハ文學的及美術的著作物ノ保護ニ關スル問題ニ付何時ニテモ同盟國ノ請求ニ應ジ其ノ必要トスルコトアルベキ特殊報告ヲ與フルコトヲ要ス

(三) 國際事務局局長ハ其ノ所管事務ニ付年報ヲ作成シ之ヲ一切ノ同盟國ニ送付ス

第二十三條

(一) 國際事務局ノ經費ハ同盟國共同シテ之ヲ負擔ス右經費ハ新ナル議定アル迄ハ年額十二萬瑞西「フラン」ヲ超過スルコトヲ得ザルベシ右額ハ必要ナル場合ニ於テハ第二十四條ニ掲グル會議ノ一ノ全會一致ノ決議ニ依リ之ヲ増加スルコトヲ得ベシ

(二) 右經費總額ニ對シ各國ノ釐出割合ヲ定ムル爲同盟國及將來同盟ニ加入スル國ヲ六等ニ區分シ各等ノ釐出スベキ單位ノ箇數ノ比例ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 第一等 二十五單位
 - 第二等 二十單位
 - 第三等 十五單位
 - 第四等 十單位
 - 第五等 五單位
 - 第六等 三單位
- 右系数ニ各等ノ國數ヲ乘ジ之ニ依リ

得タル積ノ和ヲ單位數トシ之ヲ以テ費用總額ヲ除スベシ其ノ商ハ一單位ノ費用額ヲ示スモノトス

(四) 各國ハ其ノ加盟ノ際前記等級中其ノ列セラレンコトヲ求ムルモノヲ聲明スベシ尤モ爾後何時ニテモ他ノ等級ニ列セラレンコトヲ欲スル旨ヲ聲明スルコトヲ得ベシ

(五) 瑞西國政府ハ事務局ノ豫算ヲ調製シ及其ノ支出ヲ監督シ、必要ナル立替ヲ爲シ並ニ他ノ一切ノ同盟國政府ニ送付スベキ毎年度ノ出納計算書ヲ作成ス

第二十四條

(一) 本條約ハ同盟制度ヲ完全ナラシムベキ改良ヲ加ヘンガ爲之ニ改正ヲ加フルコトヲ得

(二) 右ノ如キ問題及其ノ他ノ點ニ付同盟ノ發達ニ關係アル問題ハ同盟國ニ於テ順次開設スベキ會議ニ於テ該同盟國ノ委員之ヲ審議ス會議ヲ開設スベキ國ノ政府ハ國際事務局ノ協力ヲ得テ會議ノ準備ヲ爲ス事務局局長ハ會議ノ議事ニ列席シ且討論ニ參加スト雖モ決議ニ加ハラズ

(三) 本條約ノ如何ナル變更モ同盟ヲ組成スル各國一致ノ合意ヲ得ルニ非ザレバ同盟ニ對シテ效力ナキモノトス

第二十五條

(一) 同盟ニ屬セザル國ニシテ本條約ノ目的トスル權利ノ法律上ノ保護ヲ確保スルモノハ其ノ請求ニ依リ加盟スルコトヲ得

(二) 右加盟ハ書面ヲ以テ瑞西聯邦政府ニ之ヲ通告スベク該政府ハ之ヲ他ノ同盟國ニ通告スベシ

(三) 右加盟ハ當然本條約ニ規定セル一切ノ條款ヘノ加入及本條約ニ規定セル一切ノ利益ノ享受ヲ伴ヒ且瑞西聯邦政府ガ他ノ同盟國ニ通告シタル後一月ニシテ其ノ效力ヲ生ズベシ但シ加入スル國ニ依リ後ノ日ガ指定セラレタルトキハ此ノ限ニ在ラズ尤モ右加盟ハ加入スル國ガ少クトモ一時翻譯ニ關シ第八條ニ代フルニ千八百九十六年「パリ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年ノ同盟條約第五條ノ規定ヲ以テスルコトヲ欲スル旨ノ表示ヲ包含スルコト得ベシ該規定ハ當該國ノ一又ハ二以上ノ國語ニ翻譯スル場合ノミニ關スルモノト當然了解ス

第二十六條

(一) 同盟各國ハ本條約ガ其ノ殖民地保護領、委任統治地域、其ノ主權若ハ權力ノ下ニ在ル他ノ一切ノ地域又ハ宗主權ノ下ニ在ル一切ノ地域ノ全部又ハ一部ニ適用セララル旨ヲ瑞西聯邦政府ニ何時ニテ書面ヲ以テ通告スルコトヲ得ベク之ニ依リ本條約ハ通告中ニ掲ゲラレタル一切ノ地域ニ適用セララルベシ右通告ナキトキハ本條約ハ右地域ニ適用セラレザルベシ

(二) 同盟各國ハ本條約ガ前項ニ定ムル通告ノ目的ト爲リタル地域ノ全部又ハ一部ニ對シ適用セラレザルニ至ル旨ヲ瑞

西聯邦政府ニ何時ニテモ書面ヲ以テ通告スルコトヲ得ベク本條約ハ瑞西聯邦政府ニ宛テラレタル通告ノ受領後十二月ニシテ右通告中ニ掲ゲラレタル地域ニ於テ適用セラレザルニ至ルベシ

(三) 本條第一項及第二項ノ規定ニ從ヒ瑞西聯邦政府ニ對シテ爲サレタル一切ノ通告ハ之ヲ該政府ヨリ一切ノ同盟國ニ通知スベシ

第二十七條

(一) 本條約ハ同盟國相互ノ關係ニ於テハ千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約及順次之ヲ改正シタル諸條規ニ代ルベシ從前實施セラレタル諸條規ハ本條約ヲ批准セザルベキ國トノ關係ニ於テハ其ノ適用ヲ保持スベシ

(二) 本條約ニ署名シタル國ハ從前爲シタル留保ノ利益ヲ引續キ保持スルコトヲ得ベシ但シ批准書寄託ノ際其ノ旨ノ宣言ヲ爲スコトヲ條件トス

(三) 現ニ同盟ニ屬スル國ニシテ本條約ニ署名セザルベキモノハ何時ニテモ本條約ニ加入スルコトヲ得ベシ此ノ場合ニ於テハ該國ハ前項ノ規定ノ利益ヲ享有スルコトヲ得ベシ

第二十八條

(一) 本條約ハ批准セララルベク其ノ批准書ハ遅クトモ千九百三十一年七月一日迄ニ「ローマ」ニ於テ寄託セララルベシ

(二) 本條約ハ之ヲ批准シタル同盟國間ニ於テハ右期日後一月ニシテ實施セララルベシ但シ右期日前ニ於テ本條約ガ少ク

トモ同盟ノ六國ニ依リ批准セラレタルトキハ本條約ハ右同盟國間ニ於テハ第六ノ批准書ノ寄託ガ瑞西聯邦政府ニ依リテ右同盟國ニ通告セラレタル後一月ニシテ及爾後批准スベキ同盟國ニ對シテハ各其ノ批准ノ通告後一月ニシテ實施セララルベシ

(三) 同盟ニ屬セザル國ハ千九百三十一年八月一日迄ハ千九百八十年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ署名セラレタル條約又ハ本條約ニ加入スルコトニ依リテ同盟ニ加入スルコトヲ得ベシ千九百三十一年八月一日後ニ於テハ該國ハ本條約ニ加入スルコトヲ得ベシ

第二十九條

(一) 本條約ハ其ノ廢棄ノ通告ノ爲サレタル日ヨリ一年ヲ經過スル迄ハ無期限ニ引續キ實施セララルベシ

(二) 右廢棄ノ通告ハ瑞西聯邦政府ニ之ヲ爲スベシ右廢棄ノ通告ハ之ヲ爲シタル國ニ對シテノミ其ノ效力ヲ生ズベク本條約ハ同盟ノ他ノ諸國ニ對シテハ其ノ效力ヲ存續スルモノトス

第三十條

(一) 本條約第七條第一項ニ定ムル五十年ノ保護ノ期間ヲ自國ノ法律ニ採用スル國ハ之ヲ瑞西聯邦政府ニ書面ヲ以テ通告スベク該政府ハ直ニ之ヲ同盟ノ他ノ一切ノ諸國ニ通知スベシ

(二) 第二十五條及第二十七條ニ依リ爲シ又ハ維持シタル留保ヲ拋棄スル國ニ付亦前項ニ同じ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名セリ(委員氏名省略)

附 外務省告示

昭和六年七月十八日
外務省告示第五十九號

千九百八十八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル文學的及美術的著作物保護ニ關スル千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約ニ對シ帝國政府ハ在伊帝國大使ヲシテ左ノ宣言ヲ爲サシメタリ

宣 言

下名ハ正當ノ委任ヲ受ケ千九百八十八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ文學的著作物保護ニ關スル「ベルヌ」條約第二十七條(二)ノ規定ニ從ヒ日本國政府ハ其ノ從前爲シタル留保ノ利益ヲ保持スルコト即チ右條約第八條ニ定メラル著作物ヲ翻譯シ又ハ之ヲ許諾スル著作物ノ特權ニ關シテハ千九百九十六年五月四日「パリ」ニ於テ署名セラレタル追加規定第一條第三ニ依リ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約第五條ノ規定ニ引續キ準據スルコトヲ欲スル旨ヲ宣言ス

昭和六年(千九百三十一年)七月十日「ローマ」ニ於テ作成ス

昭和六年七月十八日
外務省告示第六十號

昭和六年七月十五日帝國政府ハ在瑞西帝
國公使ヲシテ瑞西聯邦政府ニ對シ左ノ通
告セシメタリ

以書翰啓上致候陳者千九百八年十一月
十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二
十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正
セラレタル千八百八十六年九月九日ノ
文學的及美術的著作物保護ニ關スル
「ベルヌ」條約ハ其ノ日本國ニ實施セ
ラルル日ヨリ及日本國ニ付爲サレタル
留保ト同一ノ留保ノ下ニ下記地域即チ
朝鮮、臺灣、樺太及關東州租借地ニ適
用セラレベキ旨本官ハ本國政府ノ訓令
ニ依リ同條約第二十六條(一)ニ從ヒ閣下
ニ通告スルノ光榮ヲ有シ候
尙日本國政府ハ其ノ國際事務局經費分
擔額ニ關シ千九百三十二年度ヨリ同盟
國ノ第二等ニ代フルニ第一等ニ列セラ
レ度キ旨條約第二十三條(四)ノ規定ニ從
ヒ希望致候

他方日本國政府ハ前記條約ガ日本國ニ
實施セラルル日ヨリ音樂的著作物ノ公
ノ演奏ニ關シ千九百八年十一月十三日
「ベルリン」ニ於テ改正セラレタル「ベ
ルヌ」條約ノ批准書寄託ニ際シ千九百
十年六月九日其ノ爲シタル留保ハ之ヲ
拋棄スル旨聲明致候
本官ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

敬具
昭和六年(千九百三十一年)七月十

美術獎勵施設一覽

五日「ベルヌ」ニ於テ

矢田七太郎

美術獎勵施設一覽

帝室技藝員

帝室技藝員の制度は明治二十三年十月
我が皇室におかれられて明治維新以來藝
術的に衰退し經濟的に困窮して居た當時
の我が美術界振興の思召しから制定セラ
れたもので、帝室技藝員には人格藝術共
に後進の師表と仰がるべき大家を、特に
其の爲に選ばれたる委員をして鑑衡せし
め任命せられるものである。

帝室技藝員鑑衡委員

子入江爲守、清水澄、大谷正男
瀧精一、塚本靖、伏廣幡忠隆
侯細川護立、正木直彦
帝室技藝員名簿

拜命年月

日本畫	竹内 栖鳳	大正六年六月
同	川合 玉堂	同
同	横山 大觀	昭和六年六月
同	橋本 關雪	同九年十二月
同	安田 靱彦	同
同	菊池 契月	同
同	藤島 武二	同
洋畫	岡田三郎助	同
同	和田 英作	同
同	山崎 朝雲	同
彫刻	板谷 波山	同
工藝		

聯邦參議院議員、聯邦政務省長官
ジュゼツベ、モツタ閣下

工藝	香取 秀眞	同九年十二月
同	清水 魚藏	同

帝國美術院

帝國美術院官制

昭和十年六月一日
勅令第四百十七號

第一條 帝國美術院ハ文部大臣ノ管理ニ
屬シ美術ノ發達ニ關スル重要ノ事項ヲ
審議ス

帝國美術院ハ美術ノ發達ニ資スル爲展
覽會ヲ開催スルコトヲ得

帝國美術院ハ美術ニ關スル重要ノ事項
ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 帝國美術院ハ院長一人及會員五
十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第三條 院長及會員ハ美術ニ關シ識見闊
歷卓越スル者ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請
ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 外國人ニ對シテ帝國ニ於ケル美
術ノ發達ニ關シ特別ノ功勞アル者ハ帝
國美術院ニ於テ之ヲ名譽會員ト爲スコ
トヲ得

第五條 院長ハ院務ヲ總理ス

院長事故アルトキハ文部大臣ノ指定ス
ル會員其ノ職務ヲ代理ス

第六條 帝國美術院ニ主事ヲ置ク文部部
内ノ高等官ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ
依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ主事ハ院長ノ
指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第七條	帝國美術院ニ書記ヲ置ク文部部 内ノ判任官ノ中ヨリ文部大臣之ヲ命ズ 書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
第八條	帝國美術院ハ文部大臣ノ認可ヲ 受ケ帝國美術院ニ關スル規則ヲ定ムル コトヲ得
附則	本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス 帝國美術院規程ハ之ヲ廢止ス
帝國美術院職員	
院長	清水 澄
會員	岡田三郎助 和田 英作 川合芳三郎 竹内 恒吉 中村 不折 藤島 武二 荒木悌二郎 小室貞次郎 結城 貞松 北村 西望 菊池 完爾 建昌彌一郎 和田 三造 山崎 朝雲 內藤 伸 西山卯三郎

帝國美術院議事規則

第一條 會議ハ院長之ヲ招集ス

會員五名以上ノ請求アリタルトキハ院長之ヲ招集スベシ

第二條 院長ハ會議ノ議長トナリ議事ヲ整理ス

第三條 會議ハ會員三分ノ二以上出席スルニ非ザレバ之ヲ開クコトヲ得ズ

議事ハ出席會員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス特別ノ必要アル場合ハ會議ノ議決ニ依リ前二項ノ規定ニ依ラザルコトヲ得

第四條 會議ハ之ヲ秘密トス

帝國美術院授賞規則

第一條 帝國美術院ハ卓絶セル美術作品ニ對シテ賞ヲ授ク

前項ノ外帝國美術院ハ美術ノ進歩ニ貢獻スベキ顯著ナル業績アリト認ムル者ニ對シテハ賞ヲ授クルコトヲ得

第二條 賞ハ賞狀及賞金トス

第三條 賞ハ帝國美術院會員ニ非ザル者ニ之ヲ授ク

第四條 賞ヲ授クルハ會員三名以上ノ推薦ニ依リ帝國美術院會議ノ議決ヲ經ベシ前項ノ議決ヲ爲スタメ毎年少クトモ一回會議ヲ開ク

第五條 前條ノ議決ハ會員三分ノ二以上ノ出席及出席會員三分ノ二以上ノ贊成アルコトヲ要ス

必要アル場合ニ於テハ會議ノ議決ニ依リ缺席シタル會員ニ對シ贊否ノ表決ヲ求ムルコトヲ得

第六條 賞ヲ授クベキ者推薦アリタル後死亡シタル場合ニ於テハ帝國美術院ハ授賞ノ旨ヲ公示シ且其ノ者ニ授クベキ賞ノ處分ヲ定ム

(賞記様式省略)

帝國美術院常議員規則

第一條 帝國美術院ニ於ケル院務ニ關シ院長ノ諮問ニ應ズル爲常議員ヲ置ク

常議員ノ定員ハ十一名トシ帝國美術院會員中ヨリ選出ス

第二條 常議員ノ任期ハ一年トス但シ重任ヲ妨ゲズ

第三條 常議員會ハ院長之ヲ招集ス

第四條 院長ハ常議員會ノ議長トナル院長事故アルトキハ院長ノ指名スル常議員議長トナル

第五條 常議員會ハ二分ノ一以上ノ出席ヲ要シ表決ハ出席員ノ過半数ニ依ル可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス

帝國美術院常議員

第一部

西山 翠嶂

鑄木 清方

安田 靱彦

小室 翠雲

石井 柏亭

有島 生馬

平櫛 田中

第四部

帝國美術院顧問規則

第一條 帝國美術院ハ本規則ノ定ムル所ニ依リ顧問ヲ置クコトヲ得

第二條 顧問ハ本院ニ特ニ功勞顯著ナル者ニ就キ院長之ヲ委嘱ス

第三條 院長ニ於テ顧問ヲ推薦セントスルトキハ會員會議ニ附シ出席會員三分ノ二以上ノ贊成ヲ得ルコトヲ要ス

帝國美術院展覽會參與規則

規則

第一條 帝國美術院展覽會ニ關スル事項ニ付帝國美術院長ノ諮問ニ應ズル爲展覽會參與ヲ置ク

第二條 展覽會參與ハ五十人以上以内トス展覽會參與ノ各部所屬數ハ當該部會員ノ數ニ準ズルモノトス

第三條 展覽會參與ハ各部所屬會員三分ノ二以上出席セル部會ニ於テ出席會員三分ノ二以上ノ投票ヲ得タル者ニ就キ會員會議ノ議決ヲ經テ之ヲ推薦ス

帝國美術院展覽會參與

第一部

堂本 印象

小川 芋錢

川崎 小虎

上村 松園

中村 岳陵

宇田 萩郎

建昌 大夢

香取 秀眞

板谷 嘉七
香取秀治郎
鑄木 健一
南 薫造
松岡 輝夫
中澤 弘光
清水六兵衛
川村 萬藏
松林 篤
西村源次郎
朝倉 文夫
清水 魚藏
石井 滿吉
橋本 關一
富本 憲吉
川端昇太郎
横山 秀磨
梅原龍三郎
山下新太郎
安田新三郎
安井曾太郎
前田 康造
小杉國太郎
小林 茂
有島壬生馬
佐藤 清藏
齋藤 知雄
平櫛倬太郎
津田 信夫
本田 弘人
和田 新

第三部

野田 九浦
山口 蓬春
福田 平八郎
木村 武山
石井 鶴三
長谷川 榮作
國方 林三
藤井 浩祐
澤田 晴廣
北村 正信
六角 紫水
海野 清
佐々木 泉堂

第四部

明治大正美術史編纂 委員會規則

第一條 帝國美術院ニ臨時ニ明治大正美術史編纂委員會ヲ設ク委員會ハ株式會社朝日新聞社寄附ノ美術獎勵費ニ基ク明治大正美術史編纂ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條 委員會ハ委員長及委員若干名ヲ以テ之ヲ組織ス委員長及委員ハ帝國美術院長ノ推薦ニ依リ文部大臣之ヲ囑託ス

第三條 委員長ハ會務ヲ總理ス

第四條 委員ハ委員長ノ指揮ヲ承ケ編纂ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第五條 委員會ニ幹事一名ヲ置ク幹事ハ美術研究所長ヲ以テ之ニ充ツ幹事ハ委員長ノ指揮ヲ承ケ委員會ノ審議ニ基キ

美術獎勵施設一覽

テ編纂ニ關スル事務ヲ掌ル

第六條 編纂ニ關スル事務ハ美術研究所ニ之ヲ委嘱ス

第七條 委員會ハ委員長臨時之ヲ招集ス
第八條 編纂セラレタル美術史又ハ資料ハ適當ナル方法ニ依リ帝國美術院之ヲ發表ス

明治大正美術史編纂委員 會職員

委員長 正木 直彦
委員 結城 貞松
横山 秀磨
和田 英作
石井 滿吉
香取秀治郎
矢代 幸雄
下村 宏
矢代 幸雄
美術研究所長 矢代 幸雄

幹事

帝國美術院展覽會規則

第一章 總則

第一條 本會ノ定期開設ハ毎年一回トス出品ノ種類、會場、事務所及會期ハ其ノ都度之ヲ公告ス

第二條 本會ハ出品ノ種別ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ分ツ

第一部 繪畫
第二部 繪畫（油繪、水彩畫、パステル畫、素描、創作版畫等）
第三部 彫塑（甲種 彫刻、乙種 塑造）
第四部 美術工藝

第三條 出品ハ鑑査ヲ經タルモノニ限リ之ヲ

陳列ス
出品人ニシテ左ニ列舉スル資格ノ一ニ該當スルトキハ其ノ專門技術ニ依リ出品ニ限リ鑑査外トス但シ第四部ニ於ケル綜合製作ニ依リ出品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノトス

一 帝國美術院會員及展覽會參與
二 帝國美術院授賞規則（大正十三年制定ニ係ルモノヲモ含ム）ニ依リ授賞セラレタル者
三 帝國美術院ニ於テ指定セラレタル者
前項第三號ノ指定ハ各部所屬會員三分ノ二以上出席セル部會ニ於テ出席會員三分ノ二以上ノ投票ヲ得タル者ニ就キ會員會議ニ於テ之ヲ決スルモノトス

第四條 出品ノ荷造及運送費ハ總テ出品人ノ負擔トス但シ遠隔ノ地ニ在ル出品團體ニ對シテハ文部省ヨリ特ニ其ノ費用ノ一部ヲ補助スルコトアルベシ

第五條 本會ハ出品ノ保管ニ關シ十分ノ注意ヲ爲スト雖モ出品ノ紛失又ハ損害ニ對シ一切其ノ責ニ任ゼズ

第六條 出品人ノ承諾ヲ得且帝國美術院ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲スコトヲ得ズ
前項ノ許可ヲ得タル者會場ニ於テ出品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲サントスルトキハ許可證ヲ掛員ニ提示シテ其ノ指揮ヲ受クベシ
文部省ハ出品ノ撮影、模寫シヌハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第二章 出品

第七條 出品ハ自己ノ製作シタルモノニ限ル故人ノ製作ニ係ルモノハ其ノ相續人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第八條 出品ノ出品ニシテ原型製作者ト實材製作者ト其ノ人ヲ異ニスルトキハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス
第四部ノ出品ニシテ綜合製作ナルトキハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト爲ス但シ

代表製作者ハ共同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ得

第九條 同一ノ出品ハ第一乃至第四ノ各部ニ付二點以內トス
但シ第三條第二項及第四十條ニ該當スル出品ハ一點ニ限ル

第十條 出品ノ形狀表裝等ノ如何ニ拘ラズ同一意匠ニ依レル一箇ノ作品ト認メ得ベキモノハ二箇以上ニ分離セルモノト雖モ之ヲ一點ト看做ス
第十一條 同一意匠ニ依ラザル數箇ノ作品ト雖モ一箇ニ合裝シタルモノハ之ヲ一點ト看做ス

第十二條 第一部ノ出品ハ一點ニ付縱十尺以內（裝飾設備ヲ含ム）
橫十二尺以內（裝飾設備ヲ含ム）
トシ出品人ノ占メ得ベキ陳列壁面ハ橫十三尺迄トス

第三條第二項ニ依ル出品ハ縱二十五尺以內（裝飾設備ヲ含ム）トス
第四部ノ出品ハ一點ニ付立體ニ在リテ八十尺平方以內ノ場所ニ陳列シ得ルモノ其ノ他ハ縱十二尺以內（裝飾設備ヲ含ム）トス
第二部及第三部ノ出品ハ適當トス

第十三條 會場ノ都合ニ依リ出品ノ全部ヲ同時ニ陳列スルコト能ハズト認ムルトキハ一定日數毎ニ陳列替ヲ爲スコトアルベシ
陳列替ニ關スル事項ハ當該部審査員ニ於テ之ヲ定ム

出品ノ陳列上必要アリト認メタルトキハ裝飾設備ヲ適宜變更セシムルコトアルベシ
第十四條 左ニ掲グルモノハ出品スルコトヲ得ズ
一 製作後五年以上経タルモノ
二 本會ニ陳列シタルコトアルモノ
三 風致ニ害アリト認ムルモノ
第十五條 出品ヲ爲サントスル者ハ作品一點ニ付金一圓ノ手数料ヲ納付スベシ既納ノ手数料ハ何等ノ事由アルモ之ヲ還付セズ

第十六條 出品ヲ爲サントスル者ハ手数料ヲ添ヘ所定書式ノ申込書ト共ニ作品ヲ受付掛ニ添出スベシ

其ノ期日等ハ別ニ之ヲ公告ス

故人ノ作品ヲ出品スル場合ニハ第一項ノ申込書中解説書欄ニ製作者ノ氏名及履歴ヲ記入スベシ

作品ニハ一點毎ニ命題及出品人氏名ヲ記シタル紙片ヲ貼付スベシ

第十七條 事務所ニ於テ出品ヲ受理シタルトキハ直ニ受領證ヲ交付スベシ

第十八條 出品ハ撤回スルコトヲ得ズ但シ帝國美術院長ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十九條 第一部及第二部ノ出品ハ額面ト爲シ又ハ裱練ヲ附スル等出品人ニ於テ適當ノ裝飾設備ヲ爲スベシ

第二十條 鑑査ノ上陳列スルコトニ決定シタル出品以外ノモノハ展覽會開會一週間後ヨリ二十日以内ニ出品人ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルモノハ本會ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第二十一條 本會ニ於テ定メタル陳列品ノ位置、配列等ニ對シ出品人ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第三章 鑑査及審査

第二十二條 審査員ハ帝國美術院會員中ヨリ之ヲ定ム

各部ノ審査主任ハ帝國美術院長之ヲ指名ス

第二十三條 鑑査ハ出品ニ就キ陳列スベキモノヲ定メ審査ハ陳列品ニ就キ優秀ナルモノヲ推薦スルモノトス

第二十四條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クルモノトス

第三條第二項ニ該當スル出品ハ審査外トス

第二十五條 鑑査及審査ハ各部ニ就キ審査員之ヲ行フ

鑑査及審査ノ方法ハ各部審査員ニ於テ之ヲ定ム

第二十六條 鑑査及審査ノ結果ハ各部審査主任ヨリ之ヲ帝國美術院長ニ報告スベシ

第二十七條 出品人ハ鑑査及審査ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及搬出

第二十八條 陳列品ハ本會ニ於テ其ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス出品人ニ於テ本會ヲ經ズシテ賣買契約ヲ爲サントスルトキハ本會ノ承認ヲ經ベシ

第二十九條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ代金ヲ添ヘテ事務所ニ申出ヅベシ

第三十條 即時ニ代金ヲ支拂ハザルトキハ手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ得手附ノ金額ハ代價ノ三分ノ一以上トス

前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金ノ支拂ヲ爲サザルトキハ手附金ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做ス但シ拋棄シタル手附金ハ當該出品人ノ所得トス

第三十一條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ出品ニ其ノ旨ヲ貼紙スベシ

第三十二條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價ヲ變更セントスルトキハ事務所ニ届出ヅベシ

第三十三條 出品人ニ於テ出品及代金受領等ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルトキハ其ノ住所氏名ヲ具シ事務所ニ届出ヅベシ

第三十四條 出品ノ搬出期間ハ開會後三日以内トス若期間内ニ搬出セザル者アルトキハ本會ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十五條 陳列品中賣約済ノモノハ開會後買主ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出シ自己ノ買主タルコトヲ證明スルコトヲ要ス

第三十六條 開會後陳列品ノ搬出運送等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ事務所ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズルコトアルベシ

第五章 觀覽

第三十七條 觀覽時間ハ開會中毎日午前九時ヨリ午後五時迄トス但シ都合ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ觀覽ヲ停止スルコトアルベシ

第三十八條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルルコトヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ從フベシ

第三十九條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊ルノ虞アリト認ムル者ハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムルコトアルベシ

附則

第四十條 左ニ掲グル者ノ出品ハ第三條ノ規定ニ拘ラズ今後二回ノ展覽會ニ於テ之ヲ陳列スルコトヲ得

一 從前帝國美術院美術展覽會ノ出品ニ付無鑑査ノ取扱ヲ受ケタル者

二 前號ニ準ズベキ者

前項第二號ニ該當スベキ者ハ各部會ニ於テ之ヲ決定シ會員會議ノ議決ヲ經ベシ

展覽會規則第三條第二項該當者

投資規則ニ依リ投資セラレタル者

第一部

熊岡 美彦

中村 研一

安藤 照

佐々木大樹

伊東 深水

石崎 光瑤

徳岡 神泉

大智 勝觀

吉田 秋光

第二部

田邊 至

横江 嘉純

池上 秀畝

服部 有恆

小野 竹喬

金島 桂華

吉村 忠夫

第三部

中村大三郎

矢野 橋村

山村 排花

峯本 一洋

木島 櫻谷

神原 紫峰

水田 竹園

飛田 周山

廣島 吳市

第四部

堀 進二

小倉右一郎

加藤 顯清

高村光太郎

中野 桂樹

雨宮 治郎

三木 宗策

關野 聖雲

鹿島 英二

第五部

推朱 楊成

山本 安藝

北原 千鹿

杉田 禾堂

廣川松五郎

村上 華岳

矢澤 弦月

山口 華楊

荒井 寬方

第六部

北野 恆富

島田 墨仙

廣島 吳市

廣島 吳市

廣島 吳市

廣島 吳市

廣島 吳市

廣島 吳市

廣島 吳市

文部省美術展覽會

昭和十一年文部省美術展覽會規則

昭和十一年八月四日

昭和十一年文部省美術展覽會規則左ノ通り定ム

昭和十一年八月四日

文部大臣 平生劍三郎

昭和十一年八月四日

文部省告示第三百三號

第一條 昭和十一年文部省美術展覽會ハ本規則ノ定ムル所ニ依リ東京市上野公園内東京

第一章 總則

府美術館ニ於テ之ヲ開催ス
第二條 展覽會ハ作品ノ種類ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ分ツ

第一部 繪畫

第二部 繪畫(油繪、水彩畫、バステル畫、素描、創作版畫等)

第三部 彫塑

第四部 美術工藝
第三條 展覽會ノ事務ヲ處理スル爲展覽會委員長及展覽會委員ヲ置ク

第四條 展覽會委員長及展覽會委員ハ文部大臣之ヲ命ジ又ハ委嘱ス

第五條 展覽會委員ハ第一部二十五名、第二部二十五名、第三部九名、第四部十八名以内トス

第六條 陳列スベキ作品ハ、鑑査ヲ經タル作品ト文部省ヨリ招待ヲ受ケタル者ノ作品トス

招待ヲ受ケベキ者ハ帝國美術院展覽會ニ於テ無鑑査ノ資格ヲ有スル者及今回ノ展覽會ニ招待ヲ受ケタル者トス

第七條 作品ノ搬入受付日時ヲ左ノ如ク定ム

(イ) 鑑査ヲ受ケタル作品……各部共十月一日ヨリ同五日迄

(ロ) 招待ヲ受ケタル者ノ作品……第一部、第二部及第三部……十月二十一日ヨリ十月三十一日迄

第四部十月一日ヨリ十月十二日迄
搬入受付時間ハ午前九時ヨリ午後五時迄トス

第八條 鑑査ヲ經タル作品ト招待ヲ受ケタル者ノ作品トハ第一部、第二部及第三部ハ會期ヲ分チ第四部ハ陳列室ヲ分チテ陳列シ會期ヲ左ノ如ク定ム

十月十六日ヨリ十一月三日迄 鑑査展
十一月六日ヨリ十一月二十三日迄 招待展
但シ第四部ハ全會期トス

第二章 出品

第九條 作品ハ自己ノ製作シタルモノニ限ル

故人ノ製作ニ係ルモノハ其ノ相續人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第十條 第三部ノ作品ニシテ原型製作者ト實材製作者ト其ノ人ヲ異ニスルトキハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス、第四部ノ作品ニシテ綜合製作ナルトキハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト爲ス但シ代表製作者ハ共同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ得

第十一條 鑑査ヲ受ケタル作品ハ同一人ニ付各部共二點以内招待ヲ受ケタル者ノ提出スベキ作品ハ一點トス

第十二條 招待ヲ受ケタル者鑑査展ニ作品ヲ提出シタル時ハ招待ヲ辭退シタルモノト看做ス

第十三條 形狀表裝等ノ如何ニ拘ラズ同一意匠ニ依レル一箇ノ作品ト認メ得ベキモノハ二箇以上ニ分離セルモノト雖モ之ヲ一點ト看做ス

第十四條 同一意匠ニ依ラザル數箇ノ作品ト雖モ一箇ニ合裝シタルモノハ之ヲ一點ト看做ス

第十五條 第一部ノ鑑査ヲ受ケタル者ノ作品ハ一點ニ付横十三尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

但シ第一部ニ屬スル招待ヲ受ケタル者ノ作品ハ横二十五尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

第四部ノ作品ハ一點ニ付立體ニ在リテハ十尺平方以内ノ場所ニ陳列シ得ルモノ其ノ他ハ横十二尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

第二部及第三部ノ作品ノ大サハ適宜トス

第十六條 左ニ掲グルモノハ出品スルコトヲ得ズ

一 製作後五年以上ヲ經タルモノ

二 既ニ帝國美術院ノ展覽會ニ陳列シタルコトアルモノ

三 風教ニ害アリト認ムルモノ

第十七條 鑑査展ニ出品セントスル者ハ作品一點ニ付金一圓ノ手数料ヲ納付スベシ既納ノ手数料ハ何等ノ事由アルモノ之ヲ還付セズ

第十八條 出品セントスル者ハ所定書式ノ申込書ト共ニ作品ヲ受付掛ニ差込スベシ

故人ノ作品ヲ出品スル場合ニハ申込書中解讀書欄ニ製作者ノ氏名及履歷ヲ記入スベシ作品ニハ一點毎ニ命題及出品人氏名ヲ記シタル紙片ヲ裏面ニ貼付スベシ

第十九條 展覽會事務所ニ於テ作品ヲ受理シタルトキハ直ニ受領書ヲ交付スベシ

第二十條 受理シタル作品ハ撤回スルコトヲ得ズ但シ展覽會委員長ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十一條 第一部及第二部ノ作品ハ額面ト爲シ又ハ裱縁ヲ附スル等出品人ニ於テ適當ノ裝飾設備ヲ爲スベシ

第二十二條 陳列スルコトニ決定シタル作品以外ノモノハ展覽會開會後五日ヲ經過シタル後十日間以内ニ出品人ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルモノハ文部省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第二十三條 出品人ハ陳列品ノ位置、配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十四條 作品ノ荷造及運送費ハ總テ出品人ノ負擔トス

但シ遠隔ノ地ニ在ル出品團體ニ對シテハ文部省ヨリ特ニ其ノ費用ノ一部ヲ補助スルコトアルベシ

第二十五條 文部省ハ作品ノ保管ニ關シ十分ノ注意ヲ爲スト雖モ其ノ紛失又ハ損害ニ對シ一切責任任ゼズ

第二十六條 出品人ノ承諾ヲ得且文部省ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ作品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲スコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ得タル者會場ニ於テ作品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲サントスルトキハ許可證ヲ掛員ニ提示シ其ノ指揮ヲ受クベシ

文部省ハ作品ヲ撮影、模寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第三章 鑑査及審査

第二十七條 展覽會委員ニシテ鑑査ニ當ルモノハ各部展覽會委員ニ於テ之ヲ定ム

展覽會委員長ハ各部ノ鑑査、審査ニ付主任ヲ指名ス

第二十八條 鑑査ハ提出セル作品ニ就キ陳列スベキモノヲ定メ審査ハ陳列品ニ就キ優秀ナルモノヲ選定スルモノトス

第二十九條 鑑査展ハ陳列品ハ總テ選奨、擬賞ノ査定ヲ受ケタルモノトス

第三十條 鑑査及審査ノ方法ハ各部ノ鑑査、審査ニ當ル委員ニ於テ之ヲ定ム

鑑査及審査ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第三十一條 鑑査及審査ノ結果ハ主任ヨリ之ヲ展覽會委員長ニ報告スベシ

第三十二條 出品人ハ鑑査及審査ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及搬出

第三十三條 陳列品ハ展覽會事務所ニ於テ其ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス

第三十四條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ代金ヲ添ヘテ展覽會事務所ニ申出ヅベシ

第三十五條 即時ニ代金ヲ支拂ハザルトキハ手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ得手附ノ金額ハ代價ノ三分ノ一以上トス

前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金ノ支拂ヲ爲サザルトキハ手附ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做ス、但シ拋棄シタル手附ハ當該出品人ノ所得トス

第三十六條 第三十四條ニ依ル代金及第三十五條ニ依ル手附ハ展覽會終了後拂渡ヲ爲スモノトス

第三十七條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ作品ニ其ノ旨ヲ貼紙スベシ

第三十八條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價ヲ變更セントスルトキハ展覽會事務所ニ届ケ出

ズベン

第三十九條 出品人ニ於テ作品及代金受領等

ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルキハ其ノ住所氏名ヲ具シ展覽會事務所ニ届出ズベシ

第四十條 鑑査展及招待展終了後陳列作品ノ搬出ニ就テハ夫々展覽會事務所ヨリ出品人ニ通告ス

第四十一條 陳列品中資約濟ノモノハ展覽會終了後買主ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出シ自己ノ買主タルコトヲ證スルヲ要ス

第四十二條 展覽會終了後陳列品ノ搬出運送等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ展覽會事務所ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズルコトアルベシ

第五章 觀覽

第四十三條 觀覽時間ハ開會中毎日午前九時

ヨリ午後五時迄トス但シ都合ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ觀覽ヲ停止スルコトアルベシ

第四十四條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルルコトヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且ツ掛員ノ指揮ニ從フベシ

第四十五條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊ルノ虞アリト認ムル者ハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムルコトアルベシ

附 則

第四十六條 十月十六日及十一月六日ハ觀覽招待狀又ハ優待券ヲ所持スル者ノ觀覽ニ供

シ其ノ他ノ日ハ一般公衆ノ觀覽ニ供ス

毎週月曜日ヲ觀覽日トシ團體入場ヲ謝絶ス

十月十六日及十一月六日ノ招待日ハ陳列品ノ賣買契約ヲ取扱ハズ

第四十七條 展覽會事務所ハ昭和十一年九月

三十日迄ハ文部省内ニ同十月一日以後十一月二十五日迄ハ東京府美術館内ニ之ヲ置ク

第四十八條 展覽會關係者、出品人ニ對シテハ鐵道旅客運賃割引證及出品運賃割引證ヲ

交付ス割引證ノ交付ヲ希望スル者ハ住所、年齡、發着驛名ヲ具シ展覽會事務所ニ申出ズベシ

第四十九條 展覽會終了後陳列品ハ京都市主權ノ京都陳列會ニ陳列スルモノトス

昭和十一年文部省美術展覽會委員

第一部

(イロハ順)

伊東 深水

服部 有恒

西村 五雲

西山 翠嶂

堂本 印象

小野 竹齋

川村 曼舟

川崎 小虎

吉田 秋光

竹内 桐鳳

根上 富治

永田 春水

中村 大三郎

矢野 橋村

山口 華楊

矢澤 弦月

松岡 映丘

案本 一洋

福田 平八郎

兒玉 希望

荒木 十畝

結城 素明

水田 竹園

廣島 晃市

石川 寅治

林 俊衛

長谷川 昇

太田 喜二郎

岡田 三郎助

和田 三造

第三部

建島 大夢

內藤 伸

山崎 朝雲

藤井 浩祐

朝倉 素夫

齋藤 素巖

北村 西望

坂谷 波山

石田 英一

六角 紫水

香取 秀眞

鹿島 英二

高村 豐周

堆朱 楊成

津田 信夫

海野 清

山鹿 清華

山本 安壘

松田 權六

佐々木 象堂

清水 六兵衛

北原 千鹿

高間 惣七

田邊 至

辻 永

中村 研一

中野 不折

中澤 弘光

中本 鼎

山本 武二

藤島 萬吾

小林 安五郎

安宅 興里

齊藤 興里

南 薫造

鈴木 千久馬

商工省工藝展覽會

工藝審查委員會官制

大正八年五月二十二日
勅令第二百三十號

第一條 工藝審查委員會ハ商工大臣ノ監督ニ屬シ工藝展覽會出品ノ審査ヲ爲ス工藝展覽會ニ關スル規程ハ商工大臣之ヲ定ム

第二條 工藝審查委員會ハ委員長及委員ヲ以テ之ヲ組織ス

委員長ハ商工次官ヲ以テ之ニ充ツ委員ハ商工大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第三條 委員ノ任期ハ一年トス

第四條 委員長ハ會務ヲ統理シ審査ノ成績ヲ商工大臣ニ報告ス

第五條 工藝審查委員會ハ之ヲ左ノ二部ニ分ツ商工大臣必要ト認ムルトキハ部ヲ科ニ分ツコトヲ得

第一部 圖案

第二部 工藝品

委員ノ部屬ハ商工大臣之ヲ定ム

第六條 工藝審查委員會ニ幹事二人ヲ置ク商工部内ノ高等官中ヨリ商工大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

幹事ハ委員長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

清水 龜藏
廣川 松五郎
杉田 禾堂

第七條 工藝審査委員會ニ書記五人ヲ置ク
工商大臣之ヲ命ズ
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
附則

本令ハ公布ノ日より之ヲ施行ス

工藝審査委員會委員

委員長
委員
委員

村瀬 直美
岸田日出刀
村上 宇一
霜島正三郎
畑 正吉
宮下 孝雄
木槍 恕一
岡田三郎助
六角注多良
津田 信夫
和田 三造
海野 清
平野 耕輔
國井喜太郎
磯井 雪枝
塚本 靖
武田 五一
板谷 嘉七
豊泉 益三
北原 三佳
鹽谷狩野吉
西川 浩

第一章 總則

第一條 工藝品ノ改善發達ヲ圖ル爲毎年一回
工藝展覽會ヲ開ク、開催地、會場、會期其
ノ他ノ事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス
第二條 本會ニ左ノ二部ヲ置ク
第一部 圖案
第二部 工藝品

第一部ニ出品スル圖案ニハ之ヲ應用シテ製
作シタル物品ヲ、第二部ニ出品スル工藝品
ニハ其ノ圖案ヲ添附スルコトヲ妨グズ
第三條 出品ハ審査ニ合格シタルモノニ限リ
之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スル場
合ニ於テハ出品人一人ニ付出品二點ヲ限リ
審査ヲ要セズシテ之ヲ陳列ス

一 工藝審査委員會委員タル者又ハ委員タ
リシ者が出品シタルトキ
二 褒賞一等賞ヲ授與セラレタルコトアル
者ガ褒賞ヲ授與セラレタル出品ト同種ノモ
ノヲ出品シタルトキ

三 褒賞二等賞ヲ授與セラレタル者ガ褒賞
ヲ授與セラレタル出品ト同種ノモノヲ其ノ
翌年出品シタルトキ
第四條 出品ノ搬入及搬出ニ要スル費用ハ總
テ出品人ノ負擔トス

第五條 出品ノ保管ニ關シテハ十分ノ注意ヲ
爲スト雖モ出品ノ亡失、毀損、汚染、其ノ
他ノ損害ニ對シテハ別ニ定ムルモノノ外其
ノ責ニ任ゼズ
第六條 出品人ノ承諾及商工省ノ許可ヲ得ル
ニ非ザレバ出品ヲ撮影又ハ模寫スル事ヲ得
ズ商工省ハ出品ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ
刊行スルコトアルベシ

第二章 出品
第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品
スルコトヲ得ズ
一 製作後三年以上ヲ經タルモノ
二 本會、其ノ他ノ博覽會、共進會、展覽
會又ハ品評會ニ陳列セラレタルコトアルモ

(但シ本會ニ對スル出品ヲ機選スル爲各地方ニ於
テ開ク展覽會、品評會ニ付テハ此ノ限ニアラズ)
三 販賣ノ爲店舗ニ陳列セラレタルコトアル
モノ
四 風教ヲ害スル虞アルモノ
第八條 出品セントスル者ハ附屬様式ノ申込
書ヲ商工省ニ差出スベシ
申込書ノ提出期日及出品ノ受理期間ハ其ノ
都度之ヲ告示ス

第九條 出品ヲ受理シタルトキハ出品受領書
ヲ交付ス

第十條 審査ニ不合格ノ通知アリタルトキハ出
品人ハ遲滞ナク其ノ出品ヲ搬出スベシ、若
シ通知ヲ發シタル日より二十日ヲ經ルモ搬
出セザルトキハ商工省ニ於シ適宜之ヲ處分
スルコトアルベシ
第十一條 出品人ハ陳列ノ位置、配列等ニ對
シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第三章 審査及審査
第十二條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クベキモノ
トス但シ第三條各號ノ一ニ該當スル出品又
ハ學校其ノ他營利ノ目的トセザル團體ノ出
品ハ特ニ出品人ノ請求アル場合ノ外ハ審査
ヲ行ハズ

第十三條 審査及審査ハ工藝審査委員會之ヲ
行フ
第十三條ノ一 出品審査ニ合格シタルトキハ
審査合格證ヲ交付ス

第十四條 審査又ハ審査ニ對シテハ異議ヲ申
立ツルコトヲ得ズ
第四章 褒賞及協賛
第十五條 審査ノ結果優等ノ出品ノ圖案者又
ハ製作者ニ對シテハ褒賞ヲ授與ス

前項ノ圖案者又ハ製作者ガ出品人ニ非ザル
場合ニ於テハ圖案者又ハ製作者ニ授與スル
褒賞ガ一等賞及二等賞ナル場合ニ限リ協賛
賞ヲ其ノ出品人ニ授與ス
第十六條 褒賞ハ左ノ四等級トス

一等賞 二等賞 三等賞 褒狀
第十六條ノ二 圖案ノ出品ニ付前二條ノ規定
ニ依リ褒賞ヲ受ケタル圖案者ニ對シ褒賞ノ
外左ノ賞金ヲ授與ス
一等賞 金參百圓
二等賞 金百五十圓
三等賞 金百圓
褒狀 金五十圓

第十六條ノ三 工藝品ノ出品ニ付特別ノ事情
アル場合ニ於テハ第十五條及第十六條ノ規
定ニ依リ褒賞ヲ受ケタル製作者ニ對シ褒賞
ノ外賞金ヲ授與スルコトアルベシ

前項ノ賞金ニ關シテハ其ノ都度之ヲ告示ス
第十六條ノ四 審査ノ結果優等ノ出品ノ圖案
者又ハ製作者ノ一人ニ對シ前四條ノ規定ニ
依リ褒賞又ハ賞金ノ外商工大臣賞ヲ授與ス
第十七條 褒賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

第五章 雜則

第十八條 陳列品ハ非賣品ノ外購買ノ申込ニ
應ズルモノトス
陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取扱フ
出品人ニ於テ本會ヲ經ズシテ出品ノ賣買契
約ヲ爲サントスルトキハ本會ノ承認ヲ受ク
ベシ
第十九條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ其ノ
旨ヲ本會ニ申出テ代金又ハ手附金ヲ支拂フ
ベシ

前項ノ手附金ハ代價ノ三分一以上トス
手附金ヲ納付シタル買主本會ノ閉會後七日
以內ニ殘額代金ヲ支拂ハザルトキハ手附金
ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做シ當該出品人
ノ所得トス
第二十條 陳列品ハ開會中ノ之ヲ搬出スルコト
ヲ得ズ

第二十一條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ閉會
後指定ノ期間內ニ搬出スベシ
前項ノ期間內ニ搬出セザルトキハ商工省ニ
於テ適宜之ヲ處分スル事アルベシ

工藝展覽會規程

昭和二年 五月
商工省告示第十二號

出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントストルト
キハ出品受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベ
シ

第二十二條 秩序又ハ風俗ヲ紊ルノ虞アリト
認ムル者ハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムルコ
トアルベシ

第二十三條 觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且ツ係員
ノ指揮ニ從フベシ
(附屬様式)

出品申込書
私儀工藝展覽會規程ニ依リ左記目錄ノ通出
品致度此段申込候也
年 月 日 住所 職業 氏 名 印

商工大臣宛

記

部名	番號	形狀	物質	品名	圖案者	製作者	箇數	代價	備考

一 番號ノ欄ニハ二點以上ノ出品ヲ爲ス場
合ニ於テ其ノ出品ヲ區別スル番號ヲ記載
スルモノトス

二 圖案ノ出品ニハ品名ノ欄ニ之ヲ應用ス
ベキ物品ヲ記載スベシ

三 一點ノ出品ガ數箇ノ物ヨリナルトキハ
箇數ノ欄ニ其ノ箇數ヲ記載スベシ

四 非賣品ハ代價ノ欄ニ其ノ旨ヲ記載スベ
シ

五 左ノ事項ハ之ヲ備考ノ欄ニ記載スベシ
イ 本規程第二條第二項ニ依リ添付スルモ
ノ

ロ 第三條各號ノ一ニ該當スルヤ否ヤ
ハ鑑査ヲ要セザル出品ニハ其ノ旨及其ノ
理由
ニ鑑査ヲ行ハザル出品ニシテ特ニ之ヲ請
求セントストルトニ付テハ其ノ旨
ホ 追註文ニ應ジ得ル物ニ在リテハ其ノ旨

出品搬出ノ方法(會場若ハ事務所ニ於
テ出品ヲ引取ルヤ又ハ運送ニ依リ送付
ヲ受クルヤノ別)

第二十四回工藝展覽會ノ會期、會場、
出品申込期日等ニ關スル告示
一 會期 自昭和十二年四月二十一日至同
年七月十七日

二 會場及展示期間

イ 自昭和十二年四月二十一日至同年同
月三十日迄十日間ハ東京市麹町區丸ノ
內三丁目府立東京商工獎勵館内
ロ 自昭和十二年五月十六日至同年同月
二十二日迄七日間ハ京都市岡崎公園大
禮記念京都美術館内
ハ 自昭和十二年六月四日至同年同月十
日迄七日間ハ福岡市天神町福岡縣産業
獎勵館内

ニ 自昭和十二年六月二十四日至同年同
月三十日迄七日間ハ名古屋市鶴舞公園
名古屋市公會堂内
ホ 自昭和十二年七月十三日至同年同月
十七日迄五日間ハ金澤市兼六公園石川
縣商品館内

三 本會事務ハ左ノ通之ヲ取扱フ
昭和十二年四月一日迄及同年七月二十五
日以降 商工省事務局
自昭和十二年四月二日至同年五月五日 東京會場内
自同年五月八日至同年五月二十六日 京都會場内
自同年五月三十一日至同年六月十四日 福岡會場内
自同年六月二十日至同年七月四日 名古屋會場内
自同年七月九日至同年同月二十四日 金澤會場内

四 出品ノ種類

(一) 一般出品 左ノ工藝品及之ニ應用ス
ル圖案
一 金屬器
一 陶磁器及硝子器
一 染織物(刺繡、編組物ヲ含ム)
一 漆器
一 木竹器
一 以上各種ノ綜合工藝品及其ノ他ノ工藝
品

(二) 課題出品 左ノ課題ノ工藝品
一 暖房具
一 履物類一切
一 浮き出機樣ヲ應用シタルモノ(浮き出
機樣トハ薄肉等ノ如ク平面ニ非ザルモノ
ヲ謂ヒ布帛類ニ在リテハ綾織等ヲ含ム)
出品ハ一人ニ付五點以內トス但シ學校ノ出
品其ノ他營利ヲ目的トセザル團體ハ此ノ限
ニ在ラズ

出品者ハ出品申込書ヲ昭和十二年三月三
十一日迄二商工省事務局ニ差出スベシ
圖案ニ對シテハ工藝展覽會規程第十六條ノ
二ノ賞金ヲ授與シ工藝品ニ對シテハ左ノ賞
金ヲ授與ス
一 等賞 金百圓
二 等賞 金五十圓
課題出品ニ付テハ其ノ出品中優秀ナルモノ
ニ對シテ左ノ課題賞ヲ授與ス但シ前項ノ賞金
ヲ授與セザルモノニ對シテハ課題賞ヲ授
與セズ

五 出品受理期間ハ昭和十二年四月二日ヨ
リ七日迄トス但シ鑑査ヲ要セザル出品ニ
付テハ昭和十二年四月十二日迄トス出品
ハ右期間内毎日午前九時ヨリ午後四時迄
ニ東京會場内ニ搬入スベシ譯留荷物ハ絶
對ニ之ヲ取扱ハズ
六 出品物ニハ必ず各品毎ニ申込書ノ目錄
ニ記載シタル同一ノ番號、府縣名及出

七 出品人氏名ヲ記入シタル小札ヲ附スベシ
出品ノ圖案ハ強靱ナル紙又ハ布ヲ使用
シ且陳列上見苦シカラザル樣適當ノ表裝
ヲ爲スベシ

八 出品物及出品人ノ會場ヘノ往復ニ對シ
テハ官設鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典アル
ヲ以テ必要ノ向ハ商工省事務局ニ對シテ
割引證ノ交付ヲ請求セラルベシ
九 各會場ニ於ケル初日ハ招待日トス
陳列品ノ賣約ハ昭和十二年四月二十一
日ヨリ其ノ申込ヲ受ケ申込順ニ依リ官公
廳ガ參考品トシテ必要ナル場合ハ優先賣
約ヲ爲ス

十 京都市、福岡市、名古屋市及金澤市ニ
於テ展示スル爲移送スル場合ニ於テハ左
ノ條件ニ依ルモノトス
イ 移送ノ荷造費及運搬費ハ出品人之ヲ
負擔スルコトヲ要セズ
ロ 移送ノ爲生ジタル損害ニ付テハ商工
省ニ於テ賠償ノ責ニ任ゼズ但シ事情耐
量スベキモノアリト認メタル場合ニ於
テハ商工省ニ於テ相當ト認ムル程度ノ
賠償ヲ爲スコトアルベシ

十二 出品人又ハ買主ガ東京又ハ金澤事務所
ニ於テ直接引取ヲ希望スルモノヲ除キ
出品物又ハ買上品ハ金澤ヨリ之ヲ發送
ス
イ 金澤ヨリ發送スル場合ニ於テハ荷造
費及運搬費ハ出品人又ハ買主ノ負擔ト
ス
ロ 出品物又ハ買上品ヲ東京又ハ金澤事
務所ニ於テ直接引取ヲ希望スル場合ニ
於テ直接引取ヲ希望スル場合ニ於テハ
其ノ旨出品申込書備考欄ニ明記シ又ハ
購買申込ノ際申出ヅベシ

五 出品受理期間ハ昭和十二年四月二日ヨ
リ七日迄トス但シ鑑査ヲ要セザル出品ニ
付テハ昭和十二年四月十二日迄トス出品
ハ右期間内毎日午前九時ヨリ午後四時迄
ニ東京會場内ニ搬入スベシ譯留荷物ハ絶
對ニ之ヲ取扱ハズ
六 出品物ニハ必ず各品毎ニ申込書ノ目錄
ニ記載シタル同一ノ番號、府縣名及出

七 出品人氏名ヲ記入シタル小札ヲ附スベシ
出品ノ圖案ハ強靱ナル紙又ハ布ヲ使用
シ且陳列上見苦シカラザル樣適當ノ表裝
ヲ爲スベシ

八 出品物及出品人ノ會場ヘノ往復ニ對シ
テハ官設鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典アル
ヲ以テ必要ノ向ハ商工省事務局ニ對シテ
割引證ノ交付ヲ請求セラルベシ
九 各會場ニ於ケル初日ハ招待日トス
陳列品ノ賣約ハ昭和十二年四月二十一
日ヨリ其ノ申込ヲ受ケ申込順ニ依リ官公
廳ガ參考品トシテ必要ナル場合ハ優先賣
約ヲ爲ス

十 京都市、福岡市、名古屋市及金澤市ニ
於テ展示スル爲移送スル場合ニ於テハ左
ノ條件ニ依ルモノトス
イ 移送ノ荷造費及運搬費ハ出品人之ヲ
負擔スルコトヲ要セズ
ロ 移送ノ爲生ジタル損害ニ付テハ商工
省ニ於テ賠償ノ責ニ任ゼズ但シ事情耐
量スベキモノアリト認メタル場合ニ於
テハ商工省ニ於テ相當ト認ムル程度ノ
賠償ヲ爲スコトアルベシ

十二 出品人又ハ買主ガ東京又ハ金澤事務所
ニ於テ直接引取ヲ希望スルモノヲ除キ
出品物又ハ買上品ハ金澤ヨリ之ヲ發送
ス
イ 金澤ヨリ發送スル場合ニ於テハ荷造
費及運搬費ハ出品人又ハ買主ノ負擔ト
ス
ロ 出品物又ハ買上品ヲ東京又ハ金澤事
務所ニ於テ直接引取ヲ希望スル場合ニ
於テ直接引取ヲ希望スル場合ニ於テハ
其ノ旨出品申込書備考欄ニ明記シ又ハ
購買申込ノ際申出ヅベシ

美術獎勵施設一覽

出品物搬出方法
出品物搬出宛先

注意事項

一 申込書ハ出品物ノ種類毎ニ認メ提出スベシ

二 出品物ハ各一點毎ニ別行ニ記入シ其ノ出品物ヲ區別スル番號ヲ記載スベシ(一點トハ販賣ノ一單位ヲ謂フ)

三 箇數ノ欄ニハ一點ノ出品物ノ箇數ヲ記載スベシ

四 非賣品ニ付テハ東京渡價格欄ニ其ノ旨明記スルト共ニ參考價段ヲ附記スベシ

五 左ノ事項ハ之ヲ備考欄ニ記載スベシ
イ 鑑定ヲ要セザル出品物ニ付テハ其ノ旨及其ノ理由

ロ 出品物ノ附屬品及其ノ箇數

六 出品物搬出方法ノ項ニハ會場又ハ事務所ニ於テ出品物ヲ引取ルヤ又ハ運送ニ依リ送付ヲ受クルヤノ別ヲ記載シ出品物搬出宛先ノ項ニハ運送ノ場合ニ於テ出品人ノ希望スル運送宛先ヲ記載スベシ

昭和十一年度商工省輸出工藝展覽會ノ會期、會場出品申込期日等ニ關スル告示

昭和十一年商工省告示第十九號

一 會期 自昭和十一年十月十日至十一月二十四日

二 會場 展示期間及觀覽時間

イ 自十月十日至十月十六日迄七日間ハ東京市麹町區丸ノ内三丁目府立東京商工獎勵館内

ロ 自十一月一日至十一月七日迄七日間ハ大阪市東區内本町橋詰町大阪府立寶島館内

ハ 自十一月二十日至十一月二十四日迄五日間ハ名古屋市西區御幸本町通愛知縣商工館内

ニ 觀覽時間 自午前九時至午後四時
三 本會ノ事務ハ左ノ通之ヲ行フ
イ 九月二十四日迄及十一月二十八日以降

ロ 自九月二十五日至十月二十四日 東京會場内
ハ 自十月二十五日至十一月十四日 大阪會場内
ニ 自十一月十五日至十一月二十七日 名古屋會場内

四 出品ノ種類
一 陶磁器、硝子及其ノ他ノ窯業製品
一 漆器
一 金屬製品
一 染織製品
一 木竹製品

一 以上各種ノ綜合品及其ノ他ノ工藝品
五 出品人ハ各出品種類別ニ別紙ニ認メタル出品申込書ヲ九月一日ヨリ九月二十日迄ニ商工省貿易局ニ差出スベシ
出品申込書ノ提出ナキ輸入物、膠留荷物及消費稅未納輸入物ハ之ヲ受理セズ

六 出品物受理期間ハ自九月二十五日至九月二十九日トス
出品物ハ右期間内毎日午前九時ヨリ午後四時迄ニ東京會場内ニ搬入スベシ

七 出品物ハ各一點ニ付内装内ニ必ズ出品申込書ニ記載シタル同一ノ番號、品名、箇數、價格、出品人住所氏名ヲ認メタル荷札一葉ヲ同封シ且各品毎ニ當該番號、出品人氏名ヲ記入シタル小札ヲ貼附スベシ

八 出品申込書提出後出品物ノ變更ハ之ヲ許サズ但シ事情止ムヲ得ザル場合ニ於テハ豫メ承認ヲ得テ出品物ヲ變更スルコトヲ得
出品ヲ中止セントスル場合ハ直チニ之ヲ届出ザベシ

九 出品物及出品人ノ會場ヘノ往復ニ對シテハ官設鐵道割引ノ特典アルヲ以テ必要ノ向ハ商工省貿易局ニ對シ割引證ノ交付ヲ請求スベシ

十 陳列品ノ賣約ハ十月十日ヨリ其ノ申込ヲ受ケ申込順ニ依ル

十一 大阪市及名古屋ニ於テテ展示スル爲移送スル場合ニ於テハ左ノ條件ニ依ルモノトス
イ 移送ノ荷造費及運搬費ハ商工省之ヲ負擔ス
ロ 移送ノ爲生ジタル損害ニ付テハ商工省ニ於テ賠償ノ責ニ任ゼズ

十二 出品人又ハ買主ガ東京又ハ名古屋ノ事務所ニ於テ直接引取ヲ希望スルモノヲ除キ出品物又ハ買上品ハ會期終了後之ヲ發送ス
イ 發送スル場合ニ於テハ荷造費及運搬費ハ出品人又ハ買主ノ負擔トス

ロ 出品物ヲ事務所ニテ直接取引ヲ希望スル場合ニ於テハ東京ニテ取引ルヤ名古屋ニテ取引ルヤノ別ヲ出品申込書ニ明記スベシ

十三 商工省輸出工藝展覽會規程第二十一條ニ依リ選定セラレタル出品物ノ一部ハ日本輸出工藝聯合會ガ紐育ニ於テ開催スル日本工藝品展覽會ニ左記條件ニ依リ出陳セシムルモノトス
イ 移送ノ荷造費及運搬費其ノ他ノ經費ハ出品人ノ負擔スルヲ要セズ

ロ 出陳物ノ亡失其ノ他ノ損害ニ付テハ日本輸出工藝聯合會ニ於テ其ノ賠償ノ責ニ任ズルモノトス
ハ 出陳物ハ賣約ノ申込ニ應ズルモノトシ其ノ購買申込ハ日本輸出工藝聯合會ニ於テ之ヲ取扱フモノトス

ニ 出陳物ノ賣却代金並賣殘品ハ東京ニ於テ出品人ニ直接引渡シ又ハ發送スルモノトス

二八

發送スル場合ニ於テハ爲替料金、荷造費、運搬費ハ出品人ノ負擔トス

十四 商工省輸出工藝展覽會規程第二十一條ニ依リ選定セラレタル出品物ノ一部ハ昭和十二年巴里ニ開催セラルル近代生活ニ於ケル藝術及技術博覽會ニ出陳セシムルコトアルベシ

右ニ關スル條件其ノ他ニ付テハ其ノ都度出品者宛通知ス

京都市美術展觀會

本會は昭和十年三月京都市が美術獎勵の目的を以て創設せる日本畫、洋畫、彫刻、工藝の四部に互る綜合展で、新に展覽會規程を設け五月大禮記念京都市美術館に於て作品公募の上、第一回展を開催。十一年度は都合に依り特に休會したが、以降毎年續行の豫定である。

(十二年度審査員)

(日本畫) 石崎光瑤、西村五雲、西山翠嶂、堂本印象、登内微笑、小野竹喬、金島桂華、中村大三郎、宇田萩郎、山口華楊、案本一洋、福田惠一、菊池英月、水田竹圃(洋畫) 大橋孝吉、太田喜二郎、鹿子木孟郎、田中善之助、黒田重太郎、須田國太郎(彫塑) 松田尚之、國安稻香(美術工藝) 大西淨長、奥村霞城、神坂雪佳、山鹿清華、清水正太郎、皆川月華、三木表悦(事務所大禮記念京都市美術館内)

昭和十二年度同展覽會規定拔萃

一、本會は第二回京都市美術展覽會と稱し京都市之を主催す

一、本會は昭和十二年五月二十九日より同年六月十七日迄二十日間大禮記念京都市美術館

に於て新製作の美術品及美術工藝品を展覧す

一、本會の出品は左の四部分に分つ

第一部 日本畫
第二部 洋畫(油繪、水彩畫、パステル畫、創作版畫等)

第三部 彫塑

第四部 美術工藝

一、陳列品は委員の出品を除き鑑査を経たるものに限る

一、出品の荷造運送の費用は總て出品人の負擔とす

一、本會事務所は大禮記念京都美術館に置く

一、出品者は京都府に居住する者或は京都の美術及美術工藝界と特に關係ある者に限る

一、出品は自己の製作したるものに限る

一、第三部に屬するものにして原型製作者と實材製作者と其の人を異にするときは原型製作者に限り之を出品することを得

一、第四部に屬するものにして綜合製作なるときは其の代表製作者一名を以て出品人と爲す、但し代表者は共同製作者の氏名を附記することを得

一、出品は一人に付二點以内とす

一、出品の大きさは適宜とす但し陳列上特に設備を要するものは豫め會長の承認を受けることを要す

一、出品は本會事務所に搬入すべし

一、出品の搬入期日は五月二十二、二十三日(毎日午前九時より午後五時迄)とす但し委員の出品に限り五月二十五日(午後五時迄)とす

一、出品は所定の書式に依る申込書を添付すべし

一、出品の鑑査及審査を爲す爲各部に審査委員を置き委員の中より會長之を囑託す

一、鑑査は出品を就き陳列すべきものを定め審査は陳列品に就き優秀なるものを推奨す

一、陳列品は委員の出品を除き總て審査を受

くるものとす

一、本會は審査に於て優秀と認めたる陳列品に對し授賞す

一、本會陳列品は大禮記念京都美術館に於て買ひ上ぐることをあるべし

一、陳列品の賣買契約は本會に於て之を取扱ふものとす

一、出品人本會を経ずして賣買契約を爲さんとするときは豫め本會の承認を受けるべし

一、賣買代金は即時拂とす但し代價の三分の一以上の手附金を以て賣買契約を爲すことを得、前項の買主開會後七日以内に殘餘代金の支拂を爲さざるときは賣買契約は之を取消したるものと看做す此の場合に於ては手附金は當該出品人の所得とす

一、陳列品には代價を付すべし出品人其の代價を變更せんとするときは其の旨本會に届出づべし

名古屋美術展覽會

名古屋市の主催に依り同市美術獎勵の爲毎秋日、洋、彫、工、書の五科に互る公募展覽會を開催する。

〔會長〕名古屋市長大岩勇夫

〔審查員〕(日本畫)川崎小虎、山口蓬春、堂本印象(洋畫)南薰造、横井禮市

加藤靜兒、(彫塑)建品大夢、加藤顯清(工藝)板谷波山、藤井達吉(書道)尾上柴舟、大島君川、倉尾古岳、長谷川流石、佐分移山

(事務所名古屋役所社會教育課)

一、同展覽會規定拔萃

一、本會の出品は左の五部分に分つ

日本畫

西洋畫

彫塑

工藝

書道(一般部、學生部に分つ)

一、出品は各部共一人三點以内とす

一、出品は各自に於て裱張、額縁、表装をなすものとす、書道は特に依頼したるものの外は大畫紙以下の條幅に限る

一、出品は總て審査員の鑑査を経て陳列す、但し本會より特に依頼したる作家の出品に限り鑑査をなさず

一、搬入、搬出に要する費用は出品者の負擔とす

一、出品物一點に付手数料として金三十錢を徴收す、但し入選せざる場合も右手手数料は返戻せず

朝鮮美術展覽會

朝鮮に於ける美術の發達を裨補する爲大正十一年より毎年一回春季に總督府の事業として開催今日に及ぶ。

(事務所朝鮮總督府内)

一、同展覽會規定拔萃

一、朝鮮に於ける美術の發達を裨補する爲毎年一回朝鮮美術展覽會を開く、會場、事務所及會期は其の都度之を公告す

一、本會は之を左の三部に分つ

第一部 東洋畫

第二部 西洋畫

第三部 彫塑及工藝

一、出品は鑑査を経たるものに限り之を陳列す但し左の各號の一に該當する出品は鑑査外とす

一、朝鮮美術審査委員會委員又は委員たりし者の出品

一、朝鮮美術展覽會參與又は參與たりし者の出品但し一點に限る

一、朝鮮美術審査委員會委員長に於て推薦したる者の出品

一、前回の朝鮮美術展覽會に於て特選せられたる者の出品但し一點に限る

一、出品の荷造及運送費は總て出品人の負擔とす

一、出品人は出品の製作者、製作者死亡したるときは其の家族に限るものとす

一、出品の製作者は左の各號の一に該當する者なることを要す

一、朝鮮に本籍又は住所を有するもの

一、朝鮮に三年以上居住したる者

一、朝鮮美術展覽會に於て三回以上特選せられたる者

一、同一人の出品は第一乃至第三の各部に付三點以内とす

一、出品の形狀表装等の如何に拘らず同一意匠に依る一箇の作品と認むべきものは二箇以上に分離せるものと雖之を一點と看做す前項の事實は委員長の認定に依る

同一意匠に依らざる數箇の作品と雖之を一箇に表装したるものは之を一點と看做す

一、出品は一點に付幅四間を超ることを得ず

各出品人の占め得べき陳列壁面は各部毎に幅四間迄とす

第三部の出品は立體に在りては一點に付十平方以内の場所に陳列し得る物に限る

同一部に於ける一人の出品二點以上にして其の幅合せて四間を超る時は其の出品は一定日數毎に陳列替を爲すものとす

會場の都合に依り出品の全部を同時に陳列すること能はずと認むる時は一定日數毎に陳列替を爲すことあるべし

陳列替に關する事項は委員長之を決す出品の丈高きに過ぎ陳列に不便ありと認めたるものは其の表装を通宜變更せしむることあるべし

一、左に掲ぐるものは出品することを得ず

一、製作後五年以上を経たるもの

- 一、本會に陳列したることあるもの
- 一、治安風教に害ありと認むるもの
- 一、出品を爲さむとする者は甲號様式の出品願書を添へて作品を事務所に差出すべし其の期日は別に之を公告す、作品には一點毎に命題及出品人氏名を記したる出品札を貼附すべし
- 一、出品は額面と爲し又は枠、線を附する等出品人に於て適當の裝飾設備を爲すべし
- 一、出品の鑑査及審査は各部に就き委員之を行ふ
- 一、特選せられたる作品に付ては朝鮮總督は乙號様式に依り其の出品人に特選狀を授與す
- 一、朝鮮總督は特選狀を授與したる者に賞勝又は賞金授與することあるべし
- 一、同一人にして同一部に二點以上出品したる場合に於ては其の中優秀と評定せられたる一點に就てのみ特選す
- 一、陳列品は本會に於て其の賣買契約を取扱ふものとす出品人に於て本會を経ずして賣買契約を爲さむとするときは本會の承認を経べし
- 一、即時に代金を支拂はざるときは手附を以て賣買契約を爲すことを得手附金は代價の三分の一以上とす
- 一、前項の買主が閉會後七日以内に殘餘代金の支拂を爲さざるときは手附金は之を抛棄したるものと看做し當該出品人の所得とす

臺灣美術展覽會

臺灣に於ける美術の發達を裨補するの目的を以て昭和二年より毎年秋季に臺灣教育會主催の下に公募展を開催し來り、昭和十一年十月第十回を重ねた。會長臺灣教育會々長森岡二朗、副會長深川繁治。審査委員長及審査委員は毎年改賜するも

ので昭和十一年度は左の如くであつた。
 「審査委員長」幣原坦「審査委員」結城貞松、村島酉一、木下源重郎（以上東洋畫）梅原龍三郎、伊原宇三郎、鹽月善吉（以上西洋畫）
 （事務所臺灣總督府內臺灣教育會內）
 同展覽會規則拔萃

一、臺灣美術展覽會は臺灣に於ける美術の發達を裨補するを以て目的とし毎年一回秋期之を開催す

會場は其の都度之を發表す

一、出品は東洋畫及西洋畫の二種とす

一、出品は自己の製作したるものに限る故人の製作に係るものは其の相續人に於て出品することを得

一、出品人は臺灣に居住する者其の他臺灣に縁故を有する者とす

一、出品は一人三點以内とす

一、出品を爲さんとする者は其の出品に本會所定の出品申込書を添へて本會々場に搬入し所定の出品受領證を受くべし

搬入期日は別に之を發表す

出品には一點毎に命題及出品人氏名を記したる紙片を貼付すべし

一、出品は額面となし又は枠、線を附する等出品人に於て適當の裝飾設備を爲すべし

一、陳列品は會期終了後地方都市に搬出し展覽に供することあるべし

出品人にして前項の移動展覽に應じ難き事由ある場合は出品申込書に其の旨を明記すべし

一、鑑査及審査は東洋畫、西洋畫の二部に別ちて之を行ふ

一、鑑査は出品に就き陳列すべきものを定め審査は陳列品に就き優秀なるものを特選するものとす

一、本會は陳列品中卓越せるものに對し賞を授く、賞は賞狀及賞金とす

一、陳列品は本會に於て其の賣買契約を取扱ふものとす

一、即時に代金を支拂はざるときは手附を以て賣買契約を爲すことを得手附の金額は代價の五分の一以上とす

一、臺灣美術展覽會は臺灣に於ける美術の發達を裨補するを以て目的とし毎年一回秋期之を開催す

會場は其の都度之を發表す

一、出品は東洋畫及西洋畫の二種とす

一、出品は自己の製作したるものに限る故人の製作に係るものは其の相續人に於て出品することを得

一、出品人は臺灣に居住する者其の他臺灣に縁故を有する者とす

一、出品は一人三點以内とす

一、出品を爲さんとする者は其の出品に本會所定の出品申込書を添へて本會々場に搬入し所定の出品受領證を受くべし

搬入期日は別に之を發表す

出品には一點毎に命題及出品人氏名を記したる紙片を貼付すべし

一、出品は額面となし又は枠、線を附する等出品人に於て適當の裝飾設備を爲すべし

一、陳列品は會期終了後地方都市に搬出し展覽に供することあるべし

出品人にして前項の移動展覽に應じ難き事由ある場合は出品申込書に其の旨を明記すべし

一、鑑査及審査は東洋畫、西洋畫の二部に別ちて之を行ふ

一、鑑査は出品に就き陳列すべきものを定め審査は陳列品に就き優秀なるものを特選するものとす

美術獎勵資金

黒田子爵記念美術獎勵資金委員會

東京市本郷區湯島切通坂町五一國民美術協會內 電小石川一一七七

故子爵黒田清輝の歿後、門下其の他で子爵を記念するため、寄附金を募り創立。美術獎勵を目的として昭和四年より毎年本資金の利息より五百圓限度にて洋畫一點を買上げ、東京帝國博物館に寄贈して居る。

「會長」宮田光雄「委員」石井柏亭、岡田三郎助、小倉右一郎、小林萬吾、坂井岸水、永地秀太、藤島武二、松本幹一郎、正木直彦、米山梅吉、和田英作

佐分賞委員會

東京市澁野川區西ケ原 一〇八一 佐分純一方

故佐分眞の遺志に基く佐分家の寄附資金に依り洋畫壇新人獎勵の目的を以て毎年四名以内の作家を銓衡し之に賞金を贈る。銓衡の方法は廣く洋畫壇の諸氏の投票に基いて同會銓衡委員會が決定する。本賞は年額一千圓、繼續期間十年間とし、賞金贈呈の時期は第一回を昭和十二年四月二十三日とし、爾後毎年之に準ずる。

「銓衡委員」藤島武二、梅原龍三郎、安井曾太郎、藤田嗣治、長谷川昇「委員」伊藤廉、伊原宇三郎、福島繁太郎、小寺健吉、益田義信、宮田重雄、山喜多二郎、太、窪田照三、田口省吾

昭和洋畫獎勵會

東京市大森區田園調布上沼部 二〇七 電田園調布二一〇四

財團法人組織。昭和二年設立。洋畫獎勵のため毎年公私展覽會に於ける優秀なる作家二名を選定して賞金を贈る。尙本寄附行爲は昭和二十年十二月末日を以て終了の豫定。

「評議員」米山梅吉、白瀧幾之助、石井滿吉、丸山健作、石川寅治、長谷川昇、和田英作、小林萬吾、南薰造、山本鼎、有島壬生馬

美術研究施設

美術研究所（官立）

東京市下谷區上野公園 電下谷三三八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基き、

美術研究施設並團體一覽

東京市下谷區上野公園 電下谷三三八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基き、

美術研究施設

美術研究所（官立）

東京市下谷區上野公園 電下谷三三八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基き、

美術研究施設

美術研究所（官立）

東京市下谷區上野公園 電下谷三三八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基き、

美術研究施設

美術研究所（官立）

其の遺産を以て開始されたもので、昭和

五年開設の準備成ると共に同子爵遺言執

行人より建物、諸設備及事業の一切を政

府に寄附移管し、同年六月政府は之を帝

國美術院附屬として設置した。昭和十年

六月帝國美術院改革に伴ひ、新に美術研

究所官制を制定、文部省所管、帝國美術

院に附置される研究所として、既定の事

業を進めることとなつた。其の目的は美

術に關する事項の學術的調査研究に在り、

傍ら美術に關する研究資料を蒐集して美

術圖書館的な貢獻をなさんとし、又調査

研究の結果を出版、展覧、講演等に依つ

て發表せんとするものである。現在著手

しつゝある事業は大略次の如くである。

一、研究資料蒐集

美術品の寫眞其の他の複製、模寫模造

等の標本、圖書雜誌其の他の資料

一、古美術に關する調査研究

東洋及日本美術に關する美術史的調査

研究、東洋美術總目錄、落款印譜、東

洋美術家辭典、美術關係史料、美術關

係文獻目錄等の編纂

一、明治大正時代美術の調査研究

明治大正美術史の編纂

一、現代美術に關する調査研究

現代美術及美術界に關する調査、日本

美術年鑑の編纂

一、刊行物頒布

「美術研究」毎月一回美術懇話會より

發行、「日本美術年鑑」毎年一回刊行、

其の他隨時「美術研究資料」、「研究報

告」を刊行頒布する

一、研究資料閱覽及展覧

研究者の爲に當所蒐集の圖書、寫眞、

其他の研究資料の閱覽を許可する、又

隨時陳列室に於て特殊なる資料を展覧

して一般に觀覽せしめる(便覽四九頁參照)

一、黒田清輝作品陳列

所内に黒田子爵記念室を設け、其の作

品を陳列して定時(毎週木曜日午後)

に公開する。

〔所長〕矢代幸雄〔所員〕矢代幸雄、田

中喜作〔助手〕中川千咲、豐岡益人〔書

記〕木下龍也〔囑託〕和田新、正木篤三、

菅沼貞三、渡邊一、中根勝、大給近清、

岩淵幸左衛門、隈元謙次郎、西村敬二郎

山田智三郎、梅津次郎、美澄政博、富田

美彦、倉田平吉、小高根太郎、田中豐藏

九尾彰三郎、富永惣一、堀井三友、望月

信成、福井利吉郎、兒島喜久雄、須賀利

雄、筒崎謙齋、白畑よし

美術研究所官制

昭和十年六月一日

勅令第百四十八號

第一條 帝國美術院ニ美術研究所ヲ附置

ス

第二條 美術研究所ハ美術ニ關スル事項

ノ調査研究ヲ掌ル

第三條 美術研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

所員 專任二人 奏任

助手 專任二人 判任

書記 專任一人 判任

第四條 所長ハ所員ノ中ヨリ文部大臣之

ヲ補ス

所長ハ帝國美術院長ノ監督ノ下ニ於

テ所務ヲ掌理ス

第五條 所員ハ所長ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌

ル

第六條 助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ所務ニ

従事ス

第七條 書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ

従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

東方文化學院

東京研究所 小石川區大塚町五六ノ一

五、電大塚五四四五―六

京都研究所 左京區北白川小倉町五〇

電上五〇五〇

昭和三年十月東京、京都兩帝國大學及

其他の東方文化研究者三十餘名が發起人

となつて東方文化の研究、その成果及そ

の資料の發表、有益な古書の複製、講演會

の開催等を目的とする東方文化學院創立

の事を議し直ちに同學院規定を定め、昭

和四年四月外務省の補助により事業を開

始した。規定に依る東京、京都兩研究所

は初め各該地帝國大學内に設けられ服部

宇之吉博士東京研究所主任となり、狩野

直喜博士京都研究所主任となつた。後、

京都研究所は昭和五年十一月現所在地に

建築竣成して移轉し、東京研究所は昭和

八年九月現所在地の新館に移轉した。兩

研究所の完成と共に、主任の稱は所長と

改められた。

現在迄に兩研究所に於て研究員及助手

の研究結果を刊行したものの中美術及考

古學に關係せるものは左記の通りであ

る。

題 名

支那古器圖攷(兵器篇)

遼金時代の建築と其佛像

圖版上下二冊

殷墟出土器研究

柘の考古學的考察

支那山水畫史

戰國秦式銅器の研究

支那漢以前の古鏡の研究

上記の外昭和五年度より兩研究所は各

々東方學報なる學報を年一回發行して居

る。

〔理事長〕服部宇之吉〔理事〕宇野哲人、

荻野伸三郎、瀧精一、狩野直喜、羽田亨

濱田耕作

〔東京研究所長〕服部宇之吉〔京都研究

所長〕狩野直喜〔古書複製事業主任〕荻

野伸三郎

〔東京研究員〕鳥田鈞一、青山定雄、伊

東忠太、仁井田陞、原田淑人、牧野巖、

小柳司氣太、加藤繁、松本榮一、結城令

聞、古城貞吉、服部宇之吉、佐伯好郎、

鳥居龍藏、常盤大定、竹島卓一、阿部吉

雄、江上波夫

〔京都研究員〕倉石武四郎、森鹿三、水

野清一、吉川幸次郎、高畑彦次郎、梅原

末治、長廣敏雄、塚本善隆、内藤乾吉、

小川茂樹、能田忠亮

三 一

美術研究施設並團體一覽

東方文化學院規程抜萃

- 一、本學院は東方文化學院と稱す
- 二、本學院は支那文化の研究及其の普及を圖り一般文化の向上に資するを以て目的とす
- 三、本學院は前條の目的を達する爲左の事業を行ふ
- 一 研究所の經營
- 二 研究及研究資料の發表
- 三 有益なる古書の複製
- 四 其他理事會の決議に依り必要と認めたる事業

- 四、本學院は事務所を東京市小石川區大塚町五十六番十五號に置く
- 五、東京及京都に夫々研究所を置く
- 六、東京及京都兩研究所（以下單に兩研究所と稱す）に夫々評議員若干名を置き研究に關する事業其他に付き審議す

- 七、本學院に古書複製委員若干名を置き古書複製に關する事業を審議す
- 八、本學院に理事七名を置き左記の者を以て之に充つ

- 一 兩研究所長
- 二 兩研究所評議員中より互選せられたるもの各二名
- 三 古書複製委員中より互選せられたるもの一名

- 十一、理事中より理事長一名を互選す
- 理事長は本學院を代表し理事會の議長となり理事會の委任したる常務を處理す
- 理事長故障あるときは其の指名したる理事其の職務を代理す

- 十四、兩研究所に夫々研究所長一名を置き任期は三年とし當該研究所評議員中より之を互選す
- 研究所長は當該研究所の事務を統轄し理事會の委任したる事項を處理す

十五、研究の爲左の職員を置き兩研究所に分屬せしむ

研究者 四十名以内
指導員 若干名
助手 二十名以内

十六、研究員及指導員は各研究所評議員會の推薦により理事會の議を経て研究所長之を委嘱す
助手は研究員の推薦により研究所長之を命ず

十九、本學院の經費は政府の交付金寄附金其の他の收入を以て之を支辨す

日本古文化研究所

東京市麹町區丸之内
九ビル四階四五七區

日本古文化に關する諸般の事項を調査研究の上、その成果を印刷に附して當該學界に頒布し、また研究生を採用し有爲の古文化研究者を養成するを目的とするもので、黒板博士先づその設立を主唱し、近畿二府五縣の知事の賛成を得て昭和九年四月奈良市に設置せられた。爾來近畿地方を初め、岐阜、群馬、九州等に於ける諸問題を調査研究しつゝあり、第一回第二回の報告書は既に學界に頒布した。

〔所長〕 黒板勝美〔常任理事〕 足立康、和田軍一、丸山二郎、岸蕉吉〔理事〕 濱田耕作、西田直二郎、荻野伸三郎、辻善之助、梅原末治、芝葛盛

東京美術研究所

〔研究所〕 東京帝國大學内附屬圖書館
第三十四番研究室、電小石川三九七〇
〔編輯及庶務部〕 東京市本郷區駒込千

駄木町二三四

昭和十一年十一月創立、日本美術及東洋美術の史的研究を目的とし、十二年一月より月刊美術史研究雜誌「畫說」を發行。

〔所長〕 脇本十九郎〔所員〕 大口理夫、裏辻憲道〔客員〕 香取秀真、丸尾彰三郎、三成重敬、明珍恆男

美術院

奈良市水門町一六
電 奈良六〇二

故岡倉覺三創立の日本美術院はその事業の一部門として國寶修理を行ひ、奈良に同院の二部を設置したが、岡倉の歿後日本美術院の再興に際し二部は分離して美術院と稱した。爾來主として國寶（彫刻及工藝品）の修理に従事し、傍ら彫刻の依頼製作を行ひ、尙修技生を置き、技藝の養成に當つて居る。

〔主事〕 明珍恆男〔事務主任〕 安田伊兵衛〔顧問〕 新納忠之介〔國寶修理工事主任〕 菅原安男、榊本義春、白石義雄、大賀秀雄

美術研究團體（五十音順）

浮世繪同好會

東京市日本橋區通三ノ五
電日本橋三八三六、三八三七

昭和九年十一月日本橋區本石町經濟俱樂部に於て發會。「浮世繪を主とし、江戸文化並に一般藝術の研究に資し、浮世繪同好者の親睦と斯界の發展を圖る」。

十一年三月より月刊雜誌「浮世繪界」を發行し、又毎月講演會を開く。

〔代表者〕 藤懸靜也〔幹事〕 檜崎宗重
越中史蹟古美術調査會

富山市稻荷一四
堀井三友電三七〇一

昭和十一年七月發會。越中に於ける史蹟並古美術を調査研究し、大和その他各地の古代文化遺跡と比較考究してその特質を明らかにし、以て斯界に貢獻せんとする。事業として一、隔月の縣下各地史蹟、古美術の實地踏査 二、遺跡、出土品、古美術品の寫眞撮影並頒布 三、臨地講演會の開催 四、史蹟古美術解説書の頒布等を行ふ。

〔會長〕 片口安太郎〔常任委員〕 堀井三友

藝苑巡禮

東京市瀧野川區
西ヶ原町一八七

昭和三年五月創立。古美術研究を目的として、古美術品の巡禮鑑賞會を催し、其の會數を重ねること、昭和十一年迄に六十三回に及ぶ。其他、古美術展覽會、美術家物語法會、美術史址保存事業等を行ふ。

考古學會

東京市下谷區上野公園
帝室博物館内、電下谷六

明治二十八年創立。考古學の研究團體で、初代會長は三宅米吉が就任した。毎月一回東京便宜の地に於て例會を開催す

る。創立以來研究雜誌「考古學會雜誌」「考古」「考古界」を發行し明治四十三年九月「考古學雜誌」と改名して現在に及ぶ
〔會長〕 黒板勝美 〔副會長〕 濱田耕作
〔幹事〕 佐々木三十郎、關根龍雄、高橋勇、野間清六、原田淑人、三上次男、森貞成〔顧問〕 四十七名

國華社清話會

東京市麻布區市兵衛町
二ノ一、電赤坂八五二

明治四十三年創立。國華社社友有志相會して美術に關する清話會を催す。古美術展覧、講演會等を行ふ。

〔會員〕 瀧精一、藤懸淨也、奥田誠一、足立康、逸見梅榮、坂崎坦、仲田勝之助、香取秀眞、外山英策、脇本十九郎、野上豐一郎、高野辰之、田中豐藏、松本榮一、西澤信敏、谷信一、瀧遼一、小林剛、丸尾彰三郎、加藤猛夫、金上盛三、永田春水、荒井寛方、岡伊能、刑部健、吉田金吉、伊奈信男、寺崎康哉、宮本璋、林邦彦、米澤嘉岡、田中一松、熊谷宜夫、富永惣一、渡邊晨畝、藤田經世、田澤坦、比嘉朝健、内藤堯實、吉田登毅、津田敬武、野間清六、今村龍一、瀧江二郎、吉澤忠、園田敬男、鈴木仁一、緒方秀雄、鈴木進、岡田讓、村山句吾、大塚徳三郎、宮入松雄、菊川京三、櫻井靜、岡庭文雄、篠崎誠一、猪腰菊雄

史學會

東京市本郷區東京帝國大學史料編纂所内

美術教育施設一覽

明治廿二年創立。史學を研究し、其の發達を圖るを目的とし、事業として月刊「史學雜誌」を發行し、史學大會及び講演會等を開催する。

〔理事長〕 三上參次〔理事〕 池内宏、今井登志喜、白鳥庫吉、平泉澄、村川堅固、渡邊世祐

推古會

東京市品川區上大崎
長者九二五三、松田方

大正三年創立。古美術の研究並保存を目的とし、毎年各種の古美術品の展覧を行ひ圖録を發行し第六集に及ぶ。

〔會員〕 正木直彦、岡田三郎助、朝倉文夫、内藤伸、安田毅彦、溝口頑次郎、香取秀眞、松田福一郎

美術懇話會

東京市下谷區上野公園美術研究所内、電下谷三四八七

昭和六年十一月、美術研究所内に創立。「美術に關する趣味及理解を進め社會に於ける美術の健實なる發達に貢獻する」を以て目的となす。事業として一、美術に關する懇話會の開催 二、展覽會講演會等の美術に關する研究的集會の開催 三、美術に關する出版等を行ふ。昭和七年一月より美術研究所の編輯にかゝる月刊「美術研究」及美術研究資料〔計四輯〕、美術懇話會叢書〔計二輯〕等を行して居る。

〔理事長〕 正木直彦〔理事〕 荻野仲三

郎、川合玉堂、芝田徹心、杉榮三郎、原邦造、矢代幸雄、和田英作、會員百九名
平壤名勝舊蹟保存會

明治四十五年創立。平壤府内に於ける

平壤府廳内
電一四〇〇

美術教育施設一覽

東京

學校

〔官立〕

東京美術學校

下谷區上野公園
電下谷八〇二〇一二

東京美術學校は明治二十年十月勅令を以て設置せられ、同二十二年二月授業を開始した。翌年初代校長濱新に代つて岡倉覺三學校長となつたが、三十一年退職し、彼と共に教授橋本雅邦以下多數の教授、助教が辭職した。高嶺秀夫、久保田鼎に次いで三十四年正木直彦學校長となり、昭和七年には和田英作校長となり次いで、昭和十一年芝田徹心代つて學校長となり現在に及ぶ。

本校の學科を本科と圖畫師範科とに分ける。本科は更に之を日本畫科、油畫

名勝舊蹟の維持保存及紹介を目的とし、同會の事業として平壤博物館を建設した。

〔會長〕 矢野桃郎〔副會長〕 鄭在命
〔理事〕 小林繁、遠矢良嗣〔幹事〕 加藤才治郎、大元政輔

科、彫刻科、工藝科及建築科に分ち、更に彫刻科を塑造、木彫、工藝科を圖案、彫金、鍛金、鑄金、漆工の各部に分つ。修業年限は本科四年、圖畫師範科三年、本科に入學するには豫科の課程一年を卒へることを要する故通計五年である。
昭和十年五月の統計によれば生徒總數七三六名であるが今便宜上各科、豫科及び師範科一年の生徒數を示せば次の如くである。

日本畫科	二〇名
油繪科	三七名
彫刻科塑造部	一五名
同木彫部	七名
工藝科圖案部	一六名
同彫金部	五名
同鍛金部	四名
同鑄金部	六名
同漆工部	七名
建築科	七名
圖畫師範科	一五名

生徒募集人員は毎年多少の變更もあるが

大體前表の如くである。入學資格は中學四年修了程度(但し圖畫師範科は中學卒業程度)、實技及學科の入學試験を行ふ。

本科生は將來作家として立つべきものを養成するのであるが本科卒業生と雖も在學中特定の學課目を修了したるものには中等教員無試験檢定の特典が賦與されてゐる。

此他研究科、選科及聽講生があるが近年は選科生は募集してゐない。授業料は豫科、本科、選科、一年各八十圓、研究科五十圓。

又本校には文庫があつて圖書標本を收藏し、陳列館及正木記念館があつて諸種の展覧を試み、何れも生徒學習の參考に資する。

〔校長〕 芝田徹心

〔名譽教授〕 正木直彦、和田英作

〔教授〕 岡田三郎助、川合芳三郎、藤

島武二、森井健介、結城貞松、多賀

谷健吉、六角注多良、佐々木卓、小

林萬吾、津田信夫、清水龜藏、矢代

幸雄、建畠彌一郎、朝倉文夫、北村

西望、南薰造、和田三造、香取秀治

郎、石田英一、田邊至、森田龜之助

小泉勝爾、海野清、田邊孝次、關野

金太郎、高村豊周、廣川松五郎、松

田義之

〔生徒主事〕 佐々木卓、森田龜之助、

田邊孝次

〔助教〕 松垣龜雄、水谷武彦、松田

權六、山田廉、岡四郎、森田武、野

口六三、山崎覺太郎、金澤庸治、常岡文龜、伊原宇三郎、西田正秋、丸山義男、内藤春治、羽下修三、深瀬嘉臣、磯矢陽

〔講師〕 杉田精二、大澤三之助、北村

耕造、村田良策、澤口悟一、小場恆

吉、齋藤幸晴、岡田捷五郎、鎌倉芳

太郎、正木篤三、小塚新一郎、比田

井鴻、白川一郎、鈴川信一、羽野禎

三、入谷昇、蒔田宗次、比田井元子

石澤正男、矢澤貞則、川崎隆一、沼

田勇次郎、木村得三郎、富永惣一、

平野茂、關野克、加藤鬼頭太

東京高等工藝學校

芝區新芝町
電三田一一五六八

本校は大正十年十二月の設置に係る。

松岡壽初代の校長となり、翌十一年開校。十二年吉武榮之進代つて校長となる。十三年東京高等工業學校附屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工業實業學校として設置した。十四年松岡壽再び校長となり、翌年東京美術學校寫眞科を本校に移管し寫眞部として設置した。昭和三年安田祿造が代つて校長に任命された。

同校の本科の學科は工藝圖案科、金屬工藝科、精密機械科、木材工藝科及印刷工藝科とし、工藝圖案科には工藝彫刻部を、印刷工藝科には寫眞部を附屬する。同校は他に研究生、選科生、聽講生及木材工藝別科を設置するが、本科の入學資

格者は中學校卒業生、專檢合格者とし、研究生は同校又は他の實業專門學校卒業生、選科生は中學校卒業生は一年以上、修業年限三年の工業學校卒業生は二年以上、かゝる學歷無きものは五年以上志望學科に關する工藝に従事したるもの及び工業學校卒業の專檢合格者等とし、修業年限は本科は三年、研究生は二年以内、選科生は三年以内とする。授業料は本科、研究生選科生は一箇年八十圓。木材工藝別科は中等程度工業學校卒業生及其他志望學科に關する經驗を有する者を入學せしめ、專門技術を授けるを以て目的とし、修業年限は二箇年、授業料は一箇年五十圓とする。

〔校長〕 安田祿造

〔生徒主事〕 助教 三橋逢吉

〔工藝圖案科〕 教授 宮下孝雄、永地

秀太 助教 杉山豐治

〔工藝彫刻部〕 教授 如正吉 助教

寺畑助之丞

〔金屬工藝科〕 教授 神矢敦親、稻生

有年 助教 豐田勝秋、益田森治

〔精密機械科〕 教授 竹屋金太郎、永

澤謙藏、橋本宇一 助教 山内一

次

〔木材工藝科〕 教授 木村恕一、西海

幸一郎、野村茂治 助教 鈴木太

郎

〔印刷工藝科〕 教授 鎌田彌壽治、伊

東亮次、岡利亮、助教 長口宮吉

如保之

〔寫眞部〕 教授 鎌田彌壽治、伊東亮次、岡利亮 助教 長口宮吉、如保之

〔木材工藝別科〕 教授 木村恕一、藥島棟吉

〔共通學科〕 教授 江崎歡藏、永地秀

太、岡田楠次郎、三橋逢吉、和田香

苗 助教 馬場秋次郎、鈴木豐次

郎

本科生徒數

工藝圖案科 六八名

工藝彫刻部 一七名

金屬工藝科 五〇名

精密機械科 八三名

木材工藝科 七九名

印刷工藝科 六五名

寫眞部 二三名

木材工藝別科 二二名

〔私立〕 五十音順

朝倉彫塑塾

下谷區谷中天王寺町二〇
電下谷六五四九、二〇三一

本塾は明治四十年朝倉文夫の門弟數名を教育するに始まり爾來誰云ふとなく朝倉塾と呼び、多數の作家を輩出し來つたが、昭和十二年開塾二十五周年を迎ふるに當りその記念に塾舎を改築し、十一月六月彫塑の專門學校としての認可を受け朝倉彫塑塾と改稱した。本塾は豫科、本

科、研究科、特科を設置し、修業年限は豫科三年、本科五年、特科二年とし、研究科は年限を定めない。入學資格は豫科は年齢十六歳以上、中學卒業及塾長に於て之と同等の學力ありと認めたる者、本科は豫科修了者、官公私立美術學校彫塑科卒業生にして豫科修了者と同等以上の學力ありと認めたる者。授業料及入學金は徴收せず、實習費は自辨とす。學年は十月一日に始まり、翌年の九月三十日に終る。尙本塾は寄宿舎を設置し、寄宿生を自費生と給費生に分つ。

川端畫學校

小石川區富坂町一九

明治四十二年創立。川端玉章が初代校長で初め日本畫のみの教授を行つたが、大正二年玉章逝去し同年洋畫科が設置された。

日本畫科の研究科目は臨畫、寫生、製作等で學級を分つて四級とし、入學者は實力の如何に拘らず先づ初級に編入して成績考量の上適當の級に編入する。入學隨時。月謝三圓、入學金五圓。午前部八時—十二時、夜間部六時—九時。

洋畫科は石膏寫生、人體寫生の教授をなし、隨時入學を許す。午前部八時—十二時、午後部一時—五時、夜間部六時—九時。月謝四圓(夜間部三圓)、五ヶ月十七圓五十錢、十ヶ月三十三圓。入學金五圓。

〔主幹〕川端玉雪 〔副主幹〕川端茂章

〔教授〕(日本畫科) 福井江亭、結城素明 〔主任〕岡村葵園(洋畫科) 藤島武二 〔主任〕富永勝重

女子美術專門學校

杉並區和田本町八六〇
電 中野三八四六

明治卅三年女子美術學校創立。昭和四年專門學校の認可を受く。校舎は元本郷弓町にあつたが、菊坂町に移り昭和十年現地に移轉した。學科は高等、師範、專修、家政、專攻の五科を設置し、更に高等科は日本畫部(修業年限三年)、西洋畫部(三年)の二部、師範科は日本畫部(四年)、西洋畫部(四年)、刺繡部(三年)造花部(三年)、裁縫部(三年)、裁縫手藝部(三年)の六部、專修科は刺繡部(一年及二年)、造花部(同上)、和裁部(一年)洋裁部(一年)の四部に分けられてゐる。入學資格者は何れも高女卒及專檢合格者で、家政科(二年)も同様、專攻科(一年)は師範科卒業生である。授業料は年額高等科、師範科百圓。專修科、家政科八十圓である。尙ほ寄宿舎の設備あり。

〔校長〕男爵 佐藤達次郎 〔主監〕濱幸次郎 〔副主監〕土田忠二(生徒主事) 田村一郎

多摩帝國美術學校

世田谷區玉川上野毛町
三四三、電 玉川五六

昭和十年九月元帝國美術學校長北哈吉

及評議員兼教授杉浦非水、牧野虎雄、井上忻治、吉田三郎等二十數名は同校を脱退、新に杉浦、牧野、北、近藤清吾等を設立者として多摩帝國美術學校を創立、同年九月九日より澁谷區千駄ヶ谷町の假校舎にて授業を開始、同月設立認可を受け、同十二月玉川上野毛町に新築の校舎に於て開校式を舉行した。

同校は本科、研究科、選科を置き、修業年限は本科五年、研究科、選科一年。本科を分つて日本畫、西洋畫、圖案、彫刻の四科とする。入學資格は本科は中學校卒業生、專檢合格者、研究科は本校卒業生及銓衡に合格せる者、選科は銓衡により相當の實力ありと認められたる者である。他に同校所定の學科の聽講志望者は聽講生たるを得る。授業料は本科年額九十圓、研究科、選科六十圓。檢定料五十圓、聽講料は一學年一科目十圓。一科目を増す毎に六圓とす。

〔名譽校長〕北哈吉 〔校長〕杉浦非水 〔學監〕井上忻治 〔主事〕渡邊泰亮

〔教員〕(日本畫科) 主任 中村岳陵、安田靉彦、郷倉千靉(西洋畫科) 主任 牧野虎雄、中川紀元、大久保作次郎、鈴木千久馬、木村莊八、鈴木誠、吉村芳松

中山巍(圖案科) 主任 杉浦非水、木村和一、小川倩霞、小池巖(彫刻科) 主任 吉田三郎、佐々木大樹、高村豐周(學科) 主任 井上忻治、北哈吉、駒本樂之軒、森田龜之助、逸見梅榮、岸田日出刀、今井兼次、渡邊素舟、大隅爲三、木村雄山

佐藤次夫、長瀬誠、末吉菊磨

附同校女子部

昭和十一年十月開設。同部は本科、選科、專攻科を置き、本科、選科は婦人に適切なる一般的美術教育を授くるを目的とし、專攻科は作家を養成す。修業年限は本科、選科二年、專攻科三年。入學資格は本科は高女卒、選科は本科入學の資格なき者、專攻科は同校本科卒業生及之と同等の學力ある者とす。尙本科は繪畫部と圖案及其應用部に分つ、本科、選科は日本畫又は洋畫を選修し、專攻科は日本畫、洋畫、圖案の一つを專攻す。學年は毎年四月一日より翌年三月迄、授業料は各科とも年額六十圓。尙年齢、學歷を問はず隨意の學科目を履修することを得、その場合の月謝は一科目につき二圓。

〔女子部々長〕逸見梅榮 〔女子部學監〕渡邊泰亮 〔教員〕は男子部に略同じ

太平洋美術學校

下谷區谷中眞島町一
電 下谷一七九二

明治三十五年明治美術會を太平洋美術會と改稱するに及び同三十七年下谷區清水町に研究所を設置。翌三十八年谷中眞島町に屋舎を新築移轉し繪畫、彫塑の教室を備へ、中村不折、故滿谷國四郎、岡精一、故新海竹太郎、藤井浩祐等指導の任に當つたが、爾來三十年漸次組織を改めて今日に及ぶ。昭和四年研究所を擴張し

太平洋美術學校と改稱、同九年東京府の認可學校となる。學科は豫科(一年)、本科(三年)、選科(五年)、研究科(二年)とし、豫科の入學資格者は中學校、女學校第四學年修了者、本科は同校豫科卒業者又は中學校、女學校修了者で入學試験(人體素描)に合格したる者、選科は尋常小學校卒業者である。研究科は本科若しくは選科卒業者とする。科目は何れも洋畫指導を主としその他美學解剖學等を教授する。學費は年額豫科五十五圓。本科、選科六十圓。

〔校長〕中村不折〔學監〕石川寅治、吉田博、高村眞夫〔教授〕鶴田吾郎、奥瀬英三、丸山晚霞、多々羅義雄、小野田元興、布施信太郎、三上知治、岡精一、池田永治、桑重儀一、佐々木義雄、田原輝夫、堀進二、伊藤成一〔講師〕金子保、石井柏亭、一氏義良、側武昭

帝國美術學校

市外武藏野町
吉祥寺三二〇

廣く美術家並に美術教師の養成を目的として、昭和四年三月木下成太郎に依り設立され北谷校長となつたが、昭和十年の初めより設立者側と校長側の間に學校經營を繞る軋轢を生じ、同年九月北谷吉並同人支持の教授學生は同校を脱退、新に「多摩帝國美術學校」を創立したので茲に從來の「帝國美術學校」は二分する事になつた。なほ本校は分裂後昭和十

年九月專門學校認可申請をなした。

科別を本科(第一部、第二部)、師範科、研究科に分ち、本科第一部並師範科の入學資格は中學卒業並專檢合格者、本科第二部は前記の資格なきも之と同等の實力ありと認めたる者、研究科は本校卒業者並に銓衡に合格せる者とする。本科を分つて日本畫、西洋畫、工藝圖案、彫刻の四科とす。修業年限は本科五年、師範科三年、研究科一年以上。授業料は本科、師範科年額八十五圓、研究科五十圓。

〔校長〕木下成太郎〔教務主任〕金原省吾〔主事〕名取堯〔教員〕鋪木清方、奥村土牛、藤井達吉、富本憲吉、小林集居清水多嘉示、足立源一郎、宮坂勝、高品達四郎、熊岡美彦、中野和高、鈴木千久馬、佐藤朝山、森田龜之助、山脇巖、佐々木秀一、金原省吾、板垣應穂、堀口捨巳、名取堯、谷川徹三、大宮健太郎、中島健藏、西田正秋、木村幸一郎、藤本仁平

東京女子高等美術學校

小石川區第六天町五〇
電大塚六〇四六

女子美術家の養成並に美術趣味の向上を計るを目的とす。本科、選科、研究科を設置し、各々日本畫、洋畫、彫刻、美術手藝(和洋裁縫手藝)の各科を置く。修業年限は本科三年(但し美術手藝科二年)、選科、研究科は年限を定めず。入學資格は本科は中等學校卒、選科は小學

卒、研究科は自由とす。學年は四月より翌年三月まで。授業料は本科、選科月額各々八圓、研究科は四圓。尙各科にて日土講習會を催す。

〔校長〕伊澤勝麻呂〔學監兼教授〕伊澤春子〔日本畫部主任〕荻生天泉〔彫刻部主任〕長谷川義起〔西洋畫部主任〕阿以田治修〔美術手藝部主任〕阪井琴子〔教授〕金子保、加藤泰、森田武、竹脇八重子、黑河内天嶺、小野田高節、手塚又四郎、大貫松三、榎戸庄衛、淺岡中子、秋山松代、小田富子、有久龍一、柳原燐子大石隆子、片山佳吉、滋野ジャンヌ、篠田恆、船越富美子、田鎖直江、大塚賢子

日本大學美術科

本郷區金助町
電小石川二二四

専門部文藝文學藝術專攻美術科は他の創作、演劇、映畫、音樂の四科と共に昭和六年の設置に係り、美術家、美術評論家、美術教師の養成を目的とし、修業年限は三箇年で、本科と別科に分ち、本科は中學校卒業生、專檢合格者を、別科は中學校に準ずる學校の卒業生、小學校本科正教員免狀所有者を、何れも試験の上入學せしめる。授業は二部制で晝間部(午前八時—四時)、夜間部(午後五時—十時)に分れ、實習は(A)日本畫專攻(B)西洋畫專攻(C)彫刻專攻に分つ。授業料學友會費、各科とも年額九十五圓七十錢、實習費年額二十二圓、入學金

五圓。

他に實技科あり、美術、洋樂、邦樂、舞踊の各科に分れ義務教育を了へたる男女の隨時入學を許し、内美術科は日本畫、西洋畫、彫刻の實技を各々專攻せしめ、講師指導の下に自由に研究せしめる。月謝三圓、入學金五圓。

〔科長〕松原寛〔主任講師〕山本豐市〔教授〕相良德三〔講師〕柳宗悅、岩井大慧、清水清〔實技指導〕木村莊八、中村研一、山本豐市

日本美術學校

淀橋區戸塚町一ノ四
七四、電牛込八二六

大正六年紀淑雄に依り「美術研究所」創設され翌七年認可を得て日本美術學校と改稱。理論實技の兩方面より美術の製作、觀照、批評の三能力を養成せん事を目的とする。本科、選科、豫科、專修科、普通科及び速修科の六科を置き各科に男女を入學せしむ。學年は四月より翌年三月迄。本科、選科、豫科は繪畫、彫塑及圖案等を夫々專攻せしめ、次の七科に分つ—日本畫科、西洋畫科、木彫科、塑造科、工藝圖案科、商業圖案科、演劇圖案科。入學資格—本科第一學年(男女中等學校四年修了者及び之と同等以上の學力ある者)並に同校豫科修了者、選科第一學年(高等小學卒業生)豫科第一學年(尋常小學卒業生)。修業年限—本科及選科各四年、豫科三年。檢定料各科五圓、入學

金各科五圓、授業料、本科月額九圓、選科九圓、豫科七圓五十錢。

専修科は實用美術を専攻せしめ次の十九科に分つ。版畫科、漫畫科、挿繪科、壁畫科、書字科、圖工科、包裝科、陳列科、看板科、照明科、模製科、玩具科、塗裝科、製顔科、染色科、革工科、竹工科、寫眞攝影科、寫眞修整科。但し以上の中年度により開設せざる科あるべし。各科に第一部(晝間)、第二部(夜間)を設く。入學資格一年齡學歴を問はず、同校の檢定に合格せる者。修業年限第一部一ヶ年。第二部二ヶ年。檢定料各科三圓、入學金五圓、授業料、第一部月額七圓五十錢、第二部五圓。

普通科は小學校又は男女中等學校に在學する兒童生徒のために設け、日本畫科西洋畫科、圖案科の三科を置き更に之を中等科(男女中等學校生徒)、初等科(尋常小學三年以上の兒童)に分つ。修業年限一ヶ年。毎週三日午後授業をなす。入學金二圓、授業料、月額三圓。速修科は夜間授業で、日本畫科、西洋畫科、圖案科、クロッキー科を置く。入學資格クロッキー科を除き、年齡學歴を問はず、同校の檢定に合格せる者。修業年限一ヶ年。入學金五圓。授業料月額五圓。クロッキー科は人體クロッキーを行ひ臨時入學を許し、學費を回数券制度(一回券四十錢、六回券一圓八十錢、廿五回券五圓)とす。

〔校主〕紀惠以子〔校長〕山榊儀重〔學科〕岡登貞治、荒城季夫、神絢一、青柳正廣、薄金兼次郎、高橋道利、庄司大造、田邊孝次、一氏義良、濱田増治、足立一郎、内山義郎、菅原又七郎、〔日本畫科〕川崎小虎、矢澤弦月、村山森人、太田聰雨、紀惠以子、川原香雨〔西洋畫科〕大久保作次郎、小島善太郎、藤田嗣治、川島理一郎、高野眞美、碓伊之助、猪熊弦一郎、小城基、宮本三郎、林武〔圖案科〕古田達賢、吉田謙吉、朝影禮三〔彫塑科〕吉田久繼、長谷川榮作〔各科〕池部鈞、平塚運一、西田武雄、改井德寛、數見定一

文化學院美術部

神田區駿河臺二ノ五
電 神田 三三三九

大正十四年開校。洋畫の専門家養成を目的とし本科修業年限は三箇年で、男女中等學校卒業生、専檢合格者をデッサンの實技考查の上入學せしめる。専修科の修業年限は一箇年とし同校卒業生及他校の美術、研究所卒業生を實技考查の上入學せしめ、肖像、挿畫、版畫、圖案等實際の需要に應じ得る技術を授ける。學費は本科は一箇年百四十圓、専修科は百十圓とす。同校卒業生は留加會、青丹會を結成して作品發表をなしてゐる。

〔校長〕西村伊作〔美術部長〕石井柏亭〔教授〕(實技)石井柏亭、山下新太郎、有島生馬、正宗得三郎〔學科〕興野野品子、藤田德太郎、秋田玄移、木村太郎、

前川堅市、奥野信太郎、黒田朋信、仁羅山政次郎、諏訪頼雄

はAと同じ、Dは月四回(日曜日午前)、月謝二圓。ACは入會金三圓、Dは入會金一圓

研究 所 (五十番順)

熊岡繪畫道場

府下吉祥寺八ノ三二六一
井之頭公園御殿山西隣り

淀橋區戸塚町二ノ一二二

洋畫の基礎的指導を行ふ。銓衡の上男女を入所せしむ。午前部(九時—正午)、午後部(一時—四時)、夜間部(六時—九時)を設く。研究費は午前、午後部月額五圓、午前午後又は午後夜間兼修は月額九圓。他に日曜部を置く。

昭和六年九月開場。十一年九月東京府認可となる。油繪研究の指導を目的とし、石膏部(木炭)、人體部(木炭、油繪)の二部を置く。入場資格者は中等學校卒業若しくはそれに相當する者とす。午前部(九時—正午)月謝七圓、午後部(一時—四時)月謝六圓、夜間部(六時—九時)月謝五圓。入場料十圓。

大野洋畫研究所

豊島區西巢鴨三ノ七六六

〔教授〕熊岡美彦、齋藤與里、渡邊浩三、野口謙藏、佐藤一章〔助教〕平通武男〔講師〕森田龜之助、荒木季夫

昭和五年十月創立。洋畫一般の指導教授をなす。研究所展開催三回に及ぶ。

クロッキー研究所

〔所主〕大野隆徳

麹町區有樂町二ノ四
日本新聞社ビル内

大森繪畫自由研究所

大森區池上德持町三七二

昭和七年創立。邦洋の各流派を問はず、自由研究の内に美術の基礎を作るを目的とする。A人體寫生、B日曜クロッキー、C石膏部、D少年少女部とし、Aは午前部夜間部に分れ月謝五圓、一週間一圓五十錢。Bは日曜午後、研究費一回三十錢、Cは午前部、夜間部に分れ月謝

クロッキー、デッサンの研究を目的とし、自由研究回数券を發行して何人でも隨時參加することが出来る仕組になつて居る。大正十四年開設。人體部(午後六時—九時)研究費D會員(隨時參加)五十錢、T會員(七回々數券一冊)二圓五十錢、W會員(連續六日間參加)一圓八十錢、M會員(連續一箇月參加)五圓。他に日曜研究所(午後一時—四時)及制作研究所(午前九時—正午)の制がある。

〔經營管理者〕柳川清一朗

構造社彫塑研究所

豊島區池袋四ノ三八三

昭和三年の創立で、七年一旦閉鎖したのを十年七月より再開した。模刻部、人體部の二部を設け、前者は入所資格を要せず、後者は(イ)自作彫刻若くは素描をもつて本研究所の考查に合格せるもの(ロ)嘗て構造社展に入選せることあるもの等を入所せしめる。月謝七圓、入所料十圓。模刻部(午後一時—四時)人體部(午前九時—正午)

〔指導者〕齋藤素巖、其他構造社會員

春陽會洋畫研究所

荒川區日暮里三ノ一四七

昭和四年九月設立。春陽會々員が指導に當る。研究時間並科目は次の如し。午前部(人體、石膏九時—正午)、午後部(當分石膏のみ、一時—四時)、夜間部(人體、石膏六時—九時)。入學は餘衛の上許可を決す。記名料十圓。月謝、午前五圓、午後四圓、夜間五圓、午前午後兼修七圓、午前夜間兼修八圓。午後夜間兼修七圓。日曜日、四大節、年末年始二週間及八月は休所。

商業美術學校構成塾

淀橋區戸塚町四ノ七九一
電牛込六三二七

昭和三年に商業美術協會の附屬研究所

として設立されたが、後改制されて昭和七年現稱に改めた。商業美術の技術家養成を目的とし、日本商業美術協會員が指導の任に當る。修業年限三箇年。授業料一箇年百圓、記名料五圓

〔塾長〕濱田増治

新象型藝術研究所

麹町區平河町二ノ一

昭和十年十一月創立。科學的態度に依つて造型藝術のゲゼツツを追究し、新しきセオリーとメトードに到達する。基礎的教課としてイッテンシュール(ドイッ)豫備科に於ける練習課目を適用し、形態、色彩、明暗、材質、構成等の感覺的訓練を實習す

〔指導〕橋本徹郎

鈴木繪畫研究所

淀橋區東大久保一ノ三五七

洋畫技法の基礎的教授を行ふ。科目石膏、靜物、人體。午前部(九時—正午)、午後部(午後一時—四時)、夜間部(六時—九時)に分れ、研究費は午前部午後部各々七圓、夜間部五圓、二部兼修は十圓。

〔所長〕鈴木千久馬〔助教〕倉員辰雄
〔主事〕岡田一馬

田端國畫研究所

荒川區尾久町二ノ三五八

昭和十年設立。故速水御舟は同會の創立計畫者であつたが事前に急逝したので四宮潤一他三名を以て設立した。同所の趣旨は綜合的な教育システムを以て東西繪畫の理論及實技を習得し、古典に確固たるつながりを求めつゝ次時代の日本畫の動向を確立せんとするにある。午前部及午後部の二部とし、石膏、人體、花鳥靜物風景寫生、製作實技、理論講座、構成練習等の研究種目を有する。指導は毎週所員が交互に當る。研究費は月三圓五十錢、記名料七圓。

〔所員〕河村良孝、中村直人、四宮潤一、津田正則

第三部會研究所

瀧野川區上中里町一七二
電小石川一八九八

第三部會員の指導する彫塑研究所で昭和十年十一月アトリエ落成式を舉げ十二月より授業を開始した。塑造の基礎教育を授ける外研究生の希望により左記の分擔にて各種の實材彫刻を指導する。(動物彫刻)池田勇八(木彫牙彫)石川確治、開發芳光、上田直次(薄肉彫刻)畑正吉、吉田久繼、日名子實三(石彫)小倉右一郎、日名子實三。午前、午後の二部を設け、月謝は五圓、二部兼修は八圓。

高間洋畫研究所

豊島區西巢鴨町四ノ八
八、電大塚四〇六一

昭和十年九月開設。洋畫の基礎的指導を行ふ。午前、午後、夜間の三部に分

ち、中等學校卒業程度の男女を入所せしめる。月謝、午前、午後各々六圓、夜間五圓。

同舟舎繪畫研究所

赤坂區新坂町六五

大正十四年久しく中絶してゐた同研究所を再設して今日に及ぶ。石膏及人體寫生の基礎指導をなす。石膏部は午前部(八時—十二時)、午後部(一時—五時)、夜間部(六時—九時)に分れ月謝は各部とも四圓。男女年齢を問はず隨時入所することを得。入學金五圓。

〔指導主任〕小林萬吾、白川一郎〔職員〕前田謙一

獨立美術研究所

淀橋區柏木町一ノ六三

獨立美術協會員が毎週二名づゝ交代して指導に當り、人體科、石膏科の二部あり、何れも午前或は午後開講される。月謝は人體科四圓、石膏科三圓。記名料五圓。他に各日曜日午後二時—四時キ料が開設され月謝は一圓。毎週金曜日午後全會員出席の上作品合評會を開く。隨時入所する事を得。

中村版畫研究所

杉並區堀ノ内一ノ二二七

舊稱「創作版畫自由房」。同所は洋風版畫の研究所で、研究科目を平版科(石版、亞鉛リトグラフ)と凹版科(エツチング

アクアチント、メゾチント、ドライボ
イント)の二種とする。教授日は平版科
は火曜日、凹版科は木曜日、自由研究日
は金曜日とし、何れも午前九時より正午
及一時より四時迄。記名料二圓、月謝五
圓。臨時展覽會を開く。

〔所長〕 中村義雄

二科美術研究所

四谷區番町一七
電四谷四九七八

昭和十年九月設立。洋畫の實技を指導
す。月謝は人體部六圓、石膏部五圓。

〔指導者〕 二科會員

日本エツチング研究所

麹町區麹町一ノ三
電九段五一四

昭和六年設立。エツチングの研究及普
及を目的とし同八年十一月より、月刊雜
誌「エツチング」を刊行してゐる。尙同
研究所の事業を後援する日本エツチング
協會がある。會員三十四名。同所の研究
生たらんとする者は記名料五圓、一箇月
會費三圓を納むる事。臨時研究生は一日
實費二十圓を納む。

〔所主〕 西田武雄

橋本八百二繪畫研究所

世田谷區代田一ノ六四四

橋本八百二の指導する洋畫研究所で、
午前部、午後部、日曜部を設く。

福澤繪畫研究所

本郷區駒込町三二七

福澤一郎指導に當り、洋畫の實技を研
習せしめる。

本郷繪畫研究所

本郷區春木町二ノ二八

明治四十五年六月の創立に係り、もと
本郷洋畫研究所と稱し、大正十三年建物
を再築して現稱に改めた。講習科目は人
體寫生及石膏寫生とし午前、午後、夜間
の三部を設置す。日曜、大祭日、年末年
始及七八兩月の暑中休暇を除き毎日開講
す。授業料は一部二週間二圓五十錢、一
箇月四圓、二部兼修は更に二週間一圓五
十錢、一箇月二圓五十錢を納付するもの
とし、夜間部は二週間一圓五十錢、一箇
月三圓とす。記名料五圓。

目白繪畫研究所

滝區區下落合一ノ五四
〇、電大塚四〇三七

昭和十年四月開所。油繪實技の指導を
目的とし人體、靜物、風景、石膏寫生の
指導をなす。午前部、午後部、夜間部、
特設日曜研究所(午前九時—午後四時)
を設け、月謝は午前、午後の部は七圓、
夜間、日曜研究所は五圓、記名料十圓と
す。他に日曜夜間にクロッキー部を置
く。男女年齢を問はず初心者をも教授す

る。

〔指導者〕 大久保作次郎〔委員〕 小林泰
山、石原政之〔女子部〕 大久保百合子

綠蔭社繪畫研究所

赤坂區青山北町四ノ九
電青山一〇三五

大正十四年神田區中猿樂町に事務所を
置いて洋畫及圖學の指導事業に着手。昭
和二年より毎年夏季、冬季、春季に講習
會を開催したが、昭和九年現在の地に研
究所を建設し、以來石膏、人體寫生及び
繪畫一般に互る指導をなし、他に通信指
導、講習會等を行つてゐる。

〔教授〕 石川寅治、鈴川信一、佐竹徳次
郎〔主幹〕 東門正太郎

朗峯畫塾

大森區池上本町一八六

はじめ深水畫塾と稱す。日本畫の指導
達成を旨とし、月一回研究例會を開く。
〔主宰〕 伊東深水〔顧問〕 渡邊泰次、小
林源太郎〔幹事〕 遠藤燦可、塾員凡そ百
名

京都

學校

〔官立〕

京都高等工藝學校

左京區松ヶ崎御所海邊町
電上五七、五〇〇三、五七七〇

明治三十五年三月創立。本校は工藝に
従事し又は工藝に關する學校教員たらんと
する者のために必要な學理及び技術
を授くるを目的とし、學科を染色科、機
織科、圖案科、陶磁器科の四科に分ち、
修業年限は三箇年である。授業料一箇年
八十圓。

〔公立〕

京都市立繪畫專門學校

東山區今熊野日吉町
電祇園一五八

明治四十二年三月創立。同校は「専門
學校規程に依り日本畫を研究せんとする
もの又は師範學校、中學校、高等女學校
の圖畫教員たらんとする者に必要な技
術及學理を授く」を目的とする。初め京
都市立美術工藝學校の西隣に校舎を營ん
だが、大正十五年六月現地に移轉、創立
以來多數の日本畫家を輩出して今日に及
ぶ。現在豫科、本科及研究科(本科修了
者を審議の上編入す)を設置し豫科及び
本科に選科を附設する。修業年限は豫科
二年、本科三年、研究科五年と定め、豫
科第一學年の入學資格者は中學校卒業者
及專檢合格者で、考查の上入學せしめ

る。本科卒業者は圖畫科中等教員無試験檢定を受く。授業料は京都市内在住者のみは年額本科五十圓、研究科四十五圓、選科四十圓で其他の者は本科六十二圓、研究科五十七圓、選科五十圓である。

〔私 立〕

〔校長〕 川村曼舟

〔校長〕 川村曼舟〔教授〕 中井宗太郎、入江波光、堂本印象、福田平八郎、宇田萩郎、築本一洋、中村大三郎、石崎光瑠

關西美術院

關崎公園東北

〔助教〕 山口華楊、上村松篁、松元道夫、三宅風白、池田遙郎、加藤一雄〔講師〕 太田喜二郎、猪熊淺磨、久世新十郎、河野通一、清水光繁

故淺井忠の主唱により明治三十八年三月創立。洋畫の指導をなす。

〔院長〕 伊藤快彦〔教授〕 黒田重太郎

研究所

京都彫塑研究所

京都市立美術工藝學校

東山區今熊野日吉町
電報圖一五八

事務所 左京區修學院大林町一六
松田方、電報圖一〇八

明治十三年七月の創立で、元京都府畫學校と稱し、本邦最初の畫學校である。はじめ普通畫學のみの教授をしたが、同

昭和八年三月松田尚之に依り開設。人體寫生、石膏模刻の二部に分ち、研究時間

は晝間部（午前九時—午後五時）夜間部（午後六時半—十時半）とし、模刻部

は無休、人體部は日曜日は休日とす。記名料五圓、月謝五圓、但し人體部では別にモデル費を臨時徴集する。

〔指導者〕 松田尚之

獨立美術京都研究所

上京區室町九太町下ル

昭和八年九月創立。獨立美術協會會員が指導に當る洋畫研究所で、次の四部を設け、人體、石膏、靜物を研究せしめる。

午前部（九時—正午）は人體研究、午後部（一時—五時）は石膏及靜物研究、夜間部

（六時—九時）は人體及石膏研究、日曜部（午前九時—午後五時）は石膏及靜物研究をなす。月謝は各部とも三圓五十錢、記名料七圓とし、男女年齢を問はず入所することを得。現在研究生六十八名。

大阪美術學校

府下北河内郡殿山町御殿山

〔實技指導者〕 獨立美術協會々員〔常任指導者〕 須田國太郎

大正十三年矢野橋村が主なる發企者となつて創立した。實技の指導を主とし、日本畫、西洋畫の二科に分ち、修業年限は本科三年、專攻科二年とする。入學資格は本科は尋常小學卒、專攻科は本科卒業生又は之と同等の學力あるものとし、各々試験の上入學を許可する。月謝五圓入學金十圓、授業時間男子部（午後一時—五時）女子部（午前八時—正午）

日佛文化協會洋畫研究部

吉田東一條
電上一四三〇

財團法人日佛文化協會の經營により昭和十一年十月開設。健實なる畫風を養成し、佛國々立美術學校、東美校入學志望者の爲に便宜を計る。午前部、午後部、夜間部を置き、男女を問はず隨時入所出来る。學期を分つて春期（四月十六日—六月廿四日）、秋期（九月廿一日—十二月廿日）、冬期（一月十一日—三月十日）とす。各部入會金五圓。授業料は毎學期、午前部十五圓、午後部、夜間部九圓。中途入部者は月割にて納付する。

〔主任〕 鹿子木孟郎〔顧問〕 太田喜二郎、黒田重太郎〔教授〕 井恒嘉平、池田治三郎、服部喜三

研究所

赤松洋畫研究所

南區心齋橋筋二丁目丹平
ハウス二階、電南九五七

洋畫の指導を行ふ。夜間部、日曜部、婦人部を設け、夜間部は午後七時より十時迄、月謝五圓。日曜部及婦人部は毎日曜午前九時より午後四時迄、月謝三圓とす。毎春「赤松洋畫研究所展」を開く。

〔主任〕 赤松麟作、松本銳次、田川寛

新燈社美術研究所

天王寺區勝山通一ノ五四

大正十一年創設。洋畫の研究より進ん

學校

〔私 立〕

大阪

で「新日本畫」を創作せんとする。午前、午後、夜間の三部を設け初歩研究者には洋畫の基礎技法の指導をなし婦人部を置く。月謝三圓、婦人部五圓。加名料七圓。〔指導員〕青木大乗

中之島洋畫研究所

北區中之島朝日ビルディング内
電本局四五〇〇―四五〇四

大正十三年四月鍋井克之、故小出楢重、國枝金三の三名により、大阪市西區信濃橋日清生命ビル内に開設、信濃橋洋畫研究所と稱した。同年黒田重太郎参加し、爾來夏期講習會、研究所展を屢々開催したが、昭和二年研究所展を擴充して、公募展「全關西洋畫展」を開催し以來引續いて今日に及んでゐる。同六年現地に移轉し、現稱に改めた。研究所を普通部と日曜部に分ち、普通部は午前部、午後部、夜間部とし、各部に石膏部、人體部を置く。普通部に限り入所記名料十圓、石膏部月謝五圓、人體部六圓。日曜部は午前九時より午後四時迄で石膏、人體、クロツキを教授、記名料五圓、月謝五圓。〔實技指導者〕鍋井克之、黒田重太郎、國枝金三、濱田葆光、田村孝之介、山本直治、松井正

美光會洋畫研究所

西區新町修習所前

昭和九年五月設立。齋藤與里及美光會員の指導する洋畫研究所で普通部（午後六時―九時）、日曜部（午前九時―午後四時）に分け、石膏、人體、靜物寫生を教授する。月謝、普通部三圓、日曜部二圓。

八千草會研究所

府下大軌沿線長瀬、木谷千種方、電小坂三七三

一般家庭の青年子女に繪畫趣味を普及養成する目的を以て、大正十年春創立。人物、花鳥の日本畫を教授する。實習は毎月四回日曜日。〔指導者〕木谷千種

其他

アシヤ洋畫研究所

兵庫縣武庫郡精道村山嵐屋

昭和四年四月設立。油繪、水彩、パステル、デッサンの教授をなす。研究時間は毎週火曜日午後、日曜日午前とす。所費一年四十圓、半年廿五圓、一ヶ月五圓。記名料五圓。他に小學生部を置く。又阪急岡本停留所東隣、本山幼稚園に「本山分室」を設け毎週木曜午後開講す。

鶴山洋畫圖案研究所

神戸市神戸區元町通一丁目二四四川筋

洋畫並圖案的教授をなす。科別は次の如し、第一部洋畫科（素描、水彩、油繪）、第二部圖案科（石膏寫生、水彩、描法、創作圖案、應用圖案、商業美術一般）、研究日は月火水木の夜間、第三部速成科（洋畫部、圖案部各一週二回、晝夜自由）、

第四部出張教授科。記名料五圓、研究費、第一、二、三部各月額五圓、第四部月額十圓。〔代表指導者〕有吉正雄

神戸洋畫研究所

神戸市神戸區中山手通七ノ四六九直木邸内、電元町二三四

昭和三年設立。舊稱山手洋畫研究所。晝間、夜間、日曜、女子の四部分に分れ、初學者の指導をもなす。所費一ヶ月五圓、記名料二圓。〔指導者〕濱田葆光

赤艸社女子洋畫研究所

神戸市兵庫區熊内町二丁目一〇龜高文子方、電舞合五五五

工藝指導施設一覽

工藝指導所（官立）

仙臺市廿八町通電三七六〇

「本邦固有の工藝を改善し之が全國工業化を圖り現代民衆生活の要求に合致せしむる」と共にその海外輸出の振興を圖る目的を以て昭和三年政府に依り設置され、はじめ商工省内に假事務所を設けたが同年十一月仙臺市の廳舎竣工と共に事務所を移轉し事業を開始して現在に至つた。其後事業の進展上東京に於ける調査研究の必要を認め昭和八年五月より商工

大正十二年創立。週二回（土、日）デッサン、油繪、水彩の實習をなす。毎秋神戸、大阪に作品發表展を開催す。研究所同人五十一名。〔指導者〕龜高文子

李仁星洋畫研究所

朝鮮大邱南山町三三三、電一一一七

油繪、水彩畫等の實技指導を行ふ。午前、午後、夜間、特設日曜研究部の各部を設け、入所は男女年齢を問はず。月謝は午前、午後、夜間の各々四圓。特設日曜部は三圓、人體部五圓とす。〔指導者〕李仁星

省内に工藝指導所出張員事務室を設け當時所員を駐在せしむる事となつた。當所は「第一部」木工、洋塗工、漆工「第二部」鑄造、板金、金屬化學、彫塑「第三部」圖案設計、展示、寫眞、印刷「庶務課」庶務及會計、其他調査係、傳習生係、編纂係等を設置し其事業に當つて居るが、その業務一般を要覽に依つて記せば左の如し。

業務一般

一 調査研究

内外工藝に關する意匠圖案設計材

工藝指導施設一覽

- 料、技術、生産工藝各般に關する調査研究及參考資料の蒐集をなす試験研究
- 主として木、金、漆工藝に利用すべき原料、材料、意匠圖案、又は機械器具及製作技術に關する試験研究、各種工藝品の規範原型の研究をなす試作研究
- 主として木、竹工品、金工品、漆工品其他各種工藝品を研究的に試作し、一般業者の參考に供すると共に適當の産地又は業者に實施せしめ工業化する
- 製品、圖案及參考品の貸與及展示
本所の研究試作品、設計圖案又は參考品は申請により之を貸與し或は展示會、展覽會、博覽會等に出品する製作加工圖案調製應需
- 當所では木工、金工、漆工に關する製作加工又は之が圖案的調製依頼に應じ其他當所研究による試作品及圖案の配布をする
- 傳習生及研究生の養成
當所に於ける傳習生の養成は全國斯業の發達向上を目的とし主として木工、金工、漆工業者及其子弟並に工場従業者に對し其實務に必要な技術及知識を短期間に修得せしめる。研究生は工藝の學理又は技術に關して經驗を有し特に特別の研究を希望する者を入所せしめ專任所員が指導する

七 講習、講演及審査

當所の調査研究に基き工藝に關する講習、講演を開催し又は申請により講習、講演又は審査のため當所職員を派遣し、實地の指導をする

八 質疑應答

木工、金工、漆工に關する材料技術意匠、其他工藝各般に關する質問に對し口答又は文書を以て應答し業者を啓發する

九 設備貸與

當業者の試験研究又は製品加工のため申請のあるときは當所作業に支障のない限り設備を貸與し便宜を図る

十 刊行物頒布

本所の試験研究及調査に基き工藝ニユースを編輯し、之を工政會から發行させ又隨時工藝に關する小冊子及圖録を編集し關係各方面に頒布する

工藝指導所官制

昭和三年三月三十一日
勅令第四十七號

第一條 工藝指導所ハ商工大臣ノ管理ニ

屬シ工藝ノ指導ヲ爲ス爲左ノ事務ヲ掌ル

- 一 木工品及金屬工品ニ關スル試験及研究
- 二 木工品及金屬工品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定
- 三 木工品及金屬工品製作ニ關スル傳習及講習

四 試験研究ノ爲製作シタル木工品及金屬工品、加工シタル其ノ材料並ニ調製シタル其ノ意匠圖案ノ配付

第二條 工藝指導所ハ工藝ノ改善ニ必要アリト認ムル場合ニ限り木工品及金屬工品ノ製作並ニ其ノ意匠圖案ノ調製ノ依頼ニ應スルコトヲ得

第三條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ケ

- 所長
- | | | | |
|----|----|----|----|
| 技師 | 專任 | 四人 | 奏任 |
| 屬 | 專任 | 一人 | 判任 |
| 技手 | 專任 | 三人 | 判任 |
- 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ
(第四條以下略)

商工省内臨時職員設置制拔萃

昭和八年勅令
第三十六號改正

第六條ノ二 工藝振興ニ關スル事務ニ從事セシムル爲工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ケ

- | | | |
|----|----|----|
| 技師 | 專任 | 二人 |
| 技手 | 專任 | 四人 |

同所處務規程拔萃

- 一、工藝指導所ニ第一部第二部第三部及庶務課ヲ置ケ
- 一、第一部ニ於テハ木工品並ニ木工用原料及材料ニ關スル事務ヲ掌ル
- 一、第二部ニ於テハ金屬工品並ニ金屬用原料及材料ニ關スル事務ヲ掌ル
- 一、第三部ニ於テハ意匠及圖案ニ關スル事務ヲ掌ル

四二

一、庶務課ニ於テハ庶務及會計ニ關スル事務ヲ掌ル

職員

- | | | |
|----|-------------|--------|
| 技師 | 所長兼第三部長事務取扱 | 國井喜太郎 |
| 屬 | 第二部長 | 平野久保 |
| 技手 | 第二部長 | 齋藤信治 |
| 技手 | 第一部長 | 谷内治橋 |
| 技手 | 第一部長 | 寺坂毅 |
| 技手 | 第一部長 | 阿久津保太郎 |
| 技手 | 第一部長 | 西川友武 |
| 技手 | 第一部長 | 豐口克平 |
| 技手 | 第一部長 | 安部郁二 |
| 技手 | 第一部長 | 古谷豐吉 |
| 技手 | 第一部長 | 黑澤道遠 |
| 技手 | 第一部長 | 劍持勇 |

陶磁器試驗所 (官立)

京都市伏見區深草正覺町
電圖祇園一四七八

當所は本邦陶磁器工業の改善進歩並にその輸出増進を圖る爲の國立研究指導機關にして、大正八年京都市より、元京都市立陶磁器試驗場の敷地、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、時の農商務省所管としたもので後に商工省の所管となり現在に至つて居る。而して昭和八年度、政府に於て國策として工藝振興に關する經費を新に支出することになつたがこの際偶瀬戸市に計畫された市立窯業試驗所の土地、建物その他諸設備一切を舉げて當所に移管し、同所を陶磁器試驗所瀬戸試驗場として當所に於て經營することになつた。

陶磁器試驗所官制

大正八年四月五日
勅令第八十三號

第一條 陶磁器試驗所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一 陶磁器ニ關スル試驗及研究

二 陶磁器ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 陶磁器製作ニ關スル傳習及講話

四 試驗研究ノ爲製作シタル陶磁器及加工シタル其ノ材料ノ配付

第一條ノ二 陶磁器試驗所ハ試驗研究成績ノ普及促進ニ必要アリト認ムル場合ニ限り陶磁器ノ製作ノ依頼ニ應スルコトヲ得

第二條 陶磁器試驗所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師 專任五人 奏任

屬 專任一人 判任

技手 專任五人 判任

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス
(第四條以下略)

同所處務規程拔萃

一、陶磁器試驗所ニ第一部、第二部、第三部及庶務課ヲ置ク

一、第一部ニ於テハ陶磁器ニ關スル基礎的研究並陶磁器ノ原料、材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第二部ニ於テハ陶磁器製作ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第三部ニ於テハ陶磁器ノ意匠及圖案

工藝指導施設一覽

ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、所長ハ必要ト認ムル地ニ試驗場ヲ置キ陶磁器試驗所ノ事務ノ一部ヲ分掌セシムル事ヲ得

同所製品配付及受託製作規則拔萃

一、陶磁器試驗所ノ試驗研究ニ依リ製作シタル陶磁器及加工シタル陶磁器材料ノ配付ヲ受ケントスル者又ハ陶磁器ノ製作ヲ依頼セントスル者ハ別記所定様式(中略)ニ依リ陶磁器試驗所長ニ出願スヘシ

一、前條ノ出願ヲ許可セントスル場合ニ於テハ陶磁器試驗所長ハ左ニ掲クル事項ヲ定メ之ヲ出願人ニ通知スヘシ

一 品種及數量

二 代金又ハ製作費及其ノ納付期限

三 引渡豫定期日

出願人前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五日以内ニ配付ヲ受クヘキ旨又ハ製作ノ依頼ヲ爲スヘキ旨ヲ申出テサルトキハ出願ハ其ノ效力ヲ失フ

一、陶磁器試驗所長必要アリト認ムルトキハ道府縣市立商品陳列所規程ニ依ル商品陳所又ハ學校ニ對シ無償ヲ以テ製品ヲ配付スルコトヲ得

同所傳習生規程拔萃

一、陶磁器試驗所ハ陶磁器ノ製作ニ關スル技術ヲ修得セントスル者ノ爲傳習ヲ行フ

一、傳習生ノ傳習期間ハ五箇月トシ傳習開始ノ期日ハ毎年四月一日及十月一日トス

前項ノ期間及期日ハ陶磁器試驗所ノ都合ニ依リ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一、傳習事項、傳習生ノ定員、傳習期間及傳習開始ノ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

一、傳習生ハ陶磁器ノ製作ニ經驗アル十八歳以上三十五歳以下ノ男子ニシテ官公署、學校、組合其ノ他ノ團體又ハ工場主ノ推薦ニ係ルモノタルコトヲ要ス

一、傳習料及傳習ニ要スル費用ハ之ヲ徵セス

附瀬戸試驗場 (同概要に依る)

瀬戸市大學瀬戸
電瀬戸二四五六

京都本所ノ基礎的研究よりなる中間試驗の結果を更に進んで實地的製作に移し以て陶業者と相互に聯絡を保ち、益斯業の發展を圖らんとするものであつて、當場には技術科、圖案科、及び庶務係を置く。

技術科 研究品の試作、製造、技術上の改善、研究、指導及各種の調査を行

ひ、成形係、原型形塑係、着畫係、窯係、調査係があり相互に事務の聯絡を行ふ。

圖案科 意匠圖案研究、調査及依頼調製

陶磁器試驗所職員

技師 所長兼第二部 長事務取扱 平野 耕輔

第一部長心得 小川新一郎

第三部長 水町和三郎

磯松 嶺造

滑川 正雄

石塚信太郎

藤井 兼壽

馬淵 利貞

寺崎 厚治

赤塚 幹也

遠藤 芳門

井本米次郎

飯田 利平

澤村 滋郎

各府縣工藝指導機關一覽

關東地方

東京府立染織試驗場(染織、圖案)

八王子市市明神町

同 青梅分場(染織、圖案)

東京商工獎勵館(化學、機械、圖案)

東京市麹町區府廳内

神奈川縣工業試驗場(化學、染織、木工、醸造、圖案)

橫濱市神奈川區龜住町

神奈川縣愛甲郡愛川村

神奈川縣小田原町

浦和染織試驗場(染色整理)

工藝指導施設一覽

四四

川越工業試驗場(染織、木工、圖案)	仙臺市 勾當臺通	山梨縣工業試驗場(染織、圖案)	靜岡縣濱名郡小野口村	富山縣染織試驗場(染織、圖案)	富山縣東礪波郡福野町
秩父工業試驗場(染織、圖案)	川 越 市 小 仙 波	川俣工業試驗場(染織、圖案)	山梨縣南都留郡谷村町	富山縣染織講習所(染織)	富山縣東礪波郡福野町
埼玉縣秩父郡秩父町大宮	埼玉縣秩父郡秩父町大宮	會津工業試驗場(染織、醸造、漆器、窯業)	同 上野原分場(染織)	新潟縣染織講習所(染織)	富山縣東礪波郡福野町
川口鑄物工業試驗場(鑄物、工藝、圖案)	川 口 市	岩手縣工業試驗場(木工、金工、染織、圖案、化學)	同 山梨縣北都留郡上野原町	新潟縣染織試驗場(染織、圖案)	新潟縣南蒲原郡見附町
前橋工業試驗場(染織、製絲、撚絲、木工)	前 橋 市 岩 神 町	青森縣工業試驗場(染織、醸造、木工、漆工、窯業)	同 山梨縣南都留郡瑞穂村	同 三條作業所(染色)	新潟縣南蒲原郡三條市
桐生工業試驗場(染織、撚絲)	桐 生 市 安 樂 土	山形工業試驗場(金工、木工、漆工、圖案)	甲府市立試驗場(水晶、瑪瑙細工)	同 枋尾作業所(染色)	同 南蒲原郡三條市
伊勢崎工業試驗場(染織、圖案、撚絲)	伊勢崎工業試驗場(染織、圖案、撚絲)	米澤工業試驗場(染織、圖案)	長野縣工業試驗場(染織、製絲、化學、圖案)	新潟縣麻織物試驗場(麻織物、圖案)	同 古志郡下鹽谷村
館林工業試驗場(染織、圖案、撚絲)	群馬縣佐波郡伊勢崎町	米澤工業試驗場(染織、圖案)	長野縣染織試驗場(染織、圖案)	新潟縣木工試驗場(木工、圖案)	同 北魚沼郡小千谷町
群馬縣邑樂郡館林町	群馬縣邑樂郡館林町	鶴岡工業試驗場(染織)	上 田 市 常 磐 城	新潟縣木工試驗場(木工、圖案)	新潟市附船町一丁目
群馬縣工藝所(染織、木工、漆工、金屬圖案)	高 崎 市 竝 榎 町	秋田縣工業試驗場(木工、金工、圖案)	長野市立工藝指導所	同 加茂作業所(木工)	新潟縣南蒲原郡加茂町
栃木縣工業試驗場(染織、圖案)	足 利 市 西 宮 町	川連漆器試驗場(漆工)	岐阜縣工業試驗場(染織、圖案)	新潟縣金工試驗場(金工)	同 三 條 市
町立益子町陶器試驗場(陶器)	町立益子町陶器試驗場(陶器)	秋田縣雄勝郡川連町	岐阜縣羽島郡笠松町	新潟縣染織講習所(染織、圖案)	同 中魚沼郡十日町
茨城縣工業試驗場(染織、圖案)	栃木縣芳賀郡益子町	中部 地方	岐阜縣土岐郡多治見町	新潟縣木工指導所(木工)	高 田 市 南 城 町
茨城縣結城郡結城町結城	茨城縣結城郡結城町結城	愛知縣工業試驗場(染織、窯業、化學、醸造、圖案)	福井縣工業試驗場(染織、圖案、撚絲)	同 大聖寺分場(染織)	京都府立織物試驗場(染織、圖案)
水 戸 市	水 戸 市	三河染織試驗場(染織、圖案)	石川縣染織試驗場(染織、圖案)	同 石川縣江沼郡大聖寺町馬場	京都府中郡吉原村宇安
千葉縣工業試驗場(醸造、染織、化學、窯業、木工)	千 葉 市	尾張染織試驗場(染織、圖案)	同 大聖寺分場(染織)	石川縣工業指導所(漆工、窯業、金工、圖案)	京都市立染織試驗場(染織、圖案)
奧 羽 地 方	奧 羽 地 方	靜岡工業試驗場(漆器、木工、染織、圖案)	同 輪島分所(漆器、圖案)	富山縣工業試驗場(銅器、漆器、木工、瓦、圖案、電鍍、板金、化學、陶器)	京都市上京區烏丸通上立賣上ル
宮城縣工業試驗場(染織、漆工、醸造、圖案、化學)	仙 臺 市 勾 當 臺 通	濱松工業試驗場(染織、能率、圖案)	同 小松出張所(染織、圖案)	高 岡 市 下 關	同 下京區東九條山王町
仙臺市立陶磁器研究所	仙臺市立陶磁器研究所	同 小松出張所(染織、圖案)	同 小松出張所(染織、圖案)	同 小松出張所(染織、圖案)	國立大阪工業試驗所
					大阪市西淀川區大仁西二丁目

大阪府工業獎勵館(化學、機械、發明、木工、金工、金屬、利器、飾物)

大阪府西區江ノ子島上ノ町
同 大阪府泉北郡大津町

大阪市立工業研究所(染色、化學、機械發明)

神戶市工業試驗場(化學、材料強弱、窯業)

同 窯業作業所(窯業)

同 加工陶磁器研究所(加工陶磁器)

同 三木金物試驗場(金工)

西脇染織試驗場(染織、圖案)

西脇染織講習所(染織)

奈良縣工業試驗場(釀造、染織、化學、圖案)

三重縣工業試驗場(染織、圖案、工藝)

同 松坂分場(化學、漆器、製紙)

三重縣飯南郡松坂市殿町

能登川工業試驗場(染織、圖案)

同 滋賀縣神崎郡五峰村佐野

滋賀縣高島郡新儀村
長濱工業試驗場(染織、圖案)

滋賀縣坂田郡長濱町南吳服
美術觀覽施設一覽

滋賀縣窯業試驗場(窯業、圖案)

和歌山縣工業試驗場
(染織) 和歌山市七番町

(漆工) 海南市船尾町

中國地方
島根縣工業試驗場(窯業、紙、釀造)

同 石見分場(窯業)

岡山縣工業試驗場(染織、釀造、製紙、化學、工藝、圖案)

岡山縣工業試驗場(化學、染織、食品)

廣島市東白鳥町

福山工業試驗場(染織、化學、花菱、圖案、撚絲)

山口縣工業試驗場(窯業、漆工、木工、竹工、釀造、化學、圖案、製紙)

山口縣染織試驗場(染織、圖案)

山口縣玖珂郡柳井町

四國地方
德島縣工業試驗場(化學、染織、釀造、圖案、木工)

德島市前川町

香川縣工業試驗場(染織、製紙、木工、釀造、化學、圖案)

高松市花ノ宮町
丸龜市立工藝圖案研究所(工藝)

九龍市米屋町丸龜商工會內
愛媛縣工業試驗場(染織、紙、圖案)

松山市宮西町

愛媛縣染織試驗場(染織、圖案)

今治市藏敷榎町

高知縣商工獎勵館(木工、金工、釀造、紙、圖案)

高知市帶屋町

九州地方
福岡工業試驗場(染織、釀造、圖案、化學、撚絲)

福岡市型粕町

久留米工業試驗場(染織、花菱、圖案)

久留米市津福町

福岡縣八女郡福岡町

福岡市立窯業研究所(窯業)

福岡市松園

大分縣工業試驗場(釀造、染織、化學、花菱)

大分市舞鶴町

佐賀縣窯業試驗場(窯業、圖案)

佐賀縣西松浦郡有田町

佐賀縣窯業指導所(窯業、圖案)

熊本市立商工研究所(木工、漆工、圖案、金工、竹工)

熊本市新町

長崎縣窯業指導所(窯業、圖案)

長崎縣東彼杵郡上波佐見町

同 折尾瀬分所(窯業)

長崎縣東彼杵郡折尾瀬村

宮崎縣工藝指導所(木工、漆工、竹工)

宮崎縣工業試驗場(製絲、釀造、染織、圖案)

鹿兒島縣工業試驗場(製絲、釀造、染織、圖案)

鹿兒島縣染織指導所(染織、圖案)

鹿兒島縣大島郡名瀬町

沖繩縣工業指導所(染織、窯業、漆器)

沖繩縣島尻郡眞和志村

北海道工業試驗場(釀造、化學、窯業、染織)

北海道札幌郡琴似村

美術觀覽施設一覽

御所、離宮及御苑拜觀規定

昭和十一年八月卅一日官報

御所、離宮及御苑ハ來ル九月一日ヨリ
左記ニ依リ其拜觀ヲ許可セラル

一、拜觀ノ種類 拜觀ヲ分チテ個人拜觀及團體
拜觀トス

二、拜觀ヲ許可セラル、箇所

(一)個人拜觀ヲ許可セラル、箇所左ノ如シ

(1)京都御所

(2)仙洞御所

(3)二條離宮

(4)桂離宮

(5)修學院離宮

(二)團體拜觀ヲ許可セラル、箇所左ノ如シ

(1)京都御所

(2)二條離宮

- (3) 新宿御苑
- (1) 新賓御苑
- (2) 個人拜觀ヲ許可セラル、者左ノ如シ
- (1) 宮中席次ヲ有スル者
- (2) 華族ノ禮遇ヲ享クル者
- (3) 學位ヲ有スル者
- (4) 帝室技藝員
- (5) 神佛各宗派管長並ニ禪師ヲ宣下セラレタル者及門跡御由緒寺院住職
- (6) 判任官及判任官ノ待遇ヲ享クル者
- (7) 市長、市助役及年俸ヲ受タル市吏員
- (8) 東京市、京都市及大阪市ノ區長及年俸ヲ受タル區吏員
- (9) 町村長及町村助役
- (10) 法令ニ依リ定メラレタル各種議員及委員
- (11) 官公私立學校校長及職員
- (12) 養章受領者
- (13) 多額納稅者
- (14) 宮内大臣ヨリ表彰セラレタル社會事業功勞者
- (15) 文部大臣ヨリ選奨セラレタル學校職員及教育功勞者
- (16) 宮内大臣又ハ主務大臣ヨリ獎勵金又ハ助成金ヲ交付セラレタル社會事業團體ノ代表者
- (17) 左ノ外國人
- (イ) 國賓及其隨伴者
- (ロ) 委任以上級ノ本邦駐劄六等以上ノ帶勳者
- (ニ) 本邦駐劄大使、公使並ニ領事及同館員
- (ホ) 在外本邦名譽領事
- (ヘ) 本邦駐劄大使又ハ公使(大使又ハ公使ヲ經ル暇ナキ場合ハ領事)ノ紹介ヲ經タル者

- (18) 以上ノ者ニ隨伴スル其配偶者、父母及子
- (19) 其他特ニ差支ナシト認ムル者
- (二) 團體拜觀ヲ許可セラル、者左ノ如シ
- (1) 個人拜觀ヲ許可セラル、資格ヲ有スル者
- (2) 官公吏及之ニ準スル者
- (3) 軍隊及在郷軍人
- (4) 官公私立學校學生生徒(小學校兒童ニ在リテハ最上級生ニ限ル)
- (5) 神官神職
- (6) 神佛各宗派教職員
- (7) 公務ノタメ殉職セル者ノ遺族
- (8) 公益事業團體
- (9) 教化修養團體
- (10) 社會事業團體
- (11) 新聞記者團
- (12) 邦人内地視察團
- (13) 外國人本邦視察團
- (14) 其他特ニ差支ナシト認ムル團體
- 四、拜觀手續
- (一) 個人拜觀ヲ爲サントスル者ハ拜觀箇所、拜觀豫定日時、拜觀資格及住所氏名(配偶者、父母又ハ子ヲ同伴スル場合ハ其氏名ヲ連記スルコト)ヲ具シ本邦人ニ在リテハ直接、外國人ニ在リテハ本邦駐劄大使又ハ公使(大使又ハ公使ヲ經ル暇ナキ場合ハ領事)ヲ經内匠頭又ハ内匠寮出張所長ニ願出テ其許可ヲ受ケヘシ
- (二) 團體拜觀ヲ爲サントスルキハ代表者ヨリ拜觀箇所、拜觀豫定日時、拜觀資格、代表者ノ住所氏名及拜觀人名簿ヲ具シ主務省

- 又ハ關係官廳ヲ經内匠頭ニ願出テ其許可ヲ受ケヘシ
- 内匠頭前項ノ許可ヲ與フルトキハ拜觀許可證ヲ經由廳ニ送付ス
- 五、拜觀者ノ服裝 拜觀者ノ服裝ハ左ニ掲グルモノ以上タルヘシ
- (一) 京都御所殿上
- (イ) 男子 洋服 武官 通常禮裝
 - 其他 フロウクコート
 - 相當アル者ハ之ニ
 - 和服 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)
 - (ロ) 女子 洋服 訪問者
 - 和服 紋付羽織(縫紋ニ、足袋)
- (二) 京都御所庭上
- 二條離宮 桂離宮 修學院離宮 新賓御苑
 - (イ) 男子 洋服 背廣、詰襟
 - 和服 羽織、袴、足袋
 - (ロ) 女子 洋服 不敬ニ涉ラサルモノ
 - 和服 羽織、足袋
- 六、拜觀者心得 拜觀者ハ左ノ事項ヲ心得フヘシ
- (1) 拜觀ヲ許可セラレタル日時ニ許可セラレタル拜觀箇所ニ出頭シ係員ニ其旨ヲ告グルコト
 - (2) 係員ノ要求アルトキハ拜觀許可證ヲ提示スルコト
 - (3) 拜觀中拜觀許可證ヲ携帶スルコト
 - (4) 拜觀中ハ係員ノ誘導及指示ニ從フコト
 - (5) 拜觀許可證ヲ携帶セザルトキ、服裝制規ニ反スルトキ又ハ係員ノ要求、誘導又ハ指示ニ從ハサルトキハ係員拜觀ヲ中止セ

關東地方

東京

東京帝室博物館

下谷區上野公園
電下谷 六、一九九〇、
四六〇一

同館の創立は明治五年正院中に博覽會事務局が設置せられたのに始まり、其後同局を博物館と改稱し、内務省の管轄に付したが、同十四年農商務省の主管に移し、博物館事務所(當時博物館と稱す)を上野の舊寛永寺本坊跡に移轉し翌十五年同所に新築の本館を開いた。十九年宮内省の管理となり、二十二年帝國博物館と改められ、歴史、美術、美術工藝、工藝、天產の五部を設け、三十三年六月現稱に

- シムルコトアルヘキコト
- 七、拜觀時限 拜觀時限ハ日曜日、祭日其他拜觀ヲ停止シタル日ヲ除クノ外左ノ如シ
- (一) 個人拜觀
- 自四月一日 午前八時ヨリ午後三時マテ
 - 自七月二十日 自七月廿一日 午前八時ヨリ正午マテ
 - 自八月廿一日 午前八時ヨリ午後三時マテ
 - 自九月一日 午前九時ヨリ午後三時マテ
 - 但シ特ニ日曜日ニテモ許可スルコトアルヘシ
- (二) 團體拜觀
- 自四月一日 午前八時ヨリ正午マテ
 - 自八月廿一日 午前九時ヨリ正午マテ
 - 自九月一日 午前九時ヨリ正午マテ
 - 但シ特ニ午後三時マテ許可スルコトアルヘシ

改められた。天産部は大正十四年文部省に移管された。

陳列本館は震災に大破せるため取除かれ、現在は表慶館だけを列品陳列に充てて居るが、目下、今上陛下の御即位記念の事業として帝室博物館復興費會に依り、復興工事を進めて居る。表慶館は大正天皇の御慶事を奉祝するため東京市民が帝室へ献上したもので明治四十二年の竣工、二階建の洋風石造建築で總坪數七百七十坪、館内を九室に分ち、階上は第一室歴史部、第二、第三室は美術部の繪畫、書蹟、第四室は美術工藝部の髹漆器具類等を陳べ、階下は第五室、美術工藝部の金屬、玉石、甲角、木竹器具、第六室陶磁器、第七室美術部の彫刻、第八、九室、歴史部の考古資料等を陳列する。階上の美術部列品は毎月陳列替を行ひ、又毎年數回特別展覽會を催す。

尙同館構内には公卿九條道秀及益田孝よりそれぞれ寄贈され、昭和十一年四月開館された九條公卿記念館及應舉館の二棟がある。前者はもと東京赤坂福吉町なる九條公卿邸内の前公卿道實の居室で昭和九年道秀が宮内省に先考の記念として獻納したもので、間口七間半、奥行五間半、總坪凡四十四坪、二室、廻廊下附で一間、二の間を通じて床張付、襖、腰障子に狩野の筆致を以て、四季著色樓閣山水圖が描かれてある。これはもと京都御所内九條邸にあつたのを東京邸に應用したもので筆者は山樂山雪と傳へる。後者

美術觀覽施設一覽

はもと舊尾張國海部郡大治村明眼院の書院で寛保二年の建立、明治二十二年二月男爵益田孝により東京御殿山の邸内に移築され、昭和八年宮内省に獻納された。間口八間餘、奥行五間餘、總坪凡四十三坪、書院造、二室、廻廊下附、一の間に床張付、襖、腰障子に墨畫の松梅竹梅松が、二の間に壁張付、襖、腰障子に墨畫蘆雁圖が描かれ、何れも圓山應舉の筆である。尙觀覽は特別の研究者に限り、毎週月水金に許可される。

〔總長〕 杉榮三郎 〔事務官〕 淺野長光
〔鑑査官〕 溝口禎次郎、原田淑人、秋山光夫、後藤守一、石田茂作 〔御用掛〕 都築誠 〔鑑査官補〕 吉野富雄、濱隆一郎、伊藤越、高橋勇、北原大輔、鷹巢豐治、小林剛、矢島恭介、野間清六、高橋直一、尾崎元春、蓮實重康 〔評議員〕 戸二郎、伊東忠太、久保田鼎 〔學藝委員〕 香取秀治郎、藤懸淨也、關保之助、入田整三、奥田誠一

〔觀覽日〕 一月三日より十二月廿五日迄午前九時より午後四時迄、但し季節により多少伸縮す。〔觀覽料〕 大人十錢、小人五錢、廿人以上の團體は大人五錢、小人三錢、教員引率の學生生徒の團體は無料。

帝室博物館官制

大正十年十月七日
皇室令第十四條

第一條 宮内省ニ帝室博物館ヲ置ク

第二條 帝室博物館ハ古今ノ技藝品ヲ蒐集シ公衆ノ觀覽ニ供スル所トス

第三條 帝室博物館ハ之ヲ東京及奈良ニ置ク

第四條 帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク
總長、事務官、鑑査官、鑑査官補、屬、技手

第五條 總長ハ勅任トス各帝室博物館及正倉院ニ關スル事務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第六條 事務官ハ專任二人奏任トス庶務ヲ分掌ス

第七條 鑑査官ハ專任五人奏任トス列品ノ鑑査解說陳列及保管ニ關スル事務ヲ分掌ス

第八條 鑑査官補ハ判任トス鑑査官ヲ助ク

第九條 屬ハ判任トス庶務ニ從事ス

第十條 技手ハ判任トス技術ニ從事ス

第十一條 奈良帝室博物館ニ館長ヲ置ク館長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ館務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝室博物館社寺寶物受託規程

昭和十一年十一月三十日
宮内省令第十二號

第一條 帝室博物館ニ於テ陳列ニ供スル爲社寺寶物ノ寄託ヲ受クルハ本規程ノ定ムル所ニ依ル

第二條 社寺其ノ寶物ヲ帝室博物館ニ寄託セムトスルトキハ寄託期間ヲ定メ書面ヲ以テ

帝室博物館總長又ハ奈良帝室博物館長ニ申出ツヘシ寄託期間ヲ更新セムトスルトキ亦同シ

第三條 帝室博物館寄託ノ目的物ヲ受領シタルトキハ附錄様式ノ受託證書ヲ交付シ返還スルトキハ之ヲ引換フヘシ

受託期間ヲ更新シタルトキハ受託證書ニ其ノ期間ヲ明記シ繼續ノ印ヲ押印ス

第四條 受託物ハ寄託期間内ト雖モ之ヲ返還スルコトアルヘシ

受託物ハ祭典法要修理其ノ他ノ事由ニ因リ寄託者ヨリ願出アリタルトキハ三十日ヲ限リ之ヲ返還スルコトアルヘシ

前項ノ期間ハ修理其ノ他已ムコトヲ得サル事由アルトキハ之ヲ延長スルコトヲ得

第五條 寄託社寺ニ對シテハ毎年十二月ニ社寺交付金ヲ交付ス

第六條 寄託又ハ受託物ノ返還ニ要スル荷造費及運搬費ハ帝室博物館ニ於テ之ヲ負擔ス

第七條 寄託期間六年以上ニ互ル受託物ニ付テハ特別ノ事情アル場合ニ限り寄託者ノ申出ニ依リ帝室博物館ニ於テ其ノ修繕費ノ全部又ハ一部ヲ負擔スルコトアルヘシ

第八條 前條ニ依リ費用ヲ負擔スル受託物ノ修繕ハ帝室博物館内又ハ指定ノ場所ニ於テ之ヲ行フモノトシ帝室博物館總長ハ奈良帝室博物館ニ在リテハ同館長)之ヲ監督ス

前項ノ修繕ノ方法及程度ニ付テハ當該社寺帝室博物館總長(奈良帝室博物館ニ在リテハ同館長)ト協議スヘシ

第九條 受託物ハ帝室博物館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災地變其ノ他不可抗力ニ因リ滅失紛失又ハ毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十條 本令施行ニ關スル細則ハ宮内大臣ノ認可ヲ經テ帝室博物館總長之ヲ定ム

附 則
本令ハ昭和十一年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十八年宮内省達乙第一號ハ之ヲ廢止ス

(附錄様式) 省略

帝室博物館出品規則

第一條 所藏ノ物品ヲ本館ニ出陳セラレシコトヲ望ム者ハ口頭若ハ書面ヲ以テ申出ツヘシ、但シ書面ヲ以テ申出ツルトキハ其ノ品名形状傳來等ヲ詳記シ且略圖ヲ添付スヘシ

第二條 物品ノ出品ヲ承認シタルトキハ物品ト引換ニ預證書ヲ交付スヘシ

第三條 出品ハ本館ニ於テ保管ノ責ニ任ヌ但シ天災其ノ他不可抗力ニ因リ紛失毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 出品ノ輸送費用ハ所有者ニ於テ支辨スヘシ

第五條 出品ヲ模寫模造若ハ攝影セントコトヲ請フ者アルトキハ所有者ノ承諾ヲ得タル後之ヲ許可スヘシ但シ各種列品集合全體ノ形狀ヲ撮影スルハ此ノ限ニアラス

第六條 出品ニシテ當時手入ヲ要スルモノハ本館ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ修繕ハ此ノ限ニアラス

第七條 出品ノ預期間ハ三箇年トス預期間ノ計算法ハ現品ノ領收カ六月以前ナルトキハ其ノ年ノ一月ヨリ起算シ七月以後ナルトキハ其ノ年ノ七月ヨリ起算ス

第八條 預期間満了シタルトキハ書面ヲ以テ之ヲ所有者ニ通知ス 所有者前項ノ通知ヲ受領シタルトキハ速ニ物品ノ引渡ヲ受クヘシ

第九條 出陳ヲ繼續スル場合ニ於テハ本證書ノ裏面ニ繼續ノ印ヲ押シ期限ヲ延長スルモノトス

第十條 出品預期間内ト雖所有者ノ希望ニ因リ物品ヲ返付スルコトアルヘシ

第十一條 返付スヘキ物品ハ執務時間中何時ニテモ預證書ト引換ニ之ヲ引渡スヘシ

引渡ヲ受ケタルトキハ本人又ハ代理人ハ證書ノ裏面ニ受領ノ旨ヲ記載シ記名捺印スヘシ

第十二條 出品預期間満了ノ場合ニ於テ所有者ノ所在不明ナルトキハ官報及三種以上ノ新聞紙ニ五日間之ヲ廣告スヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ末日ニ於テ通知ヲ受ケタルモノト看做ス

預期間満了ノ通知ヲ受ケタル日より三ヶ年ヲ經過スルモ引渡ヲ申出サルトキハ預證書ハ無効トシ現品ハ本館ニ於テ隨意ニ之ヲ處分ス

第十三條 出品預證書ヲ紛失若ハ毀損シタルトキハ速ニ本館ニ届出證書ノ再交付若ハ引換ヲ請求スヘシ但シ紛失シタルトキハ官報又ハ新聞紙ニ廣告シ三箇月ヲ經過スルモ發見セザル場合ニ於テ再ビ證書ヲ交付スヘシ

第十四條 紛失若ハ毀損ニヨリ再ビ預證書ヲ交付シ若ハ引換ヲ爲ストキハ其ノ理由ヲ證書ニ摘記ス

大倉集古館

赤坂區英町三
電赤坂七四〇

財團法人大倉集古館は大正六年の創設に係リ其蒐集品、建物、土地、維持資金等悉く故大倉喜八郎男がその授爵記念として寄附したものである。公開當時の出陳物は一、諸佛教國民の手に成れる各種の佛教式彫像及支那の道教式彫像、二、我國の蒔絵品、三、支那の堆朱器、四、支那の壺樽陶俑並に石佛及古銅器等で、就中支那堆朱器の蒐集は著名なるものであつたが、往年の大震災は如上の蒐集の殆ど全部を烏有に歸せしめた。大正十五

年再び大倉男の寄附に依リ現在の陳列館を起工、僅かに焼失を免れた數十點の藏品を基礎に多數の新藏品を加へて昭和三年八月開館した。現在の出陳物の主なるものは支那周代より唐に至る壺樽、墓誌石、瓦當、畫像石、西藏の佛像類及我國の蒔絵、其他の工藝品、古書畫の類である。本館は鐵筋コンクリート支那風の三階建にして延坪二百五十二坪。

〔理事〕男爵阪谷芳郎、男爵大倉喜七郎、大倉余馬、〔館長〕齋藤忠郎
〔觀覽日〕月曜日及大祭日並年始年末を除く毎日。觀覽無料

寛永寺靈屋

下谷區上野公園

第一靈屋と第二靈屋とより成り、第一靈屋は四代將軍家綱を祀リ、本殿は天和元年の創建なるも元祿十一年焼失し、現在の建物はその翌年再建されたもの。第二靈屋は五代將軍綱吉を祀リ、本殿は寶永十一年の建立で何れも國寶建造物に指定されてゐる。

郷土資料陳列所

四谷區明治神宮外苑
ケ丘口日本青年館内
電青山四二六〇一四

昭和九年創立。郷土研究に資する爲の各種の參考資料―民家、染織、履物、燈火、山袴、漁具等を陳列する。毎日開館

觀覽無料。

〔職員〕村上清文、大西伍一、加藤一郎

國學院大學國史研究室 考古學資料室

澁谷區澁谷町若木

日本考古學並土俗研究の參考資料を希望者に觀覽せしめる。參觀は豫め申込むこと。

書道博物館

下谷區上根岸町一二五
中村不折邸内

本館の設立趣意は「東洋文字ヲ識セル碑本法帖經卷名家ノ眞蹟及書籍瓦甌瓦當彫像古碑瓦器璽印鏡鑑兵器龜甲獸骨殷周時代ノ銅器秦漢ヨリ明代ニ至ル諸器硯盤等ノ文房具小錢等支那三千年間ノ物ト本朝奈良朝ヨリ徳川時代ニ至ル諸器ヲ蒐集シ此ヲ各種類ニ分類シ年代順ニ整理シ以テ東洋文字ノ研究ニ資スル」にあり、陳列品は何れも中村不折が過去四十年に互リ蒐集せるもの。昭和十一年一月財團法人設立認可。同年十一月開館式を舉行した。

〔觀覽日〕毎日〔觀覽料〕十錢、列品目錄二十錢

仙湖記念西澤人形玩具研究所

板橋區上板橋町二丁目(東上線武藏常盤臺文化住宅地内)

昭和十一年十一月開所。西澤笛畝が先考西澤仙湖の二十三回忌記念に設立せる

もので、父子の蒐集に係る古來の人物玩具に關する文獻並參考品を陳列する。紹介ある者に限り入館を許す。同館に關する問い合わせは牛込區津久土町三〇、西澤宛、電話牛込一一八一

早大演劇博物館

澁橋區戸塚町早稻田大學構内、電牛込五一四

故坪内逍遙博士の古稀の祝賀とシェークスピア全集の翻譯完成とを記念する爲設立されたもので、坪内博士を始め各方面の寄附に依り昭和三年十月開館した。同館の事業は東西古今の演劇に關する參考資料、文獻等を蒐集陳列して一般の觀覽に供する一方、劇に關する圖書館をも兼ね、又研究室、小舞臺等をも設けて演劇の調査研究を行ひ、演劇文化の向上發展に資するを目的とする。同館は早稻田大學の管理に屬するも公益機關として一般に無料で公開されて居る。

〔館長〕河竹繁俊（觀覽日）毎月曜及祭日の翌日を除く外毎日、午前九時より午後四時迄

増上寺

芝區芝公園地内

源譽上人の時徳川家の菩提所となつた名利で多數の什寶を所藏して毎年九月一般の觀覽に供する。其の建築のみは毎日午前八時より午後四時迄觀覽し得る。

〔拜觀料〕南北靈屋各三十錢、學生及團

美術觀覽施設一覽

體は半額

東京美術學校陳列館

下谷區上野公園東京美術學校内

同校は參考品を豊富に收藏するを以て陳列館（本館、別館及正木記念館）にその一部を常置陳列して公衆の參觀に供する。休暇中及日曜、祝祭日を除く外毎日午前九時より午後四時迄公開。本館及正木記念館共階下は彫刻、工藝品類を常置陳列し、不定期に少部分の陳列替を行ふ。本館階上は繪畫陳列室で常時は西洋畫名作模寫を陳列し、春秋二季に限つて日本畫の特別陳列を行つて居る。正木記念館階上は日本室であつて常置陳列は行つてゐないが特別陳列の際公開することがある。尙別館及同校々舎内庭には西洋彫刻の名作複製品を陳列して居る。何れも觀覽無料、同校職員生徒以外は住所姓名を記載し入場を許される。

東京美術學校文庫

下谷區上野公園東京美術學校内
電下谷八〇二〇、八〇二一

文庫の觀覽施設は同校教職員並に生徒の爲に設けられたものであるから一般には公開されて居ない。但し特殊の研究に従事するもので同校教職員の紹介ある場合願書を校長宛提出すれば觀覽を許可される。開館時間は日曜、祝祭日を除くの外毎日午前八時（冬期は九時）より午後六時迄、觀覽を許されるのは圖書模本の類である。

東洋文庫

本郷區駒込上富士前町一四七
電小石川二二一、七五八一

大正六年九月岩崎久彌男が前中華民國總統府顧問ジョーヂ・アーネスト・モリソンより購入したモリソン文庫を核心とし東洋に關する和、漢、洋の圖書の蒐集を行つたもので、その後現在の場所に文庫を新築し、大正十三年財團法人組織とし東洋文庫と改稱した。同文庫一切の費用は岩崎男の寄附によるものである。事業として、東洋に關する圖書の蒐集をなし、學者の觀覽に供すると共に、邦文、歐文、漢文を以て東洋學上有益なる論著の出版、史料となる稀籍の複製等をなし、又隨時講演會、展覽會を開催し、學の進歩普及に努める。（觀覽日）日曜祭日を除き、毎日午前九時十五分より午後四時迄

日本民藝館

目黒區駒場八六一
電青山二二九九

民藝品の蒐集並常置展覧を行ひ、地方民藝の指導と開發に當るを目的とする。蒐集の事業は大正十五年に始められたが、昭和十一年十月大原孫三郎の寄附に

より建物竣成し、一般公開となつた。

〔館長〕柳宗悅〔理事〕河井寬次郎、濱田庄司、山本爲三郎、武内潔眞
（觀覽日）毎日、但し毎月曜日、祭日及夏期（八月十六日―廿一日）及冬期（十二月廿六日―一月十日）は休館、（觀覽料）一人三十錢、學生十五錢、團體廿人以上一人十錢

美術研究所

下谷區上野公園
電下谷三四八七

本所はその事業の一つとして黒田記念室に故子爵黒田清輝の遺作を陳列して定期公開し、又本所の蒐集に係る美術研究資料を研究者の觀覽に供する。遺作は主として黒田家の寄贈にかゝり、之に他から寄託のものを併せ、油繪一二二點、素描一六八點、畫稿七五點、スケッチアップク二〇冊である。平常は約五十點を陳べ、屢々陳列換を行つて居る。觀覽日は毎週木曜日午後一時より四時迄。

次に觀覽に供する研究資料は東西古今に互る美術品の寫眞、複製品、模本、圖書等で、觀覽希望者は本所に於て適當と認むる者の紹介あるを要す。開覽時間は午前九時半より正午迄、及午後一時より三時半迄とす。（七月中は午前八時半より正午迄）但し日曜日、土曜日、祝祭日、夏期（八月一日―廿一日）、年末年始（十二月廿五日―一月十日）を除く。
〔職員〕（便覽三頁参照）

蓬左文庫

豊島區目白町四ノ四二
電大塚二二七

昭和十年十一月開館。本文庫は徳川美術館、生物學研究所と共に徳川義親侯の創設に係り、財団法人尾張徳川黎明會の經營に依る。所蔵の書籍は尾州家が三百年間に互つて儲藏せる圖書、記録類約七萬冊を中心とし、加ふるに近時の蒐集謄寫に係る舊尾張藩資料及國史、及び經濟史、林政史學關係の刊行物並に徳川生物學研究所圖書等約二萬冊を以てする。尙文庫に歴史研究所を附設し徳川義親侯を中心として徳川林政史の研究を進めつゝあり、更に同文庫は蓬左文庫叢刊と題して文庫中に所藏する稀書珍籍の複製頒布をも行つてゐる。

(觀覽日) 一月四日―七月十日及九月十一日―十二月廿八日(自午前九時至午後四時)、七月十一日―九月十日(自午前八時至正午)、日曜及祝祭日休館

明治神宮外苑聖徳記念繪畫館

四谷區六番町明治神宮外苑

大正四年明治神宮御造營に際して廣く國民の獻金を募り外苑及び同繪畫館を建設し、之を神宮に獻納せんとする計畫が成り、明治神宮奉賛會に依つて大正十五年建立。聖徳を讃仰するの資とする爲、各方面より奉納せる明治天皇、昭憲皇太后御一代の主要なる御事蹟を表はした繪畫(日本畫四十枚、洋畫四十枚)を奉掲する。

(觀覽日) 毎日、午前九時より午後四時まで、但十二月一日より翌年二月末日迄は午後三時迄。(觀覽料) 大人十錢、小兒五錢

明治神宮寶物殿

代々木明治神宮内苑

大正十年十一月開館。明治天皇、昭憲皇太后の最も御關係深き御物を永遠に保存し、國民一般に拜觀を許して聖徳を偲び奉らしめんとする。建物は優美なる校倉風大床造にして和洋折衷を試みたるもの、總建坪五百五十坪、明治天皇御物五十八點、昭憲皇太后御物二十三點。(拜觀日) 四月一日より九月卅日(午前八時―午後五時)、十月一日より三月卅一日(午前九時―午後四時)。(拜觀料) 大人十錢、小人五錢

地方

鹿島神宮寶物陳列館

茨城縣鹿島郡鹿島町鹿島神宮

昭和二年九月開館。甲冑、刀劍、彫刻馬具、古墳發掘品等二百六十餘點を出陳公開す。

(觀覽料) 大人十五錢、小人五錢

金澤文庫

神奈川縣久良岐郡金澤町稱名寺境内

北條實時の創立で後年その藏書の大半を搬出せられ、世上に散佚したのも多いが、今尙和漢書一萬卷餘を藏して居る。明治三十年伊藤博文公は金澤文庫を復興し、又帝國憲法草案に使用した參考資料三百二十餘冊を寄贈したが、その建物は現存しない。現在の文庫は其の所藏の古文書、典籍、什寶を保存して一般公衆に縱覽せしめ、兼ねて中世文化研究所たらしむる爲、今上天皇御大典記念事業の一つとして、大橋新太郎の寄附五萬圓と併せて十萬圓を以て昭和五と共に建設されたもので、昭和五年八月落成式を舉げて公開された。

〔文庫長〕關靖〔司書〕木谷孝
〔開庫時間〕十二月廿五日より翌年一月七日迄を除き毎日、夏期午前八時より午後五時迄、冬期午前九時より午後四時迄
(觀覽料) 大人十錢、小人五錢

鎌倉國寶館

神奈川縣鎌倉町鶴岡八幡宮境内

往年の大震災の經驗に鑑み、鎌倉近在の社寺の國寶什寶を一箇所に纏めてその保存を計らうとの議が起り且つ一般遊覽者の便にも資するため昭和三年鎌倉町の事業として同館を建設した。建物は鐵筋コンクリートで外部を校倉式とし總坪數百八十坪、社寺所藏の國寶、什寶及個人の委託品たる彫刻、繪畫、工藝品、古文書、武具等約五百點を展觀して居る。

〔館長〕清川來吉〔主事〕相澤善三

五〇

(觀覽日) 一月四日より十二月廿七日迄。

(觀覽料) 大人廿錢、小人五錢、學生軍人十錢、その他團體(廿人以上) 割引をなす。

清澄寺寶庫

千葉縣安房郡天津町清澄

大正十一年開設。當山に關係ある先師古徳の遺品並美術考古資料計七十餘點を公開す。毎日開館、大人廿錢、小人十錢。

〔館主〕玉瀧義秀

日光東照宮寶物館

栃木縣日光町大字日光山内浩養園

大正四年の東照宮三百年祭執行の記念に建立す。入母屋切妻寶形の三棟三棟より成り總建坪二百八十餘坪。東照宮、二荒山神社、輪王寺藏の寶物類(主として江戸時代の工藝品) 計三百二十點を陳列す。

(觀覽日) 四月一日より九月末日迄(午前七時―午後五時)、十月一日より三月末日迄(午前八時―午後五時)

箱根神社寶物館

神奈川縣足柄下郡元箱根村

大正十二年六月開館。古刀、古文書、木俵、佛畫等歴史資料四十點を蒐藏す。毎日開館。大人十錢、小人五錢。

東北地方

上杉神社 禊照殿

米澤市南端町上杉神社

大正三年の創立に係り、蒐集品は扁額、甲冑、刀剣、武具、佛畫、古文書、陶磁器、經卷等約七百點にして國寶、貴重品が尠くない。開館毎日。大人十錢、小人五錢。

掬粹巧藝館

山形縣東置賜郡小松町大字中小松

昭和六年開設。學術參考資料として古陶磁器其他美術工藝品約三百點を常時陳列公開する。

〔理事長〕井上庄七

北村郷土博物館

宮城縣桃生郡北村小學校

昭和四年開設。郷土資料、美術品等三百點を陳列す。

北見郷土館

北海道網走郡網走町

昭和十一年開館。社団法人北見教育會の經營に依る。建物はコンクリート造二階建て延坪數百二十餘坪。綜合的な郷土博物館で網走支廳管内に於ける考古學上の物件、拓殖、産業及教育に關する變遷發達の狀況を知る爲の參考資料を陳列す。就中アイヌ人の土俗工藝品約千點、

美術觀覽施設一覽

石器時代遺物三千餘點を陳列せるため一般に「アイヌ博物館」として知られて居る。

〔館長〕岡田佐市〔理事〕橋口謙敏〔主事〕米村喜男衛

中尊寺寶物館

岩手縣西磐井郡平泉村

同寺には藤原時代の佛像、經卷及優れた美術工藝品多く、是等は藤原末期の建物たる金色堂、經藏の外、辨才天堂、本坊、寶物館に藏せられ、寶物館の所藏點數二千九百餘である。

〔觀覽日〕毎日、午前八時より午後四時迄。〔觀覽料〕寶物館その他を併せて六十錢。

山形縣郷土博物館

山形市香澄町木ノ實
小路山形縣教育會内

昭和二年創立。郷土史、博物研究資料及美術工藝品等約一千三百點を陳列す。

米澤郷土館

山形郡米澤市屋代町

昭和五年創立。歴史考古資料一千七百點を陳列す。

中部地方

愛宕下美術館

靜岡縣小笠郡横須賀町、電一四五

昭和六年の創立にして財團法人組織。繪畫考古資料五百八十餘點を陳列す。毎日開館。觀覽無料。

〔館長〕三枝基

上田市徴古館

上田市公園内

舊上田城櫓内に設けらる。書畫、古器物、文書等の郷土資料を蒐集す。

〔館長〕〔市長〕成澤伍一郎〔副館長〕柴崎新一

〔觀覽日〕毎月曜日を除き毎日。〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢

大瀧神社寶庫

福井縣今立郡岡本村大瀧

昭和五年寶庫新築。同社に關係ある古文書類及古軸物、古器等五百點を蒐集す。

往生寺寶物館

長野市大字西長野

明治十九年創立。佛像、佛畫、古文書佛具類等を陳列す。毎日開館。

岐阜縣郷土館

岐阜市美江寺町二六
電一三四〇

岐阜縣教育會の經營による。縣内の地歴、博物標本及發掘品等二千數百點を陳列する。開館毎日。觀覽無料。

〔主事〕太田成知

久能山東照宮寶物館

靜岡市久能山

大正四年東照宮三百年祭執行の記念に建設せられ、陳列品は家康の遺品、徳川歴代將軍の甲冑武具類、古文書等の歴史參考資料三百八十二點。年中無休開館。

諏訪神社寶物館

長野縣諏訪郡中洲村
神宮寺電神宮寺一九

大正八年創立。諏訪神社（上社）の境内にあり。當社の寶物二百餘點を陳列す。〔監理者〕宮司志賀正光

大勸進寶物館

長野市大字西長野

大勸進は善光寺内にあり、天台宗に屬す。寶物館は明治四十一年の創設で、御宸翰、御物、古代の樂器類、佛像、佛畫、古文書等約百五十點を蒐集す。毎日開館。〔觀覽料〕五錢

大本願寶物館

長野市大字元善町五〇〇

善光寺内にあり、淨土宗に屬す。寶物館は皇室に關する御遺品、古文書、寫經等を蒐集す。毎日開館。〔觀覽料〕五錢

徳川美術館

名古屋市中區徳川町二ノ
二七ノ一、電東六六三六

昭和十年十一月開館。本美術館は蓬左

文庫及生物學研究所と共に侯爵徳川義親の寄附に依る財団法人尾張徳川黎明會の經營に係り、古來徳川家に傳來する數多の貴重なる什寶美術品を私有の域を脱し世の美術家、學者の研究參考に資するを以て目的とする。同館は昭和七年十一月起工され同年四月竣工。構造は鐵骨鐵筋混凝土造で本邦城郭建築の様式を加味したもの。蒐藏品は繪畫、古筆、工藝品其他名器刀劍等約七千餘點で、陳列替に依り逐次展觀する。尙臨時社寺私人の所藏に係る有益なる參考品を受託陳列する。

〔主任〕近藤眞太郎
〔觀覽日〕一月六日より十二月廿五日迄。月曜日、祝祭日を除く。〔觀覽料〕十錢、五十人以上は一入五錢。四月及十月開催の特別陳列日は料金一人三十錢とす。

〔主任〕近藤眞太郎
〔觀覽日〕一月六日より十二月廿五日迄。月曜日、祝祭日を除く。〔觀覽料〕十錢、五十人以上は一入五錢。四月及十月開催の特別陳列日は料金一人三十錢とす。

名古屋城

〔管理〕名古屋市政府土木部公園課
電東八二一一、八二二一

もと離宮なりしを昭和五年十二月宮内省より名古屋市中に下賜せられ、同市の所管として御殿、天守閣及各櫓門の拜觀を許可する。いづれも慶長年間の築造で、御殿は桃山及江戸初期の最も華麗な書院造の實例を示し、玄關、表書院、對面所、上洛殿、黒木書院、上御膳所、梅の間等は徳川期の換繪、壁貼付繪を以て名

高い。

〔拜觀日〕正門の開閉時刻は四月—十月（午前八時半—午後四時）、十一月—三月（午前八時半—午後三時）で御殿の拜觀は上記の開閉時刻前三十分迄とす。拜觀及參入は十二月廿九日より同月末日迄停止。又御殿の拜觀に限り次の場合之を停止す。一、梅雨期、二、雨雪、強風、其他天候不良の時、三、其他管理上必要ある時。

〔拜觀料〕御殿拜觀料（天守閣拜觀を含む）一人一圓、天守閣拜觀料、大人三十錢、小人十五錢。天守閣拜觀團體割引、三十人以上—大人一人に付二十五錢、小人十二錢、百人以上—大人一人に付二十錢、小人十錢、教員引率の中等學生團體は十五人以上一人に付二十錢、百人以上十五錢。

新潟郷土博物館

新潟市一番堀通町
電三三四二

新潟縣主催の郷土教育研究會並に新潟縣教育會の決議に基いて昭和九年創立、開館した。古墳發掘品、經塚出土品、古畫、古文書及産業關係等郷土研究の資料三千餘點を陳列公開する。

〔觀覽日〕毎月末日及十二月廿五日より翌年一月五日迄を除き毎日開館。〔觀覽料〕大人五錢、小人二錢、學生生徒三錢。

白山神社寶物館

福井縣大野郡平泉寺村平泉寺

大正十五年創立。白山神社、平泉寺の所藏に係る古器物、古軸物、古文書等百六十點餘を出陳公開して居る。

〔館主〕社司平泉正男（觀覽料）大人十錢、小人、學生、軍人、團體（五十人以上）は五錢。

松本記念館

松本市本町一丁目九

日露戰役記念品、博物、地歴標本、考古學參考品、圖書等數萬點を蒐藏す。毎日開館、觀覽無料。

武山閣

靜岡縣賀茂郡下田町

昭和六年創立。美術品千二百點を展覽す。〔館主〕清水歸一

三島神社寶物館

靜岡縣田方郡三島町

昭和五年開設。歴史、考古資料約二百點を蒐藏す。

身延山寶物館

山梨縣身延山久遠寺内

大正十五年四月開館。日蓮宗の本山に關係ある書畫、古器物等の什寶百餘點を公開し、年に一回又は二回陳列替をなす。

臨濟寺寶物館

靜岡市大岩町

天文五年今川氏輝（臨濟寺殿）の開基にかゝる古利。歴史資料、什寶等數百點を蒐藏す。

〔館長〕松田一道（觀覽料）二十錢

近畿地方

京都

恩賜京都博物館

東山區七條通大和
路東入、電祇園五四

明治廿二年五月宮内省達を以て圖書寮附屬博物館が廢止され、帝國博物館、帝國奈良博物館と同時に帝國京都博物館が設置された。廿五年四月本館の工事に着手し廿八年竣工、三十年五月開館した。卅三年官制の改革により京都帝室博物館と改稱。大正十三年一月、今上陛下の御成婚に際し思召を以て宮内省より京都市に下賜せられ、同年二月一日より恩賜京都博物館と改稱し、京都市の經營に屬することゝなつた。

本館は京都其他各地社寺の國寶什寶及び個人所藏の優品を蒐集して之を受託陳列し、一般の觀覽に供して居る。陳列品を大別して歴史部、美術部、美術工藝部の三部とし、更に之を細分して歴史部

(一)、圖書、二、古代遺品、三、祭祀宗教關係品、四、武器、五、儀式風俗關係品、六、貨幣、度量衡、信印、美術部(一)、繪畫、二、書蹟、三、彫刻、四、建築、美術工藝部(一)、金屬品、二、窯製器、三、漆漆品、四、織繡品、五、玉石甲角竹木品、六、紙革品、七、寫真並圖繪)とす。現在の列品點數三千二百三十三點。繪畫、文書、書蹟は毎月陳列替を行ひ、又年に數度特別展覽會及夏季講演會等を開催する。

本館は佛國ドリツク式建築にして建坪一千二百一坪、内列品館坪數九百十二坪餘。館内は十六の陳列室に區分され、他に中央室あり、臨時陳列又は講演會場に充てられて居る。

〔館長〕和田不二男〔顧問〕關係之助、濱田耕作〔學藝委員〕猪熊淺磨、小山源治〔囑託〕水町和三郎、明石國助〔鑑査員〕加藤修、松木聰二郎、土居次義、神田松之助

〔觀覽日〕一月五日より十二月廿五日迄。一月、二月、三月、十月、十一月、十二月(午前九時—午後四時)、四月、九月(午前八時—午後五時)、五月、六月、七月、八月(午前八時—午後五時半)(觀覽料)大人十錢、小人五錢、(特別觀覽料)一人五十錢。團體(二十人以上)大人一人五錢、小人三錢

太秦廣隆寺靈寶殿

右京區太秦廣隆寺内

美術觀覽施設一覽

大正十一年、聖德太子一千三百年遠忌の記念に創設す。建物は鐵筋コンクリート造にして外觀は古代校倉の模様に倣つてゐる。建坪八十七坪。廣隆寺は聖德太子の御創建に係る名刹で本殿收蔵の佛像、佛畫、古文書等には古來の傑作名品多數に上り國寶も尠くない。

北野神社靈寶殿

上京區北野官幣中社北野神社

本殿は昭和三年、當社千二十五年祭執行記念として北野會の建設奉納せるもの。多數の宸翰、各種の北野縁起繪卷、古寫日本書紀等の貴重なる古畫、珍籍、古文書、刀劍及器具の類が出陳されて居る。

〔觀覽日〕一月一日より十二月廿五日迄略毎日開館。(觀覽料)十錢

京大文學部考古學陳列室

左京區吉田町京都帝國大學構内

大正三年開設。日本、朝鮮、滿洲、支那等の考古學研究資料及埃及、希臘、羅馬の遺物等合せて一萬餘點の標本を陳列す。平素は一般には公開しないが、學者研究者には無料觀覽を許して居る。

〔主任〕濱田耕作〔係員〕梅原末治、小林行雄

高臺寺

東山區下河原町

慶長十年豐臣秀吉の室高臺院が亡夫追

福のため創建した寺で現存の開山堂、靈屋、表門等は桃山式の華麗な建築で國寶。寺寶中には佛像、佛畫、古文書等の逸品が尠くない。

三寶院

伏見區醍醐
電 醍醐二

永久三年時の醍醐寺座主三寶院勝覺の創立した寺で醍醐寺塔頭の院。堂宇は慶長年間の建立で玄關、葵の間、秋草の間、勅使の間、表宸殿、奥宸殿、純淨觀、護摩堂等國寶である。同院の寶物は現在醍醐寺寶聚院に收蔵されてゐる。

(拜觀料)二十錢

青蓮院

東山區粟田口三條坊町

天台宗の名刹で俗に粟田御所と稱す。堂宇は明治以後の再建であるが、宸殿の襖繪及壁貼附繪は國寶に指定され桃山風の金碧畫で、京狩野派の作と推される。尙同寺は名畫、古文書等多數の寶物を所藏する。

(拜觀日)冬期午前八時—午後四時。夏期午前七時—午後五時。(拜觀料)十錢

大禮記念京都美術館

左京區岡崎公園
電 上 六七〇〇

本館は將來近代美術の常設陳列館たらしむ可く計畫されて居るが、目下は所藏

品少なきたため折々藏品の展觀を行ふのみで、主として展覽會場使用されて居る。(便覽一〇頁參照)

醍醐寺寶聚院

伏見區醍醐

醍醐天皇一千年御忌奉讃會の記念事業として昭和六年三月以來工事中の醍醐寺靈寶館「寶聚院」は昭和九年末に竣工、十年四月十七日盛大な落慶法要を厳修した。同館は陳列館二棟(二百三十五坪)、寶庫二階建二棟(八十坪)、寶庫整理室一棟(十坪)、研究室一棟(百十三坪)等より成り、構造は鐵筋コンクリート造で耐震、耐火、通風等に最善の科學的諸設備を凝した新建築であるが、外觀は入母屋造り、本瓦葺の秀麗なる日本住宅風の建築である。

同館は今後醍醐寺所藏の幾多の國寶、重要美術品、古文書等を收蔵保存すると共に研究室を解放して學者の調査研究に資し又定期の展觀を開催する。

(觀覽日)公開は春秋二期即ち三月下旬より五月下旬迄、及十、十一月の二箇月と定め、開館中は月一回の陳列換を行ふ。

智積院

東山區東瓦町

新義眞言宗智山派の總本山。もと豐臣秀吉がその子棄丸のために建立した祥雲寺で、徳川氏の世となり紀州根來の智積院の名を移して再興したと傳へる。大書

院及宸殿に描かれた襖繪は桃山期の代表的名品として名高く又多數の古文書、書畫等の寺寶を保存する。拜觀は毎日。
(拜觀料)十錢

天 球 院

右京區花園妙心寺町

妙心寺の塔頭。池田信輝の女天球院の菩提所として寛永七年から十二年の間に池田光政が建立した寺で、江戸時代方丈造の一標本である。同院は山樂筆と傳へる桃山式の華麗な襖繪及杉戸繪を存し、本堂と共に國寶に指定されて居る。

東山慈照寺 (通稱銀閣寺)

左京區銀閣寺町
電上四〇三三

足利義政が文明十五年造營せる別業で後土御門天皇より東山殿なる名を賜つた。義政の歿後遺命により禪刹となしその諡號により慈照寺と號した。屢々兵火に遭つたが、幸にして當初の銀閣と東求堂及その林泉を残して居る。

(拜觀日)毎日。(拜觀料)寶物、庭園拜觀、普通二十錢、特別三十錢。

豐國神社寶物殿

東山區茶屋町

豐國神社境内にあり。主なる寶物としては狩野内膳筆の豐國祭六曲屏風、無銘傳栗田口吉光作太刀等の國寶をはじめ豊臣家關係品を蒐藏す。

南 禪 寺

左京區南禪寺福地町
電上三六五

臨濟宗南禪寺派の大本山。開山は龜山上皇の御歸依篤かりし大明國師で、上皇は離宮を改めて禪刹となし給ひ、二世南院國師は勅を奉じて諸堂を建立したが、應仁の兵火に遭ひ一山盡く燒失した。現存の勅使門、山門、清涼殿、小方丈等はいづれも慶長以後の建立、國寶に指定されて居る。

仁和寺靈寶館

右京區御室大内町

昭和二年四月開館。古書畫、彫刻工藝品、古文書等の寺寶中には國寶も多く屢々陳列替して觀覽に供する。

〔館長〕麻生靈光 (觀覽日)毎日、午前八時より午後四時迄。(觀覽料)十錢

平 等 院

京都府宇治町平等院管理
淨土院、電宇治一四二

貞觀年中源融の別業で、後、藤原道長の有に歸し、その子賴道は永承七年別業を改めて寺とした。當時七堂伽藍の完備せるを傳へるが、屢々の兵火に燒失し、鳳凰堂は當時の唯一の遺構で、藤原期美術の粹を集めた建築として名高い。其他釣殿、養林書院等國寶に指定されて居る。又寶物殿には藤原、鎌倉期の佛像、

その他古書、古器物類を陳列する。

(拜觀料)一人二十錢。普通團體一人十錢、中學生團體一人五錢。

妙 法 院

東山區大佛妙法院前町

天台宗の名刹で近世まで世々皇族方が入山せられるを例とした。大書院、玄關及庫裡は桃山より江戸初期にかけての優れた建築で國寶。又龍華藏には豐公の遺品を陳列する。

(拜觀日)毎日午前七時より午後四時迄

(拜觀料)大人十錢、小人五錢。普通團體は五十人以上半額、中等學生は三十人以上半額、小學生は三十人以上四分の一に割引。

有 隣 館

關崎圓勝寺

大正十五年開館。藤井善助の寄附による財團法人藤井濟成會の經營に係り、藤井善助の支那古美術を主とする多年の蒐集品、即ち商、周の古銅器より清朝盛期に至る美術工藝品、法書、名畫並歴史考古學資料等を展覧する。

(觀覽日)毎月第一、第三日曜日(正午午後四時)に限り公開。但し一月、八月は休館。觀覽無料。内外賓團體の見學等相當な紹介者ある場合は豫め時日を打合せの上臨時開館することあり。

養 源 院

東山區大和路七條
東入三十三間堂前
電祇園三八八七

通稱桃山御殿血天井。秀吉の側室淀君が父淺井長政(法名養源院)の追福の爲に創建せる寺で、其後火災で燒失したが、徳川秀忠夫人が伏見城の舊材を用ひて再建し、爾來徳川家の菩提所となつた。その天井は血天井として名高い。

(拜觀日)毎日午前七時より午後四時迄。(拜觀料)十錢。五十人以上の團體は割引。

蓮 華 王 院

東山區大佛妙法院前町

俗稱三十三間堂。妙法院に屬す。長寛二年後白河法皇が平重盛に勅して創建され、内に觀音像一千體及二十八部衆を安置したが建長元年炎上した。現存の本堂は文永三年の再建で、南大門と共に國寶である。又本尊及二十八部衆は舊のものに燒失せるにより建長三年、湛慶、康圓、康清等が後深草天皇の勅を奉じて改めて製作したもので鎌倉中期の代表作、何れも國寶である。現在二十八部衆の優れたものを選び京都博物館に出陳してある。

(拜觀日)毎日。(拜觀料)大人廿錢、小人十錢、團體は割引す。

鹿苑寺

上京區金閣寺町一
電西陣一三

通稱金閣寺。應永年間足利義滿の造營せる北山御殿の遺構で三層樓金閣及庭園は何れも國寶、史蹟に指定されてゐる。

〔住職〕村上慈海〔執事〕山本登照、大原一彦〔拜觀日〕毎日〔拜觀料〕普通廿錢、特別五十錢、學生團體半額

大阪

大阪市立美術館

天王寺區茶臼山町天王寺公園内
電六一〇〇、六一〇一

昭和十一年五月一日竣工。同館は古美術博物館としての事業を行ひ、併せて一般美術展の會場としての働きを爲すが、(便覽二〇八頁參照)同年九月十一日より古美術品の常設美術館として正式に開館した。陳列品は社寺其他の寄託品、文部省の出陳命令に依るもの等で、繪畫、彫刻、古銅器、古鏡、陶瓷器、考古品等である。

大阪城天守閣郷土歴史館

東區馬場町

昭和四年二月大阪市の御大典記念事業として大阪城公園を新設し同時に天守閣の復興に着手、同六年施設成り一般に公開した。天守閣内を郷土歴史館に充て、

美術觀覽施設一覽

豊公記念物竝に大阪に關係した郷土研究資料を蒐集陳列して居る。

〔觀覽日〕毎日〔觀覽料〕十三歳以上廿錢、十三歳未満十錢

觀心寺寶庫

南河内郡川上村寺元

觀心寺は大寶年間の創建と傳へ、はじめ雲心寺と稱したが後弘法大師これを再興して觀心寺と改めたと傳へる。寶庫は明治卅二年の開設に係り、國寶の佛像、彫刻をはじめ、其他寫經、古文書が多數藏せられて居る。

〔觀覽日〕毎日、午前八時より午後六時まで。〔觀覽料〕十錢

奈良

奈良帝室博物館

奈良市奈良御料地

明治二十二年奈良帝國博物館設置せられ同二十八年四月開館。三十三年官制の改革と共に現稱に改められた。陳列品は主に奈良及近縣の古社寺所有の國寶にして政府の命令出陳に依るもの、及社寺、個人その他よりの寄託品等にして、概して佛像、佛畫が多く、殊に彫刻は上古より鎌倉期に至る優秀品が多數陳列されて居る。出陳物を歴史品、美術品、美術工藝品の三種類に分ち、彫刻繪畫等の美術品は各室別、時代參考順に陳列し、歴史品及美術工藝品は箱別とし、類聚陳列を

してゐる。館内は十三室に分れ、第一室より第三室まで彫刻、第四室より第七室迄歴史工藝品、第八室は歴史品、第九室より第十二室迄繪畫、第十三室書蹟の順に陳列し、この中第一室より第八室に至る彫刻及歴史工藝品は六月、十二月の二回に定期の陳列替を行ひ。第九室以降の繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙、毎月第一、第三土曜日の午後陳列品に即しての解説の講座が開かれる。官制、社寺寶物受託規程等は東京帝室博物館の項參照(便覽四七頁)

〔館長〕山口義〔御用掛〕大宮武磨〔鑑査官補〕龜田孜、松島順正〔學藝委員〕中村雅真、新納忠之介、水木要太郎、梅原末治

〔觀覽日〕一月五日より十二月廿五日まで、午前九時より午後四時迄。但し季節により多少伸縮する。(觀覽料)大人十錢 小人五錢

正倉院

奈良市御料地

正倉院はもと東大寺の勅封藏で、最初、正藏又は正藏院と呼ばれた。明治十七年宮内省の管理となる。天平勝寶八年聖武天皇崩御遊ばされるや光明皇后は御願文と目錄を添へて天皇御遺愛の諸器物を東大寺に施入せられたが、爾來その御寶物は勅封を以て收藏され、又その建物は嘗て火災に遭遇せしことなく、今尙約三千點の名寶を保存し天平文化の精粹

を傳へて居る。建物は現在、校倉造りの一棟で、桁行十八間、梁間五間、高さ五間、床下九尺の大建築で北倉、中倉、南倉の三區に分ち上下二層をなして居る。御物は刀劍、樂器、樂面、鏡鑑、織物、經典、藥品、古文書其他多數に上り、支那渡來の工藝品及び西域關係のものも含まれて居る。

御物は毎年秋期曝涼に際して開封され、一定の有資格者に拜觀が許されるが一般には公開されない。

昭和十一年度正倉院御物拜觀規程

正倉院御物曝涼ニ付本年十一月三日ヨリ同十二日マテ拜觀ヲ許可セラル其拜觀ヲ許可セルヘキ者出願手續及拜觀者心得左ノ如シ

一 宮中席次第四階以上ノ者及其配偶者
二 帝室技藝員、學術研究會議會員、國寶保存會會長副會長委員並ニ工藝審查委員會委員

三 本邦駐荷各國大使公使及其配偶者並ニ前各號ニ準スヘキ外國人ニシテ當該國大使公使ノ推薦スル者

四 前各號ニ掲クル者ノ外宮内大臣ニ於テ學術技藝ニ關シ相當ノ經歷アリト認タル者

出願手續
一 期日 十月二十五日限

二 拜觀願出ノ者ハ現住所資格(在官者ハ官等併記ノコト、待ヲ具シ宮内大臣ニ宛テ遇官吏モ之ニ準ズ)ヲ具シ宮内大臣ニ宛テ

タル拜觀願書ヲ東京帝室博物館(奈良縣下ノ者ハ奈良帝室)ニ差出シ拜觀許可證ヲ受ケ

ヘシ但シ前項第四號ニ依リ許可ヲ受ケムトスル者ハ願書ニ學術技藝ニ關スル經歷書ヲ

添附セシ

三 配偶者其他數人同時ニ出願スル場合ハ前

項第四號ニ依ルモノヲ除キ連名出願スルモ妨ケナシ

四 拜觀願書ニハ拜觀許可證ノ送付先ヲ明記シタルはがき版六ノ封筒ヲ添附スヘシ

一 拜觀者ハ拜觀許可證ヲ携帶スルコトヲ要ス

二 拜觀ハ毎日午前十時ヨリ午後三時マテトス但シ天候不良ノトキハ之ヲ停止ス

三 御物ハ攝影又ハ模造スルコトヲ許サズ

四 拜觀ニ關シテハ諸事掛員ノ指示ニ從フヘシ

敵傍考古館

奈良縣高市郡敵傍町大字久米

昭和六年四月開館。森田常治郎が大和に於て過去三十年に亘り發掘蒐集せる貴重なる考古學資料二千餘點を陳列公開す。公共團體及専門研究家の參觀には特殊の便宜を計る。

(觀覽料) 毎日 (觀覽料) 大人十錢、小人五錢。團體は割引す。

春日神社寶物館

奈良市官幣大社春日神社境内

同館は昭和十年の新築で、當神社所藏の神寶、武器、繪畫、彫刻、古文書、装束、樂器等多數の國寶、什寶を屢々陳列替して拜觀に供する。

(拜觀日) 毎日 (拜觀料) 大人十錢、小人五錢、二十人以上の團體は割引する。

東大寺

奈良市雜司町

華嚴宗の大本山で南都七大寺の一。聖武天皇の勅願に依り創建され、天平勝寶四年大佛開眼の供養が行はれた。本堂は治承及永祿年間に兵火の爲焼失し、寶永五年再建されたもので、江戸中期の優秀なる建築である。このほか、天平五年建立の法華堂をはじめ開山堂、三昧堂、念佛堂、大湯屋、轉害門等を主とする國寶建造物が多數現存する。又本尊の盧舍那佛をはじめ、法華堂、戒壇院等の諸堂に安置される國寶の佛像等は莫大な數に上つて居る。

(拜觀日) 毎日、午前七時より午後五時まで。季節により多少伸縮する。(大佛殿拜觀料) 大人十錢、小人五錢。

東洋民族博物館

奈良縣生駒郡大軌沿線あやめ池畔

昭和三年十一月創設。九十九豐勝がシカゴ大學のフレデリック・スタールと共に蒐集せるロシア、支那、印度、朝鮮、臺灣、南洋等各地の土俗研究資料約一萬點が出陳されて居る。

(觀覽料) 七錢

唐招提寺

奈良縣生駒郡都跡村

律宗總本山。天平寶字三年唐僧鑑真が聖武天皇の御爲めに建立せる寺で、平城

七大寺の一。現存の諸堂宇中、金堂及講堂は創建當初のもので、就中前者は天平建築中最大最善の遺構と目される。その他禮堂、鼓樓は鎌倉期の建築で、尙經藏寶藏は、鎌倉期の修補を経た奈良時代の建築である。金堂及講堂には奈良時代以後の優秀な國寶佛像を安置し、其他寺寶中に名品が尠くない。

法隆寺

奈良縣生駒郡法隆寺

法相宗の大本山で南都七大寺の一。用明帝の御爲めに聖德太子が推古天皇十五年に創建せられた寺で、現存の諸建築物中金堂、五重塔、中門、廻廊の一部等は創建當初の姿に近きものを傳へると共に寺内諸堂に藏する什寶は飛鳥白鳳以降各時代藝術の粹を聚め、我國唯一の大寶庫たるの觀を呈して居る。伽藍は西院と東院とに分れ、西院に於ては金堂を初め中門、五重塔、講堂、經藏、鐘樓、廻廊、三經院及西室、西圓堂、上御堂、新堂、南大門、聖靈院、綱封藏、細殿、食堂、東大門等は何れも國寶、就中金堂内の藥師如來坐像、釋迦三尊像、四天王立像、玉蟲厨子等は飛鳥美術を徴す可き貴重な資料であり、堂内四方十二壁の壁畫は東洋繪畫史上の傑作とされる。又綱封藏には飛鳥以降の多數の佛像什寶を收容する。東院は行信僧都が天平十一年聖德太子斑鳩宮の舊址に建立せる上宮王院で夢殿を本堂とし、東院禮堂、南門、廻廊、

舍利殿及繪殿、傳法堂、鐘樓等國寶である。夢殿の本尊觀世音菩薩立像は創建當時の傑作で所謂止利式佛像の代表的なものである。

金堂壁畫拜觀期、春季(四月一日—五月十五日) 秋季(十月廿二日—十一月廿日)、夢殿秘佛本尊特別開扉期、春季(四月十一日—五月十五日)、秋季(十月廿二日—十一月廿日)

藥師寺

奈良縣生駒郡都跡村西ノ京

法相宗大本山、南都七大寺の一。天武帝の御創建にかゝり、もと高市郡岡本にあつたが、元正天皇の時現地に移建された。現存の諸堂宇中、三重塔婆(東塔)は移建當初のもので、白鳳時代唯一の建築遺構として重要、外に東院堂は鎌倉時代、金堂及講堂は江戸時代の再建である。金堂の本尊藥師及脇侍像、及東院堂の本尊聖觀音立像は創建當初の製作で、初唐の形式の粹を傳へ、古今の傑作である。又佛足堂内には有名な佛足石を安置する。尙同寺には佛像、神像等の國寶が多數に上り、平常堂塔の拜觀を許し、春秋に特別展觀を行ふ。

(拜觀料) 五十錢

地方

伊賀文化產業城

三重縣阿山郡上野町大字丸之内
電上野一八〇

昭和十年十月川崎克が伊賀上野城の廢

墟に建設せる郷土博物館で財団法人「伊賀文化産業協會」の經營に係る。同館は第一階を産業館として農工産品を、第二階を歴史館として郷土の先覺者の遺墨遺品を、第三階は書畫等の美術品を展観す。
〔名譽會長〕川崎克〔副會長〕田山八十吉
〔常務理事〕木津要藏

石 山 寺

滋賀縣大津市石山

聖武天皇の天平勝寶元年良辨僧正の創立にかゝり、正暦二年焼失せるを承暦三年再建し、後屢々修理を行つた。本堂は承暦三年の建立で藤原時代の特色を表はし、多寶塔は建久年中の建立と傳へ藤末の様式を遺存し多寶塔建築中最美のものとされ、他に鎌倉期の建立たる東大門、鐘樓がある。寺寶としては石山寺緣起(七卷)をはじめ、佛像、古文書類等多數を藏する。

(拜觀料)内陣寶物竝に源氏間を併せて一人十錢、團體五十人以上二割引、百人以上半額、學生團體半額。

圓 滿 院

滋賀縣大津市別所町

圓城寺の塔頭。その宸殿は明正天皇より寛永十八年賜つた御所の舊殿を正保四年に移したもので、桃山時代の特色を有

し宮室建築を知る貴重な資料である。一之間の貼附繪六面と五之間の襖貼附四面とは國寶である。

鶴林寺寶物館

兵庫縣加古郡加古川町

同寺所藏の國寶其他三百點の什寶保存の爲、大正十年聖德太子千三百年御忌記念として寶物館を建設した。開館毎日。
〔館長〕住職茂渡惠寬

熊野速玉神社寶物館

和歌山縣新宮市新宮一

明治四十三年開設。同社は熊野三山の一にして歷朝御進納の神寶多數を藏し、美術工藝品其他歴史考古資料二百八十五點(内國寶百五十餘點)を保存公開して居る。

(拜觀日)雨天を除き毎日(拜觀料)大人五十錢、學生三十錢、團體割引あり。

高野山靈寶館

和歌山縣高野山

靈寶館は總本山金剛峯寺の管理に屬し同寺及山内各院所藏の寶物を收容して、その保存を講ずると共に一般の拜觀に供するを以て目的とし、大正九年竣工、十年開館す。同館は紫雲殿(六十八坪餘)、放光閣(三十八坪餘)、南廊、西廊(六十二坪)寶藏(二十四坪)、管理所等より成り、紫雲殿は佛畫及一般繪畫、放光閣は佛像、南廊及西廊は帝室竝に大師關係品、佛像

及一般彫刻品、古文書、美術工藝品等を陳列公開して居る。

毎年春夏秋冬の三季に一定の期間を限つて特別展覧を行ふ。尙ほ同館はその事業として、金剛峯寺及山内寺院所藏寶物の整理竝に修理、高野山寶物に關する専門的研究の編纂竝に發表、宗教美術に關する講演會の開催、寶物目錄の編輯發行等を行つてゐる。

〔館長〕堀田眞快〔顧問〕黒板勝美、荻野仲三郎(觀覽日)年中開館、冬期は大體午前九時より午後三時迄。五月より八月迄は午前七時より午後五時迄。(觀覽料)大人廿錢、十歳以下は無料。團體割引は五十人以上一人十五錢、百人以上一人十錢。教員引率の學生及軍人の團體は一人十錢。特別展覧期日は毎年(五月十五日―廿一日)、(八月十五日―廿一日)、(十一月一日―七日)とし其期間の觀覽料は一人三十錢とす。

下郷共濟會鍾秀館

滋賀縣坂田郡長濱町大字西本一〇

財團法人下郷共濟會の附屬事業として故下郷傳平の遺志に基き、大正九年十一月創立。新舊美術工藝品、古文書等計三萬餘點を藏し、就中石器時代遺物は一萬點を算し、考古學上得難き參考品として珍重される。常時には開館せず、前以て縦覽希望の通知あればその都度開館す。

神宮徴古館

宇治山田市外倉田山

神宮徴古館は神宮大宮司の管理に屬し明治四十四年神苑會の手により建設獻納されたもので、神宮寶物その他歴史參考品約三千九百點を收藏、一般の觀覽に供して居る。

(拜覽日)毎日(拜觀料)大人十錢、小人五錢、團體割引あり。

大正記念三田博物館

兵庫縣有馬郡三田町

大正元年大正記念事業として開設。故九鬼男爵所藏の古畫、佛像、美術工藝品歴史參考品等八百點を蒐藏陳列す。

(觀覽日)毎日(觀覽料)二十錢

丹生神社寶物館

兵庫縣武庫郡山田村坂本

當社の寶物たる繪畫古文書等を一般の拜觀に供す。

〔社掌〕畠田朝英(拜觀日)毎日午前九時より午後四時まで。拜觀無料。

白鶴美術館

兵庫縣武庫郡住吉村字落合一五四五

昭和六年三月嘉納治兵衛の古稀を記念して、其の蒐集に係る美術工藝品、考古資料五百餘點の保存公開を目的とする財團法人を組織、同九年五月建築竣工、開

館に及ぶ。建物は鐵筋混凝土造日本風のもの。事業として、美術、考古資料の蒐集保存及びその研究調査の外に美術工藝に關する指導獎勵をなす。

〔理事長〕嘉納治兵衛〔理事〕嘉納純〔主事〕山本規矩三。(觀覽日)毎年春秋二季五月一日より同廿日迄、及び十一月一日より同廿日迄定期公開し、其他隨時に開館することあり。(觀覽料)大人五十錢、軍人、學生、團體二十人以上及び十五歳以下半額。

湊川神社寶物殿

神戸市湊東區多聞通

大正四年十二月設立。祭神に緣りのある刀劍、掛軸、器物、文書類等の寶物六十二點を陳列す。

(拜覽料)大人十錢、小人學生半額。

中國地方

淺野觀古館

廣島市上流川町鐵砲町

大正二年十月開館。故淺野長動侯の設立に係り、古書畫、刀劍、什器等二百六十餘點を展覧す。

(觀覽日)毎日、午前九時より午後四時迄。

出雲大社寶物殿

島根縣簸川郡大社町

大正三年創設。建物は入母屋造栗桐葺

二階建にして總坪四十八坪。收藏品は神像、古文書、武器、祭器、書畫、玉類、古鏡等で計四百十五點。

(拜觀日)毎日、(拜觀料)大人十錢、小人五錢。團體廿五人以上は大人五錢、小人三錢。百人以上は大人三錢、小人二錢。軍人學生は廿五人以上一人二錢。

嚴島神社寶物館

廣島縣佐伯郡嚴島町

明治廿七年創設。現在の寶物館は昭和九年新築された。書畫、彫刻、美術工藝品、古文書、武器、衣裳、佛具、樂器、經卷等國寶百廿七點、重要美術品三點、寶物類三千九十點の内より約百六十點を時々交代陳列する。

〔主任〕主典遠北英雄(拜觀日)毎日、(拜觀料)大人十錢、軍人學生小人五錢、團體は割引する。尙特別拜觀の制あり。

忌宮神社寶物館

山口縣豐浦郡長府町

大正四年十一月開館。歴史考古資料約三百四十點を展覧す。

(拜觀日)毎日(拜觀料)五錢

大原美術館

倉敷市新川町三二二

洋畫家故兒島虎次郎を記念するため昭和五年十一月大原孫三郎が設立したもので、同十年三月大原孫三郎、兒島虎次郎兩名の寄附により財團法人組織に改めら

れた。主として繪畫並に其他の美術品を保管陳列する。

〔理事〕大原總一郎、藥師寺主計、武内潔眞(觀覽日)毎月曜日、四大節、年始年末を除き、毎日午前九時より午後四時迄。(觀覽料)大人三十錢、學生二十錢。

岡山縣郷土館

岡山市石開町八〇

昭和四年開館。郷土研究資料即ち古代土器、石器、古鏡、古代裝身具、各時代の古瓦等の考古學參考品並に博物標本類等を陳列す。

(觀覽日)毎月末日及年末年始休館。觀覽無料。

山陰徴古館

鳥取縣西伯郡淀江町

同地方の考古學研究家の建設に依るもので、蒐集品は山陰地方の出土品を始め各地方の考古學資料を主とし、其他歴史參考品、工藝美術品等合せて約一千八百餘點に上つて居る。

〔館長〕足立正(觀覽日)毎日曜、祝祭日に開館するが、豫め申込があれば臨時に開館する。觀覽無料。

山陽記念館

廣島市袋町五五ノ一

電話五三一九

昭和十一年二月開館。財團法人頼山陽先生遺蹟顯彰會の經營に依り、頼山陽の

遺品、遺著、遺墨及び關係ある書籍、繪畫等を蒐集展覧す。

(觀覽料)五錢、學生軍人二錢、團體は割引する。

松崎神社寶物館

山口縣防府市

當社の寶物、古文書、繪卷、刀劍、武器、什器等數百點を陳列す。

〔管理〕社司鈴木衷人(拜觀日)毎日午前八時より午後五時まで。季節により多少伸縮す。(拜觀料)五錢

四國地方

鎌田共濟會郷土博物館

香川縣坂出町
坂出二五〇

大正十四年五月開館。讃岐郷土史料並に讃岐各地に於ける石器時代、金石併用時代、古墳時代の遺物及經塚並竊盜等の出土品、古瓦類等を陳列する。

〔主事〕岡田唯吉(觀覽日)毎週土曜(午前十時より午後四時まで)、特志研究者には隨時觀覽に供す。觀覽無料。

金刀比羅宮寶物館

香川縣仲多度郡琴平町、電話平長一、二

明治廿八年開館。石造二階建。書畫、刀劍、古文書、甲冑、佛像、古寫經の類百三十餘點を展覧す。

〔管理者〕宮司琴陵光熙

金刀比羅宮學藝館

香川縣仲多度郡琴平町

昭和三年開館。書畫、繪馬、出土品、油繪、博物標本、瘦土藝術品、玩具等約二千點を展覧す。

〔管理者〕琴陵光熙

讃岐博物館

香川縣三豐郡觀音寺町
琴彈公園内、電二六

昭和二年創立。蒐集品は科學、歷史、美術、軍事、産業等の部門に分ち、歷史部には石器、土器、古瓦、埴輪、古文書、古鏡、武器等を、美術部には郷土の古美術工藝品を陳列す。

〔館長〕町長浮田秀太郎（觀覽日）毎日
觀覽無料。

白峯寺寶物館

香川縣綾歌郡松山村

大正元年創設。佛畫、經卷等寺寶五十餘點を展覧す。

〔拜觀日〕毎日（觀覽料）五錢

善通寺寶物館

香川縣中多郡善通寺町善通寺内

大正二年開館。佛像、佛畫、古文書、古寫經、美術工藝品、歷史資料等約三百點を陳列公開する。

美術觀覽施設一覽

〔拜觀日〕毎日、午前五時より午後六時迄。（拜觀料）十錢

大山祇神社寶物館

愛媛縣越智郡大三島宮浦

大正十五年六月開館。當社所藏の什寶は千九十餘點を算へ、内國寶指定のもの百十五點、中にも國寶の甲冑は全國總數の六割を占める。

〔拜觀日〕毎日（拜觀料）大人二十錢、小人十錢、學生軍人は半額。團體は割引す。

九州地方

宇佐神宮寶物館

大分縣宇佐郡宇佐町

大正十年開館。刀劍、什器、書畫、能面等の什寶を展覧す。

加藤神社寶物館

熊本市新堀町四一

大正十五年設立。加藤清正の遺品を主としてその他武器、古文書、什器等を陳列す。

〔管理者〕社司湯田佐吉（拜觀料）五錢

鹿兒島市立尚古集成館

鹿兒島市外磯

同館は慶應元年の建設で大正四年まで島津家經營の鐵工場であつた建物を同十

二年歷史資料陳列館に改めたものである。刀劍、武器、文書、薩摩陶磁器等七百餘點を陳列する。

〔觀覽日〕毎日（觀覽料）大人十五錢、學生軍人五錢。

菊池神社寶物館

熊本縣菊池郡隈府町

菊池神社鎮座五十年記念事業として大正八年創設す。菊池氏關係の古文書、武器、軸物等の什寶類百五十點を保存公開す。毎日開館。

元寇記念館

福岡市東公園五六
電一二五九

本館は明治廿七年の創立で、昭和五年寶物館を増設、元寇記念の蒙古軍器三十餘點をはじめ土器、石器、銅器、刀劍、甲冑等歷史美術參考品一千餘點を陳列公開す。

〔館長〕湯川日淳（觀覽日）毎日（觀覽料）大人十錢、小人軍人學生五錢、普通團體廿人以上五錢、教師の率る學生團體三錢。

佐賀市徵古館

佐賀市松原町

昭和二年鍋島侯爵家に依つて設立さる。舊佐賀藩時代の文化を偲ぶべき歷史考古資料三百九十點を收藏す。

〔觀覽日〕毎日。但し祝祭日の翌日及毎

月最終日を除く。（觀覽料）大人五錢、小人學生二錢。

太宰府神社寶物館

福岡縣筑紫郡太宰府町

昭和四年一月開設。國寶其他歷史考古資料百六十餘點を藏す。

〔拜觀日〕毎日（拜觀料）大人十錢、小人軍人學生半額。

妻町郷土館

宮崎縣妻町、妻町
役場内、電妻一

舊稱史蹟研究所。大正三年宮崎縣が史蹟調査の爲に設けたもので昭和四年妻町の所有となり、穂北古蹟保存會がその管理に當つて居る。同地方の先史時代の遺物及西都原古墳發掘品を陳列す。觀覽無料。

宮崎宮寶物館

福岡縣粕屋郡箱崎町

昭和二年開設。當神社の什寶、御宸翰繪卷物、刀劍、器物等九十餘點を陳列す。

〔管理者〕宮司幡掛正水

別府美術館

大分縣別府市雲泉寺

昭和八年創立。書畫、刀劍、工藝品等三百五十點を陳列公開す。

本妙寺寶物館

熊本市花園町本妙寺内

明治四十二年四月清正公三百年祭の際開設。清正公及同寺に關する什寶百六十點を陳列す。

〔拜觀日〕毎日〔拜觀料〕十錢

宮崎神宮藏古館

宮崎市神宮町
宮崎神宮神苑

明治四十二年創立。皇祖發祥の地日向に於て發掘された考古資料を主とし、其他一般歴史、美術上の參考品を陳列す。

〔館長〕宮司神尾清澄〔拜觀日〕毎日〔拜觀料〕大人十錢、小人半額

臺灣、朝鮮、關東州

臺灣總督府博物館

臺北市文武町二ノ三

明治四十一年民政部殖産局の事業として創設、その後大正四年に竣工せる元兒玉總督・後藤民政長官記念建築物に移轉し、次で大正六年商品陳列館設立さるゝに及び、商品關係の陳列品を一切移管分離し、純然たる博物館となり、大正九年殖産局より内務局へ移管、大正十五年文教局の新設と共に同局の管轄となり今日に及んで居る。

陳列品の主なるものは歴史、土俗、動物、植物、地質、礦物であつて、歴史部は本島關係歴史品を展示し、土俗部は本

島人土俗、蕃人土俗及南洋土俗研究上貴重な資料を蒐集して居る。昭和十年三月末現在の蒐集品は歴史部二、六九二點、土俗部三、〇七一點、南洋部一、一四九點、地質礦物部二、一三四點、動物部三、四三七點、植物部三八二點、雜部三四一點である。

〔館長〕王野代治郎〔觀覽日〕七月一日より九月廿日迄〔午前八時―午後二時〕、十月一日より翌年六月三十日迄〔午前九時―午後四時〕。毎週月曜、祝祭日の翌日及十二月廿八日より翌年一月五日迄休館す。

朝鮮總督府博物館

京城府光化門通景福宮内電光化門六六一

大正四年、施政五周年記念朝鮮物產共進會の開催に際し京城舊王宮景福宮構内に新築した美術館を中心とし同構内の舊宮殿をも併せ利用して同年十二月開館に及ぶ。本館陳列品は朝鮮石器時代、金石併用時代遺物、樂浪帶方郡發掘品、三國時代、新羅統一時代遺物、高句麗時代古墳壁畫、高麗時代陶器、李朝時代書畫、陶器漆器、中央亞細亞發掘品等で、凡そ朝鮮各時代に互る美術考古資料約一萬三千餘點が蒐集されて居る。

〔主任〕藤田亮策〔觀覽日〕日曜、祭日の翌日を除き毎日開館。〔觀覽料〕一人五錢、引率者を有する學校生徒並軍人は無料。

同慶州分館

朝鮮慶尙北道慶州邑

豫て同地の考古研究家の設立に係る慶州古蹟保存會陳列所を、大正十五年朝鮮總督府に移管し、同年六月總督府博物館分館となして開館した。石器時代から李朝時代までの慶州を中心とする考古資料美術品、歴史參考品等約八百五十點を陳列す。

〔觀覽日〕日曜、大祭祝日の翌日を除き毎日開館。〔觀覽料〕五錢

開城府立博物館

開城府東本町子男山

昭和五年五月府制實施せられ、開城郡が開城府に昇格せられた記念として昭和六年十一月建設。主として高麗朝時代の美術工藝品、殊に高麗燒の優れたものが多數蒐集陳列されて居る。

〔館長〕高裕燮〔觀覽日〕毎週月曜日、年始年末及大祭日を除き毎日開館。〔觀覽料〕大人五錢、小人二錢。

扶餘古蹟保存會陳列館

朝鮮忠清南道扶餘郡扶餘

保存會は大正四年扶餘に於ける百濟の古蹟保存並調査研究を目的として設立。陳列館は同古蹟遺品約六百點を蒐集公開して居る。

〔會長〕李範益〔副會長〕大河原重信

平壤府立博物館

平壤府慶上里一五

昭和三年八月開館。八年九月現在の地に新築移轉す。樂浪及高句麗時代の遺物を展觀す。

〔館長〕小泉顯夫〔觀覽日〕毎週月曜、大祭日、年末年始を除き毎日開館。〔觀覽料〕十錢、十人以上の團體は一人五錢。學生團體は一人三錢。

李王家德壽宮美術館

京城府貞洞五ノ一

朝鮮に於ける美術獎勵の目的を以て、昭和八年十月德壽宮を公開さるゝに當り石造殿の内部を改造して日本近代美術の陳列館となし、李王家御所藏品及び他からの出陳に係る日本畫、洋畫、彫刻、工藝の優秀作品を常設陳列して一般に觀覽せしめる。

〔觀覽日〕一月四日より十二月廿八日迄毎日開館。〔觀覽料〕大人廿錢、小人十錢其他學生團體に限り割引をなす。

李王家博物館

京城府臥龍洞二ノ一

李王家博物館、動植物園を總稱して昌慶苑と言ひ昌德宮の一部をなし其の廣さは約十八萬一千平方米を有す。明治四十年時の韓國總理大臣李完用に依り故李王殿下の御慰樂に供する爲發企計畫されたものであるが、後殿下の思召により一般

民衆に公開し、實物教育機關となしたものである。博物館は主として朝鮮古今の美術、土俗品等各種の考古資料約一萬八千餘點を蔵し、これを明治四十四年に建築せる博物館と、朝鮮古式の宮殿建物（明政、景春、歡慶、通明の各殿）に陳列公開して居る。

（觀覽日）一月四日より十二月廿八日迄無休開館。（昌慶苑觀覽料）大人十錢、小人五錢、軍人、小學生等の團體は一人二錢、それ以外の團體は一人五錢とす。尙博物館は別に觀覽料、大人十錢、學生團體は一人五錢を徴収す。

旅順博物館

旅順市大迫町

本館はもと關東都府滿蒙物産館と稱し大正五年の創設で、同七年現在の建築の成るに及び博物館と改稱、次で同八年四月より都府の改制と共に關東廳の名を冠したが、昭和九年關東局令を以て旅順博物館と改められた。本館は露國統治時代に將校會所として起工したが半成の儘であつたのを大正五年工費三十萬圓を投じて同七年竣工したものである。

陳列品は主として滿洲、蒙古及支那本土に於ける考古、美術及土俗資料で約六萬九千點を算し、殊に蒙古小庫倫、南滿洲旅順附近、貔子窩、牧羊城址等より發見の考古的遺物は特有のもので、その他支那各時代に互る陶磁器の蒐集を始めとして、數多の銅器、鐵器、瓦器、壁畫、經卷

等、東亞考古學上貴重な研究資料を蒐蔵する。

因に本館は附屬として植物園、動物園を經營し別に旅順攻圍戰の彼我遺品を展覧する記念館（舊市街所在）を所管してゐる。

美術關係團體

あさくさ洋畫家協會（洋）

東京市淺草區千束町
一ノ一六山田篤方

昭和十一年十二月淺草區在住の洋畫家を以て結成。展覽會を開催す。

（會員）府川道徳、山田説義、村上鐵太郎、柏木仁平、山田篤、加藤利以雄、竹原千緒、梅里武夫、徳山鏡、小倉一雄、相原良保、近馬勘吾、野邊欣一、井手良徳、田中陽、小泉徳次、文鉄勝、川村秀治、渡邊祐義。

愛知縣工藝協會（工）

名古屋市中區御幸本町通
一丁目愛知縣商工館内
電本二一五六

愛知縣に於ける工藝の振興及其の産業的進出を圖り、意匠圖案の調査研究、展覽會開催、宣傳等を行ふ。

（總裁）愛知縣知事。（會長）松崎謙二郎（理事長）菅原省三（理事）岩村新、木村徳壽、中川貞三、佐藤松治郎、赤塚幹也、永塚榮治、押谷鐵三郎、瀧藤彌三郎、水

（館長）白石喜太郎（主事）島田貞彦（觀覽日）祝日、大祭日、年末年始を除き毎日開館。（觀覽料）本館及記念館各一人十錢、廿人以上の團體は半額。（特別觀覽料）一點一日に付五十錢。

一覽（五十音順）

野保一、石塚岩三郎、淺野甚七、橋本文、宮部鈴三郎、安藤重兵衛、池田彰郎、黒田邦彦、岩田芳之助、黒田忠讓、江口彌一郎

愛知社（日、洋、彫、工）

東京市瀧野川區田端町
六一二、朝蔭其明方

大正七年創立。愛知縣出身の在京美術家を以て組織す。相互の研究及親睦を目的とし、郷土美術界の爲に盡す。毎年公募展を開催。

（會員）（日本畫）川崎小虎、服部有恆、清水有聲、太田一彩、森田沙夷、森村稻門（西洋畫）山本那、加藤靜兒、渡邊正太郎、水野義正（彫塑）毛利敦武、加藤顯清、朝蔭其明（工藝）藤井達吉、長野垣志

愛知縣商業美術協會

名古屋市中區東新町
愛知縣商品陳列所内

昭和九年創立。商業美術の確立及其改善を期し、商業美術に關する調査研究、展覽會講習會の開催、紹介幹旋等をなす。

十一年二月第四回展を開く。

（會長）菅原省三（理事長）高橋信三（理事）伊藤靜定、杉本健吉、倉田虎男、石黒一彦、富野巖松、大野明、坂井茂（參事）萬代敏夫、田中均、田中自助、松井庫夫

青丹會（洋）

東京市品川區大井庚塚町
四八三二、田坂彰方
電大森二八五一

昭和七年、文化學院卒業生を以て組織。油繪研究並に發表を爲す。

（會員）千葉明、千頭清策、井村義人、小平鼎、並河弘、野中榮吉、大橋文子、大石俊彦、大兼實、志賀昇、田坂乾、安井隆

青森縣工藝協會（工）

弘前市百石町
三六、電四七

縣下工藝の發達を圖るを目的とし弘前地方に於ける工藝品製作者、販賣者及關係者を以て組織す。年一回競技展覽會を開催する。

（會長）橋本良雄（理事）奈良金一、八木橋文平、木村勇藏、齋藤熊五郎。會員九十五名。

青森工藝協會（工）

青森市榮町堤橋前
倉光木工所内
電一七〇一

青森市に於ける工藝業者、販賣者を以

て組織し、圖案、工作、販路の研究發表
を行ひ、展覽會、講習會の開催、他展
の出品斡旋等をなす。

秋田美術會(日、洋、彫、工)

東京市本郷區眞砂町三六
清和寮、東海林恒吉方
電小石川五六四〇

昭和三年、秋田縣出身の故平福百穂を
中心として、全縣出身の在京美術家有志
を以て組織す。年一回東京及秋田市に展
覽會を開催す。會員六十四名。

油繪五人會(洋)

東京府千歲村船橋三
一五、竹村義司方

昭和八年四月創立。同人の油繪研究並
發表機關。

〔會員〕大貫松三、竹村義司、岡山信一、
榎戸庄衛、須田壽

アヴァン・ガルド藝術家クラブ

荒川區尾久町二ノ三
五八、四宮潤一方

昭和十一年四月結成。「アヴァン・ガル
ド藝術家の懇親と、それによる相互の啓
發」を目的とし、毎月會合の上座談會、
講演會等開催する。會員は瀧口修造、四
宮潤一、植村鷹千代等の評論家及二科、
獨立、飾畫、一九四〇年協會、エコー
ル、東京、アニメ、ジャン、黒色、動向、
フォルム、リラ等諸團體の作家有志に詩
人が加つて組織してゐる。

伊部陶業協會(工)

岡山縣和氣郡
伊部町役場内

昭和九年三月伊部町の伊部焼業者を以
て組織。伊部焼の振興を圖るを目的とし
展示會開催、他展への出品斡旋、宣傳等
をなす。

〔會長〕島山信次〔副會長〕木村貫一、會
員二十八名。

池袋美術家クラブ

東京市豊島區池袋四丁目
四四五、佐藤英男方
電大塚二五〇一

昭和十一年八月池袋及長崎町在住の美
術家が相互の親睦を目的として結成せる
クラブ。同年九月第一回街頭展を開催し
た。

〔委員長〕田中佐一郎〔委員〕佐波市、佐
藤英男、森繁、須藤清彦、葛見安治郎、
寺田政明、桑原實

石川縣工藝獎勵會展覽會(工)

石川縣廳内經濟部
商工水産課

縣下の美術工藝、生産工藝、輸出工藝
の發達を圖り、年一回金澤市に展覽會を
開催し、引續き東京、大阪に陳列會を開
く。會員二百餘名。

〔會長〕石川縣知事

石川縣輸出工藝振興會(工)

金澤市兼六公園
石川縣商品陳列所内

昭和九年九月創立。同縣工藝品の輸出
振興を目的とし輸出向工藝品關係者に依
り組織せらる。見本製作の獎勵、販路擴
張等の事業をなす。

〔會長〕石川縣知事〔幹事〕藤野英陽、青
木外吉、澁谷廣次、淺野廉、高田利守、
能波清二

一軌社(洋)

東京市豊島區池袋二
ノ九四三、桑原實方

舊スクラム社改稱。昭和八年の美校師
範科卒業生により組織。同人相互の研究
を目的とする。

〔會員〕林佐門、高田廣喜、小島勇、桑
原實、樺葉嘉一郎、森繁

一樹社(洋)

京都市左京區中町
五、川端彌之助方

田中善之助、國盛義篤、川端彌之助等
を中心とする春陽會の京都出品者を以て
組織し、昭和十年十一月第一回展を京都
朝日會館に開催した。

〔會員〕岩崎又二郎、石井彌一郎、徳力
富吉郎、加藤啓三、川端彌之助、龜井藤
兵衛、田中秀雄、田中善之助、村上尙雄、
國盛義篤、藤野龍、琴塚英一、榎信太郎、
淺木勝之助、調樹山

一水會(洋)

東京市荒川區日暮里渡
邊町一〇三五、石井方

昭和十一年十二月、舊二科會員八名は
「會場藝術を非とし、技術を重んじ、高
雅なる藝術を尊重することに於て一致」、
同會を創立した。同人展開催の豫定。

〔會員〕有島生馬、石井柏亭、木下孝則、
木下義謙、小山敬三、裕伊之助、安井曾
太郎、山下新太郎

岩手美術工藝協會(工)

盛岡市岩手縣工業試
驗場内、電五一

昭和八年創立。縣下美術工藝の振興に
關する研究の助成及展覽會指導を事業と
し、特に郷土古民藝の現代的再生に力を
入れて居る。

〔總裁〕岩手縣知事〔會長〕同經濟部長
會員八十名。

烏城會(日、洋)

京都市岡崎法勝寺町
一八、柴原希祥方

昭和二年創立。岡山縣出身京都在住畫
家を以て組織。毎月研究會を開く。

〔常任幹事〕柴原希祥、稻葉春、生戸田
英次 會員三十餘名。

愛媛美術工藝協會(繪、彫、工)

松山市愛媛縣商品
陳列所、電四四五

愛媛縣の美術並工藝の振興を圖るを目
的とし、同縣在住並出身の美術並工藝家
を以て組織する。綜合展を開催する。

〔總裁〕縣知事〔會長〕縣經濟部長

越佐工藝美術會(工)

東京市澁橋區下落合一ノ
四二〇、佐々木象堂方

昭和九年新潟縣出身の工藝美術家を以て組織す。會員は何れも舊帝展第四部に關係の作家で會員相互の研究並發表に努むると共に郷土工藝の指導啓發に盡力する。同年十二月第一回展を開催す。

〔會員〕原直樹、富樫光成、小澤天來、小川英風、吉田醇一郎、高井白陽、山本光次、山本自燭、佐々木象堂、佐藤陽雲、齋藤鏡明、齋藤玉城、品田愼一、廣川松五郎、森三樹、市橋鷺山、原宗治、小野爲郎、眞藤玉眞

エコールド・東京(洋)

東京市中野區向臺五

昭和十一年三月創立。主に東美校出身の青年畫家の組織する新興繪畫集團。展覽會を開催し又機關誌を發行する。

〔會員〕淺利篤、相川泰、有海富貴夫、麻生三郎、安孫子眞人、和泉美雄、市岡正彦、市村力、生島寛、内田愼藏、太田士朗、小川原脩、神谷嘉廣、片山公一、柿手春三、境野一之、島田幸人、末永胤生、高橋勉、寺田政明、土井俊夫、野村章三、延岡游、長谷川善四郎、濱松小源太、廣江ミチ子、三好弘光、吉井忠、早瀬龍枝、森口靜枝

エトアル洋畫會(洋)

美術關係團體一覽

和歌山市和歌浦七
八六和田傳太郎方

昭和三年創設。年一回春季に展覽會開催。

〔會員〕沼富次郎、明樂光三郎、鈴木善次郎、山本秀臣、掛下利夫、和田傳太郎

S.P.A集團(洋)

東京市牛込區柳町三八
蘇方、電牛込六九六四

昭和十年六月駿河臺洋畫研究所を解散して現在の研究團體に改む。洋畫の研究及發表を目的とし、批評會、スケッチ旅行、懇談會等を催す。本團の下にはその「組織團體」として黒色展、白變會、大斗展、濤友會等があり各々展覽會を開き又各團體の綜合展(S.P.A展)を行ふ、入會は會員の紹介に依る。

〔指導者〕藤田嗣治、野間仁根、會員四十九名。

大阪女流畫家作品展覽會(日)

大阪市天王寺區堂ヶ芝町
一二、關西女子美術學校
内、大阪女流畫家展覽會
係、電天王寺二七二一

大阪及各地の女流日本畫家の出品に依る公募展。昭和十一年迄に開會三回に及ぶ。

〔役員〕生田花朝、橋本花乃、星加雪乃、磯紅鸞、大江更國、村岡小丘、矢島玉女、松本華羊、福田芳穂、小松華影、木谷千種、島成園、四夷星乃

第四回展出品規定拔萃

一、本會の出品者は大阪と各地の女流日本畫家とす

一、本會は昭和十二年六月七日より十一日迄大阪三越西館三階を會場として開催す

一、出品畫は規定の出品目録を添へ六月五日大阪市東區高麗橋二丁目三越五階美術部内女流畫展係まで届入の事

一、出品畫は矢野樺村、北野恆富、菅橋彦の鑑査を経て陳列と否とを定む

一、出品畫は外枠寸共六尺以内とし必ず陳列に適當する装幀をすること

一、出品畫は一人二點以内とす

一、入選作品中優秀と認めたる作品に對しては獎勵賞を授與す

一、會場に於て賣約せられたる作品は其の賣價の一割五分を申受く

一、本會の事務は前記事務所又は三越美術部に於て取扱ふこと

大阪新美術家同盟(洋、彫)

大阪市南區大寶寺町
東之丁六〇、川島方

關西に於ける各美術團體の綜合展開催を趣旨とする。昭和八年四月大阪の洋畫團體、神園會及Z I G Z A Gが合同して

結成。次で彫塑團體クレイ(現在大阪彫塑會)が加盟、同年十一月第一回展開催。十年十二月セクション・ダールが加盟、

十一年十一月第三回展を大阪市美術館に開催した。目下は以上の四團體の全會員を同盟員となし、各團體より委員を出して同盟の事務に當つてゐる。

〔同盟委員〕木下正彦、宮島久七、松本銳次、田川寛一、大石輝一、川島昇太郎、

中村眞、寺田清四郎、小島大輔、田村與志那、西阪修、玉澤潤一

大阪彫塑會(彫)

大阪市北區新川崎
町一、宮島久七方

昭和六年洋畫團體Z I G Z A Gの彫刻部として成立、翌年獨立して大阪近郊の青年彫塑家を加へ帝展、二科、院展、國展、構造社各系の相互研究團體たる「クレイ」を結成した。八年より大阪新美術家同盟展に加盟。十一年十月組織を擴大して大阪彫塑會と改名した。

〔會員〕菅原安男、保田龍門、白石正義、谷本整映、宮島久七、木下正彦、山本博一、大栗和七、金森勝太郎、木下幹、大西金次郎、日高政法、三澤賢三

大阪美術展覽會(日)

三越大阪支店内

關西に於ける青年日本畫家の向上を目的とし毎春一回三越主催にて開催す。大正八年より現在の鑑査委員に依つて公募作品の審査を行ふ。昭和十一年第二十二回展を開く。

〔鑑査委員〕西山翠峰、西村五雲、矢野橋村、菊池契月、北野恆富、水田竹岡、菅橋彦

第二十二回大阪美術展 出品規定拔萃

一、本會は昭和十二年三月一日より五日迄大阪三越に於て開催す

一、本會に出品せんとするものは出品目録を添へ昭和十二年二月二十五日、二十六日の兩日中に大阪三越内大阪美術展覽會係迄出さる可し

一、出品は二點以内にして寸法に制限なし但し陳列に適當なる裝置をなすことを要し又解説を要するものは之を添附せらるべし

一、出品物の運搬費用は凡て出品人の支辨たるべし

一、賣約したる出品に對しては賣價の一刻五分を申受け大阪三越に交付し殘金は閉會後同店新美術部に於て出品預證と引換に交付すべし

大阪府工藝協會(工)

大阪市東區大手前町
大阪府廳工務課内

大正十三年十月創立。財團法人組織。各種の工藝家、意匠圖案家及斯道關係者を以て組織し、工藝品及意匠圖案の調査研究、展示會開催等をなす。月刊「大阪之工藝」誌を發行する。

〔會長〕兒玉孝顯〔理事長〕菅波稔事〔副理事長〕片岡長信〔理事〕江藤榮吉郎、中島豐次、安原勝守、山本太助、名越孝治、黒岩倉吉、吉田岩平、吉田鹿之助、土山隆克、杉田精二

旺玄社(洋)

東京市大森區馬込町東
二ノ八八三、田澤八甲方

牧野虎雄を主宰者とする青年洋畫家の團體。昭和八年より毎年春季に東京府美術館に公募展を開催し又臨時小品展を開く。夏期講習會を東京及各地に開催す。

〔主宰者〕牧野虎雄〔理事〕久富楠太郎

〔同人〕岩井彌一郎、千木良富士、尾崎三郎、甲斐仁代、田邊嘉重、田澤八甲、橘作治郎、塚本茂、中出三也、村田榮太郎、内田泉水、能勢眞美、野田信、牧野醇、馬越樹太郎、福田新生、小林清吉、小林裕治郎、青柳喜兵衛、秋山良太郎、櫻庭彦治、樹下行雄、宮部進、東久世小六、鈴木金平、鹽利彦、深澤省三、遠山陽子、東久世秀雄

第五回同展規定抜萃

〔會場〕東京府美術館正面
〔會期〕昭和十二年三月廿五日—四月五日
〔搬入日〕同年三月廿一日—廿二日
〔搬入場所〕府美術館
〔地方出品〕東京市芝區新橋田町一九、磯谷額
〔出品手數料〕一人三點迄を金一圓、一點増す
〔鑑査〕牧野虎雄補佐の爲め同人當番數名之れに當る
〔出品畫〕油繪、水彩畫、素描、パステル、創作版畫等
〔賞〕旺玄社賞、其他

煌土社(日)

東京市杉並區上高井戸町
五ノ一八九〇野田九浦方

野田九浦の塾、居仁洞の改稱。昭和十一年五月日本橋白木屋にて第二回展を開く。

岡崎工藝美術展覽會(工)

岡崎市役所勤業課
電五四九

岡崎美術展の工藝部が昭和二年分離獨立したもの。同市の特産たる石製品、青銅器、木彫等の發達を計るを目的とし毎年同市及愛知縣工藝協會岡崎支部共催の下に開かれる。十一年十月第十五回展開催。

岡崎美術展覽會(日、洋)

岡崎市立圖書館
内、電一八五〇

岡崎市の美術の發達に資する目的を以て大正十二年十月設立。翌月第一回展開催、昭和二年繪畫部と工藝部が分離した。十一年五月第十五回展を開催した。

〔會長〕(岡崎市長)菅野經三郎〔委員〕柴田顯正〔委員〕(日本畫部)板倉晃邦、岡田撫琴、平岩三陽、和田青雨、松原耕嶺、山本一郎、早川藜香〔洋畫部〕杉山新樹、山本欽太郎、神川一郎〔幹事〕鈴木實、西尾勉雄、伊藤十一

岡崎美術展規則抜萃

一、本會は毎年春期一回之を行ひ日本畫並に洋畫の作品を陳列す
一、本會出品はすべて無審査陳列を原則とす但し會場狭小の節は本會委員に於て整理減點することあるべし
一、一人の作者の陳列點數は一般出品人五點以下、委員及び幹事は三點以下とす
一、本會の出品人は市の内外を問はず其作品を出品することを得
一、展覽會期は毎年春期一週間内外たる事を原則とす

一、會場は岡崎圖書館とし必要に應じ市公會堂を並用す
一、本會出品に對し鑑別等款實賞與賞金の類を附せず

佳都美村(工)

京都市上京區小山初智町
會見延藏方

明治四十二年神坂雪佳を中心に佳都美會設立され、後佳都美村と改稱す。大正十三年これを解體し殆ど舊同人を以て京都工藝美術會を組織し、同十五年美工院と改稱したが更に昭和十年佳都美村に還稱した。京都工藝美術會組織以後は公募展を開催して斯界の向上に努めたが現在は再び佳都美村に還り同人の研究を目的とする。隨時作品發表をなす。

〔村長〕神坂雪佳〔村員〕伊東陶山、伊東翠壺、岩村哲齋、岩村光眞、一瀬小兵衛、丹羽冬橋、神坂祐吉、神坂松濤、江馬長閑、鈴木表朗、三木表悦、魚野自醒、奥村霞城、山田樂全、清水六兵衛、宮永東山、溝口安太良、古市垣太郎、皆川月華、山鹿清華〔専務理事〕會見延藏

香川縣漆藝會(工)

香川縣高松市花ノ宮町
香川縣工業試驗場内
電三九〇二

昭和十年一月設立。香川縣工業試驗場の講習修了者を以て組織し、同試驗場指導の下に輸出工藝品及一般工藝品の研究をなす。十一年七月第一回漆藝展開催。〔會長〕(工業試驗場長)石栗眞一、會員

二十四名。

華陽會(彫)

東京市本郷區駒込神明町
三四一、後藤良方
電話 込一一五五

昭和八年一月後藤良社中によりて組織。彫塑研究を目的とし、年一回展覽會を開催す。

〔會員〕花園幸雄、岡本壽太郎、小田耐、綿引司郎、吉田茂男、卜部末彦、野村春陵、野口甚吉、八柳正雄、八柳恭次、松前楓溪、布施英治、後藤省吾、後藤良、後藤胸雄、後藤光行、小松宏次、紺谷英儀、齋田東吾、相良又二、鈴木仁亮

畫斷社(日)

東京市本郷區駒込林町三
五、電話 込五六六

明治四十四年十月、神木鷗津により設立。「東洋古畫道の復興」を趣旨とす。月刊「畫斷」を發行し大正六年三月に至り休刊したが昭和九年十月再發行して十一年八月迄續刊した。同社の催しとして神木鷗津の作品展を開催する。

〔會長〕神木鷗津〔職員〕西村南岳、梶東方、加瀬藤園

塊藝會(彫)

名古屋市西區臺所町三ノ
一一、石田方

昭和八年一月創立。名古屋に於ける新進彫塑家の團體。年一回同市に於て展覽會を開く。

美術關係團體一覽

〔會員〕石田清、大嶽茂樹、高藤鎮夫、曾我八代、野々村一男、穴吹義雄、安藤菊男、森本啓史、千木谿山、菅沼五郎

各人社(日、洋、彫、工、版)

京都市押小路當小路角
岡本庄三

昭和六年八月結成。藝術一般の研究及會員相互の向上を目的とす。毎年展覽會を開く。

〔會員〕〔日本畫〕辻村宗太郎、中村敏郎、赤松稜一、芝正雄、白岩仇三郎〔洋畫部〕仲千代二、安田謙、藤井勇、德永王樹〔版畫〕稻垣耕四郎〔彫塑部〕岡本庄三、吉川常雄、吉田淑示、中村三郎〔工藝部〕天野六郎助

革丙會(日)

東京市本郷區弓町一ノ
二六、棚田曉山

大和繪系の國史畫研究並に創作を目的とす。明治四十年故小堀朝吾門下に依りて組織され、大正十年第一回展を催し、隔來展覽會を繼續して昭和十一年五月日本橋三越にて第十五回展を開催した。

〔會員〕磯田長秋、伊東紅雲、岩田豐磨、太田天洋、川崎小虎、川船水棹、棚田曉山、舟波綠川、山川永雅、安田毅彦、小山榮達、小堀安雄〔幹事〕棚田曉山

學校美術協會

東京市荒川區日暮里町三ノ
一九六、電根岸一〇三〇

昭和二年十月設立。我が國の小學校、中等學校に於ける圖畫手工教育の健全なる發達を側面より助成するを以て目的とする。現在小學校、中等學校圖畫手工教師一萬數千名の加盟を得、教育者の指導獎勵、參考作品の無料貸出、教材用具の研究製作供給、圖書の刊行、本邦圖畫手工作品の海外への紹介展覽、視察員派遣等の事業を行つて居る。毎月雜誌「學校美術」を發行する。

〔會長〕岸邊福雄〔常務理事〕後藤福次郎〔理事〕板倉賛治、山本鼎、霜田靜志、赤津隆助、石谷辰治郎

關西水彩畫協會(洋)

大阪市旭區南島町
一一、桂龍雄方

昭和九年十月關西在住の水彩畫家十一名を以て組織す。年一回大阪、神戸、京都に於て協會展開催。夏期講習會並に毎月研究會を催し、機關誌「水彩」を發行す。

〔會員〕池島勘治郎、別車博資、桂龍雄、米倉兌、吉倉三郎、谷福太郎、田中丘人、中岡恆雄、中谷武雄、平川要、大友一三、山脇精英、青野馬左奈、研究會員百四十名。

神奈川縣商工協會(工)

神奈川縣藤岡

昭和三年五月創立。貿易部、能率部、工藝部、出品部、計量部の五部を設置し海外市場の調査、輸出並一般工藝に關す

の指導、縣下生産品の紹介等を行ひ、展覽會を開催する。

〔會長〕〔神奈川縣知事〕半井清〔工藝部、出品部主任〕川島直次郎

九夏會(洋)

東京市世田谷區赤堤町
一五四、土野義郎方

昭和九年創立。春陽會々友の組織する洋畫發表團體。十一年九月第一回展を開催す。

〔會員〕伊藤慶之助、岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、鬼塚金華、加山四郎、川端彌之助、兼平英示、齋藤清二郎、眞田久吉、土屋義郎、藤堂奎三郎、久泉共三、森田勝、揚佐三郎、和田歳一

九元社(彫)

東京市墨島區長崎町一ノ
二七八四鈴木三郎助方

昭和二年より六年までの東美校卒業生有志が八年結成せる木彫の研究團體で毎月研究會を開き又展覽會を開催する。

〔會員〕森大造、中野四郎、村井辰夫、長谷川宏、鈴木三郎助、高橋泰藏、松本光史、長沼孝三、紺谷英儀、齋藤誠一、田近政二〔顧問〕關野聖雲、北村西望、建島大夢、羽下修三

九皇會(日)

東京市麹町區九段四ノ
一五、關崎美堂内

昭和九年九月、關向美堂に於て太田聰羽、奥村土牛、吉岡堅二、高橋周桑、田中青坪、常岡文龜、寺島紫明、薄上遊龜、森白市の九名を以て組織す。十年五月第一回展を開催。其後徳岡神泉、山口華楊の二名加入し、現在會員十一名。年一回展覽會を開く。

九年會(洋)

東京市杉並區阿佐谷一、七九六、今村俊夫

昭和九年度の東美校洋畫科の卒業生を以て組織す。相互の親睦、向上を目的とし、年一回展覽會を開く。

〔會員〕伊藤清永、伊藤悌三、五十嵐俊夫、今村俊夫、石田久雄、石山融、林邦男、濱松政之助、長谷川時郎、新關國臣、西川幸衛、西村計雄、細田喜道、外岡梅太郎、陳洵、李梅樹、大城皓也、小田谷養次、岡田和夫、荻原孝一、川端實、川瀬成一郎、金子三藏、田村元勳、竹内英雄、孫一峰、中島龜三郎、奈古屋晴夫、灘波秀二、山川勇一郎、山野正、山本日子士郎、眞木小太郎、藤田篤次郎、福富實、權雨澤、相澤武男、佐々木孔、宮地莊介、島崎政太郎、關口茂、末澤繁信、李鳳榮

京都工藝院(工)

京都市東山區五條坂五丁
目、電報圖六九八

昭和十二年一月創立。京都に於ける工

藝の八團體、五條會、陶藝協會、綵工會、伸更會、京都漆藝會、金工作家聯盟、若調社、工友團が京都工藝の革新を宣言して大同團結した工藝の總括的研究團體。隨時展覽會を開催の豫定。尙二月上旬の八團體は解消された。

〔陶藝部會員〕伊東翠壺、石田來之助、池田忠雄、井上憲吾、井上素明、井野榮造、岩本克己、八田蘇谷、長谷川白峰、橋本隆、橋本龍岳、西川清翠、堀岡道仙、德力孫三郎、中條昇、岡本爲治、奥西松雲、小川幸一、桶谷定一、小倉千尋、浦波蘇藤、河合善太郎、河合磊三、叶松谷、叶光夫、米澤蘇峰、吉田光雄、大九北峰、瀧本蘇嶺、田中紫良、高木鳳子、谷口道仙、辻晋六、中谷小太郎、中村昌夫、中村幸節、村井瓶生、草加春陽、黒田清華、山本龍山、山内陶谷、山澤松篁、松下翠峰、福增阿山、福田力三郎、福井秀夫、藤井安祥、近藤悠三、國領素夫、寺池旬煥、手塚玉堂、淺見安兵衛、淺見隆三、淺見與志三、清水六兵衛、清水正太郎、清水祥次、北村祥鳳、木本多門、木村二瓶子、北村陽山、宮川香齊、宮下善壽、新開邦太郎、森野嘉光、清風與平、諏訪蘇山、末包中歩、松本華〔染織部會員〕石田玉英、今西良夫、今村冠峰、井關英夫、岩崎眞也、八田泰造、長谷川文平、馬場笛山、林雨染、太田光嶺、小合友之助、川瀬茂次、龜山善博、横山芙明、三宅更紗、田中初雄、田中貞造、田井修一、中村鶴生、長村華城、村田春綠、山鹿清華、山崎茶平、

安武聖果、前田良三、福村健、悟道卯一、佐野多景夫、岸本景春、皆川月華、島田勝四郎、平尾周史、龜山竹司、服部好雅〔漆藝部會員〕井上彦之助、岩村貞雄、井上金花、番浦吾吾、泰德三、西澤玉舟、戸島光阿彌、堂本五三良、薙野武司、奥村霞城、奥村究果、梶山禎泉、高橋利雄、高橋表清、竹中微風、上原清、山田豊、迎田嘉亭、天野六郎郎、水内平一郎、平石孝、鈴木貞路、山岸表壽、増山玉嶺、江馬長閑、湯淺華曉、三木玉眞〔金工部會員〕今大路長光、西島逸四郎、大久保鼎湖、高瀬好山、高木治一郎、國保美、中山憲一、永峰秀作、村田信續、黒井光珉、砂長伸、古市垣太郎〔木竹部會員〕岡本庄三、黒田宗傳、山本孝甫、我孫子古齊〔陶藝部準會員〕飯田泰三、長谷川吉藏、林不折、林圓山、吉田仁三郎、高木岩華、竹内勝治、野本正光、國松國三郎、東野春生、宮川己之助、宮本香齋〔染織部準會員〕賀集正夫、宇野善之助、山田誠一〔漆藝部準會員〕板倉不朽土、西澤桃也、尾關成章、大藏更生、迎田鐘一、梅村表雲、山野井藤四郎、前田勝、湯淺清二朗、森元伊造〔金工部準會員〕磯松律太郎、長谷川達治、大串晃、苗村博、村上彦自朗、上田鐵三、山中陽之輔、小森才龍〔木竹部準會員〕西川宗悅、田中保、中桂平一、藤澤伸一

京都工藝美術協會(工)

京都府廳經濟部内

京都工藝界の各部門及各流派の作家を網羅して相互の聯絡統制を圖り京都工藝界の全面的進歩を裨補せんことを目的とする。事業として毎年春季京都市に工藝展を開催し勸奨を爲して新進優秀作家を世に紹介し、又新興工藝美術の發達を助長する爲に必要な施設をなす。機關雜誌を發行す。

〔名譽顧問〕中澤岩太〔會長〕鈴木信太郎〔副會長〕淺山富之助、田中博、評議員四十一名、會員四百五十名。

同會展覽會規程拔萃

- 一、本會に於ける出品物の範圍は工藝美術的の製作品(創作版畫を含む)及圖案に限る
- 一、完成後二年以上を経過せるもの又は既に公開展示したるものは出品することを不得
- 一、本會に於ける出品者は京都府下在住者に於て當該出品物の製作者に限る。前項の外自己の爲に製作せしめたる本協會の會員は製作者及圖案家と連名にて出品をなすことを得
- 一、出品をなさんとする者は附屬様式第一號に依る出品申込書を別に定めたる期日迄に本會に提出す可し
- 一、出品物は第十八條に依る鑑査を経て之を陳列す。但し參考品に付ては鑑査長の同意を得て之を陳列するものとす
- 一、鑑査員(鑑査長を含む)は京都工藝美術協會評議員會の推薦に依り會長之を囑託す
- 一、審査の結果優秀と認めたる陳列品の出品者に對しては褒賞を授與す

京都裝飾藝術協會(工)

京都府伏見桃山宗和園内

昭和二年七月設立。織染繡及其他の裝飾藝術の向上普及を圖るを目的とし、作品展覽會、互評會、講演及出版等の事業をなす。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕宮尾清、狩野秀峰、岸本景春、山田江秀、井田宣秋、小川文齋、吉田玉城、櫻田光可。其他會員三十八名、顧問六名

京都漆藝會(工)

京都市左京區中門前町
一ノ二、江馬長閑方

昭和十年五月京都漆藝家二十數名を以て組織し、同年十一月京都美術館に於て第一回展を開催した。(十二年一月京都工藝院の結成に参加し解消さる)

〔顧問〕神坂雪佳、清水六兵衛〔會員〕江馬長閑、鈴木表朔、三木表悦、平館會、堂本五三良、迎田嘉亭、奥村霞城、井田宣秋、湯淺守一、魚野自醒、三木玉眞等二十餘名

京都陶磁器工業組合

京都市東山區東大路東
入、電紙圖一二五〇

昭和九年十二月設立認可。製作品検査共同販賣、金融統制の事業をなし同地方美術陶磁器の産業化を計る。

〔理事長〕中村孝藏〔副理事長〕淺見五郎助、藤岡幸二、組合員五百八十五名

郷土會(日)

東京市世田ヶ谷區
松原町二ノ七三〇

大正六年六月錦木清方門下に依り創立さる。昭和六年迄毎年展覽會を開催したが以後休止し現在は一、二回錦木宅に研究會を催して居る。

〔顧問〕錦木清方〔幹事〕渡邊泰次〔會員〕伊東深水、石井滴水、西田青坡、鳥居言人、千島華洋、門井掬水、川瀬巴水、龜永吾朗、笠松紫浪、柿内青葉、山川秀峰、山田喜作、松田青風、小早川清、榎本千花俊、寺島紫明、櫻井霞洞

行人社(洋)

東京市淀橋區東大久保一
ノ三五七、岡田一馬方
電四谷九三三

昭和四年創立。會員の相互研究並に作品發表を目的とす。年一回展覽會を開く。〔會員〕金原五郎、齋藤二男、安達眞太郎、中村節也、白石隆一、倉員辰雄、新道繁、佐藤章、水船三洋、井上脩、福原達朗、岡田一馬、小林榮

金工作家聯盟(工)

京都市上加茂岡本町
黒井光珉方

昭和九年三月創立。金屬工藝美術の向上を圖るを目的とし圖案研究會、講演會研究作品展を開催する。(昭和十二年一月京都工藝院の結成に参加し、二月解消された。)

〔顧問〕清水六兵衛、霜島正三郎〔會長〕黒井光珉〔委員〕高瀬好山、大久保鼎湖、今大路長光〔會員〕村田信續、古市垣太郎、高木治郎兵衛、小森寸龍、砂與三、其他十六名

金城畫壇(日、洋)

金澤市第六公園内
石川縣商品陳列所

大正十四年石川縣の畫家に依つて設立さる。繪畫の研究發達を圖るを以て目的とし、年一回公募展を開催する。初め中央より大家を聘して鑑査を行つたが昭和八年より同人に於て總てを處理することゝなつた。

〔會長〕青水外吉〔同人〕市川昌徳、原田太致、八田一路、玉井敬泉、高光一也、田邊榮次郎、中村皓、武藤直信、安井雪光、山科杏亭、紺谷光俊、越田勝治、相川松瑞、淺川修三、澤村冬岳、新納琢川、會友六十六名、特別會員四十六名〔顧問〕岡田三郎助、中澤弘光、荒木十畝、菊池契月、結城素明、吉田秋光、富田溫一郎〔研究部幹事〕工藤作平

錦巷會

東京市麻布區東町四〇
三尾方、電三田四〇七

本會は東美校圖畫師範科卒業生を以て組織し、本部を東京に置き各地方に支部を設けて、會員相互の親睦を圖ると共に技能教育の振興に資するを以て目的とす

る。毎月雜誌「圖畫と手工」を發行する。〔會長〕伯耆平田榮二〔理事長〕三尾與喜藏〔理事〕松岡正雄、三浦直政、倉田三郎〔幹事〕高橋重雄、橋本興家

銀座美術協會(洋)

A 東京市京橋區銀座六ノ二、
房野繁夫方
B 京橋區銀座四丁目三和ビレ
四階銀座聯合會事務所内

昭和十一年二月房野德夫の發起にて發會。〔藝術發表の合理化、藝術行動の實際化〕を趣旨とする。同年四月銀座聯合會後援の下に銀座通兩側商店ウインドウにて洋畫展を開催す。

〔會員〕井手坊也、房野德夫、島津一郎、石川滋彦、木下幹一、川端實、富川潤一、三輪孝、沼田一郎、大貫松三、島崎政太郎、副島秀生、黒田賴綱、眞木小太郎、須田壽、千葉衛、笹岡了一〔顧問〕岡田三郎助〔街頭展贊助出品者〕伊原宇三郎、辻永、寺内萬治郎、大久保作次郎、中村研一、牧野虎雄、安宅安五郎、楠木久太、清水良雄、高間惣七、田邊至、中野和高、小林萬吾

銀濤社(洋)

東京市杉並區荻窪一
ノ二一、武内英男方

香川縣出身の在京洋畫家を以て結成。昭和七年十二月第一回展を開催した。

〔會員〕小林萬吾、猪熊弦一郎、今村俊夫、富田千秋、椿堂芳三郎、和田正夫、柏原覺太郎、川津啓吾、鎌倉靜江、龜井

嘉治、笠井正子、吉田長次郎、武内英男、谷口國介、長尾徹、中村鐵、村上泰郎、沖津泰、熊野俊市、山田等、山尾薫明、藤川榮子、小林兵一、河野通暢、合田小三郎、齋田喬、三谷浩三、白川一郎、篠原薫、平山直隆、森英、氏家次郎、末澤繁信、灘波秀二

くろも展(洋)

東京市大森區田園調布
三ノ五七八、坂本正春方

昭和十年設立。文化學院美術部出身者の組織する洋畫の研究並發表の團體。十一年秋銀座紀伊國屋に第三回展を開く。
〔會員〕木下壽々子、黒田外喜男、鍋谷傳一郎、奥田まち子、近藤五郎、坂本不二、吉原俊藏、坂本正春

偶人社

東京市下谷區上根岸
四五、電根岸三二九

人形藝術の向上を計るを以て目的とする。昭和十一年二月第一回展開催。
〔會員〕佐野光輝、佐久間瑠市、所河春陽、服部貞子、岡山さだみ、富可川多美夫、小杉幸三、津田安太郎、黒川多加詩〔顧問〕有坂與太郎

華嚴社(日)

東京市下谷區谷中坂町
七九、田口勝三郎方

昭和四年四月、故小堀鞆音、小杉未醒、

荒井寛方等の主唱により栃木縣出身の在京日本畫家有志を以て組織す。隔年東京及郷土に展覽會を催し、又隨時、同人以外の同縣出身畫家を網羅せる作品展を開催し、後進の誘導に任ず。
〔理事〕石川幸三郎、田口勝三郎〔會員〕小杉放庵、荒井寛方、松本委水、福田浩湖、關谷雲峯、岡田蘇水、小林草悅、武井晃陵、河内舟人、大貫鏡心

月曜會(日)

東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇、石川方
電下谷八四六六

大正九年一月創立。女流畫家の研究團體で隨時作品發表をなす。
〔會員〕石川丹麗、柿内青葉、長山はく、上野秀薫、淺見松江、原けん

建築學會

東京市京橋區銀座西三ノ一、電京橋一二三二、一
二三八

明治十九年四月創立。同三十八年社團法人組織となる。建築に關する學術技藝の攻究發達を圖り併せて建築に關し社會の向上に資するを以て目的とする。事業として月刊「建築雜誌」及其他圖書印刷物の刊行、建築に關する調査研究、講演會、見學會、展覽會の開催等を行ふ。
〔會長〕佐野利器、會員八千四百餘名。

古伊賀復興會(工)

品川區下大崎一ノ九四

電高輪五六八〇

大正十年三月發會。古伊賀燒の復興を目的とす。三重縣上野町字野畑に古代式登り窯を備へ、會員組織に依り製品を分與す。又昭和十一年武州金澤町野島に登り窯を築造、川崎克指導の下に製作を行ふ。

五月會(洋)

東京市世田谷區成城町
六、田邊門樹方

昭和七年東美校洋畫科卒業生有志を以て結成。年一回展覽會を開く。
〔會員〕石川滋彦、濱口喬夫、田邊門樹、玉置弘三、山口忠助、圓城寺昇、廣田威安、廣田重男

五條會(工)

京都市東山區五條橋東五丁目四六七、清水六兵衛方

昭和五年京都在住の作陶家を以て組織す。相互の親睦、向上を圖り毎年一回展覽會を開催し、又隨時研究會、講演會を開く。(昭和十二年一月京都工藝院の結成に参加、本會は解消さる)

〔顧問〕清水六兵衛〔理事〕清水正太郎、米澤蘇峰、森野嘉光、近藤悠三、浮田樂德〔評議員〕中谷小太郎、瀧本蘇嶺、淺見與志三、淺見隆三、外四十六名

工華社(工)

東京市小石川區宮下町
六〇、深瀬嘉臣方

昭和六年設立。工藝の研究並に發表の團體。年一回展覽會を開く。

〔會員〕長谷川昇、唐杉榮四、笠木敦次郎、内藤四郎、山口寅男、深瀬嘉臣、小柳今朝一、湯川豊、島崎正二郎、下暢

工畫會(工)

京都市中京區樂師新町
西入、梅原榮二路方
電本局一三二三

昭和九年創立。染織圖案家を以て組織し、工畫の創作に努む。昭和十一年春京都市美術館に於て第二回展開催。
〔會員〕小合友之助、横山英明、中村鵬生、梅原榮二路、山田泰三、麻田辨次、佐藤久吉、平尾周史

工藝濟々會(工)

東京市瀧野川區田端町
四三八、香取方

大正十四年三月創立。東西文化合一の基礎の上に新しき工藝美術を創造せんとす。隨時展覽會を開く。

〔會員〕板谷波山、石田英一、六角紫水、飯塚琅玕齋、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、鹿島英二、河面冬山、桂光春、堆朱楊成、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木泉堂、都筑幸哉、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

工 人 社 (工)

東京市世田谷區深澤町
四ノ五〇八、北原千鹿方
電世田谷三〇九一

昭和二年十一月創立。現代意識に立脚した金工藝の創作研究を目的とし、年一回作品展を開催す。

〔同人〕富田稔、大須賀喬、岡部達男、川本吉藏、鴨政雄、鴨幸太郎、各務鐵三、田村泰二、村越道守、信田洋、山脇洋二、安井喜一、松原南海、福田三郎、古橋茂、後藤學一、佐藤潤四郎、北原千鹿

工 友 團 (工)

京都市東山區釜谷通大和路
東入ル、山澤松篁方

昭和十年九月創立。京都在住の各科の工藝家を以て組織し、相互の研究に資し且つ親睦を計るを目的とする。(昭和十二年一月京都工藝院の結成に参加し、本會は解散)

〔幹事長〕 山澤松篁

光 風 會 (洋)

東京市杉並區西荻窪三ノ一二九
太田三郎方、電荻窪二九二三

明治四十五年創立。舊帝展系の洋畫家の團體で、各自の研究、後進の誘導を目的とし年一回春季に公募展を開く。昭和十一年四月第二十三回展を東京府美術館に開催した。

〔會員〕 石川欽一郎、服部亮英、遠山

美術關係團體一覽

一、費約の場合は手数料として二割を本會に申受く

神戸創作圖案協會 (工)

神戸市神戸區榮町通五
ノ三〇、關山金市方

昭和七年五月創立。商業美術の向上を目的とし、研究會展覽會等を開き又商業美術に關する相談に應ず。昭和十一年五月第十四回展を開催す。

〔會員〕梶原庄之助、木野内登、小林正二、關山金市、南正光、上村詩二、渡邊正雄

高知縣工藝協會 (工)

高知市丸ノ内高知縣
商工獎勵館内電四八三

昭和十年三月從來の高知工藝協會を變じて現在の組織に改む。縣下工藝の發達を圖るを目的とし、意匠圖案の改善指導、展覽會、講演會の開催、他展への出品斡旋販路擴張等を行ふ。十一年十一月工藝展開催。會員は工藝作家及販賣者七十五名。

〔會長〕(縣經濟部長)渡邊廣〔副會長〕(經濟課長)廣木三郎、中島祐利

紅 日 會 (日)

東京市下谷區谷中眞
島町七、橋山孝行方

昭和十年松岡映丘門下の創立せる大和繪研究並にその發表機關。同年六月日本橋高島屋に第一回展を開いた。

〔顧問〕服部有恆〔同人〕林雲鳳、橋本明治、河村東次郎、橋山孝行、中村德二、名古屋謙一、森村稻門

構 造 社 (彫)

東京市豊島區池袋二ノ一〇九一
電大塚一八四四(呼出)

大正十五年九月立體藝術の研究及發表を目的として齋藤素巖、日名子實三の兩人を以て發會、昭和二年東京府美術館に第一回展を開いた。同年平井爲成の入會により洋畫部を設け、次で神津港人が入會した。三年構造社彫塑研究所を開設。七年九月第六回展の終了後齋藤素巖退會を宣言、會内に紛擾あり、日名子實三、清水三重三が脱會し、一時同會解散を聲明したが、それを取消して事務所を神津方に移し、彫塑研究所を閉鎖した。八年齋藤素巖復歸し、九年會則を改め新會員、彫塑部三十三名、繪畫部二十一名を加へた。十年五月齋藤素巖帝國美術院會員となる。六月齋藤、濱田、陽三名を残し彫刻部全會員が一時退會したが内十名は留任。同月神津港人退會、又構造社幹事會の決議によつて繪畫部を解消した。十年九月寺畑助之丞退會。尙構造社彫塑研究所は十年より再開されてゐる。

〔會員〕濱田三郎、萩島安二、河村龍興、中野五一、野村公雄、安永良徳、後藤泰彦、後藤清一、齋藤素巖

構 圖 (社)(圖)

中野區野方町二ノ一五
七四、平沼福三郎方

昭和六年三月創立。商業美術の研究團體で「形式的廣告美術の反撃、會員個々の作家的完成」を趣旨とす。毎年展覽會を開く。

〔會員〕今泉武治、池田利夫、岡田富之助、大橋重五郎、津村稔、南齋悌二、野石祐晴、森田博二、松下正治、森本倫夫、小池富久、水越正則、三井由之助、島田乃二郎、榎本映一、平沼福三郎

曠 技 會(彫)

東京市瀧野川區上中里町
一一七、菊池五道方

東京彫工會が大正十三年解散して日本美術協會に合併後、第七部の牙彫家が大家會を組織、後曠技會と改稱したものである。象牙彫刻の向上に努め展覽會を開催する。本邦唯一の象牙彫刻家の團體。

〔會長〕子爵錦小路頼孝〔委員長〕吉田宗齋〔副委員長〕森田藻己、中山昇民

〔會計〕菊池五道、堀志光〔委員〕竹内士生、菊池親章、吉田尙秋、成川旭舟、松田道直、小林昇雲、中村鳳堂、藤田寬堂、安藤文雅、吉橋正風、矢澤寛秀、天谷美山、富岡璋雄、淺井弘雄、田中秀行、石黒行鳴〔正會員〕高木芳眞、雨宮道慶、稻田一郎、高橋義章、今井雅邦、時田樂民、宮澤良舟、山路直春、小宮龍堂、鬼

澤丈二、曾村公佑、成川義秀、高橋寛民、鈴木壽川、荒木周光、石坂壽康、田中宗秀、早野玉山、石坂信綱、村松光玉、田中恆之、鈴木道海、大内藻水、石井道良、大内玉藻、松田春光、鈴木壽起、長谷川照美、土屋蘇大、金田正廣、櫻井廣晴、溝呂木博之、志浦光廣、鹽田光玉、小林行光、關芳仙、富岡博延、三宅明濟、矢口秀之、鈴木廣陽、奥田浩堂、川俣善三郎、大野正信、柴田芳之、平賀明吟、原口雅年、原英次郎、山川保正、宮川照雄、野村光正、小川流水、大木東城

國 畫 院(日)

東京市小石川區雜司ヶ谷町
一二二、松岡映丘方

我が民族精神の精華たる古典の素養に基いた新興藝術の創造を目的として昭和九年十月松岡映丘盟主となつて設立す。事業としては研究所を設けて國畫の技術的教習と學術的攻究に努め更に展覽會を開催して盟主同人の作品を發表する。研究所は當分松岡映丘の畫室を開放して之に充て又古典の研究に關しては洋畫家たと彫刻家工藝家たとを問はず廣く同志を迎へる。又同人の官設展覽會への出品は個々の自由とす。

〔盟主〕松岡映丘〔同人〕服部有恆、山口蓬春、小村雪岱、吉田秋光、穴山勝堂、岩田正巳、狩野光雅、高木保之助、吉村忠夫

國 畫 會(洋、彫、工)

東京市品川區北品川三ノ三
一二益田方、電高輪三〇三六

大正七年一月小野竹喬、土田麥僊、村上華岳、野長瀬晩花、柳原紫峰の五名は從來の文展の藝術に飽き足らずとなし、竹内栖鳳、中井宗太郎を顧問として國畫創作協會を設立。爾來每年秋季に東京及京都に於て協會展を開催し來り又入江波光はじめ數名の若い作家を同人に推舉したが、大正十五年梅原龍三郎、川島理一郎の兩名を迎へて第二部を新設し更に富本憲吉、金子九平次を加へて彫刻と工藝美術を第二部に置いた。その後會の經營維持困難となり、昭和三年七月終に國畫創作協會は解散となつたが、第二部は其儘留つて、國畫會と改稱し、大橋幸吉、梅原龍三郎、川島理一郎、金子九平次、富本憲吉、山脇信徳の舊會員に新に高村光太郎、椿貞雄、河野通勢の三名が参加し、翌昭和四年「第四回國畫會展」と稱して洋畫、彫刻、工藝に亘る公募展を開催した。爾來同展を繼續して昭和十年第十回展に及ぶ。十年五月帝國美術院改組に際し梅原龍三郎及富本憲吉は新帝院會員に任命された。同年六月川島理一郎は同會を脱退した。

〔會員〕青山義雄、梅原龍三郎、大橋幸吉、柏木俊一、河野通勢、清水多嘉示、椿貞雄、辻愛造、別府貫一郎、宮坂勝、山下品藏、山脇信徳、川西英、平塚運一

(版畫)、恩地孝四郎、高田博厚、富本憲吉、バーナード・リーチ〔會友〕池邊貞喜、仰木茂、仰木ゲルト、大谷房吉、大森啓助、久保守、佐藤豊吾、佐藤哲三、立石鐵臣、土田文雄、長谷川春子、平塚運一(繪畫)、中村博、野島照正、益田義信、眞垣武勝、富田重雄、武者小路實篤、村上巖、山田正、山村誠、棟方志功、本郷新、山内壯夫、石井恆、奥村博史、ビー・ハリハラ

同會第十二回展出品規定抜萃

一、本展覽會は東京及び大阪に於て左記の規定に據り開催す

一、本展覽會は何人と雖も自己の製作したる繪畫、彫刻、美術工藝品、版畫を出品することを得

一、會場及會期

東京府美術館(四月十一日―廿七日)

中之島朝日會館(五月廿五日―六月三日)

一、出品作品はすべて鑑査を行ひたる上陳列す

一、鑑査審査は本會々員會友其の任に當る

一、陳列中の作品を審査し卓越せる作品に對しては國畫會獎學金及褒狀受領者を贈る

一、國畫會獎學金及褒狀受領者は翌年一回に限り出品の内一點を無鑑査とす

出品規定

一、出品作品に對しては左記の手續料を要す

一點毎に金五十圓

一、出品作品は必ず本會所定の出品目録及び出品手数料を添へ昭和十二年四月五日、六日の兩日午前九時より午後五時までの間に上野公園東京府美術館内本會臨時事務所に搬入せらるべし

一、地方出品は豫め三月二十五日迄に目録及び上記の手續料を添へて東京新宿驛前(淀

橋角寄二丁目三八）加藤運送店（電四谷一四九〇番、振替口座東京三九九四二番）に着する様に送附せらるゝを要す（地方より會場宛に發送せられたるものは受理し難きことあるべし）

一、出品作品はそれぞれ陳列に適當なる装置をなし、また其の裏面に本會所定の出品票（正副）に題名氏名等を明記の上貼附せらるべし

一、出品作品の撮影印行等の權利は本會是を保留す

一、鑑査に入選せざる出品作品は鑑査結果發表後出品者に通知す。通知後五日間以内に通知書と引換に搬出せらるべし。若し通知期間を経過するも搬出なき時は運賃先拂にて送附すべし

一、出品作品賣約に對しては出品者は實價の一割但し工藝は二割を手數料として本會に收むべし

國際人形協會

東京市品川區南品川三ノ一
五一七、電高輪六四七〇

昭和十一年十一月發會。日本人形の國際的進出、人形製作技術の指導、人形の普及等を目的とす。

【副會長】有坂與太郎【理事】山村耕花
横山正三、成舞平兵衛、塚本靖、岡本綺堂

國風畫會（日）

東京市杉並區天沼
二丁目三一

昭和五年十一月創立。倭繪の進歩發達を圖るを以て目的とす。創立後間もなく

同人一同の謹作に係る伊勢物語繪卷を陛下に献上す。毎月研究會を開き又隨時作品發表を爲す。

【會頭】子爵入江爲守【幹事】岩田豐磨
【會員】安田毅彦、伊東紅雲、磯田長秋、大坪正義、棚田曉山、津端道彦、川崎小虎、永井幾麻、前田氏實、小山榮達、荻生天泉、森村宜紹、公文蘆淵、兒玉輝彦

國民美術協會

東京市本郷區湯島切通坂町
五一、電小石川一一七七

大正元年、第六回文展洋畫部の出品者懇親會の席上「美術全部門を包容する協會組織」の設立が發議され、翌二年三月創立總會を開催、森林太郎、黒田清輝、岩村透、松岡壽、和田英作の五名が理事となつた。同會は作家並美術關係者を以て組織し、繪畫（日本畫、洋畫）彫塑、建築、裝飾美術、學藝の五部を設置し、藝術家共通の利益擁護並美術の社會的普及を圖るを以て目的とする。既往に於ける主要なる業績は大正年間に於ける美術館建設、美術學校改革、裸體畫取締り、文展工藝部増設等の美術行政上の諸問題に關する政府當局への進言及數回に互る佛蘭西及獨逸現代美術展覽會の開催等で、尙前後十二回に互り本會員の綜合展を開催したが昭和三年以後中止となつた。

【會頭】子爵大河内正敏【主事】石井柏亭、太田三郎、加藤靜兒、神矢教親【理事】子爵

大河内正敏、石井柏亭、太田三郎【主計】加藤靜兒、神矢教親【常議員】石井柏亭、石川確治、太田三郎、加藤靜兒、神矢教親、黒田鳴心、武石弘三郎、前田公篤、坂井義三郎、佐藤功一、島田墨仙、長野宇平治

黒牛會（洋）

東京市澁野川區澁野川町
六八五、渡邊光徳方

昭和三年創立。毎年一回展覽會を開き油繪、水彩、版畫等に互る會員の創作を發表す。

【會員】五味清吉、前田慶藏、高嶋野十郎、小室孝雄、佐藤醇吉、渡邊光徳

黒樹社（工）

東京市豊島區池袋二ノ
一〇二六、松田權六方

昭和六年の結成にして、漆藝研究の團體。毎年展覽會を開催する。

【會員】太田自適、岡本昇三、高井白陽、松田權六、福澤健一

黒色洋畫展（洋）

會期中事務所 東京市銀座
紀伊國屋書店美術部

昭和十年三月結成。「新精神にもとづく純粹藝術の綜合」を目指す。毎月展覽會を開催する。

【會員】野原隆平、小野里利信、清野恆、内山義郎、山本敬輔、山本直武

早苗會（日）

京都市釜山二條下ル
三宅風白方

故山元春舉の遺業を繼承す。年一回展覽會を開催し、又月次研究會、講演會を開く。

【會長】川村曼舟【參與】山元清秀
【評議員】庄田鶴友、山下竹齋、玉舎春輝、久保田竹文、西井敬岳、林文塘、高橋秋華、小村大雲、岡文濤、船川華州、伊藤淡水、植中直齋、山元櫻月、中島春鷗、小早川秋聲、岡田泰祥、中村春楊、柴田晚葉、古谷一晁【常議員】玉舎春輝、山下竹齋、古谷一晁、堀江春露、繁本一洋、武田鼓葉、山本倉丘、川俣公邦、齋藤紫山、三宅風白【幹事】中野草雲

佐賀縣工藝協會（工）

佐賀縣經濟部商工課内

昭和十一年六月設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。

【會長】佐賀縣經濟部長

彩交會（日）

名古屋市中區熱田東町
字玉井六四、石川英風方

大正十年創立。舊稱愛土社。名古屋市中在の京都繪專出身者の組織する會で中

京畫壇の中堅を成す。昭和十一年七月現稱に改む。年一回展覽會を開く。

〔會員〕 織田香逸、和田青南、大岩聚星、大竹敬康、喜多村麥子、山田政春、奥村華雄、小寺金彦、青木草生、稻垣鈞月、淺井正臣、塚本香湖、松本竹根、鬼頭策、白作香穂、豊島司城、安藤美雪、黒田典夫、野倉操仙、山本光文、大嶽知弘、石川英鳳、準會員七名

彩々會(洋)

東京市京橋區銀座五ノ四種田ビル
今口憲一方、電銀座二〇四、一五〇五

昭和十一年三月從來の「新寫實派」を解消、新に數名の會員を加へて結成。年數回作品發表を行ふ。

〔會員〕 今口憲一、一木萬壽三、岡本貞四郎、三芳悌吉、松島正一、高坂元三及川文吾、足立暢

埼玉縣工藝協會(工)

埼玉縣廳商工課

昭和九年七月創立。縣下工藝的産業の發達を圖るを目的とし縣下の業者約三十名を以て組織す。展示會、講習會の開催出品斡旋、意匠圖案の配布等をなす。

〔會長〕 (經濟部長) 遠山信一郎、〔副會長〕 (商工課長) 鈴木直人〔幹事〕 辻野秀夫、大成常太郎、村上辰夫

緋工會(工)

京都市岡崎北御所町
三七、山鹿清華方

昭和二年四月創立。染色刺繡工藝の發達を計るを目的とし、室内裝飾品及服飾の研究をなす。毎年東京、大阪、京都に於て展覽會を開催し、其他見學、講演、製作等の依頼に應ず。十一年十一月第二回服飾美術展を大阪大丸に開催した。(昭和十二年一月京都工藝院の結成に参加、本會は解散)

〔會員〕 石田玉英、井下阿木良、井口紀、岩崎眞也、長谷川文平、林雨染、馬場笛山、星流、小合友之助、太田光嶺、長村華城、横山英明、田中初雄、田中貞造、田井修一、村田春祿、中村鶴生、山鹿清華、山崎茶平、安竹聖果、福村健、悟道卯一、駒井宗悦、皆川月華、島田勝四郎、平尾周史、龜山竹司、今村冠峯

挿繪俱樂部

東京市澁谷區代々木
木山谷町一三四

挿繪の向上並挿畫家の權利擁護を以て目的とし、昭和十一年五月創立。同月著作權審議會に著作權法中に挿繪に關する條文を加へられ度旨の決議書を提出した。

〔顧問〕 錦木清方、小杉放庵〔理事〕 石井鶴三、岩田孝太郎、林唯一、河野通勢、中川一政、中村岳陵、名取春仙、小村雪岱、木村莊八、須藤重〔監事〕 小川倩霞〔主事〕 中島重太郎

同俱樂部規約抜萃

總則

一、本會は挿繪俱樂部と稱す

一、本會は挿繪畫家の結束と特に作品の向上と進歩と發展とに努力を拂ひ更に各自の權利擁護を以て目的とす

事業

一、本會は左の事業を行ふ

A 挿繪畫家に關係ある法規の改善及び其の調査研究、B 會員相互及び文藝家との作品上又は親睦の意味の會合、C 挿繪圖書館の設置及び經營、D 研究會、E 展覽會、F 挿繪畫の認定、G 機關紙發行及び出版、H 挿繪の仲介、I 其他

細則

一、本會は新聞雜誌社を初め文藝家との連絡機關として左記を表明す

一、挿繪は畫家の創作なり

二、挿繪はその一部なりとも他の出版物その他に利用する時は挿繪作者の諒解を得るに非ざれば之を爲すを得ざること

三、挿繪執筆の際、各自に本文作者及新聞雜誌社等との間に版權又は原畫の返還、或は原畫の保存その他に關して協定するものとす

四、作品向上の見地から製作に要する時日を見越し原稿の廻付を要求する事

一、本會機關紙は月刊とし「挿繪」と稱し會員の作品及び參考作品並に挿繪に關する記事掲載し更に廣く年鑑事項をも載録し、會員及文藝家、新聞雜誌社等に寄贈し一般に發賣す

一、連續挿繪執筆中本文作者又は新聞、雜誌等との都合にてその挿繪畫家を變更する場合本會々員にしてその後繼を依頼されたる時は會員相互の親睦を計る爲之を拒絶する事

一、會員の作品又はその他に關し法律的事項を委任により諸般の交渉に當る。その着手の時、法律顧問の査定金を納入するを要す。之により會員が利益を得たる場合はその利益の内本會一割、法律顧問二割の配當を納入する事とす

一、本會に入會せんとする者は會員三名以上の紹介により理事會の決を俟つものとす

三春會(洋)

東京市世田谷區玉川
澤町二ノ六六六、大澤方

昭和三年の東美校洋畫科卒業生を以て組織。十一年三月東京府美術館に第三回展を開く。

〔會員〕 岩田芳助、伊勢幸平、波多野勝好、二宮不二磨、和佐良顯、大澤昌助、奥村義雄、加藤顯清、飯島誠二郎、勝見謙信、田中致美、田中孝夫、田淵巖、竹田讓、中井惣之助、野崎龍雄、山村孝太郎、山口猛彦、安田岩次郎、丸山清六、松原勝、福島順之助、小松原義則、天野武吉郎、淺井景一、佐藤文雄、佐藤功、佐川源治、三木辰夫、加藤久幹、原田直康、關谷陽、杉山榮、鈴木重成、林清

三條會(工)

京都市下京區白川筋
三條南、伊東陶山氣附

「京都陶藝の故地三條京田口に依つて作陶に精進する」陶工六名を會員とする。展覽會を開く。

〔會員〕 伊東陶山、伊東信助、楠部彌一、道林俊正、宮永東山、宮永友雄

瑠々會(日)

東京市日本橋區高島屋美術部

高島屋美術部の主催する日本畫發表の團體。昭和九年十二月第一回展を開催す
【會員】 西山翠峯、楠木清方、菊池契月、西村五雲、松岡映丘、結城素明

産業工藝振興會(工)

大阪市住吉區相生通
二ノ三七電或一九四

大阪府工業獎勵館助成の下に産業工藝に關する調査、指導獎勵、海外紹介を行ひ月刊「産業工藝」を刊行す。

【理事長】 藤田九章【理事】 長島治三郎、金田泰匡、佐野一致、上田儀一

産業美術振興運動

廣告美術作品展覽會

大阪市北區堂島大阪
毎日新聞社事業部内
電北五五〇〇

大毎事業部の主催する産業美術振興を目的とする展覽會で、年一回新聞廣告圖案並にポスター圖案的懸賞公募による展覽會を開催す。昭和十一年第六回展を行ふ。

十一年度同展募集規定

一、應募作品はすべて創作未發表のものに限る

一、應募作品は落選と雖も返却せず、版權は一切本所に歸す

一、應募作品の大きさは新聞廣告圖案にありては最大限を一ページ最小限を全六段の縦半分または全三段とし、ポスター圖案は特定のものを以外に制限せず、たゞし兩者何れも飽く迄實用を目的とするものなること

美術關係團體一覽

一、應募作品は圖案、寫眞、漫畫の何れかを選擇するもこれらを適當に配合するも任意にしてその枚數に制限を設けず
【募集作品種目】

第一部、新聞廣告圖案黒一色または一部彩色、彩色の範圍は縱八寸四分、横四寸一分(曲尺)に限る

第二部、ポスター圖案(彩色隨意)但し一部、二部共課題は本社指定のものに限る(課題) 六月二十五日より七月末日迄に特定マーク入りをもつて順次掲載する參加廣告主提出のものによる

(送り先) 應募作品の裏面に住所、氏名、畫題、種目を明記し大阪毎日新聞社事業部内廣告美術作品募集係宛送附のこと
(募集締切) 昭和十一年九月十五日締切
(展覽會) 昭和十一年十月下旬、大阪、名古屋、静岡、東京の四市に於て展覽會を開催の豫定

(賞品) 應募作品は審査の上課題各商品毎に入選作品を決定入選狀並びに大毎賞を授與し特に優秀なるものに賞金(細目略す)を呈す
(審査員) 奥村信太郎、霜島正三郎、堂本印象、藤田嗣治、池部鈞、北尾鐵之助、世川憲次郎、清澤巖

燦木(社)(日)

東京市板橋區中村町三ノ六二二、東谷桃園方

大正十五年五月創立。東美校圖書師範科出身の在京日本畫家有志を以て成る。年一回展覽會を開く。

【會員】 穴山勝堂、山田義雄、東谷桃園、松垣龜夫、新田梨花、小林澄心、福宿一穂、中居良次、藤原芳春、大島正記

伊藤昇、他準會員四名。

四行會(洋)

東京市豊島區池袋四ノ四四五
齋藤福藏方、電大塚二五〇一

獨立展所屬の作家四名を以て組織し、年四回作品發表を行ふ。

【會員】 竹中三郎、中尾彰、佐藤英男、池田金之助

四皓會(洋)

東京市日本橋區高島屋美術部

高島屋美術部主催にて年一回展覽會を開催す、昭和八年第一回展を開いた。同十一年七月會員滿谷國四郎逝去。

【會員】 藤島武二、岡田三郎助、和田三造

滋賀縣工藝協會(工)

大津市三井寺縣物產陳列場、電大津一九

昭和十年六月設立。縣内在住の工藝品製作者並關係者を以て組織し、縣下工藝の向上並産業的進出を圖るため、懇話會、作品展覽會、作品互評會等を行ふ。

【會長】 滋賀縣商工水産課長

滋賀圖案會(工)

大津市三井寺縣物產陳列場、電大津一九

昭和三年創立。滋賀縣内各指導機關に於ける圖案關係技術者を以て組織す。縣

内物產及工藝品の意匠圖案的向上を計るため展覽會、講演會の開催、現地指導視察旅行等をなす。

【會員】 村瀬眞治、深津和美、吉川策之助、新井武治、廣瀬義景、坪井明、西村德行、藤田幸助、宮崎正治

自由學園工藝研究所(工)

東京市豊島區雜司ヶ谷六丁目

自由學園卒業生を以て昭和五年創立す。工藝品の創作並に發表をなし、八年より東京、大阪、名古屋、神戸等に展覽會を開催す。

時習園(工)

京都市東山區五條橋東四丁目、淺見五郎助方

大正九年十一月創立。嶄新なる意匠圖案的創作並に其工藝品への應用を研究するを以て目的とし、年一回作品發表を行ふ。

【顧問】 中澤岩太【指導者】 霜島正三郎【會員】 澤田宗山、稻葉七穂、淺見五郎助、井本米泉、小川文齋、浮田榮徳、中谷小太郎、池田泰山、淺見隆三、米澤蘇峰、井田宣秋、平井香秋、櫻田光可、平野泰三、西澤玉舟、永野金泉

七絃會(日)

東京市日本橋區三越美術部

昭和五年創立。毎年一回作品發表をなし、十一年十一月第七回展を開く。

〔會員〕 鋪木清方、小林古徑、菊池契月、安田毅彦、前田青郎〔物故會員〕 平福百穂、速水御舟、土田夢徳

七 彩 會(洋)

東京市大森區馬込町東三ノ八二二、長谷川春子方

昭和十一年一月結成。各派七名の女流作家の組織する洋畫發表團體。同年東京大阪、名古屋等に四回の作品發表を行った。

〔會員〕 橋本はな、藤川榮子、三岸節子、佐伯米子、遠山陽子、島あふひ、長谷川春子

七 人 社(圖)

東京市牛込區東五軒町二岸秀雄方、電牛込四二七

大正十三年杉浦非水に師事する七名にて發企、昭和元年東京三越に於て第一回創作ポスター展を開催した。圖案研究商業美術、裝飾美術、挿繪、一般圖案等をなす。十一年五月同會第十回展として新宿三越に、杉浦非水圖案生活三十年記念展を開いた。

〔會員〕 岸秀雄、岸信男、野村昇、新井參夫、關口謙輔、小池巖、金丸重嶺、原萬助、須山浩、田中富吉、毛利滋、小川金重、金田德郎、野依健、前島誠一

漆 工 藝 社(工)

東京市王子區豐島町七三二

昭和八年太齋春夫、漆膜、漆繪膜蛇皮漆加工法の研究を完成し、翌年特許許可を受けたが同年九月小澤秋成を主宰者として同社を結成し事業を起す。漆工の勃興及び建築、家具工藝等各方面に對する漆の進出等に努む。十年十一月東京府美術館に第一回展を開いた。

〔主宰者〕 小澤秋成

静岡縣美術協會(日、洋、彫、工)

静岡市江川町一一
電一四九六

地方美術の向上を圖る目的を以て昭和九年十一月静岡縣出身並に在美術家を以て組織す。年一回静岡市に於て日、洋彫、工の四部に亘る綜合公募展を開催する。

〔總裁〕 静岡縣知事〔會長〕 尾崎元次郎〔常任幹事〕 高島茂雄

十一年度同會展規則抜萃

一、本會の展覽會は左の四部に分つ

第一部(東洋畫)、第二部(西洋畫)、第三部(彫刻)、第四部(工藝)

一、本會第二回展は昭和十一年十月十五日より十九日迄静岡市公會堂に開催す

一、本會出品は會員作品の外一般公募をなすものとす

一、公費作品は會員中より審査員を定め之を鑑査す

一、審査員の銓衡は毎年幹事會にて定め本會會長より依頼す

一、第二回展覽會審査員は左の四氏とす

(第一部)近藤浩一(第二部)栗田雄(第三部)杉本宗一(第四部)芹澤銑介

一、出品點數は會員は一人一點但し展覽會費として金一圓を申受くるものとす。會員外出品者は出品料として一點に付き金一圓也を申受くるものとす(但し點數は制限せず)

一、審査の結果特に優秀と認めたるものは會員には知事賞、市長賞を一般出品者には静岡縣美術協會賞を授與す

一、美術協會賞授與者は學年度の本會展覽會に無鑑査出品の特典を得

一、本會に出品せんとする者は出品目錄を添(別に制定せる期日内に事務所又は會場に出すべし)

一、賣約せられたる出品物の代價は本會一旦領收し閉會後本人に交附すべし但し賣價の割を本會手数料として申受く

一、地方出品は所定の出品料(會員は展覽會費)を相添へ運賃元拂にて静岡市天王町石川額練店方へ十月十日迄に到着する様發送すること、但し輸入・出手手数料として一點金二十五錢也を別に添へること、右出品に關する形式不備のものは受付ざる事あるべし

實在工藝美術會(工)

東京市本郷區駒込林町一五五
高村豐周方電小石川一一八二

昭和十年十月創立。從來の帝展第四部の鑑賞本位にのみ向ふ傾向に飽き足らずとなし、「工藝の實在性」に新境地を開拓するを目的とする。十一年度より春季公募展、秋季同人展開催。

〔會員〕 豐田勝秋、河村喜太郎、吉田源十郎、高村豐周、内藤春治、山崎覺太郎、丸山不忘、新井謹也、佐藤陽雲、木村和一、廣川松五郎

芝浦工藝會(工)

東京市芝區芝浦一
東京高等工藝學校内

東京高等工藝學校出身者及び同校關係者を以て組織し、會員相互の親睦を計り併せて本邦工藝の發展に資するを目的とする。年四回會報を發行する。

〔會長〕 鎌田彌壽治〔幹事〕 杉山豐祐、益田森治、星野幸衛外十三名。會員一四三名。

島根縣工藝協會(工)

松江市殿町島根縣物產獎勵館内、電四四五

昭和九年七月創立。同縣の工藝振興を計るを目的とす。縣内の工藝家、圖案家及販賣業者等を以て組織し、工藝品及意匠圖案の調査、展覽會、競技會の開催又は助成、内外展への出品斡旋等を行ふ。

〔總裁〕 島根縣知事〔會長〕 縣經濟部長

下 萌 會(日)

東京市牛込區若宮町二九川合玉堂方

明治三十二年川合玉堂門下長流畫塾々生によつて組織さる。毎月一回定期研究會を開催し、又隨時展覽會を催す。

〔理事〕 長野草風、菊池華秋、松本姿水、佐々木尙文、今中素友、兒玉希望、大島佳山、伊藤馨浦

主線美術協會 (洋、彫)

(繪畫部事務所) 豐島區西巢鴨
四ノ八八、高間惣七方、電大塚
四〇六一 (彫刻部事務所) 澁谷
區代々木初臺町五九四安藤照方

昭和十一年三月東京美術會高間惣七、橋本八百二、堀田清治等は「煩雜な團體的雜事から離別して一意各個の純粹な藝術的精選に全力を盡すことに決心しました」と聲明し、同會を脱退、主線協會を結成した。翌月安藤照等の組織する彫塑團體現人社と合して名を主線美術協會と改む。同會は「藝術の科學の獲得」を主唱し、その團體の機構をして「時代の必要に依る繪畫形體の創作」に對する組織的研究會たらしめ、その研究成果の「發表機關としての展覽會」を開催する。十一年十二月第一回公募展を開催した。

〔會員〕(繪畫部) 岩瀨富士雄、市川加久一、井上自助、橋本八百二、堀田清治、土肥原三千喜、大川武司、大崎泰、高間惣七、高野眞美、染木照、副島秀生、中尾達、牛島憲之、上田健一、山野正、益山雅衛、前田喜男、房野德夫、小出廣通、手島貢、酒井嘉久、溝江勘二、三輪孝、三井正登、水澤決、三宅策郎 (彫刻部會員) 泉谷喜一郎、長谷川樹藏、堀江越、小笠原貞弘、大屋義昌、渡邊徹、田中林藏、中野右左人、成瀬藤治、村田勝四郎、松田尚之、藤澤古實、古屋太郎、小室達河内山賢祐、岸崎夜光、安藤照、荒居徳亮、三澤寛

美術關係團體一覽

同會第一回展公募規定

- 一、出品受付期日は昭和十一年十二月三、四兩日とす
- 一、出品受付場所は東京府美術館
- 一、出品に對する作品の運賃は總て自辨のこと
- 一、出品作品は未發表のものとする
- 一、出品點數は一人三點以内とする
- 一、出品者より出品手数料として金壹圓也申受く
- 一、出品作品は審査(繪畫部(本年度)高間惣七、堀田清治、橋本八百二、彫刻部(彫刻部合議員)の上之を陳列するものとする
- 一、陳列せる作品は如何なる理由あるも會期中作家の自由に取扱ふを得ず
- 一、出品作品の不可抗的紛失若しくは破損に對しては本協會一切其責に任ぜず
- 一、出品作品賞約の場合には手数料として一割を申受く
- 一、繪畫部審査優待方針
- 一、鑑査は作家の日常の畫生活に重點を置く
- 一、出品者の製作態度に接する目的の爲め一例としては其の作家の意見を聽く事もある
- 一、個々の作品に對しては未完成なるも進歩的にして將來性ある作品は特に協會の性質上、出來得る限り此れを認む
- 一、各自作家の個人的、自由な立場を尊重するが故、從來の授賞、無鑑査、會友制度を廢す
- 一、出品者は研究會に出席する事を得、相互の研究に協力を得
- 一、優秀なる作家を會員として推薦す

朱 葉 會 (洋)

東京市澁橋區下落合一ノ五四〇
大久保百合子方、電大塚四〇三七
大正七年創立。婦人の洋畫研究團體で

年一回公募展を開催する。昭和十一年五月日本橋白木屋に第十八回展開催。

〔會員〕飯守米子、長谷川春子、土肥正枝、遠山陽子、小寺菊子、大久保百合子、大久保爲世、龜高みよ子、吉田ふじを、谷島豐子、谷貞子、中川幸江、八星三代、秋元松子、木下壽々子、喜多春子、宮崎美喜、鹽川時子、清水信子、平岩夏子、伊佐エツ子、一本微子、徳川禮子、高倉孝子、仰木ゲルトロード、黒瀬雅子、山口葉子、町田典子、櫻井その子、島田鉦子、下田愛子

同會展規則

- 一、展覽會は毎年一回東京にて開催す
- 一、本展覽會は會員及女子洋畫研究者の作品を陳列するものとす
- 一、本會は會員協議の上新會員を推舉することあるべし
- 一、本會々員の出品點數は四點以内
- 一、一般輸入者の出品は三點以内
- 一、出品畫の鑑別手数料として一人に就き金壹圓を徴す
- 一、本會々員外の出品畫は總て本會顧問岡田三郎助、安井會太郎、有馬生馬、藤田嗣治諸氏の鑑別を経たる上に陳列するものとす、尙優秀作品に對しては褒狀を授くることあるべし

聚 工 會 (工)

東京市豐島區難同ヶ谷町
一ノ三四七、磯矢阿伎良方
昭和八年解散した凸凹會の會員を中心に昭和十年六月結成した工藝各科の作家の集團で相互の研究並親睦の機關。

〔會員〕磯矢阿伎良、武樋貞波留、田中武雄、多田茂吉、宮井連平、三好弘、清水巖、森羅一郎、〔地方會員〕八井孝二、大原彰、武田武文、松崎福三郎、小泉清一、安倍郁二、高見九藏、山本達次〔客員〕内藤春治

十 年 社 (日)

東京市澁橋區下落合四ノ一六八石田雅秋方
大正十年度東美校日本畫科卒業生に依り組織。昭和十年五月銀座紀伊國屋にて第一回展を開催した。

〔同人〕池田幸太郎、中井三介、石井喜三郎、平岩三陽、石田雅秋、小野踏青、畠山錦成、山崎良夫、長谷川路可、柳晴一、花村晃觀、松島白虹、中村青以、榎本千花俊、遠藤敦三

春 光 會 (洋)

兵庫縣武庫郡本山村田中
二四五、伊藤慶之助方
春陽會、新興美術展の出品者にして、伊藤慶之助の指導下にある洋畫家の集團。昭和九年以降毎年大阪、神戸に展覽會を開催す。會員十七名。

春 虹 會 (日)

東京市日本橋三越美術部氣附
昭和十年京都在住の畫家十七名に依つて組織さる。毎年一回東京、大阪の三越に於て展覽會を開催する。

〔會員〕石崎光瑤、西山翠嶂、西村五雲、堂本印象、小野竹喬、川村曼舟、竹内栖鳳、中村大三郎、菊池契月、上村松園、宇田萩郎、福田平八郎、柳原紫峰、山口華楊、桑本一洋

春臺美術展（洋、彫）

東京市本郷區春木町二ノ二八、本郷繪畫研究所内

岡田三郎助を會長とし本郷繪畫研究所關係者を以て組織する繪畫、彫刻の展覽會で、大正十年同研究所有志に依り赤陶社繪畫展が組織され大正十三年迄四回の展覽會を開いたが、研究所出身者の成長と擴大に因り同十四年之を解散し、改めて本郷繪畫展を組織し、會長に岡田三郎助を、副會長に片多徳郎を推して同年より毎春一回展覽會を開催、昭和五年「春臺美術展覽會」と改稱して今日に至つてゐる。昭和十一年第十一回展を開催した。

春陽會（洋）

東京市大森區田園調布三ノ三五一
足立源一郎、電田園調布二三四六

大正九年秋、藝術の自由を唱へて決然日本美術院元洋畫部を脱退した小杉未醒、山本鼎、倉田白羊、森田恒友、長谷川昇、足立源一郎の六名は同十一年一月、新歸朝の梅原龍三郎を加へ、更に九名の客員を迎へて同會を創立した。發會に際し「春陽會は從來屢々見たる如き既成會への社會的對抗として興らず、單なる藝術家の心を以て因縁相熟したるものとす」と聲明した。翌年五月上野竹之臺陳列館に第一回展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方展を催して居る。昭和四年春陽會研究所を開設、その指導には會員が當る。昭和十年帝院改組の結果小杉放庵新帝院會員に推舉されるに及び同會は六月新帝院に對し第一次の聲明を發表、更に九月に至り「帝展第二部開催に對する試案」を進言したが、此の進言は帝院に容れられず、十一月同院總會後に至り、新帝展は「本會の理想と反する」爲之に参加せず「春陽會は依然純粹在野團體として行動」するとの意味を聲明し、小杉放庵は帝院會員を辭任した。而して山本鼎、長谷川昇、山崎省三の三會員は向後帝院側へ移ることになつたので同會を離脱した。

〔場所〕上野公園東京府美術館に於て開催す
〔鑑査〕出品畫は當會々員之を鑑査す。鑑査公開の意味を以て新聞及美術雜誌記者之に立合ふ

〔審査〕陳列中の作品を審査し、春陽會賞金を贈るべし
〔出品手續〕當會に出品せんとする者は出品目錄に鑑別手数料を添へ四月五日六日の兩日中に上記會場當會受付に差出さるべし。既に本邦に於て發表したる作品は出品することを得ず。出品畫は陳列に適當なる裝置をなし、各裏面に目錄通りなる番號、畫題、價格、氏名、居所を明記せらるべし、目錄及裏面貼附用紙は當會印刷のものたるべし、出品畫を受領したる時は領引證を交付す。地方の出品者は出品目錄に鑑別手数料を添へ便宜上三月三十一日迄に到着の豫定を以て東京市芝區新橋田町十九番地長尾健吉商店宛に發送せらるべし。出品は一般繪畫（素描、版畫を含む）

〔鑑別手数料〕鑑別手数料は一點に付五拾錢とす
〔鑑査選外品〕選外搬出は四月十六日より四月十八日迄に預り證引替とす。右期間を経過したる時は、在東京の出品者には東京市下谷區谷中初音町一ノ二〇黒田運送店（電下谷六二〇四）に托し運賃先拂を以て返送す。地方出品者には右記長尾健吉商店より運賃先拂を以て返送すべし

〔陳列〕出品畫の陳列法は總て當會の定むる所に據る。陳列されたる出品畫は閉會後に非ざれば之を搬出することを得ず
〔出品畫に付ての約束〕出品畫は鄭重に保管すべしと雖も不慮の損害に就ては當會賠償の責に任ずる能はず。陳列品を撮影し複製する場合すべて當會の承認を要す。賣約品價格の一割を當會に收む。陳列畫賣約者は即時に代金を支拂ふか又は價格の三分一以上を手付金として前納せらるべし。破約の場合と雖も手付金は返却せず。買約者には關西閉會後當會より該出品を送達すべし

〔關西閉會〕東京閉會後引續き名古屋及び大阪に於て開催することあるべきにつき出品者は豫め是を承認し置かるべきものとす。此の場合出品畫の返付期限は更に通知すべし但し、出品畫の關西往復費は當會之を負擔す。入選者會期中住所移動せる場合には必ず事務所へ届出でらるべし

女性人形同人

東京市荏原區戸越一二五五

昭和十一年九月發會。趣味涵養のための人形製作を目的とし、年一回作品發表展を開催するほか隨時懇談會、講習會を開く。

〔顧問〕今井邦子、長谷川時雨、岡本かの子、與謝野品子、有坂與太郎、會員二十五名。

女艸會（洋）

東京市中野區鶯宮五四〇七、三岸方

昭和九年創立。主として獨立展出品の女流作家を以て組織し、春秋發表展を開催する。

〔會員〕榎本友子、東山紗智子、廣江ミチ子、本多京、川路美砂子、三岸節子、峰村リツ子、成瀬田鶴子、長尾照子、織田彩子、小川マリ子、大内のぶ子、岡田春魚子、佐川敏子、櫻井濱江、鈴木昌枝

同會第十五回展規定
（期間）昭和十二年四月十一日より五月四日迄

如水南畫會(日)

京都市神田區一ツ橋如水會館内

昭和七年六月創立。如水游心畫談會と稱し如水會員及其家族を以て組織し岸浪百舛居を講師として日本文人畫の創意に努める。同年二月銀座伊東屋にて第一回觀覽展を催した。十一年四月如水南畫會と改稱。會員三十名。

昭和工藝協會(工)

京都市岡崎公園京都市商品陳列館内

昭和二年創立。京都在住の各部門の工藝作家三十五名を以て組織し毎年京都及東京に於て展覽會を開催、昭和十年第七回展を開く。

〔會長〕中澤岩太〔總務〕村上宇一〔理事長〕澤田宗山

昭和工藝美術展覽會(工)

京都市日本橋高島屋美術部

昭和九年三月創立。舊帝展特選級の作家の集團で、會員の制作發表、工藝古美術の研究等をなす。九年東京高島屋に於て第一回展を開催し、以後年一回展覽會を開く。

〔會員〕伊藤隆光、二橋美術、大須賀喬、各務鐵三、香取正彦、吉田醇一郎、高野松山、長野雄志、村越道守、海野建夫、信田洋、山本自燭、北原三佳、宮之原謙、三田村自芳

昭和美術會(洋)

京都市赤坂區青山町六ノ一〇
八、平井武雄、電音山五五七九

昭和三年五月結成。會員の自由製作發表、相互研究を目的とす。年一回展覽會を開く。

〔會員〕蘆原曠、平井武雄、小林茂、藤康三、西村久二、野村百合子

昭和みづゑ會(洋)

横濱市神奈川區岡野町一三一中央圖
畫手工研究所内、電音奈川六二五

水彩畫の振興發達を目的として、昭和十年十月創立。東京其他に於て隨時展覽會、講習會を開催し、現在全國各地に會員、會友併せて百四十四名を擁す。

〔主なる會員〕山口敏男、桂龍雄、青野馬左奈、中島敏男、水谷金造、野村房雄、中岡恒雄、石野隆

上杜會(洋)

京都市豐島區駒込一
ノ二八、藤岡一方

昭和二年度東美校洋畫科卒業生に依り組織、年一回展覽會を開く。

〔會員〕林炳東、張秋海、額水龍、金貞探、譚連登、都相鳳、大丸順衛、池田幸太郎、石井清夫、猪熊弦一郎、植松治郎、荻野映彦、染木照、加山四郎、田村義夫、高橋弘二、大館健三、中西利雄、牛島憲之、矢田清四郎、深井修次、藤岡一、小

堀四郎、近藤啓二、小磯良平、水上信雄、島野重之、白井次郎、日高榮聰、森寅雄、森達雄、菱田武夫、橋口康雄、高野三三雄、岡田謙三、青山襄、高嶋功、瀧波恆雄、中川規矩磨、大月源二、杉浦俊雄、永田一脩、荻須高徳、山口長男、太刀川英次郎

伸更會(工)

京都市新京阪沿線長岡
停留所前、前田良三方

昭和八年十二月創立。京都市立美術工藝學校圖案科出身者の組織する染織美術の研究團體。十一年十二月京都工藝院に合同するため同會の事業一切を廢し、懇親の意味を以て會名を保存することゝなつた。

〔贊助會員〕小合友之助、皆川月華、山鹿清華〔會員〕前田良三、北村正太郎、今西良夫、郷末朝、細木成實、宇野善之助、佐野多景夫、川瀬茂次、新開興作、鳴瀬英明、井關英夫、高橋忠一、八田泰造

晨鳥社(日)

京都市新島九切通南入
西村五雲方

西村五雲社中にて結成し、日本畫の研究並に發表を目的とする。會員凡そ五十名。毎年一回塾展を催し、十一年六月大阪三越に第三回展を開催した。

新古典派協會(洋、彫)

京都市世田谷區玉川奥澤町
一ノ一九、金子九平次方

昭和十一年三月設立。「人間の高貴さと、秩序ある觀念、思想の美しさ」を宣揚する新古典主義藝術運動を起す。四月小展覽會を開催し又月刊「新古典」を發刊した。毎年公募による彫刻、洋畫の展覽會開催の筈。

〔會員〕金子九平次、片山健吉、那須辰造、鹽月赴、渡邊正太郎

新構造社(洋、彫、工)

東京府北多摩郡小金井村
小金井四四八、三村方

昭和十年六月構造社幹事會は繪畫部の解消を決議したが同部は翌月構造社總會を招集、前記の解消宣言を「彫刻部の計畫的なる違犯行動と認め、彫刻部會員を退會者なりとして決議し新に會規を制定して同年十一月第九回構造社繪畫展を公募の上開催した。翌月寺畑助之丞加入。十一年七月寺畑助之丞を代表とする彫塑團體十七會の加盟により名を新構造社と改稱し、更に工藝部を新設して十一月第十回展を開いた。

〔會員〕市川兼治、稻本弘之、戸張幸男、大澤左一、大澤彦六、大泉博一郎、恩田忠一、改井德寛、神山恆、河野文一郎、加藤正己、多比羅榮一、武田芳雄、園部香峰、鍋元治、中村敬次郎、内島親晴、

中郷善太郎、上田重正、内田正男、倉本七郎、山名常人、山本正年、福崎精哉、降旗正男、古賀忠雄、寺畑助之丞、足立重興、三村英一、鈴木正、スエタケタツ〔會友〕葛西康、佐々木延、宇治山哲平、坂部重光〔代表者〕〔繪畫部〕三村英一〔彫刻部〕寺畑助之丞

新興工藝協會（工）

京都市東山工業試験所内

昭和七年創立。京都在住の各部門の工藝作家を以て組織す。

〔顧問〕清水六兵衛、澤田宗山。會員三十數名。

新興獨立美術協會（日、洋、彫、工）

東京市神田區小川町一ノ七章上社舍内、電報田三二四〇

昭和八年九月創立。「創作の自由と獨創」の尊重に立脚し、從來の有鑑査展制度を否定し、作品公募によるアンデパンダン展を開く。

〔維持會員〕萩生田祐曠、林部圭宰、木村一男、小林茂、牧田久義、牧田祥哉、丸野豊、三崎道夫、鈴木清作、山下俊三、知念龜千代、渡邊大壽、大野勝、村松乙彦、寺尾肇、寺村金太郎、佐藤文彦、大沼抱林、青井吉光

會則 拔萃

一、本會は毎年一回美術展覽會を上野府美術館に於て開催す。

一、展覽會出品作品の種類は和洋繪畫、彫塑、美術工藝とす。

一、本會は作家獨自の出品作品に對しては鑑査せず。

一、展覽會に於ける賣約作品に對しては維持會員は賣約高の一割、普通會員は二割を本會に納入すべきものとす。

一、作品點數過剰のため陳列場に收容し得ざる場合は同一出品者の點數を制限することあるべし。

一、展覽會の細則は其の都度之を定む。

一、維持會員は本會の維持發展に力め作品を出品し所定の會費を納入するものとす。

一、維持會員は月額金一圓也を納入するものとす。

新興美術協會

東京市豊島區堀内町五

昭和九年二月創立。學校教育に於ける圖畫、手工、作業科教育の擴充を期し、事業として月刊雜誌「新興美術」を發行し又全國各地に講習、講演、研究會等を催す。全國各府縣に支部百七十餘あり。

〔理事長〕石野隆

新興美術家協會（油彩、彫、彫、工）

東京市杉並區井荻町二ノ一

昭和十年七月、ホクト社の玉村方久斗、笹川巴流夫、平川清藏、船崎光治郎、院展の大内青岡、故木村五郎、國畫會の清水多嘉示、大乘美術の大内青坡等の八名

が發起者となつて「新興精神に據る諸種の藝術運動」及其の造型藝術作品の發表を目的として同協會を創立。同年十月第一回展開催。毎年秋季に公募展を催す。

〔昭和十一年度同會委員〕玉村方久斗、

笹川巴流夫、平川清藏、大内青岡、清水多嘉示、大内青坡、恩地孝四郎〔協議員〕船崎光治郎〔十一年度新會友〕〔彫〕岩崎巴人、村井麗樹、坂井半甫、鈴木貞、山崎外郎、石川勉、五十嵐幸男、村上正夫〔彫刻〕杵谷精一、杉本幸一郎、明田川孝〔油彩〕藤田悟、多田正介、大貫悌二、小林良曹、石川清、田邊德三郎、二階堂顯藏、藤本美弘、野澤武美、濱谷二郎、山田稔、大久保實雄、井上孟

新興美術協會（洋）

京都市上京區紫竹牛若町三〇、田中善之助方

昭和七年田中善之助、若山爲三、國盛義篤により設立。關西洋畫の發達を期し、一派に偏せず、特色ある作家を迎ふるを趣旨とする。毎年一回公募展を大阪及其他に開催する。

〔會員〕田中善之助、足立源一郎、齋藤清二郎、岩崎又二郎、田川勤次、三木明太郎、木下公男、若山爲三、藤堂全三郎、西村鳳山、前田藤四郎、和田歳一、島田福雄、國盛義篤、川端彌之助、伊藤慶之助、佐藤昌胤、山川清、飯田衛。會友九名。

新自然派協會（洋）

東京市目黒區中目黒四ノ一四四一

昭和十年七月小城基門下によつて創立。新自然主義派の研究發達を期す、年一回同人の作品を發表する。

〔主宰〕小城基〔顧問〕荒城季夫、川路柳虹、黒田鶴心、森口多里、外山卯三郎同人三十八名。

新時代洋畫展（洋）

東京市品川區上大崎長者九二七〇、長谷川三郎方

昭和九年四月、現行諸大展覽會の鑑査制度を否定し、左記の同人を以て創設。同展は會員各自の個人展の集合たるの意義を有し、同年五月以降略毎月一回開催されて來た。（十二年三月自由美術家協會の結成により解消）

新制作派協會（洋）

東京市大森區田園調布二ノ八一〇、猪熊弦一郎方

昭和十一年七月、第二部會總會は文展參加を決議したが、從來「帝院の獨立、帝展の解消」説を主張し來つた猪熊弦一郎、内田巖、佐藤敬、中西利雄、小磯良平、三田康の六名は結束して二部會を脱退、七月二十五日脇田和、伊勢正義の二名を加へて新制作派協會を設立した。同年十一月第一回公募展を開催した。

〔會員〕猪熊弦一郎、伊勢正義、脇田和、中西利雄、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康

同會規約（十一年七月廿五日聲明）

一、我々は一切の政治的工作を拒否し、純粹藝術の責任ある行動に於て新藝術の確立を期す

一、我々は從て「反アカデミツク」の藝術精神

に於て官展に關與せず

一、我々は獨自の藝術的行動の自覺に於て我々と背馳すると認めたる一切の美術展覽會に關與せず

一、我々は常に新しき時代の純粹藝術家の結合を與望し年一回以上の公慕美術展覽會を最も嚴格なる藝術的態度に於て開催し以て我々の藝術行動の確立を期す

一、我々は以上の藝術的主張に於て新制作派協會の結成を盟約す

同會第一回展覽規定

(會場)會期昭和十一年十一月十日—十七日。上野公園櫻ヶ丘日本美術協會に於て開催。

(搬入、搬出) 出品は十一月七日(午後一時より四時まで)八日(午前九時より午後四時まで)展覽會場に於て受付。地方出品は十一月一日迄に東京市淀橋區角筈一ノ三八加藤運送店方新制作派協會宛發送の事。選外作品の搬出は十一日、十二、十三、三日内に預り證と引換へに各自御搬出の事。陳列作品の搬出は十一月十八日午前中(尙當日搬出なき場合には當協會より費用先拂ひにて返送す)

(種類、點數) 出品は油繪、水彩にして他の展覽會に於て公開せざるもの限り、出品點數に制限を附せず

(手数料、出品用紙) 一點につき五十錢を搬入と同時に納入の事、地方出品者は前記委託運送店へ作品と同時に發送のこと。出品用紙は必ず規定の出品用紙を用ひ、出品作品裏面には各自畫題、住所、氏名を明記の事

(審査) 本協會々員これを行ふ

(賞約、攝影) 賞約の場合には二割を手數料として本會に納入の事。陳列作品の攝影印行權は本會之を保留す

(作品取扱) 出品作品に對しては本會充分鄭重の取扱ひを爲すも、天災其他不慮の損害に對しては本會その責に任ぜず

新造型美術協會(洋)

東京市本郷區弓町一ノ二五内
藤外次方、電小石川四一六六

昭和九年四月「新傾向繪畫」を標榜して獨立美術協會と絶縁せる同志を以て設立。「新超現實主義」の繪畫運動を起す。十一年一月東京府美術館に第二回展を開いた。

(會員) 島津純一、鈴木綾子、今井滋、中野政行、池ノ内篤人、下郷羊雄、成田重文、藤田鶴夫、長谷川善四郎、内藤外次、内田慎藏(會友) 波田昭三、小林正光、森口靜枝、佐藤憲藏、淺利篤、土井俊夫、鶴澤守路、濱松小源太、神谷嘉廣

新彫塑協會(彫)

東京市世田ヶ谷區野澤町一ノ二四一、元野木昇一方

昭和十年八月二科會彫塑部の故藤川勇造門下、早川巍一郎(後に脱退)、太田三郎、飯島三四二の三會友外九名は故藤川勇造の藝術的主張を繼ぎ新に同協會を組織、二科會と訣別して新帝院支持の立場を取る事となつた。同會は年一回公募展を開催し又海外作家の紹介に努める。十一年五月第一回展開開。

(同人) 飯島三四二、岩田滿平、大川逞一、太田三郎、小田定一、菊池一雄、酒見恆、戸田敬次郎、元野木昇一、中澤安雄、中村米藏、中島武
同會第一回展出品規定抜萃

一、本展覽會は何人と雖も自己の製作したる彫塑を出品する事を得但し公開の展覽會に於て未發表のものに限る

一、出品作品は總べて鑑査を行ひたる上陳列す

一、鑑査は本會同人其任に當る

一、陳列作品中卓越せる作品には賞金を贈る

一、出品者は手数料として金五十錢を本會に納入せらるべし

一、出品作品は必ず本會所定の出品目錄及び手数料を添へ昭和十一年五月六日午前九時より午後五時迄の間に上野公園東京府美術館内本會臨時事務所に搬入せらるべし

一、地方出品は豫め五月五日迄に目錄及上記手数料を添へて所定の運送店に著する様に送附せらるゝことを要す(會場宛に發送せられざること)

一、出品作品の攝影印行の權利は本會是を保留す

新圖案家集團(圖)

東京市目黒區下目黒四ノ九七四、江坂實方

昭和九年十一月帝國美術學校圖案科第一、二回卒業生を中心として「生産美術に對する協同的研究を目的」として設立。年一回展覽會を開催す。

(顧問) 杉浦非水、金須孝、金九重嶺

(會員) 江坂實、櫻井善三郎、河合雄二、野津憲之丞、川勝得三郎、山村一平、遠藤隼兒、山岸孝二
新東京漫畫團(漫)
東京市下谷區下根岸町八六
昭和十年九月創立。漫畫の向上を期す。

し、創作研究の傍ジャーナリズムにも進出す。月一回團報發行。

(主幹) 長充喜朗天

新燈社(日、洋)

大阪市天王寺區勝山通一ノ五四、電天王寺八一九

大正十一年創設。同會の趣旨は「洋の東西を問はず、そのよき處を取入れて我國の新美術として價值ある新日本畫を創作」せんとするにある。創立以來毎年東京及大阪に公募展を開催し、昭和十一年第十四回展に及ぶ。

(主宰) 青木大乗(同人) 北村種三、三井文二、山田兵一、沖中賢吾

新日本洋畫協會(洋)

京都市室町九太町下ル
獨立美術京都研究所内

獨立美術京都研究所の研究生有志の組織する作品發表機關で、昭和十年九月京都美術館に第一回展開開。毎秋展覽會を開く。會員十八名。

新美術家協會(洋)

東京市世田ヶ谷四ノ三〇四、松本弘二方、電世田ヶ谷三九三一

昭和四年設立された鉦人社を同六年改稱せるもので、會員は二科の會友及二科展受賞者である。年一回東京府美術館に同人展を開く。十一年四月第八回展開開。

(會員) 田村孝之介、田崎廣助、中村三

樹男、伊藤繼郎、早川國彦、金子博信、大澤昌助、吉井淳二、高田力藏、田中忠雄、高橋庸雄、中村善策、松本弘二、田邊三重松、古家新、藤井二郎、近藤光紀、荒井一郎、酒井亮吉、清水刀根〔十一年度退會者〕宮本三郎、栗原信〔十二年一月、伊藤久三郎、服部正一郎、柏原覺太郎の三名入會〕

ZIGZAG (洋)

大阪市南區大寶寺町東の丁六〇、川島昇太郎方

昭和五年七月、同人洋畫作品發表を目的として結成。同年十一月第一回展開催。七年彫刻部を設置、八年五月神園會と共に大阪新美術家同盟を結成、同時に彫刻部が分離獨立して「クレイ」(現在の大阪彫塑會)となつた。同年十一月神園會、クレイと共に第一回同盟展を開催、十一年第三回同盟展に参加す。

〔會員〕赤松大祐、安藝稔、藤井光、藤田篤次郎、橋上菁兒、石井元、池島勘治郎、木下公男、川島昇太郎、森島包光、中村眞、谷福太郎、寺田清四郎、吉田一雄、吉田正太郎、横井巖

朱雀會 (日)

東京市赤坂區新町五ノ四三、井上白楊方

井上白楊並白楊塾員に依つて組織さる。昭和九年より毎年春季展覽會を開催する。

〔會員〕井上白楊、本多美恵子、大川時子、上村規兒、星野進、星野一江、辰澤達太郎、辰澤茂次郎〔顧問〕結城素明、小泉勝爾

翠紅會 (日)

東京市中野區本町通リ五ノ一九、星野方

大正十四年星野錫、藤應靜也兩名の幹旋により各畫塾を網羅して結成された女流日本畫家の團體。展覽會を開く。

〔會員〕上原桃畝、陸眞末、山下紅畝、杉本文英、保井正子、永井勝子、西郷松正、木村青畝、笠原冬子、阿久津一枝、宮内英子、江崎照、尾形奈美、山口高子、櫻村靜江、宮島やす子、今井壽々子、谷口佐紀子、小島孝子、安藤ふぢ枝、春日井いく代、青柳世實子

寸土社 (洋)

兵庫縣寶塚局區内米谷、和田正節方

洋畫の研究團體で昭和八年より略毎年大阪に作品發表を行つてゐる。

〔會員〕池永英夫、和田正節、鎗木順三、高岡義次、高岡徳太郎、竹中良吉、向井潤吉、藤本保、安藤金一郎、木下公男、森島忠夫、鈴木總作〔顧問〕柳原一廣〔常任幹事〕和田正節

瀬戸作陶會 (工)

瀬戸市大字瀬戸一五二七

昭和四年創立。瀬戸古來の特技、傳統

的工藝の再興を趣旨とす。十一年東京白木屋に第五回展を開催す。

〔會長〕水野憲吾〔同人〕大江文象、加藤千一、加藤績、瀧川七郎、河本千春、栗木儀三雄、龜井清市、松原廣長、加藤壽郎、水野壽山

瀬戸市陶藝協會 (工)

瀬戸市役所第一部産業課内、電二四〇〇

昭和十一年六月創立。同市の陶工並賛助者を以て組織。事業として陶藝に關する學術並技術の研究、郷土工藝資料の調査、展覽會、講演會の開催、他への出品、圖書刊行、工藝研究獎勵金の交付等を行ふ。

〔名譽會長〕(市長)泉崎三郎〔理事長〕野田茂四郎〔副理事長〕加藤青山〔常務理事〕糸井川孫作〔理事〕加藤華仙、河本礫亭、加藤英一、矢野陶々、龜井清一

青松會 (日)

大阪市南區日本橋三丁目大坂松阪屋内

東西の日本畫家十五名を以て創立。昭和十一年秋東京及大阪松坂屋に第二回展を催す。

〔會員〕伊藤深水、服部有恆、堂本印象、徳岡神泉、金島桂華、中村大三郎、中村岳陵、宇田萩郎、矢野橋村、山口蓬春、山口華楊、築本一洋、福田平八郎、兒玉希望、廣島晃市

青々會 (日)

東京市下谷區谷中初音町二ノ一五、兒玉希望方、電下谷一八二一

昭和七年二月結成。會員の自由製作發表の機關。毎年初夏東京美術俱樂部にて展覽會を開く。

〔會員〕伊東深水、服部有恆、根上富治、兒玉希望、廣島晃市

青集會 (洋)

東京市淀橋區下落合四ノ二〇九六、島津方

昭和七年創立。會員は青山師範附屬小學校の同窓で且つ東美校の卒業生。毎年同人展を開催す。

〔會員〕黒田頼綱、木下幹一、島津一郎、島崎政太郎、楢原健三、中山正義

青樹社 (日)

名古屋市外守山町文化村横山方、電守山一四

舊稱白曜會。毎月研究會を開き、初夏に大展覽會を、秋に小品展を開催す。

〔同人〕豊嶋司城、和田比佐夫、横山菫生、安藤美靈、宮坂一義、嶋谷自然

青龍社 (日)

東京市大森區新井宿四ノ一〇五三、電大森三〇一二

昭和三年川端龍子日本美術院を脱退するに及び、龍子及び其御形塾員の制作發

表の機關として昭和四年六月青龍社創立する。同年九月第一回展を東京府美術館に開催。六年第三回展に際し紹介出品を登用し八年より一般公募制に改む。又同年三月「春の青龍社展」第一回展を三越に催す。翌年落合朗風、川口春波同社を脱退して明朗美術聯盟を創立す。帝院改組に際し龍子帝國美術院會員となるも、社人は「畫業精進の過程の上から、決して二兎を追はず、只管に青龍社に依つて自己を發揮すると同時に、在野團體としての青龍社の主張を一層確立する事に努力する」との旨を聲明した。同社の主張として、常に在來の所謂床の間藝術に對して、「健剛なる會場藝術」の創建を唱へ、又大衆と藝術の接觸に留意して、八年より展覽會に際して入場無料（目錄必買）の新制を採用した。

一、出品作品は未だ他展に公表せざる新作品に限る事。
一、出品作品は陳列の上に於て不體裁の無い様に粹飾の考慮をされること。此の點に不十分の場合は入選後に於て改裝を要求する事を豫約します。
一、輸入作品は勿論慎重に取扱に從事することですが、不可抗力に依つて生じた作品の損害に就ては、本展覽會ではその責任を負ひません。

一、出品作品にして買約された場合、本展覽會に於ては其の一割を手數料として受領します。但し破約の場合は本展覽會に於てはその責任を負ひません。
一、出品に關しての御照會の件は事務所へ御質し願ひます。
清 光 會（日、洋、彫）
東京市澁橋區下落合七三五
昭和八年四月創立。日本畫、洋畫、彫刻家の綜合團體で毎年春季東京と大阪に於て展覽會を開く。
〔會員〕小林古徑、安田靉彦、梅原龍三郎、安井曾太郎、坂本繁二郎、佐藤朝山、高村光太郎
〔責任者〕後藤眞太郎
青 義 會（日）
（會務所）京都市御幸町三條下ル
（研究所）京都市上賀茂坂口町蟻ヶ池畔
大正十年創立。會員は水田竹園門下で、毎月研究會を催し又年一回展覽會を開く。昭和十年十一月研究所を設立した。
〔會長〕水田竹園
〔評議員〕水田硯山、安田半圃、幸松春浦、村上蘭田
〔幹事〕須網雨亭
〔副幹事〕栗田槐山、會員七十餘名。

全關西洋畫協會（洋）
大阪市南區西區町二八、國枝金三方、電東七五一
全關西洋畫界の綜合展開催を目的として設立。昭和二年より毎年大阪中之島朝日會館で公募展を開催す。
〔會員〕古家新、伊庭傳次郎、黒田重太郎、松本銳二、田川寛一、渡邊造酒三、早川國彦、石丸一、小出卓二、鍋井克之、高岡徳太郎、横井禮市、濱田葆光、岩崎重雄、國枝金三、錦義一郎、田村孝之介、山本直治、伊谷賢藏、藤井二郎、向井潤吉、小野藤一郎、塚口正一、山本直治、辻愛造
全國商業美術教育協會
小石川區原町京北實業學校
校內、電大塚六〇四〇
昭和九年十月實業教育五十週年記念事業の一つとして東京府下商業學校聯合會の主催で上野松坂屋に於て第一回商美展を開催し、翌年又開いたが、十一年四月全國商業學校百一校の聯合に依つて本協會を設立した。事業として年一回展覽會を開催し、又商業美術に關し各地と聯絡し教材の交換、頒布等を行ふ。
〔委員〕下記九校の職員。早稻田實業學校、府立第一商業學校、府立第三商業學校、巢鴨女子商業學校、三重縣松阪商業學校、京北實業學校、市立京橋商業學校、昭和第一商業學校、宇都宮市商業學校

セクション・ダール（洋）
大阪市天王寺區悲田院町二五西區方
昭和十年四月創立。同年六月大阪市に第一回展を開催。同十二月大阪新美術家同盟に加盟。同盟展に参加のほかセクション・ダール展（年一回以上）及小品展を開催す。
〔會員〕長谷川初女、伊川寛、井上賢三、小島大輔、小島詰治、中野淑子、西阪修櫻井悦、高橋進、玉澤潤一、田村公子、田村譽志那、上島儀一郎、山口久一
梳 風 會（日）
東京市荒川區日暮里町九ノ一二四
故島崎柳場の榎々亭畫塾門下一同によつて組織され、大正二年以來臨時會員の作品展覧を行つて居る。
〔幹事〕清田柳莊、木島柳鳴、石川綠南、高橋樵場、仲村眞齋
艸 園 會（洋）
大阪市東區徳井町一ノ九、田川方
大正十五年創立。當時の會員は伊藤慶之助、奥村正三郎、小西謙三、大石輝一、和田歳一、辻愛造等で展覽會、講習會を開催し、又研究所の經營を行つたが昭和八年NAGACと共に大阪新美術家同盟を創立、以後同盟に参加して居る。十一年八月艸園會第八回展を大阪市松坂屋に開いた。

〔會員〕抱康子、黒田繁成、松本銳次、前田藤四郎、田川寛一、田川勤次、和田歳一、三崎孝雄、土岐流司、小西清太郎、西雅司、大石輝一、田中惣三郎、三崎六郎、六條篤、浦久保義信

草 芽 會 (工)

京都市東山區山科竹花
塚本方、電田科一五

京都高等工藝學校圖案科卒業生有志を以て昭和五年組織せる各種工藝の研究團體で八年東京に於て第一回展を催した。

〔同人〕川那部澄、塚本繁、赤澤鍼太郎、峯親吉、加藤八洲男、宮永友雄

創 工 社 (工)

大阪市住吉區住吉町一
三〇〇、汎工藝社内

大阪在住の工藝家を以て昭和四年に結成した無絃社は同年八月解消に及んだが、元同人有志が相寄つて同年十一月創工社を結成した。同社の趣旨は優れた美的價値を獲得しつゝ同時に産業工藝に力強い示唆を與へ得るが如き一品製作工藝の意義と權威を確立するにある。隨時研究會、展覽會等を開催す。十一年十一月第一回展を大阪市美術館に開催した。

〔會員〕今井千尋、羽原秋芳、中條義男、川口虛舟、河合壽成、橋外波、田邊小竹雲齋、根箭忠雄、能守安太郎、山本竹龍齋、深田光馬、福岡萍哉、越田尾山、古賀萌々、後藤年彦、會田裕宣、阪口宗

雲齋、平松宏春、森田誠之助、杉田禾堂〔客員〕入江來布、柴崎風卿〔顧問〕白川朋吉

同會第一回展規定抜萃

一、創工社第一回展は昭和十一年十一月十九日より二十三日迄五日間とす

二、會場は大阪市美術館とす

一、會員外の人にして本會の趣旨に賛成する者は賛同出品をなすことを得、本會銓衡委員の銓衡を経て合格したる物に限る

一、出品點數は會員は責任出品三點、賛同出品は其數に制限なし、既に公開したるものは出品することを得ず。但し第二部出品は此の限りに非ず

一、出品せんとする者は本會所定の出品目錄と共に十一月十六日中に別記の場所へ搬入のこと

一、出品は第一部美術工藝品及び第二部産業工藝品とす

一、出品は賣約の取扱をなす。之れに對しては賣價の一割五分を手數料として徴收す。非賣品は其旨出品目錄に記入のこと

蒼 原 會 (洋)

東京市神田區淡路町二ノ一
水谷景房方、電神田一三二五

大正十一年小山周次の勧告に基き日本水彩畫會假研究所の小山良修、富田通雄、中西利雄等に依つて設立された東京三脚會を同十三年改稱せるもので水彩畫専門の研究團體である。各地方に支部を設け地方會員は二百名に及ぶ。

〔在京本部會員〕馬場重次郎、不破章、橋口竹夫、小山良修、小堀進、間所一郎、水谷景房、丸山東美男、室岡市三、松田寅重、中西利雄、野口健司、荻野康兒、

岡田正二、齋藤大、佐藤俊雄、竹内梅治郎、富田通雄、山中仁太郎、山崎政太郎、山口進、吉田千里、山下忠平、原達三、荒谷直之介、倉本七郎、岡田節男、葛西康、荒木茂喜、大下正男、小山周次、多々羅義雄、野澤潤二郎

蒼 潤 社 (工)

京都市上京區中野九太町上ル

昭和十年九月京都在住の各種の新進工藝家を以て組織す。發會に際し「われわれは過渡期の工藝家氣質を清算し内面的に工藝の水準を高め飽くまで純眞明朗に行動する」と宣言した。懇話會、見學等を催し新古工藝美術の研究に努め又展覽會を開く。(十二年一月京都工藝院創立に際し、解散)

〔同人〕井下阿木良、井上彦之助、今大路長光、伊東翠壺、番浦省吾、堂本五三郎、小合友之助、河合榮之助、米澤蘇峰、田中貞造、中村鳴生、魚野自醒、浮田榮徳、黒井光現、楠田撫泉、迎田嘉亭、近藤悠三、清水正太郎、岸本景春、皆川月華、清水祥次、森野嘉光、鈴木貞路

造型彫刻家協會(彫)

東京市豊島區長崎町三
ノ四二三、山内壯夫方

十一年二月創立。科學的造型性に立脚した彫刻藝術の創作を目的とす。同年六月及十二月の二回に互に展覽會を開催した。

〔會員〕芥川永、明田川孝、池上璉、岩崎良平、川口信彦、佐藤邦輔、杉本幸一郎、鈴木利一、清水要、瀧一夫、武内收太、谷本整映、徳力牧之助、新田實、能美八重夫、本郷新、峯孝、宮島久七、柳原義達、山内壯夫、山本常市、木本斌

造型文化協會

東京市中野區本町通六
ノ一八、大島隆一方

昭和九年四月創立。美術批評家を以て組織す。美術批評の研究並に實踐を中心として造型一般の文化的事業を行ふ。

〔會員〕横川毅一郎、荒城季夫、大島隆一、尾川多計〔顧問〕森田龜之助、外狩素心庵

太 蒼 會 (洋)

事務所未定

昭和十一年二月第二部會員有志六名の結成せる親睦並研究の集り。

〔會員〕伊原宇三郎、中野和高、矢島堅土、阿以田治修、佐竹徳次郎、鈴木千久馬

太平洋畫會(洋、彫)

東京市下谷區谷中眞島
町一、電下谷一七九二

明治二十二年創立の明治美術會を同三十四年大改革して其組織を一新し翌年一月太平洋畫會と改稱第一回展を上野公園第五號館に開催した。爾來略年一回公募

展覧會を開き昭和十一年二月第三十二回展を催した。明治三十七年下谷區谷中清水町に洋畫研究所を開設。洋畫、彫刻の指導をしたが、昭和四年研究所を太平洋美術學校と改稱。同九年東京府の認可を受けた。昭和七年四月上野松坂屋に創立三十年記念展を開催した。

〔會員〕 淺井眞、江崎寛友、府川道德、布施信太郎、藤坂太郎、布施梯次郎、早川國彦、平澤定治、堀進二、星野二彦、石川寅治、石井柏亭、池田永一治、伊藤成一、石橋美三郎、飯田實、石井明、鹿子木孟郎、龜高文子、金子保、香取正彦、北島吾次平、桑重儀一、小宮宗太郎、丸山晚霞、間所一郎、松本金三郎、前田眞一、三上知治、光安浩行、永地秀太、中村不折、中野桂樹、野田半三、岡精一、奥瀬英三、小野田元興、大沼靜巖、大内青坡、佐々貴義雄、齋藤俊雄、澤田晴廣、佐藤三郎、澁谷榮太郎、新海覺雄、清水刀根、清水敦次郎、菅谷元三郎、杉本宗一、高村眞夫、高橋虎之助、多々羅義雄、田原輝夫、鶴田吾郎、佃武昭、都島英喜、渡部春也、渡邊正太郎、吉田博、吉田ふじを、安田豊〔會友〕 有川武夫、相曾秀之助、福王誠、畑一夫、堀潔、市原達夫、今里龍生、葛西善造、河本一夫、海洲正太郎、小泉秀松、小坂健三、國澤和衛、小林森次、能見三次、名島貢、中田恭一、三輪捨三郎、水戸敬之助、小倉一雄、齋木生光、坂本不二、島添鶴雄、鹽原啓男、鈴木寛司、田村政四郎、田原利

一、玉井力三、等々力己吉、戸津文雄、土屋穿石、高勝邦劍、吉原甲藏

大潮 會(日、洋)

東京市豊島區駒込町三ノ四〇三、浦崎水錫方

昭和十年創立の大東會を廢止して十一月七日一日設立。全國中等學校の圖畫教育關係者の作品的主張を明らかにし、その中央畫壇への進出を計るを目的として毎年秋季に文部省後援の公募展を開催する。同年十一月東京府美術館に第一回展を開催した。

〔會長〕 嘉納治五郎〔理事〕 阿部七五三吉、多賀谷健吉〔常任理事〕 浦崎永錫〔評議員〕 岩佐新、大下正男、垣見宜修、松垣露雄、藤本詔三、杉山司七、三浦直政

同會綱領

一、全國美術家の作品的主張を明かにし、其の獨立を伸張せしむること
一、埋れたる珠玉を天下に紹介し、其の地位名譽を確保すること

同會展規定

〔資格〕 出品人は在職教員並に美術關係者に限る

〔作品〕 暫て公展に發表したる作品は出品することを得ず

〔點數〕 一人の出品點數は五點迄とす

〔出品料〕 一人に付金二圓とす

〔搬入場所〕 東京市上野公園、東京府美術館北口

〔搬入日〕 昭和十一年十一月十九日、二十日

〔地方出品〕 十一月十日迄に東京市所在の

搬入取扱店へ送付せられたし
〔類別〕 出品畫は洋畫、日本畫とす
〔洋畫〕 油繪、水彩、版畫、素描、パステル、クレヨン等々

〔記名〕 出品畫の裏面には畫題、氏名を明記し本會規定の出品目録及出品料を添へて搬入せらるべし

〔大キサ〕 出品畫の大きき限度は油繪、日本畫は八十號大(四八八寸、三尺七寸)以内とし水彩畫類はデブッド、コックス全紙大(二尺五寸、一八九寸)以内とす

〔装幀〕 装幀は日本畫、洋畫共に完全なる額縁を附したるものとす

〔賞〕 出品畫中優秀なる作品には大潮會賞、美術界賞、其他を贈呈す。受賞せる作家は次回に二點迄無鑑査出品の特典を與ふ

〔審査員〕 審査員は毎年各派權威者數名に依頼す

〔推薦〕 本會の推薦は審査員に詢り決定し、毎回無鑑査出品とす(推薦と雖も出品料を要す)

〔發表〕 鑑査の結果は搬入日より數日以内に發表通知す

〔攝影〕 陳列作品の攝影印行の權利は本會之を保留す

〔搬出〕 選外作品は本會より通知を受けたる日より三日以内に於て通知狀並に受取證と引換に搬出入選作品は展覽會閉會の翌日中に搬出する事

〔賣約〕 賣約成立の場合には手数料として價格の二割を本會に申受く

〔運費〕 出品畫の運賃、荷造費は出品人これを負擔するものとす

〔十一年度展覧會〕 川端龍子、田邊至、牧野虎雄、齋藤與里、川崎小虎、中村研一、藤田嗣治、南薫造

大斗 會(洋)

東京市目黒區三田町一五八橋本太久磨方

昭和十一年三月結成。洋畫の研究團體。年四回展覽會を開催する。

〔會員〕 磯田長敬、橋本太久磨、花谷時子、二宮榮一郎、飛山幸、李仲生、池五郎、青木義容

大日本體育藝術協會

東京市麹町區丸ノ内九ノ内ビルディング三七七 大日本體育協會内、電九ノ内一七九三

體育に關する美術建築音樂及び文學の普及發達を圖るを目的とす。昭和七年及十一年のオリンピック大會藝術競技に參加す。

〔會長〕 男爵森村市左衛門〔顧問〕男爵山川健、岩原拓、平沼亮三

〔審査員(日本畫)〕川崎小虎、鏑木清方、野田九浦、矢澤弦月、松岡映丘、結城素明(西洋畫) 東郷青兒、和田三造、金山平三、中村研一、牧野虎雄、藤田嗣治、小杉放庵、安井曾太郎、南薫造(版畫)

石井鶴三、猪熊弦一郎、裕伊之助、田邊至、山本鼎、小磯良平(彫塑) 池田勇八、藤井浩祐、北村西望、日名子實三(工藝)

豐田勝秋、高村豐周(建築) 土浦龜城、小林政一、佐野利器、佐藤武夫、岸田日出刀(寫眞) 成澤金兵衛(音樂) 信時潔、山田耕作、諸井三郎

大日本製業協會(工)

東京市京橋區銀座西四丁目
五ノ六號、銀座商館第四階
電京橋五五一九

明治二十五年創立。社團法人組織。本

邦製業の進歩發達を圖るを目的とし事業として雜誌圖書の發行、講演會、講習會の開催、調査、建議、公共事業の助長等をなす。毎年一回四月に總會を開催す。京都、大阪、名古屋、九州八幡等に支部を設く。

〔會頭〕 伯爵金子堅太郎〔理事〕 熊澤治郎吉、飯塚誠厚、倉田昌孝、近藤清治、小林作平、芝田理八、永井彰一郎、中原萬次郎、日野厚〔常議員〕 六十九名

大 美 展(日、洋)

大阪府北河内郡殿山町御
殿山、大阪美術學校内

大阪美術學校の日本畫並西洋畫部卒業生の全員を會員とす。昭和三年より毎年一回展覽會を開催す。

〔會長〕 矢野橋村〔役員〕 齋藤與里、福岡青嵐

第一美術協會(洋、彫)

東京市澁野川區田端町
四五五、三國久方

昭和四年の創立にして毎年初夏、洋畫及彫刻の公募展を開く。十一年六月第八回展を開く。

〔會員〕 濱地清松、林明善、松見吉彦

三國久、御厨純一、中原實、佐藤哲三郎

鈴木巖、吉田久繼、吉澤廉三郎〔會友〕

梅村、北國克衛、小嶺伸、黒越正二、松

浦莫章、松坂康、三木辰夫、野田利衛、

齋藤好雄、佐野忠吉、杉浦藤太郎、鈴木

啓二、高橋亮、富岡藤男、山田篤

第三部 會(彫)

東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四
〇石川雅治方、電下谷八四六六

昭和十年六月、舊帝展第三部無鑑査級有志は「帝院改組は全然誤れる措置」なりとして、帝展不開催新帝院解散等を要望する旨聲明したが、其の趣旨から反帝展を標榜して同七月下記の人々が同會を結成した。「所謂展覽會むきのもの」を見せるよりも常に作りつゝあるものをすべてさらけ出した方が「好い」との意味で個展の集合形式を取り、同年十月公募に依る第一回展を開いた。十一年九月第二回展を開く。

〔會員〕 石川雅治、池田勇八、畑正吉、小倉右一郎、開發芳光、吉田久繼、上田直次、日名子實三

十一年度展規則抜萃

一、本展覽會の展覧は本會員及び公募に依る作品を以て之に充つ

出品

一、出品は彫塑及實用彫塑とす但し本邦に於てかつて公開せられたるものは受取せず

一、出品點數はすべて制限せず

一、鑑査及び審査

一、公募に依る出品は鑑査を行ひ、入選作品のみ陳列す

一、陳列の方法に關してはすべて陳列委員に一任せられたし、なほ陳列したる作品は出品者に於て撤回する事を得ず

一、入選作品はすべて審査を受けるものとす

一、鑑査は本會展覽會委員に當るものとす

一、本年度展覽會委員は左の如し

一、池田勇八、石川雅治、畑正吉、小倉右一郎

一、開發芳光、吉田久繼、上田直次、日名子實三

一、鑑査に對しては異議を申立つることを得ず

一、推獎及び授賞

一、入選作品に付き審査の上優秀なるもの若干を選んで「特選」とし其翌年は無鑑査として別に一室を與ふ、又作家の閱歷技術により會員に推舉す、尙優秀なる作品には之に賞金を贈ることあるべし

一、撤入及び撤出

一、應募出品者は来る八月廿九日、三十日の二日間、會員は三十日午前九時より午後五時迄の間に東京府美術館本展覽會受付に作品を撤入せらるべし

一、出品物には、目錄に記入と同一の番號、題名、氏名を必ず本會所定の用紙により記入貼附せらるべし

一、地方出品者は便宜上八月廿八日迄に東京府美術館内本展覽會場に到着する様作品を送送せらるべし

一、陳列作品にして賣約せられたる時には本會員は本會維持の趣旨に依り、その價格の十分の三を本會に納め、應募出品者はその價格の十分の一を本會に納入せらるべし

一、若し賣約を望まざる場合には、出品目錄に非賣と明記せられたし

一、賣 約

一、陳列作品は本會に於て撮影及び印行する事あるべし

一、撤入作品に對しては本會に於て充分の保護をなすといへども不慮の損害及び紛失等に就いてはその責に任ぜず

一、臺體彫塑會(彫)

東京市上野松坂屋內

昭和九年五月松坂屋主催の下に會員の新作品展觀を目的として設立。同年第一回展を開催し、三回展以後休止中。

〔會員〕 北村西望、建島大夢、平櫛田中、藤井浩祐、山崎朝雲

高松工藝協會(工)

高松市市役所内

昭和七年五月創立。高松市に於ける個々の美術工藝團體を綜合せるもので、工藝の振興を計るため工藝品並意匠圖案の調査、展覽會、研究會の開催、販路調査、他への出品斡旋等を行ふ。

〔會長〕 (高松市長) 富家政一〔副會長〕 川口丙三郎、坂本榮、磯井如眞

淡 交 會(日)

東京市日本橋區室町三越内

大正十三年三越の主催で會員の新作展觀を目的として創立。同年第一回展を開き昭和十年第九回展に及ぶ。創立當初の會員中、小堀鞆音、下村觀山、山元春舉の三名は物故し、現在の會員は川合玉堂、

竹内栖鳳、横山大觀の三名である。

筑前美術會(日、洋、彫)

東港市湊谷區幡ヶ谷本町
一ノ四八、今中素友方

福岡縣出身作家の親睦と鞭撻を期し、昭和八年二月發會、帝展及其他有力の展覽會に三回以上入選せる者を以て會員とす。十一年六月東京に於て第四回展を開催。

〔顧問〕 山崎朝雲、和田三造

中央美術會(日、洋)

東港市豊島區長崎南町一
ノ一九四〇、田口拘江方
電落合長崎二九七〇

大正四年以來雜誌「中央美術」を刊行昭和四年一時休刊したが、同八年復興第一號を發行し、十一年十二月迄續刊し以後廢刊となつた。年一回同會の主催にて日本畫、洋畫の公募展を開く。但し昭和十二年度は休展。

〔同展鑑査員〕(日本畫部)伊東深水、奥村土牛、中村岳陵、宇田萩郎、山川秀峰、兒玉希望、郷倉千靱、堂本印象、小野竹喬、中村大三郎、山口蓬春、福田平八郎、小泉勝爾、廣島晃市(洋畫部)伊原宇三郎、碓伊之助、川口軌外、中野和高、野間仁根、鈴木千久馬、伊藤康、東郷青兒、田口省吾、中村研一、清水登之、鈴木亞夫

中部日本商業美術聯盟

名古屋西區御幸本町
一、愛知縣商工館内
電本二一五六

昭和十一年十一月創立。中部地方各縣内に於ける商業美術團體を以て組織し、商業美術の發達を圖るため展覽會、講習會等を開く。本聯盟主催の事業には加盟團體以外に個人又は團體の参加を許すことあり。十一月愛知縣商工館に第一回展開催。

〔加盟團體〕 岐阜商業美術協會、三縣商業美術協會、滋賀圖案會、富山商業美術協會、福井商業美術協會、靜岡商業美術協會、愛知商業美術協會

朝鮮南畫院

京城府龍木町二四
電本局三三二二

朝鮮に於ける南畫道の振興を目的とする。大正三年久保田天南を中心に創立。もと朝鮮木石南畫會と稱す。同院は本部及支部を設置し之に加盟する者を院友となし、本部は京城府下の院友、支部は地方の院友を以て組織する。毎年一回院友のみの出品による展覽會を開催し、十一年十月京城に於て第二十三周年十九回展を開催す。支部三十六、會員六百餘名。

〔主幹〕 久保田天南〔幹事〕 江原善樺 伊藤彌右衛門、大森連志

沈爾(留彫)

東港市目黒區自由ヶ丘
二二七、林 是 内

東美校彫刻科製造部の卒業生に依り、昭和二年發會、六年より毎春作品展を開く。

〔同人〕 長谷川正雄、林是、大須賀力、奥田勝、黒田嘉治、佐土哲二、喜田三五、三木凱歌

圖案家協會

京都市伏見區桃山町宗和園
澤田宗山方、電伏見六〇二

大正十一年創立。京都在住の圖案家を以て結成。斯道の發展及共同の利便増進を目的とし隨時講演會、見學、研究會、展覽會等を開す。

〔總務〕 澤田宗山〔理事〕 澤田宗山、山鹿清華、田村春曉、落合萬水、狩野秀峰、福岡玉憐。正會員百六十五名

圖案技術官協會

商工省工務局内

昭和十一年十月設立。各府縣に在職する圖案技術官及關係者を以て組織し我が工業產業の改善發達を圖るため必要なる調査研究をなし、併せて會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖る。會員約七十名

鋸起研究會(工)

中野區江古田二ノ七四八、三井方

昭和七年八月結成。東美校鍛金部卒業

生の組織する親睦團體。年一回展覽會を開催する。

〔會員〕 石田英一、河村清司、八田辰之助、品田慎一、寺田龍雄、鈴木孝次、三井安藤夫、藤本長邦、柴田武次、加藤正之、松原春男、井尾敏雄、梶尾宗一、大西甚平、佐藤猛郎、小川正

帝國工藝會(工)

東港市芝區西芝浦一丁目
東京高等工藝學校内

大正十五年七月創立。本邦工藝の産業化並其の進歩發達を圖るを目的とし、事業として生産業者、販賣業者、美術工藝家並に科學者の聯絡提携に努め、産業工藝の状況を調査研究し、又地方特産工藝品の改良並に販賣の紹介等をなす。毎月雜誌「帝國工藝」を發行す。

〔會長〕 男爵 阪谷芳郎〔副會長〕 鶴見左吉雄〔顧問〕 伯爵 金子堅太郎、伯爵 牧野伸顯、子爵 清浦奎吾〔常務理事〕 安田祿造、和田嘉衛、日野厚

斗南社(洋)

東港市目黒區倉町六
四二、井手坊也方

昭和十年度東美校油繪科の卒業生を以て結成す。隨時展覽會を開く。

〔會員〕 井上隼雄、井手坊也、千葉衛、高山世繼、河野通暢、房野德夫、三輪孝、副島秀生、上原五節、宮崎恩

東 叢 會

東京市麹町區中六番町五四
市喜山義夫方、電九段三七五四

昭和八年東京府美術館借館料改正の運動起り同年五月美術團體及美術記者に依り、東京府美術館借館料改正期成會が結成された。同會は問題解決後同年十二月解散されたが、之が機縁となり將來借館團體共同の權益を保護しその便宜を圖る可き集團として九年一月設立されたものである。

〔加盟團體〕 旺玄社、九年會、國畫會國民美術協會、光風會、構造社、三春會春陽會、春臺美術會、上杜會、新造型美術協會、青龍社、太平洋畫會、第一美術協會、東光會、東京表裝飾組合、獨立美術協會、讀書會、二科會、日本畫會、日本水彩畫會、日本寫真會、日本南畫院、日本美術院、白日會、表裝同人會

〔常任理事〕 坂井岸水、太田三郎、川

端龍子、熊岡美彦、小島善太郎、山口省吾、市喜山義夫、吉田白嶺、望月省三、富田溫一郎〔理事〕 岩佐新、垣見泰山、藤本詔三〔評議員〕 中出三也、安藤照、今村俊夫、梅原龍三郎、坂井岸水、太田三郎、齋藤素巖、野崎龍雄、木村莊八、佐鹿彪、藤岡一、今井滋、川端龍子、石川寅治、佐藤哲三郎、熊岡美彦、香取重吉、小島善太郎、湯原柳畝、田口省吾、市喜山義夫、望月省三、東根德夫、田中咄哉洲、吉田白嶺、富田溫一郎、栗山弘

三 郎

東海美術協會(日、洋、彫、工)

名古屋市中區新榮町陸ビル
愛知縣商品陳列所内

明治四十三年創立。美術及び美術工藝の振興を以て目的とし、會内に東洋畫、西洋畫、彫塑、工藝の四部を置き、毎年協會展を開催の傍、帝展への出品の獎勵並に之に關する各種の事務の取扱、研究會、講演會の開催をなす。昭和十年第廿五回展を開く。

〔會頭〕 伊藤次郎左衛門〔副會頭〕 岡谷惣助、菅原省三〔評議員〕 石河有鄰、渡邊秋嶺、森村宜稻、小林松仙、菊地香三、人見彌、原田隆謫〔主事〕 岡田良右衛門、宮部鈴三郎、池田正信〔正會員〕 (東洋畫) 六十一名、(洋畫) 十五名、(彫塑) 一名、(工藝) 一名

東京鑄金會(工)

東京市下谷區谷中
眞島町一ノ一號

明治三十六年の創立にして主として東京在住の鑄金家を以て組織し毎年秋季、展覽會を開催する。昭和十年十月日本橋三越に於て第廿五回展を開催した。

〔顧問〕 大島如雲、和泉整乘〔幹事〕 香取秀眞、渡邊長男、佐々木泉堂、山本安曇、香取正彦〔評議員〕 市岡紫雲、北原三佳、山本純民、齋藤鏡明、加納晴雲、丸谷端堂、小野田晴正、長野坪志、山口

淨雄、梅村芥舟、伊藤忠雄、渡邊紫鳳、林萬壽人、山本自燭、根來實三

東京表裝飾組合

東京市淺草區淺草橋一ノ三
香取重吉方、電淺草四七四一

東京市に於て營業をなす表裝飾師を以て組織す。技術の向上及同業親睦を圖るため種々の事業をなす。年一回東京府美術館に表裝飾展を開催する。

〔組合長〕 香取重吉〔副組合長〕 上山杉太郎、前波鐵太郎〔會計主任〕 原田萬平、柴山春吉

東京みづゑ會(洋)

東京市澁橋區下落合三ノ
一七二七、佐藤平太郎方

水繪の研究並に普及を目的として昭和二年春創立。寫生會、作品批評會、展覽會等を行ひ、昭和十一年第八回展を開催す。

〔總務〕 佐藤平太郎〔會員〕 恩田孝徳、片岡豊彦、小堀進、東海林恆吉、下坂英夫、高田力藏、佃政道、内藤秀因、牧野正吉、森谷清一、渡部菊二、井上三綱、鎌田次郎、香月照次、小林保司、柴田善太郎、竹内梅治郎、寺尾浩、野澤潤二郎、松本慎三、山崎政太郎、小椋繁治、金田盛太郎、菊地武雄、佐々木正道、諏訪邦一、互井開一、手島真、堀野秀雄、松田晃八、横田仁郎

東 光 會(洋)

東京市澁橋區戸塚町二ノ
一一二、電牛込一四四一

昭和七年、舊帝展第二部出品者たる橋本八百二、堀田清治、岡見富雄、高間惣七、能岡美彦、齋藤與里の六名に依り結成さる。八年二月東京府美術館に第一回展を開催、以來毎年春季に公募展を開き昭和十年十月第四回展を開催した。尙十一年三月創立會員橋本八百二、堀田清治、高間惣七の三名は脱會、主線協會を結成した。

〔會員〕 岡見富雄、渡邊浩三、國部晋生、野口謙藏、熊岡美彦、胡桃澤源一、小早川篤四郎、齋藤與里、佐藤草、水船三洋〔會友〕 正田二郎、平通武男

同會第五回展規定拔萃

一、本展覽會は昭和十二年三月五日より二十一日まで上野公園東京府美術館に於て開催す

一、出品希望者は作品出品目録(題名、大きさ、種類、價格、住所氏名明記の事)並に出品手数料を添へ二月廿八日、三月一日の兩日上野公園東京府美術館内東光會受付に搬入せられたし

一、出品手数料一點毎に五十銭

一、地方出品畫は二月廿日迄に東京市下谷區谷中初音町一丁目二〇、黒田美術品運送店(電下谷六二〇四)宛東光會として發送せられたし(美術館宛の直接發送は絶對受付げざるものとす)

一、地方出品畫に限り搬入費として一點につき金拾五銭を申受くる事、但し出品畫發送と同時に爲替を以て出品手数料も加算して

黒田運送店宛に支拂はれたし

一、地方出品畫は作品搬出後黒田運送店より運賃先拂ひとして返送するものとす

一、出品畫は油畫、水彩、素描、パステル、テンペラ、版畫とし、一人の出品數五點を限りとす。但し大ききには制限なし

一、他の展覽會に於て既に發表したる作品は出品するを得ず

一、出品畫は總て鑑査の上陳列す

一、陳列中の作品を鑑査し優秀なるものには東光會賞及某氏奨励賞等を贈呈す（會友及無鑑査推薦をなす事あるべし）

一、鑑査致し審査は本會々員之を行ふ

一、出品畫は一點毎に適當なる額縁を装ひ、必ず裏面に命題と住所氏名を明記したる紙片を貼附せられたし

一、賣却品に對しては其價格の二割を本會に支拂ふものとす

一、陳列中の作品を撮影する場合本會の承認を要す

義忠、田島耕太郎

東 臺 會(日、洋、彫、工)

奈良市法連町明珍
恆男方、電九八八

昭和五年四月發會。東京美術學校出身奈良在住有志の懇親並研究の團體。毎年春季同人の展覽會を開催し、隔月一回集會を行ふ。

〔會員〕(日本畫) 富田一昭、立野甚一、谷山寅之介(洋畫) 井上清一、中村義夫、小野藤一郎、小松原義則、西孝親(彫刻) 新納忠之介、細谷三郎、明珍恒男、鷲塚與三松、吉川政治、菅原安男、奥田勝、長谷川正雄(圖案) 岸熊吉(工藝) 後藤年彦、幸王好太郎、北村久造(建築) 佐藤誠一(師範) 谷山藤四郎、遠山八二

東 臺 邦 畫 會(日)

東京市芝區金杉濱町
六八、狩野探道方

大正十四年舊池畔俱樂部の組織を擴張し、在京の東美校日本畫科出身者を網羅して設立す。同年第一回展を開き、以來引き続き展覽會を開催して昭和十一年第十一回展に及ぶ。

〔會長〕 結城素明〔副會長〕 松岡映丘

〔名譽會員〕 渡邊香涯、川合玉堂、横山大觀、正木直彦、木村武山、溝口順次郎、島田佳矣、鈴川信一〔常務委員〕 狩野探道〔常務理事〕 矢澤弦月、川崎小虎

會員約二百四十名

東 潮 會(日)

横濱市中區本牧三ノ谷
一三七、新井勝利方

横濱在住の院展出品者を以て組織せる津登比會を昭和八年解散し、九年舊同人に新たに神奈川縣在住の帝展系作家が加入して同會を設立した。十一年九月同市の野澤屋に於て第二回展を開催した。

〔會長〕 栗原清一〔幹事〕 飯田九一、中島清、中庭煥華、並木瑞穂、牛田雞村、小島一鶴、新井勝利、水野陽翠、座間素賢、冬木大丙、木下春〔會員〕 山下日出子、鈴木島心、高橋萬年、藤井白映、長谷川路可、片岡球子、中島保、加藤洵綾、吉川朝衣、關曄明、榮宗廣、上垣候鳥、森博

東 土 會(彫)

東京市本郷區駒込神明
町三四一、後藤良方

昭和六年十二月發會。東京生れの東美校彫刻科出身者にして舊帝展に出品せる者を以て組織し、隨時作品展を催す。

〔會員〕 淺岡重治、安藤秀吉、大須賀力、大橋清、金田豊、木内五郎、黒田嘉治、後藤光行、後藤良、杉浦藤太郎、杉本三郎、明珍勝友、安一、安田周三郎、吉田久繼、武田榮

東 陶 會(工)

東京市中野區川添町一
大森光彦方、電中野五八三五

昭和四年設立。東京及其の附近の陶磁器及硝子工藝の作家を以て組織す。年一回展覽會を開催す。

〔顧問〕 板谷波山、宮川香山、沼田一雅〔會員〕 板谷梅樹、井高富美、井上良齋、長谷川怒、靖好、日野國太郎、土肥刀泉、大森光彦、小川雄平、唐杉榮四、各務鐵三、川本素仙、横山朝陽、竹内蘭山、田中作太郎、武藤太郎、安藤喜明、小柳今朝一、古宇田正雄、湯山青厓、水野喜作、宮之原謙、清水素陶

東 風 社(日)

東京市深川區富岡町二ノ一三
福田浩湖方、電本所六一五

大正十五年創立。南宋畫の研究團體。年一回展覽會を開く。

〔同人〕 大津雲山、高須芝山、福田浩湖、佐藤華岳、木村棲雲、金子米軒、中田雲暉、荒居翠湖、佐々木永秀、關谷雲崖

東 邦 彫 塑 院(彫)

東京市杉並區本福町
四〇五、兩宮治郎方

昭和十年六月廿二日、舊帝展審査員級の長谷川榮作、加藤顯清、吉田久繼、國方林三、山根八春、後藤良、雨宮治郎、北村正信、關野聖雲等の九名に依り結成同院は大體新帝院支持の立場にあるが、新帝院の「隔年制」「彫刻二部制」には反對の意を表明して居る。同年十一月東

東 漆 苑(工)

東京市板橋區中村町一ノ八
七八、守屋方、電練馬三〇七

漆藝の研究と作品發表を目的として昭和九年創立。年一回展覽會を開催する外人の作品を常備展觀し且つ同人の製作を内外の博覽會及び展覽會に出品する爲の便宜を圖る。

〔會員〕 戸川綠島、片岡華江、吉岡郁三、横越自入、高山光明、田島耕太郎、高木進、内藤俊一、村田義忠、歌川黎明保井勇三、山永光甫、山本剛吏、増村成雄、古山英司、佐藤紫川、三田村自芳、森夜潮、守屋松亭、只浦薫〔當番〕 村田

京府美術館に第一回公募展を開催した。

〔理事〕 長谷川榮作、國方林三、北村正信、關野聖雲〔會員〕 一色五郎、羽下修三、橋本朝秀、服部仁郎、新田藤太郎、富永朝堂、岡本金一郎、大須賀力、加藤顯清、田村幸火、中島東洋、畝村直久、黒田嘉治、山根八春、梁川剛一、牧俊高、後藤良、雨宮治郎、安達貫一、赤堀信平、安一、柴田正重、毛利教武、森大造、森山朝光、杉浦藤太郎

東北美術展覽會(日、洋)

仙臺市東三番丁
河北新報社内
電四一〇〇

昭和五年創立の東北美術協會の主催した展覽會を八年河北新報社が引き継いだもので、東北の美術思想普及並に發達を目的とし、仙臺市に年一回日本畫、洋畫の公募展を開催する。規則は毎年一月上旬發表。出品種目は日本畫、油繪、水彩、グワッシュ、パステル、創作版畫。

〔會長〕 (河北新報社長) 一力次郎〔副會長〕 (同副社長) 一力五郎〔顧問〕 太田正雄、兒島喜久雄、宮城縣知事、國井喜太郎〔審査員〕 (一部) 前田青邨 (二部) 安井曾太郎、中野和高

東北海道工藝協會(工)

仙臺市二十人町通一〇
商工省工藝指導所内
電三七六〇―三七六二

昭和四年設立。東北六縣及北海道に於

ける工藝關係者相互の聯絡を保持し、東北工藝の産業的發達を圖るを目的とし、事業として工藝品並匠人圖案の指導、製品の宣傳紹介、販路の擴張、競技會、展覽會の開催、各種工藝的副業の指導獎勵等をなす。

〔名譽會長〕 藤澤幾之輔〔理事長〕 國井喜太郎〔理事〕 齋藤信治、野村道夫〔評議員〕 寺坂毅〔幹事〕 阿久津保太郎、古谷豊吉

等 遼 會(洋)

東京市澁谷區松濤町
二五、一木隴二郎方

大正十二年度東美校洋畫科出身者を以て組織する。東京に於ける展覽會開催八回に及ぶ。

〔會員〕 一木隴二郎、飯守好雄、大海清三、小野藤一郎、長屋勇、窪田照三、松本銳二、小平正彦、三田康、三谷浩二、光石藤太、鈴木誠、鈴木啓二

稻 花 會(工)

東京市芝區濱松町
一ノ九、赤塚工房内

大正十一年故赤塚自得の社中を以て組織す。相互の親睦並向上を目的とし、漆工藝をあらゆる方面より研究せんとする昭和十年東京に第二回展を、大阪に第一回展を開催した。

〔會員〕 三田村自芳、魚野自醒、太田自適、久慈自然、横越自入、岡本昇三、

石川古堂、關聰雨、井澤靈山、辻喜一郎、月尾慶外、金井正文、村田義忠、吉岡郁三、南忠、池田自勝、小澤裕、工藤喜代志、土方吉雄、山浦等

踏 青 會(日)

東京市日本橋區高島屋美術部

高島屋美術部の主催する日本畫發表機關。昭和十年四月第一回展を開いた。

〔會員〕 大智勝觀、安田靉彦、前田青邨、小林古徑、柳原紫峰、小川芋錢、鐺木清方、村上華岳、矢野橋村、福田平八郎、小杉放庵

瀋 友 會(洋)

東京市豊島區長崎町
一ノ九九三、日高方

昭和十一年春結成。二科出品者の洋畫研究團體。展覽會を開く。

〔會員〕 木寺轍、小堀進、桑原實、荻野康兒、日高健泰、財保、百足遠六、竹谷富士雄〔贊助〕 藤田嗣治、野間仁根

童 畫 美術 院

東京市淺草區淺草橋一ノ三

昭和六年創立。童心を表現し、童心を啓發し得るやうな藝術作品の向上普及を目的とし、毎年一回繪畫、彫刻、工藝、人形玩具等の各科に互る公募展を開催する。十一年第六回展を開いた。

〔同人〕 石井柏亭、笹川臨風、西澤笛畝、服部願夫、山田徳兵衛、山本鼎、和

田英作、倉橋惣三、津田信夫〔顧問〕 子爵岡部長景〔代表幹事〕 西澤笛畝、山田徳兵衛

同展規則抜萃

- 一、本會の定期開設は毎年一回とし會期、會場、取扱場所及出品物搬出入に關する細規等は其の都度發表す
- 一、本會出品物を左の種類とす
イ、人形 ロ、玩具 ハ、繪畫(日本畫、西洋畫、版畫)、彫刻(木彫、塑像、ブロンズ)、工藝品(人形、玩具又は等關係あるものを題材とせるもの)
- 一、本會は何人と雖出品することを得
- 一、出品の寸法及點數に制限を附せずと雖、必ず新發表の作品たること
- 一、出品物は總て賣品とす
- 一、出品物は審査委員鑑別の上之を陳列す、但し、本院同人、贊助員並に、推舉者の出品に限り無鑑査とす
- 一、出品物は審査の上優秀と認めたるものに對し授賞す
- 一、審査委員は本院同人及新界の權威者中より其の都度囑託し毎年開催約一ヶ月前に於て發表す

童 林 社(洋、彫)

東京市澁谷區松濤一

昭和六年度東美校洋畫科入學者の組織してゐたクラス會童林社と彫刻科同期入學者の組織してゐた創生期會と十年十二月合同して結成。十一年六月東京府美術館に第四回展を開催した。

〔會員〕 (繪畫部) 井上自助、岩田榮、伊藤彰、池田輝之、橋本正躬、富山良次、沈享求、李石樵、大山英夫、川田恆之輔

河口正喜、高木周平、根守悦夫、中西次郎、廣瀬正雄、永田精二、中村立行、上原誠、上島長健、江守龜男、野口徳次、野末恆三、藥師寺孝太郎、山中清一郎、藤岡俊一郎、船越達仁、寺田春一、赤津實、齋藤齊、里見明正、柳克文、城信義、須藤清彦、須澤鴻、杉山一正、杉山卓、鈴木貞三、村田保三（彫刻部）水船六洲、古池恆雄、柳原義達、板國吉、清水勲、新田實、黒川泰、佐藤邦輔、瀧一夫、吉田芳文、吉川常雄、關長造、千村士乃武、石田尙友、能美八重夫

獨立美術協會(洋)

東京市杉並區阿佐ヶ谷
成宗一ノ二鈴木亞夫方

昭和五年十一月二科會員兒島善三郎、里見勝藏及び會友七名は新なる藝術主張の下に結束、同會を脱退、春陽會の三岸好太郎、國畫會の高島達四郎、二科出品の伊藤廉、清水登之を加へ、「我々は既設の團體より絶縁し新時代の美術の確立を期す」と宣言して獨立美術協會を創立した。昭和六年一月作品公募の上東京府美術館に第一回展を開催して以來毎春同所に公募展を開催し且つ大阪、京都、名古屋、神戸、福岡、熊本、鹿児島、長崎、臺北等に地方展を催す。又毎秋季、會員の小品展覧をなす。其他會の事業として夏季講習會、出版の諸事業をなし、又自治制の研究所を東京、大阪、京都に開く。十一年第六回展に際し新に中村節也、松

島一郎の二名を會員に推舉、又新に會友制を設け十四名を抜擢した。

【會員】 伊藤廉、井上長三郎、海老原喜之助、川口軌外、兒島善三郎、小島善太郎、小林和作、里見勝藏、清水登之、鈴木亞夫、鈴木保徳、須田國太郎、妹尾正彦、會宮一念、高島達四郎、田中行一、田中佐一郎、中山巖、野口彌太郎、林重義、林武、福澤一郎、中村節也、松島一郎【會友】 今西中通、上田清一、浦久保義信、大野五郎、菊池精二、熊谷登久平、齋藤長三、中間冊夫、藤岡一、三岸節子、水野佳一、森有村、森芳雄

同會展出品規定拔萃

- 一、出品は洋畫とし一人五點限りとす（未發表の作品に限る）
- 一、出品畫は本會規定の出品目録及び出品手数料を添へ贈入せらるべし
- 一、各出品畫には額縁を附し（釘附嚴重）裏面には本會規定の用紙に畫題、氏名、出生地、現住所、取扱所（運送店、洋畫材料店等に委託の場合）を明記せらるべし、これを明記せざる場合に生ずる事故に就ては本會その責を負はす
- 一、出品手数料は一人に付金貳圓とす
- 一、陳列方法は本會に委任せらるゝものとす
- 一、出品畫は對する不慮の損害に就ては本會その責を負はす
- 一、陳列畫は展覽會閉會後に非ざれば撤出する事を得ず
- 一、陳列畫及び陳列せざる作品は規定期間内に通知書と引換に撤出せらるべし、然らざる時は本會の適宜の處置に任ぜらるるものとす
- 一、搬入搬出の費用及び荷造費は出品者の自辨とす

- 一、陳列畫買約は即時全價格を支拂ふか或は價格の三割を手附金として前納せらるべし（破約の場合は手附金を返却せず）
- 一、陳列畫賣約の節出品者は手数料として價格の一割を本會に納むるものとす
- 一、買約品は閉會後直ちに本會より發送すべし

讀畫會(日)

東京市豊島區長崎南町
一ノ八三、荒木十畝方

荒木寛畝を主宰として明治四十年設立さる。寛畝の歿後は十畝を會長とし、毎春展覽會を開催、昭和十一年回を重ねる事二十九回に及ぶ。

栃木縣美術協會(洋)

栃木縣鹿沼町下村木町、吉村勇方
東京市淺草區馬道町二ノ五、文挾勝方

栃木縣在住出身者の結成する洋畫團體で昭和十年十一月宇都宮市に於て第一回公募展を催す。

【會員】 淺野研兒、文挾勝、飯田張、石川勝平、水沼清、西村清子、野中寅太郎、大野五郎、清水登之、高松甚二郎、渡邊敏、吉村勇【會友】 鈴木貫司、田神正

巴會(日)

東京市本郷區駒込東片町三〇、鹽崎逸陵方

故寺崎廣業の門下にて舊帝展所屬の九

名を以て組織す。昭和八年新宿はてい屋にて第一回展を開く。

名古屋工藝協會(工)

名古屋市役所産業部内

名古屋地方の工藝家及關係者を以て組織し、同地方工藝の發達を圖るため工藝に關する種々の調査、研究、出版、展覽會開催等を行ふ。

【會長】 神田純一【顧問】 藤井達吉、板谷波山【理事長】 田中藏六【理事】 鶴原鶴羽、横山安吉、太田良次郎、杉浦冷石、中川貞三、藤本鐵男【委員】 勝利彦、山田岷山、多和田實、青井正太郎、後藤九吉、新森愛勇、犬飼倫比吉

名古屋美術聯盟

名古屋市役所内

昭和十一年十月創立。愛知縣在住及出身の美術家を以て組織す。郷土美術界の向上を目的とし、美術に關する展覽會、講習會開催の外美術獎勵に關する事業を行ふ。

【會長】 (市長) 大岩勇夫【評議員】 川崎小虎、服部有恆、太田三郎、伊藤廉、鬼頭鍋三郎、加藤靜兒、宮田重雄、毛利敦武、長野埤志、森村宣稻、狩野梅齋、朝藤其明、小川鴻城、横山龍生、織田杏逸、淺井正臣、石川英鳳、朝見香城、加藤英

舟、平岩三陽、井上安男、中野安治郎、船橋治彦、藪野正雄、渡邊多平、安藤邦衛、伊藤鎌、石井國義、魚津良吉、杉本健吉、大澤鉦一郎、横井禮市、遠山清、人見彌、市ノ木慶治、林明善、宮脇晴、鶴原鶴羽、矢野陶々

奈良美術家聯盟

奈良市大佛殿裏
田中修方

主として奈良在住の帝展、二科、獨立等の出品者を以て結成する洋畫研究團體。昭和十一年十月同市に於て第二回展を催した。

〔會員〕 市原達夫、今西春治、乾平三岩本恆三、間瀬謹平、森島包光、岡島吉郎、奥山堤、六條篤、下瀬貞和、田中修辰已義人、遠山八二、浦久保義信〔賛助員〕 濱田葆光、中村義夫、山下繁雄

奈良洋畫會(洋)

奈良市奈良女高師附屬
小學校、曾根靖雅方

奈良縣美術家の指導養成を目的として昭和七年設立。例年五月に公募展、十月に同人展を開催す。夏期洋畫講習會を開く。

〔同人〕 若山爲三、飯田衛、笠松春彦、吉本昔雄、武若武作、辻操、小森重雄、廣瀬英男、岩井濱子、鎌田史彦、吉澤健二、曾根靖雅、御宮地保、御喜田家壽夫、庄司吉郎、保田貞治、顧問十二名

長野縣農民生產組合聯合會(工)

長野縣經濟部規則課内
電長野四三〇一

縣下の農民工藝品生産團體により組織され、各團體の聯絡を圖り、生産の指導、販路擴張並に斡旋、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕 (經濟部規則課長) 大藤寛一
〔副會長〕 (經濟部副課長) 江島次郎、中村實

南畫鑑賞會(日)

東京市麹町區中六番町
四一、電九段六二〇

昭和七年三月創立。南畫道の普及を計るを目的とし、會員は随時入會の便あり。會長の執筆指導を主とし、通信教授に依り修畫するを得。年一回會員の習作展を開催する。

〔會長〕 小室翠雲

南畫聯盟(日)

東京市深川區富岡町二ノ一三
福田浩湖方、電本所六一五

昭和十一年九月日本南畫院及環堵畫塾の解散後、有志相謀り翌月廿九日に結成した。南畫道の興隆を目的とし、研究會展覽會を開催する。

〔顧問〕 小室翠雲〔幹事〕 人見少華、白倉二峰、岡田晴峰、福田浩湖〔庶務〕 大栗旌折、關谷雲崖、會員は東京、京都其他にて七十七名(十二年三月現在)

南紀美術會(日、洋、彫)

東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四、建昌大夢方、電下谷一四〇一

大正八年紀州出身の美術家により結成年一回東京或は郷里に展覽會を開く。

〔常任幹事〕 建昌大夢〔幹事〕 大亦觀風、中村新次郎、會員二十九名

二科會(洋、彫)

東京市四谷區番町一七
電四谷四九七八

大正三年文展第二部に二科設置運動が起つたが、當局に容れられず、同年十月つひに文展より分離して、上野竹之臺陳列館に二科美術展覽會が開催された。同展の開催に際して其の任に當りたる鑑査委員十一名は翌年そのまゝ會員となり、二科會は茲に在野團體として獨立した。

(其の中柳敬助、田邊至の二名は直ちに脱會) 爾來同會は常に新進流派の作家を包容して我が洋畫史上に啓蒙的功績を擧げて居る。大正八年第六回展の開催に際し藤川勇造會員に推され初めて彫刻部加入を見た。昭和五年十一月兒島善三郎、里見勝藏外會友七名は脱退して獨立美術協會を創立した。昭和十年帝院改組に際して同會々員たる石井柏亭、山下新太郎、安井會太郎、有島生馬、藤川勇造の五名が新帝國美術院會員の任命を受けるや同會は其の盟約に基いて右五名と訣別し、その同會に對する功勞を謝して名譽會員

に推し、同會は從來の通り飽くまで在野として行動する意味を聲明した。十一年九月第二十三回展を開催した。同會は東京の展覧後京都、大阪、福岡、名古屋等に於て隨時地方展を開催する。十一年十月四日小山敬三、木下孝則(十一年九月入會) 木下義謙、碓伊之助の四名は脱會した。

〔會員〕 藤田嗣治、熊谷守一、正宗得三郎、野間仁根、田口省吾、東郷青児、渡邊義知、中川紀元、横井禮市、黒田重太郎、鍋井克之、國枝金三、濱田葆光、坂本繁二郎、國吉康雄、齋藤豐作、アスラン、ビツシエール、ロオト、ザツキン、(十一年度新會員) 栗原信、宮本三郎、向井潤吉、鈴木信太郎、高岡德太郎、笠置季男、松村外次郎〔會友〕 松本弘二、椎塚猪知雄、國部邦香、酒井亮吉、伊庭傳治郎、伊谷賢藏、岡田謙三、島崎篤二、吉井淳二、小林喜一郎、清水刀根、田村孝之介、三浦舜太郎、松井正、山本直治、高野三三男〔新會友〕 安宅虎雄、小出卓二、長谷川八十、上田曉
同會第二十三回展規則

第一章

一、本展覽會は本年九月二日より十月四日迄東京府美術館に開催す。右展覽會終了後尙ほ他の都市に於て其の一部を展覽することあるべし。その場合に陳列すべき作品は改めてその作者の承諾を請ふべし

第二章

一、本展覽會は何人と雖隨意出品をする事を得。但し鑑査の上陳列決定せられたる作品

の作者は他の對立的公募展覽會へ出品するを得ず

一、展覽會には繪畫、彫塑の二部を設く

一、本年の出品點數は繪畫、彫塑とも各六點以内とす

一、同一作者にして同時に兩部へ出品することを得、但し其場合は兩部各々指定點數以内とす

一、既に本邦に於て發表したることある作品は受理せず

第三章

一、出品はすべて鑑査を行ひ入選作品のみ陳列す

一、入選したる作品は作者自身之を撤回することを許さず

一、入選發表は會場入口に掲示す

第四章

一、繪畫部、彫塑部の出品に對しては左の會員之が鑑査に當る

(繪畫部) 藤田嗣治、濱田蓂光、碓伊之助、熊谷守一、國枝金三、黒田重太郎、小出敏三、木下義謙、正宗得三郎、鍋井克之、中川紀元、野間仁根、坂本繁二郎、田口省吾、東郷青児、橋井禮一、(彫塑部) 渡邊義知

第五章

一、出品希望者は来る八月二十一、二十二日の兩日間午前九時より午後五時迄の間に會場へ作品を搬入せらる可し、額縁なきものは受理せず

一、作品には出品目録及出品料一點に付き金五十錢を添へ搬入せらるべし

一、作品裏面には必ず目録に記入せると共通の番號命題所氏名を明記せらるべし

一、前項出品目録及び裏貼の用紙は必ず本會印刷のものに限る

一、地方出品は八月二十日迄東京府美術館宛に到着する様又出品目録及出品料は(振替口座東京三八五〇五番或は小爲替にて)事務所にそれぞれ發送せらるべし、(箱詰)の出品は出品目録氏名の側に箱と大書せらるべし

一、出品引換に受取證を交付す

一、出品人住所變更の節は直に事務所へ届出でらるべし

一、選外搬出は必ず九月六日より九月八日迄に出品受取證と引替とす、箱詰の地方出品に限り運賃先拂にて返送すべし

一、搬入作品に對しては當會に於て充分なる保管をなすも雖も不慮の損害及び紛失等に就ては其責に任ぜざるべし

一、開會中出品の複寫及刊行の權利は本會に於て保有すべし

一、陳列方法に關しては陳列委員の自由に任ぜらるべし

一、陳列されたる作品は閉會後本會通知狀指定の場所に返戻すべし

第六章

一、陳列品買約者は即時に代金を支拂ふか、賣價の三分の一以上を手附金として前納せらるべし、破約の場合は手附金は返却せず

一、陳列作品の買約は本會に於て之を取扱ひ價額の一割を申受くものとす

一、買約品は閉會後早々本會より送達すべし

二科西人社(洋、彫)

福岡市大名町
八七青木壽方

昭和九年十一月創立。福岡出身の二科會出品者の組織する洋畫彫刻の研究團體。年一回展覽會開催。

〔同人〕(繪畫)伊藤研之、伊東靜尾、大河原元、金子博信、加藤尙義、加藤タキ

ノ、吉田新、吉武友樹、高田力藏、田崎廣助、能間弘、山本和夫、眞隅太莊、後藤繁喜、安部治郎吉、青木壽、坂宗一(彫塑)渡邊政夫、柳田昌、福田安敏、廣瀬不可止、山口長男、有隅善郎

廿四人會(洋)

東京市中野區櫻山
一一、樋口加六方

昭和七年創立の十七人會の擴大せるもので獨立展出品者の親睦團體。不定期に作品展を開催する。

〔會員〕樋口加六、岡部文之助、法充昌雄、小島圭一、長島榮吉、横山清治、熊谷登久平、久保田久一、今西忠通、池田金之助、中尾彰、佐藤英男、竹中三郎、清水鍊徳、坪内節太郎、森有材、浦久保義信、赤星孝、小原雄二、坂本善三、赤堀佐兵、綠川廣太郎、富樫寅平

爾步美術協會(洋)

京都市烏丸通上立賣
上ル、太田喜二郎方
電話四九六〇

昭和十一年五月創立。年一回の公募展及洋畫講習會を開催する。十一年五月京都美術館に第一回展覽會。

〔會員〕太田喜二郎、角野治郎、吉田苞、小磯良平、赤松麟作、新井完〔會友〕東坊城光長、天井陸三、伴庄兵衛

新潟縣工藝協會(工)

新潟縣商工水産課内

昭和九年三月創立。工藝團體相互の連絡、工藝品の輸出促進を圖り、工藝に關する調査、指導助成、展覽會開催、販賣斡旋等をなす。

〔會長〕(新潟縣經濟部長)梁井悌二〔副會長〕宮脇倫〔理事〕横山正、山中藤太郎、栗田太郎吉、栗山英資、二戸八一郎、小山金平、能村竹次郎、玉川覺平、堀淨親、眞藤玉眞

西日本美術展覽會(洋、工)

福岡市島警固九八四
福岡日日新聞社

福岡日日新聞社の主催する公募綜合展覽會で洋畫部及美術工藝部の二部より成る。昭和十一年十一月第四回展を開催した。

第四回西日本美術展出品規定拔萃

一、本展覽會は昭和十一年十一月十二日より福岡日日新聞社大講堂にて開催す

一、出品洋畫部は油繪、水彩畫、パステル畫、素描、創作版畫、美術工藝部は陶磁器、人形、金工、染織、刺繡、漆器、木竹細工等

一、出品は各部一人三點以内、出品手数料金一圓とす

一、出品は總て鑑査を行ひ入選作品のみを會場に陳列す、但し本會に於て推薦したる作家の出品は此の限にあらす

一、入選作品中より更に審査を行ひ、福岡日日新聞社賞及副賞品を贈與す、尙無鑑査推薦を爲すことあるべし

一、入選作品は作者自身之を撤回するを得ず、一、本展覽會審査員を左の諸氏に委嘱し、十一月九日審査を行ふ

和田三造、坂本繁二郎、兒島善三郎、齋藤三三、野田俊郎、船木長造

一、出品作品は十一月七八の兩日間、午前九時より午後五時迄の間に、福岡日日新聞社三階展覽會事務所に、本會印刷の出品目録並に出品手数料を添へ、搬入せらる可し

一、洋畫には必ず額縁を附し、作品には必ず出品目録を記入せるものと同じ番號、命題、住所、氏名を明記せる本會所定の裏貼用紙を貼付すべきものとす

一、出品物の荷造費及運賃は出品者の負擔とす

一、選外作品は審査の結果發表後三日以内に陳列作品は展覽會開會後三日以内にいづれも搬出せらるべく、右期限後は料金先拂にて返送す

一、陳列方法に關しては陳列委員に一任せらる可し

一、賣約の場合は賣價の一割を手數料として本會に收納するものとす

日本インターナショナル建築會(建)

京都市等持院北町
五八上野伊三郎方

昭和二年七月創立。各國建築家と提携して建築に關する總べての研究をなし、現代日本に最も適合する建築を完成せんとするものなり。昭和四年雜誌「インターナショナル建築」を發刊す。隨時展覽會、講演會を開き、又毎月會員の例會を催す。

〔會員〕本野精吾、伊藤正文、中尾保、中西六郎、新各種夫、本多正道、上野伊三郎、竹内芳太郎

日本漆繪協會

東京市目黒區豪町、府立高等學校内、松岡正雄方
電高輪六四〇二

昭和十一年十月結成。漆繪の向上及漆工藝の新生面開拓を目的とする。作品展開催の豫定。

〔會員〕井家三家、片山佳吉、横井弘三、太齋春夫、大村素峰、松岡正雄、三木義榮、三浦久明

日本畫會(日)

東京市麹町區中六番町
五四、電九段三七五四

明治三十年創立。日本畫の發達獎勵を目的とし、毎春展覽會を開催する。

〔會頭〕南弘〔理事〕五十嵐小太郎、市喜山義夫、太田亥十二、福田喜太郎、藤井榮三郎、三枝代三郎、清水揚之助、正力松太郎、日比谷祐藏〔顧問〕川合玉堂、鍋木清方、松林桂月、松岡映丘、小室翠雲、荒木十畝、結城素明〔同人〕伊東紅雲、伊東深水、伊藤響浦、今中素友、磯田長秋、池上秀畝、西澤笛畝、服部有恆、島山錦成、太田天洋、太田秋民、大木豐平、岡部光成、荻生天泉、織田觀湖、川崎小虎、川船水極、鴨下晃湖、勝田蕉翠、吉田秋光、吉岡堅二、吉村忠夫、吉田登毅、高木保之助、竹原嘲風、田中賴璋、津端道彦、常岡文龜、根上富治、永田春水、野田九浦、矢澤弦月、山川秀峰、安田半岡、町田曲江、松本委水、福田浩湖、古屋正壽、五島耕畝、兄玉希望、小山榮達、小泉勝

爾、佐藤華岳、佐々木尙文、菊池華秋、菊澤武江、水上泰生、宮田司山、島田墨仙、飛田周山、森村宜稻、望月春江、森白市、會友百三十五名(十二年二月現在)

同會十一年度展覽會規定(拔萃)

一、會員(客員、正會員)の出品は鑑査を行はず、但場合により會員の出品と雖も陳列せざる可きものとす

一、會員外の出品は鑑査の上陳列す

一、會員(客員を除く)の出品にして審議の上最も優秀と認めたる者一名に對して日本畫會賞を贈與す

一、會員外の出品にして審議の上最も優秀と認めたるもの若干名に對し日本畫會賞を贈與す

一、出品畫中審議の上最も優秀と認めたるものに對し中橋賞を贈與す

一、出品畫の陳列幅員は一名四間以内とし點數は隨意とす

一、出品者は出品申込書(左端の書式を切取り使用のこと)を添へ昭和十一年五月十一日展覽會出品受付場(美術館中庭口)に搬入せらるべし

一、會員外の出品者に對しては出品手数料として一名に付き金一圓を申受くべし

一、出品繪畫の荷造り並に運送費は總て出品者の自辨とす

一、出品繪畫は總て粹張り裝飾を要す

一、出品繪畫にして賣約せられたる時は手数料として賣價の百分の二十を申受くべし

一、陳列品の撮影印行の權利は本會之を保有す

一、鑑査員は評議員會及幹事會に於て推選甄託し出品繪畫の鑑査並に審査に當るものとす

日本玩具協會

東京市世田谷區世田谷町二ノ一〇八〇

昭和十一年十一月設立。玩具産業の發達を圖るを目的とし、玩具の研究調査並發明考案の助成に關する諸事業を行ふ。

〔常務理事〕畑正吉、西澤笛畝、加納淳男、永澤謙三、氏家壽子、國井喜太郎、山根省三、山田義郎、木槍恕一、阿部七五三吉、鈴木豐次郎

日本建築士會(建)

東京市京橋區銀座西三ノ一建築會館七階
電京橋六二〇

〔關西支部〕大阪市北區中之島三ノ三朝日ビル四階、日本建築協會内、電北濱四〇五一

大正三年六月創立。昭和三年十月社團法人設立認可。建築に關する實務上の事項を調査研究し本邦建築の進歩發達を圖るを以て目的とす。月刊雜誌「日本建築士」を發行す。

〔理事長〕中村傳治〔理事〕堀越三郎、渡邊靜、西村好時、關根要太郎、福田重義、松井貴太郎、長野宇平治、山下壽郎、安井武雄〔關西支部幹事〕波江悌夫、安井武雄、松井貴太郎

同會定款拔萃

一、本會は社團法人にして日本建築士會と稱す

一、本會は建築に關する實務上の事項を調査研究し本邦に於ける建築の進歩發達を圖るを以て目的とす

一、本會は前條の目的を達する爲めに左の

事業を行ふ

(A) 建築に關する技術家、美術家、工業家、材料業者等の聯絡を圖ること

(B) 建築に關する業務の研究をなし其の意見を發表すること

(C) 會報、年報、圖書並に雜誌を刊行すること

(D) 其他前條の目的を達するに必要なりと認むる事項

一、本定款に於て建築士と稱するは委託を受け一般建築に關する計畫、設計、工事監督顧問、調査等に從事する者を謂ふ

一、本會は總會の決議により必要の地に支部を置くことを得

一、會員を分ちて正員、准正員、客員の三種とす

(A) 正員は建築士

(B) 准正員は正員たる建築士の下に於て實務に從事する者但し准正員は建築士と稱せず

(C) 客員は前各號以外の建築家及建築に關係ある各種の専門家

同會會員規約

本會々員は次の各項を遵守す

一、社團法人日本建築士會會員業務報酬規程に基くものゝ外依頼者の意志に非ざる報酬を受けず

一、建築材料に關する商業を自ら營まず、但し商業を營む會社商店に關係を有する場合には業務上依頼者の意志に非ずして其商品指定せず

一、建築諸負業又は之に類似の業務を營まず

一、業務上依頼者以外の利害關係を有する第三者又は諸負業者より手数料等物質上の報酬を受けず

一、聘用問題に關し會員相互が故意に競争し若くは妨害せず

一、他の建築士と依頼者間に係争中のもの又一

は交渉完結せざるのに對しては新に同一業務の依頼を受けず
一、適當なる審査機關を具備せざる競技に加入せず

日本工藝美術會(工)

東京市下谷區谷中
眞島町一ノ一號

大正十五年創立。流派の新古、様式の東西を問はず、あらゆる工藝の作家、鑑賞家、評論家を以て組織せる綜合團體にして、毎年一回展覽會を開催する外、工藝美術の社會的施設に關する建言をなし又その實現に努める。

〔常務委員〕豊田勝秋、高村豊周、津田信夫、廣川松五郎〔委員〕板谷波山、石田英一、岩田藤七、磯矢完山、飯塚琅玕、齊、六角紫水、畑正吉、西村敏彦、保坂光山、小野島知文、渡邊素舟、香取秀眞、桂光春、四谷正美、吉田源十郎、吉田醇一郎、高井白陽、多畑宗哉、堆朱楊成、都筑幸哉、内藤春治、村越道守、海野清、梅澤隆眞、山崎覺太郎、松田權六、佐藤陽雲、北原千祿、木村和一、清水龜藏〔地方委員〕石野龍山、堂本五三良、沼田一雅、河村靖山、中島保美、山鹿清華、安原祥憲、松崎福三郎、越田尾山、迎田嘉亭、宮永東山、島野三秋、柴崎風卿、杉田禾堂

日本挿畫院(挿)

東京市小石川區久堅町
八六、加藤まさる方
電小石川四二八二

昭和十年創立。挿畫藝術の向上を目的とし、挿畫版權確立の運動、挿畫展の開催等をなし、機關誌「畫ともだち」を刊行し、又「挿畫研究會」を開催する。

〔同人〕鴨下晃湖、加藤まさる、清水三重三、鈴木朱雀、田中比左良、細木原青起、嶺田弘

日本挿畫家協會(挿)

東京市麻布區新町
一八〇、海野方

昭和三年創立。挿畫界の向上發展を期し、會員の權利擁護、相互扶助、新人紹介、作品發表等を主なる目的とす。

〔委員〕岩田專太郎、井川洗屋、石井滴水、林唯一、細木原青起、田中良、武井武雄、海野精光、近藤紫雲、齋崎英朋〔會員〕井上猛夫、伊藤幾久造、今村寅士、馬場射地、本田庄太郎、保積稻天、富田千秋、遠山陽子、布目敏行、岡本一平、大橋月皎、小笠原寛三、太田稚光、岡田なみじ、渡邊審也、加東三郎、加藤まさる、河目悌二、川上四郎、河盛久夫、樺島勝一、高島華宵、橋小夢、竹中英太郎、名取春仙、中野修二、中江正美、野水昌子、山六郎、山口將吉郎、柳田謙吉、松田青風、丸尾至陽、小村雪岱、大郷盛八郎、明石精一、淺野薫、新井芳宗、佐川珍香、齋田喬、清原重以知、水島爾保布、道岡敏、清水對岳坊、代田收一、神保朋世、新關青花、平澤文吉、須藤重、須藤宗方、大石哲路、吉郷二郎、福與英夫、

伊勢良夫、小田富彌、淡路多茂津

日本山岳畫協會(洋)

東京市品川區大井元芝町
八七〇、茨木猪之吉方

昭和十一年一月創立。山岳を崇敬愛好する畫家を以て組織し、山岳に關する繪畫の研究發表を行ふ。七月東京高島屋に第一回展を開いた。

〔會員〕足立源一郎、中村清太郎、茨木猪之吉、石井鶴三、石川滋彦、小菅徳二、丸山晚霞、染木煦、武井眞澄、吉田博、末光績、内野猛〔顧問〕小島島水、藤木九三

日本自由畫壇(日)

京都市島九通出水
上ル西廣田百豐方
電西陣三〇五六

大正八年京都の青年作家に依り設立。毎年公募展を開催す。

〔同人〕上田萬秋、廣田百豐、渡邊公親、玉舍春輝、西井敬岳、林文塘、久保飛路史

同會展規則

一、出品は出品者の自作畫に限る
一、出品畫の寸法に制限なきも點數は三點以内とす
一、他の展覽會に發表したるものは斷絶す
一、出品畫は凡て陳列に適當なる裱張とし一點毎に命題と氏名を記載したるものを其の裏面に貼付すること
一、陳列品の撮影印行の權利は本壇之を保留す

- 一、陳列品の賣約となりたる時は手数料として價格の一割五分を本壇に申受く
- 一、展覽會は毎年十月開催の豫定とす
- 一、開催の確定期日及び場所は毎年六七月頃發表す

日本漆藝院(工)

東京市澁谷區代々木
上原町一三二

昭和十一年五月結成。本邦獨自の漆藝の發展を圖るため從來の漆藝家の小黨分離の弊を打破して協力邁進せんとする。年一回展覽會を開催する。

〔會員〕河面冬山、河合秀市、吉田醇一郎、高井白陽、高野松山、堆朱楊成、都筑幸哉、梅澤隆眞、太田自適、岡本昇三、松田權六、福澤健一、結城哲雄、三田村自芳、莊司芳眞、森川紫山、守屋松亭〔賛助員〕六角紫水、渡邊素舟〔顧問〕正木直彦〔庶務主任〕岩瀧尙美

日本漆工會(工)

東京市神田區鍛冶町
一六ノ二

明治二十三年小川松民、柴田是眞、川邊一朝、池田泰眞、白山松哉、田邊源助等二十四名の發企によりて設立。品川彌次郎初代会頭となる。爾來略隔年に漆工競技會を開催し、大正十一年迄に十六回を重ねた。而して十二年の震災後同展は一時其開催を休止したが、昭和九年三月より新に現代漆藝品展覽會の名稱の下に全國漆藝展を開催するに至つた。同會は

日本特有の蒔繪並に漆に關する一切の傳統保存と進歩發達を計るを主旨とし、事業として漆並に漆工業に關する諸般の施設調査及技術上の研究、漆樹栽培の獎勵及其生産調査、斯道に關する圖書標本の蒐集、講演會開催等をなす。毎月雜誌「漆と工藝」を刊行す。

日本商業美術協會

東京市澁谷區戸塚町四
八四二、濱田増治方
電牛込六三二七

大正十五年設立の商業美術家協會を改組して昭和九年現稱に改む。健實なる商業美術の發達普及を圖るを目的とし、事業として舊協會の創立以來商業美術展、講習會、講演會等の開催、圖書出版等をなす。毎月機關紙「商業美術」を發刊、又研究所を經營す。

〔會長〕濱田増治〔理事〕古田達賢、仲田定之助、田野郁溫、伊藤豊、稻垣知雄、他會員百七名。

日本水彩畫會(洋)

東京市本郷區湯島
天神町三ノ二

故天下藤次郎、丸山晚霞、故河合新藏の三人の經營せる日本水彩畫會研究所を大正二年四月石井柏亭、石川欽一郎、故戸張孤雁等三十七名の發起に依り、改制

擴張して新に各派水彩畫家の綜合團體として設立。爾來毎年一回公募展を開催し今日に及ぶ。

〔顧問〕石井柏亭、石川欽一郎、丸山晚霞、眞野紀太郎、南薰造、中澤弘光、白瀧幾之助、會員百十二名。

第二十四回同展規則拔萃

- 一、本展覽會は昭和十二年五月二十日より六月六日迄上野公園東京府美術館(正面左側)に於て開催す
- 一、出品點數五點、一般出品、出品手数料金二圓、輸入の際右料金前納のこと
- 一、出品種類は水彩、素描、版畫、グワッシュ、パステル、テンペラ等とす
- 一、一般出品中の佳作に對し水彩畫會賞其他の賞を附す
- 一、賣約の際に賣價中より手数料(會員一割會員以外二割)を本會に徴收
- 一、買約者は即時に代金を支拂ふか又は其三分の一以上を約金として前納せらるべし破約の場合と雖も約金は返戻せず

日本彫刻家協會(彫)

東京市目黒區自由ヶ丘
二七七、林是方

昭和十一年五月結成。彫刻の研究團體。展覽會を開催す。

〔會員〕早川巍一郎、中村七十、林是、畝村直久、長谷川正雄、野々村一男、大川逞一、黒田嘉治、大嶽茂樹、雨田光平、大須賀力、佐土哲二、奥田勝、喜田三五、加藤顯清、片山義郎、三木凱歌、武井直也、菅沼五郎、長濱虎雄

日本圖書手工協會

東京市神田區駿河臺二ノ
五、伯爵平田榮二方

昭和六年一月設立。主として中等學校の圖書手工科並作業科の教職員を以て組織し、本部を東京に置き各府縣に支部を設く。技能科教育の振興、同科教員の地位擁護及び向上を目的とし、事業として同教育に關する研究調査、展覽會の開催、各地講習會、展覽會等に於ける援助、同科教員の人事斡旋、圖書雜誌の出版等をなす。

〔會頭〕伯爵平田榮二〔理事長〕三尾與喜藏

日本童畫家協會

東京市豊島區池袋二ノ
一〇二一、武井武雄方

昭和二年創立。童畫の向上發達、著作權の擁護等を目的とし、展覽會、出版等をなす。

〔會員〕初山滋、川上四郎、武井武雄、深澤省三、清水良雄〔會友〕熊谷元一、福與英夫、佐藤今朝治、木俣武

日本人形研究會

東京市神田區豐島町四ノ
四、電浪花一五三六

昭和八年人形作家及研究家を以て組織す。日本人形の發展普及、作家の社會的地位の向上を計るを目的とし、隨時講習、講演會を催し、又人形展節による國際親

善に努む。

〔會長〕山田德兵衛〔副會長〕太田徳久
〔評議員〕阿久津米洲、澤栗玉秀、鈴木甲子八、川上南甫、菊地吉五郎、小林岩四郎、瀧澤豊太郎、野口光彦、平田陽光、本多秀月〔會計主任〕櫻村豊太郎

日本人形社(工)

東京市下谷區上野櫻木町
五四、電下谷九二

我國人形藝術の向上發達を圖るを目的とし、昭和十年七月創立。十一年三月上野公園日本美術協會に第一回展を開催した。

〔會員〕岡本玉水、平田郷陽、久保勝太郎、平田陽光、吉田光一郎、磯見勝之、平田玉陽、三井鐵洲、野田芳正、宇佐見弘業〔賛助員〕吉田永光、久保佐四郎〔顧問〕西澤笛誠、有坂與太郎、笹川臨風

同社展覽會規則拔萃

一、本會は藝術人形の進歩發達を計るを以て目的とす

一、本會は毎年作品發表の展覽會を開催し會場時期及細則は其の都度發表す

一、本會は何人も出品することを得、出品物は必ず自作品のこと(但し他の展覽會等に陳列せられたる作品は之れを受理せず)

一、出品は本會鑑査の上これを陳列す

一、出品物は鑑査の上優秀なる作品に對して授賞し會員會友に推薦することあるべし

日本版畫協會

東京市板橋區板橋三ノ
五八一、藤森方

大正七年設立の日本創作版畫協會の後身で昭和六年一月内容を擴張し作家、研究家、蒐集家等を含む版畫家の綜合團體に組織を改めた。毎年一回會員の作品發表をなす外、國際的版畫展、研究的展觀等を催し、版畫の社會的普及に努む。十一年六月旭正秀を特派、米國各地に版畫展を開催した。

〔會長〕岡田三郎助〔副會長〕山本鼎〔常任理事〕前川千帆、恩地孝四郎、旭正秀、清宮彬、平塚運一、古川龍生、遠見享、山口進、深澤素一〔理事〕石井鶴三、藤森靜雄、會員七十名。

日本バステル畫會

東京市神田區表神
保町二、文房堂内

矢崎千代二に就てバステル畫の指導を受けた人々が主となり昭和三年八月設立せるもの、毎月研究會を開き、年一回又は二回作品展を開いて居る。

日本美術院(日、彫)

東京市下谷區谷中上三崎南
町五二、電下谷二五一〇

同院は明治卅一年十月、當時東京美術學校長を退いた岡倉覺三を盟主とし、橋本雅邦以下二十六名を正員として結成された。新時代に於ける東洋美術の維持並開發が創立に際して内外に宣稱した二

大主張であつた。同年十月第一回展を開催、且つ研究所を下谷谷中初音町に設置して後進の養成に努め雑誌「日本美術」を發刊した。同三十九年十二月に至り一時東京の研究所を撤廢、同人四名は岡倉覺三と共に常陸の五浦に退去し専念研鑽に努めたが、大正二年岡倉覺三病歿するに及び、直に院の再興を劃し新に院舎を谷中上三崎南町に起し翌三年九月開院式を舉行、十月再興第一回展を開催した。

再興に當りしは横山大觀、下村觀山、木村武山、安田靉彦、今村紫紅、小杉未醒、辰澤延次郎、笹川種郎、齋藤隆三等で其の中實技者六名を以て同人とした。再興美術院には彫刻部並に洋畫部を設けたが洋畫部は大正九年小杉未醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消滅した。毎年秋期に公募展を開き、昭和十一年再興第廿三回展を開催す。又春季には内部の試作展を開く。大正十年米國クリーブランド美術館の要請に應じ、同國主要都市六箇所に巡回展を開き、以降日本美術の海外紹介にも努む。昭和十年帝國美術院改組に際して、同人合議の上新帝國美術院への参加を聲明し、同人中、横山大觀、安田靉彦、小杉古徑、前田青邨、富田溪仙の五名は第一部會員に、平櫛田中、佐藤朝山の二名は第三部會員に擧げられ、又藤井浩祐は故藤川勇造の後を繼ぎ第三部會員に就任した。十一年二月第一回帝展の開會に参加す。六月新任平生文相の試案提示されるに及び、同院出身の會員は

(藤井浩祐を除く)他の八會員と共に同試案を改組の趣旨を全く没却せるものと斷じ、當局不信任を聲明して會員を辭任した。同年同人近藤浩一路、藤井浩祐、武井直也の三名脱退す。

〔評議員〕高田早苗、原富太郎、齋藤隆三〔同人〕横山大觀、木村武山、安田靉彦、小杉古徑、前田青邨、大智勝觀、平櫛田中、吉田白嶺、佐藤朝山、中村岳陵、荒井寛方、山村耕花、筆谷等觀、長野草風、橋本靜水、石井鶴三、小川幸錢、北野恆富、保田龍門、眞道黎明、橋本永邦、小林柯白、郷倉千毅、堅山南風、酒井三良、富取風堂、小山大月、喜多武四郎、新海竹藏、大内青圃、奥村土牛、溝上遊龜、田中青坪、山本豐市〔十一年度推薦同人〕中村貞以、太田聰雨、宮本重良、松原松造、中村直人〔院友〕西村青歸、牛田雞村、兒玉素行、石原春秋、野生司香雪、奥村藻山、大塚晃陵、橋本秀邦、黒田古郷、木下春、小川千颯、四田觀水、加藤洵綾、歸山千蒼、奥村玲瓏、野田文雄、跡部白鳥、保章良朗、三石紅樹、中庭煥華、小島一谿、竝木瑞穂、芝垣興生、眞道秋皓、森山麥笑、藤井白映、鈴木大麻、石本光太郎、柴宗廣、小林三季、茨木杉風、高橋萬年、中島清、鬼原素俊、内田青薫、小谷津任牛、村田泥牛、高橋周桑、上田畦草、高橋秀佳、高橋都哉、中島榮刀、岡田壺中、小林巢居、吉田澄舟、川手青郷、鈴木鳥心、島田訥郎、岡田雄鷲、菊池公明、松永成路、田中案山

子、宮崎東里、河村良孝、半田鶴一、我妻碧宇、丸儀太郎、宮田隆子、鈴木三朝、鶴岡節夫、横田仙草、花岡朝生、佐藤耕寛、冬木大内、小林草悦、大橋敏男、村田徳次郎、關谷充、白井保春、松村秀太郎、杵谷精一、寺瀬默山、入江美法、大野隆一、林是、矢崎虎夫、横田七郎、宮本理三郎〔十一年度推薦院友〕辻汎吉、長濱虎雄、長谷川豊雄、岡村進、小林章、中平四郎、古藤正雄、土井要輔〔研究會員〕凡九十名。

日本美術協會

東京市下谷區上野公園櫻ヶ丘、電下谷一九一〇

明治十一年日本美術の衰頹を憂へ河瀬秀治等の同志會として美術品評會を開き、翌十二年會名を選んで龍池會と命名し、佐野常民を會頭に推し明治十六年有栖川宮熾仁親王殿下を總裁に奉戴した。而して明治十三年内務省博物館の開設せる第一回観古美術會を第二回より繼承して開催し明治二十年に至つた。此年十二月規則を改正し、會名をも亦日本美術協會と改め、其後毎年春季二回（彫刻、工藝及書、篆刻）、秋季一回（日本畫）の三回に分ち展覽會を開催するを例とする。昭和十一年度は第百回に相當せるを以て記念の爲各部の綜合展覽會を春季に於て開催した。大正十四年組織を改めて財団法人とした。而して現在其組織は第一（繪畫）、第二（書、篆刻）、第三（彫刻）、第四（建

築圖案）、第五（玉、石、木、竹、牙、角、介甲彫品、木雜嵌）、第六（彫金、鋲起、鍍金）、第七（鍍金、鍍銀）、第八（陶磁、七寶、玻璃）、第九（漆器、蒔繪）、第十（織物、刺繡）、第十一（寫眞、製版）の十一部から成つて居る。

尙同會列品館は大正十年の竣工で平家建、延坪五百二坪、同會主催展覽會に使用する外は希望者の依頼に應じ貸館する事がある。

〔總裁〕高松宮宣仁親王殿下〔會頭〕伯爵金子堅太郎〔副會頭〕中田敬義〔事務理事〕溝口禎次郎〔理事〕東郷安、山崎朝雲、八木岡春山、香取秀眞、板谷波山、千葉胤明、大坪正義〔監事〕星野錫、下啓助〔主事〕安井易市、評議員三十六名、委員顧問十二名、委員百十一名、名譽會員三十二名、特別會員五名、通常會員九百十九名。

日本文人畫協會（日）

東京市小石川區小日向臺町二ノ二九、渡邊雪峯方電大塚六三三七

文人畫の振興を圖るを目的とし、隨時畫及詩文書等の研究會、講習會、展覽會等を開催す。昭和十一年十一月上野公園日本美術協會に第一回の公募展を開いた。

〔幹事〕中村不折、渡邊雪峯、中田雲暉、大久保風閣、西丸小園、柿木玉郎〔評議員〕磯部羽州、伊藤紫雪、島田鶴亭、藤

本翠園、辻香塙、松岡吳藍、海上龍子、本尾香園、木村棲雲、吉田苞竹、平原香雪、入澤華畦、寺山春龍、皆川桐蔭

日本壁畫會（洋）

東京市中野區昭和通二ノ三〇、大井方

壁畫藝術の研究並發表を目的とし昭和十年十一月結成す。十一年五月銀座青樹社で第一回展開催。

〔同人〕井上三綱、大井基光、安田豊、圓城寺昇、武野光瑤、安藤信哉、富川潤一、松田文雄、布施信太郎、大内青坡、牛島憲之、大内青岡

日本壁畫協會（洋）

東京市日本橋區江戸橋二ノ四

舊稱日本壁畫家協會。昭和十年十月、寺崎武男、濱田増治を顧問として、橋本徹郎、猪子斗示、其他二科展の新人を以て組織す。

日本漫畫會

東京市中野區本町通四ノ一七、牛島一乃方

大正二、三年頃當時の都下新聞社在勤畫家の紙上藝術に飽き足らず、展覽會開催を發企したのが同會結成の起源で、現在ではジャーナリスト以外の青年漫畫家を擁して年一回展覽會を開催する。

〔會員〕池田永一治、池部鈞、牛島一乃、

江島初喜、岡本一平、小野佐世男、大森弓磨、帷子進、可東みの助、京屋金介、北澤樂天、寺内純一、小林克己、小峰三四郎、近藤日出造、阪本牙城、清水勘一、志村和男、杉浦幸雄、杉田三太郎、田中比左良、田邊路平、名越國三郎、中村圭助、服部亮英、代田收一、細木原青起、前川千帆、水島爾保布、宮尾しげを、三宅當也、村上鐵太郎、森火山、森島直造、森山三郎、安本亮一、山本李兵衛、矢崎茂四、和田邦坊、富山まもる、生澤朗、澁谷三止朗

日本彫會（彫）

東京市世田谷區田園調布二ノ七二六ノ一、澤田晴廣方電田園調布二九八一

内藤伸の主唱により大正十三年設立された木彫研究會と其の姉妹會たる木生會とを合併して昭和六年春結成。木彫藝術の研究、發表を目的とし、毎年東京乃至大阪に於て制作展を開く。十一年二月内藤伸退會、研究贊助員に推さる。

〔幹部會務員〕佐々木大樹、三木宗策、澤田晴廣、中野桂樹、三國慶一、西村雅之〔會員〕佐崎霞村、木村威夫、橋本高昇、森野圓象、阿井瑞峯、佐伯量良、井口喜夫、西田明史、本田德義、大島駒藏、山助敏男、山口四郎、清水源可、平澤信勇、工藤敬三、外會友十七名。

人形藝術院

東京市品川區品川三ノ一五一七、電高輪六四七

人形の藝術的向上を計るを目的とし、例年一回展覽會を開く。昭和十一年六月東京白木屋に第一回綜合人形展を開催した。

〔同人〕正本直彦、建昌大夢、岡田三郎助、下田次郎、有坂與太郎、會員は定めず。

綜合人形展規約

一、本展覽會は例年一回開催す
一、本會の出品物は人形以外に認めず
但し、大きな並に素材には制限を加へず
一、出品物を左の部門に類別す
〔第一部〕技法の如何を問はず、純藝術品たるを要す
〔第二部〕全日本新興婦人人形コンクールとし出品者の資格を婦人に限定す
一、本會の出品は一般より公募す、但し出品の點數は一人三點以内に限り（但し併て發表せられたる作品は、これを出品するを得ず）
一、出品はすべて鑑査を行ひたる上陳列す
一、本院の推薦者を以て會員とし、會員は毎回無鑑査とす
一、本會の出品物にして優秀と認めたるものに對し授賞す
〔第一部〕最優秀者に人形藝術院賞、並に優秀者に人形賞を授與す
〔第二部〕優秀なる作品を七點選拔し、それぞれ新七草賞を授與す
一、出品物の搬入並に搬出日は出品申込者へ通知す、但し出品物の搬入出に要する費用は出品人の負擔とす
一、出品物は凡て手数料を徴せず、但し出品者の希望により出品物は賣價を附し、賣約ある場合は、手数料として賣上げの二割を徴す

一、出品をなさんとする者は豫め本院事務所（出品目録添附の上）申込む事

ねばつち社（彫）

東京市豊島區島崎一ノ二、志田達三
電話八六二

昭和九年度の東美校彫刻科製造部の出身者を以て組織す。彫塑研究並發表をなす。

〔同人〕井上信道、盤若一郎、片山義郎、富岡泰、吉田寛治、横田文男、鷹巢照久、志田達三、上田薫、畠村直久、酒見恆、中村三郎、中村七十、淺岡重治、大間知龍之助、眞鍋忠行、富田武雄、松田一郎〔賛助員〕北村西望、建昌大夢

農村工業協會

東京市神田區錦町一ノ六、電神田四六七一

昭和九年創立。社団法人組織。農村工業の發達を圖るを以て目的とし、これに關する調査研究、生産技術及經營の指導、販賣連絡等の事業を行ふ。雑誌「農村工業」を發行し、展覽會、講演會の開催、講師の斡旋派遣等をなす。

〔會長〕子爵大河内正敏〔理事〕友部泉藏、吉田茂、田澤義輔、月田藤三郎、那須皓、上田貞次郎、山本忠興、福島繁三、安藤廣太郎、佐藤寛次、佐野利器、關口八重吉、鈴木梅太郎〔監事〕結城豐太郎〔幹事〕増田作太郎

NOVA美術協會（洋）

東京市世田谷區松原町四ノ五一

昭和五年結成。從來の「興行的展覽會機構」、審査制を否定し、新感覺、新造形意識に基いて製作せんとする青年作家の集團。昭和六年より毎年春季に「無黨派的審査制」に依る公募展を開催して居る。

〔會員〕大竹久一、鶴岡政男、關川護、小俣球一、北川實、松本俊介

巴里東京新興美術同盟

東京市中野區江古田四ノ一五四、齋藤五百枝方
電中野四四一四

昭和五年成立。同會の趣旨は巴里に於けるアヴァンガルド藝術を東京に招來し又東京の新興美術を巴里に紹介し、一黨一派に偏せざる文化交流を行ふに在る。

昭和七年第一回展を開催す。

〔盟員〕齋藤五百枝、峯岸義一〔展覽會委員〕（在佛）アンドレ・サルモン、アンドレ・ブルトン、パブロ・ピカソ、ジャン・ミロ、ジュアン・リユルサ、アンドレ・マツソン、ジャン・ド・ボットン、モイズ・キスリング、松尾邦之助、（東京）川路柳虹、田邊孝次、森口多里、小城基、柴田勝衛

葉隠美術協會（日、洋、彫、工）

東京市世田谷區深澤町一ノ三四一〇江島信一方

昭和十一年五月創立。佐賀縣出身美術

家の組織する綜合發表團體で年一回展覽會を開く。

〔會長〕岡田三郎助〔副會長〕田雜五郎〔幹事〕江島信一〔會員〕（日本畫）野口謙次郎、山口實、池田幸太郎、秀島英磨、久間光一、陳内松齡、辻勝喜、立石春美（油繪）岡田三郎助、小代爲重、北島淺一、御厨純一、武藤辰平、光石藤太、手塚一郎、宮地孝、高木背水、松本弘二、副島秀生、山口猛彦、山崎善次郎、鍋島柳江、新宮清彦、甲斐仁代（彫刻）古賀忠雄、松尾仁衛、石田尙友（金工）田雜五郎、石田英一、江島信一、土屋杏平

白日會（洋、彫）

東京市下谷區清水町六
富田温一郎方

大正十三年春組織。同年六月東京三越本店に第一回展を開催す。爾來毎年春季に東京府美術館に公募展を開き昭和十一年第十三回展に及ぶ。

〔會員〕池部鈞、荻野康兒、加治屋隆二、中澤弘光、無緣寺心澄、山田説義、五島甚之助、木村桂二、伊藤清永、笠原毅、田中繁吉、永原廣、能勢龜太郎、間部時雄、秋元松子、三宅圓平、富田温一郎、吉田三郎、田村信義、永井武夫、野口良一、小堀進、相田直彦、篠原薫、大久保喜一、渡部菊二、竹林順一、村上鐵太郎、熊谷登久平、香田勝太、笹岡了一、鈴木秀雄、會友二十八名。

同會第十四回展規定拔萃

一、(會場)東京府美術館、(受付場所)同所、
(受付期日)一月二十一日、(開會期日)一月
廿七日より二月七日迄、(出品點數)一人五
點まで

一、出品物は出品目録を添へ各一作毎に出品
目録通り題名、氏名、價格を紙片に明記し
作品の裏面に貼付の上搬入の事

一、出品者は出品手数料として一人に付金二
圓を出品物搬入と同時に納入の事、但し鑑
査の結果一點も入選せざるも手数料は返戻
せず

一、鑑査は會同人によりて之を行ふ

一、優秀なる作品に對しては白日賞並に奨勵
賞を贈與し併せて受賞者は翌年展覽會に二
點以内を無鑑査出品する事を得

一、陳列品の撮影印行の權利は本會之を保留
す

一、陳列品賣約となりたる時は手数料として
賣價の二割を本會に於て申受くる事

一、地方出品者搬入搬出は荷送手数料送共一
點に付金四十錢にて下谷區谷中坂町池田運
送店にて(振替東京四二七二)取扱ふに付
利用されたし

白 鷗 會(洋)

東京市目黒區原町二
五七、廣本季與丸方

昭和八年一月結成。洋畫研究團體。十
一年五月銀座資生堂に第一回展を開い
た。

〔會員〕淺井政勝、内田一郎、畑季雄、
廣本季與丸、高橋好雄

白 朝 會(洋)

東京市澁橋區下落合一ノ
五四〇、杉本定一方

昭和九年三月舊帝展第二部審査員級有
志により組織。日本橋高島屋に於て年一
回同人の作品發表をなす。

〔會員〕金澤重治、金井文彦、吉村芳松、
田邊至、大久保作次郎、安宅安五郎、柚
木久太

白 御 會(日)

京都市左京區一乘寺松原
町一八、中島榮刀氣附

昭和十一年十月創立。關西在住の院展
系作家を主とする日本畫の團體。同年十
月京都市美術館に第一回展を開いた。

〔會員〕石丸太象、今井桂三、館岡栗山
人、中村貞以、中島榮刀、栗山弘演、藤
田四郎、福井末義、小松均、越原義山、
佐原修一郎、佐野光穂、三宅淳

白 鈴 會(日)

東京市板橋區中新井町三
ノ二〇七五、石川朝彦方

昭和五年一月創立。會員の自由なる創
作發表機關。

〔會員〕石川朝彦、春日井幾代、武田一
路、上田春芳、中島白陽、前田鳳堂

白 鷺 會(日)

大阪府東區十二軒町二二
竹村菊々軒内

舊稱交風社。日本畫の研究團體にして
毎月寫生會、作品批評會を催し春秋二季
に展覽會を開く。

八 絃 會(日)

京都市四條高倉
大丸美術部

大丸美術部の主催する京都在住日本畫
家八名の作品發表會。昭和十年第一回展
を開く。

〔會員〕堂本印象、宇田萩郎、德岡神泉、
山口華楊、金島桂華、案本一洋、中村大
三郎、福田平八郎。

原町權工藝研究會(工)

福島縣相馬郡原町吉井
樽家具製作所内

昭和五年四月創立。同地方の特産たる
樽材による工藝品の改善發達並にその販
路開拓を圖る。年二回展覽會を開く。

〔會長〕吉井佐吉、會員三十八名。

阪神彫塑家協會(彫)

大阪府住吉區天王寺町
三二六一、上田曉方

昭和十一年十月創立。二科出品の彫塑
家を以て結成し、年一回阪神に於て作品
展を開催す。

〔會員〕織田久馬一、唐木政一、上田曉、
山根顯一、木村敏一、水野美恵子、妹尾
健太郎、山本博一

斑 丘 社(工)

東京市下谷區上野元
黑門町六、神戶屋內
電下谷九八一

昭和五年の東美校工藝科入學者を以て

組織する工藝研究團體。毎年十一月に展
覽會を開催す。

〔同人〕井上敏雄、井上周平、石橋貞治、
橋本欣三、長谷川八十吉、近江晃、小川
正、和田鴨江、涌波達雄、鹿取一男、金
田諒三、柏崎榮助、芳武茂介、高田六藏、
中川清一、中村保彦、内田邦夫、乘松巖、
山本光、松原春男、松川蒸二、小池岩太
郎、小林達男、古代幸三、江波戸一郎、
寺井直次、赤松義弘、淺田二郎、佐伯義
雄、宮島昌男、島田陽次郎、清水民藏、
下暢、廣瀬英五郎、末田利一、進來昇

美校横濱會

横濱市中區庚臺六
宮川香山方

昭和十年五月創立。横濱在住若しくは
出身の東美校卒業生、在校生、關係者を
以て組織する。親睦團體。年一回展覽會
を開く。

〔幹事〕飯田九一、石野隆、岩井蘆吉、
河原丈夫、宮川澄康、森田民藏、鈴木泰

美術工藝大阪巧藝社(工)

大阪府北區河内町一ノ
二、伊藤光秋方
電堀川二六八三

大正十四年創立の精美會を昭和八年會
員を増加して現稱に改む。年一回同人の
工藝展開催。

〔顧問〕白川朋吉〔會員〕伊藤光秋、伊
藤鐵崖、今橋春齋、市川鏡琅、大原貫學、
大森金一、武石山月、田中貞二、灘波雅

堂、楠正多、松澤壽水、小林美春、三國丹祐、北野宗三郎、龜文堂正平、江殿功一齋、鈴木玩々齋

美術公正會

東京市淀橋區西大久保二ノ
二五三、電話四六三二五

昭和十年十月美術關係の記者に依て組織さる。美術行政に美術に關する諸問題を研究し、時宜に應じて其主張を行ふものとす。隨時研究會、講演會を開催しパンフレットを發行す。

〔會員〕岩佐新、垣見泰山、浦崎永錫

美術懇談會(批)

東京市神田區淡路町二
ノ七、電話二〇一〇

昭和十一年十月設立。美術批評家並に美術に關心を持つ文壇の作家批評家を以て組織し、隨時懇談會を催し、美術の研究並に批判に對する各自の教養を深め且つ文化の發展に寄與せんとする。會報、クオタリを發行す。

〔會員〕一氏義良、富永惣一、大島隆一、尾川多計、川路柳虹、横川毅一郎、村田良策、藤森成吉、青野季吉、荒城季夫、相良德三、廣津和郎、森田龜之助、森口多里

美術雜誌東臺俱樂部

東京市美術館内

美術雜誌編輯者の組織する親睦團體。

美術關係團體一覽

〔會員〕藤本詔三(アトリエ)、石川宰三郎(美之國)、岩佐新(美術)、浦崎永錫(美術界)、垣見宣修(美術時報)、大下正男(みづゑ)

美術批評家協會(批)

東京市京橋區銀座西四丁
目、ラスキ文庫内

昭和十一年十月設立。美術各部門の學者、批評家を會員とし、美術批評の確立、進歩的な文化運動の實踐を目的とする。その計畫する處の事業は左の通り。

(A)機關雜誌「美術批評」の發行、(B)美術圖書館設立、(C)美術行政に對する提案建議、(D)都市美術に對する美術的批評、(E)美術教育に對する指導機關の設立、(F)産業美術に對する指導機關の設立、(G)海外に於ける美術批評家團體との提携、(H)海外に於ける文化團體との資料の交換、(I)一般美術問題に關する講演、(J)美術著作權の制定、(K)國際的文化交換に對する批評、(L)美術コンタールの開催、(M)優秀作品の推薦。

〔會長〕子爵吉川元光〔書記長〕柳亮

〔事務長〕外山卯三郎〔會員〕(東洋美術)小林剛、蓮實重康、野間清六(西洋美術)外山卯三郎、柳亮、今泉篤男(工藝)ブルノ・タウト(建築)市浦健(工業美術)安田清(裝飾美術)藏田周忠(商業美術)原弘(都市計畫美術)石原憲治(舞臺美術)園池公功(舞踊)蘆原英了(映畫)北川冬彦、岩崎昶(寫眞)仲田

定之助、中原實(服飾)フランシシ。アエロデイ(裝飾)庄司淺水(チャナル。グラフィック)三浦逸雄

兵庫縣美術家聯盟(日、洋)

神戸市元町鯉川筋畫廊内
電話三三三五一

昭和五年八月兵庫縣在住の美術家を以て結成。事業として展覽會、講習會、研究會等を開催し、毎年春季に同人展を秋季に公募展を行ふ。十一年十一月神戸市大丸に第十二回展開催。

〔評議員〕(日本畫)福田眉仙、牛尾桃里、戸張節以、中村久巳(洋畫)鈴木清一、平松武清、山崎隆夫、櫻井政雄、杉浦三郎、東晴司、大石輝一、山口久一(囑託)大塚銀次郎、會員九十四名。

同聯盟十一年度展規則抜萃

- 一、本展覽會に陳列する作品左の如し
- 第一部 日本畫、第二部 洋畫(水彩、パステル、版畫を含む)
- 一、本展覽會に出品する者を左の如く分つ
- (イ)本聯盟會員(ロ)一般公募
- 一、一般公募の出品
- (イ)一般公募出品者は兵庫縣下に在住し本聯盟展に出品を希望する者に限る
- (ロ)一般公募出品者は出品手数料一人金一圓を作品搬入の際納入すべし
- (一)一般出品に對しては鑑査の上陳列す尙本年度の審査員は左の諸氏とす
- (日本畫)福田眉仙、大野麥風、秋吉蘇月、山本大慈、牛尾桃里
- (洋畫)林重義、小磯良平、鈴木清一、伊藤慶之助、田村孝之介、川西英、辻愛造

元川克己

一、一般出品にして時に優秀なりと認めたる者に左の規定を設く

(一)會員推薦、(二)聯盟賞(次年度無鑑査)、(三)次年度無鑑査

一、一般出品者は一人三點以内とす、但し他の展覽會に發表せし作品は聯盟展に出品するを得ず

一、一般出品者は作品搬入前凡十一月五日迄に本規定末尾の出品目録を聯盟事務所たる鯉川筋畫廊へ提出すべし

一、本展覽會に於て賣約ありたる時は賣價の二割を會場たる大丸に申受けるものとす

兵庫縣美術協會(日、洋、彫、工)

神戸市須磨區離宮前町二
番屋敷、畫室社、山本廣
洋方、電話一〇二〇

大正十一年三月創立。同地方美術の奨励を目的として毎年春秋二回公募による綜合展を神戸三越に開催する。昭和十一年十一月第二十六回展を開いた。機關雜誌「畫室」を發行す。

〔會長〕兵庫縣知事〔總務〕山本廣洋〔展覽會委員〕飯塚周悅、土肥蒼樹、大橋基市、立脇泰山、中野草雲、山下摩耶、山下薫、前田萩郎、前田賢、淺野祐夫、古川素山、宮崎翠濤、伊川寛、中安保、唐木政一、小倉千尋、丸美小平、大串貞美、佐野光穂、小山正雄〔十一年度展覽會審査員〕廣島晃市、石崎光瑤、村上華岳、森月城、田中善之助、黒田重太郎、濱田葆光、國枝金三

廣島縣工藝協會(工)

廣島市猿樂町廣島縣產業
獎勵館内

昭和六年十月設立。縣下の工藝品製作者並關係者を以て組織し、事業として工藝産業の調査、工藝品意匠圖案の研究、工藝品需給斡旋、展覽會開催等を行ふ。
〔會長〕峰松眞三郎〔副會長〕米山利助、伊藤琢郎

びゆるて(洋)

豐島區長崎町一ノ二三
八三、大山英夫方

昭和十一年度東美校洋畫科卒業生を主なる會員とする。十一年銀座三味堂に二回作品展を開催した。

〔會員〕岩田榮、橋本正躬、大山英夫、田中節子、村田保三、廣瀬正雄、須藤清彦

伏虎美術協會(洋)

東京市澁谷區千駄谷町五ノ九〇二、木下孝則方

昭和十一年三月設立。和歌山縣下の洋畫の發達獎勵を目的として、毎年春、和歌山に公募審査による洋畫展を開催す。十一年三月第一回展を開いた。

〔會長〕和歌山縣知事〔會員〕木下孝則、木下義謙、濱地清松、川口軌外、碓伊之助、園部邦香

服飾美術會(工)

京都市園崎北御所町三七
山鹿清華方、電上八二二

昭和十年一月創立。服飾美術専門の研究團體で縫工會同人により組織さる。毎月數回研究會を開き又各地の百貨店に展覽會を開催す。

〔會員〕石田玉英、井下阿木良、井口紀、岩崎眞也、長谷川文平、林雨染、馬場笛山、星流、小合友之助、太田光嶺、長村華城、横山芙明、田中貞造、田中初雄、田井修一、村田春祿、中村鵬生、山鹿清華、山崎茶平、安竹聖果、福村健、悟道卯一、駒井宗悦、皆川月華、島田勝四郎、平尾周史

福井縣漆藝會(工)

福井縣今立郡河和田村
小林作兵衛方

福井縣漆工藝の發達を目的とし、漆藝の研究並發表を行ふ。

〔名譽顧問〕根尾謙兒、山崎覺太郎〔會長〕小林作兵衛、會員七名。

福井縣美術協會

福井市福井縣商品陳列所内

大正十五年創立。福井縣の美術及工藝の發達を圖るを目的とし、同縣出身並縣内在住の美術家を以て組織す。年一回の美術及工藝品展覽會開催の他に講習會、講演會等を催し、又他の博覽會、共進會等へ出品の斡旋をなす。
〔會長〕根尾謙兒

福岡縣工藝協會(工)

福岡市天神町福岡縣産業獎勵館内

昭和十一年八月設立。縣下工藝産業の發達を圖るを目的とし、工藝に關する調査、展覽會、講習會の開催、工藝功勞者の表彰等を行ふ。「福岡縣工藝展覽會」は同協會員が主としてその開催に當る。
〔會長〕福岡縣知事

福岡美術會(日、洋、彫、工)

福岡市因幡町福岡市通俗博物館内、電一六七五

大正十二年創立。福岡縣出身並在住の美術家を以て組織する。美術の向上に資する爲中央より二科、春陽、獨立等の諸美術展の誘致開催に努め、又毎年會員の綜合作品展を開催する。

〔會長〕石橋愛太郎〔幹事〕富田賢四郎、光安浩行、永村豊秋、眞岡大莊、林玄海、藝田碧堂、杉江春男、山喜多二郎太

福島美術協會(洋)

福島縣福島市役所

昭和五年九月、福島縣に於ける美術の發達を目的として設立。年一回福島市に於て公募展開催の他、臨時講習會、講演會等を開く。

〔總裁〕福島縣知事〔會長〕佐藤澤

福陽美術會(日)

東京市本郷區弓町一ノ二五、坂内青嵐方

大正八年、福島縣出身の日本畫家を以て組織す。會員相互の親睦、後進の誘掖に努め、東京に於て三回、郷土に於て毎年展覽會を開催し現在に至る。

〔會長〕勝田蕉葵〔理事〕荻生天泉、太田秋民、坂内青嵐〔幹事〕渡邊晨畝、角田磐谷、石塚省三、酒井三良、渡部浩年、酒井白澄

戊辰會(日)

東京市杉並區井荻一ノ四〇、磯部草丘方

昭和三年創立。會員の自由製作發表を目的とし、毎年一回展覽會を開催し、昭和十年第七回に及ぶ。十一年度休展。

〔顧問〕川合玉堂〔會員〕磯部草丘、石渡風古、花村晃觀、太田一彩、甲斐常一、川崎求霞、田中針水、田崎美山、高田那美、長野草風、村雲大機子、井上恆也、野添草郷、山下巖、松本泰水、古家苔軒、古屋正壽、藤井霞郷、兒玉希望、水野陽翠、島春潮、鈴木有哉

萌青會(日)

東京市小石區小日向臺町三ノ五三、長澤美枝
電牛込二二二二

女子美術専門學校師範科日本畫部及高等科日本畫部の昭和九年度卒業生有志を以て組織す。十一年四月第一回展開催。會員十三名。

北方美術協會(洋、彫)

小樽市山ノ上町四四
澁谷政雄方

昭和十年秋小椋出身及在住の美術家
(主として洋畫彫刻)に依つて結成さる。

十一年春同市に第一回展を、十一月に秋季展を開催した。十二年より公募展開催の豫定。講習會を開く。

〔會員〕兼平英示、樹田誠一、三浦鮮治、中野五一、中村善策、澁谷政雄、齋藤尙、谷吉二郎、竹部武一、山崎省三

北陽會(日、洋、彫、工)

東京市麹町區大手町二ノ二、日清ビル六二一號、
電九ノ内一八七七

昭和八年創立。主として、東美校卒の富山縣出身在京美術家を以て組織す。毎年會員の製作展を開く。

〔會長〕伯壽前田利男〔副會長〕高廣三郎、〔世話人〕佐々木大樹、郷倉千靱、長谷川義起、山崎覺太郎、中谷宏運、五島甚之助、會員五十一名。

馬込美術會

東京市大森區馬込町東二ノ九七三、大塚金吾方
電大森二〇五〇

昭和二年春設立。馬込町在住の美術家の親睦團體で、展覽會を開く事三回に及ぶ。

〔會員〕佐藤朝山、橋田庫次、關口隆嗣、馬越樹太郎、小林克己、須藤宗方、服部亮英、田澤八甲、井上白楊、池部一夫、青柳瑞穂、大塚金吾、眞野紀太郎、矢島甲子太郎

三重縣工藝協會(工)

三重縣津市下郡田三重縣工業試驗場内

昭和九年三月創立。縣下工藝品の改善並に輸出増進を圖るを目的とす。縣内在住の工藝品製造業者、販賣者並に工藝組合團體を以て組織し、事業として展覽會講習會の開催、取引上の紹介斡旋、工藝に關する調査等を行ふ。

〔會長〕(三重縣經濟部長)石建國次郎、正會員百六十二名。

未知會(洋)

東京市小石川區林町四〇藥師寺孝太郎方
電大塚二八五二

洋畫の研究並發表團體。昭和十一年十月第四回展を開催す。

〔會員〕藤岡俊一郎、野末恆三、里見哲明、池田俊一、大畑實、寺田春一、上原誠、齋藤齊、藥師寺孝太郎、本儀信

明朗美術聯盟(日)

東京市目黒區三谷町九六
電荏原四〇九六

もと青龍社の同人落合朗風、川口春波の二名に依つて昭和九年一月創立。同年第一回展を開いた。毎年秋季に公募審査による展覽會を開催する。

〔同人〕落合朗風(十二年四月歿)、川口春波、渡邊實、荒井草雨、井上陵華、丹阿彌吉吉〔盟友〕樋口英雄、岡田魚降森、重松謙吉、伊久留朗兒、安藤ふぢ枝、安

井大游、狩野晃行、二宮新、谷良治〔盟員〕海老原克己、田代寬哉、渡邊武行、具志堅古雅、田中智子、國友重世、佐々本順、東條光高、西田知都志、城野三藏、佐々木勝磨、木和村創爾郎、研究員七名

木心會(彫)

東京市荒川區渡邊町一〇四〇、吉田方

昭和元年吉田白嶺の門下によりて結成。十一年十月第一回展を開いた。

〔會員〕林是、長谷川豐雄、岡村進、高山東一、中村直人、松村外次郎、小林貞吾、吉田白嶺

ハツ手會(工)

東京市中野區鷺ノ宮木村章平方

昭和十一年七月創立。彫刻家による工藝品の製作並發表の團體。十一年七月第一回展開催。

〔同人〕林是、長谷川豐雄、岡村進、中村直人、黒田嘉治、三枝古都、松村外次郎、木村章平

八木橋文平あけび工藝指導所

弘前市山道町一二
電六一八

昭和七年一月八木橋文平に依り設立。輸出向新あけび工藝品の研究創案並其販路増大に努む。

〔所長〕八木橋文平、所員百五十名。

幽興會(日、洋)

東京市淀橋區上落合二ノ六四〇、古川北華方

古川北華を中心とする集りで、同人展を開催する。

〔會員〕橋本關雪、古川北華、津田青楓、正宗得三郎、牧野虎雄、錢瘦鉄

洋風版畫會(版)

東京市澁野川區澁野川町六八五、渡邊光徳方

昭和四年十二月創立。主としてエツチング及石版畫の團體。毎年一回展覽會を開く。

〔會員〕岡田三郎助、田邊至、吉田久繼、織田一磨、中村研一、及川康雄、間部時雄、小磯良平、猪熊弦一郎、永坂春雄、大久保作次郎、寺崎武雄、渡邊光徳

横濱美術協會(日、洋、版)

横濱市中區日ノ出町二丁目一ノ九
佐野八郎方、電長者町三三二四

昭和七年七月創立。横濱在住の日本畫家及洋畫家を以て組織し、年一回日本畫洋畫、版畫の公募展を開く。十一年十月同市興産館に第五回展を開催した。

洛窯會(工)

京初市伏見區桃山宗和園
昭和四年創立。澤田宗山の指導を仰ぐ

京都陶磁器作家の團體。毎年數回展覽會を開き、尙毎月研究會を催す。

〔會長〕 澤田宗山〔幹事〕 松本石亭、鈴木則司、伊地知仁郎、横山瑞祥、堯部清

里南會(洋)

東京市中野區江古田
二ノ九三一、鈴木良三
電落合長崎二五六九(呼出)

昭和十一年三月結成。嘗つて巴里に於て共に修學せる人々。隨時作品展を開催する。

〔會員〕 勝間田武夫、能勢龜太郎、大橋了介、鈴木良三、高林和作、田村憲、和田清

離騷社

東京市牛込區津久戸町三〇
西澤富藏方、電牛込一八八一

大正九年八月創立。會員相互の親睦を圖ると共に、毎月美術に關する月次研究會、見學旅行等を催して修養に資せんとする集りである。

〔幹事〕 西澤富藏、金井紫雲、石川吊水、飛田周山、甲口黃葵、會員三十七名

立光會(洋)

大阪市住吉區住吉町
一三〇六、胡桃澤方

昭和八年六月創立。關西に於ける東光會出品者及同好者を以て組織す。十一年

第一回展開催。

〔講師〕 齋藤與里〔幹事〕 岩中德次郎、家永麒三郎、石田勝重、西寺鐵舟、小栗文雄、川本浩三、河井達海、吉村藤作、多田俊彦、辻利平、胡桃澤源一、山崎萬壽夫、小池光三、圓城寺泥、三田村榮、柴谷宗治、普通會員六十名

立陣社(洋)

東京市澁橋區下落合四ノ二〇
九六島津方、電大塚三三三一

昭和十一年七月創立。舊帝展系の青年洋畫家を以て結成。十一年十一月銀座青樹社に第二回展開催。

〔同人〕 井手坊也、榎戸庄衛、石川滋彦、圓城寺昇、細井繁誠、笹岡了一、大貫松三、三輪孝、川端實、島津一郎、野口良一、須田壽、山口猛彦

柳美會(工)

京都市伏見區桃山宗和園内

大正六年京都柳池校開校五十年記念に同校關係の工藝家を以て創立。毎年展覽會を開催し今日に及ぶ。

〔理事長〕 澤田宗山〔理事〕 泰藏六、吉田長春、青木俊勝

聊娛會(洋)

東京市澁橋區下落合四ノ一六二三、大給近清方

華族及び華族籍にありたる者を以て組織する洋畫愛好者の團體で、年一回展覽會を開く。昭和十一年新宿伊勢丹に於て第十二回展を開いた。

〔代表者〕 男爵 徳川義恕

〔幹事〕 子爵 織田信大 子爵 松平定晴、大給近清、會員十九名、客員十五名

緣人社(彫)

東京市下谷區谷中上三崎
南町六〇、伊藤鉦次方

昭和八年度の東美校彫刻科製造部卒業生を以て結成。毎年六月展覽會を開催す

〔會員〕 岩崎良平、伊藤鉦次、西田信星野宣、小田寛一、川口信彦、漆原馬須雄、宇佐見庄一、新井喜惣治、青柳利男、明田川孝、北青史

綠蠟彫刻會(彫)

東京市豊島區千川町一ノ三一七〇、中野昂方

舊稱大東彫塑會。大正十二年以降の東美校木彫部卒業生有志を以て組織す。關野聖雲の彫刻界に於ける主張を翼賛せんとす。會員六十名。

瓊爽畫社(日)

東京市小石川區高田窪
司ヶ谷八四、杉山寧方

松岡映丘の門下生有志を以て昭和九年結成。新日本畫の創作を目的とす。十年第一回展を開く。

〔會員〕 浦田正夫、山本丘人、杉山寧河部貞夫、岡田昇

麗交會(工)

京都市中京區富小路四條上ル

昭和十一年三月創立。東京及び京都の工藝界の中堅作家十九名が相互の研鑽を目的として結成せるもの、各地に展覽會開催の豫定。

〔會員〕 各務鐵三、香取正彦、吉田醇一郎、高野松山、田村泰三、海野建夫、信田洋、山本自燼、北原三佳、宮之原謙(以上東京) 伊東信助、井田宣秋、龍文堂安之助、小川文齋、加藤宗巖、楠部彌一、淺見五郎助、道林俊正、平館曾

六潮會

東京市目黒區大原町
一一六二、横川毅一郎方

昭和六年七月成立。作家及び批評家の集りで、交友を主とする研究團體。十一年一月日本橋三越に第五回展を開いた。

〔會員〕 中村岳陵、中川紀元、山口蓬春、牧野虎雄、木村莊八、福田平八郎、外狩素心菴、横川毅一郎

和光會(工)

東京市京橋區銀座四丁目、服部時計店內

昭和九年設立。十一年第三回展を開催した。

〔會員〕 岡田三郎助、和田三造、津田信夫、沼田一雅、高村豐周、廣川松五郎、山崎覺太郎、河村崎山

早稻田美術學會

東京市澁橋區西大久保
二ノ二〇一、坂崎垣方

早稻田大學校友及び學生關係者の美術

文化團體

學藝協力國內委員會

東京市麹町區九ノ内二ノ一六
明治生命館七階國際文化振興會內

學藝協力國際委員會を授け藝術及學問の相互聯絡により世界文化の向上に資するを目的とす。一九二二年國際聯盟の活動により學藝協力國際委員會が設置され日本より田中館愛橘博士が參加し、次で各國に國內委員會が設立され、日本にては社團法人日本國際協會内に事務所を設けたが、昭和十一年國際文化振興會内に移管し、外務省の援助の下に事業を行つて居る。

〔委員長〕伯爵樺山愛輔〔委員〕伊東延吉
濱田耕作、子爵岡部長景、岡田兼一、子爵大河内正敏、加藤正治、田中館愛橘、男爵岡伊能、長與又郎、伯爵黑田清、山川端夫、山田三良、姉崎正治、杉榮三郎
〔幹事〕本田弘人、阪本瑞男、鈴木九萬
〔主事〕青木節一

國際文化振興會

東京市麹町區九ノ内二ノ一六
明治生命館七階、電九ノ内二
〇三八、九五七

文化團體一覽

同好の士を以て組織す。久しく中絶して居たのを大正十二年春高田早苗博士を會長として再興今日に及ぶ。講演會、研究會、展覽會等開催し又圖書出版をなす。
〔會長〕吉江喬松

一覽

昭和九年四月設立。財團法人組織。本會は國際間文化の交換、殊に日本及東方文化の海外宣揚を圖り、世界文化の進展及人類福祉の増進に貢獻するを以て目的となし、次の事業を行ふ。

一、著述、編纂、翻譯及出版 二、講座の設置並に講師の派遣及交換 三、講演會、展覽會及演奏會の開催 四、文化資料の寄贈及交換 五、知名外國人の招請 六、外國人の東方文化研究に對する便宜供與 七、學生の派遣及交換 八、關係諸團體又は個人との聯絡 九、映畫の作製及其の指導援助 十、會館、圖書室又は研究室等の設置經營 十一、その他理事會に於て適當と認むる事業
尙本會の經營は設立當初の寄附資金及御下賜金、政府補助金等の基本財産に依り行はれる。

〔總裁〕高松宮宣仁親王殿下〔會長〕公爵近衛文麿〔副會長〕侯爵德川賴貞
男爵鄉誠之助〔理事長〕伯爵樺山愛輔
〔常務理事〕子爵岡部長景 伯爵黑田清、三原繁吉〔理事〕姉崎正治、小倉正恆、大谷正男、門野重九郎、串田萬藏、重光

葵、高楠順次郎 男爵岡伊能、濱田耕作、福井菊三郎、正木直彦、三邊長治、山田三良〔監事〕大久保利賢、大橋新太郎
〔主事〕青木節一

史蹟名勝天然紀念物保存協會

東京市麹町區三年町一
文部省宗教局保存課內
電 銀座 五七七一一九

明治四十四年設立。本會は史蹟名勝天然紀念物を研究し其の保存方法を講じ且之に關する思想の普及を圖り、國體の精華を發揚するを以て目的とし、月刊機關雜誌「史蹟名勝天然紀念物」を發行し又講演會、研究會等を開催する。會員を分ちて維持會員(會費一年六圓、一時金百圓)、通常會員(會費一年四圓)の二種とす。本會は會員の會費、寄附金、國庫補助、其他の收入を以て維持す。

〔會長〕文部大臣〔副會長〕文部次官、三上參次〔顧問〕伯爵德川達孝、男爵阪谷芳郎、三宅秀〔評議員〕五十九名。
〔幹事〕柴沼直

聖德太子奉讃會

東京市麹町區九ノ内九ビル四
階四五七區、電九ノ内三九八

財團法人組織。本會は大正十年の聖德太子一千三百年御忌法用を記念するための事業として大正五年創立。太子の偉徳を奉讃闡明するを目的とし、次の事業を行ふ。一、講演會を開き又は宣傳文書を發行配布すること 二、遺蹟を保護し且

つ法隆寺勸學院の維持發展を圖ること 三、五十年毎に奉行せらるる聖靈大會を奉讃すること 四、法隆寺に於て十ヶ年毎に執行せらるる御忌法用を奉讃すること 五、記念展覽會を開催すること 六、特殊の事項を研究調査せしめ表彰及懸賞の方法に依り學藝を獎勵し又は著作編輯物を出版すること 七、施藥を行ふこと 八、其他聖德太子に關係せる事業
〔總裁〕久邇宮朝融王殿下〔會長〕侯爵細川護立〔理事〕伊東忠太、林春雄、荻野伸三郎、加藤正治、高楠順次郎、高島米峰、黑板勝美、松井茂、姉崎正治、江崎政忠〔監事〕桐島像一、有賀長文
外に評議員百二十七名

都市美協會

東京市麹町區九ノ内
東京市土木局內
電九ノ内五一一一五二九

昭和三年創立。同會は都市美に關する研究をなし之を尊重すべき觀念の普及を圖ると共に都市美の構成に就て貢獻するを目的とし、一、都市美に關する實際的な調査研究 二、當局に對する建議 三、出版、展覽會、講演會等による都市愛護思想の宣傳等を行ふ。

〔會長〕男爵阪谷芳郎〔副會長〕塚本靖近新三郎〔顧問〕石田馨、横山助成、牛塚虎太郎、本多靜六、牧彦七〔常務理事〕青山泰晴、井下清、石原憲治、小野二郎、林清、平野眞三、福原信三、堀信一〔評議員〕四十四名

日本工作文化聯盟

東京市麹町區內幸町一ノ三
幸ビル内、電話三三三八三

昭和十一年十二月九日發會。本會は科學、藝術其他工作文化に關與する諸分野の専門家を糾合し、且つ産業上の諸機能と提携して「一、様式建築より生活建築へ、二、有閑工藝より目的工藝へ、三、低俗製品より價值製品へ」なる指標の下に建築を中心とする工作文化の健全なる發達を圖らんとするもので次の如き項目を事業課題とし、且つ出版、展覽會、講演會の開催、諮問應答等をなす。(イ)研究(一、住の基本問題の研究、二、都市及農村計畫に關する研究、三、史的生活文化財の研究)(ロ)指導(一、住に關する工業製品の指導、二、建築生産の指導、三、工作の諸分野に關係し來る藝術的諸形式の批判檢討)(ハ)普及(一、生活文化に關する知識の普及、二、健全なる工作文化財の普及)

〔會長〕 伯爵黒田清〔理事長〕 堀口捨己
〔理事〕 岸田日出刀、佐藤武夫、小池新二、市浦健〔幹事〕 澤島英太郎、鈴木道次、今井兼次、上野伊三郎、奥本新太郎、藏田周忠、板倉準三、關重廣、關野克、谷口吉郎、土浦龜城、中村彌三、服部勝吉、藤島亥次郎、前川國男、山越邦彦、山脇巖、吉田鉄郎

日本博物館協會

東京市麹町區大手町
錦橋通文部省別館内
電九ノ内三〇一四

昭和三年三月故男爵平山成信等の主唱により創立。博物館及博物館従業者、關係者を以て組織し、博物館事業の發達を圖るを目的とし、次の事業を行ふ。一、博物館に關する研究調査、二、博物館に關する雜誌及び圖書の刊行、三、博物館に關する集會、講演會、講習會の開催。尙月刊「博物館研究」を發行す。

〔顧問〕 平生飢三郎、伯爵林博太郎
〔理事長〕 正木直彦〔常務理事〕(常任) 大渡忠太郎、秋保安治、棚橋源太郎、山脇春樹〔理事〕 栗屋謙、上田恭輔、河竹繁俊、齋藤忠郎、佐野利器、杉榮三郎、關屋龍吉、高島平三郎、塚本靖、鶴見左吉雄、畑井新喜司、藤井善助、三宅驥一、宮島幹之助、矢代幸雄、男爵山川建〔監事〕 星野錫

日本博覽會俱樂部

東京市麹町區丸ノ内三ノ一四
東京商工會議所内、電九之内
三五三六、三三三八

大正十五年創立。内外に於ける博覽會の改善發達を圖るを目的とし次の事業を行ふ。一、博覽會に關する調査研究、一、博覽會開設に關する立案、計劃、設計及指導、一、博覽會參同に關する出品の管理及取扱、一、外國に於ける類似機關との聯絡、等。機關誌「博覽會研究」を發行す。

行す。

〔會長〕 星野錫〔理事〕 鶴見左吉雄、山本留次、安藤重兵衛、美濃部俊吉、山脇春樹、渡邊鏡藏、藤田謙一、竹澤太一、大山斐瑗、金光庸夫、本多貞次郎、正木直彦、中野金次郎、中澤安五郎、塚本靖、中村圓一郎、山崎龜吉、淺沼治、阪井德太郎、永山定富、評議員廿五名。

日本ペン俱樂部

東京市京橋區銀座西五ノ二
共同建物ビルディング五階
電話五〇一二

昭和十年十一月創立。本會は詩人、小説家、劇作家、評論家、隨筆家、新聞記者、新聞雜誌編輯者、翻譯家等文筆に従事する者を以て組織し諸外國に於ける同種團體と連絡し國際的に文筆家相互の親睦を計るを以て目的とする。十一年プエノスアイレスに開かれた第十四回國際ペンクラブ會議へ代表、島崎藤村、有島生馬を派遣した。會報(歐文、對外的機關誌)及ペンニュース(國內的機關誌)を發行す。

〔會長〕 島崎藤村〔副會長〕 堀口大學、有島生馬〔主事〕 勝本清一郎〔會計主任〕 芹澤光治良〔會員〕 阿部眞之助、阿部知二、青野季吉、有島生馬、藍田均、ジョルジュ・ボノー、土井晩翠、土居光知、江尻正一、藤田嗣治、藤澤周次、深尾須磨子、後藤末雄、M・グリゴリエフ、花野富藏、原久一郎、春山行夫、長谷川巳之吉、長谷川如是閑、長谷川時雨、林

芙美子、林達夫、日高只一、本多顯彰、堀口大學、堀口九萬一、細田源吉、細田民樹、藤森成吉、藤澤桓夫、深田久彌、福田清人、舟橋聖一、出井盛之、飯島正、井汲清治、石川欣一、石濱知行、磯部佑治、板垣應穂、伊藤整、岩田豐雄、上司小劍、賀川豐彦、神近市子、片岡鐵兵、片山廣子、勝本清一郎、川端康成、川田順、川路柳虹、木村毅、岸田國士、北村喜八、北村小松、清澤潤、小松清、今日出海、近藤春雄、小酒井五一郎、兒島喜久雄、久保田萬太郎、久米正雄、前田夕暮、正宗白鳥、三木清、宮森麻太郎、ホセ・ムニョス、村松正俊、村山知義、室生犀星、室伏高信、武者小路實篤、永松定、長田秀雄、中島健藏、中村吉藏、中村星湖、中野秀人、南條勝代、名取洋之助、新居格、西脇順三郎、昇曙夢、野口米次郎、織田正信、小川未明、岡田三郎、岡田八千代、岡本かの子、岡本綺堂、大木悖夫、大島豊、K・R・サバル、西條八十、税所篤二、齋藤勇、佐々木信綱、佐藤春夫、里見弴、芹澤光治良、島崎藤村、柴田勝衛、嶋中雄作、白柳秀湖、鈴木秀三郎、高濱虛子、谷川徹三、寺田瑛、戸川秋骨、徳田秋聲、徳永直、戸坂潤、豊島與志雄、鶴見祐輔、宇野浩二、和辻哲郎、山本實彦、山村魏、山内義雄、山崎斌、柳澤健、横光利一、米川正夫、與謝野品子、吉江喬松、福原麟太郎、F・H・ヘッヂエス、原田謙次、H・バイヤス、市川三喜、河竹繁俊、菊池

寛、R. P. カークウッド、北原白秋、正富汪洋、松尾邦之助、箕輪謙一、水原秋櫻子、長與善郎、J. P. オーシニコル、J. A. A. ベント、G. サンソム、藤田良平、杉山平助、田中耕太郎

日佛文化聯絡協會(R.I.F.N)

東京市京橋區銀座六丁目
尾張町ビル内
19 Rue Lakanal, Paris 15^e

昭和二年創立。日佛相互の知識的交遊に寄與するを以て目的となし次の事業を行ふ。

- 一、日本文藝の佛譯出版、並びに佛蘭西文藝の和譯出版
- 二、日本劇の佛譯並びに上演
- 三、日佛映画の相互交換上映
- 四、日佛文化に關する講演會、展覽會、その他會合

五、日本美術工藝品及び佛蘭西美術工藝品の相互紹介

六、日佛相互の著作權、翻譯權、上演權、特許權その他の權利に就ての交渉代辦

七、日佛相互の諸種の調査通信その他の便宜代辦

八、佛譯日本文獻及び和譯佛蘭西文獻を蒐集せる文庫の設立

九、日本文化研究のための研究室の設立

十、佛文雜誌の刊行

會員を分ちてA名譽會員、B贊助會員(百圓以上の寄附者)、C普通會員(年額六圓宛の會費納入者)の三種とし、會員は次の如き便宜を有す

十一、文藝の翻譯發表並びに出版に就ての特味の便宜

十二、本會關係の出版物及び本會紹介の美術工藝品を無代または特價にて求め得ること

展覽會場一覽

十三、本會關係の劇、映画、講演、展覽等の會合へ招待すること

十四、日佛相互の調査、買物または旅行の際の特殊の便宜

〔實務委員〕(在東京) 川路柳虹、加藤健吉
武藤豊、税所篤二(在巴里) 松尾邦之助
René Maublanc Steniber Oberlin, Alfred Smollar

滿日文化協會

(本部) 新京大同大街、大興ビル内
(東京分會) 東京市麹町區下六番町五
(京都分會) 京都市上京區大宮田尻町五二

日本名日滿文化協會。昭和八年十月創立。本會は日滿學界の協力に依り東方の文化を保存並に振興するを以て目的とする。業績の主なるものとして奉天國立博物館を倡立せる外政府の委託により滿洲建國の記念事業たる「清朝實錄」の編纂に従事し、更に熱河地方の古建築物調査を行つた。

〔名譽會長〕 張景惠〔會長〕 羅振玉

〔副會長〕 于蔭 岡部長景、寶熙〔顧問〕

阮振鐸〔常任理事〕榮厚、池内宏〔理事〕

謝介石、丁士源、許汝霖、王季烈、金毓

綏、服部宇之吉、狩野直喜、白鳥庫吉、羽

田亨、濱田耕作、久米成夫、水野梅曉

〔評議員〕 鄭孝胥、袁金鎧、臧式毅、

熙洽、沈瑞麟、趙汝楳、溫肅、曾格、黃

允中、陳曾矩、伊里春、楊鍾義、葉玉麟、

市村瓚次郎、伊東忠太、原田淑人、小川

琢治、矢野仁一、溝口頑次郎、新村出、

黑田源次、筑紫熊七、田邊治通、矢田七

太郎、長岡隆一郎、入江貫一、神尾式春

〔常務主事〕 杉村勇造

風景協會

東京市京橋區銀座西七ノ三
養生堂ビル内電話銀座二九四

本會は風景に關する研究調査をなし併せて其の保護利用を圖るを以て目的とし、一、風景に關する一般調査 二、機關雜誌「風景」其他圖書の刊行 三、研究會講演會及展覽會の開催 四、團體會

展覽會場一覽

東京

東京府美術館

下谷區上野公園
地下谷二三〇四

大正十五年竣工。建築費百萬圓は佐藤慶太郎の寄贈である。昭和四年東京府より約四十萬圓を臨時支出して別館を増築した。昭和十年三月設立十週年記念の祝賀を舉行した。

同館の敷地は約四千坪で建物の様式は近代クラシック式、軒高、地盤よりバラベツト上端迄四十八尺、構造は鐵骨鐵筋コンクリート。建物延坪数は三八〇六坪三四にしてその内譯は地中階六七坪五、壹階二〇四坪九二、主階一六二三坪六七、中階七三坪二五である。

同館役員

員の依頼ある時風景地の調査計畫並に宣傳に關する指導或は援助、其他を行ふ。

〔會長〕 公爵鷹司信輔〔副會長〕 子爵岡

部長景、子爵 田中阿歌磨、塚本靖

〔理事〕 鍋木外岐雄、冠松次郎、岸田

日出刀、黑田朋信、高久甚之助、田中豊、

築地宜雄、辻村太郎、中村孝也、三浦伊

八郎、矢澤弦月〔常務理事〕 石井柏亭、

國府種徳、田村剛、福原信三、藤浪剛一、

本田正次

〔館長〕 横山助成〔次長〕 宮野省三、

白戸半次郎〔主事〕 尾川藤十郎

〔書記〕 矢田部正造、早川治平

〔顧問〕 佐藤慶太郎、宇佐美勝夫、平

塚廣義、正木直彦、伊東忠太、川合玉堂

小室翠雲、荒木十畝、結城素明、横山大

觀、安田靉彦、岡田三郎助、和田英作、

藤島武二、中村不折、朝倉文夫、北村西

望、中野勇治郎

〔常議員〕 鍋木清方、松岡映丘、野田

九浦、木村武山、飛田周山、小林古徑、

川端龍子、小林萬吾、南薫造、石川寅治

永地秀太、牧野虎雄、石井柏亭、小杉放

庵、山崎朝雲、内藤伸、建島大夢、小倉

右一郎、藤井浩祐、平櫛田中、津田信夫

香取秀眞、海野清、赤塚自得、板谷波山

田口掬汀、小池泰康、正宗得三郎、小島

善太郎

展覽會場一覽

職制拔萃

第一條 本館は美術に關する創作の展覧新古美術品の陳列其の他美術の發達に必要な事業に使用するを以て目的とす

第三條 館長は知事を以て之に充て館務を統理す

第四條 次長は内務部長並學務部長を以て之に充て館長の指揮を受け館務を掌理し館長事故あるときは其職務を代理す

第七條 本館に顧問評議員及常議員若干名を置き知事之を委嘱す顧問及評議員は重要な館務に關し館長の諮問に應じ又は意見を陳陳するものとす
常議員は評議員中より知事之を委嘱し館の使用其の他常務に關する事項を審議するものとす

のとなす

第八條 評議員會及常議員會の議長は館長之に當る館長事故あるときは館長の指名したる者之を代理す

第九條 評議員會は毎年一回之を開く但し必要に應じ臨時會を開くことあるべし
常議員會は毎年二回之を開く但し必要ある場合に於ては臨時會之を召集す
使用規定拔萃

第一條 本館ハ左記目的ヲ有スルモノニ限リ
本使用規定ニ依リ使用セシム
一 美術ニ關スル創作ノ展覧
二 新古美術品ノ陳列
三 其ノ他美術ニ關スル事業
前項各號ノ使用者ナキ場合ニ限リ藝術等ノ

諸會ニ臨時使用セシムルコトヲ得

第二條 本館ヲ使用セシムル者ハ別記第一號ノ様式ニ依リ要項ヲ具シ館長ノ承認ヲ受クヘシ

第三條 前條ニ依リ承認ヲ受ケタルモノハ左ノ通使用料ヲ前納スヘシ但シ特別ノ事情アリト認ムルトキハ相當ノ保證人ヲ附シ又ハ保證金ヲ徴シタル上後納ヲ許可スルコトアルヘシ
使用料ハ當分ノ内別表ニ依ル
(備考) 室ノ名稱分區ハ別紙圖面ニ依ル
第一階分室使用者ニシテA室、B室、C室ノ一ヲ使用スルモノハ更ニ一分區室ノ使用料ノ四分ノ一ニ當ル料金ヲ加ヘ納ムルモノトス彫塑室ヲ分割シテ使用スル場合ハ全室トノ割合ニ應シ使用料ヲ徵ス前表以外ノ使用料ハ其都度之ヲ定ム彫塑室及第一階陳列室ニ臨時間切ヲ爲サムトスル使用者ハ之ニ要スル人夫賃等ノ諸費ヲ負擔スルモノトス

一〇六

スルコトアルヘシ
一 不可抗力ニ因リ指定ノ場所ヲ使用スルコト能ハサルトキ
二 本館ノ都合ニ依リ使用承認ヲ取消シタルトキ

第六條 使用者ニ於テ切符賣場其ノ他特別ノ設備ヲ爲サムトスルモノハ本館ノ承認ヲ受クヘシ

第八條 使用者使用ヲ終リ又ハ使用ヲ中止シタルトキハ若クハ使用ノ承認ヲ取消サレタルトキハ速ニ使用ノ場所ヲ原狀ニ回復シ館長ノ検査ヲ受クヘシ館長ハ使用者ニ對シ必要ニ應シテ更ニ適當ノ措置ヲ命スルコト得

(備考) 繪畫陳列室壁面延長合計
八百三十七間
本館畫 壁 五百二十五間
同 第一分區室 百十五間四尺
同 第二分區室 百〇九間五尺

場所	時期	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
全館	一日二付	二五〇円	三〇〇円	三三〇円	四〇〇円	四〇〇円	四〇〇円
第一階 (彫塑室及地階)	同	三五	五〇	六〇	七五	七五	七五
本館全館 (地階室ヲ除ク)	同	三三	四五	六〇	七五	七五	七五
彫塑室	同	八	一三	一八	二五	二五	二五
本館第一階全部 (彫塑室ヲ除ク)	同	二三	三〇	三八	四五	四五	四五
同 三ヶ分區室	同	一五	二〇	二五	三〇	三〇	三〇
同 二ヶ分區室	同	一〇	一三	一五	二〇	二〇	二〇
同 一ヶ分區室	同	五	六	八	一〇	一〇	一〇
同 地階陳列室全部	同	六	八	一一	一三	一三	一三
同 分室	同	三	五	六	八	八	八
別館主階全部	同	一〇	一五	一八	二五	二五	二五
同 一ヶ分區室	同	五	八	一〇	一三	一三	一三
同 地階陳列室	同	一〇	一五	一八	二五	二五	二五
同 分區室	同	五	六	八	一〇	一〇	一〇



看守受付下足等ニ關スル事項ハ自己ノ負擔ニ於テ使用者之ヲ施設スルモノトス
第四條 本館使用ノ承認ヲ受ケタル後之ヲ他ニ轉貸スルコトヲ得ス
第五條 既納ノ使用料ハ之ヲ還付セス但シ左ノ場合ニ於テハ其ノ一部若クハ全部ヲ還付

同 第三分區室 百〇九間
同 第四分區室 百〇七間二尺
同 A 室 二十二間
同 B 室 二十間二尺
同 漆喰壁ノ室 四十間三尺
同 彫塑室 三百七十六坪

同 工藝陳列室 二百三十四坪
別館主階全部 三百二十二間
同 南分室 百四十一間
同 北分室 百四十一間
同 C 室 十九間
同 廣 間 十九間
同 工 藝 室 三百六十一坪

天城畫廊

淀橋區角筈一ノ一
電四谷一五六四

昭和十年六月開設。洋畫の展覧に適す。
使用料一日十圓。但し主催展は無料宣傳費その他一切負擔す。壁面十三間。十二年一月より美術雜誌「アルト」を發行す。
〔經營者〕 天城俊彦

上野・かんべや・ギヤラリー

下谷區上野元黒門町六
仲町入口、神戸屋隣上
電下谷九八

昭和十一年九月開設。會場は繪畫彫刻一般工藝品、寫眞等の展覧に使用出来る。
使用料一日(午前九時—午後九時)八圓。壁面十七間、面積三十八坪。
〔責任者〕 下暢

カネボウ・ギヤラリー

京橋區銀座三丁目鐘紡サ
ビス・ステーション四階
電京橋七一八一、七一八二

同店布地宣傳の爲の染織工藝展開催を主とするが、場合により會場を賃貸する使用料は一日に付二十圓又は賣上の二割とし、賣上の二割が廿圓に達せざる時は豫め二十圓の料金を支拂ふこと。

紀伊國屋ギヤラリー

京橋區銀座六ノ一
電銀座七一〇

洋畫の展覧に適す。壁面十六間。使用料一日(午前九時—午後九時)廿五圓。借用申込の際約定金として一日分を請求す。

銀座・三味堂ギヤラリー

京橋區銀座八ノ二
電銀座一八〇八

會場は同店主催の洋畫展に使用するが主催展のなき場合諸種の展覧會に賃貸する。會期日数を三日、五日、七日の三種とし、時間は午前十時より午後九時迄。使用料は三日間七十五圓、五日間百圓、七日間百三十圓。但し夏期(七月廿一日—九月十五日)は三日間三十圓、五日間四十五圓、七日間六十圓に割引する。會期中は會場係一名がつけられる。同店は原則として賣込に關係しないが、但し賣約の斡旋をした場合は手数料として賣約價額の二割を申し受ける。廣さ約廿坪。壁面約百尺。
〔經營者〕 堀越震六

ギヤラリー・ブリュツケ

京橋區銀座西二ノ五

洋畫、彫刻、工藝、寫眞等の展覧に使用出来る。使用料一日(午前九時—午後八時)十圓。

資生堂ギヤラリー

京橋區銀座七丁目
電銀座五四二一

美術及美術工藝品の展覧を主とし使用申込みを受けたる後相當の餘額を経て貸否を決定する。最小壁面約十間、最大壁面約廿間。使用料一日(午前九時—午後九時)四十圓(看板費、看守費、電燈費等を含む)。展覧會の性質により、賣上金額の二割を申受け使用料に代へる。

青樹社

京橋區銀座四ノ四
電京橋三六七八

洋畫展の會場として一階に限り賃貸する。期間は五日間又は一週間とし、使用料は五日間百圓、一週間百三十圓とす。時間は午前九時より午後七時半迄。原則として賣込には關係しないが、賣約斡旋をした場合は賣約價額の二割を申し受ける。壁面十七間。
〔經營者〕 鈴木里一郎

東京堂ギヤラリー

神田區神保町一ノ一
七、電神田四二七

洋畫の展覧に適す。使用料一日十圓。壁面三十八間。

東京美術俱樂部

芝區新橋七丁目一二
電芝九九〇—九九二

株式會社で美術骨董品の入札及賣賣を主とするが一般席貨業をも營む。但し昭和十一年九月より改築中で十二年六月竣成の豫定。
〔社長〕 伊藤平藏

日動畫廊

京橋區銀座數寄屋橋
畔、電銀座四四一八

昭和六年開廊。現代洋畫の即賣常設展觀を行つてゐるが、又隨時同店主催の洋畫並彫刻展を開催する。會場壁面は(イ)十八間(ロ)廿五間(ハ)卅間の各々三通りに使用する。主催展の會場費は無料であるが、賃貸する際の一使用料は(イ)三十圓(ロ)五十圓(ハ)百圓である。
〔經營者〕 長谷川仁

日本サロン

京橋區銀座西六ノ五
電銀座五四九八

昭和十一年十月開廊。會場は洋畫、版畫、彫刻、寫眞その他一般美術工藝品の陳列に適し、壁面は全長約四十間、工藝品陳列臺四十間。使用料は一日(午前十時—午後九時)三十圓、三日間七十五圓、五日間百圓。表看板料三圓、陳列臺使用料一日に付八圓。但し一月、七月、八月は上記の二割引とす。
〔管理者〕 斧山萬次郎、柳川清一郎

文房堂

神田區神保町一ノ二
電神田七〇〇—七〇一

同店の「工藝美術品陳列室」を展覽會、即賣會等の開催希望者に無料にて貸與す。但し陳列及販賣方法は同店に一任し、賣約價額の二割五分を納金すること。會期は一週間以上二週間以内とす。宣傳費は開催者の負擔とす。陳列室面積八坪。陳列ケース七本。

〔同店催物係〕 齋藤

ラテン畫廊

京橋區銀座西五ノ二
電銀座五四六三

昭和十一年九月開設。洋畫及諸種の展覽會に使用出来る。壁面十五間。使用料三日間四十五圓、五日間七十圓、七日間九十一圓。但し一月、七月、八月は右料金の二割引とす。

〔管理者〕 青樹官三

三越 日本橋區駿河町
同 京橋區銀座
松坂屋 下谷區上野廣小路
同 京橋區銀座
高島屋 日本橋區通二ノ五
松屋 京橋區銀座三丁目
伊東屋 同
服部時計店 同 四丁目
鳩居堂 同
東美俱樂部 日本橋區通二ノ五

大阪

大阪市立美術館

大阪天王寺區茶臼山
町天王寺公園内、電六
一〇〇、六一〇一

古美術品の常設展觀と一般美術展のギャラリーの設備を兼ねた近代的美術館で、大阪市が工事に多年を費して昭和十一年五月落成、帝展作品の陳列を以て開館した。建物は鐵筋コンクリート造、三階建て地階を加へ、建坪一二二坪、延坪、三八五坪。陳列室、展覽會室、講堂、圖書閱覽室等より成り、陳列室は同館の蒐集保存に係る古美術品—繪畫、彫刻、美術工藝、書蹟、考古學資料等を常設展觀し、展覽會室及講堂は一般美術展並美術講演會、講習會等の開催希望者に貸館し、又圖書閱覽室に於て同館所藏の圖書を規定に従つて一般の閱覽に供する。

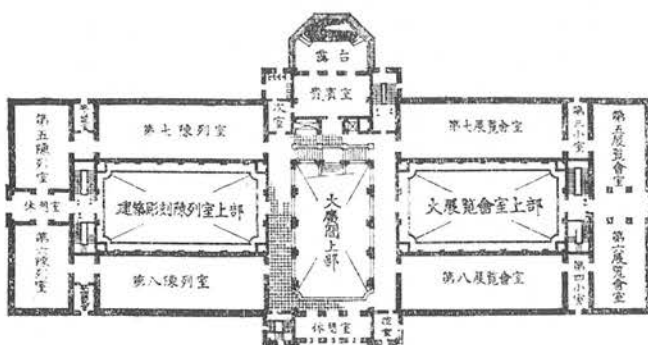
〔館長〕 今井貫一〔主事〕 高津満、望月信成〔囑託〕 荻野伸三郎、武田五一、松本文三郎、廣瀬治兵衛、伊勢專一郎、堂谷憲男、上田令吉、片山喜之、藤井源一〔學藝員〕 小林太市郎、三才佳吉

大阪市立美術館條例抜萃
第一條 本館ハ美術及美術工藝ノ助長、獎勵及研究ヲ爲スル目的トス
第二條 本館ハ左ノ事業ヲ行フ
一、美術品及美術工藝品ノ蒐集、保管及陳列展觀ヲ爲スコト
二、美術及美術工藝ニ關スル圖書ヲ蒐集、

第一階平面圖



第二階平面圖



保管シ之ヲ閱覽セシムルコト

三、美術及美術工藝ニ關スル講演會、講習會等ヲ開催スルコト

四、美術及美術工藝ノ助長、獎勵又ハ研究ニ關シ本館設備ヲ使用セシムルコト

五、其他市長ニ於テ必要アリト認ムル事業

第三條 本館ハ美術品及美術工藝品ノ寄贈又ハ寄託ヲ受ク社寺ヨリノ寄託品ニ對シテハ市長別ニ定ムル所ニ依リ補給金ヲ給スルコトアルヘシ

第四條 本館ノ陳列品ノ觀覽料一人一回ニ付左ノ如シ

普通 學生軍人團體 普通團體
十三歳未満十錢
十三歳以上廿錢
五錢 十錢
前項ノ規定ニ依リ團體ハ學生、生徒、兒童

又ハ軍人ノ團體ニ付テハ卅人以上、其ノ他ノモノニ付テハ五十人以上トス

第五條 特別ノ陳列ヲ爲シタルトキハ其ノ期間ニ限リ市長ハ前條ノ規定ニ依リ觀覽料ノ五倍以内ノ觀覽料ヲ定メ之ヲ徴收スルコトヲ得

第六條 本館ノ陳列品又ハ保管品ニ就キ特別ノ研究ヲ爲サントスル者ハ市長ノ許可ヲ受ケヘシ

前項ノ場合ニ於テハ前二條ノ規定ニ依リ觀覽料ノ外特別觀覽料トシテ一回一點ニ付五十錢ヲ徴集ス

第八條 觀覽者ハ市長ノ許可ヲ受ケ本館所藏ノ圖書ヲ閱覽スルコトヲ得

第九條 美術品及美術工藝品ノ展覽會又ハ美術及美術工藝ニ關スル講演會、講習會等開

八坪(延坪二千八百三十二坪)

〔館長事務取扱〕石川芳太郎〔主事〕西野巖三〔書記〕山田一江〔評議員〕石田吉左衛門、飯田新七、西山翠嶺、鹿子木孟郎、竹内栖鳳、植田壽藏、清水六兵衛、菊池契月

同館規則抜萃

第一條 本館は美術品及美術工藝品を陳列して一般の觀覽に供し其の他新道獎勵の用に供するを以て目的とす

第二條 本館は前條の目的を達する爲本館の所藏に係るもの及官廳團體又は個人等より出品ありたるものを陳列して一般の觀覽に供す

第三條 本館は一定の期間を限り團體又は個人に對し美術品及美術工藝品陳列の爲本館の全部又は一部の使用を許可することあるべし

第七條 本館に評議員若干人を置く評議員は美術家及美術に關し識見ある者の中より市長を委嘱す

第八條 評議員は重要な館務に關し館長の諮問に應じ又は意見を開陳するものとす

第十條 本館は一月五日より十二月二十五日迄毎日左の時間中間館す但し時宜に依り之を伸縮し又は閉館することあるべし

一月二月三月十月十一月十二月
午前九時より午後四時まで
四月九月 午前八時より午後五時まで
五月六月七月八月 午前八時より午後五時三十分まで

同館使用條例抜萃

第一條 本館の陳列品觀覽者に對しては左の區分に依り觀覽料を徴收す但し本市の區域内に在る學校の學生、生徒、兒童にして教員の引率するもの及其の引率教員又は市長に於て特別の事由ありと認めたる者に付ては之を減免することあるべし

一 普通觀覽料

大人一人二付 金十錢
小人一人二付 金五錢

二 團體觀覽料(二十人以上)

大人一人二付 金五錢
小人一人二付 金三錢

第二條 特別の陳列を爲したるときは前條の規定に拘らず其の期間に限り市長の定むる所に依り別段の觀覽料を徴收することあるべし

第三條 美術品及美術工藝品を展覧せんが爲本館を使用せんとする者は所定の様式に依り使用願書を提出し市長の許可を受けくべし

第四條 使用の許可を受けたる者は左の區分に依り使用料を前納すべし但し特別の事由ありと認むるときは相當の保證人を立てしめ又は保證金を徴し後納せしむることあるべし

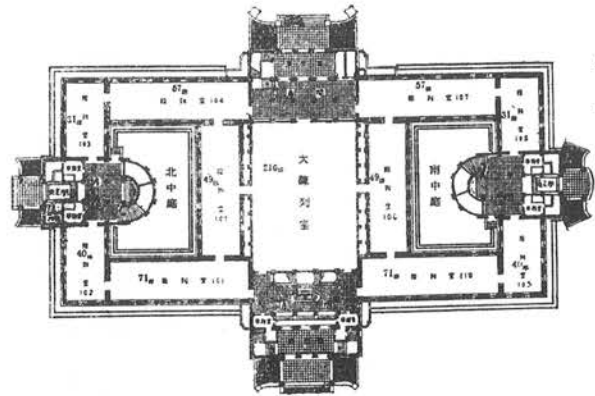
前項使用場所の一部を使用する場合に於ても使用料の徴收に付ては全部を使用するものと看做す

本館使用者にして其の使用料金全館使用料金の三分の一以上に該當する場所を引續き十日以上使用するときは第十一目より其の使用料を二割以内減額することあるべし

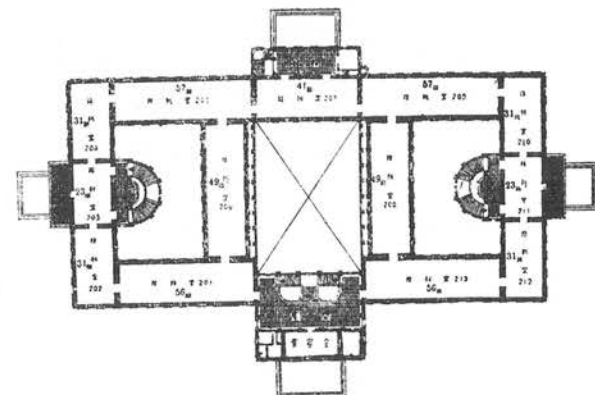
使用場所 使用料(一日當り)

大陳列室(二六坪)	一七圓
陳列室	
第一〇〇一號	八
第一〇〇二號	八
第一〇〇三號	八
第一〇〇四號	八
第一〇〇五號	八
第一〇〇六號	八
第一〇〇七號	八
第一〇〇八號	八
第一〇〇九號	八
第一〇一〇號	八
第一〇一一號	八
第一〇一二號	八
第一〇一三號	八
第一〇一四號	八
第一〇一五號	八
第一〇一六號	八
第一〇一七號	八
第一〇一八號	八
第一〇一九號	八
第一〇二〇號	八
第一〇二一號	八
第一〇二二號	八
第一〇二三號	八
第一〇二四號	八
第一〇二五號	八
第一〇二六號	八
第一〇二七號	八
第一〇二八號	八
第一〇二九號	八
第一〇三〇號	八
第一〇三一號	八
第一〇三二號	八
第一〇三三號	八
第一〇三四號	八
第一〇三五號	八
第一〇三六號	八
第一〇三七號	八
第一〇三八號	八
第一〇三九號	八
第一〇四〇號	八
第一〇四一號	八
第一〇四二號	八
第一〇四三號	八
第一〇四四號	八
第一〇四五號	八
第一〇四六號	八
第一〇四七號	八
第一〇四八號	八
第一〇四九號	八
第一〇五〇號	八
第一〇五一號	八
第一〇五二號	八
第一〇五三號	八
第一〇五四號	八
第一〇五五號	八
第一〇五六號	八
第一〇五七號	八
第一〇五八號	八
第一〇五九號	八
第一〇六〇號	八
第一〇六一號	八
第一〇六二號	八
第一〇六三號	八
第一〇六四號	八
第一〇六五號	八
第一〇六六號	八
第一〇六七號	八
第一〇六八號	八
第一〇六九號	八
第一〇七〇號	八
第一〇七一號	八
第一〇七二號	八
第一〇七三號	八
第一〇七四號	八
第一〇七五號	八
第一〇七六號	八
第一〇七七號	八
第一〇七八號	八
第一〇七九號	八
第一〇八〇號	八
第一〇八一號	八
第一〇八二號	八
第一〇八三號	八
第一〇八四號	八
第一〇八五號	八
第一〇八六號	八
第一〇八七號	八
第一〇八八號	八
第一〇八九號	八
第一〇九〇號	八
第一〇九一號	八
第一〇九二號	八
第一〇九三號	八
第一〇九四號	八
第一〇九五號	八
第一〇九六號	八
第一〇九七號	八
第一〇九八號	八
第一〇九九號	八
第一一〇〇號	八

第一階



第二階



第六條 第三條の使用を爲す場合に於て看守受付切符賣捌下足等の必要あるときは使用者之を設置するものとす

第八條 使用の許可を受けたる者特別の設備を爲さんとするときは豫め館長の承認を受けるべし

第十五條 陳列室以外の館内及本館構内地は市長に於て管理上支障なしと認むる場合に限り臨時使用を許可することあるべし
前項の使用料は前納とし市長の定むる所に依る

京都朝日會館畫廊

中京區三條河原町京都朝日會館内、電上五〇七
昭和十年新設。北光線を採光し冷暖房裝

京都美術俱樂部

中京區御池通寺町東入電上二九二、二九三
株式會社組織。京都美術尙榮社組合員

を以て組織す。書畫骨董其他新古美術品の展覽及貸席を行ふ。(一日の席料)南館階上六十圓、西館階上廿三圓、東館階上十三圓、北館階上二圓、西館階下八圓、東館階下八圓、南館階下六十圓、階上全部八十五圓、南館を除く全部四十六圓、南館階下を除く全部百圓、南館階下分室略す。

〔取締役社長〕福田淺次郎〔同副社長〕高橋吉兵衛〔取締役〕土橋嘉兵衛、淺井清之助、林新兵衛〔監査役〕服部多一郎、林新助

大 丸 四條高倉
高 島 屋 烏丸高辻下ル
六角會館 六角烏丸東

名古屋

鶴舞公園美術館

鶴舞公園内

昭和四年の博覽會の遺品にしてバラック建二棟あり。各々二百坪。借館料は一日各棟十圓宛、計廿圓。名古屋市民公園課の所管。

名古屋美術俱樂部

東區朝日町三ノ一一
電東二〇〇九、七三七〇

明治卅八年五月設立。株式會社組織。

展覽會場一覽

美術並美術工藝品の委託販賣並に席貸業を營む。席料三日間百八十圓。

〔取締役〕宮部鈴三郎、伊藤喜兵衛、味岡由兵衛、野崎森一、長谷川竹次郎
〔監査役〕餘吾藤兵衛、竹内七郎、横井清三郎

名古屋丸善 廣小路
松坂屋 中區南大津町

其他

神戸畫廊

神戸市元町驛下鯉川筋
電三宮三三五一

昭和五年開廊。三室より成り總坪數卅坪、陳列壁面八十三尺。休憩室の設備あり、使用料一日(午前九時—午後六時)十圓。夜間使用は別に相談に應ず。

〔經營者〕大塚銀次郎

プチギャラリー

神戸市元町一ノ二四

洋畫の常設陳列場であるが邦畫、彫刻版畫、圖案、工藝等の展覽會に貸貸する壁面は洋畫八號大のもの廿四、五點を陳べ得る。使用料一日五圓。

〔管理者〕有吉正雄

野澤屋吳服店 横濱市伊勢崎町通

現代美術關係定期刊行物一覽（五十音順）

一 般

アトリエ

月刊、藤本韶三編輯、アトリエ社發行、牛込區原町三ノ七九、電牛込六四二一、一圓二〇錢

阿々土

月刊、澤川憲編輯、阿々土社發行、板橋區中新井町三丁目、電練馬一六八、六〇錢

畫室

月刊、山本廣洋編輯、畫室社發行、神戸市須磨區離宮前町二番屋敷、電須磨一〇二〇、四〇錢

藝術

旬刊、中川良平編輯、藝術通信社發行、本郷區湯島天神町二ノ二、電下谷一六〇八、月五〇錢

藝術日本

月刊、永岩一義編輯、東京美術親交會藝術社發行、小石川區西江戸川町一八電小石川七一〇二、五〇錢

現代美術

隔月、田中明次編輯、藝美社發行、神戸市林田區大丸町一ノ一三、三〇錢
月刊、中山貞夫編輯、現代美術社發行、豊島區長崎東町一ノ九五五、電落合長崎三一三五、一圓

裝美報

月刊、今井登編輯、東京表装師組合事務所發行、淺草區淺草橋一ノ三ノ一、年二圓

日本美術

月刊、吉田久次郎編輯、日本美術社發行、名古屋市中區西日置町中田一、電西二九三五（呼）三〇錢

美術

月刊、岩佐新編輯、東邦美術學院發行、淀橋區戸塚町二ノ一二、電牛込一四四一、一圓二〇錢

美術界

月刊、浦崎永錫編輯、美術界社發行、豊島區駒込町三ノ四〇三、二〇錢
月刊、大山廣光編輯、美術街社發行、京橋區銀座西五丁目三S二號館、電銀座一三四七、五〇錢

美術時報

月刊、垣見寛修編輯、美術時報社發行、淀橋區西大久保二ノ二五三、電四谷六三二五、月一圓

美術通信

月刊、佐久間善三郎編輯、日本美術通信社發行、蒲田區蓮沼町一三四、月一圓二〇錢

美術乃日本

年四回、小佐井清平編輯、美術乃日本社發行、淀橋區戸塚町四ノ五七五、三

美術評論

〇錢
月刊、藤森順三編輯、美術評論社發行、牛込區矢來町二九、電牛込一三二三六〇錢

美之國

月刊、石川宰三郎編輯、美之國社發行、豊島區雜司谷町七ノ九四七、電牛込四四三五、一圓二〇錢

風景

月刊、黒田朋信編輯、風景協會發行、京橋區銀座西七ノ三養生堂ビル、電銀座二九四、四〇錢

繪畫

エツチング

月刊、西田武雄編輯、日本エツチング研究所發行、麴町區麴町一ノ三、電九段五一四、二〇錢

塔影

月刊、齋田元治郎編輯、塔影社發行、麴町區下二番町三、電九段三三四〇、一圓二〇錢

南畫鑑賞

月刊、石塚彰吾編輯、南畫鑑賞會發行、麴町區中六番町四一、電九段六二〇、四〇錢

白日

月刊、湯山昇編輯、白日社發行、澁谷區代々木七原町一二九五、電四谷五六〇五、五〇錢

美術往來

月刊、猪木卓二編輯、資文堂發行、麴町區九段一ノ一四、電九段二七一五、五〇錢

美術春秋

月刊、芳川越編輯、美術春秋社發行、豊島區西巢鴨二ノ二三五八、三〇錢
月刊、大下正男編輯、春島會發行、小石川區關口駒井町三、電牛込二〇四三、一圓二〇錢

みづゑ

月刊、日本民藝協會編輯發行、神田區淡路町二ノ七小口ビル、電神田二〇一〇、年一五圓

工藝

工藝ニユース

月刊、商工省工藝指導所編輯、工業調査協會發行、神田區旅籠町三ノ四、三〇錢

産業工藝

月刊、藤田九皋編輯、産業工藝振興會發行、大阪市住吉區相生通二ノ三七、電戎一九四、非賣、昭和十二年二月發行

創作工藝

月刊、山田義郎編輯、創作工藝獎勵會發行、芝區三田四國町三ノ一、一〇錢
月刊、宮下孝雄編輯、帝國工藝會發行、芝區西芝浦東京高等工藝學校内、電三田一五六—一五八、五〇錢
月刊、柴崎俊吉編輯、汎工藝社發行、大阪市住吉區住吉町一三〇〇、三〇錢

建築

建築研究

月刊、須藤真金編輯、建築研究社發行、王子區神谷町二ノ一四二、三〇錢
月刊、菅原肇編輯、建築學會發行、京橋區銀座西三ノ一、電京橋一二三二、一三三八、一四〇

建築雜誌

月刊、鈴木增雄編輯、建築世界社發行、京橋區京橋二ノ二ノ四、電京橋一五七五、七〇錢

國際建築

月刊、小山正和編輯、國際建築協會發行、麻布區市兵衛町二ノ四六、電赤坂四九四一、六〇錢

新建築

月刊、吉岡保五郎編輯、新建築社發行、京橋區寶町一ノ六、電京橋四七五二六〇錢

住宅

月刊、小林清編輯、住宅改良會發行、大阪市西區土佐堀船町八、電土佐堀二三二九、五〇錢

日本建築士

月刊、小瀧文七編輯、日本建築士會發行、京橋區銀座西三ノ一建築會館内、電京橋六二〇、四〇錢

古美術關係定期刊行物一覽(五十音順)

美術

以可留我

隔月、佐伯啓造編輯、船故郷會發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、四〇錢

浮世繪藝術

月刊、檜崎宗重編輯、浮世繪同好會發行、神田區須田町一ノ七檜崎方

漆と工藝

月刊、日本漆工會編輯發行、神田區鍛冶町二ノ一六、三五錢
不定、奥村伊九良編輯發行、京都市東山區今熊野南日吉町二三
月刊、阪本十九郎、大口環夫編輯、東京美術研究所發行、本郷區駒込千駄木町三四路本方、五〇錢、昭和十二年一月創刊

教育

繪畫教習

月刊、芳川赴編輯、繪畫教習會發行、神田區錦町一ノ二、二松堂ビル内、電神田一四一〇、五〇錢

學校美術

月刊、後藤福次郎編輯、學校美術協會發行、荒川區日暮里町三ノ一九六、電根岸一〇三〇、三〇錢

教育美術

月刊、佐竹林藏編輯、教育美術社發行、神田區一ツ橋二ノ九教育會館内、電九段一六六、二五錢

新興美術

月刊、牧野基溫編輯、新興美術協會發行、豐島區堀ノ内三〇、二〇錢

圖畫と手工

月刊、三浦直政編輯、錦菰會發行、世田谷區玉川園調布二ノ七〇九、三〇錢
月刊、圖畫教育獎勵會編輯、晚成處發行、下谷區櫻木町二、三〇錢

報告書類

國民美術

年刊、荒城季夫編輯、國民美術協會發行、本郷區湯島切通坂町五一、非賣

東美術

年刊、鈴木榮之亮編輯、東京美術青年會發行、芝區新橋七ノ一二、東京美術俱樂部内、非賣

大日本黑業協會雜誌

月刊、大日本黑業協會編輯發行、京橋區銀座西四丁目銀座商館内、電京橋五五一九

日本美術協會報告

年刊、安井易市編輯、日本美術協會發行、下谷區上野公園櫻ケ岡、非賣

博物館研究

月刊、大渡忠太郎編輯、日本博物館協會發行、麴町區大手町錦橋通(文部省別館内)電九ノ内三〇一—四(内線二)一五錢

京都美術青年會誌

中西勇太郎編輯、京都美術青年會發行、京都市御池寺町東入

國華

月刊、村山句吾編輯、國華社發行、麻布區市兵衛町二ノ一、電赤坂八五二、五〇

史蹟と古美術

十回、國史普及會編輯發行、京都市七條通堀川西入、田住昇、電下一五七五

史迹と美術

月刊、川勝政太郎編輯、スズカ出版部發行、京都市烏丸通二條南入、四〇錢

書畫骨董雜誌

月刊、大岡純太郎編輯、書畫骨董雜誌社發行、牛込區南山伏町一二、電牛込二九〇五、三五錢

書藝

月刊、野本白雲編輯、書藝社發行、豐島區駒込四ノ五

書道 月刊、横山房雄編輯、泰東書道院出版部發行、日本橋區江戸橋三ノ三、五〇錢
月刊、遠藤敏夫編輯、寶雲社發行、日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル、電日本橋二四五六、二〇八一、五〇錢

茶巾 隔月、東洋陶磁研究所編輯發行、日本橋區江戸橋二、松慶ビル二階、五〇錢
不定、小川晴陽編輯、飛鳥園發行、奈良市奈良帝室博物館、電八七二、二

陶磁 不定、香取正彦編輯、七日會發行、瀧野川區田端五〇〇
不定、栗原武平編輯、寧樂發行所發行、奈良市東大寺龍松院、二圓

東洋美術 月刊、美術研究所編輯、美術懇話會發行、下谷區上野公園櫻ヶ岡、非賣
下谷三三八七、二圓

日本美術協會報告 月刊、美術研究所編輯、美術懇話會發行、下谷區上野公園美術研究所內、電
二回、內藤藤一郎編輯、日本美術同政會發行、大阪市住吉區天下茶屋二ノ二

美術及美術史 不定、源豐宗編輯、佛教美術社發行、京都市左京區北白川伊織町四五、電上
二〇四七、一圓五〇錢

佛教美術 四回、西川一草亭編輯、去風堂發行、京都市左京區淨土寺馬場町一五七、七
〇錢

瓶史 四回、森暢編輯、寶雲刊行所發行、京都市左京區岡崎真如堂前町二、二圓三
〇錢

寶雲 月刊、秦秀雄編輯、便利堂出張所發行、京橋區銀座七ノ二、五〇錢
月刊、鈴木伸樹編輯、學藝書院發行、麴町區下二番町五四、五〇錢

星岡 月刊、島本一編輯、大和國史會發行、奈良縣郡山町柳町一九八、二〇錢
不定、佐伯啓造編輯、鶴故鄉會發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、電法隆寺四、二圓

燒もの趣味 月刊、京都市林泉協會編輯發行、京都市左京區吉田下大路町四五、三〇錢
寺四、二圓

大和志 月刊、京都市林泉協會編輯發行、京都市左京區吉田下大路町四五、三〇錢
寺四、二圓

夢泉 月刊、京都市林泉協會編輯發行、京都市左京區吉田下大路町四五、三〇錢
寺四、二圓

林泉 月刊、京都市林泉協會編輯發行、京都市左京區吉田下大路町四五、三〇錢
寺四、二圓

泉 月刊、京都市林泉協會編輯發行、京都市左京區吉田下大路町四五、三〇錢
寺四、二圓

貨幣 月刊、田中謙編輯、東洋貨幣協會發行、荏原區戸越町二九一、七五錢
東京考古學會編輯發行、大阪市住吉區住吉町阿倍野筋三ノ一〇坪井良平方

考古學雜誌 月刊、考古學會編輯、聚精堂發行、本郷區龍園町三一、電小石川七八七、
五〇錢

考古學論叢 三森定男編輯、考古學研究會發行、京都市左京區下鴨藪倉町七一
國學院大學內國史學會編輯發行、澁谷區若木町九、國學院大學

國史同願會紀要 國史同願會編輯發行、赤坂區青山南町六ノ一五六隈侯爵邸內
月刊、奥田慈惠編輯、四天王寺事務局發行、大阪市天王寺區元町、二〇錢

四天王寺 四回、立教大學史學會編輯發行、豐島區池袋三、五〇錢
九次史學會編輯、富山房發行

史淵 四回、三田史學會編輯發行、芝區三田慶應義塾大學文學部研究室內、一圓
三回、廣島史學研究會編輯、中文館書店發行、牛込區辨天町一七四、七〇錢

史學研究 月刊、史學會編輯、富山房發行、神田區神保町、四五錢
早稻田大學史學會編輯、同大學出版部發行、澁谷區戸塚町

史學雜誌 月刊、史蹟名勝天然紀念物保存協會編輯發行、麴町區三年町一、文部省
宗教局保存課內

史蹟名勝天然紀念物 四回、大塚史學會編輯、刀江書院發行、神田區駿河臺三ノ六、八〇錢
四回、京都帝國大學文學部內史學研究會編輯、内外出版印刷株式會社發行、
京都市西洞院通七條南入、七五錢

史潮 四回、京都帝國大學文學部內史學研究會編輯、内外出版印刷株式會社發行、
京都市西洞院通七條南入、七五錢

東方學報 不定、東方文化學院 東京研究所編輯發行 小石川區大塚町五六ノ一
京都研究所編輯發行 京都市北白川

東洋學報 四回、東洋協會學術調查部編輯發行、麴町區內幸町一ノ三、電銀座四〇三九
一圓五〇錢

東洋史研究 四回、京大文學部陳列館內東洋史研究會編輯、彙文堂發行、京都市中京區寺
町通九太町南入

鴨台史報 大正大學史學會編輯發行、豐島區西巢鴨四ノ五三〇大正大學史學研究室
龍谷大學編輯發行、京都市七條、龍谷大學史學研究室

龍谷史壇 月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五
月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五

歷史學研究 月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五
月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五

歷史教育 月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五
月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五

歷史公論 月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五
月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五

歷史地理 月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五
月刊、龍谷大學史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四五

其他 月刊、岩波書店編輯發行、神田區一ツ橋三、五〇錢
月刊、大藏出版株式會社編輯發行、本郷區本郷三丁目、二〇錢
月刊、東北帝國大學文科會編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋三、五〇錢

文化 月刊、東北帝國大學文科會編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋三、五〇錢
月刊、東北帝國大學文科會編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋三、五〇錢

美術商一覽

古美術(五十音順)

安藤榮之助 東京市本郷區駒込坂下町六九

阿部克平 東京市淀橋區淀橋六九九

阿部文吉 東京市本郷區湯島天神町一〇七

秋田盛太郎 大阪府東區平野町五〇三

朝岡善四郎 合資會社精華堂代表社員 東京市日本橋區芳町一ノ六鈴木きき方

朝田貞 神奈川縣鎌倉町大町塔辻一四一

味岡榮次郎 名古屋市東區針屋町二ノ三

味岡由兵衛 名古屋市中區袋町五ノ五

井上熊太郎 大阪府東區高麗橋二ノ三九

伊丹信太郎 東京市麻布區我善坊町五

伊丹秀之助 東京市目黒區洗足町一三四〇

伊藤喜兵衛 名古屋市中區錦屋町一ノ二四

伊藤清次郎 東京市本郷區湯島天神町一ノ四

伊藤高太郎 東京市日本橋區通三ノ一

伊藤信藏 東京市日本橋區通二ノ五

伊藤平藏 平山堂、東京市四谷區尾張町一、電四谷三〇〇〇

飯田國太郎 東京市神田區旅籠町一ノ三、電下谷七〇〇九

池田金太郎 合資會社銀座美術園代表社員 東京市京橋區銀座西五丁目五ノ一

池戶宗三郎 大阪府東區今橋三ノ一二

石井柳助 東京市京橋區京橋一ノ四〇一

石田貞吉 東京市小石川區同心町二五

石野力藏 山登商店代表者 東京市日本橋區濱町一ノ一五、電茅場町四七五

石橋幸次郎 東京市日本橋區通三ノ六五

磯上清治郎 大阪府東區瓦町一ノ五

一色利厚 東京市芝區南佐久間町二ノ〇、電芝二七〇七

稻垣一六 東京市日本橋區箱崎町二ノ三五

稻垣利恭 東京市本郷區湯島天神町二ノ三〇

乾益次郎 金澤市七町八

今井貞次郎 京都市四條通懸屋町東人奈良物町一五

今泉茂平 東京市本郷區湯島新花町七六

入江熊吉 大阪府東區瓦町三ノ一

岩井慶三郎 東京市麻布區飯倉町四ノ一七

岩上虎吉 東京市日本橋區兩國六ノ六

宇島貞吉 東京市本郷區湯島天神町二ノ三七

宇田川照 東京市淀橋區原宿一ノ二八

植村平兵衛 大阪府東區道修町五ノ一八

臼井吉之助 大阪府東區伏見町二ノ一九

內山豐男 金澤市中町三四

小川義一 東京市神田區金澤町一

小川文吉 東京市小石川區大塚通町二四

小高眞藏 合資會社大勝商店代表社員、東京市本郷區湯島切通町一

小野春吉 東京市京橋區銀座八ノ四

大川源 東京市本郷區春木町二ノ一五

大久保健二 東京市芝區西久保町三八

大田清造 東京市麻布區新網町一ノ六九

大沼政吉 東京市日本橋區茅場町一ノ六

太田龜三郎 東京市芝區今入町二九

太田佐七 大阪府東區伏見町三ノ三三

岡田祝三 東京市下谷區東墨門町五

岡田太郎 大阪府東區伏見町四ノ二九

岡田卓爾 東京市目黒區中日黒一ノ五

岡田友次 株式會社山中商會代表取締役、大阪府東區高麗橋一ノ一二

岡村藤兵衛 東京市麻布區飯倉町三ノ一

岡本嘉兵衛 金澤市博勞町六八

岡本良民 東京市芝區明舟町二三

長田捨三郎 大阪府東區今橋三ノ一五

加賀朝一 大阪府南區心齋橋筋一ノ二九、心齋橋美術館

加賀千代太郎 東京市日本橋區室町一ノ五

加藤善之助 愛知縣海部郡津島町大字津島字藤浜二ノ割イ三〇五

角谷憲一 東京市本郷區湯島同朋町六

勝倉源三郎 東京市淺草區田原町一ノ八

門垣爲作 小倉市室町五〇

金澤治三郎 大阪府東區高麗橋一ノ一四

金森三郎 東京市芝區芝公園第五號地二三

上村環 東京市京橋區寶町一ノ八ノ一

龜井貫二 東京市日本橋區繩段町二ノ二

川合定治郎 東京市京橋區銀座西六ノ四

川添寅藏 京都市中區區六角通御幸町東人

川部太郎 東京市芝區芝公園第五號地二三

川部利吉 株式會社川部商會取締役社長、東京市日本橋區通二ノ五ノ一二

木口金太郎 帝國美術株式會社事務取締役、東京市下谷區竹町二九、電下谷三三〇八

木村錦太郎 名古屋市中區東魚町三ノ九

岸本正之助 京都市中區區柳馬場通御池南入

北川堯英 大阪府東區今橋三ノ一一

九十歩京一 東京市豐島區巢鴨町三ノ三〇

一一五

美術商一覽

- 黒部正雄 東京市麻布區霞町三三
栗原森太郎 東京市日本橋區通三ノ三ノ七
熊谷直之 京都市寺町姉小路上ル
組田鞆之助 東京市澁谷區豐澤町二五
小出源三郎 大阪市東伏見町五ノ一一
小松邦芳 東京市芝區新橋五ノ一二
小林喜代志 東京市芝區芝公園第九號地二花舎院內
小林庄重郎 栃木縣上野郡日光町三七一
小林信次郎 東京市芝區櫻川町四
小林甚太郎 新潟市東區通十番町一七三九
小山常次郎 東京市下谷區池ノ端仲町一六
古賀勝夫 大阪市東區伏見町三ノ五
兒島嘉助 合名會社兒島嘉助商店代表社員、大阪市東區高麗橋三ノ二二
光明義一郎 合資會社光明商店代表社員、京都市東區四條區岡町南側
佐藤淺吉 大阪市東區伏見町四ノ一一
佐藤一郎 東京市本郷區湯島切通坂町一
- 佐藤こう 東京市芝區新橋三ノ二八
佐藤章太郎 京都市錦手通辨財天町八
齋藤才次郎 京都市庭屋町御池上ル
齋藤利助 東京市四谷區尾張町一
坂井準平 新潟市本町通八番町
坂田作治郎 株式會社坂田作治郎商店取締役社長、大阪市東區高麗橋二ノ三〇
境定美 東京市澁谷區大和田町三〇
里見忠三郎 京都市堺町三條上ル
澤達三郎 東京市日本橋區人形町一ノ一四
篠田實識 東京市麴町區平河町二ノ二九ノ五
莊英達 東京市神田區田代町九
神通傳二郎 東京市日本橋區通二ノ五ノ一〇
神通豐次郎 富山市豐川町五
諏訪喜之松 東京市京橋區京橋三ノ四
杉原仁三郎 東京市大森區調布鶴ノ木町四三三
鈴木政三 東京市澁谷區景丘町三三
- 砂貞吉 大阪市東區北濱五四ノ五
砂元吉 大阪市東區北濱五ノ三九
瀨津伊之助 東京市日本橋區通三ノ三
關口喜三郎 東京市京橋區京橋一ノ九ノ五
關口定次 東京市京橋區京橋二ノ二
善田喜一郎 京都市姉小路丸東入
宗力丸 京都市聖護院河原町二五
宗田伴藏 東京市芝區西久保櫻川町二
田口ハマ 東京市芝區新橋六ノ六
田島松次 東京市下谷區西黒門町四
田谷廣吉 東京市淺草區橋場町二ノ四
田中正次郎 東京市麴町區麴町六ノ一ノ一
田中良助 株式會社東京會常務取締役、東京市下谷區谷中清水町二〇
田原信次郎 合資會社田原壽善堂代表社員、東京市本郷區湯島天神町一ノ七一
田村勝清 東京市四谷區荒木町二三
高田謙吉 東京市日本橋區通二ノ四
- 高津六平 高津株式會社取締役社長、東京市日本橋區室町二ノ八ノ一
高橋一雄 門司市錦町四ノ一二三四ノ三
高橋熊太郎 大阪市東區北濱五ノ三三
高山開治郎 株式會社東京美術館事務取締役、東京市京橋區銀座一ノ三
竹内善次 東京市芝區西久保巴町四一
竹内秀太郎 東京市京橋區寶町一ノ六ノ二
竹内廣太郎 東京市目黒區下目黒三ノ七七
武田德太郎 大阪市東區北濱五ノ三三
谷村庄平 金澤市十間町四四
玉井久次郎 東京市澁谷區原宿三ノ三三〇
土橋嘉兵衛 合名會社土橋永昌堂代表社員、京都市四條通堺町東入
辻高重 合資會社辻保全社代表社員、東京市麻布區北新門前町三
鶴來美松 京都市新門前梅本町二六二
戸田政之助 大阪市東區伏見町四ノ三七
戸田彌七 大阪市東區伏見町三ノ一六
豐田益之助 東京市日本橋區室町三ノ四ノ二
- 名和ひ 東京市日本橋區茅場町二ノ一ノ一
柳川市郎 東京市下谷區御徒町二ノ三九
中川清壽 東京市本郷區湯島天神町一ノ八三
中島勝也 東京市赤坂區青山南町二ノ三四
中島豐吉 東京市下谷區池ノ端茅町二ノ五
中西房之助 大阪市東區高麗橋五ノ三二
中野善九郎 大阪市東區高麗橋三ノ一五
中村嘉十 東京市赤坂區青山南町一ノ一
中村富次郎 東京市京橋區京橋一ノ一
永堀政利 東京市澁谷區神泉町四
永山賢四郎 東京市芝區西久保櫻川町六
長尾芳次郎 東京市京橋區寶町一ノ四ノ四
成瀬信治郎 合資會社東方美術館代表社員、東京市本郷區湯島組町八〇
二本木關太郎 東京市下谷區御徒町三ノ六九
丹羽忠一 東京市芝區西久保巴町一四
西村彦太郎 合資會社西村商店代表社員、大阪市東區道修町四ノ三一
野崎森一 宇治久合名會社

代表社員、名古屋市東區東本町四ノ一

野村 兼吉 東京市日本橋區
濱町二ノ一

野村 洋三 横濱市中區本町
一ノ五

羽津己之吉 大阪府南區八幡
町八

長谷川貞八 東京市京橋區西
八丁堀一ノ三

長谷川 竹次郎 名古屋市中區住
吉町一ノ二八

橋崎治三郎 大阪府東區高麗
橋五丁目百番屋郎

橋本元佑 東京市日本橋區
兩國二ノ二

服部政太郎 合名會社服部來
々堂代表社員、京都市佛具屋通魚欄上錫屋
町四番戶

八田 富雄 東京市日本橋區
通三ノ一

八田兵次郎 大阪府東區內平
野町一ノ五三

林 新助 京都市古門前通
三吉町三五二

林 新兵衛 京都市東區祇
園町北側三一七

林 操 東京市四谷區坂
町一四

原田 文 東京市本郷區切
通坂町四五

春海 謙二 合資會社春海商
店代表社員、大阪府東區伏見町三ノ二一

日野雄太郎 東京市麴町麴麴

町五ノ四ノ六

平澤駒四郎 金澤市下近江町
五

廣田 松繁 東京市日本橋區
通三ノ五

福田 淺次郎 京都市寺町押小
路上九二九

藤岡 清雄 東京市芝區西久
保櫻川町三

藤城銀太郎 東京市本郷區湯
島天神町二ノ三七

藤田 精一 東京市赤坂區永
川町三四

藤原伊兵衛 兵庫縣西宮市森
具奥畑三二二

二木外二郎 金澤市橋場町二
七

船橋 正七 合資會社丸嘉商
店代表社員、東京市京橋區銀座七ノ四

古川伊三郎 東京市日本橋區
人形町三ノ二二

古川 銓吉 東京市神田區仲
町二ノ一四

古木 常八 東京市小石川區
大塚窪町一九

堀口 磯吉 東京市日本橋區
室町三ノ四ノ二

堀津長右衛門 東京市日本橋區
通三ノ八

馬淵 瀧治 東京市品川區西
大崎一ノ二三

前田 義一 大阪府東區高麗

橋五ノ九

前田捨次郎 大阪府南區玉屋
町二二

牧寺三樹 東京市牛込區橫
寺町四九

卷田 廣 東京市芝區芝公
園第五號地二三

松岡六兵衛 京都市富小路通
三條南

松木善右衛門 京都市新門前仲
ノ町二七八

松平吉太郎 金澤市上今町四
七

松谷豐次郎 東京市牛込區矢
來町一〇二

松永善三郎 東京市神田區旅
籠町三ノ七

滿山 順吉 東京市京橋區京
橋二ノ一ノ四

三尾邦三 株式會社春海商
店專務取締役、大阪府東區高麗橋五ノ四五

三谷勘四郎 東京市日本橋區
室町四ノ一

三宅利右衛門 東京市日本橋區
室町三ノ四

三村和三郎 東京市本郷區湯
島切通坂町九

水原金兵衛 大阪府東區淡路
町二ノ一四六

宮地甚吉郎 金澤市古寺町一
八

村田德太郎 東京市豐島區巢

鴨町三ノ三〇

本山豐實 東京市芝區芝公
園第五號地二三

守口三郎 東京市京橋區寶
町一ノ二

森勝平 東京市芝區芝公
園第五號地二三

森川 保 大阪府東區伏見
町五ノ一一

森澤安之助 和歌山市新通五
ノ一四

森田清太郎 奈良市登大路町
三七

矢尾 豐 東京市麻布區三
河臺町三

山內孝造 東京市日本橋區
吳服橋三ノ一五

山口 歌 長岡市東千手町
四二二

山崎淨忍 東京市下谷區池
ノ端仲町一九

山田健太郎 東京市日本橋區
通三ノ一六

山田源兵衛 東京市麴町區平
河町二ノ二七ノ三

山田 甚助 名古屋市西區袋
町五ノ一五

山田保次郎 東京市四谷區西
信濃町一〇

山中吉郎兵衛 大阪府東區北濱
二ノ五二

山中松治郎 山合合會社藥
務執行社員、京都市上京區粟田口三條坊町

一四

山室文亮 東京市牛込區橫
寺町六八

山本龜太郎 東京市芝區西久
保巴町一〇

山本 西二 東京市日本橋區
江戸橋一ノ七

余田 喜一 東京市四谷區舟
町二五

橫井清三郎 合名會社米萬商
店代表社員、名古屋市中區朝日町二ノ一四

橫山小八郎 京都市麴手通新
橋上

橫山保太郎 岐阜市中竹屋町

橫山 龍治 名古屋市中區伏
見町二ノ八

吉川 亮夫 長野縣下伊那郡
松尾村三〇二

吉澤丹治 東京市神田區小
川町三ノ一

吉田吉之助 東京市京橋區京
橋一ノ五ノ九

吉田 武雄 東京市四谷區尾
張町三

吉田 忠一 東京市赤坂區青
山高崎町一二

吉田 富子 東京市赤坂區仲
ノ町三

吉村 銳治 東京市目黒區上
目黒三ノ一七六八

吉村 正雄 東京市目黒區上
目黒五ノ三三四〇

米田長之助 合名會社米田商

店代表社員、大阪市南區玉屋町四五

米田留治 東京市芝區西久保町四二

米田久雄 大阪市東區清水谷東ノ町四一七

渡邊政四郎 東京市澁橋區諏訪町二三一

現代日本畫(五十音順)

角谷憲一 二葉堂、東京市本郷區湯島同朋町六

後藤眞太郎 清光會、東京市澁橋區下落合七三五

佐藤梅吉 梅軒畫廊、京都市島丸通り四條北入

關長次郎 尙美堂、東京市麴町區九段四丁目一五、電九段二六〇二

田中良助 東京會、東京市下谷區清水町二〇、電下谷九六〇三

辻梅吉 詩琴堂、大阪市東區平野町四丁目

辻音吉 長盛堂、京都市清水四丁目

戶田榮次 觀美堂、下谷區谷中町六、電下谷八三〇一

土井久吉 撰美堂、京都市繪樂師島丸東

橋本秀二郎 多聞堂、東京市麻布區我善坊町一、電赤坂一五九七

林數之助 琅玕洞、東京市下谷區上野元馬門町一〇、電下谷一五四三

松島勝之助 松島畫廊、東京市日本橋區江戸橋二ノ三

三野道夫 昭和堂、大阪市天王寺區茶臼山町八〇

森島梶之助 觀松堂、大阪市東區北濱一丁目

山内孝造 春靜堂、京都市車屋町姉小路上九

洋畫(五十音順)

石原龍一 求龍堂、東京市澁谷區千駄ヶ谷五ノ八八八、電四谷二五八四

後藤眞太郎 東京市澁橋區下落合二ノ七三五、電落合長崎三〇三〇、大阪事務所、大阪市北區中之島三丁目朝日ビル内美術新論社畫廊氣付、電本局四五〇

佐藤次郎 日佛畫堂、東京市麴町區麴町一ノ一、電九段四〇八七

鈴木里一郎 青樹社、東京市京橋區銀座四ノ四、電京橋三六七八

薄田晴彦 三角堂、大阪市淀屋橋南、電北濱三三三九、同京都府、京都市河原町三條南、電本局三七四一

平春漢 美友社、大阪市東區大川町御堂筋、電北濱二五四二

西川武郎 兜屋、東京市澁谷區經田三ノ一八九、電青山四四〇二

西田武雄 室內社、東京市麴町區麴町一ノ三、電九段五一四

長谷川仁 日動畫廊、東京市京橋區銀座西五ノ一日動ビル一階、電銀座四

花房靜也 大阪畫廊、大阪市南區順慶町、電船場二二五八

藤井輝夫 晴湖社、京都市下鴨中川原町六五、電上一三三〇

美術家及美術關係者名簿

凡例

一、本名簿は昭和十一年十二月三十一日を以て締切つた。其の後の變動による改訂は次年度に譲る。

一、本名簿に記載した美術家及美術関係者の数は二一七七名である。本邦に於て美術家として社會的地位を有する人々を、一定の標準に従つて採録した。未だ人選洩れもあるべく、不備の點は次年度に補ひ度い。

一、建築家は美術的見地より見たる建築の設計家のみに限つて採録した。

一、本名簿は電話番号簿の如く、氏名の頭文字の發音によつて五十音順に記載した。發音の同じ場合は字畫の少いものを先にした。頭文字の同じものは二字目の發音により、其の發音の同じ場合は字畫の少ないものを先にした。但し使用上の便を考へて同字は訓音の異なるものなるべく一箇所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、紙數の減少及び簡略を旨として左の如き略語を用ひた。

(日)日本畫 (洋)西洋畫 (挿)挿畫 (版)版畫 (漫)漫畫 (彫)彫塑 (工)工藝 (漆)漆藝 (陶)陶磁 (金)金工藝 (染)染色 (織)織物 (繡)刺繡
(硝)硝子 (圖)圖案 (學)學者 (批)美術批評家 (記)美術記者 (舊帝院)舊帝國美術院 (帝院賞)帝國美術院賞 (舊帝展)舊帝國美術院美術展覽會
(帝院)帝國美術院 (帝展)帝國美術院展覽會 文展(舊文部省美術展覽會) 新文展(昭和十一年文部省美術展覽會) (工藝審査委員)商工省工藝審査委員
會委員 (國寶委員)國寶保存會委員 (重要美術委員)重要美術品等調査委員會委員 (史蹟名勝委員)史蹟名勝天然紀念物調査委員會委員 (朝鮮寶物委
員)朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然紀念物保存會委員 (教)教育家 (東美校)東京美術學校 (日美校)日本美術學校 (女美校)女子美術學校(女子美術専門
學校) (東京高工藝校)東京高等工藝學校 (東京高工校)東京高等工業學校 (美術院)日本美術院或は同研究所 (美術協會)日本美術協會 (太平洋)太
平洋畫會研究所 (川端校)川端畫學校 (水彩畫會)日本水彩畫會或は同研究所 (本郷研)本郷繪畫研究所 (南畫院)日本南畫院 (葵橋研)葵橋研究所
(京都美工校)京都市立美術工藝學校 (京都繪專校)京都市立繪畫專門學校 (京都高工藝)京都高等工藝學校 (大阪美校)大阪美術學校 (信濃橋研)信濃
橋洋畫研究所 (自由畫壇)日本自由畫壇

一、住所中東京市のみは市名を略して區名を以て始めた。

一、舊帝展出品者にして特選を得たる人々は其の旨特記したが、その人にして無鑑査の場合は、特選の事は省略した。又審査員を命ぜられた人々は總て無鑑査なる故、無鑑査なる旨は特記しなかつた。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (121～166 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.121-166)

Cut for protection of the personal information

日本美術年鑑 昭和十二年版

昭和十二年十一月六日印刷
昭和十二年十一月十日發行
定價 五 圓

著者兼發行所 美術研究所

印刷者 井上源之丞
東京市下谷區二長町一番地

印刷所 凸版印刷株式會社
東京市下谷區二長町一番地

發賣所 岩波書店
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

電話 (33) 〇一八七番 (以下4)
九段 振替口座東京二六二四〇番

[illegible]

(誤)	新海邦太郎 八咫鳥 新彫塑協會 屋覽會 山口華陽 王井力藏 春陽會第四回 漆器三四二 三枝禮	廣島晃浦 竹久夢二裝展 土用會賞 岸波百草居 蘆房卿 及ぶ	公爵山内豐景 公爵德川閑順 公爵木戸孝一 東京府	傳西海曼茶羅 支柱 數年 宮地獄神社 推朱
(正)	新開邦太郎 八咫鳥 新彫塑協會 展覽會 山口華楊 王井力藏 春陽會第十四回 漆器三四三 三枝禮	廣島晃市 竹久夢二裝幀展 土曜會賞 岸浪百紳居 蘆房卿 及ぶ	侯爵山内豐景 侯爵德川閑順 侯爵木戸孝一 東京市	傳清海曼茶羅 支柱 數年 宮地獄神社 堆朱

	(頁)	(段)	(行)	(誤)	(正)
二五八	中	下	最終	美術街 手工科 蠶卷材	美術街 手工科 新教材
二五九	上(雜誌名中)		二八	腕一本	腕一本
二五九以下	物		史迹名勝天然記	念物	念物
二五九	下(氏名一) 同(氏名三)		渡邊華山 比嘉朝健一 龍村謙二	渡邊華山 比嘉朝健 龍村謙	渡邊華山 比嘉朝健 龍村謙
二六〇	上	終ヨリ四	靈釋筆寒山圖解 南蠻大圖 柏倉彫	靈彩筆寒山圖解 南蠻入圖 鎌倉彫	靈彩筆寒山圖解 南蠻入圖 鎌倉彫
二六七	下	終ヨリ一	寶藏及經 光融餘	寶藏及經藏 光融館	寶藏及經藏 光融館
二七八	下	終ヨリ一七	奈良帝室博物館餘	奈良帝室博物館	奈良帝室博物館
二七四	上	二			
同	中(發行所名中)				
同	下(編著者名中)				
三七	四	一七	荒木季夫	荒城季夫	荒城季夫
四〇	三	二二	井恒嘉平	井垣嘉平	井垣嘉平
四三	二	二五	商品陳列所	商品陳列所	商品陳列所
九二	二	七	井家三家	井上三家	井上三家
一三九	二	三五	西井白澄	酒井白澄	酒井白澄
一四二	二	一〇	末良雅雄	末永雅雄	末永雅雄
一〇一	插圖		同中央廣間 同帝室階段	同便殿前廣間 同中央廣間	同便殿前廣間 同中央廣間